

AC
145
G855
1939
v.14

Gunsho ruiju

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

Errata

訂正表

左記の頁にある空角□は取り除くこと。

一八三ノ上段	九行ノ下	十一行ノ下	一八七ノ上段	二二行ノ下
	十五行ノ下	十七行ノ下		二三行ノ下
一九〇ノ上段	二六行ノ下	一九〇ノ下段	二行ノ下	二二行ノ下
			二三行ノ下	
二〇六ノ上段		二〇八ノ上段	二二六ノ上段	
二二七ノ上段		二一八ノ上段	三八七ノ下段	十五行ノ下
				十七行ノ下
三八八ノ上段				

昭和五年八月出版

羣書類從

第拾四輯

東京 續群書類從完成會



AC
145
G855
1939
v. 14

群書類從第拾四輯目次

和歌部家集

卷第二百二十八

土御門院御集合點詞家隆卿

卷第二百二十九

砂玉和歌集後崇光院御集

卷第二百三十

元良親王御集

瓊玉和歌集

卷第二百三十一

李花集宗良親王御集

卷第二百三十二

西宮左大臣御集

金槐和歌集

卷第二百三十三

常德院殿御集

夏日陪多田院廟前詠五十首和歌

源義尙一四二

卷第二百三十四

柿本集

家持集

卷第二百三十五

權中納言兼輔卿集

權中納言敦忠卿集

權中納言朝忠卿集

海人手子良集

閑院左大將朝光卿集

卷第二百三十六

前大納言公任卿集

卷第二百三十七

權中納言定賴卿集

卷第二百三十八

權中納言俊忠卿集

中納言雅兼卿集

成通卿集

源義尙一四二

一四四

一六〇

一六八

一七四

一七六

一七九

一八一

一八八

二一五

二二五

二二七

二三一

前大納言實國卿集……………二三五

入道大納言資賢卿集……………二三七

按納言集長方卿……………藤原長方…二三九

卷第二百三十九

權中納言爲重卿集……………二四七

卷第二百四十

亞槐集……………飛鳥井雅親…二六二

卷第二百四十一

爲和卿集……………三一

權大納言言繼卿集……………三一九

卷第二百四十二

明日香井和歌集……………飛鳥井雅經…三三九

卷第二百四十三

隣女和歌集……………飛鳥井雅有…三九四

卷第二百四十四

祭主輔親卿集……………四七三

大藏卿行宗卿集……………四八四

卷第二百四十五

六條修理大夫集……………藤原顯季…五〇〇

左京大夫顯輔卿集……………五一六

卷第二百四十六

從三位賴政卿集……………五二六

卷第二百四十七

紀貫之集……………五五七

卷第二百四十八

業平朝臣集……………五八三

敏行朝臣集……………五八六

宗子朝臣集……………五八七

公忠朝臣集……………五八八

賴基朝臣集……………五九一

猿丸大夫集……………五九二

紀友則集……………五九四

坂上是則集……………五九六

藤原清正集……………五九七

藤原元真集……………六〇一

卷第二百四十九

信明集……………六一二

藤原義孝集……………六一八

藤原仲文集……………六二二

源順集……………六二六

卷第二百五十

能宣朝臣集……………六四二

爲賴朝臣集……………六四六

元輔集……………六五〇

兼盛集……………六五八

卷第二百五十一

實方朝臣集……………六六七

高光集……………六七五

相如集……………六七八

重之集……………六八一

卷第二百五十二

藤原長能集……………六九三

源兼澄集……………七〇〇

源道濟集……………七〇六

卷第二百五十三

橘爲仲朝臣集……………七一九

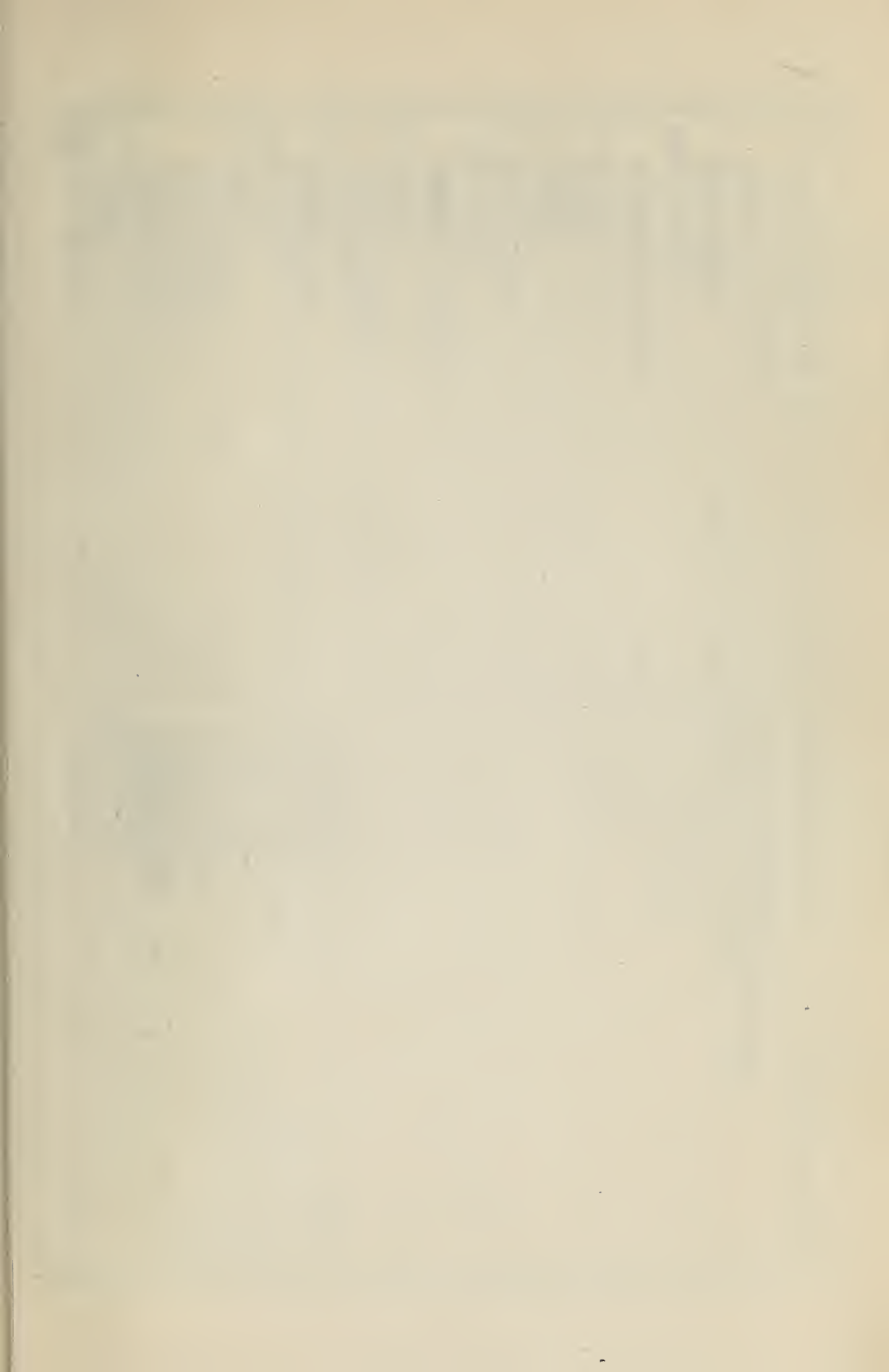
橘爲仲朝臣集……………七二四

讚岐入道集……………藤原顯綱…七二八

故侍中左金吾家集……………源賴實…七三三

津守國基集……………七三八

群書類從第拾四輯目次終



群書類從卷第二百二十八

檢校保己一集

和歌部八十三家集一

土御門院御集

合點詞
家隆卿

詠述懷十首和歌

寄風述懷

舊古

吹風のめにみぬかたを都としてしのふもくるし夕暮の空
先うちみ候より。已落涙かきくらし候畢。善惡すへて不

レ覺候へとも。心詞無ニ申限一歟。

寄月述懷

同

雲よりやとりなれにし袖の月いかにかはれる涙とかみる
是又凡夫更々淺心難レ及候歟。

寄雪述懷

いと々又跡なき庭となりぬらんはらふ人なき雪の古郷
めてたく候に。無字二所に候。書失候歟。

寄曉述懷

舊後

曉のしきのはねかきかきもあへし我思ふ事の數をしらせは
又こゝろふかく。すかた不レ及ニ左右一候歟。

寄夕述懷

舊古

夕暮のなからましかは白雲のうはの空なる物はおもはし

初五字より。心もめつらしく。姿もをろかならず候。

寄海述懷

あまを舟とふ人あらは藻鹽たれみなみの海にわふとこたへよ
意よりはしめて。姿詞は本歌もつよくめてたく候。

寄山述懷

いはかねの枕はさしもなれにしになにおとろかす松の嵐そ
うるばしくかさる所なく。よろしく候。

寄河述懷

行水にかすはかきてきならし河おなし流をいくせ渡ると
此河子細定候歟。又優美候歟。

寄野述懷

かゝみのやたか偽のなのみしてこふる都のかけもうつらす
同前。

寄關述懷

すまの浦いはうつ浪の音はして人をとゝむる關はなかりき
十首すへて心詞高無ニ申限一候。注進猶事淺候。

詠百首和歌

承久三年

春

立春

氷とくしかの浦風吹まゝに波とともにや春はたつらん
秋よりもなを春波たよりをえて。立まさり候歟。

春日

春の野のはつねの松の若葉よりさしそふ千代の影はみえ
子日のうたには。一句一字をろかならず候。但さりとは。
此中には可_レ爲_二御地_一候歟。

雪

^{續後}
いせの海のおまのはらなる朝霞空に鹽やくけふりとそみる
餘勢姿心。たくみに無_二申限_一候歟。

鶯

霧にむせふ山の鶯出やらて麓の春にまよふ比かな
山のうくひす。こゝろ尤よろしく候。

若菜

^體
白妙の袖にまかひてふる雪のきえぬ野原にわかなをそ摘
うるはしく。一句無_レ難。優美候。

残雪

霞行ひはらは今やくもるらん小松かはらのゆきのむら消
梅

植をきし梅のそのふやあれぬらん匂ひもよその古郷のはる
これ又まことにしのひかたきさまに。優美見候歟。

柳

さほひめのてたまもゆらによる糸や緑になひく春の青柳
一句無_二相違_一。尤よろしく候。

早蕨

さわらひのもゆる春日と成しよりたるみの水もいはそく也

同前。但釋阿入道法皇の御時百首に。さはらひもいまは
おりにやなりぬらんたるみの氷いはそくなり。如_レ此
覺申候。

櫻

いそかれぬ花の比こそ哀なれなけきのもとに春は^{日イ}へぬれと
うちきゝたるより。又涙にかきくらし候て。物不_レ覺候。

春雨

浅みとりはつしほそむる春雨にのなる草木も色まさりけり^{そイ}
心詞又無_二申限_一候歟。

春駒

いとゆふのおなしなのみやまかふ覽霞のうちの野への春駒
野馬心優美候歟。

歸鴈

^{續後}
かへる鴈雲は誰もなれしかとうら山しきは春のかよひち
心肝を動無_二申限_一候歟。又落涙候。

喚子鳥

心あれやみ山のおくのよふこ鳥さしも住へき人もなき世に
この鳥にとり候ては。いかゝかくは可_二思寄_一候。

苗代

苗代のたのにはふるしめのをのしつみは沈むひく人はなし
又意すかた。まことによるしく候にや。

堇菜

紫のねはふよこのゝつほすみれ春やゆかりの色にさくらん
釋阿詠に。むらさきのねはふよこのゝつほすみれま植

につまん色もむつまし。

杜若

やつ橋のくもてになひく杜若昔の花のなこりとそ見る

藤

藤の花おなしえことにさきしよりまた一入の松そうつるふ

此三首。地には少し過候歟。但藤は今少勝候歟。

欸冬

おもひやるゐての山吹盛にも都にすまはあはまし物を

此山吹。いかなることにか候らん。本歌も此ために詠を

き候けるにやと落涙候し。猶々無_二申限_一歟。

三月盡

春と夏とゆき相坂の關守もこよひは鳥のねやおしむらん

是又心姿をはしめて。連句などに申候へしとも不_二覺悟_一

候。

夏

更衣

時しらてすくすうき身のかひもなくけふとて花の衣かへめや

又詞をいたはらす。幽玄候歟。

卯花

このころも遠かた人やとかむらんしろくそ咲る里の卯花

無_レ難神妙候へとも。以前に申候し可_二御地_一候歟。

葵

神地山かけしたのみのあふひ草二葉より社かきしそめしか
是又日出度候に。此神地山は他社にはよみて候へとも

不_レ覺候。西行と申候しか。太神宮にはしめて詠候て後。
少々詠候歟。神山は常事候歟。

郭公

時鳥まつ山のはに月は出ぬたかたのめたるこよひならねは

菖蒲

人しれぬ袂にねをはかけしかとけふあやめの色にみえける

早苗

みなかみにたかさなへとる末ならん流てにこる谷川のみつ

照射

ますらおか立田の山にともしすとひとりあかせは長き夏のよ

二首。可_レ地候歟。

五月雨

さみたれのふるき思ひの晴すして眺むるかたは山端もなし

盧橘

^{嘯古}

昔をはなたち花にしひてん行末をしる袖のこもかな

二首。尤よろしく候。中に猶行すををしるそてのか。少

まさりて候歟。

螢

あしま行夜はの螢やうつらん波のそこなるいさり火の影

蚊遣火

かやりひの煙はよその思ひかはなかくもる夏のゆふくれ

蓮

はちす葉の露の白玉みかゝれてにこりにしまぬ夏の池水

三首。地に少々候らむ。

氷室

ひむろ山せきいれし水の音たえて氷の上に夏そおほめく

可_レ爲_レ地候歟。

泉

せき入しいはまの水のかけすみて底にもむすふ袖はみえ鳧

六月萩

御萩する袂にふるゝおほぬさのひくてあまたになひく河風

二首。尤よろしく候歟。

秋

立秋

かそふれは涙の露もとゝまらずこれやみそちの秋の初かせ

又例の不覺の涙にむせひ候畢。

七夕

我いのるねかひの糸のとしをへてあはてしもやは秋の七夕

高たかく實たのもしく聞候歟。

萩

くたらのゝふるえの萩の花みれは今年はかりの秋としもなし

女良花

ふる郷やあれ行庭の女良花あるしかほにもすくす秋哉

各可_レ爲_レ地候歟。

薄

さゝかにのうははにすかくいと薄みたれにけりな秋の夕風

面白候に。このいとすゝきは。いと詠ならひ候はす候

歟。いとゝさる同前。

菊 萱

たか旅の草の枕とさためねとむすほゝれたるのへのかるかや

蘭

ふちはかまきつゝなれ行たひ人のすそのゝはらに秋風そ吹

萩

萩の葉にたれか思ひのむすほゝれ夕暮ことの露とをく覽

三首。心詞もとりゝに。すかた宜候歟。

早 鴈

かたしきやまたひとへなるさよ衣かりかねさむし庭の松風

かへり高候歟。

鹿

みつくきのをかの村萩うちなひき鹿のねなから秋かせそ吹

末の句ことによろしく候。

露

白露にそほつるのへの唐衣よろゝきぬるたひはなにそも

霧

秋霧のたつくれ毎につまかくすやのゝ神山みらくすくなし

二首。又未學者不_レ可_レ詠出候歟。

槿 花

色かへぬ竹のまかきの槿もをのれはあたの花にそ有ける

地にはすこしすき候歟。

駒 迎

望月のあきの光りをさそひきて雲ゐにみゆるひきわけの駒

尤よろしく候。

月

久かたの月の都のみちならはわたりてもみむかさゝきの橋

擣 衣

あさち原はらはぬ霜の古郷にたれわかためと衣うつらむ

二首。又意すかた無_ニ申量。落涙候畢。

虫

菊

まくすはふあたのおほのに啼虫もひとつらみの秋の夕暮
爾後
よそに行秋の日数はうつろへとまた霜うとき庭のしら菊

二首。よろしく難_ニ思分_ニめてたく候歟。

紅葉

した紅葉よのまの露や染つらんあしたの原のきのふよりこき
又詞おもしろく殊勝候歟。

九月盡

大かたの秋になくさむ思ひたに我身ひとつとあすや成なん
是猶すこしまさり候らん。無_ニ申限_ニ候歟。

冬

初冬

置まよふ霜のした草かれそめて昨日は秋とみえぬのへかな
又不及_ニ左右_ニ。姿めてたく候とも。ことをろかに候。

時雨

神なつきみふねの山はしくるれと色にもそまぬ瀧のしら糸
無_レ難候へとも。此めうつりに色すこしあさく候。

霜

いつ迄かあさちか末にはらふへき老をたつぬる野への初霜
すかた詞うるはしく優美候歟。

霰

聞わかぬまきの板とのね覺かな木葉降よも霰ふる夜も
常風情なるやうには候へとも。詞つゝきおかしく候歟。
末句ことに面白候歟。

雪

百とせの雪もけなくに風さえて又冬こもるみよしの、山
猶高まさり候らん。よろしく候。

寒蘆

白露のをけは玉江のあしのはに結ひかへたる冬かれのしも
干鳥

まづ寒きみつの濱へのさよ千鳥ひかたの霜に跡やつける
二首。をけは玉江ひかたのしも。いかに「候」はんと不

覺す猶候歟。

氷

谷河や氷のかくるしからみのせくとは見えてはやきとしなみ
常人詠風情に候へとも。つゝきよろしく聞えて候。

水鳥

冬の池のうきねのをしもうちはふきけにさむけなる浪の音哉
末句おかしきさまに。此すかたにとりていみしく聞候
歟。

網代

はし姫の袂やいろに出ぬ覽このはなかるゝうちのおしろ木
はし姫。いまはよみつきたる物に候。この風情いかての
こり候らん。この心のこり候よ。

神樂

あめつちの神代のあきのしわざよりとるゝ櫛の色もかはらす
神樂にとりて尤よろしく候。

鷹狩

はしたかのすゝの篠原かりくれて入日のをかにきゝす鳴也
續古

無常

朝ことにひまゆく駒をはやめつゝいかなるかたへ尋^{人のイ}ゆくらん
このすちにとりて。又よろしく候歟。

述懷

うき世にはかゝれとて社むまれけめことはりしらぬ我涙哉
うちつゝきあまりひまなく候間老候。

祝

契りてもとしのをななき玉椿かけにやちよの數そこもれる
祝心深よろしく候。

詠二十首倭歌

承久四年正月廿五日

四季日

春

みかさ山さすやあさひの松のはにかはらぬ春の色はみえ鳧
夏

庭のおものつちさへさくる夏の日にひとり露けき姫ゆりの花
秋

あかねさすをのか色にやそめつらん入目むかひの岡の紅葉は
冬

冬枯の草葉にさはくひのねすみ昨日はけふになるを程なき
四首。暫心やすめ候はんひまに。神妙に候なからちと定
候畢。

四季月

春

ときわかぬ涙に袖はおもなれてかすむもしらす春のよの月

尤優美候へし。

夏

あかている月のかたみにをく物は露よりさきの扇なりけり

心おもしろく候へと。地と定候畢。

秋

しきしまや山とひこえて啼鴈の翅あらはにすめる月かけ
新後

無難よろしく候歟。

冬

立田山紅葉やまれに成ぬらんかはをとしろき冬のよの月

おほろけの人またよみいつへからす候。まことにあり
かたく見え給候。

四季雨

春

よしのかはいはとかしはにむす若のかはらぬ色に春雨そ降
尤よろしく候。

夏

菖蒲生る沼のいはかきかきくもりさもさみたる。昨日今日哉
あはれかくつゝけ候ことはかなはず候物を。高なとこ
とに候はねともこのすちに候。最上富候歟。

秋

夕暮はまかきをこむるきりのはにその色となく時雨ふる也
尤よろしく候。

冬

雪ませに雨はふりつゝしかすかにこほりもやらぬ山川の水

このみそれの心。おもしろく見る様に候歟。

四季雲

春

花しらぬ朽木の柚になかりけり白雲かゝる春のあけほの

又心詞おかしく高も候歟。

夏

時鳥啼や雲ぬのはれすのみおもふ心やそらになるらん

又よろしく候歟。

秋

村雲のたえま／＼にほしみえて時雨をはらふよはの秋風

まことにまさしく見るやうに覺候。尤殊勝候歟。

冬

冬の日ハ雲のみおにてはやければ流るゝ年のしからみもなし

又同前に難分見候。

四季風

春

氷とく風のととりやこれならん波になり行池のうき草

此風のやとりめつらしく。心詞よろしく候歟。

夏

たちやとるならのこかけに風過てゆふへ涼しきせみの衣

秋

人とはぬあさちか原の秋風に心なくも松むしのなく

二首。とり／＼に宜候歟。

冬

なには江やあまの衣のうら風にかれたるあしの音のさひしさ
心詞すかた。あまの衣の浦かせ。めつらしく候。

詠五十首和歌

春

春風春水一時來

時わかぬ嵐も浪もいかなれはけふあら玉の春をしるらん

あはれたかくめてたく候ものかな。

春入枝條柳眼低

棹姫のいとよりかくる青柳の枝もたはゝに春はきにけり

雁返爐峯頂北霞

嶺こえて秋こし道やまよふらん霞の北にかりも啼也

是はすこしをとりてや候らん。

白片落梅浮澗水

なかくれくむ袖さへ花に成にけり梅ちる山の谷川の水

よろしく候。

樹根雪盡催花發

木のもとの雪はやゝけぬ足引の山の櫻よはやもさかなん

暖雨晴開一徑花

春雨の野邊のふる道露しけみぬれて色こき花櫻かな

鶯聲誘引來花下

鶯のさそふ山へにあくかれて花のこゝろもうつるところかな

遊絲繚亂碧羅天

大空にたかをりなせるくれはとりあやに亂るゝのへの糸ゆふ

紛々花落門空閑

風にちるやま櫻戸のさしもやは人めまれにて春を送覽
五首。又心詞姿不_レ及_レ申_二善惡_一候。

紫藤花下漸黄昏

藤なみの花の夕はへしほるなりあすより後の春のかたみに
是はいさゝかさかり候歟。

夏

初着_二單衣_一支_二躰輕

久かたのあまのは衣またきねとかく社けふの風はまつらめ

一聲山鳥曙雲外

横雲のをちかた山の時鳥聲より後の夜半そすくなき

盧橘子低山雨重

たか袖の涙とか又しのふへき花たち花の雨のした露

綠樹陰前逐_二晚涼_一

また青きはゝその杜の夕かけになくも涼しき蟬のは衣

螢火亂飛秋已近

をさゝ原しのにみたれてとふ螢今いくよとか秋を待らん

五首。又とりく_二に心詞宜候。勝劣難_レ申候。

秋

窓中滿月初知_レ秋

住吉のちきのかたそきもる月の行あひのかけに秋はきに鳧

耿耿星河欲_レ曙天

七夕もしはしやすらへ天河あくるものをのか影ならぬかは

二首。秀逸體不_レ及_レ申_二子細_一候。

寒露已催鴈北至

初かりのきこゆるよはの白露やねさめはしめの涙なるらん
達_レ壁暗螢無_レ限思

ねやちかきかへのそこなる蛸おもひくらへの秋そへにける

二首。おかしきさまのすかたに候歟。

蟬鳴黃葉漢宮秋

ならのはのなにおふ宮の薄紅葉そむるや蟬の涙なるらん

月穿_二疎屋_一夢難_レ成

あれますとこの月かけうち拂ひ夢によかれて明す比哉

南樓月下擣_二寒衣_一

思ひやる心を月になくきめて夜寒の衣うちもたゆまず

菊爲_二重陽_一胃_レ雨開

なか月やをのか比とてさく菊の露もとをゝに雨はふりつゝ

霜草欲_レ枯虫思_レ苦

すゝ虫の聲ふるさとのあさち原たゝかれねともをける初霜

林葉蕭々一夜霜

秋の色はひとよはかりの初霜にうつろひはつるきゝの紅葉は

六首。又同前候。無_二申量_一候。いかにかくのみ候にか。あ

さましく候。

冬

紅葉添_レ愁正滿_レ階

ちりつもる紅葉にはしはうつもれて跡たえはつる秋の故郷

御地に候か。猶過候て事さひ優候。

鳥雀群飛欲_レ雪天

雲むゆくつはさもさえて飛鳥のあすかみゆきの古郷の空

末句ことにおもしろく候歟。

寒流帶_レ月澄如_レ鏡

いほさきのすみとかはらの川風に氷のかゝみみかく月かけ
よろしきさま候歟。

蘆花風起暮潮來

みしま江やあしのはちかくみつ鹽のほなみにかよふ冬の川風

晩過_二千山_一雪氣寒

夕暮の山のしら雪ふみならし立かへるへき跡はつけてき

二首。又殊勝候歟。

戀

與_レ君後會知何日

たのめをくあすの命もしらなくにはかなき物は契成けり

雪月花時最憶_レ君

倂もたえにし跡もうつりかも月雪花に残るころかな

故情歡喜聞_レ書後

たまつさやかきとゝめける跡みれば昔にかへる人のことのは

三首。又尤宜候歟。

分袂二年似_二夢寢_一

夢かとよわかれし袖のなみたよりふた秋かけて露のかはかぬ

何況鷄鳴即須_レ別

きぬゝのわかれやさてもかなしきと曉しらぬ鳥のねも哉

二首。又落涙不可思議事候歟。

雜

柴扉日暮隨_レ風掩

夕附日さす人もなき柴のとにあるしかほにも吹あらし哉

草堂深鎖白雲間

續後拾
谷深き草の庵のさひしきは雲の戸さしのあけほのゝ空

二首。殊勝離_二分申_一候歟。

月入_二斜窓_一曉寺鐘

かねの音にいく有明をうれふらんねさめかちなる窓の月影

是も無_レ術候歟。

野寺訪_レ僧歸帶_レ月

法の師にまとへる道を尋てそ野寺の月に獨かへりし

ことに景氣もあはれに。たへかたくみえ候歟。

嶺猿群宿夜山靜

獨すむみ山のよはのさひしきはけにわひしらにましら鳴也

孤官宿時風帶_レ雨

時雨ふることひはかりの木枯に宿はなくとも衣かせやま

世間飄泊海無_レ邊

玉
かちをたえおほ海の原に行舟の跡はかなき身をいかにせん

三首。とりゝによりしく候。

雲愛山高且暮歸

我ことやあさゆふはれぬ物は思ふたかまの山のよその白くも

莫_下對_二月明_一思_中往事_上

袖の月に昔の秋な思ひいてそ夫ゆへにこそかけもやつるれ

往事渺茫都似_レ夢

むなしくてみそちの夢はすくしきぬ老の寢覺も今よりやせん

白髮鏡中暫易_レ老

よそにみしのはらの霜のいかにして鏡のうちに置はしめ鎖

毎夜座禪觀_二水月_一

むねの月心の水もよなゝのしつかなるよりすみはしめける

五首。殊銘ニ心肝一候。無ニ申量一候。

但有ニ泉聲洗ニ我心一

影すめるいはまのし水さはりおほみ我心をしあらひつる哉

御地に過候歟。

碧落無レ雲稱ニ鶴心一

雲はるゝ空にきこえて鳴鶴もよその思ひはいふかひそなき

但有ニ双松當ニ砌下一

我もしり我もしられて年はへぬ砌にうへしふたもとのまつ

二首。不思議に思給候。

詠三首和歌 承久四年八月十五夜

月前松風

いつれともわかれぬ秋のけしきかな月にならふる嶺の松風

月前旅宿

月ゆへと出し都のわかれかはこよひそ秋はさやのなかやま

月前久戀

契りても空行月のいくめぐりむなしき秋を過しきぬらん

三首。又殊勝候。

詠二十首倭歌 貞應元年十二月二日

花三首

山さくら思ひたえせぬ花のうへにいたくなふれそ春の鶯
いそのかみふるのゝ花にこととはむかゝるなけきや有し昔も

心詞姿。二首又落涙。

あちきなくおしともいはし山櫻かたおもひなる風も社ふけ

末句無術躰候歟。

郭公二首

きく人の袖しのもりの郭公なれゆへしけき露としらすや
はおもしろく候。然而又思寄事候歟。

時鳥あやめの草のゆかりあらはわか袂なるねにもなかなん

殊勝に候歟。

月四首

たなはたの稀にあふよの月よりや心つくしのかけもそふ覽
こゝろつくしの月も。かくこそ候へけれ。いかに人不ニ

思寄一候らん。

大井川しもはかつらの月かけにみかきておつるせゝの白浪

末句きよけにきこえ候歟。

なかむるに物思ふ事のなくさまは月になれたるみとや成なん

本歌にいたくかはらすや候らん。仍不ニ合點一候。

心もていらむたにこそおしからめ月のあなたはうち時雨つゝ

よろしく候。

雪五首

麓には雪けの風を先たてゝみ山の松そ白くなりゆく

見様に覺候。宜候歟。

さゝのはにふる初雪のあさこほり消ぬかうへに霰たはしる

うち拂ふ羽かひの雪の寒き夜はつかはぬをしね覺かちなる

二首。おかしきさまに候歟。

雪ふれは又も咲けり冬かれの山したのへのをはなくす花
今朝は又たれ跡つけて通ふ覽雪もてわたすきそのかけはし

二首。殊勝におもしろく候。まさりに候歟。

戀六首

いもにこひわかの浦松恨てもつれなき色に年そへにける
凡夫はなれ。ゆゝしく候歟。

秋田なるかひやかけふり下もえに思ふとはしれ跡はなく共
戀をの^{戀古}みしつのをたまきいやしきも思ひはおなし涙也けり

二首。無難宜候歟。

くちにけりひる時もなきかたしきの涙の下のとふのすかこも
是は劣地候歟。

しなのなるあさまの山の浅からぬ思ひの末そ煙ともなる
ことよろしく候。

いもまつと山のしづくに立ぬれてそほちにけらしわか戀衣
高ことからゆゝしく候。

詠五十首和歌 貞應二年二月十日

春

林變ニ容輝ニ宿雪紅

紅のかすみにけさやにほふらん雪のはやしの春のはつ花

高心姿實難有候歟。

露暖南枝花始開

春の日の光りに匂ふ梅花みなみよりこそ露もをきけめ

是又宜候。

鑽レ沙草只三分許

秋はまたわくへき道と成やせん緑みしかき庭のわか草

氣霽風梳ニ新柳髪ニ

春きぬとつけのをくしもさゝなくに柳のかみをけつる春風

心姿とりく無ニ申限ニ候歟。

舊巢爲レ後屬ニ春雲ニ

白雲をのかすもりと契てや都の花にうつるうくひす

めつらしきさまに候へとも。すこし劣候歟。

江霞歸浦人煙遠

あし火たく難波の浦の夕煙浪ちへたてゝかすむ比かな

林中花錦時開落

立田山花のにしきのぬきをうすみ咲か散かにまよふ春哉

落花狼藉風狂後

花さそふ木のしたかせの吹まゝに猶時しらぬ雪そみたるゝ

三首。又尤宜候。同前候歟。

山腰歸鴈斜牽帶

立かへる雲の鴈をおひにせる山のすかたそ春はさひしき

春情難レ繋夕陽前

夕つく日霞のしたにかたふきて入相のかねに春そのこれる

二首。いますこしきかりて見え候歟。

夏

竹亭陰合偏宜レ夏

ときはなる陰しけりあふさゝ竹の大宮人の袖そすゝしき

高尤よろしく候。

花薰紫麝風程

たか袖の匂ひを風のさそひきて花たちはなにうつしそめ釵

谷靜纔聞山鳥語

足引の山ほとゝきすしのふ也そのばなかくふ谷のひとつら

まことよろしく開候。

松高風有ニ一聲秋ニ

松かけや身にしむ程はなけれとも風にさきたつ秋の一聲

不_ニ是_ニ蟬悲_ニ客意悲

夏ふかきもりの空蟬ねにたてゝなくこの暮は我さへそうき

二首。劣候歟。

秋

風從_ニ昨夜_ニ聲_ニ蟬怨

きのふよりよはの松かせ音たてゝ恨そそむるあまのは衣

炎氣剩殘衣尙重

蟬のはのうすき衣も猶おもし秋の日數もなれぬこのころ

曉露鹿啼花始發

我宿の庭の秋はき咲そめて此曉の露そうつろふ

竹風鳴葉月明前

をとつるゝ夜はの風や更ぬらん籬の竹を出る月かけ

由來感思在_ニ秋天_ニ

身にしめし秋の夕のなかもより物思ふ我と成にけるかな

五首。心詞よろしく候無_ニ申限_ニ候歟。

綠草如今麋鹿苑

深草や秋ののらにも成はてゝあるしかほなるさをしかの聲

水底摸_レ書鴈渡時

初かりの翅にかくるたまつさのかけさへみゆる山川の水

蔓草露深人定後

はらはねは更行まゝに露そをく草にやつるゝ庭の通路

蘆洲月色隨_レ潮滿

みつしほにすすきの蘆もみかくれて月よせ返る三嶋江の浪

蘭蕙苑風摧_レ紫後

むらさきにたか染置し藤はかまその色となく吹あらし哉

四首。又一字一句いやしからず。宜候歟。

冬

每朝聲少漢林風

紅葉ちる梢の時雨よはるなり昨日はあらしけふは木からし

心すかたおもしるく候歟。

雪點_ニ林頭_ニ見_レ有_レ花

時雨までつれなき色とみしかともときは木なから花咲に鳧

面に雪とはみえず候なから。時雨までと候に。心こもり

て實にこゝろよりかたく候。彼からくれなゐに水くゝ

るとはなと同前候歟。

霜妨鶴唳寒無_レ露

をく露のむすへはしろき霜の上に夜深き鶴の聲そさむけき

群源暮叩谷心寒

とちやらぬ氷のしたになみさえて谷の小川そ冬こもり行

人無_レ更少時須_レ惜

惜めとも老計りこそ積りけれあすはみそらの數ならぬみと

三首。又こゝろ詞すかた。いつれと難_レ申候。落涙かなし

く候。

戀

楊貴妃歸唐帝思

幻をうつゝ計になくさめてまたさめやらぬ夢のかよひち

年々別思驚_ニ秋鴈_ニ

秋ことに忘れぬかりの聲きけは立別にし人を戀しき

寒閨獨臥無_ニ天簫_ニ

獨のみねやのさむしろ打はらひあかし侘ぬる冬のよなく

身化早爲^ニ胡朽骨^一

あかきりし都をこふる泪こそつゐにこしちの雪ときえしか
洲蘆夜雨他郷涙

夢にたにまたみしまえの葦のはに都戀しき袖のあめかな

五首。心すかた高相かねて。いかに申へしとも不^レ覺候。
不^レ可^レ說事候歟。

雜

終宵床底見^ニ青天^一

かたしきや闇の板まのあれしより空もひとつに露そ置ける

蕭索村風吹^レ笛處

笛のねのほの吹すさふ秋かせにとをちさひしき里の一村

ふえなとは。かゝる物にて候けるにや。

故山無^レ主晚雲孤

人しれぬ山ちのおくに住なれて夕暮ことにかへるしら雲

晴後青山臨^レ隔近

窓ちかきむかひの山に霧晴てあらはれわたる檜原檜原

三千世界眼前盡

見渡せば幾雲ゐとも白雲のかきりをかきる夕暮の空

深洞聞^レ風老檜悲

苔深き洞の秋かせ吹すきてふるきひはらの音を悲しき

人如^ニ鳥路^一穿^レ雲出

とふ鳥の通ふはかりのしるへまで雲のかけ橋ふみみてし哉

暮鳥栖煙守^ニ廢籬^一

しとゝなく籬の竹のゆふ煙幾よかへぬる人すますして

觸石春雲生^ニ枕上^一

いはかねの枕の夢もさめやらてよこ雲かすむ春の曙
曉颺飛落峽煙深

曉の煙も深き山の邊におりしりかほのむさゝきの聲

付^レ題ては無^ニ左右^一候得と。猶物によりて爲^レ輕片點候。

未^レ通^ニ春花夢裏名^一

ちる花のあたなる春の夢のなもいとはすなからいとはしき哉

實心詞おかしくよろしく候。

儻得難^レ逢一乘文

うとんけの法の花にもあひにけり菩提の種を植てける身は

一生西望是長襟

よにふれはいくそ思はおもひかは西を望むそなかき物思ひ

諫鼓苔深鳥不^レ驚

音たえしいさめのつゝみとりなれて苔むす程に年々へにける

不老門前日月遲

年へても老せぬかとなさしてけり空に月日のすまん限は

詠三首和歌 貞應二年九月十三夜

閑中秋深

秋も今は深きよもきの下露もはらはてのみやしもと成らん

遠山紅葉

もみちするとを山鳥のをのつからたくひありける袖の色哉

曉月聞^レ鹿

鹿のねにとたえかちにも成にけり夜わたる月の夢の浮橋

三首。こゝろすかたよろしく候。

詠古寺九月盡 貞應二年

行秋の名残さひしき夕かな野寺のかねに残るまつかせ
末句實によりしく候。

詠寄竹祝 貞應三年正月五日

鶯のはつ春いはふ吳竹の千とせの色をわかともにせん
祝によりて尤よろしく候。

詠五首和歌 貞應三年正月廿三日

野外霞

春のさる霞につまやこもるらんまた若草にむさしのゝ原
この風情はいかにのこり候けるにか。

山間鶯

みよしのゝ山の鶯春かけてなけともいまたはなそ物うき
是は聊劣候歟。

橋邊花

花みよとたれわたしけん足引の櫻にまかふ雲のかけはし
寄松戀

寄水祝

たけくまのまつとはいはし年ふ共つれなき物と人も社しれ
いすゝ川たえせぬ水の水上も清き流なてらささらめや

詠五首和歌 貞應三年七月廿五日

女良花

轡虫

小倉山道もまとはすなく鹿はへたつる霧にしをりをやせし
雲かゝる月のをちかた晴やらてむかひの山に時雨降らし
駒迎

孔子影

こぬ人をまつらかおきもむなしくて霞に浪はへたゝりに鳧
くるとあくと思ひや後のよのえたの劍の色にみゆらん
阿波國

秋風のはらひし宿はのとなりてくすのうら葉そ庭に残れる

詠五首和歌

同 隱題

萩花

うへあらし吹ぬる比はきのはなきみ山にしもそ月はすみける
小男鹿

蜚

浪こほるけさをしかもの床さえて玉もの池に冬はきにけり
をのゝ山みやきまはらにみえつるはきりゝ炭をやけは成鳧

懸樋水

いかにせん空しくすくる駒のかけひのみつもりて老と成身を
庚申

南さす法のしるへにふたらくの岸へゆきつけかのえさる舟
年來隱題折句かゝる物にて候けると驚目候也。無三申

限一候歟。

詠月前思故郷 貞應三年八月十五夜

したひくる影は袂にやつるこも面かはりすなふるさとの月
詠冬景氣屬閑居 貞應二年十月廿七日

冬こもる里のあるしはこたへねと竹のあみとを敲く木からし
詠歲暮多風雪 元仁元年十二月廿一日

風まぜにふるしら雪の積りつゝおいてふ年を急くはかなさ
三首。同宜候歟。

惣此中左右點片點雖難分申上候。猶愚意之所及聊事
をも爲_ニ申上_一候。如_レ此注進上候。地御製一切不_レ見候之
間。申不_レ及候歟。唯同事還無_ニ念候歟。今此左右點之上
言。其舛隨_ニ長短_一秀候歟。仍每_ニ御製_一不_ニ注付_一候。只同
事候歟之間如_レ此候。以_ニ此旨_一可_ニ申上_一給_ニ候。

春五首 此以下以他本齊加之

かそふれはなけきも老もつもりけりよそなる春を送り迎て
昔思ふくち木の柳なにゆへにみとりのかみをけつるなる覽_{續古}
山のはにやゝいりぬへき春の日の心ななきも限こそあれ
住すてし花の都の家櫻たれかかさしとおりやつすらむ
咲てちる花をもめてし是そこの嵐にいそくあたし世中
夏五首
もゝしきの庭の橘思ひ出てさらに昔を忍ふそてかな
あやにくになくや雲ゐの時鳥聲なき風そ思ふよな_{續古}
ねをたえておふる五月の浮草のうきな計そ波にしつむな

あやめ草袖にかけても思ひきや長きねにのみ朽はてんとは
夏草のふかき思ひもある物ををのれはかりととふほたる哉
秋五首

はつ秋のゆふへしらする白露は昨日の袖の涙なりけり
すゝきのゝ緑か末のはつ尾花なひくにつけてよる方もなし
こ萩はらうつろひはてし秋の色にあかすふるえの花をまつ哉
鴈のくるそなたの空をなかもても思ひつきせぬ嶺の朝きり
袖ぬるゝ秋をはあまたへしかとも月にはあかぬ心成けり
冬五首

はゝそ原しくるときけは我袖のかひなき色を先まさりける
霜かるゝのへの葛はの心ちしてうらむるかひもなしや世中
人めよりやかてあれにし我宿のあさちか霜そむすほれ行
山陰にふるしら雪のきえやうて残るうきみの末を悲しき
行末をしらぬ我身のたくひ哉氷にむせふ谷川の水

雜十首

つらしとて人をうらみむゆへそなき我心なる世をはいとはて
いとへとてなる世の中もいとはれてうき身ににたる我心哉
行末のたのみはたれもありかほに待はむなしき月日成けり
徒にこたへぬ空をあふきつゝ哀あなうとすくす成けり_{續古}
誰ゆへにちに交はる光りそとはゝ神のいかにこたへん
うき身とも思へはいはし逢かたきみたのちかひを頼てしかは
よく思へあまねきあめの下なれとねなき草木は恵みやする
昔よりうき世中ときゝしかとけふは我身の爲にそ有ける
ゆきとまる里を我よと思へとも猶戀しきは都なりけり
定なき程たに物を思ふかな末葉の露の消かへりつゝ
月前念佛

西へ行心に月の影晴てすてぬ光のちかひをそおもふ

月前述懐

なけくとして袖の露をは誰かとふ思へはうれし秋のよの月

月前無常

とゝまらぬ浮世の數によそへつゝ今夜は月をまゝとろまてみん

草名十首

野邊に出て誰家つとゝ折つらん春の蕨にまじるいたとり
極樂の池のかきりといつかみんけふはひらけぬ胸のはちすは
夕立の名残の露も消やられてまたたははなる庭の常夏
八重葎しけき思ひにとちはてし跡をはかれす秋はきにけり
年のうちに又さく花のなきまゝに菊の籬を猶そつくるふ
別路におふる葛はの露みればきえぬたくひも又しられけり
あたにしく苔の庭のつゆけきは都みぬめの涙なりけり
神代よりくもらぬ空の日かけ草たえぬ末とはてらさきり鬼
つき草の花にはすらし我衣しけき涙は露にまされる
いくしほもをのれかそむる色そかしなと紅のからあるの花

木名十首

此比はあるしもしらぬ梅花春はみやこの梢のみかは
咲ぬとも誰かはしらん春霞たなひく方は山なしのはな
たちはなの袖に匂はぬ時たにも戀しき物は昔なりけり
朝霧のなみまにみゆるはまひさきさやかに秋の色はわかれす
深山邊やま弓よりこき色そなき紅葉は秋のならひなれとも
時雨つるこのてかしはの二おもてとてもかくてもぬるゝ袖哉
埋るゝ木のはか下のみなし栗かくて朽なん身をおします
しきみつむ心のおくの山なくは淺き歎きをなにかこらし
杉のかとさゝむとまては思はねととふ人なしに苔とちて鳧

光^{榮後}をは玉くしのはにやはらけて神の國とも定めてしかな

虫名十首

山里の花のそのふにまふてふの色々まかふ春の夕暮
急雨のくもよの螢數みえて風吹すさふ庭の夏くさ
我宿の庭の夏草露かけて涙さきたつ松むしの聲
日くらしの鳴夕暮の山かせに色をもまたてちる木のは哉
冬かれのよもきかもとの蜚いけるはかりはけにそかひなき
神かきは祈るいのりは遅けれとゐもりのしるし猶やみゆ覽
蜻蛉のをのゝ草葉のあれしよりあるかなきかととふ人もなし
家^をすてぬ心は同しかたつふりたちまふへくもみえぬ世なれと
世中を思へはたれもひをむしのけふの命の夕暮の空
軒ちかき籬の竹の末葉よりし^のふにかよふさゝかにのいと

鳥名十首

春もいまたあさるきゝすの跡みえて村々のこのへの白雪
夏の夜のさてもあくるに習てや我かとたゝくくゐな成らん
別こし都のかたのことつてもなをまたるゝは秋のかりかね
芦の葉につなくうきすも氷つゝすみあらしたる冬のには鳥
み山への嵐にうつるこからめは時雨に残る木のはとそみる
いつもきくおほをそ鳥の聲までもねさめ悲しき有明の月
足引の山深くすむみゝつくは世のうき事をきかしさや思ふ
このうちにまたすみなれぬひえ鳥は心なくて世をすくす哉
はしたかのとかへる山にすみなから淺き心はならはさりけり
山鳥のをろの鏡にあらねともうき影みてはねそなけれける

獸名十首

此ころのしつか田かへすからすきのうしと思ふも力なのよや
谷深みふするのかるもかきたえてなれし都そうとく成行

霧ふかき嶺ゆく鹿の友をなみ迷ひてのみそれななけれける
きつねたにかけをうかふ山川の氷の上をふみてのみゆく
世を忍ふ心のうちのあなねすみやすくいつへき道もあるらし
つきもよに梢もとむるむさゝひの聲きく時そ夢はたえぬる
あらくまのすむ奥山に入しよりおそろしき世を忍ふくるしき
心をば北の翁にならへともまた立かへるこまたにもなし
月影に命をかへしさるよりもしつみはてぬる我身成けり
人心てかひのとらにあらね共なれししもなとうとく成らん

月三首

なゝとせの秋のこよひをいたつらに獨しみれば月もうらめし
我袖の物なりなから秋の月くもるはえこそとめさきりけれ
なをさりに過し心のむくひにやかゝる旅ねの月をみるらん

名所春

よしの山また冬なからかすめるや麓の春のはしめなるらん
時しらぬたくひも今はいかゝせん朽木の杣に霞たなひく
舟つなくかけも緑に成にけりむつたのよとの玉のを柳
霞にはふしの煙もまかひけりにたる物なきわかおもひかな
三笠山ぬれぬ草木のみとりさへよそに染なす春雨の露
難波めの芦火のさかもなかり鳧をのれとくもる春のよの月
菅原やふしみのあらたうちかへし民のしわさになれる此比
ときは山いかなる春のけしきそと花より外も猶そゆかしき
山姫の花をりかくるかつらきの霞の衣はるそかさなる
宮木もりなしとや風もさそふらんさけはかつちる志賀の花園
同 夏
たちかふる衣の關のせきもりは昨日の春をえやはとゝむる

浪のゆふかくる比とやうの花のかけにかくれぬ玉川のさと
かしは木の杜の下をはおりしきてやかつみかみを祭る比哉
大原やをしほの山の郭公昔にあらぬねをやなくらむ
しるしあるみわの梢もみえわかすいづれも杉の夏のみとりに
やつれゆくすかたの池の菖蒲草うきねはかりを袖にかけつゝ
吹かせに背をのみや忍ふらんくのに都に残るたち花
あけはてゝしはしも見はや玉くしけふたみの浦の夏の夜月
なつのこる玉江のかりにとひてみんかく古郷は忍ぶ物かと
き舟川曉やみもなかりけり月に螢のかけをかへつゝ

同 秋

春日のの萩のやけはらいいつのまにうはゝに秋の風かよふ覽
いせの海ふかき契のまゝならは今夜影みん星あひの濱
露なから秋まちえたる萩原のふる枝の萩に風なふれそも
花薄下にかよひし小男鹿も聲ほにいたすいなみのの原
久かたのかつらの里も有物をなとや宮この月はこひしき
千はやふる神もや秋を契るらん木のま淋しき月よみの杜
逢坂の關のわらやは跡もなし秋のしらへを松にのこして
津の國のなにはかくれぬ弓はりのはつかの山に残る月かけ
深草や誰ふるささとしらねとも昔忘れす衣うつなり
鐘の音によもきか露を置まよふとよらの寺の秋の夕くれ
同 冬
色とりし秋の木のはゝ散はてゝ残るゑしまの松の一ふて
かくはかりしくるゝ色やかなる覽宮この人のころもての森
霜さむき籬の嶋の冬枯に浪の花もや色かはるらん
木枯に下葉残らす散はてゝけにもる山の冬の月かけ
見わたせはましる薄も霜かれて緑すくなきゐなのさゝ原

宮城のやかれはたになき萩か枝におれぬはかりもふれる白雪
み狩せしさかのはきとにすみなしてをのか家々冬こもりせり
すまの浪あかしの月もよ寒にてをのか浦々千鳥なく也
冬さむみゆるきのもりにゐる鶯の夫ともみえぬ雪の夕暮
老といひてかさなる春もあすか川はやきせにのみ行月日哉

同戀

たのめこし人の心は通ふやととひてもみはやうやむやの關
名とり川うき名にぬるゝ戀衣逢せまつまに朽やはてなん
あまの原あけてくやしき契りより思ひしらるゝ水の江の宮
市人のそめししかまのかちよりもふかき契の色はみせてき
はふくすの恨は末もとをらねは心にまよふあしからの山
いくよとか袖のしからみせきもえん契し人はをとなしの瀧
我戀はかたのの萩に置露のうつろふまゝにてにもたまらず
なゝひろの石よりも猶つれなきはひかれぬ人の心なりけり
行あはむ程をはしらす住吉の松にたえまのちきのかたそき
うつの山過にし夢の面かけに見はてぬ夢はうつゝ成けり

花光契萬年

梅花匂ひはつきし万代の春のかさしと植置しかは
以長夜月置末句二首

なかむれとしはしなくさむ影もなしたか偽のなかきよの月
此頃の涙は秋のゆへならすくもりなはてそなかきよの月

戀二十五首

寄風

難波めのあしひの煙たきまさりなひかぬ方へなひく鹽かせ
月

此暮とまたまし物を秋の月契しまゝのちきりなりせは
雲

たゆたひに思ふ心もさほ山の色にはみえすよその白雲
露

よひのまは出て拂はんと思ひしにさきたつ袖の露をあやしき
雪

年ふれと跡なき人の契ゆへつもりはてぬる庭の白雪
山

深くのみ思ひ入かなこしかたをまよふ山路となに歎らん
河

明日香川あすも有とや頼けんけふは逢せにかふる命を
野

すゝきの小花かもとにしほれても思ひの露を置所なき
浦

朽はつる袖しの浦の浪ならはうきになかるゝ名をも残すな
關

あしかきのよはのまもりや心あらん忍ひをゆるす川口の關
松

年へてもまつとは誰かうへをきしつれなき色に人ならひ見
櫻

さためなき人の心の花櫻さくといふまにうつろひにけり
竹

吳竹聲古のよゝの契もしられけりうきふししけき戀のむくひに
萩

小男鹿のたちののこ萩露かけて消なん後を誰にかこたん
葛

鶯

螢

鴈

葦

鶯

衣

枕

鏡

燈

席

軒

繁

韻字六首

眞葛原うらむる色をしらせはや秋にあへぬ身ともこそなれ
 ねにたつる心のともゝわすられぬなけきにうつる春の鶯
 きぬのの曉やみにとふ螢まよふ心のしるへをしへよ
 初かりのわすれぬ秋のこゑきけは
 獨ぬる枕とするやきり／＼す長きおもひの行衛とふらん
 我戀は氷にすたくなし鳥のむすほゝれ行ねをのみそなく
 まちくらし恨あかして置露のしろあき衣ぬれ／＼そきる
 敷妙の枕のうへにむす苔も獨ねよとや生はしめけん
 増鏡戀しき人はみえなくに我おもかけのなにうつるらん
 窓ふかき秋のともし火消やらてもゆるはむねの思ひ成けり
 ぬるかうちにみし面影も忘られてうつゝにあかすよはのさ筵

猿

魂

門

痕

朝

夕

春

戀

此御集。

永祿八年乙丑仲秋念三

正二位藤原爲益判

幾度か秋の袂の朽ぬらんしけきなけきの露の下にて
 山深くすみける程もしられけり月夜のさるの窓ちかき聲
 あくかるゝ我たましぬの行へをも千里の外の月や知らん
 にしへとやみのりの門ををしふ覽さきたちて行秋のよの月
 かよふへき跡ありとたに忘れなんとはれぬ庭を苔にまかせて
 鶯のなけともいまた明やらて横雲ゆるき春の大そら
 ゆふ霞たなひきわたす山のはにみとりの松のかけそ少なき
 恨こし人の心もとけやらす袖のこほりに春はきぬれと
 此御集。以勅本令比校畢。尤可爲正本者也。
 永祿八年乙丑仲秋念三
 正二位藤原爲益判

群書類從卷第二百二十九

和歌部八十四家集二

砂玉和歌集 後崇光院御集

京にすみ侍し比應永（後小松）十年九月九日伏見殿（榮仁）
よりめされし三首の歌

菊帶雨

雨そゝく籬のきくの花の枝に置そふ露は千代の數かも

曉鹿

明かたはなれもや月をおもひいるみ山に鹿の聲かへるなり

契絶戀

瀬をあさみ絶けるものを山水の流ての世となに契けん

應永十一年五月廿日萩原殿にてめされし三首の歌

山家鶯

鶯のなくねにのみやともなはん人をもさそへ春の山里

契久戀

契りしを命にかけていつまてか憂にたへたる世をもすくさん

草庵雨

思ひある葎の宿の夜の雨に猶ぬれまさるかたしきの袖

同年八月三五夜にめされし五首の歌

漸昇月

山のはの木のををわくる月影の程なく松の上に出ぬる

岡上月

岡のへやいつともわかぬ松のはに秋しる月の影そもりくる

月似鏡

雲はるゝ遠山鳥のおのへよりかゝみをかけて出る月みゆ

旅泊鷹

行鷹に都を思ひこしの海にうきぬするそことやつてまし

寄澤戀

わきかへる心よいかに鳴澤の音にたつへき思ひならぬを

おなし十三夜にめされし三首

月

名にしおふ月も今はの秋ふけておしと思ふ夜そ今宵成ける

戀月

あちきなくよるたにもらせ忍ひわは月ゆへぬらす袖にまかへて

雜月

月をたに心のまゝになれて見むうき世の秋の思ひ出にして

おなし十月廿日人麿影供に召れし歌

落葉

梢にて染し名残のあかすとや落葉かうへに又しくれぬる

冬 月

秋もかく身にしむ色は見さりしに枯野の霜に氷るよの月

名所戀

契置しそのかねことを忘れずはみのゝお山の松としらなむ

應永十二年七月七日めされし三首

七夕風

ひこほしの妻まつ秋の初風にうらめつらしき天の羽衣

七夕歌

七夕をなれもうらやむ心とや妻まつ暮に鹿の啼らん

七夕恨

天川流てたえぬあふ瀬にも恨や残る秋の一夜に

同年九月十三夜三首めされし歌

月前露

草の原露のやとりを尋てもとふ物とては秋のよの月

月似鏡

松浦川水底かけてすむ月を浪にしつめし鏡とそみる

寄月待戀

とへかしな今夜はことに待らむと空にみゆべき月のけしきを

應永十三年夏の頃有栖川殿(桑毛)へまいりてしはらく

侍し時間六月五日廿六番歌合冷泉中納言爲尹卿合點

判詞なとめされしによめる

夏 月

月やとる岩井の清水結ふ手のあかても明るみしか夜の空

夏 山

夏ふかきは山に秋を先こめて涼しくおろす峯の松かせ

戀 草

いつまてか思ひ亂てしの薄心のいろのほにもいつへき

戀 鳥

しのひこしうき名たかしの濱千鳥ふみ通ひる跡やみえけん

雜 色

君になを千世の齡を松か枝のときはの色をゆつれと思ふ

雜 船

難波かた芦荊舟のいつまてかかゝるうき世を思ひわたらん

おなし閨六月十一日かさねて五十番歌合侍しに判者

冷泉中納言と飛鳥井中納言入道(雅經)と勝負付侍し

谷 鶯

霞つゝ古巢もみえぬ谷の戸をねにあらはれて出る鶯

落 花

月かけにほのみし花のかつちりて明る木末は雪の村きえ

夕 立

ゆふたちの過つる峯は日影みえて村雲うつる山そ暮行

萩 露

花の色もえならぬ萩の匂ひかな村雨そゝく露のしめりに

岡紅葉

もみちする岡へにまじる松のはの秋ならぬ色も秋はみえ鳧

朝 霜

見し秋に寂しき色はつきにしを枯野に残す霜の朝明

寄風戀

思へたゝこぬ夜更行秋風はいかに涙をさそふとかしる

寄衣戀

夢にたにせめてやあふと小夜衣待よはる床にかへしてぬる

羈 旅

結びつる草の枕の名残さへ月ゆへおしき野へのあけほの

左點 冷泉中納言

右點 飛鳥井中納言入道

同年十月廿日人丸影供にめされし五首

櫻

花のうれにしつめる月は影おちて明る櫻の色そえならぬ

時鳥

なれのみそねをもかたらふ時鳥身をうの花の宿の夕暮

月

あくかれて行衛もしらぬ空にのみ心をやとす秋の夜の月

雪

月と花のなさけいつれと思ひしも心に迷ふ雪のあけほの

初戀

思ふよりいつしか袖に置露は君か行衛や秋のはつかせ

應永十四年三月三日めされし三首

三月三日

から人の心もけふそしら波にうかひて匂ふ花のさかつき

水上落花

大る河いはせの浪による花の雪まをくたす春の筏士

竹契追年

千世こむる竹のそのふの幾年もかはらぬ色に君そさかへん

同年九月十三夜にめされし三首

月前菊

秋かせの露うち拂ふ菊のうへに猶かけとまる月そいさよふ

田家月

をしがなく鳥羽田の面に霧晴て月もいほもる秋の山風

寄月思戀

待宵のとはぬ思ひのいく思ひ月はしるやとうれへてそなく

おなし年十月廿日人丸影供にめされし

時雨

身を秋の露ほしはてぬ袖の上をしほりなそへ今朝の時雨に

思出戀

我のみやこひもしのはんもろともにみし夜の月を思出にして

山家夕

松ふかき軒はの山は暮はてゝむかひの峰に残る日のかけ

應永十六年八月十五夜菊亭にて歌合侍しに判者冷泉

中納言爲尹卿

秋風

しらさりし風のやとりは萩のはに有とも秋はなにゝうらみん

秋露

ものおもふ袖こそ露のやとりなれ草木はなへて秋風そ吹

秋月

あくかるゝ心を空にやとしをきてかたらひあかす秋の夜の月

秋雨

露なから桐の一葉はかつちりて木末秋なるむら雨の空

秋鹿

夕されは鳥羽田にかよふさをしかの聲吹をくる秋の山かせ

秋鷹

天津鷹都の秋をしたひきて田面の月によるとなく也

秋虫

ねにたてゝ我はなかねとうき秋の思ひをかはす虫の聲かな

秋花

露むすふ小萩か花の夕しめり月のみ秋となに思ひけん

穠霜

妻こむる鹿のたちとやあらはれん初霜かれのむさしの原

秋水

月かけのやとりにつけて鳴のたつ野澤の水にすむ心かな

秋祝

ちゝの秋猶色かえぬ松よりもときはかきはの君か御代かな

穠旅

秋風やさてもとはまし草の原露の旅ねにおもひきえなは

秋戀

おしと思ふ今宵の秋の月にしもとはぬは獨ねてあかせとや

秋述懷

山ふかく思ひもいらぬつれなさよ世をあきはつる有明の月

秋雜

時しもあれ秋の半におとこ山月に御幸や契をきけん

おなし年八月廿日庚申の會に

秋月

立田姫そむるにもあらぬ久かたの月のかつらも秋そ色そふ

穠露

をく露も有かなきかにかけるふの小野の淺茅に秋風そ吹

秋鹿

御田やもりうちぬる夢をさしかの我しも啼て驚かす哉

秋水

秋も猶手にや結はん月影の涼しさあかぬ山の井の水

秋雜

玉ならぬわかか浦はのもくつにも光はやとせ秋のよの月

おなしとし九月重陽の歌に

菊初開

昨日迄つほみし菊の背のまに咲るは花もけふやまちけん

尋戀

尋ねよといひしるしの杉はあれと人社みえぬみわの山本

田家水

まかせつるかけひの水は猶そもる荳田の庵は月もすまねと

早春

同年九月十三夜菊亭の會人々よませて歌合にかきつかひて飛鳥井中納言入道に判せさせしによめる

早春

民の戸も雪消ぬらし玉ほこの道ある御代の春をまちえて

春花

山櫻ほのみえそむる横雲のひまこそ匂へ春のあけほの

見花

山さくらあかぬ心のまゝならは我世を花にくたしてやみん

曉郭公

月も猶ふくるやまちし時鳥有明の空にもらす忍ひ音

夕立

をはつせの山かきくもる夕立にふしみの暮は風そ涼しき

萩露

小萩原分つる野への秋風に思ひをかるゝ花のうへの露

河月

貴舟川いはせの月に浪こえて玉ちる影に秋風そふく

庭紅葉

なをさらに庭の梢や時雨けん染もつくさぬ薄紅葉哉

鷹狩

狩くらし道ふみまよふはし鷹のとかへる山に月をまつかな

閑中雪

とふ人も哀とみすや閉はつる蓬かかとの雪のあけほの

寄海戀

いはみかた千ひろの底も限あれはふかき恨を何にたとへん

寄枕戀

待かねしひとせもしらてにみ枕あたし心といかにうらみん

眺望

藤代の御坂は雲の上にみえてきの海遠く有明の月

神祇

哀とは神もみすやはいたつらに心をそむる住吉の松

同年十月廿一日菊亭にて庚申まもり侍し人々に歌よ

ませて歌合にかきつかひて常光院堯尊法印に判の詞

點々と申侍りしによめる

歳内立春

世の人のいそく心にさそはれて年も暮ぬに春やきぬらん

春月

かすめるを月やあらぬとうらむれは我身一つの涙成けり

待花

咲やらぬ花まつ頃の春山に人たのめなる峯のしら雲

葵

人なみに頼みをかくるあふひ草神のめくみも我をもらすな

杜郭公

一聲はしのたの杜のかひもなく千枝にかたらへ山ほとゝきす

早秋風

夜のまより軒端の萩に忍ひきて朝戸明れは秋かせそ吹

樋田

雨はるゝ鳥羽田の末の秋風にいなはをこゆるよとの川浪

社頭月

男山袖にうつりしいにしへの光もかくや秋の夜の月

夜雪

月かけのかすまぬのみそ春ならぬ梢の雪ははなの曙

寄野戀

あふ事は片野のみのゝかりにたとはれぬ鳥のね社なかるれ

寄原戀

戀衣雨にもまさる涙かなみやきか原の露はわけねと

寄湊戀

見せはやな身はうき舟もよるはかり涙のさばく袖の湊を

葦間鶴

和歌の浦や葦邊のたつの浪風にきこえぬ音をはしる人もなし

寄日祝

君か代はあまつ日影の曇なくてらん限はつきしとそおもふ

伊勢へ法樂の歌とて人のすゝめ侍しに

翫花

折かさす袖に匂ひなうつしてもあかぬ心の花にしみぬる

初冬

神なつき時をたかへす天つ日のかけものさむき冬を告也

忘戀

かれねたゝ忍ふにもあらぬ草の名よ人は軒端に何しける覽

應永十七年三月盡に菊亭にて歌合侍しに判者冷泉中

納言

初春

浅みとりはるになるてふ世の色は山も霞て鶯そなく
海邊霞

春はなを玉もかり舟よせかねつ霞にたとるわかのうら浪
雪中鶯

うちきらし梅のたち枝に降雪を花のちるとや鶯のなく
梅薫月

にほひこそしるへともなれ梅花色をはわかすかすむ夜の月
春曙

明やらぬ外山の霞ふかけれとたちもらさるゝ花の色哉
夜歸鴈

行鴈もなきけをしらはかへらめや月に花ちるあたら夜の空
山華

よしの山花より外の梢までおもかけ匂ふ峯のしら雲
花未飽

櫻はなさらぬ別のなかりせはあかてや千代の春も馴なん
花如雪

山さくら分こし雲ばかつ晴てかへさはあらぬ雪のかよひち
三月盡

鶯もけふはものうき聲す也なきもとゝめぬ春を恨て
おなし年七月七夕法樂に歌合し侍判者飛鳥井中納言

入道
春日

朝つく日霞をいつる外山よりはるの光も四方に匂へる
秋煙

秋はまたあさまの山にたつ霧も煙になれてみやはとかめむ
春夕

思ひそめしあけほのよりも櫻はな心うつろふゆふはへの色
冬山

峰つゝき木のはを送る山かせにしくれてめくる谷陰の里
夏浦

さみたれに浦のとまやも浪こえて軒端によするあまのはし舟
雜玉

から人のうきみしつみし白玉もつゐに光やかくれさるらん
雜書

教をくふみ見るたひにもろこしのかしこき人の心をそしる
戀舟

つゐにさていかなるえにかよりはてん芹分舟のさはる契は
おなし年八月十五夜によめる

初秋月
露たにもまた置あへぬ初秋に月の桂のはや色そそふ

澤邊月
所から月にあはれやまさるらしふしみの澤にしきもなく也

暮秋曉月
長月もやゝ更てゆく有明に秋ををしかそ聲もおしまぬ

寄嵐戀
たのめつる人はあらしの音信を心のまつにこたへてそ聞

寄草戀
うき人の軒はの草の忍ふにもあらぬ忘の名さへうらめし

寄衣戀
まちよはりせて夢にもみゆやさてかへす衣の恨てそぬる

應永十八年四月に伏見殿へまいりて今はさふらふほ
とに御歌の會しけくて月次の御會によめる

曉梅

雪とのみちりかふ梅もあたらの月さへおしき春の曙

深夜千鳥

小夜ちとり月もふけるの恨てやかたふく跡に音をはなく覽

山家

君になを千年をちきれふしみ山代々へし跡の庭の松かえ

月次の御會によめる

郭公頻

ことはりや聲もおしまぬ時鳥さ月も今はありあけの空

寄船戀

まほならぬ芥まかくれの捨小舟こかれわふ共人はしらしな

蜀中衣

しほるとも露ははらはし旅衣馴し都の月しやとれは

おなし年七夕法樂によめる

七夕雲

天河雲なへたてそ七夕のあふせを水にうつしてもみん

別戀

いかにせむ月もわかれの明方にあかぬ名残のおしきのみかは

寄道雜

玉ならぬ藻屑なりとも和歌の浦の道ある御代に名を残さはや

おなし年八月十五夜に

月前霧

木々の色山のすかたはへたつとも月をはこめぬ秋のゆふ霧

關月

月かけのもらすは何にうき秋のすまの關やに心とまらん

月前鶉

深草の里とふ月のあはれをも獨うつらの音にや立らん

おなし年九月十三夜に

風告秋使

吹風の萩のうは葉に音せすはめにみぬ秋を何にしらまし

欲顯戀

くちねたゝあふせもしらて名取川身の埋木は顯れんもうし

寄身述懷

今よりは心にはれよ夜半の月うき身を秋の涙さそはて

おなし年重陽宴に

菊帶雨

うちしめる色もえならぬ匂ひかな村雨そゝく菊の上露

寄木戀

つれもなきたくひとみれはうき人のなかむる庭の松も恨めし

寄山戀

あふ坂の山よいかなる戀路にて憂身はこえぬ關となるらん

おなし年十月廿日人麿法樂に

落葉深

雪ならぬ木葉にたにもかよひちの嵐にたゆる冬の山里

水邊冬月

川風の吹きゆる夜はしら浪のこほれる上にこほる月影

名所戀

夢にたにあふ夜もしらていたつらに獨ふしみの里の名もうし

應永十九年九月重陽の會に

籬菊知時

おりをしるなへての花の中にしも菊はけふをや待て咲けん

〔頭註〕 今年八月廿九日稱光院受禪

忍不逢戀

ふみなれぬ忍ふの山のかよひちにまよふ心のおくをみせはや
松契追年

ふしみ山年ふる松も更に又ちよをは君に猶やちきらん
おなし年九月十三夜によめる

月前煙

藻鹽やくあまのしわきも心なき煙をすまの月やうらみむ
寄月逢戀

今宵しも名にあふ月に新枕わすれぬふしのかたみにやせん
花洛月

たくひなや花の都の秋の空さそな嵐の月はすむとも
寄月旅宿

馴てみし都の月にはれすは旅寝の秋や猶うからまし
應永廿年九月十三夜によめる

野月露深

深草の野への月かけ秋更て露の夜寒に鶉なく也
河月似米

月やとる川瀬の波の音せすは秋もこほれる渡とやみん
寄月顯戀

いかにして世にはもれけん面影も朧月夜にたとる契りを
同年の冬万葉詞百首當座に人々によませられ待し中
によめる

春

かくしきけらは
かくしき色やそはまし櫻花柳か枝にかくしきけらは
かれすなかむる

目もかれすなかむる花はうつろへと心そちらぬ春の夕かせ
その日のかきり

思ひ出にその日のかきりしたふらし花みしたひも別路の春

夏

待つひてなかなか頃の時鳥いつとしりてかつれなかるらむ
やすくぬる夜は

いもやすくぬる夜はあらし丈夫か小鹿待あかしともしする比
この夕風に

入日さす山路の木陰涼しきはこのゆふ風に秋やちかつく

秋

すたれうこかし

軒端あれてすたれうこかし吹風にねやの奥迄月そいさよふ
いそきなあけそ

心してこよひ一夜は天の戸もいそきな明そ星合のそら
朝霧こもり

山陰に朝きりこもりたつ鹿の聲吹もらす峯の松かせ
色つきぬらん

秋もやゝしくるゝ雲のたつた山さそな梢も色付ぬらん

冬

小松にみゆき

おれやすき木末をうつむ便にて小松にみゆき猶つもり梟
あさ戸ひらかん

いかにして朝戸ひらかむ吳竹の雪おれとつる窓の明かた

草木はななき

野も山もかすまはいかに春ならん草木花咲ふれるしら雪

戀

こゝろにむせひ

しられしな心にむせひこかるともうへにみゆへき煙ならねは

なれはすれとも

倂になれはすれともみし人の行衛はそはぬ月をかひなき

行もとまるも

有明はかたみをわけてやとりけり行もとまるもしほる袂に

雜

雲のなみたち

尋かぬ蓬か鷗に行舟よ雲の波たちしらぬ鹽ちに

たつかけるみゆ

あさりする入江の芦邊汐みちて浦路はるかにたつかけるみゆ

旅のやとりに

心をはたちもとむなよ世中は旅のやとりに住やはつへき

きのふのくれの

夢うつゝ思ひもわかぬよの中はきのふの暮の浮雲の空

おなしとし十月廿日人麿影供に

冬 雲

さのみやは時雨はかりにさむからんこほれる雲の雪け成らし

冬 水

行なやむいはせの水に音かへて氷をたゝく松かせそ吹

冬 鳥

天津鴈かり田の霜にあさる也稻葉におりし秋や忘れぬ

冬 戀

あきはつる契りも今は浅ちふの通ひし道も霜枯にけり

冬 雜

徒にねをなくわかぬ浦ちとり世の人なみに跡もつけはや

田舎人勸進の歌によみつかはす

澤 螢

川ちかき伏見の澤にとふ螢をちのかゝりの影かとそみる

夕 顔

たそかれにそれともみえぬ夕顔は折てそ花の名をもしりぬる

見 戀

つれなしとみるにもやかて涙そふ人の心やあり明の空

同年十一月卅日重有朝臣すゝめ侍し十首

天 象

曇なき月日をみても天の戸のあけし神代を猶あふく哉

地 儀

ふしみ山麓のこかけ水にみえて松のうれこすうちの川浪

雜 木

夢の世は花も紅葉もとまらねは松をかはらぬ友と社みめ

雜 草

住よしの松に思ひを手向草露のめくみも神はかけすや

雜 鳥

和歌の浦や芦間隠れにゐるたつの世にも聞えぬ音をもなく哉

雜 獸

有明のかたふく峯の木末より嵐におつるさるの一聲

雜 虫

涙ゆへくもると月を恨ても藻にすむ虫の名をやかこたん

居所

釋教

神祇

應永廿一年端午の會によめる

菖蒲

梅雨

山居

おなし年七夕法樂に

七夕雨

七夕朝

七夕夜

七夕鳥

秋をへてより羽をかはす鵲はほしのあふ夜や契をきけん

同年閏七月廿七日諏訪明神法樂百首和歌仁科入道勸進によみてつかはし侍る

春月

山陰にやとをしめても心をは憂世にかへすみれの松かせ
 いかにして只一ふさの花の色にやかて悟をひらきそめけん
 御裳濯のなかれをうくる君か代は神に任てたえしと思ふ
 あやめふく軒端に風のにははすは忍ふの緑色やまかはん
 露たにもにははぬ梅の青葉のみしけりて深き五月雨のころ
 都にてならはさりしに松かせの心をしほる山かけの里
 たなはたの妻まつ宵の村雨やはぬさきより袖ぬらす覽
 たなはたの秋を待こし程よりもけさの心はくれや久しき
 月の入空をなかめてたなはたの袖口ほとを思ひこそやれ
 秋をへてより羽をかはす鵲はほしのあふ夜や契をきけん
 同年閏七月廿七日諏訪明神法樂百首和歌仁科入道勸
 進によみてつかはし侍る
 春月
 木のまもる心つくしも身にそしむ花のかほりにかすむよの月

聞郭公

積雪

同年九月十三夜によめる

月

月前戀

月前難

同年十月人麿影供に

春天象

秋植物

冬動物

戀雜物

同年霜月十六日當座人々に歌よませられし時よめる

朝落葉

寒草纒

被忘戀

一聲はをし明かたの時鳥月もなこりの空になくなり
 松なれやうつむ梢も高砂のおのへになひく雪の一村
 月よいかに大和もろこし二夜迄かゝる隈なき名をとゝむ覽
 うき人の是もかたみの行衛ならはやとれ幾夜も袖の月影
 おりにあふ御幸に神もいかはかり今宵心のすみよしの月
 浅みとりこのめも春の雨の中にかすめる野へや草の下萌
 長月や花のちくさはうら枯てもみちにとまる秋の色かな
 はし鷹のをふさの鈴のなら柴に馴たる鳥やたちかくるらん
 更ぬとやねよとのかれも哀なりさらても今は待よはる夜に
 月のこるあさけの空のくもらぬは風にしくるゝ木のは成鳥
 野邊の色は霜かれなから村すゝきほのかに残る秋の篋

契りこそかはりはてゝも忘しとちかひし神を思ひいてすや

山館竹

我友とうへてみ山の柴の戸にうき世へたつる軒のくれ竹

應永廿二年三月盡五十首の中に

暮春霞

かすめたゝ臘月夜のわかれたにをし明かたの春のなこりに

暮春

ねにかへる名残をみせて木のもとに花のからすき春の暮方

暮春鳥

なきとめぬ春の別を恨てや身をうくひすの谷に入らん

名所戀

最上川あふせも今や稻舟のしはしはかりをいつとたのまん

寄鶴祝

をのえのくちし所を君かすむ山路にしめよ千世の友鶴

同とし二月七日菊亭梅賞翫に人々によませし懷紙に

書てつかはし侍

庭梅盛

萬代を松に契りて久にへん宿もさかりの庭の梅かえ

梅薫風

梅かかをしるへにとはむ故郷に我身もさそへ庭の春かせ

寄道祝

糸竹のたへなる道もさらに今かしこき君か代にそさかふる

同年七月三日當座三首の歌

早秋風

露よりも先やをかまし秋立てすゝしき風にならす扇を

早秋月

雲間よりほの三日月の影にさへはや哀そふ初秋の空

曉述懷

なかめつゝ思へはかなしいたつらに我よもふくる有明の月

ある人の重有朝臣によませし歌をかの朝臣にかはり
てよめる

萩露

宮城野や分行袖に露おちてそめぬにうつる萩か花摺

夕鹿

ゆふ山や月まつほとの木のまより嵐に出るさをしかの聲

久戀

年もへぬ契りしことは久かたの月をいつまでかたみ共みん

同年九月十三夜によめる

月前露

秋はたゝ袖こそ月のやとりなれ草木の露は風しほる也

月前契戀

うき人もさすかとひける今宵こそ月にめてたる契成けれ

寄月旅

旅人のいくやとかはる野山にもともなひすてぬ夜半の月哉

同年九月廿九日大通院(榮仁)指月庵に御座ありて詩歌

を合せられしに雨中惜暮秋といふ事を

長月や秋もあらしの夕時雨そめてもおしくちる木のは哉

おなし九月盡に

秋戀

こひしたふ人の行衛や秋の月そふ面かけになみたおつなり

待あかしこぬ夜の數もかくはかりつもる恨を鳴のはねかき
うき人の契かれ行道芝のかよひし中は秋かせそふく

雜 秋

都人とはゝ哀やまさきちる深山のあらし秋ふくるところ
おなし十月人麿影供に

寒草霜

をしながら千草かれ行霜の下にうつろふ菊そ秋をのこせる

戀

なをさりにたゝいひすつる言のはも思ひ思はぬ色はみえ鳧

應永廿三年二月七日御歌始によめる

竹間鶯

鶯の御垣の竹にうつるより君にそ千代の春は告なる

梅薰袖

手折か人と人にとはれて梅かかをうつす嵐や袖にこたへん

寄松祝

ふしみ山代々をふる木の松かせは君をちとせと聲よはふ也

同年三月盡人々に歌めされて歌合にかきつかひて飛

鳥井中納言入道に判せさせられしによめる

落花

山櫻苔のみとりに散しきて庭にも花の青葉をそみる

歎 冬

又來むと井手の山吹契りてもこたへぬ花に蛙なくなり

暮 春

花鳥のあかぬ色音を思ふにも春にわかれぬ憂世ならはや

春 戀

しらせはやみ山かくれの初櫻ほのみし色にうつるこゝろを

秋 戀

身を秋の契りかれ行道芝を分こし露そ袖に残れる

旅 泊

こと浦にかゝる月をやなかめこし明石のときりいつか忘れん
おなし年の九月十三夜に月前露

月かけのやとらさりせはうき秋も猶山しほの露深き庵

橋 月

月影はむかしのまゝのつき橋にいくよの秋をかけてすむ覽

月前夢

たれかけに夢もむすはむおしと思ふ今宵ねぬへき月の影かは

同九月盡に暮秋雨

長月や末はの萩もうちしほれ哀をくたく雨の音かな

暮秋契戀

さし櫛のあかぬ契りに野の宮の別の秋をしたひかねつゝ

暮秋祝言

里人のにきはふ秋は吳竹のふしみの小田をかりおさめつゝ

同十月廿日人麿法樂に山初雪

都にはしくれやすらん山里の今朝初雪を人にみせはや

神 樂

岩戸明しその神わきないかにしてうけ傳へんあさくらの聲

祈 戀

常陸帶神のしるしははやみえつ思ふかことをなにといはまし

大通院御歌の會。この御法樂まてかなこりにて侍

也。同霜月廿日御事ありていとあはれにこそ。同二

十四年二月に葆光院(希仁)御事ありて。その年はう

たのきたにをよばす。兩代うちつゝきの事に御會

もなし。

應永十八年十二月四日庚申の御會に冬朝

あとおしき雪のあしたにとひとはぬ人の心のなきけをそしる

冬野

冬されの野へのかれふに吹嵐小篠にさやく音計して

冬涙

思へたゝひとりまろねの夜をさむ枕も袖もこほる涙を

冬思

ふゆの日も物を思へは暮かたみ春よりななき心地こそすれ

同十九年二月花見御會當座の歌に

見花

今よりやふしみの花になれてみん都の春も思ひわすれて

名所花

吉野山花にましらぬ松たにもひとつにかゝる八重のしら雲

同廿年三月盡の御會に春天象

霞たになをたちのこれ花の跡の雲もにほはぬ山端の空

春地儀

あら小田をかへす頃しも行春を苗代水にせきもとめはや

春植物

山櫻ちりし木陰のいはつゝしいはねと花のかたみかほなる

春動物

いかにせむたのむ古巢にかへりても身を鶯の音社なかるれ

同年九月盡のうたに九月盡植物

秋はけふくれないおしき紅葉はよそをたに残せこからしの風

九月盡人事

ねてあかす人はあらしな誰もみなおしと思ふ夜の秋の別に

九月盡光彩

秋をしたふ折しもあれや夕つく日うつろふ菊の色も忘し

このうたとも後に見いたして。年號のしたいたかひ侍れともかき入ぬ。

應永二十四年正月二日歌始に祝言をよめる

さかふへき我代の春そ此はるといはふ心にまかせつる哉

このとしの二月に葆光院の御事ありて我代になり侍。この祝言のこゝろにたかひ侍らねは。ふしきにこそ。

同廿四年八月十五夜に一身詠し侍

思ひきやことし我よをもち月のさかゆく秋にあらん物とは

四十あまり馴みし月の今宵こそ心はれたる秋にあひぬれ萬代の秋を契てことしより雲ゐの月を袖にやとさん

應永廿五年正月七日雪いとふり侍に陽明局にまかる

さてさかつきに雪を入てつかはし侍

歌始によめる初春

ちとせへん我代の春は久かたの日かけ長閑に霞そめつゝ

子日

千世ふへきためしにひかん姫小松ことしわか代の春を契て

祝言

いはひこしその年月の言のはもたかはぬ御代の春にあひつゝ

同年二月五日御會始に初春霞

春あさみ霞の色もまた寒しはれぬ雪解の空の匂ひに

庭梅盛

やとふりてあたし盛も見ぬへきを鶯さそへ庭の梅かゝ

寄松祝

伏見山松に昔のあととめて我代千とせの春をちきらん

同年の春報恩庵主はしめてまいりて見参し侍當座に

歌よませし時よめる

今よりは千年の友とたのみなんしるへともなれわかの浦人
この庵主は二條大納言爲定卿の息女なり。七十あ
まりの尼衆也。

同年三月盡の會に暮春天象

かすめたゝ月もいまはの有明よ彌生の空の忘かたみに
暮春地儀

暮春植物

行春をおしとはいはぬ色なから心ありてもさける山吹
暮春動物

暮春雜物

花の香にそむる衣を今いくかきて立かへん春をしそ思ふ
おなし年七夕會に七夕風

心あてに思ふも涼しひこほしの行あひの空の秋の初風
七夕別

祈神戀

明やすき一夜をしたふ別路や星の契のうらみ成らん
つれもなき心を神にゆふしてのなひく計に祈てもみん
寄日雜

寄道雜

山里のやふしもわかすてらさなん天つ日影の曇なき世に
四のをのたえぬ道をはうけなから代々に及はぬ身を恨つゝ

群書類從卷第二百三十

和歌部八十五家集三

元良親王御集

陽成院の一宮もとよしのみこいみしき色このみにお
はしけれは世にある女のよしと聞ゆるにはあふにも
あはぬにも文やり歌よみつゝやり給ふ源命婦のもと
にかへり給ひて

後撰一

くやゝと待夕暮と今はとて歸るあしたといつれまされる
とうてゐたまへはひかへて女

今はとてわかるゝよりも高砂のまつはまさりて苦してふ也
いとおかしとおほして人々に此返しせよとのたまへ
は

新後撰戀二 本院侍從

夕暮はたのむ心に慰めつかへる朝そけぬへき物を後撰
飽しかるへき

またかくも

今はとて別るゝよりも夕暮のおほつかなくて待こそはせめ

これをなんおかしとのたまひける。

はやうすみ給ひける女のおふきに書給ひける

年毎に夏にあふきと聞からにふるき事こそとはまほしけれ
一條にて人々住給ことをうちわたりの人いひければ
その女宮の御もとにかくなん聞えたりける

みな人のまけるか如くしりぬれは同じほところ思ひ成ぬれ

宮うかれめこきに住給ふ比せまりつといひきはくを
聞たまふて藏人にいひつかはしける

ひとりのみよにすみ竈にくゆる木のたえぬ思を知人のなき
いとへともうき世中に炭かまのくゆる煙を待よしもかな

御返し女

はゝ木々を君か住家にこりくへてたえし煙の空になつ名は

みふのみこにつかはしける

へしやよにうきをはこれに限てん思ふ心はあひみるからに

おやある女に程なくたえ給にければおやいふときゝ
給ひて

蟬の羽の薄き心といふなれとうつらしよとそまつほなかるゝ

枇杷の大臣（仲平）にいちや君とてわらはにてさふらひ

ける男ありとはしり給はて宮の御文つかはしければ

女

綱古戀二

大空にしめゆふよりもはかなきはつれなき人を頼む也けり
こふる

又女に

いはせ山よのひとことに呼子鳥よはふときけは耳をなれぬる
宮

とふことをまつ／＼山の山彦はいかかは人におとつれをせん
又をんな

難波女の此方彼方によるといへは汐のひるまや戀しかる覽
宮おはして出よとのたまへは女

いさゝめにわかきをやみとうき波のたちはてゝやまん事は惜きを
かへり給ふとていもねらるましとのたまへは女

ふさりからねさめせしては起かへり又もこしと君は誓はん
女のもたるものをとておはしにければつとめて女

人こふる夜の衣にあらずとも是は返して我にみせなん
かくて此女こと人にあひて宮のうらみ給ひければ

吉野川よしと思はしたきつせの早くいひせはかゝらましやは
宮ことはりとて

秋風にふかれてなひく萩の葉のそよ／＼さ社いふへかりけれ
又女

よととも君か心し長月にあらはたのまん秋ははつとも
女今はことさまにやと聞えたりければ

松山にまつ波こえていにけれといかゝ思はんあたし心を
恨給ひける女

淀河のよになうらみそしら波のしらすや下に思ふ心は
最上川上れは下る富士のねのみしまのひまにあらはのせてん

猶うらみ給へは女さらは是やめてんと聞ゆれば宮
山の井のやまんといへはなをさりの淺き心はたのまれぬ哉

女

君か田の穂にて見えんと思へとも後は人からいなはと云也

宮御ふくにおはしけるに

黒染のふかき心やわれなくは哀と思はぬ人やなからむ

こと女に宮

さしくるはたのまれすとも下紐の心とけたるよをのみそ待

をんなとちかへやり戸のもさにて物のたまひてのち
見し夢はこまなく成てやみにけんちかへ遺戸のもとにねしかは

太秦に詣給ひてよしある局に遣しける

たちよれば塵たつ計り近き間をなともろこしの心地のみする

又女にあひ給ひてなかれてなとのたまひて程へてつ
かはしける

水莖のたえにし跡を尋れはなかれてといひしことによりてそ

御返事

なかれてと早くいひしは忘れぬと飛鳥川なる世こそつられ

此宮の御姨おほむの大納言の北のかたにておはしけ
るをいと忍ひてかよひたまひけるを北方

あるゝ海にせかるゝ海士は立てなんけふは浪間に有ぬへ哉

此北方うせ給ひにければ御四十九日のわきに白かね
をはこにつくりてこかねを入てみす經せさせられけ

るにそへ給ひける

君を又うつゝに見はやあふ事のかたみにふりぬみつは有共

京極のみやすむ所また亭子院^{亭子}におはしける時に
けさうし給ふて九月九日聞え給ひける

世にふれはありてふ事を菊の花愛すきぬへき心ちこそすれ

夢のことあひ給て後みかとおつゝみてわたらせたまふ

とてえあひ給はぬと宮に候けるによせりよみける

麓さへあつくそ有ける富士山嶺の思ひのもゆる時には

かもゐの大君にあひ給ひてつとめて

から錦たちてこゝちのかへる山かへる／＼も物うかりしか

宮うらみ給ひければ女

世中のうきもつらきもとすへてしらする君や人を恨むる

ほとなくかれ給ひにければ女

白雲にあらぬ我身をあふことのまへはのうらにけふはけぬへし

宮御かへり

まつち山待としきかは年經ともいろかはらしと我も頼まん

又女

君により心つくしのはかたつのはかなきねをも鳴わたる哉
驚となとかはなかなぬふりたてゝ花こゝろなる君をこふとて

かくうらみ聞えけれど後々は返事もし給はさりけり
又おなしかも院の中の君をけさうし給けるに女

天雲をとふかりそめにとふなれはおほ空事をいかにみる覽

あひ給ひて後宮

思ふともこふとも君は下紐のゆふてもたゆくとけんとをしれ

女のきこえ給けるも

思ひせはゆふてもたゆくとけなまし何れか戀のしるし也ける

したひものゆふ暮ことになかむ覽心のうちをみる由もかな

むら鳥のむれてのみ君有ときけ獨ふるすに何にあらんと

うきふしの一よも見えは我そまつ露より先に消かへるらん

宿りゐるとくらあまたに聞ゆれは何れをわきて古巢とかいふ

おなしえにおひつる宿もなきものを何にか鳥の音をは鳴けん

又おなし閑院の三の君に稻荷にまうてゝあひ給てみ

やはしり給はぬを女はしり奉りてかへりて聞えける

ぬは玉のやみにましりて見し人のおほつかなから忘れぬ哉

なと聞えてあひにけりきて宮

埋木の下になけゝと名取川こひしき瀬にはあらはれぬへし

女

我かたになかれて通ふ水茎のよる瀬あまたに聞ゆれはうし

なかれても頼む心のそはなくにいづれ程にか影のそふへき

木かくれの下草なれは峯の上の光もつゐに頼まれなくに

つきもせぬ言のはなりとみるからに頼むといふも嬉しかり鬼

風ふけはみをこす波の立かへりうきよの中をうらみつる哉

むは玉のよるのみ人をみる時は夢にとらぬ心地こそすれ

涙川なかれて岸を崩してはこひよることもあらしと思ふ

方きためなくあくかれ給ひけれといとこゝろありて

おかしう思はする宮と聞給ひてたいふの宮息所の御

母の女ば宮にあはせ奉りてあしたにおとこ宮

程もなくかへる朝のから衣こゝろまとひにいかゝきつらん

かへし

時のまに歸りやすらんから衣心ふかくやいろにそはぬと

母御息所の御許に御後のほころひぬひに奉りたりけ

れは御息所

うつしけに人から衣思ふには常ならぬ香そそひてめてたき

かくて住奉り給ひけれと外ありきをし給ひけれはつ

らけなるけしきにおほしけれと見しらぬやうにてい

て給ひければ女宮

音に高く鳴そしぬへき空蟬の我身からなるうき世と思へは

との給ひければあはれゝとてとゝまり給ひにけり。

同御中にまたしかりける時のこの宮におはしはしめ

ての又の日京極御息所の御なかに奉り給ひける

いとゝしくぬれこそまされから衣逢坂のせき道まとひして

みやす所のかへし

誠にてぬれけりやとも唐衣こゝに來たらはともにしほらん

さま／＼かよはし給ひける御ふみとも今日かへし奉

後撰雜二
元良親王
やれはおしやらねは人に見えぬへしなく／＼猶返す勝れり

北方宮にむらことてきふらひけるをめしければかん
しうをき給ければ男宮こまの院におはしけるにむら
こ參ける

數ならぬ身は只にこそ思ほえていかにせよとか詠めらる覽
おとこ宮の御返し

つれ／＼となかめてふれる人よりも宵の時雨は劣らさり梟
女宮うせ給ひければ男宮

岸にこそ世々をはへしかいつみ川ことし袂をひたしつる哉
又の年の十月にこれひらの中將まいりて御みきのつ

いてに
神無月しくはなこそ古も思ひいつれはかへる世もなし

宮

いにしへを思ふにあへぬから衣ぬるゝ程なくかはき社すれ
ある女のこの宮をうらみ聞えて

世中をうきのみ渡る宿りにはかりもこなくにいろ替りけり
御返し宮

さためなき君か心にあえてこそまたき木の葉も秋をしるらめ
又女

年經ともなれしと思ふから衣うすき心のあらはれはうし
おはしたりけるにはやかへらせ給ひねと聞えたれは

さらにたかしとの給ければ女

から錦たえて見ゆらん闇き夜はたれとかあやめ思なさまし

又

なにゝ君思ひかけけんから衣人めもみてはとはし物ゆへ
あた人のよはひし聲に山彦のこたへ初にし身をそうらむる

人の國へゆくとして女

にこり江のすみうきものと都をはいとふか山に身をや投まし

こと女に物のたまふとてきちきやう稽懸につけて
頼みとは同からまし言のはを歸りにけりなきちきやうの花

又こと女例の御心見えければ

ことのわの我身の秋にあふ時はもみちて空にちると社きけ

宮

宇治川のなかれて深き心かと我も□たのみはつへく

女

たのむれは下の心はあさち原露にぬるれはいるかはりつゝ

五月はかりにはやうすたれ給ひにける女の聞えたり

ける

五月雨にわか手そへつゝうへそめし君か頼みは今やいつ覽

女山里にすみける比

秋風のはやき山邊にすむ比はとふ言のはもかれそはてぬる

またこと女に文つかはしたりけるかへりことに

頼まれぬしはしの程も秋の夜のなかき心もあらしと思へは

宮

頼れぬことも心のから衣なれてよるとやさらは思ひし

こと女に宮

あま雲のはる／＼見ゆる嶺よりもたかくそ君は頼みそめてき

山井の君に住給ひて久しくありて宮は參りたまひて

夜ふけてまかてければくらくていかゝとの給たりけ

れは女

苦しとまたとられさりき古を思ひはてゝしかへりこしかは
をくり人につけて聞えたりける

歸り來る袖もぬるゝはたまきにあふくま川の水にや有覽
たゝしはしにてたえ給ひにける人に程へて御文つか
はしたりければ

音つれてほとふる山の郭公なく一こゑのめつらしきかな

宮いかゝの給ひけん女

月影にわれもをくれすあふことはよしのの山に思入にき

又

涙たにかゝる我身になかりせはうきも辛きも誰にいはまし
からうしてとひ給ひければ女

中々にとふひの杜の郭公君こひなきはよはにこそなけ
又

散ぬへき花の心とかつみつゝ頼そめけむわれやなになる
加茂のまつりの日かつらの宮の御車に奉り給ひける
しらね共かつらわたりと聞からに加茂の祭のあふひとそせん

又の目物のたまふ女ともへちらにまであひてみつ(本)
なしりつにし給ひていとよく見給てつかはしける

世中にうれしきものは鳥部山かくるゝ人を見つる也けり
わすれ給へりける女清水にまうてあひ給て宮はしら
すかほにていて給けるに聞えける

假にくる宿とはみれとかましへのおほけなく社住まほしけれ
同所にて常に見給ふ女にしの竹のふししけきをつゝ
み給てつかはしける

篠竹のふしはあまたに見ゆれ共よゝにうとくも成にける哉

おなし人に宮

いかにしてくり染にせん糸なれば常にはよれ共あふ由のなき
返し

ちかくたによることもなき白糸のあふ計にはおもほえぬ哉
やむことなき女の御もとに
尋ねつゝ今ふみそむる山道にいつ鹿の音そまつなけれける
返し

世中の秋山にのみ聞ゆれはいつしかの音も耳なれにける

又おなし人に宮

つれなきをしめて頼めは水の上のうきたる草の心地社すれ
返し

草の名におほせしもせし山川の早くよりこそ浮て聞ゆれ
わすれ給ふなよと女の聞えければ

谷の松月のかつらにねをふみて花咲む世や君をわすれん
所仰(雲香ノ假字)殿中納言君にほとなくたえ給ひにけれ
は女

拾遺五
人をとくあきた川てふ津の國の名にはたかはぬ物にそ有ける
かくて物もくはてなくゝ戀聞えて松に雪のふりか
かりたるにさして聞えける

來ぬ人を松の枝にふる白雪のきえこそかへれあはぬ思ひに
昇の大納言の御むすめに住給ひけるをひさしにおま
ししきて御さのこもりて後久しくおぼせてかのひさ
にしかれたりし物はさなからありやとりやたて給ひ
てしと聞え給ひければ女

しきかへすありしなからに草枕ちりのみそゐるはらふ人なみ
と聞えたりければ宮

くゆる後撰戀二

きし大和物語

草枕ちりはらひにはから衣たもとゆたかにたつをまてかし
又女

唐衣たつをまつまの程こそは我しきたへのちりもつもらめ
かくておはして後宇治へかりしになんとたまへる
に女

御狩する栗駒山の鹿よりもひとりぬる身を侘しかりける

一條の君に

世中をいかゝはせまし春霞よそにもみしと人はいふなり

御返し

哀とはみれともうとし春霞かゝらぬ山もあらしと思へは

山の井の君の家の前をおはすとて楓のもみちのいと

こきをいれ給へりければ女

給後難戀

思ひいてゝ間にはあらず秋はつるいろの限をみする成らん

又ほと經てとひ給はすとうらみて

山の井にすむと我名は立しかととふ人影もみえすも有かな

すりの君のもとにおはせんと有ければ女

たかくとも何にかはせん吳竹の一夜ふた夜のあたのふしをは

うきまで人を尋給ければ女

八重垣にひとへまされる九重にあたる人は尋しもせし

女のもとにおはしてとまり給へとのたまへは女

わたつみのその心は白波のしらてはいかゝよるとそや君

後難戀五拾遺戀二

侘ぬれは今はおなし難波なる身を盡してもあはむと思

かねもとのむすめの童部のもとに今こんとの給ひて
おはせさりける又の日女

人しれす待にねられぬ有明の月にさへこそあさむかれけれ
あしふちと云馬に乗給ける比女のもとに久しくおは
せさりければ女

ありなからこぬをもいはしあしふちの駒の上社戀しかりけれ
是におとるきてなんまとひおはしたりける。

女のもとにおはしたりけるに明ぬと聞えたりければ
かへり給ひて宮

後難戀二

天の戸のあけぬゝといひなして空なきしつる鳥の聲哉

返し

天の戸をあく共我はしらさりき谷深かりし鳥の音にあかて

時々おはする所におはして前栽の中にて立聞給へは
宮のこよひ夢にみえ給へる哉とて女

うつゝにもしつ心なき君なれば夢にもかりと見えつるかうさ
(き歌)

御匣殿に宮

鶯の木つたふ枝を尋ぬとて花の住家を行てみしとや

はるゝと思ひて月も過ぬれは今になつくることを待かな

つけそめし思ひを常にかすめてもおほつかなさの猶まさる哉

返し

いつよりか君か思ひの馴ぬらん今より外にいふそあやしき

源命婦にかたふたかりたれはなとの給ければ女

と聞えたりければさはらておはしにけり又の日さて

おはせて嵯峨の院にかりしになんととの給ければ

大澤の池の水くきたえぬともさかのつらさを何かうらみん
何かうらみんさかのつらさは大和物語

御返事もいかゝ有けむわすれにけり。

近江介なほきか娘ともかたちよく心たかしと聞給ひてつかはしける

萩の葉のそよくことにそ恨つる風にかへしてつらき心を

又

浅くこそ人はみるらめせき水のたゆる心はあらしと思そ返し

せき河の岩間をくゝる水あさみたえぬへくのみ見ゆる心を

月のあかき夜おはしたるにいてゝもなとは聞えてとくいりにければ宮

よなくゝに出と見しかとはかなくて入にし月といひてやみ南

扇をおとしておはしにける見れは女の手にてかける

忘らるゝ身は我からのあやまちになしてたに社思たえなめとあるかたはらに書付て奉る

ゆかしくも思ほゆる哉人毎にうとまれにける世にそ有ける

こまのゝ院にて秋つとめて人々おきたりけるに源ののふるひとりことにいひける

白露の消かへりつゝ夜もすからみれともあかぬ君か宿哉といふをきこしめして

よもきふの草のいほりとみしかともかくはた忍ふ人も有鬼おなし院にていつみ川といふことをよませ給ひ人々

の干とせおはしませといはひ聞えければ宮御いつみ川心にかなふ命あらはなとか千年もわたささるへき

又

泉川水ふかけなる水なれは人なみゝの聲そきこゆる

志賀の山越の道にいまはら(いは口大和物語)と言所もたまへりけりそこにおはしつゝ人見給けるをしりてとし

こかいつけゝる

かりにのみ來る君まつとふり出つゝなくしか山は秋を悲しき

ある人御ふみつかはすにかくれて侍らすといはせけれは

かくれぬと聞からにこそ深芹の思そこそと思やらるれ

又つかはす

なにかへりかりにもあらぬ玉章を雲井にのみを待たりける

物の給ふ女男いてきにけり十月はかりに遣しける

こまはとや移ろひにけん木の葉故よその村雲なに時雨る覽

女宮ゑしてよせ奉らさりける比四宮より

身をつみて思ひしりにきたき物の獨ねいかにわひしかる覽

御返

心から今はひとりそすみかまのくゆる煙をまつ人もなし

おほしかけたる女男したるに御文つかはしたりけれ

は

三芳野の山より落る瀧津瀬の早くなりせはまちそしてまし

宮の御返し

秋風にとよりかくより花薄そよやさこそはいふへかりけれ

前わたりし給ひければ女にこの月はいかにと聞えた

りければ女

おほそらの月たに宿にいる物を雲のよそにもすくる君かな

近衛のみかとの君といひける人に

思つゝいはねとなにかさもあらねは心にのみまくる我身か

女に物の給ひてあしたに

もえかへりこかれし草も厭にきたゝ宵の間の露にをかれて

京極の御息所

吹風にあへてこそちれ梅花あたににほへる我身となみそ
かねみちの宰相の女に

そむれともこさもまさらぬから衣いろの限をきてみつる哉

又

あまたには今も昔もくらふれと人花かたみそらに戀しき

女わすれななんとこそ覺ゆれと聞ゆれは宮いみしう

恨聞えける女に宮

恨つゝなけきのかたき山ならはおろしの風のはやく忘れね

後撰戀一よみしらす
物の給ふ女こと人に物いふと聞しめして宮

いつしかと我まつ山の今はとてこゆる浪にぬるゝ袖かな

返し

松山にこきはこす共君ををきて浪のたつ名はあらしと思ふ

又宮

あふ事の涙にのみそぬれそはるあかね世ををし悲しと思へは

御返

たえはて給ひぬると見て山の井の君

山の井のたえはてぬともみゆる哉あさまをたにも思ふ心に

又うこと云人の聞えける

心さへさみたれなりし郭公いかてことしの聲をきかまし

御返

めに近く身には見しとや郭公よそにて聲を聞んてふとも

いとあたにおはすと聞て女

つきもせすうきことのはの多かるを早く嵐の風も吹なん

宮の御かへし

露にたにうつり行なることのはのなとか嵐のかせを待らん

京極のみやす所

思ふてふこと世にあさく成ぬ也我こゝはかり深きことせよ

又花かんし（前）奉り給ふとて

鶯はなかわしづくにぬれねとや我思ふ人の聲そよそなる

三條の右大臣の御女のへしやよにとかいたまひたり

ける

なにか世に今は恨と思らんしらねは人のつらき成らん

津の國にたまさかといふ所にしりをき給ひける女に

こしまなる名をたまさかのたまさかに思出ても哀とはなん

右元良親王御集以無類本不能接合姑仍舊耳

瓊玉和歌集卷第一

春歌上

三百首御歌の中に立春の心を

類古

おほとものみつの濱松かすむ也はや日の本に春や立覽
人々によませさせ給し百首に

逢坂や關の戸明てとりの啼東よりこそ春はきにけれ
春立口よませ給ひける

あつまにはけふこそ春の立にけれ都はいまた雪や降らん
早春

早春

風寒みまた雪消ぬしからきの外山霞て春はきにけり

百首御歌の中に

類後拾

さほ姫や衣ほすらん春の日の光に霞む天の香久山
弘長二年(龜山)冬たてまつらせ給し百首御歌の中に霞

を

類古

春きては霞そうつむ白雪のふりかくしてし嶺の松原
たちぬはぬ衣と見えて朝ほらけ水上霞む布引の瀧

三百首御歌の中に

故郷のよしの山は雪消て一日も霞たゝぬ目そなき
ひれふりし昔を遠み松浦かた霞のそてに春風そ吹

古渡霞といふことを

思ひやる都もさこそかすむらめすみた川原の春の夕暮

たてまつらせ給し百首に春雪

山たかみ風に亂て散花の面影つらき春のあはゆき

人々によませさせ給し百首に

風寒みまた花さかぬ梅かえにこれなんそれと雪をつもれる

三百六十首御歌の中に

かつ消てたまらぬ物は鶯の聲する野邊の春のあは雪

野外鶯

鶯の宿あれぬらしくたら野の萩のふるえは今そやくなる

たてまつらせ給し百首に鶯

今も猶妻やこもれる春日野の若草山に鶯のなく

三百首御歌の中に

心にもかなはぬ言をやつくすらむせり摘のへの春の鶯

人々によませさせ給し百首に

けふしこそ若菜摘なれかた岡のあしたの原はいつか焼けん

若菜を

類後拾

霜雪に埋れてのみみしのへの若菜摘まで成にける哉

五十首御歌に

誰か袖の匂ひをかりて梅花人のとかむる香には咲覽

春の御歌の中に

いつの春とはれならひて梅花咲より人のかくまたるらん

むめの花咲は人こそまたるゝを思ひの外と何かいふらん

夕梅といふことを

袖の香にまかふもつらし人を待夕は梅の匂はすもかな

百首御歌中に

春ことに物思へとや梅か香の身にしむ計匂ひそめけん

御歌はかりもゝつかひ合せさせ給とて梅を

ふりにける高津の宮の古をみてもしのへと咲る梅枝

この春も人こそとはね宿の梅誰かなさけを花にみせまし

梅香入聞といふことを

思ひそふねやもる月の影に又猶いひしらぬ梅か香そする
和歌所を始をかれて結番しけるをのこともに歌よま
せさせ給ふ次に

梅か香の身にしむ床は夢たえてねぬよかすめる月をみる哉
三百首御歌の中に

飛鳥風川音ふけてたをやめの袖にかすめる春のよの月
春月を

人めもる空にはあやな春の月なと霞つゝ影しのふらん
かすめるはつらき物から中々に哀しらるゝ春のよの月
おほろ月夜を御覽して

晴かたき身の思ひこそうかりけれ霞める月も秋を待らん
春曙

いさ人の心はしらす我のみそかなしかりける春の明ほの
たえゝにさと見えそむる山もとの鳥の音さひし春の曙
百番御歌合に

何事をまた思ふらん有はてぬ命まつまの春の曙
三百首の御歌に

いひしらぬつらさそふらし鴈金の今はと歸る春の明ほの
曉歸鴈

時こそあれなと有明の空にしも別をみせて鴈の行覽
十首歌合に

たのめこし人の玉章いまはとてかへすににたる春の鴈金
故郷歸鴈を

ふるさとをうき名なりとやいとふらんならの都に歸る鴈金
海邊歸鴈

こきかへるあまの小舟の友なれやゆらの戸わたる春の鴈金

春の御歌の中に

玉章や春行鴈につたへましこし路のかたの都なりせは
身にしれはうしともいはし歸鴈さそ故郷の道急らん
和歌所にてよませ給ける

こしかたを忍ぶ我身の心もて何かうらみん春の鴈金
花をまつ外山の梢かつこえて別も行かはるのかりかれ
三百首御歌の中に

雪とふる花をこしちの空とみてしはしはとまれ春のかり金
人々によませさせ給し百首に

ひとかたになひきにけりな谷風の吹上にたてる青柳の糸
奉らせ給し百首御歌の中にはなを

春といへはやかても咲て櫻花人の心をなとつくすらん
花月五十首御歌に

櫻花咲へきころと思ふよりいかにせよとかまたれそめけん
百首御歌中に

まつ程はちるてふことも忘られてさけはかなしき山櫻哉
花御歌とて

花の咲時やきぬらん足引の遠山みれはかゝるしら雲
人々によませさせ給し百首に

生駒山はな咲ぬらし難波とをこき出てみれはかゝる白雲
よしの山雲と雪との偽をたかまこととか花の咲らん
花月五十首中に

へたつとも恨みぬ雲はいこま山君かあたりの櫻なりけり
三百首御歌の中に

花咲ぬときはの山の嶺にたに櫻を見せてかゝるしら雲

瓊玉和歌集卷第二

春歌下

文永元年十月（龜也）百首の春御歌

思ひせく人の心か山櫻をとのきこえぬ瀧とみゆるは
花五首歌合に月前花

まともまぬ月に夢路は絶はてゝ春の夜一よみつる花哉

閑居花

さひしきは馴ぬる宿になにとなく軒はの花の人またすらん

五十首御歌中に

いかにせんとはれぬ花のうきなさへ身に積りける春の山里

花の御歌とて

植て見る我をや花のうらむらんうき宿からに人のとはねは

和歌所の結番うたをのこともよみ侍ける次に

とはるへき宿とも更にたのまぬを人まち顔に花の咲らん

よゝふりてしらぬ昔の春の色を花にのこせるみよしのゝ山

をのことも題をさくりて歌よみ侍りける次に山花と

いふことを

新後拾

三よし野もおなしうき世の山なればあたなる色に花を咲ける

百番御歌合に花

花の色にいきなはれつゝ春毎に行てはきぬるみよしのゝ山

よの中をいとふ山邊と聞しかと吉野は花の宿にそ有ける

春の御歌中に

みよしのゝ山にいる人山にてもおなし櫻の奥やゆかしき

なれをこそつらしとは思へ櫻花あたに移ろふ春の經ぬれば

人々に歌よませさせ給ふ百首に

うつろへは物をそ思ふ山櫻うたて何とてこゝろそめけん
奉らせ給し百首に花

したにこそ人の心もうつろふを色にみせたる山櫻かな

惜花といふことを

咲そめし昔さへこそうかりけれうつろふ花の惜きあまりに

花月五十首に

散ぬともねさへかれめやとはかりに思ひなくさむ山櫻哉

いかてかはあたる花にをしへまし浮世にたえず過す心を

花五首歌合に霞中花

山さくらちるまを人にみせしとてかすむや花の情なるらん

曙落花といふことを

いかにせん高根の櫻雪とのみふるたにあるを春の明ほの

をのことも題をさくりて歌讀侍けるに鶯

花ちらすをのかは風もかなしきに松にこつたへ春の鶯

三百首御歌に

ときはなる松にもおなし春風のいかに吹はか花の散らん

春風を

みな人にあかぬ名残をおしまして花の爲とや風の吹らん

落花を

風吹はいかにせよとて散時のつらさもしらす花に馴けん

なれてみる春たにかなし櫻花ちりはしめけん時はいかにと

三百首御歌の中に

うかりける花にいつよりなれそめて散春ことに物思ふらん

散をみて更に我身のくやしきは櫻にそめし心なりけり

百首御歌の中に花を

おしみてあまり有けり一とせに又とも咲ぬ花の名残は

春の御歌とて

またのはるあひみん事は命にてことしも花に別ぬる哉
奉らせ給し百首に落花を

人々によませさせ給し百首に
散はてゝ後こそ花はかなしけれ待こしほとを何うらみけん

奉駒を
我ふるす人の心にあらなくなと奉駒のあれてみゆらん

文永元年十月御百首に
駒なへて朝こえくれは春山のさきのおすゑにひはり立也

奉らせ給し百首に歎冬を
山吹の花おる人かかはつなくあかたのゐとに袖のみゆるは

人々によませ給し百首歌の中に
ことしより松の木陰に藤をうへて春の久しき宿となしつる

百番御歌合に
御狩人衣にすれや紫の色こき時の野邊のふち浪

みぬ人のためならす共なほさりにおらては過し田子の藤浪
文永元年百首に

咲にけりぬれつゝ折し藤の花いくかもあらぬ春をしらせて
暮春の心を

さもそうき彌生の空の雲間よりはつかに残る有明の月
人々によませさせ給し百首に

たくひなくなしき時か春の行彌生の月の廿日あまりは
三月盡を

めくりあふ命しらるゝ世なりとも猶うかるへき春の別を
したふへき便りたになしいつかたへ行ともみえぬ春の別は

定めなき浮世にもにぬならひかな日をかきりぬる春の別は

瓊玉和歌集卷第三

夏歌

百首御歌の中に更衣

花染の袖さへけふは立かへて更に戀しき山さくらかな
三百首御歌の中に

雲のゐる遠山鳥の遅櫻こゝろなかくも残るいろかな
奉らせ給し百首に卯花

浅かりし春のへたとと見るからに垣ねもつらき宿のうの花
人々によませさせ給し百首に

明ぬれは光を残す月のうちの桂の里に咲る卯のはな
葵をよませ給ける

あつまにはかさしもなれす葵草心にのみやかけて頼まん
奉らせ給し百首に時鳥を

昔よりなと子規あちきなく頼まぬものゝまたれそめけん
三百首御歌に

待わひてこよひも明ぬ郭公たれにつれなき音をならひけん
人ならは侘つゝもねん時鳥いとゝまたるゝ夜半のむらさめ

いとゝまた夢てふことを頼めとや思ひねに啼ほとゝきす哉
百首御歌の中に

うき身にもまたるゝ物を蜀魂心あれとはたれいとひけん
和歌所にてをのことも結番うたよみ侍ける次に

かく計またるゝ音とも時鳥思ひしらてやつれなかるらん
人々によませさせ給し百首に

しけりあふ草かの山の郭公くれにこえてや初音なくらん
文永元年十月御百首に

故郷のさほのうへ行き規はかひの山にはつねなくらむ
杜ほととぎす

なきぬなりいはせの森の時鳥ゆふへさひしき山陰にして
五月子規

ほととぎす里に出たる聲すなり五月は山に住うかるらん
山路郭公

行やられてくらせる山のほととぎす今一聲は月に啼なり
奉らせ給し百首に時鳥

をのかつま戀しきときか時鳥山より出る月になくなり
人々によませさせ給し百首に

一聲をあかすも月に啼すてゝ天の戸わたる郭公かな
夏御歌の中に

時鳥秋の夕をみせたらは今よりもけに音をやなかまし
まちわひし時こそあらめ郭公聞にも物のかなしかるらん

和歌所にて
聞はうしきかねはまたる子規物思へとてなきはしめけん
五月とはなと契けん郭公うきになく音は時もわかしを

三百六十首御歌に
物思ふね覺の空の時鳥誰かまさるとなくそ聞

郭公あやめの草のなになれやわきてさつきの音には啼らん
こゝにのみ聲をつくせはことかたのよかれ嬉しき時鳥かな

奉らせ給ける百首に郭公
岩井汲人や聞らん時鳥あかて過行志賀の山越

をのことも題をさくりて歌よみけるに早苗を
秋風にきのふといつか思ひけんいそく山田のけふの早苗を

百首御歌合に

山里も猶としけし我門の外面の小田のさなへとるころ
奉らせ給し百首に五月雨

天の原岩戸の神やさためけん五月を雨の晴ぬ比とは
三百首御歌の中に

露にたにみかさといひし宮城のゝ木の下くらき五月雨の頃
池の五月雨を

いかはかり水まさるらし川上のあちふの池の五月雨のころ
さみたれを

松浦川かは音たかしきよ姫のひれふる山のさみたれの空
人々によませさせ給ひし百首に

ふけぬともいかに待みん夜半の月はつかの山の五月雨の空
閑中五月雨を

さらてたに人やはみえし夏草のしけれる宿の五月雨の比
百首御歌中に

いかにせん心のうちもかきくれて物思ふ宿の五月雨のころ
いかにせん涙はかりの袖たにもほすまはなきを五月雨の頃

せきちく(石竹)を
ちらぬまに今もみてしか高岡の尾上に咲るやまとなてしこ

野亭夏草
よそにてはありともみえし夏草のしけみに結ふのへの假庵

野夏草
秋ちかくのは成ぬらし夏萩のおふの下草茂りあひつゝ

人々によませ給し百首に
よるはもえひるば消ゆく螢哉ゑしのたく火にいつ習ひけん

螢を
焼すてし跡とも見えぬ夏草にいまはたもえて行螢哉

三百六十首御歌の中に

時わかぬ思ひの友は何ならん螢も夏そもゆるとはみる

杜夏月を

夏のよはみつといふへき程もなし淀のむかひの杜の月かけ

人々によませさせ給し百首に

今もかも夕立すらし舟木山のさかのにしに雲のかゝれる

五十首御歌に

夕立の雲吹のほる谷風に下葉そたへぬ山のとときは木

奉らせ給し百首に夕立

松風もはけしく成ぬ高砂の尾上の雲の夕たちの空

納涼

秋ちかくなりやしぬらし足曳の山の蟬なきて風そ涼しき

三百首御歌に

水上にたれか御板をしかま川海に出たるあさのゆふして

瓊玉和歌集卷第四

秋歌上

崎初秋といふことを

都にははや吹ぬらしかまくらのみこしか崎の秋のはつ風

河初秋を

みくつせくやなせのさ浪音信て川音涼し秋の初風

三百首御歌の中に

今よりのあはれをいかに忍はまし外山の庵の秋の初風

淋しさはさらてもたえぬ山里にいかにせよとは秋のきぬ覽

山家早秋

いつち又あくかれよとて山里の心うかるゝ秋のきぬらん
初秋のこゝろを

かく計物うかるへき時そとはいかにきためて秋のきぬらん
野も山もなへて露けき時そとや秋くるからに袖のぬるらん

人々によませさせ給し百首に

あはれまた秋そきにける何事のうしとはなしに物思へとて

文永元年十月百首御歌の中に

天の川いつかと待し七夕の行あひのけふに成にける哉

三百首御歌に

更行は月さへいりぬ天の川あさせ白浪さそたとるらん

奉らせ給し百首御歌の中に七夕を

七夕の戀やつもりて天の川まれなる中の淵と成らん

七夕後朝

月たにもつれなくみえぬ七夕の別れの空よいかゝかなしき

秋の御歌の中に

萩の葉は風吹ことに音信て物思ひつく秋は來にけり

さらてたに涙こぼるゝ秋風を萩のうはゝの音に聞かな

萩の葉に風の音こそ聞ゆなれ涙おとさぬ人はあらしな

夕萩といふことを

吹風も身にしむはかり音たてゝ萩のはかなし秋の夕暮

秋かせのつらさは時をわかねとも夕かなしき萩のをとかな

人々によませさせ給し百首に

あきのよはうつゝのうさの數そへてぬる夢もなき萩の上風

奉らせ給し百首に萩

聞初はいかにかせまし秋ことになれてもつらき萩のうは風
おなし心を

秋風をうしとはいはし萩のはのそよく音こそつらさ成けれ

草花露を

消ぬまを人に見せはや女郎花猶一ときとをけるしら露

庭草花

しけりあふ籬のすゝき穂に出て秋のさかりと見ゆる宿哉

行路薄

夕日さすあさちか原の花すゝき宿かれとてや人まれくらん

御歌はかり百番あはせさせ給とて薄

はな薄おほかる野へはから衣袂ゆたかに秋風そふく

奉らせ給し百首に

立わたる霧のたえまの花薄袖かとみえて秋風そ吹

和歌所にて

今よりの誰か手枕も夜さむにて入野の薄秋風そふく

葬を

夢路にそさくへかりけるおきてみんと思ふをまたぬ槿の花

はかなしと何かは言ん世中はかくこそ有けれ葬のはな

朝顔の花の籬の秋の露いつれあたる名にか立らん

萩を

春焼し其日いつともしらねともさかのゝ小萩花咲にけり

袖ふれておらはけぬへしわきも子かかさしの萩の花の上の露

萩花映水といふことを

いまそみる野路の玉川尋きて色なる浪の秋の夕暮

人々によませ給し百首に

高圓の野邊の朝露かつ散てひもとく花に秋風そ吹

秋の御歌中に

やゝ寒く夜風も成ぬ秋萩の下葉の露や色に置らん

野 鹿

夏草のかげに忍ひし棹鹿の音にたつばかり野は成にけり

文永元年十月百首に

眞葛はふ野はらの小鹿恨ても啼てもさこそ妻を戀ふらめ

人々によませさせ給し百首に

波たてるつまつ待風や寒からしいまきの嶺に鹿の啼なる

百番の御歌合に鹿を

尋きてさもなくさめぬあはれかな鹿のなくなる秋の山里

奉らせ給し百首にむしを

何事を思ひあまりてあさちふの小野の草葉に虫のなくらん

秋御歌とて

露ふかき尾花かもとのきり／＼すさそ思ひある音をは啼覽

いくよしもあらしとそ聞露霜の寒き夕の松虫の聲

うきをしも泪を誰に習てか草木も秋は露けかるらむ

心なき草葉も露のこほるゝばいかなる秋のつらさなるらん

三百首御歌中に

草も木も露そこほるゝ大かたの秋の哀や泪なる覽

奉らせ給し百首に

草葉こそ萎れてほさぬ秋ならめなと我袖の露けかるらん

おなし心を

長夜の寐覺の涙いかゝせん露たにほさぬ秋の袂に

うきことにならはぬ人や置露を袖より外の秋とみる覽

くるゝまも頼まれぬ身の命にて何かは露をあたにみるへき

五十首御歌中に

さのみやは憂身のとかにかこつへき秋のけしきの誘ふ泪を

和歌所にて

なかむれはたゝ何となく物うくて泪こぼるゝ秋の空かな

人々によませさせ給し百首に

置つゆにぬるゝ袂そいて我をひととかめそ秋の夕暮

百首御歌中に

吹風も心あらなんあさちふの露の宿りの秋の夕くれ

三百首御歌の中に

遠さかるあまの小舟も哀なりゆらの湊のあきの夕くれ

色かはる野へよりも猶さひしきは朽木の柚の秋の夕暮

秋のゆふへを

たへて猶すめはすめとも淋しきは雲ある山の秋の夕くれ

みすしらぬ野山の末のけしきまで心にうかふ秋の夕くれ

よイ

さひしきになかむる空のかはらすは都もかくやあきの夕暮

いつまでかきても命のなからへてうしともいはん秋の夕暮

尋はや世のうきことや聞えぬと岩ほの中のあきの夕暮

閑中秋夕

思へたゝまたるゝ人のはんたに淋しかるへき秋のゆふ暮

秋の御歌中に

おもひしる時にも有らし世中のうきもつらきも秋の夕暮

うしとても身をやはすつるいて人の事のみそき秋の夕暮

泪こそこたへておつれうきことを心にとへは秋のゆふくれ

うきことをわするゝまなくなけゝとや村雲まよふ秋の夕暮

あはれうき秋の夕のならひ哉物思へとは誰をしへけむ

文永元年十月御百首に

袖のうへにとすれはかゝる泪かなあないひしらす秋の夕暮

瓊玉和歌集卷第五

秋歌下

山月といふことをよませ給し

したひものゆふへの山の高根よりめぐりあひてや月の出覽けんい

十首歌合に

みるまゝに山の端遠く影すみて松にわかるゝ秋のよの月

川月といふ事を

すみなれて幾夜に成ぬ天の川遠きわたりの秋の夜の月

閑居月を

人とはぬ草の宿の月影に露こそ見えね秋風そふく

月前鷹

あはれにも待こし秋のめぐりきて雲井の月に鷹そ啼なる

月前鹿

とをつ山月すみのほる秋風に宮城かはらは鹿そなくなる

野月

身をすつる人や有らん唐國のとらふすのへの秋のよの月

嶋月

なかもはや言のはたにもかはるなるうるまの嶋の秋の夜の月

奉らせ給し百首に月を

あつまにて十年の秋ばなめきぬいつか都の月をみるへき

和歌所にてをのことも結番歌よみ侍ける次に

月見ればあはれ都と忍はれて猶ふる郷の秋そわすれぬ

うくつらき物成けりな更る夜の月の空行秋のむら雲

人々に讀せさせ給し百首に

我袖よいかにかせまし思ふことなきにもぬるゝ秋のよの月

絶すをく涙の露を契りにて袖によかれぬ秋のよの月

文永元年十月御百首に

いつよりかうきを泪のしり初て月にもいたく袖のぬるらん

月の御歌の中に

露をかぬ袖には月の影もなし泪や秋のいろをしるらん

とはすとて人をはいはし我からとねを社なため秋のよの月

秋のよは物思ふことのかきりとて月に涙をまかせつるかな

袖ぬらす月とも何かわきていはん思ひのみこそ涙成けれ

いかにかく袖はぬらす世中のうきもなくきむ月と聞しに

なくきめぬ我にてしりぬよの人もかくやみる覽秋のよの月

されはとて行へきかたもなき物を秋の月夜の我さそふらん

百番御歌合に

いとふへき物とはしらすみても又またもみまくの秋のよの月

うきことの身にそふ秋となけきても猶うとまれぬ夜半の月哉

三百六十首御歌に

宵のまのおなし空行月影のいかにね覺はかなしかるらむ

花月五十首に

夜寒なるねさめの空の秋風に涙こほるゝ月をみるかな

よなゝの袖の涙にやとりきて憂身ふるさぬ月の影哉

秋の夜のふけたる月をひとりみてねになかり物を悲しき

忘れぬ都の秋をいくめぐりおなし東の月にこふらん

山端の夕の空に待そめて有明までの月になれぬる

歌合に残月といふことを

秋の夜の心なかきは涙とて入まで月にしほるそてかな

奉らせ給し百首に擣衣を

わひつゝもねられぬ夜半の月影に人待人や衣うつ覽

秋の夜の月をあはれとみる人やひとりおきゐて衣うつらん
 夜擣衣
 河内女のくるてふ糸の長きよに手染の衣いまかうつらん
 曉擣衣
 ね覺する長月の夜の有明をいかにしのへと衣うつらん
 三百首御歌に
 眞萩ちる遠さとをのゝ秋風に花すり衣いまやうつらん
 五十首御歌合に
 偽のたか秋風を身にしめてこぬ夜あまたの衣うつ覽
 百番御歌合に
 里はあれていとゝ深草しけき野にかなて誰か衣うつ覽
 人々によませさせ給し百首に
 なか月の菊の垣根に霜さえてうつろひ行か秋の日數の
 夕霧を
 何となく空にうきぬる心かなたつ川霧の秋の夕くれ
 和歌所にて原上夕霧といふ事を
 何處にか我やとりせん霧深きいなゝの原にくれぬこの日は
 三百首御歌に
 外山なる横の葉そよく夕暮に初鴈なきて秋風そ吹
 故郷秋風
 ふるさとのかきほの薦も色つきてかはらの松に秋風そ吹
 秋雨
 夜の雨の音たにつらき草の庵に猶物おもふ秋風そふく
 百首御歌合に秋風を
 深草の里の秋風よきむにてかりにも人のとはぬころかな
 和歌所にて

人はこて秋風寒き夕こそけにさひしさのかきり成けれ
三百首御歌の中に

立田山しくれぬさきの秋風にまつうつるふは心なりけり
秋御歌とて

立わたる霧のたえまは紅葉して遠山さひし秋の夕くれ
外面なる梢をみれば紅葉してまたるゝ人のつらき頃哉

山のさくらのもみちしたるを御覽して
花散し尾上のさくら紅葉して又いとはるゝ風の音かな

人々によませさせ給し百首に

しからきの外山の紅葉かつちりてきとは夜寒に秋風そふく

山秋風を

蟬のなくと山の梢いとはやも色つきわたる秋風そふく

五十首御歌に

さほ山のはゝその紅葉色見えて霧のとたえに秋風そ吹

和歌所にて

朝なゝ鷹かね寒み佐保山のはゝそ色つく時はきにけり
いたつらに散や過なむ奥山の岩かき紅葉みる人もなし

百首御歌に

秋の色のかきりと見るもかなしきに何山姫の木のは染らん

文永元年十月御百首に

秋ふかくばや成に梟千葉のぬのこの手かしはの色付みれは

三百首御歌に

みなふちの細川山の時雨めるまの紅葉今さかりかも
なく鹿の聲聞時の山里を紅葉ふみ分とふ人もかな

奉らせ給し百首に紅葉を

うらふれて我のみそ見る山里のもみち哀ととふ人もなし

文永元年十月御百首に

鹿のなく有明の夜の山おろし木のは時雨て月を残れる

暮秋心を

月をのみなかめしほとに故郷のあさちか末に秋そなりぬる

人々によませさせ給し百首に

神なひのもりまてとてやをくらし人やりならぬ秋の別を

九月盡の夜むら雨したるを題にてをのことも歌よみ

侍ける次に

空も猶秋の別やおしむらん涙に似たる夜半のむらさめ

瓊玉和歌集卷第六

冬歌

三百首御歌の中に

時はいま冬になりぬとしくるめり遠き山邊に雲のかゝれる

初冬の心を

ほしあへぬ秋の涙をあかすとや袖にしくれて冬のきぬらん

秋の空いかなにかめし名残とて今朝も時雨の袖ぬらす覽

人々によませさせ給し百首に

須磨のあまの鹽たれ衣冬のきていとゝひかたく降時雨哉

秋よりも音そさひしき神な月あらぬ時雨やふりかはるらん

時雨を

標古

風はやみうきたる雲の行かへり空にのみしてふる時雨哉

きたまらぬ冬のくもりのたひゝに風にまかせて降時雨哉

朝時雨と云ことを

さならてもおきうき袖は乾かぬをあしたの床にもる時雨哉

戀のこゝろを

つゝめとも涙をおつる身に戀のあまるや秋のゆふへ成らむ
袖をわれいつの人まにしほれとて忍ふにあまる涙成らん

奉らせ給し百首に

よそにては思ひありやとみえなから我のみ忍ふ程の果無さ

不逢戀

あふことはいつにならへる心とて獨ぬるよの悲しかるらん

思ひにもよらぬ命のつれなきは猶なからへて戀やわたらん

さりとも月日の行もたのまれず戀ちの末の限しらねは

人々によませさせ給し百首に

はては又さこそはきえめ物をのみ思ふ月日の雪とつもらは

三百首御歌の中に

したもえのあまのたくもの夕煙するこそしらね心よはさは

五首の御歌合に戀を

戀初し心をたれにかこたましあはぬは人のうきになせとも

題しらす

夢にのみみるをあふにてやみもせは何か現の片身なるへき

つれもなき人のつらさも馴ぬるにこりぬ心のいろを待らん

いかにふる袖の涙のしくれにて紅葉にあまる色なみす覽

和歌所にて

山鳥のをのれ猶みるますかゝみかけてや人をななく戀まし

百番御歌合に名所戀を

くらへはや戀をするかの山たかみをよはぬふしの煙成とも

三百首御歌に

わたつ海の底の玉ものみ隠に亂れてそ思ふあふよしをなみ

百首御歌中に

心をそ盡しはてぬる宿をたにそこともいはぬ人をこふとて
百番御歌合に不逢戀を

つれなきも限りやあると頼むこそなき思ひの始なりけれ

浪のうつ岩にも松のたのみこそつれなき戀のたねと成けれ

夕戀といふことを

人またぬ時たに物のかなしきにこんとたのめし秋の夕くれ

人々によませさせ給し百首に

また人を待そわひぬる偽にこりぬ心はあきの夕くれ

まつ戀の心を

いねかてに人まつよひそ更にける有明の月も出やしぬらん

待わひてひとりなかわる夕暮はいかに露けき袖とかはしる

來ぬ人をいかにまてとか秋風の寒き夕に月の出らむ

よひのまとたのめし人はつれなくて山のは高く月を成ぬる

契空戀を

待人と友にそみまし偽のなき世なりせは山端の月

三百六十首御歌の中に

わひつゝもねぬへき夜半の村雨に猶人まてと秋風を吹

忍待戀といふことを

宵のまは人めしけしといひなして更てこぬにそ恨みわひぬる

瓊玉和歌集卷第八

戀歌下

奉らせ給し百首に初逢戀を

なか／＼に逢とも胸のさはかれて言もやらぬ夜半の陸言

戀御歌とて

忍ふとて逢よのまれに成もせは心にあらてたえぬへきかな

寄月忍戀

よひ／＼はくもれと思ふ人しれす我かよひちの秋の月影

百首御歌合に別戀

聞しより猶こそうけれ衣々の別の空の月のつらさは

戀のこゝろを

今はとて別る袖の涙こそ有明の空のしくれ成けれ
いくたひか夜深き空の鳥の音にあかぬ別をおしみきぬらん

三百首御歌の中に

暮なはと契ても猶かなしきはさためなきよの曉のそら

逢後契戀

いかにせん逢までとこそ歎しにその面影のそへて戀しき

文永元年十月御百首に

よそにみし思ひは猶も數ならすなれてそ人は戀しかりける

題しらす

下むせふ思ひをふしの煙にて袖の涙はなるさはのこそ

思ひわひ人にもかくといふへきに忍るほとはそれもかなはす

いかばかり戀るとかしの我せこか朝明の姿みすひさにして

玉章をつけし淺茅のかれはにてもゆる思ひの程はしりけむ

三百首御歌に

ふけすともまたてやねなん月にたにこさりし物を宵の村雨

雨ふらはうらみさらしこぬ人の心みえなる夜半の月哉

世の常と思ふわかれのたひならは心見えなる手向せましや

〔これは後拾遺別に藤原長能か歌也〕

戀の心を

たのめぬを我心より待わひて人のつらさや身につもるらん

被忘戀

いつまてかまちもわひけん今はまた我身のよその秋の夕暮

更る夜のかねの音にも思ふかないいつまて人のこねを待けん

人々によませさせ給し百首に

人はいさ思ひも出し歎つゝぬれはや逢と夢にみゆらん

百首御歌合に會不逢戀

うたかひし心のうらのはては又逢ぬかあふとなるそ悲しき

戀御歌の中に

忘れなんといふもかしこしうき人の猶しのはるゝ心よはさは

忘れしと偽なからいひしこそつらきか中のなさけ成けれ

三百首御歌の中に

いかにしてよそにも見んと思ひしはつらきになれぬ心成鳧

さりとともと人のなさけを頼哉つらき心も岩木ならねは

ほしわふる袖のためしは何ならし草はに秋そ露は置ける

あはれなる身の思ひかな偽の人のちきりをなくさめにして

逢不逢戀

哀またあふ夜ありやとなからへて物思ひする我命かな

我のみやたえぬかたみと忍ふらんつらきかなかの有明の月

奉らせ給し百首に同心を

さはた川ゐてなるあしのかりそめに淺しや契一よはかりは

見るたひにつらさをまさる今はとて人のいそきし有明の月

三百首御歌に

うつろはゝ色かはれとや契をきしうき身しりける袖の露哉

人々によませさせ給し百首に

何とかく色變るらん木にもあらず草にもあらぬ人のことは

寄花戀

戀戀といふ事を

うつろひてまたもさかぬはうき人の心の花のつらさ成けり
花の木のかをはいはし人心ならひなけれとうつろふ物を
いかにして恨やらまし契しにあらぬつらさの月日經ぬるを
人々によませさせ給し百首に

あちきなやいつまで物を思へとてうきに残れる命成らん
和歌所にて結番歌のこともよみ侍ける次に

恨むへき我身の咎は忘られてとはぬをうきになすそはかなき
戀のこゝろを

身の程を思ひしりつゝうらみすは頼ぬ中となりぬへき哉

百番御歌合に恨戀

たのめはと思ふはかりにうき人の心もしらすうらみつる哉

被志戀

なをさりにこれや限りといひしよのつらき誠に成にける哉

二十首歌合に戀を

忘草たねあれはこそしけるらめ軒はや人の心なるらん

絶戀といふ事を

もろともに忘れしところ契しに誰つらさより思ひ絶けん

十首歌合に

今はまた影たにみえぬうき人のかたみの水は涙成けり

寄淵戀

人心うきになかるゝ我袖の涙のふちはかはるせもなし

寄川戀

ちりをたにはらはぬ床の山河のいさやいつより思ひたえけん

絶戀年戀

いたつらに年のみ越て逢坂の關はむかしの道となりにき

瓊玉和歌集卷第九

雜歌上

三百首御歌の中に

百敷や天照神の宮柱君かみかけをさそまもるらん
奉らせ給し百首に神祇を

民やすく國おさまれと身ひとつに祈る心は神そしるらん
おなし心を

おなし心を

よの中のうきをみるにも男山頼む心に身をまかせつゝ
此道をまもると聞はゆふかつらかけてそ頼む住吉の松

三百首御歌に

住吉のうらはの松のふかみとり久しかれとや神もうへけん
二所へまうてさせ給ける時

二所へまうてさせ給ける時

たのむそといふもかしこし伊豆の海ふかき心はくみて知覽
五戒の御歌の中に不殺生戒

五戒の御歌の中に不殺生戒

くらき夜の鵜河の簀さしをきて心の月の影を尋ど
末法萬年餘經悉滅

末法萬年餘經悉滅

散はてゝ花も紅葉もなき山にひとり色こき高砂の松
此日已過命即衰滅

此日已過命即衰滅

はかなくも暮ぬとはかり歎かな命しらする鐘のひゝきを
百番御歌合に釋教を

百番御歌合に釋教を

あひかたき御法の花をそれとみよ老すしなすの藥尋は
世をおさめ民をたすくる心社やかてみのりのまこと成けれ

旅御歌の中に

年月はへたてきぬれと逢坂や關路霞し春を忘れぬ
何となく我にもあらぬ心ちしてさすらへこえしさやの中山

旅御歌の中に

何となく我にもあらぬ心ちしてさすらへこえしさやの中山

蜀中松といふ事を

雲のゐる外山の末のひとつ松めにかけて行道そはるけき
百番御歌合に野を

日のくれにいな^{わか}の^い原を分行は鳴そたつなる宿はなくして
人々によませさせ給し百首に

臥わひぬいかにぬし夜か草枕ふる郷人も夢にみえけん
旅宿月といふことを

都おもふたひねの夢のさめぬまに恨やしつる秋のよの月
旅御歌とて

またしらぬ野山の末にあくかれてかはる草木に秋をみる哉
夜船こくせとのしほひをよそにみて月にそ越るさやの中山

蜀中晩嵐を

きさかたのあまのとまやに宿とへは夕浪あれて浦風そ吹
海上眺望といふことを

出雲なるちくみの濱の朝なきに漕出て行は興の嶋みゆ
海旅を

はりまなる稻見の海に舟出して朝こき行はやまと嶋みゆ
あはち嶋せとの吹わけ風はやし心してこけ沖津舟人

奉らせ給し百首に海旅を

心なる道たに旅はかなしきに風にまかせていつる舟人
弘長三年八月の風によりて御京上とまらせ給て後
をのことも題を探て歌よみ侍ける次に浦舟といふこ
とを

今そしる浦こく舟の道ならぬ旅さへ風の心なりとは

三百首御歌の中に

みわたせは鹽風あらし姫嶋の小松かうへにかゝるしら浪

浦古松を

うら風に幾世の友を契らんふりて木高き住吉の松
人々によませさせ給し百首に

あしたつの啼音もすみて更る夜に月かたふきぬ和歌の松原
吹風のなるをにたてる一松さひしくもあるか友なしにして

百番御歌合に河を
住わひは行て尋ん三輪川の清き渚^{なれ}やいつこなるらん

三百首御歌の中に
河の名もこととふ鳥もあらはれてすみたえぬるは都也けり

奉らせ給し百首に河を
このさとはすみた河原も程遠しいかなる鳥に都とはまし

橋

今も猶ふしの煙はたつ物をなからの橋よなと朽にけん
百番御歌合に同じ心を

いかにせんとつな^山の橋のそれならて浮世を渡る道の苦しさ
山を

岩木までもゆる思ひのある世とてあさまの山も煙たつ也
人々によませさせ給し百首に

ふしのねやいかに思ひのもえ初て雪にもけたぬ煙成らん
卯月の頃二所へまうてさせ給し時箱根にてふしの山

を御覽しける折しも殘鶯の啼けるを聞せ給て

此山はふしの高根のみゆればや時しらね音に鶯の啼
百番御歌合に山を

世のうさに思ひもいらは誰をかもしる人にせんみ吉野の山
山家を

ことしけきうき世のまきれうち捨てすまはや山の奥の庵に

三百首御歌に

都人とはぬもよしや山里はさひしきにこそ心すみけれ

山家松を

山里はまつのあらしの音こそあれ都にはにすしつかなり鳧
住なれぬ心なりせは山里のまつの嵐やさひしからまし

奉らせ給し百首に山家を

人の身はならはし物を山里のすみよきまてに成にけるかな
人々によませさせ給し百首に

山里も住うくなりぬいつちまたあくかれそむる心なるらん

六帖題をさくりてをのことも歌よみ侍りけるに古郷
を

此里をすみうしとにはなけれともなれし都そさすか戀しき
御京上とまらせおはしましてのころよませ給ける

今更になれし都そ忍はるゝまたいつとたに頼みなけれは

百番御歌合に述懐を

年月はうつりにけりな故郷の都もしらぬなかめせしまに

うき身こそかはりはつとも世中の人の心の昔なりせは
續拾遺懷舊ニ入此集ニ不見

瓊玉和歌集卷第十

雜歌下

三代御詠御覽せられける次によませ給ける

書をける跡見るたひに古のかしこき御代はしのはすもなし

奉らせ給し百首に懷舊

わかの浦やあはれ昔へありきてふ人の情を猶しのひつゝ
六帖題をさくりてをのことも歌よみ侍ける次に言葉

かきつくる言の葉なくは何をかはしらぬ昔のかたみとはみん

玉

うき身とは思ひなはてそ三代まてにしつみし玉も時に逢鳧

述懐

有て身のかひやなからん國の爲民のためにと思ひなさすは
心をはむなしき物となしはてゝ世の爲にのみ身をや任せん

心をも身をもくたかしあちきなくよしや世中有にまかせて
うつり行月日にそへてうきことのしけさまさるは此世也鳧

人々に讀させ給し百首に

世にふれはうきことしけきさゝ竹の其名もつらき我身也鳧
題しらす

梓弓ひきのはへる青つゝらことしけきよはくるしかり鳧
山深くすまんとまてはなけれとも事しけきよをよそに聞はや

有増の心のかねてかよへはやまたみぬ山の戀しかるらん
うらやましいやしき賤も中々に身をは心に猶まかすらん

述懐廿首御歌に

うきも又我身のとかになけくかな世のことはり物忘して
なけきてもをのか心とくちぬを誰におほせて猶うらむ覽

世中のうきには關もなき物を何に心の猶とまるらん
されはよになとや心のとまる覽うきは名殘にあらしと思ふに

おなし十首御歌に

世を捨は友にと契る人もかなひとり山の道をしらぬに
いとひても後をいかにと思ふこそ猶世にとまる心なりけれ

文永元年十月百首御歌の中に

鶯のねくらの竹の世中にとまりやすきは心也けり

いとふへきうきよの中と思ふより外なる物かとまる心も
百番御歌合に

雜御歌中に

世のうきを思ひつゝくる夕暮は我身にちかしみよしの山
すつともうきみひとつは惜からず人の情に思ひ侘ぬる
行末に待ことも多き身なり共いとふへきよのうきとこそみれ
よの中ににもかくにもくるしきはたゞ身を思ふ心なり
身の爲にうれしと思ふ事はみなうきよの中となるそ悲しき
世中をあなうと歎くことしあれば先こほれける我涙かな
和歌所の結番歌なことも讀はへりける次に
世中のうれしはともいとはれぬ哀我身の何をまつらん
はかなしと浮世中をかつみてもこりぬ心はいとひやはする
いかにせん唯有増の月日へてつゝに厭はぬ世をもつくきは
百首御歌合に
後の世を此よの爲に忘られて我身のあたは我身なり鳧
述懐の心を
のちのよを思へはかなしいたつらに明ぬ暮ぬと月日數へて
とにかくに猶世そつらき賤しきもよきも盛のはてのうければ
三百首御歌に
夢のうちに猶みる夢やよの中のはかなく過しむかし成らん
うつゝにも思ふ心のかはらねは同じことこそ夢に見えけれ
雜御歌の中に
夢は猶昔に又もかへりなん二たひ見ぬはうつゝ成けり
かねてしる命なりともおほかたは悲しかるへき夢の浮世を
人々によませさせ給し百首に
いかに見て思定めむうつゝとも夢ともなきは此世なりけり
寄草無常といふことを
よの中はさそふ水まつ浮草のあるともきかぬねのみなかれて
圓満院宮仙花門院御事うちつゝき聞えさせ給ける頃
月を御覽して

なき人の數のみまさる世中をいかに哀と月もみるらん

寂明寺の舊跡なる梅のさかりなりける枝を人の奉り
たりけるを御覽して

心なき物なりなから墨染に咲ぬもつらし宿の梅かえ
去年冬時頼入道身まかりてことしの秋長時おなし様
に成にしこと思召て

冬の霜秋の露とてみし人のはかなく消る跡そかなしき
雜御歌の中に

なき人のかすそふ世こそ悲けれあらましかはといふ計にて
なかむれば思ひそ出るみし人のなきかおほくの秋の夜の月
されは又いつをうつゝのならひとて今更よをも夢といふ覽
明るまてと命を頼む心こそはかなき事の限成けれ

文永元年十月百首御歌に
まてといふに更に別のとまらは何をうき世に思ひわひまし
あし原の國つことは絶すして猶もつたへよ万代まてに

人々によませさせ給し百首に
おさまれる御代には朽ぬ道なれはいともかしこし和歌の浦風
百首御歌合に祝のこゝろを

萬代のかすにとらなん君かすむ龜のお山の瀧の白玉
文永元年大嘗會の心を讀せ給ける

すへらきの位の山の小松原ことしや千代のはしめなるらん
文永元年十二月九日奉仰眞觀撰之

老てかくもしほに玉そやつれぬる浪は神代の和歌のうら風

此一册者以 禁中御證本留寫畢

慶長三年三月日

左少將基任

卷第二百三十 瓊玉和歌集卷十 雜歌下

六十一

群書類従卷第二百三十一

和歌部八十六家集四

李花集上 宗良親王御集

春歌

立春のこゝろなよみ侍し
春たつといふはかりにはかすめとも猶雪深しみよしのゝ山

千首歌よみ侍しに立春天

久堅のあまの岩戸そかすむなる神代に歸る春のしるしに

立春雲

今朝よりは霞そとつるあまつ空雲のかよひち春やきぬらん

立春關

^{野臺}關守のうちぬるひまに年こえて春はきにけり逢坂の山

早春河

たつた河雪けの水もまさる也三望の山ははやかすむらし

早春湖

比良の山海ふく風はさゆれともさゝ波かすむ春はきにけり

百首歌よみ侍し中に立春として

立浪も霞をそへてあら玉の年やこゆらんすゑの松山
くるとあくともかれぬ空も霞けりいつの人まに春はきぬ鹽
さほひめの霞の衣うちへてたもとゆたかに春や立らん

羈中によせて百首歌よみ侍し中に立春の心を
いそきつるひなのなか路に年暮て都に遠く春もきにけり

餘寒の心をよみ侍りし

春のきる霞の袖も立かへり嵐にさゆる山のはのくも

春雪を

山たかみはや消ぬらん春の日のひかりにあたる松のしら雪

霞たつ山の木のめの春風にきえれとおつる松の白雪

時しらぬ深山のすまゐもいつまでかくてはなとおも

ひつゝけられし比

雪つもる谷の埋木そのまゝにしらてや春をよそにすくらん

中院准后(親鸞)詠歌ともあまたかきあつめてよしあし

しるしつけて歌をもよみくはふへきよし申たりし中

にふりにける身にそおとろくあは雪のつもればきゆ

る色をみるにもとありしそはに書そへ侍し

ふりにける雪と我身そあたらしき春にはあへぬ物にそ有ける

鶯の歌とてよみ侍し

たくへくる花かと思て谷かけに鶯さそふ春の白雪

延年(後醍醐)四年吉野の行宮にさふらひし比よみてた

てまつりし歌中に

あきらけき御代の春しる鶯も谷より出る聲聞ゆ也
おなし比よみ侍し
みよしの、谷のふるすも出にけり君か春しる鶯の聲

山家鶯といふことを

鶯の谷のふるすのちかければ山里よりや春をしるらん

中院准后うくひすの鳴て出つる谷かけをなを時しら
てのこる山人とありしそはに書そへし

君か代の春まつ人は谷深み鶯よりも先やいつらむ

山ふかく籠侍し比よみ侍し

鶯は谷より出る春なれと猶山ふかきわかすまひかな
たに深きやとの梢の鶯はふるすを出しかひやなからん

舊巢のうくひすを

をのかねはあらたまれとも鶯の谷のねくらそいとふり行
二十餘廻の春も都のよそに過ぬることと歎侍しこ

ろ鶯を聞いて

ことしわか春をしらせよ鶯もしるしなきねやさのみ啼へき
永日もくらしかたう侍しにたゝ鶯のみ啼ければ

のイ
興國（後村）五年信濃國大川原と申山のおくに籠居侍

うれへあれは聞こといとふ我宿になれのみ春と鶯そなく

しにたゝかりそめなる山里のかきほわたり見ならは

ぬ心地し侍にやふしわかぬ春の光待出る鶯の百轉も

むかしおもひいてられしかは

かりのやとかこふはかりの吳竹をありしそのとや鶯のなく

春ことにあひやとりせし鶯も竹のそのふに我しのふらん

千首歌中に鶯とて

春くれは花にうつるふ鶯の心の色そねにはしらるゝ

なへてふる梢の雪を鶯のいつれ梅とかわきてなくらん
色かよりほかにも猶そあはれなる軒端の梅の鶯の聲
子日を
君か代は猶こそあかねかすか野の松をみなからひき盡して

若菜を

春やとき花やをそきとたとるまにみかきか原にわかなつむ也
鶯のときふひの野邊の初聲にたれきそはれて若な摘らん

いつのまに若なつむ野と成ぬらんきのふは雪のふるの中道
消すともなとかなか覽獨いてゝ若菜つむへき雪まはかりは

よそよりは雪まもみえぬ春日野に野守や獨若菜摘らん

千首歌の中に霞

立わたる霞のしたの白雪は山のはなから空にきえつゝ
みよしのやこれよりおくの嶺續きありともみえす霞む空哉

關霞

春はなを名にこそたてれ東路やいつれ霞の關路なるらん

名所霞

松浦川なゝせのよとのほるゝと霞なかるゝ春のあけほの

住江の岸うつほとは聲もせてかすめるおきに

海邊霞

いつくをかわかすむかたと歸る覽かすめる興のあまの釣舟

延元四年春比遠江國井伊城に住侍しにはまな橋の

霞わたりて橋本の松原湊の波かけてけるゝとみわ

たさるゝあした夕のけしきおもしろく覺侍しかは

夕暮はみなともそことしらすけの入海かけてかすむ松原

はるゝと朝みつしほの湊船こき出るかたは猶かすみつゝ

遠樹の霞といへる心を入々によませ侍し次に

高砂の峯の梢もかすむ也空にあらしのをとばかりして
信濃國にて百首歌よみ侍しに霞を

霞めたゝいづれ宮このさかひともみゆへき程の旅の空かは
そのはらや有とはみえしは木々の梢もかすむ春の夕暮
すはの海や氷のうへはかすめとも猶うちいてぬ春の白波
きさらきの比山をこえ侍とて

梅かかに花のあたりを行やらて山路くらせる春風そ吹
むめかかの嵐にたくふたひことに人をも花や又さそふらん
百首歌よみて北野の宮に法樂し侍しに梅を

山里は風そたよりのしるへとも梅かかにほふ比やしるらむ
梅風を

里ことにさける軒はの梅かかを風はひとつにさそひける哉
しのひて住侍し山里に梅花さかりなりしかは
梅のはなうたてにほひのしるければわか隠家も人やとふ覽
あるところの梅をみてかへるとて

おらずとも歸りやせまし梅かかのうつれる袖を家つとにして
ひとりすみ侍し山里に梅花のさかりに鶯の鳴ければ
色もかもしらてみるこそ梅花やみよりは猶あやしかりけれ
いろも香もしらてそみつる梅かえの花もてはやせ宿の鶯

あやしやなとたはふれ侍し人の許へ梅花一枝おりて
つかはすとて

梅かかのほはぬ袖もなかり鳧誰をたれとか人のとかめむ
里梅を

待人のかそにほふらん梅花さかりをとほぬ里しなけれは
朧夜の月の光によもすからあくかれてあるところの
梅花のもとに立より侍しかともあるしもみえさりけ

れは後にもみよとて花の枝にむすひつけ侍し
あやなしといはぬはかりそ梅花さける軒はの春の夜の月

うつし裁侍し梅の程なく咲ける春よみ侍し
ことしより花咲そめて宿の梅うき身には猶春をまてとや
千首歌の中に池柳を

青柳のみとりのまゆをかきたれてうつすは池の鏡成けり
春駒を

浅みとりあらはれそむる初草の雪まをあさるのへの春駒
喚子鳥を

あまひこの音羽の山のよふこ鳥我か人かとはまし物を
興國三年越中國にすみ侍し比歸鴈を聞て

おなしくは散まてをみて歸る鴈花の都のことかたらなん
同比壽中百首とてよみ侍し中に

かへる鴈こしちの嶺のへたてを我こえてこそ思しりぬれ
人々に歌よませ侍し次に歸鴈を

今はとて雲ぬはるかに成ぬ也空行鴈の春の通路
百首歌よみて北野宮に法樂し侍し中に歸鴈を

歸鴈なにいそく覽思ひ出もなき古郷の山としらすや
百首歌よみ侍し中に

夕暮のやとりもとらて歸鴈こしちの山はよるやこゆらん
興國二年越後國寺泊といふところにしはしすみ侍し
に歸鴈をきゝて

ふる郷と聞しこし路の空をたに猶うらとをく歸る鴈かね
旅の空にも年月のみつもり侍ぬれは故郷もさすかに

戀しく侍しに千首歌よみ侍し次に歸鴈
春きぬとわかるゝ鴈の我ならはかへる雲路にねをはなかしを

いかにそや身のみ物うくおほえ侍し頃 鴈の歸るをききて

誰もけにありなは後のいかならんうきめみえしと歸る 鴈金
百首歌よみ侍しに關春月

まはらなる不破の關屋の夜半の月霞める影はもるかひもなし
春月とて

花の色にあらそひかねて春のよの月も光のかすむ成けり
新巻
羈中百首とてよみ侍し中に

やとからに霞むとのみやなけかれん都の春の月みさりせは
歎事侍し比春月をみて

袖の上にかすめる月はそれなからもとのみならぬ身を歎哉
中院准后よみて見せ侍し歌の中にいかにせんさらて
もかすむ月影の老の涙の袖にくもらはとありしそは
に書そへ侍し

この頃はさらてもかすむ月なれば老の涙をいとはさらなむ
花歌よみ侍し中に待花とて

待ことの花にしくは山櫻さかぬまいかにさひしからまし
櫻花春はかきりのある物をいつみよとてかつれなかるらん

これかれさそひて花尋侍し所にて
いつくとも所ためぬ花のかにさはれきつる春の山道

たつねはやそこともしらぬ花のかの霞ににほふ春の山もと
花の色はみまれみすまれ分ゆかんかすめる山に風にほふ也

對山待花といふ心をよみ侍りける
さらぬたにまたきなき名の立田山いくたひ雲の花とみゆ覽

花さかりに吉野に侍しにちかくても雲とやみると人の
申侍しかは

花ならて何とかはみむみよしのゝあをねか嶺にかゝる白雲
同比歌たてまつりしに見花とて

分きても雲とそみるよしの山君か御かきの花の梢は
花のうたの中に

久かたのあまのかく山空はれて雲にまかはぬ花のいろかな
よしさらはいつれ花ともなか／＼にしるてはわかし峯の白雲

北野宮に
すかはらやふしみの暮にたつ雲ははつせの山の花にそ有ける

人々に歌よませ侍し次に嶺花
櫻さくこれやたかまの山ならん嶺よりおくのみねの白雲

さらぬたに春はまつおもひやらるゝ吉野の奥此比は
皇居にてさま／＼をしはかられさせ給しかは

さかはまつ行てこそ見め我やとゝたのむよしのゝ花の下陰
信濃にてよみ侍歌の中に

ありとみて尋はこれもいかならんふせやにさける山の初花
東路に侍しころ都のはなおもひやられて

春といへはやかて心にまかひけりなれし都の花のしたかけ
盛花といふ心を

山櫻花はさかりの比なれやにほひはかりをさそふはる風
ある所にて花によする祝をよみ侍し

咲花も散といふことをしらぬ迄のとけからなん御代の春風
故郷花を題にてめん／＼歌よみ侍し中に

ことかたれふりにし志賀の宮木守花こそせめて物いはす共
社頭花とて

春の目ののときき神のめくみもてちらしとたのむ花盛哉
閑居花

柴の戸にうき世のなかは捨ててつ花に嵐を又いとへとや
しはしすみ侍し所に櫻を裁て程なくたちいて侍しか
はその木にかきて結つけ侍し

蜀中百首とてよみ侍し中に

都にて花みるひまもなかりしを心のまゝにくらす春かな
とし毎に宿かへてみる花なれば後の春ともいかにたのまむ
花故にあくかるゝ名も立ぬへしさらて旅ねをせぬみ成せば
信濃國伊那郡と申所にて花み侍しに思出侍ける
ちらぬまに立かへるへき道ならは都のつとに花もおらまし

花見にさそひ侍し人のさはることありとてとまり
けるにかへりて花の枝をつかはすとてよみ侍し
こぬ人のためとて手折一枝はちるよりおしき山さくらかな
花のもとにて人々和歌會し侍し次に

よしさらは散ともおらし山櫻風よりつらき名をもこそたて
身を捨て心はかりや思ふよりほかなる花に猶うつるらむ
歸るさは身にこそそはねあかさりし心や花に猶とまるらん
老木の花をみてよみ侍し

わきて猶花も老木そあはれなる植けん人を昔とおもへは
延元四年春比にや顯家卿なといさなひてあつまより
はるゝとのほりて今は都へといそき侍しに奈良天
王寺のいくさやふれにしかは思ひのほかに吉野行宮
に参りて月日を送しにやよひの比爲定卿の許より風
の便に歸るさをはやいそかなん名にしおふ山の櫻は
心とむともと申をこせたりし返事に

新聲
ふる郷は戀しくとてもみよしのゝ花の盛をいかゝみすてむ

人もすさめすなり侍ける家に花さへことしはをそき
なといふを聞て

あるイ

をそしともなれをそたのむ山櫻やとふりぬとて春な忘れそ

ある所の花おもしろかりければ暮までなかれて歸侍
しことに名残もおほくてその花に結び侍し

めぐりあはゝ父こん春の花もみよ我やわするゝけふの夕暮

池のみきはも物ふりてよしある木たちのはなかけむ
かしおほゆるもあはれに見入られしところにて

春ことの池のかゝみは年ふりて花も老木のかけやはつらん

扇の繪に春の山にかれこれたちやすらひて花の枝か
さしたる所を人のよませ侍しかは

たかためにしゐては花を手折らんさても家路のいそかれ哉

中院准后かきあつめてみせ侍し歌の中にみよしのや
雲の櫻君か代にあふへき春や契をきけんとなりし

そはにかきそへ侍し

うつろはぬ君か心にならひなは花もときはの色をみてまし
又ひとりみてなくさみぬへき花になとしつゝゝろな

く人をまつらんとありしに

我はかりみるにかひなき花なれば憂身そいとゝ人もまたるゝ
はかなきことなと思ひつゝけ侍し比花のうたとて

さけはちるよしや芳野の山櫻うき世の春を花にしらせし
人々に歌よませ侍し次に志賀山越を

忘れすよしかの山こえ春をへてなれしきくらの花の下かけ

花はいつれもおなし春なる色香をみるにも所から猶
あかぬ心ちして九重の昔のみ思ひ出られ侍しかは

百敷やあひも思はぬ花の色のこゝろにそみて忘れぬかな

中院准后歌よみて吉野よりみせ侍し中に九重の御階のさくらさそなけに昔にかへる春をまつらんとありしそはにかきくはへける(侍リイ)

君すめは是もみはしの櫻花むかしの春にかはらさるらん又いかにして老の心をなくさめんたえて櫻のさかぬ世ならはとありしそはにかきくはへける

花さそふ風にそさはく春はたゝのとけかるへき老の心も日くらし花のもとにたゝすみてよみ侍し

忘るゝに忘れぬへき身なりせは花に憂へのなき世ならまし春ことにかはらぬ花をみるにもいさゝうつろひはてたる身のしき思ひしられて

老木まで花はさきけりうたてなと我世の春のすくなかる覽おなしこゝろを

ちるとみし花もさきけりうきはたゝ我世の春の一さかり哉吉野の行宮もあらぬかたにうつされて後岩のかけみちもいとゝ跡たえはてゝ侍し先帝(後醍醐)の御廟もゆ

かしとおほしめされけるにや。三月十日比新待賢門院(護子)〔備註〕准三宮簾子。後醍醐院妃。後村上院母儀。右中將公簾女。

御まいり有けるに藏王堂をはしめてきながら房とも皆煙となりはてゝ跡たにもみえさりけるに塔尾の御廟の花なん昔なからの色香にてなつかしくおほしめされければ同心にもみよとて一ふさ御ふみのなかにつゝみくばへられてみよし野はみしにもあらず荒にけりあたる花は猶のこれとも仰たりし御返事に今みてもおもほゆるかなをくれにし君か御蔭や花にそふ覽

たつねみる人のためにや残けんおなしかさしのみ吉野の花と申侍しにいくとせもへたてさりしに女院も御かくれありしかはさらに父世の中くれまどひぬる心ちして後春又かの御ふみをとりにたしてみ侍しにしほめる花もさなからつゝみくせられて見しまゝなれはいとゝあはれにて

尋ても今はた誰かみよしのゝ花のむかしを我にかたらんうき世のならひもよるつにつけて思ひしられぬにしもあらぬ身のなにしてかつれなくなからふるやらんと我なからおもひつゝけられしころ花をみて今はとて思ひすつへき世中に花こそうたて心とゝむれ

あたる世を今はなにかは數なと申しらせ侍し人に彌生の末つかたうつろひたる花に結び付てつかはしける

おしむなよたれもうき世の花盛散とみてこそ有へきものを彌生の比はしめて山里にうつろひて人の許につかはし侍し

山ふかみあくかれそめてわか心花にうき世の門出をそする中宮准后の許より歌よみて見せ侍し中にまたさかぬ梢あれはとたのますはうつろふ花やなをうからましとあるそはに書をへし

いとゝ猶ちらぬをみてそ散はうきおなし心に花たにもなき同歌に春をへて涙ももろく成にけりちるをさくらとなかめせしまにとありしかは

おしめ先とまらぬ花になれゝゝてはては涙そもろく成ぬる花のちる夕つかたこしかた行すゑのことともつくつ

くとおもひつらね侍て

うつゝともなに思ひけん夢とこそいふへかりけれ花の盛を

落花の歌中に

吹からに誘はれやすき花そとはいかてか風にしらせ初けん

うつろふも心つからとみる花の風の名たてになにとちる覽

櫻花さきてとくちる年毎に幾たひ春をうらみきつらん

いつのまに春日のとけき櫻花さくとみしより風も吹あへぬ

花のちる木陰にたちよりても日數へぬる旅のすまゐ

なとおもひつゝけられて

あたにさく木すゑを旅と思へはや花もつゐにはねに歸る覽

相阪の關に花のちりけるを人のみてとをるかたかき

たる繪にかきそへし

かつこえて春にわかるゝ逢坂は人たのめなる花やちるらん

落花のこゝろを

あはち嶋せと行船の追風にちりくる花や跡のしらなみ

雲まよふよしのゝ山のやまおろしに花の白雪ふらぬ日はなし

おしめたゝ散なむ後はあくた河それとも見えし花の白波

風いと吹たてゝ花の梢もやうゝうつろひゆく夕つ

かた花おしむ心めんゝよみ侍し次に

ちる花におほふ袂はせはくともおしむ心はよもにみつらん

谷落花とて

ちる花の嵐にきはく谷川はふちにも瀬にもあた浪そたつ

ある庵室に住侍し比世中のはかなき事なとありしも

るともに物かたりせしに庵の櫻折しりかほにさとち

りて春のくれ行氣色も衰成しかは

今はさは花ちりはつる愛世也なにゝか人の心とむらむ

久しくをとせさりける人の春の暮かたにしもまうて
きたりけるに庭櫻の枝を取いてゝみするとて

我やとをとふにてしりぬ山櫻外の木すゑは散はてにけり

永日もくらしかたう侍しかは春の霞とたちいてゝそ

こはかともしらぬ山邊にあくかれ侍しに薪おへる山

人のわらひなと取くして行あひ侍しかは

山人や妻木につけて歸るらんさらてももゆる嶺の蕨を

松下躑躅といへる心を

松か枝はときはの山の名のみして下てるはかりさく躑躅哉

摘 莖

春ことにすみれつみにとくる人そ荒行宿の哀しるらむ

苗代を

水上に誰なはしろにまかすらむなかれてほそき春の山川

しつのをか苗代水をまかせ入てけふは門田に蛙なく也

中院准后よみて見せ侍し歌中に小山田の苗代水のひ

きひきに人の心のにこる世そうきとありしそはに書

くはへ侍し

をのつから道ある御代にまかすれは苗代水もにこらさり鳧

款冬を

かはつなく井ての山ふき逢ことのまれなる色と春は暮つゝ

藤 を

咲てこそ猶したはるれ藤波のなみにおもはぬ春の名残は

うちはへてかけとたのまむ我宿の松にさく藤春もかきるな

暮春歌とてよみ侍し

うつり行山の櫻のかり衣けふはかりなる春のいろかな

彌生の廿日あまり花ものこりすくなくて春のけしき

物ことにをとろへたる夕つかたよみ侍し
今はとて春をもさこそさそふらめ散ぬる花の跡の山かせ
羈中百首中に暮春

鳥のねもふるすにかへる谷の戸に春をは獨われやおしまむ
惜三月盡といへる心を人々よませ侍し次に

二なき心は花につくしてき又いかにして春をおしまん
我身世にふる春のなかめにうちまされぬる鐘の聲も
けふはさすかにおとろかされて

惜む共なにかとまらんさらぬたに憂身のよその春の日數は

夏歌

百首歌よみ侍し中に新樹を

春わけし跡にしをりを残し置て櫻はしるき夏木立かな

卯花似月といふ心を

うのはなのよそには月の影もなし籬や空の雲ま成らん
中院准后よめるうたみせ侍し中にもろかつらたのみ
をかけしまゝならはしめの外なる身をもわするなも

ろ人は心を神にかたふけてけふはあふひの山かつら
せりとありしそはに書くはへてつかはしける

代々かけて神にあふひのかさしをはしめの外とも何か思はむ
かけて頼めその神山のやまかつらけふにあふひと人は云也
すみあらしたる前栽の中になてしこの一むら花さき
てみえけるに

今更に塵をもたれか拂ふへきあれにし宿の床夏の花
瞿麥露を

けさのまはまたしきたへのとこ夏に露のおきゐる程を涼しき
待郭公を

よひの雲路に關はなきものをさはりかちなる郭公哉
山里にすみ侍し比時鳥を待とて

かくてたに猶もまたれは郭公なにを深山の思ひ出にせん
忍ひねも待人からにやなとまで思ひとかめられし暮
つかたからうしてそれかとはかりほのかなる聲を聞
て

あちきなくいつも雲のよそにのみうき身へたつる郭公哉

待わひ侍し夜夢にもほのかに聞侍しかは
思ひつゝぬれはこそきけ霍公またすは夢もかひなからまし

草の庵雨するほと山郭公心ありぬへき折からなれ
は

ふらぬ夜の心はしりつほとゝきす今こそなめ村雨の空
人ことにはや聞侍なといふにも身一つもれぬる心ち
して

物おもふ我にかきらは郭公なかぬもけにそこゝろ有へき
時鳥を

なかぬかなやとふかき夜の郭公たゝなるへき里のあたりを
かれこれ時鳥ははや聞たりやなとたかひにたつね侍
し折ふし樵夫の山より出けるを見て

歸るさの遠山人にことゝはむけふほとゝきす聞やきかずや
〔頭註〕後醍醐帝去年十二月入吉野。

延元二年夏の比伊勢國一瀬といふ山の奥にすみ侍し
に郭公を聞て

深山をはひとりないてそ時鳥われも都の人はまつらむ

螢を

荒ぬれはしける宿の草むらにあつめしよりも 飛螢かな
あしの葉にかくれぬ里のもしほ火や入江にもゆる螢成らん
思ひあれはよしの、河の岩波にはやくももえてゆく 螢哉
池水のいひ出かたき思ひにやもえて螢の身をこかすらん
草ふかみしたゆく水もをのつからありとやこゝに螢飛らん
螢の光かすかにみえまかひて草ふかきやとのあはれ
もしりかほなれは

せめてなとほたるはかりの身をてらす我身の光なき世成覽

山ふかく籠居侍し比木すゑに蟬のなくを聞て

山ふかみ世のひとつもきこえぬに何を空蟬なきくらす覽

納涼のこゝろを人々によませ侍し次に

我宿にかたえさしおほひしけるなるならの廣葉の陰を涼しき

羈中納涼といふことを

秋かせにこゆへき關のちかけれは涼しく成ぬたひの衣手

中院准后みせ侍し歌中に松風の音するかたの山陰は

思ひやるよりすゝしかりけりとありしそはに

深山路は目もゆふかけのうす衣いとふはかりの松風そふく

六月秋をよみ侍し

夏と秋と行かふ浪のみそき河わたりはてねは風そすゝしき

秋歌

百首歌よみ侍し中に立秋を

いつのまに秋はきぬらん夏衣ころもへすして風そみにしむ
けさよりそうらめつらしく吹かへす岡の葛葉の秋の初かせ

海邊初秋といふ心を

浪によるみるめに秋はなけれとも松に音そふうら風そふく

七月七日よみ侍し

まちえつる涙のひまの秋ことにこよひや袖をほしあひの空
代々の秋思へはひさしたなはたのぬる夜の數もさそ積る覽
たなはたにやとくす人やなかるらん天の川原に岩枕する
たなはたは年にまれなる逢ことにかへてやななき契成らん
袖かはすあまのかはらの岩枕浪さへけさはたちわかれつゝ
さまゝ物おもひ侍し比前栽の露をみて

あはれてふことをあまたになかむれは露もくたけて秋風を吹
秋の露なにしら玉とかはるらん涙は草にこかぬものかは

露をよみ侍し

玉とちる露のみたれのつかれをは風吹みたす蜘蛛の糸すち
なへて世にうれへなき身の秋ならはかこちそせまし袖の白露
風かよふ蓬かもとの苔の庭露もしつくもわかれさりけり
いかなりけんあしたにか露をはらふとてよめる

おきてうきこよひの夢の名残かは朝の床の秋のしら露

萩を

そよと吹をとほすれとも白玉を露にこたへぬ萩のうはかせ

山里の秋の氣色やうゝ物かなしう侍しに萩の風を

聞て

今よりは物思へとやおきの葉にあつらへつくる秋の初かせ
夕暮はよきてと思ふ萩のはにあやにくに吹風の音かな

萩風を

ほに出てむすはれにける庭の萩の末葉の露を拂ふ秋かせ
人々に歌よませ侍し次に江萩を

すみのえの松にたくひてひゝく也遠里をのゝ萩の上風

萩の風の吹ける比よみ侍し

物思ふ人の心そおきの葉に風も吹あへぬ秋をしりける
露ならぬ心を萩のうは風にさのみくたけて物おもふ哉
歌よみ侍し次に萩を

しめのゆき紫野ゆき秋はきの花にしほるゝ袖そ色こき

中院准后よみたる歌ともかきあつめて見せ侍し中に
萩の戸の昔の秋の面影に今たにかゝる袖の露かなと
ありしそはに書そへて遣し侍し

いましのふ袖にくらへは萩の戸の昔の秋の露はものかは
同歌に野へみれば秋は千種の花かたみめならふ色に
わきそかねぬるとありしに

花かたみめならふのへの秋草にわすられぬ覽旅のおもひは
又故郷となしてこそみめ宮城のゝ萩の錦をきてもか
へらはとありしに

咲花の千くさにあけるかたへしも萩の錦をきて歸るらん

人々に歌よませ侍しに原薄を

露にふす朝の原の花すゝきまたしきたへの袖かとそみる

羈中百首とてよみ侍し中に女郎花

かりそめの契はうきを女郎花草の枕になににほふらん
旅ねに侍しあたり蘭のほひければ

蘭ぬしきたまらぬ匂ひかな誰もかりねの野へのあたりに

北野に法樂し侍し百首の中に秋夕を

いつちへか心をやりてなくさめむうきはなへての秋の夕暮
物毎に哀しられし秋の夕つかたはなくさめかたくや
ありけん

たよりにあらぬ草木に秋はたゝ心をつくるのへの夕くれ

つゐにあくかれ出侍し野山の道もさこそはつゆふか
かりけめ

いつくにか心とまるとなかわれはみやもわらやも秋の夕暮
夕暮の雲のはたても時雨けりあまつ空なる秋のあはれに
霧を

露深きゆふ暮よりもしほれけりまかきの花の霧の朝明
舟よはふ遠かた人の聲はしてまた夜はふかしよとの川霧
へたて行いなゝの原の夕霧に宿ありとても誰かとふへき
わかきつるかたもしられす立霧にをちかた人は宿りとる覽

おもふこと侍し比虫のなくを聞て

夜もすからねをなく虫にくらへても我やいほねぬ思そふ覽
身にしらぬ思なりせは虫のねをあはれときかぬ折もあらまし
山ふかくすみ侍し比よみ侍し

世のうさをきかしとおもふ草の庵に猶ことしけき虫の聲哉

中院准后のみせ侍し歌の中にかきりなき虫の恨にた
くへてもつきぬは老の涙なりけりとありしに

老てこそ聞はとかむれいにしへの秋のよすから虫や鳴らん

蚕を

きりゝす野はなけれはやね覺する夜半の枕の下に鳴覽
秋の夜は人なき床のきりゝす枕のみしるねをやなくらん
なれも又恨やそふるきりゝすま葛か原の風の夜寒に
人々に歌よませ侍しに岡鹿を

夕つくよさすや岡邊の秋風に霧晴てなくさをしかの聲
鹿を

山鳥のおのへのしかもひとりやはなかゝし夜の月に鳴覽
田家鹿といふことを

雲もなき田面の月のもる庵にいとはれてのみ鹿や鳴らん
羈中百首よみ侍し中に鹿を

音にたてぬ袖さへ露にしほれけり鹿なくのへの秋の旅ねは
百首歌よみて北野社に法樂し侍し中に鹿を
長きよもあかすや鹿のをのか妻こふれとしるしなき明す覽

鹿歌中に

さをしかのつまとふ聲は更にけり今夜の月の空たのめかば
をのかつままつとしらせて高砂の尾上にたてるさをしかの聲
露深きをのゝ草葉をかたしきて今宵も鹿の妻や待らん
をのかつま逢よしをなみ秋の野の尾花にましり鹿や鳴らん
百首歌よみ侍し中に鹿を

めにちかき萩の下葉のうつろふは雲のかりや鳴わたる覽
秋ことに故郷いてゝくる鷹はみやこの月にすみやならへる
夜舟こく音はかりして白浪の跡なき空にかりやなくらん
なく鷹の聲きく秋も忘れぬはかすみていにし恨なりけり

中院准后歌よみて見せあはせ侍し中に誰かはとおも
ふ物からふる郷のたよりまたるゝ初かりのこゑとあ
りしそはに書そへ侍し

故郷のたよりうれしく待えても問へき人やなく鷹の聲

父かきりなくとをくきぬらし秋霧の空にしほれて鷹
もなく也とありしそはに

鷹たにもしほれてそなく越路迄さすらへし身を思ひやら南
越中國にて羈中百首歌よみ侍し中に鷹を

思ひやれ都の空も鷹なけは獨こしちの跡のきひしき
人々に歌よませ侍し次に嶋を

夕霧のへたつるをちはしらねとも鳴たつかたや澤邊成らん

信濃國に住侍し比人々に歌よませ侍し次に駒迎のこ
ころを

みやこへといそくをきけは秋をへて雲むに侍し望月の駒
百首歌よみ侍しに月を

またなれぬ心つくしの木のまよりほのみえそむる秋の三日月
芳野に侍し比月の歌とて

ほかよりも猶まぢかねつ吉野山かさなる嶺を出る月かけ
みよしのゝ山の秋かせ更る夜に古郷かけてすめる月かな
月欲出山といへるこゝろを

いてぬるか光はよそにみえなから松のかけなる山の葉の月
月の歌中に

山鳥のはつ尾の鏡これなれやなかゝし夜の嶺の月かけ
秋風にまよふむら雲もりかねてつらきところや大空の月
なかもつゝ秋とや人も覓なるたかまの山の木間もる月
はつせ山尾上のかねの音するはひはらか奥に月かたふきぬ

野月とて

分きつる野原の萩の枝なからうつしてすれる袖の月影
さすか又限あればやむさしのゝ草葉の末に月はいづらん
夜もすから月はいくらもらて宮城のゝ木の下露や雨とふるらん

原月を

さらぬたに色ことになる故郷のあさちか原に月そかたふく
夜もすから法談なとして曙かたに寺より歸ける道す
から月すさましく鹿の音すみ渡りて面白く侍しかは
露深きうき世の秋をあはれみて鹿の園にも月はやとりき
月前鷹といへるこゝろを

なく鷹の涙なるらし月影に數さへみゆる庭のしら露

河月を

くもりなき玉嶋河の秋の月幾瀬の浪にひかりそふらん
心あるあすかの川の浪なれや七瀬のよとに月やとるなり
天河雲のしからみよはからし光もりいつる秋の夜の月

沼月

かくれぬの下ゆく水はすみなからみくさそ月の隔成ける
池月

さる澤の池のたまもくもらねは月にそうかふ人の面影
月歌の中に

谷水のこほりにまかふ岩まより打いつる浪や秋の夜の月
するかに住侍し比よみ侍し

するかなる田籠のうら浪たぬ夜はあらはや月を氷ともみめ
海邊月を

時しあれは秋なき浪の花の色も月にうつろふ浦風そ吹
越中國なこのうらに忍て侍しに羈中百首よみ侍とて

月を
都にやおなし空ともなかもらん我は行衛も浪の上の月
遠江國に侍し比月歌とてよみ侍し

湊江や夕しほふかくなるまゝに月にそうかふ浦の松原
駿河國にてしはしなれにし人の程へてのちをとつれ

たりし返事に
わすれめや清見か磯の浪まくら關路の月を面影にして

浦月

難波かた浦のもくつをかたしきてしほひに残る月をみる哉
をしてるや難波の秋を身にしめて今夜も月をみつの濱風
わたつ海のおきつしほあひに宿る月のよる方もなき秋の半天

松かけやふけ行まゝにかはる覽月こそめくれ志賀のから崎
跡たれし日吉の神のかけそへて月さへすめるしかのから崎

諏方下宮寶前に通夜し侍りて夜もすから法施たてま
つりしに湖上月くまなくて秋かせもほかよりは夜さ

むに侍しかはよみける
すはの海や神の誓のいかなれは秋さへ月のこほりしくらん

社頭月といへるこゝろをよみ侍し
かたそきの行あひのまより月もりて神さひまさるよはの松風

竹間月といへる心を
窓ちかき竹の葉分にもる月の影さたまらぬよはの秋かせ

山里にかくれ居侍し比月のみよなく友成しかは
山深みうき世に忍ふかくれ家はありとやこゝに月もすむ覽

月いとあかき夜山里にまかり侍しに
さひしさに猶やま柴の夕煙とはれぬ月のかけくもるらん

信濃國大川原と申侍ける深山の中に心うつくしう庵
一二はかりしてすみ侍ける谷あひの空もいく程なら

ぬに月をみてよみ侍し
いつかたも山のはちかき柴の戸は月みる空やすくなかる覽

中院准后見せ侍し歌中にきひしとは太山隠の杉の庵
松の軒もる夜半の月かけとありし誰も思ひしられて

そはにかきくはへ侍ける
杉の庵松の軒はもかはらねは月にそいとと思ひやるゝ

山里にすみ侍し比よみける
草の庵竹のあみとのかりの世に月も心をとめしとそすむ

露しけき草の庵も月かけのみかけは玉のうてな成けり
草庵月とてよみ侍し

秋萩のかりほの軒の露しけみ花のしづくに月そもりそふ
あかたのすまゐも年を經てすみうくのみ覺侍し比月
をみて

月にあかぬ名をやたゝましことしきへ猶更級の里にすまは（る歌）

正平十七年秋住吉の行宮よりことしの八月十五夜こ
そ月もおもしろかりしかいかゝみつらんなどおほせ
られて年經ぬるひなのすまゐの秋はあれと月は都と
思ひたにやれと有しかは御返事に申侍し

いかゝせむ月もみやこと光そふ君すみのえの秋のゆかしさ
月に君思ひ出けり秋ふかく我をはすての山となけく
中院准后のもとよりよみたる歌ともみせ侍し中に幾
里の月に心をつくすらん都の秋を見すなりしよりと
ありしそはにくはへ侍し

さらしな月みてたにも我はたゝ宮この秋の空そ戀しき
同歌かくてなとすまさりけると山さとの月みる秋の
ころをそとふとありしそはに

なくさまぬ心なれはやさらしな月みる里もすみうかる覽
又なにしおはゝ雲ゐの秋の夜半の月外よりもさそて
りまさるらんさ有しに

名にしおふをはすて山に照月も雲ゐの秋をみしことはあらず
月いとあかき夜故郷のかたもおもひやられしかは
後は又旅ねや月に思ひいてん今は都のかたみなれとも
あつまにすみ侍し比月を見て

入をさへおしまてそみる夜半の月山のあなたを都と思へは
中院准后みせ侍し歌中に待もうし山のあなたの里人
になりてそ月はみるへかりけると有しそはに

關こえぬほとや思ひし都人山のあなたに月はまたしと
又猶いかになかられまし物おもふ心のうちを月に
とはれはとありしに

物思ふ心を月もとへはこそおりしも空のかきくもるらん
興國六年秋月をみてよみ侍し

ものおもふことはかはれと秋の月みそちあまりの影は眺めつ
正平（後村上）十二年百首歌よみて北野社に法樂し侍け
る中に月を

大空をてり行月しかこたれぬ身の光なき秋とおもへは
人のすみあらし侍ける宿に月のみ隈なきをみて

庭にみし影は淺茅にうつもれて軒の板間そ月はくもらぬ
月歌あまたよみ侍し中に

時しもあれ身にしむ月の光哉おなし雲ゐに風や吹らん
ひとりぬる身はならはしの秋かせに手枕さむき月の影哉
なかめつるうき身のかけは老もせて月そ有明の空にかたふく

興國二年うかりし八月の空にめぐりきぬれは十五夜
會し侍りし次によみ侍ける

おもひいつるこそその八月の秋の月又くもれとてぬるゝ袖哉
年へて後八月十五夜によみ侍し

うきなから秋の半の月影そなかきわかれのかたみとはみる
なき人の別をあすと思はすはこよひの月はしたはれそせし
夜もすから月をみてよみ侍し

なかむれはうき世中の思ひ出もありける物を山のはの月
興國の比にや月爲秋友といふ心を人々によませ侍し

次に

諸共に三十あまりはすくしきぬ我なへたてそ村雲の月

かくても年をのみかさね侍ければいたつらに月にむかひゐてよみ侍し

我よはひ共にかたふく月なれば身をかくすへき山のはもなし

なかつるに齡はたけぬしかはあれさ猶いつまでか有明の月

信濃にすみ侍し比歌よみ侍し次に擣衣を

信濃なるあさの狭衣よしうたしやつれにけりと月も社みれ

信濃の山さとにすみ侍しに衣うつ音を聞て

よそにのみきし信濃のあさ衣はこの里にうつ物にそ有ける

人々歌よませし次に擣衣を

篠わけしあさのさ衣こよひさへぬきかへかてら月にうつ也

秋風の吹とふきぬる里ことになへてきぬたの音そひまなき

わかうたぬ砧の音のひききてたれか夜寒にぬれさる覽

遠聞擣衣といへる心を

里もなき野原に風のたくへきておほつかなくもうつ衣哉

羈中百首とてよみ侍し中に

みやこには風のつてにも稀なりし礎の音を枕にそきく

秋田を

風渡る田面の末に霧晴て稻葉の露に月そうつろふ

吹はとていなはのそよく音もなし風よりしけき露のおもさに

小山田のいなはの露の袖の上にをくとはなけきもりあかす哉

人々に歌よませ侍し次に初紅葉を

今朝みれば紅葉してけり龍田山昨日の雲やしくれ成らん

杜紅葉を

草かくれ野中の杜の薄紅葉そめはしめたる秋の色かな

長月のすゑつかたうつの山路をこえ侍しに名にしお

ふ秋の山路まことにおもしろう侍しかは

聞しより猶露深しうつの山くれなゐくるつたのした道
うつの山秋行人の袖なからしくれてそむるつたの下みち

山さとに侍ける比紅葉をみて

心さしふかき山路のしくれかなそむる紅葉も我のみそ見る

秋霧のたつや錦のぬきなうすみ紅葉みたれて山かせそふく

末の露もとのしつくのあらそひてをくれ先たち染る紅葉は

遠村紅葉をよみ侍し

しくれ行四方の木すゑを見渡は千里にしける錦なりけり

延元五年八月十六日に先帝かくれさせ給ぬるよしほ

のかにきこえしかともさらに猶まことにもおほえ侍

らて日かすを送り侍しにいつかたよりの風のをとつ

れもおなし悲のこゑにのみきこえしかは一かたに思

ひきため侍るにつけてもいと夢の心ちしてさらて

たにさひしかりし山の奥のすまゐともいかにとお

ほつかなければ長月の末つかた空もれいよりはかき

くもりてわれらか中の時雨もひまなかりける比涙の

色の紅もおなし千しほにやなと思ひやられしかは秋

のもみちとちり／＼にならぬやうに申きたあるへき

よしなと別當資次卿のもとへ申つかはす次に井伊城

にありし紅葉を一つみくして

おもふにも猶色あさき紅葉哉そなたの山はいかしくるゝ

返し

資次卿

此秋の涙をそへて時雨にし山はいかなる紅葉とかしる

かくて二三年もすき侍し後九月はかりに新待賢門院

いまた准后と申侍し比御廟に御籠ありて御らんせら

れけるに山の紅葉おもしろかりければ所からことに

御めひとつにやつしかたくて一葉御文につゝみくせ
らるゝよし仰られしかともひきあけてみ侍しにみえ
さりしかは御返事に申侍し

その山ときくに涙もしくゝは袖をもみちの色とみよとや
こゝまでもふかはふきこてもみち葉を誘ひ捨ける山風をうき
かやうに申侍て程へて御文の中よりみいたし侍しか
は父のひんきに申侍し

もみち葉に涙をそへて見る色は手折しよりもふかきとをしれ
羈中百首とてよみ侍し中に紅葉

いたつらに紅葉の錦きてみれば家路ならてはかひなかり鬼
山里にかくれ居侍し比秋風やゝ吹て山かつのかきほ
あたり荒行にいとゝ物かなしう おほえ侍しにはひか
かりたる葛のはのをのれひとりときはくも哀におも
ひしられて

風わたる賤かかきねにはふ葛のくるしや何の恨なるらん
世のうきめ見えぬ山路の葛の風いかにふけはか先うらむ覽
九月九日菊をよみ侍りしに

幾千代も結ひかさねよ秋の露山ちの菊のほしあへぬまで
老せずは猶とりそへむ菊の花千世もおもふ人のかさしに
菊の露を

あさなゝうつろふ菊にをく露も花ゆへにこそ色かはりけれ
野邊の氣色もおもかはりし侍まゝにいとゝさひしき
夕つかた萩すゝきなとやうの草も秋の霜にむすほゝ
れて花かあらぬかとみえまかふにをのつからのこれ
るしをんりむたうの(露イ)色もむへ山風にのみしほれ
行もあはれにて

なにを世に秋はてぬとて野への草今は限の色とみすらん
暮秋の風をよみ侍し

風はやみ世を今更にくすのはの恨やすらん秋はてぬめり
秋の暮つかた草むらの虫もかれゝに聞えしかは
恨ても鳴ても野への蜚いはんかたなき秋の暮かな
九月盡によみ侍し

人は父けふばかりとや詠むらんうき身はつきぬ秋の思ひを
中院准后よみてみせ侍し歌中におしからぬ我身にか
ふる秋ならはさてくらすへきけふの暮かはとありし
そはに書そへ侍し

なからへん命と身をも頼まねはかへても秋をえこそおしまね
父おしむへきことはりならぬ身を秋のくるゝしもな
とものはかなしきとありしに

身を秋と思ふにいとゝよそならぬけふの別のおしくも有哉
暮秋歌中に

かきりそと思はて過し夕たにたゝやは秋の空はなかめし
けふといへは入相の鐘に木葉ふり秋そはつせの山おろしの風

冬歌

初冬の心をよみ侍ける
神無月しくゝ空のはれ曇りけふは冬ともきためかねつゝ

越中國にすみて羈中百首よみ侍しに初冬を
都にもしくれやすらんこしちには雪こそ冬のはしめ成けれ

物おもひ侍し比冬のはしめをよめる
昨日まで露にしほれし我袖のいとゝひかたくふる時雨哉

時雨を

てりもせすくもりもはてぬ冬の日の空行雲はうちしくれつゝ
神無月のはしめつかた山里にうつろひてよめる

今よりのあはれをしればはつ時雨ふる程よりもぬるゝ袖哉
さらぬたに照目まれなるおく山の谷のかけ道うちしくれつゝ

しくるゝ空をみてよめる

誰里もおなししくれのまゝならてなそしも雲のたえゝに行
冬の夜の夢といふ心をよみ侍し

ね覺して絶々にきく楨の屋の時雨のひまや夢路成らん

中院准后よみ侍歌中にはれくもる程たにもなく山端
の嵐よりふる初時雨かなとありしに

時雨さへ山さとしてやかはるらん宮この空は晴まありしを

又今よりや人めかれなむ草の原霜をきそへて冬はき
にけりとありしに

冬はまつかるゝ人めを歎かなうきみ草葉のなにならね共

山里にすみ侍しに時雨をきゝて

軒はなるならの葉かしは散ぬれば庭に時雨の音を聞かな

曉落葉といへるこゝろをよめる

あか月の夢のかよひちたえに鳧木のはふりしく四方の嵐に

落葉歌中に

さらてたに夕さひしき風の音に木葉みたるゝ岡のへの里

山ははやのこるこのはもなき物をちるはいつくの紅葉成覽

さと人のもみちふみ分跡もなし猶吹まよふ庭のあらしに

落葉混雨といへる心を

有明の月はくもらて山おろしに紅葉吹おろす音をしくるゝ

霜を

わか袖の露より霜となるまゝにはらはてきつる旅衣かな

ある所にかりねし侍しに風いとさむかりし夜
霜さむき小篠かはらのかり枕ひとよをたにも明しかねつゝ

信濃國にすみ侍しにさむきなん都にはかはりたへか
たくやいかゝはすると人のとふらひ侍しかば

かたしきのとふのすかこもさえ侘て霜こそむすへ夢は結はす

なかもふりぬる前栽の草ともゝ今はそれともみえず
なり行もあはれにて

花すゝきなひく葉すゑも霜ふりて我かはあやな袖のさむけさ

けぬかうへに猶をきそへて山かけや夕霜ふかき谷のした草
寒蘆とてよみ侍し

此暮もしほかせさえてひかたなる蘆の枯葉に霜結ふ也

冬月を

いかてかははらひもあへむ初霜の置まとはせる袖の月かけ
ふりそむる尾上の雪もみかゝれて友鏡とや月はみるらん

中院准后よしのにてよみあつめたる詠歌ともとてみ

せ侍し中にいほりさすやとは深山のかけなればさむ

き日ことにふる霰かなと有しそはに書そへ侍し

是よりも吉野の山の山あらしは寒くあらしと思ひやりしを

氷を

にほのうみやこほれる程をかきりにて浦より遠くよする白波

北野社に百首歌よみて法樂し侍し中に水鳥を

おきへにもよらぬ玉ものとことにはうきてきこゆる水鳥の聲

池水鳥といへることを

池水の氷や關と成ぬらんよひゝことのほのかよひち

千鳥を

ふけぬるか佐保の川との清き瀬に月かたふきて千鳥鳴也

越後國寺泊といふ海つらにすみ侍し比夜もすから千鳥をきゝて

あら磯のほかゆく千鳥さそなけにたちるも浪の苦しかる覽

千首歌よみて爲定卿のもとへつかはし侍し

濱ちとり心みえなる跡をしも行末迄となにおもふらん
ふみまよふ和歌の浦ちの濱千鳥はかなき跡は浪もけたなん

雪歌中に

昨日よりたなひく雲もはれやらすつきてふるらし嶺の白雪
よそにみしたかねの雲のさえく我衣手にふれるしら雪
白妙のをとめの袖とみゆるまで雲のかよひち雪やふるらん
露にみし花こそあらめ霜枯の色も残らぬ野への白雪
中院准后みせ侍し歌の中に霜枯はさすかに残る秋の
色を跡みせぬまでふれる雪かなとありしそはにくは
へ侍し

霜枯はなか／＼つらし行秋の跡ふりかくせ野への白雪
同歌に待人の跡みるまでもつもらねとこゝろ空なる
けさの初雪とありしに

積らぬもよしや歎かしはつ雪にまつとはるへき我身ならねは
雪を

かつらきやたかまの山の空はれて雲ぬにつもる峯のしら雪
ふる雪に尾上の松もうつもれて月みる程の木のまたになし
あまの川こほらぬみおに風さえて雪氣にもたつ雲の浪哉
いにしへのかさしおりけん跡もなし三輪の檜原の雪の明ほの
にほの海のかさしにさせるから崎の松白妙にふれるしら雪
禁中雪といふ心をよみ侍ける

ふるまゝに雪の光もそへてけり玉もてしける九重の庭

東路の旅もおもひ出らるゝ事もや有けん

かきくらす雪にそこえしうつ山うつゝか夢か跡も残らす
雪かきくれふる日山里成ける人のなとやとはぬと申
をこせ侍しかは申つかはしける

雪ふかきふもとをみてそ歸にし山には道もたえぬと思へは
初雪ふりていとさひしかりし朝よみ侍し

跡つくる人もありやときえもせてけふはまぢみよ庭の初雪
山里にかくれ居侍しに

山ふかみふりつむ雪をわくらはにとふ人なくて年をくれぬる
いたつらになかめくらしつ侍人のこぬをならひの庭の白雪
今更に何かは跡のまたるらん思ひしことよ庭のしら雪

思ひのほかに柴のとほそを人のとひければ
さすか又雪にとひきて冬籠思ひもかけぬ跡をみるかな

あやしき山かつのすみかに身をかくし侍し比ゆきい
たうふりて庭の籬もあらはなる心ちし侍しかは

れやかこふ賤か篠かきひまをあらみ所もわかすつもる雪哉
あけそめしねやのひまさへ埋れて猶夜深しとふれるしら雪

信濃國伊那の山里にしはくすみ侍しに雪いみしう
ふりつもりて道行ふりのたよりもたえはてにしかは

稀にまつ都のつてもたえねとや木曾のみさかを雪埋む也
曉の雪深くつもりて群山にみてる色もおもしろく侍

しかはいにしへの園のうちも思ひやられてひきかへ
たるすまゐ我なからあはれに覺侍しかば思ひつゝけ
侍ける

かゝる世のためしもいまた白雪にうつもれやせん園の吳竹
わすれめや都のたきつしら河の名にふりつみし雪の明ほの

其まゝのみやかなりせば庭の雪に厭ふはかりの跡はみてまし
こぬまでも雪にそ人はまたれましおなし都の住居なりせば
夢といひけんをのゝ山里もおもひ出られて

をのつから雪ふみわけてとひこしも都にちかき山路成けり
ふしきにも又たちかへる世もあらはとわか心をなく
さめ侍し次によみける

故郷の庭のしらゆきいたつらにわか歸るさのあとやまつ覽
年月すみ侍し所を又あくかれ出しに雪さへふりける
日よめる

いてゝいなは我跡さへや埋れむ住こし宿の庭のしら雪
こしの國にすみ侍し比都の人の許へ申遣しける
雪つもるこしのしら山冬深し夢にも誰か思ひをこせん

かくて猶年をかされし冬の比よみ侍し
何ゆへにゆきみるへくもあらぬ身の越路の冬を三年へぬ覽
中院准后よみ侍し歌ともの中に故郷のよし野のみゆ

きふみ分てむかしにかへる跡を見えけるとありしそ
はに書そへ侍し
芳野山昔にかへるためしにば今のみゆきの跡をたつねん

おなし歌にふみわけてとふ人あらはふりつもる雪よ
り深き跡はみてましとありしに
心さしふかくふりつむ雪なれととふへき人のなきそ悲しき

山ふかくすみ侍し比さらに雪のみふりつみて月日の
行衛も覺す侍しかは
谷深き雪の埋木までしはしあはてはつへき春ならなくに

鷹狩を
まゆみちるあたちの原を踏分て鳥たち尋ぬる野へのかり人

御かりする野守の鏡かけもなしこほれる程や曇るといふ覽
としことにやとをかりはのさゝ枕一夜もさむしあまの川風
かれこれいさなひて狩にまかりて日暮ければよみ侍
し

きゝす鳴かた山かけにうつる日の残る程とやかりくらす覽
みかりするつかれの鳥のおち草に猶ふみまよふのへのさゝ原

中院准后みせ侍し歌中にうちむれて猶かりゆかん野
へとをみくれなは草の枕ゆふともとありしに

野へとをみ歸るさまにも狩ゆかんくれなはなけの草枕かは
蜀中百首歌よみ侍し中に鷹狩とて

日くるれは狩はの小篠枕にて霞玉ちるたひねをそする
歳暮のこゝろを

おしむからかつそ戀しき行年のことしはこそに成ぬと思へは
かくしつゝとにもかくにも年月の暮るはやすき物にそ有ける

うき身にはやすくも過ぬ月日さへつもれはさすかくるゝ年哉
つきせぬ身のうれへし侍ける比歳暮といふ題にて

きのふといひけふと暮すも涙にてとまらぬ年を袖にせく哉
徒に過ぬとおもへは思ひいてのなきにつけてもおしむ年哉

おしむにもよらぬ別もある物を何とし月の身につもるらん
中院准后みせ侍し歌の中になけきつゝ暮ゆくさしを

世にふれはなをいそくとや人のみる(いふ)らんとあ
りしそはにかきそへ侍し

あらたまる春には誰もあふやとてうきにもいそく年の暮哉
今上いまた吉野行宮にましゝける比にや歳暮歌よ

み侍しに
あしかきの吉野の里の冬こもり難波の春のためしにそまつ

李花集下 宗良親王御集

戀歌

百首歌よみ侍し中に

思ひ侘たかまの山に分きても猶よそにみる峯の白雲
 夕くれはまたみぬ人をこふるかな雲のはたてを俤にして

初戀の心をよみ侍し

煙たつにゐ鳥守かときまやかといつよりかくはくゆり染けん

戀百首とてよみ侍し中に

ふしのねやたえぬ思ひの夕煙きえなてさのみ何くゆるらん

中院准后歌みせ侍るとてさりぬへきにはかならずう

たをそはによみくはふへきよし申たひたりしに富士

のねにまさる思ひのはてそなき戀の煙は空にみえね

ととありし所に

我つゝむ胸のけふりの立出て曇りふたかり空もみえしを

寄山戀を

よそにたにみるへき物をいもせ山隔なはてそ中の川霧

戀百首歌よみ侍し中に

袖にをくならひも今やしらるらん思ひ入野の秋の白露フイ

武藏野の露分わひし袖ならていつか戀路にしほれきぬらん

羈中百首歌よみ侍し中に戀の心を

これやさは戀路なるらん旅衣露はかりとは見えぬそてかな

しられしなふしのたかねの雲かくれむせふ煙は空にたつ共

信濃國あさまの山ちかきわたりにすみ侍し比

あさましやあさまのたけも近ければ戀の煙も立やそふらん

忍戀とて

から衣むねのあたりにたつ煙末をは富士のたかねともみよ
 夜とゝもに胸をそこかす烟たちもゆとはみえぬ思ひなれ共
 しのふてふ心のおくのすり衣色こそみえぬみたれそめつゝ
 人のもとへ交つかはし侍し次に

いかにせむ忍ふの浦のもしほ草かきやる浪のひまたにもなし

羈中百首よみ侍し中に戀を

人しれぬ心のおくのしるへには忍ふの里もかくれさりけり

北野宮に百首歌よみて法樂し侍し中に忍戀を

いかにせむ瀧津涙のしからみもかけてせくへき袂ならぬを

忍戀さて

いかてかは尾花か本の草の名の思ひありともほにはいつへき

今はたゝ袖の涙ももらしてんそをたに人のつらき名たてに

戀歌よみ侍し中に

しのふるも猶人しれぬ心哉もらさはかくやくるしかるへき

寄虫戀を

枕にもしらせぬ物を蝨あなかま夜半の聲なとよみそ

忍戀さて

いかにしてこの瀬包まむ涙河うきにはいさゝ名社おしけれ

思はずよしのふにたへぬ我命憂名にかへてなからへんとは

伊勢の海の千尋の底にうちかはへてくるとしらすなあまの釣繩

年を經し楨の下葉の露なれはぬれても色にいてぬ成けり

寄琴戀を

しらせはや君かきかなすことの音に松風ならてかよふ心を

人のもとへ申つかはしける

しるしなき心の杉をたよりにて思ひそやりし三輪の山本

尋戀

尋ねつる杉のしるしはかひもなし人の心をまつとしらねは
中院准后みせ侍し歌の中にわきも子か手染の糸のよ
るへなみこなたかなたにかけて戀つゝとありしそは
に

思ふそよこなたかなたにわきもこか手染の糸の色深くのみ
戀歌とて

寄河戀

流れてはふかさそまさる涙河あふ瀬ありやとたのみし物を
中院准后歌に君こふる涙かたしきねてしより枕のし
たはふちとなりనికిとありしに

流れても我みなかみのなかりせば涙の淵よあせやしなまし
戀歌の中に

戀すとしてわれにもあらぬ我心たかため誰を猶しのふらん
寄糸戀とて

いまたにも人の心はしら糸を経てみまほしく何おもふらん
程ちかく侍し人のもとへつかはしける

あしかきのまちかきほとにかつみれとうときは人の心成鬼
戀の歌の中に

ぬれてほす袖の涙の露のまも猶きえかへり物を思ふよ
ことはりと思はゝ人もつらからししらはやせて世々の報を
みさこゐる荒磯浪もかくはかり心ひとつにさはかれやする
古のちぬの丈夫なかりせは戀のためしに我やならまし
をとせさりける人につかはしける

吹風のたよりはありときく物を雲路なればやふみゝさる覽
片思といふことを人々によませ侍し次に

もろともに思はゝなにか歎へき戀をはかゝるものとしらすや
羈中百首歌よみ侍し中に戀を

へたてこし遠山鳥の獨寢に都をこふるねをのみそなく
寄山鳥戀を

かきりあれは遠山鳥の契たに尾上ひとつのへたてとそ聞
戀百首歌よみ侍し中に

難波かたしほひのありそ尋てもかひこそなければ袖はぬれつゝ
思ひ川なかるゝ水のあはれともいふ人なしにきえかへりつゝ

つねよりもまさると見しは我袖の涙なりけりよとの澤水
我心つたのほそ江をこく船の君にそよせしうらかくれても

不逢戀とて

よそにのみいはれの池のねぬ繩のねぬなはなとて苦しがる覽
ほしやらて猶やかさねん草枕ゆふてはかりの露のぬれきぬ

寄夢戀を
思ひねの夢はかりこそ海となる枕のしたのみるめなりけれ

中にあるし夜半の衣のそのまゝに月日重ねて猶へたてつる
寄衣戀を

戀百首歌よみ侍し中に
人しれぬ心はかりをへたてにてうちとけかたき下ひもの關

おなし世につれなくなからへて侍よしなと人に申つ
かはす次に

あふまての命と人にしらせはや戀しねとてそつれなかる覽
不逢戀を

涙川なかれて戀んかひもなしつゝにあふせもしらぬ身ならば
後の世に此むくひとてつらからむわか心さへうき契りかな
とへかしなあはての浦にしほたれて年ふる蜚の袖はいかにと

寄鷹戀といへるこゝろを

逢事はかた野の鷹のかたかへりいかゝはすへき戀の繁さを
信濃國伊那と申所に侍て人の許へ申つかはし侍し
山たかみ見つゝわかこしはゝ木々のあはてふせやに迷ころ哉

寄山戀を

かひなしな渡らぬ中を河とみていもせの山に年をのみへは

おもへともつらき人に申つかはし侍し

さりともたのむ心のうらさへにあはてはつへき身の契哉
いかにしてゆき逢坂の道なればまたこえぬまの苦しかる覽

蜀中百首歌よみ侍し中に

いさや又しるもしらぬも逢坂の關路ときけはたのまれぬ哉
中院准后みせ侍し歌中に逢坂もこえはこゆへき道な

れとつれなき人を關は守けると有しに

いさや又こゆともこさし逢坂も憂身のための關路なりせば
心地れいならず侍ていとこゝろほそくおほえし比人

の許へ申つかはしける

いとせめておしき此世の名殘哉あひみぬさきの別と思へは
ひとをうらみ侘てよみける

うき身先消ましものを行水のあはれとたにも人にきかれは

我はかり先戀しなはこん世にも人をまつまや久しかるへき
戀百首歌よみ侍し中に

沈むへき身をも心に任せねは思ひますたのいけるかひなし

なりともなとかけていひ侍し人の返事に申遣しける
なからへてこれを頼むにかたければ露の情をいとゝかひなき

中院准后みせ侍し歌の中にいたつらにすくる月日を

せめてなとまてとはかりもちきらさりけんとありし

に

ありへはと思ふはかりにたのめかしまてと契らぬ月日成共

戀歌の中に

せめて唯身を離れ行我玉もこれなんそれとしられたにせよ
中院准后みせ侍し歌の中にいかにせんみるめはへい

からてあま人の浪かけ衣下に朽なはと有しそはに

朽ぬたゝふかき恨にしほたるゝみるめも浪のあまの衣手
又なをさりのことの葉ならはいかにせん命にかけて

たのむ契をとありしに

なをさりの契にたにもなれぬれはいふを誠とたのむばかりそ
憑戀といへる心を

たゝ頼めいのちはあすをしらすとも契は世々にくちん物かは

契久戀を

かくはかりたへて有へき命ともしらてや人のたのめ置けん
不逢戀を

ことのをはたのめし程のなくさめも憂になれてはなき契哉
契戀とて

をのつからさはるといひしよなゝや契し中の誠なりけん
偽も思へはこそは契けめつらくはたゝにやみぬへき世に

先の世の契も猶そたのまれぬいひしまゝなる習ひなけれは
行末をのみたのめ侍ける人の許へ申つかはし侍し

まてといはゝまつへき物か玉のをのみしかき心思たえなて
待戀の歌中に

待戀の歌中に

難波江のあしまをさして行船のイりさてやはとまるさはり有とて
早き瀬に棹さしとめぬ筏士の猶このくれもすくしてよとや

待空戀といへるこゝろを

楨の戸をさゝてまちつる宵々も誰もる關に父さはるらん
いつよりは猶あやにくに頼まれて更行鐘そうたかはれける
羈中百首歌よみ侍し中に戀を

誰をかはまつのした根の岩枕行衛をたにも人はとはぬに

中院准后みせ侍し歌中におもひ侘父や契らん僞もた
ひかさなれはたのみなけれどとありしに

僞のかさなる夜半をかそへてそ猶ざりともと人はまたるゝ
待戀とて

わひつゝもねられぬ月の有明につれなく待し程そしらるゝ

北野宮に法樂し侍し百首歌中に夢中契戀を
はかなしや我身に糸のよるの夢あふとはすれと現ならねは

別戀を

面影のともに立いてゝ別れなは何か身にそふ形見ならまし
鳥のねをなにかいひけんあか月のわかれは人のこゝろ也鬼

したひかね別もやらぬ衣々に鳥の八聲をかさねてそきく
何か又いけらは後と契なん身にかへてこそおしきわかれを

うねの野のたつの一聲鳴わかれ又もあふみと頼めてそこし
いかなる夢の名残にてか有けん人の許へ申遣しける

夢たにも忘れかたみは有物をありし現のさてややみなん
中院准后みせ侍し歌中にそのまゝにたえなはいとゝ

うかるへき一夜の夢を人にかたるなと有しに
それをたに思ひ出して忘れぬ一夜の夢を人にかたらん

戀百首歌よみ侍し中に

これやこのゆめてふ物の行かよふ涙の床のうたゝねのはし
思ふより外なる心かよふらしうちぬる人の夢の枕に
ねてもみえねても忘れぬ面影を夢計にはいかゝなすへき

かはらしといひしは夢かゆめにてもなとあふことの
見えすなりぬるととひたりし人の返事に

契しは夢ならはこそ夢にてもせめてみゆやとまとろみもせめ
祈戀とてよみ侍ける

はかなくそ人の心にまかせけるいのるにたにも難き逢瀬を
我そ祈る人の心のおほぬさをひくてあまたに神はうくなと
千早振神てふ神もうき人のおなし心に成にけるかな

中院准后の歌の中にことはれよ神々ならはゆふたす
きかけてちかひしすゑのことはとありしに

誓ひしも神ことはらはいかにせん人うかれ共思はさりしを
戀百首歌とてよみ侍し中に顯戀

涙川くるの八千たひ思へ共なかれし名をはせくかひもなし
いかなる事にかもれけん人のうらみ侍しかは

はゝそ原かつ散そめし言のはに誰かいはたのをのゝ秋かせ
顯戀を

思ひわひ我名もよそに立に鬼人のつらさのとはすかたりに
憂そとよ浪うつ岸のそなれ松いつのしたねにあらはれぬ覽

はし鷹の野守の鏡くやしそ戀すさ人にしらせ初けん
羈中百首歌よみ侍し中に戀を

思ふ人ありといはすはすみた河ことゝふ鳥の名をも頼まし
歌よみ侍しつてにおなし心な

とはゝやな心のうちも宮こ鳥わかおもふ人の我やおもふこ
寄笛戀といへる心を

笛竹の一よのふしの遠ければねもなれかたき物にそ有ける
物いひ侍し人のさらに又つれなく也侍しかは申つか
はしける

逢ことにかへんといひし命をや今はたえねと人のまつらん
寄露戀を

あたにのみいはれののへのしら露を誰契にかむすひ置けん
うつろはむ物とそたれも白露のことはことに心なかれし
紅葉のうつろひたるを人のもとへつかはすとて
かはり行ことのはにこそ色みえぬ心の秋も先しられけれ

戀百首の中に

くみてこそ變るもやすくしられけれ野中の水のもとの心は
うつり行けしきの森の色をみよこは大かたの秋のいろかは
身にそしむいまはの心つくは山みねよりおろす秋の嵐に
なへて世のさか野の秋の風ならは身にしむとても歎かきらまし

わすれ草を一葉つゝみて人のもとへつかはし侍とて
忘らるゝ身をおなし名と思はすはなにか軒はの草もうか覽

戀歌の中に

蓬生の庭のかよひち中々にたえははてなてしけるころ哉
もえこかれ蜚のもしほ木こりすまに又もなき名をたつ煙哉
うつろふは我身ひとりか玉葛はふ木あまたの色をみせはや
うかりける誰ことのはのかはる覽はては歎きの杜の時雨に
數々にみならつろはゝいかゝせん信田の杜の千枝の言のは
たのまれぬ人のもさへ申つかはしける

偽のことはにのみきゝなれて人のまことそなき世成ける
ふるき扇のみえけるにかきてつかはしける

君か手にならず扇やわすらるゝうき身の秋のたくひなる覽

松風のあやしく吹たてゝいと心すこき夕つかた琴の
ねほのかにきこえける所へ申つかはし侍し

今はとて思ひたえにしことのねにたか松風の又かよふらん

寄澤戀を

契しはあきゝは沼の草かくれ影をたに見てたえはてよとや

寄月戀を

思ひいてよかたみはをのか物ならぬ雲のよその山のはの月

人の許よりこよひの月はみるかとお侍し返事に

是ならぬ忘かたみも有物を月はなかくめしくもりもそする

中院准后歌みせ侍しにかよひこし人は軒はの夜はの

月たのまぬまつの木のまにそみると有しに

月そすむ人は軒はの木のままにも思ひ出れはたゝまつの風

又うき人はおもひもいてしひとりわか心をやりてみ

つる月かなと有しそはに

わか心たくふとしらは影やとす月さへ人にいとはれやせん

人々に歌よませ侍し次に久戀といへる心を

をのゝえはつれなき中に朽ぬれと猶こりはてぬ我なけき哉

をのつから思ひいつやとまたれつるその年月も今は過にき

命たに猶なからふる物ならは人の心のはてはみてまし

戀百首の中に

年へぬる宇治の橋守なかりせは何をたくひに待わたらまし
みちのくのとつなの橋のくりかへし契し末もたえやしぬ覽
うからまし一夜ふせやの契にてそのはらとたに思ひ出すは
越中國にて羈中百首歌よみ侍しに戀を

今そうきおなし都のうちにては心はかりのへたてなりしを

こしちにはしほのみちひもなき物をいかなる袖の恨なる覽

寄鏡戀とて

なとつらき心のわれにかはるらん人をみる社鏡とおもふに

戀の歌の中に

さすか我心にかなふ物とてや命はかりのうきにたへけん
つらからは誰もさこそと思ふたにおなし心になき契り哉
陸奥のあつきのまゆみたかひけは思はぬかたに心よすらん
朽はてん苔のしたにも露をきて此世なからの袖はかはかし
たよりあらはうらみもやらん水くきの岡の葛はの秋の初風

恨戀を

数々に恨はてゝもから衣涙は袖に猶のこりけり
夫をたに人のつらきになしはてゝ憂身の咎をしられすもかな
いかにせむうきを怨むる時たにも猶したはるゝ心よはさを
うらみかねて人に申つかはし侍ける
いかにせんいはれは胸にみつしほの心のうちのからき恨を
恨戀の歌の中に

いまはたゝ涙にかこつ色をみよいひしに勝る言のははなし
人そうき憂は我身の數ならぬ世のならひそと思ひなしても
秋と吹風のやとりはうき人の心なりけり行てうらみん
よしさらは我か人かと辿らせて元の憂身としられすもかな

雑歌

歌よみ侍し次に曉鐘といへる心をよみ侍ける
をはつせの鐘のひゝきぞ聞ゆなる伏見の夢のさむる枕に
夢の世に重ねてゆめなみせしとや屋上の鐘のおとるかす覽
曉を

いまばとてたゝよふ嶺の横雲に有明の月もかけまよふなり
中院准后みせ侍し歌の中にね覺して思ふもかなし有
明のつれなき物と身こそふりぬれと有しに
同じ世に猶有明のつれなくはなれし雲るにめぐりあはゝや

窓灯を

消殘る窓のともし火そむけてもともにあはれむ人やなか覽
松をよみ侍し

徒に世々にイはふるとも高砂の松はわかこと物はおもはし

中院准后歌にはるかなるさとのつゝきは木かくれて
まつの色よりくるゝ山もとと有しそはに書そへ侍し

夕月夜さすかにみれはをかへなる松の葉こしに里も有けり
又見し世こそ猶戀しけれ小倉山かけの庵の庭のまつ
風とありしに

むかしみし人はいきとやうらむらんすまで年ふる庭の松風
又みし世にも心かよはゝ武隈の松ふく風のをとつれ
もかなとありしに

吹風のたよりあれはそ武隈の松とも人の聞わたるらん
又雲のうへのともとおもひし哭竹のその世にもあら
て身こそふりぬれとありしに

雲の上に契やをきし河竹のなかれて末の代をたのめとは
又いにしへの竹の園より家の風吹としふかはよゝに
かはるなとありしそはに

言のはもしけくなるらし哭竹のそのより風の世々に吹きて
ふるさとの事なと思ひいてられて
行末を契ていてしそのゝ竹よゝはふるともあるしわするな
竹を

憂ふしは茂からてこそなよ竹くれイの代になかゝれと身を思ひしか
今はわか友とたにみす窓の竹むかしなからの色しあへねは
おひかはる竹のふるねそあはれなる世々の昔を聞につけても
和歌會し侍し時山柳を

柳葉の枝さしかはす神かきのみ室の山はときはなるらし
麓柴とて

さひしくもむすふ麓の庵かなま柴こりたく便はかりに
簷忍草を

をしなへて昔をしのふ草ならば軒ははかりに何しけるらん
路芝

ふる郷の道のしは草しはしとて出こしまゝの跡やたえなん
沼蘆を

あしねはふ玉江の沼の水鳥はしたのかよひもやすからぬ哉
中院准后みせ侍し歌の中に世間よふるからをのゝい

つかさはもとみしまゝにかしは木の杜と有しに
君ひとりふるからをのゝもとかしはもとみし人と頼む斗そ

伊那にすみ侍し比よみ侍ける
ありともあるかひもなき帯木の伏屋にのみや年をへぬ覽

住侍しあたりの山かつのすまゐもみならはぬことのみ
みおほく侍し中にもこかふわさんいともつかしく
くはこきたるあたりもまことに所せけに見え侍しか

は
厭はしな親のかふこのいふせさもかゝる伏屋の習ひと思へは
中院准后歌みせ侍し中になけかしな山としたかくな

り行もせめて道あるためとおもはゝと有しに
君か代に山とし高くなる人を誰かはよそにあふかさるへき

又いつかたも道ある御代のちかければ又もこえなん
白河の關とありしそはに

道あれは又もこえなんと誰もみなけに白川の關路まさしき
名所關を

君か代にあふ坂までといそけとも關の外なる身こそ老ぬれ
あつまちと聞しなこそその關をしも我故郷にたれかすへけん
名所山を

東路やいつれ都のさかひそとはねとしるきあふ坂の山
伊駒山おほえの岸のたかければたえすそ雲の浪はかけゝる
名所野

武藏野の草葉にのみそ啣たるゝ同しゆかりのなきに付ても
心ほそく覺侍し比ことにたつきなき心ちして讀侍し

武藏野の草のゆかりも遠ければ露消ぬともたれかつけまし
名所川

今は世にありともいふな名取河その名もつらし瀬々の埋木
最上川しはしはかりと思ふ身をくたしなはてそせゝの稻舟

古は誰も宮こにすみた川われにことゝふともゝあらなん
こゝにのみすみた河原のわたし守都にありし人はあらしな

飛鳥川きのふのふちもけふの瀬も我身ひとつにうき沈みつゝ
遠江國に侍し比三河國より足助重春しきりにさそひ

侍しを猶おもひきたためぬよし申つかはして
一すちに思ひきたためぬ八橋のくもてに身をもなけく比かな

ことにふかき山路にひきこもり侍し比よみ侍し
すみなれて人めをたひと思ふたにさひしきたへぬ松の風哉

山深みしはしもかくてありぬやと心みかてら月日をそふる
世のうきにたへぬ心のまゝならば猶山里もすみやうかれん

中院准后歌みせ侍し中に是もみな忘かたみに成ぬへ
し思ひの外の柴のかりいほと有しそはに

しかりとて心なとめそ此頃のしはしはかりの柴のいほりに
同歌に山深くむすふ庵もあれぬへし身のうきよりは
はイ

世をなけくまにとありしそはに書くはへ侍し

山深くすむ人さへにいつる社かしこき御代のしるし成けれ

又すみはつる習ひそかたきうきみにもくみてしられ
し(るゝい)山の井の水とありしけにいにしへの白河邊

のすみかあはれに思ひ出られてそはに書くはへ侍し
くみてしる君か心のふかけれはすまで出ける山の井の水

又のかるとて庵結ひし山の井のすみはてぬるそけに
をろかなるとありしに

山の井も浅かりけりな明らけき御代には更にかくれかもなし

また山里は思ひやるこそさひしけれすめはこゝろも
すまるゝものをとありしに

すめはこそすむともおもへ山里にすまぬ心やすみうかる覽

同歌によそにきゝあらましにせし見よしのゝ岩のか
けみちみぬくまそなきとありしそはに

思ひきやつかへなからにみ吉野のおくより奥を尋ぬへしとは

山里にしひてこもりぬ侍し比猶みち行ふりのたよ
りもしけくなと申てふかき山にうつろはせ侍し時よ

み侍し

山にても猶うき時のかくれかはありける物を岩のかけみち

人々に歌よませ侍次に山家雲といへる心を

吹拂ふ松の風たになかりせは軒はも雲にうつもれなまし

田家を

春秋の賤かしわさもなれてみつ田面の庵に年をへぬれは
あれにけり小田の假庵すむ人の有をみしたに淋しかりしを
うき世には秋風立ぬおくてもる山田の假寝あはれいつまで

歌よみ侍し次に故郷山を

むかしとてみしも昔に成にけり今はよそなる志賀の山越

吉野にすみ侍し比よみける

みよしのゝふる郷人も君すめは又にきはふる時にあふらし

正平十五年東國の凶徒とも河内國にせめ入て行宮も
あやうく聞えしかはなにともしてひとつ所へなと思

ひ侍しかともふとはかなひ侍らて心くるしうきゝわ

たり侍し程なうもとのことくにうちしたかへられて

あまさへ御入洛あるへきにて住吉へうつろはせ給程

信濃よりとく力をあはせてせめのほるへきよしおほ

せられしに秋冬までに成にければをそく侍とていつ

までかわれのみひとりすみよしのとはぬ恨を君にの

こさんと仰られしかは御返事に奏せさせ侍し

わかいそく心をしらはすみよしのまつ久しきを恨さらまし

冬の程は馬のあしなとも木曾路のこほりになんきな

るへきよし申とて

木曾路河あらしにさえて行浪の滞るまをしはまたなん

羈中百首歌よみ侍し中に

さのみやは身のうき雲のさそはれん人やりならぬ四方の嵐に

おほつかないかななる山そみ吉野の奥たに人のつてはありしを

たちかへり又はみるとも鏡山ありしにもにし年經ぬる身は

日數のみかさなる山のたひ衣あらしも露も袖になれつゝ

東路やさやの中山こえくれはかひのしらねそ雲かくれゆく

その原やふせやの床の露けきにきそのあき衣ほす隙もなし

徒につなかぬ船のわれよさはいかなるえにか朽んとすらん

湊江やよせてはかへる浪のまにさしをくれしといそく舟人
かち枕夢路はかよふ舟もなしねぬ夜の浪の音はかりして

たひねしてわかるゝ嶺の曉を横雲のみと人やみるらん
つらからぬやとこそなけれ草枕野にも山にも結ひきぬれは
きかさりし嵐をさむみ旅衣こゝのかさねのうちそこひしき
かりの世にかりのやとりを問かねて旅よりたひの身を歎哉
人にわかれける時よめる

露わけぬ人もや袖をぬらすらんとまるは行をおしむ別に
いとひきて待みちに出てよみ侍し

旅の空うきたつ雲やわれならんみちもともしも嵐ふく比
露ふかゝりける野にて風さへ身にしみ侍しかは

ほさてねし昨日の露もはらへとや朝たつ風の袖にふく覽
なかつの比一年すみ侍ける所を立出侍とて

時しもあれ秋や別の草枕このたひはたゝ袖そ露けき
雲井はるかに成ぬるかたをかへりみて

いとせめて心もゆかぬ旅なれと日数は跡をへたてつるかな
中院准后みせ侍し歌中に白雲の八重にかさなる山に

たにころもへすしてやつれぬる哉と有しに
おもひやれ年をかさねし旅衣ころもへぬたにやつるゝ物を

旅歌中に

わたつ海とあれにし床のたひ枕わかため拂ふ松の風かは

これよりはむけに都もちかき程なりなと申侍し所に
て思のほかにさはる事ありてその夜しもふるさとも
夢に見えければ

草枕さすかみやこのちかければ行てそかへる夢のかよひ路

延元四年の春にや遠江よりはるゝのほりて都へと
心さし侍しも御かたのいくさやふれにしかは吉野行
宮にまいりてしはらく侍しかとも猶東のかたにさた

すへき事ありてまかり下へきよし仰られしかはその
秋の比かへりて井伊城にてよみける

なれにけり二たひきても旅衣おなしあつまの嶺の嵐に
かくてしはゝすみ侍ける所の柱に書付侍し

あつまのあさ木の柱かりそめに思ひなからや住なれに劔
あるところの障子にかきつけ侍し

たひ衣へにける年をあはれともなれぬる里の人はいしるらん
暮行山路のはるゝと心ほそくおほえ侍しに松の一

木たてるも峯の雲ゐにしるくみえける折から哀にて
をちこちのたかねにみゆる一松歸るさまには道しるへせよ

木曾路をとをり侍しにたゝ河音のみたかく岩にむせ
ひて浪の氣色も心ほそう侍しかは

きそち川うつたへ瀬々の浪ならは行めぐりても立歸らまし
忍ひて美濃國までまかりのほり侍しかとも都へもは

はかりおほく又跡へもかなはぬことなん侍て犬山と
いひし所よりなるみの浦ちかくいて侍しに山ちには

引かへて海つらの住居もめつらししく覺侍しかは
山ちより磯邊の里にけふはきて浦めつらしきたひ衣かな

佐良科の里にすみ侍しかは月いとおもしろくて秋こ
とにおもひやられしことなと思ひ出られければ

諸共にをはすて山をこえぬとは都にかたれさらしなの月
中院准后よみ侍し歌中に常陸國にてのうたにてや有

けん都にて月まつとせし山のはゝいく重こえてもか
はらさりけりとありしそはに

つくは山かけしけゝれは東路の道のはてまで月やまつらん
又露にぬれ霧にしほれて足引の山分衣ほすひまもな

しとありしに

分てみぬ山路の袖の露ならはほさぬと聞ゆかしからまし
又草枕たひといふへき程もなし十とせあまりををく
りむかへてとありしそはに

すめは又いつくも君か都にてたひとは誰もおもはさらなん
旅歌中に

立田山夕つけ鳥も聲す也夜半にこえつる道やはるけき
ありま山ゐなの篠原行暮て一よのやとに嵐ふくなり

なるみをとをり侍しに折ふししほさしてこゝをはい
かかなと人の申侍しかは

なるみかたしほのみちひのたひ毎に道ふみかふる浦の旅人
海路の心をよみ侍し

暮行はうらく船の湊人に夕波たちてしほかせそふく
延元四年の秋の比にや伊勢より船にのりて遠江へ心

さし侍しに天龍のなとかやにて浪風なへてならす
あらく成て二三日までおきにたゞよひ侍しに友なる

船ともみなこゝかしこにてしつみ侍しにからうして
しろわの湊といふ所へ浪にうちあけられてわれにも

あらず船さしよせ侍しに夜もすから波にしほれてい
とたへかたかりしかは

いかてほす物ともしらすとまやかた片敷く袖のよるの浦浪
旅の歌とてよみ侍し

秋風の吹にし日よりかそふれは關よりおくも道そはるけき
中院准后みせ侍し歌の中に行ききは夢にもみえすふ

る郷にかへる心そ身にはそひけると有しそはに
夢たにも人にしられはよるは行ひるはかへるとみえまし物を

いみしうおそろしき山中にまとひて夜もすからつか
れ侍けるにや松風にもさはらすうちまとろみしに昔
の御面影夢にみえければ驚て思ひつゝけ侍し

ひとり行旅の空にもたらちねの遠きまもりを猶たのむかな
芳野の行宮を他所にうつさるゝよしきこえしかは先

朝の御なこりも猶遠さかる心地していかなること
かなとさまゝなけき申侍しついでに

たらちねの守をそふるみ吉野の山をいつち立はなるらん
御返し

ふる郷となりにし山は出ぬれとおやのまもりは猶もある覽
とにかくに旅のうさも一かたならすおほえ侍し頃

旅の空にか戀しき故郷はすみうくてのみあくかれし身に
興國三年越中國名古といふ浦に忍てすみ侍し頃都へ

行人のありし便宜にやよひの比にや爲定卿のもとへ
申つかはし侍し

いたつらに行ては歸る鷹はあれと都の人のことつてもなし
今は又とひくる人もなこの浦にしほたれて住あまとしら南

返し
ねになけはそれとはきかて行鷹にことつてなしと何思ふ覽
あゆの風はや吹かへせなこのあまのしほたれ衣うらみ残さて

信濃國伊那と申山里にとしへて住侍しかは今はいつ
かたの音信もたえはてゝ同世にありともきかれはや

なとおほえし比よみ侍ける
我を世にありやとはしなのなるいなとこたへよ嶺の松風

月日のひかりはかりは見し世なからのおなし空とお
ほえ侍けれは

たのむそよ照行空の月も日も我みそなはせ光けなくに
嵐にまよふ浮雲も我身のよそならす覺侍しかは

吹はらふ嵐をいたみ中空にうき立雲は我身成けり

大河原と申侍し山の奥をも又立いて侍しに行末もい
かかなと申て香坂高宗なとしきりにとゝめ侍しを猶
ふりすてゝ出侍しにそなたとおもひしかたも又さう
ゐする事ありしかは中空にたゝよひし比よみ侍し
暫したに吹ぬまもかな風の上に立ちりの身のありか定めん

さのみかくわれにもあらすあくかれゆく身のしきな
けき侍けるころ月を見て

月も又同し空をそ行めくるさのみや旅のやとをとふへき

駿河國貞長か許に興良親王あるよし聞てしはしたち
より侍しに富士の煙もやとのあさけに立ならふ心ち
してまことにめつらしけなきやうなれと都の人はい
かに見はやしなましとまつ思ひいてらるれば山の姿
なとゑにかきて爲定卿の許へつかはすとて
みせはやなかつたらはさらにことのほゝ及はぬふしの高ね成鳧
返し

思ひやるかたさへそなき言のはの及はぬふしと聞につけても

同比忠雲僧正かもとよりいかにもしてくたりてひな
のすまゐみるへきよし申をこせたりしかともむなし
く月日すくし侍しかは申つかはしける

清見かた浪の關守ひまもあらはまつとはつけよみほの浦風
かくて又の年の半まですみ侍しかともさすか又我世
へぬへき所にもあらねはこゝをも立出侍らんとせし
に狩野介貞長なとやうのものとも夜もすから名残お

しみてさかつきたひゝめくり侍し程過こしかた猶
行末の事まで二心なきことなと申あつめつゝはては
ゑひなきなとせしかはいつの程よりのなしみにかと
あはれに覺えて出さまにそこのかへに書をきし

身をいかにするかの海の沖の浪よるへなしとて立はなれなは
かしこをは夜ふかく出侍ておきつといふ所は曙かた
に成ぬるに霧もたえゝに成てゆたゝ見えたるいほ
さきの松原はさなから海の上にのこれり吹はらふ風
のけはひもすさましきにいつて船のはやく過るも波
の關守にはよらぬかと見ゆ月是有明なれはあくるも
しらすおもしろくすみわたりて一かたならすみすて
かたければせきのとにしはしたゝすみ侍しに袖のう

ら風秋の夕よりも身にしむ心ちせしかは
すゑまでゆかぬいほさきの清見か關も秋風を吹

うきしまか原をとをりて車かへしといひし所より甲
斐國に入て信濃へと心さし侍しにさなから富士の麓
を行めくり侍しかは山の姿いつかたよりもおなしや
うに見えて誠にたくひなしすそのゝ秋のけしきまめ
やかに心こと葉もをよひかたよくおほえ侍て

北になし南になしてけふいかふしの麓をめぐりきぬらん
甲斐國しらすといふ所の松原のかけにしはしやすら

ひて
假初の行かひちとは聞しかといさやしらすのまつ人もなし

信濃國に行つきぬれはをくりのものの返し侍し次にす
るかなりし人のもとへ申つかはし侍し
富士のねの煙を見ても君とへよ淺間のたけはいかゝもゆると

百首のうたよみて北野宮に法樂し侍し中に述懐の心を

心こそ猶立かへれ年をふる日なのなかに物わすれせて
中院准后よみて見せ侍し歌の中にあつめこし雪も螢
も年をへて消ぬはかりの身そ残りけるとありしそは
に書加侍ける

くもりなき御世をも人はあつめこし雪と螢の光とそみむ
又かたいとのみたれたる世を手にかけてくるしきも
のは我身なりけりとありしそはに
苦しとも思はさらんかた糸の亂はつへき世にしあらねは
同歌にいかにせんわかみおいその杜の露なをいたつ

らに袖をぬらさはと有しに
いかにせむ人もおいそのもりの影たのむ我身の袖の露けさ
又身のうさはさもあらはあれおさまれる世をみるま
ての命ともかなとありしに

身のうさにたへても御世のまたれける心なかさや命成覽
歌よみ侍し次に寄關述懷を
あらましのそのまゝにてもとをらぬは心の末や關路なる覽

戰場に出侍し道すからいきみあるへき事なとつはも
のともにいひふくめ侍し次に思ひつゝけ侍し
君かため世のため何かおしからんすてゝかひある命なりせば

遠國に久しく住侍て今は都の手ふりもわすれはてぬ
るのみならずひたすら弓馬の道にのみたつきはり侍
て征夷將軍の宣旨なと給りしも我なからふしきにお
ほえ侍ければ歌よみ侍し次に
思ひきや手もふれさりし梓弓おきふし我身なれん物とは

千首歌かきあつめて爲定卿のもとへつかはし侍し次
に贈三品爲子のをよはぬ跡をもたえしとて此道の心
さしふかきことなと申つかはし侍しに

〔註〕贈從三位爲子。爲世卿女。爲定卿叔母。後醍醐帝
妃。宗良親王母儀。

散はてしはゝその杜の名殘そとしらるはかりの言のはも哉
同千首歌の中によみくはへてつかはし侍し
から玉やまじると和歌の浦のま砂の數をよみ盡しつる

同千首歌のつゝみ紙にかきつけける
山ふかみかけの朽木と成ぬれは言のはさへに色なかりけり
返し

あたならぬことはの花の色にこそ朽はつましき梢をもしれ
興國の比旅の歌とも書あつめてつかはし侍とて
うき身には思ひすてなて敷嶋の猶みちしたふ程のはかなさ
返し

敷嶋の道しあらはとたのむ世をはかなき跡と思はさらなん
爲定卿
續後拾遺撰侍し比立親王以前名字なとなんきに侍て
思ひの外に作者にもくはゝり侍らさりしに今度風雅

集とかや撰はるゝよしきこえしかとも今は又身のよ
そに覺侍しにあらぬさまなる撰者ともにて爲定卿は
もれ侍ぬるなときくさへ此道もなく成ぬる心ちして

なけかしおほえしかは歌つかはし侍し次に
いかなれは身はしもならぬ言のはの埋れてのみ聞えさる覽
此度はかきもらすともしほ草中々わかのうらみとはせし

うれふる事侍し比村鳥のたつをみてよみ侍し
うらやまし若まにすたく村鳥の飛たつはかり何おもふらん
述懐のうたよみ侍し中に

いとゝ憂身社しらるれ沖津浪人につくまのえにしよる世は
都をいてゝのちは時のまもやすき心ちなく侍て

世の中の浪のさはきにこきいてし蜚の小船そよる方もなき
いかなるおりにかありけん人のもとへ申つかはし侍
し

末つゐにかくうからめや梓弓人しひきのゝつゝら成せは

都の外に身をはふらかしはてぬるなめりとおもふに
も昔の蟬丸かためしなとまでおもひつらねて

古のわらやもみやも猶ちかしいつれの關に名をとゝめまし
いとわひてうみつらにすみける比よみ侍し

よしさらは斯てありその浪による浦の藻屑と身をやなさまし

信濃國大河原といふ深山に籠て年月をのみ送侍しに

さらにいつとまつへき期もなければ香坂高宗なとか
朝夕の霜雪を拂ふ忠節もそのあとかたなからん事さ

へかたはらいたく思ひつゝけられて

いはて思ふ谷の心もくるしきは身をむもれ木とすくす成鬼
人のもとへ申つかはしける

さそふ水なきにもいとゝ數ならぬ身を浮草のねこそなかるれ

おほえすして過し侍ける月日をかそへても今更身の
うきふしのみつもりければ

我身さてかゝらんとてそせめきけんけにうき物は月日成鬼

正平三年の比よみ侍し

歎きこし十年あまりの世中を夢になしつゝさめてましかば

秋のはしめつかた住吉の行宮より御をとつれありし
にことしはさりとともなとおほしめされなからも今日
までに成ぬることよとて

徒にことしもなかは過にけり我あふことはいづをかきりそ

とおほせことありし御返事に

けふゝと先急かれていたつらになかは過ぬる年を覺えす

御子左大納言（爲定）の宿所を此比は尊氏卿うつろひ侍

て昔の跡をさへたちわかれて今は身をかくすへきか
たもなくまよひいてたるやうにてあすをもしりかた

く心ほそきにも今一たひのたのみは思ひすてかたき
世にてなとさまゝ申し侍し文のおくにいとゝ身の

をき所なくなりしよりまちこそわふれたのむかけと
てとありしいとあはれに侍し父のひんきに申つかは
し侍し

（爲定）爲定。爲道朝臣男。爲世卿孫。

袖濡す露なけかめやたのまれし昔なからの木かけなりせば

住吉殿よりひんきありしに北山太政大臣の許より思

ひなから久しくとはぬと心よりほかなるよし申され

し次にをろかならすかよはし侍し心のうちも昔に露

かはらぬなとありておくに日にむかひ月にわすれぬ

心をはたゝ中空におもひやらなんとありし返事に

思ひあかしなきてくらす心をは月日もしらぬ時やある覽

あさからす申かはし侍し友たちも今はよそにのみき

き侍しかは

いにしへの人の心を今みてそ我身のかはる程もしらるゝ

述懐歌の中に

さすか世の憂を歎かぬ人よりはしりかほにしてぬるゝ袖哉
浦にすみ侍し比行衛もしらぬおき中に舟のうかへる
をみてよみ侍し

世を海の波にうかへる蜚小舟よるへあれはそきして行らん
寄瀬述懷を

寄川述懷とて

芳野川よしやと物を思はすはなかれて世にもあられたにせし
寄江述懷とて

寄沼述懷

山ふかみ人たにしらぬ沼水のみくさかくれもすみかたの世や
年月すみ侍し山里を立はなれてもたゝかはらぬ世の
うさのみなげかれしかは

宿かへて猶世の中はこゝろみついくもすめはつらき成鬼
世中うきつらきあはれなる事のみきこえ侍りて身の
上にもありぬへき心ちし侍し比

かくてこそうきもなくさむ世間をさためなしとはなに歎覽
御子左大納言いまた中納言ときこえし比あはれなる
よの中の事とも申をこせ侍し次に法印俊慶さへなく
成ぬるよしなといひて思へたゝ花咲春を待かねてつ
らなる枝のかれし歎をうたてなと我もあるにはあら
ぬ世にはかなき夢をかさねきぬらんと申侍し返事に
つらなりし枝もあらはと思ひいてゝ花咲春は猶やなけかん
よそに猶はかなき夢をみるほとそうつゝの我もある心ちする
同法印かことを四條一品隆資卿申をこせ侍し文のお
くに
いつまてと身をたのみてか聞たひによその哀と猶思ふらん
かへし

いつまてと身を思ふにそよそにきく人の哀も悲しかりける
山里にすみながらも今は限の妻木のたよりも思ひき
られずや侍けむ

うき世かなつらき身かなと恨てもさて父なにゝとまる心そ

いつかたの風のたよりもたえはてゝおほつかう侍
折ふし住吉殿より御使ありてこの程うちつゝき御惱
にて御心くるしかりつるやうなとおほせられし御文
にめくりあはんかきりそしらぬ命たにあらはとたの
むほとのはかなさと有し御返事に

めくりあはむ憑あるへき君か代に獨老ぬる身をいかにせん
御子左大納言の許よりつねに世中のあるかひなき事
をのみ申なからさまゝに頼みをくへき行すゑのあ
らましことなままつ事にてあかしくらすよしたのも
しけにのみ申侍しかかきたへをとつれなくておほつ
かなく侍しにさまなとかへてゆゝしくいたはりける
よし聞しかはわさと人をつかはしける次になにとて
かくはなと申侍とて

ゆく末を猶もたのまてさのみなと世をうき物と恨はつらん
返し

かくてこそ猶行末もたのまるれ今更世をは何かいとむ
野への煙のたつをみてよみ侍し

なひくかたわきてやあらん夕煙いつくの空に立消ぬらん
先帝（後醍醐）崩御の後はいとゝよしのゝ奥のおなしか
さしもゆかしう思やられ侍しかとも今はそれも又何
のかひあるへきなとさまゝに歎かれ侍てよみ侍し
なくれしと思ひし道もかひなきは此世の外のみよしのゝ山

中院准后みせ侍し歌の中に尋入ひとも嵐の山なれや
麓の鐘の聲そきこゆるとありしそはに

かひなしな見し世のまゝに嵐山麓のかねはなをひゝくとも

又いかにせん春のみ山のむかしより雲ゐまてみし世
のこひしきとありしに

古の春のみやまを雲ゐまて見し人さへになつかしきかな

寢覺懷舊といへる心を人々によませ侍し次に

いかばかり秋のね覺のなかけれは思ひのこさぬ昔なるらん

おもひねにや有けんさながら見し世の事のみ夢に見
えければあしたにおきてよみける

人しれすこぶるにしろしある物は昔をみする夢路成けり
ぬれは夢さむれはうつゝとにかくに昔わするゝ時のまもなし

懷舊の歌中に

憂事も昔になれは忍ふかと今より後そ思ひしるへき
見し人のあらましかはと忍ふ哉世にたつきなくなるにつけても
なけかしな忍ふはかりの思ひ出は身の昔にも有しもの也

老後懷舊といへる心をよみ侍ける

おいらくのいとふにたにもくる物を昔はなとて遠さかる覽

夢のうたの中に

うつゝ社夢と思ふにぬるが中の猶はかなきを何にたとへん
それとたに思ふこととてみる夢をなにさますらん庭の松風

無常歌とてよみ侍し

程もなくひま行駒は過ぬへし何にかしはし命つなかん

寄露無常

消返りはかなきうへの道芝に幾度露の身をやとすらん

寄霜無常

露の身を蓬か霜にをきかへて草葉の宿を枯はてよとや
中院准后みせ侍し歌の中に思へたゝ草のうへなる露
のみの消やらぬまもあるは有かはと有しそはに書加
し

あれはある露の身とのみ頼まれて消へき事をしらぬはかなさ

又なけゝとて老の身をこそこのこしけめ有はかすかす

あらずなる世にとありしそはに

みし人のなきはなへての世成鳧いきて我身のあるは有かは

正平十五年三月十四日御子左大納言入道(爲定)身まか
りけるよしきこえしかはあはれともなかゝ言のは

もなき心ちし侍て月日をのみなけきくらし侍し程に
宮こへ便宜ありしかは哀傷五十首歌よみて爲遠朝臣

(爲定朝男)のもとへつかはし侍し

いつしかと春くる空のうす霞消し煙のおもかけにたつ
鶯と啼てそわふる今は我ふるすにのこる人もなき世に
いささらは梅の花植ん我宿になき人のかやいつもとまると

春ののにあかりておつる夕雲雀かすみし空の行衛しらせよ

立のほる霞の雲となりしより春のなかめの袖そしほるゝ

又もこん秋をもまたは行かりにたくひしらるゝ別ならまし

今そしる風も吹あへぬ程なれや花にさきたつ人の命は
花たにもちらてのとけき春風にいかてか消し峯の白雲

あかて散花のまきれに別にし人をはいつの春か又みん

いかはかりことしは春のおしみけんおしみ馴にし人の別を

墨染の色にやかへしけふことに花の袂はぬき捨しかと

めつらしきこゑと思ふ郭公我啼ふるす袖をみせはや

人なくていくかもあらねと五月雨の降ぬる宿と聞て悲しき

みしか夜の空行月の雲かくれ又みることのなきそ悲しき
露やとる池の蓮の花の上にきえにし人を祈をく哉
今よりは人なき宿そあはれなるたゞく水雞を聞につけても
氷室山のこるこほりも有物をやすく消にし人そあたる
さらぬたに昔忘れぬ故郷に猶おとろかす萩のうはかせ
ありし人なきや戀しき七夕のこそこのよひを思やりつゝ
露深き小萩か花のさかりかなものふる枝を聞につけても
ふる郷の一村すゝき秋にあはゝ哀忍へと植やをきけむ
鷹かねは啼てきぬれと春霞かすみていにし人はかへらす
常にてる月も涙にかきくもりやみにふるよのおほくも有哉
みし人のなきを忍ひて月たにも今年の秋はくもりかほなる
今は世にありともしらぬ面影を月は何とてさそひきぬらん
歸るへき別ならねとふる郷は人まつむしのねにやなままし
哀さはなへての空となくさめし秋にもけふは猶やこふらん
此ころはふらねとぬるゝ我袖に思ひとかめぬはつしくれ哉
神無月しくれとふりし言のはを猶このもとに尋れてやみん
老ぬれは残らぬ物とおほあらきの杜の下草かれやはてけむ
和歌の浦に友なき千鳥をくれゐて獨なくねを誰にきかせん
降積るゆきみるへくもなき人の跡をも今朝は思ひやりつゝ
とはれしを思ひ出てそしら雪のふりにし人はいとゝ戀しき
さ夜深きねやの埋火かくてたにせめて有世と思はましかは
別路にありといふなるしての山こえてかへらぬ旅そ悲しき
さはかりにつらき別をみつせ河かはとみなからなとか歸らぬ
けふ別あすはと人を思ふたにみぬまは袖のかはくものかは
いきうしといひても歸る道ならはこぬをつらしと恨社せめ
なきや夢ありしやゆめとたとる哉面かけのこる夜半の枕に

あるか上にあるを思ひし人の世になきか内にもなき悲しき
又も見ん頼みやありし同世はさかひはるかにへたてしか共
有をたにみさきし旅の恨こそなきにつけても猶かなしけれ
みし人は皆先たてつ今はわかあすのあはれよ誰にとはれむ
ありし時戀しかりしにくらふれは猶もなけかぬわか心かな
しられしな別れし後の六の道行めぐりてはあふ瀬有とも
思ふ人なしとはきゝつ都鳥今はなにてふことかとふへき
しるへせし人にをくれて敷嶋の道にはひとり我やまよはん
はかなしな今^{やイ}はかきをくうたかたも誰かはみつの哀ともみむ
たまひるふ事もあらはと和歌の浦に頼む心の今ははかなき
我みちのたえぬときけはなき跡のかなしき中に猶悲しき
言のはにかゝるさへこそ悲しけれ消てはかなき露の名残は
神祇歌とてよみ侍ける
君か代をたえせずてらせいすゝ河我はみくつと沈みはつ共
代々かけて思ふも久し神風やいすゝの河のす原のしらなみ
中院准后よみて見せ侍し歌の中に我上に月日はてら
せ神ち山あふく心にわたくしはなしと有しそはに書
加侍し
くもりなき月日もさそな神ち山あふく心を先てらすらん
石清水を
いはし水にこりにしまぬ心をは神そあはれと照しみるらん
たのもしな神もさこそは石清水人のひとゝは思はさるらん
中院准后みせ侍し歌の中に石清水清きなかれを憑よ
りにこらしとこそ思ひそめしかとありしに
石清水なかれにこらぬわか人の心をかみもあはれとそ見ん

賀茂を

そのかみに祈りし末のいかなれはかけはなる覽かもの河浪
春目を

あまの原はるかにあふく心をは三笠の山のかみもしるらん
目吉を

いつくにも照す目吉の影なれとあらたにすむはひえの山本
から崎の松にかけてもさゝ浪の立かへるへき世をいのる哉
やはらくる光なれともくもらぬは猶もひよしの光なりけり

興國三年越中國にすみ侍し比 羈中百首よみ侍ける歌
の中に神祇を

かそふれば七とせもへぬ頼みこしなゝの社のかけをはなれて
住吉を

我みちを思ふ心のふかけれはわきてそあふくすみよしの神
祇園を

忘るなよそのしら河の神かきになれし斗りを頼みにそする
稻荷を

稻荷山のりしことのしるしもやかつゝみつゝの社なる覽
北野社に法樂せし百首歌中に

いつはりのなき世なれはや跡たれてあら人神も君まもる覽
諏訪宮に法樂せし百首歌中に

あらたなるすはの祭の御狩人しかもありける神のちかひか
すはの海や氷を踏て渡る世も神しまらはあやしからめや

神祇歌よみ侍し中に
すはの海やみきはの氷ふみ分て神も道ある世にはまよはす

中院准后よしのにてよみ侍歌さもみせ侍し中に萬代
と聲きこゆ也みよしのゝ山やよはひをよはふなるら

んさありしそはに

万代とよはふる聲はみよしのゝ吉野の山の神のつけかも
羈中百首中に釋教の心を

ちかひあらははやこきよせよ渡し船憂世の岸に浪たかく共
中院准后歌に釋教とていつかさばうつゝなるへきね

てもみえぬぬにも見ゆる夢の世中与しそはに書て
つかはし侍し

世中は夢もうつゝもなき物をおきてもねても何思ふらん
釋教歌中に

なにとかくはしめもしらすはてもなき心ひとつの迷ひ成覽
よしあしを我心より分かねてなにはの事もさはりかほなる
をろかにや心ひとつに歎けむうきもつらきもなかりける世を

譬喩品を

小車のみつの御法をしるへにてうき世の門はいてやしぬ覽

千首歌よみ侍し時法華經の品々をよみけるに序品人

於深山^ニ思惟^ニ佛道^ニ

山ふかく尋入てそまかひなき佛の道はしるへかりける

方便品共智惠門^ニ難^ニ解^ニ難^ニ入^ニ

入かたき草のとさしも秋かせの吹はらふにそ月はすみける

化城喩品故以^ニ方便^ニ權化^ニ比城^ニ

かりそめに草の庵を結はすははるけきのへにいかて行まし

五百弟子品不^ニ覺^ニ內衣裏^ニ有無^ニ實珠^ニ

いにしへもかけし衣の珠なれとらめつらしくいま思ふ哉

提婆品皆塗見^ニ後^ニ龍女成佛^ニ

渡津海のおしまの波をわけきても五のさはりなきそ嬉しき

屬累品如^ニ世尊勅^ニ當^ニ具奉行^ニ

末の世を思ふ佛の勅なればわれらかためそいともかしこき
勸發品即往二聖天上

のほるへき雲の上そと思ふよりかねて心の空になるかな
心經を

花の色はむなしき枝に消はてゝ染し心の跡たにもなし

十如是の心をよみ侍し如是躰

みかくなる玉のかたちの清ければ光もよそにうつる成けり

如是果

音より御法のたねをまきてこそ今も佛の身とはなるらめ

如是夜

いにしへの苔の席を引かへて花のうてなに身をやとすかな
夢イ

如是本末究竟等

あつさ弓ひけは本末ひとつにて今も昔に又かへるなり

方等經の心を

色もかもしらぬ憂身をよそにしていかなる袖に花はちる覽

十界歌とてよみ侍し中に地獄界

かりそめに身をやくたにも有物を消ぬほのほと聞そ悲しき

修羅界

わたつ海の底まで浪やさはく覽はけしくおるす峯の嵐に

聲聞界

のこりなく鹿なく野への秋霧に鶯のたかねの月もはれけり

空蟬のからたにとめぬ木の本になにを有とか世をは頼まむ

緣覺界

なかめつる花も紅葉も散はてゝ心の色そ今はむなしき

花のちり木のはのおつる山風を厭はてみるやさとりなる覽

祝の心をよみ侍ける

うちはへて春とやいはん今よりはのとけかるへき御代の光を
この比はのとけかるらし啼田鶴も雲みにかへる聲きこゆ也

寄星祝

まつり事おさまれる世の雲井にはほしの位もたかはさり鬼

寄郡祝を

名にたてる鶴の郡の民なれば千世のみつきもたえせさり鬼

寄都祝を

吹風の枝をならさぬ御世にこそ花の都はしつかなりけれ

歌よみ侍し次に祝言とて

敷嶋ややまこしまねのはしめより今迄たえぬ道はこの道

年を經し澤邊のつるも今よりや雲をさして鳴わたるらん

騎中百首歌に祝をよみ侍し

君か代にあふ坂山の關ならはなとか都にかへらさるへき

寄天祝を

久かたの月日のかけもくらねは空にしらるゝ君か御代哉

東夷を征すへき將軍の宣旨を下されて東山東海のほと

とりに籌策をめぐらし侍ひまに題をさくりて歌よみ

侍とて寄海祝を

四方の海の中にもわきてしつかなれ我おさむへき浦の波風

建徳二年九月廿日鎮西より便宜に中務卿親王（橘良）

日にそへて近れんとのみ思ふ身にいと憂世の事しけき哉

しるやいかによを秋風の吹からに露もとまらぬわか心かな

同年十二月到來して後に便宜にかくそ申つかはし侍

し

とにかくに道ある君か御世ならはことしけく共誰かまとはむ

草も木もなひくとそきくこのころのよを秋風と歎かさら南

此本書 先師兵部卿師成親王（出家號惠梵）筆跡也。教弘相傳之。
時享德改元仲冬廿日 多々良朝臣判

右以本阿本書寫之。但彼寫本於防州大內文籠之抄物取出之次。幸爾令借用半日馳筆之間落書等多之。猶重而以證本可加按合者也。

于時享祿四曆極月廿七日

兵部少輔中原遠忠

右李花集二卷以成嶋和興橫田茂語藏本按合畢

群書類從卷第二百三十二

和歌部八十七 家集五

西宮左大臣御集

をんなに

すまの蟹のうら漕舟の跡もなくみぬ人戀る我やなになる

笛を人のもとにをかせ玉ふとて

笛竹のもと古音は變る其をのか世々にはならすもあら南

小野宮の中君にいと久しく聞え玉はて

さりとと思ふ心にひかされていまゝて世にもふる我身哉

御返し

頼むるに命のふる物ならは千歳もかくてあらむと思ふ

九條殿(師轉)三の宮に聞え玉ふ

年月は我身にそへて過ぬれとおもふ心のゆかすも有哉

かへし

もろともに哀といはすは人しれぬとはす語を吾のみやせん

たねしあらは岩根の松と聞しかは心にのみ委せさりける

返し

朽かたき物とこそきけときかへて常盤の松と成にける哉

夢にたにみぬものからに暮かたき春の日ののみ眺めつる哉

常夏にわひしき物は色ふかく思ひそめたる心なりけり

御かへし

五月雨のなかにぬれて郭公ことしきへにやふる聲をせん
現にもあらぬ事こそかたからめ夢斗りたにみつといはれむ

小野の宮の中君に聞え給ふ

露はかり頼む心はなけれども誰にかゝれる我ならなくに

かへし

はかりなき草葉をみつゝ白露のかゝること社あはれ成けれ

又かへし

はかなから草としりせは白露のかゝる事をそしらすをあらまし
よそにのみあるを侘しき久方の天津空にもすまぬものから
我ひとり思へはくるし限なき心はかりをわきてしらせん
人やりにあらぬものから恨むるも身の理と思ひしらすや
わひはてゝやみもしぬへきよそにのみ難面中をきくの白露
かくしつゝ月日を経ぬる世中に有かたき身を我いかにせん
明暮に思ふ心をうつゝにも夢にもみぬはたかつらき也
日をこそは長きものとは思ひつれ月のほとたに暮かたき哉
またなしとこたふ計りそ今はたゝ誰にもとはて我に問かし
限なく燃る思ひの中にたにみえもせなくにわれいかにせむ

おもひこかれし夏むしの首尾欠

世中にときを待つるかひもなく夢にたにやはみえしらす覽
をきところ有ともみえぬ露にのみ思ひけちても長閑成かな
人しれぬ我そ俗しき白露のいとゝ心に消んとやする
ひかりまつ下にかゝれる露の命消はてねとや春のつれなき
驚の木つたふ花にふみつけし跡の見えぬをいかて尋ん
歎つゝ忍ふることのくるしきにいひても物をおもふころ哉
山彦のこたふる聲や聞ゆらんなかめしほとに春はきにけり
もろともにみん人もかな獨のみをれはかひなき常夏の花
限りなく深き心もかくしあらはあさましくやは思ひたえ南
いとふてふ言の葉をたに露はかりみまくほしきや何の心そ
水莖のあとをし君にまかすればゆかぬ心もあらしと思ふ

返し

あたならむ人の心を水莖のせきとめはてすなかれましやは
はつ鴈のはつかに聞しことつても雲路にたえてわふる頃哉
いとふてふ言の葉ならは年をへて秋を何しか色のみつらん
神無月時雨とのみや思ふらん天津空にてこふる泪を
空にもや人は知らん夜とゝもにあまつ雲を詠くらせは
打咥て啼音にかへは山彦のこたへぬ空はあらしと思ふ
秋の田のほのかに人を哀ともいへてにかけてやまんとやする
時雨にも雨にもあてしいたつらに年のふるにそ袖はぬれける
秋の夜の月の光にあらねともあけてはおとる物にそ有ける
年をへてこりぬ思ひの甲斐もなし心みかてら厭ふと思へは
春をたにいっしかとのみ思ひけんまつ驚の聲もせなくに
かへし

人しれす君によそへて梅の花おりみる程に袖そ濡ぬる
ぬるゝほと露ならなくにから衣はかなき名をも残すなる哉
打忍ひなくとせしかと君こふる涙はいろに出にけるかな
皆人のいひふるしてしことなれと此五月雨はあやしかり鬼
いひふるす人たになくは打つけに思はぬ事も言すはあらまし
かへし
ふりにける事の厭ひにせきなからいはぬは辛き心ち社すれ
ひた道に頼めは人をつらしとも知らぬ顔にてあらんとそ思
つらきをは咎めぬ人のひたふるにたえぬと言もいかゝ頼まむ
返し
つらくとも何か恨ん今さらにうれしき誰か君にまさらむ
けふよりは秋の初めと聞からに袖のたもとそ露けかりける
かへし
たのまれぬ秋の心になる人や露けきほとを先は知らん
かへし
言の葉の色にさこそは優るらんたとてか秋を頼まさるへき
返し
語るたに深からは社こひことにしらぬ哀をいはんと思はめ
かへし
こひ毎にまたいひしらぬ君ならは深き心もあらんとそ思ふ
七月七日
風雅集
たなはたの契れる秋もきにけるはいつと定めぬ我そ悲しき
わひ集
かへし
うたかひもなき七夕の中なれは契れるほとを過ぬなる哉
秋深く成行野へに鳴むしのいとゝ侘たるこゑきこゆ也

金槐和歌集

鎌倉右大臣實朝公

春

正月一日よめる

けさみれは山も霞て久かたの天の原より春はきにけり
立春のこゝろをよめる

九重の雲井に春そ立ぬらし大内山に霞たなひく
故郷立春

朝霞たてるを見ればみつへのえのよし野の宮に春はきにけり
春のはしめに雪の降をよめる

かきくらしなを降雪の寒ければ春ともしらぬ谷の黄鳥
春たゝは若菜つまんとしめをきし野へ共見えす雪のふれゝは

春のはしめのうた
うちなひき春さりくれば楸生るかた山陰に鶯そなく

山里に家居はすへし鶯の鳴はつ聲のきかまほしきに
屏風の繪に春日の山に雪ふれるところを讀る

松の葉の白きをみれば春日山このめも春の雪そふりける
わかなつむところ

春日野の飛火の野守けふとてやむしかたみに若菜つむ覽
雪中のわかなといふ事を

若菜つむ衣手ぬれて片岡のあしたの原はあは雪そふる
梅のはなをよめる

梅かえに氷れる霜やとけぬ覽ほしあへぬ露の花にこぼるゝ
屏風に梅の木に雪降かゝれる所

思ふ事有てなかねと秋きつとことになきける虫の聲きけ
時雨する神無月かと聞しかと涙の玉そけふふりにける
返し

涙ともわかれぬ雨のふりけるは時雨ときかは哀ならまし
かへし

よとゝもにたえぬ泪の雨よりは時雨や何そなにならなくに
かへし

空に降泪のよにし聞ゆれば袖の時雨をおとりこそせね
返し

なく涙空にもなとかふらさらんあま雲晴ぬ物を思へは
ちかつきて

いかてへし我ならなくにことしあらは今しも物の悲しかる蘭
かへし

有しより今しもとのみ悲しきはさてそ中々あるへかりける
篝火ものもしるゝあかすのみまとふ心をおもひしる覽

一宮の中君に聞えそめ玉ひける
袖の色のこく成ぬれば我戀をしらせそめつる涙なりけり

また
山彦のこたへぬ空はよにもあらし聲をさへにも隔つる哉

とあるに御かへりなけれは
詠めあかておかしき事をいひしまに戀も我身もつみてける哉

治承三年七月二日書寫校合畢

建長五年四月十三日以眞觀本一書寫校合畢

右西宮左大臣集以村井敬義本書寫校合了

梅のはな色はそれともわかぬまで風にみたれて雪は降つゝ
むめの花さけるところをよめる

わかやとの梅の初花咲にけりまつ鶯はなとか來なかぬ
花のあひたの鶯といふ事を

春くればまつ咲やとの梅のはなかをなつかしみ鶯そなく
梅花風に匂ふと云事を人々讀せ侍し次に

むめかゝを夢の枕にさそひきてさむる待けり春の山風はつイ
梅香薰衣

梅かかは我衣手に匂ひきぬ花より過る春のはつ風
梅のはなをよめる

春風は吹とふかねと梅のはな咲るあたりはしるくそ有ける
春の歌

早蕨のもえいつる春に成ぬれば野邊の霞もたな引にけり
かすみをよめる

三冬つき春しきぬれば青柳のかつらき山に霞たな引
おほかたに春の來ぬればはる霞四方の山へに立滿にけり

をしなへて春は來に鳧筑波根の木本ことにかすみたなひく
柳をよめる

春くればなを色まさる山城の常盤の杜の青柳の糸
雨中の柳といふことを

浅みとり染てかけたる青柳の糸に玉ぬく春雨そふる
水たまる池の坡のさし柳この春雨にもえ出にけり

青柳の糸もてぬける白露の玉こき散す春の山かせ
雨そほふれる朝勝長壽院の梅ところゝ咲たるを見
て花にむすひつけし歌

古寺のくち木の梅も春雨にそほちて花の綻にけり
雨後鶯といふ事を

春雨の露もまたひぬ梅かえにうはけしほれて鶯そなく
梅華厭雨

我宿の梅はなさけり春雨はいたくな降そちまくもおし
故郷梅花

誰にかもむかしをとほん故里の軒端の梅は春をこそしれ
としふれば宿はあれにけり梅花はなはむかしの香に匂へ共

古郷に誰しのふとか梅のはなむかし忘れぬかに匂ふらん
古郷春月といふ事をよめる

故郷は見しこともあらずあれにけり影そ昔の春の夜の月
たれ住て誰なかむらん古郷の吉野のみやの春のよの月

春月
なかむれば衣てかすむ久方の月の宮故の春の夜のそら
梅華をよめる

我宿の八重のこう梅咲にけり知もしらぬもなへてとはなん
鶯けいたくなわひそ梅のはなことしのみ散ならひならねは

さりとともと思ひしほとに梅のはな散過るまで君かきまさぬ
わか袖に香をたに残せむめの花あかて散ぬる忘かたみに

梅のばな咲る盛をめのまへにすくせる宿は春そ少なき
呼子鳥

あをによし奈良の山なる呼子鳥いたくな鳴そ君もこなくに
すみれ

浅茅原ゆくゑもしらぬ野へに出て故里人は莖つみけり
きゝす
高圓の尾上の雉子朝なノ妻にこひつゝ啼音悲しも

をのか妻戀わひにけり春の野にあさる雉子の朝なくなく

名所櫻

をとに聞よしの櫻咲にけり山の麓にかゝるしら雲
となき山の櫻

かつらきやたかまのさくら眺むれは夕ゐる雲に春雨そふる

雨中櫻

雨ふると立かくるれは山さくら花の雫にそほちぬるかな
けふもまた花に暮しつ春雨の露のやとりを我にかさなん

山路夕花

道とをみけふ越くれぬ山櫻はなのやとりを我にかさなむ

春山月

風さはく遠のと山に空晴てさくらに曇る春のよの月

屏風のゑに旅人あまた花の下にふせる所

木の本の花のした臥夜ころへて我衣てに月を馴ぬる

木の本にやとりはすへし櫻花ちらましくおしみ旅ならなくに

この本にやとりをすれはかたしきの我衣てに花は散つゝ

いましはと思ひし程に櫻はな散木の本に日數へぬへし

山家に花見るところ

時のまと思ひてこしを山里に花みるゝとなかぬしぬへし

花ちれるところに鷹のとふを

鷹かねの歸る翅にかほる也花をうらむる春の山かせ

きさらきの廿日あまりのほとにや有けむ北むきのえ

んに立出て夕暮の空をなかめて一人をるに鷹のなく

を聞てよめる

なかめつゝおもふも悲し歸鷹ゆくらんかたの夕くれのそら

ゆみあそひをせしによしの山のかたをつくりて山

人の花見たるところをよめる

み吉野の山の山もり花をみてなかくし日をあかすも有哉

みよしのの山に入れんやま人と成みてしかな花にあくやと

屏風によしの山かきたる所

みよしの山の山にこもりし山人や花をはやとの物とみるらん

故郷花

里はあれぬ志賀の花崗そのかみのむかしの春や戀しかる覽

尋ねても誰にかとはん古郷の花もむかしのあるしならねは

はなをよめる

櫻花ちらましくおしみうち日さす宮路の人そまとぬせりける

さくら花ちらはをしけむ玉鐙の道行ふりに折てかさゝん

道すから散かふ花を雪とみてやすらふほとに此日暮つゝ

人のもとに讀てつかはし侍し

春はくれと人もすさめぬ山櫻風のたよりに我のみそとふ

山家見花といふ事を人々あまたつかうまつりし次に

さくらはな咲散みれは山里に我そおほくの春はへにける

屏風に山中に櫻咲たるところ

山櫻散はちらなんおしけなみよしや人みす花のなたてに

花をたつねぬといふ事を

花をみむとしも思はてこし我そ深き山ちに日數へにける

屏風の畫に

山風の櫻吹まく音すなり吉野の瀧の岩もとゝろに

瀧の上のみふねの山のやま櫻風に浮てそ花も散ける

散花

春くれはいとかの山のやま櫻風にみたれて花そ散ける

花かせをいとふ

咲にけりなからの山の櫻はな風にしられて春も過なん
はなをよめる

三よし野の山下陰のさくら花咲てたてりと風にしらすな
名所ちるはな

さくら花うつろふ時はみよしのゝ山下風に雪そふりける
花雪に似たるといふ事を

風吹は花は雪とそちりまかふ吉野の山は春やなからん
山深み尋てきつる木本に雪とみるまで花を散ける
春は來て雪は消にしこのもとに白くも花のちりつもるかな

雨中夕花

山さくらいまはのころの花のえに夕への雨の露そこほるゝ
やま櫻あたに散にし花のえにゆふへの雨の露の残れる

落花をよめる

春ふかみあらしの山の櫻はな咲とみしまに散にけるかな
三月の末かた勝長壽院にまうてたりしにあるそう山
陰に隠れおるを見て花はととひしかは散ぬとなんこ
たへ侍しを聞て讀る

ゆきて見んと思ひし程に散に鳧あやなの花や風たゝぬまに
櫻はなさくとみしまに散にけり夢かうつゝか春の山風
水邊落花といふ事を

櫻はなちりかひかすむ春の夜のおほろ月夜のかもの川風
行水に風の吹いるゝ櫻はななかれて消ぬあはかともみゆ
山さくら木々の梢に見しものを岩まの水のあはとなりぬる

湖邊落花

山風の霞吹きまきちる花のみたれてみゆるしかの浦なみ
故郷惜花心を

さゝ浪やしかの都の華盛風よりさきにとはまし物を
散ぬれはとふ人もなし故郷は花そむかしのあるし成ける
ことしさへとはれて暮ぬ櫻はな春もむなしき名に社有けれ

花恨風

心うき風にも有かな櫻花さくほともなく散ぬへらなり
春風をよめる

櫻花さきてむなしく散にけり吉野の山はたゝ春の風
櫻をよめる

春ふかみ花ちりかゝる山の井のふりにし水に蛙なく也
河邊歎冬

河邊歎冬

歎冬の花の雪に袖ぬれて昔おほゆる玉川の里
山ふきの花の盛に成ぬれは井手のわたりにゆかぬ日そなき
山吹を見てよめる

わかやとの八重の山吹露ををみ打拂ふ袖のかほりぬる哉
雨のふれる日山吹を讀る

春雨の露のやとりを吹風にこほれて匂ふ歎冬の花
歎冬をおりてよめる

今幾日春しなけれは春雨にぬるともおらんやまふきの花
歎冬の花おりて人のもとにつかはすさて

をのつから哀ともみよ春ふかみ散残るきしの山吹の花
散のこる岸の山吹春深み此一えたをあはれといはん
やまふきの散を見て

玉もかる井出の河風吹にけりみなはにうきぬ山ふきの花
たまもかる井出のしからみ春かけて咲や川瀬の山ふきの花
まとゆみのふりうにて大井川をつくりて松に藤のか

かるところ

立歸りみてをわたらん大井河かはへの松にかゝる藤波
屏風の畫に田籠の浦に旅人のふちのはなおりたる所
田籠の浦のきしの藤浪立かへりおらてはゆかし袖はぬる共

池のほとりの藤の花

古郷の池の藤なみ誰うへてむかし忘れぬかたみ成らん
いとはやも暮ぬる春かわか宿の池の藤波うつろはぬまに

正月の二有し年三月に郭公の鳴を聞てよめる

きかさりき彌生の山の郭公春くはゝれる年はありしかと

春のくれをよめる

春ふかみあらしもいたく吹宿は散殘へき花もなきかな

なかもこし花もむなく散はてゝはかなく春の暮にける哉

いつかたに行かくるらん春霞立出て山の端にもみえなくに

行春をかたみとおもふを天津空在明の月はかけもたえけり

三月盡

惜むともこよひ明なはあすよりは花の袂をぬきてかへてん

夏

更衣をよめる

おしみこし花の袂もぬきかへつ人の心そ夏には有ける

夏のはしめのうた

夏衣たつ田の山の郭公いつしかなかん聲をきかはや

春過て幾日もあらねと我やとの池の藤なみうつろひにけり

郭公を待といふ心を

夏衣たちしときより足曳の山郭公待ぬ日そなき

子規きくとはなしにたけくまの松にそ夏の日數へぬへき

初聲をきくとはなしに今日もまた山時鳥またすしもあらず

郭公かならず待となけれとも夜なゝめをもさましつる哉

山家郭公

山近く家居しをれは蜀魂なく初聲は我のみそきく

ほとゝきすのうた

足曳の山郭公木かくれて目にこそみえねをとのさやけさ

かつらきやたかまの山の杜宇雲井のよそに啼渡る也

足曳の山時鳥み山出て夜深き月の影になくなり

在明の月はいぬる木の間より山子規啼ていつなり

皆人の名をしもよふかほとゝきす鳴なる聲の里をとよむる

夕郭公

夕暮のたゞしきに郭公聲うらかなし道やまとへる

夏歌

五月まつ小川のますらおいとまなみせきいるゝ水に蛙鳴也

菖蒲

五月雨に水まさるらし菖蒲草うれはかくれてかる人そなき

五月雨ふれるにあやめ草をみてよめる

袖ぬれてけふふく宿の菖蒲草いつれの沼に誰かひきけん

五月雨

さみたれは心あらなん雲まより出くる月をまてはくるしも

五月雨に夜の更けは郭公ひとり山邊を鳴てすく也

さみたれの露もまたひぬ奥山の横のはかくれなく郭公

五月雨の雲のかゝれるまきもくの檜原か峯に啼子規

五月山こたゝ(か殿殿)き峯のほとゝきすたそかれ時の空になく也

故郷盧橘

いにしへを忍ぶとなしに故郷の夕への雨に匂ふたちはな

盧橘薰夜衣

イ元

轉寐の夜の衣にかほる也もの思ふ宿の軒の立花

ほととぎすをよめる

蜀魂きけともあかす立花のはな散里の五月雨の頃

社頭時鳥

さみたれをぬさに手向て三熊野の山郭公なきとよむ也

雨いたくふれるよひより郭公を聞てよめる

郭公鳴聲あやな五月やみ聞人なしに雨は降つゝ

深夜ほととぎす

五月やみおほつかなきに郭公ふかき峰より鳴ていつ也

五月やみ神なひ山のほととぎす妻戀すらしなく音悲しも

蓮露似玉

小夜更てはすの浮葉の露の上に玉とみるまでやとる月かけ

河風似秋

岩くゝる水にや秋の立田川かはかせ涼し夏の夕暮

螢火亂飛已近といふ事を

杜若おふる澤邊に飛螢かすこそまされ秋や近けん

蟬

夏山に鳴なる蟬の木隠て秋近しとや聲もおしまぬ

みな月の廿日あまりの比夕への風すたれをうこかすをよめる

秋近くなるしにや玉たれのこすのまとをし風を涼しき

夜風冷衣と云事を

夏深み思ひもかけぬうたゝねの夜の衣に秋風そふく

夏の暮によめる

昨日まで花の散をそおしみこし夢かうつゝか夏も暮にけり御秋する河瀬にくれぬ夏の日の入あひの鐘のその聲により

秋

夏はたゝこよひはかりと思ひねの夢ちにすゝし秋のはつ風

七月一日の朝によめる

昨日こそ夏は暮しか朝戸出の衣手寒し秋のはつ風

海邊秋來といふことを

霧立て秋こそ空に來にけらし吹上の濱の浦のしほ風

うちへて秋はきにけり紀の國やゆらのみ崎の蟹のうけ繩

寒蟬啼

吹風の涼しくも有かをのつから山の蟬鳴て秋はきにけり

秋のはしめの歌

住人もなき宿なれと萩の葉の露を尋て秋はきにけり

野と成て跡は絶にし深草の露のやとりに秋はきにけり

白露

秋ははや來にける物を大かたの野にも山にも露ををくたる

秋風

夕されは衣手さむし高まとの尾上の宮の秋の初風

なかむれは衣手寒し夕つくよさほの河原の秋の初かせ

繩のはしめによめる

あまの河みなはさかまき行水のはやくも秋の立にける哉

久かたの天の河原を打なかめいつかと待し秋もきにけり

彦星の行あひをまつ久堅の天の川原に秋風そ吹

夕されは秋風涼し七夕のあまの羽衣たちやかふらん

七夕

天河霧立わたる彦星の妻むかへ舟はかやもこかなん

戀々て稀に逢夜の天河川瀬のたつはなかなかすもあらなん七夕の別をおしみ天河やすのわたりにたつもなかなむ

今はしも別もすらしたなはたは天の河原に田鶴そ鳴なる
秋のはしめ月あかゝりし夜

天原雲なきよひに久堅の月さえわたる鵲のはし
秋風に夜の深ゆけはひさかたの天の河原に月かたふきぬ

七月十四日夜勝長壽院の樓に侍りて月のさし入たり
しをよめる

なかもやる軒の忍ふの露のまにいたくな更そ秋のよの月
曙に庭の萩を見て

朝ほらけ萩のうへ吹秋風に下葉をしなみ露そ繖る
秋野にをくしら露は玉なれやといふことば人々にお

ほせてつかうまつらせし時よめる
さゝかにの玉ぬく糸のをゝよはみ風に亂て露そこほるゝ

あきのうた
花にをく露をしつけみ白すけの眞野の萩原しほれあひけり

路頭萩
道のへの小野の夕霧立かへりみてこそゆかめ秋萩の花

草花をよめる
野邊に出てそほちにけりなから衣きつゝ分行花の雪に

蘭
藤はかまきてぬきかけしぬしや誰とへと答へす野への秋風

とかりしにとかみか原といふ所に出侍しときあれた
る菴のまへに蘭さけるをみてよめる

秋風に何にほふらんふちはかまぬしはふりにし宿と知すや
古郷萩

古郷の本あらの小萩徒に見る人なしに咲かちりなん
庭のはきをよめる

秋風はいたくな吹そ我宿のもとあらの小萩ちらまくもおし
夕秋風と云事を

秋ならてたゝ大かたの風の音も夕へはことに悲しきものを
ゆふへの心をよめる

おほかたにも思ふとしもなかりけり只我ための秋の夕暮
たそかれに物思ひをれは我宿の萩のはそよき秋風そ吹

我のみやわひしと思ふ花すゝきほに出るやとの秋の夕くれ
庭の萩はつかにのこれるを月さしいてゝのち見るに

ちりにたるにや花のみえさりしかは
萩の花くれ／＼までも有つるか月出てみるに無かはかなさ

萩をよめる
秋萩の下葉もいまたうつろはぬに今朝ふく風は袂さむしも

あさかほ
風をまつ草の葉にをく露よりもあたるものは朝良の花

野へのかるかやをよめる
夕されは野ちのかるかや打なひき亂れてのみそ露もをきける

秋歌
朝な／＼露におれふす秋萩の花ふみしたき鹿そ鳴なる

萩かはなうつろひ行は高砂の屋上の鹿のなかぬ日そなき
さを鹿のをのかすむ野の女郎花はなにあかすと音をや鳴覽

よそにみておらては過し女郎花なをむつまし^(の原歌)み露にぬる共
秋風はあやなゝ吹そ白露のあたなるのへ・葛のはの上に

白露の仇にもをくか葛の葉にたまれはきえぬ風たゝぬまに
きり／＼^{邊イ}す啼夕暮の秋風に我さへあやな物そかなしき

山家眺望といふことを
暮かゝる夕への空をなかわれはこたかき山に秋風そふく

秋をへて忍ひもかねず物思ふ小のゝ山邊の夕暮の空
聲高みはやしにさけふ猿よりも我その思ふ秋の夕へは

秋のうた

玉たれのこすのひまもる秋風はいも戀しらに身にそしみける

秋風はやゝはた寒く成にけり獨やねなん長き此夜を

鴈なきて秋風さむく成にけりひとりやねなん夜の衣うすし

を篠はら夜半に露吹秋風をやゝ寒しとや虫のわふらん

秋ふかみ露さむきとや葎たゝいたつらに音をのみそ鳴

庭草の露のかすそふ村雨によふかき虫の聲そ悲しき

あさち原つゆしけき庭の蜚秋ふかき夜の月に鳴也

天のはらふりさけ見れは月清み秋のよいたく更にける哉

月をよめる

我なからおほえすをくか袖の露月に物思ふ夜頃へぬれは

八月十五夜

久かたの月の光し清けれは秋のなかはを空にしるかな

海邊月

たまさかにみるものにもか伊勢の海の清き渚の秋の夜の月

伊勢の海や浪にかけたる秋の夜の有明の月に松風そふく

須磨の蜚の袖吹かへすしほ風にうらみて更る秋のよの月

しほかまの浦ふく風に秋たけて籬か嶋に月かたふきぬ

月前鴈

天原ふりさけみれはます鏡きよき月夜に鴈なき渡る

むは玉の夜は更ぬらし鴈かねの開ゆる空に月かたふきぬ

啼渡る鴈の羽かせに雲消て夜ふかき空にすめる月かけ

九重の雲井を分て久かたの月の都に鴈そなくなる

天のとを明かたの空に啼鴈の翅の露にやとる月影

海の邊をすくるとてよめる

和田の原八重の鹽ちに飛鴈の翅の浪にあき風そふく

なかもやる心もたへぬ和田の原八重のしほ路の秋の黄昏

鴈を

秋風に山とひこゆる初かりの翅に分る峯のしら雲

足曳の山飛こゆる秋の鴈いく重の霧をしのき來ぬらん

鴈かねは友まとはせりしからきや横の袖山霧たゝるらし

夕鴈

夕されは稻葉のなひく秋風に空飛かりの聲も悲しや

田家夕鴈

鴈のゐる門田の稻葉打そよきたそかれ時に秋風そ吹

野への露

ひさ方の天飛鴈の涙かも大あらし野のさゝの上の露

田家露

秋田もる庵にかたしく我袖に消あへぬ露の幾重をく蘭

田家夕

かくて猶たえてしあらはいかゝせん山田守庵の秋の夕暮

田家秋といふことを

から衣いなはの露に袖ぬれて物思へともなれる我身か

山田もる庵にしをれは朝なノたえす聞つるさをしかの聲

夕鹿

鳴鹿の聲より袖にをくか露物思ふころの秋の夕暮

しかをよめる

妻戀る鹿そなくなる小倉山やまの夕霧立にけんかも

ゆふされは霧立くらしをくら山やまのとかけに鹿そ鳴なる

雲のゐる梢はるかに霧こめてたかしの山に鹿そ啼なる

小夜更るまゝに外山の木のまよりさそふか月をひとり鳴鹿
月をのみ哀とおもふを小夜更てみやま隠に鹿そなくなる

ぬれておる袖の月かけ更にけり籬の菊の花の上の露
ある僧に衣をたまふとて

閑居望月

野邊みれはつゆしも寒し蜚よるの衣のうすくや有らん
長月の夜きり／＼すのなくを聞てよめる

名所秋月

蜚夜半の衣のうすき上にいたくは霜のをかすもあらなん
九月霜降秋早寒といふ心を

月みれは衣てさむしさらしなや嬭捨山の峯の秋風
山寒み衣てうすし更科やはすての月に秋ふけしかは

虫の音もほのかに成ぬ花すゝき秋の末葉に霜や置らん
秋のすゑによめる

秋歌

鴈鳴て吹かせさむみ高岡の野への浅茅は色つきにけり
かり啼て寒きあさけの露霜にやのゝ神山色つきにけり

月清み秋の夜いたく更にけりさほの川原に千鳥しはなく

月前擣衣

名所紅葉

秋たけて夜深き月の影みれはあれたる宿に衣うつ也
さよ更てなかはたけ行月かけにあかてや人の衣打らん

初鴈の羽風のさむくなるまゝにさほの山邊は色付にけり
鴈啼て寒き嵐の吹なへに立田の山は色つきにけり

夜を寒みね覺てきけは長月の有明の月にころもうつ也

今朝来なく鴈かねさむみ唐衣立田の山は紅葉しぬらん

擣衣をよめる

深山紅葉

ひとりぬるね覺に聞そ哀なる伏見の里に衣うつこゑ
みよし野の山下風のさむき夜を誰古郷に衣うつらん

神無月またて霰や降にけん深山にふかき紅葉しにけり
さほ山のはゝその紅葉時雨にぬるゝといふ事を人々

秋歌

によませしついでによめる

昔思ふ秋のねさめの床の上にほのかにかよふ峯の松風
見る人もなくて散にき時雨のみふりにし里の秋萩の花

佐保山のはゝその紅葉千々の色にうつろふ秋は時雨降り
秋歌

秋萩のむかしの露に袖ぬれてふるき籬に鹿そなくなる

木の葉ちる秋の山へはうかりけり堪てや鹿のひとり鳴らん

朝またき小野の露霜さむけれは秋をつらしと鹿そ鳴なる

もみちはは道もなきまで散しきぬ我宿をとふ人しなけれは

秋はきの下葉のもみちうつろひぬ長月の夜の風のさむさに

水上落葉

雨のふれる夜に菊を見てよめる

流れ行このはのよとむえにしあれは暮ての後は秋も久しき

露をおもみまかきの菊のほしもあへす晴れは曇る宵の村雨

暮て行秋の湊にうかふ木のは蜚の釣する船かともみゆ

月夜菊の花をおるとて

秋をおしむといふことを

長月の有明の月のつきすのみくる秋ことにおしき今日かな
年毎の秋の別れはあまたあれとけふの暮るそ飽しかりける

九月盡の心を人々に仰せてつかうまつらせしついで
によめる

冬

初瀬山けふを限となかめつゝ入あひのかねに秋そ暮ぬる

十月一日よめる

秋はいぬ風に木のはは散はてゝ山淋しかる冬は來にけり
まつ風しくれににたり

ふらぬよもふるともまかふ時雨かな木の葉の後の峯の松風
神無月木のはふりにし山里は時雨にまかふ松の風かな

冬のうた

木の葉ちり秋も暮にしかた岡のさひしき杜に冬は來にけり
神無月時雨ふるらしおく山は外山の紅葉今さかりなり

冬のはしめの歌

神無月時雨ふれはかなら山のならのはかしは風にうつるふ
下紅葉かつはうつろふ杵原神無月とて霰ふれりてへ（イイ）

三室山紅葉ちるらし神無月龍田の河に錦をりかく
吉野川もみちはなかる瀧の上のみふねの山に嵐吹らし
散つもる木の葉朽にし谷水も氷てとつる冬はきにけり

野霜といふことを

花すゝき枯たる野へにをく霜のむすほゝれつゝ冬は來に息
霜をよめる

東路の道の冬草枯にけり夜なゝゝ霜や置まさるらん
大澤の池の水草かれにけり長きよすから霜やをくらむ

月影霜ににたりといふことをよめる

月影のしろきをみれば鵲のわたせる橋に霜そをきける
冬歌

夕月夜さほの川風身にしてみて袖より過る千鳥なく也
河邊冬月

月前松風

千鳥なくさほの河原の月きよみ衣手寒し夜や更ぬらん
天原空をさむけみ鳥羽玉のよわたる月に松風そ吹
海のほとりの千鳥といふことを人々あまたつかうま
つりし次に

夜を寒み浦の松風吹むすひむしあけの浪に千鳥鳴也
夕つくよみつしほあひのかたをなみ浪にしほれて鳴千鳥哉

月清みさよ更ゆけは伊勢嶋やいちしの浦の千鳥鳴なり
名所千鳥

衣手にうらの松風さえわひて吹上の月に千鳥鳴也
寒夜千鳥

風寒み夜の更ゆけはいもかしまたみの浦に千鳥鳴也
ふかき夜の霜

むば玉の妹か黒かみ打なひき冬深き夜に霜そをきける
冬歌

かたしきの袖こそ霜にむすひけれ待夜更ぬる宇治の橋姫
かたしきの袖も氷ぬ冬の夜の雨降すさむ曉のそら

夜をさむみ河瀬にうかふ水の泡の消あへぬ程に氷しにけり
氷をよめる

月前嵐

音羽山やまおろし吹てあふ坂の關の小河に氷りしにけり
わたれりイ

更にけり外山のあらしさえくゞてをちの里にすめる月影
湖上冬月といふことを

比良の山やま風さむきからさきや鳩のみつうみ月そ氷れる
池上冬月

原の池の芦まのつらゝしけれとたえくゞ月の影はすみ鳧
冬歌

あしの葉は澤へもさやに置霜の寒きよなく氷しにけり
難波湯あしのは白くをく霜のさえたる夜半に田鶴そ鳴なる
夜更て月を見てよめる

社頭霜

小夜更て雲間の月の影みれは袖にしられぬ霜そをきける
さ夜更ていなりの宮の杉の上に白くも霜の置にける哉
屏風に三輪の山に雪のふれる所

社頭雪

冬こもりそれともみえす三輪の山杉のは白く雪のふれゝは
み熊野のなきの葉したり降雪は神のかけたるしてにそ有らし
鶴岡別當僧都もとに雪のふりし朝よみてつかはすう

た

鶴か岡あふきてみれは岑の松こすゑ遙に雪を積れる
八幡山木たかき松にゐるたつのはね白妙にみ雪ふるらし
海邊鶴

冬歌

難波かたしほひにたてる芦たつの羽白妙に雪は降つゝ
降つもる雪ふむ磯の濱千鳥波にしほれて夜半に鳴也
みさこゐる磯邊に立るむろの木の枝もとほゝに雪を積れる
夕されは鹽風さむし波まよりみゆる小嶋に雪は降つゝ

立のほる煙はなをそつれもなき雪のあしたの鹽竈の浦
雪をよめる
なかむれはさひしくも有か烟たつ室の八嶋の雪の下もえ
冬のうた

夕されは浦風さむしあま小船とませの山にみ雪降らし
まきもくの檜原のあらしさえくゞてゆつきか嶽に雪降に鳧
深山には白雪ふれりしからきの横の杣人道たとるらし
はらへたゝ雪分衣ぬきをうすみ積れは寒し山おろしの風
横の戸をあさけの雲の衣手に雪を吹まく山嵐のかせ
山里は冬こそことにわひしけれ雪ふみ分てとふ人もなし
我庵はよし野の奥の冬こもり雪ふりつみて問人もなし
奥山のいはねに生るすかの根のねもころゝにふれる白雪
をのつから淋しくも有か山深み苔の庵の雪の夕くれ
寺邊夕雪

閑居雪

打つけに物そかなしき泊瀬山おのへの鐘の雪の夕暮
故郷はうらさひしともなき物をよし野の奥の雪の夕暮
冬歌

冬歌

夕されはすゝ吹嵐身にしてみて吉野のたけにみ雪ふるらし
山高み明はなれ行横雲の絶まにみゆる峰の白雪
見渡せは雲ゐるかに雪白し富士の高根の曙の空
さゝのはのみ山もそよに霞ふり寒き霜よをひとりかもねん
山邊霞

山邊霞

雲深きみ山のあらしさえくゞて生駒のたけに霞ふるらし
雪をよめる
はし鷹もけふはしらふに變る覽とかへる山に雪のふれゝは

冬歌

雪降てけふとしらぬ奥山にすみやく翁あはれはかなき
炭竈の烟もさひしおほはらやふりにし里の雪の夕暮
わか門の板井の清水冬ふかみ影こそ見えぬ氷すらしも
冬深み氷やいたくとちつらん影こそ見えぬ山の井の水
冬ふかみ氷にとつる山河のくむ人なしに年や暮なむ
ものゝふの八十宇治川を行水の流てはやき年の暮哉
白雪のふるの山なる杉むらのすくる程なき年のくれかな
かつらきや山を木高み雪しろしあはれと思ふ年の暮ぬる

佛名の心をよめる

身に積る罪やいかなるつみならんけふ降雪とともにけぬ覽

歳暮

老らくのかしらの雪をとゝめをきてはかなの年や暮て行覽
とりもあへすはかなく暮て行年をしはしとゝめん關守も哉
ちふさすふまたいとけなきみとり子と共になきぬる年の暮哉
ちりをたにすへしと思ふ行年の跡なき庭をはらふ松かせ
烏羽玉の此よな明そしはゝもまた古年の内とおもはん
はかなくて今宵明なは行年の思ひてもなき春にやあはん

賀

千々の春よるつの秋になからへて花と月とを君そみるへき
おとこ山神にそぬさを手向つる八百萬代も君かまにゝ

松によする祝といふ事をよめる

八幡山こたかき松の種しあれは千年の後もたえしと思ふ
位山木たかくならん松にのみ八百よろつ代と春風そ吹
ゆく末も限はしらす佳よしの松に幾代の年か経ぬらん
住の江に生てふ松の枝しけみ葉ことに千世の數そこもれる

君か代は猶しもつきし住吉の松は百たひ生かはるとも
祝のこゝろを

たつのゐるなからのはまの濱風に萬代かけて波そよすなる
ひめしまの小松かうれにゐるたつの千年ふれとも年老に鳧
大鶯會のとしのうた

くる木もて君「か」つくれる宿なれば萬代ふともふりすもあら南
梅の花をかめにさせるをみてよめる

玉たれのこかめにさせる梅のはな萬代ふへきかさし成けり
はなの咲るを見る

宿にある櫻の花は咲にけり千とせの春もつねかくし見む
苔によする祝といふことを

岩にむす苔のみとりの深き色を幾千世までと誰か染けん
二所詣し侍し時

千早振いつのを山の玉椿やをよろつとも色はかはらし
月によする祝

万代に見るともあかし長月の有明の月のあらん限は
河邊月

ちはやふるみたらし川の底清み長閑に月の影はすみけり
いはひのうた

君か代もわか世もつきし石川や蟬の小河の絶しと思へは
朝にありて我世はつきし天のとや出る月日のてらん限は

戀

初戀のこゝろをよめる

春霞たつ田の山のさくら花思東なきを知人のなき
寄鹿戀

秋の野に朝霧かくれ啼鹿のほのかにのみや聞渡りなん

戀歌

尾上イ

足曳の山の岡へにかかるかやのつかのまもなく亂れてそ思ふ
 我戀ははつ山あひの摺衣人こそしらねみたれてそおもふ
 木隠て物を思へはうつ蟬の羽にをく露の消やかへらん
 かさゝきのはにをく露の丸木はしふみゝぬ先に消やわた蘭
 月影のそれかあらぬかかけろふのほのかにみえて雲隠れにき
 雲かくれ鳴て行なる初鴈のはつかにみてそ人は戀しき

草によせて忍ぶる戀

秋風になひくすゝきのほには出す心みたれて物思ふかな

風によする戀

あたし野の草のうら吹秋風のめにし見えねは知人もなし
 秋萩の花のの薄露をおもみをのれしほれてほにや出なん

ある人の本へつゝ脱ぎはし侍し

難波かた汀のあしのいつまでかほに出すしも秋をしのはん
 鴈のゐるはかせにさはく秋の田の思ひみたれてほにそ出ぬる

戀のこゝろをよめる

小夜更て鴈の翅にをく露の消ても物はおもふ限を

忍ぶ戀

時雨ふるおほあらしのゝをさゝ原ぬれはひとつも色に出めや

神無月の頃人のもとに

鬟のみふるの神杉ふりぬれといかにせよとか色のつれなき

戀のうた

夜を寒みかもの羽かひにをく霜のたとひけぬ共色に出めや
 芦鴨のさはく入江のうき草のうきてや物を思ひわたらん

海の邊の戀

みのみイ

うきなみのをしまの海士の濡衣ぬるとないひそ朽ははつ共
 伊勢嶋やいちしの蟹のすて衣あふことなみに朽やはてなん
 淡路嶋かよふ千鳥のしはゝもはねかくまなく戀やわた覽

戀のうた

とよ國のきくのなかはま夢にたにまたみぬ人に戀やわた蘭
 須磨の浦に蟹のともせる漁火の灰に人を見るよしもかな
 あしのやの灘の鹽焼われなれやよるはすからにくゆり侘覽
 ぬまに寄てしのふ戀

かくれぬの下はふあしのみこもりに我そ物思ふ行衛しらねは

水邊の戀

まこも生る淀の澤水みさひるて影し見えねは問人もなし
 三嶋江や玉江のまこもみ隠れてめにし見えねはかる人もなし
 雨によする戀

郭公なくやさつきの五月雨の晴す物思ふ頃にも有かな
 時鳥まつ夜なからの五月雨にしけきあやめのねにそ鳴なる
 子規鳴やさ月の卯の花のうき言のはのしけき頃哉

夏の戀といふ事を

さつき山木の下やみのくらければをのれまといひて鳴郭公

戀のうた

奥山のたつきもしらぬきみにより我心からまといふへら也

草イ

おく山の苔ふみならすさをしかも深き心のほとはしらなん
 天原風に浮たるうき雲の行衛さためぬ戀もする哉

雲によする戀

白雲のきえはきえなて何しかも立田の山の名のみたつらん
 衣によする戀

忘らるゝ身はうらふれぬから衣さても立にし名社おしけれ

戀のこゝろをよめる

君にこひうらふれをれば秋風になひく淺茅の露そけぬへき
物おもはぬ野への草木の葉にたにも秋の夕へは露を置ける
秋の野の花の千草に物そ思ふ露よりしけ色はみえねと
露によする戀

我袖の泪にもあらぬ露にたに萩の下葉は色に出けり
こひのうた

山城のいはたの杜のいはすとも秋の梢はしるくや有らん
山家のちのあした

消なまし今朝たつねすは山城の人こぬ宿の道芝の露

なてしこによする戀

なてしこの花に置ある朝露のたまさかにたに心へたつな

草に寄て忍ふる戀

我戀は夏野の薄しけゝれとほにしあらねは問人もなし

あひてあはぬ戀

今更に何をか忍ふ花すゝきほに出し秋も誰ならなくに

すゝきによする戀

まつ人はこぬものゆへに花薄ほに出てれたき戀もする哉

たのめたる人のもとに

小篋はらをく露さむみ秋されは松むしの音に鳴ぬよそなき

まつよひの更行たにも有物を月さへあやなかつたふきにけり

まてとしもたのめぬ山も月は出ぬいひしはかりの夕暮の空

月によする戀

數ならぬ身は浮雲のよそなからあはれと思ふ秋の夜の月

月影もさやには見えすかきくらす心の闇のはれしやらねは

月のまへのこひ

わか袖におほえす月そやとりける問人あらはいかゝ答へん

秋のころいひなれにし人のもとへまかれしにたより
につけて文なとつかはすとて

うはの空に見し篋を思ひ出て月に馴にし秋を戀しき
逢事を雲のよそに行鷹の遠さかれはや聲も聞えぬ

遠き國へまかれ・^(り鷹)人八月はかりに歸りまいるへきよ

しを申て九月まで見えさりしかは人の許につかはし

侍しうた

こぬとしもたのめぬうはの空にたに秋風吹は鷹は來にけり

今こんとたのめし人は見えなくに秋風寒み鷹はきにけり

かりによする戀

忍ひあまり戀しき時は天原空とふ鷹の音に啼ぬへし

戀のうた

海人衣たみのゝしまに鳴たつの聲聞しより忘かむつゝ

難波かた浦より遠になく田鶴のよそに聞つゝ戀や渡らむ

人知す思へは苦したけ熊のまつとはまたしまてはすへなし

我戀はみやまの松にはふ蔦のしけきを人のとはすそ有ける

山しけみ木の下かくれ行水の音聞しより我やわするゝ

神山のやました水のわきかへりいはて物思ふ我を悲しき

苔深き石まをつたふ山水の音こそたてね年は經にけり

あつまちの道のおくなる白川のせきあへぬ袖をもる涙かな

^(り鷹)

忍山下ゆく水の年をへてわきこそかくれ逢よしをなみ

もらし篋ぬ忍ふの奥の山ふかみ木かくれて行谷川の水

心をし忍ふの里にをきたらばあふくま河は見まぐちかけん

としふとも音にはたてし音羽河下行水のしたの思ひを
石の上ふるの高橋ふりぬともとつ人には戀やわたらん

廣瀬川袖つく斗あさけれと我はふかめて思ひそめてき
あふ坂の關屋もいつら山しなの音羽の瀧の音に聞つゝ
石はしる山下瀧津山川の心くたけて戀やわたらん
山河のせゝの岩浪わきかへりをのれひとりや身をくたく覽
うきしつみはてはあはとそ成ぬへき瀬々の岩波身を碎きつゝ

戀

しら山にふりて積れる雪なれば下社きゆれうへはつれなし
雲のゐるよし野のたけに降雪の積り／＼て春にあひにけり
春ふかみ峯のあらしに散花の定めなき世に戀つゝそふる

月によせてしのふる戀

春やあらぬ月はみしよの空ながら馴しむかしの影を戀しき
思ひきや有しむかしの月影を今は雲のよそに見んとは

まつ戀の心をよめる

さむしろに獨むなしく年もへぬ夜の衣のすそあはすして
小庭にいくよの秋をしのひきぬ今はたおなし宇治の橋姫
こぬ人をかならず待となけれとも曉かたに成やしぬらん

曉の戀

さむしろに露のはかなくをきていなは曉ことに消や渡らん

曉の戀といふ事を

曉の露やいかなる露ならんをきてしゆけはわひしかりけり
曉のしきのはねかきしけゝれとなと逢事のまを成らん
人まつこゝろをよめる

みちのくのまのゝ茅原かりにたにこぬ人をもみ待か苦しき
まてとしも頼めぬ人の葛の葉もあたなる風を恨みやはせぬ

戀のこゝろをよめる

秋ふかみすそ野の眞葛枯々にうらむる風の音のみをする

秋の野にをく白露の朝な／＼はかなくてのみ消やかへらん
風をまつ今はたおなし宮城野のもとあらぬ萩の花の上の露
きくによする戀

消かへりあるかなきかに物と思ふうつろふ秋の花の上の霜
花よりも人の心は初霜の置あへぬ色のかはる成けり

ひさしき戀の心を

我戀はあはてふる野のをさゝ原幾よまてとか霜のをくらん

古郷戀

草ふかみさしもあれたる宿なるを露をかたみに尋こし哉
里はあれて宿は朽にし跡なれや淺茅か露に松虫の鳴
あれにけり頼めし宿は草の原露の軒はに松虫の鳴
忍ふ草しのひ／＼にをく露を人こそとはね宿はふりにき
宿はあれてふるきみ山の松にのみとふへき物と風の吹らん
年を経て待戀といふことを人々におほせてつかうま
つらせし次に

古郷のあさちか露にむすほゝれ獨鳴むしの人をうらむる

ものかたりに寄る戀

別にしむかしは露か淺茅原あとなき野へに秋風を吹

冬の戀

あさち原跡なき野へにをく霜のむすほゝれつゝ消やわた覽
淺茅原あたなる霜のむすほゝれ日影をまつに消やわたらん
庭の面にしけりにけらし八重葎とはて幾夜の秋か經ぬらん
古郷の杉のいたやのひまをあらみゆきあはてのみ年のへぬ蘭
すたれによする戀

津の國のこやの丸やのあしすにれまをに成ぬ行逢すして
戀の歌

住よしの松とせしまに年も経ぬちきのかたそき行逢すして
 住の江のまつ事ひさに成に鬼來むとたのめて年の経ぬれは
 思ひたえ侘にし物を今更に野中の水の我を頼むる
 をしかふす夏野の草の露よりもしらしなしき思ひ有とは
 きかてたゝあらまし物を夕月夜人たのめなる萩の上風

たなはたによする戀

七夕にあらぬ我身のなそもかく年に稀なる人を待らん

戀のうた

我戀は天の原とふあしたつの雲井にのみや啼わたるらん
 久かたのあまの川原に住たつも心にあらぬ音をや鳴らん
 久方の天とふ雲の風をいたみ我はしか思ふいもにし逢ねは
 我戀はかこのわたりの綱手なはたゆとふ心やむ時もなし

こかねによする戀

こかねほるみちのく山にたつ民の命もしらぬ戀もする哉
 逢事のなき名をたつの市にうるかねて物思ふ我身成けり

雪中待人と云事を

けふもまたひとりなめて暮にけりたのめぬ宿の庭の白雪

戀のうた

おく山の岩かき沼に木の葉落てしつめる心人しるらめや
 奥山の末のたつ木もいさしらす妹にあはすて年の経ゆけは
 ふしの根の烟もそらに立ものをなと思ひの下にもゆらん
 おもひのみふかき山郭公人こそしらね音をのみそなく
 名にしおはゝそのかみ山の葵草かけてむかしを思ひ出なん
 夏深き杜のうつせみをのれのみむなしき戀に身をくたく蘭
 大あら木のうき田の杜に引しめの打はへてのみ戀や渡らん
 それをたに思ふ事とて千早振神の社になかぬ日はなし

千早振加茂の川なみいくそたひ立かへるらん恨しらすも
 涙こそ行衛もしらねみわの崎佐野の渡りの雨の夕暮
 しらま磯邊の山の松のはの常盤に物を思ふ頃かな
 白浪のいそせちなるのとせ河後も逢みん身をしたえすは
 わたつ海になかれて出たるしかま川しかも絶すや戀渡り南
 君により我とばなしに須磨の浦に藻汐たれつゝ年のへぬ覽
 沖つなみ打出の濱の濱ひさきしほれてのみや年のへぬらん
 かくてのみ有磯の海のありつゝも逢よもあらは何か恨(み)む
 みくま野の浦の濱ゆふいはすとも思ふ心の數をしらなん
 我戀はもゝしまめくる濱千鳥行衛もしらぬかたに啼也
 おきつ嶋うのすむ石による浪のまなく物思ふ我そ悲しき
 田子の浦の荒磯の玉も浪の上にくきてたゆたふ戀もする哉
 かもめゐるあら磯のすさき鹽みちてかくろひ行は勝る我戀
 武庫の浦の入江のすとり朝なゝ常にみまくのほしき君哉

旅

玉ほこの道は遠くもあらなくに旅とし思へはわひしかり鬼
 草枕旅にしあれはかりこもの思ひみたれていこそねられね
 旅衣袂かたしきこよひもや草の枕に我ひとりねん

羈中夕露

露しけみならはぬ野へのかり衣ころしもかなし秋の夕暮
 野邊分ぬ袖たに露はをく物をたゝ此ころの秋の夕くれ
 旅衣うらかなしかる夕暮のすそのゝ露に秋風そふく

羈中鹿

旅衣すそ野の露にうらふれて日も夕風に鹿そ鳴なる
 秋もはや末野の原に鳴鹿の聲聞時そ旅は悲しき
 ひとりふす草の枕の夜の露ともなき鹿の涙成けり

旅宿月

獨ふす草の枕の露のうへにしらぬ野原の月を見る哉
岩かねの苔のまくらに露をきていく夜み山の月にねぬらん

旅宿霜

袖枕霜をく床の苔のうへにあかすはかりのきよの中山
しなか鳥ゐな野の原の笹枕まぐらの霜ややとる月かけ

旅歌

旅ねする伊勢の濱荻露なからむすふ枕にやとる月かけ

旅宿時雨

旅の空なれぬはにふの夜の床わひしきまてにもる時雨かな
屏風の繪に山家に松かける所に旅人あまたあるをよめる

稀に來て聞たにかなし山賤の苔の庵の庭の松風
まれにきて稀に宿かる人もあらし哀とおもへ庭の松かせ
雪降山の中に旅人ふしたる所

かたしきの衣手いたくさえ倦ぬ雪深きよの峯の松風
曉の夢の枕に雪積り我ねさめとふ峯の松かせ
雪中雪

旅衣夜半のかたしきさえくゝて野中の庵に雪降にけり
あふ坂の關の山道越わひぬ昨日もけふも雪し積れは
雪降て跡ははかなくたえぬともこしの山道やますかよはん

二所へまうてし下向に春雨いたく降しかは讀る

春雨はいたくな降そ旅人の道行衣ぬれもこそすれ
春雨にうちそほちつゝ足曳の山ち行らん山人やたれ

雜

海邊立春といふことをよめる

しほかまの浦の松風霞なり八十嶋かけて春や立らん

子日

いかにして野中の松のふりぬらん昔の人はひかすや有けむ

殘雪

春きては花とかみえんおのつから朽木の柵にふれる白雪

鶯

深草の谷の鶯春ことに哀むかしと音をのみそ啼
草ふかき霞の谷に春こもる鶯のみやむかしこふらし

海邊春月

住よしの松の木かくれゆく月の朧にかすむ春の夜の空
立よれば衣手涼しみたらしや影見る岸の松の川波

海邊春望

難波かた漕出る舟のめもはるに霞に消て歸る鴈かね
關路花

名にしおはゝいさ尋みむ相坂の關路に匂ふ花は有やと
尋見るかひはまことに相坂の山ちに匂ふ花にそ有ける
あふさかのあらしの風に散花をしはしとゝむる關守そなき

櫻

あふ坂の關の關やの板庇まさらなれはや花のもるらん
いにしへの朽木の櫻春ことに哀むかしと思ふかひなし
空蟬のよは夢なれや櫻花咲ては散ぬ哀いつまでも

屏風に春の繪かきたる所を夏みてよめる

見てのみそ驚ろかれぬる烏羽玉の夢かと思ひし春の残れる
なてしこ

根

ゆかしくは行てもみませゆき嶋の岩ほに生るなてしこの花

戀

我宿のませのはたてにはふ瓜のなりもならずも二人ねまほし
六月秋

わか國の山としまねの神たちをけふの御被に手向つる哉
仇人のあたにあるみの仇事をけふ六月の秋へすてつといふ

山家思秋

ことしけき世をのかれにし山里にいかにて秋のきつらん
ひとり行袖よりをくか奥山の苔の扉の道の夕露

故郷虫

たのめこし人たにとはぬ古郷に誰松むしの夜半に鳴らん

古郷のこゝろを

鶉なくふりにし里の淺茅生に幾夜の秋の露か置けん

契むなしくなれる心をよめる

契けむこれやむかしの宿ならんあさちか原に鶉なく也

あれたるやとの月といふことを

淺茅原ぬしなき宿の庭の面に哀いくよの月かすみけん

月をよめる

思ひ出てむかしを忍ふ袖の上に有しにもあらぬ月を宿れる

行廻り又もきてみむ古郷の宿もる月は我をわするな

大原やおほろの清水里遠み人社くまね月はすみけり

水邊月

わくらはに行てもみしかさめかひのふるき清水に宿る月影

〔あか〕
まな板といふものゝ上に鴈をあらぬさまにして置た

るを見てよめる

あはれなる雲ゐのよそに行鴈のかゝる姿に成ぬと思へは

聲うちそふるおきつ白浪といふふることを人々あま

たつかうまつりてし次によめる

住の江の岸の松吹秋風をたのめて波のよるを待ける

月前千鳥

玉津嶋若の松原夢にたにまたみぬ月に千鳥鳴也

冬初によめる

春といひ夏と過して秋風の吹上の濱に冬はきにけり

はまへ出たりしに海士のもしほ火をみて

いつもかく淋しき物が蘆のやにたきすさひたる蟹のも汐ひ

水鳥のかものうきねのうきながら玉もの床に幾よへぬらん

松間雪

高砂の尾上の松に降雪のふりて幾世のとしかつもれる

海邊冬月

月のすむ磯の松風さえくくて白くそみゆる雪のしら濱

屏風にちののみ山書たる所

冬こもるなちのあらしの寒ければ苔の衣のうすくや有らん

炭をやく人の心もあはれなりさて

も此世を過るならひはあしにわつるふことありて入こもれりし人のもとに

雪降し日よみて遣す歌

降雪をいかに哀となかわらん心は思ふともあしたゝすして

老人寒をいとふと云事を

年ふれは寒き霜こそさえけらしかうへは山の雪ならなくに

雪

我のみそ悲しとは思ふ波のよる山のひたひに雪のふれゝは

としつもるこしの白山しらすともかしらの雪を哀とはみよ

老人憐歳暮

老ぬれは年の暮行たひことに我身ひとつとおもほゆる哉
しらかといひ老ぬるけにや事しあれは年の早くも思ほゆる哉
打忘れはかなくてのみすくしきぬ哀と思へ身に積る年
足引の山より奥に宿もかな年のくましき隠家にせん
年のはての歌

雑

行年のゆくへをとへは世中の人こそひとつまうくへらなれ
春秋はかはりゆけともわたつ海のなかなる嶋のまつそ久しき
みさきといふ處へまかれりし道に磯邊の松としふり
にけるをみてよめる

磯の松幾久さにか成ぬらんいたく木高き風の音哉
ものまうてし侍し時磯のほとりに松ひさもと有しを
見てよめる

あつさり磯邊に立るひとつ松あなつれ／＼けともなしにして
屏風の歌

年ふれは老にたうれて朽ぬへき身は住の江の松ならなくに
住の江の岸の姫松ふりにけりいつれの世にか種はまきけん
豊國のきくの濱松老にけりしらす幾世の年かへにけん
屏風の畫に野の中に松三本生たる所をきぬかふれる
女人とをりたる

をのつから我を尋ぬる人もあらは野中の松よみきとかたるな
かち人の橋わたる所

かち人のわたれはゆるくかつしかのまゝのつき橋朽やしぬ蘭
故郷のこゝろを

いにしへを忍ふとなしに石上ふりにし里に我はきにけり
いその上舊き宮こは神さひてたゝるにしあれや人も通はぬ

相州の土屋といふ所に年九十にあまれるくちほうし
有をのつからきたりむかし語りなとせし次に身の立
居にたへすなん成ぬる事をなく／＼申て出ぬ時に老
と云事を人々におほせてつかうまつらせし次によみ
侍る歌

我幾そみし世のことを思ひ出つ明る程なき夜のね覺に
思ひ出て夜はすからにねをそ鳴有し昔のよゝの古こと
中々に老はつれても忘れなてなとか昔をいと忍ふらん
道とをし腰は二重にかゝまれり杖にすかりてそこ迄もくる
さりとともと思ふ物から日をへてはしたひ／＼によはる悲し
雑歌

何處にてよをは盡さん菅原や伏見の里もあれぬといふ物を
歎わひ世をそむくへきかたしらす吉野の奥もすみうしと云り
世にふれはうき言の葉の數ことにたえず涙の露ををきける
あし

難波かたうきふししけき蘆のはにをきたる露の哀世中
ふね

世中はつねにもかもな渚こくあまの小船の綱手悲しも
千鳥

朝ほらけあとなき波に鳴千鳥あなこと／＼し哀いつまで
鶴

澤邊より雲ぬにかよふ蘆たつもうき事あれや音のみ鳴らん
慈悲のこゝろを

ものいはぬよものけた物すらたにも哀成哉や親の子を思ふ
道のほとりにおさなきわらはのはゝを尋ていたく鳴
を其あたりの人に尋しかは父母なんみまかりてにし

とこたへ侍しを聞てよめる

いとをしやみるに涙もとまらず親もなき子の母を尋ぬる
無常を

かくてのみ有てはかなき世中をうしとやいはん哀とやいはむ
現とも夢ともしらぬ世にしあれば有とて有と頼むへき身か

わひ人の世に立めくるをみてよめる

兎に角に哀有けるよにしあればなしとてもなき世をもふる鴨

ひころやまうすともきかさりし人あかつきはかなく
成にけると聞てよめる

聞てしも驚くへきにあらねともはかなき夢の世に社有けれ

世間つねならずと云事を人のもとによみてつかはし
侍し

世中にかしこき事もはかなきと思ひしとけは夢にそ有ける
大乘作中道觀歌

よの中は鏡にうつる影にあれば有にもあらずなきにもあらず

思罪業歌
焰のみ虚空にみてるあひちこく行衛もなしといふもはかなし

懺悔歌
塔をくみ堂をつくるも人なけき懺悔にまさるくとくやはある

得功得歌
大目の種子より出てさまやきやうさまやきやうまた尊形と成

心のころをよめる
神といひ佛といふも世中の人の心のほかのものかは

建暦元年七月洪水漫天一氏愁歎せむことをおもひ
て一人奉向本尊聊致祈念

時によりすくれば民の歎なり八大龍玉雨やめ玉へ

人心不常といふ事をよめる

とにかくにあなきためな世中や喜ふものあらはわふる物有

黒

烏羽玉のやみのくらきにあま雲の八重雲かくれ鴈を鳴なる

白

かもめゐる沖のしらすに降雪の晴行空の月のさやけさ

ある人みやこのかたへのほり侍しにたよりにつけて

よみてつかはす歌

夜をさむみひとりねさめの床さえて我衣手に霜ををきける

かゝるおりも有ける物を手枕の隙もる風を何いとひけん

岩根ふみ幾への峰を越ぬとも思ひも出は心へたつな

宮古より吹こん風の君ならは忘なとたにいはず物

打絶て思ふばかりはいはねとも便につけて尋ね計そ

宮古へに夢にもゆかん使あらは宇津の山風吹もつたへよ

五月の頃陸奥へまかれりし人のもとにあふきなとあ

またつかはし侍し中に郭公かきたる扇にかきつけ侍

し歌

立別因幡の山の郭公まつとつけこせかへりくるかに

ちかうめしつかう女房遠き國へまからんといとま申

侍しかは

山遠き雲井にかりの越ていなは我のみひとりねにや鳴なん

遠き國へまかれりし人のもとよりみせはや袖のなと

申をこせたりし返ことに

我ゆへにぬるゝにはあらしから衣山路の苔の露にそ有けん

といひ侍しかは

ゆひ初て馴したふさのこむらさき思はす今に淺かりきとは

山の端に日の入を見てよめる

くれなぬのちしほのまふり山端に日の入時の空にそ有ける

二所詣下向にはまへの宿の前に前川といふ川あり雨

降て水まさりにしかは日暮てわたり侍りし時よめる

濱邊なる前の川瀬を行水のはやくもけふの暮にける哉

相模川といふかはあり月さし出て後船にのりてわたるとてよめる

夕月夜さすや川瀬のみなれ棹なれてもうとき波の音哉

二所下向後朝にさふらひとも見えさりしかは

旅をゆきし跡の宿守をれく^{のイ}に私あれや今朝はいまたこぬ

民のかまとより烟の立を見てよめる

陸奥に爰やいつくし^{〔し船歌〕}・ほかまの浦とはなしに烟立みゆ

またのとし二所へまいりたりし時はこねのみつうみを見てよみ侍る歌

玉くし^{海はイ}け箱根のみうみけゝれあれや二國かけて中にたゆたふ

箱根の山を打いてゝみれは浪のよるこしまありとも

のものに此海の名はしるやと尋しかは伊豆の海となん中とこたへ侍しを聞て

箱根路を我越くれは伊豆の海や沖の小嶋に波のよるみゆ

朝ほらけ八重のしほち霞わたりて空もひとつにみえ

侍しかはよめる

空や海波やそらともえそわかぬ霞も浪も立みちにつゝ

あら磯に波のよるを見てよめる

おほ海の磯もとゝろによる浪のわれてくたけてさけて散か

走湯山に參詣の時歌

わたつ海の中に向ひて出るゆのいつのお山とむへもいひ鬼

伊^{〔豆歌〕}の國山のみなみにいつるゆのはやきは神のしるし成けり

はしるゆの神とはむへもいひけらし早きしるしのあれは也鬼

神祇

瑞籬の久しき代よりゆふたすきかけし心は神ぞ知らん

里みこかみゆたてさゝのそよくになひき起伏よしや世中

かみつけのせたのあかきの神社やまといひかて跡をたれけん

法眼定恩にあひて侍りし時大峯の物語なとせし聞て後

よめる

幾かへりゆきゝの峯のそみかくたすゝかけ衣きつゝ馴けん

すゝかけの苔折きぬのふる衣いく木の本にきつゝ馴けむ

奥山の苔の衣にをく露は泪の雨のしつく成けり

那知瀧の有さまかたりしを

三熊野のなちのをやまに引ひめの打はへてのみおつる瀧哉

三輪のやしろを

今つくる三輪のはふりかすき社過にし事ばとはすともよし

加茂祭歌

葵草かつらに掛けて千早振賀茂の祭をねるやたか子そ

社頭松風

ふりにけるあけの玉かき神さひてやれたるみすに松風そ吹

社頭月

月のすむ北野の宮の小松原幾代をへてか神さひにけん

神祇

月さゆる御裳濯川の底清みいつれのよにかすみはしめけん

八百萬よもの神たち集まれりたかまか原にきゝたかくして

伊勢御遷宮の年のうた

神風や朝日の宮の宮うつしかけ長閑なる世にこそ有けれ

述懐

君か代になをなからへて月清み秋のみ空の影をまたなん

太上天皇御書下預時歌

大君の勅をかしこみ父母に心はわくとも人にいはめやも

ひんかしの國に我をれは朝日さすはこやの山の影と成にき

山はさけ海はあせんん世成とも君にふた心我あらめやも

右鎌倉右大臣集以一本及流布印本校合了

一本及印本所載歌

梅の花をよめる

咲しよりかねてそおしき梅花ちりのわかれは我身と思へは

春の歌

このねぬる朝けの風にかほる也軒はの梅の春の初花

雨中柳

青柳の糸よりつたふ白露を玉とみるまで春雨そふる

落花をよめる

咲はかつうつろふ山の櫻花花のあたりに風な吹そも

みちすから散かふ花を雪とみてやすらふ程に此日暮しつ

櫻をよめる

櫻花さける山路や遠からん過かてにのみ春の暮ぬる

水底の山吹と云事を人々あまたつかうまつらせし次

に

聲高み蛙なくなり井田の河岸の山吹今は散らん

立歸りみれともあかす山吹の花散きしの春の川浪

歎冬に風の吹を見て

我心いかにせよとか山吹の移ふ花のあらし立らん

三月盡

朝きよめ格子なあけそ行春を我聞のうちにしはしとゝめん

卯花

我宿の垣根に咲る卯花は憂事しけき世にこそ有けれ

神まつる卯月になれはうの花のうき言の葉の數やまさらん

深夜郭公

五月やみ小夜更ぬらし郭公神なひ山にをのか妻よふ

郭公

玉くしけ箱根の山の郭公むかふの里に朝なゝなく

照射

五月山おほつかなきを夕月夜木隠てのみ鹿や待らん

蟬

泉川はゝそのもりになく蟬の聲のすめるは夏のふかさか

夏の暮によめる

御被する萱か軒はに引してのまつはれつきて夏をとゝめん

詞書闕

今よりは涼しく成ぬ日暮しのなく山陰の秋の夕風

蟋蟀

秋の夜の月の都のきりゝすなくはむかしの影や戀しき

菊を

ませの内による置露やいかな覽ぬれつゝ菊の移ろひにける

秋の末によめる

はかなくて暮ぬと思ふををつから有明の月に秋を残れる
初冬歌の中に

霰

夕つく夜澤邊にたてるあしたつの鳴音悲しき冬そきにける
初しくれ降にし日より神なひの杜の梢そ色まさり行
武士のやなみつくるふこての上に霰たはしるなすのしの原
笹の葉に霰さやきてみ山への峯の木枯しきりてそ吹

雪

久かたのあま雲あへり葛城や高まの山はみ雪ふるらし

建暦二年十二月雪のふり侍ける日山家の景氣を見侍
らんとて民部大行光か家にまかり侍けるに山城判
官行村などあまた侍り和歌管絃の遊ありて夜更て歸
侍しに行光黒馬をたひけるをまたの日見けるにたつ
かみに紙をむすひ侍るをみれば

此雪を分て心の君にあればぬししる駒のためしをそひく
返し

ぬししれと引ける駒の雪を分ばかしこき跡にかへれと思ふ
建保五年十二月方達のために永福寺の僧坊にまかり
てあした歸り侍るとて小袖をのこしをきて

戀歌の中に

春待て霞の袖にかさねよと霜の衣のをきてこそゆけ
はみのほるあゆすむ川の瀬をはやみはやくや君に戀渡り南
夕月夜おほつかなきを雲まより仄にみえしそれかあらぬか
かれはてん後しのへとや夏草の深くは人のたのめをきけん
今さらにわか名はたゝしかはらやの下しく烟くゆりわふ共

もしほ焼蜚のたく火のほのかにも我思ふ人をみるよしも哉
足曳の山にすむてふ山かつの心もしらぬ戀もするかな
風吹は浪うつきしの岩なれやかたへも有か人の心の
よそにても有へき物を中々になにしかに人にむつれそめけん
名所戀の心によめる

須磨の浦に蜚のともせる漁火のほのかに人を見るよしも哉
から衣きなれの里に君をゝきてしま松の木のはては苦しも
我せこをまつちの山の葛かつらたまさかにたにくるよしも哉
水菫の岡邊のまくす枯しより身を秋風の吹ぬ日はなし
忍戀

時雨ふる秋の山へにをく霜の色にはいてし色にいつとも
寄月待人

忍ふれはくるしき物を山端にさし出る月の影にみえなん
恨わひまたしと思ふ夕へたになを山のはに月は出にけり
寄露戀

色をたに袖よりつたふ下萩の忍ひし秋の野への夕露
今もみてしか山かつのといふ事を

山賤のかきほに咬るなてしこの花の心を知人のなき
ある人のもとにつかはし侍し

秋の田のほの上にすかくさゝかにの糸我はかり物は思はし
旅の心を

草枕たひにしあれば妹にこひさむるまをなみ夢さへみえす
東路のさやの中山こえていなはいとゝ都や遠さかりなん
旅泊

湊風いたくな吹そしなかな鳥いなのみつうみ舟とむるまで
やしのさき月影さむしおきつ鳥かもといふ舟うきねすらしも

素還法師物へまかりけるにつかはしける

おきつ浪八十嶋かけてすむ千鳥心ひとつといかゝたのまん返し

濱千鳥八十嶋かけてかよふともすみこし浦をいかゝ忘れん

秋の比いひなれたる人のもとへまかりしに便につけて文なとつかはすとて

思ひ出よみしよはよそに成ぬともありし名残の有明の月

建保六年十一月素還法師于時胤行下總國に侍しころの

ほるへきよし申つかはすとて

戀しともおもはていかゝ久かたの天照神も空に知らん

松間雪

雪積るわか松原ふりにけり幾代へぬらん玉津嶋守

社頭夏月

なかむれは吹風すゝしみわの山杉の梢をいつる月かけ

寄松祝といふことを

田鶴のゐるなからの濱の濱松のまつとはなしに千世を社ふれ

行末の千とせをこめて春霞立田の山に松風そふく

障子の繪に岩に松の生たる所

岩の上に生る小松の年も經ぬ幾千世までさ契りをきけん

寄竹祝

竹の葉に降おほふ雪のうれをおもみ下にも千世の色は隠れす

なよ竹のなゝの百そちおひぬれとやそのちふしは色も變らす

なよ竹のちゝのさ枝のはゝ枝の其ふしゝによゝはこもれり

あひ生の袖のふれにしやとの竹よゝはへにけり我友として

大嘗會のとしの歌

今つくる黒木のむるやふりすして君はかよはん万代までに

慶賀の歌

宮はしらふとしき立て万代に今そさかへむかまくらのさと

群書類從卷第二百三十三

和歌部八十八家集六

常德院殿御集

文明十三年二月廿五日愚齋月次會

梅 風但延引廿九日

にほひをはかせこそをくれ人はいさ心もしらぬ宿の梅かえ

五月廿五日會瀧五月雨

秋山にあらぬころしも宮たきや心をまよふさみたれの空

九月廿一日より平等寺に七日こもり侍けるに道のま

かきに萩のなひくを見やりて

こゝろなき賤かかきほのひまにたに秋をしらす萩の上風

廿三日題をさくりてよみ侍し名立戀

ふしのねの煙のみさそおもひしに我身のうへに有けるものを

十四年二月五日飛鳥井中納言雅康卿遁世して江湖松も

とと云所にまかりてかしらおろし侍ときととめ

侍らんとために重信を遣し侍しに年月の望にて侍るな

と申て

かしこしな君につかへし道なくはのかるゝ山の奥もとはれし

返し 十日遣之

君に先仕へし道はさもあらはあれ遁るゝ山の奥はとひてん

三月末つかた折句をよみてかいたう花に付て同人のも
もとへつかはしける

形見にといひてやさても手折ましうつろふ花のけふの木末を

返し

梢にはうつろふ色も惜からし詞の花のときはかきはに

七月廿六日歌合し侍しに暮春鶯

暮行は身をうくひすの音にたてゝ啼はかりにもおしき春哉

九月三日家君長谷より葎かりのとて松たけを硯のふ

たに入てをくられたりけるを句の上に置て

ふみ分むたか通路もかひそなきへたてゝ遠き住家成せは

返し

吹かせに玉とみたれぬ萩の露きしの小薄ぬきもとゝめて

十一月十八日題をさくりて人々に歌よませ侍しに海

邊月

もしほくむあまの袖しのうら波にやとすも心有明のつき

日比古今集のこと葉にて人々歌よみける時

古郷はもみちふみ分とふ人も秋より後の山おろしのかせ

十五年三月六日打聞し侍る所にて人々歌よみ侍しに

雨中花

なかめやるをちの霞はそれなから櫻にくもる春雨の空

五月九日故招月廿五年忌とて正般藏主人々に一品經歌すゝめ侍しに序品

よをてらす光は一ひかりにてちかひはよもの法のともし火

懷舊

さらに今袖ぬらせとや廿あまり五月の雨のいとゝひまなき

廿八日庚申に二百首題をさくりてよみ侍しに

秋月

かけやとすしのふか原の秋かせに露ちる月はなを亂れつゝ

夜灯

待いてし夕の月はかたふきて軒端の竹にのこるともし火

日比すみはへりける所よりことかたへ移ける夜月の

くまなかりければおもひつゝけ侍りし六月十九日

軒端なる忍ふの露をかた見にて忘れなはてそ古郷の月

その比姉小路宰相基綱卿歌合の判をこひ侍しに詞にま

かせ侍し折句

折しもあれ夏なき床に清水もりしくれぬ松をならす谷風

やそ嶋やみちくる鹽のはるゝと松はらかけてくもる浪哉

霜こほり露さむくなる山かけはさそなかれ行柴のした草

とまやかたも中の月の西かけてよなゝなみも少時宿かせ

しらせはや野への小篠をふみ分て通ひし袖に露かゝりきと

すみ捨て通ひしみちも絶にけりよもきふ深き柴のあみ戸は

露なから月こそかゝれ葎はふまかきのもとの草のしけみに

よしやたゝきえねと思ふ月くさの形見の露はひる袖をなみ

秋はまたほにいてぬ萩の白露よたのめぬ袖になとかゝる覽

晦日に北野法印禪椿社頭に侍しとて松虫ををくりたる次てにそえ侍ける

君をいのる神かきなれは松虫も秋より先にこゑよはふ也

返し

名にしおはゝ秋も一よにめぐりこむ神の宮ゐの松むしの聲

七月廿五日月次會萩風

なく鷹をれさめの床におとろけは時しもあれや萩の上風

岡鹿

柞原またきもみちぬかた岡のすそのゝま萩鹿や分らむ

八月十五日夜公宴三首月前秋風

をくつゆはのきはのかせに亂れきて萩にしらめる庭の月影

湖月似氷

あま人はぬるもかた田の秋の月氷のなみに袖をまかせて

寄月顯戀

もれそめし露の行衛をいかにとも袖にこたへは月や恨みむ

月のいとあかき夜こむといひてきも侍らさりければ

文のおくに

ひとりみる今宵の月のおもかけを空たのめなる人になしてよ

返し

面影もさめうかるらん獨みるこよひの月のそらたのめして

十月廿五日月次會氷閑細流

さらてたに岩まかくれし山水の氷てのちは面かけもなし

寄名所戀

みるもうししゐておもへとわかれての後せの山の有明の月

かきなかす谷の下水哀ともうきなをかけむことの葉そなき

旋頭

驚のひとつと告る我宿の梅かゝにおりしる比は猶そまたるゝ
混本

しまつとりうのゐるいしにはふ松のねをのみそなく

折句

ふくる夜は雪のたるひに軒開て氷にさむきひとりねの床

沓冠折句

夕たゝみむかひの山ちくれなからたかゆく方か雲に距つる

十一月二日北野社へたてまつるとて人々にすゝめ侍

し名號のうたよむ

昔おもふ形みのみけしいかなれはちさとの浪に袖は朽けむ

い

いつくより雪けの雲になりぬらむ時雨も過ぬよもの嵐に

神

かみかきやみかきの松の手向草色なきつゆの言の葉そこれ

廿八日石清水法樂櫻

さくら色の初はな衣つゆかけてかすみにほふ春雨の空

十二月十二日姉小路宰相基綱卿 自詠を百番歌合につか

ひて後成恩寺關白判詞書給しを 一見しはへれは 曩祖

濟時大將のことをよみ侍ければ返すとてつゝみ紙に

かきつけ侍し

返し

我そまつしつみはてける水底の月になけきし跡ならねとも

なけかしな君か光をたのむみはしつみもはてし水底の月

水底の月をあはれとなかめてそかゝる言葉の玉もかりける
十六年正月廿五日源尚俊家會始に庭松弄毎年 舊冬移宿所

也

殿つくり三は四はの松かけに猶たちならひいく千代かへむ

三月十日のころいはし水の社にたてまつりける卅首

内

八重むくらかこふともなき古郷に人こそ見えね松虫のこゑ

うらみしないせをのあまのすて衣なるればそれぬるゝ袂を

いつかさてみ山の竹に庵しめて浮世のなかを哀とおもはむ

十二日十首のたいをすゝめて人々よみ侍しに

海邊驚

おきつなみ吹上のはまのはま風に花かあらぬか驚のこゑ

同ころ多田院にこめ侍し五十首の中

いつのよのたかゆかりにかそほつ覽蓮つむ野に春雨そふる

かたそきの行あひの霜のよや寒き衣うつなり住吉の濱

廿八日臨時會藤爲松花

くさならぬ濱松かえの藤なみをけふの手向にさそなうくらし

右歌者。舊冬對ニ後京極殿讀ニ和歌ニ之時。攝政殿語

云。春日山都能南志賀曾懷北濃。藤浪葉流耳案邊登

輪。是隨分思給云々。奇特夢想也。然仰ニ中納言入道ニ

彼御像令ニ書寫。狩野大炊入道色紙形之歌大納言入道書レ之

畢。則於ニ影前ニ披講。題者亞相禪門。讀師同。講師雅

俊朝臣也。

四月梅子につけてつかはしける

あはれにもをしへの道をきかぬ哉昔の友はめぐりあへとも

返し

教へすばそれともわかしさかぬ間の草葉にまじる蘭も紫苑も
宮御方へ折句をよみて芍薬につけて參らせし

中納言入道

しけり行山下陰の草むらにやとれる露や暮をまつらん
御返し

しら露のやとれるからに草ふかき山ちや秋のくると見え南
同比かな題の歌人々よみしに卯のはな

のこりけり月の入にし籬にも光はとめつにはのうのはな
廿六日いにしへの歌仙の名を題にて人々よみけるに
俊成卿

行すゑにしのはれぬへきことの葉や昔の筆の跡にとめけん
爲世卿

白玉の葉分のかせやいにしへの伏見の竹のすかたなるらむ
五月二日内より慈惠大師の御法樂とて題を給侍しに
よみて奉れる

春雨

いにしへのいもゐの庭の春の雨に草の庭のめくみをそしる
山家

かしこしな横川の峯に契ありてよはひは杉のかけとふりにき
廿五日月次會夏虫

日くらしのなく音を風にたくへきてぬれぬ時雨を松にきく哉
六月下旬太神宮に奉りし百首歌中に

立春

時しあれば神にむかしやおもひいつる天の岩戸のはるの曙
花

家つとによしさはたをれ山口はいかゝいはねの初さくら花
七月四日人々に萬葉風舩のうたをすゝめて褒貶し侍

駒なめて草かの山を分行はあさちか末にきり立わたる

夜に入て人々題をさくりてよみ侍しに初秋
しかりとてそむかれぬ身の夕暮にまつなけるゝ秋の初風

七日に中納言入道すゝめ侍し七首のうち

七夕天象

星合をまちつゝをれは天川しら浪たちて月かたふきぬ

七夕植物

露はかりかけむ言葉の色もなしけふの手向の千種ならては
堀川院百首二の題を一首につくりて五十首をすゝめ

て千首に書なし侍けるととき

立春子日

子日する松のよはひに契をかはこれや万代やとのはつ春
打聞し侍る所にて人々題をさくり侍しに

閑居秋風

ひとりきく袖のなみたにふきとめて月にのこれる萩の上風

廿五日月次會餞別

白露のをくるゝけふの袖よりやたひれの山をおもひ出らん
その比うれふること侍ければ奏し侍し

たれもまたぬれぬめくみの秋の露浮身はくらね谷の下草

御返し

万代の秋をもちきれいやましにこたかゝるへき松の言の葉
八月に従一位富子もとより女房ともなひてまうてき

たりけるかかへらむなと申をきてつくりたる萩のあ
りけるに付てことつて侍し

來る人に秋のたよりはうとくとも萩のうはゝの風につて南
返し

ほのかにも萩ふく風のつてにこそ君か言葉の便をも見れ

行人のたよりすくさぬ言傳をいかなれはかく疎しといふ覽

十五夜公宴御會三首霧間月

立きりもへたてなけてそいもせ山こよひそ秋の中河の月

返書戀

さき中のかたみはとめしとはかりにうらみて歸る筆の跡哉

旅祝言

都思ふ草のまぐらのかりねにもしつか成代を夢に見えける

十九日月のおもしろかりければ俄に人々めして歌よ

ませ侍けるに名所里月

この里は初瀬のかねにゆめ覺て月をふしみの有明の空

廿八日打聞の所にて人々歌よみしに

朝萩

のる胸のあしたの原の露分ていき見にゆかむ秋萩の花

九月五日源義春にはかに身まかりにければ十二日あ

すは明月の名をえたる空を思ひやりて

おりにあへはなたかき月も曇れたゝ跡の煙を忍ふはかりに

内よりもみちのかた枝そめたるを賜はすとして

立田ひめをるや錦の青地にもえたに一村見ゆるなりけり

御返し

からにしきいつれの色も立田姫おほぬさにはなと織初けむ

打聞所にて人々題をさくりて

寄虎逢戀

忘れめやこよひの露のかね事はとらふす野へのためし成共

十五日同所當座に秋田

秋山のふもとのをしねこきたれてかり庵さむみ時雨ふる也
同所にて題をさくりてうたよみ侍し時

古郷聞鹿

こぬ妻をまつとせしまにあればてゝ野となる庭にさを鹿の聲

十月の比周全法師出雲國へまねきの侍をつかはす歌

をもをくりてむやとありければよみてつかはし侍し

此比のいつも八重垣へたつともしくれの空に君かへらなん

自ニ内裏ニ賜ニ紅葉ニ仍奉之

いく秋か時雨ふりをける一もとの色にならへむ言のはそなき

二十首歌よみはへりけるに

夏去はあさのよりてのそよさらに御萩すゝ敷浪のゆふして

小川亭にまかり人々遊なとし侍し次に題をさくりて

冬竹

一よさへ夢やは見ゆるくれ竹のふしなれぬ床に木枯の風

今夜一夜逗留仍如斯詠也。

打聞の所にてよみ侍し檜原雪

穴師川かは音さむしまきもくのひはらや雪にうつもれぬ覽

寄草戀

かれねたゝ思ひいるのゝ草のないつしか袖の色に出る共

瀧水

吉野川よしや憂身はたきつせの岩にくたくるあはれ世の中

十一月八日四季戀のかなの一字をかしらにおきてそ

のこゝろを人々によませ侍しに

初瀬ちやむかしの梅のたよりさへ心もしらぬはるの夕かせ

韻字を置いてよみ侍しに林變容輝宿雪紅

たつた山梢の雪はつれなくてさくらをくるゝはるの紅

露暖南枝花始開

夏のくるかたえの梅のはるは先つゆあたゝめて花や咲らむ

十二月廿五日月次會冬浮嶋原

ふる雪にふしのねかけて見わたせば松に色なき浮嶋か原

因幡山

きのふこそ秋はいなはの峯の松あらしにかはる冬やきぬ覽

二見浦

ふたみかたあふよも夢のとはかりにあけてかひなき浪の手枕

十七年正月十日題をさくりて百首歌よみ侍しに梅

楨の戸ををし明方の梅かゝにうき春かせや夢さそふらむ

廿五日月次會始鶴有退齡

いく年を立かさぬらむ山高みけるのかすみも鶴の毛ころも

この會に大納言入道限なくよゝ(は歌)ひはくもゐはる

かにて宿にきなるゝひな鶴の聲とよみ侍りければ遣

しける

契りをく君かよはひもおい鶴のこゑふきかはせわかの浦風

返し

羽杖つき霜をふるまでおい鶴の恵あらせよわかのうらはに

二月廿二日水無瀬殿法樂とて藤原政行すゝめ侍し立

くれはとりあやに霞ををりかけてけさより來春の山のは

歸鴈

ほとそなき秋にこしちの月かけを花にかすめて歸る鴈かね

忍戀

くもるよにこむとちきらむそをたにもいはゝ知南袖の月影

別戀

さらすとしてつらからなくに鳥の音を恨みて慕ふきぬ空イの袖

觀世音菩薩と云字を上空イに置いてすゝめ侍りしなり。

廿五日北野宮にたてまつらむとて人々すゝめ侍し山
寒花遅

かつとくるなみの初花色みせて匂うち出ぬ谷の下影

白地戀

かりそめのみちのたよりの梅の花そのかにふれし袖を忘れぬ

三月八日水成瀬殿法樂とて三十首うたよみしなかに

これも又みゆきの跡は哀なり大内山のはなのした影

廿一日東山の花見に人々まかりて題をさくり侍しに

初はな

いくより開しはしらすこれやこの宿を千年のはるの初花

古寺花

夕つくひ雲に櫻はくれはてゝ入あひさひし志賀の山こえ

その比句ことにあまりたるとて風前花

名残あれや梢ふきはらふ花の雲の明かたの月に山嵐のかせ

廿五日源尚俊會に路落花

こぬ人をいとひしまてはなかりしにさても苔ちの花の白雪

閏三月十四日當座に夕喚子鳥

鳥のなの呼聲くれぬわきもこをきませの山の待とせしまに

廿一日水無瀬殿法樂春庭

みなせ山なかめすてけむはるの色の霞と消し跡そかなしき

春弓

夏はまた弓末見えこしむさしのや束のまもなき春の若草

廿五日月次會林喚子鳥

よふこ鳥鳴ねに花や散ぬらむはやしの木かけ春そ淋敷

閏三月盡 彌生山かさなる雲の花衣なれてもつらしはるの別は

廿六日人々に六首歌よませ侍しに

けふよりや霞の袖も廣せ川淺せのみつはかつこほれとも

四月二日人々雜躰歌よみ侍しに折句

朝日かけ山の尾上にめくりきてくるゝ雲より五月雨の空
夕まくれきき山かけにふる雪のかたえになひく柴の下草

隱題 山寺

すむ月のなかにありてふ男山てらさむまては猶そたのまん

廿五日 月次會 戀鏡

つらきかなみしおもかけもうつり行人の心の花のかゝみは

同比源氏日錄にて雜躰歌よみ侍しに隱題桐壺

秋のきりつほめる花の籬よりひとりほにいてゝなひく萩原

榊

いかにせむ通ふ玉つきかきたえて手にもたまらぬ水くきの跡

五月七日雨のふり侍しに人々うたよみける次に寄雨

釋教

おりくゝに草木の色は變れとも催す雨はをのかひとしほ

十一日右京大夫勝元十三廻なりよりて源政元一品經

歌人々にすゝめ侍しに懷舊

たらちねの庭調はのこるともいさめしみちのあとやこひ敷

副法花經遣之畢。

同日水成瀬殿に奉し五十首内則奉納言

はるはけにきひのなか山かすむ也ほそ谷川も氷とくらし
あらし吹み山の秋をわけ行は月よりおつるまつの下露
我心まかれる枝はもとめねと人のななきそまれに成行

打聞のために五十首歌人々によませ侍しに述懷の題
にて大閤をろかなる身ながら代々のあと付て三度そ

越しせきの白雪と侍けるをみてまいらせし

かしこしなふりにしよゝの跡とめて三度こえける關の白雪

返し

くもりなき世々の跡にもこえつへし君かこと葉の玉の光は

人々に廿一首をすゝめて日吉社に奉る中に

殘雪

春の色は淺茅か末にむすほゝれ風はあらちの山のしら雪

山時鳥

卯の花のまかきの山の時鳥夜もこえてやなかむとすらむ

紅葉深

露しくれのこれる山のもみち葉に夕日をそめて秋風そふく

述懷

われを人をろかに思ふ程はかり人をわか身のおもふよも哉

七月廿五日月次會露

浪のたまも秋にみたれて浦かせのふき上のをのゝ葛の夕露

薄

あつさ弓入のゝ薄わけまかひをちかた人に秋かせそふく

橋

この里は山のかけはし苔ふりて杉のした道とふ人もなし

八月廿五日月次會曉月

露しけき有明かたの秋かせに月かけさひしふる里のには

卜戀

いかにせむ浮木の龜のうらみてもあふせによらぬ契成せは

奉納之

九月十一日水無瀬殿に奉りけるうたの中に別に(副イ)
袖の色ははなかなぬか都人わかなつむ野に雪はふりつゝ

廿五日月次會秋山朝

かつらきや花に詠めし名残かはもみちにかゝる峯のよこ雲
 廿八日源尙氏歌合の判をこひければ書てつかはし侍
 しうち

折句

さひしきは浮身も秋のひとりねにともを尋て鹿そ鳴なる
 山風に薄も菊もしほれけり峯のもみちはきのふとおもふに

十月二日自歌をつかいて柏木に判をこひて聖廟にた
 てまつりける時早春待花

あしかきのよしのゝ山のあき霞まちかき花の俤そたつ

遐齡翫鶯

いくとせのはるにきゝけむ乙女子か袖ふる山の鶯のこゑ

砌下垂柳

古郷の軒はの柳時しらぬわか世の春のすゑもたのもし

河邊春月

駒とむるひのくま川の春の夜にかけみる月もかすむ比かな

罽中曉花

たひねする木のしたかけにかけおちて花の袂も有明の月

山家秋夕

山里はかきほのことり庭におりて木の葉色つく秋の夕暮

池草水閑

とをつ人かりちの池は氷してひしのかれ葉も霜さゆるころ

寄山神祇

春日山その藤浪の末ならはきたのゝ松にかけてたのまむ

述懷非一

憂まゝに人のとかとは思へ共思ひとくにそ身はしられる

廿七日古今集に同文字なき歌とて侍るを上に置いて卅

一首人々によませ侍し各冬也

よしの山おちのはの梢いかならむはや古郷はみそれふるなり
 侍從中納言實隆に筆をたつて侍しかは遣とてつゝ
 み紙にかき付て侍し

草かくれ霜の下なるきりゝゝすいかなる春にあはんとす覽
 返し

霜の下にうつもれぬとも蜚こと葉の春にあはさらめやは

十二月廿五日月次會閨埋火

しもの後松の戸ほその閨のうちにつれなくむかふ埋火の本

罽中雲

芦曳の山分衣たつくもの袖もほしあへすうち時雨つゝ

十八年正月廿五日月次會始松爲久友

君そみむ四もとの松のかけしけみ雲ゐるみねに生のほる迄

同日源尙俊家月次會梅契還年

いく代かはふりさけみえん春日なるみ笠の森の春の梅かゝ

藤原尙隆鶯のうたこひ侍しに

山鳥の尾上の梅に宿しめてなかゝし日をうくひすそ鳴

二月廿二日水無瀬殿法樂とて藤原政行すゝめ侍しに

立春

けきよりは色わくほとに日かけさす岡への松に春はきに見

三月宮御方へ梅枝をまいらすとてむすひ付侍し

おもひきや春しらぬ身の宿に咲軒はの花は君かためとも

御返し

花もさそ我もまちえてうれしきは君か言葉の色をそへつる

白藤につけて藤原尙隆につかはしける

君か心するの松山こさはこそこの藤浪のかけてうらみめ

返し

藤浪のかけてたのまはよもこさしふかき契りのすゑの松山

四月六日宗山より予出題にて廿首歌すゝめたりしに

窓柳春十首歌同之

これも又窓の螢の光かな柳にぬけるつゆのしらたま

野徑堇

すり衣君か袖ふるはる雨に紫のゆきすみれつみてん

松藤

石はしる瀧なき山の松かえにおち来る水や春の藤浪

庭萩

いつのよの秋の哀のかせよりかのきはの萩の音つれぬらん

見萩

袖の露は人の心をそめはてゝ萩の下葉の色そうつろふ

秋竹

しくるとも色はかはらしくれ竹の園生の秋の代々のした影

九日石清水にこめ侍し卅首内落花

風ふかはなしと答へむ門さしてちらぬ櫻にあはさらよしを〔ま歟〕

十六日四季をわかつて人々歌よみ侍しに

霜か雪かひとりなかつてきよ衣打おとろけは有明の月

廿二日褒貶歌合に首夏

木々もはやかとの衣袖かけてれ覺のまとの露のしたかせ

藤原尙隆一夜こぬ事侍しに五月六日あやめにつけて

つかはしける

見せはやな菖蒲の枕ひとりねてけさ迄かくる袖のうきねを

返し

袖の上にかくる菖蒲のなかきねを君かよはひの枕にそひく

十日古人の名にて人々歌よみ侍しに山邊

取名

春日山のへのさをしか心せよ秋萩さきて露みたるなり

忠岑

取歌

いにしへの有明の月の別より秋の心のかきりをそしる

順

取名

なには湯ことうら船の名もつらしたかうき中に遠さかる覽

俊頼朝臣

取歌

まさきちる峯のあらしの音信をきゝけむ人は逢よしもなし

爲家卿

同

花のすかた面影にして散にけんその木のもとそ今も戀しき

頼阿法師

取集

今もなを袖にかけてそおもひしる草の庵の言の葉の露

雅世卿

取名

蔦かえてしけみわけきてうつ山のさよ更かたの露にぬれつゝ

廿二日公宴水無瀬殿法樂五十首乍隨不逢戀

うき契り結びもやらぬ揚卷のとくる氣色はいかて見えけん

戀自我下人

山かつのなけきの程をおもふには宿のけふりも立ける物を

右題十九日賜之。廿一日詠進之。御一座之様戀難題

五十首也。作者廿二人。各二首詠之云々。

廿五日月次會夏草露

草ふかきまかきの本のきりくす秋まつ露や泪なるらん

寄糸戀

河内女か手染の糸のくるとあくと思ふ心いく夜をか經し

遠寺鐘

はつせ山あらしにまかふ鐘の音をふしみのくれに誰か聞けん

十五日藤原尙隆十首歌人々にすゝめ侍しに

峯霞

みよしのゝ青ねか峯はかすめ共こけの衣はたつとしもなし

鷹

御かり野や木居せぬたかの振舞に寛かひしてすゝやときてむ

楊貴妃

宮の内は露のうてなとなりはてゝ消けむ人の跡そかなしき

つくりたる松に露の置たるを筆にそへてつかはすと

て

いくかへり松にをく露積りてかふての海とはならんとす覽

返し

藤原尙隆

いく代まで松の言のはかきあつめ盡せぬ筆の海をたゝへん

八幡名號を上をきて卅三首歌社頭に奉りしなかに

むかしたれ古のゝ澤につみそめてかたみのわかな袖濡す覽

八月初つかたよみ侍しはつせ山

心あてにわかはそのわかむ初瀬山ひはらの露に秋はなけれと

十日藤原尙隆すゝめ侍し歌合に山家月

岡のへや松ふくかせに夢さめてのき端の山の月を見るかな

依戀祈身

此まゝにかけはなれすはしめ繩のなかきを人の契と思はん

十五日夜二首歌中納言入道すゝめ侍しに秋月入簾

月見よとすたれうこかす秋風に君まちをれは夜そ更にける

九月二日假名題歌よみ侍しにふちはかま

又やこむすそ野の原のふちはかままはきにすれる花の盛を

こひわひぬ

人よさていかに難面く永らえむ戀わひぬ共しりてやみなは

九日宗山聖隣に詩歌をたてまつられけるに不逢戀

山鳥の尾上のさとはなのみしてかくろへかねし夕暮の空

廿一日藤原尙隆人々にすゝめし歸鷹

おりしあれははるのにしきやこれならむ柳さくらの衣鷹金

雑々の歌に

あきらけき御代の光をしるへにてよみに曇らぬ春は來に鬼

下もみちうつろふ此の山風は月のためともおもはざりしを

わしの山高ねの花のにほひてそひらけそめける法の言のは

廿五日月次會關鷄

あしからや關ちの鳥のなくねよりいそけとくらき竹の下道

十月中旬題をさくりて夕落葉

夕つく日さすやは山の峯の松のこるこすゑはあらし吹也

十五日柏木大納言もとよりもみちにつけて

うすくこき此一枝は山ひめの心をいかてわけてそめけん

返し

山ひめのそむる心の色よりも君かことはやたくいながらん

十一月中つかた藤原尙隆とさしむかひに歌よみ侍し

とき江雪

湊風夜さむになりぬあすや又なこ江のたつの雪にうかれむ

廿三日三十首歌日吉社にこめ侍けるに

早春

きのふけふくものはたても霞みつゝ天津空より春はきに鬼

無常

大かたの夕のくもゝあはれなりわか身のいつの空に詠めん

寄神祇祝言

くもりなき君か世いのる心こそ日吉のかけの使なるらめ

朗詠題にてよみ侍し歸廓

したふそよ春の有明の山のはにたへてつれなく歸かりかね

僧

いかにせん衣にかゝる玉ゆらのしはしはなれぬ浮世也せは

將軍

八雲たつ出雲やへ垣宮みせし契のすゑはたえしと思ふ

十二月中旬あふことはと云五字を上へすへてよみし

十首内

逢ことはいなはの山の秋のかせしくれぬ松の色もうらめし

海住山大納言高橋卿御扶持あれと言事を句のかみにを

きてたひ侍し

心さしふた心なく契りきてあふく君にはれいもたかへし

返しこゝろゆる

これも又これも又とやろんすらむ弓と馬ともるい代のみち

源寛行人丸名號の賛に愚詠をよみてと申侍ければか

きてつかはし侍し

風のすかたあふきてみれば敷嶋の山とし高き言のはそこれ

文明十九年二月廿日石清水社法樂廿首内

いつる目のかけこそかすめ豊國の鏡の山に春たつらしも

かた鋪の袖のむめかゝ句ふよは春の嵐にねむかたもなし

露は猶いつれのかたにみたるらむ軒の柳にさゝかにの糸

なにとなき歌よみしに初秋雲

今よりのなかめへたつなみねの雲露もしくれも色は分とも

擣寒衣

しもやたひおきなさひ行仙人の鶴の毛衣たれかうつらむ
俳諧歌に鹿

とにかくに船につきたる名なり鳧かいよと鳴もさを鹿の聲

廿三日姉の去年身まかりしをとふらふとて一品經の

うたの人々によませ侍しに勸發品

頼もしな法の衣のおりに逢ておほふはかりの袖のめくみは

申出 御製隨而公武詠之。廿八人各一首也。

三月中比見るに梅の花をかさりてうちの女房につか

はすとして

渡津海のかさしの花は有といへと梅見る迄は思はさりしを

盡日人々に五首歌すゝめ侍しに

夕月夜有明のかけをしく花のかたみもつらしみよしのの山

梓弓はるくれぬめりいささらは彌生の空を引もとめなむ

雲かへるやよひの山のもゝ千鳥散にし花に詠なくても

歸こむ我身の春もしかりとてそむかれなくにしたふけふ哉

ちりし花のこれる藤の花までも獨なかつておしむ春哉

五月廿一日庚申によめる夏風

川きしや岩ねの柳うちなひきむす清水に山かせそふく

夏車

夕かほの露の契りやを車のとこなつ〔か服散〕しきかたみなりけむ

夏刀

あやめ草おなしすかたに置馴て枕の露や光そふらむ

廿五日月次會森

たかさとのたよりもしらす玉嶋やこの川上の五月雨の比

竹

山本や里のけふりは立消て竹にのこれるあきのゆふかせ

六月六日折句歌おもてかは

奥山のもみちややかてらす覧かたへの日影はや時雨つゝ

七夕七首人々にすゝめて褒貶歌合し侍しに

待七夕

君やこむ我宿たとる夕くれの雲のはたての星あひの空

七夕雲

白雲は聳にけりなたなはたのあまつひれふると空にみる迄

七夕霧

彦星の待夕くれの秋かせにきりたな引てあふ人もなし

七夕橋

はつ秋のもみちの橋の色よりや四方の梢もちゝにそむらん

七夕衣

へたてゝもよはのつらさは恨なよ七夕つめの中のさころも

七夕舟

七夕のたむけのみかは秋ことにけふのかちとる漢川をさ

七夕後朝

立かへりこむ秋までのかねことやあまのかはらの葛の下風

人衆十人。大納言入道付ニ當座勝負。

廿七日諏方社法樂とて神主貞通時信の守兼日より題を

たひ侍し花

さゝ竹の大みや人の春の色にさほ山さくらさきにけらしも

戀

うき人の心のおきの袂より月と露とはうらみはてゝき

祝

すくなるを眞に定めまかれるをみちにおこなふ我君のため
廿九日父の十七年忌とて藤原政行すゝめ侍し一品經

歌に序品大光普照のこゝろを

秋の空心よりすむ法の月はてらしのこせる山のはもなし

懷舊

十あまり七年過し秋かせは今もたもとにふく心ちして

自二十八日長享

八月下旬つれ／＼に人々歌よみ侍しに菊萱

いつ迄か韓の床にたのみけむ露にはかなきのへのかるかや

九月三日宗山勸進に夜萩

くさののおきて詠めし夕くれたえけるものをよはの秋風

寄鳥戀

はしたかのをのれあふ事ばかたきよに心打絶て物をこそ思へ

但廿八日給題。仍朔日詠進之。

十二日近江國進發のためにおもむき侍しにまつ東坂

本の陣所にて十九日續歌よみ侍しに暮秋山

なか月や日もうす衣たつた山もみちのにしきあらしふく也

夜神祇

神樂歌にうたふさゝ浪よるなれとひよしのちかひ曇らぬ物を

十月四日さかもとよりうみをこして安養寺と云とこ

ろへちんをよせ又しはらくそれに逗留し侍しなかに

女房のなかへのよしにて家君に贈侍し

坂本のはまちを過てなみ安くやしなふてらに佳とこたへよ

返し

やかてはや國治まりて民やすくやしなふてらも立そかへ覽

廿七日まかりと云所へ父陣かへし侍しに霜月廿日あ

まり中納言入道宋世もとより
かへりねと志賀の浦浪たゝぬ日も君を都にまたぬ日はなし

返し

思ひとけは浮世なり見しかの蜚の業もしつへき旅の日敷を
同比鴈のつはさにむすひつけて侍從中納言もとへ
此まゝにきてややみなむ十あまりこゝのへ年は空に行共
かへり事

遠きをもおさめしる代は行かふ鴈のつかいの空に見え鳧

閏十一月廿八日一昨日より二樂軒安養寺に宿をとり
て卅首歌張行侍しに朝山雪

朝ことの花になかめむ色よりもかゝみの山のさくら木の雪

卽談合二樂每朝鏡山一段神妙々々十二月二日侍從中
納言くたり侍りしに御製をおくり給てはへりし

君すめは人の心のまかりをもさこそはすくに治なすらめ
御返し 四日奉之

人心まかりの里そ名のみせむすく成きみか代につかへなは
その末つかたに藤はら尙隆とたゝさしむかひによみ

ける時湖邊歳暮

うき秋はおもはさりけりさゝ浪やはまへに年の暮物とは

爐頭歳暮

春近き廿日あまりのいたつらに身もうつもるゝ埋火のもと

寄名所戀

月よさていかに契りてしのふ山つゆより袖にやとりきぬ覽
我戀はしらつき山のしらねは只ゆふたゝみゆふてたにみむ

長享二年正月十五日百首題を人々につかはし侍し内々

會始立春

三冬つきはるきにけらし乙女子か袖ふる山にかすみたな引

三月十三日卅首の題をさくりて歌よみ侍しに花盛

くもやあらぬ花のよそめのよのほとに昨日の山を稀に成行
所勞之間殊左送之。

五月朔日藤原尙隆につかはす

けさよりの詠めも隙はあるものをうき人ゆへの袖をみせはや

返し

如何みらん五月雨の露にあらて香珠計なき袖を過る月の色

女院御ことほとへて侍從中納言に申とて實望朝臣上
洛の次にことつけて遣し侍し

思ひやれ國のはゝ木々かれしより玉の緒よはみななく心を

返し

すみ染の袖にめなれてことのはのよににぬ花そをき所なき

女院翼門崩四月廿八日。此詠送事五月中泮也。愚詠
は

初はるのはつねのけふの玉はゝき手にとるからに
ゆらく玉のを

此心也。但比興歟。

六月十八日卅首續歌侍しに彌勒

今そしるたかのゝ山にしむる庵はあけむうきよの夢の宿りと

法花

一枝の花に心のひらかずは露のなきけもしらすそあらまし

その比後成恩寺殿の詠草をみて内大臣に返しつかは
すとてつゝみ紙に書付て侍し

さくもゝの言葉の花のかゝみにもたつをもかけの水菫の跡

彼作者桃花也。故如此。

返し

君かいまみかきそへすは塵つもる言葉のはなの鏡ならまし

六月つくる日歌合し侍りしに名所夏校制書予

しかの浦や春のおもかけ立浪の白ゆふ花にあさのゆふして
路納涼

夏ふかき山ちの夕日色くれて秋にすゝしきならの下かけ

欲迎秋近

今もさくまかきの萩のさよ更て一はのそはむ秋の風かは

寄風戀

うらめしや恨やりても吹風のつてはいかにとはゝ社あれ

寄草戀

しはしとて結ふ契りは枯行に秋まつ草よしけらすも哉

天

わか心くるらしと思道よりそ天津みそらもきよくてらせす

甲

四方にみつ星のやとりに雲の腰はやふき歸し空もはれなむ

八月十八日初鴈を内へまいらせし文のおくに大納言

三位兼寵女のもとへかくなん

玉章は雲の外の外に待もみすはる別こし鴈はくれとも

返事御製の短籍を書そへられて侍し

かけてくるかりの翅の文ならていつか都に君を待みん

依ニ數寄ニ注雖レ難レ計ニ 天氣ニ捺レ之處如レ斯。眉目

之如何之。

廿五日佛供養地蔵し侍る導師に天台座主尊應を請し侍
て廿首歌講し侍し次に萩如錦

一よにや紐ときそめし小車のにしきとみゆる秋はきのはな

湖上月

秋ふくるかたののうらの蛭人は月にうたひていくよへぬ覽

述懷

よにしらぬ浮身なりともをのつから願文よ契たかふな
十月三日夜雨ふりてつれ／＼なりしかは歌よみ侍し

に初冬時雨

きのふけふ神有月の空かけて雲の八重かき時雨きにけり

殘鴈

引すてしひたのかけ繩なきよのかり田の霜に落るかり金

山家友

此里は梢のさるにはの鹿それならてたゝともなはゝこそ

十一月十四日歌よみ侍しに窓前雪

灯を花の光にさきたてゝまとの白雪春いそくなり

古寺雪

しら雪のふり分かみのつゝゐつにあり原寺の跡をしと思

長享三年正月廿二日廿首歌人々に遣しける 内々會始早

春霞

つくは山めくむ霞の黛籠こやはつ春の衣にはあるらし

叢虫

野への色つゆのなさけにかはり鳧庭にうつしゝ虫の鳴音は

述懷泪

人もうし我身もつらしとはかりにとにもかくにも落る泪よ

二月のはしめつかた瓶にむめのはなをさして藤原尙

豊につかはすとしてこのうたをむすひつけ侍し

菩提心無非中道にそむかすは一色一香のたねやこの花

廿五日聖廟法樂とて五十首歌人々よみ侍しに社頭梅

さくむめの花のにしきを手向山春吹かせもかみのまに／＼

近花

あかす見るにはを盛の花ゆへに軒はの山のかかけやくれなん

浦月

いせの海やしほひのたつの聲たけてわか松原月さへ渡る

積雪

松は緑まさらむとする誓よりふりをける雪をあはれと思

切戀

たゝたのめいはゝや物を偽になさむ限りのはてをしらすは

名所夜

露も猶ゆるさぬ月の袖のうへにいく夜か宿をかるかやの關

薄

吹かせの音もなつかし花薄なひく籬の秋のゆふくれ

名所擣衣

いにしへを思ひみたれて陸奥のしのふの衣誰かそふらん

原上霞持

文明十四年六月十日歌合
古郷は霞そこむるみよしのゝみかさか原に春や立ちむ

見花忘恥持

山櫻春はいかなるならひとて人めもしらぬはなの木の本

麓納涼勝

風かよふふもとの野邊の葛かつらかた葉の露に秋そ近つく

田早秋負

今朝見れば露をさそふる小山田のかりほの庵に秋はきに鳧

月似鏡持

同
み空行月は鏡と見えなから手にはとられぬ物にそ有ける

芦間氷持

同
みしまえや霜におれふす芦のはもなひかぬ迄に氷る比哉

不叶心戀勝

同
つらくとも逢を限とおもはずば人に哀をなにかかへまし

互恨戀同

同
君と我ふたみの浦の恨ゆへかけ衣ほす隙もなし

〔なみ歌〕

山家戸負

同
さらてたにあれましくおしき山里の柴の戸たゝく峯の松風

祈世神祇持

同
君か代も猶すくなれと祈るそよたゝすの竹にかもの水かき

寒夜月

文明十三年十一月二十日歌合
秋に見し露をは霜にむすひかへて枯野の月の影そ淋敷

竹雪深持

ふりつみし籬の竹は折ふして雪よりはるゝまとの明ほの

忍逢戀勝

あひ見てそ心のおくはしられける忍ふの山の露の下みち

夏日陪

多田院廟前詠五十首和歌

征夷大將軍從一位行權大納言源朝臣義尙

春十首

たちわたる長柄の橋のかすみ春の氣色を何にたとへむ
 梅かほり鶯の音もくればて、軒端ゆかしき春風そふく
 松たかき日影のうへは霞はれてけふりにつゝ里の夕暮
 吹をくるあらしの後のむら雲に雨を残して歸るかりかね
 只暮ぬ暮すつけふはとまら南明日やはいかに花の下ふし
 月よし吉野の山のやま櫻まかはゝまかへみねのしらくも
 へて見はやあたの此世も一さかり人と風とのしらぬ櫻を
 一つのよのたかゆかりにかそほつらん莖つむのに春雨そ降
 磯山やいはほか中のかきつはたよを隔てつゝ恨みてそふる
 くれぬめりしはしはとめよ呼子鳥春のわかれもなれか別よ

夏五首

から衣きつゝなれにし花の色にかへむ袂の名こそおしけれ
 郭公月にかたらふしのひねのさなからあくるよはの短かさ
 橋をねさめのまににほはせて月の枕に水鶏なく也
 小山田や杉の下かけ雨すきてすゝしき露にとるさなべ哉
 みそきする難波の苜の夜のほとに秋きにけらし佳吉のはま

秋十首

秋きぬと吹すきてくる風の音につらくも有哉袖の白露
 をく露はあたちの原の霧の内にかつゝ秋の色こそもれる
 初鷹のつはさにかゝる白雲はをのつからふくあきの夕かせ
 哀れをは萩のうは葉にかこたなむたもとはゆるせ棹鹿の聲
 故郷にきりゝす鳴てはたさむき秋風たちぬあけぬ此よは

我心こと有かほのなかも哉月はかりなるあきのいろかは
 をか野へのわき田のをしね色つきて山もと淋し秋のゆふ暮
 露に萩きりに紅葉をこきまさせてたつたの秋をしそ思
 秋されはまかきの菊の霜やたひおくあらはなる高圓の宮
 かたそきの行あひの霜の夜や寒き衣うつ也住よしの濱

冬五首

山かせにかり田の木の葉吹分て時雨のしたにうつら立也
 時雨の雨ふらはふらなん故郷のみかきの紅葉散ぬともなし
 あられふるかたのゝ眞柴わけまよひ夕かり衣ほす隙もなし
 筏士のみちはこほりに絶にけり柚木も雪にうつもれぬらむ
 ふる雪にわかすむかたはとひこかし芦やの里の冬のくれ方

戀五首

杵ちるおなしおのへのしのすゝき本の心やいろにいつらむ
 身を秋の末のゝま萩つゆかけて袖も心もおきのうはかせ
 厭はるゝなけのなさけを忍はすは人め計のなみたならまし
 難波女のすくものけふり空にのみこと浦風のつても恨めし
 歸るさの袂に残る月影はくもれるしもそかたみなりける

雜十五首

月影をならのみ山の高根にてかなふねかひを照してし哉
 春日山ちかひをあふく松かせに神さひわたるよろつ代の聲
 吹風を心のそこにこたへなん胸のはちすも今やひらくと
 春はまつ明ほのはかりかこても秋の夕もをのか一とき
 すてぬよをくやしきとおもふ心こそたゝうち数住居也けれ
 あはれ又いつの目までと歎まにをくるゝ涙いく世へぬらん
 浪かゝる袖に跡ふり濱千鳥しほれてたにものころうき名に
 ふかく入て人の心に宿とへはとめんとめしは情なりけり

はりぬ。

右五十首和歌以多田院藏眞蹟模本校正

たかみそき夕露はらふ足引の山分衣袖もしみゝに
うつ山都は月もをくりきと露にともなへ蘿の下かせ
あま衣しきつの浦の松かけに幾世の波をかきぬらむ
燈火の明石の瀬戸に見渡せはおきつの田鶴の友なしにして
驚のゐる田中の柳色くれて夕日かけろふきりの下みち
小さゝ原なみたあらそふ草むらに夜をしる虫の聲を露けき
をくりおく二位のふたこゝろなくて吾道をなをまもらなむ
右三十一字をつゝり。五十首につらねてかの廟院にた
てまつる。むねおほきに似たりといへとも文道にをき
て其名たかく。武藝に至て其譽おほひならむことをお
もふ。此願に過ぎるへし。おほよそ水の尾のすめるなか
れを請て。桃閨の跡かうはしく。第六孫王の餘裔をつ
き。いま天の下のかたき守りとして柳營のかけ盛なる。
無雙重器の元祖となれり。されは多田の鳴動をもて四
海の安危をかゝむ。よりてわたくしの尊崇はなはたし
きのみならず。つゐにおほやけの嘲哂いちしるきかゆ
へに。あらたに二品の位階を送りて。さらに千載の美談
とせり。抑餞別の玉辭を拾遺の集にとむ。靈神の丹心
も雅頌の道にあらむものか。是によりていま長柄のは
しの朝かすみ。難波のうらの晩夏より神のちかい萬代
まであふかむことをおもひ。吾道二心なく守りまさん
ことをねかふにいたるまで。事によせてことはをのへ。
ものにふれて心さしをあらはす。をのつから神を感
せしむるの道にかなはゝ。國家をたすくる力をくはへ
たまふへしとなり。時に文のあきらかなる年の第十六
の曆。夏五月のはしめの十日に。いさゝか是をしるしを

群書類從卷第二百三十四

柿本集

和歌部八十九家集七

春

昨日こそ年はくれしか春霞春日の山にはや立にけり
 きのふこそ月は立しかいつのまに春の霞の立にけるそも
 あすからは若菜摘んと片岡のあしたの原はけふそやくめる
 梅花それとも見えす久方のあまき雪のなへてふれゝは
 誰か宿の梅の花そも久堅のきよき月よにこゝらちりくる
 來てみへき人もあらなくに我宿の梅の初花散ぬともよし
 我せこにみせんと思ひし梅花それともみえす雪のふれゝは
 梅の花まつ咲枝を手折もてつゝなつてよそへてもみん
 雪さむみさけときかれぬ梅花なほ此ころはしかとあるかは
 梅花さきて散とはしらぬかも今まで妹か出てあひみぬ
 わか宿にさき散梅を月清みよるゝきつゝみん人もかな
 風はやみ落たきつらし白浪にかはつ鳴也朝夕毎に
 河水に蛙なく也夕されは衣手さむみつまゝくらせん
 わかせ子をならしの岡のよふこ鳥君よひかへせ夜の深ぬとに
 よそに有て雲井にみゆる磯の上に咲散花をとらてはあらし
 朝なゝわかみる柳鶯のきゐて鳴へき時にはあらぬ

とまりゐてかつらき山を見渡せば雲を降るまた冬なから
 青柳のかつらにすへくあるまてにまてともなかな鶯の聲
 春雨のうちふることにわか宿の柳か枝はいろつきにけり
 今さらに雪ふらめやもかけろふのもゆる春ひと成にし物を
 春雨にもゆる青柳手に持て日ことにみれとあかぬ君かな
 爰にきて春日の原をみわたせは小松か上に霞たな引
 わか宿に鳴しかり金雲の上にこよひ鳴也くにへ行かも
 春されは野へに鳴てし鶯の聲も聞えす戀のしけきに
 春霞たな引山の櫻花はやくみてまし散過にけり
 櫻花枝になれたる鶯のうつし心もわかおもはなくに
 夏
 我宿の池の藤浪さきにけり山ほとゝきすいつかきなかん
 たこの浦にて藤の花をみて思ひをのふ
 田子の浦そこさへにほふ藤浪をかさしてゆかむみぬ人の爲
 時鳥かよふ垣ねの卯花のうきことあれや君かきまささぬ
 時鳥なくや五月のみしかよも獨しぬればあかしかねつゝ
 われこそはにくゝもあらめ我宿の花橋をみにはこしとや
 我宿の花橋に時鳥さけひてなかんこひのしけきに
 かたよりにいとをこそよれ我せこか花橋をぬかんと思ひて

我せこをうらまちなかねて時鳥いたくなかなん戀もやむやと
我ことく君をまつとや時鳥こよひすからにいねかてにする
萩の花枝もたは^{とを}露^霜のおきさむくも夏の^{時は}成にける哉
庭草に村雨ふりて日くらしのなく聲きけは秋はきにけり

秋

天川こそわたりのうつろへはあさせふまに夜そ深にける
天川とほきわたりにあらねとも君かふなては年にこそまて
わたり守舟は^{わたせをよふ船のいたらねは}おとよはふ聲もきかぬか梶音もせず
渡もりはや舟わたせ一とせにふたゝひきます君ならなくに
年にあひて一夜妹にあふ彦星の我にまさりて思らんやそ
としのこひ今宵つくしてあすよりは常のことにや我戀を覽
あはすてはけななき物を天河ふなてはせまし夜の深ぬ時
あはすてはけななき物を天河へたてゝ又そわかこひをらん
彦星とたなはたつめとこよひあはん天河原に浪立なゆめ
天川霧立わたり彦星のかちおと聞ゆ夜の更行は
天河川打橋渡し妹か家にやます通はん時またすとも
天河せをはやみかもむは玉の夜は深行とあはぬ彦ほし
銀河夜は^{たまかつたえぬものから}深行てさぬるよはとしのわたりにたゝ一よのみ
七夕の今宵あひなは常のこと秋を^{月日}へたつ事なから南
天河こそわたりはあせにけり君かきまささんあとの白波
天河せゝの白波ふかけれとたゝわたりしぬまてばすへなし
妹にあふときかたまつと久堅の天のかはらに月そへにける
戀るひはけななき物を今宵さへともしかるへくあふへき物を

彦星のつまよふ舟の引つたのたえんと君にわか思はなくに
神なひの山下とよみ行水にかはつ鳴なり秋といはゝや
戀つゝもいなはかき分我をれはともしくもあらす秋の初風
夕立の雨ふることに春日野の尾花か上のしらつゆおもふ
此くれに秋風吹ぬ白露のあらそふ花のあすかみさらん
てまもなくうゑし草は出みれは宿の初萩咲にけるかも
秋風はすゝしく成ぬ駒なへていさみにゆかん萩の花みに
白露のおかまくをしき秋萩を折のみ折りておきやからさん
秋の田のかりほの宿の匂ふ迄さける秋萩みれとあかぬかも
春されは霞かくれにみえきりし秋萩さけり折てかさゝむ
我待し秋は來ぬかゝれとも萩の花こそひらけきりけれ
皆人は萩を秋といふいなわれは尾花か末を秋とはいはん
玉ほこの君かつかひの手折たる此秋萩はみれとあかぬかも
このよりはさ夜深ぬらしかり金の聞ゆる空は月わたるみゆ
我宿にさける秋花あきならは我待人にみせまし物を
我宿にうゑ生したる秋萩を誰かしめさす我にしらせて
わきもこに行あひのわさる時に成にけらしな萩の花咲
我妹子かあかもぬらして植し田をかりて納めんくらなしの山
秋霧のたなひくをのゝ萩か花今や散らんいまたあかなく
戀しくはかたみにせよとわかせこか植し秋萩花咲にけり
秋されは妹にみせんと植し萩露しもおきて散にけるかも
秋萩における白露朝なゝ玉と社みれおける白つゆ
白露と秋の花とをこきませてあくことかたきわか心かな
此比の秋風さむみわか宿の萩の下葉はいろつきにけり

秋萩をおらすな^{ち高}かめのふる比はひとりおきゐて戀る事多き
 秋風は日ごとに吹ぬ高松の野への秋萩ちらまくをしみ
 鴈金のきなかん日まてみつゝあらし此萩原に雨なふりこそ
 わか衣するにはあらず高松の野を行しかは萩のするそ
 さきぬ共しられし我はたゝにあらん此秋萩にしらてをあらん
 みまほしく我まぢ戀し秋萩は枝もたはゝに花咲にけり
 秋風の日に吹はつゆかさね萩の下葉はいろつきにけり
 秋萩はちり果ぬへみ立よりてみれともあかす君としあれば
 夜をさむみ衣かり金鳴なへに萩の下葉は色つきにけり
 棹鹿のあさふすをのゝ草わかみかくろひかねて人に知らるな
 鴈金は今そきなかぬわ^{きイ}か待し紅葉はやつけまてはくるしも
 鴈金の初聲聞てさきてたる野への秋萩みにこわかせこ
 かり金を聞つるなへに高松の野のうへ草はいろ付にけり
 雁かねのさむき夕の露ならん春日の山をもみたす物は
 かりかねの聲聞からにあすよりは春日の山も紅葉そめなん
 かりかねのさむく成より水くきの岡の木葉はいろつきに梟
 秋風のさむく吹なへにわか宿の浅ちか末はいろつきにけり
 朝かほはあさ露おきて咲といへと夕影にこそ咲かゝりけり
 手にとれは袖さへにほふ女郎花木下露にちらまくをしみ
 ことさらに衣はすらし女郎花さく野の花に匂ひてをらん
 山ちかく家をしをれば棹鹿の聲を聞つゝいねん^{そねかねつもイ}比かも
 かけ草のおひたる宿の夕露に鳴日くらしは聞とあかぬかも
 足引の山ならませは棹鹿の妻よふ聲をきかまし物を
 夕かけて鳴日くらしのそくはくの日毎に聞とあかぬ君^{みんイ}かも
 我宿の尾花おしなみおく露^{に高}のでふれわきもちらまくをし

秋されはおく白露にわか宿の浅ちかうれは色付にけり
 秋風の日毎に吹はみつくきのをかの木葉もいろつきにけり
 一とせにふたゝひゆかね秋山を心にあかす過しつるかな
 我宿にまもる田みれと秋の海のうらの秋萩すゝきおもほゆ
 わかせこかかし^{はイ}の花におく露をきよくみせんと月は照らし
 秋の花咲たる野への日くらしのなくなるともに秋風そ吹
 奥山にありてふ鹿のよひきらす妻よふ萩のちらまくをしも
 詠花
 白露にあらそひかねてさける萩ちらはをし^{けん高}くも雨な降こそ
 つるによす
 たつかねのけさなくのへに鴈金のいつくをさして雲隠る覽
 むは玉の夜中^{わたる月高}計りはおほつかな幾よをへてかおのか名をよふ
 鹿の聲を
 此比の秋のあさけの霧かくれ妻よふ鹿の聲のさやけき
 秋萩のさきたる野へは棹鹿の分つゝねは妹戀をする
 山へまていたせる年はおほかれと嶺にも尾にも棹鹿の鳴
 きりくす
 きりくす我床の上に啼明すおき出ぬるにぬれとねられす
 つゆをよむ
 白露をとらはけぬへみいさ^{とも高}にも露にいそひて萩の遊せん
 ますかゝみみなふち山はけふもかも白露おきて紅葉ちる覽
 山をよむ
 曉の時雨の雨にぬれわたりかすかの山はいろ付にけり
 秋山をゆめ人かくな忘れにし其紅葉葉のおもほゆる^{きみ高}かも
 物おもふとかくれのみるてけさみれは春日の山は色付に梟

紅葉ちる時に成らしつまをとこかつらのいたく色付ぬれは

月人の聲

よする萬

秋の田のほむけの風のかたよりに我は物思ふつれなき物を
橋をよりへの家のたわせかるとて過ぬこしとすらしも

鹿によす

〔本ノマ〕

棹鹿のをのゝ草ふしいちしるく我もとほぬに人の知るらん
わか宿のはきさきにけり散ぬまにとくみにこなん都里人
草深みきりゝすおほく鳴宿の萩見に君はいつかきまさ
敵里のはつ紅葉葉を手折つゝ今そわかくるみぬ人のため
心なき秋の月夜の物思ひにぬれとねられすてらしつゝふる
朝なゝ立川きりを寒みかもたはし山の紅葉そめけん
秋くれはかふりの山に立霧を海とそみつる波たゝなくに
秋萩をかりにあはしといへれはか聲を聞ては花の散らん
棹鹿の戀をしのふと鳴聲のいはんかきりはなひけ萩原
なと鹿のわひなきすらんよそにても秋のゝ萩にしけく有覽
足引の山の本かけに鳴鹿の聲もしのはす山田もらすと

きりゝすをよむ

秋風はさむく吹なりわか宿の淺ちかもとにきりゝすなく
秋の野の尾花かくれに鳴虫の聲を聞はか我も我妹も
秋萩の枝もたはゝに露もおき寒も秋の成にけるかな
春はもえ夏はみとりにくれなぬのいろにみゆめる秋の山哉
いもか袖まさの朝霧をしむらん紅葉はちれるくちをしきか
紅葉はの匂ひはしけく成ぬともつま梨の木を手折かさゝん
露霜のさむき夕の山風に紅葉しにける妻なしの本は

鷹かねのきなきしからにから衣立田の山は紅葉はしまる

風吹はもみち散つゝしはらくも我まつはらにきよからなくに

妹こそは今おきてゆけ伊駒山打こえくれはもみち散つゝ

秋萩の下葉のもみち色に出て時過ぬれは後戀んかも

〔秋のつゆしり萬〕

色付ぬ有明の月もなふりこそ妹かたもともまかぬ此日は

くれなゐの八しほの雨はふりけらし春日の山の色付みれは

あやしくもきなかぬかりか白露のおきて朝はさひしき物を

わか宿の淺ち生までも色付ぬまたこぬ君はなにの心そ

秋霧のおとろへなん思ふかも野へに出つゝさをしかのなく

妹かひもとくとむすふと立田山今こそ紅葉はしめたりけれ

足引の山田の稻はひてすともつなたにはへよもるとしるかね

たかまつの此みねことに風吹て紅葉たえたる秋の月かな

秋山の木のはもいたもみちねとけさ吹風は霜もけぬへし

妹をこひとこしの池の波まよりとりのね開ゆ秋はきぬらし

けふ暮てあすにならん神無月時雨にまかふ紅葉かさゝん

冬 天皇立田川のわたりに行幸有けるに御供にまゐ

りて紅葉おもしろかりけるに 天皇御製

立田川紅葉みたれてなかるめり渡らはにしき中や絶なん

とありけるに
立田川もみちはなかる神なひのみむろの山に時雨ふるらし
しくれの雨まなくし降は横の葉もあらそひかねて色付に鳧
玉たすきかけぬ時なく我待し時雨しあらは侘つゝもゆかん
紅葉はをおとす時雨の降比はよさへそ寒きひとりしぬれは
思はずに時雨の雨は降たれとあま雲晴て月は清きを
君か家のともしき紅葉とくは散る時雨の雨にぬらさゝら南

秋田もるひたの庵に時雨ふり我そてぬれぬほす人なしに
 天雲のよそにかり金聞しよりはたれ霜ふりさむし此よは
 さをしかの妻とふ山の岡へなるわさ田はからし霜は置とも
 おしてや難波堀江の背へにはかりねたるらし霜の降るに
 いそくともよふかく行な道のへのこさゝか上に霜の降るに
 やたの野に淺ちいるつくあらち山峯のあは雪寒くそ有らし
 あさ月の峯猶くもるむへしこそ籬のうちの雪けさえけり
 ことならは袖さへぬれてかよふへく降なん雪の空に晴行
 淡雪はけさはな降そ白妙の袖まきほさん妹かあらなくに
 いといたくふらぬ雪ゆゑ事おほけに天つみ空は曇あひつゝ
 妹か家は我まとはしつ久堅の空より雪のなへてふれゝは
 ゆきにあひきて

淡雪の空にけぬへく思へともあふよしをなみ年そへにける
 笹の葉にはたれふり覆ひけ長くも忘れすといはゝ我も頼さん
 霞ふりいたくもふふき寒きよははたのにこ宵かり人のねむ
 あまをとめのほるの山の峯にふる雪は消しとつけよ其こに
 あまとふやかりの翅のおほひはのいつくもりてか霜の置覽
 我せこと朝なゝにみれはあは雪ふりぬ庭もはたらに

蒼天

あめのうみに雲の浪立月の舟星のはやしにこき歸るみゆ

月

常はさもおもはぬ物を此月の過かくれ行をしきよひかな
 あすの夜を照す月影かたよりに今宵によりてよなからなん
 玉たれのこすのま遠し獨ゐてみるしるしなき夕月よ哉
 百敷の大宮人のまかり出てあそふこよひの月のさやけき
 ますかゝみ照月影を白妙の雲かくせるか天津きりかも

雲

足引の山川のせのあるなへにつきゆみなかく雲立わたる
 おほうみはしまもあらなくに海原やたゆたふ波に立る白雲
 我せこか袴の裏をそめんとてけふのこし雨に我そぬれぬる

山

なる神のおとにのみきくまきもくのひ原の山をけふみつる哉
 いにしへの事はしらねと我みてもひさしく成ぬ天のかく山
 大君のみかさの山の帯にせる細谷川のおとのさやけき
 千鳥

さほ川にあそふ千鳥のさよふけて鳴聲聞はいこそねられね

みよし野

皆人の戀しみよしのけふみれはむへもいひけり山川きよみ

うち川に生たるすかも河清みとらて來にける苞にせましを

津のくに

さよ更て堀江こくなる松浦舟かち音たかしみをはやみかも

いとまあらはとりにきませよ住吉の岸に生たる戀忘くさ

すみよし

住吉の岸に心をおきつへによする白波みつゝ思ふらん

すみよしの興津白波風吹はきよれるはまをみれはきよしも

夕されは梶おとすなりあまを舟おきつめかりにふる成へし

旅にてよめる

草まくら旅にしあれは秋風のさむき夕にかり鳴わたる

紀伊國

玉つ嶋みれ共あかすいかにしてつゝみもたらんみぬ人の爲

てゆかん萬

むは玉の黒かみ山を朝こえて山下つゆにぬれにけるかも

さ低山にたな引雲のたゆたひに思心をいませきたむる
もろこしにまかりてかりをきゝて

あまとふやかりの使もえてしかなならの都に言つてやらん
芳野山に御幸の時の歌

夕されは秋風さむしわきも子かときあらひきめ行てはやきん

おほなむちすくな御神の作れりし妹せの山をみれはとしも

たひになほひもとく物を事しけみまろね獨する長き今宵を

ふなかせのかく吹までもいつまでか衣かたしきわか獨ねん

いにしへに有けん人も我事や三輪のひはらにかさし折けん

ほのく^と明石の浦の朝霧にしまかくれ行舟をしそ思ふ

近江よりのほるに宇治川のほさにてよめる

ものゝふのやそうち川の綱代木にいさよふ浪の行ふ知すも

旅の歌 伊勢のみゆきの時

神風やいせの濱荻折敷て旅ねやすらむあらき濱へに

石見の國に女をおきてのほる時のうた

さゝのはのみ山もそよにみたるめり我は妹思別きぬれは

川の瀬にうつまくみれは玉もかる散みたれたる川の舟かも

さゝ波やおふつの宮は名のみして霞たな引宮木もりなし

さゝ浪や志賀のからさきさきくあれと大宮人の舟まちなねつ

おみの海に舟乗すらんわきも子か玉ものすそに鹽みつ覽か

むこの浦のとまり成らしいさりする蟹の釣舟浪の上にみゆ

たちはきのたまさの末にいつしかと大宮人の玉もかるらん

しま宮のまかりの池の濱千鳥人めを近みおきにおよはす

石見にて京をおもひやりて

石見なるたかつの山の木間より我ふる袖を妹みけんかも

こ紫ほすかはくれぬいつくにかたま宿からんきとはらにして

はなれいそに立むるの木うたかたも久しき年の過にけるか

こかね山したるの下に鳴鳥の聲たにきかは何かなけかん

ことしけに里にすますはけき鳴し鴈にたくひてきなまし物を

天さかるひなの長路をこきくれば明石のとより大和しまみゆ

岩城の野中に立る結び松心もとけすむかしおもへは

もかみ山すかさせしより心有てまかりかへせるやかたをの鷹

白浪は立と衣にかさならす明石も須磨もおのかうらく

草かくれ行棹鹿はみえねとも妹かあたりはみれは戀しも

春雨に衣のいろはひちつとも妹か家ちの山はこえなん

朝さく夕はしほむ月草のうつろふ色は人にそ有ける

くたら川かはせをはやみ我せこあしの底にもふれてふる哉

旅にしてあたねする夜の戀しくは我家の方に枕せよきみ

いにしへのふるき翁のいはひつゝ植し小松は若生にけり

朝なくみすは戀なん草枕たひ行君かかへりくるまで

思はずに吹秋風か旅れして衣かすへき妹もあらなくに

まゆねかき又いふかしく思けるいにしへ人にあひみつる哉

おしてや山すけかきさをおきふるし後は誰きん物ならなくに

山たかみ下行水のおちたきつうら波みれとあかね君かも

ちとりなくみ吉の川の河の萬代にたゆる時なくがへりこん

瀧の上のみふねの山はおきながら思忘るゝ時のまもなし

やゝましる我玉のをゝおほくには大和へかとも同しと思

「石は萬葉卷六に「やすみしゝわか大君のをす國はやまともみも同しと思ふ」とあるを誤りし也」

わたつ海のもたる白玉みまほしき岩ふち巡りあさりするかも

驚は時々鳴さ東路の君かたよりはまてとこぬかも

宮こちはわれもしりたり其道は遠くもあらず年はふれ其こゝはくに人はいへともおりてきん我はた物の白きあさ衣

せんとう歌

うちひさすみやちに有し人妻はねたしたまのをのおもひみたれてねにし夜そおほき

かの岡に萩かるのをのこしかなかりそ有つゝも君かきまさんみまくさにせん

ますかかみ見しかと思ふ妹にあはんかも玉のをのたえたる戀のしけきこの比

かなしひひきてのうねへ身をなけたる時の歌

さゝ波やしかのてこらのまかりにし川せの道をみれば悲しきさゝ波や志賀の大わたよとむ共ににしへ人に父あはめやも

さる澤の池にうねへの身なけたるを

わきもこかねくたれかみをさる澤の池の玉もとみるそ悲しきひなみのうせ給へきとき

久堅のあめのふる事あふきみしきこのみ事のあれまくをしもさぬきのさみねの山にして岩の上になくなれる人を

みて

妻しあらはつみてゆかましきみの山上のお原に過にけらしもおきつ浪よるあらいそを敷妙の枕としてもなれる君かも

めのしにたるをかなしみてよめる

家きて高にいきて我やをみれば敷如のほかに玉原高おきける妹かこ枕

かへるとしの秋月おもしろきに

去年みてし秋の月よは照らすとも相みし妹はいや遠さかる

あすかの女王をおさむる時によめる歌

飛鳥川しからみわたしせかませは流るゝ水ものとかからまし

奈良の帝をおさめ奉けるをみて

久堅のあめにしほるゝ君ゆゑに月日もしらす戀渡るかも

めにをくれて

秋山の紅葉をしけみまとひぬる妹をもとむと山めん高ち暮しらすも高しつ

石見國か高に有てなくなりぬへき時にのそみて

いも山の岩根しま高における我をかもしらすて妹か待てやあらん

かも山の岩ねのたかにある我をしらすて妹かまちつゝませる

おほ舟にまかちしけぬきおはかちをこきつゝ渡る月人男

神風の清き夕に銀河舟うなはら高ときわたせ月ひとをとこ

秋風の吹にし日より天河川せにいてたちてまつとつけこせ

戀

我せこそ我戀をれは我宿の草さへ思ひうら枯にけり

湊入の芦分をふねさはりおほみ我思人にあはぬ比かな

かた糸もて貫く玉のをゝよはみ亂れやしなん人のしるへく

足引の山下とよみ行水の時そともなく戀わたるかも

よそにのみみつゝや戀む紅のすゑつむ花の色に出なて

からにしき紐ときあけてゆふ人も知ぬ命を戀つゝやあらん

戀々て後もあはんとなくさむる心しなくはいきてあらめや

月しあれは明らむわきも知すしてねて明しゝも人みけん鴨

戀するにしにする物にしあらませけ千度そ我けしに歸らし

棹鹿の岡のかやふしいちしるく我はしらぬに人のしるらむ
足引の山下風はふかねとも君かこぬよはかねてきむしも
とに角に物は思はすひたゝくみ打すみなはのたゝ一すしに
たひのうた

はふり子かいはふ社の紅葉はもしめをはこえて散といふ物を
戀てしねゝとやわきもこか我家の門を過て行らむ
ますらをのうつし心も我はなし夜ひるわかす戀しわたれは
戀つゝもけふはくらしつ霞たつあすの春日をいかて暮さん
山のはをさし出る月のはつゝに妹をそみつる戀しき迄に
玉ゆらに昨日のくれにみし物をけふの朝に戀へきものか
かくはかり戀しき物としらませはよそにそみつる有けん物を
戀しなはこひもしねとや玉鉾の道行人にことつてもなし
岩ねふみかさなる山はへたてねと逢ぬ日敷を戀わたるかも
つるはみのあはせの衣の裏にせは我か袖ひめや君かきまさぬ

八さひの女王のおさかへのみこに奉る歌

敷妙の袖かへし君玉たれのおちのすきせる消てあらんやは
ときゝぬの思ひ亂れて戀ふれともなそ何故ととふ人もなき
足引の山田もる庵におくかひの下こかれつゝわかこふらくは
思ふなと君はいへともあふ事をいつと知てか我こひきらん
奥山の岩かきぬまのみこもりに戀や渡らんあふよしをなみ
なにすとか妹をいとはん秋萩のその初花のうれしき物を
秋萩の咲散のへの夕露にぬれつゝきませ夜は深ぬも
長月の有明の月の有つゝも君しきまさはわか戀めやも
わきも子に相坂山のしの薄ほには出すて戀わたるかな
朝はさき夕はしほむ月草のけぬへき戀も我はするかな
長きよを君にこひつゝいけらすは咲て散にし花ならましを

秋のよの月かも君は雲かくれしはしもみねは戀しかるらむ
君かあたりみつゝをゝらん伊駒山雲なかくしそ雨はふる共
このよあかつきくたあ萬
けふの日の曉方になくつるのおもひはあかす戀こそまされ
まつ萬
君こふと庭にしをれはうちなひき我黒かみに霜置まよひ

住よしの岸を田に堀蒔し稻かりほすまでもあはぬ君かな
み狩する狩はのを野のならしはのなれは増らて戀を優れる

紅のあきはの野らにかる草のつかのまもなく忘れなくに
あはぬよのふる白雪とつもりなは我さへともに消ぬへき哉
青柳のイ

足引のかつらき山にゐる雲の立てもゐても妹をしそ思ふ
風吹は浪たつ岸の松なれやねにあらはれてなきぬへら也

み熊野の浦の濱ゆふもゝへなる心は思へとたゝにあはぬかも
この比の有明の月の有つゝも君をはおきて待人もなし
こひまろひ萬

よそにして戀はしぬれといちしるく色には出し朝顔の花
ことに出ていはゝゆゝしも朝顔の匂ひひらけぬ戀もする哉

梓弓ひきみひかすみこすはこすはこそはなをよそに社みめ
垂乳根の親のかふこのまゆ籠りいふせくも有か妹に逢すて
こひわろひ萬

宮木ひく泉の袖に立民のやむ時もなく我戀らくは
朝霜の消み消すみ思へともいかてこよひをあかしつるかも
ちはやふる神のいかきも越ぬへし今は我身のをしけくもなし

戀るひのけ永くあれと御園ふのからあやの花の色に出に鬼
皆人の笠にぬふてふありますけ有ての後もあはんとそ思ふ
ますかゝみ手にとり持て朝なゝみれ共あかぬ君にも有哉

朝ねかみ我はけつらしうつくしき人のたまくらふれてし物を
久堅のあまてる月もかくれ行何によそへて妹をしのはん

三月月のさやけくもあらす雲隠れみまくそほしきうたて此比
 あひみてはいく久しきにもあらね共年月の事おもほゆる哉
 頼めつゝこぬよあまたに成ぬれはまたしと思そ待に増れる
 足引の山鳥のをのしたりをのなかゝしよをひとりかもねん
 春日山雲井かくれて遠けれと家はおもはす妹をしと思ふ
 むは玉のこよひな明そ明ゆかは朝ゆく君をまつくるしきに
 我かせこをきませの山と人はいへと君かきまぬ山の名ならし
 難波人芦火たくやはすゝたれとおのか妻こそとこめつらなれ
 この山の嶺に近しとわかみつる月の空なる戀もするかな
 三島江の玉江の芦をしめしより已かとそ思ひまたからねと
 久堅のあめにはきぬをあやしくも我衣手のひる時もなき
 波まよりみゆるこ島のはまひさき久しく成ぬ君にあはすて
 夏草の露わけ衣きもせぬになと我か袖のかはく時なき
 夏野行をしかのつゝつかのまも忘れす思へ妹かこゝろを
 夕されは君來まさんと待しよの名残そ今もいねかてにする
 妹かかみあけをさゝ野のはなれ駒こかれにけらしあはぬ思は
 わきもこは衣ならなん秋風のはさむき此比したにきましを
 わか心ゆたのたゆたにうきぬれはへにも奥にもよらむ方なし
 山高み夕日かくれのあさち原後みん爲にしめゆはましを
 杉板もてふける板間のあはさらはいかにせんとか相見初せん
 棹鹿のいるのゝすゝき初尾花いつしか妹か手まくらにせん
 藤の花咲て散にき秋萩はさきて散にき君待かてに
 さくらあさのおふの下草露しあらは明してゆかんおやは知共
 三輪の山やましたとよみ行水のみをし絶すは後も我妻
 あらちをのかるやのさきに立鹿もいと我ことく物は思はし

ちはやふる神のたもてる命をも我か爲にかは長くと思はん
 久かたのあまてる月の雲まにも君を忘れて我思はなくに
 家の井のたまわけさとに妹をおきて戀や渡らむ長き春日を
 天雲をちへにかき分あまくたる人も何せん妹かあはすは
 こと絶て今はこしとは思へともせきあへぬ心猶こひにけり
 梓弓引はり持てゆるさぬにわか思心君はしらすや
 今も思ひ後も忘れしかりこものみたれてのみそ我戀まさる
 打なひき人もねつれはます鏡とると夢にみつ我戀まさる
 あひ思はぬ妹は何せんうは玉の一よも夢にみえもこなくに
 夏草のしけきわか戀住吉の岸の白なみ千重につもりぬ
 賢木にも手はふるなるをうつたへに人妻なれはこひぬ物かも
 鳥つとふはやひと舟の浪高みひさよとますたえんと思な
 獨ひて思ひみたれてあま雲のたゆたふ心わか思はなくに
 わかせこか家を頼て足引の山すけ笠をとらて來にけり
 妹みては月もへたてすいそのさき道なき戀も我はするかな
 夕されは野へに鳴てふかほ鳥のかほにみえつゝ忘れなくに
 時鳥鳴さほ山の松の根のれもころみまゝほしき君かな
 みくまのに立朝霧の絶すして我はあひみんたゝんと思な
 後つひに君をみんとて打なひきわか黒かみに雪のふるまで
 けふゝと君を待よのふけぬれはななき心と思ひかねつる
 雨ふるによは深にけり今更に君きまさめや誰かきてねん
 かくても戀しわたれは玉きはる命もしらす年はへにけり
 つくも川たゆる時なく思ふにはひとひも妹を忍ひかねつゝ
 かく戀ん物としりせは梓弓すゑのなか比あひみてし哉
 かさゝきのはねに霜ふりさきよを獨そねぬる君を待かね
 石上ふるのわき田のほには出す心のうちにこひやわたらん

わか戀ふる心をしらす後つひにかゝる戀にもあはさらめやは
立田山嶺の白雲たゆたひに思しやれはまつそすへなき
あさみつむ春日の露のおきそめてしはしも峯は戀しき物を
青柳のしけりに立てまふとも妹とむすひし紐とけめやは
山越て遠くいにしをいかてかは此山こえてゆめにみえけん
たらちめのはゝかてはなれかく計わひしき戀は未せなくに
いつとも戀せぬ時はなれ共夕さるゝまは戀しきはなし
わか後にうまれん人は我こく戀せん道にあひあふな夢
よしやよしこしらん君をいかゝせん厭はぬ我は戀つゝを覽
君をわれみまほしきはここの二夜年月の事おもほゆるかな
秋風にちる紅葉はのしはらくも散なみたりそ君かあたりみん
紫に匂へる妹かかくしあらは一もとゆゑにわかこひめやは
玉ほこの道行つかれいなむしろ敷ても君をみるよしもかな
あま雲の八重雲かくれなる神のおとにのみやは戀渡り南
月草に衣そそむる君か爲色のわかほのかけとおもひて
猶あへと事なし草にいふ事を聞てもしらはうれしからまし
月草に衣はすらん朝露にぬれての後はうつろひぬとも
夕かけて祈るみむろの神さひて妹にはあはす人めおほみそ
もゝへなるやそのしまへをこく船に乘にし心忘れかねつとも
しほさむにいつものうみにこく舟に妹乗らんか荒き磯へに
紅葉はの散ぬるなへに玉章のつかひをみれば逢し目思ほゆ
雨のこるすゝしの逢はん目をおほのはしかは今そ戀敷
人ことは夏のゝ草のしけくとも妹と我としたつさはりなは
此比の戀のしけくは夏草のかりそくれともおひらくかこと
かけてのみ戀ふれはくるし撫子の花に咲なん朝な／＼みん

みな月の土さへさけて照日にも我そてひめや妹にあはすて
秋風に山飛こゆるかり金のいやとほさかり雲かくれつゝ
かきほなる萩のはさき吹風の吹なるなへに鷹そ鳴なる
秋風の遠く吹なるわか宿の浅ちかもとに日くらしも鳴
この比の秋風さむみ萩の花ちらす白露おきにけらしも
玉たすきかけぬ時なく我戀ふる時雨しふらは行つゝもみむ
秋の田のほの上における白露のけぬへく我はおもほゆる哉
秋の田のかりほにつくる庵してまつらん君をみるよしも哉
秋萩の枝もとをゝに置露の消もしなまし戀つゝあら〔す〕は
さもこそは身は心にもあらさらめ身さへ心にたかなり鳧
水底に生る玉もの打なひき心をよせてこふる比かな
足引の山より出る月まつと人はいひて君をこそまて
なる神のしはしくもりてさし曇雨もふらなん君とまるへく
伊勢のみゆきに京にまかりとまりて
あすの海に花の香すらむわきも子か玉もの裾に浪やよす覽
〔右は万葉卷一に「あこの浦に船のりすらむをとめらか
たまものすそにしほみつらむか」とあるを誤りし也〕
足引の山ちもしらすしらかしの枝にも葉にも雪のふれゝは
玉葛といふけきつゝさぬるよば年のまれよにたゝ一よのみ
草枕たひに物おもふわか聞はゆふかけつきて鳴かはつかも
うちひさすみやちに人はおほかれと我か思人は唯ひとり也
あら玉の年はふれもわか戀ふるあしなき戀のやまぬ悲しき
行ゆけとあはぬ物ゆゑ久堅の朝露しもにうるひぬるかな
戀しきに心をやれとやられぬは山も川せもしらぬなりけり

山しなの木幡の里に馬はあれとかちよりそゆく君を思へは
 水の上に敷かくかことわか命君にあはんとうかひつるかな
 我ゆゑにいはるゝ妹かたかき山嶺の白雲すきにけんかも
 むは玉の黒かみ山の「や」まくさに小雨降しきますゝ〱そ思
 わか妹も我を思はゝますかゝみとりても月の影そみさらん
 曉にさすつづくしのふるけれど何そも君かみれとあかぬか
 玉ほこの道ゆきふりにうらなへは妹にあひぬと我につける
 敷妙の枕をしきてねす思ふ人は後にもあひなん物を
 誰かこの宿に來てとふたらちねのおやにいはれて物思ふ我を
 さぬるよはちよに有ともわかせこか思くゆへき心はもたす
 おほよそは誰かみむにかむは玉の我黒髪をけつりておらん
 獨ぬる床くちめやはあや蕤（高）になるまで君を忍はん
 たそかれとはゝこたへんすゑをなみ君か使を返しつるかな
 妹戀とわかなく泪敷妙の枕とをりてそてそひちぬる
 たちておもひるてもそなけく紅のあかもすそを引し姿を
 思ふ事あまる時にはかひもなし出てそ行しその門を見よ
 夢に見て猶かく計り戀ふる我うつゝにあはゝましていかにそ
 あひみてはおもてかくるゝ物からに常にみまくのほしき君哉
 昨日より今こそよなれ吾妹子かいはりかもみまくほしきかも
 むは玉の妹か黒かみ今夜もやわかなき床になひきてぬらん
 いるに出て戀は人みなしりぬへし心のうちのかくれ妻かも
 逢みてはこひ慰むと人はいへとみての後こそ戀まさりけれ
 偽もにつきてそするいつよりかみぬ人ゆゑに戀にしにする
 戀しなん後はなにせんわか命いきたる目社みまくほしけれ
 しき妙の枕うこきていねられす物思こよひはやく明なん

夢にたになとかは見えぬみえね共我かも惑ふ戀のしけさに
 なくさむる心もなきにかくてのみ戀や渡らん月日かさねて
 いかにして忘るゝものそ我せこは戀はまされと忘れなくに
 かひもなき戀もするかな夕されは人の手枕ねぬるものゆゑ
 もゝよしもちよしもいきてあらめやは我か思妹をおきて敷かん
 玉ほこの道行ふりに思はすに妹をあひみてなけく比かな
 妹か袖わかれし目より久堅の衣かたしき戀つゝそぬる
 むは玉のわか黒かみをなきくらし思みたれて戀わたるかな
 今更に君か手枕さためゝやわかひものをのくとくともなしに
 大原のあら野らに我妹をおきていね社かねつ夢にみゆれは
 夕けにも夢にも見えよ今宵たにこしらむ人をいつとか待ん
 敷妙の枕かさねて君とわれぬるとはなしに年そへにける
 山里の櫓の板戸の音はやみ君かあたりの霜の上にねむ
 足引の山櫻戸をあけ置てわか待君を誰かとゝむる
 月清み妹にあはんとたちから我はくれ共夜そふけにける
 朝かけに我身はなりぬから衣たもとのあはてきひしくなれは
 すり衣きると夢にみつうつゝゝはたか事のはかしけく有へき
 しかのあまの汐たれ衣なるれとも戀てふ物は忘れかねつも
 ささ遠み戀わひにけります鏡面影さらすゆめにみゆれは
 たちのをのおひに尺さすますらをも戀てふ物は忘れ兼つも
 時もりかうちなす鼓敷ふれは時には成ぬあはさるもあやし
 灯の影にかゝよふうつ蟬のいもかゑみかほおもかけにみゆ
 おはたゝやいたゝの橋の崩れなは桁よりゆかんこふな我妹子
 君戀とぬれとねられぬつとめては誰かのる馬の足音かする
 紅のすそひく道を中におきて君やきまささん我や行へき
 まのゝ池の小菅の笠をぬはすして人のとふなを立へき物か

きす萬

わきも子か袖を頼てまの、浦の小菅の笠をとらてきにけり
山たかみ谷へにはへる玉かつらたゆる時なくみるよしも哉
いきのをに思へはくるし玉のをのたえて亂れん人は知る共
玉のをのくりよせつゝもあはさらは我同しをにあはんと思
いせの蟹の朝な夕なにかつくてふあはひの貝の片思にして
思へとも思へもかねつゝ引の山鳥のをのなきこよひを
我妹子を戀ふるにあらん沖にすむ鴨の浮ねの安けくもなし
明ぬとて千鳥しはなく敷妙の君手枕いまたあかなく
おく山の木葉かくれて行水のおと聞しより常にわすれす
風吹ぬうら／＼浪になき名をはわかに上立あふとはなしに
眉ねかきはなひん時まためやはいつしかみんと問つる我を
わきも子に戀てかひなき白妙の袖かへしては夢にみえつゝ
我せこか袂かへせるよるの夢にまさて妹か逢かこと／＼に
おしするや山すけ笠をおきふるし後は誰きん物ならなく
紅の花しありせは衣手にそめつけんとて行へくそおもふ
河上にあらふ若なのなかれても君かあたりのせに社よらめ
百敷の大宮人は玉ほこの道も出ぬにこふるころかな
棹鹿のなくらん山を越さんひたにや君かあはしとはする
石上に生たるあしの名ををしみ人にしられて戀つゝそふる
わきもこかきすてふりぬるあか衣穢れふりなは戀やしぬへき
冬こもり春さく花を手にとりて千かへり恨み戀もするかな
春山の霞にまよふ鶯も我にまさりて物はおもはし
わきも子か朝けの顔をよくみればけふのあいふを戀慕しつる
さきて散る梅か下枝におく露のけぬへく妹を戀る比かな

朝霞かひやか下に鳴蛙聲たにきかはわれこひめやも

櫻花時過ぬれとわか戀る心のうちのやむ時もなし

山吹の匂へる妹かはねす色のあかものすかた夢にみえつゝ

秋のゝ尾花か末の打なひき心もいもに我よするかも

秋山に霜ふりおきて木葉ちる年は行とも我忘れめや

紅葉はに匂へる衣我はきし君かまつちはよもきこえかね

わか宿に今さく花は女郎花さらぬ色には猶戀にけり

萩の花匂ふをみれば君にあはぬまの久しくも成にけるかな

秋されはかり人こゆる立田山立てもゐても君をしとおもふ

秋の田をつとにおしなりおける露消もしまし君に逢すは

ますらをの心はなくて秋の田の戀には花をみつゝ有なん

我が袖にふりつむ雪のなかれ出ていもかたもとに今も消南

夢の事君にあひみてかきくらし降くる雪のきえそかへる

ひとめみし人はこふらくかき暮し降くる雪のきえそ歸れる

かきくもり降くる雪の消ぬとも君にあはんとながらへ渡る

梅花うちみゝられす降雪のいちしるくしも使なやりそ

獨して物をおもふかすへなきにいけとも妹かあふ時もなし

うちの海に釣するあまの舟にのりのりにし心常に忘れす

今さらに妹にあはてや春霞たな引のへつ花も散なむ

あひみすて年そへにけるあやしくも妹は戀すて戀渡るかな

芦かもの入てなくれのしらすけの知すや妹をかく戀んとは

衣手もさしかへつへく近けれと人めをおほみ戀つゝそをる

露草のかりなる命有物をいかにしりてか後にあはん君

棹鹿のふす草村のみえねとも妹かあたりをゆかはかなしも

よそに有て雲井にみゆる妹か家にはやくいた覽あゆめ黒駒

たけとあまりたかねと長き妹か髪此比みねはあけつみたれつらんか萬覽かも
 山草の白つゆおほみ袖にふる心ふかくて我戀やます
 よならへて君をきませと千早振神の心をねかぬ日はなし
 夕附よ曉かたの朝かけに我身は成ぬ妹をおもひかね
 ま袖もてゆか打拂ひ君まつとおりつるほとに月かたふきぬ
 君かすむ三笠の山にぬる雲のたては別つかるゝ萬戀もするかな
 夕けとふわか袖におく露をおもみ妹にみせんととれは消つ（衣服脱）
 待わひてうちへはいらし白妙の我手につゆはおくとも
 朝露の消みきえすみ思つゝまた駒かへし君をこそみめ
 足引の山鳥のをの人めをひとをこゑ萬はひとめみしこを戀へき物をか萬
 妹か名も我名もたてはせしと社ふしの高ねももえつゝ渡れ
 白波の立よるかたのあらいとにあらまし物を戀つゝあらすは
 おほとものみつの白波妹をなほこふと人のしらて久しく
 おほ舟のたゆたふ浦に錨おろしいかにしてかも我戀やまん
 みさこゐる沖のあらいとに立浪の行へもしらす我戀しさは
 大船の沖にもへにもゐる浪のよるへも我は君かまに／＼
 中々に君にあはすはまきの浦の蟹ならましを玉もかりつゝ
 すゝきとる蟹のたく火のほのにたにみぬ人故にこふる比哉
 むまやちにひき舟渡したゝのりに妹か心にのりてふるかも
 我宿のほたてふたからつみはやしみになるまで君を社まそ
 わか戀のこともかたらなくさむる君か使を待やかねてん
 現にはあふよしも無し夢にたにまなくみん君か戀にしぬ（ち服脱）へし
 こんといへは只にたやすしちいさくも心のうに我思はなくに
 思出てねにはなく共いちしるく人のしるへくなきすな夢
 白妙の袖かけしより玉たれのをすのすかさる又もあはぬに

をくるまの錦のひもとけむかも我を忍はゝわれも思はん
 忍ふへしむすひもあへす小車の錦のひもをよひ／＼ことに
 返し
 小車の錦のひもときそめてあまたはねすはたゝ一よのみ
 あらかふにしひても君か濡衣かきよにそやなそ只一夜のみ
 名立ける女の十首よみて送りける

しほ衣あまの身かと思けるうきよにふれはきぬ人もなし
 なき名のみいはれの池のみきはかなよにも嵐の風も吹なん
 ぬれきぬをほす棹鹿の聲聞はいつしかひよと鳴にそ有ける
 田子の浦あまのぬれ衣きたれともほしきに物は言すも有哉
 吹風のしたのちりにもあらなくにさも立やすき我なき名哉
 ほしわひし人をそ聞しぬれ衣わか身になして今そかなしき
 陸奥にあるといふなる名取川なきなとりてはくるしかり鬼
 わたりぬる身にこそ有ける名とり川人の淵せと思けるかな
 なき名立身のきる物はぬれ衣いくかさねとそかきらさりける
 しつのをに掛けてとゝめゝ大方はたか立そめしなきならねは
 返し十首

我屋にも君かきるなるぬれ衣をよにも嵐のかせも吹なん
 同し名を立としたゝはぬれ衣きてをなくさむうらふるゝ迄
 なき名のみたつの市とはきはけともいさ又人をうる由なし
 おりたゝぬ程はかりをや名取川渡らぬ人もなにならなくに
 夢ならてあふことかたき君ゆゑに我も立名をたゝにやは聞
 あちきなく名をのみたてゝ唐衣身にもならさてやまんとや君
 君をわれいくたの浦のいく度かうき名を立てと思ひし物を
 竹のはに落ゐる露のまろひあひてぬるとはなしに立我名哉
 なきたむる泪の川のうきぬなはくるしや人にあはて立なは

君といへば何かなき名のをしか覽よそへて聞も嬉しき物を
うつくしと思し妹を夢に見ておきてさくるになき悲しき
柿本人麿あからさまに京近き所に。しはすの廿餘り
くたりけるを。とうのほらむと思けれど。いさゝかに
さはる事ありてえのほらぬに。正月さへふたつある
として。いと春長き心ちしてなくさめかねてこ
の世にある國々をよみける。是なんぬ中にまかりた
りつるつとて。あるやむことなき所に奉りけると
なん。

五畿内

やましる

打はへてあな風さむの冬のよやましるに霜のおける朝道

やまと

ふた道に我やまとはんにしへの野中の草もしけり相に梟

かうち

朝またきわかうちこゆる立田山ふかくもみゆる松の緑か

いつみ

あまならて海の心をしらぬ哉いつみつしほにみるめから南

津のくに

あしかものさはく入江の水の江のよにすみかたき我身成梟

東海道十五ヶ國

伊賀

ちりぬともいかてかしらん山櫻春の霞の立しかくせは

伊勢

二葉よりひきこそうゑめみる人のおいせぬ物と松を聞にも

しまのくに

山川のいしまを分て行水はふかき心もあらしとそおもふ
をはり

春立は梅の花笠うくひすのなにをはりにてぬひとむらん

参河

あた人の事につくへき我身かはしらてや人の戀むといふ覽

とほたあふみ

ひねもすにとほた近江に種まきて歸るたをさは苦しかる覽

するか

ふしのねのたえぬ思ひをするからに常盤に燃る身とそ成ぬる

伊豆

あふ事をいつしかとのみ松しまのかはらす人を戀わたる哉

かひ

須磨の浦の鶴のかひこのある時は是か千世へん物とやはみ

さかみ

足柄のさかみにゆかん玉くしけ箱ねの山の明んあしたに

むさし

しほりせむさして尋に足引の山のむちにてあととはとめん

安房

春の田のなはしろ所つくとてあはけふよりそせき始めつる

かんつふさ

とめ行んつふさにあはとみえす共しかのはかりはしるといふ也

しもつふさ

木すゑしもひらけさりつる櫻花しもつふさこそまつは咲けれ

ひたち

いつしかとおもひ立にし春霞君かみ山にかゝらさらめや

東山道八ヶ國

あふみ

流れあふみかとの水のむしふれはかたへもしもむまき也梟

美濃

わたつ海の沖に東風はやからしかのこまたらに浪高くみゆ

飛驒

さしてゆく三笠の山し遠ければ今は目たけぬあすそいた覽

信濃

あたなりといひさめられし濡衣はひしなのみこそ立勝るらめ

かんつけ

音に聞よしのゝ櫻みにゆかんつけよやま守花のさかりを

しもつけ

春きぬと人しもつけよ相坂のゆふ付とりも聲にこそしれ

むつのくに

いつかおひんつの國蘆をみる程度は難波の浦の名のみと思ふ

いては

夕やみはあなおほつかな月影のいてはや花のいろもまさ覽

北陸道七ヶ國

わかさ

春立はわかさゝ水につむせりの根ふかく人を思ひけるかな

越前

志賀山を越行人のつくしつゑちせんわたすときはまことか

加賀

おのか香の有ける物を花といへはひとつ匂ひと思ひける哉

能登

されはかつ散ぬる山の花さくら心のとかに思ひけるかな

ゑちう

花のすゑちうに優りて匂ひせはそれをそ人は折てとらまし

ゑちこ

人ににすさかなきおやの心ゆゑちこさへにくゝ思ほゆる哉

さと

東路のもろこしさにおりてたつきぬをや唐の衣といふ覽

山陰道

春雨によには水こそまさるらしたにはたきえは音高くなる

たにこ

たのむへき我たに心つらからはふかき山にもい覽と思ふ

たちま

春霞立まふ山とみえつるはこのもかのもの櫻成けり

いなは

鶯の聲をほのかにうちなきていなはいつれの山に尋む

はゝき

山のはゝきよくみゆれと天原たゝよふ雲の月やかくさん

いはみ

よとともに浪なれ磯の岩みれはかたへそかはく時は有ける

おき

草のはにおきゐる露の消ぬまは玉かとみゆる事のはかなき

いつも

あともなくけさふる雪の朝またいつもるときくは空事か君

山陽道八ヶ國

はりま

立かはりますたの池のうきぬなはくれとも絶ぬ物にそ有ける

みまさか

君かみまさかなく常にはなれつゝ我が花園にふみしたくめり

ひせに

ときは山二葉の松の年をへてくひせにならん時をみてしな

ひちう

たもとひちうきてみさへ流れつるわかなき戀のあはぬ泪に

ひこ

ひころへてみれともあかぬ櫻花風の誘はんことのれたさよ

あき

鶯のあきて立ぬる花の香を風の便に我はしるかな

すはう

水鳥の立ゐてさはくみつのすはうかへる舟を浮ていにける

なかと

海の中ときは入てかつく蟹も人にはあはひともしかり鳧

南海道

きのくに

あさみとり野への青柳出てみんなとを吹くる風は有やと

あはち

我ちかふことを眞と思はすはあはちはやふる神にとへきみ

あは

梢のみあはとみえつゝはききの元をもとよりしる人そなき

さぬき

われはけさぬきて歸つから衣よのまといひしことを忘て

伊與

はかなしや風にまかへるくものみよ心細くて空にわたれる

とさ

みなとなる舟社けきはあやしけれ目たけは風の吹て返すに

西海道十一ヶ國

ちくせ

かたみちくせに作れといひやらん蒔し若なもおいはつむへき

ちくこ歌本になし。

人をこひせめて泪のこほるれはこなたかなたの袖そぬれける

ひこ

誰しかも我をこふらん下ひものむすひもあへすとくる心は

ふうせ

春の野に昨日うせにしわか駒をいつれのかたにさして求めん

ふこ

花に蝶こゝにて常にむつれなんのとけからねはみる人もなし

ひうか

逢ぬこひうかり鳧と思ぬる身をは焦せとしるしなけれは

おほすみ

我宿のおほすみ山のいかなれは秋をしらすてときは成らん

さつま

春の野の華をくさくつまんとてきもかたみをも作りつる哉

ゆき

ゆきかへる雲井に道もなき物をいかてか鷹のまとはさる覽

つしま

山きはに水しまさは水上につもる木葉はおとしはつらむ

萬治二とせ小春後の八日豊の前中津河にして書人の歌あり。

詠宗連坊

一本所載歌
芳野山にみゆきする時

みれとあかぬよしの河とこなめに絶る時なく又歸りみん
あかねさし日は照せ共むは玉のよ渡る月のかくらくをしも
しらすとも又ひく道を知すともすまちを行はつかひ思ほゆ
すまの浦に舟乗つらん乙女らかあかも櫓にしほやみつ覽
山里は月日もおそくうつらなん心のとかに紅葉はもみむ
白露を玉につくれる長月の有明の月はみれとあかぬも
たれかれと我をなとひそ長月のしくれにぬれて君まつ我そ
我宿に咲る秋萩ちりはてはあきにもあはぬ身とや也なん
長月を君にこひつゝいけらすは咲てちりにし花ならましを
ことに出ていはゆゝしみ山川の瀧つ心をせきそかねつる
ひのくもり雨ふる河のさゝら波まなくも人を戀わたるかな
あら磯のほか行波のほか心我は思はしこひはしぬとも
無名のみたつたの山の麓には世にもあらしの風もふかなん
まさしてふ八十の巷にゆふくとふ占まさきにせよ妹にあふく

右人磨集以橋本肥後守經亮本書寫以一本印本及万葉集
校正

家持集

早春部

月よめはいまた冬なりしかすかに霞たな引はる立ぬとか
きのふ社としは暮しか春霞かすかの山にはや立ぬらん
いにしへの人のうへけむ杉かえに霞たな引春そきぬらし
春霞たつかすかのゆきかへり我はあそけなや年のはに
うちなひき春はきぬらし我宿の柳のうれに鶯のなく
梓弓はる山ちかく家ゐして絶す聞らん鶯のこゑ
寒き過春は來ぬらし年月はあらたまれとも人はふり行
梅花さきたる中にふくめるは戀やこもれる雪を待かも
淡雪にむらさき立る梅花君しきたらはよそへてもみむ
梅かえにふりおほふ雪を包みもて君にみせんとれは消つ
わかせこにみせむと思し梅花それともみえず雪のふれは
残たる雪にまされる六日の花はやくな散そ雪はけぬとも
わかをかにさかりにさける梅花残れる雪にみたりつるかも
あは雪の目をへてきえすかくふれは梅の初花散か過なむ
ゆきの色をうはひてさける梅花今さかり也みん人もかな
春のゝに鳴やうくひすなつけん和我のそのに梅の花さく
春くれは先さく宿の梅の花獨みつゝやはるをくらさん
いもか爲いつれの梅を手折とて下枝の露にぬれにける哉
わか宿に咲たる梅を月夜よみ夜なみせん君を社まで
久かたの月夜をきよみ梅花心ひらきてむかし思ふきみ
來てみへき人もあらなくに我宿の梅のはつ花散ぬるもよし
我かさす柳のいとをふきみたる風にや妹か梅のちるらん
うちなひき春かと我はけふそしるわかしろかみに梅花ちる

春霞立し時より鶯のはつ聲するけはるへにやなる
浅みとり染かけたとみるまでに春の柳はもえにける哉
あさな／＼わかめる梅に鶯のきゐて鳴へくしけくはやなれ
百敷の大宮人のいへ路かつらなるしたり柳はみれとあかぬかも
青柳の糸よりかけて春風のみたれぬさきにみん人もかな
今日更に君はなゆきそ春雨の心を人のしらさるなくに
はる雨にあらしひかねてわか宿の櫻の花は咲ぞめに鬼
見わたせは春日ののへにかすみ立さきみたるは櫻はなかも
はる雨の折々ふるにたかまとの山のさくらははいかゝ有らん
足引の山のまてらすさくら花此はる雨に咲にけらしも
春の日の紅にほふ桃のはな花の名たてに出いたるいも
山もせに咲るつゝしのにくからぬ君をいつしか行てはやみむ
我せこにわかこふらくはおく山のつゝしも今日は盛成けり
はる山は散過れとも三わ山はいまたふくめり君まぢかてに
つはなぬく浅ちか原のつほすみれ今はさかりにしける我戀
山吹の花とりもちてつれもなくかれにし妹を思出るかも
やまふきを宿にうゑつゝみる時は思はやます戀こゑをまされる
戀しくはかたみにもせんわか宿にうゑし藤波花咲に鬼
藤波の花のさかりにかくこそはかきすくりつゝ年に思はめ
ふちなみのはなさくみれは時鳥なくへき折はちかつきに鬼
藤なみの花の盛に成にけりならの都は思いつやきみ
梅の花はるよりさきに咲しかと見る日はまれに雪は降つゝ
来て見へき人もあらしを我やとの梅のはつ花折つくしてん
梅の花散にし日より敷妙の枕も我はさためかねつも
白紙にさしまとはせる花の色をそれなむ梅と人はわかなむ

夏歌

春風のふくにさきたつ梅花きみかためにそきとめつる
風ませに雪はふるともみになさす我家の梅を花にちらすな
雪さむみさきもひらけぬ梅花よし此頃はさてもあるかね
我宿のまへの青柳かせふけは折人なしにぬきみたるいと
青柳のいとゝあやしき散花をぬきてとゝむる物とはなしに
山守はいはゝいはなん高砂の尻上の櫻折てかきゝむ
手もやます折ておきてむ櫻花散なむ後にあかぬ戀せし
ゆかん人こん人しのへ春霞たつたの山のはつきくら哉
ふる郷に花は散つゝみよしのゝ山のさくらはまたさかす鬼
櫻花こたかき枝の空にのみ見つゝやこひん折すへもなみ
春の雨に匂へる色もあかなくに香さへなつかし山吹の花
折てしももてゆきかほに櫻花さける山へをわたるしら雲
梅の花さきつる野そのイへの青柳をかつらにしつゝ遊びくらさむ
花やなきかつらに折し梅花たれかばうゑしさきのうへに
さほ山にたな引霞みることうかへしよかつきのうへにイに妹を戀つゝなかなぬ日もなき
久かたの天のは山に此夕かすみたな引はるたちにけり
おくれゐてあれはや戀の春霞たなひく山を君かこえなは
花のちることやくるしき春霞立田の山の鶯のこゑ
石はしる瀧なくもかな櫻花手折もたらんみぬ人のため
色もかも咲にほふらん橘のこしまかさきの山吹のはな
今イ

春雨そふりやみぬ也時鳥たつたの山に今やなくらん
時鳥まてときなかなすあやめ草玉にぬく日のまた遠きかも
五月雨の空もとゝろに郭公何をうしとか夜たゝ鳴らん

さみたれをたひにのみふる時鳥夜深くなきついやねかねつゝ
 たれをかはこふの山邊のほとゝきす草の枕にたひくそ鳴
 郭公宮古へゆかは立かへり今きぬへしと妹につけよかし
 郭公山ちにたかく鳴聲をわか獨ねに聞かかなしき
 しのゝめのほからに聞は時鳥我まつかひはなかりけりやは
 かも河のみなそこ見えて照月を行てみんとや夏秋する
 うの花の匂ふ五月の月きよみいねす聞とやなくほとゝきす
 卵のはなもいまたさかぬを時鳥さほの山へをきなきとよむる
 わきもこかきる夏衣白妙にさけるかきねのうの花やとき
 時鳥待に夜ふけぬ此くれのしつくをおもみ道やよくらん
 夏山の梢をたかみほとゝきすなきとよむる聲のさやけさ
 郭公一こゑ鳴ていぬるよはいかてか獨いをやすりぬる
 夏衣かたしめ山の時鳥今はきとよみ立かへりなけ
 うつくしとみる度毎になてしこの花の名残はなつかしなきみ
 春過て夏そきにけらし久かたの衣ほしたる天のかこ山
 時鳥おもはすありき此くれのかく成まてになとかきなかぬ
 神なひのいはせのもりの時鳥ならしのをかにいつかき鳴む
 春日野のふちちり過て何をかもさかりの人の折てかさゝん
 うの花のちらまくをしき時鳥野にも山にもなきとよむかも
 ほとゝきすきなきとよむる橋の花ちる庭をみる人もかな
 此暮の夕やみ成を時鳥いつこをいへとなきわたるらん
 獨ゐて物思ふときにほとゝきすこゝを鳴行は心あるらし
 しななるすかのあらのに時鳥なく聲きけばとき過に鳧
 君こふとふしむもせぬに時鳥あを山邊より鳴わたる也
 我宿の花橋にほとゝきすよふかくなけは戀まさるなり
 ほとゝきす獨山へになくなれは我うちつけに戀せらるはた

秋歌

神なひのみむるの山のくすかつらうら吹かへす秋はきに鳧
 君ゆへに我戀をれはわかやとのすたれうこかし秋風そふく
 わきもこか衣ならなむ秋風のさむき此ころ下にきましを
 秋かせのさむき朝のさゝのをか戀らん君に衣きせましを
 あき萩の咲出るのへの夕露にぬれつゝきませよは深ぬとも
 秋はきの下葉たはゝに置露のけなはけぬとも色に出ぬや
 玉はぬけ消すはきえし秋はきのうれもたはゝにおける白露
 いもか家の門田をみんとうち出て心もしるくてれる月かも
 秋かせの吹にし目より天河かはせに出立て待さつけこせ
 あまの河波は立とも我舟はいさこき出なむ夜のふけぬるに
 秋かせのきよき夕にあまのかはふねこきわたせ月人をとこ
 しはくもあひみぬ君に天川舟出はやせよ夜のふけぬ時
 ひこ星の妻むかへ舟こきくらし天のかはらに霧立わたる
 此夕ふりくる雨はあまの川とくこく舟のかひのしつくか
 天河白波たかく我こふる君か舟出はけふそすらしも
 あまの川霧立のほる七夕の雲の衣のなひく袖かも
 あまの河わたるせふかき船をうけてこきくる君か梶のと聞ゆ
 君かふね今こそわたれ天のかは霧たちわたる此川のせに
 秋かせに山飛こゆる鴈金の聲とほさかる雲かくるらし
 此頃の朝けにきかぬ足引の山をとよましさを鹿そ鳴
 手にをれは袖さへ匂ふ女郎花その白露のちらまくをしも
 殊更に君はすらしををみなへしさかのゝ花に匂ひてをみむ
 秋萩の咲たる野への棹鹿はちらまくをしと鳴といふ物を
 我宿の萩のはなさけり見にきませ今二三日あらはちら南

まくす原なひく秋かせ吹からイにあたの火の、萩の花ちる
 秋の、の尾花か末のうちなひき心は妹によりにしものを
 秋されはおく白露に我宿のあさちかうれは色付にけり
 物思ふとかくれのみゐてきてみれば春日の山は色つきに
 かり金の鳴にし日よりかすかなる三笠の山は色付にけり
 かり金の鳴つるなへにたか圓ののへの草はも色付にけり
 秋はきのうつろふをしと鳴しかの聲聞山はもみちにけり
 むは玉の夜の夢にはみゆらんや袖ひるまなく我し戀ふれは
 鳴鹿の聲にてふりぬ時は今あきの半に成ぬへらなり
 此夕秋かせふきぬ白露にあまねく花はあすも咲なむ
 春くれは霞にこめてみせさりし萩さきにけり折てかさゝん
 わか宿にさける秋はき常ならは我待人にみせまし物を
 うつら鳴ふりにし里の秋はきを思ふ人としあひみつるかな
 いもかひもとくと結ふと立田山いま社もみちはしめ也けれ
 飛鳥河もみちそなかるかつらきの山の木のはは今かちる覽
 秋はきの花咲にけり手折もてみれともあかぬ君にも有哉
 秋山に霜ふりおほひ木葉ちるともにゆけとも我忘れめや
 紅葉はをちちらす萬に時雨の降なへに夜さへそ寒きひとりしぬれは
 さを鹿の妻とふ山のをかへ成わさ田はからし霜はおくとも
 秋田かり庵つくりてわかをれは衣手寒し露そおきける
 長月の時雨のあめにうつり行かすかの山は色つきにけり
 しら露を玉にもぬきて長月の在明の月をみれとあかぬも
 一とせにふたゝひゆかぬあき山を心にもあらずくらしつる哉
 ときは今は秋そと思へと衣手に吹くる風のしるくもある哉

あきはしめいつとしらぬを月影のまどに入ても思ほゆる哉
 今よりは秋風さむく成なむをいかてか獨なきよをねむ
 たかまとの野への秋萩ちらさらは君かかたみと見つゝ忍はん
 こそ見てし秋の月夜は照せともあひみし妹はいや遠さかる
 七夕はなのりすらしも天河きよき月よにきりたちわたる
 ひこほしの別て後にあまの川をしむなみたに水まさるらし
 天河かへらん空もおもほえすたえぬ別とおもふものから
 としかさね我舟かくる泪かはかせはふくとも波たつな夢
 戀わたる年のわたりは七夕のかた時もあはす別ぬるかな
 君かくる今夜はまれに天川年月のみそわかるへらなる
 あまの河淺くふみつゝわたるせに歸なみたの淵と成つる
 天川きり立くもれ玉くしけ明なはあかすかへらまくをし
 秋かせのふきにし日より天河せゝに立出て待とつけなむ
 ひとゝせにひとたひわたる天川いくらはかりのひろさ成覽
 けふよりは天のかはらはあせなゝむ淵せともなくたゞ渡南
 逢よしもわたるなと思へは天川思立よりそ嬉しかりける
 かさゝきののはしつくるより天川水もひなゝむかち渡りせん
 秋かせに夜のふけ行は天川かはせになみの立ゐこそまて
 一とせに七日のよのみあふ事の戀もつきねは夜そふけにける
 天の河かはせに波のうちはへて我たちまちしけふそ來にける
 天河せゝのしら波さくもわかまつ君か舟出すらしも
 いもにあはん夜をはたまつと久かたの天川原に月はえに
 銀川いはこそ波の立ゐつゝ秋は七日のけふをこそおもへ
 さゝかにのはつなにかけてわたす橋又もこほれす心有らし

天河夜ふかく君はわたるとも人しれぬとはおもはさらなむ
 七夕のあふ夜のみ社天川わたるせありてきりもたつらめ
 よなくに天の河原にならせ共夜永しとしもあらしと思
 久かたの天のかはらに舟うけてこよひや君か我やとにこむ
 あけぬやととふ物ならは天河霧立いまはれすといは南
 秋のよの庭のしら露けさみれは玉やしけると驚ろかれつゝ
 わか宿の尾花か末にしら露のおきし日よりそあきかせの吹
 玉にぬきかけてまもらん秋萩のうれはわくにおける白露
 しら露と名にはたつれと紅に山の木葉の色にみえけり
 秋かせは日毎にふきぬ高砂のをへの萩のちらまくをしも
 秋風はことと吹ぬか白妙のわかとき衣ぬふ人もなし
 うちはへてかけとそたのむ峯の松色とる秋の風にうつるな
 さほ山のはゝその紅葉ちりぬへみ夜さへ見よとてらす月影
 我門のわさ田も未たかりあけぬにかねて移ろふ神なみのり
 足引の山田の稻もひいてにけり植しにあはぬわかかりにこん
 いと早みまたきもかるな石上ふるのわさ田に未たひてぬを
 秋の田のかりの庵に雨ふりて衣手ぬれぬほす人もなし
 足ひきの山田のいねは出すともつなをはやはへ守と知らむ
 たかためのにしきなれはか秋霧のさほの山邊を立かくす覽
 秋きての見へき紅葉を霧くもりさほの山邊のはるゝ時なし
 霧分て鷹は來にけりひまもなく時雨は今やのへにそゝかん
 千鳥なく佐ほの川きり立ぬらんみねの梢もいろかはりゆく
 秋霧のまきれにいへち忘れてや思はぬ方にとまりしにけむ
 あしろへとさしてきつれと河霧の立とまよひに道も行れす
 かり金の鳴つるなへにから衣立田の山のもみちしぬらむ

秋霧に妻まとはせる初かりの雲かくれ行聲のきこゆる
 あま雲のよそにかり金鳴時そ下葉いろつく我やとの萩
 雲の上にかりそ鳴なる我宿のあさちもいまた紅葉あへぬに
 大空に雁そなく成うねひ山みかさの原にもみちしぬるかも
 あま雲のよそにかりかね聞しより霞霜ふりさむきこよひかも
 山田に田もりのひたのこほろわて戀す鹿のこゑそとよめる
 秋山にこゝろのはれはみかひする鹿をおくまてとむる也鬼
 きりゝす我宿近く夜はなけひるはさはかし物かたりせむ
 から衣立田の山にあやしくもつゝりさせてふきりゝす哉
 きりゝすつゝりさせとは鳴なれと村衣もたる我は聞かれす
 秋ののに人松虫の聲すなり我かと行ていさとふらはむ
 秋の山かけやかたふく日くらしの此暮ことになき渡らん
 萩の花色つく秋をいたつらにあまたかそへて年そへにける
 いなひのゝ秋の尾花はまねけとも女郎花にも心とけゝる
 藤はかまきる人のみや立ながら時雨のあめにぬらし染つる
 なとうたて吹秋かせを藤はかまぬきてかすへき妹もまさぬに
 うゑてこし秋田かるまで越こねはけき初かりの音にそ鳴ぬる
 折てみはおちそしぬへき秋はきの枝もたはゝにおける白露
 萩の花ちるらむをのゝ露霜にぬれてをゆかむよはふけぬ共
 おく山の岩かき紅葉ちりぬへみてる目の光みるよしもかな
 天川あふせしら波たとりつゝわたりはてれば明そしにける
 きりゝす我衣つゝれわひ人の宿も秋かせよきすふくなり
 わきも子かはたきりおろしから衣させてし日より秋風の吹
 萩の露玉にぬかむととれはけぬみむ人は猶枝なから見よ

冬歌

我せこか衣のすそを吹かへしうらめつらしき秋のはつ風
秋風の吹につけてそおもほゆるさほの山邊は今やもえ出る

神な月時雨にあへるもみちはの吹は散なんかせのまに／＼
もみちはは過こましくをしみ思おもへ共ともあらそふ今夜明あすもあら南
冬ふゆされは衣手寒ふきみよしののたかき山へにみ雪ゆきふるらし
まきもくの檜原ひののいまたくもらぬは小松か原に淡雪あわそふる
夕ゆふされは／＼とをろにか衣手寒ふしたか圓の山の本ことに雪ゆきそふるらし
やたの／＼の淺あち色つくあらち山みねの淡雪あわさむくなるらし
はたゝ雲くもふらぬ雨あめゆへ久かたのあめよりは空に曇りあひつゝ
あは雪の日毎々ごとにふりしけはならの都のおもほゆるかな
我せこを今や／＼といてみれば淡雪あわふれり庭はとおとろに
妹か家路いへわれ惑はしつ久かたのあまき雪ゆきのなへてふれゝは
つくはねのよそにのみして有かねて雪けの水になつみつる哉
山の上のさやかにみえず久堅ひさのあまき雪ゆきのなへてふれゝは
あし引の山にしるきは我宿わしにきのふ日くらしふりし雪かも
松かけの淺茅あか上のしら露つゆをけたすて玉にぬく物にもか
白雪しらのふりおほふ山をこゆるまも君を社やしろにいきのをに思おもへ
高たかま山岩いねに生ふるすかのねのねもころ／＼に降ふおく白雪
奥山おくの横よこのしほにふる雪ゆきのふりはます共ともつちにおちめや
うちふき鳥は鳴ともかくはかり降ふしら雪に君きまさんや
おほ宮の内にも外にも珍めづらしくふれる白雪しらふまゝくをしも
橘たちばなのみさへ花さへその葉さへ枝さへふれとまさとときなき

けふしれに雪にこそひて我宿わしのふた木の梅は花さきにけり
わかやとの冬木の上にふる雪を梅のはなかとうちみゆる哉
うちなひく冬をちかみかむは玉たまのこよひの月よかすみたる哉
み雪ふる冬はけふあしたまで驚おどろのなかん春日はる日はあすにあるらし
あすか川がはかは霧きりたかしむは玉の夜風よかぜそ寒き雪ゆきそふるらし
今更いまに待人まち人こめやあまのはらふりさけみれば夜はふけに鬼
あはすある物ならなくにときゝぬのさらなる戀も我はす哉
草かけのあさあの松まつのかさしまを見つゝや君か三笠みかさこゆ覽
すみの江えのみるみちをわき道みちなしと人にしらるゝ事はよき哉
みかはなるイ
三ヶ月さんげつのふたみくちよりわかるれは我身わしもあれも獨かもぬる
照月しょうげつを雲くもな隠しそしまかけに我ふねとめんとまりしらすも
美吉野みきちののみふねの山にゐる雲の常ならむ其我おもはなくに
紅葉もみぢはの時雨ときふりとふれはさす笠の上に紅べにしみぬへらなり
吹風ふきかぜに散たにをしきさか山の紅葉もみぢかきたれ時雨ときふりさへふる
から衣立田いだての山のもみちはははた物もなきにしきとぞみる
わきもこか神かみなひ山やまのもみちははうつる事ことにも物は悲しき
かさゝきの渡わたせる橋はしにおく霜しもの白きをみれば夜を深にける
さほ山に錦にしきおりかく神な月つきくれの雨をたてぬきにして
春はるをまつ梅うめの立枝たちえにふる雪は人のためなる花にそ有ける
別行冬べつぎょうのかたみは黒かみのふりおける雪のきえぬなり鬼
あら玉たまの年のをはりになる事に雪も我身わしもふりまさりつゝ
此時雨このときいたくなふりそわきもこかつとにみせむと紅葉もみぢ折をり
秋あきのたは皆かりはてつれと初霜はつしものおくての稻いねそ久しかりける
露霜つゆしももおけはそよけと竹たけのぼのいつもうつろふ色ならなくに

おとしける末はの上もみらいに白玉をぬきてみせたるけさのあられは
 霰ふり玉とみれともひるひおきて心の如くぬかはけぬへし
 夜をさむみあさとを明て見わたせば庭もおとろに淡雪そ降
 山のかひそこもみえす白かしの枝にもはにも雪のふれは
 月夜には花とそみゆる竹の上もみえにふる白雪をたれかはらはん
 雪ふらは立もかくれん春日なる三かさの山のすゑのまつ原
 あら玉の年もみえも渡りてあるかうへにふりつむ雪のきえぬ白山
 梅かえにふりつむ雪を包みもて君にみせんととれはけぬへし
 しら雪のいろわきかたき梅かえにとも待雪そきえ残りたる
 しら山の峯なれば社白雪のかのこまつらにふりてみゆらめ
 冬のよの寒きまに／＼わきもこか衣をかりの聲はきゝつや
 けひか家ちあれまとはめや足引の山かきくもり雪はふら南

戀部

わかせこを戀ては久しむまおひのあへ橋のこけをふるまで
 吉野川いはきりとほし行水のおとにはたてし戀はしぬとも
 音にのみ戀れはくるし撫子の花にさかなむなそへつゝみむ
 玉ほこの遠道もこそ人はゆけなとか今のま戀しかるらん
 彥星のつまよふ舟の引つなのそこに絶なむと我思はなくに
 足引の山のかけ草むすひおきて戀やわたらん逢よしをなみ
 しらま弓もみえいつはの山もみえのときは成命かあやな戀つゝやあらん
 奥山のいはほのこけの年もみえひさにみれともあかぬ君にも有哉
 長月の時雨のあめの山かくも我むねたれをみてはや見なむ
 妹かぬる床のあたりに岩くゝる水にもかもやいりてくゝねまくもみえ
 くしけなるかゝみの山をこえ行は我は戀しき妹かすかたか

雜部

こひしくはきませぬ君の長月ちがひのもみえみちの色のすきばつる迄
 かくはかり戀しくあらはます鏡月かがみづき日ひならてもあらまし物を
 最上山すかけせしより心有てまもりかへせるやかたをのたか
 橋をもりへの家のかと田かりわせかりとき過ぬうとみやすらん
 我宿のわさ田かりかりあけてあへす共君か使はたゝにはやらし
 かは風にかはつ鳴也なり夕ゆふされはかり金さむしゆふまくらせむ
 白波しらなみのこすといふかたにつきぬれば今を嬉しきみつの濱松
 家路には石ふむ山いしもなき物ものをわか待君かむまのつまつく
 さよ深てみつゝやゆかむまつら成小夜姫せいやひめのかひれふりの山
 岩のへに釣せし人もうちつけの思ありとはしらすや有けん
 足引の山すかのねをひきみつゝ我かねはとゆめ人にいふな
 足引の山下かせはふかねともいもかなき夜はいねて寂しも
 あひみんとあひ榮へみむと大宮を仕へまつれば尊くも有哉
 世中の常なきことは知らむを心をつくすますらをににして
 よの中のつねならぬ身みとかつしれはいもに心を忍ひかねつも
 みたちせしこまのあら磯今みれは老さりし草生にけらしも
 けふ／＼とわか待君は岩水いしかにみづのかこにまじりぬありといはめや
 妹か名はせなになかさむ姫小松まつかえかくれこけ生る迄
 しぬらんとかねてしりせは北海くわいのありその濱はみせまし物を
 いっしかとまつらむ妹に玉ほこの事たにつけすゆきし君か

一本所載歟

雲隱鳴なる鴈の行てみむ秋の田のほもしけくしおもほゆ
妹家路我わすれめやあし引の山かきくもり雪はふるとも
新しき年のはしめにいやとしに雪ふみちらし常ならぬかも
戀つゝもあらんと思へといふは山隠れし妹を忍ひかねつも
さほ山にたな引霞みる毎に妹にこひつゝなかねひそなき
きのふこそ君はこましか思はずに濱まつかえの雲のたな引
君はいさわすれやすらむ玉葛かけにみえつゝわすれぬ物を
白露はけなけなゝむきえす共玉にぬくへき人もあらしを
我宿の江の木つきのきつき毎につかひはやらむ心またくな
その原の山をいくかもなけくまに君も我みもさかり過行

右家持集以橋本肥後守經亮本書寫校合

群書類從卷第二百三十五

和歌部九十家集八

權中納言兼輔卿集

正月一日これかれあつまれる所にて

あたらしき年の始の嬉しきはふるき人とちあへる也けり

藤原のさねきか藏人よりかうふり給はりてあす出んとするに

むは玉のこよひはかりかあけ衣あけなは人をよそに社みめのりゆみのかへりたちのあるしの所にて

故郷のみかさの山は遠けれと聲はむかしのうとからなくに兵衛のつかさはなれてのち庭に紅梅をうへて花おそく咲ければ

宿ちかくうつして植しかひもなく待とほにのみ匂ふ花哉梅花おもしろかりけるを見にとてひわ殿におはしけるに

やと近く匂はさりせは梅花風のたよりに君をみましやはるかむ(玄土)の宰相左近中將にて紅梅を折ておこせたりしに

君かため我おるやとの梅花色にそ出る深き心はとある返し

色も香もともに匂へる梅花ちるうたかひのあるや何なりしのひたる人の移香の人とかむるはかりしければその女に

梅花立よるはかり有しより人のとかむる香にそしみぬる是も女に

もとの香のあるたにあるを梅花いと匂ひのそはりぬる哉屏風に

青柳のまゆにこもれる糸なれは春のくるにそ色まさりける三條の右大臣殿(金芝)のまたわかくおはせし時かた野に狩し給ひし時おひてまうて

君かゆくかた野はるかに聞しかと慕へはきぬる物にそ有けるいそくことありてさいたちて歸るにかのおとゝのみなせ殿の花おもしろければつけて送る

櫻花匂ふを見つゝかへるにはしつ心なきものにそ有ける京に歸たるにかのおとゝの御返事

立かへり花をそわれは恨こし人のこゝろののとけからねはあたなりといへる人に花折てやるとてあすしらぬ物としるゝ櫻花ちらぬ限りはみまくほしはた櫻の花のちるをかきあつめて下さふらひにをかせ給

へりけるをみてひはのおとゝ
散花をあたなる物といふなれは斯てのみ社みるへかりけれ
そのついでに

ひろひ置てみる人しあれは櫻花ちりての後の悔しさもなし
櫻の花のちるをみる人

雪のことちりくる春の櫻花冬は残れるこゝちこそすれ
かへし

櫻花しらかにまじる老人の宿には春のゆきやたえせし
庭にたゝすみて八重山吹のもとにて

わかきたるひとへ衣は山吹の八重の色にもおとらさりけり
くちなしの色このみといふなはたてゝ井手の山吹盛すく哉

是は井手といふみかばやうとに山吹の花をもたせて
色めける人のおこせたりける返事也

あふ事をこよひゝと頼めすはなかゝ春の夢もみてまし
雨ふる日

庭たつみ木の本ことに流すはうたかた花をあはとみましや
みのむしつける枝につけておこせたる返事に

春雨のふるにつけつゝみの虫のつける枝を誰か折つる
もろともに我をる宿の櫻花あかぬ匂ひを誰にみせまし

京極の家の藤の賀三月一日しけるに三條右大臣殿
かきりなくなにあふ藤の花なれはそこるもしらす色の深さに

かへし
色ふかく匂ひしことは藤浪の立もかへらす君とまれとそ

またおとゝ夜明にけり
昨日みし花のかほとてけふみれはねてこそ更に色優りけれ
とあれはまた

一夜のみにてしかへれは藤の花心とけての色みせんやは
また

いたつらに明はあやなし時鳥なくを待とて君はとゝめん
かつらの御息所なにことにかそうせ給て返事おそし

とて恨み給けれは
つゝむへきほとならなくに時鳥いかゝしてかはふる聲のする

物思ひしける比時鳥を聞て
時鳥なきのみわたる夏山のしけくも物をしのふ比かな

大やけ所にしのひにきける男のえかくれあへて誰そ
なといひさかはれけるを聞て

人しれぬ宿にすみせは時鳥うき五月雨はしられさまし
平のなかきかはりまよりのほりきたすること有てい

ままでまいらぬといひたる返事に
時鳥なきまふ里のしけゝれは山へに聲のせぬもことはり

男のもとより扇えたる女にかはりて
嬉しくていとゝゆく末わひしきは秋よりさきの風にそ有ける

七月六日
いつしかとまたく心をはきにあけて天の河原をけふや渡覽

七日うへのさむらひにこれかれ歌よむに
七夕をわたして後は天河浪たかきまで風もふかなん

戀わたる七夕つめにあらは社けふしも人にあはんと思はめ
是は。かのさはること有てと云たりしなかきか。ありあ

りて七日に來けれは。内のさふらひにていひ出したり
ける。

七月七日歌よみける所にいきて
天河あさせ白浪たとりつゝ渡りはてなは明そしぬへき

常にあひそひたりける人の。其夜ほかにて

七夕にわかかすものはまたもなしこよひ計のあはぬもの也

返し女

こよひかす七夕つめに身をかへて明は歸らん事を社おもへ

まらうとのいそきたつを

七夕の人に物かすこよひさへいてゝはいたく急かさならん

女に

人しれすおもふ心は秋萩の下葉の色に出ぬへらなり

扇を人に送るとて

吹風とうとまさら南秋の夜のエそむつましきしるへ成ける

月なみの御屏風につらゆき

人しれすこゆと忍ひし足引の山下水に影はみえつゝ

殿返し

河霧の立しかくせは水底にかけみる人にあらしと思ふ

よさふらひにて女郎花みに野へ出んとさたむるに八

月なり

女郎花は思ひなわひそもろ共に月も過ぎすむれてとふへし

こないしのかみの賀みかとのせさせ給ふに屏風の繪

雲井にかりの飛所

白雪の中にまかひて行鴈も聲はかくれぬ物にそ有ける

女のもとより

いて人の忍ふといひし言の葉は時雨と共にちりにけらしも

返事人にかはりて

初時雨ふりしそむれは言の葉も色のみまさる比と社見れ

はつ時雨ふるにぬれつる我袖のひるまはかりをみるそ怪しき

こないしのかみの御屏風に

時雨ふるおとはすれとも呉竹のなと世と共に色もかはらぬ

はつきはかりに親の思にて久しくえあふましき人に

墨染の衣もよなへたてつゝおほつかなくや秋を過さん

おもひなりけるをしはとひけるほとにかくとい

ふになくさむといひたりければこのとふらふ人

とふ毎に名草の濱のなくさまは波のよるひるあらしと思ふ

返し

白浪のよるゝことになくさまは袖のひるまは我も知なん

十月ふたつあるとし御前の菊のえに

神な月ふたつあるとしの時雨には一本菊そ色こかりける

女房の

菊の花折てはとらし初霜のおきなかしこそ色まさる比

こないしのかみの住給ひし時藤壺にて菊の賀みかと

のせさせ給ひけるに

紫の一もときくは萬代をむさしのにこそ頼むへらなれ

御前に菊たてまつるとて

けふほめて雲井にうつす菊の花天つ星とや明日よりはみん

からにしきあらふとみゆる立田河大和の國のぬさにそ有ける

はやうなく成にける人ともろ共に逍遙せし所をひさ

しく成て見て

うたゝねのうつゝに物の悲しきは昔のかへをみれば成けり

人にさうそくをくるとてもものこしにつけゝる

むすふをのかけてみたればむは玉の夜の衣を返すまとしれ

人のもとに文やらむとてかきてはやりゝするひと

をみて

思ふこといふことかたみ徒にかきてやるをそかたみにはする

女の恨てなきけるに

岩千鳥あやなかるねは何故になかすの濱のなかすにあら南

女かへし

物思ふをなくさの濱のいは千鳥なくさむまにそ鳴まさりける

父女に

わすれなん我をうらむな時鳥人を秋にはあはんともせず

返し

忘れなは誰かは人を恨へきうきにおくれてしなは我かは

をとこ

みくまのゝ浦のはまゆふもゝかさね心はあれとあはぬ君哉

女返し

みくま野の浦の濱ゆふ夕されは我にひとへに思やはすな

また返し

しのゝめの明れは君は忘れないつともわかぬ我を悲しき

雨ふるとてこぬ男をうらみければ

思ふ事ならすなからに世の中のふれはや雨に我さはりけん

月もへたゝりにけると女のいへる返し

浮雲に身をしなさは久かたの月へたつともしられさり鬼

女に

あひもみて君かきえなはけふ計りちいろの濱の名をも流さん

伊勢の齋宮にまいりて歸る比はやうしりたる女のも

とより

人はかる心のくまはきたなくて清きなきさにいかて行けん

此女は齋宮のないしといふなり。返し

たかために我は命をなか濱の浦にやとりをしつゝかはこし

かたかへにいきたる所に枕をかへすとて

しき妙の枕にちりのゐましかは立なからにそ人とはまし

かへし女

君か爲打拂つゝしき妙の枕のちりにけかれぬるかな

冬の日はなかもむるまにも吳竹のよるそ侘しきなき思は

女のもとより出てほとなく雪のいたくふりければ

白雪と今朝はつもれる思かなあはてふるよの程もへなくに

父女に

冬のよの涙にこほる我袖の心とけすもみえし君かな

返し

いつとてもはるゝ事なき我身には戀をまさらんかけん物かは

女

うき身とて雪降まゝに消にしを人にとはれん玉しゐもみん

かへし

ふりもせぬ君か雪けの雪ゆへ袂にとけぬ氷しにけり

あふ事をいつしかとのみ思ひつゝくらす心のあやしかり鬼

常にあひしりたりける女のいかゝありけんふすへけ

れは

東路のあるかなきかをしらぬまは厭ふにきたる物にそ有ける

つねにそへる女四日はかり外にて

おののえも朽やしぬ覽あふ事の世々ふる事の久しと思へは

心みにひとりぬるよの夢にたにみぬは侘しき物にそ有ける

女山吹のきぬきかへたりけり返すとて

語りつといふくちなしの色もなくたてる衣はかひなかり鬼

わらは名むきといひける人にすみけるをすこしかれ

ける比かくやるとて

みまぐさのためとおほゆる草莖のむきとや人の今はかる覽
たしまの湯にくたるとてふたみのうらにやとりて
夕月夜おほつかなきを玉くしけふたみの浦は明てこそみめ
しふく山にて

あらしふく山下とよみなく鹿の妻こふるねに我そ侘しき
女のまたあかぬほとに人の國へいきけるにあふ坂な
りける家をかりてそれよりいてたちければ

あふさかの關にわか宿なかりせは別て後はたのまさらまし
大江千古かしらやまにまうてけるに

君かゆくこしのしら山しらねとも雪のまに／＼跡は尋ん
ものへゆく人にきぬやるとて

もろともに惜むわかれもから衣けふ許りそと先そほちける
ものへゆく人に

思ひやる心しききに立ぬれはとまる我身はあるかひもなし
人のはらからの物へゆきけるにかはりて

ひとつすに歸りはるれと濱千鳥しはしもたえは侘しかり鳧
あふきにぬさつて

風にしもつけつるぬさは道のへの手向にあかぬ神なかれとそ
亭子院のみかとおほうち山におはしますすにうちの

御つかひにてまいりて
白雲のこゝのへにしも立つるは大内山といへはなりけり

幽仙法師かとし久しく御導師つかうまつりて御佛名
のあしたに律師になりけるを見て

足引の山のかけはしふみのほりけふこそ嶺の花はおるらめ
この律師にかはりてそうせる

日の光ちかき朝はいたゝきの霜こそとけて袖ぬらしけれ

式部卿宮うせさせ給へるころ
今はとて風まつほととの櫻花人の世よりはひさしかりけり
おやの思ひにて山寺にこもれるにいつくにてと人た
つねたりける返事

足引の山へに今はすみそめの衣の袖のひる時もなし
藤衣人の袂とみし物をおのかなみたになかしつる哉

女をなくして家に歸てかのすみし所をみて
立寄んかたもしられすうつせ貝むなしき床の浪のさはきに

思ひにて人の家にやとりけるに此家に忘草のおほ
かりければその家にいひける

なき人をわすれかねては忘草おほかる宿にやとりをそする
かへし

かた時に見てなくさめよ昔よりうれへわするゝ草といふ也
ふくぬくと聞て人のいひをこせたる

今はとてをしきながらに藤衣ぬきすてゝけることの侘しき
返し

藤衣うきをかきりにはつれつゝ泪の玉をぬくそ悲しき
先帝のおりゐさせ給ふに三條のおとゝ

かはりなん世にはいかてかすまふへき思やれ共ゆかぬ心に
そのかへし

秋ふかき色かはるらん菊の花君かよはひの千世しとまらほ
又

おちかはる萩の下葉のしたにのみ秋うき物と我なきそへん
たいこの帝うせ給て後三條右大臣

人の世の思ひにかなふ物ならは我身は君にをくれさらし
帝うせ給て又の年の正月の朔日に三條のおとゝ

いたつらにけふやくれなんあたらしき年の始は昔なからに返し

なく泪ふりにし年の衣手はあらたまれともかはらさりけり是もおとゝ

都にはみるへき君かなき物を常に思ひて春やきぬらん又おとゝ

はかなくて世々ふるよりは山科の宮の草木とならまし物をかへし

山科の宮の草木と君ならは我も雪にぬるはかりなり三月のつもこり。おとゝ

櫻ちる春のくれには成にけりあやめもしらぬなけきせしまに返し

春ふかくちりかふ花をかすにてもとりあへぬ物は泪成けり帝の御ふくに親のを重ねて貫之か來りけるによみて

やりけるひとへたにきるはわひしき藤衣かさなる秋を思やらなん山里にて

足引の山へにをれば白雲の立ぬたゆたひ物をこそ思へ朝夕の身にはそへともあら玉のとしつもりゆく我そ悲しき

さかのおほみゆきのついでに年たけてあひつることを數ふれに我もおきなに成そしにける

としことに鳴つる鴈と聞しまに我はひたすら老そしにけるこのかなしきなと人のいふ所にて

人のおやの心はやみにあらね共子を思ふ道にまといぬる哉子の爲に残す命をへてしかな老てさきたつくひなかるへく

ひんかし

以下一本無之

我わひんかしらの白くなるまでに年月ふともあはす成なは

たつみかすみたつみねやいつくと尋みん花のとをめをまきはす哉

みなみ並々の人なみならは住の江のまつともいふに出ていなましを

ひつしさる陸奥の白川こえてあひくつしさるくもゆけとはるけき

にしわすれにしききをうしとは思へとも心は雲のうち忍ふかな

いぬゐ今はいぬゐのへのまつのおひぬ覽年月ふともさかりとけ南

きたきたしきたへの枕に涙せかれつゝ夢とたにみぬころにも有かな

うしとら憎かりし人のあたりはものうしとらはとら南玉のをにして

きのえ秋はきの枝にかゝれる白露をあやしく玉と我おもふ哉

きのとふたりねし床にて深く契りてきのとかに我をうち頼めとて

ひのえはしたかのとかへる山のしひのえは常盤にかれぬ中を頼まん

ひのと夕されはあひみるへきを春の日のとく暮ぬ社侘しかりけれ

つちのえ風さむみ衣うつなるつちのえのおれぬはかりに音のする哉

つちのと

門田かりせきのふかりを思ひしをひつちのとくもおひにける哉

かのえ

梅の花いつれは□にくからすかのえたおりて家つとにせん

かのと

さをしかのともまよはせる聲す也妻や戀しき秋の山へに

みつのえ

淀河やすきてあなたにある水のえこそまたみね駒の立とも

みつのと

ちはやふる神の社のいふばかり水のとあ□て祈るめる哉

ひとよめくりこそおほかれ

別れてもなを忘れすうちしのひとくめぐりこよ空のうき雲

出たては後めたなくある人よめぐりにすへてみる由もかな

五月はかりに女の人にくれてほとゝきすを

よのつねにきくたにあるを時鳥なき人こふるおり／＼の聲

右兼輔卿集以古寫本并流布之印本按之

權中納言敦忠卿集

しのひたる人に

あふことをいさほに出なん篠薄忍ひはつへき物ならなくに

たえたる人のもとに花をつみて

心にもあらてありふる年月のけふまてはなとつみてける哉

あたたなつ人いとむくつけし物をたにいはしとあれ

は

忍ひにもいかてか問ぬ濡衣を名にのみ立てやまんとやする

返し

名に立るあまの濡衣くやしきをほさてはやまん物ならなくに

父

しほりたる蜚の濡衣同じ名を思ひかへさてきるよしもかな

また

五月雨のよゝと鳴つる郭公袖のひるまもなきそかなしき

やむことなき人に

雲井にてくもゐにみゆるかさゝきの橋を渡ると夢にみし哉

ちかもりかからものゝ使にくたるにいはいにかねのひ

うちをほくそにちむをしてしのふをすりたるぬのゝ

袋に

うちつけに思ひいつとや故郷のしのお草にてすれる也けり

たいこのみかたとにくれたてまつりて

君なくてたつ朝霧は藤衣いけさへきるそかなしかりける

物へゆく人にあふきに

たひとをくわかるゝ人を思ふには心の色そあらはれにける

我ひとつたくふる風をやそしまの松の嵐にあふきくらへよ

みくしけとのにまたの日

けふそへにくれきらめやはと思へともたへぬは人の心也 梟
あふみのかういに

みわの山かひなかりけり我宿^{かとい}の入江の松はきりやしてまし

一條の君のつとめてうへよりおるゝにさしむかひ給
へれば

白露のいそきおきつるあさかほをみつとも人に夢に語るな
かへし

あさかほを朝ことにみる物ならは君より外に誰にかはいはん
みくしけとのにきんたちのほよ

朝なゝをきつむ霜のあさからて心とけたるいはねてし哉

いかてとおもふ人のこと人にさたまりたるにをみな
へしにさして

二葉よりたのみし物ををみなへし人の垣ねにおひにける哉
年月をへてちきりなからさもあらぬ人に

人しれす思ふ心はとしをへてなにかひなくなりぬへき哉
人にいひうとめられてかへりことせぬ人に

うきことのしけさまされる夏山の下流水の音もかよはず
はしめのきたのかたうらみ聞え給て

世中にまたしら雲の山の端にかゝるやつらき心なるらん
すけまさの母きみうみをきてうせたるをおはのもと

にてやしなふふたつはかりなるを見におはしたるに
物かたりなと聞えけるにいみしうなき給てちこの名

はあつまとなんいひける
むつこともまたいひいてゝ別にし人のかたまはあつま也けり

齋宮とよをへて聞えかはし給ひけるはしめのにや

したにのみなかれわたるは冬河のこほれる水と我となり 梟

かへし
心から人やりならぬ水なれは流れわたらんこともことはり

また
かけにのみ残れる雪の消はてぬききにも人のあひみてし哉

返し
光みぬかけにならへる雪なれはあひみむからに消てまさ 覽

又
露なから野への花をはおらねともたえす袂をしほる比かな

返し
露にたにおほせそせましかく計りてる日にぬるゝ袖も有よを

又
さりともと思ふ心にはかられて世にもけふまでいける命か

かへし
頼むにも命のかゝる物ならは千とせもかくてあ 覽とを思へ

又
いつしかとおもふ心のなき人やとまらぬ春を侘しとは思ふ

野分して白波たゝむ時たにもすすきす君にあひみてしかな
返し

松山もこゆといふなる白浪の立んつきとはかけすもあら南

又
しひてのみ我身をふれはひとつとおおさらぬ物は涙也けり

かへし
せきあへぬ涙なれともわれを君けふは心のふるはまされり

ふくにやおはしけん
ひとへたにきるは侘しき藤衣この事をさへかさねてそ思ふ

きてうしと思ふかきりそ藤衣かきねて色はおもはさりけり

又

世と共にはれぬ涙にさはりなはよそのみふる身さや成南
世中をわふるわかみはひとつにていかてこゝらの物思ふ覽

返し

たれかわか身を二つにて物は思ふ幾ら計をこゝらといふ覽

ふるき人になんかへりときゝ給へるけしきなる人に

今はとて春のわかれに鶯のふるすみけるをくやしと思ふ

なかあめのころ又

我のみは夏のなかめはせさりけりおほ空さへや物を思ふ覽
物思ひなくてなかむるおほ空のうちのころと聞かひのなさ

又

いつとなくしつ心なき我戀のさみたれにしもみたれそむ覽

ほとへてをともしたまはさりければ宮より

古のことかたらひし時鳥いつれのさとに長ゐしぬらん

返し

なからへてへにけるさは時鳥道のほとたにおほえさり鳥

又

五月雨はすきぬとおもふ時鳥おほ世中をなきつゝやへん

右敦忠卿集以古寫本并流布之印本按之

權中納言朝忠卿集

村上の御時歌合に霞

くらはしの山のかひより春霞年をつみてや立わたるらん

うくひす

我宿の梅か枝になく鶯は風のたよりに香をやとめこし

藤

むらさきに匂ふ藤浪打はへて松にちとせの色は見えけり

暮春

花たにもちらて別るゝ物ならはけふをわりなく惜まましやは

戀

人にたにしらせてしかな隠れぬのみこもりにのみ戀や渡覽

あふ事の絶てしなくは中々に人をも身をも恨さらまし

朱雀院御時。わか宮の御もきの御屏風に。柳

青柳の糸はかけさへあやなれや氷もさけて今はむすはぬ

櫻の花を人みる

心こそ花にくれてとまるらめ駒さへあやな過かてにする

なてしこの花を人もてあそふに

初花をみてこそしのへ白露の置て残せるなてしこの花

女郎花

ほのかにもかけみてしかは女郎花野へにまされる色は有やと

八月十五夜

秋霧は月のこゝろも心みに入山のはを立かくさなん

網代

もみち葉のなかるゝ底を尋てそ山のおもとに我は來にける
村上の御時齋宮くたり給ふに長奉送使にて下りて歸

るとて

萬代のはしめとけふを祈置て今行末は神そかそへん
權中納言のおとはの家にて

音羽川身をはたきりてなかる共君か宿にはまさりしもせし
みちの國のかみしら河にてせんし給ふに

別るともまた逢坂の關路にそしるもしらぬもまとはさり鳧
行かへる物とするゝあやしくも別と聞はをしまるゝかな

たいふかもとより曉にかへりて

もろ共にをるとはなしに打とけてみえやしぬらん朝顔の花
同じ人

古はおもひ出きや渡り河わたるてふなはなかれすや君
かへし

なかれての名に社有けれ渡り河あふせありやと頼けるかな
又同じ人

ぬれはつる水の下にもいかなれはこひといふ魚の絶す佳覽
又

池水のいひ出る事の難ければみこもりなから年そへにける
世中のさはかしきころ

人の世の花をはてにしせましかはけふかあすかと思はさまし
かへし

心にもまかせきける命かとのめもおかし常ならぬよに
物もいはてかへるあした

いたつらに立歸こし白浪のなみたにそてのひる時もなし
返し

何にかは袖のぬる覽白浪のなこりありともみえぬけしきを
とのぬ物をうちの人のつほねにもてたうへたりける

にきたなける上のきぬにむすひつけたりける
故里のならのみかとの始めよりなれにけりともみゆる衣哉
かへし

ふりぬとて思ひもすてしから衣よそへてあやな恨もそする
女にはしめて

白浪の立出るはまの濱千鳥あとやは歸るしるへ成らん
内侍督の御もとにたのめてこねは

よのほとは今やゝと慰めつさめての後そわさとなかるゝ
少貳命婦かよふにつゝむことありて

雲間にはいとゝ詠めそ増りける天の岩戸のひまやみゆると
かくて久しくありてわつらひしにとはてほとへてい

ひたる
露はかり思ひおくへき心あらは消ぬさきにそ人は問まし
ひさしくおとせてとひたる人の返事に

思ひ出ておとつれしける山ひこの
いと忍ひて物いふ人のをとこのつかさえてくたるに

程へつる我玉しゐはいかにしてはかなき空にもてはなる覽
七月七日

七夕のあまのとわたるけふさへや遠かた人のつれなかる覽
本院侍従かれみちとねたるを立聞て

よそにわか人とゝを聞しかはあはれとも聞あなうとも聞
うちの女房に

知人はみよしもあらし思なる心のうちのこゝろならては
ほかへやる文をたいふかもとにもてたかへたれは

道しらぬ物ならなくに足引の山ふみまとふ人も有けり
返し

しらかしの雪も絶にしあし引の山路を誰かふみまよふらん
本院侍従にかうしのかはに書て

うすけれとうすくもあらず山吹のやへの色にし思そむれは
かへし

かさぬれとうすき心のやへなれはそむてふ色の數は物かは
本院のせうさうしはふきするを聞て

しもつけやしはふきの杜の白露のかゝる折にや色かはる覽
かたらふ女おさせぬに

ことしおひの竹の一よのへたつれは覺束なくも成まさる哉
返し

幾世しもあらし物故わか竹のおひそはりける春さへそうき
たいふ

あふ事を松にかゝれる白露は久しきほとに消そしぬへき
右近にはしめて

よと河の汀におふる若草の根をし絶ねはそこもしりなん
同じ人に

山城のうりのつらくはみゆれとも思ふ心のなとさはらめや
中將にて女と名たつ比中納言といふ人に

もろともに君とほきなん濡衣はかなき名をは我のみやたつ
少將にて駒むかへに本院女御殿のおまへをひかせて

御前へまいる人々ゐたる所よりて
少貳

望月のこま引わたる秋の夜は光あまねきものにそ有ける
少貳

時しもあれ秋のさかりにつられは思はぬ山に入ぬへき哉
女に

富士のねを音にそ聞し今はわか思にもゆる煙なりけり

返し

しるしなき思と聞は富士のねもそこはかりの煙成らん
女藏人けんといふあつまべくたるに

別ちを惜む心そ櫻花あふ坂まてはちらすもあらなん
たいこのみかとかくれ給へるに好古宰相

夢かとそわひては思たまさかをとふ人ありや父やさめぬる
かへし

あはれとも思そわかぬうは玉の同じ夢ちにまとふ身なれは
むま子にむかへられてかへりなんとて車こへはをく

らぬに外にもとめてかへりたるに
天の戸をあくるまをたに許されてまたきにのりて歸ける哉

權大納言ひは殿にかよひはしめ給て四日といふに
我妹子かねやのつまなる菖蒲草ねも顯はれて今朝はみゆ覽

こないしのかみの御はてに母君の御もとに
あふ事のみやつかへにと侘つるを今朝の袂を露けかりける

返し大將
人しれすうちにはらひつる朝露にあやしく君もぬれにける哉

いつとなくぬるゝ袂は古を忍ふる雨にぬれにけるかな
かへし

人しれぬ野の下草となれる身も雨におとらぬ露を置ける
右朝忠卿集以古寫二本按之

海人手子良集

實大納言師氏卿也

春

自妙の雪はかすみもみよし野のかさねてけふや立はしむ覽
こち風に氷薄くていけかをものつらゝもへゆるをしの鴨鳥
かくせともをそきはるへにひとりいてなかも宮の鶯の聲
にほふかのめも春風にさきたゝはちりやそむらん紅の梅
とふ人もみえぬよもきのもとなれや今はすみれの盛なる哉
いとまなみ淀のさしつる程もなく春の遊びのよるのよとか
陸奥のまかきのわたりいそなめてわかめかりにを蟹も行かふ
久かたのみとりの空の雲間より聲もほのかに歸るかりかね
わきも子かまゆににたれは青柳のなひくにつけてます涙哉
春のすゑ夏のもとにはかゝれともまつにみたれぬ岸の藤浪

夏

やをとめもけふやひとへに夏衣神のみそきそいそきたつ覽
見渡せは今はもえきも縁にてなくみをとりの聲のみそする
うの花のさかりになれは時鳥夜ふかきねにそ有明の月
あやめ草軒の限りはひまもなみけふはよとのやあらは成覽
數ならぬしつかたまきもをのかしる今は早苗のいそかしき哉
みたれすてこの下やみに小倉山ふもとに鹿をとすすあき人
あせもよにみたるゝ夏も涼しきは君にあふきの風はやみ也
高瀬さす鶴飼も今はをりたちて水なつかしきかものうは浪
しけりあひて亂るゝ萩の上葉すら靡くは夏もみなつきぬ覽
露結ふもとあらは萩の末たをになりゆく秋もちかつきに鳧
鵲のゆきあひの橋のつきなれば猶わたすへき日社とをけれ

秋

冬

聲よはみ亂るゝ虫をこからしの露ふきむすふ秋の夜なゝ
ひこほしのなかにめにつふは天の川さしてやわたる鵲の橋
白露と草葉にをきて秋のよを聲もすからにあくる松むし
山吹の色にかひあるをみなへしさのみやゐての名には有覽
霞たち立かへりにし鷹金もけふを雲井にきりはれてなく
たかさこに立わたりたる霧間より紅葉の色のふかき奥山
八重菊のうつろひわたる庭の面にかねても結ふ夜はの白露
ほのゝと天のと渡り明たれはこきませなりやよもの玉垣
ぬきかふる衣のつきにたつものはけふ珍らしき火おけ也鳧
陸奥のうたの濱へにこのはかたなからむ冬の風うからまし
吾妹子か玉のうてなに獨ゐていとゝわさなにやまなかつ覽
あしたつの遊ぶすさきも冬くれはけさしも冬の心ちみえ鳧
しも月のひよりもうちの網代木に今も氷のいほにさりける
をみかよふこゝのかさねにひかけさし豊の明に見ゆる妹哉
をし鳥の食のなかもすゝしやとよなゝしも夕重ねつゝ
雲高きよもめたかれもかたちなるみなしら山にみゆる比哉
都へとゆきかふ人の道もなみとしのせめてもいそかしき哉
百敷の大宮人もむれゐつゝこそとやけふをあすはかたらん
あはぬ戀
いかて猶みてのかさまもえてし哉我する戀の數のしるしに
逢坂のうたかた人は陸奥のさらになこそをなつくるかもし
歎きつゝかたしく袖にくらふれは清見か關の浪はものかは
よと共になへてけしきを陸奥のさは此身よといはせてしか
すはの海の神のみまるを詠めつゝけふひねもすにをり暮す哉
君かふる涙は袖にひたちなる色つくそこのみねはなるらし

君しいなはいな／＼こそは信濃なる淺間か山と成やはて南
あつまちのはまなの橋のはやくより深き心はくみてしる覽
かひもなきいくたのうらをあさりつゝ涙なからに歸る釣舟
黄昏に涙の玉をななめつゝねふしてよはにあかすともし火

あひての戀

こゆるきにさし出てみれば天の原波間にこゆる舟のわれ哉
いは／＼しを造りさしけん葛城の神にけなくもあさほらけ哉
ひまもなく涙に袖をぬらしつゝこまに任せて歸るよな／＼
通へ共常にまとふを武藏なるさ／＼のやまへのしるへせよ君
わりなきをしなむふしなむみまさかやくめのさら山今更に君
あひてあはぬ歎き駿河のふしの浦に焦れて歸るあまの舟鴨
わくらはにあふかはあふか陸奥の忍ふのちすり數ふ計りを
しのひねに又忍ひねの重なりてひるまなく／＼袖朽ぬへし
逢坂の道にかきほは越なからまた許されぬしたひものせき

わかれ

ひなたかのよもの別もかくやたつ烟はみよにすきにたる哉
わかれちをけふそかきりと陸奥のいはて忍ふにぬるゝ袖哉
今はとてわかるゝ人をみくまのゝ浦の濱ゆふ重ねてそ思ふ
別路となつくるたひはたまほこのみち見ぬ人も猶惑ふらし
別路に行もとまるも二こゝる袖にうきてもなけく比かな
わかるゝを心つくしくしたるともいきの松原色かはらめや
別路は千草のとのをさしなからいなく山のことと社みれ

無常

結ふての雫にこる月影の身としりぬれはちよもいな／＼
春たては子日の松をひきつれていつら祈りし千世のしるしは
ともしひの影にならへし世中をいつれ久しとかすめてし哉

ちよをまつ松の緑とみえしよははやつきくさのうつし成鬼
朝かほに露の命をくらふれば花のにほひはひさしかりけり
庭の面にうきて漂ふうたかたのまた消ぬまにかはる世の中
澤の面に年ふるたつのちよをへて後は羽うつ程(おとせ)もなしとや
色深き峯の紅葉も山川のそこにくちはのみくつとそなる
しもなしみとりとみえすすかはねし何れも白き渚なり鬼

いのり

さゝれ石におひむよ松にすを作るたつの日なきも君はすみ南
山彦をしるへになしてみとりにもいつくか龜の内に通はん
斧のえを手馴しそめぬ君なれは何をかくたす何はくたさん
三千年になるてふもゝのゝかへり君か爲にとうへし山人
ころもしてなつる巖のつくるまで君か齡をしらさらめやは
蘆田鶴の千世の齡をさしなから君にゆつるとなつくるかゝも
限なき齡をのふるうら嶋のこのたまくしけのとけしや君
君か世は猶おほはらのをしほ山なつのすゑも頼もしき哉
昔よりかすかのふちの榮ゆれば今のつかひもかさしなり鬼

とし

思はんとしのひ／＼に誓ひしを今はたゝすの神そゆゝしき
月
たかかたの浦々事にかつきつゝ蜚は苦屋にいくかへぬらん
日
風ふけはひゝきのなたのをと高み浪の末わくあまのつり舟

とき

おもふこと君を思ふも思ふ也なをしかすかのわたりにて社
花
ませちかくうふる花しも匂ふかなこやこからしの秋の初風

春の花に驚むつる

驚の木つたひちらす櫻はなこや春の日のをそきなりけり

夏ほたるみきはに火をとす

身をてらす螢きえなは夏の夜の水際くらしと火をとす覽

池水かゝみににたる

池水ののとき底にかけなみそさるは鏡にみゆるなきはを

玉のひかりていのなかにあり

別るともきみを汀にのほるにはいきの松原はたみさらめや

あふさかのせき

別る其身のうちふねそうかりける手向の神もみえぬ浪かは

秋の夜の月みつにうかふ

秋の夜の月影うかふ水のおもやあまの川ともみえわたる覽

此一冊者。定家卿以_二白筆本_一書寫了。尤可_レ爲_二證本_一者也。

永正三年九月日

右之本。文字繁多不審。重而以_二類本_一可_レ爲_二校合_一之者也。

永祿元暮春念日

左府藤公彦_{在判}

閑院左大將朝光卿集

たまさかにかへり事したる女に

うき橋のうきてたにこそ頼みつれふみゝて後は跡たゆな夢

ある上達部のむすめのちいさきをおとなになしてと

ちきりたるほとにこと人にときゝたまてそのわたり

の人のあふきに

おひたつをまつと頼めしかひもなく浪こすへしと聞は誠か

はゝのかへし檀中納言敦忠室概把左大臣女

おひもせずおひすもあらず末の松なにかこすへき沖津白浪

□殿□大盤所にはかまのこしのおちたりけるをたれ

かならんと「あるかきり」かはあらず「

「けりさ」みて「のあ」つけ

て大盤所に

ときむすふてかせにいたくほころひて花の下紐解にける哉

下紐の下にもいかてあやしきはまつうへにしもおつる也鬼

とてやなきの枝にあをきしきしにつけてその藏人に

匂ひさへちるそ脩しき青柳のかたいとしてはなとかときけん

驚のよる青柳の糸なれば君かてかせにとくるなるらん

万代

あたにのみ君かむすへる下紐のとくるを人におほせさら南

百敷の花の下紐さしなからみれともあたにをちすそ有ける

世と共に君かおもひにとかれたる下紐のさはをちにける哉

内侍のかみの□のものをきかへてたてまつりたまふと

て

かつきするいせをの螢のぬれ衣あらはれぬへき心地社すれ

奉宮の左近藏人わすれたまうてのちに聞えたる

下紅葉みるにつけてそ我身にも秋(念服世)にけりと露も置そふ

大貳の聞えたりける

垣ほにも思ひよそふるなてしこの忍かねてそ今朝は折つる

返り

誰にかはおもひよそへて折つ覽さためにもてことこ夏の花

又かへり

色をみて思ひよらなむ撫子はかきほよりま□跡とそもなし

女おもふやととひたりけれといらへもせさりければ

思ふともいはすなりぬる時よりもまさる方にて頼まるゝ哉

返り

いはねとも心のほとをみえぬれは何れをまさる方と頼まん

しのひたる處よりかへり給てひるつかた

白露の日たくるまゝにきえゆけは暮待我もいかゝと思ふ

消ぬるときはそおつる我袖にいかに置つる露のしけさそ

十月はかり女のもとよりかへり給にしくれのふるに

万代露わけてかへる袂にいとゝしくしくるゝ空のつらくも有哉

返り

時雨さへ露けくそ降いつ□そてをわけてや哀れといはん

馬内侍のみなみななる家に十二月二十日はかりにわた

るまつともにつけて

春近きとなり君はすみのえのまつ人とはたおもほゆる哉

返り

冬こもり氷にとちてみつかきの春のとなりにとくやと思ふ

ひは殿にて不斷經よませたまひける大とくたちのな

かにいたさせ給

しりかたき物にそ有ける我身□いつれかおつる涙なるらん

御かへり

智範あさり

いつれともなに□つきいさきよき蓮のかゝる涙なるへし

ちせんあさりまつかさきにてすほうするにいひやり

たまふ

頼もしきちとせをまつかさきにすむ人の心のときは也せは

なりにしをれは草も木もさまことにして頼む成へし

みあれの宣旨あまになりたるにしきみの枝のむしつ

いたるにつけていひやる

あめの下ふりて哀といふ程にみのさためたる虫そかなしき

返り

ことの葉にかゝれるみのゝあ□せはさ袂も□そぬれぬる

つかさめしのころ左右えたまはらぬおもふことおは

しましけり□をきこえ給□

おもはしと思ふ物からまつ山の末こす浪のぬれつゝそふる

返り

浦こへし浪のけしきのあしければ思はしとたに我は思はす

思はすになり行末のまつとてもつねにはいかゝぬれ渡る覽

わたらゆと涙もあらは思ふとち人のつゝめる君をみましや

かへしこのたひはなかりけり

きしちかみなる

きになにも

なみまもあらはと

おもふなり

あまひとの

まか□の□まを

なとゆ□と

まつやまの

秋きりの

たちを□

ゆふたすき

おもひもかけす

いふなれは

しくれましれる

神無月とか

ことの葉の

草もかはかぬ ほとなきに あさましくのみ
みゆるころかな

四條宮大盤所にこれきためてとのたまへるに
鶯の春のはつねと時鳥よふかくなくといつれまされり

とあるを人々さためさせ給に
〔ともなき〕

折からに何れもまさる鳥の音を時ならぬみはいかゝ定めん
〔いかにさめん時ならぬ身はへ〕

左右大将の御くるまにていて給にちむにて

左朝光

おもふとち へんをのやまの

とあれはみき濟時

□れなるみちによはひくわへ

秋のたのかりにとみゆるほと□れか添てつまん程そ侘しき

かものやしろのまへにてをるゝ人を見て

右

きみとわれいのる心をちはやふる

左

かみいつかたにみゝとゝむらん

いそけとてとひたりののたまへはみき

まつみねとうしろめたくは思ほえし近き守りと我し馴れは

つゝみにて左のくるまそひのと□にかはりて

袖ならてつゝみとゝめんけふよりは君か嬉しき言の葉も哉

右の車そひに又かはりて

そひてゆくくるまの事もおもほえず君か心をけふはやる哉

花見にありき給ふ時にさそひたまはすとて

左大将濟時

獨して花も紅葉もわきてやは錦はかりとみてはきにけん

返り

百敷の花もみちもわきてきみ天津星かときみそとはまし

みやをの大將したうつのかたをかりたまひてあしか

たとある處にかきつけ給ふ

流れあしの方にとまれる沼水のかひありけふもみゆる影哉

ほりかはの院にて八月はかりの夕暮にはたをりのい

みしくなくに中將君御前なるにのたまふ

おほつかな錦もみえぬ闇の夜に何のあやめをおるにか有覽

中將かたる五條のあまきみかくそきこゆる

をとした思はさりけり唐錦あやつる聲のをとこそきけ

宮の君のうちとけたたまへるをみて

下ひものゆふ日に人をみつるよりあやなく我そ打解にける

かへり

下ひもの夕日もうしや朝良の露けなからをみせむと思ふ

ひたちののをのゝみまさよりくさたてまつりたるをみ

たまひて

常陸なるをののみまきの露草をうつしは駒のをくにそ有ける

ほりかはの院にすませ給に閑院のさくらの花をもし

ろくみえ

少將内侍

かきこしにみるあた人の家櫻花ちるはかりゆきておらはや

御返り

おりにこと思ひやすらんさくら花ありし昔の春をこひつゝ

ともまさの大貳のこのむまのすけをうしなひたるこ

ろ閑院女御もうせ給ひぬときゝて

〔おも（とも）（なげくと拾）〕

我のみやこのよはうきと歎しを君も思ふときくそ悲しき

かへり

同
うき世にはあるみもなきにおもほえて涙のみ社ふる心ちすれ

入道殿にてなにをかきみの□たし給さま おとなにも
まされりかけものなといれ給ひけり

源宰相

昨日より心にそいるあつさ弓はるのかさしとみゆる君ゆへ
かへり

さためなき君か心にいるなれは梓の弓のはるも物うし
女のもとにおはしたるにかへら□ねといはせけるを
おほしきことありてつとめて

後拾
あま雲のかへるはかりの村雨に所せきまてぬれし袖哉
かへり

人はいさ袖やぬれけん我はたゝ涙にのみそそほちつゝこし
とき／＼かよいたまふ女あまたなる事人にいはるゝ
こそ心うけれとのたまひければ女

ねぬなはのねぬなのいたく立ぬれは猶大澤のいけらしやよに
返り

おほ澤のおほくの人の嘆きにいていけらしとのみ思ふなる覽
大貳くたらしとすまひて心ちあしとてきて修法すと
きゝてやり給

思ひやるこそ悲しきあさ□みねの白雲たつやたゝすや
おなし女おはすへからむおりはひるはのたまへとい
ひければ二三日ありて
晝といひし言かはる共笹蟹のいかにふるまひしるくみゆ覽
かへり

我せこかしるきよひとさゝかにのいとを頼まん心ち社せね
とてけふあすすくさむとありければたちかへり

今日をたに暮しかねつる笹蟹の糸にかゝりてあす迄やへん
たひ／＼かへりことせぬ女に

山彦はこたふるたにもはるけきを晋せぬ人をまつか苦しき
ついなしのときをるところはきにつけて

小鹿なく峯の朝霧よそにわか思やりつるおりそかなしき
おなし人のもとに月あかき夜うちよりおはして
きもなれぬよるの衣もさよなにかへす／＼も哀なりけり
かへり

色ならぬ衣もなとかかへるにはうすく成覽身にしみてかく
よそふる人やおはしけんその□いとたかき人を心に
かけて

君か身を春の山ともみてしかな思ふ心もかすむはかりに
中宮宣旨を内にてほのみ給て

万代
女郎花よはの下紐うちとけてみなれし袖そ今は戀しき

あらかひてかへりこともなし
あらかは／＼しひてもいはし岩清水流れて今はしたに頼まん

いかにせましといふをきゝて
世中に身をしかへつる君なれは我家にもあらずと思ふ

又

いかなりし旅の夕か忍ひけんぬれにし袖よまたそかはかぬ
とあるにたまはりぬとのみあれは

今更におほつかなしやまたなさむへたてぬ中となりにし物を
いかなる事のあるにがありけん人かはりなとしけれ
は

忍ふ草忍ふかひなくもてなさは忍ふる事ももらはいかにそ
返り

あふとたにみさりし物を忍ふ草もらすはかりの露や置けん
かせを

思ふかなうすき衣を空蟬の今よりあらき風にあてしと
父おとゝの御ふくにてもし給に内より馬内侍を御

つかひにてとはせ給へるにその夜とゝめてあか月に
いかてかは夢にも人のみえつ覽物思ひそめし後はねなくに
返り。

歎つゝ我もねなくにみゆる夢の慰むかたはなきさこそきけ

おなし人くらへやに中將とありてあか月いつるをよ
ひよりいとよくきゝ給て

くらへやの覺束なくもみえぬよは月みるほとすすめは也鳧
返

なにしおへは影たに見えぬくらへやを月有さまにいひます哉
三條のきたのかたよりかへりたまひて萱草花にさし
たまひて

をこたりの色に出たる花みれば物思ひしれる折かと思ふ
返

あやまちの始めもしらす何事にをこたりそめし花の頃そは
又返

知すとかそとに聞つゝかさしたる花は移りて外にをらすや
かりのこをとをたてまつりたまへればきたのかた(重

明親主女)

雁のこに恨をさへそ重ねつるいとゝつらさの數をみすれば
ほさへておはしてすのこにすゝきのかせに

万代

我きてもまねきやまねは花薄またくる人の有かと思ふ
とのたまふをきたのかたの御めのとひらかといふ聞て

ありそ海の恨もはてぬまつ頃になひくをはなはつねの事也
ほりかはの院より仁和寺にみかとかへらせ給ふに女
房のみふたにかきつけたるをみたまひて

御狩野の野へに漂ふ草なれやかきつくべくもみえず成ゆく

ためちかかみかはになりて□いはのかたにふくろを
ぬいてかめのかたをぬいつけてものともいれて

岸の上かゝるまでふるかめのよの春けくすまむ程そ久しき
定めむと思ふ物からしかすかのわたり□みては難くせまほし

たなこひのはこのふたにあしてにて

別路のかたみにそふる玉匣あけくれ我を人忘れめや
しらかはとのゝはかによるとまりたるひまに

めの前にかくみる人もすくるまにとまれるとてや過る成覽
返

うき世にはまたもかへらてやかてかく蓮の上の露と成なん
又返し

露とたに消なは何のうたかひか花のなかより生れさるへき
またの目まうてたれははすの花を□してつくりてみ

のうちにほは□いしほをいれてやり給
日たくれは消やしぬ覽うたかたの花の顔をも今朝はみる哉

この御八かうをたうとかり給ひて
しらかはとたれなつかななかれての後よりかさす蓮也鳧

宮にわたり給に中宮いて給へるにまいり給へりかみ
まいらせ給へるにおひてかみをたてまつり給へりま

□にかみ□うすやうを

まけ□も君を祈りしるしにや多くのかみの今朝はみゆ覽
御返

祈る共あまをかきしと見えしかは神の邊によらしと思ふ

むかしうちわたりにねたまへりけるに

あまに思ひをかせりけりと千早振いかきのもとに聞し事也

正月十五日ねの日にあたりたりけりほりかはの中宮

わたらせ給てこなと參らせたまひてしろかねのこま

つのゑたにあをかみにて名かきつけ給中將に

君か代をゆく／＼みれは小松より外の縁はみえすそ有ける

中宮の御返

すゑ遠き野への小松をまかすれはいさひきつれん

とのかよひはしめ侍りて雪のふるにかへり

万代

あかすして歸るみやまの白雪は道もなきまでうつもれに梟

返

ともすれはあとたへぬへきかへる山越路の雪はさや積る覽

かく通ひ給へとあらすとかくし給を左大將見あらは

し給てよひとよ物かたりし給てかへりたまひぬまた

左の目

忍草いかなる露かをきつらむ今朝はねもみなあらはれに梟

返

淺茅生を尋ねさりせは忍草思ひ置けん露をみましや

たうのみねの君にひはとの御いのりし給へとた

まひければみねのきみ大納言との御ときよりをろ

昔より

いひはしめけるいかかさきすゑの人さへ頼もしき哉

かさきにまうて給へるにためとしほ

まいらんといいけるをおもひ出てつかはしける

返

我宿にしける蓮のさしをわけ思はん人にゆつりてしかな

正月一日

君たにも心へたてぬ物ならは花とともなる身とそ成へき

返

あたらしき年のはしめのうれしさば昔の春もかくや有けん

うれしきにめつらしきをもそふるかな

ほり川の中宮

くやしきもくみてける事思ふ哉沈みそめたる今朝の我身を

中將にものたまひてつとめて

少將の君さといつるに

さゝ浪やたちいつるこそはいとなくて

あめに十月はかりのみちのみなちりたるにつけて

うしと思ふ秋に後れて止まれる人はかひなき物にそ有ける

返

過る秋とゝむる人は色わかてみえはかある心地こそせめ

三條の大殿(麗義公)のうせ給へるを又ともかくもせて

おとゝいみしうなき給ふと聞て

烟とも雲ともならぬ程はかりありと思はんことのかなしさ

わつらいたまふて久しくさふらひにもいてたまはて

いひいたしたまへる

朝夕にいてつゝみしをおほつかかな人の心のうつりうつらす

御返 左衛門督まさひら

いつしかと心にしてみてふかみとり松より外の色はかはらし

なかのきみの御もきにちむの枕にいでて たてまつり
たまへる

よそみなく人もろ共にふすことく枕を君にゆつりつる哉
御返

今よりはみよりはなるな敷妙の君かとこ世の枕と思へは
すけまさの大貳のくたるにななし装束一くをこひの
ふたにいでてたうかみにかきてさしはさみて□よ
りつかはしける

また近き程をもたえぬ戀なれはをくらすへくも思ほへぬ哉
殿やはたにまうてたまふにまうてとふらい玉ふをあ
かめもよにかくとふらひ給ふよとよろこひたまふつ
いてに

今日は猶ぬるゝのみ社嬉しけれ天の下にしふる身と思へは
八月はかり仁和寺の帝ひろさはおはします御とも
につかうまつりてかへさにひたりにきこえ給

秋のよを今はとかへる夕暮に鳴虫の音を悲しかりける
左御かへり

むしの音に我も涙をおとすかないとゝ露けく野へや成らん
まつりのかへさに女車に卯の花あふひ
はやふるならぬことかきとて□てやたまふ

しつのをのしのひにをなけ時鳥
とあれは

こたかき聲はまたもしつるを

此一册。以三_ニ家隆卿筆跡之本_一書_ニ寫_レ之_一。舊本虫損等多
故往々除_レ之_一。重以_ニ別本_一可_レ改_ニ正_一之_一。入_ニ撰集_一歌有_ニ

首書。考_レ之_一閑院左大將藤原朝光歌也。他人書集_レ之
歟。此集詞書有_ニ左右大將_一。左者則朝光。右者藤原濟時
也。

藤朝光。天曆五年辛亥生。關白太政大臣兼通公四男。母三品兵部卿

有明親王女從二位能子。貞元二年四月二十四日任_ニ權大納

言_一。同年十二月九日兼_ニ左大將_一。寛和二年轉_レ正卿。永祚元年

六月廿七日辭_ニ大將_一。長德元年三月二十日於_ニ枇杷第_一薨。歲

四十五。號_ニ閑院大將_一。

藤濟時。天慶四年辛丑生。左大臣正二位師尹公二男。母右大臣定方

公女。貞元二年十月十一日兼_ニ右大將_一。永觀元年八月廿三日

任_ニ權大納言_一。正曆元年六月朔日轉_ニ左大將_一。同二年九月七日

轉_レ正。長德元年四月廿三日辭_ニ大將_一。同日於_ニ五條第_一薨。歲

五十六。號_ニ小一條_一。

群書類從卷第二百三十六

和歌部九十一家集九

前大納言公任卿集

春白河に殿上の人々いきたりけるに

^拾春きてそ人もひける山里は花こそ宿の主なりけれ

同じ所に紅梅うへ給へるにはしめて花さきたるにお
はしたりけるに女御(麗子)の御もとより

植しよりしたまつものを山里のはなみにさそふ人のなき哉
かへし

うへをきし花なかりせは蓬生を何につけてか思ひ出まし
雨のうちに山里の梅をおもふといふ事を

山里の梅をおもふに雨ふれはたゞにもちて色や増らん
二月迄梅の咲さりけるとし前の梅にむすひつけたる
しるらめや霞の空をなかめつゝ花もにほはぬ春を歎くと

たかともえしり給はてとる人やあると結ひつけ給ふ
ける

^{新千}おほつかないつこなるらん花さかぬかすみのうちの鶯の聲

いとひさしうとる人もなきに打たゆみてとられにけ
りあさましうねたきことをおほしけるによふかき曉
にむすひつけゝるを見てとらへとめてみ給ひし

霞たつ遠山ふかきうくひすの花の林をとふにそ有ける

つかひにとへは三條の宮に□といふ人のとらせしな
り本はしり給はさりし事也かゝる事ゆかしかりこし
給ふなといふ返しに

うくひすの音をしるへにて霞たつみ山のうちを尋つる哉
ほとへて奉りたる

花咲しひより待哉尋ぬやと三わの山邊の鶯のこゑ
かへし

花をのみ尋る程にうくひすはその山もとを過やしにけむ
花山院また春宮と申けるととき水にはなの色うかふと

いふことを人々によませ給ふに
花の色をうかふる水は浅けれと千とせの秋の契ふかしな
やみはあやなしといふ題を

^{後拾}はるの夜のやみにしあれは匂ひくる梅より外の花なかり鳥
前ちかき桃のはしめて花咲たるに

うれしくもゝの初花みつる哉又こむ春も定なきよに
白川の西のとに人のかきたりける

きてもみて花をさながら散しつる風のためにや人の植けむ
都いてゝ花見にこそはくれなゐの色なる梅に心をめつれ

返しかたはらにつくる

風にしも何かまかせむ梅の花よそへてとはむ人をこそまで
花ひらの敷にてもしれ紅にやしほそめたる梅にやはあらぬ

中務の宮(眞季)にて人々酒のみしつとめて宮のきこえ
給ふける

あかさりし君かにほひの戀しさに梅花をそけさはおりつる
かへし

今そしる袖ににほへる花の香は君か折けるにほひ成けり
中宮にてなにのおりにや

めつらしき玉の臺の花のかけにきかまくほしき鶯のこゑ
返したれともしらす

しつえにて聲をおしみし鶯は花の盛を待にそ有ける
あはたに人々おはしておもふ心よむに

浮世をは峯の霞やへたつらんなを山里はすみよかり鳧
二月十日前なりける梅の咲たりけるにさとなる女房

君により風もよきつゝ散かてにまつめる花のおりな過しそ
なしの花にとき過たるみのつきたるに右大弁

春ふかみ深山かくれの花なしといふにつけても分そかねぬる
かへし

常ならぬ身をそ恨むるならぬより花なしといふよに社有けれ
またかくてはとて

ありといふ程たにあるをかつみつゝ花なしといふ春を社思へ
二月に雪のいとたから降たるゆきよりかさうしの前

に雪の山をいとたからつくりて煙をたてたるに雪の
いたうふれはからかさをおほひてたてたりければ

東路のふしのたかねにあらねとも三かきの山も煙立けり

そちのみや(敦道)花見に白河におはして
我が名は花ぬす人とたてはたて唯一枝はおりてかへらむ

と有ければ

山里のぬしにしらせて折人は花をもなをもおしまきり鳧

又みやより

知れぬそかひなかりける飽さりし花にかへてし名を惜ます

かへし

人しらぬ心れイのほとをしりぬれば花のあたりに春はすまはん

花をも名をもと聞え給へりける御かへしにつけてみ
ちきた(道真)かめのきこえたりける

おる人のそれなるからにあちきなくみし山里の花のかそする

かへし

しるらめやその山里の花のかのなへての袖にうつりやはする

また聞えたりける

しらせしと空に霞のへたてしはたつねて花の色もみてしを
かへし

今さらにかすみとちたる白河の關をしるては尋ぬへしやは
白河にて

故郷の花をもおもふ山さくら散をみすてゝかへりかたきよ
白河に忍ひておはしたるに大白河といふ所に殿上人

おほくおはしたりときゝ給ひてその日式部卿の宮の
中將おほ白河におはしけるに

しら河のおなし河邊のさくら花いかなる宿を人たつぬらん
かへし

花の色の深さあさゝにをのつからやとわく人と成にける哉

三月十日松か崎の念佛きゝに女御うへなとしのひて
おはしけるにみちのほと月おほるにて風の聲などは
るかなり女御とのゝ御

晝ならは河邊の花もみるへきによはの嵐のうしろめたさよ

とありけるに

香をとめてゆかはけぬへし山風の吹まゝにちる陰みれはうし

夜一よたうとき事きゝあかして曉かたにみれはよる

散ける花のやり水の浪によせられてすはうかひ（藤枳

見）のさまなるに櫻かひとは是をやなといひて

よもすから散ける花を朝ほらけあかしの濱のかひかとそみる

といふにとものり

水に浮ふ櫻のかひの色みれはなみの花とそいふへかりける

といふに

朝ほらけ春の湊の浪なれや花のちる時そよせ増りける

御車のことゝもあるへしたらにゑさうしに花のちる

をみ給ふむかしの御むろの南なる花のいといたう散

をとり集てすけあきら

花のちるむろは昔の跡ながら苔の庭にはあとばかりもなし

といふに

さくら花露にぬれつゝ尋ぬれはいにしへしるき宿の庭哉

此ついでにすけあきら遠くいぬへき事なといひて

すきかたき花につけてそ都出てゆかましもの□あつちの風

すけあきら

春過て散花たにも有ものを老のみをたゝ思ひやらなむ

白河により給ひて

しら河のなかれてけふをわすれめや

とありければ御車より

見たえて浅き瀬とはなるとも

三條殿世中すさましうてこもりおはしけるころ御前

のふちの咲はしめたるを

風

年ことに春をもしらぬ宿なれと花咲そむる藤も有けり

花山院觀音院におはして残のはなをたつぬ山寺にあ

そふといふ題よませ給ふけるに

みるまゝにかつちる花を尋ぬれば残の春をすくなかりける

常にます鶯の峯をしまたみねけけふ山里の珍らしき哉

三井寺に物ならひに入給ふとて白河により給りけれ

は花のさかり成けるかかへるさに散はてゝければ

故郷の花はまたてそ散にける春より先に歸ると思へと

白河に三月つこもりにおはして

おしみにとさしてきつれと相坂の關にも春はとまらさり鳧

タイ

はのすけ京極の家なる紅梅をしら河にうへ給と

て堀せ給ふければ結び付たりける

いにしへの春のかたみに詠めつる花をいつれの風さそふ覽

かへし

香はかりをさそへと思ふ山里の風をねながら誘ふへしやは

人に春のはしめなり

すこし春ある心ちこそすれ

との給ひければ

吹そむる風もぬるまぬ山里は

子規まつこゝろを

ほのかにもきかぬかきりは時鳥待人さへそねられさりける

同じ心を女御の御

待えてもたゝ一こゑを時鳥ね覺かちにてあかすころかな

ほとゝきす聲まれなりといふ題を實方中將

里わかぬ空音ときけは時鳥誰にかいかゝいはゝこたへむ

さあるに

ほとゝきすあかてややまむ待きつる今朝のね覺の只一聲を

からなてしこ

色ことにほへる宿の撫子はいにしへからの種にそ有らし

たかとを(篇選)のきみ

種わきて色しも深きなてしこの花に心も染てこそみめ

夕立のしたるに人々歌よみけるに

夕立に草の縁に見ゆるかな秋さへとをくならむとやする

ためもと

夏の日のふりしもとけぬ村雨に草のみとりを深くそむらん

また

くれなるにぬるゝ袂はなる物をいかなる庭かみとり成らむ

山里のうの花をすけかたの弁

としをへて通ひなれにし山さとのかとゝふまてに咲る卯花

かへし

卯花のちらぬ限はやまさとの木の下闇もあらしとそ思ふ

中納言のちこにおはしけるとき薬玉をたてまつり給

ふとて女御の御

命をそつくといふなるいとさなき袂にかゝるけふの菖蒲は

御かへし

いとさなき菖蒲はおふる所から誰にかゝりてふへき千世そは

また

あやめ草おふる澤水清ければひく人あまたあらさらめやは

糸にう(面隠)院にたち花のこに入たるに夏むしをすへて是よめと仰られければ

夏虫ははな立花にやりしてこの中なから千世もへぬへし

さつきのくもりたりけるに

月待と天のかはらを詠むれは出る程たにみえぬそらかな

ほとゝきすを待は月をまつにまされりといふ題を

月よりも待そかねぬる時鳥太山を出む程をしらねは

からなてしこを人々よむに

敷嶋や大和にはあらぬ撫子の花はむへこそよにゝさりけれ

くもれる月をまつころ

ふたゝひや人よりまたむ月影の雲の隙より出ぬ限は

なてしこをみ給ひて

いそくへきよとはしかゝ床夏の花に心のとまりぬる哉

四月になかたに(長谷)にゑむよ僧正のまうてたりける

にさくらにのさかり成けるをみていみし有けり折て進

て又の日

きのふまておしみとめてし山櫻よのまの風のいふかしき哉

かへし

春過て君を待ける花なれば又くるまては散しとそ思

五月五日

けふ殊に軒のつまなる菖蒲草たなはたつめにをとらさり鬼

七月七日藤つほの撫子あはせに人讀半都満字計たり

ける

たなはたの秋のよをへて撫子の花をそけふは合せつとみよ

ないせの命婦か家ちかきところに渡り給ひて七月七

日

雲ゐにて契りし中はたなはたをうらやむ程に成にける哉
かへし

哀にも忘れさりける雲非哉たなはたつめのけふよりもけに
秋のはしめつかた中務のみやに

おほかたの秋はきぬれといかなれはした待花のをそく咲覽
人々のさかのにゆく日とまりていひやり給ふける

誘ひていくやなになる女郎花分てひもとく野へのあたりを
返し中宮大夫たゝ今の大殿（重長）

君をしもよくともなきにをみなへし露の心ををかれぬる哉
女郎花ほりていく所の有けるをとせ給ふければあ

きのふか家といひければやりたまふける
思ふとも心もしらてをみなへしいかなる宿にうつす成らむ

返し
をみなへしおなしゆかりの花なれと君し尋ねは家に社せめ

宮に大夫の薬入て奉りたりけるくしのはこを程へて
秋立日返すとて色々の花とも入てかへさせ給ふと

て
初風にのとけき花の露ならはをきてみつへき玉くしけ哉

とかゝせ給ふけるをかくもいひてむかしと見たまふ
ける

夜をこめてをきける露の玉くしけ明てののちそ秋と知ぬる
八月十五夜にあきのふかもとに

蓬生のやみものこらぬこよひさへ錦の袖をしらすや有らん
かへし

月といへと心のうちはてらさぬに衣のうへはそへて社きけ
ひさしう住給はさりける所にかへり渡り給ふて

時しもあれ秋ふる里をきてみれば庭はのへとも成にける哉
松のしたもみちしたるを

露霜についにかれせぬ松なれと下葉は秋にしのはさり鬼
くるすのにてみつといふ題を

としふとも契れる水はかはらしを人の心やいかゝと思ふ
故殿うせさせ給ふて後はなちたる鈴むしのきこえて

待ければ
いかてかは音のたえさらむ鈴虫のうきよにふるは苦しき物を

南の岡の鈴むしといふ事を人によませ給ふけるに
萬代の秋をこめたる宿なれはたつねてすめる鈴むしのこゑ

すゝむしのとしをへてなくに
年後拾經ぬる秋にもあかす鈴虫のふり行まゝに聲のまされは

女御にや有けむ
たつねくる人もあらなん年をへてわかふる里の鈴虫のこゑ

女御のかたおとこ女とかたわきて歌合せさせ給ふに
まけてうれへたりけるとものり

露ふかき色にまされる花のえをいかに定めし野分成けん
かへし

露を重み折ふしにける花のえはかことを風におほせさら南
さか野を過給ふとて

秋たにもまたゆきはてぬ道なれさおしみし人を先過にける
中宮の御前にせさい裁させ給ふ日秋のはなをうふと

いふ題を
松むしの音を尋ねてやほりつらん長閑くみゆる秋の花かな

北白河に人々まうてあはむと聞えたりける日雨ふり
てとまりにければありくに（在題）かきこえたりける

雨をなみふりはへおもふ山里につらくも雲のへたてける哉
かへし

白河の河邊にたてるをみなへしけふの雨にや身をしほる覽
大殿のみもとにて秋の日あそひくらして

秋の夜は水こそことに増るらし月と露とのもるにまかせて
花山院より名もしらぬ花を給はせて

あきことに咲とはみれと此花の名をしる人の更になきかな
御かへし

君か代に咲とはきけとみもしらす是やことはの花といふ覽
月のくもかくれけるを

すむとてもいくよもすまし世中に曇かちなる秋のよの月
後拾 あらし後拾

題おほえす

秋の 新續古 の花の露としらさきつ千草の 原にぬける新續古 色にをける 白玉

すゝむしのはねに

年毎にとこめつらなる鈴虫のふりてもふりぬ聲を聞ゆる
八月十五夜月をみ給ひけるに女房のめさましたりけ

るに

君ならて誰かみしらむ月影のかたふくさよのふかき哀を

とてひとりこつに

ふかくしる事はなけれと月かけを同し心に哀とそみる
ふみなとつくり給ふけるよの

空晴てをそくも月のすくつかないといふなかむる數や増らむ
雲 雲

八月十五夜

一とせの秋の半は残れゝと月は今夜そ限り成ける

大殿より

我宿のみきはにまちし秋風は半によくもすきにけるかな

御かへし

よと共にすめるみきはの秋風は盡るしるしもみえずも有哉

大嚴のまた所々におはせし時人々くしてもみち見に
拾 拾 ありき給ひしにさかのたきとのにて

瀧の音はたえて久しく成ぬれと名こそなかれて猶聞えけれ
千 千

殿にかへり給ひて

山邊よりのへものこさす尋きてとまりもしるき宿の紅葉は
るイ

白河に紅葉見に大殿のおのこともいきたるにみつと
いふ人のもとにやりける

ぬししらて誰かおりけむ山里のものともものと思ふ紅葉を
かへし

いつこともさためて過し道なれと秋のとまりに我はきに梟

菊の花こまやかにて秋をしりぬといふ題を

我袖によそへてみれば菊の花ふかきにしより露のしけきは
ありくにかすまぬ家にて九月九日

住人もなき山里にきくの花秋のみ咲てたゝに過ぬる
かへしありくに

住人の

にほひそふらん菊のはな又うつろはぬ事をこそ思へ
又水のほとりのきく

秋ふかき汀のきくのうつろへは浪の花さへ色増りけり

ゑにう院の石山におはしますに殿上人うきはしとい
ふところにいきてかへるとて

われたにも歸る道には物うきにかて過ぬる秋にか有らん
ためより(爲順)

田上や山まの紅葉は數しあれば秋はおふ其のとけきをみよ

秋はつる日山路ゆく

^{新古}打むれて散紅葉はを尋ぬれば山路よりこそ秋は行けれ

九月つくる日かんし(庚申)なるに

めにみえて行秋なれやよもすからいもねて何をまもる成覽

九月廿日初雪ふるに

梅か枝にふる初雪をけきみれば春秋とさく花にそ有ける

女御おほむかへし

花かとも雪ともいさや何事も物うき秋はしられさりけり

九月晦日の日秋のかけは雨の中につきぬといふを

何方に秋は行らむわか宿にこよひ計は雨やとりせて

九月ふたつ有としの十月朔日の日かねすみ(兼登)かむ

すめのもとに霧のいみしうたちふたかりたりけるに

つねよりも程へて過る秋なれと猶立とまれ今朝の朝霧

かへし

置かはる霜にまきれて立霧は久しき秋のためし成けり

山里に行て笹のきくひとしといふ事も上續後拾を

色々に笹のきくは成にけりた、一枚の霜とみしまに

月前のしらきくといふ事を人々よみしに

おほつかな花はありやは月影にをく霜とのみ見ゆる白菊

ある人

のとかなる月にまかせて我はたゝ霜をそ拂ふ宿の白きく

法輪にまうて給ふ日あらし山にてもみちのしき拾

朝ほらけ嵐の山の寒ければ散もみち葉をきぬ人そなき

十月朔日殿上人夫井にいきたるに

落つる紅葉をみれば大る河むせきにとまる秋にそ有ける

いしのなかなるきくのため一本のこりたるを

岩間よりおふるにしるき菊なればなへての花は霜に枯にき

長谷に入給ひて後中納言のまいり給ひてかへりたま

ふとてなかににより

みすてゝは歸るへしやは風止ぬ峯の紅葉ののとけからぬを

御かへし

嵐ふく峯ののみちをみぬ時も心はつねにとゝめてそくる

八月十五夜のいみしうあかゝりしにたやしの君のむ

すめのとをきところにくへと聞給ふて

くもりなき後の今宵の月をみは山邊の秋を忘れはてめや

なかにゝ紅の岡といふは例の草木にもあらず人の

名もしらぬきものはやしにてあるかいみしうめて

たう紅葉するなりけりやしほの岡とつけ給へりける

か紅葉のいとめてたき比中納言の御もとより

思ひやる心たにゆく紅葉はを見せてちらすな木からしの風

かへし

名にたかき岡のあらしは寒からし紅葉の錦みにしきたらは

三井寺に入道の中將(成信)紅葉見にまうて給ふてかへ

るきに松かさきこのうさうあさりのもとにより給ふ

たりけるに聞え給ふける

見そめてはとくかへらめや紅のやしほの岡ののみち葉の色

あるしをあさりにゆつり給ふければ

紅葉葉にとめし心は松の葉の緑とゝもにかはるよもあらし

またこれより

おつる葉の常ならぬよにかてかは松の緑に心とむらむ

あさり

君か代をなか谷の松露のよに心をかくる梢なればそ

これより
松の雪消かへりつゝ君かため千とせをへても我はつかへむ

あさり

法のためいとふかくそおもほゆる水も心をすめるなか谷
みくしけ殿にやしほの岡のめてたきを御らんせさせ
ぬことゝ年毎にまうし給けるを渡らせ給へりけると
しも紅葉せさりければ歸らせ給ふとて

紅葉はの錦とみゆる物ならは山里いかに立うからまし
御かへし

やしほとも岡はみえねと故郷に紅葉をきてや立歸るらん
文のついでに

春もみし木のはもみちて散にけりこや一年の限成らん
十月初瀬にまうて給へるにきりのいみしうあかつき
に立たりけるを

後い
行路の紅葉の色もみるへきをきりとゝもにやいそき立へき

かへし中納言

同
霧分ていそき立なむ紅葉はの色しみえねはかへりゆかれし

に見えなは道も後い
雪のはしめて降たりけるに女御の御

みる人の年は積れと初雪といふなはかりはふりすそ有ける
御かへし

初雪も降ぬとなどかいはさらむこそ年積るはしめと思へは
雪を

人のあともみえす成ゆく我宿にとひくる物は雪にそ有ける
冬をみなへしの咲たるな

女郎花菊より後に咲にけりこと花なしとたれかいひけん
兵部卿の宮にて月待こゝろを

月影の出ぬほとたにある物を人まつ宿を思ひ社やれ
御かへし

またちらぬききに紅葉もみるへきになと月影の出かてにする

枯たる枝に雪のこほりつきて花のやうに見えければ
かくて所々にやり給ける

雪ふれは花咲とのみみえしかとけさは枝さへさえてける哉
みあれかへし

蓬生の枝なき雪にうつもれてあやしく今は枝をみる哉
雪の山をつくり給ふて

音にきく越の白ねはしら山の雪つもりての名にこそ有けれ
よきむにして山の雪をしるといふを

小夜さむみ山への雪を待とてはおもふ心を人やしるらん
雪降日いひむろのにうたうの中將に

「君かすみかをおもひやるかな
かへし

君をのみみ山かくれに降雪を心なかくそまつたつねける
清昭阿闍梨のやまよりたてまつれたる

外山なるまさきのかつらいかなれは時雨や降と問人のなき
かへし

山さむみ雪まつ積る宿のうへを白雲そふるすみかとやみる
かへし

おく山をしらすかほにて年ふれは心のうちは時雨のみして
また

雪ふらぬ伊邊尾心のさむければ峯のあらしを忘やはする
禪林寺のそう正に雪の消ぬるうへに霜のをきたるつ
とめて

雪のうへに置はつ霜のよの中はいつれ朝日の消のころへき
かへし

人のよのはかなき程に較ふれば雪しもまづは消しと思ふ

雪降たるつとめて

おなしそ雪は積らんと思へ共君ふる里はまつそとはるゝ
かへし

白雪はとふことのはにかゝりてそ降くる宿もはる心地する
ゆきよりかさうしに雪の山をつくりたるに物にかき
てさゝせ給ひける

音にきく越の白山しら雪の降つもりての事にそ有ける
かへしかねすみか女

ふり積る雪をのみゝる白山のけふはかひある心地こそすれ
ひさしう里なるころ雪の山つくり給ふたりときゝて
奉りける

おほつか今も昔も音にたゝ名をのみそきくこしの白山
かへし

白山をよそに思はゝ我宿を今はこしとおもひなりぬる
雪のとしかへりてふりたるにうちの大殿（後拾）（勢通）へ上

ふる雪は年とともにそ積りけるいつれかふかく成増るらん
御かへし

雪つもる君か年をかそへつゝ君かわかなをつまむと思
あまうへの聞え給ふける

積るとも雪ともなる年ならはかへるゝも君にひかれむ
女御とのにきこえ給ふとて

消やすき名になたとへそ年をつむかしらの雪はたかく成とも
長谷にすけ（出歌）し給ふておはしましはしめたとし

雪たかき日おなし女御の御もとより
おもひやる心はかりはおく山のふかき雪にもさはらさり鬼
御かへし

はやくくるす野といふ所におはしたりけるにともま
つ雪を見給ひて

山里に雪さへともを待ければ野風を寒み尋來にけり
中務のみやに八重きくうへ給ふてふみつくりあそひ
し給ひける

をしなへてひらくる菊はやへゝの花の霜にそみえ渡りける
宮

閨の上の霜とおきゐて朝なゝひとへに家の花をこそ思へ
春宮にてもなと聞えける人位につかせ給ひて後忘
れ給ひにたるかときこえたりければ

九重のうちかはれとみかきもりおなし思そ今も焼らし
おなし春のはしめつかた

鶯の聲をまつとはなけれども春のしるしに何をきかまし
ときこえたりければ

鶯はなけとしるしもなき物をうきことしよりまつまさりける
ある人うちのは繪にさうひきん（雀尾琴）といふ事よま
せ給ふけるに

きりふ山吹木枯にこかれたるをよりそ聲はしるへかりける
冬のはしめつかたかたちめ殿上人（大井）にあそふと
いふことを

風雅
流れゆく紅葉をみれば大なる河みせきにとまる秋にそ有ける
女のもとに

冬さむみいつも氷れる衣手を今朝はとけてもかはらさり鳧

をのゝ宮の中納言殿そめ殿の御おもひにて秋はてか
たにきこえ玉ふける

白河の紅葉をみてや慰さまんよにふるさとはかひなかり鳧

ときこえ給へりければ

常ならぬ思ひやなになくさまむ山邊はいとゝ木葉散つゝ

ある女に

新古しら山にとしふる雪やまさる覽よはにかたしく袂さゆ也

つる新古とよのあかりのよ女のもとに人のきあひたれば

をみ衣すりすてゝきつる露けさば春の日すから又そ忘れぬ

しらきのうるまの嶋人きてこゝのひとのいふ事も聞

しらすときかせ給てかへりこと聞えさりける人に

千おほつかなうるまの嶋の人なれや我恨むるをしらす顔なる

かへし

はるかなるその嶋人のことの葉をあるとほみけむ風の便に

チイかつらに人々おはせしにそのわたりなる女につかは

しける

尋ねくる人の心もしらぬには山邊をのみやなかめくらさん

新後拾遺おもひやみにける人のもとより

嵐ふくと山のもみち冬くれは今はこのはたえはてぬらむ

とありければ

同遠近の峯のあらしにこととはむいつれのかたか色は變れる

るとイおなし人にあるやうありて

木のもとを我くやしそ頼みけるはさまから社雨も漏けれ

こおとゝ(頼忠)の御おもひにてそのほとはおはせさり

新千けるを程すきてつかはしける

もゆれともしる人なきば年つもる思ひのうちの思ひ成けり

へる千物いひける人のまたひとになたちけるころ秋つかた

いひやり給ひける

かはり行人の心をみさりせは何につけてか秋をしらまし

ゆきより御むかひにまいりてかうゝゆふ所の有け

るとてその頃すけたゝともろともによみてをとり増

りるう(論)しけるゆきより

秋も今は嵐の山の山高みいかてのこれる紅葉成らむ

冬つかた麗景殿のほそとのにものなといひける程に

くら人これすけからものゝ使にてくたるまかりまう

しせむとて御ものいみにこもる日あけての年かうふ

り給るへければやかてうへにもさふらふましきよし

いひければ

新千西へゆく月の常よりおしきかな雲の上をしわかると思へは

これすけ

別路はよのつねなれや中々に年のかへらん事をこそ思へ

拾たいあまたして歌よみけるに水鳥

霜置ぬ袖たにさゆる冬のにかもの上毛を思ひ社やれ

ぬふ人もなき水鳥のけ衣はさつる氷にまかせてそみる

ゆきより

冬の池の水ゆくらん水鳥の夜ふかくさはく聲聞ゆ也

女のもとに

人しれすつゝむ思ひのあまるときこほるといふは涙なり鳧

たひゝ御返事きこえさりければ

雪やまぬおく山里の道なれやきのふも今日も跡のみえねは

みちのくにかみさねかた〔實方〕くたるにしたくらや
るとと

拾
東路の木下くらに見え行は都の月を戀きらめやは
かへしくなり拾

ことつてむ都のかたに行へきにこの下くらにいとまふと
ありくにの大貳のつくしにくたるに

別フより増りておしき命かな君にふたゝひ逢むと思へは

よの中きはかしかりけるとしつねにありける人おほ
くなくなりて後神無月のつこもり方にしら河にわた
り給ふに紅葉の一本のこれるにつけて常にふみつ
り歌なとよみける源中納言なと思ひ出られていとあ
はれにおほえ給ひければ

新古
けふこそすはみてやはやまし新古山里の紅葉も人も常ならぬよに

またのとしほうさうしの御八講の日ためより

冷
世中にあらましかはと思ふ人なきかおほくも成にける哉

ある女に

白山にとしふる雪やまさるらんよはにかたしく衣さゆ也

人のもとにこしのかたなるつかさある人のかよふと

いはれけるころ

くやしくそ春を待ける雪ふれと通ひやすきは心也けり

かへし

思ひやれもろこしはかり聞物をゆきかよふなの空に散らん

またつかはす

もろこしも夢みむ程や遠からんこはよるかたの道と社きけ

水のほとりのきく

秋ふかみ汀のきくのうつるへは浪の花さへうつろひにけり

なりともものむまのかみ

秋ふかみ霧立わたる朝なくくものもりなる君をこそ思へ

女院〔東三條〕の四十の賀に大將殿のし給けるかはらけ

取て

君か代に今いく度かかくしつゝ嬉しき折こゝイにあはむとすらん

拾
女院うせ給ひて父のとし二月初子の日女房のもとに

誰にとかまつをもひかん驚のはつねかひなき今日にも有哉

なりより拾のふの中將すけしてつとめて左大弁ゆきなり〔行

感のよのはかなき事聞え給へりけるに

拾
思ひしる人も有ける世中にいつをいつとてすくすなるらん

雪ふるに入道なりのふの中將のもとに

ふれはまつ君かすみかを思ふ哉雪は山邊のしるし成けり

こそその六月にうせ給ひてしはすのはてつかたに入道

露の身の思ひに絶てきえにせは問言の葉も聞すやあらまし

かへし

夢とのみ歎きし程に明暮てとはぬうつゝにみえやしぬらん

しら河におはせむと有ける雨のふりければおほしや

りて

白河の花をぞ思ふ雨ふれはたゝにもあらで色やまさらん

人の御むすめを聞え給けるにうちにまいるへしとあ

りければ

詞
ひとたひに思ひしりまし世中をいかゝはすへき賤のをた卷

をみにさゝれ給ひてのふかたの中將のふく〔服〕なるに

あかひもかりにつかはしたりければ

雲の上の光もいかゞ遠ければ猶ほしかたし墨染のそてかへし

晴すのみしくるゝ方を詠むれば光もくもる物にそ有ける
山里のはつ秋といふ題を

いつこにも秋はきぬれと山里の松ふく風はことにそ有ける
すはうのかみとよみつの朝臣の家にしはしおはしける
を三月十よ日花のいみしうおもしろう咲たるほと
にまたほかにわたり給ふとて

王 仇なりと思ひなはてそまたちらぬ花より先に移るひぬとて
御かへし

をろかにも思はぬ物をことしより人にあかるゝなを散す哉
秋の暮つかた母うへの御もとにまいり給ふけるに日
頃もなやませ給ひていとよはけにならせ給へれば女
御殿に聞えさせ給ひける

風やまぬ秋の林に紅葉はの色はいかにとみるそ悲しき
八月二十八日かつらとのに右の大殿の北のかたなど
おはして稻からせてみ給ひけるに

千世をへてかりつむ宿の稻なれはおほくの年をあたる君哉
山里の紅葉は時はわかぬかな秋の半にいろふかくみゆ
とやいはましと思ひてふところかみにかきてもたせ
けるを大殿の御ひとつ車にておとし給へりければか
へり給てまたのあしたかくやいはましとなむおほえ
しとて聞え給へりける

山里にまたき散けることの葉を宿の主やかきとゝめけん
正月十よ日あせちの大納言きこえ給ふる

白妙に雪のふれゝは水鳥の青はの山もあらしと思ふ

祭のつかひにいつるないしの御車に聞えたりける
あふひ草心にかけておもひやるをのか車をさしはまかせん
中宮（影手）の御うふやのいつかの夜

王 秋の月影のとけくもみゆる哉こやなかぎよの契成らむ
ゑにう院かくれさせ給ふての春のよの中ふく（願）なる
ころつれゝなりければ歌よみける

春雨

同 草も木も色つきわたる春雨に朽のみ増る藤のころもて
うくひす

常ならぬ音にそ聞ゆる山里の山へにきなくうくひすのこゑ
わかな
此春はたかためにかは水もくみのへの若菜も満むと思ふ
かすみ

戀侶て君かあたりに尋ねればのゝ霞を哀とそみる
かへるかり
思ひしる人もなきよにうらやまし浮世をすてゝかへる鴈金
やなき

墨染の櫻ならすは青柳のみとりの袖をかけてみてまし
ちるはな
花たにもはかなく散は憂物を數ならぬみのたのみかたさよ
春の田

春の田をなそうちかへしかなしきは頼みすくなき我身成鳧
戀
さまゝに思しよりは世中にたえぬは君を思ふなりけり
ちゝおとゝ（願）うせ給ふてのころたきもの人のこひ

たるつかはすとて

花たにも散つる宿のかきほには春の名残もすくなかりけり

三月つこもりふくにおはするころ

別れにしかけさへ遠く成行はつねよりおしき年の春かな

御いもうとの女御

春しらぬ宿には花もなき物を何かはすくるしるしなるらん

四月ふくなれはころもかへもし給はて

すみ染の衣なからのけふなれとかはれるものはむかし成臈

ふくぬき給ふとて

墨染の衣にそへてなかせともつきせぬ物は涙なりけり

ひかし山のあたり人々もみち見に行て

色ふかき峯の紅葉を尋ねれば山路よりこそ秋は行けれ

一の宮の御めのとみふにものゝ給ふけるをまたおと

りの人かたらふときゝ給ふころものいばんといばせ

給ふければゆにをりてといはせたりければ

哀とも猶きよしとも思ほへす人はありまのゆさしきかねは

かへし

袖山におろす袋も有ものをゆのみやあむと人のいふらむ

序品

くさくさにちりかふ花は古の風にまかせてふるにそ有ける

方便品

ひとことによりてそよゝに出ければ二も三もなきなゝり鳧

譬喩品

かてには三の車と聞しかとはてはおもひの外にそ有ける

信解品

さすらへし昔はおやとしらさりきいつを任するけふの嬉しさ

藥草喩品

ひとつ雨にうるふ草木はことなれと終には本に歸らさらめや

授記品

あらためて深き心を悟りぬるしをけふはうるにそ有ける

化城喩品

古の契もかひやなからましやすめて道にすゝめさりせは

五百弟子品

きてふしてとこゑひなれは衣手にかゝる玉ともさめて社みれ

人記品

ふたなからみよの契の有ければ行末かねてゆふにそ有ける

法師品

法とかむみむるも外になかりけり唯心をそすすへらなる

見寶塔品

そのかみの誓絶くちはイれはいくよともしらぬ姿を空にみるかな

提婆品

みな人を佛の道にいれつれば佛のあたも佛なりけり

さはりおほみ浪を分こし身をかへて蓮の上に居とこそみれ

勸持品

さまくおしまに浮世の中を忍ひつゝ命にかへて法をとくらむ

安樂行品

よをそむくくせも心をおさめつゝ誓て末の法をひろめん

涌出品

たらちねは親よりこそ老にけれ年あらかひを人もしつへし

壽量品

出入と人はみれともよとゝもに鶯の峯なる月はのとけし

分別功德品

隨喜功德品

きくまゝに皆人道をますかゝみ行末までもてらしつるかな
傳へつゝあなたうとゝもいふ人のその人ことにしく事そなき

法師功德品

法の雨にみなからきよめ盡してはさはりの外を何か尋れむ

不輕品

うちのるもさても種をし植つれば終に御法の空しからぬを

神力品

珍らしく述る舌にて御法をは眞の中の誠をそしる

囑累品

いたゝきを猶數々そかきなつるえ難き法のうしろめたさに

藥玉品

明らかにてらす程社みゆる哉身をおしまて法をおもへは

妙音品

法のためきぬとみれ共身を分て至らぬかたはあらしと思

普門品

よをすくふうちには誰かいらさらむ普き門を人しきゝぬは

陀羅尼品

限りなき法の力にときそふる守はいとゝ頼もしきかな

妙莊嚴玉品

闇にのみまよひきつれば契てしともそ道ひくしるへ成ける

普賢品

尋くる契しあれはゆく末もなかれて法の水はたえせし

是はかき給へりけるおくに

法ほむる事きこえねと靜なる光のうちはてらささらめや

ゆいまの十のたとひ此身あはのことし

千こゝにきえかしこに結ふ水の淡の浮世にすめる身に社有けれ
このみ水の月のことし

水の上にやとれるよはの月影のすみとくへきもあらぬ我身を
この身かけろふのことし

夏の日の照しもはてぬ蜻蛉の有かなきかの身とはしらすや
この身はせを葉のことし

風吹はまつやふれぬる草のはによそふるからに袖そ露けき
此身まほろしのことし

このみをは跡もとゝめぬ幻のよに有物と思ふへしやは
此身夢のことし

續古常ならぬ此身は夢の同しくはうからぬ事をみるよしもかな
此身影のことし

世中にわか有物とおもひしはかゝみの内の影にそ有ける
この身響のことし

ありときく程に聞えず成ぬれば身は響にもまさらさりけり
此身行雲の如し

後拾定めなき身は浮雲にたとへつゝ果はそれにそ成はてぬへき
此身いなひかりのことし

いなつまのてらす程には入息の出るまつまもかはらさり鬼
中宮のうちにまいり給ふ御屏風歌人の家近く松梅の

梅のはなにほふあたりの笛の音は吹風よりもうらめしき哉
宰相中将いれりたゝのふ(應信)

ふえ竹のよふかき聲を聞ゆる峯の松風吹やそふらん
中宮のうちにまいり給ふ御屏風にかの海つらなる人

の家の門に人きたり人いてゝあひたり

昔見し人もやと尋ねてはよにふることをいはんとそ思ふ
わか門に立よる人は浦ちかみ浪こそみちのしるへ也けり
翁の鶴かひたる處

ひなつるをすたてし程に老にけり雲ぬの程を思ひ社やれ

花山院の御いれり

ひな鶴をやしなひたてゝ松原の陰にすませむ事をしそ思ふ
山つらにけふりたつ家あり野に雉とも有道人たち
とゝまりてみたり

煙たちきゝすしはなく山里の尋る妹か家ゐなりせは

人の家に花の木ともあり女すゝりにむかひてゐたり
行人につけやゝらまし我宿の花は今こそ盛なりけれ

人の家に松にかゝれる藤をみる

紫の雲とそみゆるふちの花いかなる宿のしるし成らむ

女院の四十の御賀の屏風の歌もしやとて承りけれと

さもあらさり花あるところ

春立て咲花みれは行末の月日おほくもおもほゆる哉

松のおほかるところにて六月はらへしたる所

姫松のしけき所にたつねきて夏板する心あるらし
秋へする河邊の松もけふよりは千世をやちよにのへやしつ覽

七月七日女男にもいひたるけしきしたる所

我戀はたなはたつめにかしつれと猶たゝならぬ心地社すれ

花山院のかゝせ給へる紙書に歌つけて給りたりける
に人々さるへき所はつけはてゝなかりければ人の鶴
かひてふみひろけていたる所

鶴ならぬ友はなけれと文みれは昔の人に逢心ちする

人の顔をかくしてあやしき事したる所におほちにて

我顔は露もらさしと思ふともはなけそいたく紅葉しぬへき
繪物かたりにねひたるやもめなる詠てゐたる所

なかむれと曇らは月のうらやましいかて浮世を出て住らん

とりあつめてそとよめるうた

安からぬしたの思ひも消ぬらし又取あへすこほりゆくには

きくはこきこそといへる女の所

いかはかり契し花の露ならんおきてしもいと哀とおもふ

かへし

結びけむ契も今や朝露のおくみえぬへし花のところは

これもおなし事なるへし男のこゝろにもあらぬこと
なといひたる所に女きて

打とけて頼まさりせは露の身の忍ひに袖はしほらましやは

かへしとて

わりなきは心の外に置露を袖のみたれにかくる也けり

これもおなしさまのこと

くるしきは人にかたらぬ夢路にて父も逢よや有とみるまで

かへしとて

夢計まざるまでのみすくすにはいかなる世にか父は逢へき

繪に梅の木にうくひすのなきてすのこにことひく男
あるところにすの中にて

鶯のさきにか君かきみつるをかつ打出む梅かえのこゑ

春ゐなな家にあそひしたる處にまらうとの來て

青柳のかた糸により出けれとさしてそきつる梅の花かさ

女のおほしくてそ女御の御

花笠をさしてきつれと櫻人春の山への便とそ見る

花山院の御歌合のやうなる事せさせ給ひけるに月を御

秋の夜の月に心のおくかれて雲井に物を思ふころかないつもみる月そと思ふに秋のよはいかなる影をそふる成覽

かりこれしけ

我せこか旅ねの衣打はへてまつかりかねは今もなかなむたかたにて

わきも子かかけてまつらん玉章をかきつゝけたる鷹金の聲

むめ殿上のうた合に雪を

梅かえにふりしく雪は一とせに二度咲る花とこそ思へ

大殿いしやまにこもりたまひてたいともしてうた合

し給ひにけるに題をよみてありけるにみねの上のほとときす

山邊たにねかたき物をほとゝきす都の人はまちやかぬらん

水の邊の螢

水の上にもゆる螢にこととはむふかき心のうちはもえすや

山里の卯花

うの花のちらぬ垣ねは山里の木の下やみはあらしとそ思

草の庵のたち花

蓬生のしけいへには橘のかをたつねてそとふへかりける

くれかたき夏の日

暮かたきけふにてしりぬ石山の山の巖を祈るしるしは

影すくなきよひの月

忘れても有へき物を中々に雲間すくなき月を社思へ

かくて奉れたれば

五月雨は詠る程のみつくきに君かことのはみるそ嬉しき

かへし

ことのはをみるに袂のぬるゝ哉軒の玉水敷もしられす

中將におはしけるとき冬のよさう／＼して歌合の

様なることし給ふけるに

もみち葉は雨とふれとも空晴て袖より外はぬれすそ有ける

臨時の祭のつかひしてかへりたるにふねにすけあき

ら

石清水かきしの藤の打なひき君にそ神も心よせける

かへし

水の上心はしらす石清水浪のおりこし藤にやはあらぬ

おなしおりになかふる

いはし水昨日の藤の花をみて神のこゝろもくみてしりにき

こせち(五節)のちやうたいの夜中宮の御方にかんたち

め殿上人まいりて

九重の雲の上人打むれてくれとひかけは

右大辨中務の宮に参り逢んといひてみえすなりにけ

れは

秋の日を詠くらせる夕暮は月待よひにおさらさり見

おなし宮にまいり給ひたる人に契り給たりける事あ

りければ心もとなくてまたいて給はぬにいてたまひ

にければつとめて

恨めしく歸りける哉月夜にはこぬ人をたに待とこそきけ

御かへし

夜を寒み月よゝしともつけきりし宿も過うく思し物を

五月はかりおなしみやにまいり給ひてこのころすく

してまいらんと申給てあきに成ければ宮より

五月雨をすくすに程と頼めしを秋の風こそまつはきにけれ

御かへし

うつろはて行末遠き松のえは初秋風を何とかはきく

内藏頭たき物こひしを梅につけてつかはし給とて

降雪にまかふばかりそ梅花おれはにほひもとまらさり鬼

かへし

なつかしき袂にかゝる梅か香を風にしられぬ事をしと思ふ

庭はらふなてしこの引きられたるをみてなかつる

すき物を花のあたりによせさらはこの床夏にねたましやは

宮の女房すけの君といふ人

床夏も花の名たてに思ふ覽ことすきもののねしりかほなる

といひて後なかつる久しうみえさりければやりける

いかにそやなのりし人もかれぬれは過にし花の折そ戀しき

かへし

常夏に思し出は今よりは花の時なる實とや成なむ

せいせう阿闍梨夏のはしめに聞えたりける

白雪のふかくつもとみし程に夏のみとりに成にけるかな

かへし

雪消て花さへちりぬかくしつゝ常なきよをやたゝに過さん

又阿闍梨かへし

をやみせず流て落るみなツイのさと月日の過るいつち成らむ

返し

行かたもしらすと思し年月は我みにつもるつみにそ有ける

又

わかゝりし昔年月のとけてつみのふかさはとくそ消ぬるツイ

女院にて權を見給ひて

經古

あすしらぬ露のよにふる人にたに猶はかなしとみゆる朝顔

みちのふ(道信)の中將

朝かほを何はかなしと思ひけん人をも花はさこそみるらめ

おなし中將のかうかいのまくらほにこにあなるかへし

やり給とて

かみかきを返すゝもみる時そ色好みとはしるくみえける

又かへし

をしなへてもみつる時は神垣の榊葉さへやしるくみゆらん

又かへし

紅葉はは時にかはるを榊葉の常なる色にいかて成けん

かへし

時ならてよにふる人は紅葉はの移りやすなる色はならはす

ほうりにためもとしほうまうてあひて音せていてに

けるつとめて

なみのよに逢事かたき龜山の浮きをたゝにかへすへしやは

かへし

天河跡を尋ぬるよなりせは逢事やすき浮木ならまし

野分したるつとめてなかつか家の北に故入道とのみ

なみには故三條殿すませ給けるにおほ風の吹ければ

たてまつれる

我宿は野分はふかむとなりよりあれ増りたる心地こそすれ

かへし

隣よりあれまされりといふなるはいかなる風か身をは吹覽

さねよしといふ人久しうこもりゐたりけるころゆき

のふりけるつとめて

いとゝしく常ならぬよを歎くみに逢みぬ程と過すへしやは

かへし

心にもあらぬ道にやまとふらん雪ふるまでは思はさりしを
さねかたの少將祭りの使せしにかひをはなにいれた
りしあふきをやり給ふとて

かへし

あふきをは猶床しと思ひこし今日はかひあるしるし也梟
いかてかはかひの有とはみえつらむ袖の裏にもよせしと思ふに
宰相にえなり給はさりける九月九日爲元法師

かへし

世中をきくに袂のぬるゝかな涙はよそのものにそ有ける

又

をくれゐて猶さりかたき菊のはな笹のもとをとふや誰そも

世中の

世中をきくにはことに思ふへし袖の露たにちるよ成せは

かへし

常ならぬ此よの花をみさりせは露の心はつらくやあらまし

藏人これすけかぬきいてにかうふりうへきころ 椎を
をこすとして

かへし

みを君にまかせつるより椎柴のかはらんよまで頼もしき哉

かへし

しる柴にそむる衣はかはるとも此身をよそに思はさらなむ

事のついでにむかしのことをいひ出てないけの命婦

かへし

おもひ出る有し昔の在明の月なからよのかはらさりせは

また

忘れぬそのよの月はふりにしを新しくのみおもほゆる哉
はなややく有しなからに鶯のさもあたらしくおもほゆる哉

とて鶯をさくらの枝に居ておこせたれはそのえたを
宮のすけのかりやり給ひたりければ

雲井なる櫻のえたをうくひすのふみ絶んとも思ふへしやは
かへし

さくら花しつえをならす鶯のふみたかへたる春にや有らん

曉月夜にいしやまより出たまふとて關のあなたにて

月のいらぬさきにうたひとつとの給ひければ

相坂の關まで月はてらさなん杉のむら立木くらかるらん

といひたれば

猶後拾

ともに行月なかりせは朝ほらけ春の山路を誰にとはまし

かけまさか露草のうつし聞えたりけるやり給ふとて

朝夕につねならぬよを歎くまにうつし心もなく成にけり

かへし

葉末より深く染てし色なればよはうけれさも歸りやはする

月のあかゝりけるよ一品の宮に殿上人あまたまいり

給ふるにくちすさひに松かうらしまとの給ひたりけ

るを聞てうちの人

浪たにもよる事かたき松嶋をいかてか蟹のありなしをしる

かへし

浦なみの昔の跡のしるければ尋てきつるこゝろ有らし

うち

いかてかはむかしの跡を尋ね覽さかしき人になしと社きけ

又

さかしかる人もなければ行末の契にきつる松かうらしま

御とものひとの雨ふりぬへしと聞えければ

秋のよの雨にもなにかいそくへき此ころふると思ひなしつゝ

かへし

雨ならてはかなき空にふる人は露にもぬるゝ物と社きけ

ぬれてかへり給ふとてそちよりつとめて

新後拾
あはて
そらイ
カイ

こし袖の半は秋のよの月さへくもる物にそ有ける
かへし

人はゆき霧は笹に立とまりくもりなからそ我はなかめし

その夜もるとともにものしける人にかくなむありしと

うきよには心すこしも行やらて身さへ止らぬ跡ならしそ

返したゝのふの少將

慰むるかたゝにあらは月影のすむへきよとは今のみやしる

みちのふの中將

世中はあるかなきかそ今はたゝおもふ心を思ふとちへむ

露草のうつしを宮のすけのもとめければ色わるきな

うすからん花を侘てそ思ひつる猶こゝまでも散せおしむな

かへし

惜むへき程たにもなき花よりもまつかへりぬる色にそ有ける

又しり給ふ山寺におはして

今はとて入なむ後そおもほゆる山路をふかみとふ人もなし

かへし

歸りてもふかきなこりの花の色を袖に移してけふはみる哉

草の庵をたれか尋ねむ

いかなるおりにか
との給ひければくら人たかたゝ

九重の花の都ををきながら

女御の御かたよりつれ／＼になんうたひとつときこ
え給へれば

何事もつねならぬよのさかなれば明くるゝまで忘れに鬼

御かへし

植置し人なかりせは淺茅生を何につけてか思ひ出まし

殿上人こむくうのつゐてに嵯峨野にいきて馬こそか

ありけるをあはれかりてむかしをおもひやるこゝろ
を

住人も昔も今もことなれば花みる寺に尋ねつる哉

みちのふの少將

としふれはかはりやしにしをみなへし昔の秋も問へき物を

なといひてかへるに廣澤の池に月のうつりたるを

水の面にやとれる月の影みれば浪さへよると思ふなるへし

みちのふの少將

浪のよる水にうかへる月影にまつしらるゝは淵せ也けり

こほりたる水に月のうつりたるをおなし少將

池水の濁りにしつむ月影を我みになしてみるそかなしき
かへし

月影のうかひわつらふにこりにはおふる蓮を頼むばかりそ

むまこそかかへしとてきたるをみれば

遁るれとうとましく社思ほゆれこやなき人のみそのなる覽

とかねす系かよみかけたるかへしを

今更にわかなは惜くもあらね共みそのとつくる事の侘しき

感前(えちぎ)の前司(せし)の松のみを奉らんときこえて
ほとへてありてければ

暮かたき春のひよりも契てし君待のみそ久しかりける

八河といふ所におはしたりけるにさゝをかせたりける

宿らてものとけくもあらぬ人のよを露は床しと思らんやは
ためもとしほち(新體意)のてなれはたつねて

あくるまのほとたにもなき露のみの此世中の心ほそさよ

又かへし

草枕はかなき物とこのよをは鳴むしのねやおもひしるらん

小野宮有大臣(實考)式部卿のみや(爲平)の女御のもと

にまいりはしめ給ひて三日いとつれ／＼なるにこよ
ひまいりてものかたりも聞えんと有ければ

秋風の袂すゝしきよひことに君待ほとは人やうらみむ

かへし

うらむへき人をはしらて秋風にお花をあやなたのみける哉

おはしなれしころ焼物を聞え給たりければ

いにしへは契し宿のをみなへしかをむつましみしりも社すれ

こ君ときこゆるかへし

女郎花おなしのへにはおふれ共契しねにはあらずとかきく

この歌とも心えねと本のまゝと本に

宮のすけの君といふ人 女郎花のわかきをなん兩ほう

といふをきゝて

りやうほうといかゝいふへき女郎花佛の種をたつと社きけ

かへし

をみなへし種たえましや白露の□なきころを世は

竹に氷のつきたるを女御殿に奉り給とて

君かため雪まを分て尋ぬればひとよこもれる竹にそ有ける
御返し

鶯の氷れる竹のよをふともかゝる雪まを誰尋ねまし
うちの御使にてきさいのみやにまいりていみしうし
ひられてつとめて

今よりは思ふ事をいひてへむしふるはつらき物にそ有ける

かへし

ことはりや想も心にしられにき思ふ人やはひとをしひける

ひらをかへすとてたゝのふの少將

今はとてとくをし^しもみれは年のをのなく契しかひやかなか覽

かへし

としのをに結かけてし契あれば心のこりをとくといはなむ

宮にえちことてきふらひける 女房にひとりはいを

やかせてとてあつけ給たりけるを奉るさてあかきか
みにかきてひのやうにてうつみたりける

數ならす埋もれたるか思ひにはあたりのはいも山さ社なれ

かへし

うつもるゝけはいをみれば人しれす思ひやふしの煙とも立

是ははやらの事なりと河にまうてたりしにふねにて

かうふりやなきさいものたいふくな君

いにしへの露にぬれにしかひもなくとか柳のみとり成覽

たれとかおほつかなければ

から國の昔の事にくらふれば松にをとらぬ柳なりける

きむきたの中將

昔よりあけの衣はなのみして柳色なるとしをふるかな

うこんの少將さねよし

いにしへのなにもかはらし青柳のことくさすかや緑なる覽
しはかりをいてふね弁

さして行しはかり小船さほをいたみ
といへはしもつく左衛門

まつこかるゝは心なりけり

はるのくれぬることをいふにおなし人

春とゝもにゆく船路にも思ふ哉都の花は散はてぬらん
なといふほとにみしま江とはしもをなん申といふを
ききて

思ひしるうきみしま江の水なれはゆけ共ゆかれぬ心地社すれ
ななみつ

行過てこのみしま江にいとゝしく遠くはなれん事をしそ思
なからのほしにて

橋はしらなからましかは流れての名を社きかぬ跡をみましや
くらうなるほとに住吉にまうてつきぬ松風波の音き
こえしにたかはすおかし人々御てくらのついでに歌
よみて奉れとこひたれはえきかすそのよは其わたり
にとまりて曉月夜にはまつらをゆけはいはむかたな
くおもしろし

斯はかり歸るものうき住吉の岸にはいかで浪のよすらむ
こと人のえきかねはかゝすひゝきのなたにて海士の
綱ひくにいをともこひてはなたす濱邊は何事もおか
しきにあまの鹽やくことにみゆ

もしほやく煙になるゝあま衣霞をたちてきたる成へし
少將

あま人のやくやもしほの立そへは雲の波こそ深く見えけれ
いかなることをみけるにかふな君
へたてなき海へをわたり行ときも人の心のくまはわかれす

ひなみの湊松はらのほとにてしはしやすらひてかさ
きより越てつくゑ松をみればけにゆへなくはあらす
こゝにてこそはくらさめといふ其よはきしつらに泊
りて曉に出ていとおもしろけなる所々見むとて玉津
嶋にまうてむとてあるに道おほつかなしなといふほ
とにかみ人たちたものさきにつかうまつらんとてい
てきたりなりあひの松はらよりゆけはまこもくさ生
しけりさはにこまあるにおかしう緑の松こくらき中
より白浪のたつもとをさるやうくみやしるにい
たるほといりひのほとりに蟹の家かすかにて船とも
つなきあみともほしなとしたるを都にはかはりてお
かしみやしろにまうてつきてみてくら奉り所々めく
りてみれはいひやらんかたなくおもしろくおかしき
をおもひとにみせぬをたれもかくおもふへしその
ありさまいはゝ中々をとりぬへしかゝる所にて中々
ものもいはれぬものになむありけるかへきにうしろ
のいはやをみればほとけのいとけにておぼするを
あま人の法わたしけむしるしにやいはやに跡をとゝめ置劔
少將

蟹のすむ濱のいはやの佛には浪の花をや折てよすらん
といへは

彼岸の遠きをしりて岩陰にみかけをやとす水の月哉
和歌のうらよりかへるにおもしろさきくらやおいだ
るあまをみて少將

年をへてわかの浦なるあまなれは老の波には猶をぬれける
吹上のはまにいたりぬ風のいさこをふきあくればか

すみのたなひくやうなりけになにはたかはぬ所なり
けりさたかやまのほうの前人々なとみえたりて「マ」
いとおもしろし駒をひきとめてやすらへは蟹の鹽
たるゝもいと哀なり

物おもふにみれは忘るゝ濱風に住あまいかに鹽をたるらん
粉河にまうてつきて風のもりといふ所に

いとこへも花のあたりはあたなれといかに散らん吹風のもり

圓融院のおりゐさせ給ひての日さうにセイ少貳のみやうふと
いふ人あはれといふをきゝて

哀たかたゝさのみやは思ふへき萬になけく人も有よに
冬のはしめつかた觀音湯本より久しう御讀經にめさ

れぬと聞えたりければ

霜はやみうつろふ色は菊の花をと女の袖もかくこそはみめ
かへし

をと女子か袖ふる霜の打はへてたはまぬ菊の心とをしれ

みちのふの中將よみたる歌とも書あつめたたるかたみ
にみむといひやるとて

斯はかりふる事かたき世中にかたみにすめる跡にそ有ける
かへし

古事はかたくなるともかたみなる跡は今こむよにも忘れし
賭弓のつとめて中宮のすけ

弓はりのまとゐやいかて有しそのいるかた山は遠さかり劔

かへし

かた山は雨に紛れてやみにしをかつゝきくと誰か定めし

こまの内侍のこはく聞えたりけるをほとへて秋立る
日やり給りければなとてか今までと聞えたりければ

紅葉はの露の色なる玉なれは秋をまたてはいかゝみすへき
かへし

秋深き海のそなる玉なれは露待ほとをきてこそみめ

のふかたの中將まうてむと聞えてみえず成にければ
又つとめてやり給けるせとうか

思ふとちねてはかなくもあくるよを長しといふは人待時の
名に社ありけれ

人のもとにある事をの給ふて

世中は水にやとれる月なれやすみとくへくもあらずも有哉
頭になりたまふてうちにまいり給ふて花山院の御と

きよにつかさる家をわたりたまふければいひ出した
りける

雲のこそ昔を空にあらねとも思ひしことよかはらさり梟
かへし

頼こし月日はたゝに過にしをいかなる空の露にか有らん
人の尼になりたるに

あはれともいはて思はむ行末の蓮の上はおもひいつやと
かへし

とふにたに置所なきはちすはの上までかゝる露をかなしき
薰物あはせてうへに置いて給にければ少しとゝめ

給ひて女御の御

残りなくなりそしにける焼物の我獨りにしまかせてしかな
と有ければ

くゆるへき人にかはりて終夜このわたり社したこかれつゝ
ひはのをかへし聞ゆとてみちなりの中將

秋霧のたな引小野の山路にはことのほさへそふかく成ける

かへし

ことのはの散山のをは秋風のすくるまゝにそ聲増りける

花山院おりぬ給ひての年の佛名にけつりはなにさし

てみあれのせし宣旨のもとへ聞えたりける

新古
程もなく覺ぬる夢の中なれとそのよにゝたる花の陰哉「いろい

かへし

見し夢はいつれのよそと思ふまにおりを忘れ花の戀しさ「をい

またのとしおなしおりされかたの中將

いにしへにかばらぬ花の色なれば花のむかしの昔戀しき

かへし

昔見し花の年々にたれともおなしからぬを思ひしら南

かまくらといふ所におはしたるになかりければ忘草

をとり給ふとて寺にかくいへとての給ける

忘れくさかりつむ程に成にけり跡もとゝめぬかまくらの山

かへし

あり侘に枯にし宿の八重葎いつこをさして君に告げん

山里をはしめてしむかすみ

春かすみほとへてたれか山里はうきよの外をとむる成へし

入道のとうにあひたまひてあしたに

雪ふかみ山路もしらすまとふみは道ゆく人やあるとまつ哉

かへし

みな人をよそにきくとも雪深みひとつ山路にいらんつまとて

かすかにまうて給けるにけふりたつ山里をこれなむ

こまのさとゝ人の聞えければ

朝またきあさる雲とみえつるはこまのゝ里のけふり也鳥

そとはある所を過給ひけるにこれを題にてよまむと

て

覺束なそとはみなからいそのかみふるき都やいつれ成らん

山にきよき事をせきすとておはしけるにいたつらな

りければ

今とはとて入なむ時そおもほゆる山路をふかみとふ人もなし

宮の女ほうへむつかせ給ひしこまつりしてつかせた

まふけるを少將といふひさまけすとあらかひければ

さしそへし春日の山のみかさ山まつりし人もいかゝ定めん

かへし

三笠山わきてや君かまつりけむかねていのらぬ人の爲には

山におはしけるころたゝのふの中將

よをうしとのかると聞は我はいとゝ是より深く入ぬへき哉

かへし

山よりも深き所をもとむれば我心にも君はいらなむ

九月十五日みやの御念佛はしめられけるよあそひな

とせられて月のおほろなるにふるき事なとおもふこ

ころを人々よみけるに

詞花

古をこふる涙にくらされておほろにみゆる秋のよの月

權弁

雲間より月の光やかよふらんきやかにすめる秋のよの月

かへし

蓮葉の露にもかよふ月なれはおなし心にすめる池水

これをきゝ給ひて左大殿より

君のみやむかしをこふるよそなから我みる月もおなし雲ゐを「心をい」

又

同(はたゝい)
いまよりは君かみかけをたのむ哉雲かくれにし月を戀つゝ

ときこえ給ふたりければ

今よりはあみたか峯の月影を千よの後まで頼むはかりそ
女院のすみよしにまうてさせ給ふるに式部卿のみや
の中將のうちの おほんせしにてまいり給ふるにつけ
て左の大との大宮の大夫の御もとにをのゝみや
都人ありやとゞば、津の國のこふのわたりにわふと答へよ
と聞えければ

さそはれぬ身こそ侘つれつの國のなにはの浦を思ひ遣つゝ

御むかへにまいり給ふみちにて見給ふて

尋ねくる心をしりて津の國のこふとも人のつくる也けり
なりとも馬のかみすけしてうち院に住ころ逢にい
きて

秋ふかみ霧立わたる朝なゝくもの森なる君をこそ思へ

中務のみやきゝ給ふて

そむきにし跡をいかてか尋ねまし霧も立そふくもの杜には
とあれは

白雲に跡くらゝと行かけもとひもやするとおもひける哉
御かへし

もろともに契し雲のすみかにはとへともたれを頼なるらん

又みやより

秋ふかきおなしかさしのことのはゝ山下露やもらむとす覽

御かへし

常ならすしくゝ空のことのはゝもろとも露を何とかは思ふ

又

いふにたにしくれむ空はつれゝと詠の後は思ひこそやれ

おなし心を大とのに
世中を花の匂にさそはれてはかなきよをは何たのむらむ

かへし

よの中の花を花とや思ふらんそのはかなきはしる人そしる
御かへし花山院のとも

をくれぬと何思ふらんその花は時の至りて有にやはあらぬ

御かへし

その時をいつれの時としらぬまはまつや常なき時や今こむ

左の大とのゝかすかの使に出たち給ひて又の日雪の
ふりけるにそのとのより

後拾
わかなつむ春日の原に雪ふれは心つかひをけふさへそやる

御かへし

同
身をつみておほつかなきは雪やまぬ春日の原の若な也けり

うちとのゝ八講に

みな底に沈める底のいろくすをあみにあらても掬ひつる哉
と有けるに

うち河の網にあらねと誰はかは君にひかれてうかはさるへき

かけまさか四位になりてうへのきぬ申たりしつかは
すとて

おなしこと衣はふかく成にけり心そ我にならひやはせぬ

みちさたかみちのくにゝくたるにめのしきふかやり

けるうたをきゝ給ひて

今更に霞へたつるしら河の關をはしめて尋ねへしやは

笛ふきのやしろを

ふえ吹のやしろの神は音にきく遊び岡にや行かよふらん
月の前の笛の音

月かけにこちくの聲そきこゆなるふりにし妹は待やかぬ覽
ねまちの月を

ねてまつと今宵の月をいふなれは物思ふ人はみてやゝみ南
三河入道のたうにわたるとしてしら河にくたりけるに
やり給ふける

わか宿にやとる門出の行末は旅ねことにも忘れさらなん
かへし

音にきくかうかの水はかへるとも白河の名をいつか忘れむ
七月七日ふねにのるにやり給ふける

^拾天^拾河後のけふたにはるけきをいつともしらぬ我そかなしき
後拾

たや寺の君のむすめとものもとにしるきかみにせみ
をつゝみてはちすの花にさしてやり給ふたりければ
蓮の花をつくりて此うたかきてせみの中にさし入て
たてまつりたりける

いつれをかのとけきかたにたのまゝし蓮の露と空蟬のよと
かへし

蓮葉にうかふ露こそたのまるれ何空せみのよをなけくらん
又あれより

はちす葉にうかふ計りの程なれやなへて頼まぬ玉のありかを
かへし

契あらは玉のありかも告なゝん此よの夢はうとくみゆとも
殿上にて琴ひきふえふきあそひ給ふておなしことあ

笛の音は哀むかしにゝたれともあふ事なきはかひなかり鬼
うちよりかへり給ふ日

こゝろたにゆきはてぬれはこも枕よとの渡は近付ぬらん

人にをくれて世中すましましう おほされけるころしら
かはにおはして

白河の宿にうきよをのかるれとしつめる影は猶そみえける
女御とのよりきこえ給ふける御かへしに

ことのをはかきなかしつゝ白河の水の面をけふみつるかな
うへのあまになり給ふたりけるころ

空蟬のよの常なきを知らないとひかたきはわか涙かな
いはし水臨時まつりのつかひとのゝ少將まひ人にて

わたり給ひけるに大殿のもの見給ひけるにきこえ給
ふける

をみ人のゆふかたかけて行道をおなし心に誰なかむらん
かへし

小忌衣袂にきつゝ石清水心をなへてくますもあらなん
よすきましましうてこもり給へるころ大殿より春のこ

となり
谷の戸をとちやはてつる鶯の待にこえせて春も過ぬる

御かへし
行かはる春をもしらす花さかぬみ山かくれの鶯のこゑ

おなしとのおもくわつらひ給ふて大殿に
かそふれは同じ齡の草なれや露にをくれて先そかれぬる

おなし御としなりける。

ゑゆう院の御ときにやうつほのすゝし仲忠といつれ
まされるとろしけるにしのはらはすゝしか方にや有

けむ女一宮はなきたゝか方におはしけるにやいつれ
をいるゝなとあるにものないひそとおほせられけれ
はともかくもいはておはしけるをいひにおこせ給ふ

ければ

おきつなみ吹上の濱に家ぬしてひとり涼しと思ふへしやは
權中納言筆に扇をかへていくつはかりにかあたるへ
きといひたるを

敷しらすあふく風にも水くきの跡はなかれて絶むものかは

せきみの少將春日の使したまふてかへり給ふ目いみ
しう霧のたちたりければ是より大殿に

三笠山春日の原の朝霧にかへりたつらん今朝を社思へ

御かへし

みかさ山麓の霧をかき分て秋をしるへに今やきぬらん

左の大殿にふみつくられるにみるへき事ありてふ

みもおきていそきかへり給るにかの殿よりすなはち

うらめしや今宵はかりの旅ねをは我宿にたゝ草枕せて

御かへし

おひしこそよゝに契れる吳竹のそのあたふしを恨むへしやは

少納言むねまさかほうしに成てしかにあるに

さゝ浪やしかの浪風いかばかり心のうちはずゝしかるらん

同し人のもとに久しう音もし給はさりければ

奥山の木下かけに住人は月さへとはぬ物にそ有ける

かへし

おく山の木下水の清からはもりても月のかよはさらめや

清少納言か月輪にかへりすむころ

ありつゝも雲間にすめる月のわをいくよ詠て行歸るらむ

返事もきこえてほとへてうれふことありて御ふみを

聞えてその事いかに聞えければ

何事も答へぬ事とならひにし人としるゝとふやたれそも

かへし

たふなきはくるしき物とならはして人の上をと思ひしら南

とてなむとあれは黄なる菊にさして

くちなしの色にならひて人事をきく其何かとはんとと思ふ

かへし

おしなへてきくとしも社見えきらめこは厭はしき方にさけかし

さねよりかかひに有けるに

東路に入にし人を思ふよに都なからもきえぬへきかな

さねより

はるかなる雲井の程のひと事はみるに時雨そふり増りけり

左大將朝光五節舞姫たてまつりけるをみてつかはし

ける

あまつ空とよの明にみし人のなを倂のしゐて戀しき

齋院にても申ける人内わたりにまいれるよしきゝ

てあふひにかきつけてつかはしける

年ふれとかはらぬ物はそのかみに祈かけてしあふひ也けり

五月五日につかはしける

時鳥いつかと待しあやめ草けふはいかなるねにか鳴へき

かへし

馬内侍

五月雨は空おほれする時鳥ときに鳴音は人もとかめす

寛仁二年正月入道前太政大臣大饗し侍りけるに屏風

の繪に山里にもみち見る人きたるところ

山里の紅葉みにとやおもふ覽散はてゝこそとふへかりけれ

よをそむきて長谷に侍りけるころ入道中將のもとよ

りまた住なれしからなりと申されければ

谷風になれすといかゝ思ふらん心ははやくすみにしものを

秋のくれつかたしら河にまかりて

都出ていつかきぬらん山里の紅葉はみれは秋くれにけり
長谷に侍けるころ僧の装束法服なと關白殿よりをく
らるとて

いにしへは思ひかけきやとりかはしかくきん物と法の衣を
かへし

おなしとし契しあれは君かきる法の衣をたちをくれめや
同しとしの人になん。

後朱雀院生れさせ給ひて七夜に

いとけなき衣の袖はせはく共ここの石をはなてつくしてん
題しらす

我宿の梅の盛にくる人はおとろくはかり袖そにほへる
歎事侍りけるに紅葉のちるをみて

もみちにも雨にもそひてふるものはむかしをこふる涙也鳧
よの中はかなきことおほかりけるころいひ絶たる女
に

逢みねと忘れぬ人はつねよりも常なきおりそ戀しかりける

花のさかりに藤原爲頼なとゝもなひていはくらにま

(實イ)

かれりけるを中將宣方朝臣なとかく侍らさりけむ後
のたひたにかならず侍しと聞えけるをそのとし中將
も爲頼もみまかりにける又のとしかの花のころ中務
卿具平親王のもとより

春くれは散にし花も咲にけり哀わかれのかゝらましかは
かへし

行かへり春や哀と思ふらん契りし人のまたもあはねは

右公任卿集以古寫一本校合了

群書類從卷第二百三十七

和歌部九十二家集十

權中納言定賴卿集

正月五日雪のふりて松にたるひのしたりけるに
いつしかとたれ引つらむ雪分て子日の松はこほりとけぬに
返したれにか

冬籠りまたしかりける松ゆへに子の日をとしと誰かひき釵
右大臣左衛門督と申ける時松雪似花と云題をよまれ
けるに

しら雪のつもる梢に咲花はまたふるとしの春にさりける
三月十日隨風尋花と云題を

吹風ないとひもはてしちり残る花のしるへとけふはなり鬼
三月盡日あめをかしてさりぬと云題を

かきり有て雨にさはらぬ春なれは散花笠なきてや行らん
右大弁

すきゝぬる春はわかれて残る覽花ゆへけふの雨をこそ思へ
九月九日ひねもすに翫菊といふ題を

夕露のをくまで菊をみつる哉おもてのしはをのこひつるより
庭のおもに秋くれぬと云題を

いつとなくこひしき宿の花なれと秋の氣色はしるく見え鬼

庭のもみちをみてよめる

もみち葉の散つむ時そ打はへてはらはぬ庭の面かくれなる

大井川にて人々紅葉をよめる

大井川水のあさくもみゆるかな紅葉の色は雨とふれとも

四條の宮におはしける時大納言殿公任より時雨とゝ

もに紅葉のこらすちると云題たてまつられたりけれ
は

紅葉にも雨にもそひてふるものは昔をこふる涙也けり

御返し姫宮のなくなり給けるとしなり

春ちりし花をおもへはもみち葉のめにとまらぬは涙也けり

廣澤に人々いきて月のいみしうあかう池にうつりた
りけるに

すむ人もなき山里の池の面はやとる月さへ淋しかりけり

かりのおほくつれていきけるに

かきつらね雲路にむすふ鷹金のはかすも秋の月は見えけり

ゑに織女にことひきてかしたる所

琴のねはかさすもあら南彦星のうへのまへには誰か彈へき

松の木の下に人々居てことひく所

ひく琴はことゝなれと松風にかよふ調はたかはさりけり

月夜に旅ゆく人ある所に

人しれす出たつ道の旅なれと空行月はをくれさりけり

紅葉の木の下にて酒のむ人ある所

風にいたくちらぬさきにと紅葉はを君か爲には折留めまし

繪に櫻のいみしうさける所に

世と共にちることもなき櫻花糸には風こそかゝらさりけれ

櫻を見はやとのたまひけるをきゝていみしうめてた

き花をたてまつられたりけるあかそめか家のはなを

折につかはしける

櫻さく盛になへてなりぬとも花なき里はしらすやあるらん

返し

我宿にをとらぬ花はありやとも今は尋しなき名立けり

さか野におはして

春の色をきてみる時は稀なれと心は秋の野守也けり

しとみのひまより月のさし入たりけるを

しとみ山へたてたれとも月影のあまり赤きはもりて見え鬼

きゝもしらぬ鳥のなきけるを人のきこえける

またしらぬ鳥もなきけりさよ更て

といひけるに

いまはしりたるなのりたにせよ

白川殿にて

限なき匂ひをそへて白川の里のしるへはしかにさりける

うちよりいてたまひてゆつけのゆまち給ひける程に

時鳥のなきければ

ゆつけのゆまつに夜更てをのつから山時鳥なくをきゝつる

右大弁の父におはしけるに右大臣殿うへの御もとよ

りくすたまたてまつりたまひけるを

宿わかぬ軒のあやめをみてたにも隙なき戀のねをやたえ南

御返し

すきたもてふく暇たにある物を軒のあやめの程を社思へ

四月一日のりたゝか女房の許にいひたりける

けふよりもきそめてしかな夏衣すきなは人の心みゆへく

女房にかはりて

うちつけにいそきたつなる夏衣先しるきかな人の心の

又のりたゝ

夏衣またひとへなる心とはかさねぬほとに見ゆるなるらん

又返し

かさねての後をしまたは夏衣けにとみるへき程のはるけさ

中宮の七夜に

かすか山わかねにさける藤の花松にかけてやちよを祈らん

子日に

千世こめておひ出る野への姫小松引てもちよのねも知れけれ

春毎に花をおしむと云心を

としをへて花に心をくたく哉おしむにとまる春はなけれと

のこりの菊をおしむ

わかれにし秋のゝこりて菊の花匂ふ籬のしまにそ有ける

右大弁

すきぬとておしみし菊は咲残る籬のしまにとまる也けり

いそきてきぬを人にぬはせければ御せあはせんと人

人のいひければ

衣川遠きあたりにあらね共たれにあふせをわきて云らん

すたれに雨の玉のやうにかゝりたるを

雨にいとゝあれのみまさる故郷に思ひもかけぬ玉簾かな
九月はかりさか井と云所にしほゆあみにおはしたり
けるにひめきみの御もとに

すみ吉のなかるのうらもわすられて都へとのみ急かるゝ哉
かへし

立かへりひころのふれは住吉の猶なかる浦とこそ見れ
おなし所にて

ふねはゐれとも浪は立けり
ひとりこちたまひけるをみちなり

ゆふされはふしみの里にいそくまに
雲晴て月あきらか也と云題を

みる人の心や空になりぬらんくまなくすめる秋のよの月
菊色をへんすと云題を

きのふみし色もかはりて朝ことに面かはりする庭の菊哉
うす櫻さ云を人のもてまうてきたりければ

是や此をとにきゝつるうす櫻くらまの山にさける成へし
春の比題出して人々によませたまひけるに

をとつるゝ人しなけは鶯の友よふ聲に慰るかな
春過てうとくやならんつれゝをたえすをとなふ鶯の聲

ちくふしまにまうてたりけるに
磯なれてこゝろもとけぬこも枕いたくなかけそ岸の白浪

おく山の瀧
くる人もなき奥山の瀧の糸水のわくにそ任せたりける

つれゝにおはしけるたはふれにこめたいにすたれ
かはを人々よみける

跡たえてとふへき人もおもほえず誰かは今朝の雪ま分こん

わかくりを
たちかはり誰ならす覽年をへてわかくりかへし雪ましる道
なつめ

都人けふもそきますかた岡の雪かき分てなつめわかせこ
もちひ

かつきせむ蟹のしわさも千尋なるみるめしなくはかひあらしは
あはしかき

水のあはし搔きえ易くみゆれとも露の身よりは久しかり
やいこめ

あなうやいこめてそ只にやみなまし斯つらからん物と知せば
右大弁人のむこになりて久しくまうてたまはさりけ
れは

谷水のうへはひとつにこほるとも下の心はのとけからめや
御返し

こほるともうちたとけは谷水の深き心はかくれやはする
なにのおりにか頭弁の御もとに

古の春忘れすは梅の花もとのあるしのおるなとかめそ
御返し

古のあるしならねと梅の花おりしる人そいかゝとかめん
右大弁花

春暮てちりはてにける花の上は木の本に社とはまほしけれ
筑前の入道なくなりて後四十九日のゝゑたいかゝせ
たてまつりけるかへしやり給とて

極樂のはちすの花のひものうへに露の光をそふるけふ哉
御返し

人の上に蓮の露を結び置けはみかける玉のひゝに社ませ

三月三日はらへしに河原へいて給けるにくるまとも
のきをひてさばかりければ御心のうちに

ときなはのとくもいそかし御祓にはゆふかけたるを神は請覽

三月つこもり郭公の鳴を

時鳥思もかけぬ春なけはことしはまたて初音きゝつる

いとあかくしもあらぬ月の折に菊のいみしうさきみ
たれたれは女房なといてゐてみるとある人のさゝ
めきける

またきふりぬる雪かとを見る

とあれは

神無月おほる月夜のしら菊は

四月まゆみのもみちしたりける見給ひて中將殿のか
れかれになり給ける比なり

すむ人もかれゆく宿は時わかす草木も秋の色にそ有ける

ひめきみ

みとりなる松の木末をおもはずに紅葉の色のこくみゆる哉

やはたにまうてたまひて木の本にとまりたまひてこ

みと云くゝつまはしよひにやりたまひけるかをそか
りければ

たかせ舟ふなてこさむとまつ程に

とあれは右大弁

やかてにしにもかくれぬるかな

おさなき人のおやにをくれておもひもいれてあるを
み給て

もりおほす露も消ぬるませのうちに獨匂へるなてしこの花
うへの御をとうとのおさなくおはしける程わたり給

てひとよありてかへりたまふにめのとのかたはらな
るに

ねたえぬるこゝちこそすれ笛竹のひとよやふしの限成らん

おまへなる人のこゑをにはかにいとたかくわらひけ
れは

ふりたてゝわらふ聲をは秋過てまた鈴むしの鳴かとそきく
式部かやすまさかめになりてたむこになりけるにい

きやせましいかゝせましといふときゝてやり給ひけ
る

ゆきゆかすきかまほしきを何方にふみ定む覽あしうらの山

五條のあまうへの御もとに君たちわたり給て菊のう
つろひたる紅葉のたゝひとはつきたるをたてまつり

たりければ

我のみやかゝるとおもへは故郷に籬の菊もうつろひにけり

このもとを思ひこそやれ紅葉はの枝にすくなき色をみる哉
みつなりかさぬへきいくにやりたまひける

松山のまつのうら風吹よせてひろいて忍へこひわすれかい

御返し

たゝぬよりしほりもあへぬ衣もてまたきなかけそ松の浦浪

遠きほとなる人のもとよりかゝみとくものこひたま
ひけるやりたまひけるに

君か影見えもやするとます鏡とけと涙に猶くもりつゝ

と云たりしおなし所なるをみて

ます鏡とけと涙にくもるらん影をならへてみるはうれしや

うへの御をとうとの三君の御許に
ひくよりそしるくみえけるあやめ草君か袂にかくる千年は

この返しを

み隠れにおふるあやめはけふ事に誰に引れてふへき千年そ
はりまのかみのひさしうたいめしたまはてうへにき
こえ給ける

あはぬまのうきにおひたる菖蒲草袂にかゝるねをたにもみよ
このかへしを

逢ぬまは我うきからそあやめ草袂にかけていはすもあら南
女房のちこそ男おやのとはさりけるに

故郷のこはきか本の露けきをとほぬつらさは秋そまつしる
こうりを人のたてまつりたりけるに

朝夕にたつをやくまでうりふ山麓の霧のはるゝまそなき
此うりを人のもとにやりたりければ

うり作り今は辛さも忘られてよそになれるそ戀しかりける
とある返しを

山城のとはのわたりのうり作りこまほしと思ふおりそ多かる
殿上にて

けふよりは衣の袖もほしからす紅葉の錦身にしきたれは
三月はかりはしめて女御殿に御たいめありてのちこ

れよりきこえたまひける
あさかりし夜の名残の面かけを宿の櫻によそへてそみる

御返し
詠むらん花とひとへのにほひをそおりても我は床しかり鳧

おなし女御殿のはうへなくなり給ひて後その御か
はりにおほせなと聞え給て

我を君むかしの人とおもはん心はさらにかはらしものを
御返し

かはらしと聞はむかしの人よりもこはまさりても頼へき哉
しほゆにおはしてあかつきかたになみのたては
おきつかせよはに吹らし難波瀉あか月かけて浪そ立なる
ゆきかふふねを

思ひやる都のことをかたるやとゆきかふ舟をみぬ時そなき
おなしたひにて九月卅日

常よりものとけき秋と思ひしを旅のそらにもやとる月かな
十月はかりよるなるのいたくふりければ

梢には残りもあらし神無月なへてふりつる夜半のくれなる
尼上のはすのすゝをねすみのくひたりけるをみて

よめのこの蓮の玉をくひけるはつみうしなはむと思ふ覽
物におはしける道にてそとはをはしにわたしけるを

わたり給て
世を渡る誓ひの方をいひなしてそとはみなからこえ渡る哉

白川におはしけるに御ともにゆきよりの朝臣ありけ
るかかへりけるにをひてやりたまひけり

山里にくれはとひけり今よりは戀しき時のかたみにをせん
返し

うちはへてかけと頼まは假初の山里にしもおくれやはせん
うへの御おはのうせ給ひける御いみにてよりみつの

朝臣
しての山しほりたにしてみえよかしこに後れたる人の爲にと

とありけるをきゝ給ひて
うき世には留るのみ社悲しけれかくいふ人もあらしと思へは

おなし人の御手のありけるを見給ひて
みることに浪はよすれと濱千鳥昔の跡はかはらさりけり

おなし人みのおはしけるに御祈よくせさせ給へよ
のきはかしきなときこえたりけるふみをみ給て

なかゝれと人をたに社をしへけれなとか我身を祈らさり釵

男の女房をかたらひてとうかとなきてまいりつゝ申

さむといひけるか一月はかりみえさりけるをいかに

いはむといひけるに

とほとほと契りし事は鳥の子を重ねる程をいふにさりける
返し

とほにてと咎むる人は有ぬへしみそかにと社いふへかりけれ

中將殿のかれかたになり給て五月雨のころ

五月雨の軒の雫にあられともうき世にふれは袖をぬれける

ひめきみ

今までもなからふる身のなかりせは何かは露の袖もぬれまし

中將殿たえはてさせ給て後御枕にらてんに松をすり

たりけるに姫君かきつけ給ける

心には思ひいてしとのふれと枕にてこそ松は見えけれ

あはれなることなと人のかたりきこえけれは

しきたへの枕のちりをうちらはらひ待かひ有とみるおりも哉

いとあかうしもあらぬ月に菊のいとしろう見ゆるを

うへの帳のまへにふしたまへるをやとおこしきこえ

給けるをおき給はさりけれは

梓弓をしひきしつゝ夜もすからやゝといへ共いる人もなし

ひとりをまさくり給て

おもと事ありとはみれといかなれは獨とのみは人のいふ覽

中宮の女房人にわすられてなけきけるを十月はかり
にやり給ひける

紅葉にも雨にもそひてふる物はむかしをこふる涙也けり

中納言御かへし

春ちりし花を思てもみち葉のめにとまらぬは涙也けり

なかにの入道殿の御もとにまうて給てかへりたま

ひけるに入道殿

みすてゝはかへるへしやは山風の峯の紅葉のことと問ぬを

御返し

嵐吹みねの紅葉をみぬ時も心は常にとゝめてそくる

なかにによりかへり給てはゝの御もとに

故郷のいたまの風にね覺つゝ谷の嵐をおもひこそやれ

御かへし入道殿

谷風の身にしむ事は故郷の本の本をこそ思ひやりつれ

三井寺に入道大納言いり給けるにこしらかはにより

給たりけるに花の心もとなかりけるにかへさにみな

ちりにければ入道殿

故郷の花はまたてそちにける春よりさきに歸ると思へと

御返し

行かよふ便ならてはこぬ人をこしとや花の色にちり釵

又とのゝ御返し

故郷のあるしと思はゝとめてまし面かはりにや花も見え釵

御返し

植置し人たにもこぬ故郷に歸て花をうちむるやたれ

いたうわつらひ給けるころとゝをかねたてまつり

給へりければ御かへにかきつけたまひける

人の命なかに山にほるといはゝ死る所はあらしと思ふ
入道殿にたき物をきこえ給けるをたてまつり給はさ

りければ

いつかたに風さそふらん梅の花なと木の本に匂ひたにこぬ
おん返しとてなし。

人々なくなりける比

みる儘に人よけふりとなりはてぬこそひのいゑは悲しかり鬼
女御殿の御いみはてゝ七月十五夜山のさすのことの
のみかたとに常不輕つきにきにけるを後にきゝ給て
老て社うつへかりけれよゝへてもそらのつゝみの契有やと

返し

朝夕にたへなる法をよむ君は世々の後をも何かまつへき
うへうせ給てのちわかなを人のたてまつれたまへり
けるをみ給ひて

古のかたみにつめる若菜ゆへみるこのめにもみつ涙かな
母うへの外にわたり給て人に物いはぬ行ひにて久し
うたいめしたまはてかへりわたりたまひてけふなん
いとまあきたるときこえ給けるにいそきまいりたま
ひけるに人の文御いとまふるかりてと聞えければか
へり給にけるをうへはいとまちとをにおほしてかく
聞え給ける

この本にきてもみかたき帯木々はおもてふせやと思成へし
御返し

みえ難き帯木々を社恨みつれ其はならぬみかはと思へは
女院の中納言の君つれなくのみありければ

ひるはせみ夜は螢に身をなして鳴くらしてはもえあかす哉
おなし所の人に又やり給けるを返事をつかひのせめ
ければかみをひきむすひてたてまつりければ

我ほとけ跡たれたまへ千早ふる神のかきりはいふせかり鬼
おなし所にはやうやすらひとてさふらひけるわらは
のもとにこの御なのりして人入ぬときゝ給ひて

怪しくも我なのりをいせの海のおまたの人にかゝるめる哉
これは女にちかう見きこゆる人の。いみしうかくし給
めりしほくともの中なりしかば。かくなり。

かものまつりの日なるへし

千早振神のしるしと思ふ哉思ひもかけぬけふのあふひは
いかなるおりにかありけむ

又

はらふ人ありと聞しをしきたへの枕にいかて散つもりけん
夕露のいかなる方にをきつ覽あくるまたにもなき夏のよを

御返などもことに聞えさりしかは

あひおもふ事こそ人のかたらめ我思ふ事をするとなにいへ
なとやにて年月すくめりしをしはすのつこもりかた
にいみしうあれたりつとめて

年をへてとつるつらゝも春近みとくれはとくる物にさりける
かへし

しきたへの枕も床にとちられてとけぬはとけぬ心地社すれ
れいのつまとをならし給けれときゝすくしてあけに
ける又のつとめて

まつ人や有明の月と思ひしをさしてやみにし横のつま戸を
御返し

獨のみ有明の月の山の端に入までさゝぬ横のつまとを
女御殿の内にいらせ給ての春物忌にてまいり給はさ
りしころ

鶯は都の花にうつるともとのふるすはわすれさらなん
御かへし

雲の上をならはさりける鶯はもとの古巢をこひぬ日そなき
さのみ所なと物さばかりきなこよひせちにきこゆへ
きこざなん御くるまの 有明の月のいとまはゆきほと
すくしてとてところをもしたまはて

夕つくよまはゆき程も過ぬるを待人さへやいてかてにする
おん返しとてなし。

ある人のもとにかよひ給けるころ内にまいりてひさ
しういてさりければあやにくにこの比はありきもせ
てつれ／＼なるまゝに例の所にいきつゝなむなくさ
むるとて

戀わひてあひみしとこに立よれば枕にちりを待りたりける
しきたへの枕はさもやなかるらん待めしちりは数積りにき
つほねにおはせしほとに尼上に申さることありし人
のたちよりたりしをなにしにきけるそなとむつかし
けにおほしてあけにしまたつとめて

きしかたもうたかはれ鳧月よみしならし顔にもとひし人哉
かへしとてなし。

まきれ給ひし所ありし比五せちに内にまいりたれば
日影さす雲のうへにばかりかけてたに思ひも出し故郷の月
返し殿上人まいりなとじていとものさはかしければ
わるきなめりとそ

影とめぬ月に心のくれそめてとよのあかりもしられさり鳧
さより内にをくり給てせちなる事ありて出るなり
とありしつとめて聞えし

まぢかねの里をいてぬと思ひしを大方としの名に社有けれ
かへし

思ふとし伏見のさと聞しかとなとまぢかねと人のいふ覽
さか井といふ所にしほゆあみにおはしたりしに聞え
し

覺つかなさかみはるけき旅人のなか井の浦になかみする比
返し

はる／＼となかみの浦を詠つゝ戀しきことの名社つられ
内にまいりたりし又の夜せちにいふへきことなんあ
るとて御くるまのありけるをさるへき人々さふらは
ぬほとにえいてさりければこゝろの内をみせたてま
つらはやと聞えたりければ

うき人の心の内をみせたらはいとつらさの数やまさらん
かへし

昔よりつらき心をたへてみは人にいくへのかすをさゝまし
さとなりしにこよひはうちのとのもていて給しを
れいの所にやと思ひしかはつとめて聞えし

うちかはしかさぬるとこは何なれや返し侘づるよはのさ衣
返し

返すとはきこえぬ物をから衣かさぬときくそまさるぬれ衣
うちにまいらんとせしに關白殿の白河殿にまいり給
にしにさばる事有てまいらすなりにければつとめて
聞えし

行道もけふは猶こそとこほれつてにも花のうへを聞とて
かへし
ゆく道もとこほるなる花の上を急きていかゝ人にかた覽

ある所にかよひ給けるころ内にさふらひしになとか花を

歸りてもみつやは猶やあくかれん花もあるしも盛すきな返し

あくかるゝ花の心をみる程に我さへ旅のそれれをそする

ものうくいてぬ程にこゝちのあしかりければくるまたへと聞えたりければ

もろ共にあひも思はぬなからゐる車はいかに久しとかしるかへし

しらすやはくるまゝの久しきを心うしとはかけて祝ふとかやうにいひつゝあかしくらしゝをあさましうめにちかう見なしきこえてこゝに入給ひぬめりしかは今ふみといふをとりにれたれはありしにもにすいとうとうとしきたてふみにてこまやかにまめやかなる事とものおはれにおほしなりたる事とものあるなかにききまきらかしたるをとりいてたるとて

思ひすて出てにしやとのつまなれと下に忍の草はおひけりとありけるこそ。まことに哀なりしか。返しとてなし。

又のとしの春都にいて給たりし比さうしもてへたてたる所にあまうへおはしましゝかは御經のころはかりはかはらねとありしよとおほえすいと物おはれにてすくしゝにくれつかたつねよりもよみすましたまひたりしにかりのなきたりし聲にもなみたたとめかたきこゝちするに内よりとて俄に車をたまはせたるにとくゝとさはかすをかくなんともえ聞えあは

すくるまにのるそらもなき心地するにたゝかみをさかしいたるをみればかうそかゝれたりける

聲はかり聞たにあるを雁かねのいとゝ雲井になりぬ成かためくるゝ心地してみしろくも覺えねとかならずとさふらひつるをいかにゝと車の人々のいふに心あはたゝしくて

鴈金の雲井になかむ折ことになれしとこよをこふとしら南とかみのはしにかきつけしはかゝしうもみえさりけむかしとそありしをきたまひける枕をかたみに見つゝすくしけるに御ふみにかくてよろつゝましうやと思ひしにつみのかうのみおほゆる事のみおほかれはなむありし枕たまへ佛につくりたてまつらんつみもほろほさんさありけるをしつゝみてとみに御かへしもかきやられさりければつゝみかみに

た枕の佛にならむ後の世もかりそめふしの人を尋よかへし御返ことのなきこそ中々ことはりなれとて

いまはとてかへす枕はあかねとも共に佛の道をちきらん方ふたかりてとみにもかへりたまはさりしほとにしも月ばかりよりれいならすなやましうし給しにいみしう物こゝろほそけにおほしたりしを常のことにおもひなしてあからさまに内よりめしたりしかはかくなんと聞えたりければいとかう心ほそきに

春ちかみ峯の朝日の出るまもまたてや露の消はてなんくるまよせてれいのとくゝとせむるに。心ちかもかきみたりて。はかゝしうおほえすとして。返しとあれとなし。

梅^干か枝に心もゆきてかきなるをしらてや人のとへと言らむ

東山の花のもとにて人々うたよみに山をこえて花をみるといふ心を

あふ坂のせきちにほふ山櫻もるめに風もさはらましかは

みちのなかにしてあふこひといふことを

なこの海のと渡る舟のゆきすりにほの見し人の忘れぬ哉

故殿うせ給てのち五月五日源中將くにさねのきみせうそこして侍しかへりことのついでに

すみ^干そめの袂にかゝるねをみればあやめもしらぬ涙なり鳧

返し 中將

あやめ草うきねをみても涙のみかくらむ袖を思ひこそやれ

家の歌合に花たちはな

き^金月やみ花橋のありかはは風のつてにそ空にしりける

こひ

我戀^干はあまのかるもにみたれつゝかはく時なき浪のした草

二條の家にて十首のこひのうた人々によませし時

占戀

きねかとするそのくましねに思事みつてふかすを頼む斗りそ

來不留戀

我戀はくすのうらはの風なれや驪きもあへす吹かへしつる

誓戀

いかて我心つくしのまつらなる鏡にかけて見ゆるわさせむ

乍臥無實戀

戀々てかひもなきさに沖津浪よせてもやかて立かへれとや

祈不遇戀

あけおろし乙女か神にねきかくる櫛のさすかにゆるきけもなし

追從戀

我妹子かもすそ許にしなさ南さけひかれても恨みやはせん

偽不遇戀

如何せむうしろめたなき人心つらぬく玉のくたけてそ思ふ

聞音戀

よるこえぬ關地にかゝる旅なれや鳥の空音にねをそそへつる

厭賤戀

數ならぬいはせの杜ときくからに身をしる雨は時雨てそ行

〔本ノマ〕

つかひかくれにしかは中宮女房にやとてほりかはの

院へたてまつりし

おもひきや散にし花の影ならてこの春にさへあはむ物とは

ひか事なりければきさいの宮の女はう返し

雪とふる花ならね共いにしへをこふる涙にまよふとをしれ

身をうらみてかつらの家にこもりゐて侍しころ九月

十三夜

なかめする心のやみもはるばかりかつらの里にすめる月哉

おなし所にて又のとしの春のこりの花をおしむ心を

世のうさを厭ひ乍らもふるものを暫しもかくる花もあれかし

八條の家にて歌合に草花露といふことを

夕露^金の玉かつらして女郎花野原の露^{（かせイ）}におれやふす覽

月

くまもなくあかしの浦にすむ月はちひろのそこの鏡なり鳧

鹿

終夜つまとふしかの鳴なへに小萩のはらの露そこほるゝ

寄瀧戀

戀^詞わひてひとりふせやによもすから落る涙やをとなしの瀧

法輪寺にまうつとて故大納言殿^{忠家}の御はかの見ゆるほとにくるまをとめておりてまうつとて

新古

さらにたに露けきさかの野邊にきて昔の跡にしほれぬる哉

秋ころえふみにひころこもりていつるあか月に

山深み松のあらしにきはなれてさらに宮こやたひ心ちせん

嘉保三年^{堀河}三月廿一日花契千年 左少將

君か代のちとせをふへきためしにて花ものとかに匂ふ成鳥

鳥羽殿歌合

花爲春友

左中將

この春はかさねてにほへやへ櫻霞とともにたちもはなれし

御前にて五月雨を名所によせて人々つかうまつりし

に 少將

時しもあれ藻鹽たれたる須磨の浦に日數ふる雨の晴間なき哉

永久四年^{鳥羽}閏正月廿五日

鳥羽殿 梅花薰衣

參議

袖かけておりみおらすみ花の色にそむる匂ひを妹なとかめそ

題可事

山守よ歎きといへは伏柴もなめかしはもわきてやはこる

右俊忠卿集以村井古巖所藏京極黃門眞蹟摸寫本書寫

中納言雅兼卿集

曉聞鶯

鶯^金の木つたふさまもゆかしきに今一聲は明はてゝなけ

山花初發

櫻花まつ咲山のはつ風はほかよりさきにいとれやす

水上落花

花^金さそふ嵐や峯をわたるらむさくらなみよる谷川の水

池邊柳

風^金ふけは波のあやをる池水にいとひきそふる岸の青柳

毎朝見花

咲しよりいとかさぬらむ朝霞たつたの山の花のあたりに

松間花

なみたてる松もや風をいとふ鹽あたりの花の散かおしさに

白河の花見御幸に

年毎^金にさきそふ宿のさくら花猶行末の春そゆかしき

落花盈地

苔むしろみとりの色はうつもれて散しく花にしく物そなき

苔上落花

こけむしろありけるものを散花にしく物なしと思ひける哉

水上落花

咲は散こすゑのみかは櫻花 〓 みつゝもとまらさりけり

夜梅遠薫

波のよるせゝの末までかほるなりこれや梅津のなかれ成覽

花經年香

さきそめしばしめもしらぬ櫻花いく春風に匂ひきぬらん

三月盡

花故にけふのおしさはかゝるかと常盤の里の人にははや

河邊歎冬

心してひけたかせ船きしの山吹にほふさかりそ

遠水螢

五月やみ苜蓿まのほたるほの／＼と見ゆるや淀の渡りなる覽

未聞郭公

五月雨の空のなたてに郭公きゝつとかたる人たにもなき

夏夜月

風ふけはかたよる澤のまこも草

路夏草

かへるさの道のしるへと宮城のゝ花まつ萩をしほりてそ行

六月思郭公

きかねともなをかてらるや郭公まちし五月の心ならひに

晚風告秋

夕まくれをはきか花は咲ねとも鹿なきぬへき風の音かな

初聞郭公

明はまつ人に語らむほとゝきすまた里なれぬ初音きゝつと

名越萩

年毎の御萩のしるしあらませは我なに事をけふいのらまし

草花告秋

咲そむるあしたの原の女郎花秋をしらすつまにそ有ける

秋月

これやこの詠むるたひにしのはるゝ哀れ異なる秋のよの月

早萩

□萩はら花咲にけり今年たに

しかにいかてしらせし

七月八日

久かたの天の川なみあけたてはぬれてやかへる雲の羽衣

をみなへしをみて

女郎花なひくとみれば秋風の吹くる末もなつかしき哉

夕月

たかまとの山の裾野の夕露にかけさしそふる弓はりの月

八月十五夜

秋ことにこの月影のこよひしも□れはこそはなには立けり

おなしき月の十六日に女許へ

忍ひつまひとりにあらず望月のこまいつかたに心ひく覽

曉聞鹿

皇后宮にて

思ひし人に見せはやをしか鳴ふたかみ山のあけほのゝ空

永久元年九月依山大衆事下向河尻邊歴覽住吉

社於注江詠

すみよしのたむけのたひにあらね共哀はかけきおきつ白浪

隔垣紅葉

まはらにかこへ柞原下枝の紅葉よそなから見ん

月前落葉

隠れるの木くれの月のもののみや紅葉散よのとり所なる

移野花

秋くれは野原の花をませのうちに露も落さす移してそみゆ

十月紅葉

たつねこむみたに隠れのはゝそ原しつ枝に秋の色や残ると

船中晚涼

ふなてせし秋まつほとは暮しまの空吹風もすゝしかりけり

旅門秋深

秋ふかみ山風寒したひろも心してこそたつへかりけれ

駒迎内府にて

逢坂の關もる神にこととけむいくよかみつる望月のこま

逐夜雪深

おれふして竹の末葉もうつもれぬ夜毎にまさる雪の重さに

鷹狩

御狩する片野のすそとしりなから何ときゝすの跡とゝむ覽

初雪

あつまちの人にとはゝや甲斐か根の山にもけふの雪や初雪

樓聖人として東山に侍し僧の樓のうへにこもりゐて人

のいくに見えさりしかはかへりて三四日ありていひ
やりし

此たひはあかきみ佛みえたまへさてこそ後の世をも頼まめ

戀春花

わすれしの契もかけぬ花なれとたをりし枝は忍はれそする

月照松

時雨とやおもひはてまし松風を梢の月のもりこさりせは

月照橋

はつ霜は降にけりとも見ゆる哉なからの橋をてらす月かけ

松久緑公宴

八百よりつ久しき御代のためしとは替らぬ松の緑をそみる

隔夏戀

夏衣へたてゝてやかてさは夜寒の床にひとり寝よとや

尋不遇戀

さりととも尋ねこしちのかひもなく跡をたにみて歸る山哉

互有障戀

人の上となけきしものを今は又我さへすふるはゝかりの關
雲によする戀

むねにみつ戀の煙や雲ならん心のそらのはるゝよもなき
をみなへしによする戀

よそへつゝ我みる野邊の女郎花こひせぬ人もきてやおる覽

臨時増戀

なけきつゝ夜は明かたに成ぬれといとゝ心のかきくらす哉

懷舊心

昔のみ忍はるゝ身の行末はけふこひしくやあらんとすらん

貧人戀

はなをたにすゝり□われか身にいかにそへつる戀の涙そ
近不遇戀

伊勢嶋や蟹ならませはをのか浦の見るめ渚に物はおもはし

不問人戀

苦しきはとはぬつらさをつらし共思はしとおもふ思ひ成鬼

忍戀

忍ふれと戀はけしきやしるか覽まつみる人のめてた顔なる

山家戀皇后宮にて

思ひやれ松吹風に夢さめて戀しさまさる冬のやまさと

寄石戀

山里の岩垣なれやわか戀はおもひこめつゝ年のへぬらん

寄水鳥戀

をし鳥はすかたの池に移してやをのか思ひのほとをしる覽

聞權大納言家詠永上月の心

あるしなる水たにすまぬ濁江にほのかに月のなにやとる覽

同置女白地出の心

たち出てねとともさらぬ程なるを獨ふすまの妻やうらむる
戀心

かゝりける涙と人もみるはかりしほらし袖よ朽はてねたゝ

九月十三夜くもりて去夜あかゝりければ

きのふとは誰か契りしこの月は十四夜と社いふへかりけれ
返し中務丞平實重

古のきのふはことに雲はれて今宵の月やかゝらさりけん
又遣

さやかなる秋のなたてに年をへても

返實重

九月の今宵わきては曇らねとかくしもはれは名にそたゝまし
又

これも又うき世にめくる妻かとて心のまゝに月をたに見す
返實重

世をすてゝ西へ行とは知なから見しとはいかに山の月の月
思へともよにゆるしなき雲のうへにいさなふ月の影も有鳧

よの人に月みることのをとらねは秋そ我身のさかり成ける
又

盛りとほまたきなかけそ秋の月雲の上まで見ぬはみるかは
實重 戀人に未成前也

雲るにば月の光もそふなれはいとゝ心のかゝりぬるかな
世のはかなきことを

いひしいへは此世は夢そうれしとて包みし袖に何かとまれる

夢のうちに生れもしにもする事を何かられへも喜びもせん
世の中を同じしまとひのうちにても歎かぬ夢を見るよしも哉

涼 寛治元年七月七日

涙のみかゝる袂を秋の夜は人なみ／＼にかさずやあらまし
遺喪時不訪人の許よりいへる

人を社とはて過ぬれ定めなき世をうみにのみ汐たるゝまに
かへし

悲しきのいつを限りとあらはこそとはて過ぬる人を恨みめ
ひさしくれいならぬころ五月をみなへしの咲たれば

よりはりゆく我みよとてや女郎花秋よりさきにいそき咲らん
中納言になりたりけるを皇后宮よりよろこひおふせ

られたりければ堀川院御事思ひ出て
植をきし匂ひとおもへは梅のゝいとゝむかしの春そ戀しき

雅頼昇殿して侍し時奏内裏出家後

うれしさをかへす／＼もつゝむへき苔の袂のせはくも有哉

右雅兼卿集以佐伯侯秘書寫

成通卿集

民部卿殿伊勢使にくたり給しに藤方にて人々浦の松をよみしに

いくしほか立波毎に染つらんみとりのふかき藤かたのまつ
三條殿に中宮おはしましゝに其御方にて人々月の心をよみしに

さもこそは曇りなき世の月ならめみる人までもすむ心かな
同御方にて草花告秋といふ心を

花薄またほにいてぬ宿ならはけふ迄秋をしらすやあらまし
新院御方にて人々春花盛心をよみし

いつとてか花に心をつけさらんをろかに匂ふ春しなければ

鳥羽殿にて霞隔殘梅をよめる

春霞へたつとならば梅花またありけりと風にしらすな

遇不逢戀

逢みむといひわたりしは行末の物思ふ事のはしにさりける
けふ社はしらせ初つれ戀しさをさりとてやはと思ふ餘りに

月前紅葉

あかなくによるも紅葉をみよとてや秋しも月のさやけかる覽
幾かへり嬉しつらしと思ふ覽たのめてあはぬ夜半し積れは

ある人にちかくみるさてやみなはのちのよのさまた

けにも成ぬへしと申たりしかはよみてをこせたりし
玉草のかよふはかりになくさめて後の世までの恨のこすな

返しつかはしゝ

幾かへりふみかよふ共逢坂をこさすはいかゝ恨みさるへき
ある人故院の御事をなけきて

いかなれは別れは今の心ちしてよはあらぬよに成はてぬ覽
返しやりし

名残なくかはりはてぬる世中になかるゝものはなみた成鳧
故院かくれさせ給ひたりし頃美作前司のもとより

さりともたとのみしかけもくれはてゝ涙の雨にぬるゝ頃哉
返しつかはしゝ

言の葉にいふともつきし世中は我心にて人をしらなん
おなし頃三條殿にまいる人々かきつけ侍し着到のう

へにかみをほそくきりてかきてをして侍しよみ人不知

思ひわひ頼む影なき宮の内を敷きてみればあれそしにける
返しうらにかきつけし

なけく覽人を誰とはしらねとも心はわれにかはらさりけり
竹風夜涼

萩の葉にあやまたれつゝ吳竹のよるの音にそ秋はきにける
草枕よはのけしきのわりなさをおもひやるさへ袖を露けき

思ひやれはるかにゆかぬ時たにも君戀しきは忘れやはする
暮るまも定めなき世としりなから歸りこむ日を待そはかなき

なに事を我思はまし時のまも君にはなれぬ身ならましかは
人のもとより

さえわたる氷の上にふる雪の消ても物をおもふころかな
返しやりし

きゆはかり思はゝなとかあは雪のあはぬ夜半しも積る成覽
霞

音羽山をとにきけとや春霞かたゝにみえず立かくすらん
うくひす

鶯やとしのはしめと告つらんなくひとこゑは春めきにけり
さくら

めにみえぬ心にたにもとまりけり枝はなれそ春のはつ花
五月雨

水まさるふるえのあやめ今更に生いつと見ゆる五月雨の空
ほととぎす

一聲のなとつらからんほととぎすきかて明ぬる夜たに社あれ
盧橘

我宿の物ならなくに匂ひ来る花たちはなのあるしともかな
鹿

夜もすから妻とふ鹿を聞からに我さへあやない社ねられね
をみなへし

女郎花なひくをみれは人しれす秋吹風そうらやまれぬる
雪

しら雪の行かふみちをしらせねはまた音つれぬ遠のさと人
水鳥

夜とともに霜をくつるを水鳥のうら山しくや下にもゆらん
あし

冬ふかく成にけらしな難波江の青葉ましらぬ芦の村立
祝

言の葉にかけてもいかゝ祝ふへき計をしらぬ君か代なれは
こひ

あちきなや誰爲思ふことなれは我身にかへて人をこふらん
十五首述懐に一蕩盛定

限りありて立はなれなは春霞戀しかるへき雲のうへかな
とよみて侍しを人々あはれかりほめしかはまたの日

よみてつかはしゝ
雲の上にとまる心のあまりにてなをさへ君は残しつる哉

返もとの消息のまゝ

雲のうへに猶残しつと聞おりも涙の雨はとまらさりけり

九月十二日夜月のあかきにたれともなくてかみわた
りよりとてつかはしたりし

雲の上の月はかりをはなれなむれと我身もおなし數ならぬ哉

返しつかはしゝ

雲の上の月を詠むる人ならはかけはなれては思はさらなん
ひとゝせ二條にて四十九日かうちに月のおほるなり

し夜誰ともいはて人のもとより
雲はるゝ朧月夜の哀さを物おもふ人はいかゝみるらん
かへし

いつくにも晴すみまさる月影を我宿からと思ひけるかな
夕暮に命をかけぬ身なりせはけさ歸るさにしにやしなまし

月契還年 内裏
千年まで君のみそみむ久かたのひさしかるへき秋のよの月

山家月

まはらにて時雨に厭ふ柴の庵は月もるよりそ悔しかりける
今よりは山邊に近く家居せしまたいらなくに月かくれけり

遠思野花 内裏當座

あかすして過ぎし野への花薄たつねは道に秋やくれなん

寄月戀 内裏

ひとりぬる身を浮雲のはれぬよや戀せぬ月もかけに成らん

月照竹 内裏

時雨にもかはらぬ竹の緑さへしろくそ見ゆる秋のよの月

河竹にむすふ氷とみえつるはなかるゝ夜半の月にそ有ける

秋のはなちかくにほふ

かほりくる籬をみすは閨のうちに花咲やとゝ人やいはまし

たひによせるこひ 内

宵のまは草葉の露にことよせてひるの袂をいかゝ忍はん

水のへんのもみち 内

紅葉はを折へき物をとあさにて船のよらぬそわりなかりける

雪のうちの佛名

こよひしも散あは雪はふるとしの罪のきゆへきためし成覽

祝のこひ

もろ共に千世へん程の久しきはけふの暮るを待にてそしる

月

程もなく入にしよひの月よりなをうらめしき有明の空

うのはな

しら波に見ゆる垣ねの卯花は我こゝるとやおりつくすらん

月夜遠行樹下

思ひしりしはしな入そ秋の月こゝまで人をさそふとならば

水邊夏草

浪たてる萩のからほの夕暮はむれゐる鷺にわきそかねつる

山家月

此里はこなたかなたの山高みみるに程なし長き夜の月

寄衣戀

むらさきのねすりの衣うらめしき人にやちしほ心そめつも

置網のちゝのめも悲しかしあらはかく迄君を見さらめやはた

白菊のなをもたのまし年をへて心にそめぬ秋しなけれは

菊閑中友樹下

この花の散なん後の心をはなにゝつけてかあかしくらさむ

雨中のこひ樹下

紅葉はをそむる時雨のあたりにや我心さへいろにいてぬ覽

舟中言志

河岸のふねはちかひてのほる哉これや早せの見する成らむ

戀

獨ねてまつに久しきかねの音もうしと思はしあはんよの爲

海邊眺望

是よりはいくらかあらん夕つく日入かゝりぬるおきつ白波

紅葉漸落

たちまちに散とはなしに紅葉はもひころをふれは梢すき鳧

寄擣衣戀

うつ聲にあはれしらるゝ唐衣つれなき人にきかすへらなり

ある人の消息云

いかにして世にめくれとて月影の我を見すてゝ雲かくる覽

かへし

曇るとて思ひないりそ世にすまは又もはれなむ冬のよの月

ある人のもとより

たゆましと思ひそめてし道なれば猶ふみかよへ谷のかけ橋

人のもとへ

さりとても慰むへきにあらね共心かはれるゆへをしらすや

ある人にやる

花さかぬ我身と思ふにあやしくも春のみ君かたつね來る哉

かへし

花さかん折をたのめる我なれは来る春毎にたつねとをしれ
花漸少

打つけにさひしくもあるか櫻花まれに成ゆくみやまへの里

契不來戀

たのめつゝ君かこぬよの衣手や待かね山の雫なるらむ

ゆめにあふこひ

とにかくに程なき夜半そ恨めしき明る別もうつゝのみかは
うくひす

驚の人をのみやはさそふへき我もふるすにかへらさらなん
おるもおし見すてゝかへる空もなし花下陰に身を盡してむ
ひたすらに風をいとはし風しらぬみやまかくれの花も散鳧
苗代のあらたをかへすいとまなみいつらは永き春日なる覽
河霧はたちにつけらしな高瀬舟はたうつ棹の音はかりして
櫻花あらき風なき君か代にことをよせてそみるへかりける
此世にてかきれるなかにあらね共命はおしき物にそ有ける
今よりはあはしとかけける玉章のそれより奥は見やはさゝるゝ
菖蒲草なへてにはあらす長きねの千世迄かけんためしとはみよ
これは信成むすめのあかこのかりはしめてくすたま
やるうた

こひわひて多くの年を呉竹のたゝひとかたに嬉しと思はゝ

皇嘉門院に女房共供花以百種花供佛可被奉訪

北政所菩提其の中或女房云獻結花之日欲相具和

歌一首可綴作讀之

はちす葉に消にし露をもらさしと契りを結ふ花としらすや

菩提山上人に給

消ぬへき命にかけてたのむそよ露もあたにはおもはさら南
花を見る程のみ物を思はねはおしきはいかゝなへて成へき
青柳のあなたに匂ふ花の色は峯こす風の便りにそみる
いかてかはなへてなるへき櫻ちる庭さへ拂ふ風のつらさは
まつ時はいてゝもいてすおしむ間はいらぬに入や有明の月
人にかはりて

雲の上に朝夕かくるたのみをは天照神はいかにしつると
雲の上にふき上の濱を待かねて神のみつかのうらめしき哉

前大納言實國卿集

春

たつ春の心を

〔月詠〕

こそといへは久しくなれる心地して思へは夜半の隔て也見
山人の笈にむすふ氷たにとけすはけふを春としらめや

關路霞

さらぬたになこそその關ときく物をいと霞のたちへたつ覽

梅のはなひさしくにほふ

松かえにさかぬはかりそ梅花いろはちとせも變らさらなむ

對樹待花

櫻花今いくかありてさかなんと枝ものいは問ましものを

往隣花と云こゝろを皇后宮にて人々よみ侍しに

詠めやる花し咲なはあちきなくまたぬあるしや我ものとみむ

按察にさそはれて大内の花見侍しに

雲の上に風ものときき春なれやちるともみえぬ花さくら哉
あかなくに袖につゝめはちる花を嬉しと思ふに成ぬへき哉

花みけりとさゝて花山院の中將のもとよりまたのあ
したきのふはなにことかは侍しとはれし返事に

櫻花見しそのほとは思ひやれ散よりほかのなけきやはせし
遠方の風にみたるゝいとさくら我手にかけてみる由もかな

本院のはな見にまいりたりしにみすうちにことのを
とのせしかはかへりさまに

琴のねにあかてや今はかへりなむ花にとのみも思ひける哉

夏

ころもかへ
思ひなく花色ころもぬくはかりそめし心のまつかはれかし

卯花連里

山さとのかきねならひの卯花やをとなし河のせゝのしら浪

爭待郭公と云こゝろを女御殿にて人々よみ侍しに

我は早きゝつといはむほとゝきす人のまところむ時のまも哉
なこりなくすきぬなるかな時鳥こそ語らひし人としらすや

水草隔船

あまを舟さして入えのこもかくれ水うつ棹の音のみそする

小屋五月雨

〔月詠〕
五月雨は賤のしのやのしのすかきふしところ迄水はきに鬼

故里五月雨

朽にける板まにもれるさみたれのふるやくるしき我住み哉

月明似秋といふことを二條院にて人々よみしに

月きよみなかめもあへす明るよや秋にかはれるしるし成覽

秋

江上月

さらぬたに玉江の水の清きうへに光をうつすあきのよの月

鹿

あはつ野になくよの數の積れるは鹿もよ妻やつれなかる覽

八月の中の十日に神樂をし侍ていとなこりおほかり

しになか月の十日あまりにかくなむ申をこせたりし
隆信朝臣

あかほしのあかて出にしあかつきは今宵の月に思ひ出すや
返し

たゝ爰にたゝ爰にとそ思ひしにけは八月のかひもなかりき
落葉

紅葉ちるあらしの山の山もりはおもひもたゝぬ錦をやきる
せきのもみち

をとは山ぬさと散かふ紅葉はをせきもる神やわか物とみる
〔月語〕

皇后宮の女房もろともに大井川のみち見にまかり
侍しに三位中將にはかにさはることありてとゝまり

たりしかはいひつかはし侍し

もろともに君とみぬまのもみちはゝ心のやみのにしき成鳥

九月盡

暮行を おしむにつくるこゝろ社秋のこよひの類ひなりけれ
〔月語〕

冬

あかつきしくれ

をやみては又をとつるゝ村時雨幾たひといふに鳥のなく覽

とをき山のはしめの雪といふこゝろを女院にてよみ
はへりし

杉原や三輪の山へに雪ふりてけふこそ冬のしるしとは見れ
雪のうちのたかゝり

〔月語〕

朝またき狩はの小野に雪降はしらふにならぬはし鷹そなき

旅のとまりのちとり

旅ねするすまのせきやに夢さめて我よすからのとも千鳥哉

山のいへの氷

かけひにはつらゝゐにけり山人の朝け夕けの水いかゝする

戀

戀そめし心のはなの色ふかみ風のつてにもまたしらしかし

經年序戀

八重霞はれぬ思ひはそれなからいくたひ春のかはりきぬ覽
つゝめ共たえぬにひけるあやめ草我心ねそあらはれにける
ほのかに聲をきゝて

きゝもせずきかぬしもなき聲ゆへにあるもあられす山時鳥
なけきつゝかくてやきえむ白雪のしられむ迄の命ともかな

二條院にてこひのこゝろ人々よみ侍しに
さきのよに我に心や盡しけむむくひならすは掛らましやは

依和歌増戀といふを二條院にてよみ侍し

あふこととはとをくにみゆるしきしまの道にまとへる我心哉
〔千載〕

戀しなは我ゆへとたにおもひ出よさこそはつらき心なり共
思ひあまりけぬへきものをいかなれは戀を命と人のいひ釵

〔千載〕
沙たるゝ我やいせおの蟹な覽さらはみるめをかる由もかな

依雨違約戀

ぬれしとて思ひかへさに思ひしれ身をしる雨はさそ處せき

艶女遇他人戀といふ心を人々よみ侍し
〔月語〕

とけかたみこゝろと見しは氷室山たゝ我からのつらゝ成鳥
かれゝゝになりにし人の又人に見えけるときゝしか
〔千載〕

契りしを三年までこそまたさらめいつしかなりや新枕する
待明後日と云ことを女院にて人々よみ侍しに

頼めをく今日はう月の御被しときみをみあれの日社またるれ

兩度違約戀

ありしそのうきを忘れて頼みつるこよひもおなし偽にさは

臨期變約戀

さよ衣きてかさねよと契りしを返してはさは夢にみよとや

上東門院にて戀官仕妨と云こゝろを
此間縁聖簡
五月雨の目をふるまゝにさはた川其たかはしは名のみ也梟

閏五月郭公

ことしたに聲なおしみそ郭公をのかき月のそへるしるしに
山さとに侍けるころ郭公はなくやと人の尋侍りしか
はいたく鳴てあまりなるよし申たりしかは

經正朝臣

今もさは昔もきかすほとゝきすいとふためしに君やなり南
返し

夏虫

足引の山時鳥いにしへもものおもふ人はいとひやはせぬ
夏虫をはかなくよそに思ふ哉これは此よにもゆるはかりそ

夏月

なつのよをうらみもはてし月影の名残は秋もかくそ惜みし

橘寄寄鶯歌無常

見むといひし君もまちえぬたち花は花の盛もあちきなき哉

七夕

秋にしもゆきあふ事は七夕のなかきよとてや契りそめけむ
棚機にあひそめ衣ぬきかさんかへる色をはいみもこそすれ
としに待あふことよりもたはたは中々けふの暮や久しき

雁

斯はかりいとふうき世をいかにして又かへりくる初雁の聲
夕まくれ旅の空ゆく鴈金はふしみの田井やとまりなるらん

入道大納言資賢卿集

梅

むめの花ふきくる風やわきもこかかさねし袖の匂ひなる覽

菖蒲

我宿のつまと頼まむ菖蒲草ひとりねをのみかくる身なれは

雨中郭公

千載
をちかへりぬるともきなけ時鳥いまいくかは五月雨の空

夏夜待月

月までは涼しかり梟なつのよも山のあなたに秋やきぬらむ

社頭明月

さやけさにいとゝ光をますかゝみくまなき空の月よみの神

月

山のはにいりぬる月をおしむたににしへ心のゆきにける哉

駒迎

望月の駒のあまたにみゆる哉ひきならへたるかけにや有覽

社頭郭公

ゆふかけてまつのをやまの時鳥神のしるしにひく聲もかな

草花

思ひあまりほに出にけり花薄人めもしらすまねきかほにて

虫

いかなれは聞たひことに鈴虫のふりせて聲のかはらさる覽

鹿

しとろなる小萩かもとにをとするは妻をしのふる男鹿鳴也

なてしこ

ひとりねに枕の塵はつもらねときひしかり梟とこなつの花

あられ

あはらなる賤のふせやに音するはたはしりかゝる霞成けり

雪

雪降てあとたえにけるおく山にくる人もなきあをつゝら哉

常住心月輪の心を

いかなれは我身はなれぬ月影のこゝろのやみを照さゝる覽

丹州にこもり居のとき述懐のこゝろを

歎きこそおほえの山と積りぬれ命いくのゝほとにつけても
世中の心つくしをなけくまにわか身のうさはおほえさり鬼

おなしころ一條三位入道の許へ

今はさは君しるへせよはかなくてまことの道に惑ふ我身を

返し

言のはゝおほえの山と積れ共君かいく野にひこそちらさね

會不會戀

下紐はとけにし物をいかなれはおもなめしてまた結ふ覽

はしめより

いかはかりさひしかるらん秋はてゝ人もをとせぬ冬の山里

述懐

かへさぬもいかにかはせむ夏衣ひとへに君かゆかりと思へは

郭公おほつかなきにおなしくは都のかたのことをかたらへ

なけくこと侍しときかさきの少輔入道延俊申をくら

れたり

とかくしてねふりをさませ春のよの憂夢はさそ悲しかる覽

返し

春のよのうき夢にたに驚かすいつかねふりのさめむとす覽

ある女房の許よりをくられたり

さはり多みいしまの水のもりこぬやたえはてぬへき始成覽
かへし

心より外に一よのたひねしていしまの水のたゆるなそたつ

故少將遠忌日かさきの少輔入道女に物なとあひくし

て中將のもとへつかはされたりし返事に

年ふれとかきりもしらぬ歎かなをくれさきたつ習ひなれ共

返し

わかれしはけふなり鬼と思ふかもさこそけあらめ歎く心は

壽永元年八月六日

入道大納言資賢卿宮内卿
有賢之息也

集

右之外集に入歌

有馬のゆにしひて御幸ありける御ともに侍りける

にゆの明神は三輪の明神となむ申侍りけると聞て物

にかきつけて侍ける

按察使資賢

めつらしく御幸をみわの神ならはしるし有馬の出ゆならまし

題不知

前大納言すけかた

新勅春

立かへりあまの戸わたる鷹かねはけかせに雲の波やかく覽

百首うたよみ侍けるにしのふこひのこゝろを

思ひやる方こそなけれをさふれさつゝむ人めにあまる泪は

こひのうたの中に

限なくうかりし中をこりすまの思ひもしらてまた歎けとや

以ニ冷泉中將爲景之本。誂ニ春正ニ寫レ之。

慶安貳年仲秋上旬

按納言集 長方卿

春

立春の心を

あら玉の年とはきくにいかなれはたゝ同し身のふりは行覽

霞を

春毎に面かはりせぬ霞こそ年たちかへるしるし成けれ

濱邊霞

春霞いくへ重ねてへたつらんえそみくまのゝ浦のはまゆふ

もゝつたふ八十の船路の夕霞幾重へたてつあはの嶋山

羈中霞

よさの海霞わたれるあけほのに沖こく船の行衛しらすも

橋上霞といふことを

清見かた波のせき路やこゝならん霞のうちにふねよはふ也

おきつしほたかしの海の夕霞いつか濱名のはしもみゆ覽

しに春のうたとて

皇后宮大輔三輪のやしろにまうてゝ人々に歌よませ

見遠花といふ事を

なからへは我世の春の思ひてにかたるはかりの花櫻かな

おほつかない村見ゆるしら雲やよし野のたけの春のはつ花

皇太后宮大輔か春のうたとてよませしに

水に歸鴈といふことを

我心いくしほ春にそめつらん花さへにほふあけほのゝ空

河邊霞を

ひきつらねことをたてゝ歸る鴈浪にしらへの聲あはすなる

鶯呼客といふことを
花の香をしるへにやりし鶯のをのか聲にも人さそひける
うくひす
花の木枝にこつたふ鶯は聲のみならず見まほしき哉
鶯のこゑまたししく聞ゆなりすたちのをのゝ春のあけほの
高倉院御時殿上人鶯契週年といふことをよみ侍しに
ねくらとはみかきの竹をしめをきて千世をは君にちきる鶯
百首歌中に梅花を
花は散香はにほひくる梅ゆへにうれしくつらき春の風かな
梅花招客
君ませといひにはやらて梅か香を風の便にまかせてそよる
二條院御時梅花遠薫といふことを
むめの花さかぬ垣ねも匂ふかなよその木すゑに風や吹らん
若菜
見わたせは若菜つむへく成にけりくるすのをのゝ萩の焼原
こらか手はさぬれやしぬる飛火野に雪も若なもつみに社つめ
わらひ
武藤野のすくろか中のした蕨またうら若しむらさきのちり
高倉院御時宮花初開といふことを
咲そむる雲井の花はいはれとも空にそ千世の春はしらるゝ
花を
散もうくまつもくるしき櫻花咲初てこそ物もおもはね
花の色はあかしと思ふ萬代をさながら春になしてみる共
いさゝらは吉野の山のやま守と花のさかりは人にいはれむ
咲ちる時そくるしき櫻花まちしは物も思はさりけり
春風新勅のやゝ吹まゝに高砂のおのへにきゆる花の白雪雲イ

年へてもわすれやはせん花盛志賀の山こえせしはその目と
花故にのりに心そうつりぬるいつもしほまぬ色をみんとて
よし野山こすゑに花の散まゝにたえゝになる峯のしら雲
春のうちは花にけかるといはるへき庭をも風の朝清めする
さくら咲ひらの山風ふくなへに花のさゝ波よするみつうみ
花ゆへにふみならず哉みよしのゝ吉野の山のいばのかけ道

花下忘歸

我をまつ故郷人は花さそふ風やあやなくうれしかるらん
白川にて花見侍しに花樹臨池水といふことを
みなそこに花の錦をうつしもて又あやをるは池のさゝ浪

池邊花

曇りなき池のかゝみのそきよみつしとゝめよ花の面影

雨中花

春雨の糸すちよはみをりいてゝ花のにしきを染るぬれ色

林花半落

庭の面にいまこれはかりつもりなは梢に残る花やなからん

水上落花

水の面に花のにしきをしきみてゝ波のたゝむに任せたる哉

晩尋山花

暮ぬともなを見にゆかん櫻花あすは青葉に成もこそすれ

遠尋山花

またちらぬ花もやあると春霞へたつる山を幾重こゆらん

池邊殘花

池水のそこにも色のうつらすはたゝ一枝の花をみましを

柳夾水

筏士のこなたかなたへこそす棹のしつえをさふる柳はらかな

春駒

もえ出る春はけしきの事なれは草葉そ駒のこゝろなりける
春くれは澤邊のまこもつのくみてなつみし駒も引かへてみゆ
春くれは雲にいりぬと見ゆる哉澤邊にあるゝつるふちの駒

續徳撰

春雨

目にそへてみとりそまさる春雨のふるからをのゝ道の芝草

つゝし

夏

卯花

しら波のこすかとそみる卯花のさける垣ねやすゑの松山
卯花の枝さしかはすほそ道は雪のした行心ちこそすれ

郭公

〔千載〕

〔つるい〕

心をそつくしはてぬる郭公ほのめく宵の村雨のそら

時鳥雲井のよその一聲はきかてやみぬといはぬはかりそ

郭公かたらひあかす名残にはまつよひよりも物をこそ思へ

たまさかにきなくとならは郭公まつよの數に聲はきかせよ

旅宿郭公

ほとゝきすよそになくねのいかなれは草の枕に露こほる覽

皇后宮大輔人々に四季のうたよませしに夏を

たち花のしたてる枝に郭公かたこひすらし聲もしのはぬ

故郷郭公

新勅
あれにけるたかつのみやの郭公たれとなにはの事かたる覽

五月雨

みたやもりせきそわつらふ五月雨にあせこす計みかさ増りて
夏月

夏の夜は月のみふねにまほあけて天の戸わたる程のなき哉
晩涼如秋

夕されは一むらすゝき打なひき鹿こそなかね秋のけしきそ
二條院の御時片葉有風といふ事を

夕されは難波のあしを吹風にこやのわたりそ涼しかりける
關路晩涼

ゆふされはせき風はやき清見潟秋とおほゆる波まくらかな
泉を

岩間もる水のあたりの涼しさにしられて夏の過にけるかな

秋

早秋の心を

秋たちて事そともなく悲しきはおきの葉そよく夕くれの空

七夕

たなはたはたゝよふ雲をころもにて月の光やかゝみ成らむ

二條院御時草花始開といふことを

咲そむる小萩か原を見渡せはまたをりはてぬ錦成けり

萩を

我宿に野原の萩をうつさはや鹿のしからむいろのおしきに

夕されはま萩か下に小鹿ふしたゝゑにかける野邊のけしきそ

をみなへし

わきもこか花のすかたの女郎花たまのころもやあきの夕露

行路秋花

さらすとしてたゝにはすきし花薄まねかて人の心をもみよ

萩

おほかたの秋吹風は身にしむにこはよにしらぬ萩をと哉
すゝき

すかるふすくるすのをのゝ糸薄まそほの色に露やそむ覽

夕されは尾花かたよる秋風にみたれもあへぬつゆのしら玉

旅亭聞鹿

をしかなく山の麓にやとりして心つかからそ袖ぬらしつる

鹿

さを鹿の聲そ悲しき露むすふいはたのをのゝ萩のしたふし

月

續後撰

駒とむるひのくま河の成きよみ月さへ影をうつしつるかな

山端に月まぢ出るよひのまはおほろけならすうれしかり鳧

あかていらん名残をイもいとゝおしめとや傾ふく儘にすめる月影

雲はらふたひにひかりそまさりける月をは風のみかく成鳧

清瀧の河瀬にさゆる月影は冬よりさきのこほりなりけり

皇后宮大輔人々に四季の歌よませしに秋を

入月を誰ためなにおしむらん心はやまのあなたにそすむ

賀茂歌合月を

やをかくく濱のまさこをしきかへて玉になしつる秋のよの月

又きりを

むこの海にあまの呼聲聞ゆ也霧のあなたにあひきすらしも

八幡歌合社頭月を

神垣や世々にたえせぬ石清水月もひさしき影やすむらん

又旅宿虫を

かやかねに虫恨みける野邊にしもひとりさぬれは都思ほゆ

水路月

とまりするみなとに影の宿る夜は月もたひねの心ち社すれ

林中月

神ますと人はいへ共かしは木の柱の木の間は月のみそもる

池上曉月

生駒山たかねに月の入まゝにこほりきえ行こやのいけ水

九月十三夜によめる

さやけさを今宵と人のいひをきし昔もかくや月はすみけむ

虫を

鈴虫を御狩のたかのをとかとて野邊のきゝすや草かくる覽
忘られてたなれの駒もこぬ宿にいかてをとなくつは虫そも

擣衣

とをつ道行にしせなを戀わひてむなしきねやに衣うつなり

遠聞擣衣

ねさめしてきけは物こそかなしけれとをちの里に衣うつ聲

紅葉

^{新古}あすか川せゝに浪よるくれなるやかつらき山の木枯しの風

妹か袖まきての山をくれなるに千しほふり出雨や染らん

みむろ山神に錦もたむけせし紅葉の色にあける此ころ

社頭紅葉

笈さほにしきをわけてくたすめりにふの川上紅葉散らし

關路紅葉

時雨ふる音羽の山のあらしゆへ紅葉になれるせきの杉村イはら

紅葉未遍

山めぐり村雨しくれてイにして過ればや峯の木のはをそめはつすらむ
きり

難波かたこや夕霧の立ならんいこまの山のみねのむらきえ
杣人は道まよふらしまき向のひはらもみえす霧たち渡る

きくを

長月のきくのした水汲くれはおいせぬくすり誰かたつねん

秋のすゑに大井河にまかりたりしにもみちいまたち

らす侍りしかは

もみちはを吹もちらさて小倉山峯のあらしの我を待ける

冬

月前落葉

吹たひに梢の風はよはりつゝ月はひかりのまさり行かな

しくれを

音もせぬあしの丸やの村時雨くもるのみこそしるし成けれ

深山邊の檜の葉かしは散つみて上には夜半の時雨をとなく

海路時雨

松風の音かときけはあはち嶋時雨すくとして笛たつぬなり

家歌合に曉時雨を

みやまへのならのはさはく初時雨幾むらすきぬあけ方の空

靄中雪

まろねするをしまの崎の笛やかたもくつか上に雪もしき鳧

江邊氷を

^{續後撰}みなと風寒く吹らしたつのなくなこの入江につらゝゐに鳧

山家冬深といふことを

都人花のたよりをまたすともかれぬる草のいほりをはとへ

皇后宮大輔四季の歌人々によませしに冬を

春ならぬ花と見よとやみよしのゝ玉松か枝にふれる白雪

山家落葉

山里に夜半の時雨ときゝつるは紅葉をやとに吹にそ有ける

橋上落葉

かつらきやくめちの橋のとたえにも紅葉を風のわたしつる哉

氷未遍結

原の池の汀はつらゝゐにけらし湊をさしてつたふあちむら

山路霰

霰ふるゐなのしは山人のしらたまつゝむまくりての袖

深夜霰

竹の葉にそゝや霰の音なりさらても夢のさむるおりしも

ゆき

夜もすから床のさむしろ下さえて今朝は高根にみ雪積れり

^{新古}初雪のふるの神杉うつもれてしめゆふ野邊は冬こもりせり

^{新古}宮木ひく袖やま人は跡もなしひはら杉はらゆきふかくして

行路初雪

道すからふるとはすれと行駒のつめもかくれぬけさの初雪

氷逐目結

難波湯みきは目をへてこほるらしうらはの浪もおきに成行

寒草帶霜

^{月詩}冬ふかみおふの浦風さえゝて霜かれにけりいせのはま萩

故郷雪

^{新勅}窮嶋やふるのみやこは跡たえてならしの岡にみゆき積れり

千鳥

おきつしほさしての磯の濱千鳥風さむからし夜半に友よふ

霜

冬の夜は玉のうてなに霜さえて雲井にたつの一聲をずる

海路雪

雪のうちに友をたつねし心ちしてあはての浦に歸る舟人

年暮

明ぬとて鳥たになかはけふを又ふる年と社いはんとすらめ

旅宿歲暮

白雲の八重たつみねを暮て行年とともにや我もこゆへき

庭の面に雪こそふかく成にけれ我身に歳のつもるのみかは

戀部

戀

おち瀧つはや瀬の川もいはふれてしはしはよとむ涙とも哉

うしといひつらしといふもをしなへて心は同じ戀にそ有ける

つれなきを猶さりとともとなくさむる我心こそいのち成けれ

ひとすちに君を思そ入にけるこひ路はかへるかたやなか覽

快にはたえぬ涙も戀にのみくちぬる名をはえこそすゝかね

^{新古}戀しなむ同じ浮名をいかにして逢にかへつと人にいはれん

^{新古}きの國やゆらの岬に拾ふてふたまさかにたにあふよしも哉

しなの路や木曾のみさかの小笹原わけ行袖もかくや露けき

さりとともと思ふ心になくさめていはて過にしかたそ戀しき

誰をかはうらみもすへきうつせ貝心たくも我からそかし

これもみなむくひある覽さきの世に我ゆへ君も物や思ひし

いひすてゝ君か心のつらからはそを恨みても慰みなまし

かくしつゝあらぬ其よになりぬ其みし傍はいかゝわすれん

人しれぬ心のうちのかねことをむなしくなさぬ行末もかな

君かすむ宿の水際に岩のあらは雲と成てもふれんとそ思ふ
道のへの草はか露となりてさは君かもすそをぬらしてし哉
ありへては如何なるへき我なからつきせぬ戀の果そ床しき
しまきふくひゝきのなたの船渡り心まとふも誰によりてそ
草をなみうたの焼野にすむきしのなにゝ隠れて戀を忍はん
伊勢の海おふの恨を重ねつゝあふ事なしの身をいかにせむ

戀をのみすまの汐下に玉もかるあまりにうたて袖なぬらしそ
たつねはやあひつゝの山の中に又人にしられぬ道やあるらん
浅ましや思はさりしを思ひ出とありし其よのならむ物とは
身にかへむうき名のみかは永きよも同じ戀路に猶や惑はん
おほつかな戀はいかなる色なれはいひそむるより深く成行
今はとてしはし忘るゝ時しもあれ何なをさりの言葉そこは
戀わひぬ淵にもいらん今はさはこむよを待と契りたにをけ
我戀はこさしのもちにつく鳥の思ひ放てとえこそはなれぬ
しつかをるみつきの麻の筋よはみ苦しき戀のしけきふし哉
蜘蛛の我いか様にあふまひて君かあたりにかきもつきなん
難波かた堀江の芹におひまさるよしなき戀に身をくたく哉
あふ坂の山路たつねて入はかり我をゆるさむ關守もかな
なかわれはいとゝ物こそかなしけれく行ほとんの空の村雲
今は只そらしはてつるはし鷹のいかて雲井のよそにたにみん
我戀は海士のも汐の何なれやからしわりなし人しれすのみ
結ふへき人もある覽わか松のおひ行すふはいかゝたのまん
初遇戀
思ひかねしなはやといひし言葉も逢みてはまつ悔しかり鬼
忍戀
我戀は小倉の山のきりかくれしかありけりとたれか知へき

色深くしたに思はん岩つゝしいはしやいはゝちりも社すれ

二條院の御時山路見戀といふことを

東路やあふ坂山のゆきすりに見し人しもそつれなかりける

初戀

包みてもほに出来るけふそ賤かかる秋の山田の否と言なゆめ

行路戀

小篠原わけ行露もある物をあなあやにくの袖の雪や

遇在所戀

妹か門駒のあしおるはしもかなそなかこちても暫しとま覽

寄古戀

思ひわひすきひにもするはひ占もあふてふ事は嬉しかり鬼

賀茂歌合に戀の心を

なみた川淵と成てもはては猶あふせにかはるなかれ共かな

八幡歌合寄松戀

波あらふはま松か枝のたむけ草としふる戀に袖そかはかぬ

家歌合に絶久戀といふことを

まちしよに思ひよそへて幾かへり山のはいつる月をみつ覽

ほのかに見たる戀

我せこはまつちの山にすまねとも見し倂やひれふりし袖

不知家戀

我戀はたつね行へきかたそなきうらやましきは三輪の杉村

並面戀

いかこ湯よこの浦はに置網のめを並へてもあはてやめとや

芝かこふ園の瓜生の一つらになる年ならはまくりあへかし

春夜戀

永き目を夜半のけしきと思ひせは獨やいとゝあかし兼まし

悲難戀

夜と共にあふせたえせぬ中川もつらゝぬぬれは通ふ物かは

雜部

紀伊二位八十嶋詣に住吉にて人々歌ふみしに

神垣や磯邊の松に言問はむけふをは代々のためしとやみる

賀茂のまつりのかへさの五月一日にあたりたりしに

女房の中より申をくりて侍りし

あやめふく五月にかゝるあふひ草永き例にひかれもやせん

返し

けにやけに千世の例となるへきは五月にかゝるあふひ成鬼

祝

神風やいすゝ河かみ宮居して幾よろつ代か君をまもらん

徳大寺左府うせられて侍りしころ九月盡日三位中將

のもとへ申つかはし侍りし

又もこむ程をまつへき秋たにもわかるゝけふは悲しき物を

かへし

身にしみて惜むとをしれ別にし名残の秋のかたみと思へは

人々のちる日

皆人はもゝの木のはとちりゝになり行程はいかゝ悲しき

十月に服になりてつきのとしの春傍官とも加階のと

きよめる

諸人の花さく春をよそに見て猶しくるゝはしぬしはの袖

無常

世中を思ひしとけはあたし野に風まつほとのかるかやの露
よの中はうたの狩場にすむ雉のありとてありと如何頼まん

世中はきしのかけ草ねをたえてよせくる浪をまつ程そかし

少將公房出家の時兄少將のもとへつかはしゝ

いかゝせむ我より和歌の浦人も憂世のあみを出ぬときけは

述懐の心を

うき身には時雨もよその物なれや歎くなけきの色も變らぬ

官辭したるよし申侍るつゐてに

おなしくは苔の袂にぬきかへていとひはてつと君に告はや

返し

思ひする心のみこそあはれなれ苔の袖にもまよふうき世を

皇后宮大輔人々に述懐の歌よませしに

澤邊にて子を思ふ鶴の鳴聲をあまつ雲井にいかてとをさん

おなし大輔人丸幕見にまかるとて其心を人々すゝめ

てよませ侍しに

塵となる跡とふまてはかたけれと誰もしのはぬ柿の本かは

かのはかに詣て佛事ををこなひて

かきつめし言はの露のかす毎にのりの海にはけふや入らん

賀茂政平か一品經歌よみ侍しに藥草驗品

をしなへて伺しみのりの雨なれとうるふ草木はものゝ品々

海路の心を

おきつ浪たかしまめぐり漕過てはるかに成ぬしほつすか浦

羈旅の心を

旅に出てみれば悲しも故郷のみやこの方はかすむ一むら

別の心を

別れつゝ今はこし路の歸る山えそひとかたにおもひ定めぬ

都うつり侍りし頃

廣田邊の家に宿して柱にかきつけ侍し

一夜ぬる草の枕もよゝをへて結ひをきてし契りならずや
きしかたの事なとおもひつゝけ侍て

おもひ出のなきにもあらぬ昔こそ忘れぬ夢のなき成けれ
春の花秋のもみちをみし友のなかはゝ苔のしたにくちぬる

名所

さくらみの里にて春は花を見て秋はかつらの月をなかめん
うつすとも筆も及はしあはちなるゑしまの石にかくる白波

上陽人

はかなしやむなしき床に明くれて年のむそちの空に過ぬる

李夫人

中々に散なむのちの爲とてそしほれし花のかほもはちけん

王昭君

かくはかりせきわつらはゝ涙川みやこのかたへ流れいら南

楊貴妃

まほろしは玉のうてなにしたつねきて昔の秋の契りをそ聞

此一册定家卿自筆之本一覽之次書寫了。外題按納言家
集直書之。是按察大納言長方卿詠也。

一本云

以ニ京極黃門定家卿自筆ニ令ニ書寫ニ尤可レ爲ニ證本ニ而已。

慶長第三曆五月日

羽林郎藤

花押

右一卷以勢州林崎文庫本校合畢

群書類從卷第二百三十九

和歌部九十四家集十二

權中納言爲重卿集

康曆二年

正月十二日松田丹後守宿所當座三十首

朝霞

光をはかすみの色にききたてゝのとかに出る朝つく日哉
夕郭公

採早苗

残りつる苗をも今はうへはてゝかへさすゝしき小田の夕風

川霧

明ぬへき程とはしれとはし姫のまつ夜を残す宇治の川霧

松雪

ふみ通ふ雪のはしたて跡見えてとたえかちなるよさの松原

後朝戀

道しはの露のひるまも消かへりたへて待へき夕ならぬを

旅泊波

浦風のたよりもかはるよひくに浪まてうとき夢のかよひち

十七日道場會始

早春

朝鶯

氷ゐしみきはゝ去年の道なれやなみに春たつ志賀のうら風
今朝はまた野邊の霞をへたてにて宿よりよそに鶯そなく

祝言

絶せしな和歌の浦なみ世々の名をかけても遠き敷嶋の道
當座三十首 予出題

霞

春になをうらをかすみの名にたてゝはや遠さかる興つ白浪

春雨

春雨の空をのとかになかむれはこけに色あるのきの玉みつ

螢

水はなをせゝにせかるゝ夏川の井てにあかるはほたる成鳧

紅葉

秋ふかみ霧にはなれし薄もみちそむる時雨のほとや待らん

神祇

梅かかも松もふりぬる神かきに猶春しるきめくみそを見る

二月十四日柳原當座十首

霞

梅

山とをきよそめよりはやかすむ日の色になりぬる春の空哉
雪と見し色にさかりや過ぬらんよそめに残る春の梅かな

待戀

頼みける心や見えむいつはりといひはてつへき夜半の契を
祝

十八日道場月次會

梅薰風

梅の花とひもとはすも春かせのよその匂ひにうつりぬる哉

春月幽

さすかなをみえける程に光にはあらてやかすむ春のよの月

名所橋

朽にけるなからの橋は我なれやそのあとゝたに知人もなき

當座三十首

湖上霞

けきみれは霞のみをにかひ出てみきはそわかぬしかの浦舟

嶺早蕨

山はたに立し烟のしたわらひみねにもおにも今そもゆらし

池藤

あやをなすやよひの雨のいけ水におれともうつる藤の陰哉

田家水

これも又秋のかたみの水なれや冬のたな井にみくきぬに鳧

三月六日早旦。澁谷遠江入道爲關東使節下向之次。立
寄侍し次に。餞別の義に一首を可詠給之よし申侍し

に

たちかへる道とは聞とたひ衣ゆくをなこりとぬる、袖かな
十一日 禁裏 二十首 御短冊

柳帶露

白露のむすふとみれはあをやきのいとに玉ちる春かせそ吹

遠尋花

すゝわくるみねまでこえて吉野山雲にいろある花を見る哉

違約戀

木の葉しく宿のかよひち秋かけてやかてそ人はうつる物かは

恨身戀

いはみ渴はやよせたゆむ浦浪をなを身にかけてぬる、袖哉

十三日松田張行當座五十首

早春雪

雪はらふ簀しる衣けふまでもうちきて寒き袖のはる風

野若草

もえわたる野への草はの薄緑うらのみわかき物とやはみる

朝葵

葵草また朝露も玉たれのこすのうへまでけふはかくらし

夏草露

をきあかるつゆの下葉に跡みえて猶道ふかきのへの夏くさ

渡霧

あかし湯霧のまかひに夜をこめてあけぬと浪にかゝる船人

松雪

とへはとていかゝあくへき柴の戸もさらにとちぬる松の雪折

忍戀

なかとやつゐにみえなむ涙川をさふるたにもしるき袂を

隣家鶏

さもこそはおなしね覺の袖ならめやとにへたてぬ鳥の聲哉
思往事

しのふそよ馴こしかたの人かすもなかはゝすきし昔語りを
十八日道場月次

歸鴈

をくれしと行こそみゆれ旅にはやたちぬる頃の春のかり金
花

山家

濁る世を捨ぬと思ふ山の井もなをあさはかにすみや侘まし

當座三十首

野霞

あまのすむいそ野の草の薄みとりなみもひとつに霞む春哉

湖歸雁

水とりのにほのうみちを行かりも春は霞のしたくゝる也

尋花

わけまよふ山もいくへの櫻よりあとなき雲のあとを尋ねて

路苗代

なはしろにひくよりあまる山水のすゑをも河とわたる比哉

曉鷄

逢坂はまた山あさき里なれば明行鳥のこゑをこそきけ

故郷松

わひ人となりて住こし故郷の残るしらへのまつかせそふく

三月廿三日 内裏御會始

藤花春久

幾千世もあかぬやよひの匂ひよりうちはへかゝる藤の下影

三月盡 將軍家御會始

松有春色 大納言出題

小松原はるにそひゆくひとしほの色をは千代も君そ數へん

同日 禁裏御會 當座二十首題は同

暮春野

いはえこしこまのゝ草のしけみより春さへ深く成にける哉

暮春別

きぬゝの名残にそへてとゝまらぬ春をも人に恨つる哉

暮春祝

よくれぬけふはなこりにしたふ共遠きやよひの九重の春

卯月四日。柳原辨違例侍しをしり侍らて。狀をつかはし

侍しに。とふらひ侍らぬよし返しに申侍りしを。やかて

もとひ侍らさりしに申たひたりし。みたれゆく心のす

ゑのとこにてもとはぬやうときはしめなるらむと侍し

返事に

さそときく後まてとはて過るまはわれゆへうとき心社(ち説)すれ

五日 將軍家 月次御會始

更衣

いろ香までけふぬきかへは花衣なにを櫻の名残とかみむ

郭公

きかて社うらみはつとも時鳥まつ人かすにいかゝもれまし

祝言

代々をへしあとにはのこる道なれや又吹そふる和歌の浦風

當座五十首 亞相出題

歸鴈

見るまゝにへたつる跡の霞ゆへなをすゑとをくかへる鴈金

夕虫

ゆふ露のかやの下葉みたれてもおもはゝなにか松虫の聲

時雨

たえゝゝに移る入日のかけなから雲もみね行村しくれかな

鷹狩

かり衣なを袖見えてはしたかのをすけにかゝる玉あられ哉

顯戀

名とり河やなせをかけてせく袖のうへにも今は流れぬる哉

逢戀

山といひせきとてさはるつらさをも今あふ坂に忘れぬる哉

眺望

吹上の濱のまさこをきのうみのすゑまで残すおきつしら波

神祇

今年こそみゆきも急け君か代にかへる日よしの光しられて

十三日顯阿一廻一品經勸進詠歌成忠勸進也

序品

みよしのゝいはのかけちを残しても猶おくしるき花盛り哉

懷舊

こそ夏そひし卯月の別れよりなきもくはゝる數そ悲しき

十二日土岐會始 油小路宿所

迎春祝言

さらに此春にそみつる雨露をうけゝる君か御代の惠は

當座三十首 予出題

山霞

山のはの雲に雪けをのこしてもかすむはしるき朝日影かな

早苗

時にあふ千町の苗も今日よりや君かよはひの數はとらまし

朝氷

とちのこす流れはみえぬあさあらしの下に氷れる山川の水

十六日本阿張行 當座五十首

山早春

峰高きあまのかく山かすむ日の色にのとけきはるはきに鳧

朝若菜

けさはまた袖にも残るつらゝゆへ澤のね芹を摘やわけまし

夏草滋

をしかふす夏のをふかみかり人のゆ末もみえすしける比哉

閑駒迎

せきまてといそきし道にくるゝ日もなな見えて行望月の駒

閑霞

ねやの上のならのかれはをへたてゝも音はさやかに降霰哉

待戀

偽もまこととわかれてくるゝまをそもいつ方に思ひきためむ

變戀

うき中にやかて月日のうつるよりなみまでこゆる末の松山

里竹

里までもめくりてしけき深草の竹のはやまをよそにやはみる

廿二日上御所當座五十首 予出題

竹間鶯

吳竹のしけみさえたに夜はこめてあくるまをそき鶯のこゑ

花下送日

櫻かりふりこし雨のやとりよりぬれていくかの花のした陰

夕早苗

あすまでと思ひし苗をとりやらてけふも岡への暮にける哉

野女郎花

かり人のくるもさか野の女郎花靡くあた名はたちそそふ覽

篠霰

さゝのはのうへにくたくを白玉のかすにみえてもちる霰哉

忍久戀

亂れこし袖のもちすり年月をさのみ忍ふといかゝみゆへき

寄國祝

我國といひけむ神のちかひをも今おさまれる御代に社しれ

廿三日 准后御張行百首 大樹參會

簷梅

吹はなをにほひをそへてさそふまもしられぬ軒の梅の下風

郭公

思ひいつるときはの里のよかれゆへとふさへつらき時鳥哉

夜鹿

つまこむる山はいくへとしらね共夜半にそ高きさを鹿の聲

冬月

山川のこほりのうへもよるみえていはまに寒き月のかけ哉

寄雲戀

さえてたつ嶺の葉山の峯にさへいさよふ雲を詠めわひつゝ

廿六日久我亭當座十首 亭主出題

更衣

かへてうき物とはいへと花衣ぬけはそ残る袖のうつり香

無返報戀

しらせはやよせしはかりの藻鹽草かへるなみなき跡の恨を
山家祝

さひしともきく人やなき御代に今出ぬる山のあとのまつ風

五月八日上御所 當座五十首 予出題

初春待花

霞たにまた立なれぬ山のはに花となみえそ春のしら雲

深夜春月

たちまよふ雲はしつまる春のよの霞なからもふくる月かな

晴天鴈

しら雲の道ゆきふりは名のみしてあとなき空にかへる鴈金

民戸菖蒲

高きやの軒端よりふくあやめ草民のかまさも五月をそしる

家々夏秋

おほぬさの引手は宿の數なれやみそきあまたの加茂の川浪

二星適逢

恨をはのへも盡さし年にのみくるを契のほしあひのそら

廣澤池眺望

池よりも北なる山の春風になをひろさはの月そくまなき

海上待月

山のはも見えぬしほせに漕出て雲にのみ待夜半の月哉

古渡千鳥

ゆらのとに絶にしちちもある物を行衛をもしる友千鳥かな

思疲戀

しきしのふ道のゆくてのいなむしろいなは心の契にそしる

從門歸戀

かへりこし浪路そつらき鳴戸よりさし出されし船の行衛は

行路市

道のへのたつの市人くれゆけは何なうるまのしみつ共みす

上陽人

春秋を送るむそちのゆかの上にかく老はつる身をもみせはや

十一日月次御會

山田早苗

小山田になひくさなへの薄煙いほもるかひををかぬ計りそ

河五月雨

名取川しはしはせくとみしやなもはやをしおとす五月雨の頃

忍不會戀

しのふ山心のおくもまたしらてみちなきかたにまよふ比哉

當座五十首 予出題

浦霞

をしてるやなにはのみつの浦つたひみえても霞む蟹の釣船

郭公

時鳥待あかす身もある物をたかふす程のよはのひとこゑ

夜虫

夜さむをは同じ恨のきり／＼すさて社床のあたりにもなけ

井水

いと／＼しくさゆる朝日のあさ緑とちよと氷る山の井の水

逢戀

下紐のとくにつけてもあかぬ夜になをや契を結びをかまし

曉鷄

曉とゆふつけとりの聲なからなきそめてなと夜を残す覽

十四日俊成卿九十賀記を管領に書てつかはして侍りし

返ことに。八十あまりと／＼せにみてるとしなりときく

にもならふよはひとまかなとはへりし返事に

言の葉にそへてもならへ九十みつとしなりとみゆる齡を

同日上御所 當座五十首

杜新樹

夏木立春あきならぬもりの色をいくたと計り誰かとはまし

郭公

やかてはやふりぬるこゑは時鳥忍ひしよりや世にもれに劔

里蚊遣火

をちかたの里のかやりの薄けふりたてそへぬまに暮る空哉

鶴川簀

うかひたつまつらの鮎の上りせも見ゆはかりなる篝火の影

寄楠木戀

山人のみほのそまとりとりもあへすひくを心と戀やわた覽

宿虫戀

夏虫のもえはてつへき思ひゆへなをきえやらぬ程や見え南

寄鏡戀

はし鷹の野もりの鏡しるへせよ見ればそよそのこともしる

寄衣戀

見るめをはかけゝる物をあま衣さのみや人を恨わたらむ

田家風

もる人もしはしまとろむ小山田にひたひくはかり秋風そ吹

羈中雲

けふははやよこをる雲をわけ越て跡にそみゆるさやの中山

海眺望

わたの原うすきよそめをなをかけてうかふ計りの淡路嶋山

十六日眞實坊もとよりしろきうりを一たひたりしによ

みそへて侍し。五月雨にこまのわたりのうりつくりひ

とつなれとも君かためとやと侍しに返し

露深き駒のうりふの五月雨に誰かはかゝるつらをみすへき
廿一日道場會

簷菖蒲

茂り行簷のしのふをかき分てけふそとはかりふくあやめ哉
江夏月

思往事

にこりなく涼しきものはみさひ江の玉に曇らぬ夏のよの月
和歌の浦に哀きえにしうたかたのなき數そへてぬる、袖哉

當座

朝更衣

花ころもけさのもぬけを夢そとは如何したはむせみの羽衣
摘葵

鵜川簾

願ひこしかたならす共諸かつらかけよみあれの同しかさしに
河しまの水のなかれをさかのほるほとよりよとむ篝火の影

故郷橘

里はあれて人さへふりし袖のかを猶きき殘すやそのたち花
曉雲

あけぬとや人もみつらん東雲の雲よりみれば山かつらして

六月十日久我殿風呂之次三十首

浦夏月

亭主出題

夜半に出る野坂の舟もみしまゝにゆかてそ明る夏のよの月

隣家瞿麥

花はよもおりてもやらしちりをたにすへしといひし宿の常夏

橋螢

あけてみぬをのかひかりも岩橋の夜のま計りと飛ぼたる哉

不同心戀

うけひかぬ中とはみれとくるかたを猶身に頼む浦のあみなは
來不留戀

無返報戀

立かへる磯への波のうつせ貝われのみ今も身なくたきつゝ
をのつからつけゝる迄の玉章はかける葦手のよしあしもなし

野亭閑談

はし鷹のすゝの篠屋の狩にてもとへはそ語るかゝる住居を
仁義禮智信五常 此時出之

禮

親を親と思ふひつしのひまをたにみえける道は猶そたかはぬ
智

智

ほたるをも雪をもおなし窓のうちに見しや心の光なるらむ
廿三日眞覺上人のもとよりつること申うりをたひたりしに

か

せものとかなれとて鳴はつるの子と侍し返しに
わかの浦に音をなく鶴の此世迄かけても波の行衛やはみむ

廿六日柳原當座十首

夕立雲

ふる程になれはいつとも晴まなくみえてそかゝる夕立の雲

河夏秋

みたらしや月日と友に暮はつる夏の御秋はけふや流さむ

契待戀

眞木の戸をさゝぬはいひし末なれとふけて頼まむ契ならぬを

思往事

いはてたゝさて社すきめ思ふ共さのみしのはん昔ならぬは

七月六日注之大塚庄之事御執奏事二條殿へ申侍し狀の
おくに

ひけはこそ君をもたのめしつむへき程をな捨そわかの浦舟
と申侍しをほとへて又おとろかし申てはへりしに武家
時宜無三子細之由仰られしつゐてにかの御かへし。今
さらにひくさもいはしときにあふ風そたよりのわかの
うら船と侍しに御返し

今こそは風のたよりもしら波のあとに道ある和歌の浦ふね

七日此事已に萬里小路中納言御執奏のよし承侍しつ
ゐてに。心ひく道のしるへもうれしきははやしほかな
ふわかのうら船。又たなはたのけふのこよひをためし
にてかきりもあらし行末の空と侍りしに御返しに
思ふ事みち引しほのかなふよりしるへ嬉しきわかのうら舟
たなはたの契にかけて思ふにも君そよゝむ行末の空
同日松田張行七十首 愚身出題

七夕

めぐりあふ月のみ船のみなといてにをひても涼し天の川風

七夕河 此題依露著出

七夕のまちにし袖のなみた川けふはあさみにみをやひち南

七夕庇

まれにくる秋や夏やかたひさしかたきよるへのあまの川波

七夕床

まつよひの露の玉ゆか打はらひなをたなはたの袖やぬれ南

七夕塔

あしかきのまちかき中もある物をうとき契のほしあひの空

七夕桐

落そむるのきはのきりの一葉たに秋とそいそくほし合の空

七夕柏

けふは又みつの柏のうらまてもとはてや頼むほしあひの空

七夕山鳥

山とりのひるみる中の契には一夜もまさるほしあひの空

七夕墨

するすみのそのふちしろに秋かけて絶ぬなぬかの梶の玉章

あふ事をまつにかけたるふちしろの墨のなしるき梶の玉章

此墨歌後直之。

七夕筆

秋にとるかちの七葉とみゆるより露に染たる水くきの跡

七夕笛

千々の秋ときこゆるからにふえ竹の一夜もとをき星合の空

七夕矢

あらちおのおへるかるやのうはさしもけふ七夕にぬきてかすらし

七夕布

星合のけふのこほりにほす布のほそくやをりて我もかさまし

同日詠進 禁裏七首

七夕

秋風の立ていくかとかそふれはほとなきけふの天の川なみ

あきにくる露の玉はしかすそへて渡る夜しるき星合の空

大川いくよわたりて更る夜のさて明ぬへき程をしるらむ

やかくてこそまさるゝ物となりにけれ逢よまれなる星の光は

女いづとなく戀になれぬる七夕のあひみることも年に社しれ

彦星の迎ふる妻による船のけふはかたほにいかゝ見るへき

たきものゝひとりの煙それまでもなちてたむけに匂ふ比哉

七夕七首梶葉

衣あふことのを山すりの衣をやけふ七夕にかけてかきまし
たなはたはけふ暮ぬとや日暮の鳴つるなへに契りまつらん
川代々たえすみけるほとも天川かけにそしるきほし合の空
久かたの天の河かせ秋にはや吹こそなかの契なりけれ
舟こひ／＼てけふとりむくるおも梶にをひてを急ぐ天の川舟
彦星のけふくる秋の秋衣をわかはたものとまつやかきまし
琴たなはたの手向の棚にをく琴のひきもひかすも今は逢らし
十三日浦上入道豪覺かもとよりあこたのうりをたひた
りしかへしによみそへて侍し

今社はあこたもしるきひとつるになりつゝけたる程もみえ鳧
十四日あふきの繪に相坂の關のわらやにて蟬丸か琵琶
をひきはへるを博雅三位立聞侍を書て侍しに

あるしにはとへともあはて雨風の夜半にわらやの調をそ聞
廿日高雄密乗坊宣惠法師もとよりからなしをたひたり
しによみそへて侍し。しきしまの大和にはあらぬから
なしをつねのたくひとおもはすもかなと侍し返しに
我國のたねにもあらてなるなしの常のたくひと誰か思はむ

廿六日 内裏二十首

萩風。この短冊にて書進る。面々懷紙に書進云々。所
爲各別不_レ可_レ然歟。依尋_ニ申内裏之處。可_レ爲_ニ思々_一
由被_ニ仰下_一候

籬なるおきのはまては音たてゝしのふによはる軒の秋かせ

萩露

をしかなく秋もいまはのころなれや小萩露ちる山のした風

夜虫

秋風も露も夜寒のあさちふに恨そへたるむしのこゑかな

曉鹿

山ふかき秋の夜ことのね覺をもよそにさためて鹿を鳴なる

秋夕

身にはそも今さらなにを思ふそとみゆはかりなる秋の夕暮

秋田

急つるむろのかりしほ色見えてはやうちなひくをたの秋風

山月

へたてつるかすにもうなる村雲のあとゝはあはし山のはの月

河月

はやせ河みなきる水にすむ月のなをしく物はこほりなり鳧

搗衣

今そうつ露わけきつるかり衣とを山すりもわたるはかりに

紅葉

はれくもる秋の日影のうす紅葉そめよ時雨のほとはなく共

忍戀

人まとて猶もあふせはなみた川みをにも袖のなりぬへき哉

契戀

頼ましなつらきなからの末の松またこすほと浪はみす共

待戀

しるしなき夜半とも如何かこたまし我いひかけし蜘蛛の糸

會戀

さよ衣かへす袖よりみし夢のいまうつゝにもなりにける哉

別戀

鳥のねもはやいそく夜の明暮はしはしとしたふ袖の別れそ
絶戀

恨戀

かこつへき夜かれを人に任せ置てつゐにも中の絶にける哉
うらかるゝほとを限りのくすのはに猶身をしらぬ秋風そ吹

浦松

波をさへこすゑのをとに吹そへて松のみひゝくよきの浦風

野旅

天さかるひなのあらゝ荒き風いくかを袖にふせききつ覽

祝言

さらに今吹もつたへし風なれやあしはら遠き世々の言のは
此二十首。八月二日御基の御勝負の時參上。愚作事凡不
混俗。每首言語道斷。非御批判之限。なとまで。預々
感之條。道之面日何事如之哉。

八月十二日四條道場月次會

鹿

さをしかのたつきしらるゝ袖方に又此くれもつまやこふ覽

月

ほしわふる袖のなみたを契にてなを身の秋は月そなれ行

竹

たのみなきわか行末もうきふしのしけきにしるき宿の吳竹

當座二十首

野女郎花

今はたゝおらてや見まし女郎花なひくさかのゝ風に任せて

夜虫

しはし猶こゑもよはらてきり／＼す鳴そふ程の夜寒なり鳧
里擣衣

夕鐘

手すさひといはゝいふへき里人の月待ほとなきぬたなり共
けふまての命をあすのたのみにてきゝのみきつる人相の鐘

七月十二兼日分。今日一座披露

初秋風

いふき山ふけはさせもか露なからなにそ思ひの秋のはつ風

野草花

山風のをのゝ秋はきみる人のなくてさかりのすきぬへき哉

古寺松

はつせ山やととふ花はむかしにてよその木すゑに松風そ吹

八月十五日上御所將軍家當座三十首。此題當日早旦以
濱名備中守承候間。出進畢。

水邊萩

玉川のなみと露とにうつりきぬ野路より染るはきか花すり

雲端鴈

あらし吹秋の日なからむら雲のたえまに寒きはつかりの聲

竹間月

葉わけよりもるかけしるゝ吳竹のふしみの月に秋風そふく

擣寒衣

秋さむき霜夜の床のから衣うちさへあかす比にもあるかな

雨後紅葉

下紅葉またひぬ露にしくれつるほとよりも猶いろやそふ覽

毎夕待戀

月をみぬ夜半はあれとも頼めこしすゑを頼まぬ夕暮そなき

會不遇戀

立にり又をとつれはもとの身になしつるものと人や思はむ

厭形見戀

今はうき形見のうらの藻汐草かくよるへとは何留めけむ

恨身戀

身の程を思ひしるにもたかうきになすへき中の事のはそなき

田家水

秋はつるたな井の水のみくきよりはや住のきしいほを見え行

同日夜 禁裏 三首

薄暮待月

山のはの暮るゝまで社いそきつれ出よ今宵のあきの月かけ

深夜見月

いねかてのよ寒もしるくかたしきの袖に更ぬる月のかけ哉

曉更惜月

月影のかたふくかたの山かつら雲にうらみの残るのみかは

十六日 禁裏當座三十首。大樹參上。同夜九打程に。別

當井万里小路黃門可參之由送狀候間。則參上。

遠山花

よしの山松のはとをきよそめより猶はなしるくかゝる白雲

藤交松

咲かゝる松には花をなをみせてうらはすくなき春の藤なみ

庭夏月

霜と見るひかりに急く秋の色を月よりそふる庭のまさこち

杜納涼

かけふかきいく田の森のすゝしさをとふへき比と秋風そ吹

草花露

まねくかとみれはま袖にをく露をはらひて立る花すゝき哉

野外月

さゝ葉しくゐなのゝ露の深き夜にさも袖ぬれし月をみる哉

寒草霜

さかき葉のやたひの霜のかすまでも今やみむろの谷の冬草

寄岡戀

我中はむかひの岡の草をたにしらぬゆかりと問やわひまし

寢覺鶏

いそくかとおもふれ覺の手枕にやかても鳥のこゑをきく哉

廿一日宗久坊張行。十鏡齋西

寒夜雪

やとしなき旅ねに雪をかたしきて月も夜深きにしの山もと

廿六日上御所將軍家當座五十首

竹裏鶯 予出題

世にたかきこゑそ聞ゆるくれ竹の枝より移る春のうくひす

野雲雀

野邊とをみ霞むみとりの草の上におりてはあかる夕雲雀哉

籬歎冬

やかてはやゐてそと見ゆる山吹のまかきは里のみちへ成見

早苗多

つくはねのすそはをかけて立田子やしけき惠の早苗とる覽

江夏月

なかれ江の波のよすかにおりしきて月影涼しいせの濱おき

萩如錦

まはき原露の白地をゝりかへてむらさき深きからにしき哉

行路薄

花すゝき分ゆくまゝの道のへにかへるともなき袖のあき風

曉擣衣

うちあかす数は幾夜そ唐衣しちのまろねのほとはなけれと

落葉深

そよいかに散しく庭を幾重ともしらぬ木のはの上の通ひち

面影戀

思ひ出よまのゝかや原みたれわひみし社とをき契り成とも

關路鶏

たひ人の逢坂までは夜をこめてきくよりあくるとりの聲哉

羈中友

やとなくはのへの草葉を枕そといひてたかひにいそく暮哉

獨述懷

うき程そわきてしらるゝ君か代にあひて憂へん我身ならねと

九月九日 禁裏菊十首

山路尋菊

おのゝえのくちにしあとをいつく共君にやとひて白菊の花

菊浮河水

谷川のなかれに遠きいほとせをなをせく菊の花のしからみ

菊花

咲うつむみかきのきくの白妙に雪ますくなきこゝのへの庭

菊匂留袖

いく秋そつむよりうつる袖のかも花にかはらぬけふの白菊

菊漸色々

さきそめし時よりのちの霜の色をまた染かふるあきの白菊

菊前契戀

うつろはむ心のほともしらきくの秋なき時やさかは頼まむ

菊下待戀

とへかしな菊のまかきの袖の色もはやくれはつる心盡しを

對菊恨戀

みるもうし身をあき風の吹上にうつろふきくの花のあた波

毎秋愛菊

霜をへしいそちの秋のしらかみになれぬる菊の色そゝひ行

翫菊延齡

千代ふへきよはひを花にとりそへてかさしも遠き秋の白菊

十二日 管領張行當座五十首

簷萩風

ねやちかき夜半をもしらす秋風の吹はとそよくのきおき原

川上月

あなし河をとほ山へにひゝけ共こほれるものゝ秋のよの月

湖朝霧

まのゝ浦のさゝ浪なからほのみえてけさや尾花の袖の薄霧

故郷鶉

すまはこそならへてもみめふか草や鶉の床のよゝの故郷

寄風戀

思ひわひみぬめの浦にかこちても其をとつれはよその汐風

寄原戀

さゝ枕ゐなのといふもしるき哉ふしはらうとき中の契に

寄江戀

身を盡しなをも戀ちのふかきえに今はたくちぬ程やしられむ

曉更鐘

の歌

ふけすくるよもきかかみの霜にたにひゝきは急く鐘の音哉

十三夜 内裏五十首 御短冊

月前露

なひくかとみゆるあさちの露なから月までもろき秋風そ吹

月前野

花にこそみなうつりにしみやきのゝ露をもらさす宿る月哉

月前紅葉

龍田川月のこほりのしたもみちちらても冬の色は見えつゝ

月前別

めぐりあはむ程をはさこそ頼ともまたやは月のきぬゝの袖

月前筵

うつら鳴秋社まのゝかやむしろ月にもいとゝしき忍ひけれ

月前笛

心あるあまのたきさし夜ははれて月にのみふく秋のうら風

十五日久我亭 當座二十首

薄似袖

暮ぬるかあまのいそのゝ花すゝきかへる袖まで浦風そふく

海上月

月もこよひすめる今宵かわたつ海やとよはた雲のあとの浦風

初忍戀

誰にいまとひてかをかむ涙川けふよりかくる袖のしからみ

不會戀

こひしなぬ命のまゝになからへてつらき心の限りをやみむ

名所松

船よせし神代のなみのいろゝをみとりに残す辛崎のまつ

十七日久我亭 當座二十首

暮秋露

霜こほるあさちか上の露にたに秋のかたみは残しかねまし

暮秋虫

鳴よはる恨もさそなきりゝす夜さむの床の秋のくれかた

暮秋擣衣

今こむといひしやまちて長月のありあけまでも衣うつらん

寄枕戀

空にたつちりにやあらんしきたへの枕にさのみ積りはつ覽

懷舊多

さらに猶みしかすそへてなき人の名残わすれすぬるゝ袖哉

皆以卒爾遺歌也。可憚々々。

十八日道場月次會

月前擣衣

いそきうつよそのきぬたもある物を夜寒もしらす月をみる哉

紅葉山錦

たつた姫しくれの跡にをりたてゝ露にとさらす唐にしき哉

海邊眺望

しほかまの浪よりをちを猶わけて雲にしまそふ曙の空

當座二十首

籬草花

たちこもる霧の籬の名残よりぬれて露しくをみなへし哉

故郷虫

蓬生と成にし庭のふる里にたかこむあとを松むしのこゑ

關駒迎

引とむる程とそみゆるせきの氷うつれるかけのもち月の駒

水郷葦

ひきつるゝ難波の舟のつな手ゆへしはしかたよる葦のむら立

十月一日松田宿所當座三十首濱名張行云々

初冬嵐

神無月時雨もあへぬ空よりもあらしにしるき冬やきぬ覽

浦冬月

暮るまでさえつるすまの波かせを夜半の光とこほる月かな

疑契戀

たのましといふも契は残りけるうき身にしたふ中の言のは

會増戀

から衣かさぬる夜半を待えてもうらなきなかにぬるゝ袖哉

後朝戀

ことのはをみわくはかりもなかり鬼心のやみのけさの玉章

被厭戀

鳴子ひく秋の山田の鹿なれやちかつく程をいとはるゝ身は

五日久我亭 當座二十首

夕落葉

山人のかへさの木のはふみ分てそよくともなき

池水鳥

ひろさはやたゆたふ波の隔ゆへかつかぬにほそしはし隠るゝ

雪埋竹

忘れはやあくるひかりにたゆみなて今朝迄つゝく竹の雪折

恨戀

憂ほとはいつそといひて聞せまし我身かひなき中の言のは

述懷

いかにせむしらぬさかひはいりやらて猶身にあさき敷鳥の道

七日庭のきくをおりて中院大納言もにつかはし侍し
に短冊にかきてつかはし侍し

うつろはぬ程にと思ひししら菊の花を冬にもおりにける哉
返し 中院大納言

手折ける心もふかき色なれはあたにはをかし露のしら菊

十八日道場月次會

落葉

たつ田姫冬にすみなす庵より紅葉ののきは風もたまらず

枯はつる色とみしよりをく霜のしたにすくなき庭の冬くさ

夕鐘

露きえむゆふへはいつとしらね共ちかつく物を入相のかね

當座三十首

杜時雨

さのみ世を歎きの森の村時雨たゆむひまともぬれぬ袖かは

橋上霰

駒わたすせたのなかはしさゆる目にとゝろくはかり降霰哉

田家雨 稻たはねをうちかへしてはしたる
をさかをと云なり

山かつのをしねさかをりほしあくる程に日影の何しくる覽

名所瀧

尋はやくたをとひしたよりにもなをみぬかたの布引の瀧

旅泊浪 松田許にて書之

浦風のためりもかはるよひの波までうとき夢の通ひち

廿日松田本安なとあひともなひて仁和寺の權資僧都坊

のもみちにまかりて侍りしに當座卅首に

時雨雲

浮雲のたえまの目影それなからもりてくもらす降しくれ哉

尋網代

月影はいさよふ程になりぬ共とはてやゆかんうちの綱代木
閑上霰

木の葉ちる閑まおろしはしつまりて更に降よの霰をそきく

寄坂戀

思ふ事なるみもしらすしほみ坂我ゆへからき中のへたてに

寄虫戀

しらせはや猶身は人にひきまゆのくのはかくれ思ふ心を

名所松

有注

和歌の浦の松のふるきの跡にきて猶ことのほの色をみる哉

廿三日本阿張行當座三十首

檜原霞

きのふまで曇らす見えしまきもくのひ原をこめてたつ霞哉

五月雨久

楨のはのこけも今こそ生ぬらめをすての山のさみたれの比

鵜川箒

かゝりさす田上河の山かけはすきても猶やゆふやみのそら

靜見月

秋かせのふけ行まゝにすむ月のかけを心になしてみるかな

寒草處々

〔上歌〕

冬枯のへのえもきのむらゝに霜もたえゝ結ほゝれつゝ

寄舟戀

みを浦の蟹のはしふねむやひきてこかれもやらす戀や渡覽

寄鐘戀

契こし心のすゑにひゝきゝていまはとたのむいりあひの鐘

寄琴戀

手なれにしかたみの小琴ひき別れあらぬ調に音をやそへ猿

行路市

わきてわれとふともなくて大和路に立てしみわの市をみし哉

廿四日松田張行樹玉庵歸洛題源房一座

雨中落葉

染はてゝ散ける木々の紅葉ともけふの山路の時雨にそしる

氷留河流

せくと見し程よりもなを音羽川つらゝによはる瀬々の岩浪

惜別戀

きぬゝの袖の移り香よそ迄はしらぬ名殘を慕ひわひつゝ

廿七日大方張行當座二十首

篠上霰

松田經資義理等參入

たまりえぬ霰なからに吹ませてをさゝにとまる風のをと哉

夕鷹狩

きゝす鳴夕かりをのゝ入日影今ひとよりはあはせてや見む

立名戀

しるときく枕の外の塵とてもさてたちやまうき名ならぬを

被忘戀

今そけに残るとはしるあはてけにはなれし程の人の面かけ

寄神祝

みかきけるものとそみえむ玉津嶋たゆたふ浪の程はあり共

群書類從卷第二百四十

和歌部九十五家集十三

亞槐集卷第一

夏日同詠百首應 製和歌

正二位行權大納言臣藤原朝臣雅親上

春二十首

立 春

こほりとく池のさゝ浪今朝みえて水なき空も春風そ吹

山 霞

まさかきのかをかくはしみかく山に立や霞のあまの羽衣

海邊霞

行船の波路へたてゝかすむなりをしてる宮のあとも遙に

鶯

春來ぬと人たにいはぬ山里にはやくそつくるうくひすの聲

野若菜

若菜つむ袖はぬれつゝ春日野やしのふにはあらぬ雪の亂れに

梅 風

軒ちかみたゝ香はかりにさそひ來て長閑に匂へ梅の下風

柳

今そあかぬまゆにこもれる青柳の春のけしきに打なひく比

春 月

雲やまたそれともみえす迷ふらん思ひしよりも霞む月哉

春 雨

つくくゝと我ころもてもほしかたく霞にくらす春雨のそら

歸 雁

いとせめてよる歸るらむふる里のこひしき時の衣かり金

早 蕨

岩かれにのこる薄をつかねをにたえゝもおるはつ蕨哉

裁 花

つきて咲花の心をとにかくにかねてそうふるあかぬ餘に

尋 花

ちきり置て思ひこそたて花あれは入し山路のこそ含りに

盛 花

あらし吹春の朝けのみねの雲なをこりゐるは花さかりかも

挿頭花

狩人もあかね陰とや交野なるなきさの花の枝をおりけむ

落 花

ちらすとて古郷人の來て見しも歸るよし野の花そかひなき

苗代

歎冬

藤

暮春

夏十五首

更衣

葵

待郭公

郭公遍

菖蒲

橘

五月雨

夏草

小山田もけふはうるほふあめつちの心かはして種やまく覽

いはぬいろと名のりて咲る山吹の籬はましる花もなきころ

さく藤の花のしなひに吹むすひ松にもよはき風のをとかな

あたら世の花ものこらす春くれてわつかに霞む有明の月

色も香もかふれはつらし散とみて有へきものを花そめの袖

むら雨に暮る日かけは見えわけて露にかたふくあふひ草哉

うちわひてぬるほともなく時鳥めをさましつゝさらに社まで

ほとゝきすをちかへり啼明かたは猶うとまれぬ短夜のそら

五月まつやとのいつみの水清みしけるあやめの色をすゝしき

いつよりか庭も木立もふるさとに軒端うつもれ匂ふたちはな

草つたふ雫もおちて岩そゝくたるみ言そふ五月雨のころ

かりにくるおのこたになき夏野哉いとゝ深草道まとふまて

夏月

蚊遣火

螢

池蓮

夕立

納涼

六月杪

秋二十首

早秋

七夕

萩

萩

女郎花

出るよりかつみなからにしたはれてしつ心なきみしか夜の月
たつ煙さなから千賀の鹽かまのからき思ひに蚊遣たくみゆ
ともし火に身をやく虫のはかなさをよそけに見ても行螢哉
ぬきとむる池のはちすの糸はあれと浮葉の露そ玉と亂るゝ
雲おほふ空のみたれの程もなく日かけ見えそめする夕立
涼しさにふみからすまでかよひ來ていとゝ夏なき森の下草
しるしらすけふば川邊に小車のひく手あまたに流す大ぬさ
秋にしもかさねぬ袖は涼しさのことはりしるき初風そふく
まれにあふ契りうき木の朽ぬ名を天の川せにいつ流しけん
今さらにうきゆふへかな萩のはにうへし春より待し秋風
見せはやな立田姫にも眞萩原時雨のそめぬ秋のにしきを
をみなへし野守のかよふ道にしもなをさはり有名にや立覽

叢虫

なきあかす草の原をはとはしとも思はぬ誰をまつむしの聲

初雁

萩のうへの露もいかにと思ふ夜にくる初雁の聲をそへぬる

田鹿

これをさへいとふならひよ小田守のなくさみぬへき鹿の聲哉

秋夕

おりも時も心あらはやかこたまし思ひそ秋の夕くれの空

山月

雲のちり雲の上までおさまりてはこやの山に月そさやけき

橋月

明行をかきりの影もいは橋によな／＼おしきかつらきの月

浦月

月見つゝとてもあかしの浦波に嶋かくれ逆行舟もかな

社頭月

君をまもる賀茂のやしるに宮人も都のかたの月やみる覽

古寺月

月そすむにしより出しこの寺の清くすゝしき光かはして

曉鳴

あかつきの涙のかすも百羽かき鳴たつ澤やかたしきのとこ

掃衣

うらみてもとふ影見えぬ月草のたかすり衣うちすさむらん

河霧

たかせ船うきていつくに迷ふらん立川霧の深きあさけに

菊

花の上のひかりやそふる葉に置てきたかにみゆる菊の白露

紅葉

名もしらぬ秋の太山の木々のはも人こそとはねいろ深き比

九月盡

立かへはあすものこらし行秋のかたみを露の袖にをくとも

冬十五首

初冬

みよし野の山かせはけし神無月いふ計なる春もしられて

時雨

なかめわふるこゝろの空を夕時雨むなしき色に染て過なり

落葉

あれまさる葎の宿の木からしに散しくものは落葉也けり

霜

日にそへてもとくたち行冬草におもくもみゆる霜の花哉

寒蘆

霜かれてみなと入江の舟の音もあるか無かの蘆のむら立

冬月

さえとをるねやより出てみる月に袖の氷もふかき夜のかけ

水

汲〔め〕は濁る野中の清水かけたえてもとの心にこぼる比哉

千鳥

妻とふ夜はの千鳥もさゝ波にみるめなしてふうらみてや鳴

水鳥

なつみ川山陰さしてゆく鴨やこほらぬさきに浮ねさたむる

綱代

たきすさむ網代のかゝりほのかにて明かた寒き宇治の川浪

嶺雪

うちはらひなつるとそみる高砂の雪にこもれるみねの松風

庭雪

野分してみたれし秋の花の後雪もふまゝくおしき庭哉

鷹狩

つみうへき心もしらて御狩野になれ行鷹のあかぬふるまひ

炭竈煙

深雪よりさきにつみしは炭竈の煙にみゆる爪木なりけり

歳暮

おしからぬ身におしむこそ哀なれさすかに暮る年の名残を

戀二十首

初戀

これそまよふ戀路なりける行末をあやふみなから思ひ立身は

忍戀

我忍ふおもひににたる世かたりはきかしや涙こほれもそする

祈戀

いとふゆへ哀ときかは戀せしのみそきといひて猶や祈覽

聞戀

おほつかなたまたみぬ松かうら嶋にむへ袖ぬらす波のよす覽

不逢戀

かくて我思ひきえなは人やまたあまりつれなき名を残さまし

哭戀

行末をちきる心の誰なれやあす知らぬ身を又わするらむ

逢戀

別戀

いかならん折かと思ふつらさをも逢夜にまけて言す成ぬる

後朝戀

人のせくなみたもかなし限りとや此きぬくを思ひなす覽

遠戀

おもひかね今宵もやとそ打わひし雪も夜深き宇治の渡りを

馴戀

いたつらにあけのそほ舟さす棹のみなるを袖を幾世ぬらさむ

顯戀

くちかためいふきの山の影草にむすひし露も色に出にき

増戀

あしへより満くる汐のうら風にそよとも人の思ひしれかし

偽戀

人のうきいつはりよりの我涙これもやあらぬ色にしほらん

悔戀

したひしもおなし涙のさきたぬくゐの幾度袖ぬらすらん

經年戀

なつかしきふるき枕をあたにやは年のみとせの後もかふへき

忘戀

うへてみる物とは聞しわすれ草まさしや君か宿にしけれる

思戀

はれかたく思ふおもひにたきそへてたつともみせぬ夕煙哉

片思

深き夜につかひはなれぬ鳥の音も獨なくをそ友と聞つる

恨戀

思ひくまなかりし中にいつよりか恨を深くかくしきぬ覽

雜十首

曉

老か身はねてもね覺の物うきに嬉しくあくる鐘のこゑ

名所松

としふれはいく世の人もよそへこしよはひや獨り武隈の松

窓竹

風わたる竹の末葉のおきふしに窓のひかりや晴くもるらん

山家

雲きりのしめりも深き山里ははやく朽ゆく板ひさしかな

田家

稻葉もるかり庵よりやすみなれて田つらに賤が里をしめけん

羈旅

けふはまつみやこ離るゝ道そうき鄙の野山の末はしらねと

述懷

代々の跡も其名はかりの身ひとつにうけて賢きみことのり哉

夢

あたなれや末みぬ夢のうきはしは絶て思ひをつかぬよまなし

釋教

ありときく御法の舟のこき歸り我もやつゐに人をわたさむ

祝

神もまた神にや祈るいやつきに君のきみをし守る世なれば

右文正元年爲ニ撰歌一所獻之百首也。二月中旬引接院

贈内府綱光。子時禮山納言。爲ニ勅使。持ニ向院宣畢。家之光

輝世之稱美難レ述ニ筆端。猶前後之子細別記レ之。

亞槐集卷第二

住吉社法樂百首

春二十首

立春

春のくるあしたつの音もいつしかにのとなかり鳧住吉の濱

子日

君に千代ちたひも契れ姫小松たかためならぬけふの子日に

霞

をしなへて春をつゝむと見えてけり霞の衣袂ゆたかに

鶯

うくひすの舊巢より鳴初音こそ谷には春をまつしらせけれ

若菜

つむ人をけふは野へにや待つらん雪まを分て生るわかなも

殘雪

ふみ分るあとたにきえす雪さえて春のあさくもみゆる庭哉

梅

道のへの竹の内なるしのやまてあるし床しくにほふ梅か香

柳

みかくれぬ玉藻とみえて川のせになひく柳の陰を移れる

早蕨

山人の柴のおもにゝ家つとをあはれにつくる初わらひかな

櫻

ものゝふもいとま有ときの櫻かり花より御代の盛をそしる

春雨

つく／＼となかむるうちに露おもく草木いろそふ春雨の空

春駒

花すゝきほさかの駒の春はまつわか葉になれて荒まざる頃

歸雁

こし秋の鴈の玉章返りをは誰にか忍ふかすみかくれに

喚子鳥

みやま路にはるの日くらし呼子鳥我がと行てさふ人やなき

苗代

すみよしの岸にはしめの苗代をいはひそ初るかみの宮つこ

堇菜

これもまたいかなるねより紫のいろうすくこく堇咲らむ

杜若

池水のみさひの中に花も葉も色のまかはぬかきつはたかな

藤

松かえにはひまつはれて咲藤はよそにかへらぬ浪をかけ鳧

歎冬

花さくら散にし後は籬より八重咲いつる庭の山ふき

三月盡

けふとてもめに見ぬ春をしたはめや月日を何に數へしりけん

夏十五首

更衣

夏きぬときのふにかはる風もなし薄きをしらぬ墨染の袖

卯花

賤のめかをるてふ布を花の色の（にイ）ひきてさらせるうつき垣哉

葵

葵草すたれのみかは手すさみにふるき文にも巻そへてけり

郭公

ほとゝきすいかにせよとて過ぬらんなく一聲に月を残して

菖蒲

いろ／＼の糸に結へるあやめ草老すしなすの玉のをなれや

早苗

おそくとく稻葉の風や聞えまし昨日もけふもうふる早苗に

照射

みしか夜に分入山の松の火は鹿まつほとやひかりすくなき

五月雨

さみたれはめくる月日を心あてにわくへき空の光たになし

盧橘

雨すくる軒の橘はなちりてすゝしくかほる露のゆふかせ

螢

なをもゆるをのか思ひをけつほと草葉の露にやとる螢も

蚊遣火

待いつる有明の月にかやり火の煙はかりのうきこともなし

蓮

ぬきとめんはちすの糸はあやなくて浮葉に露の玉を亂るゝ

氷室

ときわかぬ名にはたてとも松か崎夏はしられて氷室もる也

泉

むすふ手にとる計なる秋なれや月も泉に影をやとして

荒和板

ちりの身もけふ人なみの御板川神の光をかさはささらめや

秋二十首

立秋

いやましに音やそふへきあしへよりけふ吹初る秋のしほ風

七夕

天の川いつよりさてもひこほしの人にしれつゝ戀渡りけむ

萩

花もちり露もこほれん萩かえのおもくみゆれと風は待れす

女郎花

秋かせのつらき名にしも女郎花となひかむと亂れそめ劔

薄

ゆふ露のしのに露吹しのすすきほに出すとてみえぬ秋かは

荊 萱

枕にもかるかや人のひきむすひ跡みたれたる野邊のあさ露

蘭

松かえに春はみしなの藤はかまおなし木陰ににほふいろ哉

萩

ふかぬまもさすかさひしき萩原にうきをまちとる秋風の音

鷹

くるかりよならの都をわすれすやいまの雲ゐを過て行らん

鹿

こゝろをは聲きく時を思ひしる深山の秋に鹿もなくなり

露

千草なる花にさま／＼うつろひてをのか色なき野への露哉

霧

ゆきかふや遠かた人の聲はして夕霧ふかし秋の山もと

槿

うへ置て籬にしめを夕影もまたてしほるゝ花そかひなき

駒 迎

夕まくれ道たと／＼し望月の駒まつほととの逢坂のやま

月

秋の月いかにすめはか物ことのあはれをそふる影となる覽

搗衣

あき風の身にしむまゝに打すさむ衣は夜寒猶やかさねん

虫

神やきく聲うちそへて更る夜にきねも袖ふるすゝむしの鳴

紅葉

露しくれ染すはありとも紅葉葉は秋の深きに色やみえまし

菊

秋のきくうつろふ後の霜ふかみしけくもかはる花の色かな

九月盡

露になれ風にうらみし秋の袖けふを名残と猶しほれつゝ

冬十五首

初冬

秋たに草木しほれし山風のをとあらましく冬は來にけり

時雨

高嶺より雲をあまたに吹分て風もむら／＼行しくれかな

霜

かたそきのひまをそ思ふかりねする遠里小野の霜の枕に

霰

あらし吹音にこゆるはさゝのはのみやまよりふる玉霰かも

雪

冬は又ふもとの山の白妙にゆきめつらしくみゆる富士の根

寒 芹

枯はてゝわつかにのこる村芹のなひかぬ霜そきむきうら風

千 鳥

淡路嶋やまの端ちかく月更てしきつの浪に千鳥つとふイなくなり

氷

岩間ゆく水のしら浪音たえて氷はけしき河風そふく

水 鳥

我身こす波はなけれと池水につかはぬをしの氷にそなく

網 代

身なうちと思ひもしらて網代木に年なみよせて守もはかなし

神 樂

神と君こゝろやすめる赤星のひかりも聲も折にあふよは

鷹 狩

あらたかの心とりかふ山口にしるくそみゆるけふの御狩場

炭 竈

尋常のさとの煙のおくに猶ふかくみゆるやをのゝすみかま

爐 火

焼すさむよひの名残を埋火とたのむもよはき影とつゝい成にき

除 夜

折にふれ春秋をたにしたひこし年のわかるゝ夜をいかにせん

戀十首

初 戀

くるまにも餘るためしの戀草をけふつみそむる袖の露けさ

不逢戀

せめてたゝいまの命を後の世の逢にかふとも身を惜まめや

忍 戀

つゝみかぬる涙を袖にゆるさむと契らぬ暮をまたぬ日もなし

初逢戀

行すゑもまた難からんあふ坂になを袖ぬらすせき川の水

後朝戀

きぬゝにつきせさりける我涙をとつれもなきけさぞ知るゝ

會不逢戀

人つてに契りやせしとはかりも今一たひは唧つ夜もかな

旅 戀

たゝ一夜はかなくかはす旅枕いそちを経ける夢になさはや

思

我涙せきかへさすはかくはかりむねに思ひの淵もたゝへし

片 思

戀すてふならひは君よしらすとも思ふ人をは思ふ世そかし

恨

とにかくにいひつくす哉恨をばかくすをはつる心ならねと

雜二十首

曉

明やらぬ夜をなかしとて歎く哉よはひみしかき老のね覺に

松

住の江にあまりふりぬる松の年きしなる草にとふかひもなし

竹

かしこきかあとをもしらぬ山賤もうへてそ竹の陰頼みける

苦

鶴

すまてとしふる郷となる我やとや都のうちの苔の通ひ路
誰にかもあひかたらはん老の鶴忍ひかねてはよるもなけ共

山

くれかゝり明行山にむかふとき春と秋との色もおもはず
〔おたりイ〕

河

瀧津川かくやなかるゝ木々の露山の雫のつもるはかりに

野

心ありて誰かやとりなつくりをく行なやむへく遠き野中に

關

あらき風關ふきこゆる音絶て須磨の浦はゝ白波もなし

橋

いまは世にあしまに見えし水荳のあともなからのほし柱哉

海

のとかなる浦漕出るおほふねのあとなき浪も跡は見えけり

旅

おり敷てさぬる山路の椎柴に故さところふる涙もりつゝ

別

花もみちありとも時をうつさめや歸りこん日をちきる別は

山

このさとは庭に鹿ふし山ひこも近く答ふるむさゝひの聲

田

小山田やほられぬ石を庭にたて水はしらせて住るかり庵

懷

もろともに老ぬる人そなつかしき昔かたりも泣きみ笑ひみ
〔はイ〕

夢

無常

現にそかはらさりける道をおこし身を捨る共見えぬ夢路は
思へたゝ過るははやき山水にきえてかへらぬあはれ世の中

祝

きみゝは百とせすくるよばひにて世は皆人もすなを成へし
〔はかけイ〕

述懷

百草のことの葉すゑの露はかり恵かけてよ道守る神
〔はかけイ〕

右文明十一年四月廿四日爲_レ遂_ニ舊願_一參_ニ詣_ニ此社_一。三箇

日逗留之間。於_ニ神主國照朝臣館_一詠_ニ之畢_一。

詠五十首 〔和歌イ〕

春十二首

初春

くる春の色ももとりにあらはれて小松か原は雪を消ゆく
〔にイ〕

霞

さたかには霞とたにも見えわかつて常より遠き春の山のは

朝鶯

吳竹の軒の下なるさえたまで鶯なるゝまとのあさあけ

梅薰風

春はたゝつぬにもみちぬ松風も心よはくて梅か香そする
〔の風イ〕

柳

一むらのうすみとりなる柳原煙をたえぬさとかとそ見る
〔たえイ〕

歸鴈

秋もこぬ友をこし路に残してやまつおもひたつ春の鴈かね

春曉月

かすめともかねの響は高砂やおのへのしに月は埋れて

山花

咲花はかはらす世をやふるの山にうへけん時の色も匂ひも

禁中花

衛士のたく夜の煙の名残なくもらぬ花の朝ほらけ哉

落花

さそへ風心つからに散と見は花にうらみの残らんもうし

藤

み山木にそれとも分す見しかつらかゝる花にもさける藤哉

暮春

目に見えぬ春こそあらめ關守もしゐてかためよ花鳥のため

夏七首

葵

誰なへて哀ともみんなふひ草つゆはかさしの玉とおつとも

不如歸

時鳥うらみはれてもあちきなく思ひあかせる空のひと聲

早苗

いそく覽門田のさなへあけたてはせみの羽衣折はへてとる

五月雨

山川はいせきの杭もかたふきてもくつしからむ五月雨の比

夏草

深山邊を越にし後もなつくきのたかきに見えぬ道の行末

螢

ゆくほたる初めて永き夜半の空に早く傾く星かとそみる

納涼

松風は岩根におちてなかれにも枕しぬへき夕涼み哉

秋十二首

七夕

七夕のなみたや染て露しくれまたぬ紅葉のはしとなる覽

萩

うきなからいとひもはてす萩のはに心をかるゝ露の秋風

女郎花

わすれ草植そへて見ん女郎花思ひあれはや露けかるらん

松虫

行ふりに聞は松てふ虫そ鳴とふへかりける草の原かな

鹿

嶺たかみうはの空なる妻やとふ雲のはたてに鹿の鳴こゑ

待月

山のはにまつほのめかす光かなまたれて月や出んとすらん

木間月

月みんとたのむ木のまもさたまらす心つくしの軒の松風

惜月

夜もすからみるか内にも思ひ侘ぬ今より月は有明の空

霧

岩根ゆく水はをとして山本の川霧くらき秋のあけほの

紅葉

もみちせぬ横檜原には龍田姫つらき心の色を見せけり

掃衣

露霜になれたる袖も巻ほさていく夜打らん賤かさ衣

九月盡

あまをふね泊瀬のかねにけふ暮ぬしらぬは秋のとまり也鬼

冬七首

時雨

あつまの雫も落ぬさよ時雨袖をそぬらすあまり成まで

庭霜

本の色も残らぬ庭のま萩かなふる枝は霜の花となけとも(にイ)

氷

深き夜の月をも風そ吹むすふ池の心とこほるのみかは

河千鳥

明ぬるか引鹽とをき濱川に聲打かはし千鳥なくなり

雪

天乙女をしますいかて下すらんこの世のものとみえぬ雪哉

炭竈

嶺の雪かたふく月にくもるなり炭焼をのこしはしたにみよ

鷹狩

犬かひの柴の下みちかる聲にたかも木ゐなや移り行らん

戀六首

忍戀

枯はては形見なるへき玉章を忍ふあまりの思ひにそやく(思ひのあまりイ)

祈戀

ゆふ疊手向にはあらて相坂のなをや關守る神にいのらん

初逢戀

今ぞ知(る)またいつかはと思ふには新枕にもなみた落つゝ

後朝戀

きぬくの夢の浮橋たとりきて命あやうきほとをとへかし

増戀

思ひきやほのかたらひし夕附夜よをへて影の身に添はんとは

恨戀

みるやいかに靜に聞と我恨かきつくしつるかひはなくとも

雜六首

名所浦

名にそたつ神も心をとめしよりいつくはあれと和歌の浦波

山家

山水の思ひしよりも住よきにおなし流れをくむ人もかな

旅

ふるさとの軒もる月に思ひやれ忍ふもちすり露に敷野を

述懷

語り出む言の葉までもをろかにて人もすさめぬ老のあやなま

夢

はかなしや我心ひくことをみてうつゝに夢のあとしたふ身は

祝

斧くたす杣人あらは我君の御代をかはらす歸り來てみよ

亞槐集卷第三

春部

年内立春

あら玉の年のをのこる日數にもたか急くとて春のくるらん

立春

天となり地と定〔ま〕る神代よりときのはしめの春や立らん
さえくし雪けのそらも閑長にてけふ出そむる春日影哉
聖廟法樂の百首歌に

薄こほりけふとけそめつ東風ふかは池の心も春をしれとや
坂本の旅宿にて

大ひえやたかねそ霞む氷とけけふはさゝなみ春も立らん
住吉社法樂三十首歌の中に初春

春のくるけきの朝水ひとしほにまつ陰うつす住吉の松
〔一花の匂はぬ先も年こえて春にのとけき天の下哉〕

〔原本こゝより下に十首脱したれば〇を標して補足す〕
藥師法樂三十首歌に

はるのくる空はみとりの光にて世に明らけくあふくけふ哉
春の歌の中に初春祝道

四本うふる庭のまつ陰雪消てわか道みゆる春は來にけり
〔人丸の影供養とて人の申せしに初春

くりかへし春はきにけりあら玉の始め終りもなき年のをに〕
早春風

春はたゝ名にのみ立〔ち〕てきのふけふ霞む共なくさゆる山風
〔初春霞

一花もまた咲やらぬ天の下の春をかすみの色に見せけり〕
子日松

ねの日する野邊の小松の千代の種手ことにとりて歸る諸人
鷹をさへけふひきすへて子日する小松か原に暮しつる哉

〔諸人の千代を手ことの家つとや今日の子日のかさし成覽〕
霞

〔長閑なる志賀の浦風打かすみさゝ浪よする音も聞えず〕
うすくこく霞の色そにはふなる空や雲間に夕日さすらん
春のきるこれも霞のかり衣とを山すりに匂ふ野へかな
子日にはあらて年ふるのへの松もたなひかれけり春の霞に
深くのみたてる霞のみほの浦にけきは印の松たにもなし

山霞

けさみればよもの山邊の八重霞九重に立春そしらるゝ
野外朝霞

橋邊霞

わか草はまたそれとなき冬枯の野原になひくあさ霞かな
松のはのみとりのすゑもかきりなく霞みかけつく天の橋立

關路霞

逢坂の山路へたてゝかすむ也たてるやいつこ關の杉むら
松上霞

霞隔行舟

唐崎や氷し波はうちとけてかすみの下にむせふまつ風
ときつ風ふかすかすめる波の上に行衛も見えぬ玉もかり船

鶯

うちかすみ都の山はとをくして初音ちかつくやとの鶯
驚そしゐてさえつる春來ぬと人はいへともおりをしれとて
一花もまた咲やらぬ梅かえに世はみな春ときなくうくひす
谷かけにすむ山かつをふるす出て里なれそむる鶯の聲

若菜契還年

君か爲神しまもらは春日野のわかなも千世を摘んとそ思ふ
若菜
里人の家をも名をもはななかたみかたみにとひて若菜をそ摘

近江國柏木にすみ侍しときわかなの類を人のみせけれは

これそのわかなも名にもかひなきは都をよその宿の初春
住吉社法樂百首歌の中に春雪

さすかはや高根はきえてなかれ出る山下水の淡雪そふる
はるの歌の中に残雪

降つみしうへより消てたゝひとへ残るやこそその峯のはつ雪
谷残雪

かつきえてのこれる雪のふかさこそ顯れそむれ谷の埋木
竹残雪

外面なる竹や雪まとなりにけり春の嵐のむら消の音
餘寒

谷川にとけと氷はまたとちてふり出にけり春のはつ雪
山さくらおもふもとをし谷風にこほりつれなき春のはつ花

餘寒霜
かれぬへきいろとは見えぬ若草も秋よりさむき春の朝霜

水解
よし野川こほりはときつ山さくら花のひもふけ春の初風

初梅
なへて世の花にはしめの梅かえのましてまつ咲色そえならぬ

梅久薫
降をける雪の下よりにほひきて今は梅かえ色もまかはす

梅薫袖
いくたひか匂ひを袖にはこふらん花に行かふむめの下かせ

梅風
さそひ行風やうからんむめの花めに見えて散匂ひなりせは

こすのうちの匂ひなからや千里まで吹まかふらん梅の下風
もろ人の袖に匂ひをもらさしとのとかにさそふ梅の下風
むめかほるうら風吹ておほかたに見えぬ難波の春の空哉

月前梅

なかむれはひかりも花も匂ふなり月にはかすみ梅にさよ風

雨中梅

あかすなを袖につゝまん春雨に梅か香おつる軒の玉みつ
梅かえも花そうつるふ春雨のふるはなみたかきなく鶯

霞中梅

きたかにそむめかゝむかふ初瀬路や舍りかすめる春の夕暮
文安五年二月十三日内裏へ紅梅の枝をたてまつりし

に

いま手折この一枝の色香をばわきえぬ身にも猶やめてまし
御かへし

ちよの春もなをそたをらん梅かえに君か言葉の花を契れは
江州柏木にすみ侍し時つれゝなる春のころそのあ

たり見めぐりけるに梅のほひければよみ侍し
竹あめる垣ほのうちの賤のやも猶世にしらぬ梅か香とする

柳先花縁といふことを
あさみとりあかぬ柳の玉かつらかけてそ花の色もまたるゝ

岸柳

行水のさそひもはてぬうき草や枝をひたせるさしの青柳
船くたすよとの川長きちかみしはし柳の花かつらせり

常徳院かくれ給し後彼あそはし捨られし題ともにて
ある人歌すゝめ侍しに河柳
春ふかき小川のさしの柳かけかへらぬ水のあはれよの中

若草を

雪間出るいろも珍らし年こえてけふばはつかの野への若草
ゆき消る庭のわか葉に露見えておもひやらるゝ秋の淺茅生

早 蕨

山里の庭のさはらひ手を折てかそふれは又としもつみけり

春 曙

明わたる高根の花にわかるなり心つよきははるのよこくも
月残る雲のいつこも見えわかつて霞そ色にあげほのゝ空
なにのいろにそむる心そことなくかすむ計の明ほのゝ空

浦春曙

かすみ行この鹽かまのうら船のいつはあれともはるの曙

春 月

いく夜われ月にちかつく浮雲もしらて霞をかこちあかせる
はるのきるよるの衣のうす霞月にうらみをかされてそみる
おほるなる光につけて夜はの月深き霞をさたかにそみる
ほのかなる月や霞のみをつくしふかきしるしのみゆる影哉

濱春月

春風の吹上のはまの夜はの月眞砂も空にかすみそふらし

春曉月

春そうきさらてもうすくなる比の月影かすむ有明のそら

春 雨

たつた姫木のめはる雨降よりやこゝろにそむる行末の秋
河上に雪やのこりて春雨におもひしよりも水まさるらん

草庵春雨

野へみれは色まされともはる雨に草のいほりを軒は朽ゆく

春田雨

せきもいれすまたさかへさぬ小山田にまつ水濁る春雨の比
ますらおかみのしろころも打しほれかへす山田に春雨そふる

春 駒

勇みある世の名は立て春駒の野原にあるゝけしきをそみる
春のくるそなたの風に當りてもいはへに鳧な野へのあら駒
雪消し澤邊の水とわか草をおもふことゝてなるゝはるこま

雉

山もとや春のおはれをかり行は霞かくれにきゝす妻(とイ)こふ
妻こむる霞やはるの狩衣のへのきゝすのうらふれて啼

雲 雀

董さくのへの床にはなくひはり一夜もかれし子を思ふとて
たひ人の朝行野への芝生より雲雀も床をはなれてそたつなくイ
おりむつゝ峯のしはふになくひはり上らぬ聲も空に社きけ

歸 鴈

たえすおもふ古郷なれや春のかり時しも夜たゝかへる聲々
もえ出る草木のいろはみとりにて鴈の北にも歸る比かな(へイ)
またさむきこしの白根にむかふなりみやこのたれに衣鴈金
しるへとやこしのしらねにむかふ鴈かすめと鴈の行末の空
さたかなる聲をそしたふ春の鴈數さへ見えし月はかすみて

浦歸鴈

歸るなり春の目影をかさしにてをみのうらはの衣かりかね

田里歸鴈

人やりの道とやいはん門田よりかへせはかへる春の鴈かね

野 遊

すみれつみ小鷹ひきすへ梓弓はるのに人のくらす比かな

待花

こゝろあてに思ふ月日を大かたの契りになして花を待るゝ

雨中待花

さきなはとまたあらましの櫻かりぬれぬそつらき春雨の空

尋花

花とみて思ひそ立し太山路やあとはまかはぬ雲ゐはるかに
けふも又まかひしまゝの峯の雲おられぬ花の影やはまし
花と見し雲はおもかけ消ゆけと思ひかへらて山路をそとふ
くれなはといひて出にし花のいろにけさより迷ふ遠近の陰
はしたかのと山かたかけ長き日のくるゝをしらぬ櫻かり哉

享徳□年二月廿六日室町殿の御きたにて内裏舞御覽

ありし次三十首御續歌講せられしに花始開

千世かけて緋きそむる花の雪をめぐらす袖やためしなる覽

初花さいふことを

おもひこし花のうへより匂ふ也けふそわか身の春のはつ風
けふはなを目數かそへて庭の花かつみながらに盛をそまつ

〔愚亭の庭の花を人々見侍りし時朝見花

朝戸あけて我も見るかひあるものを花こそ人を待えたれ共〕

見花

あかすみてたゝ時のまとおもふこそ花に重ねし目數也けれ
なをあかぬ心のしほはみちかねて磯山さくら見らくすくなき

終日見花

おき出てむかひし花のあけほのゝおもかけ計くるゝいろ哉

見花觀無常

またさかむ春もたのまぬ老か身にことし植をへ花を見し哉

花

古郷のよしのゝ花はふらぬ日もなかりし山の雪かとそ見る

つふにちる花なうき世とそむくともよしのゝ外の山や尋ん
さきのよの我身たれにて契りけんあやしき迄になるゝ花哉

盛花

よしの山花はゆふへをさかりにて歸るともなき雲を重ねる
をそくさきはなの心そしられける盛りはおほき四方の櫻に
つれもなくみえし櫻の今は又枝こそ花にこもりはてぬれ

嶺花

けふ幾日みねにこりゐし白雲は花の雪けとあらしふくなり
うつり行こゝろの色もまかふ覽おのへあまたの花のしら雲
花のいろにかすみも幾重匂ふらん面影ふかきみねの白雲

山花

散かゝる色にはあらてかゝみ山くもり果ぬるはなきかり哉

〔暮山花

たかかへる家つとならんくれ行は山路の花の雪をれの聲〕

夜花

俤はくらきのきはにみゆれとも花に月まつ春のうたゝね

夜思花

かつちるをおもかけなから花の陰ねてかさめてか山風の音
ねぬる夜もめはさめにけり夕くれの花の匂ひを俤にして

交花

けふいくかかさしにをしき山櫻おらて袂をかはしきぬらん

挿頭花

山櫻ちるならひをは恨きてあかぬかさしに折もあやなし
かくれえぬ老の心をわすれすはあたら櫻をたをらましやは

〔花下忘歸

くれなはといひし山への花のかけさても幾夜を家路忘れて」
花慰老

見すはいかにみるも苦しいひしよの花の陰迄思ひしれ共（るイ）
故郷花

花見にとまつこし人があるしにてとふこと絶ぬばるの古郷
胡蝶のみ春の園もるふるさとは散よりも猶おしきはな哉

野花留人

あまの川花をやとかす人にしてあすもかたのゝ櫻かりせん
おもへばや野への櫻も色に出てくれなはなけの情みすらん
ある所に梅櫻柳など枝をかはして庭の木立も艶に侍
るにかの梅か香を櫻の花に匂はせてと侍ることをおもひて

おなし枝にさかぬ計を梅かゝも櫻もまじる青柳のいと
三井寺金堂の花只一樹さかりなるを見て暮行ほとに
人々別れけるととき

いささらは暮る一樹の陰しめてその曉の花までも見む
仁和寺神殿のほとりの花をみて暮行ほとにやとにう
へし櫻のかつうつるふもおしくて立歸るに
とひすてゝ歸らんものか山櫻やとにうつるふ花なかりせは

惜花といふことを（すイ）

身を忘れ家路もしらてなとか思ふかひなかるへき花の行衛を
しはしまつ盛なみせそ櫻花おとるへぬへきことはりもうし
花浪

落花

やまかせに岩こすをとをひゝかせて苔のうへゆく花の白浪
あけわたるたかねの花に風過て春に別るゝよこ雲の空

はかなくて咲散花のことはりはみれ共悔しうへさらましを

落花如雪

ちらぬまの花のかゝみも春の日のうつれはかはる雪の下水
水上落花

庭上落花

にほ鳥は花にそあそふ池水の玉もの床もさくらちる比
庭のおもにうらみそつもの散花を風の宿りのしるへにはして

摘莖

つみたむるわか衣手の墨染にすみれも色をやつすのへかな
躑躅紅

雨中に庭のつゝしをよみ侍る

花のみかいろそふ苔の岩つゝし春雨あかぬ庭のおも哉
巖躑躅

ふる雪のおもかけにまたかへるまていはほにも咲白躑躅哉
〔紅にあらぬつゝしも種しあればいはほも雪の色に咲く也〕

池杜若

春の池の底にもうつるかきつはた鳩の下道へたつとやみる
款冬

うのはなの枝にこもれる籬にもまつ時しりてさける山吹
行春をこゝにこめてや山吹の花の八重かきつくる里人

河邊款冬

よし野川さくらなかれて行春もこゝそとまりと咲る山吹
岸藤

鳩鳥ものとかにみゆるいけ水にをのれ岸うつ春の藤浪

松上藤

松かえのみとりの色はことなれとかゝれる藤も春の一しほ

さく藤の波のきはきにしく風はきえていとほね松のこゑ哉
ときはともみえずよ春の末の松たかことのほにこゆる藤浪

名所藤

さく藤の花もうつろふ色によせて歸るをみれは田子の浦浪

暮春

〔梅を折り藤をかさしてしたふ哉うつれは變る春の日數に〕
何をかはいまはと思ふ老か身に花ちる春もくるゝかなしき

山風は花も残らすはる暮てさすかひはらに聲そかなしふ

いとほてそ今はうらむる山さくら花なきわか風すさふ比

ゆく春と思ふもあやし老はてゝ今は月日もおしからぬ身に

やよやまてやよひのよはの明方に横雲出てかすむ月影

花ちりしさくらのわか打しほれ春雨さひし夕ぐれの宿

なれゝてしたふに春のいかなれはあひも思はて別れ行覽

いまいく日あらはなつみの川水に吉野の花のとまるせもなし

文明十一年三月若狭國へくたり侍し時小濱瑞雲院と

云寺にて

またもこん時とところと頼めともあはれ老ぬる春の暮方

折からの名とそきこゆる春も行をのれも歸るうくひすの聲

三月盡

櫻あさの袖は花にも匂はねとあすたちかへん名こそ惜けれ

亞槐集卷第四

夏部

首夏

月草の花すり衣四のときのうつろひそむる夏は來にけり

首夏藤

雨の中におり残しつる藤かえの露もまたひす夏はきにけり

夏くれははふきあまたの深みとりうらはもわかぬ藤浪の花

わかれにし春のかたみにさく藤のかへる浪にも父や恨みん

竹亭夏來

はしにさく花はまたきに軒ちかみ竹の葉風の夏そ涼しき

更衣

こゝろをはかへぬ色とて今朝もなをひかふる物を花染の袖

羈旅更衣

われもけふうすきころもの關守にとゝめぬ春を恨てそゆく

幸餘花

ちるさくらありてうかりし春過てまた咲もやとふ山路哉

殘花在何

散ぬとて出しみ山の道かへて春にをくるゝ花やとはまし

殘花

さかぬまもいたつらにこし山さくら青葉の雲にまた迷ふ哉

新樹

道のへに散をくれたる花のえをたかためおらて誰のこし劔

新樹

しくれにも雪にもたえしときは木の梢夏しるわかみとり哉
霜の葉の色もおもはす夏木立朝露なからなひく匂ひは
なつ衣袖かけてふくあさ風にみとり涼しき若かえて哉
春は見しかすみのひまのいろたえて若葉櫻に吹風もうし

卯花

のイ

散にしそなをしたはるゝ卯花は咲さくらとも見えぬ匂ひに

籬卯花

うつき垣花の淡雪つれなくて雫も見えずさす日影かな

卯花似月

卯花をもるかけにしてひまもなきしけきの梢月そさやけき

山家卯花

うのはなのひかりはまとをてらす共しらし山賤雪のふる事

賀茂祭

めくみある神と君とのもろ心もろかつらにそかけて見えける

世をそむき侍し父のとし人の許より草紙を視のふた

(セイ)

に入てをこし侍しにそのふたに葵をまき糸にし侍し

何となく袖そ露けき今年はやよそにみあれのけふのかさしに

朝葵を

神山のあさ露なからとるあふひ誰にかさしの玉をそふらん

待郭公

おきゐつゝ待よことゝへ郭公夢にまさらてほのかなりとも

時鳥おもひねに見し初聲にめをさましてそ待あかしつる

つれなさのわか身ひとつをわかしとは思へとつらき時鳥哉

人傳郭公

われそうき人のおしまぬ初音とて今朝あまた聞郭公哉

始聞郭公

きゝふるす幾夜の夢の時鳥はてはね覺に初音鳴なり

さそなまつよしやしたはし郭公はつね過行遠のさと人

時鳥

一こゑは夢にまきれて時鳥とをさかるをそきたかにはきく

こゝろしてまちかくきなけ郭公老のねさめは猶たとる也

いかなれはなをしたふらん郭公七十年きゝしこそのふる聲

時鳥ほとは雲みの月影にわするなとたによはのひと聲

春日社參詣の時よみ侍る三十首の中に

ほとゝきす待とはしるや橋のかほる軒端に夕なかめして

日吉の社のほとりにて基綱卿いさなひ侍しかは寶藏

院といふ寺にて歌讀侍しに

しつかにて鳴音もきかん石走る瀧なくもかな山ほとゝきす

寢覺郭公を

いかゝきくいかにかしたふ郭公とははやよその人のね覺を

夜郭公

子規なく一聲のみしか夜にたか里までかとはんとすらん

雨中蜀魂

ほとゝきす鳴や五月雨降すさふ雲の迷ひのあり明の空

馬上聞時鳥

いたるへき雲ゐならねと時鳥駒ひきむけてしたふこゑかな

旅宿郭公

草枕まつかりそめのうたゝねもやかてねられぬ子規かな

早苗

遙なる田面にうへん苗なれやほとなきしめの内にとれとも

あさ衣おりたつ田子の袂にもわかなへいろのみゆる比かな

うへわたす山田のさなへ影見えて涼しくすめる水のいろ哉

をやま田の水にうつるふたつくよ影を早苗に取や添らん

文安五年十月十三日畠山修理大夫入道賢良家の障子に
四月に早苗うへわたしたるかた書たるところに

うらわかみなひく早苗にはる／＼と音なき風の見えて涼しき
「以下錯亂せり雲間夏月より夏草までの八首は下の夏
月の歌五首の次に入るへきなり」

雲間夏月

したふそよ雲のひま行影よりもあくるは早き短夜の月

浦夏月

夏かりのみしかきあしへしほ満て月にくまなきわかの浦波

名所夏月

山陰はみるほともしなつみ川鴨の羽かひの短夜の月
なつは猶よとむせもなし瀧（みい）のうへの月のみふねの山を明行

長祿四年四月十六日此蓬屋に室町殿わたらせ給ひて
題をさくりて二十首歌よませ給ひしとき

歸るさを君し忘れはいさよひの月をすしめあくる迄（みい）みん

庭置麥をよめる

庭にうつすはまの眞砂にうへ置てみるかひあれや常夏の花
秋の花にましへても猶あかす見む咲な盡しそ底のなてしこ

夏艸

春のゝにまつみし若なうつもれてあらぬ末葉のなひく夏草

端午興といふことを

あやめにそけふみたれあふ忍草あふる軒はもすれる袂も（おイ）

池菖蒲

宿ふりて水影ひろき庭の池のおも高ましりあやめ茂れる

澤菖蒲

けふといへは野田の田子さへおり立てあたりの澤に菖蒲引也

菊菖蒲

橘

五月雨に淀の川舟管をあらみけふかるあやめまつやく覽
ふるさとの軒はの草の名をとへは花橘をさそふゆふかせ

樗

あふちさく梢に移る入日かけこゝろにかゝる雲のいろ哉

五月雨

さみたれは天の川瀬をせき分ていつくも汀まざる比かな
なをさりの露こそ見るも涼しけれ草葉をしほる五月雨の庭
終日に空かきくらすさみたれのたそかれ時もわかぬころ哉
つく／＼と衣手しほれくらす哉日はすかのねの五月雨の比
雲のみそ行ては歸る五月雨に遠方のへは人かけもなし
谷川や岩こそ波は音たえてたかきそみかさ五月雨の比
ぬきかへん衣かせ山五月雨にけふみかの原袖しほれぬる

文明十七年五月廿六日東山殿御参内のつゐてに禁裏

廿首御續歌

苔のいろ露の玉しくたまかしはさみたれも猶あかぬ砌か

愚亭にて浦五月雨を

すくもたく浦の筈屋の夕煙思ひもかなし五月雨の比

夏色

さみたれのはれ行窓の竹の葉に夕日の色そぬれて涼敷

夏木

さみたれのなこりの露の玉柏葉守の神のかさしなるらん

水鷄

やすらひに出つゝ月を松の戸に水鷄は誰を驚かすらむ
夢をこそおとろかしけれ柴の戸を明よとて飛水鷄ならめや

水鷄驚眠

夢のうちにとひこし人そ横の戸をたゝく水鶏に明て出ぬる
夜水鶏

浦嶋のあまのとまやを叩く夜も明れはくゐな行衛しられす

夏月

めてこしも悔しき計短夜のつもれは月のあり明の空
夏の夜はなかはの空を行月もみなみの山にちかき影かな
月待と立やすらひしあつまやのあまりなる迄短夜の空
月はなをすむへき空をみせなから残らぬ夏の夜を恨つゝ
みしか夜の月にむかひてしたりおの長き鳥をも恨てそなく

夏艸露

なつふかき庭のくさむら雨過て花なき露のさかりをそみる

野夏草

みな月のてる日に水はかれゆけと野中の草そ滋く成ぬる
分ゆけは萩の葉にする夏衣色もすゝしき宮城のゝ露

夏天

みとりこく星のひかりはかゝやきて月まつ夏の空も涼敷

夏獸

山陰やうしひきつれてあけまきの芝生にすゝむ夏の夕くれ

夏鳥

木をめぐりねくらにさはく夕鳥涼しきかたの枝やあらそふ

夏衣

こぬ秋もうらめつらしき風たちてなく夕かけのせみの羽衣

嶺照射

峯にたく松としきかはさをしかも立別れつゝよらしと思ふ
谷川のそこにそ影をあつめける峯にまをのとしなれ共

鵜川

大井川よなまつ鵜舟かゝり火の影こそ見えぬ煙たつなり
いつのまにぬるや川邊の石間さす鵜舟の棹のなかゝらぬよを

螢

飛ほたる淺澤をのゝわすれ水思ひ出たるゆふくれのかけ
衛士のたく影にはあらぬ夏むしの哀れ思ひにもゆる比かな

住吉社によみて奉し歌の中に水邊の螢を

〔新編古今〕
池水のいひ出かたき思ひとや身のみこかすほたるなる覽

江螢

こぬ秋もよるゝみえて難波江やあしの螢のなひく浦風

蚊遣火

蚊の聲のむせふはいかにつられと煙にかふるしつか枕そ

疎屋夕顔

しつかたくりおもしもつらく咲花の煙にくもる軒の夕顔

蓮

ちるもおしはちすの糸にぬきとめよ池のうき葉の露の白玉

〔はとイ〕

雨をきゝ露みるのみもすゝしきにはちすはかほる池の夕風

氷室

氷室もる神のこゝろやとけぬ覽柴まの水のしたゝりもなき

朝またきむすひし氷室さえにけり春立風も吹とかすして

夕立

夕立のあととはとたえす鳴神の跡とゝろかす雲のかけはし

〔ふみイ〕

露たにもなこりはあらし夕立の雲よりあとの嶺の松風

夕立雲

みな月のすゑは月みぬよひかけて涼しさあかぬ夕立の空
わつかなるあしたの雲のかさなりて雨となり行々立のそら

夕立過

あつかりし日の夕立の名残有て分るもぬるき道芝の露
水上と聞ほともなし山川のなかれにつれて過るゆふ立

夕立早過

吹送るかも山陰ほともなく雲のはやしにかゝるゆふたち

行路夕立

みちのへやあとよりきほふ夕立を友とはなしに待木陰かな

綠樹蟬

なくせみのはにかはりて衣手の森のしけみの陰そ重なる

水風涼晩

夕すゝみ千世も經ぬへし宿の池の心もきよくまつかせの吹

納涼

むすふ手にいかなる水の心にて夏をわすれてイはわすれ秋のおほゆる

水艸のすゝしきあかぬ山陰におりゐてしはし駒を飼つる

松下納涼

このまゝに枕にしめん夕風の涼しさあかぬ庭のまつかね
山陰をまたきすゝしき松かせはいつれの緒より秋とふく覽

享徳四年六月十三日嵐山のイのかえての一枝えもいはす

もみちして侍るを室町殿より給はるとて枝にむすひ
付らるゝ

わきてみよ秋をもまたぬ一枝はたくひ嵐の山のもみちはイ

御返し

世にたくひあらしの紅葉山姫も君かためにそ急トイくとセイはみる

六月秋

いにしへはけふにかきらぬ御秋月さへ清き影やそへけん

亞槐集卷第五

秋部

六月立秋

御秋せん日數もまたて涼しきは秋立けふの加茂の川かせ

立秋風

一葉ちるきりの立枝に秋をはやみせもきかせも渡る朝かせ

初秋

はたさむく吹とはなしに袖とをる程はおほゆる秋の初かせ

諏訪社法樂三十首の續歌の中に

かり衣日も夕くれの袖かけておはな吹也秋のはつ風

秋の歌の中に初秋曉

寢覺して秋おもほゆる床の上にわか置初る露そ身にしむ

初秋水

もり捨て氷室の山の谷風に秋そうち出る波の初花

岡初秋

岡邊なるわさ田の末葉音たてゝまつほに出る秋のはつ風

早秋

涼しきはわきて見えぬに夕月やおほつなくも秋の覺ゆる
早秋風

夕すゝみなれし木陰に吹そめておなし袖とふ秋のはつ風
早苗とりし日数はしらすいなは山けふはまつ吹あきの初風
残暑

身にしむる程こそなけれ扇とる手にまかせたる秋の初風
早涼至

あつき日の空にまたれし秋は來ぬ驚かれぬははつ風の音
早涼知秋

袖にむかふ風より秋の心にていつしか涼し三日月のかけ
待七夕

星のまつ秋の一夜はみな人のとしをかすく送る程かも
七夕

けふに名をのこしける哉あまの川浮木のさほの末の世迄も
こよひとてしるしなけれとみな人のうち詠るや星あひの空
ものおもひなき空ときく天川なと星合の名をなかつらむ
七夕露

たなはたの涙ほす夜の手向して草の露とる袖はぬれけり
七夕琴

梶の葉に露の玉つさききたてゝかきなすことも空にうく覽
乞巧奠

秋風や空にしらふるたなはたのかす玉琴のねにもたてぬを
七夕後朝

夢うつゝけさいかならん星合の心を世人さたむへしやは
露

ふかき夜のまつ風吹てたつそなく老の袖より露やをく覽
浅茅露

ところえて茂るあさちの宿の庭露のさかりを拂はてそみる

玉かともとはぬ野分に淺茅原をのれこたへて消る露かな
このころ色にもみ鬼花もなき淺茅になひく露そめとまる
萩

萩の葉のむすふをはらふ音はして枕に露をたむる秋風
うきも今うきなくさめと成にけり夕は秋の萩のうはかせ
萩音近枕

きゝてたに身にしむ物を手枕のすきまもとむる萩の上風
萩

眞萩原なひくにつけてあたりなる草の袂の錦とそなる
露しけみたゝ一夜にも萩か花にしきの紐をときかさねけり
萩盛

秋風になひきしまゝに露ちりて花のみおもる庭の萩はら
萩露

はきかえやたゝ白妙にみし露も心のいろか花にうつりぬ
今朝みれば庭の眞萩の露そ重き野分にあらぬ秋風も哉
野亭萩露

眞萩ちる野への夕露身にしみてかり庵さむきあき風そ吹
秋植物

秋さむみ花と露とそちりまかふ風をもまたしもとあらぬ萩
草花

野へみればおはなくす花風をうらみ露に袖かす秋の夕暮
草花露

白露のをきかさねたるませの内に千草の花もこぼれてそ咲
風わたる野へのちくきにをく露の幾たひ花のいろに散らん
野外草花

露ふかみ花はむもれて野へはたゝ色の千種の玉をしくころ

薄

岡のへやいなをほせ鳥も花薄まねくおりにそきつゝ鳴ける〔なイ〕

まのゝ浦や汀もそこ見えわかつて尾花咲波秋かせそふく〔なイ〕

薄似袖

くるゝまでまねく尾花の袖見えて遠方のへは行人もなし

苧 萱

百草のませゆふ庭もかるかやの葉〔はイ〕にをく露そ猶亂れける

槿

夜もすからつゆにむもれてねくれたれの花の槿あかぬ色かな

籬 槿

花みんとおもはぬしはの籬をもうつむはかりにかゝる槿

戸外槿

松の戸のときはの陰はしはし猶あさ日かくれに残るあさ良

文明十一年按察使〔理長〕もとよりしろき槿の花を硯笥の

ふたに入てをこせて

數ならぬかきほもしらてみせはやと思ふ心やあさかほの花

返 事

いまそみるやとの朝良夕つゆに紐とく花のいろに咲けり

稻 妻

いなつまのひかりの間にそ白露の草葉に宿る程も見えける

さゝかにのくものふるまひ顯れて軒のしのふに通ふいな妻

よるひかる玉にはあらて小車のかよひち遠くてらす稻妻

初あきの夜半の木かくれ里人のすゝむもみゆる稻妻の影

秋 夕

露もまたわすれす袖をたつねけり七十なれし秋の夕暮

春の風にひらけし花もとゝまらて桐の葉かゝる袖の夕露

うき秋を萩ふく風にとはすれは空にゆふへの雲そこたふる

文安五年九月十八日内裏月次五十首御續歌におなし

こゝろを

夕くれの秋のこゝろを心にて草葉も袖もわかぬつゆかな

秋とふく不破の山かせ軒近みせきもる人もゆふへ悲しな

尋 虫 聲

我ならぬたれをかさても松虫のねたくとへとも忍ふのへ哉

虫

あかつきのねさめもあれとすゝ虫はほのなき出る夕暮の聲

すゝむしの聲は千種の花やかに鳴出る宿に月もまたれて

松 虫

さひしさはいつともわかぬ岡のへも秋は一本のまつ虫の聲

鴈 初 來

ふもとなる小田の稻葉の山こえて待としもなき鴈は來に鬼

初 鴈

〔なイ〕

露としもむすひはかへすくる鴈のなみたは涙夕くれのそて

萩のうへの露をかたしくねさめ哉あはれ夜ふかき初鴈の聲

初 鴈 一 聲

つらにをくれ友をゝくらす心をはしらす夜深き初かりの聲

月 前 初 鴈

萩のうへの露もあらはにかりかねのきこゆる空は月更に鬼

左右聞 鴈

過行もくる鴈金も波のうへにきゝてそわたるせたのなか橋

夕 鴈

おりからやかりのなみたの玉章も袖に待とる夕くれの空
田上鷹

かりかねはいなはの雲にうち侘て門田にさむき秋風そ吹
遠天旅鷹

なみたもや時雨てきぬる一むらのゆふへの雲に初鷹のこゑ
いなおほせとり

秋風はかり庵さむく吹たちていなおほせ鳥の暮深き聲
文明元年五月のころ日吉の御社のほとりにて基綱中

將いさなひ侍しかは寶藏院といふ寺にて百首の續う
たよみ侍しに鹿を

うかるへき秋に夕かせ吹たちぬおもふ妻なきしかも鳴らん
文明元年七月七日室町殿御會に田鹿

さすか又小田守しつも鹿の音のとをさかるをは哀れとや聞
春日社參詣の時よみ侍ける二十首の中に野鹿

みかりするならひもしらぬ春日のや萩の錦にをしかふす也
秋の歌の中に田家鹿

をやまたに庵もるひたの音絶て妻おとろかす鹿そ鳴なる
深山鹿

つまこひにおもひもいらぬ鹿なれや世を秋山のおく深き聲
鶉

露をふくあさちか原の秋かせにゆふへはさそなうつら鳴聲
文安五年關白家千首續歌に里鶉

里はあれてふりそふ比の露霜にかはらぬ床も鶉なく也
寛正四年七月十八日内裏月次五十首御續歌に曉鳴

よるひるの思ひの數はかきり有て明行空に鳴のはねかき
享徳二年七月廿日室町殿御會當座三十首續歌に

澤田もる秋のねさめのうき數を羽れかく鳴の音にきくかな
秋の歌の中に田嶋

露ふかき山田のほたち見えそめて鳴のはねかく曙の空
もる人の袖いかならん夕まくれ物さひしきのさはたたつ音
月前嶋

白妙に澤邊の水は月澄てまたふかき夜の嶋そ立なる
大樹家御月次會三首秋山朝

朝霧のはるゝを見ればまきの葉に露うち散て山風そ吹
秋野夕

むしの聲千種の花ののへみれば秋の暮行夕かなしも
秋浦夜

白浪のよるのなかめの末はれてあかしも須磨もすめる月影
秋のうたの中に秋田

あかすもれ小鹿妻とひかり鳴てわさ田色つく露のかり庵
秋牛

かへす田に見えつるうしの此比は稻つみ車かけぬ日そなき
秋色

しくれにはまたそめやらぬ片岡に秋をいろとる森の薄霧
曉霧

色も聲もなきなめさへ秋はおし空うち霧て明やらぬ程
曙霧

露なから霧ふきかくる秋風に籬しほるゝ明ほのゝそら
山朝霧

朝日山かけたに見えす麓よりたつ川霧のみねにくもれる
駒迎

空にすむ月けにはあらぬ駒なれと秋の最中の雲るにそ引

八月十五夜

月もまた最中の秋の名にめてゝみる人なみに數へさらめや
天河こよひをせにそ月はみる名はまたすゑの秋にあれとも

十五夜惜月

更にける我世をきて秋も月もなかはたけ行影をしそ思ふ

終夜月

秋のよも空もなかはに見る月のにしはうれしく雲霧のなき

夕月

いたつらに空の半をめくるまでみぬ影おしき夕つくよかな

閑見月

とへかしなとはゝやと思ふ人もなし憂身は月を長閑にそみる

雨後見月

秋の空しくれぬさきの影よりも雲を出行月そきやけき

老見月

かそふれは七十過てかすむなり秋の最中も春のよの月

享徳二年四月廿一日室町殿にて太神宮法樂百首御續

歌に雲收月明

秋風の月に吹とも見えぬまできやけき空は行雲もなし

月の歌の中に

幾世をか我もめくりて秋といへは月に心をすましきぬらん
人ことに苦しきものとまたすとも里をはかれす月やとふ覽
あかすむかふ月もかけをやかはす覽心の末に色は見えねと
なかめつゝ昔をおもふ袖の上に月そことゝひ月そことふる
おとこ山みねにくまなし里人や淀の澤邊に月をみるらむ

海月

みるこゝろやまともろこしいかな覽松浦の沖の月に問はや

江月

月やみる入江しつかに更る夜にあしの葉そよき舟出るをと
秋さむみうらかれそむる草か江のよさむの波に月は更つゝ
かくしこそ神代も月は住の江の松を秋風ふくる夜のそら

河月

みな川なかれぬ月もつくはねの峯より出し影やすむらん

水上月

雲のちりいけのみさひを吹分て風のまにゝすめる月影

湖上待月

曇りなき鏡の山にほのめけはかねてそみゆる波の上の月

湖月似氷

氷にそたとへてはみるしかの浦や漕行船のあとのつき影

浦月

松陰のをのか篷屋をうら波のよるゝ月にいつるともふね
天つかせ雲のみほより吹そめて月かけよするわかのうら波

嶋月

あはれ共思はぬ海士のみるめさへをしまの波に更る夜の月

月前秋風

あまつかせのこらぬ雲に吹はてゝ月の身にしむ影さそふ也

秋月勝春花

二月の花もおよはしくれたゐのかつらの影のひろき哀れは

月前薄

秋かせにもるゝ尾花の露とめてまねかぬ袖を月はとひけり

月前女郎花

花のいろはあはれたさへてみるはかり月影てらす女郎花哉

松間月

雲はらふ峯のあらしは軒に落てなを月くらき松の下庵

古寺月

石の室苔のとほその露の上に高野の月そかけ靜かなる
すみのほるよ川の鐘の聲の内に月はにしなる嶺に落つゝ

山家見月

うかりつる世のすさひにも契をきし月のわすれす飛み山哉

秋月入簾

しつ（カイ）のやの軒もみしかき蘆すたれ隙もる月はおくも隈なし

庭月

秋かせのはらひのこせる露さひて月しつかなる淺茅生の庭

有明月

めてきつる光のほとは有明の月のわつかにのこる比かな
つらかりし山のはとをく成はてゝ空にそかゝるあり明の月
よひのまの夜をなか月とかこちてもいく有明の月をみつ覽
告わたるゆふつけ鳥の尾上にもかゝらて月のおくころ哉

已入月

空に残るひかりそうすき山の端に入ぬる月の影や行らん

擣衣

さよ衣（新古今雜上）きてかたしく露の袖思ひやうち明すらむ
長月の有明の月に秋更てうつ音さむし麻のさころも
よなゝの月も有明にうつるまで花すり衣露にうつころ
長月や夜寒の月はかたふきてきぬたの音を空にすみぬる
名所擣衣

萩か花うつるふころのすりころもとふ火の野守今やうつ覽

海邊擣衣

とまをあらみ秋風さむき浦浪にうつ音たくふあま衣哉

故郷擣衣

砧さへうちよはりつゝ露霜もふるさと寒き秋のあはれさ（カイ）

秋夜

萩に風まくらの下にきりゝす秋はなかゝ夢そみしかき

秋夜長

かきりある思ひの数もいかならん八月長月あけやらぬ夜は

野分

をしかふす跡たにつらき秋萩のにしきをしなみ野分立ぬる

山菊

見てのみや山路に千世を送るへきいさ折とらん白菊の花

谷菊

春こそははるもよそなれ白菊の秋をは谷のものと咲なり

黄葉

うち出ん春のはつ花もほと遠しはしは匂へ菊の下みつ

柞紅葉

ときは木にかはるはかりのけちめみせ時雨も待ぬ露の下染
くれなるの深きはまたきした染もかつゝあかぬ山の色哉

紅葉

そむれとも千入はみさほ佐保山の秋の色をもふる時雨かな
（を色にイ）

紅葉

ねくらとふ鳥もゆふへやわかきらん林のかげの紅葉てる比

紅葉

にしき木のもみちの千束立田姫誰につれなくたしはつ覽

霜のたて露のぬきにもそめはてぬ程を梢はにしき成ける
いかにしてもみちはふかく成ぬ覽色有としも見えぬ時雨に
いたつらにしくれとをみるくれなるの色染つくす秋の梢は
（るイ）

唐にしきたゝむとそみるうすくこくかさなる山の峯の紅葉は

岡紅葉

水くきの岡のこすゑを色とるやえならぬ秋の時雨なるらん

松かえのならひの岡の下紅葉いたつらなりし時雨なりしを

瀧紅葉

山ひめの瀧のよとみをかくすかと紅葉のかさしさす高根哉

紅葉映日

かたみにや影かばすらんくれなるの鏡にむかふ峯の紅葉は

紅葉移水

紅葉葉のかけもなかれす大ぬ川ちらぬ稍をしからみにして

草庵紅葉

もみち葉の色そふころの草の庵にもるもうれしき露時雨哉

紅葉深

そめつくすのちは何かは色そはんもみちにあやな露も時雨も

こゝろをそ染かさねつる露霜は限りをみする木々の紅葉に

霜 文安五年九月十八日内裏月次五十首御續歌に紅葉帶

霜

さすか猶うつみもはてす紅葉はをまたはつしほに返す霜哉

文明六年九月十五夜江湖柏木に住侍し時春日社參詣

時亂世によりて道すなほならぬ折にてしからき龍泉

寺といふ寺にやとりてよみ侍りし

もみち葉（をイ）

もみち葉のひかりに分し影暮て月にそ明す三山への宿

同年九月廿九日柏木郷より蒲生郡新熊野へ參詣の道

すからもみちの盛にみな人歌よみし次に

もみち葉をあかちになしてつれもなき松こそ山の錦也けれ

思ふとちきて見んことや稀ならん山はとしく紅葉する共

惜秋といふことを

袖の露もなにそはかたみしたへともあひも思はて秋の暮行

暮秋

行秋のかたみまつとてふくるまで月の影みぬ長月のそら

暮秋興

うちしくれ秋もすゑのゝかり衣立よる陰はもみちしてけり

暮秋惜月

いかにせん初霜むすふ草木かはよを経てかるゝ有明のかけ

暮秋風

野邊の花木々の下葉も散はてゝむへ山風の色かはるころ

暮秋霜

ゆく秋の草葉のうへももとゆひも霜より深き哀とそみる

秋もいまかへるをみせて眞葛原初霜まよひ風すさふなり

暮秋虫

うらむなり尾花浪こす野分して秋さへ末の松むしの聲

九月盡

けふくれて行かたしらは秋の別れみやこ出てゝも猶や送覽

を 文明五年九月十九日室町殿百首御續歌に同じこゝろ

かこちこし夕の空もしかすかにけふは別れそうき秋となる

亞槐集卷第六

冬部

初冬

外山よりしくれとなりて冬そくる秋にわかれし峯の横雲

初冬風

はけしくそむへ山風もなりにける秋の草木は色ものこらて

時雨

夕附日やとすばかりの露もなし時雨にぬるゝ岡のへのまつ
つれもなき松にいく度かへり来て因幡の山もしくれ行覽
夕しくれけしきはかりの軒には忍ふの露の玉水もなし
染はてし色は一葉も残らしなくれよこきり山かけてふく
〔せそイ〕

時雨易過

このほとはしくると見れはさす日影いくかほす覽雲の衣手
寛正四年十一月十八日内裏御續歌の中におなしこゝ
ろを

さよ風や雲さそふらん閑の上に時雨はときをふる程もなし

しくれの雲といふことを

山にてはたれなかつく覽夕しくれさそひてかへる雲の一むら

朝時雨を

おとろきてまたつく夢の末もなし朝けの窓は打しくれつゝ

野時雨

山風のさそふたよりも遠けれは時雨そよはるむさしのゝ原

山家時雨

やま風に時雨吹まく芹すたれあみめにすかる露も寒けし

朝木枯

散のこるならの廣葉の朝霜もむすほゝれ行木枯のこゑ

夕こからし

一葉たにいまはのこらぬこからしの枝にはけしき夕暮の聲

詩歌合侍しに十月見紅葉といへる事を

神無月名にたつ春のくるゝまで初花染の紅葉をそみる

落葉

しみてなを時雨のそめし限りこそ落葉か露の色にみえけれ
まつちるや先朽ぬらん霜のはのつもとまなき庭の面かな

落葉有聲

そめはてししくれを色にさそひきて木葉窓うつ山風の音

麓落葉

山下風のさそひかさぬ麓にはつゐにもみちぬ松としもなき
〔しイ〕

瀧落葉

色もなきとなせの瀧の白糸をあらしそ染る紅葉ちるころ

殘菊帶霜

草かれの籬のかせははらへとも霜さへ散らぬ菊の一もと
秋のくさはかれたる上にをく霜をひとり色けつ白菊の花

朝霜

みし秋の千種はのこる色なくて霜の花さく野への朝風

寒草

とひなれし秋の色なき百草の花にはかれぬ野への霜かな

江寒蘆

難波江や霜かれはてゝ芦邊行鴨の羽かひの色もまかはす

寒松

をのか名にたつをともなくなりに鳧雪にしくるゝ峯の松風

寒樹交松

こからしにたへぬ梢をかはしてもまつ霜ふく色は寒けし

氷初結

岩間もるをとたえそめて遺水のこほるをよはの枕にそ聞

遺水のをとかれそめてこほる夜は淺茅か露も霜とをくらし

氷

さそふとは見えぬ嵐に岩波の花も残らすこほるやま川
かけたのむひのくま川の朝氷こまうちわたす音のさやけさ

氷閉細流

山風もさゆる小川の河くちはこほりそ水の關のあらかき

田氷

くちはつる庵のみかは氷ゐて山田は水のもるをともし

湖氷

かれ残るおはなの浪もまとをにて汀をこほるまのゝうら風

寶徳二年十一月廿七日大樹家百首御續歌に冬月

秋の露やとりは袖にかはれとも霜にかされてなるゝ月かな

同十一月十八日内裏月次御續歌におなしこゝろを

雪はるゝ庭の梢の花にいまかすまぬはるの月を（同じこゝろをい）

さゆる夜にたへて社みねかたふくけをし明かたの窓の月影

一花のちるもさなから春なれや空は雪解の臘月夜に

雲のなみこほりのきをる月もとりかねたる庭の池水

きくもさえ見るも氷りて更る夜の鐘のねたかく澄る月かけ

水邊冬月

はちす葉の朽てくまなき冬の池に月も氷にし（にこりイ）まぬ影かな

文安五年十月十日室町殿御續歌の中に千鳥

あま小舟友よひかはすうらゝに猶こゑさはく夕千鳥かな

同十八日内裏月次百首御續歌の中におなしこゝろを

しほかせに波もや高くなるみかた聲うちよする夕千鳥哉

春日社參詣のときよみ侍し二十首の中におなしこゝ

ろを

くれぬとて鹽焼たゆむ浦つたひをのれくもりて立衛哉

湖上千鳥といふことを

したにかよふにほてふ海のさよ千鳥波の上にそ妻を戀ける

嶋千鳥

こゝろある海士のね覺のいかならん千鳥鳴なり松から嶋

河千鳥

月清みなく河ちとり打咄て瀬のこゑさむき明方の空

水鳥をよめる

（新編古今）むれて立羽音そ寒き芦鴨のさはく入江はさそ氷るらん

鳴の立澤たにおつる村鳥の羽かきそへて寒き音かな

さゆる夜もかたみにたのむ聲す也羽うちきする池のをし鳥

芦邊ゆく波風さむみふくる夜に鴨の羽かひも霜やをくらん

水鳥多

こすゑよりをしむれ入る山川を嵐にうかふ紅葉とそみる

池水鳥

かのみゆる池邊にかるゝあしまには鴨の羽かひもしるき色哉

網代

川霧のはれまに見れば朝日山かけなるせゝにしけき網代木

霰

水上はこほりてたゆる岩かねに瀧のしら玉ちるあられかな

篠霰

かめの尾の山の瀧津瀬氷ゐてあられの玉そ岩ねにはちる

あられふる岩ねの小篠音たえてこほれと散や瀧のしら玉

うつもれぬ風もさえたに音たてゝ初雪寒き窓の吳竹

文明元年四月二日室町殿御續歌中に都初雪を

いかばかり太山の松のつもるらんみやこは野へのはつ雪の空
美濃國へ下り侍し時伊吹山を見れば雲たちかくして
見えす侍しか漸はれ行まゝに雪いとしろく見えけれ
はよみ侍し

雪けともしらぬいふきの峯の雲晴てそつもる程をみせける
雪の朝東山殿へ詠進し侍し

軒ちかき山いかならんわかやとのせはき庭にもまつ白雪
御かへし

さそな雪庭の松にもつもるらん軒はの山は埋れにけり
雪のうたの中に

時のまの草木にいろの匂ふかな枝より出ぬ花のしら雪
かつふるにきえし雪もたるひして横のや埋む夕暮の雪
まかきよりみなおれふしてくれ竹の末葉は庭の雪の下草

雪満群山

みねの雪猶おくふかくつもり鳧外山はみえし松のはもなき

野外雪

冬かれの色も残らずやたの野のあさちか雪の浅からぬ比

海邊雪

はらひえぬ風そと見えてよる波も雪もたかしの濱の松かえ

山家雪

山里にすまはさても庭の雪とはれぬまでも跡やまたれん

閑中雪

なをさりにゆきこそ埋め苔深みいつもと晴ぬ庭と見えしを

依雪待人

つもらはと人もちきらぬ庭の雪に心と待て誰をうらみん

行路雪

たひ人のすかたそくもる道のするみのしる衣雪はらふらん

積雪

わきて先たかかつけゝんわたむきやあたゝかけなる峯の白雪
ふりそめていつれ眞砂と見し色も埋れにける庭の雪哉

深雪

ねや寒みうつもれふしてきけは又まかきの竹も雪おれの聲
庭の山は雪にむもれて遺水のなかれを聞も谷ふかき音

松雪深

白妙にあらぬちとせの色はなを松のかたえに深き雪かな
うつめともなを松の葉のしるき哉降雪さへに散うせすして

雪埋松

風さむみ冬木のこす原はらへとも雪ふり埋むまつ長閑さ
ふるまゝに嶺の松原枝たれて木のもとさへも見えぬ雪かな

橋のえたうちほらふ庭の雪に松のみおもきよもきふの宿

目にそへてみとりも見えす松をたにする人もなき高砂の雪

かすかのゝ草のはつかの色そなき雪まもらぬ冬の松かえ

木のもとに峯のまつ原猶見えて雪よりいつる朝日かけかな

享徳二年四月廿一日室町殿太神宮法樂百首御續歌の

中に海邊松雪

まさこにもつもれは高き白雪をよそめにえやはわか松原

おなしこゝろを

浦かぜにくもりて暮るゝ松原をさたかに見せて積る雪かな

杉雪を

ふりおもる軒はの杉の下おれにこほれてふかき雪の一かた

檜原雪

行人もかしの雪をはらふらしおいの檜原の山の下道

鷹狩

はしたかのすゝの下道分過て太山のおにもかゝりぬる哉
かきりなきけふの鳥立もとひ侘ぬ忍ふの鷹の雪の亂に

鷹狩日暮

とまるへき館は見えずやかたおの鷹も手かへる岡への暮

連日鷹狩

かりくらしきのふの鳥のおち草をけふ猶たとる明ほのゝ空

爐邊閑談

老人のみちしる夜半のことはさも靜かにふくる埋火のもと

閑埋火

あくる窓のほたる計の光にてたえゝ見ゆる閑のうつみ火

冬人事

埋火の夜ふかきまてにむかひて道をおこさぬ身を歎つゝ

神樂

おりかへす霜夜のさかき笛の聲もりの嵐そふきあはせたる

八こゑなくゆふつけ鳥に六のをのしらへもすめる里神樂哉

歳欲暮

よる糸のなかなるてふ冬の日も覺えす暮るゝ昨日けふ哉

歳暮

山川にかへらぬ水はこほれとも月日なかるゝとしの暮かな

文明六年冬春日社參詣の時よみ侍ける廿首の歌の中

におなしこゝろを

やとせうき年のおはりはおしましよはや治れる世に歸れ春

歳暮雪といふことを

春かけて猶降そはん雪なれや月日はつもるかきりあれとも

百首續歌のなかに除夜

なやらふをいそくばかりに行年もおしまぬ程の雲の上人
除夜の佛名といふことを

となふなる佛のみなに小夜更て積れるつみもはるをま近き

亞槐集卷第七

戀部

初戀

契りをくならひなけれと思ひあれば詠そめぬる夕暮の空
あすやは思ひかへ覽我なからきのふはしらぬ戀路なれ共
ふみそめて袖そしほるゝ野邊の露山のしつくは分ぬ戀路も
ためしあれはうちつけなから岩かねに心の松のたねや頼まむ

おなしこゝろを(イ不此題詞なし)

いかなれは出たつあしのまよふ覽とをき所もしらぬ戀路に

始草縁戀

うくひすの宿りにかよふ花のかをけふこそ風の便にもとへ

忍戀

まよふともさのみ歎かし色に見せことに出へき戀路也せは
わけ迷ふ戀の道芝ふみそめてしのふか原の露をしるかな
たえず我思ふことゝて夢路まで人めつゝまぬうたゝねもなし
忍ふそとこゝろのとはゝこたへても落る涙を誰にかこたむ

おなしこゝろを(イ不此題詞なし)

いかにせん人めをつゝむ折しもあれ心のとへはおつる涙を
心にもあらで涙やこたへましおもひを人にとはれすもかな
もれなはとさすかに思ふ玉章に言葉のこしてやるもうらめし

いかにせんしのふもちすり袖の上の涙のみたれ限り有よを
心にもせきかへさすはわかなみたつゝむ袂を猶やもれまし
軒はもるしのふなからの月のかけ涙の露にうつす袖かな

忍涙戀

おもひをもけたぬ涙のなかれ出てなと人めもる袖濡す覽

おなしこゝろを「イナシ」

あはれともたれか白玉なへて世につゝむ涙はとふ人もなし

共忍戀

思ひ川ふかさあさゝはしらねとも同し心にうき名をそせく

相互忍戀

袖のいろのまつ誰かゝたに亂れまし同し涙を忍ふもちすり

忍親昵戀

かたみとて涙に浮ふもくつをはかへすを見ても袖や濡なん

忍久戀

我おもふ人たにしらはせめてたゝ心にこめて年はふるとも

秘知音戀

我忍ふことをいかにてかしらせまし緒をたつ程の友はあり共

寄都鳥戀

ことゝはゝ人そあやめんみやこ鳥わか思ふ心空にこたへよ

寄螢戀

あけゆけは人め思はぬ思ひかなうらやましきは夜はの夏虫

寄玉戀

しらせはやかからき思ひの鹽かひに涙の玉もひろふ袂を

夜ひかる玉とも見えはいかゝせんくらきを頼む袖の涕の

思不言戀

つれもなくむすほゝれたる心をはいつかはさても岩代の松

言出戀

思ひより餘りていつる言の葉のけたれぬ名にも立ぬへき哉

洩始戀

忍ひえぬ思ひとかねてしらねはけふより先に打や出まし

切戀

つまはやなわすれははてぬ忘れ草やすめて心またつくす共

おなし心を「イナシ」

たゝせしのちかひにかけし我命一よもかれはかひやなか覽

戀しなん此世の後の身をせめてかゝる思ひに沈めすもかな

我せくにあまる涙の玉しるもつれなき袖の中にまきれよ

不逢戀

戀偕る身をとにかくになくさむる心なかさもいつ迄の世そ

なをやうきつれなく見えし別路はしらぬ袖にも有明の月

おなしこゝろを「イナシ」

なき名にもたゝはやせめてそれをたに契り有とや人の思ふと

あふ事はかたきならひと慰めて心なかさ身そたえにける

別れてふそのひとこととうき數にあはれ加はる契りとも哉

馴不逢戀

とへかした逢瀬をとはん舟人のみなれさほさす袖はいかにと

咎言不逢戀

絶ね共いふはならひの偽をなき名になしてとはしと思ふ

寄月戀

わか袖の露かはおもひいつやとて月にも心やとすよなノ

寄山戀

寄柚戀

ひとりのみわかぬる床の山はたゝちりはらふへき松風もなし
柚人もよひやはせん思ひいる戀の山路になけきこる身は

寄野戀

まゝひては限りあるへき武藏野を我戀路とも思はましかは

寄松戀

まつたとに君こそつゐに岩ねより人たのめなる種はみせけれ

寄桂戀

有明の月のかつらよひきそふる草の名をたにかけぬ難面さ

寄衣戀

かたしきの我思ひねのさよ衣かへさすとてもみえぬ夢かは

寄繪戀

君かく手すきみならばあら海のいかれる魚も哀とやみん

寄鐘戀

けふもきゝてなかもやすると思ひ出は慰みてまし入相の鐘

寄夢戀

つらくのみ見えつる夢の面影を身の契りにそ思ひ合はする

戀帶

いつ迄か心もとけす下の帶のしたにを思ひむすほゝれまし

戀紐

心よりとけぬといかてたのむへきあばに結へる紐ならば君

寄老人戀

恥かした南にまれにみゆる星の心空なる身とはしらしな

立聞戀

哀ともいふやいかにと立そひぬそのかひまみはわかぬ々に

祈戀

神たにもうけぬちきりをくりかへし今は歎きの春のしめ繩
おなしこゝろをイナシ

契

あひ見ての後は神をも忘れしと契りも深く結ふしめ繩
うけひかて神も諫むる中ならはかけしめや悔しからまし

來世には契りたえねと祈らばや迷ふむくひにこりぬ心を
神よひけ戀しかなしとおりたつは浮田の森にかくるしめ繩

契戀

まちいつる月はふけゝり契りつる人の心の道たとるまで
ことのはを頼むはかりのなかゝに思ひ絶せぬ月日經に鬼

契

頼めしにいつの人まはしらは其くるとあくを急くはかなさ
おなし心をイナシ

契日中戀

うちつけにまはゆくさてもよしや只頼む晝まを待て社みめ

晝戀

かつらきの神やはかくるおもかけにひるね驚く夢の浮橋

契久戀

このくれといふたにまつは久かたの月日いつまで積り行覽

不憑戀

いまはたゝ人の心の大ぬきをわか戀せしのみそきにそかる

憑誓言戀

我思ひいのるやしろはそれなから人の誓ひし神もことばれ

待戀

忍ふそといひて契りし言のはをかはるにつけて頼むよは哉

頼

頼めしに時のうつるはうき宵のうたゝぬるとも紛やはせん

おなしこゝろを「イナシ」

更行にわか身おとろく鐘の音をたのめし人よいか聞らん
さよふけてとかむる犬の一聲も人まつかたに聞え嬉しき

送書待戀

覺束な我をとつれも黄昏にいかみつらんさよのふけゆく
連夜待戀

さはる事なき世なりせは偽の幾夜なくさめしめてまためや

寄雲戀

なかむれは袖そしくるゝさためなき契りに似たるうき雲の空

寄雨夜戀

つく／＼とまもる燈かきくらし獨り雨さく闇の夜ふかさ

寄雨戀

闇の上に君は聞ともよるの雨のかすなき迄の思ひやはしる

寄花戀

行末はうつろふ色にならふともせめては花の便りにもとへ

寄木戀

つれなきの色には人のならふ共名をばしらすや夕暮のまつ

寄蛛戀

とひもこは涙の玉をぬきて見せよ袖にかけたるさゝかにの糸
これもまつつまとそみつるよき事と聞さゝかにの下の軒はを

寄庭戀

幾夜さてとはれぬ床のあや庭あやめもわかす塵つもるらん

寄衾戀

夢にてもくることあらはわひつゝも獨ふすまの下に待みん

寄車戀

待わひぬしのひ車のくるまたに猶やるかたもなき心地して

若松の思ひのかけや見えさらん忍ふ夜くるま道たとるまで
待空戀

うたゝねのまどろまぬよのなか／＼に今はと鳥の空音をそ待

さゝかにの糸は軒はに露見えてくへきよあくる空も恨めし

人とはゝいかゝこたへん月まつといひし空かは有明のかけ

おなし心をよめる「イナシ」

人もまた人め忍ふと思ふまによひのま過て鳥そ鳴なる

宵のまに思ひたえなは打ねても待へきものを夢の浮はし

初逢戀

これまでもしらはとはゝや新枕なを行末の契りいかにと

新まぐらかはす一夜をちよまてと言葉のこらす契りつる哉

逢戀

忘れにき逢にかへたるうき中のやかて別れに向ふへきよを

あふこひといふことを「イナシ」

あすやまたさらに戀路にまよはまし逢を限りも偽にして

俄逢戀

風のまにおもひもかけすむすひにき軒はの萩の露の契りは

「逢切戀イ」

あはすはと思ひしものを玉の緒は別れん際も知らぬ夜は哉

稀逢戀

いかにせんよるの衣のおさをあらみ重ねても猶うすき契りを

文安五年四月十一(八)日内裏月次五十首御續歌に夢逢

戀

夢にてもとはれにけりなおもひつゝぬるてふ事を偽もなき

おなしこゝろを

おもひねの床はなれ行夢たにも猶倂をかたみとはして

こよひよりあひみぬさきを思ひねに問れし夢を覺て嬉しき

亞槐集卷第八

戀部

寄源氏物語名戀

諸人の同しかさしにまかへてもあふひてふ名をかくる比哉

欲別戀

あふこともせめて思ふにつらき哉別れにむかふ心まとひに

おなしこゝろを「ナシ」

きぬ／＼をおもふ涙をしりかほに鳥もをくれぬ初音鳴なり

いかにせん頼む夕も程そふるかつまなからのきぬ／＼の空

別戀

別路は思ひしともうかるへしさもあらぬ人の涙つれなき

岩戸明し神の代まてにかけまくもかしこけれともうき別哉

人もまた涙をかはすきぬ／＼の袖をはほさて形みにやせん

忍別戀

あはれとや人は思ひし忍ふとて我いそきつるきぬ／＼の空

念別戀

我のみのうき名なりせは忍ふとてまた深きよに別ましやは

惜別戀

きぬ／＼にくらき涙よしはしまてうき涕をせめてとゝめん

深更別戀

世にもれはまたとふましき契りゆへ別れに深きよを恨つゝ

恨鳥別戀

初音なく鳥の涙をかりそめにおきて歎しまゝのきぬ／＼

寄鳥戀

恨みわひ・鳥もしは／＼鳴よはのあけ暮まとふきぬ／＼の袖

負戀

つれなさもつゐには人そかつしるや通はすなりしまゝの繼橋

後朝戀

きぬ／＼を思ひ悩むに残りつる言葉盡して今朝そかきやる

おなしこゝろを「ナシ」

逢すはといひしに違ふ玉のをゝなからふる身と人や思はむ

今朝も猶言葉のこりて鳥の跡面影なからかきくらしつゝ

寄衣戀

いとせめて思ふやせみのから衣かへすに夜の夢はまたねと

後朝切戀

ゆふへとは契りをけ共今朝は身のきえをあらそふ道芝の露

歸無書戀

別れにし今朝はいのちのいかに共とふへき人の玉章もみす

逢不會戀

うき事のためしなりつる別れ路の俤しのおあけくれの空

いのちをそしらぬといひし行末に契りは絶つ同し世にして

おなしこゝろを「ナシ」

うかりしもたゝ一たひの別れとてこりすや人を猶したふ覽

なからへて今更なけく命こそ逢にかへたるつらき也けれ

かよひ路のたえにし後はをさゝ原一よもほさぬ袖の露哉

寄柱戀

うつり香の残るもうすき形見哉人のよりゐし眞木の柱は

寄憂戀

ねくたれのその玉かつら佛をかたみとまては思ひかけきや

寄鏡戀

はなれしといひし鏡にうつらねとけに佛の身にやそひけん

通書戀

かきやるもわか涙さへさそはるゝあはれはみるや水莖の跡

なをさりの鳥の跡とて恨しよいつかは我もかきつくしつる

顯戀

たつ名とてさのみはなとかかこつ覽たかうきにより洩す涙そ

やすく世にもれにける哉君に我しらせかねつる思ひ成しを

寄月顯戀

くやしくそ月に忘れてのほりつる思ひも袖の露のうてなに

隔夜戀

なをさりに人は思ひやしりぬ覽一夜まろねの床のけしきを

追從戀

きぬゝに恨みてあくる櫛の戸をいて、控ふる袖もはかなし

難忘戀

あふ事のかたきをゝきて忘んとしみて思ふもかなはさり鬼

尋戀

我こひの山もとにのみ迷ふかなみわと契りし杉のした道

寛正四年七月七日七十首續歌の中に互疑戀

人も父おもひかへるな行末をとにもあやふむ戀路なりせば

戀のうたの中に疑眞偽戀

契りしなをやたのますといひやらは心淺きにわれや成らむ

疑行末戀

かきりある契りそしらぬもろ友に心になふ命なりとも

偽戀

したはしと我いひしをは偽りと思ひもなさて猶そうらむる

厭戀

しりにけん人にいとふも苦しくはまして憂身に深き思ひを

被厭戀

せめて我身のとかも哉それをたにいとふを人の理りにせん

思後世厭戀

水莖にうつすむくひをみてやかく深きえにしも絶んとす覽

從門歸戀

つれもなき心のむくらさす門の露に袖ふれ歸るよふかさ

おなしこゝろを「イナシ」

月雪にとふ舟人もつれもなく門させりとて歸りやはせし

悔戀

しらて社憂もつらきも唧ちけれ悔しかるへき身の契りとは

顯悔戀

やちたひも流れし袖のみなと川歸らぬ名社かひなかりけれ

誓隱戀

つれなしやさたかにかけし神山に推しは隠れ行衛しられす

變戀

水莖の跡はさなから流れてといひしにたかふ言のはそうき

われのみそうつるひかたき世中は心の花もかく社有けれ

誰おもふ涙のしくれ身にふれて我にことはの色かはるらむ

寄月戀

かたみぞと思ひしよりそ曇り行さやけき月にさやは契りし

寄船戀

とへかした契のよそになるとよりさしはなれ行船はいかにと

寄鏡戀

心たにうつりゆかすはともにみし鏡のかけはさすか絶しを
うつるてふ人の心はますかゝみ我かけはかり残るにそみる

おなしこゝろを「ナシ」

かけをたに残さはせめて涙川人のこゝろのはなも鏡そ

借名戀

元の身や驛くにつけてつらからん黄昏時に名をはかへても

戀の歌のなかに

ぬれつゝもとふへき人の心かはそをたにくもれ村雨のそら

むくひをも人にうちそへかこつ哉歎かん爲の世に生れ來て

後の世もあはれうき身の契りそと戀てふ道にめぐり逢人

いかにせん身はならはしの夕くれに恨ても待心よはさを

いひそめし事をくやしと思ひ出は忘れはてんや嬉しからまし

それをたになひきて見えはよしや猶思ひの煙たき増るとも

等思兩人といふことを

なひかすは共にをたえね夕手遅かけて戀しきこなたかなたも

片戀

心かへする世なり共いかて我つらきけしきを人にみえまし

われを思ふ人をはしらす戀侘てあやなむくひの始とやなる

久戀

あらはあふ世に年ふるもはかなしやをのか物から知ぬ命を

年を経てなからふる身よ大かたのよかれをたにも歎く習に

寄露戀

をく露の命のいつを限りとてわか戀草もかれんとすらん

寄山戀

とこの上につもり初にしちりよりそ我身も戀の山守となる

寄松戀

昔たれたれしあれはとなくさめて心の松に千世もへぬらん

舊戀

としをふる涙の袖やあふ事のまれなるいろに出て見えまし

こりすまの波かけ衣たちかへりまた露はらふ蓬生のやと

いく年か秋はかきりのもみちをも袖にこき入て涙まかへし

忘戀

よしさらは戀をむる身といひなさん驚かす共思ひ出すは

今さらに思ひひとつともよもととはし我わすれぬをしらぬ心は

寄若草戀

つまはやと思ふに袖をぬらす哉雪間にもゆるこひ忘草

被恨戀

身のとかを心へたてす語り出は恨かほにはむかはすもかな

恨

あはれ共いふへき人の心かは憂きをもうしとよしや唧たし

いはてすきいひており／＼唧つをは恨のひまの有身とや思ふ

披書恨戀

はかなさの數かきそふる玉章に思はぬ人をうらみてそ見る

おなしこゝろを「ナシ」

あはれてふ言の葉もなき玉章に何となみたの露かゝるらむ

人傳恨戀

わかおもふ心のかきりつたへすはあらぬ恨や人に分まし

恨身戀

もしほ草つらくみゆともさそひこよ我みをうらに歸る白波

恨絶戀

絶ねともかけて誓ひし神嶋やいそまの海士の里のしるへは（こい）

互恨絶戀

暫しこそ共にひまある中ならめ言の葉さへにかれや果ぬる

寄月戀

いまこんの契りたになき身を秋の月にうれふる有明の空

寄心戀

幾たひか身をいつはりになしつ覽おもはしとても思ふ心（は）
（のい）

絶戀

はかなしや思ひ絶ても程ふるをたゝになかめぬ夕くれの空

寄硯戀

よはの床ばらはぬのみかかき絶て硯も塵のつもりぬる哉

曉戀

うちわひて今はたのまん夢もやは有明の月に鐘ひゝくなり

老戀

いかにせん涙を露にまかへてもわか身老會のもりの下草

寶徳二年三月十九日大樹家月次五十首御續歌に旅戀

わするなよさらぬ契りそ我も旅人もかりぬの一夜成とも

享徳二年七月内裏月次五十首に占戀

たのまれぬ心の占はまさしくてあはぬそ中の契り成ける

おなしこゝろを

末つるにあふよしも哉とふうらの正木のかつら長き契りに

亞槐集卷第九

雜部上

關鷄

明わたる關のとほそにうちはふきまた一しきり鳥やなく覽
なく鳥のをのかたれをかしたふらん關の戸あくる逢坂の山
あふ坂やおきなれてもる關の戸に鳥も時しる明かたのこゑ

文明元年十月五日日吉の社のほとりにて基綱朝臣い

さなひ侍しかは寶藏院といふ寺にて百首の續歌よみ

侍し中に松

夢のうちに見し松かえのいかなれは身の小高くも生昇る覽（りけい）

おなしこゝろを

いつ見るもあかぬ松かな春秋に心をうつす色はなけれと

嶺松を

夕ゐると見えつる雲も浮立ぬあらし吹けりみねのまつ原

浦松

わすれすよ芦へのたつの聲はして夕汐みちし和歌の浦松

薄暮松風

あけわたる波をかさしの玉くしけ二見の松のあかぬ色かな

竹

萩の戸はまた秋遠しことし生の竹のうてなの露の涼しさ

岸竹

れくらとふ鳥は聲して川かせもふかぬになひく岸のくれ竹

寛正元年十二月廿三日内裏御月次に窓前竹

末たかく生のほりぬる竹の葉になか／＼窓のうちを晴たる

布引の瀧を見にまかりて

山ひめの手もたゆからず織かけてさらすや幾世布引の瀧
世のうさもわするゝはかり驚やなみたにからぬたきの白玉（とく）

名所瀧といふことを

布引と名にはたてともしらきぬをかけてそ落る瀧の岩波
行てみぬみねのいつみのいかならん落てそ瀧つ布引のみつ
おりかくる高ねの雲のころもにやあまるよしのゝ瀧の白糸

名所市

檜原にもさはく聲して市人のかへるさくる三輪の山風

名所橋

朽ぬ名の昔なからにのこらすは誰かははしの跡もしのはん

庭鶴

わかみちも庭の松かけまなつるに千代をまなはん行末の爲

名所鶴

音をそなくいまもなるゝは友鶴の昔にもにぬ和歌の浦はに

三井寺にまかりける時古寺をよめる

たのもしなわかつ柚木引分しこの山寺の法のゆくすゑ

古寺路

おくふかく入相のかねの聲はしてまた門みえぬ杉の下みち

遠寺鐘

きく人も寢覺の心雲わけて尾上のかねにかよはさらめや

山家

くる人のおさまれる世と語る社山にても猶うれしかりけれ
立出てみるにそさすかあはれなるおきふしやすき柴の庵も
此山に宿りしてぬる友もかないてぬうき世を一夜いさめん
山里も世のうきよりはとはかりに住よくとても心とめしな
頼みこし山やあらぬとゝもすれはもとの身にしてすむ心哉
うきこそをきかぬも君か恵みそよたか山なれば身を隠す覽
のかれ來てすむと思ふないつかたも我大君のきみの山さと

歸るそとみし山人のしはしありてふもとにたつる夕煙見ゆ

山家苔

一たひは我が踏分つ浮世よりいりにし山のこけのかよひ路

山家鳥

爰もたゝ人はとひこす鳥のねのきこえぬほとの太山ならぬと

名もしらすみさりし鳥は近く馴てうき世に遠き深山への庵

山家人稀

いかにせん草のいほりに山鳩のよるの雨よふゆふくれの聲

友とするひとりふたりは山ふかみ有かなきかの庵の通ひ路

山家送年

いくたひかかやか軒端もくちぬらん我引うへし松の下露

谷梯

となりなき谷の下庵とふ人のあとやはみゆるこけの梯

閑居

しつかにもすめる庵かな松のとし竹のよはひを獨かすへて

浮世にはかく勝りける住るをも語らんとすれはとふ人もなし

閑居夢

人とはぬ宿はうちぬる夜はたにも現の現えて夢を淋しき

閑庭苔深

松風のちりはらふ音はしつかにて目毎にあつき庭の苔哉

幽徑苔

山ふかみ岩ほつたひのかよひ路を莓のむすまて問人もなし

鶯

姿をもみせしとやすむ筑波根にかくなく鶯のかゝる浮世は

鶯

いつくにかわたるかさゝき一聲ののちまてすめる有明の空

遠村煙

たてそふる宿やあまたの夕けふり一むらくもるをちの山本

田家水

もり捨しかりほの笕朽はてぬあせ行水も音細くして

田家鳥

鳴そたつ小篠の庵のしのゝめにあはれたへてももる山田哉

柚川筏

さそなけにくたす筏のこととはにうき世を渡るみをの柚川

樵夫

かくれかのある世もしらすしは人や山に入ては市に出らん

夕樵歌

くれけりな嶺にはをのゝ音たえて谷のこかくれうたふ樵人

湖眺望

しかの山の鐘や聞らん釣ひとのけふも暮ぬと漕かへるみゆ

さゝ波も名のみ也鳧山かけてみるめにあかぬしほつすか浦

湖上雲

しくれつる比良山おろし末見えて雲もうきたつ興津白浪

遠帆連波

をひてそとまほ引つるゝ興津舟みるめや遠き行としもなき

望遠帆

友船も思ふとまりやかはる覽きほふかた帆に漕わかれゆく

昆明池

ひこ星のかたちをうつす池水は天の川をやせきてたゝへし

李太白

水莖にさくと見し夢まさしくそことはの花と世に匂ひける

王昭君

都出しかたみなるへきまゆすみもきえて悲しき旅の空哉

琴

そのかみは五と聞し琴のをにまたかけそへしねも絶にけり

かけそへし二つのを社今の世に名のみたえせぬことと成ぬ

寄琴雅

ことのねにかよふやいつれ雨はるゝ庭の松風のきのたま水

箏

あはれ昔心ひきてし箏のをまたつとはなしに別れはてぬる

心靜延壽

をのつから心ひまある柴の門さゝすとてくる老らくもなし

披書逢青

流れての世にもかはらしいにしへのみちはきたかに水莖の跡

室町殿より万葉集のうたの詞の一句を題にて五十首

かきて奉れと仰せられしときかきてまいらすとて女

房のもとへ申遣し侍し

古の時雨ふりける言のはもこのたひさらに色やそへまし

侍従大納言實隆卿もとよりしなの櫻のかへり花の枝

にさして

まちつ(け)ん人のみかたき宿なれや年にまれなる花は咲鳧

かへし

珍らしき言のはそへて待みめや年にまれなる花しさかすは

定家卿のかゝれたる色紙をとし比持たりしをことの

故ありて僧宗祇につかはすとてつゝみ紙に書つけ侍

さまゝにあはれとをみよ今の世に残ることとはの花鳥の跡

三條相府公教公五十首歌よみてみせられ侍しにかへす

とておくにかきつけ侍し

よしあしをわく事難し和歌の浦の道に名をかる年はふれ共

返事

内大臣

わかの浦のもくつをてらすしるへ哉かゝる言葉の玉の光は

横川住侶慶嚴阿闍梨正教の文卷に勸學文勿謂_レ今日
不_レ學有_二來日_一を書たる傍に書つけ侍し

いたつらにけふくれことし暮はてゝ衰老ぬる身をや歎かん

室町殿御續歌の中に述懐

家の風老の浪とをあはれてふことたにかけは袖はぬらさし

おなしこゝろを

〔はイ〕

おろかなる心はわかすよそにても我をや人の憂身ともみる

たれなりと後しらるへき言のはのなき水くきも跡や残らん

心なくて詠こしをも誰かおしむ六十あまりのあたらし春秋

世中はさのみこそあれ疎にてうからぬうさを歎つるかな

苦しきにくるしき事はかへたくてなとかかたみに人を羨む

ことの葉の一朵もかな家の風ひろく世にちる程はなくとも

〔見イ〕

世のうさも人のつらさもふかゝらす春花をめて秋月をめて

うけかたきあたらしこの身を捨てて捨はてん社悲しかりけれ

おしへ置きゝも置つるかひそなき君に仕へん道のさまゝ

われよりもなを數ならぬ人はよもさのみ心のなきも歎かし

〔ちイ〕

物にそひこゝろの色やなくとてすみの袖にも涙落けり

せめて身をしたとやいはん愚にて世にありふるを歎く心は

獨述懐

愚なる身には等しき人もあらしたくひなき名を世にや残さん

われはかりわか君あふく人はあらしと思ふ心のおろか成覽

老後述懐

これその老の心にねかふことさすかあれ共思ひとをさて

春述懐

浮世をはいてやと思ふ折しもあれ花さへさそふみ吉野の奥

寄花述懐

いかにみる心とたにもしらぬ身にあやしやあかぬ花の色哉

寄金述懐

愚にて月と花とをいかゝ見んちゝのこかねもよしや春のよ

寄鏡述懐

朝毎の鏡はさても見るかうちに世の倂のかはらすもかな

寄道述懐

山水をかけひにうくる庵にてもものくる二のみちはわすれし

老ゆけときかぬことは花岡に心のたねよ有かひもなし

近江國栢木といふはしる所にて應仁の亂世以來お

り下りてすみ侍し比おなし國百濟寺西谷の曼陀羅

堂の前に古鞠懸あり二本闕たるをうへつきたきよし

寺僧とも頻望侍し難波一流のうへ侍る懸なりかの説

當流の説通用の事有てそのやうをそうへをき侍し

てこのかゝりうへける人誰かと申傳侍りけると尋ね

侍れとも時代へたゝりたる事にてそのめし知れる人

もなきよし申もあはれにて妙音院といふ僧坊にさし

をかせ侍し

庭の松けふうへそへていつの世の誰ともしらぬ跡しのふ也

懷舊歌の中に

世にあるをおもふこゝろはたゆめとも昔の友は猶そ忘れぬ

忍ふらんおもふも悲しおもかけはきのふをこそ夢の昔に

忍はるゝ數となるにもわすれすよ馴て聞つるわかし語は

常德院御一回に懷舊を

うかりしをこそとやいはんことし又めくる月日にちかき倂

寄月懷舊といふことを

更行は袖せはきまで月そとふ數まさりぬる昔語に

燈

消てまたをのれかゝくるともしひの光もさひし明方の窓

寄月往事

月見つゝおもひわたせるいにしへの事やねぬよの夢の浮橋

往事如夢

昔おもふうつゝの夢の浮橋はぬるかうちこそとたえ成けれ

夢

なをたのめ神の心をことのはにまさしくみつる春のよの夢

曉夢

あはれ我世は明かたに更はてゝよそけにみつる夢も恥かし

夢驚

曉の夢をはゆめとおとろくやけふも暮ぬと聞し鐘のね

草庵夢

山ふかみ人をわけこぬくさの庵あとなき夢は行かへれとも

人丸の影前にて三十首續歌に夢を

限りなく道守るへき影なれやあふけは見えし夢のかたちは

ある人定家卿影をかゝせて

供養に百首の續歌すゝめ

侍し中に寄夢無常

おとろけは心そ夢に紛れぬるむなしかりけりねても覺ても

別部

餞別

あひそふる親のまもりもなき身にはしゐて別を誰か惜まん
離別

老てゆきおいてとまるそ哀なる悲しからぬはなき別れにも

坂本に住侍し比僧宗春明日よし野の花見になん思ひ

立より申て來りしに扇をつかはすとてつゝみ紙にか

きつけ侍ける

春もくればかへりてみせよ言の葉にちらて殘んみ吉野の花

大膳大夫入道宗勳若狭の小濱に侍し比まかりて日こ

ろへて歸り上りしにひかさといふ所までしたひ來て

宗勳もやかてのほるへきよし申てをのく後會を契

りてわかれ侍ぬるにおもひつゝけ侍る

行末をとともにみやこ契るたにわかるゝ程の袖はぬれけり

返事

行すゑの都にむかふ袖たにもぬるゝになれし別れかなしも

宗勳

旅部

旅を

いてゝこしふる里へとて行人をうらやましくそ歸りみし哉

またしらぬ山のあなたを逢人にとひてやすらふ岩のかけ道

山旅

雲となる岩ねを床とこよひもや山のしめりに袖ぬらさまし

朝旅行

のるこまもいさみにけりな宿出て朝露ふませ野原ゆく程

夏旅行

石ふむもあつき河原は楸生る陰にやすらひ行もやられす

旅行友

獨ゆかは物うかるへき野山そといひ出^{（カハユイ）}すにも道そなくさむ

旅宿夜雨

くらき雨の窓うつ音に夢たえてうき限りなる旅の宿哉

旅宿夢

都おもふをさゝの枕かせたちてさやかに見えし夢は残らず

江湖柏木といふ所にすみ侍し比京へのほりて三十首

續歌よみ侍し中におなしこゝろを

たひに出て思ふゆへなり都にて都のみやは夢にみえつる

旅泊

舟なから袖うち敷てねぬる夜のうきにも馴て夢そみえぬる

うきねする枕の下の波のまにしはしそ夢をみるめかりつる

蜀旅

露霜のたてぬきなるゝ旅衣いく夜しほれていくかほしけん

幾夜われ山の岩根にむす苔の袖しきかはししほれきぬらん

みちのくの遠きたひわをすか枕とふのすかこもいくよ敷劔

たひにのみ思ひの外の年をへてみやこのかりね今そ嬉しき

蜀中野

むかしたれしらぬわれをもやすらへて野中^{（トイ）}に庵を結置けん

蜀中懷都

思ひやるこゝろのうちは日にそへて都にちかき旅の空かな

海路

松風に出るいそへのとまり舟いかなる夢に漕わかるらむ

けふはたゝのとかなるへき波路そと聞になくさむ舟の内哉

草の庵もかはらぬ舟のまくら哉とまふ軒にいその山風

舟

身のうへはたれもわすれて友舟のたゆたふ波をみるか危き^{（イイ）}

夢そなき錨おろしてねぬれとも船うつ波のすさまじきは

我ならて舟待人もなき暮にものうくよするわたし守かな

渡船

舟もはやつなきて歸る川長にわたらてこよひ宿やかままし

すみた川舟待ほとに日は暮ぬむかしもかくや都こひけむ

岸頭待舟

日暮ぬと我こそいそけすすみた川船さしかへる程ののとけさ

物名

はるたつ日

たむくるに神の恵みやなをそはるたつひろまへのきぬも豊に

きくもみち

いかにせん詠めし月もかき曇り野分入もみちくさしほるゝ

うほのな十

山をこしあめにますひをいるかとて振さけ歩む旅の辛さは

亞槐集卷第十

雜部下

哀傷部

ある人二月花の比身まかりけるに

よそへつゝ見るも悲しきおほかたの春の嵐に花のちるをも

百首續歌よみ侍しに無常

おもへた、北なる州にすむ人も千とせの後にあたし世の中
八月八日・^(ハイ)藤知院殿の七めくりの目にて提婆品捧物な
と室町殿にたてまつり侍し經の包紙にかきつけ侍る
けふはさそ七年さめぬ思ひにて半の秋の夢もかなしき
かすならぬ袖にも秋の露をく世におほひてしかけを忍て
御かへし

見し夢の分れは程もなとせのあととふけふそさらに驚く
大かたの袖たにあるに思ひやれなをこの本の露のふかさを
享徳三年正月廿九日嵯峨の崇福寺といふ所にて贈大
納言の墓所の侍しに雪をわけてまうて侍しかの在中
將の惟喬のみこをとふらひにをのにまかりよみ侍し
事をふとおもひ出て

夢とたに思ふはかりの影もみす雪ふみ分て跡はとへと
長祿四年十一月一日祖父黃門禪門の三十三回なりか
の嵯峨の墓所にまかりて

三十あまりみしそのかみの初時雨けふも幾度袖ぬらすらん
あはれなりせめてわかとふ今日の跡末の世迄の名は残る共
文明十一年の秋伊賀前司賢盛年比すみ侍し女の身ま
かりけるをあふみの柏木といふところよりさふらひ
にのほせ侍し文のおくにかきつけて侍る
袖よいかに露ける覽秋やはいひし別れも思ひしられて
かへし

袖もけにぬれこそまされ秋やはと夕の露のかゝる別れに
僧正徹十七回にかの遺弟正廣經文の歌すゝむるついでに懷舊のうたに

とふあとのまたおとろかす月日にはかへれと覺ぬ短よの夢
文明二年十二月廿七日 仙院崩御の事 明る廿八日柏
木にてうけ給りておとろき侍しおりふし風氣にをか
されて老病たえかたきころにてあくる正月にそのほ
り侍しそのころおもひつゝけ侍し歌とものなかに
色香する君もなき世にさく梅の花のうへまであはれ成哉
月は猶なみたうちそへかすむ也雲かくれにし影さたかにて
さすかみな歎しつまるほとならは遅れてきくを哀とはしれ
冷泉三位爲廣もとより顯豪僧都逝去し侍る事をとふら
ひをこせておくに

おもふそよつらなる校の下おれにさそな歎きの森の言のは
返事

おもひやれたのむかたえは空くて残るなけきの森の老木を
父の思ひにてこもり侍しに聖護院准后藤原より壽量品
を給るつゝみ紙にかきつけ侍る

此法の花のひかりにあたるてふ人はやみちに迷ひやはせん
御返し

知らめやとふにつけても後れにし跡にかひなきねのみ鳴さは
青蓮院入道内府于時師大納言實雅より淨土三部經をくられ
しつゝみかみに

しるへせしわかぬ浦はの老のなみたちも歸らてぬるゝ袖哉
かへし

君までも袖ぬらしけり立をくれはや道迷ふわかのうち波
後成恩寺殿兼良子時關白左大臣より亡父の事なけき思給ふ
ことなと消息ありて
和歌の浦に 年へて住し あしたつの をのか翅に

霜ふりて 千世もさ誰も おもへとも
秋きりの はたへを犯し 身をしほる
たれこめて つもる月日も しら雪の（くもイ）
しかすかに 年も歸れば あらたまる
たのみつゝ 猶さりととも おもひしに
きさらきの 二日の空の あけくれの
消にけり この世中の つねなさを
しかはあれと 昨日けふとは あたしのゝ
よらさりき まして歎の このもとは
なかりけめ かゝる悲しき 折にあひて
なきわふる 涙も雨も しくくと
さらにいま 思ひ出れば てるひかり
身なからに みはしの櫻 たちならし
ふみわけて くらみの山の ふたたにを
をのつから 三代の君にそ あひにける
玉てはこ 二のみちを たつぬれば
いひをきし 春のとまりの 花のかけ
みなせかは かすみの洞と なしつほの
かへすして いつゝの人に かそへしや
なりけん 流れたえせぬ かはたけの
きこゆれと あみより出て あをやきの
みことのり 降りし日より こゝのへの
つかへつゝ きよき渚に ひろふてふ
あつても いにしへ今の ことのほに
なつけしは 万代までも わか君の

歎きもしらぬ （なほイ）
あらしの風に 猶はれやうて
事をかことに こは夢かとよ
かすみと共に いへはさら也
露思ひたに さこそ言のほ
世を鶯と 世を鶯と
ふりにし事を ちかき守りの
おとろの道を きはめし迄は
我身はなれぬ 我身はなれぬ
なと白川と 山もとかけて
むかしの跡を 家のはしめと
よゝに其なは いと長き
大宮にのみ 玉のかすゝ
新たにつくと みそなわせと

おもひける いふなれは 妻木こるへき しろそくは
やつれしを 思ひつくはの かけひろき いたなみに
なつさひて わすれぬや また春秋は あすかゐの
まさぬして 玉のむしろを しきしまの 月のよすかに
あひにあふ かねる時代に あめつゆの めくみも事に
ふかければ 思ひしほとに 世をいのり 國にむくひん
ことをのみ こけの下に 思へはかなし ひとのよの 草をむすはん
とおもふらん みつせ川 かへらぬ水の あはれけに 六十あまりの
たのむらん 人なみに たまよはひ 空にたつらに 涙のつゆに
二月の鶴の林のけふりにも 君かなけきや 立まさるらん 松風のみや
和歌の浦に留る玉もかひなきは きたつ波の 返りこぬなり
御返事
くれ竹の 世々を重ねて たらちねの つかへし道は
ひさかたや 天津日影の やふしわかす てらす内にも
このきみの 仰かし（こき） いにしへに 立歸りにし
和歌の浦に おなしは 岩ほか中に すまはやと 苔の袂の
年を経て こゝのえの 猶のかれえぬ ことのほの 花をそふとて
雲の上には 月をめて 廣きうへきの

みきりには みち／＼の なけくまに きさらきや 見えしかと きゝしとき すてすてふ さつつけつゝ たのもしく うつせみの わかさりし 山かつら すゑまでも 春くれて 折ふしの 濱ちとり ふることに 見るにこそ うかふより ことをたに こゝろをは	四本の下に その一かたも さても別の つゐに朽ぬる 終り亂れす 三のこゝろの ふかき誓の 花のうてなに 思ひかへせと 空しきからに 心まとひに 高ねをかけて 怨めしかりし 雨も涙も 憂 ^な とほるゝ 跡はかすゝ 思ひよそふる 更につらさも 涙くはゝる かきも流さて さなから君も	立ならし まなひかね 限りある あをやきの 一すちに まことにて かはらすは うつるへき かへりこぬ むかひゐて ほともなく なひきつる 藤ころも ふりまさり たまつさに おほけれと 歎きさへ ますかゝみ 水くきに やま川の くみてしらなん	しるへと也し 身をとに角に 六十三とせの いとよはけは 唱へしみなを たのむ人をは 佛も御手を ことも今やと 道のならひは 夢もうつゝも 明行西の よはの煙の 立事やすく 思ひ晴せぬ せめてなくさの をゝたちける 今はかひなく また佛の 思ふ計の 岩まにむせふ
--	--	--	---

おもひやれ目數もともにとゝまらて涙降そふはる雨の空 かはかすときくもなつかしたらちねになれし計の苔の袂よ 常徳院殿かくれ給ひしころ思ひつゝけ侍る はしめなく ことほりを たのみつる それのみな とにかくに こゝぬかの まほろしの のこるらん わかの浦に しほかひに 人しれす 成はつる 七そちの かはりゆく なけく比かな	かへし おもひやれ目數もともにとゝまらて涙降そふはる雨の空 かはかすときくもなつかしたらちねになれし計の苔の袂よ 常徳院殿かくれ給ひしころ思ひつゝけ侍る はしめなく ことほりを たのみつる それのみな とにかくに こゝぬかの まほろしの のこるらん わかの浦に しほかひに 人しれす 成はつる 七そちの かはりゆく なけく比かな	終りなき世に みしも聞しも ひろき梢の 夢にまさらぬ 日數うつりて 朝のけふり 有かなきかの 馴にし事を 道を學ひて 玉もかすゝ かけし心は 哀むかしへ 餘れる迄に 習ひもかなと おもへとも	めくり來て とゝまらす かけかくす おもひにて 卯月てふ たつと見し おもかけは つくゝと まなつるの あらはれん 袖ぬるゝ いひをきし なからへて おもへとも	をのつから成 過し中にも 闇のうつゝは 心まよひの 名も恨めしき 涙もきりて 何なかゝゝに 思へはかなし あさる渚の 波の打きゝ よすかとのみを まれなる齡 惜からぬ身の 猶をくれるて
---	--	---	---	---

釋教部

釋教

身を深く思ふのみかは法の師の世をへたてなく祈るかしこさ
えにしあれば衣の裏の玉かしはかくれあらはれ知人そしる
のりの道さとりひらかん一きはゝいさやいさ此門に人身も
慈惠大師の尊像を毎月兩度すり奉る事は玉躰より

はしめそのほか私さまの妻子從類のため又兩道の門
弟祈事多年になり侍ぬ今老病心ほそく侍るにけふも
又摺奉るとて思ひつゝけ侍る

わか身世になからん後の末までも祈る心はとをれと思ふ
夕聞法といふことを

いたつらにくるゝをおもふ心には入あひの聲も法と社きけ
江州百濟寺一見の時聖德太子の御堂に参り侍りしに

かの所に太子御願文云遠聞我寺名近拜見寺塔〔跡イ〕律
經二宿輩必生一淨土この御誓をみてをのつから

一夜彼坊にとまりてつとめておもひつゝけ侍し
生れあはん便りをきけは此寺の一夜もかりの宿りならすよ

按察使大納言亭にて往生要抄の天道を講するを聞て
庭のくすの葉に書付侍る

おもへたゝかさしの花の色も香もつゝにしほるゝ天のは衣
かへし 按察大納言親長

しほれ行かさしの花をみるからにいとゝ頭の雪そわひしき
堯孝法印來て歌よみしに念珠を落して侍るをあした
につかはすとてつゝみ紙にかきつけける

いかてかくうき世のちりの中にしもきよき念の珠は有けん
かへし 堯孝

さらにいまことはの玉を引珠のちりにまじはるかひも有哉
心經をよみ侍りける

山さくらおりかさすとも心せよつゝに空しき色香ならすや
信解品

磯かくれまよひ行てもあまの子の歸るなみにや玉は拾ひし
陀羅尼品法花經者除其衰患

山櫻おれはしほるゝ色もうしあせぬ御法の花をかきゝむ
佛前にて看經の序に見し人々の菩提をとふらふとて
おもひつゝけ侍る

我たのむ國にゆけとそ朝ことに短かなき世の跡はとひけり〔るイ〕

神祇部

春日

君をい〔るイ〕のり身にたのみても春日山やまとし高く仰きつる哉
春日社參詣のときよみ侍る廿首の中に

あふくかたあまたあれ共わきて此我うち神を頼まさらめや

勅なればつかへまつりし年々を神の御前におもひいてぬる
禁裏月次御續歌の中に神祇を

あとたるゝこの日本の國つかみ君まもるてふ數もしられし
おなしこゝろを

諸人も神のめくみの廣まへに思ふすちをやたてするみてくら
なをさりにあふくへしやは今も世に神世をうつす敷嶋の道

天地のはしめもいまも神の代のみちに言葉の花そひらくる
たまかきの明行まゝに白妙の袖見えそむる神の宮つこ

吉田の社によみて奉りし歌の中に
いまこそは森の草木もめくむらめもとの宮ゐの山かけの春

文明十一年六月三日御靈八所明神に奉らるゝとて内
裏より十首題を給りしに寄神祇祝

世をいのる出雲の寺のいつもゝ此神まもる法はたえせし
社頭祝を

すみよしによりくる波の玉津嶋かへらぬ宮ゐいく世しる覽
すみよしに種をそ千世と祈つる神もうへけん松の言のは

諏訪の社の法樂に瑞籬

代々をへてのほる位のしなのゝや神垣たかき名をあふく哉
文明十一年九月十四日御臺御方將軍御儀御參宮とて
柏木の茅屋ちかき所につかせ給しに參り侍れは此度
の御まいりは世のみたれしはしもしつまるさまにも
侍らはとの御願にておほしめし立ぬるよし承り侍り
ければ女房のかたへ申つかはし侍し
世をいのる君か心のまことにや内外の神もめくみそふらむ
御返し

祝部

池水久澄

庭に落る瀧のしら玉かそふれは池の心にかよふ千代かな
久 享徳三年正月十三日室町殿月次御會はしめに水石契

千代のやとに御船こかんと白玉を岩ねより敷庭の瀧なみ
文安五年關白家千首續歌の中に松を
軒ちかくうへし松にそ契りつる君かちとせも道のめくみも
をなしこゝろを

住吉や玉津嶋松うつし植て道にともなふやとのひさしさ

大樹家御會始に松爲久友

君をまつしる人にして若みとり千世たちなれん春の宿かも
庭上松を

風をきき雪みんための庭の松わするゝ色もこもる千代哉
(千代イ)
(いろイ)

延徳二年公性法印坊にて三首歌よみ侍し中に庭松

ちよまでも二の道にまよはしな庭のをしへの松のことの葉
おなしこゝろ扇をつかはすとて書付侍る
(紫イ)

わかやとの風を扇につたへ置て契りし道を千世もわするな
文明十二年三月十四日將軍家子時宰相中將御鞠始あり准
后もたゝせ給ふ予雅康卿于時中納言已上四人立侍し事は
てゝ詠進侍し

君々の千世もつらねん袖をみて身に餘りぬるけふの嬉しさ
御返し

末とをくつらねん袖をみてもけに嬉しさそ猶身に餘りぬる
(たつみみてイ)
(あまなりぬるイ)
内裏十八日月次御續歌の中に祝を

ことしまのほるもうれし位山あふけは高き君かめくみに
正月六日叙位に正二位の加階し侍り參議に任し昇進
の事なと申ける文のおくに甘露寺大納言親長于時右大辨
もとより

道をおこす君かしるへに位山のほるこゝろやさらに嬉しき
返し

道をおこす君か惠のかしこさにおろかなる身も登る嬉しさ
雅俊朝臣四品し侍し時東山殿より賀し仰られて彼朝
臣によみて給りし

さらに今君かめくみのうれしさはつゝみやあまる椎柴の袖
御かへし 雅俊朝臣

きみかめくみ君か言葉の嬉しさもつゝむまそての色を添ヒえ
おなし時よみて奉り侍し

わか君のめくみに猶や椎柴の袖のむらさき色やか(をイ)さねん
室町殿御會に竹不改色

千世の色かはらぬ陰をたつぬれはこゝにみきりの竹の行末
大膳大夫入道宗勳もとにて春祝を

わか道の老の坂とふ人にけふ千とせの春のすゑをしへつ
寶徳二年祝の歌の中に

さゝれ石にいまもととふる君か代は岩ほをまたん程そ久敷
諏訪法樂百首歌の中に祝言

世には引ことを忘るゝ梓弓とるわきたえぬすはのみかりは
此亭にて四季に會侍しに寄月祝

君か代にめくらん千々の秋のかけ空にはしるやつきの宮人
寄矢祝

四の海靜に成ぬものゝふの矢なみおさまる御代を待えて
寄民祝

は衣のいはほに越てわかきみの民をなつるや久しかるへき
寄旅祝

旅ねまでやすき山路の苔むしろ治れる代にしく事そなき
寄道祝

つきせしな出雲八重垣いにしへもいまもへたてぬ敷嶋の道
我家のめくみにしるし世にひろき道にも君をさそ仰らむ
行末もなをそのほらん位山みちに二つの神しまもらば

寄國祝

君もしらすおさむる國と成ぬへしつかふる人の心すくにて

右亞槐集十帖者。飛鳥井權大納言雅親卿之家集也。雖有
世本一不無魯魚之誤。幸今得正本。故寫之以傳世者
也。

石亞槐集以一本校正畢

昭和五年二月家藏甘露寺嗣長卿書寫の古本及押小路家
舊藏の寫本を以て校合畢第三卷に脱落せる歌十首あり
□を標してこれを補足す又第四卷に前後錯亂せる所あ
り其處に記せり

品田太古識

群書類從卷第二百四十一

和歌部九十六家集十四

爲和卿集

土佐殿

永正十四年二月七日一條殿御會始 松退年友

君そみん老木の松もわかかへり限りしられぬ千世の行末
一條殿舊冬より御上洛。君公御同道口御會始之事被仰
如レ此なり。

同八日土佐國守護代細川遠江守政益母身まかりにけ
るとて方便品を勸侍けるに

かく法を心ひとつにくる身も若生のかすならぬかは
六月十日土佐殿一條殿より 住吉社御法樂とて人々によ
ませられし時 水郷寒蘆

さはりなく蘆まの小船出いるや難波わたりの霜かれの頃
御上洛之御時。難風にあはせ給ふ時。船中にて三十首。
ひとくよませられて。御寶納あるへきよし御祈念有
つれば。やかて波風しつまりしまゝ。其御法樂とて仰給
ひける。やかて又御下向の御沙汰有。御上洛は去年十二
月七日なり。

永正十五年二月六日細川安房守身まかりけるに壽量
品つかはし侍けるそのつゝみ紙に

見しよたゝいやはかなにもなる夢の現にかへれ人の面かけ

同(永正十六年)五月廿九日 姉小路前宰相濟繼卿身まかり
ける爲三追善三條西前内大臣入道義家勸給けるに聞法
出家を

法の師の教ゆゝしく聞からに今はたかふる墨染のそて

永正十七年二月十一日滋野井會の發句に高國江州へ被落す今月十七日に細川

ふた道に名残やいつれかへる鴈

三月廿二日半井明孝母越前國にて身まかりけるにあ
くるとしのおなし日よめる

やよいかに越路の鴈の名残さへ三月の空にしたふへしさは

同廿七日後法花寺殿御七年に陀羅尼品

むつよろつ八千人までもうる法にもれんもれしは心とをしれ

五月廿九日明孝亭にて 雪三日に高國出長張懸十一日三好腹切

ふるまゝにいくその瓜木數たえて雪をおもに歸る山ひさ

永正十八年三月廿二日御即位。廿一日に雨降により。二

日に御延引。同八日早朝に室町殿阿波へ御座をうつさ

ればへるなり。京都雜説也。然とも御即位廿二日に行は

れ侍也。外辨の參議に爲和參。午刻にはしまり末の刻に

終。

八月廿六日(大永元年也廿三日改元) 梶井法親王壽胤去年うせ
給けるに當年人々一品經よませ給ひけるに勸持品
まよふへき心のやみもすみのほる月にさはらぬかせの浮雲
同十一月廿四日家月次會 落葉十月延引也淡路武家十月廿二日
に堤迄御渡滄然開延引也十月題也

大永二年二月廿四日禁裏月次御會 洩始戀

つゝみかねけふ立をむる錦木も思ひの色はあさからめやは
昨日廿三日武家御參内始也。

十月四日(三河東條下吉良國(下向の折節也) 吉良持清勸め侍ら
れける 松週年友

いつよりの深きねさしと松か枝に今そよりくるわかの浦波
大永三年閏三月廿四日禁裏御會 納涼

一とをり風に先たつ涼しさやゆふたちこゆる 峯の浮雲
寄河戀

今はたゝつれなき人につくは河たゝりなしてよ思ひしらせん
十三日に。幸夜又遠行之間。談事打置。然間他事望却
不レ詠候。光玉童子四男。(三讀也。爲益弟也。十念寺に納
之。

從三六月四日。孝父以外腹を煩。存命不定也。竹田其外
方々雖ニ良藥用ニ無レ減。既に廿日には待時侍り。然に
澄玄自レ堺上洛。聽而一藥用。そのまゝ得レ減。七月二
日には日出事也。(生身玉)祝着々々。

同十月廿五日下午冷泉前大納言入道身まかりて三十五
日にあたりける時かしらに彌陀の名號を置て人々よ

みける時 篠上霰あかしら

あかすしたふ心は野への玉笹や袖にあまりて霰ちるなり
氷始結たかしら

瀧津せのをとは今朝よりとたえして風にこほる谷の下水
大永四年三月廿八日赤澤兵庫助父七年忌とて勸侍五
百弟子品

心よりまといふやみちの山のはゝ出てそ月の光ともしれ
大永五年三月廿四日禁中晴御會中殿已前密之問約内々皆々衆也
麻製臣上詣之只官姓名衆計也

春日同詠花色春久和歌

三行上字
ことの 葉の玉の砌やさく花のひかりも千世の春をしるらん
今日戌刻に參内。中山中納言。飛鳥井宰相依ニ遲參。丑
刻御會はしまる。主上以外御氣色よろし。今日勅題也。
御製講師惣の發聲等爲和依レ仰勅レ之。

同五月廿五日齋藤又二郎賢綱夢想とて勸侍 祝言なか
しるにて

名の譽代々にかしこき道々も一心のゆくゑなるらむ
同七月廿七日諏方法樂とて諏方左近勸はへる 卯花

卯花のかきねつたひの山兒やさえぬ袂に雪はらふらん
同九月廿三日赤澤兵庫助政眞母三十三回に分別功德
品

さまゝに心うつるふませの中も只一本のしものしら菊
十一月廿一日家月次會 冬木 細川六郎植國十八歳高國ノ一子
也五月廿三日 還行後傳今月九日於ニ龍安寺 有之然開庫藏により十二日延引
なり

きえは又柚木こるへき山人の斧のてもなき峯の雪折
同閏十一月十八日畠山左衛門佐義總父保憲院身まか

りける經を贈るとつゝみ紙の裏に書付侍る
あたにみし露を袖にとゝめ置て夢のたゝちに消し面影
大永六年二月廿六日西郡貞弘遠行之時宗化勸はへる
寶塔品

いてゝ世のをしへうけつゝ法の水の流の末や清くすむらん

四月廿五日人記品人の勸侍る正廣三十三回正詣勸侍也

聞もらす方こそなけれ時鳥むらさめ過る月のよなく

五月廿一日能州七尾城畠山左衛門佐亭にて當座 虫

分迷ふ秋の野もせに鳴むしも色のちくさに聲みたるらし

七月廿三日に彼城にて入道身まかり給ければ彼御座

所をのちにおもひてつかはしける左衛門佐かたへ

哀けさあとなき床をかへりみて有しよりけの袖の白露
返事左衛門佐

又故入道殿御前に奉り侍る歌

廿日あまりみし夜の月を侍えてや心のやみの雲はらふらん

一期之間。月待をさせ給ひて。看經に歌六首。心經千卷。

念佛六万反つゝ。毎月廿三日毎にさせ給ひしゆへやらん。七月廿三日身まかり給ひける。

大永七年六月廿三日今川修理大夫入道一回とて宗長

勸ける勸持品

立おほふ浮世の雲のさはりなくたれも心の月やすむらん

同七月廿五日に。將軍家。江州長光寺に御牢人にて御

座間。爲和長々牢人にて奉公申なり。同廿七日に守山

まで御出張。御伴申御先へ參。同九月十九日に東坂下

まで御出張。佐々木彈正少弼御伴。廿五日に渡海也。

十月六日に越前衆坂下へ着陣。同十三日に東山若王

子まで御着陣。同廿四日東寺まで御着陣。十一月十九

日に大合戦。明年四月六日に相國寺まで御陣替。同五

月廿八日に。又東坂下まで被_レ移_二御座_一。爲和御伴申。

公家衆は高倉兵衛督永家朝臣。阿野少將季時朝臣。烏

丸右少辨光康。爲和。以上四人。近日又江州朽木杣迄

被_レ移_二御座_一。由其沙汰あり。飛鳥井雅綱卿は。東寺ま

て御伴申。今度坂下へも御伴不_レ申候。言語道斷々々。

今京都に公方と申は。誰人の息共。諸人不_レ知_レ之。

大永_{（皇祿元）}八年五月廿八日に。武家御所。又江下まで

被_レ移_二御座_一。細川道舟今月十四日に。江州山上迄退。

七月廿三日亡父一回に。安樂行品

松たてる岩ほの上もよをそむく心を種とすめは住らし

同日彼位牌前歌

四十年あまり馴しうつゝは夢よりもはかなく覺る初秋の月

八月十五夜に攝津掃部頭元道勸ける 山月

雲霧も及はぬすみの山の端を出て隈なき月のなかそら

同夜理乗坊菴にて三雲新九郎等當座よみ侍るついで

に八月十五夜

いつはあれとこよひ計や秋の空月も名にめて澄のほるらん

享祿二年正月廿五日理乗坊所にて杉原伊賀守孝盛其

外人々當座に 霞

鴉の海や春のけしきは顯れて霞にしつむおきのしまやま

同四月十六日任庭之官片山中務入道勸ける 當座

立春風

霞みあへすけさくる春やみちのくちいそく都の心あひの風

消あへぬ雪のふきもかきくれて五月雨寒し不盡のしは山

同七月廿五日聖廟法樂細川常植之友波々伯部兵庫助
勸侍 雨後庭萩

村雨の露ほしあへぬ夕風にしめりてそよく軒の萩原

於三教賀細川右京兆被官伊藤因幡守伊勢國より右京

兆出張之時彼伊藤は伊勢國被官にてありけるか京兆

供すへきよし申西國まで供して討死すへきよし申し

侍ていとまこひに愚亭敦賀の旅宿へ來りしかはつか

はしける

たくひなき人の心の高名や天津空まで聞えあくらん

同天笠爛六勸ける 初春鶯はかしらにて

ほのか成霞の袖にひかれてや都ははるといつるうくひす

享祿三年七月廿六日 關

さすらふる身はひたふるに夢のよを現に越るうやむやの關

此四五年。世のみたれに都をはなれ。たゝよひありきけ

れはかくなん。

同九月廿九日 理乗坊會當座。江州柴原彦九郎一勝參

會。門弟子也 萩似人來

花に鳴し鳥もかけせぬ秋風に入くと萩の何そよくらん

享祿四年十月五日 太守對面遅々之間。同名關口刑部

大輔氏縁許へ門弟也

浮ひ出る汐あひしらてかくて世の浪にたゆたふ和歌の浦船

かくて程なく見參有。

惣印軒太守へ取合無沙汰ある間雪の朝にいひつかは

す

さもあらはあれなと人の問ぬまに恨みて雪や獨消なん

おなしこる同人に門弟也

ひかるへき繩手をよはみ波の上によるへ漂ふわかの浦船

かく申つかはしければ。ほとなく取合共彼仁申て。今河

五郎氏輝門弟になられ。會とも侍りき。

享祿五年(天冬元年也七月廿九日改元) 三月五日 後慈光院前内

府追善三回に 無常

かけりても慕はさらめやなき玉の面影かよふゆめの浮橋

同五月十八日瀬名寅玉丸法樂に 瀧霞れかしらにて

れいのをととは高雄の峯にうかひ出て霞の底におつる清たき

四月十四日に都の友たちとも伊勢八郎貞就。大和兵

部少輔晴統已下のほられければ。河原まで送に出て

わかれおしみ都の朋友のもとへいひつかはし侍ける

友はみなつれ行かたを都そとおもふに袖やなをしほるらん

同六月廿三日今河故匠作七回にひと歌よみける

時和しはへりける阿彌陀名號上にをきてよめり

なけきのみちゝにつみてや七車めくる日數のけふは悲しな

むつまじくなれし言葉の跡とふもむなしき露に残る玉のを

あはれけに夢てふゆめよみるか内もやかて別るゝ魂の面影

みなれつる人は何地といへはえに抑ふる袖よむせ歸りつる

たまきはる命も仇に世に超し人の光をしたけさらめや

二つなく三ともわかぬしるき法の花咲庭は千世もへぬへし

匠作息寺に庭に蓮侍ければ。かの息の寺へ遣しはへる

なり。

同七月廿三日亡父七回に 釋教るかしらにて

瑠璃をのへ玉をちりはむ法の場の教への道よ仰かさらめや

濱 月

一とをりしほくもりする月影も松のあらしにすみよしの濱
右嶋月にて侍しを。今河の家に嶋といふ事不言なる間。
俄によみかへ侍り。嶋の歌には下句うかふや波の淡路
しま山とよみ侍し。

九月一日奥州會津の金井源家朝門弟になりはへる時
歌に老躰の迷懷を申送り侍ける返事

老のなみよりくる和歌の浦風に心の船のかよはさらめや
同八日由比四郎兵衛尉光階七回とて子の僧惣印軒安星
勸侍ける 早秋風

あさな（も脱離）身にしむ老の哀さよ今年・なかはすきの下風

天文二年正月十三日今川五郎氏輝會始 梅花久薫

いくかへり鶯さそふはなの香に十世の宿ツキやよろつ代をへむ
右十代は當今河まで今河家十代なり。然間如此よみ侍
るなり。

今河元祖

國氏——基氏——範國——範氏——泰範——範政——範忠——

——義忠——氏親——氏輝

三月十一日於ニ相州小田原・北條左京大夫氏綱亭にて

當座 朝花

吹立る浦風ならし朝戸明やのき端によする花のさゝ浪

小田原は浦ちかく侍る間如レ此詠。

同三月晦日に藤見之當座

いへはえにみなれぬ花の朝こちになひくもしるき北の藤浪有注
右有注と書はへるは。氏綱女中は近衛殿。關白殿御姉に
てましますか。御内縁になられる間。かくよみはへり。

ことに彼女中にての會や。

於ニ駿州・奥州より門弟新田伊豫守入道家朝上洛して
歌みせける奥に

葉かへせぬ色をみさほに世々ふとも根さし添てよわかか浦松

同家朝伊達かたへ遣歌みせける其おく

とり（も脱離）のことはの玉の光こそ世々に朽せぬちきり成けれ

右家朝本國は常陸縣。牢人にて奥州に逗留。然而伊達か
たへ又此國よりたのみ可レ申由申し歌也。

同家朝牢人して本國の人をたのむよし申下しはへる

歌の奥に加點してかく書加

あはれけに老の浪路をしのとともよらん湊よ何たとらまし

同家朝に兵法傳へはへりけるにのこさすをしへし時

家朝歌にことの葉の情わすれす武士の愚なる道をい

かて残さんとはへれは

残なく傳し君か武士のみちの光をあふかさらめや

駿州へ下向の時三河國松平兵衛大夫入道在所に一宿

せしかは。かのものやさしき者にて上洛にはかなら

す又一宿の由度々駿州へ申し下し間。さる便風に申

遣ける

おもひきや一よのやとりかり衣君か情をちゝにみんとは
山述懷

神もしれ二代をかけてふしのれのならぬ歎に老そしにける有注

右有注と侍るは。當今河氏輝と父氏親とへ分國之内に。

愚知行分四ヶ所はへり。然共于レ今無ニ安堵間。かくよ

めり。

同八月廿八日葛山中務少輔藤原氏廣亭にて當座 萩

風

いくさとのね覺もよほすうき秋も萩一本にそよくさよ風

同九月七日珠長所會法宗就事也又ハ號釣雪電 月前萩

ふきわくるかけ待のきの下萩に心うこかす月のさよかせ

同十月十三日家月次會 尺敦

南無佛と願ふこそまことのみちのしるへなりけれ

天文三年二月廿日大浦藤二郎會に 花所々

みる人にかたりあはせていつかたの花一本も千本にをせん

同八月廿四日葛山中務少輔氏廣亭にて 當座之百首之内 立春

紀の海や春きにけらしそことなく霞の浪にかゝる浦舟

かへるかり

故郷にさはん友の有とたにしらてやひとりかりの行らん

當國に四年在國し侍しかはかくなん。

黒谷の上人一枚起請人のかゝせ侍りけるその奥に所

望せし歌

となふより外にさとりはなかりけり南無阿彌陀佛く

同十月廿日和十五日沖津又四郎頭役會 落葉不待風

つくしてはけふはた落ぬ木葉哉あすの嵐につらさおほせて

藤澤廿五代上人かたより懇志之儀とも申送り早々上

洛之儀待入之由越前國より申被下候返事にかく申

遣しける消息一男等覺院上人弟子也

思ひきや世のうき波に浮沈みあらぬすまひに年をへんとは

天文四年正月廿二日 東漸寺月次會始頭人葛山八郎氏

元 鶴千年友

なれきつるをのかちとせの毛衣を春いくかへり宿に契らん

百年を十とせの宿になれきつるをのか毛衣はるいくかへり

同二月十三日 若浦

たちかへる代々の契をたのみてもねに鳴ぬへき和歌の浦鶴

有注と侍るは。今河代々別而當家扶助之處に。愚にもて

あつかはれければかくなん。彼分國に愚知行數か所持

り。當今河親父氏親の代には何もく、知行可相渡由被

申候。先遠州小高ラタカ郷。駿州小柳津ラヤイツ。此兩所

は可渡。相殘分。遠州相良サカラ庄郷。同國高部タカ郷

但是替地を爲和に可渡由被申了。同國菅谷水垂御園ミソノ。何も何

も當給人に替地を出可返由被申侍るに。其後遠行侍

る間打過はへる處に。當今河此子細をも未申候。人々に

は怪事とも申。折節侍る間愚詠如レ此。小高郷は京着万

疋運上の在所なり。然間其由申之處に。先是彼在所之

分とて黄金十兩宛氏親一兩年運上之處に。無程遠行之

間無念無極。其旨にて黄金十兩は毎年被出之間。此訴

訟を葛山中書岡部左京進等内々申共不事行間。心底

を申述計也。

六月四日渡邊彦二郎廣會に 寄宿祝

夜半におき星をいたゝきひたふるに仕ふる宿の代々の行末

今月五日從甲州敵出張。廿七日に諸勢出陣。八月十

九日に万澤口にて合戦。同廿日に從相州氏網兄弟

父子。何かに一万計にて出陣。同廿三日に相働。都留

郡主小山田衆武田被官。合戦終日侍りて未刻散。小山田

衆討捨七八百。三百六十討捕。鯉河廿三日に小山田

へ歸陣。小山田原衆手負二三百。討死衆は二人。河村與

太夫（是輕）子也

天文五年正月十三日於本城・彦九郎爲昌興行當座
浦霞

釣たるゝをのかすさひはことたらて霞の網にかゝる浦舟

四月十七日氏輝死去。廿四日。同彦五郎同日遠行。

夏日四月廿七日於酒井懸左衛門丞亭當座從今日。亂初也。

更に今秋をうかへて夏の目もすゝしくうつる庭の遣水

十月十八日三條宰相中將母仁壽榮保大姉。追善二十三日ニ

遠行彼辭世

五形をはみなことく返し捨て曇るかたなき有明

の月如此はへれば彼位牌の前に一紙瓦礫

夢にのみ有かとみればなきかけの心の月や空にすむらん

天文七年八月武田信虎亭にて同名大井宗藝初て參會

之時信虎歌よみて宗藝へ可遣之由申されける時當

座に彼宗藝歌道執心之法師にて侍る間かくなん

いまよりや契置なんしるや君世々のねさしの和歌の浦松

天文八年正月十三日今河治部大輔義元會始 竹不改

色

露霜ははらひ果たるさゝ竹の匂ひこほるゝ千世の春風

怡雲亭孫彦五郎於尾州・歸陣之砌舟に沈み侍よし聞

て祖父怡雲亭許へ

親のおやの心を千々にしつくともしらて子のこや浪に入覽

同父の兵庫頭信喬へ

さそなけに世のことほりもかきくれて心の闇の道たとる覽

一條之住持に双紙あつけ侍しをとりつかはすとて沓

冠にかくなん

ありてなをつゆといつはたけぬるままものゝ哀はのへにこそあれ

右爲益母に去四月にをくれて。彼寺にて佛事となし
侍る間。物哀なるついでにて侍れは。彼住持へかく申侍
也。

天文九年八月三日 萩風一色元成亭にて當座於甲州也

千里までかよふ心のうき秋もおき一本にそよく夕かせ

九月十三日申剋ニ甲州を立。同十六日ニ駿州へ下着。同晦

日ニ駿州を立。十月十二日東坂本へ上洛。京都へは同十

七日に上洛。

天文十年九月能州金臺寺天神法樂とて井上藏人張行

早春鶯來年二月之張行

霞あへす日影木くらき谷の戸にをのれほのめく鶯の聲

天文十一年二月十三日於高雲齊武田大井宗榮晴信月

次會 花風

みよしのやその曉の花の香も金の御嶽にひゝく山かせ

晴信同名民部少輔入道怡雲齊道鑑亭にて庭梅各見は

へるついでに

三月九日於高白齊高雲齊也當座 初花

とふ人の心や見んとけふまてに花はまたれてさらに聞らん

八月十五日於板垣駿河信方亭會に 月前聞鷹

音に立て月もこよひの最中そと南にかへる鷹の一つら

同當座 十五夜當日

月も今夜なたゝる秋に有耶無耶の心にさはる雲霧もなし

天文十二年正月十三日今河治部大輔義元亭會 鶯有

嘉聲

なれきかん春いくかへりしつはたの山もよはふや宿の鶯

樞民部大輔かたへ紅梅の枝につけてかく申遣
世はかくそ花も折しる姿見よと匂ひふかめてゆるし色なる

甲州於三晴信亭二月次會穴山信友頭役也 毎月十五日愚
官越により九月十七日に延引 池上月

さす棹のしつくもしつく波の上に月をのせたる庭の池水

同九月廿一日同月次向山參河去七月分頭役張行 紅
葉色深

日にそへてもみたす木々に置露も積れは老の霜のましらか

天文十四年七月七日治部當座 七夕霞

霞にもむせふはかりに七夕のあふせをいそく天の河岸

聖護院門跡御座なり。内々東と和與御扱候由なり。然間

當國へ御下向之間。彼會へ入御也。河つらと詠けるを。

河つらさは今河家に禁也。同嶋も禁也。殊に新嶋一段不

吉。

同月十六日於三浦尹氏員亭當座 時鳥一聲

時鳥たゝ一聲をこゑにをのれ添たる木綿付の鳥

秋 香

行人の袖引はかりゆふ風におはなかるかやわれも香はし

右聖護院門跡入御也。和與の御扱不調候而同十八日午

刻に御上洛。和與之御使禮部へ爲和可申に。彼門跡仰

によりて御使申なり。同廿三日義元臨齋寺へ門出。同廿

四日人數立。義元は廿四日の曉月出て出陣。すくに富士

のふもと善徳寺へ着陣。

天文十五年三月廿七日齋藤佐渡守元清夢想とて勸侍

る 霞隔遠樹こかし。

梢こそそれともわかぬ花の色の霞にくるゝはるの山もと

六月二日於義元亭 早春鶯 京都より三條西實澄卿(時大納言四辻實澄卿)參中書省(下向甲州)越之間一會張行

さそはるゝをのか心のはなをのみしるへにきゐるはるの鶯

同六月六日最勝院素純十七ヶ年之追善に 彼弟子素經

張行 郭公(但六日三河甲州)越山之開路次送送に素經同道開會延引

面影はほのみし夢の行ゑそとかへるやいつち山ほとゝきす

同六月九日家月次會 樹陰夏月朝比奈十郎左衛門尉親孝頭

さぬらくは跡なき夢の餘波そとつらさ身にしむ 秋の初風

八月九日家月次會 野外秋月富樫介氏家頭役

ふきはらふ裾野の月にねおろしの雲をそなかつしの芝河

十月十一日(但廿九日)家月次會 風前落葉飯尾善右衛門頭役

神代にも沈む木葉を吹たてゝ風やかけたる 天の浮はし

十一月十一日家月次會 雪中旅行名和式部少輔頭役

これや此宿かる峯の爪木そとたよりにひるふ雪のかさ折

天文十六年六月廿日(但廿一日)葛山八郎氏元月次會 樹陰

納涼

松かけや衣をりはへ河社なみのぬれ衣かけてすゝしな

右爲和卿集以一本校

權大納言言繼卿集

永祿五五十六歲十一月二日還任年 正二位行權中納言兼太宰權帥臣藤原朝臣言繼

松添榮色正十九 公宴御會始

霜の後一しほつゝの春の色の松の千年は君やかそへむ

鶯是万春友同廿 近衛親經會始

いく年の限もしらす春といへは馴きて宿に鶯のなく

餘寒月同二九 愚亭月次

さえかへる嵐の末のいかなれは梅か香そはぬ夜はの月影

祈身戀

契りたゝ神もあはれめ玉くしけふたしへもなく祈る我身を

早苗多同二廿五 公宴御月次

此ころは袖うちかはへて遠近のみぬさと迄もさなへとらん

池水鳥

むらゝの若は枯たつ池水にうかへる鴨そあをは成ける

五月雨久同四廿五 公宴御月次

雲ふかみいつかは晴んをのゝえもくたす計りの五月雨の空

瀬鶴川

瀬をはやみみなきる水の鵜飼船さしてのほれる魚やくふ覽

罽中枕

たひはたゝ木のね岩かれ浪枕いつまで夢を結びては見ん

春田雨同六廿五 公宴御月次

草もなくかへすあら田は徒に露もむすはぬはるさめそふる

浦秋夕

心とめて誰かみさらむ浦遠くかりかねおつる秋のゆふくれ

夏草露同日御法樂御當座

置ぬへき時ならなくに草のはの露めつらしき夕立のあと

忍戀

よそにしもうきな立なは暫し先こたへせす共よしや恨みし

庭松

今年生の二葉より先うつし植て千世をこめたる庭の松かえ

初秋朝同七廿五 公宴御月次

聞ははや音吹かへつゝいかにねておくるあしたを秋の初風

鴈初來

玉章は待となけれと聞からにまつめつらしき初鴈の聲

忘久戀

いかさまに紛れかすらむ年へても忘れはせしにとふ年もなき

雁作字同八廿五 公宴御月次

白雲にたゝくたりかく文のそれかあらぬかかりのゆく空

淨侶暮歸

かへるさやそこと告らむ墨染の袖のゆく底のいりあひの鐘

山家猿

山深み獨のすみかことゝへはなを淋しさのましら鳴なり

秋菊盈枝同重陽公宴

時ならぬ雪こそつもれ白菊の咲そふ花の枝たはむ迄

春曙鴈同廿五 公宴御月次

おき出て行衛の空もほのゝとかりかね霞むはるの曙

旅秋夕

楓はなを夕そつらき草むしる袂は露ををきかさねつゝ

竹間霜

わきてけさ猶霜白しなよ竹の夜長き程や置も添らん

雪中眺望同十二廿五 公宴御月次

ふしのねをこゝに都の大ひえや小ひえの雪の明ほのゝ空

爐邊閑談

さま／＼のよのことくさを語りあひて嵐の音は埋火のもと

河水流清

河水の底すみわたりみさり成空も移て雲そなかるゝ

聞郭公同十二廿五 公宴御月次

老か身のね覺も嬉しあか月の月にむかへは鳴ほとゝきす

寄雨戀

いとせめて思ふそなたにさりとては涙よゆきて雨とふら南

野霞

ひろき野をたれまろばして其儘に貫きとめぬ玉霞そも

松上雪

立並ふ四本の松の雪にけき千年の色の深さをそみる

祝言

家の風吹つたへきて行末も限りなき世にしき嶋の道

雪中眺望同十二 於太秦月次

降積る雪のたかねの嵐山是も都のふしとかも見む

冬 曉同當座

しらけたる雪の光に冬されは明ぬ此よもあけかたの空

冬 野人に代て

霜にかれ雪にむもれて野への草いつ萌出ん色としもなし

冬 獸

ひろふへき木のみも雪に埋れてさそ侘しらにましら鳴蘭

藥王品同十二 三條亞相勸進父稱名院前右府七回

つとめては月日と共にいさきよく明らけき名の世に聞えける

す花盛

すきかてにみつゝも暮す殘なく開くる花のうつろはぬまを

社木

春秋を幾ちとせとか天みてる神の宮居にしける眞榊

爐邊閑談同十 於太秦眞珠院月次

むかし今かたり出つゝ向ひてしはしさむさを埋火のもと

篠 霰同當座

をのつから清き心を見よとてや玉さゝにちる玉あられかも

澗水

山人の聲かとはかり谷川のこぼりのしたをくゝる水をと

逢 戀同人に代て

嬉しさもうさをもわかすあひみては泪を先にまつすゝみける

早 梅同十二 於飛鳥井月次會

世にしれとやゝこえぬへき春にしも先立て咲宿の梅か香

歳暮

ことしけき我身ならねと暮て行としに心のさそはれそする

祈戀

木綿かけて神にしいのる身の契いつかうけひく心をもみん

海邊霞同七十一 左金吾勸進春日社法堂

四海の浪もしつけく朝かすみゆたかに匂ふはるの色哉

忍久戀

あらはれていつかはみえむ年月は人めくるしき瀬々の埋木

たなはた同八二

年月のつもる思ひの袖の露こよひや共にほしあひの空

すゝき

夕まくれ人も言せぬ庭の面に誰をか招くお花なるらん

うらみ

一かたにつらくはかくも恨しを何そはなけの情かけゝむ

新秋雨同當座

草も木も天の恵の露をそへて村雨さそふ秋のはつ風

尋虫聲

色々の聲のみしけく廣きのもまつてふ虫を先や尋ねん

漁舟火

くらきよの爲にはあらてかゝりひに驚く魚をあまの釣舟

待七夕同人代

としことに穩立といふ日より先さそな嬉しきほし合の空

江邊萩

なにはえやむらゝ茂る苔も名の替るとそ聞いせの濱おき

網代同十一人にて

風さむき網代の床に目を重ねよを重ねつゝもりや侘らん

炭竈

煙をはふりも埋まで立のほり雪の底なる峯の炭かま

錢別

やかてとく又逢坂をたのむれとけふの別の先そ悲しき

松有佳色同十一廿九 菊亭會始

ふりにけり千年の色も白雪の積るにしるき宿の玉松

竹雪同當座

移し栽しめくりの竹や霜八たひ置て千尋の陰深むらん

歳暮

越てくるはる近しとて年木こりいとなみしけき人の行かひ

永祿六癸亥年 正二位行權中納言兼太宰權帥臣藤原朝臣言繼

野若草同正十一 近衛殿御夢想御法樂撰紙

秋こそは千種にましれ春はみなゆるし色なるのへの若草

馴増戀

年月はかゝる心もしら糸のとけて思ひの色をそへけり

し萩同御短尺

しらせてや軒はの萩のむつましく問くる人をそよと告らん

か紅葉深同人にて

かつ染る程さへあかぬ色なるにそふは千入の木々の紅葉葉

寄若菜祝言同正十九 公宴御會始

我君の千世のためしに澤へなる長きねせりを摘やそむらん

鶴退年友同正廿 近衛殿

巢たつより砌になるゝひな鶴の千世の齡は君かそへてん

松樹契多春同正廿一 聖護院院御會始

二葉よりうつし裁てし松なれは君そみるへき十かへりの春

山ふきのはな同當座

色にそむしられて見る人の衣の重ねも山ふきの花

竹契齡同正廿七 愚亭會始

契りをかむ代々の齡の例にはときはかきはの庭のむら竹

春月同當座

いかなれは思ひしよりは老か身にかす増りける春のよの月

祝言

敷嶋の道を心のましはりにけふまつ契る千世の行末

歸鴈連雲同二十四 愚亭月次

雲の袖花の錦をふるさにときてこそ鴈のかへり行らめ

契行末戀

ちきりをく我中かきの姫小松木高き迄に色かはるなよ

松藤同當座

ためしには榮行松を三笠山よゝの花さけ北のふちなみ
旅 曉

たひは只またよ深くも鳥かねにいそかしたてゝしつ心なや

歳 暮

いつのまに昨日の春とけふもくれあす又年のこえんとす覽

呼子鳥 同三十五 公室御月次

答へする人はなけれど春の山のこなたかなたに呼子鳥なく

花 纔 殘

手折なは心なしとや人も見ん散てかたへに残る花の枝

初 逢 戀

つらさのみかこちなれしも今はゝや新手枕にかはる言のは

靜見花 同三三 大泰眞珠院月次

たをりもつ人もましりて木の本に風吹ぬまの花をみる哉

池 邊 藤

池水の底も匂ふやうつりぬる影もこすゑにかゝる藤浪

名 所 關

いかにして越も行ましをろか成身は許さしものしの關の戸

里 花 同當座

こゝのみはめかれにければめつらかに又事方の花をみてまし

夕 花 同人に代て

あやなくに暮行空も夕附日さすかに花の光そひけり

早 苗 同五廿八 於眞珠院月次

小山田に五月男しつのめ隙をなみうたふも有てとる早苗哉

梅 雨

三日月も雲間にみしか有明の空まで晴ぬ五月雨のころ

眺 望

なくさみも何か磯邊のかたを浪よせては歸るなかめのみして

郭 公 同當座

よそよりはむつましけにも郭公こゝをせにとそ百千返なく

旅 宿

くさ枕結ひて社はをろかにもすみし住居のたのしみはしれ

氷 室 同人に代て

昔にも立歸る世を松か崎又もそなふるひむろならなん

蚊遣火 於太泰實仙房月次會

さとつゝき夕けの後の煙こそすゝか伏屋のかやり成けれ

遠 夕 立

ゆふたちの雲はよそにも鳴神の音のみ聞てあつき日の影

通 書 繼

かゝりける露の情も柏木のもりてそつらき水莖の跡

夏 岡 同當座

晴やらす日をふる雨に水くきの岡の葛はゝなをそ茂れる

夏 旅

故郷は夢さへうとく草枕むすひもあへすあくる短夜

夏 糸

たれとしも主はしられす山姫やかけてほすらん夏引の糸

七夕管絃 同七夕 公宴

こよひ先秋のしらへを彥星に手向ことなる琴笛の聲

曉擣衣 同廿三 三條大納言興行

なかきよを月みかてらや明す覽鳥かねそへて衣うつ聲

萩 同廿九日 太泰於

假そめも露をはためし朝夕にそよくのみ成庭のおき原

露

秋草は所せきまでふるもありのほるも有て置る白露舟

その人の思ひ／＼に沖をこき浦つたひして行船もあり
壽衣幽同當座

吹風のおり／＼ことに聞えきて遠き碇そたゆみかちなる
寄秋雲戀

身を秋の心そつらき晴くもる時雨の雲を中にへたてゝ
穠祝言人代

民の卿なひきしたかふ時きての今秋津洲そ豊成ける
翫月同八十六 大秦月次會

あくかるゝ心にそ思ふ峯高みのほらは月や手に取てみる
山月

所からみる人からは有もせむ月のひかりは山きともなし
寄月戀

いかにせむさやけき夜半の月影も泪くもらす恨そひけり
秋蝶護籬花同重陽公宴

とふ蝶もまかきの草のあるか中にわきてや菊の花に宿れる
河千鳥同十五 公宴御日待御當座

青海の浪もやあらき狛杵のさほの河原に鶺鴒鳴也
暮山雲西刻月蝕也

こよひ月かけたる影を山のはの夕の雲の立やかくせる
津千鳥同十五 公宴御月次

世間にいまなにはつのよしあしをやよいかさまに千鳥鳴覽
雪中望

しはしみむ船さしとめよひらの山花こそあらめゆきの曙
寄鶺鴒戀

いかにせんをよはぬ峯にすむ鶺鴒のうへ見ぬ程の人のすかたを
遠歸鴈同十二廿五 公宴御月次

錦とて鴈は霞の衣をやふる里遠くきてかへるらん
山家月

山さとはなくなみおほく松の聲鹿の音そへて月をみる哉
寄露戀

いたらねと人の心の秋といへは時ならぬ露の袖にあまれる
永九三月十五日太秦眞珠院興行

ちらすなよ香はしめるとも花の雨
八月廿七日於殿下

こゑやはなこゝら鹿なく野への草
永祿七年
鶺鴒有慶晉正十九 公宴御會始

嬉しきは我はかりかは君か代にあへるを春の鶺鴒のこゑ
椿葉契久同正廿 近衛殿御會始

移しうへし砌の椿つら／＼におもへはひさし八千年の春
山殘雪同正廿六 於甘藷寺頭辨亭夢想法樂當座

へたてこし春ともいはし消やらぬ山路は雪のふるとしの空
り俄逢戀

呂の聲に心もことにひかれきてたのめぬ人をあひみつる哉
み窓竹

道すくに思ふ心の窓ならは猶裁そへよ千尋あるかけ
松色春久同正廿八 近衛殿御會兼日嶋津彦守義從中沙汰

莓のむす巖岩ねに春をへて千世にやちよの松の木高き
浦邊雪同御當座

袖寒くまのゝ浦風ふくからにお花むら／＼なひくしら雪

松千春友同七二九 愚亭會始

稀戀

千とせとも春は限らしわか君の友と砌の松の木たかさ

とたえある中もかこたし彥星の契をたにも頼むためしに

湖上霞同當座

星夕言志

消殘る雪もさやかにひらのねの霞吹とくしかの浦かせ

せめておもふけふより年に二たひと二の星よ契りをか南

名所鶴

月下女郎花同八十五 公宴御當座

霜寒き夜半も吹井の浦風に所きためぬひな鶴の聲

をみなへし月に心を移しつゝなひくとみるやくゐる成らん

柳垂糸同二二二公宴 永無瀬殿御法樂

寄月閑居

露ならでなをぬきとか織なましたてのみゆる青柳の糸

すむ影は人もとひこぬ老か身をむかし忘す月そともなふ

被忘戀

初鴈同八廿五 公宴御月次

ちきり只後の世までと誓ひしに今更なとかわすれはつらん

姿をは霧のむら／＼へたつれと聲はまかはす鴈の來る空

梅同二廿四 人に代て

菴月

こゝにきて問すはあらし梅花袖ふれて猶色かもそゝふ

たかさとも行て問なん我ひとりあたらし今宵の月を見ましや

花

野旅

よそに又たくひあらめや所から宿から深き花の色香は

野を遠みむしの音そへてかり衣露を結へる草枕かな

旅春雨同二廿五 公宴御法樂御當座

秋菊盈枝同重陽公宴

たひにして休むもあれといそくには道さまたけの春雨の空

九重にけふ八重ひとへ下枝まで咲てやちよを秋の白菊

隔遠路戀

龜夕同九廿五 公宴御月次

契りしをとかわと計出たつに只足もとの千里ともなき

みひとりとなにうれへけん昔よりいつくの空も秋の夕くれ

曉花同二廿七 公宴御當座

馴戀

鳥の聲鐘も聞えてさきつゝく花の色より明るしのゝめ

たち馴てかたらふさへにいなせ共いひも放たて程をふる哉

月前花

旅夢

よしの山花より出て花にいる月に我身もさそはれそする

狩衣露もかさねて草まくらむすふとすれと夢は結はす

寄花釋教

岡紅葉同九月盡 公宴

開は散ことほり見せて春ことの花こそ法のをしへとはなれ

時雨でも岡への袂いかなれはうすきなからに秋はくれ劍

閑庭薄同六廿五 公宴御法樂御當座

秋忍戀

ひとりすむ庭の籬の花すゝきなくさめかほに何招らん

たゝはなをいかにかせまし袖の上の泪は露と答へてもみん

寢覺月同九廿五 公宴御月次

よひのまは曇ると見しに老か身のね覺嬉しき月の影哉
紅葉深

かつそむる時雨もあれとあかねさす入目や木々の色深む覽
稀逢戀

かく計り月日へたてゝあはんとは我もかねては契らさりしを

冬 月同十五 御日待公宴御當座

曇りしもさゆる嵐にみかゝれてむかふ月こそ鏡なりけれ

冬 岡同十五 公宴御月次

ふみ分て誰か問まし冬枯のをかへのさとのしもの通ひ路

冬 鶴

幾とせをへにける程もしら鶴の白きや霜ををき重ぬらん

水邊螢同十一十七 於南部春日社但馬屋近衛殿御當座

河きしに光みたれてちる波や風の行衛のほたる成らん

待 戀

さりとは我のみいひしかねことの行衛ならぬをいかに待けん

不逢戀人に代て

ことゝふもあらさる方にいひなして猶人傳の答へたになき

連日雪同

山ふかみ雪も日數も降そひて立出つへき道もわかれす

冬 月同十一廿五 公宴御月次

よはになをさやく霰はさやかなり月の光のくたけてやちる

遠山雪

雲霧のいかに隔てゝ遠かりき雪には今朝の山のま近き

初 戀

假初のかいまみなから忘れぬ人のこゝろのおくいかな覽

古溪雪同二十九 於聖義殿御會

さらぬたに苔にふりたる谷の戸を埋み添けるけさの雪哉
永祿八_五年 正二位行權中納言兼大宰權帥臣藤原朝臣言繼

春天使象正十九 公宴御會始

君か代のためしをかくと北にゐて動ぬ星のいくはるか經し

鶯は万春友同廿 近衛殿御會始

春ことにともなひきてや鶯のかそふる君かよろつ代の聲

梅遠薰同御當座

程遠きさとの梢はさきぬともしらしを風の梅か香そする

寄柚木戀

つらしたゝ思ひそま木のそまぬ其心の色はいかにひかまし

花 雪同廿二 公宴水無瀬殿御法樂

はる風や尾上の花をさそふらん猶ふりそひて匂ふ白雪

朝海路

朝ほらけなきたる浪は跡ききと漕こそ出れ浦のとも舟

山 花同廿五 公宴御月次

栽し世も名のみに今はあらし山又も千本の花はみまほし

池水鳥

池ひろみ汀のあしはかれはてゝたゝ鴨のみそあをは成ける

夏草露同日 公宴御法樂御當座

しける野に先ひめ置て姫ゆりの花に顯はす露の色哉

掃衣幽

遠く聞ちかく聞えて里わかぬ砧の音そ風のうへなる

逢切戀

思ふそのすちたかふなよ糸竹もあはすはかゝる心しらめや

竹 鶯同廿九 公宴御當座

なれてくる春はかきりもなよ竹の幾世の宿の鶯の聲
霞隔花

たつともいとひははてし花に吹風やへたての霞なるらん
旅宿春雨同四廿五 公宴御月次

春雨の日をふる旅の宿なれはとまるもいふせ濡てゆかはや
水鳥馴舟

かち音になれてさばかぬをし鴨はさなから浮ふ波の友舟
葛 風同當座

古郷の風のたよりも水葦の岡の葛はのかへすくも
寄庭戀

いつまでかかゝる思ひをすか庭しき忍とはせてしれかし
懷舊淚

たらちおのいさめし時はうかりしを思ひ出てそ今泪なる
湖上月同九十三夜 禁書菊御覽御當座

かゝみ山あかすそ向ふさゝ波や鴉てる月の影をうつして
月前鴈

なれつゝも越路の秋やうかるらし宮古の月に來る鴈の聲
菊契多秋同九十七 同菊御覽

露はらふ山路のたねを植つれば籬の菊もちよはへぬへし
秋 雲同九廿五 冷泉鶴進法樂

たてぬきを何をすらしも織女にかすてふけふの雲の衣は
秋 思

しらすりき我もつれなく袖の露の起伏かゝる思ひせんとは
霜同十一十六 愚夢月次

いかなれはいとしも露にうるほひて霜にかしくる草木成覽
氷

むかひみる池の氷ばさなからに影もうつさぬ鏡なりけり
思

とにかくにつらき心のかるからす思ひに身をそ猶くたしぬる
水 鳥同當座

かさねても暖ならしよなくへいくへの霜のをしのふすまは
野 風

宿るへき草も木もなく廣き野はいつこを風に行ふなるらん
嶺上雪同十一世 於若州有嶺朝臣孝息久簡元服朝

わか方はよしへたつとも峯高み猶ふりつもれけきの白雪
寄松祝

姫小松かねてそ見ゆるいや高く生のほるへき千世の行末
冬 月同當座

をのつから清き光もみかゝれて氷をわたる夜半の月哉
永祿九丙午 六上歲 正二位行權中納言兼大宰權帥臣藤原朝臣言繼

霞添山色正十九 公宴御會始
淺みとり龜の上なる山もけき霞てはるの色やそふらん

花 雨同廿二 公宴水無瀬殿御法樂
よしやたゝ雨もいとほし立よれば雫も匂ふ花にやはあらぬ

谷 水
靜なるすまむをとへはこたへして岩間に咽ふたにの水をと

旅春雨同廿五 公宴御月次
はれやらぬ春のなかに旅衣とまるも淋しゆくものうし

萩 風
ふくとしもよその梢は見えねとも萩の葉よりや秋風の聲

寄鳥戀
我袖は鶉のゐる石にあらねとも人のうき瀬の浪そかゝれる

餘寒雪同日 公宴御當座御神社御法樂

この比はことほり過て冴かへりなを消かての四方のしら雪
祈身戀

よしさらは兎角に人のうけひかぬ我身を神に祈りてやみん
春秋野遊

あかなくも野をこそ分れ朝鳥かり小鷹狩はに日を暮つゝ
三月十五日於太秦眞珠院讀之

さきて今梢の雪とみる花の散ても草をうつまさらめや
太秦
庭上落花同三廿五 公宴御月次

老か身はたれとふへくも思はねと花散庭の道もなき迄
惜春不留

まてしはしはやくも暮て行水の歸らぬ春の末のしら浪
山家待人

山里は春こそいとゝうたてけれどもしや花にと人の待れて
寄雪花同書 御當座公宴

つもるともよしやいとほし袖にしも匂ひをとめよ花の白雪
山家鳥

遠しとて思ひへたつる山鳥のおのへのさとの夕をもとへ
山 榊

神山になをしけりそふ眞榊は幾代の霜か置かさぬらむ
萩同廿五 冷泉勸進法樂

のへの草あるか中にもさく萩の花の枝かさる露の白玉
霧

み渡せはおほろゝと立くるも消るもわかぬうす霧の空
雨後月同八十 愚亭月次

村雨の跡こそかくはやとしみれ草木の露のちゝの月影

松間月

田子の浦や浪のよるゝ立出てしはしそ月を三穗の松原
山家月

淋しきや身のくせならし山里にうからねはこそ月はすむ覽
行人隔霧同當座

間近くも聲は聞えて姿のみ立へたてたる袖のうす霧
海邊鳥

こと浦のいつこさためて一方に立きはき行あちの村鳥
月前風同八廿五 冷泉勸進法樂

風もなを光と成て一葉ちる桐の木のはの月そ影そふ
月前戀

よなゝに立てみゐて見待てふは月をか言とせめてしれかし
雲 雀同日 公宴御當座

思ふ子の空にも有て幾たひか父は鳴たつひはり成らん
惜別戀

さらはとはかたみにいひて袖の露をき別うききぬゝの空
庭 松

陰たかき砌の松は栽しよりいく十の年の霜か置らん
逐年菊菰同重陽公宴

としゝになをうへ添て咲菊の花の匂ひももゝしきの庭
龍田山同九十一 愚亭月次會

うすくこく今や錦を立田姫山はもみちの色をそへつゝ
會坂關

あふ坂のせき路を遠くこえゆけはやかてそ歸るしかの浦浪
永祿十丁年 正二位行權中納言兼大宰權帥臣藤原朝臣言繼

松有春色正十八 於本藏寺法泉坊會始

けふよりや春のみとりも立そはん萬代こもる庭の松かえ

初春霞同當座

春きても花の錦のをそしとや霞の衣たちそめぬらん

春松契齡正十九 公宴御會始

いくかへり龜のうへなる山松の千年の春を君かそふらし

鶯是萬春友 正正廿 近衛殿御會始

春といへは宿に馴きて君かへむ万代かそふ鶯の聲

野若菜同御當座

うちむれて若菜摘なり春日のゝ野守もいまゆるす成らむ

社頭祝

末葉までさか行はるに三笠山さしてを守れ北のふちなみ

挿頭花同三廿二 公宴永無漫殿御法樂

かさしもつ花もはつかしいとゝなを老の姿のあらはれやせん

野旅

一夜をはゆかり有ける色めてゝ葦咲野にかりねをやせん

河歎冬同三廿五 公宴御月次

行水に影をうつしてこほれさく花の敷そふきしの山ふき

歲暮念

なへて世に春くといひて誰もみないそかしたつる年の暮哉

紅梅盛同三廿五 公宴御法樂御當座

かけてほすきぬかと計り咲みちて枝おもけなるくれなるの梅

忍久戀

夢計しる人ありてとふとてもよそになしつゝあひきといはし

山家水

濁る世をそむくとなしに山水の清き心のすむにまかせむ

落花如雪 同日 人に代て御月次

散しくを又いくたひか春風の梢にかへす花のしらゆき

爐邊閑談

いにしへや今の世の事取あつめ語るにあかぬ埋火のもと

窓前竹

すなほなる世のことはりのためしにはまつこれな覽窓の吳竹

松 藤同三廿五 公宴御月次

色かへぬ松のちとせに契置てはるに榮へよ北のふちなみ

暮春

行雁をさきに立つゝ鳥も皆かへりて春のくるゝあやなさ

忍戀

問まては門をもさすな横の戸をたゝかはよそに人もしら南

卯花盛同四廿五 公宴御月次

しらきぬを掛てもほすやと計りに垣ねのうつき花そ咲そふ

逢戀

年月の人のつらさも我うさもけふそかたみにいひはるける

春 月同日 公宴御月次人に代て

難波かたよしとなかめし月もあれと都の春にしく影そなき

柏霰

一とをり山風なからいさきよきなともあられの玉かしは哉

聞郭公同五廿五 公宴御月次

あかすなをたれきけとてか過かてに山郭公をちかへりなく

橘薰枕

むかしのみ其ことゝなくみし夢のさむる枕ににほふ立はな

名所山

をろかなる身とて心をつくは山このもかものにもしる道そなき

郭 公同六廿五 公宴御月次

聲はなを花にそまさる置露の木々の青葉のやま郭公時雨

春秋をしらぬ梢も時雨してみさほの色やなをふかむらん
山家鶯同廿五 公宴御法梁御當座

山家鶯同廿五 公宴御法梁御當座
山家とにすむてふかひは鶯のはつねをはやく聞にやある覽

寄船戀
いかにせむ人の心のあら磯に身はうき船のよるかたもなき
老述懷

うるわさのよしなくとても仕へむのそれも忘る老のあやなき
行路秋

分きつるのへの限りのひとつ色に薄はましる露の萩原
鹽屋煙

宿からむ濱邊につゝく一里をとへは鹽屋の打そけむれる
勸持品同八五 故中院通胤贈卅三回勸進

さはりありそしり有とも心にはかけしの法の教へならすや
菊同八廿五 公宴御月次

かこひをく籬の草にさく花のまれなる色や露の山吹
衾

ぬきすへし恵もあるに寒しとて闇の衾をいかゝ重ねむ
菊獨秋花同重陽公宴

わきてみむ千種は有とも千々の秋よゝのためしを白菊の花
永祿五暮秋十二天松峯尊靈の三十三回をむかへ寸志

を勵さむとするに家貧ければその懇情を徒になし小
僧を請せむとすれとも世亂かはしくてなを經營の求

を空すよりて僅に法華八軸心經四紙眞文等を書寫し
泣筆を淚痕に浸し六字の名號を句の上に置て野語を

綴り脾前に奉レ備といふ事しかなり

特進都督郎藤言繼

長らへてあるもかひなし垂乳根の跡とふへくも事たらぬみは
紫の雲にまじりていと竹のしらへもおなし臺なるらむ
數多しもあらぬやいかに只獨此とふらひはをろそかにして
三十あまりみとせの秋の過にしも思へは夢よ見る程もなし
手向つゝとなふる彌陀の力もて上かうへなる品に道ひけ
ふたつなく三なくうけよ一筆にかきし御法の花のめくみを
永祿十一^{六十ニ}年^{六十ニ} 正二位行權中納言兼大宰權帥臣藤原朝臣言繼

鶯告春^{正十九} 公宴御會始

空はまたかすみもあへぬあら玉のはる來とけきは鶯のなく

鶴宿松樹^{同廿} 近衛殿御會始

なれてすむ松の千年と君か代をかそへやあくる鶴のもろ聲

庭落花^{同御當座}

庭の面に散しくはたゝ春風のさなから花をふき上の濱

窓竹

うへしよりすなほ成ける心とはよそにもしるき窓のくれ竹

春雨^{同廿二} 水無瀬殿御法梁

しつくのみ木々より落てはるゝとも降ともみえぬ春雨の空

山家

かけひさへ冬は氷れる谷の戸の雪消てこそ水も音すれ

野春草^{同廿五} 公宴御月次

こぬ秋の色をさなから先みせて霜のはなさく野への若草

寄雨戀

いつまての限さもなく春雨のはれぬ思ひに身をくたせとや
苔埋路

いかさまにかくれすむ覽ふむ跡も見えぬ苔路の奥の谷の戸
麓納涼同日 公宴御當座

日の影はよそにもふりて麓ゆく岩ねの水の音のすゝしさ
寄琴戀

一つらの鴈も飛くる琴の音にひかるゝ人のこゝろともかな
陀羅尼品 同三廿四 越州朝倉祖母第三回飛鳥井羽林勸進

とく法をたもつ此身はおとろへも憂る事もなにかあるへき
つ山家夏月 同四廿一 伊勢加州勸進大坂興生等早世追善

月も今山里いかにみしか夜のあけぬにはやく雲かくるらん
廬 橘 同四廿五 公宴御月次人に代て

見し夢は花たちはなにさそはれて枕にかよふかせかほる也
夏萩

津の國の難波のことのあしきをもけふの御萩にはらひ流さん
餞別

けふ出て程なく歸りあふ坂のとりか音までと廻る杯
夕 花 同四廿五 公宴御月次

いつみるものをろかならねと色もかも猶一しほの花の夕はへ
搦衣

こゝも又寝ぬよの里と長夜をうちあかしたる賤か狭衣
山旅

稲舟にあらねと山はいく度かのほれはくたる道のさかしさ
郭 公 同五十七 萬寧月次

ひと聲に明ぬといひし夏のよにをちかへり鳴やま郭公
五月雨

おほかたはこまもろこしの雲までも集りきてや五月雨の空
歎無名戀

いかにせん思ひもかけぬ人に今ほすかたもなきあまの濡衣
郭 公 同五廿五 公宴御月次

月なから一通りふるむらさめの雲のはつかに鳴ほとゝきす
五月雨

ゆふたちはまたき過行夏の空にいかに目をふる五月雨の雲
名所旅泊

いかにせむ鹽時ならし浪の音のまくらに高きしかの浦ふね
歎 冬 同六廿五 公宴御月次

秋またてはる生る草の中にしも花めつらしく咲る山吹
嶺雪

ふかさは分入ねともはやくふりつもるをこゝに峯の白雪
郭 公 同日 御當座御法樂

穂もとへ聞あへぬほさの短夜にきなくはおしきやま時鳥
七夕雲爲衣 同七廿公宴

けふといへは我袖のみか織女に雲の衣も空に手向て
初秋月 同七廿五 公宴御月次

風前薄

新 樹 同四七 於連歌師紹巴亭當座

所から色も一しほなつ木立はなも紅葉もいかゝをよはん
夏 雨 同四廿五 公宴御月次

かせわたる草葉もあれと夕立の跡こそ露は涼しかりけれ
夏 社

任例にかものみあれの神祭父もつかひのたつ世ともかな
夏 歌

報ひありて己か命をけたんとやともしほくしに鹿によりけめ

曉月聞郭公同五廿五 公宴御月次

名殘あれや八聲の鳥に聲そへてあけ行月に鳴郭公

古宅五月雨

いかはかり年をふるやの五月雨に軒の忍ふの露みたるらん

寄名所述懷

思ほえず幾その年かたけくまの待事なしに身はふりぬらん

江中菖蒲同六廿五 公宴御月次

蓮葉にあらぬあやめにもこり江の濁にしまた露の涼しさ

寄煙戀

思ひせくむねよりたつとふしのねとくらへは煙何れ高けん

樵夫入山

木をこるも山路を行も世を送るわさとし知に苦しくやなき

星夕言志七夕公宴

藥王品同八十五 聖門新門主御勸進重壽院五十七日

此のりの教にあは、誰も皆なにか心のまゝになからむ

暮天旅鴈同八廿五 公宴御月次

故郷をへたてゝ遠くこし鴈は夕のあきやさそうかるらん

依處月明

わきて猶をは捨山にてるといふ月をは行て見まくほしさよ

隠士出山

うきに社身をは捨つれおさまれる世にしあはんと出る山すみ

菊花薰袖同重陽公宴

朝夕にかこふ籬の菊の露袖にそしみのふかく匂へる

春小鹽山同九廿五 公宴御月次

誰かさて等閑に見むをしほ山神代のまゝの花の色かを

樵路日暮

山遠くかへる木こりは夕暮の月になりてや越る一坂

暮山聞郭公同四廿五 近衛殿御會豐州杉網入道古頼實業行

月をのみ待し夕の山のはに聲ほのめかすほとゝきすかな

隔年戀同御當座

中かきのよそなるさへもうかりしにいかてか年を隔きぬ覽

夏草露同五九 於西園寺左府亭與州松葉入道

くれてみむ茂る河への夏草に螢そ露の色を添ぬる

獨述懷

いかにせはわか身ひとつも四の國二の嶋に名をもしられん

郭公同五廿五 公宴御月次

山よりも空に名たかし夕暮の聲めつらしきほとゝきす哉

五月雨

いかなれは時こそ有けれ五月とて必雨のひかすふりぬる

名所旅泊

またなれぬ方のみみつの泊ふね行衛をとふも白浪の聲

雨中螢同六十三 愚亭當座

しめらすも晴やらぬ雨に消もせていかにかともす螢火の影

池上蓮同六廿五 公宴御月次

濁にもそまねはそまぬ心をもしれとや清き池の蓮葉

寄虫戀戀

かならすといひし今宵も松虫の待にかひなく明るはかなさ

水江芹

難波人さしてはなにのわさならしあし分小船行かへりぬる

星河繩久同七夕公宴

彦星は天の河せにあめつちのあらん限の秋や契りし
たまやなき同八廿五 公宴御月次

光をもちらさす露の玉柳つらぬく糸やなくみゆらん
をのゝすみかま

草木まで埋れはつる雪の日も煙はのほるをのゝ炭竈
あかつきば

鐘の聲鳥の音そへてあか月はいとゝめさます秋の夜長さ
暮春花

限ありて彌生の空は暮ぬとも花は千年の春もみてまし
瓶 花同人に代て

見捨つゝ歸るそつらき一枝は手おるもゆるせ家つとにせん
岡 花

はるにこそしはし心を岡のへの花より外になくさみもなし
新樹朝風 同四卅 於太秦亂院月次會

いまは又花ともいはし若みとりたちまさりつゝにほふ朝風
夕聞郭公

心あれやたそかれ時の一聲に名のりをしつゝゆく時鳥
海邊眺望

雲かすみはるれは近し住のえや浪にうかへる淡路しま山
海邊眺望 人に代て

いく十度沖の小嶋による波はいつくにこえて又かへるらん
首 夏 同當座

今朝ははや霞の衣ぬきかへて卯花かきね夏やきぬらん
戀 戀

いかなれは花田の帯のいとなくむすひし末の色かはる覽
軒廬橋 同五廿二 於太秦亂院月次會

小夜まくら軒のあやめも香を添てはな立花に風かよふなり
瀬鶉川

さしくたすせゝの篝のおほる河末やかつらの鶉船なるらん
變約戀

今宵とはかたみにいひてとひこしをなとしも人の答たになき
軒廬橋 同人代

のき近き花橋のこたへせはとこ世のむかしとはまし物を
瀬鶉川

消やらす河瀬の浪になす罪もなにかう舟のかゝり成らむ
變約戀

必すと頼めしけふもあひみねはいかに契ていかにとかめん
早 苗 同當座

行末の秋を心にくるゝをもおほえす田子やさなへとるらん
白 梅 同九廿五 公宴御月次

たに河の水にし梅の散うきてさなからにほふ春のしら浪
寄鳥戀

鳥立にも思ふといへは思ふてふ例もしらてなとみさほ成
分別功德品 同十三 於三條亞相勸進祖父道達院卅三回

をのつから思ひしとけは法の道わか心こそをしへとはなれ
懷 舊

敷嶋の道のみならず三十あまりみし面影ににたるもそなき
落葉埋路 同十 於太秦月次

かへるさを誰にとはまし山里はつもる木のはに道も別れす
江寒草 同當座

こと花のかれしお花にさくやいかにまのゝ入江の雪の朝明
松經年 輞

としを猶ふりそふ雪もすかたをは埋まさりける松の木高さ
あ首夏藤同廿二日 親王御方御夢想御法樂

青葉にもさきまします藤の夏かけて梢に春をゆるし色なる
れ見 戀

例なれてなとかつれなく年月をみるめ計に過しきぬらん
落 葉同廿五 公宴御月次

やまかせの又吹たてゝ梢よりおなし木のはの落そかさなる
千鳥

我君をかそへあけてや濱千鳥千世々々といふ聲のみのする
偽 戀

中々によしつらからて等閑のなさけをそふる言のはそうき
朝時雨同廿八 飛鳥井月次會

照もせず曇もはてぬ朝日影さしもさためす時雨ゆく空
橋落葉

いろゝの木のはつもりてさなからに錦をりかく峯の梯
初逢戀

かくてしも末いかならむ今宵まつたのめぬ人に逢み初てき
池水鳥同當座

枯わたる池のあしへにひとりたゝ鴨はあをはの色をみせ鳧
歳 暮同當座

なすわきの何に月日もくれはとりあやなく暮る年にも有哉
契 戀

よしや人いひさくる共替らめやかはらしとのみ頼め置身は
石間氷同當座

うすかれや氷る岩まも下くゝる水の音をはとつるともなし
神 祇

みかさ山はやくも四の宮はしら國の民のつくりかへてよ
十二月廿六日雪中獨吟於濃州岐阜旅舍

大内よりの御つかひさねとしてしばすの廿日あまり
のころ美濃の國岐阜といふ所にくたり侍けるに雪の
ふる日いなはの山にむかひて御ことのりのおもむ
き成就し侍るやうにと天地に祈念し又は境地のおも
しるさを筆にまかせて志のゆく所しかなり

野史拾翠

すへらきの御ことのりには武士もしたかはしめよ天地の神
都路にいなはの山の嬉しさを色にいてゝもいさかへりこん
あふきみよ一の石の山たかく生のほる峯にかゝる白雲
おもふ事心のまゝになるみかたさはりも浪に立かへりなむ
よそにさへ名高き山の峯に生るまつたくひなきゆきの曙
雪の色をよふもなきをうつしゑに素きを後と誰かいひ劔
所から光をみかく玉のちり玉のみきりも何ならぬまで
ふりくらすみのゝ小山の雪の色にさす笠重き里の通路
秋も過冬深ければ月日なをつもるもしるきふれる白雪
にきはゝむ國のためしに豊なる年をみせたるけさの雪哉
元龜三年 正二位行權大納言臣藤原朝臣言繼

梅有色彩正十九 公宴御會始

しろきをは後にやおらむわきて先匂ひもふかき紅の梅
鶴遐年友同廿 一條殿御會始

雛よりもいく十の年の霜ふりて老行迄のとも鶴の聲
増 戀同當座

聞しよりみても思ひのます鏡いつかはいつも向ひてまし
鶯告春同廿五 愚亭月次會始

けふ立をいかに知てか鶯のきゐる千年のはるのはつ聲
春 月同當座

まとゐするよはも短しあつき弓ゆみはる 春の月霞む空
述 懷

おもふそよ任例にも百敷やもゝのつかさの時にあふ世を
殘 雪同三廿五 愚亭月次會

くるはるの跡やつけゝむ谷の戸はふむ人なしの雪の村消
久 戀

思ひさていつ山人のをのゝえもいはて朽ゆく袖いかにせむ
柳同當座

さきなはと風のまにゝ線ためて花やぬひものゝ青柳の糸
鶴

わきて猶寒き霜夜はまた雛の子を思ひての老鶴の聲
春 曙同二十 愚亭月次

月雪の空も及はしほのゝとかすみなしたるはるの明ほの
恨 戀

つらしたゝ返すゝもさよ衣うらみなからに身を盡せとや
夏 雲同當座

涼しさはいはんかたなし風かほり雲もにほへるむら雨の空
夏 海

かつきする海士人さそな水底のみるめやわきて涼しかる覽
夏 衣同人代

着換ても猶あつき日はししまつからまくほしき蟬のは衣
霞同廿五 冷泉勳進

かけ高き松は縁にしめのうちこの野ゆたかにたつ霞哉
霜

朝毎に空よりやをくとけて又もとのしづくか霜にむすへる
神まつり同六十 愚亭月次當座

神まつるけふとて雲の上人の出す車よいつのまゝなる
もとゆひ

思ふそよ思ふ子の子の紫の初もとゆひをみるよしもかな
猪名野同六廿五 冷泉勳進

かるもかくやかて茂りて小篠のみ深き猪名野の露の涼しさ
益田池

さのみ又影もはなれすとに角に思ひ益田のいけるみのうさ
七夕衣同七夕公宴

織女にいつれありともわきてけふ七かさねの衣やかさまし
初 秋同七十 愚亭月次會

草も木もいたりいたらぬ秋の色を獨さためてをける白露
祈 戀

今こそはよしつらくとも天にます神もあはれめ祈る行衛を
乞巧筭同當座

けふことにひかて手向る玉琴は二の星やかき合すらん
暮 秋

もみちちり千種の花もうつろひてなめ淋しく秋を暮行
寄松戀

いつまでか恨をしのかの濱松のまつはかりにも夜を明さまし
寄車戀

巡りあふ限りもあらは小車のしちのはしきかききてしもみむ
夜 霞人代

隔こし都を思ふ手枕にゆめもくたけてちるあられ哉
早梅似春同二十五 於一條殿御會

年の内にたつてふ春を先みせてひらくや梅の唇なるらん
歳 暮同御當座

弓とりてなやらふよはもま近しといひしはいつの儘に有劔
恨戀

かつきする海士ならぬみのいかなれは恨つゝ猶年をふる覽
元龜四癸卯年天正元 正二位行權大納言臣藤原朝臣言繼

陰たかく生のほる松は君か代にいく十かへりの花か咲らん
松歷年正十九 公宴御會始

霞添山色同正廿九 親王御方御會始
はるのいろ顯れゆくやあし曳の山はかすみの立にまかせて

寄道祝言同二六 冷泉拾遺會始
ちりひちの山とし積る言のはの道をうけつく宿のかしこさ

梅 風同當座
なにはつの昔かはらすさくや此はなの香さそふよゝの春風

恨戀
むは玉のよるの衣をかへしつゝうちぬる夢も恨みならずや

社頭
三笠山今年は四の宮はしらいとふとしくつくりかへてよ

落 花同三廿二 公宴水無瀬殿御法樂
うつろへる梢とみれは吹かせのよはきも花をさそひてそ行

薄暮煙
遠かたのさとのむらゝうちなひく煙を色に暮てゆく空

瞿夏勝衆花同六八 於飛鳥井中將
うつろふな猶とこ夏にみはやさむ千種万木はなはありとも

五月雨晴同當座
五月雨の雲間ならすは秋の空も及はぬよはの月をみましや

山家夕嵐
なくさめて人は音せぬたそかれにあらしのため山の下いほ

穠菊盈枝 重陽公宴御會
さきそひて花にもれたる枝もなく降ぬ雪をも秋の白きく

残雪 九月盡 公宴御當座
峯たかみ霞ふきとく春風にきえ残る雪を花かとそ思ふ

恨戀
なをさりに思ひもすてぬおりゝの恨にふかき情をそ見る

野郭公同廿六 公宴八幡宮御法樂
夢さます假ねの野へのほとゝきす猶もきかなん明ほのゝ聲

梅雨
麓をもたかねもわかす遠近は雲につゝめる五月雨のころ

絶戀
此まゝにたえやはてなんいさゝかの言葉の末を恨とはなる

夏 秋同人代
思ふそよ難波の事もけふよりは悪きもよしと御秋をそする

螢同六十五 於太秦置珠院月次會
徒にをくるもしらて夕まくれあつめぬ窓をとふ螢かな

蓮
濁をはうきはの下に隔つゝ蓮にをける露のすゝしさ

旅
老かみの足とからねは旅の道をくれて 友たにもなし

螢同人代
河かせや吹たちぬらむ一かたにすたく螢のうち亂れ行

蓮
しら露の玉をかさりて花も葉も池の蓮をかほりえならぬ

旅

跡さきとおなしやとりに行あひて語るに社は國ふりもきけ

杜夏草同當座

涼しさに立よる杜の木陰にはさゆりなてしこ花も咲けり

稀戀

へたてゝはたのめさりしに天河ほしの契をわか中にとは

松下泉同人代

かへらめやしはしは夏をわすれ井の水を結へる松の下かけ

若菜同六廿五 公宴御法樂御當座

雪なからゑくもましへて摘たむるほとやいく田の若な成覽

歸鴈

雲かすみたつを錦と鴈のきて故郷にもやかへり行らむ

擣衣

かさねてはきねとよ寒に忘れつゝきぬたをしもや擣明す覽

七夕植物同七廿公宴

百草のあるか中にも彦星のうしひく花を手向とやせん

湖上月

から崎やいつくの秋か及はまし今宵鴈てる月のひかりに

春月同二十二 河内源五郎勳進夢想法樂

久かたの空には立もをよはしをなとか住らん夜半の月かけ

禁中神樂同十二廿五 公宴御月次

わか君のちとせを猶もいのるてふかしこ所の前張のこゑ

歳暮雪

暮てゆく年木こるへき山路さへふみわけかたく雪や積れる

砌下有松

色かへぬためしをしれといつよりか栽て砌の松の木高き

永祿十三年金山薬師万句

ゆくはるをつなきとゝめよいと柳

天正二甲午年

初春祝正十九 公宴御會始

節會時毛寒 幾爾使安利氏御酒給布春能惠美加志古佐

花雪二廿二 公宴水無瀬殿御法樂

はなを今あらしや空にさそふらん雲より散てにほふ白ゆき

増戀

つらさにはこりもせよかしいと猶したふはなにの心成覽

海邊月同廿五 公宴北野神社御法樂御當座

あかしかた波の友ふね心あれや月にさほさす秋のうらん

祝言

天みてる光そへてよ君か代はあふく此野の神のまに

螢同六廿五 公宴北野神社御法樂御當座

さく花の色こき草の朽しもやぼたるとなりて光みすらん

萩

それとまた穂には出ねと昨日けふあきと夕のおきのうは風

千鳥

夜もすからたゆむまもなくしは鳴はいく村ちとり聲を添覽

星河秋久同七廿公宴

あまの川神代のいつの秋よりか契をきてしあふ瀬なるらん

盛花同二 内侍所御法樂

峯もおもひとつ色にし咲比の花につゝみてときは木もなし

風前花

匂ひをはよしさそふとも春風にさくてふ花をふきな散しそ

柚花

春きてはさそな朽木の柚人もはなの袂やまつひかるらん

湖 花

にほの海やひらの山風ふくからによするとみるも花の白浪

待 花 同八廿五 公宴御月次

消のこる雪の色よりまかへきて霞も雲も花かとそおもふ

篠 霰

風ならて又一とをり音すなり霰打ちりさやくさゝ原

寺

しつかにと思ふのみなる古寺も峯の松かせ又瀧のをと

五月雨 同日 公宴御月次

空はなを雲重なりぬ五月雨は今いくかありて晴んとすらん

別 戀

しはしたゝおきは別れし鐘の聲鳥の音きかて住さともかな

竹

植しより枝に霜をけと常盤にて千尋ある陰に住かかしこさ

同五廿四連歌師紹巴興行 小野小町影弘法大師五筆感

得人々に詩歌よませけるに

梅 雨 同五廿五 公宴御月次

見し春の俳ながら花の色はうつりにけりな木々のあをはに

納 涼

つくりなす庭に瀧おちいつもみぬ澤水ひろき五月雨の頃

曉 鷄

風之音もならのはかしはうち茂り行過かてにすゝしかり鳧

まとろめははや明方の短よに八聲までやはとりもなかなん

夕鶺鴒 同六廿五 公宴御月次

聞聲増戀

さらぬたにふかき思ひのつま事の聲に心のなをそひかるゝ

遠山鐘

はつせ山さそふ嵐にすかはらや伏見を遠み鐘かすむなり

遠村卯花 同日 同人代

時ならぬ雪かとみえて寒からすうつ木花さく遠の一村

待 戀

我心かよひやすらしよなゝにきけはよそにも松かせの聲

田里夕煙

立のほる田つらのさとの夕煙なひくや風のすかたなるらん

七夕草花 同七廿公宴

あるか中に牛ひく花を彦星のまつけふことの手向にやせん

愛 萩 同七廿五 公宴

宮城野やまのゝ眞萩を移しうへませゆひたてゝ猶見はやさん

寄玉戀

河 月 同八十五 公宴御當座

底清くうつれる月の桂川かけもとまらぬ瀬々のしらなみ

躑 躑 同八廿五 公宴御月次

散て猶くれなゐ櫻こき色にのこるとみえてつゝし咲也

冬 月

冬になをわきて光のさやけきも月の桂や落はするらん

普門品 同八九 同人に代て

身をかへて猶あまれくももらさしの法の教のちかひ頼もし

菊粧如 錦 同重陽公宴

仙人の苗をあつめし色々の花のにしきはきて見さらめや

月前擣衣同九十三 公宴御當座

よを寒みいそきぬたも有明の月みるほとや打たゆむらん

冬月

影もなを雲間はわきて清ければ時雨そ月の光とはなる

恨

いかにせん蟹の子ならぬ身にしあれと恨てのみを年はふりぬる

近見花同十五 公宴御月次

こゝをよきてよそは尋ねし片かきの間近き方の花を社みめ

霧底筏

立こむる霧またとりて大井河くたす筏のとこいかならむ

磯浪

徒に同じ磯邊をいつとなくよせかへる浪も世のなかそかし

法師功德品同八廿九 故二條殿十三回御勸進

法の道聞うるならはよの人の見ぬを鏡にうつしてもみむ

壽量品同王十二廿一 稱名院右府第七日

藥そと先きくからに法の水うけてこゝろの濁あらめや

嶺雪同廿五 公宴御月次

木々はけささなから花に降なしてまたこぬはるを峯の白雪

竹雪

ふるとしもみさりしものを呉竹のよのまにふかく積る雪哉

松上雪

ときぬとみきりの松に十かへりの花をさかするゆきの色哉

寄雪祝

年も今豊なるへき色見せて猶いや高く雪そつもれる

杜同御當座

降雪に色そめかへて今朝は又みな白妙の衣手のもり

沙

言の葉の敷にしとらはわかぬ浦や濱の眞砂もいかになよはん

藤理松同十二廿五 公宴御月次

行春の末の松山こゝにしも木すゑをこえてかゝる藤なみ

寒草霜

日影さす方よりちりて一さかり花をみせたる霜のした草

永祿五二廿五於淀細川右京大夫千句

織ぬふやはなのにしきのいとさくら

右言繼卿集雖有少々不審以無類本不能校合

群書類從卷第二百四十二

和歌部九十七家集十五

明日香井和歌集 參議雅經卿

鳥羽百首 建久九年五月廿日始之毎日十自披講之

詠百首和歌

侍 從

立春

東路をいそぎ立ける程みえて今年越ぬるあふさかの春
今はさて今宵はかりと思ひねのあたに覺ぬるふる年の夢
東より立くる春やこれならむ霞のおくの明ほのゝ空
今朝よりは都のかたの雪消てまたかたさゆる谷のした風
今朝よりのなめはそれに成はてゝかすみも馴ぬ初春の空
驚も出あへぬほととの明ほのに先春つくる鳥のひとこゑ
いつしかとくるつらゝはそれなから波も聞えぬ音なしの瀧
今朝こそは同じ日數に春をしる心のうちを人にしらるな
けさこそは花に成ぬる俤のなめにかはる雪の明ほの
もろ人の春にあふへきゆへなれやはこやの山の千世の初空
花
梢にはまた春あさし吉野山さえたる風の音はかりして
これそこの霞のうちの梢よりまつさきたちしおもかけの花

さてはいかに人にはかはる氣色哉花待えたる春の山かせ
詠やる高ねは花にうつもれて雲のみふかきみよしのゝ山
たれもみな花に心をうつしきてみやこのはるはしら川の里
たとりつる霞はよそのなめにて匂ひにこもる春の花かけ
咲そめし花に心をいれしより春の日かすはみよし野の山
花かとも思ひもはてぬ山路よりなめまよふみねの白雲
とにかくに思ふも悲し吉野山花ゆへにやはいらむと思ひし
をのつから青はに残る花の色やつらき嵐のなさけ成蘭

霍公鳥 此題三首不足略

花もまた忘れぬ程の夢路より山ほとゝきす春に鳴なり
ほとゝきす待えぬほととゝきすめは心にとめし去年の古聲
とにかくに名残と思ふほとゝきす聞たにはてぬ聲の明ほの
待來つる五月の頃になりぬれば雲に聲あるゆふくれのそら
五月やみ雲路もみえぬさよ中に山ほとゝきす聲まよふ成
したひ行心の末になく聲もきく心地するほとゝきすかな
つねならぬ老やはつらき郭公さてこそあかね人のこゝろを

五月雨 此題一首不足略

五月雨はすたく蛙のこゑなからさはきそまさる井手の浮草
さみたれは雲のしからみ越にけり空よりあまる天の河水

五月雨は軒の雫の音すみて長閑に更るあま雲のそら
さ月やみ窓うちあかす雨の音にこたへて落る袖の玉水
初せ山入あひのかねの音までも打しめりたる五月雨のころ
さみたれの日敷の外や小男鹿のつめたにひね山川の水
うち川のはやせにめくる水車そらよりそくる五月雨の頃
雲間よりいてぬ日影のほのみえて扱しも晴ぬさみたれの空
五月雨のおなし雲まに秋をみて獨はれたるおもかけの月
月此題一首不足歌

ほのめかす鳥羽田のいなは打なひき露に影有夕月よ哉
それもみな出へき程の有物をまつ心にやいさよひの月
しかばかり待には暮ぬ空なからいつれは更る秋のよの月
晴やらて山端たかく成にけり雲よりいつる秋の夜の月
詠むれは更行まゝに雲はれて月すみはつる秋かせのそら
哀にも袂にやとる光かな月や情をおもひしるらん
おもかけを何に忘れむ秋の末なかも馴たる在明の月
思ふ事はそたかはぬあきの月我ゆへはるゝそらならねとも
むねのうちにたのみもふかき月よりも先心すむ秋のよの空

紅葉一首不足歌

外山より心にふかきうす紅葉時雨のおくの思ひやられて
かはり行すそのゝ萩の下はより梢につゝく秋の色哉
よそにたにみてやは過し柞原きりのうちまで思ひ入らむ
秋山の色を心にそめかへて詠すてゝきみねのしら雲
のこるへき秋のかたみのためなれやまた青は成枝の一むら
思へとも色はみやこに遠ければあたちのまゆみ音にのみ社
ちりつることをかねてや谷川の影よりうつす峯の紅葉は
衰さて是はかきりの色なれや秋も末はのはしのむら立

おもふよりかれてかつちる詠哉たつ田の山の秋かせの色
雪

むら時雨跡より晴し山端のやかてくもるや雪け成らん
朝戸あくるなかもは霜の心地してまつにはななく薄雪の色
分なれし木のはの上に雪つみて跡たえはつる秋の故都
よはさゆる冬の朝になかむれはまつ都にはをの山のゆき
みよしのゝいはのかけ道跡たえて人やはかよふ雪ふかき頃
程もなく哀もふかきなかも哉こまかにつもる夕暮の雪
ときはなる松のみとりも埋れてなにの梢の雪のむら立
たれかみる夜深くあくる横の戸に雪よりしらむ庭の明ほの
この比はかけのかよひち心せよふゝきにこゆるこしの旅人
いはしろの尾上の松に雪ふれば風の音までむすほゝれつゝ

歳暮一首不足歌

畚ねはやあすか都に年越て春はこよひや關のあなたに
春よいかに年をこめてや立ぬらむ宵よりかすむ面影の空
春たゝむ氷の下のおもかけやうち出かたの波のはつはな
月をのみめつるつもりも今夜にて年こそ人の老と成物
いたつらに哀あなうと思ひきて過し日敷の一とせのはて
大かたの日敷もけふのなかにて暮はてぬるか年の夕暮
みな人の年のつもりを哀なるいそく氣色をみるにつけても
ゆく年を送りはてつるうたゝねの夢路にちかき春の明ほの
はかなしと思ひはてつる詠より袂につもるけふの年波

戀

懐かしと思ひ初てし氣色にはつれなかるへき君とやはみし
思ひ餘る心の程や見えぬらむうち沈まればなかせられて
厭はるゝうき身の程のことはりもいさや心のあらは社あらめ

あやなしやをさふる袖に移りきて泪にしつむ君か面影
をししかへし思ひしつむる身の程にあまる心やあくかれぬ
人しれぬ心の外にもる物はをさへてむせふ袖のした水
かへしてもむなしき床にしほる哉恨はてつる夜はのさ衣
きても猶かさねそやらぬさよ衣かへさぬ夜はも恨せよとや
あかなくに立かへりぬるおもかけやなかにうつつ有明の月
命にもかへむと思ふあふことに先きえ行はこゝろ也けり

述懷

思ふにも猶たのもしな千世ふへきはこやの山の行末のかけ
立かへりなをやはかなくまよひ南此度なかく離るへきよを
いとほしな扱もなからむ後は又戀しかるへき此世ならすや
つく／＼といつをいつとて過す覽急きても猶急くへきよを
さりとても思ひもとらぬ身の程に何と心のありかほにこは
あくかるゝ心そよにもまとひぬる思ひ定むる心地なきほと
とにかくに思ひし事はたかひきて果はよをたに背き兼ぬる
なにとなく哀身にしむななめ哉うき世を是そ夕くれの色
哀なりいづくも草の枕にてつゐのすみかは苔の下ふし
あはれ我なつまで過る道もかなくらゐの山の岩のかけ道

後鳥羽院第二度百首正治二年

冬日詠百首應製和歌

從五位上行侍從藤原朝臣

春

霞

雪消るはるはみとりのゝへの色をかすみ初つる明ほのゝ空

春は猶明ゆく空そあけやらぬ霞かゝれる横雲のやま
風の音も春の氣色になかみかた波路はるかにうす霞つゝ
かすみ行まゝにみきはやへたつ蘭また遠さかる志賀の浦波
まきもくの檜原か末は長閑にて霞の上に春風そふく

鶯

うくひすの泪の氷いかならむふきにし物を春のはつかせ
春きてはまた雪ふかき梅かえに宿とひかぬる鶯の聲
初音より名残そ思ふ鶯の都へ出るはるのやまさと
今よいか月に月影かすみ明ほのゝ梅のにほひに鶯のこゑ
古集たつ都もはるの梢にて霞を出ぬうくひすのこゑ

花

これも先あかぬ心に入やらて外山の花にけふは暮しつ
詠てもねたきは雲の色なれや思へは春の花のさかりを
よしさらは花のふもとの松にふけいとひもはてし春の山風
吉野河ゆくせもみえぬ霞より風になかるゝ花のしら波
何としていか成へしとなき物は花にあらしの春の暮かた

夏

郭公

うの花のかきねより社子規まつちり初る忍ひ音のこゑ
ほとゝきすまつ夕暮に句ひきてたのめかほ成軒のたちはな
初音とていかにかたらむ子規まちふるしたるよはの一
我もまたほのかにきゝつ郭公誰まちえたる夜半の一
いつもあかぬ名残なれとも子規ひと聲のこるみな月の空

五月雨

霞しく朧月夜とみし物をへたてはてつる五月雨のそら
詠やるいこまの山のみねの雲いくへになりぬ五月雨の空

五月雨はもとのみきはも水越て波にそきはくいての浮草
さみたれの頃ともいはいつとも雲は軒はの山かけの庵
我袖にむかしとはむ橋のはなちる里のさみたれのそら

秋

草花

袖の上にうつれる色やそれならぬ折はやつさし秋萩の花
のへは閨草はをのか枕にて露にのみふすをみなへし哉
萩原や風まつくれの下露をよそにもかこつ女郎花哉
花薄なにとて秋を待けらし忍ひし程は露かゝりきや
まねくおはなうらむる葛に事とへはたか秋風のゝへの夕暮

月

秋よたゝ夕のそらを哀ともなかもはつれは山端の月
花の春なれし名残の佛に秋の月とはちきらさりしを
光もる軒のしのふの露ながら袖にみたるゝ夜はの月影
なかもわび更行まゝの袖の露月やはつらき秋のよのそら
月影の名残をのみやなかもへき秋もいくよの明ほのゝ空

紅葉

そむるより心やつくす立田姫あらし吹そふ秋の梢に
しくれ行木々のこすゑや移るらむ露も色つく杜の下くさ
尋入秋はとやまの色なれや是よりおくは松かせのこゑ
秋は猶たえずや松の下紅葉思ひもすてぬ色をみすらむ
宿うつむ軒はの薦の色をみよ深山の里の秋の氣色を

冬

雪

晴くもるあらしにさゆるむら雲のしくるとすれは初雪の空
さひしさはかれのゝ原の末よりも雪の朝のとを山の松

ふりにける跡ともけきはみえぬ哉志賀の都の雪の花その
御狩野や雪はふりきぬ是も又ぬるとも花のはるのおもかけ
たつねくる人は音せて三木の山杉の木すゑの雪の下おれ

氷

石はしる清たき河は玉ちりて結びかねたるうす氷かな
そこ清き玉江の水のうす氷やとらぬ月もみる心地して
霜こぼる尾花か末も波の音もむすほゝれたるまのゝ浦かせ
あらし山木のはの音も落はてゝとなせの瀧は氷してけり
山河の岩本たきつゆく水のこぼるへしともみえし物かは

雑

神祇

君かため明はしめてや久かたの天の岩戸のいにしへの空
いはし水そのみなかみを思ふにも流れて末は久しかるへし
賀茂山のたかねにかゝるしら雲や分し名残の空のかよひち
住吉の松にたのみをかけ置てけふはうれしき波のしらゆふ
わけうつすおなし日吉のかけなれや光は是そあけの玉垣

釋教

をしなへて尋ね山の花もみつへたつる雲のへたてなければ

天眼通

遠さかる聲もおしまし子規聞のこすへき四方のそらかは

宿命通

世々をへて過にし方を思ふにも猶くもりなしよはの月影

化心通

皆人の心々そしられける雪ふみ分てとふもとはぬも

神境通

思ひたつ程こそなけれ東路にまた白河のせきのあなたは
曉

夕へとて淋しからすはなれともたへぬ哀は明かたのそら
いとふへき契有ともいかゝせむ夜ふかき鳥のほのかなる聲
今はとてたか道芝にわくる露あはぬねさめのよその袖まで
さても猶夢をはかなみまるとまんしはしな明そ小庭の床
東やのまやのあまりのやすらひに先たつ人の音はすく也

暮

色かへぬ色こそかはれ夕附日さすやをかへの松のむら立
詠むれは暮たにはてぬ山のはにいつかたふける三日月の影
やまのはに月待頃のしはの戸をさゝすやなにをみねの松風
雲くるゝやまかたつきて誰か父都の空をななめそふらむ
おほえすよ野守や近きいほりさすあたりもしらぬ入相の鐘

山路

なかし夜のさよの中山明やらて月に朝たつ秋のたひ人
時雨つる磯邊の雲を分くらし野原にいつるそての月影
ふる郷のたよりとならほことつてむ袂にむかふうつの山風
暮行は宿かる方もしら雲のかゝれる峯に立そわつらふ
ゆきかよふかけのほそ道末たとりこゆとしらする旅人の聲

海邊

明石かた月ゆへならぬ詠まではれて淋しき波の上かな
都思ふ袖をはゆるせ清みかたきこそならひの波のせき守
哀なりいつれの浦の泉郎ならむ寄かたもなき興の釣舟
なみの音松のあらしの浦つたひ夢路より社遠さかりぬれ
またしらぬうきねの床の梶枕なれぬ袂になるゝなみ哉

禁中

百敷やたえぬなかれをみかは水猶行す糸のかけもはるけし
河竹のかはらぬ色のふかみとり玉しく庭の末ぞしらすゝ
治れる世のためしとやかきとめし風も音せぬあら海の波
くもかゝる大内山と成にけり幾よのちりのつもる成らん
衛士のたく煙たえせぬ御代にあひて民の寵もいかゝ嬉しき
宴遊

公事

春の朝はこやの山のみきりより先いはひたつ雲のうへ人
今日にあふ雲るの庭のすまひ草とるてもあたにうつる物かは
これも又ちとせの秋のためし哉けふこととにひく望月のこま
君か代に雲のかよひち空晴て乙女のすかた月に見るかな
新玉の春をむかふる年の内におにこもれりとやらふ聲々
祝言

雲の上もはるのみやまの萬世も松と竹との末にたとへて
いつとなく君か齡はわかぬ浦に千年をさして田鶴なき渡る
きみか代を思ふ心の末の松波はこすとも色はかはらし
幾千世もおなし月日の廻りきて變らぬ御代は空にしるしも
百草の千くさにあまる言のはも君かみかけは末そさかへむ

千五百番歌合百首建仁元年

秋日同詠百首應 製和歌

春

從五位上守左近衛權少將藤原朝臣

きのふかも年はくれしか天の戸の明るまちける春霞かな
 氷とくをきつ春風吹ぬらしみきはにかへる志賀の浦なみ
 はれやらぬ雲は雪けの春風に霞あまきるみよしの空
 若なつむゆかりにみれは武さしの草はみなから春雨の空
 雪さむき山の軒はの梅かえに春を待しもうくひすの聲
 春もきて立よるはかり有しより霞の袖の梅のうつりか
 霞むより雲路にのみを聲はするさはへの田鶴ものへの雲雀も
 誓告

しらくもの絶間になひく青柳のかつらき山に春風そふく
 立歸りみても見まぐの花盛さそはぬ風のうち匂ひつゝ
 山高み雲みの櫻くもとみて休らふ程に風やふくらむ
 たにかせや山も霞のひま毎に又うち出る花のしら波
 山風のふきぬるからに音羽川せき入ぬ花もたきのしら波
 雪もうし嵐もつらし山櫻まかふとみれはちりはてにけり
 春のうちは待もおしむも思ひねの花をのみ見る頃の夢かな
 忘れすは散なむ後も思ひ出よ花みかてらの春のよの月
 三吉野やたのむのかりの聲す也花に名残の春の明ほの
 ささゝをみいく野の末を見渡せは霞にかへすはるの小山田
 暮ぬともいかゝみすてゝ橋のたつねこしまのやまふきの花
 うつり行春をはたこのうらみても忘れすかけよ岸の藤波
 限りあれば今宵もすてに更にけり暮かたかりし春の日數の

夏

袖の色も移りにけりな夏衣春は暮ぬとなかめせしまに
 卯花や春をへたつるかきねまで残はてたる雪のむら消
 花は春ちりにし峯に哀てふことをあまたにやらぬしら雲

秋

たつねはやさ月こすとも子規しのふの山のおくのひと聲
 數ふれはこぬ夜あまたの郭公待にまされるなかめせよとや
 子規ねさめさりせはとはかりも思ひもあへす過るひとこゑ
 橋の匂ひは今そほとゝきすなかなはなくへきゆふくれの空
 いにしへやみぬ俤もたちはなの花ちるさとのありあけの月
 五月雨に越行浪はかつしかやかつかみかくるゝまゝのつき橋
 石上ふるのゝ道も夏晴くさに露分衣そてふかきまで
 夕立の名残はみねに雲消てすそのゝ草の露の一むら
 明わたる雲のいつくに入やられて山のはかこつなつのよの月
 立よれば衣手涼しあらし山秋やとなせのたきのしら波
 夏ふかき野原の暮に影みえて螢露けきさゆりはのはな
 みな月やさこそは夏の末の松秋にもごゆるなみの音かな

朝倉や木の丸とのにたれとへは秋をもななる萩の上かせ
 久方のあまの羽衣まれにきて契りはつきし星合のそら
 萩のはなさくともよそに宮城のゝ木の下露の秋の夕くれ
 をとつて身にしむ風の吹しより結はぬそてにおきの上露
 咲にほふ千種の花の末はよりうす霧なひく野への夕かせ
 尋ねてもたれかはとほむ三木の山霧の籬に杉たてる門
 夕附夜やとる山田の露の上にかりねあらそふいなつまの影
 よしさらは袖にもかけをやとしてむ月待よひのやまの下露
 眞葛はら露に光をさしそへて玉まぐ物は秋のよの月
 かつらさやたかまのみねに雲晴てあくるわひしき在明の月
 有明の秋そ名残は大はらや月をゝしほの山のはのそら
 ともしせしは山しけ山忍ひきて秋にはたえぬさをしかの聲
 秋かせにうつら鳴のゝ夕まくれなきこゝろまで哀をそしる

夕暮はいづくをいかになめまし野にも山にも秋かせそ吹
いはしろのゝへの下草ふく風にむすほゝれたる松むしの聲
何とかくはらひもあへす結らむ袂は露のをき所かは
夜なゝはやり馴にし月影もかれ行をのゝ淺ちふの露
暮かたの木のはにまかふ秋の雨の窓うつ音に夜は更にけり
あきふかき松の嵐の立田山よそのこすゑを先はらふらむ
ふかくさや秋さへ今宵出ていなはいとゝ淋しき野とや也南

冬

秋山に時雨は過ぬ神無月このはそ冬のはしめとはふる
ゆく秋のわかれし野へは跡もなし只霜ふかき淺ちふのはら
くれぬとも猶秋風は音つれよ萩のうはゝのかれゝにたに
行かへり是や時雨のめくる雲又かきくらすとを山のそら
霜やこれかはらぬ色をおきあかし月にかれのゝ秋のふる郷
此ころは月こそいたくもる山の下はのこらぬ木からしの風
ふちはせに變るのみかは飛鳥河きのふの波そけふは氷れる
つくは山しけき木末やいかならむこのもかもの雪の下折
とふ嵐とはぬ人めもつもりてはひとつなかめの霜の夕暮
波の上に友なし千鳥うちわひて月にうらむる在明のこゑ
芦間とちいかにうきねのをしの聲先氷りける波のまくらを
あしる木や宇治の河風よはさえておのれのみよる波の音哉
昔よりたえぬ煙の淋しきはむろのやしまの冬の夕くれ
哀にもをのゝ音までいそく也松きる山のとしのくれかた
としくるゝ春や昔の春ならぬもとの身にのみ立かへりつゝ
祝
千世を祈る神のみむろの榊葉は君かためしに茂りあひにき

戀

思ひやる心のはても猶過て道ある御代の千世のゆくすゑ
かきりなきよは久方の空はれててらす月日も長閑にそすむ
君かへむ齡をさして大そらにむれたるたつのおのか聲々
きみか代は常盤の山の松のかせ色もかはらし音も絶せし

雑

是やさは人を思ひの初けふりなれぬ詠のそらのうき雲
ほに出し芦のふしはの下みたれ入江のなみにくちははつ共
思ひせく心の瀧のあらはれて落とは袖の色に見えぬる
いかて猶しはしも人をすみよしの淺澤水のすゑはたゆとも
かけてたに頼めぬ波のよるゝを待もつれなきよきの浦風
哀ともいつかは人にいはれのゝいはれすかゝる袖の露よな
さきの世を思ふもうしや人心つれなかれとは契りしもせし
思ひわひ落る泪の玉ことにくたきはてゝもあるこゝろ哉
やとるとて月に涙をまかせても朽なはいかに袖のしからみ
歸してもむなしき床にしほる哉うらみはてつるよはのき衣
思ひかねつれなき中にまつ事はくらせる宵の夢のかよひち
山のはに入まで月をなかつともしらてや人の在明のそら
物思ふ心ひとつに秋更て人をも身をもくすのうら風
思ふこと残らぬ秋のゆふへにも猶わすらるゝ身社つられ
むすふ手の雫はかりを袖にみてあかても人に山の井の水
東屋のゝきの忍ふの末の露いく朝おきの袖しほるらん
やとれとや苔のさむしろうちらはらひ旅行人を松の下かせ
雲にふし嵐にやとる足曳の山のいくへのゆふくれの空
跡とめてとまるかたなきうきね哉さこそうきたる波ち成共

風わたる松の下ねのきよ枕夢ちまたゆるあまのはし立
玉藻しき袖しく磯の松かねに哀かくるも沖つしらなみ
けふも又萩のうはゝを空にみて露ふりくらすむさしのゝ原
草のはにしほれふしぬる袖枕夢やはむすぶよはのしら露
野への露山の雪と立ぬれてかことかましきたひ衣哉
哀としてしらぬ山ちをゝくりきて人にはつけよあり明の月

詠百首和歌建仁二年八月廿五日

正五位下行左近衛權少將藤原

春二十首

消あへぬ雪を花とやみよしのゝよしのゝ山のはるの初風
春霞たちなほみ雪稀にふれ若なつむへき野へのかよひち
はるも猶むすほゝれてや岩代の野中にたてる松の白雪
鶯の聲は都にふりにけり舊巢はいまた雪もけなくに
けふも又とふ火の野守しるへせよ今いくかありて峯の初花
雪もきえ花もちりなほ中々に雲そさひしきみよしのゝ山
百千鳥さへつりくらす春の目を物うるねにうち詠つゝ
するかなる田子の浦波うら馴て春は霞のたゝぬ日そなき
なめわぬ春の霞に入月のおほろけにやは在明の空
花さかていくよの春にあふみなる朽木のそまのよその埋木
八重霞たつ田かはらの河柳ふかくもはるの色になりゆく
ひきかへて緑の色をみちのくのあたちのま弓春雨そふる
雪の色は越のしら山しらね共はつかにかすむはるならぬ空
立わたる霞の袖や大そらにおほふばかりの春の明ほの
いつれとか梢はかりを三々の山霞にまかふ檜はらすきはら

人やりの春ならなくに行かりのかすめは空にをのれ鳴聲
なはしろの水かはあやな遠山田風にまかする花のしらなみ
ちりつる花はいくかそもゝ敷や大宮人の春のかよひち
きゝもせすみもせぬ山の嵐まで俯つらきはなの上哉
わくらはにとへかし人のけふの暮春の別にわふとこたへむ
夏十五首

袖の色になれに花のから錦たゝまくおしきなつ衣哉
分入れと袖やはぬるゝ卯花のうきたる波の玉かはのさと
浪速なる芦間をしふみかき分てけふはた同じ菖蒲をそふく
雪まよりほのみし野への夏も猶むすほゝれたる風の下草
一聲もいつらはよはの子規まつかとすれはあくるしのゝめ
たか爲もまちし五月のあやめ草あやめもしらぬ郭公哉
石上ふるのさみたれ瀧にそふいかにみかさの末のしら波
五月雨におりたつ田子のみつからもほしあへぬ迄早苗とる袖
むら雨の名残涼しきなてしこのとこなつかしき露の玉哉
あまのかるもにかすむてふ我からの音をたに鳴ぬ夏虫の影
夏くれは梢をしけみ葉かくれて蟬の鳴音はおほあらしの森
くもりあへす白雨すゝし夕つく日さすやをかへの村雲の空
月かけに風ふく夜半の夏衣たちこぬ秋になるゝ袖哉
いとひとしなつみな月の空晴て秋にまぢかき在明の月
みそきかば河波しけく立まよひ夏はなこしのけふの夕くれ

秋二十首

萩のはのなひく氣色はそよきてもまた馴そめぬ秋風そふく
たなはたのたえぬ契りもしら露の曉をきの天のはころも
分わふる袖の朝露打はらひ秋にしなれはみやきのゝ萩
露にふく浅茅かはらの秋風をいくよのやとにたれなむ覽

誰ともうれたき秋の夕暮をたえずも吹か葛のうら風
 さとはあれてうらむる虫の聲計庭も籬も秋の夕くれ
 ふる郷の秋をはかれす人もとへくるしき物と松むしのこゑ
 はらはしよ分入のへの露しけみうつるとすれは袖の月かけ
 なかしとはけにもいつらは月の頃みる人からの秋の夜の空
 あたら秋の月と露とをやとしもて哀もしらぬそてにみる哉
 たえ／＼に雲間を分て行月のゆくゑにまよふ秋のむら雨
 ひたすらに山田もる身と成もせし今やいなはの秋のゆふ暮^{露イ}
 鹿の音をねこし山こしことつてよつまにもかもや秋の夕風
 秋のくる峯の朝霧たちまよひ思ひはれせぬさなしかの聲
 あまのすむ浦より遠の秋よたたくもの煙夕きりのそら
 みよしのゝ山の秋かせさよ更てふる郷寒く衣うつなり
 秋は今末の松山なみ越てあたし心はあり明の月
 しくれ行よもの山邊をなかむれは空よりかはる秋の色哉
 時雨ゆくときはの山の岩ね松いはねは社あれ下もみちつゝ
 かつらきの山の紅葉はなかるらし冬を思へばあすか川かせ
 冬十五首
 冬きぬといはたのをのゝ梢より先しくるゝはあらしなり見
 曇り行しくれなはらふ松かせの音しもはれぬをかのへの里
 虫の音も今はかれ野にありてなし哀あなうの秋のふる郷
 ぬるかうちにをとやこのはの積るらむ夢ちたゆる山嵐の風
 外山なるまさきのかつら繰かへしいく度晴て霰ふるころ
 小さゝ原露ふき結ふ風の音のいとゝさやきてけきの初霜
 吹まよふ嵐の音の山めぐりくもる時雨かはるゝ木のはか
 さても猶秋の名残は在明のつきせぬ色をみねのしら雪
 雪ふれば秋なきときし咲にけり移しうへての宿のしら菊

戀十首

いつしかも影みし水の薄氷月や光をむすひをきけむ
 時しらぬ山ともみえすふしのねやつもれはつもる此頃の雪
 千鳥なくさほのかはらの河風に霧晴わたるあり明の月
 哀なりにほのうきすのうきてのみよるへしら波跡も止めず
 さひしとてやくとしもなき炭かまのたえぬ煙の大はらの里
 おしみかね今こそ春にこゆるきの磯たちならしいそく年波
 亂れあへすかゝる露をく物そとはまたしら菅のまのゝ茅原
 是やさはもゆる思ひをしなの成わか身あさまの夕くれの空
 思はしと思ひたえてもいくかへり解やらぬ戀を賤のをた巻
 さてのみや山路の菊の露のまにぬれてほしあへぬ片敷の袖
 いく世まで契りし後も久かたの月ならぬそらをまち詠つゝ
 更ぬるか思はぬ月はまち出ぬわれやゆかむのやすらひの空
 便りあらはいはたのをのゝをのれたに斯と告ぐせ葛の裏風
 消かへり落るなみたの玉のをのたえぬとかいはむ袖の亂に
 秋は只枯ぬるくさは道芝のしはしのあとゝみしやいつまで
 むすひをけ別しまゝの跡の露けなむ名残は人とはずとも
 雜此題歌十三首不足
 そむきえぬ我をやつねに松の風心ならはすみよしのゝおく
 さてはさていか成山にかくれなむ世にすむ月の行すゑの空
 なかむれは月はわかしのかたみかはあらましかはの人の倂
 とにかくに思ふ事のみ大原やせりうの谷に身をやなけてん
 世やはうき人やほつらき大かたは只我からと思ひなりぬる
 むがしまて立かへるへき我身かは道ある身には嬉しけれ共
 ことのはをちらし置こそ哀なれ朽ぬ名もあらんと思ふ計に^{はイ}

詠千日影供百首和歌

元久二年正月九日
相當立春仍始之

羽林員外次將

春

春たつといふはかりなる月日にて今日より空や霞そむらん
猶さゆるおなし雪けの空の雲たゝまくおしきはる霞哉
峯の雪たにの氷りもとけぬらむ鶯さそへ梅の下かせ
のへの色は若菜つむへく成ぬれと山のおくには猶雪そふる
見渡せば野へはみとりに雪きえて今はこのめも春雨そふる
こしのそらはいくへの雲の上に又霞とひ分かへるかりかね
花やさく霞のうちもしら雲のかゝれる山のあけほのゝ空
花の色はいまたよそこにもみねの雲重ねて消るきさらきの山
くもの色もおなしなからの山櫻霞そしかのはるの明ほの
しら雲とかすみはてゝも足曳の山のかひより春や行らむ
夏
久方の天のは衣ころもわかし今日のならひの夏は立とも
此頃はあなうの花の垣根まで山ほとゝきすな〜そふる
かけて待その神山のほとゝきすけふやはつねにあふひ成覽
あやめゆふおなしよとのゝ子規なれか鳴ねも枕にそする
人ことに戀ふる昔はかはれとも匂ひはおなし軒の立はな
今はたゝさそふ水あらはと思へ共袖のみそうく五月雨の空
世中はふかき契りをうかひ舟しつまんよゝのをと尋ねつゝ
露をさへ玉とあさむく蓮葉のにこりにしまぬ夏夜の月
ほに出ぬなつのゝすゝき下そよき吹かたしらぬ秋風のいろ
春も過夏の日數もたけくまの松ふく風や秋ならすとも
秋

冬

はつせ河きのふかみそきすかはらやふしみの里のけさの秋風
天河かさぬる年の
ふたゝひわたせかさゝきのほし
あやなしや露吹むすふ夕かせにちるらむ小のゝ秋萩の花
世中を心ひとつに秋風の吹にしそてにおきのうは露
鴈のくるそなたの空のたよりとてつはさを送る秋の山かせ
あらしふき霧晴あかる山のはに猶ほのかなる夕月よかな
秋遠く露に光やみちぬらむすそのにしゝ草の上の月
秋は只なをおく山の夕まくれ紅葉ふみ分る鹿のねもうし
たれもみようき世を秋の末の露もとの雫の淺ちふのかせ
思ふよりやゝ木からしの聲もうし秋にわかるゝ夕くれの山
萩のはになれし音こそかはれ共これも身にしむ木枯の風
暮かゝる時雨の雨のたてぬきに雲のはたての折さきひしま
聞わかぬよはの嵐やたゆむ覽木のはの音もふりみふらすみ
さとかよふ四方の嵐の聲さむしいつれの山にはつ雪かふる
片敷や置まよふ霜のさむしるにいくよの冬をうちのほし姫
月影はあしやのおきにかたふきて我すむかたは千鳥なく也
さえゆけは昔間のをしのと〜に友ねあらそふ夜半の諸聲
芳野川たゆる時なき瀧つせにあらし落そふ冬のさやけさ
冬のうちはいづれを梅の雪の色に匂ふかきねやさける初花
暮はつるけふを哀とまゝとるめはいやはかなゝる一年の夢
戀
今日こそは岩かきぬまのみこもりに打出かたき底の心を
思ふとはしらすやいかにまゝとり住人をうなての杜の下草
誰故かかくしもたえぬなけきひく思ひいつみの袖の通ひち
かきくらす涙に空やまかふ覽あくらんわきもしらぬよの月

さても猶山鳥のおのをのつからなか／＼しきを契り共かなぬるか内に夢としりせは中々にあふとみる程の慰めもあらしいとせめて物思ふ時のなかめには空行くも／＼しつ心なし興に出てみるめをかつく時たにもくるれば蜚の恨みてそ行今は只けぬとかいはん朝露にぬれにしとても朽はつるましぬる命さてもかきりのいかなれはしらぬ月日の猶積る覽

旅

今はとて都をいつる空そなき山のはしらむあふさかのせき袖ふかき露のかことや月影をきつ／＼なれたるあきのたひ人雲の外にいくへ日敷をへたきて宮古も遠き山の夕くれしほれふすのへのをかやのかり枕むすふや露のやとり成覽足曳の山の下露うちはらひ入にし袖をとふ人はなしこそへこし日敷も今はしら雲のいくへの山をけふも越らむあつまちや宮古しのふのうらみてもならはぬ波にかこつ袖哉思ひねはかならずなれし都にていくよもおなし夢の通ひちみし夜半の月に都をとひかねてしほれふしぬる袖の俯またしらぬのへにや宿をかるかやの思ひ亂るゝそでの夕露

懷舊

久かたの天きる雪のふかき色は幾夜ふりても跡そかはらぬ足曳の山鳥のおのなか／＼に昔をかけてか／＼みきりせはいかはかり我身しくれとふりぬらんみしも昔とぬるゝ袖哉ぬは玉のよるの名残は今もみれと又あひかたき古の夢身にそひてやすむ心のひまそなき遠さかりにし古のあときけは猶心にむすふふるき風今更にやはいはしるの松立かへり心のうちそたとらるゝ過にしかたの道まとふかにうきながら我身ひとつのものと身やあらぬ昔の名残成らん

いたつらに過る月日の明暮は思ひそ出るいにしへのそらこしかたはむなしくてのみ杉たてる里もうき我みわの山本

述懷

よる波のかひある和歌の浦人とかゝる汀のいかてなりけむ哀このみちしる御代にあひぬとも昔のあとを尋ねざりせはあはれとやそれさへうしと身を捨て思ひし谷のふかき心をいたつらにかくても年のたけ行をたけしや心猶たのむらんことしけき世はうき物と亂ぬる心をさてもしつめかねつゝよの中よとてもなくてもありはてぬ命まつまを何歎くらむことのはを今さらにやは岩代の尾上の松とむすひそめてきざりともと思ひそめてし年月のはては哀と身につもるまて歎ふれば三年になりぬ水草のたえぬ流れのためしともなれ人ことに哀はかけよ百草のちくさにつもることのはの露

無常

誰か世を思ひとりへの山のはにたつやはよその煙ならねと世のならひはかなき物そとはかりを云もあたる言のはの露おとろかぬ心ひとつのまよひきて猶夢ふかしあなう世中いたつらにむなしきそらを詠ても世は浮雲のうち時雨つゝ人となること社かたき世なれ共哀いく度生れきぬらん有とてもさてやはつるといける物必すしぬるよとはしるゝ／＼かきりあればいつの契りを結ふらむしらぬの山の苔の下露さきの世もいかなるつみのおもき上に重ねて積る月日成覽いつ迄か長閑に世をも思ひ劔うしとみそしの餘りはかなき人の齡これより末そあはれなるさり行きまの思ひしられて

十樂一首不足

聖衆來迎樂

ふかく染る心の色のあらはれて浮世はれ行むらさきのくも
蓮華初開樂

初花とさくも程なきはちすはのにこりにしまぬ色やみゆ覽
身相通樂

をしなへてゆきゝのさとみつる身は通ふ心に身を任せつゝ
五妙境界樂

是そ此心にかけししら雲のさかひはるかにうき世へたてゝ
快樂不良樂

思ふ事ゆたのたゆたにつゝむ袖立ゐにつけて身に餘るまで
引攝結緣樂

あたにのみ猶うたかたのきえぬ共結へは深きえに社有けれ
聖衆俱會樂

終に又法のむしろをしきしまやまと言のはかはす諸人
見佛聞法樂

佛を見法を聞こそうれしけれねかひしまゝの心たかはて
隨心供佛樂

朝夕のなるゝたふさにさゝけても心のまゝの花たてまつる
に

詠百首和歌此百首四十八首有之殘歌不見

秋二十首

立 秋九月九日始之

秋のくる山さなかつらうちなひき朝露かけて風やふくらん

七夕

天の河紅葉のはしの秋かせにこそわたりもうつろひそ行

萩

いねかての曉露もをきもあへす下葉色つくのべの秋はき

女郎花

色に出てまたきうつろふ女郎花たか秋風になひき初けむ

薄

袖にまかふ遠方人はしらね其尾花ふきこす風はうらめし

刈萱

をかや原かるも亂るゝ秋風にふするの床もいやはやすけき

蘭

武藏野の草のゆかりの藤はかま主こそしらね色はむつまし

萩

下おきのをきふし秋をかそふれはなかは過たる露を降ぬる

鷹

かりのくる都の秋の俤にとこよの月やひとりすむらん

鹿

高砂の松もつれなき秋風によをつくしてや鹿の鳴らん

露

露落るよものあらしの聲毎に泪もたえぬ秋のそら哉

霧

麻衣八重たつきりを分かへりつま木にこりぬ賤のをたまき

槿

さくとみてかつちる春の花よりも空蟬のよは秋の朝かほ

駒迎

しろたへになひく眞袖や花薄ほさかのこまにあふ坂の山

月

移りあへす色かはりゆく山のはに残るもつらき在明の月

掃衣

かりかねのきこゆる空に月さえて小夜更るまで衣うつ也

蟲

露霜をたてぬきにはたをる虫の聲のあやなくまつよりは行

菊

秋の霜つもれと人のこれそ此老とはしらぬしらきくの花

紅葉

くれなるのやしほの岡の色そこきふり出て染る秋の時雨に

九月盡

秋の色のためこそみまほしやらぬ後は何せむ袖のしら露

冬十五首

初冬

今朝よりは嵐ふきそふみよしのゝ故郷さむき冬やきぬらん

時雨

しくれ行み山かさとの庵にたくしはくもる此頃のそら

霜

ふく風の音もさえ行篠のはにをく初しものふかきよの空

霰

浦かせにさやく難波の玉かしはもにうつもれぬあられ降也

雪

誰みそきゆふかけそふる色なれや衣立田の山のしら雪

寒芦

ひろ澤の池の玉もに亂あひて枯ゆく芦のしのふもちすり

千鳥

波ち行月になくさの濱千とり友こそなけれ影ははなれす

氷

水の面にねさしとまらぬ浮くさのよとむ計に氷る瀧つせ

水鳥

芦のはにかくれてすみし水鳥の鴨の青はもあらはれにけり

綱代

橋姫のまつ夜更行かは波に月もいさよふせゝのあしゝ木

神樂

みしまゆふかたにとりかけ榊葉にときはかきはに祈る神垣

鷹狩

はしたかの野守のかゝみ外にやはみるかけさへに暮方の空

炭竈

忘れては雲かと思ふ雪分て煙たなひくをのゝすみかま

埋火

秋をやくこのはの色や残るらむ嵐にたえぬ宿のうつみ火

歲暮

東路にありといふ成てまの關とりとめかたき年のくれかな

戀十首

初戀

思へ共いはかき沼のひまをなみうきみこもりにもらし兼つゝ

不知人戀

しる人もなきさの松のねを深み又とゝはれす波はかくれさ

不遇戀

あふ事は涙のかはのはやきせにおひぬめる何を何もとむ覽

初遇戀

うしとのみゆふてもたゆく思ひこし心も今そとくる下ひも

後朝戀

梯は猶有明の月くさにぬれてうつろふそての朝露

遇不逢戀

立かへり又やはよそに石間行みつのしら波袖もせきあへす

旅戀

かたしきの袖も我からあまのかる〔に脱離〕藻・すむといふ虫あけのせと

思

煙たつふしの高嶺のよそにたにたえぬ思ひを空にしれつゝ

片思

哀とも思はぬ人の倂にかすかきわふるみつからそうき

恨

しかのあまの鹽やき衣なれたにもかはかぬ袖を恨やはせぬ

雜二十首 此歌十七首不足

曉

年をへてねさめよふかきかねの音の泪ももろく成そ悲しき

松

霜雪にさても年ふるそなれ松心の色はわれそつれなき

竹

木にあらず草にもあらぬ竹のはも籬の外の物とやはみる

春日社百首

元久二年十二月三日於寶前
坡講七ヶ日參籠之間詠之

冬日百首和歌

左近衛權少將正五位下行加賀權介藤原朝臣

春

春はまつ空の氣色そ春日山みねの霞もはや立にけり

春きぬと人にもかもや岩にふれ瀧のみななみ氷とくらし

松の雪は今はたおなし高砂の尾上のとやまはる風そふく

春日野やたゝはるの日にまかせても猶うつもるゝ雪の下草

野へみれは今は霞のしかすかに雪消にけりわかたつみてん

へたてつるかすみややかて曇るらむいこまの山の春雨の空

霞行春は雲路をとふとりのあすかのさとに鷹かへるらし

立まかふかすみの色も朝日影にほへる山のむめのしたかせ

はる風に梅の初花さきしよりあかね色かはうくひすのこゑ

咲きらむ山ちの花もしら雲にかきねの梅をみすか過なん

みやこ人花とやみらむはるかすみかゝれる山のみねの白雲

霞たつ春の錦のおりをみよ柳さくらをたてぬきにして

はる風にありかをとへは足曳の山櫻戸の明ほのゝそら

年をへて花みる事はしかあれとも春にはうとき物思やなき

花の色はうつりにけりなみよし野の稍青根かみねの春かけ

はるの色も今更しるになくさます秋をはすての朧月夜に

梓弓はるはかすみの山のはにるか如くのありあけの月

つみにこし人の心もすみれ草野をなつかしみひはり鳴也

河風にちるたにあるを山ふきのゐてこすなみに春や行蘭

けふならて今幾日ともなき春をとふ火の野守えやは留むる

夏

春をのみ猶うつせみのから衣むなしくうつる袖のいろかな

夏かけてうつろふ池の藤波に山ほとゝきす松かせそふく

この頃は卯花月夜よゝしとて山子規またすしもあらず

待えても誰かはきかむ子規たゝ一聲をさよふけてなく

子規なく一聲も夏のよのみはてぬ夢のあけほのゝそら

郭公あやめか軒のむら雨にぬれてもかほる夕くれの聲

五月雨はふもとにくものおりはへて山もとゝろになく郭公

久堅の雲の波こす瀧の上や御ふねの山のさみたれのころ

ふる郷はむかし忍ふの軒の露袖にかけてもかほるたちはな

早苗とる山田の原のならかしはいなはもまたぬ風そよく也

鵜川たつかた山舟のさしもなと月にはいてぬならひなる覽
袖川や月も波間にうきまくら筏の床は夏もしられす
むすふてに秋を思ひそいつみ河波ふく風を袖にかせやま
夏ふかき篠分るあさの袖ひちて野中の清水結び暮しつ
涼しさをそてにならしのをかへなる秋といはせの杜の下風
夏のひもたけふのこふの夕すゝみ袖には秋の心あひのかせ
河なみにまかふ螢のみたれてもすむや澤邊のあしのうら風
夏なれは遠かた野へにかかる草のかきねにつゝく山のへの里
小はつせの山たちはなれすかはらやふしみの里の夕立の空
たかみそきゆふかくる波の立田山あさのは流る此川のせに

秋

このねぬる朝けの袖はまたひとへかさねはたれに秋の初風
まちえても先更ぬらし夕つゝの行かふよはの星合の空
夕日さすすそのゝ末にわくる露うつるか袖に匂ふうきはし
秋萩の花をやねたくしら露のをくとははらふ野への夕風
夕されは玉ちる露も白妙の尾花かそてにあきかせそふく
つの國のこやのねさめに芦へなる萩のはさやき秋風そふく
風の音は秋もあらちの山のはにこゝろくやしき鷹そなく成
夜もすから妻とひかねてかへるらし朝行しかのあとの白露
出やらぬ月待よひは足曳の山のあなたのおもかけもうし
月といへは嵐そ雲をまきもくのあなしの山の夕暮の空
山のはに秋もや今と更ぬらむ待宵過ていつる月かな
哀我秋のなかはの夜をかきね在明の月にねきめしてのみ
守あかす月に心をつくはねのすそはの田井の秋のかりいほ
秋のよのふかき思ひはもゝはかきはねかく鳴の曉のそら
ふかくさや霧のまかきにたれすみてあれにし里は衣うつ覽

虫のねに露を夕かせふきみたり淺ちかはらは秋そかなしき
秋も今はしくるゝ程に成に鳧山のこのはのそらにうつろふ
はゝそ原色つき行は山しなの石田のをのゝくすのうらかせ
三むろ山秋をや風のかへすらむ紅葉にあける神なひの杜
詠わひ秋もくれぬと夕つくひさすや三かきの山のはの空

冬

いつしかも冬の氣色を水くきのをかのかやねのけきの初霜
冬は來てとはぬ人めを松かきのましはの樞風もたまらず
横のはにあらそひたてるみねの松いつれつれなし木枯の風
よしさらは人とはぬまて埋とも入なむ山の跡の木からし
ねさめする深山もそよに篠のはに一夜ともなき嵐をそきく
草も木も枯ゆくよはのしもとゆふかつらき山の冬の明ほの
さゆる夜ははねに霜ふる大鳥のはかへの山に山下風そふく
霜の上にかたふく月の影落ておなし尾上のかねの一聲
さむしろに衣かたしく橋姫の枕に波のよるのあしる木
日影さすあしたの原やくもるらむかた岡山にしくれふる也
久堅の空は雪けのみねの雲きのふもけふもち時雨つゝ
霰ふるまききのかつら埋れて雪になり行みやまへのさと
ふきしほるむへ山風のあらしより野への草木の雪の下折
見わたせは檜原杉のはうつもれていつれかみわの雪の山本
誰かけき雪うち拂ひはし鷹を末のゝはらにとかりすらしも
霧はるゝ月は明石のみなとかせさむく吹らし千鳥しは鳴
月影をそれかと計みしまえの玉江の水はこほりしにけり
よし野なる冬はなつみの川かせに氷る岩間のをしの諸聲
此里や八十氏人のすみかまとまきのお山に煙たつなり
いかにせん春にはあはて老らくのこむといふ成年の暮かた

雜尺教

是身如聚沫

早くゆく岩間の水のわくらはに浮てもめくるあはれよの中

是身如浮泡

庭たつみはかなく結ふうたかたの消るもよその袖の上かは

是身如炎

春のゝにやくともえ行若草の哀をこめてたつ煙かな

是身如芭蕉

あひにあひて世を秋風の吹もあへす先破ぬる草のはもうし

是身如幻

世中に猶哀なりまほろしのうつりやすきはならひなれとも

是身如夢

むは玉の夢とみつゝもおとろかすななき眠に結ほふれつゝ

是身如影

厭ひかねうきは身にそふ陽炎のあるかなきかのよをや頼まむ

是身如響

谷風のひゝき計を契りにて聞もあやなき山ひこの聲

是身如雲

詠むれは空しきそらにうき雲のさすらへはてむ行衛知すも

是身如電

秋の田のほの上てらす程もなし闇をはなれぬいなつまの影

述懐

神垣にひくしめ繩のたえすしも君につかへむ事をしと思ふ

かすか山またゝにふかき岩ね松かたき神の恵み成けり

ことしたに春にはかけふ藤の花いかに三笠の山のはもおし

春をまつ袖にはいつかこむらさき我元ゆひの霜そふりぬる

ねきかくる泪の色やふかゝらむ思はぬそてもあけの玉かき
うしとのみ三年かけつる年波のなみ／＼ならて身の沈む覽
水上の哀はかけよきほ川のたえ行末のみくつなりとも
有もうくなきも悲しき世中をいかさまにかは思ひきためむ
そのかみの契りをしのにたのみても袖に涙や七日ひさらむ

短歌

あまのはら 春の日の 光あまねく
てらす世に なくさけ仰く うきくもの あるにもあらず
さすらひて へにける方を かそふれは みそち餘りの
よるのしも いかに結ひし 契りにか 水上きよき
さほ川の しつむみくつと なりてはゝ あへすしほるゝ
ふちなみの さ社下葉の したにのみ 末かす原まで
かれぬとも ゆかりの色の ひとしほは 松にかけても
かすかなる みかさの山の 名にしおほく 身をしる雨も
空はれて なを久かたの つきもせず あゆみをはこふ
たまほこの 道をたつぬる いそのかみ ふりにし跡は
とをくとも 君につかへて むかしへに かへるためしは
大あらきの 森のしたくさ しけゝれは しけみか中の
露はかり たのみやありと かしこみて たむくる神の
ゆふしてに なひく程には よゝのかせ ふくとなけれと
ことの葉に こゝろの色を あらはして かきあつめつる
もゝくにや かすにもあらず 恵みをそ思ふ

反歌

哀とも人こそしらぬ人しらぬ心のうちは神のまに／＼

百日歌合

毎日一首後不見建保二年七月廿五日始之

春一首不足

曙雲

あらし吹尾上にまかふ鐘のをとの絶々になる横雲の空

夜雨

窓の雨のうちねぬことも夢なれや現かはらぬ長きよの空

過風

峯續きいく里かけてかよふらむやとふ風の遠さかりゆく

遠煙

ふる郷は雲に煙そたつ田山そなたのそらをとふひのゝ杜

閑曉

ぬるかうちにみるを夢とておとろけは猶ななきよの曉の鐘
ねさめとふ遠山寺のかねの音も我身の外のものとやはきく

幽夕

けふも又はれぬ詠に暮にけり谷のとほそにかゝるしら雲
今日もきくたか入相のかねの聲明日やわか身もしらぬ詠に

移時

けふも又ゆふかけ草にをく露のうつれはかはる世中そかし

往昔

いにしへにかへらぬ道の悲しきはかさなる年の行方そなき

送年

大かたは行もかへるも一にて身にのみつもととしの通ひち

沖石

荒磯にはなれてたてる岩たかみ沖つ汐干にあらはれそゆく

湊波

風の音もみなと湊入江のさはりおほみ芹分小船波やかゝ覽

濱砂

うち寄るはまのまさこのしき波にかそへもあへす積る年哉

深江

さても猶いか成えにて難波なる身をつくしても世に沈む覽

迅瀬

あすか川うつりもあへす月も日も流れてはやきせゝの白波

荒渚

波高みきよする船もなきさ成泉郎の笛やもあれやしぬらん

古渡

角田川いまは昔の都鳥あとなきふねの跡のしら波

堰水

ゆく年をせかはやゐてにわく泪流るゝ水もかへりくるかに

故郷

みよし野のよし野の山の夕時雨ふるさと人の袖ぬらすらむ

細徑

よをたとる跡を思ふそほのか成行末しらぬのへのほそ道

漲瀧

よし野河山のはふかくなかれ出て雲にみなイあまきる瀧の白なみ

湖上

興に出て釣する泉郎も心せよさゝ波たかしひらの山風

磯邊

暮かゝる磯邊の波のおり／＼にともしけちたる蟹の漁り火

江橋

なには江やなからの橋は朽はてゝくもてに残るあしの村立

田家

いねかてにすそはの田井の秋の庵守山風やおとろかすらむ

野亭

しなかな鳥いなのさゝやのかり枕一よか露にふしそわつらふ

溪梯

世を渡る道をたえすも入へきにあやふまれける谷のかけ橋

麓庵

なかきよのをくらのすその草の庵夢をはかなみとふ嵐かな

仙室

たちぬはぬ山分衣いく秋の霧のまかきにぬれてほすらん

柚山

我身たつ袖も朽木のそま山はしけきなけきを引人もなし

山畑

思ふ事かた山畑のうちたへてたつきもしらぬ夕けふりかな

檜原

露霜にはつせのひはらつれなくて嵐にたくふ入相のかね

杉村

わか身猶いかにまちみむ三わの山つれなくてのみ杉の村立

篠原

たかりを野原か末と跡とへは露の小さくのいくよともなし

蓬生

月をのみすめと計に山風のあらしかはつるよもきふのやと

杜樹

しけりゆく我このもとを思ふにも哀はゝそのもりのした草

嶺松

いか計りつれなしとのみ岑に生ふるまつらむ山の奥も耻かし

梨花

思ふ事かたえのなしのなりならず身には年のみおふの浦波

濱楸

さりとともと思ひこしまの濱楸ひさしき名をや波にのこさむ

社榊

神路山かゝる心やしら露の玉くしのはのゆふくれのそら

寺櫓

たれか猶尾上のかねの音ふりてしきみかはらに年を積らん

檼葉

山ふかみまきの下はのをのつからうつまぬ程のあとは絶鳧

椎柴

いつまてか猶椎しはの折からに心ひとつの色かはりつゝ

白樫

山人のしほりのみちもしらかしの枝にも葉にも嵐ふく比

玉椿

はま風に清きなきさの玉椿よせくる波のかけまよひつゝ

園竹

かきこもるそのふの竹の秋の風ふしなれてしも淋しかり鳧

巖苔

山ふかみとへといはねのこけ衣たかためにとて露のをく覽

池蘋

さそはれぬ身をうき草の悲しきは行かたもなき宿の池みつ

道芝

石上ふりにしあとをたつねても我身にふかき道芝の露

澤菅

風わたるおなし澤邊にしら菅のまのゝかや原亂れあひつゝ

岡葛

風そとふ軒はの岡のくすかつらくるかは人の恨みわふとて

忍草

跡もなくあれにしやとのしのか草末はに残る露の身もうし

忘草

淺茅

すみ吉のきしかたをやは忘草まつにふりぬる身を思ふにも
きえやすき露のかきりをたつぬれはあきちか原の秋の夕暮

浦鶴

和歌の浦のその名はむかし芹田鶴の鳴音もふりぬ沖つ汐風

汀鷗

かもめゐる汀のなみやまかふらむ立もたゝぬも夜半の浦風

洲鷺

はらひかねはかひの霜や氷る覽すさきの鷺のたつ空そなき

鷄尾

ますかゝみその數ならぬ山鳥のおのへの月に音をや鳴らん

原鷹

はしたかのとかへる山のかり衣すそのゝ原や露にしほれぬ

關雞

相坂のせきちのとりの鳴聲や音羽の山の明ほのゝそら

拾貝

玉ひろふ磯邊の波のうつせ貝空しき跡に名をや殘さん

峽猿

跡たえて御幸ふりにし山のかひ今はあらしにましら鳴也

牧馬

打まれてをのかたちゝ放れ駒あれども友にひかれてそ行

里牛

里ことにはなつ野牛はうなひ子かうちたれ髪のかひ亂つゝ

隣人

心をは猶へたつとも津の國のなにはかくれすあしの中かき

老翁

行客

すかたこそ昔にあらす成行と心はかりはおきなさひけむ
里遠み麻のさ衣うちわたすをちかた人のしるへとそなる

蓊薺

をのかすむ草刈をのこうらみわひあなかまつらき虫の聲々

樵夫

山ふかみいりと入なは爪木こるをのれうき世に何かへる覽

獵師

しおりしていつさ入さの武士よ心なとめそいなむやの關

漁父

あひきするよにうけひかね諸共に恨みても猶浦そはなれぬ

八乙女

千早振神のいかきにきねかふるすゝるにものゝ哀なるらむ

遊君

たれとなきなこり計に袖ぬれて浮たる船のあとの白なみ

傀儡

たひ人の倂つらきかゝみ山うつれはかはる契り成らん

鞆中

この程はあらしの音もあらかねの岩ねこきしき獨やはねん

旅泊

舟とむるむしあけのせとの波枕むすひもあへす沖つ鹽風

枕塵

ふる郷とあれ行ねやはしきたへの枕のちりをはらふ山かせ

窓燈

覺やらぬ長きねむりも悲しきにうき世そむけよ窓の燈し火

琴調

きゝなれし昔を忍ふことのねに今はあれ行にはの松かせ

笛音

音にきく其よの笛はいさしらす習はぬ音のみ身には戀つゝ

曝布

月をまつ雲のはたてのおりかけてよる迄布をさらしなの里

倍鏡

朝毎にみれば思ひそますかゝみしらぬ翁のかけもはつかし

釣舟

いせの海にゆらるゝ舟を哀なる釣する蟹のうけかたきよに

河筏

柚川におとすいかたの暮ぬまもいさしら波のうき世成けり

小車

うきながら離れもやらぬ小車の我身いつまでよにかめく覽

竈鐘

さめぬれは現なるへきかねの音も猶夢ふかきあかつきの空

海査

波の上にあらぬうき木をいく世までみても盡せぬ沖つ嶋山

鹽木

浦ちかき山ちにも又なれにけりしほ木こりつむ里のあま

焚藻

浦風になひく焼もの夕けふりいか成あまのおもひなるらん

引網

網引する蟹のたく繩うちへて苦しき物のはてはうけくに

圍碁

わたしこし唐舟の波のをともまたうちたえぬ濱のまさこは

雙六

十あまり五の石のかすゝによにすくろくのすさひ成けり

蹴鞠

立なるゝ我身おい木の本毎にさても朽せぬ名やとまり南

競馬

とねりこそちかふるこまの足うらに心競へのみえもする哉

相撲

世中にすまふとすれと猶そふる思ひとられぬ心よはさは

濱木

いせの海の浦のはまゆふいくへ共いさしら波の立重ねつゝ

唐衣

よの中のうきは猶ふれから衣何と心をかさねきぬらむ

玉帶

いつとなく落る泪の玉のをは露のかことをむすふ計そ

院百首 建保四年

春日同詠百首應 製和歌

正四位下行右近衛權中將兼伊與介藤原朝臣

春

淺みとり長閑き時の色とてや春立空の霞そめけむ
久堅の天きる雪のふりはえて霞もあへす春は來にけり
さゝ波やふるき都のしかすかに霞なからの山のしらゆき
春風に野澤の氷りかつ消てふれとたまらぬ水の淡雪
古集たつ雪まのくさのはつ聲はわかなつむのゝ春の鶯
鶯のはねしろたへの衣手に梅かかにほふあはゆきそふる
月かけに折袖にほふ梅かえのかはたれとさきの在明の空

あら玉のとしのをなかく打はへて絶すもなひく春の青柳
さくらかり雲ふみ分て足引の山とりの尾のいくおこゆらむ
立かへりとやまそかすむ高砂の尾上の櫻くもまかはす
山のはのみなしら雲に成ぬれは花のかならぬ春風そなき
はなの色は雲の八重山かさねても春の日数のあかぬ頃哉
霞たつ春の衣のぬきをうすみ花そ亂るまよもの山風
〔玉響〕
春風は花ちるへくもふかぬ日にをのれうつろふ山さくら哉
花さそふ風のとてや白雲の道行ふりのはるのかり金
新勅
はるのよの月も在明に成にけりうつろふ花に詠せしまに
春も今は杉のはかすむ三わの山花より後の色も尋ねよ
以上十七首之内御點十五首可有之。而朽損之間不見
之。

立かへり山には春もなく聲の今は物うき谷のうくひす
すみよしの岸の藤波ちりぬとも春を忘るゝ草の名はうし
けふは又暮なはなけの陰もなし花もちりにし春の餘波は
夏

東路の衣の關のなもつらし今朝たちかふる春の別に
かきねさへうしや卯月のさく花に色も匂ひも春そ忘ぬ
卯花のさきちるをかのまくさひくいもねすそまつ山郭公
たか爲に待しさつきのあやめ草あやめもしらぬ子規哉
ほとゝきすやすらふ雲の山かつら曉かけて一聲そきく
五月雨の雲間の月の出かてに山ほとゝきすまつ空そなき
かそふれは老その杜の子規ことしはいたく聲もおします
思ひ出るときは立花いかなればあたる袖のかににほふ覽
ともしけちほくしもたへす嵐山をくらの峯の夕やみのそら

夏ふかき澤邊にしけるかりこもの思ひみたれて行螢哉
山陰や清水おちくる岩枕手にのみ汲とゆめはむすはす
あなし山夕たつ波に風さはき弓楓かたけにかゝる村雲
露まかふ日かけになひく浅茅生のなのつから吹夏の夕かせ
哀にも我身にあきのちかつきて盛過たるもりの下草
河波にせゝの玉ものうちなひきまたみこもりの秋風そふく
秋

袖にまた露をさそひて來る秋も我ためにやは萩の上風
あふせ猶うきつの波やさはくらん秋こくふねのよるへ計に
風に行くものみを成天川はやくそうつるほし合のそら
やとれ月をのかすむのゝ女郎花ひとりしほるゝ花の白露
夜や更る月やをそきと詠ても猶つれなきは山のはの空
千々にのみ思ふ思ひも心から我身ひとつの秋の夜の月
秋のよの月にかく度なためして物思ふ事の身につもるらん
小鹿なく山の尾上のをのれのみ音を社たてめよその夕暮
涙そへてかりも鳴也哀我思ひつらぬる秋のねきめに
なき渡る鴈の翅にも霜をはらひもあへすうつ衣哉
山賤のあきていそかすきり／＼す鳴音もさはき衣うつ也
虫のねもしのふる事そまくす原うらみや秋の色にいつらん
ぬきみたるくもの糸すち露おもみ玉のをよはき虫の聲々
をのかふす末野の秋の夕露に鳴やうつらのとこの山かせ
露のみや秋のかたみとしけ山の青葉の杉の色はかはらす
みむろ山下葉そ遅き神南備のもりあへぬ程の秋の時雨に
しくれ行雲のはたての折からや山の錦も色まさるらん
秋山の紅葉を分る月影ははるゝもつらし峯の木からし
大かたの秋をはいはす物ことにうつろひ行を哀とそ見る

秋のゆく野山のあさちうら枯て岑にわかるゝ雲そしくるゝ
冬

小庭も衣手かれて秋はいぬねての朝けのしものふるさと
今朝は猶よのまの露も玉さゝのは分の霜のかたむすひなる
むは玉のくろ髪山のやま草のやゝ霜さむくうら枯そ行
さゆる夜の在明の空の霜くもり枯野は月も影そ淋しき
月影はうつりもあへず時雨つゝ風吹くもるむら雲のそら
雲かゝる深山にふかき横の戸の明ぬくれぬと時雨をそ聞
大かたは色なき風も身にそしむ袖にしくれの夕くれのそら
朝戸明て軒はのをかは跡たえぬ雪ふりつもりまつ人はこす
末をもみもとくたちゆくさゝの葉の我身につもる年の暮哉
波路かけはまゆふ風のいやはに吹上の千鳥聲そかたよる
霜こぼる汀はしらすなにはかた枯はの芦の末そすくなき
芦邊行かもものはかせも寒きよに松かけ氷るみしま江の月
結へとも氷ににこるかけはなし木の間はれ行山の井の月
ふゆ川のさゝれふみ渡る朝氷をちかた人の音そ寒けき
梓弓いるかことくの年月はまた春ちかく成そしにける

戀

初鷹の羽うちかはすしら雲のしらしな袖にやとる月かけ
正木ちる山の霞の玉かつらかけし心や色にいつらん
〔舞動〕
み吉野のみくま〔か〕すけをかりにたにみぬ物からと思ひ亂れむ
山田守をのれ心をおくかひの人こそしらね下こかれつゝ
思ひわひ煙はたてし鹽かまの浦こく舟のほのかにそみし
餘所にのみ水のうへと思ひしをうつるもしらぬ袖の月影

雜

岩そゝくたるみの水のうち出ても猶下もえの春のきはらひ
山ふかみ時雨あらそふ横のはのつれなき色もたえぬ袖哉
かつきわひ爪木折たく蜚の袖猶こりすまにほしそわつらふ
今は只身をそいふきの山に生るさしも思ひにもゆる物かは
移りやすき花田の帯の色そうきたえける中を何むすひけむ
みくさのみしける板井の忘れ水波ねは人の影をたにみす
歎わひぬる玉の緒のよるゝは思ひもたえぬ夢もはかなし
曉のしきは音のかく計泪かすそふねさめやはせし
きえぬとも淺茅か上の露しあれば猶思ひをく色や残らん
神路山かひ有春のたむけくさ玉松かえやまつなひくらん
石清水たえぬ契りやみなせ河水上ちかくすみはしめけむ
みくまのゝはしめの年を數ふれは我身に残る浦のはまゆふ
さりともと思ひこしまの濱楸ひさしき御代を猶たのむかな
年をのみ思ひつもりの興津波かけてもよをは恨やはする
和歌の浦の其名計はかけなからあらぬ波社身にはよるらめ
思ひきや君も雲井にみし花の我のみ雪とふりはてむとは
春の雨に身はふりぬとも三笠山さしもに袖のぬれん物かは
身の上にふり行霜のかねのをとを聞おとろかぬ曉そなき
心やは二むら山の峰の雲月日へたつるたひの空かな
かくてやはふるの中道なかゝに思ひたえにし行衛也せは
今は我心のやみも春にあひぬ子を思ふかたの道はまとはし
嬉しさもつゝみなれにし袖に父はては餘の身をそ恨むる
思ひしる心計はありなからたゝおほかたに物そかなしき
いかにせん松も老木に成ぬれば君か千年にあはんともせず

詠五十首和歌 正治元年九月四日

春十首 三首不足 侍 從

急けともをくりもはてぬ年の内に思ひもあへず春は來に鬼
梅の花さけはなきけり鶯のこゑのいろもや枝にこもれる
淡雪の猶ふるさとの梢よりなめわひぬるみよし野のはる
春風の花をたつぬるしほりとや結ひて過る青柳のいと
心ある霞のうちに分入てなそよりはりなくさくらふく風
やさすさむ朝のはらのかた岡に残る所ときゝすなくなり
うす霞む色はのとけき詠にてうちみたれたるいとゆふの空

夏五首 一首不足

宿さらすたゝく水鶏も有物をまつに音せぬほとゝきす哉
風わたる梢もしらぬ橋のにほひにすゝむまとのゆふくれ
たれかみるは山にまかふ下紅葉秋も梢のいろをまつほと
春も過夏もたけぬる今年哉今秋冬もあはれいく程

秋十首 三首不足

萩の音は暮行ほととの哀にて袂よりふくあきのはつかせ
月をみはをは捨山の秋のそらなくさめかぬる心ありとも
月は秋となかめなれぬるよなゝの名残はかりそ在明の末
鹿も虫も哀はひとつ聲なれや野にも山にも秋の夕暮
思ふにははかなき物は曉の空にかすかくしきのはれかき
宿うつむ軒はの薦の色をみよみ山の里の秋の氣色を
なれゝて秋に別のたつ田ひめ今夜はそての色やそふらむ

冬五首

枯にけり秋にわかれしまくすはらうらみ計を風にのこして
けふまでも思はぬのへの蜚よを秋はてぬならひかなしも

今朝みれば岩間をくゝる山河のよとむともなき薄氷かな
かきくもり空にあまきる詠哉つもればこれや雪となるもの
かくしての年の積りを思ふにはいそくこゝろも物うかり鬼

戀十首 一首不足

思ふより波こす袖をたのむ哉人のこゝろの末のまつやま
をしかへし思ひしつむる身の程に餘る心やあくかれぬらん
うからすは厭はて只そいなといはん我身の程をしれと成へし
君かすむ宿にもかよへ袖の露萩の末はの風のたよりに
かつきするあまの濡衣いかな覽袖ひとつたに泪ほしあへず
契りあらはまつへき程と思ふにもたへぬ心はゆふくれの空
思ひわひねられぬいさへ歎てもかならず夢のみゆる物かは
よふかしといふもしらすしたひきて遙にをくる鳥の聲哉
わすれしのなこりはかりは思ひ出よ結ひすてゝし契也とも
祝二首

むかしよりいく千とせをか松風のたえぬ氣色のみゆる宿哉

契りあらはむれるるたつの諸共に千世を重ねよ和歌の浦浪

述懷三首

なにとなく哀身にしむ詠哉うきよはこれそ夕くれの色
ともすれはうかれ出るも如何せむ身を捨はつる心なければ
いとはしなきてもなからむ後は又戀しかるへき此世ならすや

旅三首

あゝ
哀われしほれなれたる袖なれと都にかゝる波の音かは

枕とて草引むすふゆかりとや我そてぬらすむさしの露

哀わか駒も心もなつみきぬかさなる山のいはのかけ道

眺望三首

此題三首歌不齊

時しらぬならひないつゝたゝしとや煙にかすむふしのねの空

院老若哥合

建仁元年二月十二日奏覽

詠五十首

從五位上守左近衛權少將藤原朝臣

春十首

たけくまの松にや音を立初てけきは都のはるのはつ風
雪きえぬひらの山（イモ）おろし猶さえて霞に氷るしかのうら波
鶯の聲やはかすむ春とても月そおほるのあり明のそら
花は猶風まつ程もある物を枝にたまらぬ春の淡雪
さらすとして匂はぬ梅のあたりかは風もあやなし春のよの闇
心あらむ人ともいはし津の國のなにはのはるの明ほのゝ空
雪やそれ雲やあらぬとうつりきて待えたる花に春風そふく
（新古今）色は雲匂ひは風に成はてゝをのれともなき山さくらかな
（新古今）たつねきて花にくらせる木間より待としもなき山端の月
名残まで思ふ心やのこるらむ花より後のはるのくれかた
夏十首
立残る霞の袖のうすみとりこれもやけふのならひ成らむ
分て猶まつをは知やほとゝきす一聲きくもねぬ夜成けり
はつせ山入相の鐘のをとまてもうちしめりたる五月雨の頃
大方はうちぬる程も夏のよをさてもいつよりあかしかぬ覽
山かけや袂すゝしき夕かせに聲をはきかしせみのはころも
のへの色もしけりにけりな大あらしの梢につゝく杜の下草
秋のゝの千種の花を待ほとやしはしやとれるさゆりは露
大江山木かけも遠く成にけりいくゝ末の夕立のそら
夏虫の光をやとす下葉より淺ち色つく野への夕くれ
今日といへはみそきに靡く袖ながら秋風たちぬせゝの河浪

秋十首

新古今

きのふまでよそにしのひし下萩の末はの露に秋風そふく
秋は猶風そこたふる暮よりも萩のうはゝのむら雨の聲
秋そかしかへらは社はと思へとも雲ちのかりの遠さかる聲
谷ふかき軒はをこむる朝霧のはるゝ梢はくれかたのそら
宿はあれぬ庭はよもきに埋もれぬ露うち拂ひとふ人はなし
（新古今）たへてやは思ひありともいかゝせむむくらの宿の秋の夕暮
とを山田いなはのかせはほのかにて庵もるひたのさよ深き聲
（新古今）はらひかねさ社は露のしけからめ宿るか月の袖のせはきに
今こむと契ぬつまを長月の在明の月にさをしかのこゑ
袖の上に誰しのへとて行秋のなこりかほなるのへの夕露
冬十首

冬十首

今よりの宿をはかれず人はとへ庭のけしきは霜にあるもの
木のはふく嵐そ今は音羽山みねたちならす鹿のねはなし
（新古今）秋の色をはらひはてゝや久かたの月のかつらに木枯しの風

かけとめし露のやとりを思ひ出て霜に跡とふ淺ちふの月
今朝みれば岩間をくゝる山川のよとむともなき薄氷かな
有明の月にむれたる聲ながら千鳥なみよる沖つしほかせ
冬されは雪にふりにし宿なれや庭もまかきも跡たゆるまで
（新古今）はかなしやさてもいくよか行水にかすかきわふるをしの獨ね
おほかたは哀もしらぬ武士のやそうち河の冬のあけほの
月をのみめてしつもありもこよひにて年こそ人の老と成もの
雜十首

君か世のためしはこれかよもの海の波をおさむる和歌の浦風
（新古今）影やとす露のみしけくなりはてゝ草にやつるゝ故郷の月

すみなるゝおなし木のまに影落て軒はに近き山のはの月
ならはすよすまはやすまんをのつから雲より遠の山陰の庵
瀧の音松の嵐を枕にてむすはぬ夢のむすほゝれつゝ
吹かよふよものあらしは音たえて野中にたてる松の一もと
波よする磯やの下のかちまくらなれたる蚕もぬれぬ袖かは
なみの上もななかめはかきり有物を心のはてそ行衛しられぬ
故郷新古のけふの倂さそひこと月にそちきるさよの中山
朝露もきつゝもなれぬたひ衣はるゝぬれむ袖をしそ思ふ

仁和寺宮五十首

詠五十首和歌

左兵衛督藤原

春十二首

初春

久かたの天のいは戸のむかしよりあくれは霞む春はきに鬼
雪中鶯
春となく初ねはかりを鶯の羽かせをさむみ雪はふりつゝ

橋邊霞

しもとゆふかつらき山に春やくる霞とたえぬくめの岩はし

行路梅

分やらぬ匂ひそふかき梅かえの花のゆきゝも道まかふかに

春月

ときはなる松は緑の色そへてひとしほかすむ春のよの月

岸柳

もかみ川影こそおなしいなふねののほれはくたる岸の青柳

旅春雨

春さめのふる郷人のかたみとてみのしろ衣ほさすともきむ

遠歸鷹

霞行よもの木のめもはるゝと花まつ山にかへるかりかね

山花

あたなりといひはなすとも櫻花たか名ばたゝし岑（春イ）の松風

關花

おしめとも花もとまらぬふはの關やま吹こゆる春の嵐に

庭花

雪とのみふるはならひの花なれとやとから庭の跡やたゆ覽（元なんイ）

川欸冬

山ふきの井手のさと人主やたれ花はこたへすはるの川なみ

夏七首

社卵花

神まつるうつきの花や咲ぬらむ下くさかゝる杜のゆふして

早苗多

植つくす千里の田子のいとまなみつけの小櫛も早苗とる頃

里郭公

尋ねきてさとゝふ人も鳴ふるす山ほとゝきす我のみそきく

岡子規

朝戸あけの軒はの岡のほとゝきすをのかね山も今やいつ覽

夜盧橘

さたかなる夢もむかしとうは玉の闇のうつゝに匂ふたち花

籬瞿麥

をく露や宿りとるへき夕暮のまかきそやかて大和なてしこ（ハイ）

江 螢

新勅
なにはめかすくも焼火の深きえにうへにもえても行螢かな

秋十二首

早 秋

標古
空蟬のはにをく露もあらはれてすき袂に秋風そたつ

萩 露

年をへてうつろふ秋の露やそふいつかは袖のもとあらのか萩

萩 風

おほかたのなひく草木は分ね共萩のうはゝそあき風はふく

尋 蟲 聲

まてしはし聞てもとはむ草のはら嵐にまかふ松むしの聲

山 家 月

袖の上にとさすとてもこの山の峯にはちかき月を馴ぬる

野 徑 月

なかつゝ更行末も忘れぬ山のは遠きのへの月影

舟 中 月

こく船の外行なみも月寒み雲はへたてぬやへのしほかせ

曉 鹿

あくるまでつつままつ風も高砂のをれつれなき小男鹿の聲

川 霧

つれもなき楫のを山はかけたえて霧にあらそふうちの川波

掃 衣 幽

から衣うつか碯も初かりの雲をわたるねにまかひつゝ

夕 紅 葉

暮かゝる夕つけとりのをりはへて錦たつ田の秋の山かせ

殘 菊 句

物事にうつろふ頃の色ながら秋もかきらすにほふしらく

冬七首

朝 時 雨

あさな／＼しほるゝ袖もますかゝみみる影さへに時雨てそ行

竹 霜

竹のはによる／＼霜のふる郷は庭もまかきも冬そあれ行

池 水 鳥

ゆられ行にほのうきすもよるへなみ氷〔ら〕ぬ程をひろ澤の池

嶋 千 鳥

あはちしまわたるちとりも白妙の波まにかさす沖つ鹽かせ

松 雪

庭の面はすゝきをしなみ跡たえてとひこぬ人を松のしら雪

湖 雪

さゝ波やうらちをはるかに風さえて岑もたひらの山の白雪

惜 歲 暮

年きはる身の行へ社悲しけれあらはあふよの春をやはまつ

戀六首

寄 雲 戀

思ふより泪ふりそふ雨雲のよそにも人はみえぬものから

寄 露 戀

おくといひぬとはしのはんしら露のねなくや袖の色に出覽

寄 煙 戀

恨しな難波のみつにたつけふり心からやく泉郎のもしほ火

寄草戀

寄鳥戀

いかにせん人の心のたねたえて思ひ忘るゝ草のはもなし
袖の上もかすかく計成にけり鳴の羽音のしけきなみたに

寄枕戀

しられしな我袖はかり敷妙の枕たにせぬよはのうたゝね

雑六首

曉述懷

かきりあればけふも暮ぬと詠つゝきのふのかねの曉の聲

閑中燈

人とはぬわかよやいたく更ぬらむ影よりはり行窓のともし火

山旅

立歸り又もやこえん峯の雲あともさためぬよものあらしに

新勅

海旅

影移す袖はうきねの我からに月ともにすむ虫明のせと

野旅

里遠み野中の庵に人はなし草の袂をまくらにそかる

寄松祝

神代よりまもるちかひのつきせぬは君か千年もすみ吉の松

春日野

かすか野や咲ちる梅も白妙の雪ふりやます若菜つむ袖

三輪山

龍田山

ほとゝきす一聲すきの木のもとに尋ねぬみわの山ち暮しつ
さをしかの紅葉ふみ分たつた山いく秋かせに獨なくらん

泊瀬山

菅原やふしみのをたは時雨して雪そはつせの山のはの空

難波浦

なにはかた波も霞のみこもりにしたねとけ行芹の浦風

住吉濱

淡路しま浦こく船のほのゝと霞にあくる沖つしらなみ

芦屋里

夕されば秋の濱へをふく風に軒うちそよく芦の屋の里

布引瀧

さほひめの山分衣ぬきをうすみよれば涼しき布引のたき

生田森

津の國の生田のおくの秋風にしかのねなるゝもりの下露

若浦

鶴のすむわかのうら風ふけぬらし芦邊の波に月わたるみゆ

吹上濱

冬ふかみそれかあらぬか沖つかせ吹上のはまの雪のしら波

交野

かりくらし今はとちも交野なるふみならしはの雪の下折

明石浦

あかしかた月は波路のはてもなし秋をかきりの在明の空
志賀麻市

松浦山

都には春をかけてやまつら舟とし立かへるなみにまかせて

因幡山

いつかとしていなばの松の秋風に身をまかせたる山の夕暮

高砂

松風にうきねのなみも高砂の尾上のかたかさをしかのこゑ

野中清水

往古の野中ふる道跡たえて清水なかるゝよゝのさゝはら

海橋立

波路分つりするあまの橋立や霞にまかふよさのうらふね

宇治川

さむしろにうちの橋姫いかな覽波のみよるのせゝの網代木

大井河

此川にもみちはなかる足引の山のかひあるあらしふくらし

鳥羽

とはたゆくかりの泪のちるなへに秋の山邊の色をかふなる

伏見野

いなほ守ふしみの田井のいねかてに千世を一よと松風そ吹

泉川

いつみ河ゆくせの水もふかみとりしける杵のもりの下かけ

小鹽山

大原や神代かけたる夕霞はるやをしほのまつのかせ

會坂山關イ

いくそたひおなし霞の立かへり春のゆきゝにあふ坂の關
志賀浦

鈴鹿山

峯さむきひらの山おろし雪ちりて汀氷れるしかの浦波

やそせ行水はまさらて木のはのみふるやすゝかの山の秋風

二見浦

玉くしけ明ゆく空やふたみかたうらみもあへぬ波の上の月

大淀浦

大よとの松はつらくもかすまねと波ちへたてゝ歸るかり金

鳴海浦

夕霧に友となるみの浦千鳥跡なきかたのしほひをそとふ

濱名橋

はつ鴈の聲のゆくゑもしら波の濱名のはしの霧の明ほの

宇津山

ふみ分し昔は夢かうつの山跡ともみえぬつたの下みち

更科里

雲ちかき山路の月を人とはゝ今さらしなのをはすての空

富士山

ときしらぬ山とはきゝてふりぬれと

清見關

きよみかたせきを岩れにもる月の波間すき行夏のしほ風

武藏野

浅みとりかすむ計の若草に春もこもれるむさしのゝはら

白川關

思ひをくる人ばありとも東路や雪ふりぬとはしら河の關

阿武隈川

忘れしよ又あふくまの川風にしはしなれぬと千とり鳴也

阿立原

色つくかあたちのまゆみ秋の末しくるゝ雲の空にたなひく

宮城野

故郷をしのふもちすり露みたれこの下しけさみやきのゝ原

安積香沼

野へはいまた浅香の沼にかかる草のかつみるまゝに繁る頃哉

鹽竈浦

かすむより今一しほの鹽かまに松のはなひきうら風そふく

永仁二年春比類集之畢。

前參議藤原

應レ召備ニ 叡覽ニ訖。

同年六月廿二日被ニ返下ニ之。

嘉元二年冬比以ニ雅孝朝臣本ニ書寫之畢。令ニ一校畢。

北野歌合

建久元年十月

時雨

なめわひ我身世にふる夕時雨くもりなはてそ空もうき比

忍戀

我なからうちねぬ程のせき守は夢もゆるさぬ戀のかよひち

羈旅

しら雲のいく重の山を越ぬらむなれぬ嵐に袖をまかせて

新宮歌合

正治二年八月一日

社頭祝

萬世を祈こゑまでつきもせしはこやの山の秋の宮人

池上月

せきとめて下もかよはぬ池水の波のしつかにすめる月かけ

野邊虫

しけきのゝをのかすみかにをく露を袖にしらする虫の聲々

玉津嶋會

同九月日

海濱曉月

詠れは吹上のはまの松風に波よりすめるあり明の月

山館秋雨

くれかゝるたかねのくもの梢よりまとうちなれぬ秋の村雨

松風破夢

都とふ夢路の末にかよひ來てうつゝにさそふ松のかせ哉

仙洞十人歌合

神祇

今も又さしそふ千世の朝日まであまてる神の光成へし

若草

高砂の尾上の雪のきえやらてまつ緑なる野への一しほ

落花

花さそふなこりを空にふきとめてしはしは匂へ春の山かせ

菖蒲

けふ毎に結ふ淀のゝあやめ草是もなれぬる枕成けり

子規

忍ひこしかきねわたりの郭公はな立花に聲うつる也

浦月

哀猶あかしの浦の秋の月すめともなれる波の上かな

山嵐

吹まよふものあらしの秋の聲しくるともなき山めぐり哉

曉雪

月は今くもりはてぬと詠れは雪の光もあり明のそら

水鳥

芦かものうきねよいかに波枕たのむ入江のまのゝうら風

庭松

たれゆへになかめわひぬる夕とてをのれやととふ軒の松風

同歌合 同九月盡

月契多秋

かけそふる雲の月ものゝかにてはこやの山の万代の秋

暮見紅葉

行あきの名残をのみや夕まくれあすはあらしの峯の紅葉は

曙更聞鹿

暮るより妻まちわふるさなしかの思ひたへたる明かたの聲

同歌合 同十月日

社頭霜

石上ふりぬるけさのはつ霜に先色かはるあけの玉かき

東路月

都出しその月かけのめぐりきてまた在明のさよの中山

同歌合 同十一月

初冬嵐

これも猶秋のあはれのなこり哉み山おろしの木のはふく音

栢野朝

のへの色は秋をく霜にむすほゝれ恨によはる葛の下かせ

暮漁舟

くれかゝる波路の末のかす消てこき出る程そあまのとも船

影供歌合 同十二月八日

暮山雪

くれかゝる空の色ともみえぬ哉岑にあまき雪のしら雲

古寺月

をきまよふ霜になれてや泊瀬山月にもひゝくかねのこゑ哉

朝遠望

詠やる沖つしま山ほのかにて波よりはるゝよこ雲のそら

同歌合 同十二月廿六日

曉尋千鳥

哀とてなれもきむかへ友ちとり月にとひ行在明のそら

山家如春

鶯はふるすなからも聲す也はるをもまたし谷ちかき庵

海邊歳暮

音ふくる波にや年もかへるらむたちくる春はちかのうら風

同歌合 建仁元年正月廿八日

遠嶋朝霞

朝なきや波ちはれ行鹽かせに霞にたてる浦しまの松

隣家夜梅

とふ人も匂ひはわかし梅の花おなし軒端のはるのよのやみ

山家残雪

やとふかき外山にかすむ松の雪残るとならは花の頃迄

新宮撰歌合 同三月二十九日 作者隱名

霞隔遠樹

からにしき秋のかたみを立かへて春はかすみの衣手の森

蜀中見花

いはねふみかさなる山を分すてゝ花もいくへの跡のしら雲

山家秋月

よそにみし雲よりくもにやとめて梢に出る山端の月

鳥羽殿御會

同四月廿六日

池上松風

かけきよきみとりはおなし池水に千世をまかする庭の松風

影供詞合

同晦日

曉山子規

ほとゝきすまた明やらぬ山端に横雲ならすやすらひのこゑ

海邊夏月

夏のためあかしの浦に雲きえて波のいつくにあり明の月

忍戀

物思ひをさてしも人のとひやせむつゝむは常の氣色ならねは

院御會

同日當座

竹風夜涼

夕すゝみやかてうちふす窓ふけて竹のはならす風の一むら

山家五月雨

足曳の山のはふくなりはてゝ軒はにくもるさみたれの頃

同御會

同六月晦日當座

六月秋

夏はつるけふみな月の板河かは風かくる波のしらゆふ
和歌所 同七月廿七日當座

暮山遠鷹

月やまつ雲路の末に飛かりのしはしやすらふ山端の空

影供歌合

同八月三日

初秋曉露

夏と秋と行かふ風や過ぬらむ露ちりそむる篠目の道

關路秋風

さひしきはこゝにとゝめつ清見かたせき守なみの秋風の聲

旅月聞鹿

草むす露の枕に袖しきて月に鹿なくさよの中やま

故郷虫

あれぬとてなくか籬のきり／＼すをのれ淋しき蓬生のやと

初戀

けふよりや人に心を沖つ波かけてもしらぬそてのうらかせ

久戀

年月もむなしき空にうつりきてふるき詠になれぬ倂

撰定歌合

同十五夜

月多秋友

いく秋を空に契りて君か世にすまんかきりのあり明の月

湖上月明

からさきや秋のこよひを詠れはてる月なみにうら風そふく

深山曉月

人はこてまきのは分の月そもるみ山の秋の明かたのころ

野月露涼

袖の上に更行月のかけなから露ふきむすふのへの秋風

河月似氷

月かけやいかにさえ行薄氷なみはたつたのあきのかは風

仙洞歌合

同當座

深夜聞虫

長月の夜も更ぬらしきり／＼すよその枕に聲なるゝまで

海邊暮鹿

秋と云はつまをや鹿のまつらかたうらみわひたる夕暮の聲

羈中曉戀

詠わひ夢ちたえぬるうつ山月もうらめし有明のそら

影供歌合

同九月十三夜當座

近野秋雨

わか庵はのへもひとつの秋の露まかふとみれば村雨そふる

遠山暮風

秋のあらし梢をかけてはらふらし夕暮みねにまよふしら雲

寄池戀

あしねはふうきはよそなる汀かは袖にもふかしこやの池水

和歌所

同二年正月十三日

初春松

はるも今日ちよも初るときは山のとかなりぬ松かせの聲

春山月

さらてたにたつ事やすき木かけかは花に有明の山のはの月

野邊霞

野へみれば霞にはるをならしはのしはしは雪も消あへぬ共

影供歌合

同二月十日

海邊霞

浦かせの音も長閑になりはてゝ波よりかすむなには江の春

關路鶯

雪の色はまたしら河の關ちより春はこえぬと鶯そなく

忍戀

きえねたゝしのふの山のみねの雲かゝる心のおともなき迄

新古

同御會

同八月十五夜

月前虫

月になけすき行あきのきり／＼すなかはも今は有明のそら

月前鹿

月ゆへやをのれ鳴ても秋を知る今宵在明のさをしかの聲

月前風

あきの月こよひそ名をは高砂の尾上の雲をはらふ松かせ

戀十五首歌合

同九月十三夜水無瀬殿

春戀

人しれすをさへてむすふひま事になみた打出る袖のはる風

夏戀

きかし只人まつ山のほとゝきす我もうちつけのさよの一聲

秋戀

なかめしや心つくしの秋の月露のかこともそてふかきころ

冬戀

霜ははやふるの中みちなか／＼にかれなて人を何にとふ覽

曉戀

したイ

涙さへしきのけねかきかきもあへす君かこぬよの曉の空

暮戀

あちきなくそへし心のかへりこてゆくらんかたの夕暮の空

羈中戀

草枕むすひきたためむかたしらすならはぬのへの夢の通ひち

山家戀

君しるや都もよそにみねの雲はれぬ思ひになかめわひつゝ

故郷戀

ひたふるに里をも何かいとふへき我身一つのうき名なり鬼

旅泊戀

片敷の袖のうきねの波枕ひとりあかしのうらめしの身や

關路戀

みし人の倂とめよ清見かた袖に關守なみのかよひち

海邊戀

契りきなさてやはたのむ末の松まつにいくよの波は越つゝ

河邊戀

さゝのくまひのくま川にぬるゝ袖ほさてや人の面影もみむ

寄雨戀

詠わひたえぬ泪や雨となるしくるゝ空にまかふよの袖

寄風戀

今はたゝこぬよあまたのさ夜更てまたしと思ふに松風の聲

同夜

當座

月前秋嵐

秋も今はこよひをのみそ松の嵐はらふみねより出る月影

水路秋月

唐舟やいくせをさしてみなれ棹みなれてくたる波の月かけ

曉月鹿聲

今はとて月にをしかの聲たてつ妻まつ山の在明のそら

同夜

當座

水無瀬川 隱題

山のはに雲をあつめてこよひみなせかはや月の入やらぬ迄

同夜

折句

しはしみむうき雲にさやけさは昔もあらし山のはの月

同御會

同三年正月廿五日

松有春色

春といへは今ひとしほの松の色も千世をかねたる我君の爲

影供の次に

同六月十六日

夏月二首

夏はうしろしと思ひし山のはに入まで月をいつか詠かむ

九十賀屏風和歌

同八月十五夜次 若草

雪まより緑はふかし春雨のふるからをのゝ野への若くさ

霞

ことならは花よりさきも人はとへかすむ梢の春の山もと

花

子規

久かたの雲にたかまの山櫻匂ふもよその春の明ほの

五月雨

かめのおの瀧のしら玉千世のかす岩ねに餘る五月雨のころ

納涼

むすぶての涼しくも有か山の井のあかぬ雫はなつの夕暮

秋野

さをしかの入のゝおはなほに出てつまとふ暮に秋かせそ吹

月

更行はなかくめにかゝる雲もなしちさとはるゝ秋夜の月

紅葉

秋の山まかはぬ色もたえゝに猶立ならすみねのしら雲

千鳥

友ちとり君かや千世の聲はして波はのとけし和歌のうら風

雪

けぬか上にふりにしかたのこしの空いつれの年の雪の白山

氷

かはらすよ影みし水の薄氷月や光をむすひ置けむ

同夜 和歌所當座

秋月五首

あかしかた面影かよふ月かけに都にちかき波のかよひち
きよみかた關守波に影とめていかにこよひのありあけの月
後も見むつくしなはてそ月のかけこよひ計の秋の空かは
つくはねのこのもかのも下晴て今宵の月にます影はなし
君か世のくもりなき社嬉しけれ長閑にすめる月をみるにも

同御會

元久元年八月十五夜當座

瓶月

おほかたの月をは秋とまちえても今夜計の影をやはみし
春日社歌合 同十一月十三日

落葉

新占
移り行くもに嵐の聲す也ちるかまさ木のかつらきの山

曉月

あかなくの秋もや空に残るらむ山のは分て有明の月

松風

君かためふりさけ聞はかすかなる山もちとせの松の風かも

新古今竟宴 同三月廿六日

きみか世になれぬるわかぬ浦風にあまねき波や嶋の外まで

詩歌合 同六月

水郷春望

霞より緑はふかしまこもおふるみつのみまきの春の河なみ
かたしきの霞ふきみたる春かせに猶さむしろのうちの橋姫

山路秋行

たちぬるゝ木の下風になく鹿のこゑきく時の山の夕暮
ふきなるゝ嵐の音もたつた山秋のしくれとまかふ袖哉

北野宮歌合 同七月十九日

初秋曉

明かたに行かふ空やなりぬらむまたひとへなるそての秋風

暮山雨

暮かゝるやまは手向の岑のくもくもれる雨も神のまにゝ

田家風

小山田の庵守しつかひたすらに身にしむとても秋の夕かせ

高陽院歌合

建永元年正月十一日

庭花春久

萬代を砌の梅もさきくさのみつはよつはに匂ふはるかせ

院當座歌合

同七月十三日

湖邊月

よしさらはひら山おろし月にふけ波ちはれゆくしかの唐崎

暮山雲

いりぬともたれかはとはん山ふかみ越て跡なき夕暮のくも

行路風

たれとなく袖に亂るゝ玉ほこの道行ふりの露の夕かせ

卿相侍臣歌合

同七月廿八日

朝草花

木のまよりさすやをかへの朝日影うつるふ露にゝほふ萩原

海邊月

里のあまの袖にくたけぬ影をみむ岩うつ波のあら磯の月

羈中暮

^{新古}いたつらにたつやあさまの夕煙さとゝひかぬる遠近のやま

院當座歌合

同七月廿八日

いかならむ世にかはまたは松風の今はむかしの秋と吹ぬる

雨中無常

かそふれは猶かきくらす袖の上のなきかおほくの村雨の空

被忘戀

いつまてか馴し名殘の俤のわするゝ程の袖の上の月

卿相侍臣嫉妬歌合

同八月

述懷三首

^{新古}

君か世にあへる計の道はあれと身をも思はず行末のそら

^{新古}

おほかたは置あへぬ露のいく世しもあらし我身の袖の秋風

うしとても身をはいつくにおく山の苔の岩とも露けかる覽

鳥羽殿御會

同八月五日新御所初度

庭上月

ふるき秋の月も砌の影添て宿あらたむる千世のはしめに

院御會

同二年正月廿二日

春松契齡

きみか世はちよともいはし常磐なる松にみとりの春の行末

鴨御祖社歌合

同三月七日

山家朝霞

みやこ人とふさもけさは白雲のやへたつ山のなをかすみ行

湖邊夕花

浦かけてちりかふ花のさゝ波や志賀の夕かせ山にふくらし

社頭述懷

早くより深き頼みはそれながら猶御手洗のみつからそうき

同御會

永元二年閏四月四日

雨中郭公

足引の山ほとゝきす一聲もそらしつかなる村雨の空

遇不會戀

いつまてか岸うつ波のまつ事も絶えてうきねや現はれぬ覽

寄述懷雜

大君のみことかしこみ仰きても我たつみちに末をしそ思ふ
此歌は御鞠の長者にておはします事を思ひてよみはへ
りけるとなん。

住吉社歌合

寄月祝

君か代のためとそそらに久かたの月もかねてや住吉のまつ

寄旅戀

わすれしの契りはかりはむすひてき逢ん日迄の野への夕露

寄山雜

わたの原雲るにみゆる波まより猶遙なるあはち嶋山

河崎會

同四年八月十一日當座

雨中草花

むらさきに人のゝ眞菰露おもみぬれての色は袖そうつろふ

粟田宮歌合

同九月廿二日

寄海朝

そらにのみたつ朝きりの波の上にうきて思ひの海人の釣舟

寄山暮

そのかみにあらぬもなをし粟田山かけてもしるや夕暮の空

寄月戀

またしたゝ猶秋のよは長月の有明の月のおもかけもうし

建曆元年閏正月四日庭雪厭跡といふ題をたまはりて
よみ侍りける

よしさらは家たつあとの木下にわすれぬ今朝の庭の白雪

大内花下應製 建曆二年二月廿五日

萬世の春をかきねて咲にけり大内山の花のしら雲
あはれ我君か御世よりみし花のかはらぬ色に年そへにける
たちなるゝ我身ともなし九重の雲るに高き花の下風

内裡詩歌合

同五月十一日

山居春曙

山の端は霞のうちに明やられて軒にはるゝよこ雲の空
春きても誰かはとはん花咲ぬ横のは山の明ほのゝ空

水郷秋夕

さゝ波やおきに釣する志賀のあまのくるれは歸る袖の秋風

羈中眺望

時しらぬふしのたかねのゆきやられて日數のみふる東路の空
みねの雲かゝる嵐もまたしらぬふる郷人のまつにつけこせ

松尾社歌合

建保元年七月十七日

初秋風

里の名に月のかつらもかよふらし木のまほのめく秋の初風

山家暮

詠め暮す身を秋山のしかりとてそむかれなくに宿求むらむ

社頭雜

ゆふなひく空にまかせて神かきの松のお山にかゝるしら雲

仙洞歌合

同三年六月二日

春山朝

いつもみし朝るる雲はそれなから霞にかほる春の山かせ

夕早苗

「從」
さといをき田中の森の夕日影うつりもあへすとるさなへ哉

行路秋

もみちはも行衛きためぬ秋風にしらぬの山の道たとりつゝ

曉時雨

まきの戸の明かたとしも驚かすねさめふりにし頃の時雨に

松經年

いつ迄か松のしつえにとゆるきの磯ちにかくる波も恨めし

歌合

同三年八月七日

山曉月

おしみかね思へは同じよはの月いらて明るを山のはの空

野夕嵐

のへの色を詠てけふもひくらしの鳴音うつろふ秋風そふく

河朝霧

ほのくくと朝日いさよふ波の上に山端のこすうちの川霧

内裡歌合

同九月十三日

江上月

秋は猶ことしの空も津の國のなにはかはらすみしま江の月

旅宿戀

都にはかこちかねにし我袖にあまるもしらすのへの夕露

暮山松

今よりの夕ゐる雲やさそふらん時雨をならすみねの松かせ

内裏歌合

同閏九月十九日

深山月

しくれ行色こそしらねしからきの外山のおくも秋夜の月

寒野虫

きり／＼す鳴音もよはの初霜に野への淺茅や先かはるらん

寄風祝（舞イ）

つくはねのこのもかのもの嵐にも君かみかけを猶や頼まん

和歌所

建保元年十月十四日當座

冬月五首

此頃は雪ふる山のときはなる松にも月の影そくもらぬ

秋たにも氷るものかとみしまに片間の月のかけそさえ行

枯はつる草のとさしのあたにやは人の契りしあり明の月

いたつらに我身ふりねとゆふ霜のかさねて更る夜はの月影

ゆく年の數かく水にかけみればせくかたしらぬ袖の上の月

秋十五首歌合

同二年

秋風

今よりのはきの下葉もいかならむ先いねかての秋かせそ吹

秋露

音そよく萩のはよりも秋かせの人にしらるゝ袖の夕露

秋月

おほかたは我身ひとつの秋としも嵐にはるゝ山のはの月

秋雨

かせすきふきりの落はに跡たえて窓深き夜の秋の村雨

秋鴈

鳴わたるかりの泪やしくるらむはねうちかはす村くもの空

秋虫

月影はいたらぬ里もなく虫の聲のかきりはふか草の露

秋鹿

「ペイ」

〔新後抄〕
思ひ入山にても又なく鹿の猶うき時はあきのゆふくれ

秋花

あき風に吹ちるをのゝ露しけみ袖もとをゝに移る萩はら

秋水

音羽かはせきの嵐の影みえてたか色ふかき秋の漣つせ

秋霜

夜を寒み今はあらしのなとめ子か袖ふる山の秋の初しも

秋祝

神風やみもすそ河の夕波に千とせの秋の聲もつきせし

秋旅

月よ猶さよの中山なか／＼になに面かけのあきのふるさと

秋戀

風むすふたよりもつらし道のへの尾花かもとの露の下くさ

秋懷

しらさりしねさめも今は深き秋の在明の月に夜を残しつゝ

秋雜

秋の夜をかつはつらしと深山木のこりす時雨に袖をかす蘭

秋十首撰歌合

同八月十五日於水無瀬殿被調之

花薄くさの袂をかりそなく泪の露やをきところなき

さそへ月なれぬる秋の露の袖のにも山にも道はある世に

身を秋のわか世やいたく更ぬ覽月をのみやは待となけれと

袖のみや思ふ心も朽ぬへしことしもふりぬ秋のよのしも

秋はけふ紅くゝる立田川いくせの波も色かはるらむ

あし引のやまとはあらぬ唐錦たつたの時雨いかてそむ覽

當座御會 同九月十三日

曉山
秋の色は袖にもたへす有明の月をのこして山そ時雨るゝ

夜戀

いく度かよを長月のねさめしてみはてぬ夢に秋もはかなし

院御會 同九月十四日

月契多秋

萬代にちよをかかねて契るらし君にかけそふ秋夜の月

月卿雲客歌合 同九月廿九日

野徑月

露分る名残はかりや行月も秋の末のゝ有明のそら

寄雲戀

思ふよりわか名やまたき立雲のうはのそらなる詠計に

霧中雁

はれやらぬ雲路分くる初鴈の羽風になひく岑の秋霧

同嫉妬歌合 同九月盡

河落葉

神南備の山の嵐やたつた川みつの秋のみふかき色かな

寄鳥戀

〔新後〕
待わひてこぬよむなしく明行は泪かすそふしきのはねかき

深山雪

ふみまよひたつきもしらぬ山人の袖もしほりの雨の夕暮

内裏歌合 同三年六月日

水邊柳

石はしる清たき川の玉柳とすゑにむすふ水のしらなみ

江上霞

立かへりかすみの内に入江こくたなゝし小ふね春や行らん

朝落花

よしの山さゝ分るあさの下露に袖こそおもれ花のしら雪

夜歸鴈

月をやはたのむのかりも立まよひ霞む雲路によると鳴也

山晚風

いかさまのなにかとまらむ君か世にあふさか山の關の夕風

野曉月

かくてのみふるのゝさはに影みえて猶有明の月もはつかし

内裏百番歌合

同四年閏六月九日

春

霞行日かけは空にかけろふのもゆる野原の春の淡雪

みよしのゝまきたつ雲の梢には花もつれなき色そ残れる

夏

子規なくや五月の玉くしけふた聲きかてあくる夜半哉

みちしほのからかの嶋に玉もかるあままもみえぬ五月雨の頃

秋

こしちより秋を急かす鴈金は初もみちはのおりにあふらし

虫の音もいかにうらみて眞葛原をのゝあさちの色かはり行

冬

しろたへの衣ふきほす木枯のやかて時雨る天のかく山

かり衣すそのもふかし箸鴈のとかへる山のみねのしら雪

戀

秋の田のわさほのかつら露かけて結ふ契りのかりにたになし

をとほ川たきつ心をせきかねてあふさか山の名さへ恨めし

熊野路にて湯淺の宮にて御會ありけるに 同年

九月廿日

山花

分まよふみ山櫻や咲ぬらん雲よりおくにかほるはる風

山夕

日かけさす雲のぼたてのいとか山くるれは空に風を涼しき

山月

藤代や山のはかけて秋風の吹上のなみにいつる月かけ

山曉

そらふかきまきのと山は明やらてをのれしくるゝ岑の横雲

山旅

秋の霜みな白たへの衣手にかさねて寒きみちの山風

嵯峨の郷二品の第へ御幸ありて庚申に當座

御會侍けるに 同年十月十一日

山家落葉

宿ちかき山はあらしの吹たひに木のはの音も猶しくれつゝ

内裏御會 同十一月一日

寒山月

夜なゝは聲よはり行嵐山梢もたかく月そのこれる

遠村雪

よそなから山ちもたえてふる雪はとはれぬ花の主とそみる

寄葦戀

つの國のなにはしられし蜚のたくあしのしのひに煙たつ共
院庚申御會 同五年四月十四日

春夜

花をおもふ四方の白露をきもせすねもせぬ比の床の山風

夏曉

夏草の露分衣此ころのあかつきおきは袖そすゝしき

秋朝

小男鹿のつま木こるおに迷ふらし同じ尾上のゝへの朝きり

冬夕

あられ降まさきのかつら暮る日の外山にうつる影を淋しき
續拾

久戀

新勅
つれなしと誰をかはむ高砂の松もいとふも年はへに鬼
光明寺入道歌謡致
右大臣家歌合 同五年九月

夜深待月

待出ていつかなかめん久堅のあまり更ぬる山のはの月

故郷紅葉

ならのはの名におふみやも今更に時雨ふりそふ秋の色哉

河邊擣衣

秋ふかきよしのゝ里の川かせに岩波はやくうつ衣かな

行路見戀

思ひ送る心はかりはしたの帯のみちはかたゝ行めくる共

山家夕戀

よそにみし雲のはたての夕くれを軒端の山に思ひきゝつゝ

羈中松風

けふはまた野中の松を友なへと送る嵐そ遠さかり行
内裏歌合 同十一月四日

冬山霜

山風にみむろの木間も霜の下草かけて冬はきに鬼

冬野霰

うたの野や宿かり衣きゝすたつ羽をともしやに霞ふる也
〔新拾〕

冬關月

清見かた月かけこほる冬のよにをのれたのまぬ波の關もり

冬河風

此頃は時雨も雪もふる郷に衣かけほすさほの川かせ
續拾

冬海暮

さとかよふあまのとまやも跡たえて誰となくさの濱の白雪

冬夕旅

はれくもり時雨る空やくれぬらん日かけも急くさよの中山

冬夜戀

涙せく袖の氷りをかかねても夜半の契りはむすひかねつゝ
續拾

同御會

同六年八月十一日

池月久明

いけ水にちよはまかせつ久かたの雲の月の影もはるかに

同十月二日

社頭曉月

さりとともよもの空をもあふく哉しるし左明の月よみの杜

禁中翫月といふことを

雲の上の今宵の月をみつる哉こゝろもはれぬ萬代の空

内裏御會

承久二年二月十三日五十七歳

春山月

をのつから雲こそ春の夜半の月霞かゝらぬ山のははなし

桂外柳

野への色はまた下もえの淺みとりをのれそなひく春の青柳

内裡御會

同八月十五夜

待月

木のまもる月の桂の下紅葉山のはふかき影そつれなき

見月

万代はまたなかはにもあらなくに秋は今夜とすめる月哉

惜月

なかつてふ秋のよすから詠てもあかぬあまりのあり明の月

同御會

春風

花のかはまた白雲の色はかり袖の外なる春の山かせ

春雨

大かたの霞むを春のならひにて曇らぬ御世のはる雨そふる

春日社歌合同三年三月七日

野花

ちる花の野守のかゝみくもるらむ俯つらきよものあらしに

海霞

春のうちはいつれの蟹ももしほくむ同しかすみの袖の浦波

述懷

春日のゝおとろか道はわけそめつ古きに歸る御世にあひつゝ

左大將家會に庭上松

松風もつきせぬ宿とみかさ山さしそふ千世のかけなひきつゝ

日吉社家親成七十賀し侍けるによみて遣しける

いくとせも猶みつしほのいやましに昔にこえんわかの浦波

春

建曆二年の頃よみ侍ける歌の中に湖上立春

朝日影にほてるおきのさゝ波に春も立ぬとかはる浦かせ

空は猶雪けなからの山風にはるとかすめる志賀のうら波

はるくれはとくる水りのさゝ波に先うち出る志賀の花園

建保元年の頃霞中餘寒といふことを

立わたるかすみを分てふる雪にみのしる衣はるとしもなし

海霞

うらちとふ里のしるへそほのか成霞めるかたの蟹の藻鹽火

立迷ふ霞の袖やふるさとに松浦かおきのけるの舟人

春のうたの中に

ふるかなを春の淡雪哀よにいつまで消ぬ物とかはみん

梅かえの花のたよりにおられ共そてにそかゝる春のあは雪

しつえひつ磯邊の松そ色まさるみちくるかたの春の一しほ

川邊柳

色ふかき河そひ柳いなむしろはるはみとりにしく物そなき

歸鴈

ほのゝと空はかすめる横雲の山たちはなれかへるかり金

あし引の山とひこえて行かりのはかせにつらき花のしら雲

正治元年三月十七日大内南殿花御覽のために御幸あ

りける御ともに右少辨範光さふらひけるか花のえたにつけて被送ける

心あらは花も昔を思ひ出よものとあるしのけふは御幸そ
返し

いかはかり花も哀と思ふらむ昔のはるにあふこゝちして
きのふの御幸のことを思ひ出て

きのふみしはなの御幸の名残にてちりかひくもる雲の通ち
承元四年三月頃花山院の花見にまかりて侍けるにお
りふし雨ふりて催興し餘亭主南庭のかたへいてゝ歌
よみなとせられけるに

跡たえぬ庭のはる雨ふりもせよふるともけふは花の下かけ
同月廿日あまた人々ともなひて南殿の花見にまかり
たりけるに土御門中納言定通同中將通方朝臣など女
房五六人あひくしてさきよりまいりて侍けるに(カイ)
中納言の許より

しるしらす何かへたつる春霞あやなし花のよそになりなは
かへし

わきてよも誰をへたてむ春霞立よる程の花の木陰は
具親朝臣

花ゆへに誰かうらみを夕かすみへたてけりとも今社はしれ
かく申て後をのくよりあひて歌よみ侍けるに

いく年の春に我身のイもふりぬらむ花のゆきゝの雲のかよひち
家會に月前花を

野 花
花の雪空にしられぬ色ながら木の下風に月そさえ行

すみれつむ袖とはいはし櫻ちる野をなつかしみ春風そふく

河邊花

櫻ちる山下水をせきかねて瀧つあらしの末のしら波
建保三(三イ)年三月廿日頃八重櫻の枝に鞠をつけて内
裏へまいらせけるにそへて侍ける

春をおしみ折一枝の八重櫻九重にもとおもふあまりそ
御かへし

はるをおしみ折つる花も九重に思ふあまりの色はそへけり
東勝寺のさくら鞠のかゝりにてとしへにけるか風に
たふれてありけるに跡にこと木をうへられて侍ける
をみてあまたの年々たち馴にしことを思ひて讀侍け
る

なれくてもしは名残の春そともなとしら河の花の下かけ

うたあまたよみける中に桃花浮水上

うつしそめし折から人の花かつらかけてもけふの流をそくむ
海邊春暮

夏 立かへる難波のはるを恨てもかすみそのこる跡のしらなみ

夏の歌の中に

花になれし色やはかはる夏衣たつ田の山のみねの白雲
なくへき頃よりもとく時鳥をきゝて清範かもとへそ
のよし申つかはしたる返事に

ほととぎすなかな鳴きとを恨てもまづはむなしきやとの夕暮
これよりかへし

さと近き山ほととぎす一聲に我そむなしき名残とは聞
菖蒲

あやめ草ななきねさめのうき世にはむすふ計の枕成けり
建曆二年の家會に澤螢火を

影まよとふ星か澤邊の芹のはに螢みたるゝ夏の夕暮
夏 萩

みそきする河こえかてらよる波の歸らぬききに暮ぬ此日は

秋

立秋

夏のよはみしかき芹のふしの間にいつしかかはる秋の初風
萩の歌よみける中に

時しもあれ慰めかたき夕暮たそかれイにそよとこたふる萩のうはかせ
露ふかき軒の下萩末わけてとふへき物と秋かせそふく

兼思七夕

秋風のたつやをそきと銀河こゝろ行かふ波のかよひち

七夕後朝

いつとまたたのみなくさむ□なくくかへるけさの七夕

山家秋思

哀とふ都の人のあらは社なくさきもせめ秋のゆふ暮

荒庭露滋

いにしへの玉のうてなの心地して露けき庭の苔むしる哉

待野花

秋毎とおもふイに心の色やさきたちておもかけうつるオイのへのはきはら

野徑薄

ならひにてまねくと思へは花薄駒もとゝめす野原しのイさゝはら

承久二年七月十七日影供三首に古徑萩を

道のへの朽木の柳みしはるもうつりにけりな萩の下露
水邊草花

風吹は汀にたてる女郎花波のまくらにおれふしにけり
故郷蘭

あれにけり籬もたはにぬきかけてたか故郷の藤はかまそも
ふちはかまきてみる人もあらしたつ野と成にける庭の通ち

行路聞虫

分わひぬ袂の露も虫のねもしけき野原の秋のゆふ暮

連夜聞虫

夜をかさねよはるにつけて虫のねは哀をそふる物にそ有ける

向山待月

よや更る月やをそきとなかめても猶つれなきは山のはの空

承元三年八月十五夜家會に浦邊月

秋のよの月に煙のいかならむあまのやくてふ鹽かまのうら

河上月

秋といへは名になかれたる夜半なれや影久方の中の河波

深山月

外山には正木のかつらくる人もまたみぬ色はおくの月かけ

關路月

逢坂の夕つけとりもなきぬらし關のとさしの明かたの月

田家月

露や守山田の庵のかり枕わか袖ぬれぬ月やとるまで

竹中月

秋風はみ山もそよと竹のはに夜ふかき月のかけそもりくる

閑庭月

さても猶人こそとはね八重むくらしけるまゝの庭の月影

月の歌あまたよみ侍ける中に

秋の夜の昔まの月をなむれはなには、春の氣色のみかは
月清みなからの山に雲消てよるともみえすしかの浦波
都にはかゝる嵐の聲もあらし思ひも出よ月は見るとも
月といへはまつ思ひ出る木間よりなかはとみゆる秋のよの月
くまもなき月みるたひに思出る秋のなかはは今夜なりけり
小山田の庵もる賤かをのつから心もあらず月をみるかな
八月十日あまりの頃兼秀中将信能少將なとともなひ
て鴨禰宜祐綱か河崎の家へまかりて侍ければもとよ
り人々のおそふ景氣のしければ逃かへりて祐綱かも
とへ遣しける

はれくもる雲間の月にさそはれて出てもつらきむら雨の空
かへし

月故にあかくれ出し池水にすまさらめやは雲の上人

家會に毎夜明月

さしもさはたえせさりける光かな今夜もあかし秋のよの月

月照亡屋

故郷はいく世の秋にあれぬらむ軒はの月のねやにもるまで

九月十三夜に鈴鹿の關にとまりてよめる

我心いかにすゝかのせきの戸に名をとゝめたる月をみる哉

家會に月前語往事

月みつゝかたる今夜そしられぬるたれも昔はわすれさり鬼

關路駒迎

ゆきなやむ駒ひきとめて逢坂のせきの小川にしはし水かへ

雨中駒迎

かきくもる逢坂山の時雨してさやかにみえぬ望月の駒

閑居秋雨

秋ふかき霧の籬のむら雨にはるゝよもなくしほれてそふる

野宿曉鹿

曉に鹿のねきかぬたひねたにいかゝ露けき小のゝ草ふし

月前閑鹿

とにかくに秋の哀ぞ知れぬる月澄よはのさをしかの聲

鹿聲遠近

わか庵のかきほのみかとときく程にとを里に父をししか鳴也

鹿聲兩方

なれかすむのへにさこそは旅れせめ跡まくら成さを鹿の聲

承久二年七月十七日影供三首に曉初鷹を

曉のしきの羽かきかすゝにかきつらねたる秋のかりかね

朝初鷹

立かへり名殘にかける玉つさをみる心地するけさのはつ鷹

晩聞鶴

詠やるすそのゝ秋の夕露に鳴やうつらのとこの山かせ

旅宿掃衣

から衣うちおとろかすつちのをとに都のかたの夢をたにみす

霧隔山路

いとゝしく駒やなつまむ夕霧にあしともみえす岩のかけ道

紅葉

みれは猶下葉はまたし神なひのもりあへぬ程の秋の時雨に

くれなゐのやしほのをかの色そこきふり出て染る秋の時雨に

花のみやあるし成へき山里はもみちのおりもとひける物を

隔川紅葉

朝日山みねの楓のさかりにはこゝろあらなんうち河霧

霧間紅葉

さらぬたに小倉の山の紅葉はを立こめてける今朝のきり哉

當座歌合に海邊紅葉

いせしまやいちしの浦の蟹のやくいくしほ深き峯の紅葉は

菊花

さもこそは千くさのゝちの色ならめさくへき程も白菊の花

終日見菊

ねやのうちを朝日とゝもに立出て入までそみるしら菊の花

籬菊花

いつとなく籬の竹はときはにて移ろひにけり白菊のはな

暮秋

夕日さす梢に秋はくれていなはいとゝ嵐の山とやはみむ
秋の色のためこそみまほしやらぬ後は何せん袖の白露

冬

建保四年十月歌合し侍けるに初冬

けさよりは嵐ふきそふみよしのゝ故郷寒きふゆやきぬらむ

海邊初冬

けふよりは冬になるおの浦さえてはけしかるへき沖つ汐風

日吉の社にて如法經の十種供養し侍ける次に故郷時

雨を

初しくれふりにし里のしかすかに同しなからの山のはの雲

時雨

しくれゆくみ山かさとの庵にたゝしはしばくもる此頃の空

しほれふす磯屋か床のあまの袖しらしなよはの時雨もる共

落葉埋橋

きてみれはうつもれに鬼吹わたる風に紅葉のふるのたか橋

落葉埋路

思へとも入ぬ山路は跡もなしことしもさてや木のは降つゝ

海邊落葉

紅葉はのちりしく時のうらゝはすまも明石の心地社すれ

嵯峨の郷二品の第へ御幸なりてしはらく御所にて有

けるに清範か御供にさむらひてけるに小袖つかはす

とて

古はちるもみちはをきるといふに嵐の山に今は思はず

かへし

紅葉きしきんたうの君にくからすかゝる小袖もあらし山には

紙燭一寸にて讀ける歌のうちに月前菊花を

うつろへる色なかりせは月影にまかひやせまししら菊の花

をみなへしきかり過たる冬かれのかしら霜をそふる月影

(題詞)

里冬

この里やよのうきよりはすみ吉と思ひもあへすさゆる松風

春は猶とを里をのゝ草かれにあらしそ寒きすみ吉の松

風の音も遠さと小野の此頃は人こそとはねすみよしの松

氷をよめる

つらゝゐるけさやはくまむ古の野中のしみつ心しるとも

谷川の岩うつをとの絶ぬるはむすふつらゝや波のしからみ

水の面にねさしとゝめぬうき草のよとむ計に氷る瀧つせ

水鳥

水鳥のかもの青羽もかれて行氷る汀のあしのよなく
難波江の芹のふしはやをしとりの浮ねの床のかこひ成らむ

千鳥

波路ゆく月になくきの濱千鳥友社なけれかけははなれす
夜をさむみ芹のうら風音さえて千鳥しはなくなにはかた哉
いそなきのなけとこぬ身の濱千鳥ひとりや夜はに友恨む覽

初雪

年毎にめつらしきかな初雪はふりてふりせぬ物にそ有ける

山路雪

故郷へ歸る山路はさりともと駒をそたのむ雪の明ほの

雪の中に法勝寺へまいりてよめる

花咲しけふしら川をきてみれば雪の木かけも立ちかりけり

冬歌よみける中に

ふみ分てとふ人もなき宿なれば心のまゝにつもるゆきかな
雪の内に春の立くる年ならはけふやきかまし鶯のこゑ
はしたかの野守の鏡よそにやはみるかけさへに暮方のそら

連日鷹狩

昔よりひつきの御狩たえせぬはうち出ぬおりはかたの成鳥

冬歌の中に

みしまゆふ御室の山の榊葉をかたにとりかけいのる神かき
はし姫のまつよ更行月影もいさよふ波のせゝのあしろ木
秋をやく木のはの色や残らむ風にたえぬ宿のうつみ火
忘れては雲かと思ふ雪分て煙たなひくをのゝすみかま

禁中佛名

聲々に雲のうへ人きこゆ也ほとけの御名はつくすのみかは

歳暮従水早

筏おるす柚山川のはやせ河としの暮社ほとなかりけれ

歳暮

東路にありといふ成てまのせきとりとめかたき年の暮哉

雪中除夜

今夜ふる梢の雪の明はては初花かとかやみらむとすらん

戀

忍戀

よしさらばまたしる人も泪川うきはなへての

暮忍戀

ゆふつくひけふくれなぬのまふりてにつゝむ泪や色に出覽

夏戀

難波江やうきて物思ふ夏のよの短き芹のふしのまもなし

旅戀

夢路さへ遠さと小野の草枕獨そむすふよはのまつかせ
夢ちやはとをちのをのゝ松風になひく草はを結びかねつゝ
しるや君すみたかはらに袖ぬれて都鳥にもなれをとふとは

海路戀

たちはなれ獨あかじの浦ちには袂にまつも波そかけゝる

隔關戀

あつまちの衣か關を打こえてそのなを君とかさねつる哉

隔遠路戀

程もなく心つかひは通ふ哉日數へぬへき戀ちと思ふに

遇門戀

まてよ君今かへさには立いらむ心かはりてなしとことふな

互恨戀

心にもあらぬ夜かれを恨つゝかへす君とてつらからぬかは

雨中戀

待宵の雨も涙もふりまかひはれ間もなくて更る空哉

歲暮戀

いつとなく君かあたりはよそにして思はぬ春を近付にける

寄月戀

思ひ出ぬ君かこゝろもかよふらむ月をなかむるよはの心に

寄虫戀

くれゆけは淺茅か原に鳴虫の音にたてつとも君しるらめや

寄葦戀

深き江のうきにしほるゝ芦のねのよゝの契りも朽やしぬ覽

寄藤花戀

波よする田子のうら藤しほれつゝ人を心にかけてぬ日はなし

承久二年七月十七日影供三首に寄萩戀

消かへり心ひとつの下萩にしひもあへぬ秋のゆふつゆ

寄秋風戀

あき風は君かきくをやよきてふく物の哀もしらすかほなる

寄鹿戀

さらぬたにかたく袖は露けきを泪なそへそさをしかの聲

寄源氏戀

もらすなよ只手ならひとことよせてかきなかしたる水莖の跡

思高人戀

數ならぬ身にあふ程の君ならは思ひありともいはまし物を

契經年戀

たのめつゝ年はみとせになりぬ共新枕をはえこそかはさね

寢人戀人

から衣此つまと又ふれなからかさねて人の戀しきやなそ

忍人戀

山ふかみ下行たにの埋水せくももらすも人しれすのみ

憑示現戀

祈りつゝぬる夜の夢にあひぬるは神のしるしをみする也鬼

憑誓言戀

頼むそよ今驛かんとわきもこかけて誓ひしをすゝきの宮

聞詞怨戀

人心なをさりけ成言のはゝたのむるまでもつらきなりけり

深夜待戀

契りきや扱もはかなき宵のまにをけらん露のきえはてね共

毎夜違約戀

夜はこの其偽をするへにていとふ戀ちにかよひなれぬる

鴈聲催戀

はつかりの泪とも今白露のをくかたしらぬあきのころもて

曉風催戀

松風のふかぬおりたにきぬゝになりぬる床は如何淋しき

隨日増戀

ひにそひて深き思ひになるみかたゝちまさり行□□波かな

秋風増戀

契とてむすふか露の玉ゆらもしらぬ夕のそてのあきかせ

冬來増戀

露たにも所せかりし戀衣たもとしくるゝ神無月かな

近隣戀人

芦かきの同し内なる君ならはもらす隙たになからましやは

物隔談戀

あふ事は思ひかけすと思へとも此玉たれのうちへいらなむ

敷妙の枕のみかは逢夜半はむつことをさへかはす成けり
忘るなよこひちきりを敷妙の枕はともにこけのむすまで

被妨人戀

古の關守すへし通路はいまばわか身になりになれるかな

夢會戀

^{續古}思ひねにあひみる夢のさむる社とりのねきかぬ別なりけれ

不慮逢戀

心にも結はぬよはの契り哉さきの世よりやとけはしめけむ

精進間戀

いもゐして引しめ繩のうちはえて絶すも袖のかく朽めやは
梯のしめのうちにも立そひてきよき衣のそてぬらしつゝ

思三人戀

いつれをも思ひたえしとする程に三夜に一よもめぐり逢哉

教居隱戀

尋ねよといひし心をあらためて宿をさへにもかへてける哉

厭戀思浮世

いもかりとやりし車を引かへて法にも今はこゝろかけつる

見返事無字戀

濱千鳥あとなき浦は中々にみせず袖もしほれさらまし

落返事戀

さのみやはいとなかる覽さりとて頼むたひし落にける哉

雜

ふたみのうらにてよめる

神風にたちよる波のたよりにもけふりふたみのよゝの浦松
海邊のこゝろを

月はみつさてもあかしの夢ちたえなれぬ野原に浦風そふく
昔よりなのみなからの橋はしら跡もあとなき波のかよひち

山路雲

そことなく夕こえかゝる山風に漂ふ雲のあともはかなし

關路嵐

とまるへき關やはうちもあらはにて嵐はけし足柄の山

御使に鎌倉へ下るよし高弁上人のもとへ申つかはし
侍けるつゐてに

みやこたに遠しといひし山のはにいくへへたてん峯の白雲

かへし

白雲はいくかさなりもへたつとも思ふ心のへたつへければ
^{かよふ}

九月廿九日侍從宰相定家卿の許へ申送ける

秋をおしむ名殘計りはあらす共わか行かたも思ひをこせよ

かへし

とし毎の秋のたくひの別かは君をそなたにしたふこゝろは

おなし夜餞すとして暮秋餞別といふことを

たひ衣たつ空そなき別路は秋もかきりのあかつきの露

十月一日賀茂社へまいらせける三首に太田新社

いかにせんたのむ都の神無月しくれ計を身にはそへつゝ

橋本

此たひの我みちさらぬしるへにて今は昔のあとを忘るな

くれしければ

しはしかと思ひもあへす袖ぬれて時雨はすきぬ野ちの松原
篠はらの池に水鳥のありけるをみて

霜をけとをのれはかれすにほのすむ汀に寒き芦のしの原
かゝみの宿にて

としをへて立よる影をます鏡山の名つらき物とやは見し
安儀河にて

をのつからこのはの色はよとめ供くれにし物を秋川のみつ
小磯森を

下草をもいその杜の霜をへてわか身のうへと成にける哉
小野宿たちけるに

あけぬとてまたたつをのゝ草枕このたひ計露けきはなし
をのれさへをのゝ山田のかり枕日敷かそふるしきの羽かき

さめかゝるにて
思ひゆく其俤に袖ぬれてむすはぬ夢もさめかゝるの水

あを墓
われみてもいくよの霜かふりぬらむ
「あをはかの里

同合宿にとまりて
冬枯のあをのゝ原は霜にあれて今あらたむる宿のかやふき

株河にて
我も世にまた朽はてすくいせ川又もあふせの波のかよひ路

信濃路のかたへ里馬引たかへたるを
さもこそは其名もしらぬ信濃ちよ引たかへたるかひの黒駒

小川にいかるかをもちたるものゝあへるをみて
世中はいつくもおなししかるかやとみの小川の流とそみる

やふ川といふを
日のひかりやふしわかねは此河の汀の波もかけはへたてす

墨俣渡にて
浪の上に身をうき舟のわたし守いそくもつみの同し渡りを

かの岸とおなし浮よのむやい舟渡るといふもはなれさり鬼
玉井森にて馬よりおりて

思ひいつやみたらし川にせしみそき忘れぬ袖の玉のゐの水
古渡

むかしより其名かはらぬ古わたりさても朽せぬ橋はしら哉
鳴海かたのしほみちて侍けれは

汐みてはよそになるみのかたをなみ浦より遠の急きてそ行
汐みては跡なき波のかへりみるかたは鳴海のうらみつる哉

星崎のかたをみて
和田のはら空もひとつの朝なきに波間にみゆるほし崎の浦

二村山にて
心やはふたむら山を越來ても君をそたのむみやこ思へは

色々に誰おりかくる折なれや紅葉のにしきふたむらの山
あひともなひて侍ける人の

一むらこゆる二むらのやま
「といひけるをきゝて

八はしもわたるはほともなかりけり
八橋にて

都思ふ程はくもてにみたれつゝ袖こそぬるれなみの八はし
矢作宿にて恒例

これ迄もいたゝく星のかすゝに猶たのもしきたひの空哉
乙川のはしを渡

里とよむかたもはるかにきこえけり駒うちわたす乙川の橋
みやち山にて

宮古思ふみやちの山の中になつたつきもしらぬ夕霧の空
いかはかり風もたかしの山なれば峰のかや
「しとろに

火打坂といふ所にて難人の中に

ひうち坂にはくつをかくるそ

これを歌に聞なして

いしのかとたかしの山のこれならむ

たかしの山うちおりてしらすかの濱にて

沖つ風をとまたかしの山越てうちよする波のしらすかの濱

橋本の宿にて

波のうつ浦のはま松ねもいらす枕さためぬあつまやのとこ

たれうへて海と河とをへたつらむ波を分たる松のむら立

佐夜中山

東路のさやのなか山中絶てかくこひぬれは父もこえなむ

菊川宿にて

うつり行わか影のみやかはるらむおいせぬ物ときく川の水

大井川にて筏を

是や此みやこの西の大井河いさこととはんくたすいかたし

藤枝にて

春をまつなけきはたれもある物をおなしかれはの藤枝の里

うと濱にて

いにしへの天のは衣きてとへはいふこともなきうと濱の松

興津にて

宮古思ひ興津のはまの濱ひさしくなりぬ波にしほれて

大和多の浦にて海人をみて

哀なりいかにするかの田子の浦蟹のしはさとみるもはかなき

富士の山を

旅人の思ひはふしの夕けふりはれぬみそらをなかれてそ行

昔よりみてもいくとせふりぬらん我身にふしの雪積りつゝ

いさやその昔はしらすふしの山けふりは絶す雲そたな引

浮嶋か原にて思ひ出ること侍て

世中は猶うきしまのあた波にむかしをかけてぬるゝそて哉

關東へ下りつきて仙洞へ奏せさせ侍ける

宸筆の御返歌十月廿七日給りて侍ける

かへりこむ程は時雨の衣手にへたてゝ遠き雲る成とも

旅春雨

たひ人の衣はる雨ふる郷をこふる袂のかはく日もなし

羈中夏草

なつ草のは山しけ山茂あひて露分衣そてもほしあへす

旅泊月

月かけに夜舟いさよふ浦人もあかしのせとは出そわつらふ

旅山秋鷹

敵郷にかよふ夢路も初かりの聲におほめく宇治の山風

旅歌の中に

野へなれは露にはぬれん旅衣さのみはなしにしほりかねつゝ

たれにかも跡の契りを結びをかむいなはの山のこけの下露

都思ふ夢のみ残るれさめには時雨も袖になこりかほなり

あつまのみちに讀ける歌中に

あとゝめてたれ又こゝに草枕結びそめつるのへのはかなき

思ひ出るねさめはおなし都にてみねの嵐を枕にそきく

漂らふる身はしゝかの恨みてもあれたる波に濡つゝそ行

わするなよ友とみきはのひとつ松まつとは波の立歸るまで

けふはまたはまなの海の橋柱うきたる波の跡もとゝめす

かへりみる都のかたはとを海のはまなの橋のわたり迄きぬ

はやくみしはまな海に立かへりむすはぬなみも契り有鳧
やみふかき浮世をいたふなにもおはす曉事の名残をや思ふ

熱田社にて

駒とめてすゝみてゆかむ千早振ゆふ日あつたの杜の下かけ

これもおなしあつまの路にて讀侍ける歌の中に

あとはかつみえす鳴海の湯をなみ満くる汐に駒うちわたす
汐もみちぬ日も夕暮になるみ満いかなる方に今夜かもねん
見しよりも猶ふりにけるわたり哉うきかみ川の波の八はし
朽にけるけふやつ橋を都思ふこゝろやゝかてくもて成らん
武士の身にならすてふやはき川をのかすかたの行衛知すも
うらに出る湊はおなしおきつ河たえすやせゝの猶深くして
おほつかな我はのに出てかられ共おかしき岸の姿とそみる
足からの山の關守古はありもやしけんあとたにもなし
うさ濱にいつかきにけん昔より我を汀にまつとなけれと
花もみな色なき時はをしなへて野成くさ木を淋しかりける
誰もかはかりのならひの枕とて草ひき結ふのへにかもねん
さゝのやのよふかき霜をおきもせすねもせぬ床に嵐ふく也
今までにわすれぬ人はあらしふく山もへたてつ跡のしら波
いかならむ風の便につけやらん立ゐる雲の跡もたえねは
吾妻へ下るとてあをはかの宿にてあそひて侍ける傀
儡のほるとてたつねければみまかりけるよし申をき
きて

山家

尋ねはやいづれの草の下ならむ名はおほかたのあをはかの里
山下風によのうきよりは空晴てすみよきものとあり明の月
とふ人はをかへのをかはかき絶てけふりをたつる冬の山里

山述懷

立なれし其神山のみねの雲こゝろはかりはかけぬ日もなし

海述懷

うきて思ふよるへしらせよ興つなみ海と嵐のかけの便に

月前述懷

さても猶物思ふことはなくさまで月にしもこそ詠わひぬれ

述懷歌あまたよみ侍ける中に

和歌の浦にその名をかけてたのむ哉哀と思へ玉つしま姫
われかくて住ぬへしやと世中に心のとめよ山のはの月
ともすれはうかれ出るも如何せむ身を捨てぬ心ならねは

厭はしなきてもなからむ後は又悲しかるへき此世ならすや
初めなき身のまとひこそ悲しけれ誠の道をまたしらぬまに

思ひ出る事もいくその數そへはなきか多くも成につけても
今はよに有にもあらず成ぬれと暮れは年の數やそふらん

すみ染のころもむなしく過そ行心のうちに思ひたてとも
春にあふ今一しほの松ことに霞の衣たちそやられぬ

社頭述懷

あはれみよ人數ならぬ身なり其神はあまねき物とこそきけ
かすか山朝いるみねにかけて祈る雲ぬはるかに空そ長閑き
君か世をかけていのれはかすか山朝ゐる岑の雲のかよひち

橋本社五十首中に

柏木の森の朽葉は霜ふりぬいつとかまたん恵みありとも
君かためはるもかきりは嵐ふく松にそなひく万代の聲
つくりけるうそをあまた木の枝にすへて人の許へつ

かはすとて人にかはりて

心にはとひぬはかりに思へ共うそゝきいたる歎きをそする

かへし

とひぬはかり思ふらむ社哀なれうそきいたる歎するとて

ひはを人につかはすとて又人にかはる

思ひやるひはいくかにか成ぬらむ明ぬ暮ぬとまち數へつゝ

かへし

待かねてなむる空に暮日はうれしなからに猶かそへつゝ

入道寂蓮身まかりて侍し頃定家朝臣許より

たまきはる世のことはりも頼まれす猶うらめしき住吉の神

かへし

限りあれは怨みても又いかゝせむかゝるうきよに住吉の神

承久三年七月七日六波羅の壹岐前司親重か家へまか

りて侍しに昔この所にて遊びしことなと思ひいてら

れて哀に侍しかは障子の上の小壁にかき付ける

をのつからなきかけもやと水の面にさしても袖の満増つゝ

かなしきは別れはてにし詠哉又こん年も星合のそら

建曆二年七月六日筆簾の師にて侍ける季遠か爲に追

善しける所へまかり向て更て歸るとてこゝろのうち

に思ひつゝけ侍ける

おしへをきし道は露けき蓬生にあとゝふのみそ限り也ける

承久元年六月の頃より女子 中將忠嗣朝臣室賀十三 わつらふ

年毎のたえぬたのみを契りにてこのせにもたて天の川なみ

九日つるにかくれ侍にければ其頃あまた歌よみける

中に

むは玉のこの黒髪をかきなてゝ思ひし末よかゝるへしやは

思へたゝ此世むなしき玉くしけふたゝひあはん契たになし

倂はたちにし月をへたてゝも別はけふのゆふくれのそら

消はてし露のかたみの女郎花いはぬも色にしほれはてぬる

消はてし露の形見と折袖にうつるや花のなこり成らん

五十まで多くの年はへぬれともこの秋はかり悲しきはなし

哀とも御世の佛に消はてし露の名残の花たてまつる

うしとみし其夜の夢はまたさめす何おとろかす曉のかね

子を思ふ心ややかて晴やらてさきたつ道の闇と成らむ

おとろかす鐘の響も打たえて猶長きよのさめすや有らん

今夜又うかりし月のめくりきて思ひ出れはかきくらしつゝ

こゝに猶倂のみそ残りけるをくりし月よ行衛しられす

こけの下もみる心地する倂にはくゝみはてし袖そくちぬる

別れにし其目をけふとかそふれは泪かきあへす夕くれの空

今はたゝ濁りにしまぬ玉のをはちすに結ふ契りともかな

今はたゝ九の蓮にやとりして六のちまたになかくかへすな

さきたちし倂のみそ有明のつきせぬものはなみた成けり

限りあれはさても止めぬ別路に只戀しきのやるかたそなき

思ひをきて消なん事を歎しに猶さためなき露の身そらき

別路は淺ちか末と成にけりいつしかしけき秋のゆふつゆ

八月廿七日此佛事の棒物に唐綾をもちてかめをつく

りて前裁の花を折てたてゝ一首を結つけゝる

けふは又折袖うつる花の色を消にし露の名残計に

九月十五夜亡者の小手箱を布施にしける中によみて

いれける

いかにせん行衛もしらぬ玉匣ふたゝひあはぬ此世なりけり

廿一日おひぬき侍とて
たえはつる名残やけさの麻の帶思ひとくにも猶そかなしき

廿七日中將忠副朝臣の造帟箱をくくりつかはすとて敷のうらにかきつけゝる

なき影を思ひもいてよ十寸鏡うつれはかはるならひなり共とまりぬる數も夢の内なれやさきたつ人もうつゝならねはみイかへし

夢うつゝ思ひもあへぬ迷ひにもわかさきたゝぬ道を悲しき古のわしのたかねにことよせてこの面影そ在明の月

建曆二年とよ（はイ）のみそきふたゝひとけをこなはれし日次の日治部卿定家のもとへ申をくり侍ける

君まちてふたゝひすめる河水に千世そふとよの御禊とそ見る返し（をイ）

續拾
君か代の千世にちよそふみそきしてふたゝひ澄る鴨川の水

治部卿（定家）子息爲家元服して後ほとなく從上の加階したるよろこひに申つかはし侍ける

袖のうちに思ひなれても嬉しさの此はるいかに身に餘る覽かへし

袖せはくはくゝむ身にもあまるまで此春にあふ御世を嬉しき子息教雅をありきそめに人のもとへつかはしけるに

手本を引出物にしてそのつゝみ紙にあとならへ思ふおもひのとをりつゝ君にかひ有敷嶋のみち

敷嶋の道ある君にならひをきつ末とをるへきあとに任せてかへし

同人三位に叙して一たひに侍従をかけたりけるにつかはしける

嬉しきはむかしつゝみし袖よりも猶立歸るけふやことなるかへし

嬉しきはむかしのそての名にかけてけふ身にあまる紫の色

近衛司にて年たけぬるよし述懐百首におほくよみてほとなく右兵衛督になりて侍しあしたに同人の許より

柏木そ今日やわかばの春にあふ君か御かけのしけき恵みにかへし

春の雨にふりぬとなにか思ふ覽恵みもしけき森のかしは木同人祖父中納言の春日行幸の賞をつのりて正三位したる朝につかはしける

新後撰
祝もまた君かためとや春日山ふるき御幸のあとのこしけむかへし

定家
〔同〕
うつもれしおとろか路を尋てそふるき御幸の跡もとひける

教雅少將になりて侍し時同人のもとよりよろこひつかはすとて

みかさ山わかばの松にいか計あめの恵みのふかさをかみるかへし

年のうちに春の日影やさしつらむみかさの山の恵をそ見る社頭祝言

かきりなく君か千とせは火はらやをしほの山の松は物かは承元四年新羅祭の次に社頭殘菊といふことをよみ侍

けるに
神垣やいくよの霜の跡ふりてむかしをかくる菊のしらゆふ

元久元年五月廿日院より御歌を春日社へまいらせられける御使にまいりて其たゝう紙に御使の位署年號

なと書付てそはにわたくしの歌を一首かきそへ侍ける

勅奈禮者如何爾賢久御笠山差天納夜與呂津世之音

建保三年正月十四日加茂へまうてけるに月はくまな
くて雪うちりければ

またしらすその神かけてふりぬれは月と雪とのよはの白ゆふ

五月五日本院へまいりて女房越前を尋て對面してや
や久しくありていてけるに忠信卿春宮權亮のあふき
をととりて硯を召てたひければかきつけゝる

けふも又かへるみあれの夕たすきありし名残の猶残るらん

宿所へ出て後返事忠信卿の許よりつたへ送りける

ゆふ禪ありしなこりはいかなれや今日そ心にわきてかゝれる

貴布禰社にまうてたりしに奥御前にて庵室のありけ
るにたちいりてみければ深山のけしき餘興つきかた
くおほえて障子にかきつけゝる

〔雲散〕

けふは猶なこりを思ひおく山にたつ空もなき夕暮の空

無量義經

我も又よそち餘りと過にけりたのむ心のまことあらはせ

法師品

やみはれぬ人の心をさそふとてうきよをめくる山のはの月

提婆品

法の水結ひし谷のこけのそて千世にいく度ぬれてほしけむ

勸持品

雨雲のよそにも何か恨みけむさすかにやかてはるゝ物から

神力品

かくれにし後も必てらす月定めなき世の空たのめせて

日吉社にて如法經十種供養し侍けるに法師品種々供

養のこゝろをよめる

誰もけふひとくさならぬ花のかに露のかことや結ひをく覽

普賢經

かねてよりかすめる空の色をみる春のなかはの入かたの月

多寶佛

ときのへし法の蓮の友なれやいかに契りをしきしのひけん

大圓鏡知

よしさらはこの世のさとり増鏡なき影つらき身とも思はん

般若婆羅密

浮世渡る波のうきゝをたてぬれはしるしも深きえに社有けれ

衆生無邊誓願度

新後撰

ゆくゑなき世をうち河の橋柱たてゝし物を人わたせとは

彌勒菩薩

よしさらは此世のやみは夢にてもさめむかきりの曉のそら

法印慶範か坊に舍利供養し侍ける次に人々歌よみて

つかはしはへりけるに紅葉を

染てほす色や梢にみえぬらむしくゝ山のみねの秋風

隱題

女郎花

秋の野の露にしほるゝ花をみなへしやおらまし後のかたみに

明障子

あしのはの末まで波のあかりしやうしほ遙にみつの浦かせ

折句

はきのはな

はるゝときり立こむるの山よりはつかり金のなき渡る聲

夏

穉

かけて祈るその神山の山人とたれもみあれのもろかつらせり
風さむみ夜な／＼虫のなみにや明るあさちの色かはり行
いく秋か月をめてゝもいたつらにおいその森の霜の下くさ
をのゝえは朽木のそまの夕時雨つれなき色に秋風そふく
今はさて我身に秋もたけくまの松に嵐のしくれてそ行

冬

雑

はしたかのすゝの篠やに宿からむあすはひつきの御狩のゝ原
足からの山のかひ社なかりけれわかるゝ涙せきもとゝめす
建保六年八月十三日中殿宴に池月久明といへる事を
瀬水にいはほとならむさゝれ石の數もあらはにすめる月影

備ニ 叡覽ニ之處。今日被ニ返下ニ畢。

永仁四年卯月四日

戸部尙書在判

以ニ雅孝朝臣本ニ書ニ寫之ニ畢。

嘉元二年十月廿八日戌刻於ニ讃州之許ニ注レ之。

此集。相公御集也。家之正本粉失。仍假ニ借冷泉前大納言
爲富卿之本。仰ニ治部大輔藤原爲説ニ令レ書ニ寫之。彼本
書落字謬等繁多。尋ニ正本ニ重可レ改者也。

右明日香井集以百花庵宗固本校合

群書類從卷第二百四十三

和歌部九十八家集十六

隣女和歌集

やまとうたは。みなかみひの河よりいてゝなかれ。たまかきの國つわさとなれりしより。代々の勅撰。家々のうちきゝ。いにしへのあとをつきて。いまの世にたえずなりぬるなかに。歌よみとおもへる人。たかきもくたれるも。みつからの歌をしるして家の集とせり。かれは心のはないたつらに散うせ。ことはのはやし。むなくむもれきとならん事をおしみ。もしは末のよの集のためとのこし。かつはなきあとのかたみとおもへるなるへし。こゝに人なみゝに。正元よりこのかた。わかぬ浦にかきすてしもくつをいまひろひあつめて隣女和歌集といへることあり。さきにいふ所の歌仙たちのおもむきにはあらず。これはただこの道にふける思ひにひかれて。たへざる身。をろかなること葉をかへりみす。おりにつけ時にしたかひて。こゝろさしをのふるかすをみて年々にふかくなり。あさくおこたる心のほとをしらんためはかりにかきとゝめぬるを。しらいたのこのすちをはしらす。くれ竹のよのつねにならひてみむ人は賤かかきねにさらすぬのを心ひとつに花とあやまり。難波江におふる蘆を

もわか目にはよしと見るになむなりぬへし。おほよそいとけなかりしより。かすゝに書置しことのは。たひゝのやとのけふりに大空の霞となりにしかは。過にし弘安のはしめよりことなるふしなけれと。ゐなのさゝはらしけるにまかせて。たかきみしかきをいはず。なほきみや木ましはらされは。くちきのそまにまかりゆかめるをもきらはす。さなからかきのせぬるあさけり。今のひとのきゝ後のよのそしりのかるゝかたなく。はゝかりおほけれと。ねかふところは心さしのふかくて。よのいとなみにまきれぬかたをあはれみて。つたなきことは。いやしきすかたをおもひゆるせとなり。又題のしたい歌のにほひ。ことはのかきさまふるき言。かやうのふしゝさなからおほく。かたくなにたかひひかめる事みつからととのへんとすれは。老のやまひ物うく。ふたゝひみむはたわれはつかしく。いはんや人のてをからんすらかたはらいたきによりて。此道にあやめもわかぬともからにまかせて。かきあつめさせぬれは。うしろめたれと。ちからなき身のいたつきになむ。まけにたる。もし見む人このおもむきをおもひて。あさけることなくは。のそむとこるたりぬへし。そもゝわかみは新古今新勅撰のすかた

を心にかけ。なかくろよりは万葉集古今等の心地をいかで
かとこひねかへとも。箕裘をたにまなひみす。かの西施かと
なりの女の。かれをうらやめるよそほひ。もとのかたちより
は。ますくみにくくなりけるになすらへて。この集の名と
せりといふことしかり。

隣女和歌集卷第一 正元年中

春

雪のうちみ山の里にたつ春は冬の日かすをかそへてそしる
けさよりは春のとなり成ぬとや冬をへたてゝ霞たつらむ
けさみれは氷とけぬる谷川のしたゆく波に春や立ちむ
驚もかすみをもそき雪のうちに春する物は心なりけり
春は来ぬゆきけの雲ははれやうてさなから霞むみ吉のゝ山
しからきの外山はゆきもなをさえて里のみ霞む春の明ほの
ほのゝと明ゆく空をみわたせば山もとよりそ霞をめける
はるのきる霞の衣たちこめてよるへもみえす袖のうら波
もしほやく浦の煙をたよりにて春はなみちそまつ霞ける
深山にはなをしら雪のふるすよりのきはにうつる鶯の聲
はるきてもなを風さむきやまさのかけのゝ草に残る淡雪
かすめともまた縁にはなりやうてかれのゝ草に残る白雪
何處にも梅かゝそする春の目の至りいたらぬ里のなけれは
故郷の老木のむめは咲にけりむかしの春の色をのこして
あさみとりなひくもしるし青柳のいとかの山の峯の春風
春来てもいくかもあらぬにいつしかと心にかゝる花の白雲
雲ははな花はくもとやまかふ覽空にかすめるかつらきの山
みよしのゝ山のさくらの花さかり峯にもおにもかゝる白雲

吉野山はなよりおくのしらくもやかさなる峯の櫻なるらむ
麓よりいくへの雲をわけすてゝしらぬ山路の花をみるらむ
みよしのゝ春の鏡とみゆるかなあをねか峯の春のよの月
くれぬとも月にはみてん春のよの闇はあやなき花さかり哉
もゝしきやおほうち山の櫻花くもゐにふかく匂ふはる風
たちはなの匂ひならねと古里の軒の櫻にむかしこひつゝ
いさゝらは散なはなけのはな櫻風よりさきに折つくしてん
雪とふるはなにのきはゝ埋れてさくらをふける春の山里
をのつから心とけさは散はてゝさそふ風をもまたぬ花哉
けさふかはいかに風をもかこたましのときき空にちる櫻哉
峯の雲みきはのなみそさわくなるひら山風に花や散覽
歸るへきならひなりとも春のかり今年計りは花にやすらへ
さすかまた花のなこりやおしからむ啼て別るゝ春のかり金
なのみしてときはの山の岩つゝしみとりにかゝる花も咲鬼

夏

わかさりしうの花かきも白妙に咲あらはるゝ夏は来にけり
しつのめかさらせる布や山里のかきへのたにゝ咲るうの花
としことのをそきになれて郭公またぬうつきの空に鳴なり
まちわひぬおのかさ月の空にたになをもつれなき郭公哉
いりひさす雲のはたてのをりはへて鳴やさ月の山郭公
鈴鹿山あけ方近きせきの戸をふりはてゝなく郭公哉
なつのよの有明の空のほとゝきすおなしねさめの人や聞覽
なけやなけさよのねさめの郭公ふた聲きゝて思出にせむ
ひとこゑは夢と思ひておとろけはうつゝなりける郭公かな
しられけりひける菖蒲の長きねにまたみぬゝまの底の深さ
足曳のとを山をたにそて濡ていく程もなきさなへ取らし

秋

五月雨は目かすふれともなには鴻もとのみきはを越ぬ白浪
 さまたれに天の川浪たかゝらし月のみふねの渡るよもなき
 たか袖のうつりかよりか橋を昔こととふつまとなしけむ
 みしかよときこそはいはめ月影のいるをもまたて明る空哉
 五月雨にきえぬうふねの笛火やかつらの河の螢成らむ
 こかくれにしつみ流るゝ山の井のあかても夏の日を暮す哉

うたゝねの袂をかけて吹風のめにみぬ色に秋をしる哉
 久方の空になかれぬあまの河なほし合の影そみえける
 秋の露たか手枕と結ふらんいるのゝすゝきほに出にけり
 なかゝに千草の花もなきのへのしのゝを薄風そ淋しき
 むさしのや千くさの花の色々にをきかへてける秋の白露
 利風のふきしをのゝあさちはら結びもあへず露そこほるゝ
 あきもたゝ思へはおなし夕暮をなからにや淋しかる覽
 春はこし秋はみやこにくる鷹のいつもたひなるねをや鳴覽
 あき風に鷹は來にけりしら雲のみちゆきふりに聲を聞ゆる
 久かたのあまとふかりのおほひはに初霜ふりぬ有明の空
 しからきのみやまに風やむかふ覽おのへの鹿の聲よはる也
 ふきをくるみ山嵐につたひきてさとまでかよふ小男鹿の聲
 村時雨はれゆく雲のおひかせに山めぐりするさをしかの聲
 みやきのゝこのした露にたちぬれていくよか鹿の妻をこふ覽
 寂覺してなを残すよもなかつきの有明の山のさをしかの聲
 久かたの月こそあらめあけゆけは鹿の聲さへ山にいるらむ
 うつらたつあさちのはすゑ打なひき夕の露に秋風そ吹
 ゆふされは草はの露をふきすきて涙をさそふ袖のおひかせ

さひしきはゆふへの風と思ひしにうすきりまよふ曙のそら
 山のはにまつよの月は出にけりこの里人やいねかてにする
 くもりなき空すみわたるなきよの月のみふねの山の秋風
 山里のにはの萩はら露ちりて身にしむ色の月そさひしき
 をきあかす露のよすからかけとめて月にやとかす庭の萩原
 むさしのは心つくしの山もなしまたれんものか秋のよの月
 神もさそ秋もなかはといはしみつなに流れたる月はみる覽
 須磨の浦せきふきこゆる秋風に月さひわたる浪のをちかた
 月影はよるとも見えすみつしほに流れひるまの心地のみして
 明石かたあかてかたふく有明の月ふきかへせおきつしほ風
 しほのいほまつのおみともまはらにて窓より出る有明の月
 きりゝすなにを恨みてあさちふの有明の月にねは盡す覽
 たひねする野風をさむみきりゝす草の枕のしたに鳴也
 ふるさとの庭のあさちふうらかれて虫の音よはる秋の夕霜
 ふきすくる風ならねともおきのはにをとつてて降秋の村雨
 もみちはゝをのれと染る色なれやときはの山も時雨ふる也
 山人のそても色にや出ぬらんつたはひかゝる谷のした道
 もみちはをよるさへ見よとて月月の光さやけき神並のより
 をしかなくありあけのころの山端にもみちを分て出る月影
 露霜にかねてこののはの移ろひてしくれを待ぬ神なひのより

冬

神無月しくれすとても曉のねさめは袖のかはくものかは
 かみな月冬のはしめはかき曇りしくれはさため有ける物を
 あくる夜の外出吹おろすこからしにしくれて傳ふ峯の浮雲
 たかねには夕日さすなりいこま山ふもとの里の雲は時雨て
 何にかは紅葉の幣をたむくらんしらすやあらし神無月とは

淋しさをいかに忍はむ神無月かせにしくれてこのはふる頃
紅にいはなみたかしみな川おなしたかねに紅葉散らし
片岡のはゝそのこのはちりはてゝ庭に音する山おろしの風
風さむみ月かけにもるゝ山したのくちはかうへに残る朝霜
をときむしゆふしも結ふ浅茅生の枯葉のをに嵐吹なり
山里のいはのかけちの霜くつれとはむといひし人も待れず
紫にかはりし花もしも置は又しらきくとうつろひにけり
またふらぬ雪けの空の雲をみてかねてこりをく山のした柴
したはよりかへぬみとりはほのみえて初雪薄き岡への松
のこりなくはらふも風の心にてたゆめはつもる松のしら雪
とにかくに冬はやまちそたえにけるこの後は積る白雪
今朝見ればあきさく花のあともなし雪をふるえの宮城野の萩
さえゝし雲はゝれぬる山のはの雪よりいつる有明の月
難波江やしほをふきこす浦風にかればたになき芦の村立
難波瀉ゆふしほみちてあまのすむいそやに近く鳴千鳥かな
さよちとりなくこゑさむし有明の月のてしほやみつゝの濱風
心あるあまそきくらん松しまやをしまのちとり月になく聲
冬もなをあさき淀みそこほりけるたきりて落るうち河の水
すはのうみや舟ちは絶てこの比はこほりの上を通ふかち人
山里のかけひの水はをとたえてこほりも夢も結ふころかな
なみ越るうちの河瀬のあしろきにいさよふ月の影の寒けさ
いかにせむあかてかたふく月影にしくれてむかふ峯の浮雲
ふしのねは又も有けり雪のうへに烟そなひくをのゝ炭かま

戀

あやしくも詠めかちなる夕へ哉わか心こそひころにもにね

枕たにしらぬ思をいかせんうちぬる程もあらは社あらめ
としをふるやとにしける忍草したはの露よ人めもらすな
かくはかり人めをつゝむ思ありとちらすな露の袖のあき風
人やきくけしきは色にみえねともしのふの山の松の秋風
あふ事は誰ゆへつゝむこひちとて思もしらす人のつれなき
あま衣ぬれそふ袖のうらみてもみるめ渚にもしほたれつゝ
あらくまのすむなる山のおくまでも君たにあらは行て尋ん
ひろせ川袖つく計り尋れとあふせをしらぬみをいかにせん
いのらすよ稻荷の山の杉のはのつれなき色に人ならへとは
きえかへりまつ夕暮の空の雲空しきはてはうちしくれつゝ
待わひぬたのめてもこぬ偽はたかならはしの夕暮の空
たのめつゝくらせるよひの更ゆくをかこち顔なる袖の露けさ
たのめつゝこぬ偽をまつとのさゝていくよか夜を明す覽
われのみやうきみかりのゝ拾柴の一夜もなれぬ人を戀つゝ
知せはやあふせもしらぬかたふちのやかても深き戀の心を
あふせなきわか戀かはをゆく水のふかきよとみに袖や朽南
あはてのみたゝ徒らに戀しなはなにゝかへつる命とかせん
我戀はあふを限と思ふみの目をふるまゝによはりぬる哉
一夜とてあたにや思ふさゝたけの此よはかりの災りならしを
逢事はたまさかやまの谷かくれした行水のかかくれてのみ
あかさしりしけさの名残を身にそへて又ねの床も起うかり鬼
別れちをなかめし月の有明はつらきなからのかたみ成けり
なれし夜はならへし床の枕にもぬるよなけれはうとく成つゝ
わたりけむあふせもみえずあすか川きのふに戀る人の心に
我ならは今夜の月にさそはれて思はぬ中の人も問なむ
たつね行わかるへせよ夜半の月なれにし袖の露のおも影

風ふけはたゝよふ雲のなか空にうきて思ひの消やはてなん
なかもやるそなたの雲をたよりにて袖にしくるゝ我泪かな
烟たつ思ひは誰もするかなる富士の高根をよそにやはみる
烟たつむろのやしまは遠けれとくゆる思ひのかよふころ哉
もしほやく難波おとめかあしのやのひまなくくゆる下煙哉
我袖につれなき浪はかけなから月日そこゆる末の松山
伊勢嶋やしほひのかたによる浪のいや遠さかる中そつれなき
時雨にはつれなき山のまつたにもさそふ風にはなを靡き鳧
ひとよとてかりねのゝへのさゝ枕むすひし露の契り忘るな
こひしとも誰にいひてか慰まんおなし心の人もなきよに
つれもなき人を必ずこひよとは心よいかたれかをしへし
いとせめて物思ふ時のふてすきみ只かく事は戀しとそいふ
よしさらは心のまゝに恨みてんつらきを人の思しるやと
さすか又心やかよふつれもなき人も夢ちにあひみつる哉
いかにせむ花に心そ移りぬるみやまかくれの朽木なるみも
しけかりしいとは山のおをつゝら思ひ絶ては來人もなし
あはてのみ年ふる里の軒の草かれね忘るゝことのはもうし
みをしれはうちみんとしも思はぬに心にもあらず濡る袖哉
しらせはや人をうらみの戀衣なみた重ねて獨ぬるよを
まれにてもあひ見はとこそ思しにたえぬは人の恨なりけり
ふえ竹のひとよのふしのうきねのみなくゝ人を恨みつる哉
あらゐそにうち捨らるゝ忘かひ忘す人を恨みつる哉

雜

別路に厭ひなれたるつらさにてさならぬよはの鳥の音もうし
はるゝと都をよそにへたつなりこえ行山のあとのしら雲
しからきのとやまに深き夕煙よにたつ人のすみかならしを
あまのはらふりさけみれば東路やふしの烟に秋風を吹
ふしのねはいかなる神の誓ひにてつれなき雪の山と成けん
夕されはしほやみつらむ伊勢の海ひかたにむかふ沖つ白浪
おなしくは都へさそふ浪もかなみつこのしまけ人ならす其
室のとやおひてふきまはす夕風に片ほに掛けてよする鰯舟
よるゝとよふね漕なるこゑすなりひらの港の有明の空
旅人のかちのゝはらに日はくれぬいつれの草に枕むすはん
ゆきくれぬいさやとからん松風のこゑするかたや住吉の里
よをいとふみ山のいほのさひしさに又うかれぬる我心かな
かた山のそはのいしゐのさゝれ水淺ましきみはすむかひもなし
つゝらはふ山のこさかの道せはみ苦しき物をよを渡る身は
うかりけるみ山かくれのいはね松色もかはらて朽やはて南
うき事のなをみにそはゝいかゝせん吉のゝ奥によを厭ふ共
よの中はかくこそ有けれ濁江の堀江の水のすみかたのみや
なにことか今はあらんと思へとも身の行末をさすか床しき
行末のあらまし事になくさみてはかなくすくす月日成けり
うき身にもなを行末そまたれける君かみかけを頼む計りに
長きよに迷ふうきみのしるへせよわしのみ山の有明の月
君か代はなからの濱にひるふとも盡ぬ眞砂のかすも限らし

右愚詠。去正元二年之春。依竹園之召。所書進三百首
已上百八十六首（朱書中書王御點今以之示之）

之内也。兩方無點歌等除之畢。

正應五年五月日書之。

前參議藤原朝臣

勅點十八首頭末

永仁元年十二月十二日被返下之。

隣女和歌集卷第二自文永二年至同六年

春

歲内立春

めつらしき年にも有かな一とせに二たひ春の光見つれは

立春

いつくよりくる春なれはあまの戸のあくるもまたす霞初覽
あまの戸の明かたちかく鳴とりの聲のうちにや春はたつ覽
わかまちし春やきぬらんあまの戸のあくるもしるき鳥の聲哉
あら玉のとしたちかへる時なれやゆふつけ鳥も聲を聞ゆる
あたらしき年の始と何かいはむけふは齡そふりまさりける
春の立けふたにいまたくれなくにやかてもふかき朝霞哉
正月二日あめのふり侍りしかは
あたらしき年はいくかもあらね共ふりぬる物はこのめ春雨

初春

春たちてけふみかのはら見渡はいつしかかすむ泉川かな
谷川にうちいつる波の遅ければ軒はの梅や春のはつ花
しら雪のふりかくしてし梅のはなけさ色見えて春はきに鳧
雪中子日
万代を君にゆつれと引松のはな咲まてにあは雪を降
若菜

たか爲のわかななれはかかすかの、雪間を分て急きつむ覽
かつきゆる雪まもしろし白妙の袖をつらねて若なつむのは
袖ぬるゝのへの雪けの忘れ水いへちわすれてわかなつむ哉
わかな摘のへのゆふ風なをさえてかへる袂は雪にぬれつゝ
野遊

霞

春霞たちにくらしなしからきの外山の朝日影そくもれる
山風やさえずなりゆくころしもそ霞の衣たちかさねける
はる山の谷のとかけにわかおれは霞たなひきむもれさり鳧
入相のひく山邊をなかわいとゝをくらのにそかすめる
三輪の山をしへし杉はうつもれて霞そたてる春のしるしに
ふしの根のめつらしけなき煙かとみしそ霞のはしめ也ける
のとかなるたこのうらなみ春かけてたゝぬ日もなき朝霞哉
うとはまにぬきし乙女かあまつ袖面影たてる春霞かな
春されは霞のそこらうつもれてそのなはかりやうき嶋の松
春霞やへのしほちの波まより見えし小嶋もいつく成らん
見わたせばあしやのおきの夕なきに霞にうかふ蟹の釣舟
さたかなる夢にはをとるうつゝ哉かすむなにはの春の夕暮
あしやに侍しに佳吉にまかりてよめる
すみよしの岸より見ればあしのやの我すむうらは霞成けり
うくひすのなかさりければ
としの内になきふるしてし鶯のはるてふなへに聲も聞えぬ
うくひすのうたの中に
鶯はいつれの梅にうつろひてなれにし花にをとつれもせぬ
春雨にぬれつゝそなく鶯のかさにぬふといふ梅はさけとも

餘寒

夕暮はやまとやみえむ鶯の籬の竹にねくらしむなり
春立てつのくみ渡るあしのやもなをよなくの風を寒けき
春きても山風さむく猶さえて雪けなからにかすむ空哉

残雪

たちさらぬ雲かとそ見る葛城の高まの山に残る白雪
かつらきや山の霞はとたえて夕日うつるふ峯のしら雪
まかひつる霞も雪もいろくにあらはれわたる朝ほらけ哉
俗人のすむかくれかの山里は春をしらせぬ雪のつれなさ
海のほとりの山に雪のこりて侍を見て

山端は猶白ゆきのふりそひて浪ちはかりそ霞そめぬる
正月はかりにものへまかり侍みちにて男山をみやり
て

神さひて年たけにける男山かしらの雪はくろきすちなし

おなしとき道のほとりの竹をみ侍て

つもりけん雪のふかさは消はてのちさへしるき竹の下折

攝津國よりまかりのほりて

旅衣雪うちほらひわけしかと都は春のけしき成けり

春雪欲消

あすからは若なやつまむ春の日のうらゝに照すのへの白雪
春のうたの中に

いはそく山の雪のこゑすなり嶺の白雪解やしぬらむ
梅か枝にかゝれる雪の朝こほり花まちつけてきえは消なん
梅か枝に咲かとすれはかつちりて庭につもるや春のあは雪
霜かれのまた色かへぬ故郷に咲散はなや春のあはゆき
いつしかとまたるゝ花の面影も散はものうき春のあはゆき

白雪のふりしく山か花ならは咲るさかざる枝はかくなむ
春來てもまた霜枯の櫻木に花のぬれきぬきするあは雪
さくら花咲ぬと見えし二月の空たのめして雪そ猶ふる
誰かけふ花とみきらむ二月の空もくもらて降れるあは雪

谷春水

鶯の谷の戸いつるやすらひにまつをとつるゝ雪のした水
こやの池を見やりてよめる

春風に汀の水とけぬらしさゝ波よするこやの池水

焼野雉

やけのこる片山はたの村薄たのむ陰とや雉子なくらん
やけのこるかたのゝ原を分行はそてふる草にきゝす鳴也

梅

白雪のかゝれる枝の梅花かをとめてたに別れさりけり

吹風はいつくよりかは誘ふ覽のへには見えぬ梅のかそする

梅のはな香をふきかくる春風にさながら袖をまかせつる哉

見渡せは里は霞にうつもれてそこはかとなく梅かゝそする

春の夜の月はおほろにかすめ共さやかに匂ふ軒の梅かゝ

むは玉のやみこそあらめ月にさへ色もわかれぬ梅花かな

月夜よしむめも盛の色なれは誰とはなくてまたすしもあらす

梅の木のもとにて月を見侍て

月のもる梅のしつえに立よれば影も匂も身にうつりつゝ

梅の歌中に

梅かえにふる春雨の雪こそ花のちるかとあやまたれけれ
春雨をかたいにしてよりかくるはなたの色の玉のを柳
みる人の心をふかくそむれはやから紅にむめはさくらむ
紅に匂はさりせは梅のはなけふふる雪にいかておらまし

梅のちるをみて

いとふへき風より先にかつちれはをのれのみうき軒の梅枝
いにしへのためしもきかず春風にかほれる雪を袖に散ぬる
ちりぬとて何かは花をわきていはん春の日數も移ろひに鳧

梅のちりてのちよめる

むめの花ちりぬる後のこのもとは鶯さへそをとつれもせぬ

柳漸低

みとりこかふりわけ髪の朝みたれまたうちへぬ青柳の糸

柳歌中に

さほ姫のかさしの玉か青柳のうちたれかみにかゝる白露
梅はちり櫻は遅きこのもとはなかめにかくる青柳の糸
ぬきとむる花はなけれと梅かえに亂てかゝる青柳の糸
河岸になひく柳のかけみれは底の玉もそ浪にみたるゝ
立こむる霞の袖のほころひに亂て見ゆる青柳の糸

佐保姫のたつや霞のうす衣はつるゝ糸か峯の青柳

春風はのとかに吹ぬあさ緑霞になひく青柳の糸

あさみとり霞のうちにかけろふのあるかなきかの青柳の糸

春雨のよにふることはくるしとや柳の糸のむすほゝるらん

水無瀬殿の柳を見侍て

みなせ川あれにしみやをきてみれは朽木の柳春めきにけり

路邊柳

わかことく人やおりけん道のへの一本柳えたそさひしき

春雨

春雨の降とも見えぬ夕暮に霞に落る軒の玉水

梅かゝの移ふ袖もうちしめりうたゝあるさまの春のよの雨

彌生まで咲をくれぬる櫻木の花をすゝむる春雨そふる

人とはぬむくらのやとに侘つゝもわか身よにふる春雨の頃
みかさ山よそなる袖は春雨のよにふりはてゝ濡ぬ日そなき

閑居春雨

梅もちり鶯さへも音たゆるやとはなかめのうちそさひしき

歸鴈

あまの原霞のうちにねをたえてたかさそふとか鴈のいぬ覽

春毎に歸るもつらし鴈金のなしかよひち霞へたてよ

しのゝめの霞の衣立歸る袖の別れに鴈もなくなり

櫻さく山の尾上をかつ越て別れもゆくか春のかりかね

逢坂の鳥よりさきにかへる鴈をのれ鳴てや立別るらん

かへる鴈強顔みゆる有明の月をのこしてかすむ山もと

此里の秋にてしりぬ越路には初鴈金とはるはいふらん

かまくらへまかりくらむと思ひたち侍頃鴈のこゑ

を聞て

故郷に我もことしはかへる鴈あつま越ちの道はかはれと

鴈の聲をきゝてこしなる人をおもひいてゝ

かへる鴈秋風吹は別にしわかひとつらをさそひてもこよ

こしよりまうてきたる人のかへり侍しかは

鴈かねにあらぬ物から春たてはもとのこしちに歸行らん

遠所にまかりて心ならずひさしう侍て歸鴈をきゝて

故郷にかりかへるなり此春は我もともにとおもひし物を

ふる郷にいかなる鴈の歸らん思はぬ方に我そ年ふる

春きても我は歸らぬなけきすと雲井の鴈よいもにつけこせ

ものへまかりて月をみ侍て

夕月夜竹のした道過行は葉分のかけそ袖にかすめる

春雨

このまたに心つくしの山のはの霞よりもる夕月よかな
霜かれのまた色かへぬこのまにも猶晴かたき春のよの月
春霞おほつかなしや小倉山まつ梢にうつる月かけ
はるの夜の月はをくらの山なら川音きよき龜のおのたき
鐘の音は霞のそにとたえて霜にかけそふ峯の月影
月を見て

昔わかおもひしまゝに津の國の難波の春の月をみる哉
あけぬるか霞のうちに影たえてあるかなきかの山端の月

山家春曙

明ぬるか柴のかこひのひま見えて霞にのこる山のはの月

花

咲やらぬはなまつ比は徒にゆきてはきぬる春のやま里
きのふたに咲ぬとみえし山櫻けさゝへいかに猶またるらむ
咲さかすかつとふへきを山さくら尋ぬる道にあふ人そなき
咲さかすよそにてもみむ春霞花のあたりをよきてたゝなむ

櫻をうへをきてものへまかり侍とて

植置しわかきの櫻咲そめはつけよわかせこみにかへりこむ

花歌中に

このまよりひれふる袖と見えつるは今朝咲そむる花の一枝
遅るとき櫻を宿にあまたうへて花の盛の日數をそみる

花の傍の木に鶯の鳴を

盛なる花に羽風をあてしとや我とよそなる鶯のこゑ

花の歌中に

花をみる春の日かけの夕かつらなかしと誰かゝけて思はむ
櫻木に枝ぬきみたる青柳の糸は花田の色にそ有ける
夜の程に花や咲らん朝朗かすみのうちにかゝるしら雲

たよりにもあらぬ野もせにゐる雲の行かたなきや櫻成らむ
色かよふ高ねの雲の偽をこりすも花と又ななめつる
まがへすは尋さりましたのめつゝまてはや雲を花とみつ覽
立かくす霞やなそとあしかきの吉野の花をみるよしもかな
人しれぬ花や咲らむ春霞たな引山にうくひすの鳴
櫻咲あしやの里の薄霞空さへ花の色にみゆらむ
霞しくあしやの里の花さかりうら山かけて人にみせはや
春雨の雫の露の朝しめり色なつかしきやま櫻かな
朝霞立まふ山の春雨に咲すきみたる嶺のさくら木
春雨にぬるともゆかむしめゆひし山の櫻はちりもこそすれ
此雨にさきたつ花はちりぬともをくれし枝は盛りなるらん
春雨にしほるゝ花を哀とや櫻かえたに鶯のなく
月きよみさよ更かたに立いてゝ花のこかけに立そやすらふ
花にほふ彌生の空のうす曇かすめる月にあくかれそゆく
月夜に花を尋侍て

山里の花みにゆくと月影に分入そてはさよふかき霜

よし山の山の花おもしろきよし人の申侍を聞て

音にきく吉野の山の櫻花この春ゆきておもひてにみん

花歌中に

春毎にあくかれいてゝ見しかともかゝる所の花はなかりき
としをへて都の花もみしかとも此山里ににる花そなき
今更に誰かさはむと思へとも猶たのまるゝはな盛哉
とはれぬもうき身をしれは恨みぬをかこつたかなる花盛哉
櫻花にほふ比たに人もこそ散なん後に誰をまたまし
とはれぬも身にはうらみす大かたは花を尋ぬる人もなき哉
わか宿の花の思はんこともかくほかの櫻にめかれやはせん

限りなき思のまゝに手折とも人なとかめそ花のやまもと
かつみてあかぬ心におりつれば花のため社色なかりけれ
さくら花待もおしむもくるしきにこりぬ心を哀とやみぬ
櫻花あすより後はしらねとも心のかにけふはみるかな
よの中はさてもやうきと櫻花ちらぬ春にも逢みてし哉
ちるはおし匂ひはまさる數々に思ひおもはぬ花の下かせ
櫻花かつみなからに戀しきはちりなむ後を思ふなりけり
かつみつゝかねて戀しき名殘かな散ことやすき花と思へは

春禁中

百敷や大内山のさくら花昔かさしゝ春そわすれぬ

花下遇友

故郷の老木の櫻みにこすは昔の人にかてあばまし

朝夕に奉公し侍しに勞によりてこもりて

ことしけきよにもつかへて此春は心のとかに花をみるかな

一兩年在京なから或所勞或は服にて出仕に及す侍て

いひしらぬ身のつらさ哉よそにたに雲井の櫻みてややみ南

あつまの故宅にひとりかへりすみ侍て

古も人はとひこすわきもことみてなくさみし花は咲つゝ

閑居花

さしこもる葎の門もあけぬへし人たのめなる花さかり哉

惜花

今よりは人もとひこし櫻花ちるは名殘のおしきのみかは

落花隨風

小倉山吹こす風のつてにこそあなたおもての花は見えけれ

風前花

けさよりは心つからも散花にうたて吹そふはるの山風

山たかみ雲井をわたる春風に亂るゝ花の行衛しらすも

落花

かねてたにあらまし事のうかりしはさは此風よ花散すめり
我からもうつるふ花の風吹はかことをかけてちる櫻かな
春雨に庭行水のさゝら浪まなくなかるゝ花のうたかた
ぬれゝも昨日みましを春雨のはるゝまつまに花を散ぬる
春の色ははやく移りぬ吉野川岩きりとをる花の白波
芦のやの岡へのさくら風吹はをよはぬ波の花さへそちる
時ならぬみそれとそみる春雨にふりそはひぬるはなの白雪
庭の面にまなく降しくあは雪の消ぬ物から波に立らん
さくら花ちるこのもとに立寄は袖こそぬれね雪はふりつゝ
櫻咲梢の雲はかつ消てふりまさりゆく庭のしら雪

花のちるおり鴈のかへるをかける屏風の繪をみてよ

み侍し

花のねに今かへるとや故郷の雲ちにむかふ春の鴈金

花前無常

夢のよをあはれとみつゝなかむれはいやはかなにも散櫻哉
つねならぬ習ひもかなしきはかつ散行花の哀れ世中

落花歌中に

世中のうき數々にちる花の數をさへもそふる春哉

ものへまかるみちにて

なはしろのあせのなか道過行は日くれさひしく蛙鳴也

藤

うつろはぬ松にかよへる色とてや常盤のもりにかゝる藤波
さきかゝる梢の藤の色なから同しときはの松にやはあらぬ
松にのみ枝をつらぬる契もてなとかは藤のあたにうつろふ

池水に春の名残はかけとめつみきはの藤の花のしからみ

春日社の御前の藤をみ侍て

かすか山藤のかたえの花さかて年ふることを神はしらすや

暮春

あはれてふ事をのこきて花をさへさそひていぬる春に有哉
常よりも日數くはゝる今年たにやすく過ぬる春にも有かな

三月盡

昨日たになけきしものを春の日のけふはかりなる入相の鐘

潤月ある春の末に郭公のなくを聞侍て

よのつねのう月に馴て時鳥數そふ春も又きなくらん
夏たにもめつらしと聞初聲を春よりもらす郭公哉

夏

首夏

咲あへぬ垣なれとも卯の花のなにおふ月ははや立にけり

卯月に鶯をきゝて

散のこる櫻とやみる卯の花のさける垣ねに鶯のなく

卯花

神まつる杜のゆふして色そへて咲まかへぬる野への卯の花
うの花のかきほの月よ影きよみやみもあやなき庭の通ひち

葵

祈るそよその神山のみつかきの久しきみよにあふひあれ共

賀茂祭日よみ侍し

よの常の年に葵の草ならはよそにみあれのかさしならしを

神まつり

たかさとに神まつるらん昨日けふ榊葉とりてかへる山人

ほとゝきすを侍侍て

徒に花たちはなは散にけり山郭公待とせしまに

郭公歌中に

我そのゝあふちの花のちらぬまに山時鳥きつゝなかなん
郭公いつもかはらぬふるこゑと思ひ捨ても猶そ待たるゝ
あしのやはうきふししけき里なれや山郭公ねをたえてこぬ
人の時鳥聞侍よし申侍れは

待わふる我より先に時鳥ねたくも人にきかれぬるかな

霍公歌中に

めつらしき初音なれとも人傳にきけはふりぬる時鳥かな
いさよひの月とともにも山のはをまたれて出る郭公かな
名残をは心にとめて時鳥いつくの雲のよそにすくらむ

霍公さよふけかたの一聲はまとろまねともおとろかれけり

聞もせすきかぬにもあらぬ時鳥とをき雲路のさよの一聲

我そ先鳴はしめぬる郭公物おもふやとのさ夜の一こゑ

郭公さ月まつまの忍ひねを夜ふかくおきて獨聞かな

鳴ぬなりさよ更方の時鳥おなし寐覺に誰か聞らん

宵なから明ぬる月のほのかにもあかぬねに鳴郭公かな

有明の月まち出る高嶺よりをくれてすくる時鳥かな

我宿の花橋や匂ふらん窓ちかくなくほとゝきす哉

賀茂社にまうてゝ侍しとき郭公を聞侍て

神山のみねよりいてゝ時鳥たゝすのりの方になくなり

はこねをとをり侍とて

箱根山雲のうへなる杉かえにあまた聲する時鳥かな

たこのうらにて

田子の浦のなみかたかけて富士のねの雲に鳴入時鳥かな

嵯峨にかへりまうてきて侍しに

夢後時鳥

かへりすむをくらの山の郭公こそかたらひし我を忘るな
あふとみてさめぬる夢のつれなきにかへて嬉しき時鳥かな

郭公歌中に

しての山こえてくるなる時鳥わか思ふ人の行衛かたらへ
何事をいかに歎きて郭公物思ふやとを鳴て過らむ
橋の花こそちらめほととぎすなと言とひしねさへかれぬる

五月五日よめる

菖蒲草まとをにふける宿なれとこゑもよりこぬ郭公かな
玉かくる五月のけふのなつ衣はなの袂にかへりぬるかな
芦のやのあしのやへふきふきそへて軒はひまなき菖蒲草哉

早苗

よそなからみるさへ苦し五月きており立川子の暇なの身や

五月雨

五月雨にはやなりにけり咲初し花橋になかめせしまに
けふいくか露も雫ももる山の下草くつつる五月雨の頃
おちまさる瀧の白糸をりはてふる五月雨は日數へにけり
さゝ波やあれにし宮にうらさひていと降ぬる五月雨の比
初瀬山ひはらもみえす五月雨の雲のそこなる入相のかね

蟬

五月雨の雲る嶺のこのまよりほのかにもらす蟬の初聲

盧橘

ねやちかき花橘の匂ひきてわか袖の香のなをそたてぬる
思ひいて誰忍へとはなけれ共我袖ふれん軒のたちはな

夏夕月

時鳥鳴一聲にあくるよをなをのこしても月そかくるゝ

夏月

鹽風の涼しき磯の松陰にまさこかたしき月をみるかな
みなとえの芹のしけみを分わひて月のみふねもさはる比哉

照射

狩人のいるのにたてる檜芝のなれていくよのとししつ覽

螢

夜はの月をよはぬ谷のこかくれに見ゆる光は螢なりけり

光ミユルヤ ナルラム

さ夜更てあしやの里を見わたせは田面はるかに飛螢哉
やゝしけるさつきの池の萍のうきて思ひにとふ螢哉
むら雨の露けき花のゆふかほに光そへてもゆく螢かな

夏草

ふみわけてさらにやゆかむ玉ほこの道もなきまで茂る夏草

蚊遣火

夕顔の花咲かゝるあつまやのまやのあまりにたつる蚊遣火

夕立

夕立の空もとゝろになる神のこゑする方にむかふ雨雲
日はくれぬと思へは雲の小倉山嶺より過る夕立のあめ

松陰納涼

興津風涼しき磯の松かねに衣かたしき日なくらす哉

あふさかにて

逢坂の杉のこかけに胸とめて涼しくむすふはしりゐの水

山家晩涼

雨そゝくそものの眞柴風過て夏を忘るゝ山の夕影

晩夏

日くらしの鳴夕暮に吹風の音にそ秋はちかつきにける

六月秋

麻のはのゆふしてなかる此川の水上にたれみそきしつらん
戀せしと誓はぬ人もけふ毎にみたらし川にみそきをそする

みなつきのつこもりの夜讀侍し

夏秋も思ひきためぬさ夜なかに風吹わくる庭のおきはら
夏秋の行あふ空をかそふれはとしの半はこよひ成けり
さ夜なかとよはふけにけり夏はてゝ秋社今は立かはるらし

秋

立秋

初秋

久かたのあまの川浪あき立ぬけさよりいかにしつ心なき
涙たにおき所なき我袖に又露そへて秋はきにけり
今よりの風の氣色を如何せむきのふけふたにまつ悲しき

秋風

秋風のきむき夕は何事をおもふとなしに涙おちけり
吹過る夕の風やさそふらん露も涙もとまらさけり
此夕村雨ふりてわか門のいな葉をわたる風のすゝしさ
萩の音に宵のうたゝね夢さめて涙こぼるゝ袖の秋風
秋かせの身にしむからによの中の今さらなとか悲しかる賢

七夕

天河月のみふねはいてにけり七夕つめや今渡るらし
天河とわたる雲の秋の袖千代を一夜にかさねてしかな

七月七日雨のふり侍を

かきくもりけふ降雨は七夕の暮待わふる涙なるらし

同日人のもとへ申侍る

我戀はかたのゆくなる天河けふ待えても渡るせもなし

かちの葉を

天川あふせの舟のわたし守はやいそきとれけふのかちのは

八日朝人のもとより歸り侍てよめる

けさはわか身にしられても悲しきは七夕つめの別なりけり

故宮萩

露分ておのへの宮をきてみれはいまはのらなる秋萩の花

草花露

晴あかるきりの名残に露落ておるそてぬるゝ秋萩の花

野にまかりて女郎花をゝりて

女郎花に心のうつろはゝあやなくのへにけふや暮さん

女郎花おりてかへらは同じのにすむらん鹿や妻こひにせむ

ものへまかりて

山里にわか植置し女郎花あやなく散なかへりゆくまで

草花歌中

うすくこき草の花のうつろへは花をかへりて露を染ける

染出すのへの錦の色々にかへりてうつる秋のしら露

秋の露たか手枕に結ふらんゐる野のすゝきほに出にけり

あしやにすみ侍しころほに出たる田をみて

浦近きまつをふきこすしほ風にたのもさへにそ波は立ける

虫

わか宿の萩吹すきむ夕風に忍ひあまれるむしの聲哉

暮行は萩ふきまさる秋風に聲うちそふる庭の松虫

月見つゝ物思ふ宿のあさちふになく松虫の待人はこす

蜚をのか涙か終夜こゑする草にきえかへるつゆ
蜚鳴のゝあさち色つきぬ泪の露やよきむ成らむ

あきをへはのへとやな覽虫の音もかつ／＼しけき草の一村
色かはる萩のしたはの露さむみ獨や虫のいねかてに鳴
野も山も色付そむる秋風の身にさむきよは虫も鳴也
鹿

女郎花おほかるのへにたつ鹿のなにをあかすと妻をこふ覽
小男鹿のしからむのへの眞萩原花をはのこせ露はちるとも
我門のわき田茹まで足曳の山たちいてぬさをしかの聲
山田もる苦屋にかこふならしはのなるゝを厭ふさほ鹿の聲
月

風そよく軒はの萩のほのかにも露にかけそふ秋のみか月
またいてぬ今宵の月のさやけさもかねてしらるゝ夕日影哉
空晴て山のは残る夕霧に立はなれたる月のさやけさ
さをしかの妻とふ山の松の葉に月は移りて夜そ更にける
僞のなにこそ有けれ小倉山くもりなきよの月はさやけし
忘すよまたゆきて見む大井川玉ちるせゝにさえし月かけ
おもひきや年ふる里を住かへてことし都の月をみんとは
船にのりて讀侍し

入江より舟漕いてゝあしのやのうらの湊の月を見るかな
月前眺望

あしのやのうら路を行は住吉の松さへみゆる月のさやけさ
月歌中に
月のすむあしやのたつみ霧晴て夜さへみゆる住吉の松
月も猶すみよしとてやよとゝもに入江の水に影やとすらむ
松かえに月のしらゆふかけて猶神さひまさる住吉のうら
八月十五夜讀侍し
難波かた秋のもなかの玉かしはあらはにみゆる波のうへ哉

難波江やしほのさしくる波の上に宿る月さへ影そみちぬる
同夜にあかしにまかりて侍しにくもりて侍しかは
待えたるこよひの月はくもれ共明石の浦の名にそなくさむ
ふくるほとに晴て侍しかは

よひの間にくもらさりせは月影のかく計やは嬉しからまし
心ある人こそなけれ秋のよの月も名高き浦のとまりに
昔よりおもひし事はこれそこの今宵の月をあかしにてみる
船にのりて讀侍し

明石瀉おきに漕いてゝ月みるを釣するあまの名をやたつ覽
明石かたきよき月夜にこき行は淡路の嶋に千鳥友よふ
いさり火を見て

くまもなき明石の浦の月影に光そへたるあまのいさりひ
曉かたにすまへこきかへり侍しに

いける身の思ひ出なれや明石より月に漕行須磨の浦浪
かへりて後月をみ侍て

月見れは先そ戀しきよとゝもになかめあかしの波の通ひち
九月十三夜入道大納言爲家卿の會に題をさくりて月
前橋

あかてのみあくるもつらし葛城やくめちの橋の秋のよの月
月前海

みくまのゝうらよりをちの秋風に霧のよそなる月を見る哉
月前薄

さをしかのいなのおはな照月の旅寐のさこや露の手枕
月前葛
吹かへす眞葛か原の秋かぜに月にうらみてしかも鳴なり
月前顯戀

月前逢戀

せきかぬる涙の露にやとりきて人にしらるゝ袖の月かけ
わくらはに逢とみるよの月たにもあかぬ涙にかきくらしつゝ

月の歌中に

老さなるうさをはしらて此秋も月みるよはそ身に積りぬる
わか袖に露を置なる月見つゝ物思ふまに夜やふけぬらん
哀いかに人待宿にうらむらん秋風さむく月そふけ行
月影の更行まてに獨ゐてちゝに物思ふ袖の露哉
故郷の軒のいたふきつまくちてしのふを分る月のさひしき
ふるさとは軒もる月のかけのみそ昔の秋にかはらさけり
うたゝねの袖ふきかへす秋風に夢路たかへて月をみる哉
更る迄詠めさりせは宵のまにくもりしまゝの月にやあらまし
門田なる鳴の羽音にねさめしてかたふく月に物思ふ哉
秋風に物おもひおれは濱松の梢をいつるいさよひの月
秋風に雲のたなひく山のはをいさよひのほる有明の月
浦さふる松の秋風さよふけて雲かくれゆく有明の月
明ぬるか夢もいく度きえかへりねさめの後もななきよの月
あつまより秋は都の雲井まてたなひきのほるきりはらの駒
秋歌中に
秋萩の花ちるまてに久堅の雲ゐのかりの音信もせぬ
萩もちりわさ田のをしねかり過ぬいつか雲ゐの鷹はき鳴ん
初鷹
秋風のさむく吹にし夕より門田のおもに鷹はきにけり
霧深きくもちやまよふ我門のわさ田に落る初鷹の聲
から衣のつまふく秋の夕風にうらめつらしき鷹はきにけり

霧たちて朝くもりする秋山の嶺飛こえて鷹は來にけり
野も山も色付ぬらし霧立てさむき朝けに鷹は來にけり
いつくよりけふゆき暮て龜のよの月の都に鷹はきぬらん
和琴を彈侍し時鷹のすき侍しかは
秋風に聲をまかへて引ことのことちにゝたる鷹のつらかな

鳴

山田もる秋のかりいほのいなむしろ鳴の羽音に夢も結はす
霧
程ちかくさきたつ人の聲はしてそのあと見えぬ山の夕霧
山路霧

山路霧

これやこのやみのうつゝのうつゝの山霧に分いる薦のした道
さかにすみ侍しころ
あさといてに小倉の山をなかむれば霧立空のなに社有けれ
むこ山の霧を見て

浦風にとまやは晴て奥山の横たつ嶺にのこる夕きり
龜歌中に

龜歌中に

なへてよの野山の草木花も葉も秋の盛とみゆる色かな
秋されは物思ふ人のいかならん我袖たにもほすひまもなし
さひしきは山里からとおもひしに都の秋も涙なりけり
小倉山尾上吹こす秋風に松よりつたふ入相のかね
うらちまて秋の山下風さそひきぬのてらの鐘の入相の聲
宿ちかしいく田のもりのいく度もとはむとそ思ふ秋の限は
浪よする秋のしほ風よをさむみ入江のかたに千鳥鳴也
夕霧のはるゝとたえになかむれは入日にほへるあはち嶋山
なかつき
風さむみよを長月になりけり今よりいかにね覺せられん

九日人のもとに申つかはし侍し

菊

諸共にけふはつむへき白菊のはなれてよそに袖そ露けき
おる人も老せぬ菊にをく露の玉のをなかきかきしとそみる

擣衣

都には入またたぬ秋風の音羽の里に衣うつなり
この里はひとりある人のやとらしなへてより先うつ衣哉

遠村擣衣

ほのかにも衣うつなる聲す也たか山里のねさめなるらし

秋時雨

鷹かねのきこゆる空の夕時雨なみたなからやこのはそむ覽

紅葉

きのふけふ秋風さむく雨ふれは山のこのはや色かはるらん
この朝けはつ霜ふりてしかのたつ外山のはゝそ色付にけり
白露となにはたてともをくからに秋の草木の紅葉しぬらん
夕日さす雲のはたてのから錦立田の峯はもみちにけり
嶺はるゝ霧の名残に露落て月日色つく山のもみち葉

秋歌中に

もみち葉をさそふ嵐にねをたえて露の底なる庭の松むし

九月盡

長月もけふ紅のから錦もみちのかけは立もさられす

暮秋霜

尋ぬへきゆくゑもしらす草のはら霜に跡なく秋はいぬめり
同日あす京へ出侍らんとてさかの宿所にてよみ侍し
立かへり秋もろともにわかないはこの山里そ人めかれなん

冬

初冬

神無月けきなことなるけしき哉きのふもふりし時雨なれ共

時雨

問人はかれぬ庭の冬草にをとつれかはるむらしくれかな
まさきちる峯のむら雲立まよひをとふりそふるゆふ時雨哉

旅宿時雨

かりねするさゝのまるやにもる時雨涙の外に又しほれとや

十月一日入道前大納言爲家卿家にて題をさくりて讀
侍し歌の中に冬落葉

まかひつる高ねの雲は空はれて時雨をのこす山の紅葉は
冬曉

篠の葉は霜をかさねてそよく也みやまの月の有明の空

冬山

秋はつるかり田のとまや荒はてゝ心のまゝにもる時雨かな

冬夢

たえずゝる時雨の音にねさめして冬のよさへの夢そ短かき

落葉歌中

時雨たにひまなき物を神無月ふりそはりぬる山のもみちは
なにしおはゝ嵐の山の紅葉はや外より先にちりはしむらん
紅葉ちる梢の冬の風さひて庭にとまれる秋の色かな

霜

駒なめてあさふむ後のをかやはら枯はの霜に風さはく也

閑庭霰

庭の面はふるや霰のたまさかにふみ分てとふ跡たにもなし
霰歌中に

空さゆる有明の月は有なから 村雲みたれちる霰かな
野寒草

虫の音も花の色々かれはてゝみしにもあらぬのへの淋しさ

寒 芹

風さゆる池の汀はつらゝゐて 獨なみよるあしの村立

千 鳥

浦風の吹上のまさこかたよりになくねみたるゝさ夜千鳥哉

浦風に月更行はあしのやの我すむかたにちとり鳴也

住吉の松の梢をこす波はいりえにかよふ千鳥なりけり

難波江やこほる霜夜の昔間より立ゐる浪は千とりなり

浦つたふ夕浪ちとり立迷ひやそ嶋かけて千鳥なくなり

明石かた鹽風さむく月冴て嶋かくれなくさよちとり哉

さほ川の汀の水ふみならし妻よひまとふさよ千鳥かな

大井川嵐の山のさむければふもとの汀先こほりけり

なるみかたを過侍しにひかたに氷のひまなく侍しか

は

なるみかたしほひの道をあさ行は波の名残に先氷ける

雪

此里もうら風さむし雲かゝるかつらき山は雪けなるらし

雲かゝる嶺の松風音さえてさむき夕にあは雪そふる

さえくらす時雨の雨やこほる覽かつみるまゝに雪に成ける

あまの戸は猶雲くらきしのゝめの山のはしろくつもる初雪

ふり積る雪のしたしはうちなひきさひしまさる冬の山風

冬されはいつとも雪の白山をこしちにのみと思ひけるかな
たかき山に雪のしろく侍をとひ侍しにきそのたけと

申侍しかは

雪白きかたやいつくことゝへはきそちの山と人はいひ鳥

海邊雪

白雪のふりしく時はをしなへてなみまともなきあはち嶋山

冬 月

月かけはふけぬともねし我袖にをけらん霜はうちはらひ南

冬のよの曉までに月見ると我かほるそてに霜はをきつゝ

廣澤の池の氷にかけさえてどもかゝみともみゆる月かな

旅宿冬月

草枕霜をかたしく袖のうへにまたかけこほる月のさむけさ

冬曉月

霜こほる庭の冬草うちなひき有明の月に嵐ふく也

月をみ侍しおりゆきのふるを見て

神 樂

曇るとていとひもはてぬ雲間より月は有明に雪そかつちる

今も猶神代の風やかよふらんあつまのことの朝倉のこゑ

あめのした道ある時そおなしくは神代にかへせ朝倉のこゑ

神代より色もかはらて宮人のかさしにさせるわか櫻かな

歳暮雪

くれ行は年こそつもれけふまては我身のよそにふれる白雪

老後歳暮

流行としのとまりを尋れば老の浪よる我身なりけり

歳暮歌中に
定なき習ひとしれば老かよにをよはぬ身にもおしき年かな
二年といへは久しき名のみしてけふとあすとは程なかり鳥

戀

初戀

忍山わかまたしらぬ道なれはふみそむるよりくるしかり
 忍山これよりおくのいかな覽ふみそむるよりかつ迷ひゆく
 忍山たかしるへよりふみそめて我身ひとつに道迷ふ覽
 見戀

あさりするあまならぬ身のみるめゆへ朝夕袖に波をかく覽
 風吹はあしやの波にうく草のなをたに人のなをたえねとや
 忍戀

常盤山色こそ見えね下草のしたはの露はかはくまもなし
 下萌のわかたくひこそなかりけれ忍ふのうらも煙立なり
 冬河のこほりをくゝる岩波の下むせふとも人はしらしな
 逢見ての後は立名も惜からすまたき色にはいてしと思
 忍ひつゝ年のへぬれは我なから心つよしと身を思ふかな
 契戀

波こえむ末をはしらすすゑの松かばらぬ色と頼め置かな
 待戀

たのめつゝこぬ人よりも偽にこりすまたるゝ我そつれなさ
 ぬれつゝも雨にさはらす今夜こほ思ひ鳧とは身をも頼まん
 月よゝし秋風さむし今夜たにとはすはゆかん人なとかめそ
 月前顯戀

せきかぬる泪のつゆにやとりきて人にしらるゝ袖の月影
 不逢戀

祈らすよ其かみ山の草のなの我身にうときかさしなれとは
 戀路にはなとあふさかのなかる覽人めは關のとさしなれ共
 うき身にはそをたに後の思ひてになきな計りの逢事もかな

臥無實戀

逢戀

あひみてもあはぬなけきの戀衣かさねても猶なにか隔つる
 今夜たに泪はかはけわか袖のうらめつらしき月日わすれて
 初夜逢戀

月前逢戀

ふけぬまにやかてさめぬるよひの夢あふと計もみやは定むる
 わくらはに逢とみるよの月たにもあかぬ涙にかき暮しつゝ
 後朝戀

思ひをく心はかけとそひぬるをいかて我みのなかへたつ覽
 夢ならはけきのつらさはなからまし闇の現そかき暮しつゝ
 忍歸戀

鳥をたにまたてそる人しれぬ我身一つにねをはなきつゝ
 かへるさの袖はまきれし有明の月たちかくすみねの横雲
 逢不逢戀

變戀

別れちにかこちし月のめくりきて今は形見と見るもはかなし
 我袖にならひにけりな松山のまつとせしまにこゆる白波
 片戀

恨戀

我爲につらきむくひのたかはすは人も戀路にかくや迷はん
 亂つゝもにすむ虫のなをわすれかるてふあまの恨みつる哉
 遠戀

名立戀

東路のみちのおくよりたつ人の相坂とをき戀もするかな
 忍山しのひし道とふみまよひ思はぬ川のうき名とりぬる

思高戀

契あれは空なる月も思川ふかき水にはやとるとそきく
夢に人にあふと見て

夢にても現のうさにかはらずは思ひたえつゝ歎かさらし
人のもとへ申つかはし侍し

夢とたに思ひ忘れぬはかなき名残りよかに現なるらん
色みえぬ心のみこそ悲しけれ思へと人のしるよしもなき

此比のうつゝは夢に劣りけりぬるよならてはあふ由もなし
人はいさ思ひもいてし我のみそつらきを慕ふためし成へき

たのみ侍る人にあはすして遠所へまかるとて申遣し
侍る

別るてふ事はあひての後の名をまたきに歎く我そあやしき
ものへまかり侍る人の許に

逢事は波にたゝよふみるめたにはてはかれなん後の悲しき
鎌倉へまかりて侍しかやかてかへりのほるへきよし

思ひて侍しに心ならすひさしう侍て

けふくゝとまつらんいもか下紐のひきちかへて年月をへん
唐衣つましなけれは古郷も旅のやとりにかはらさりけり

旅衣かたしきわふる我よりも獨ふすらんいとおしそ思ふ
草枕ひとりぬるよの露けさは都のともかはらさるらん

咲そむる若木の花のまともをに君をみし日のなりまさる哉
よなくの夢ちは絶すかよへともうつゝにこえぬ相坂の山

草枕旅のやとりにいもこふと我ぬる袖は露にぬれつゝ
ものへまかり侍る道より人の許へ申つかはし侍し

ときはなるまつらんとしも頼まねは思ふ物から急く旅ちは
ちりかたなる萩につけて人のもとへ申つかはし侍し

秋萩の花ならなくに人心うつるふ色のあたにみゆらん

もみちにつけて人の許へ申つかはし侍し
下染の心の色にくらへみよなを深からぬ峯のもみちは

薫物を人のもとへつかはすとて
あふ事のと絶かちなる歎よりくゆる思ひのたくひともみよ

煙たつ我下もえのたくひともいはゝあたにや思けたれん
寄日戀

天の原雲ゐのよそにわたる日のをよはぬかけをみしそ戀しき
寄月戀

涙あれは袖にも月はやとりけり戀しき影よなとかつれなき
忘なよ行末かねて終夜ちきりし月の有明のかけ

寄雨戀

難波人あしふくこやにふる雨の音にそたてぬ袖はぬれつゝ
つゝみかね人めにあまる我袖の涙まさるゝよひの急雨

我ゆへの涙とやみぬなきあかす袖よりくもるけさの五月雨
寄風戀

逢事は思ひたえぬる我宿にうたてあるなの松風の聲
寄雲戀

なかむれは空行雲のはてもなしあふを限りの戀ぢならねと
戀しなは雲となりても君かすむあたりの山を立ははなれし

寄煙戀

芦のやの下たく煙ひまあらはもらしやそめん名にはたつ共
寄春戀

見てたにも慰みなまし春霞君かあたりをたちなへたてそ
寄夏戀

みるもうし我身もさそな夏虫の思ひにかへてすつる命は

寄秋戀

別にし人のかたみか秋風のふくにつけてはこひしかるらむ
つまこふる屋上の鹿の人ならばあひ語ひて音をはなかまし

寄冬戀

物おもふ袂は冬の外なれや涙の川のこほるよもなき
涙川こほらぬ波もこほればや行方もなき思ひなるらん

寄朝戀

かへるさの袖よりおちし涙にや今朝の道芝いろかはりけん

寄夕戀

ともすれは猶たのまるゝ夕哉あひみし比の心ならひに
夕暮はたのみなれにし時とてや思ひたえてもかなしかる覽

寄夜戀

まとろまは忘るゝ程もあるへきを暮る夜毎に夢にみゆらん
思ひかねうちぬるさ夜のかねの音に夢はたえても覺ぬ比哉

寄山戀

此比は關守も居ぬあふさかをなとこえやらぬ身とは成らむ
露ふかき葉山しけ山分いれと我こひちにはあふ人もなし

寄瀧戀

み山木のこかくれおつる瀧つなみ心くたくと人はしらした

寄野戀

宮城野のこのしたしけき露よりも袖の涙そ雨に増れる

寄杜戀

我袖の涙とも見よ色かはるしのたの森の千枝の夕露

寄石戀

谷陰のこけの下なる玉かしは人にしらぬとしそへにける

寄河戀

涙川袖のうき波立さはき人めつゝみもせきそわひぬる
大井川關のいはまをもる水のわきかへりてもむせふ比かな
瀧川の岩にくたくる白波の人めもしらす散なみたかな

寄池戀

いかにせむ池のみなくちいひ出はまたきにもれん名社惜けれ
故郷戀

寄木戀

今も又かきなかさはや古のかきのもみちの水荳の跡
垣みては波こす磯のいはね松ぬれてとしふる袖のつれなさ

寄葵戀

祈るそよけふのかさしの草の名の葵を神のしるしと思はん
今そしる葵てふなをかことにてかけし思ひを神やうけゝん

寄夢戀

思ひねの夢さへおなしつれなさのうつゝにゝたる夜半の倂
あふと見てあくる別を歎くまにはかなく夢の覺にける哉

寄鏡戀

あふ事は夢より外のみちもかないかにねしより現なりけむ
戀しのふ人はうつゝにます鏡かけとなるみをみるそ悲しき

戀の歌中に

天の原霞をわたる月影のおほつかなくもよそにみるかな
何故につゝみそめけん我戀をしらはそ人の哀とも見ん

足引の山井の氷うちとけていはぬを友にくむ人もかな
住吉のまつとしきかは白波のほとをもをかす立かへりなん

行かへりあふさか山はこえぬれと我戀路には同しなそなき
諸ともに命そしらぬ別てもあらはあふよのなとかなからむ

あさましやみ果ぬ夢の名残たにはかなくけきはうち靡きつゝ
袖の露ひるまもたえぬ逢事は又ねにかよふ夢ちなりけり
うつゝにも夢にも常にみし人のねてもさめてもあはぬ比哉
吳竹の一夜へたつる程たにも猶うきふしに物を悲しき
思ひきや逢せのうらな別れてみるめをよそにかゝん物とは
通路の中こそたえめ君かすむあたりをさへに立別れぬる
仇なりし花の心を見てしよりうしろやすくもたのまれぬ哉
風あらきうら漕舟の侘つゝも思ふかたにはよらずやある覽
頼めつゝこさりしよはのつらさに忘れ形見に戀しきやなそ
わくらはに逢みし夜はの名残社此頃までもねられさりけれ
さらに又あらたまりぬる歎哉なれし昔を春とおもへは
詠むれは物思ひまさる久かたの月には人のかけやそふらん
物おもふ涙や落つつもりけんなかむる月の袖にやとれる
秋はたゝ草葉はかりとみし物をことしは袖に露そこほるゝ
大かたの秋の露たによひゝはほしあへぬ袖にそふ涙哉
我はかりかなしき物か秋風はつれなき人のそてもふく覽
鴈鳴て秋風さむみ暮ゆけはわか戀まさるとふ人はなし
宮古にも夜さむに秋のなりゆかはつれなき人もさすか忘し
忘れすは思ひやらなん君こふとねなくにあかす夜はの秋風
鴈啼て吹風さむき秋の夜に獨かたしく袖をみせはや
わか爲にくる秋なれやしけかりしことは山の色かはり行
鴈啼てはたれ霜ふりさむきよを君きまさすは明しかねつも
物思ふ袂や秋のまくすはらうらむるたひに露のこほるゝ
契りきな有明の空をかたみにて月みむことに思ひてよとは
まつ山とちきらぬ中の袖にたに我身こすなみ立さはきつゝ
あふ事のたえは思ひもたえはせて心ひとつになに残るらん

雜

てる日

あきらけき日影や空に照すらん道ある御代と祈る心は
庚申に終夜月をみ侍て

月故にまところまぬとはなけれども今夜かひある光とそみる
月夜に木のかけの庭にうつり侍たるを

むは玉の闇には見えすこのものと闇きも月の影にそ有ける
雨晴て曉ふかく月み侍しに庭のこすゑの露風にちり
侍しき時雨ににて侍しかは

風かよふ梢のつゆのむら時雨月はくもらぬ有明の空
ものへまかり侍道にて

月またはよもふけぬへし夕闇のたゝしきをしみて待哉
桂里といふ題を探て

久堅の中なる里のちかけれは乃のむ光に我身もらすな
伏見里

吳竹のふしみの里の宮柱万代ふともあれんものかは
遠村煙

行くらすあつまの野ちのをち方に煙のたてる宿やからまし
足柄山にて富士をみて

足柄のゆふこえくれは入目さすふしの高根に雲そかゝれる
あひつにて雨のふりしに

そま山のひはらかられもみえぬまで雲たち渡り雨は降きぬ
たこのうらにてしほや見侍し時

たこの浦になひく煙をしるへにてあまのしほやに尋きに鳧

ふし河にてよみ侍し

ふし川のわたせを深み岩もとのはゝにかゝれは日暮にける
いかたをみて

ふし川をくたすいかたのみなれ棹早く都をみるよしもかな
うつつやまにて人にわかれて

別路の涙にくれてうつつ山うつし心もなくそゆく
さやのなかやまにて故郷を思出て

嵐吹さやのなか山さやかにわか故郷のおもほゆるかな
濱なのはしにて

ゆふ日さすはまなの橋をみ渡せは入海とをく鹽そみちくる
うちわたす濱名のはしの橋柱みらくすなく垣にみちくる

雪白きいふきの山をめにかけてのかみをゆけは嵐さむけし
ふはの關やをかやにてふきてひさしを板にてし侍を
見て

をかやふくふはの關屋の板ひさしく成ぬ苔おひにけり
いぬかみにていさやかはをとひ侍しかともしらすと

いつくそと流をとへはいさや川いさこたへて知人もなし
人申侍しかは

雪いたくふり侍しかはおいそのもりに立よりて
雪ふかきおいそのもりに立よればしらぬ嵐も袖はらひけり

俄に雪のふるに鏡山をみて
したひこし日影もみえず鏡山ちりかひくもり雪のふれゝは

眞砂路のきよきかはらに駒とめてあふ人すくすせたの長橋
あふさかにて

東にていつかといひし相坂の關の杉村今そこえゆく

蟬丸かことをおもひいてゝ

いにしへの東のことの跡とへはわらやもみえぬ峯の松風
かの和琴のてをつたへて侍事を思ひ出して

行衛なくわらやの跡はなりぬれとひきし調は身にそ残れる
はしり井にてしはしやすらひて

走井の水のうへなる二本のすきうき山はあふさかの關
京の舊宅に一日侍てやかて津の國へまかり侍らんと

よゝをへて残る都の故郷も一夜はかりの宿りなりけり
非なのにて

駒なへてゐなのゝはらを朝ゆけは衣手さむし有馬山風
上のほらといふ所にて

駒留てうへのほらより見渡は難波のうらはたゝ麓哉
有馬山にて

有馬山雪けの道をこえ行は木々の雪に袖そぬれぬる
あしのやにこもりて侍しころ

東にておもひしよりも攝津國の難波わたりの春を淋しき
眺れはそこはかとなく淋しきは芦やのおきの霞なりけり

夕暮にあしやのおきをなかわれは霞こきゆくあまの釣舟
夏かりのあしやのなたにみるめかるあまたの年を過しつる哉

故郷を別て程はへぬれとも猶かりねなるあしのやのさと
聞なれし夕にも似ぬ詠かなあしやの寺の入相のかね

ことを引ならしてあそひ侍に

芦のやのおかへの磯のことのねにかよひまされる浦の松風
思ひいてゝ今しのふとは故郷にとゝまる人のしらすや有覽

同しころ人のもとへ申つかはし侍し

めぐりあはむ命しなくはこれそのななき別の門出成へき
海山の千里をこえて思ひやる心はかりはたてきりけり
芦のやのなたのやかたのかり願かりそめにたに問人もなし
みつからしほやきてよみ侍し

かりにこしあしやの里に年をへて鹽やくあまと成にける哉
雜歌中に

(の脱駝)

夕されは鹽みちくらしあしやのふかひの橋にかゝる白波
きちの山麓にまかふ横雲に立まよひぬるおきつしら波
浦ちかくねて讀侍し

ね覺して岸うつ波の音きけは枕のしたに海は有けり

ものへまかる人のさはる事侍て一夜とまりけるにつ
かはし侍る

行やらぬけふの泊は限りなくしたふ心のせきと成らん

都より人のまうてきてほとなくかへりて後つかはし
侍りし

都人心もとめぬ昔のやはたうきふしのなにこそ有けれ
かつらきやまをみやりて

春されは霞のいくへたつらん雲にうすきかつらきの山
住吉を見やりて

見渡せはあしやの奥の波まより一村かすむ住よしの松
あしのやのしほちの霞空はれてゆふひにみゆる住吉の松

同所にまかりて歸侍てよめる

よの中のうさはいつくもかはらねはたれ住吉の里といふ覽
みのおちかくやとり侍て

草枕かりれのやとにきこゆ也みのゝお山の曉のかね
あかしへまかり侍し道にて

磯つたひ石ふむ道のとをければ駒行なつみ日もくれぬへし
すまの關屋のあとの松をみ侍て

これや此すまの關屋のまき柱のこる松さへ苔ふりにけり
あかしにて

あしのやの浦より浦に傳ひきて明石もすまもけふみつる哉
みぬ人にかて語らむことのほゝ思ふ計もいはれきりけり

都へのほり侍し時なにはにて淡路嶋をかへり見て
みやこへと難波の海を漕行は跡にかすめる淡路嶋山

よにとまりて千鳥を聞て

舟とむる淀のわたりのふかき夜に枕にちかく千鳥鳴也
あまのかはにて

久かたの七夕つめにあらぬみのあまの川せに舟出をそする
橋を見て

聞わたる天の川瀬のはしなれともみちもみえす鵲もなし
とはに思ひの外にとまりて

都人しらすまつらし契をく日敷を過てとまる今夜を
ものへまかるとき木幡山にて

こはた山峯たちこえてみ渡せは伏見のをたにさなへとる也
又もこむうちの橋姫我をまでもみちの比の月のよなゝ

同時道にて
分わふる道のゆくゑを宮古そと思はゝいかに急かれなまし

伊勢に侍てよみ侍し

我こえし山ちをみれば白雲のはるゝ時なきたかねなりけり
山をこゆとて

涙たにほしあへぬ袖をみ山ちのこの下露にぬれぬ日はなし
河のほとりをまかるとて

つはなさく川原のしはふ駒なめてあさふむ道に雲雀たつ也
鎌倉へまかり下侍とて會坂にて

行末を思ふそとをき宮こいてゝ先こえとむる會坂の山
かゝみの宿にて

玉くしけあけてそみつる鏡山よのまは月のくもりにしかは
いさやかははこの川と人の申侍しかは

此川といへはその名にたかひ鳧しらすいさやととはゝ答よ
ふはの關にて

關守のもる山よりも心をは都にのみそとゝめをきにし
やつはしにて

古にかはらすみにもかなしきははるゝきぬる道の八橋
濱名のはしにて

都おもふ心もしはしなくさむは濱なの橋の渡りなりけり
うつをやまにて

夢路にもうつ山へのうつゝにも都にかへるわかこゝろ哉
清見か關にてめをかりて

清みかた鹽干の磯におふるめをかりに立よるあまと成みは
清見瀉波の關守かけとめて夢ちをさへもゆるさゝりけり

もしほやくあまやすむらんみほのさき松にかさねて立煙哉
みほのさきに煙のたち侍しかは

京より人のをとつれして侍し返事に
心あらは我をな問そ都人いとゝそなたのわすれかたきに

かへりのほり侍し時ふしの山を見て
富士のねの煙はたえて年ふるにきえせぬ物は雪にそ有ける

詠めつゝけふはくらさむふしのねのゆき過かたき浮嶋の原
濱名のはしにて宿とり侍し

松かけに駒引とめて海こしにむかひのさとの宿をとふ哉
月あかく侍しかは舟にのり侍てきみともおほくおそ
ひ侍しに

東路のおもひいてなれや終夜月にさほさす入海の舟
ふたむちやまにて

しりしらすあふ人毎に鳴海瀉しほひの道をとひゝそゆく
しほのひるほとを侍侍し時

鳴海瀉しほひをまつと山陰におりしあひたにこの日暮しつ
羈旅歌中に

みやこ思わか涙よりぬれ初て袖にあまれるあかつきの露
露しけき非なのゝはらのさゝ枕ひとよなれ共ふしそ侘ぬる

故郷に立かへるへき我爲は都もたひのやとりなりけり
もゝしき

百しきの近き守りの數なからいかに雲井のよそになるみそ
庭

草ふかみうつもればつる我宿の庭のをしへの道や絶なむ
庭松

誰か又聞もとかめむ跡たえてすむ山里の軒の松かせ
山家

かりそめと思ひしかとも小倉山松もとしふるともと成けり
山里はのきはに立る松をのみとしふる友とたのみけるかな

わくらにはに都にすまふ時たにも猶山里をはなれさりけり
都をはかけはなれつゝ山かつらはふき數多の年そへにける

跡たえて我よへぬへき山里にすみうきほとと峯の松かせ
山ふかき庵にまかりて炭やくをみ侍て

おもひきやまきのと山の谷の戸に煙をたてゝ炭やかんとは

閑居

暇なくつかへし物を山里にあはれのとけく年をふるかな
 芦のやのなたのかりやのかやすたれ隙ある身とを今は成ぬる

無主草菴をみて

世をすてゝすみこし山のいほりをも心とまると猶や出けむ

玉

玉ひろふかたをしらねはわかか浦や昔のあまの跡や絶なん

鏡

増鏡そこなるかけのありかほにみゆる物からなきよ成けり

箒

夕されは物思ふやとの琴のねになけきくはゝる松の秋風

あまの川といふ箒を人につかはすとて

七夕の契りたになきあまの川雲井のよその形見ともなれ

鐘

驚かすうき世の中のかれの音にたれもね覺て哀とそきく

燈

吳竹のよなかきとこにね覺して又かゝけつる窓の灯

物名てうし

よひゝゝに通ひしなかの道絶てうしとも人を恨つるかな

山鳥

山鳥のおろのぼつをの愚にもおもはずなから隔そめてき

かめ

濁なき御代のためしはかはかめのをにうかひにし水莖の跡

懷舊

昔までとをくはいはし過ぬれは昨日の事もこひしかりけり
 戀しくはまたもあひなん思いつる我心こそ昔ともなれ

行水に何かたとへん思ひいつるたひに昔はたちかへりけり

夢

なに事も昔ながらにみる夢のさむるそかはるうきに成ける
 常ならぬうつ蟬のよをみる夢の覺て思ひそいさゝばかなき

やまひ大事に侍し時

無(き)ひとの跡をもしはしとふ許露の命の消すもあらなん

草枕たゝかり初と思ひしはやかてもななき別なりけり

別ちをなげく心のあまりにはとはぬ人さへうらめしき哉

なけきの中にとかくわつらはしき事侍しかは

別てもあふさきさにくるしきは浮世を過る道にそ有ける

五月五日よみ侍し

墨染の袖の涙の白露をさ月の玉と人やみるらむ

すみそめの衣ならすは菖蒲草けふ我袖にねはかけなまし

藤衣やつるゝとしの袂にはあやめにあらぬねそかゝりける

なき人の鏡をみて

ある程を鏡はうつすなき人の面影見るは心なりけり

いろぬき侍し日よみ侍し

なき人のかたみの色の衣たにはてはかへぬる今そかなしき

亡父か墓所へまかりて

分いりて昔をこふるこのもとに面影あらぬ月そもりくる

無常歌中に

吉野川よしや世中うかふあはの消るまつまの程もはかなし

墨染のふちの衣をきてしより人の哀も身にそ知るゝ

なけきのころさかに籠めてよめる

小倉山麓の里にこもりゐて浮世のさかと歎く比哉
 日をかさねふる五月雨の露よりも猶ひまなきは涙なりけり

雅經卿うへをきて侍かゝりの櫻を

うへ置し人の形見と尋ねきてみればはかなく散櫻かな

したしく侍女の身まかりて後そこに侍人のもとへた

ちはなの盛につかはし侍し

しのふらむ昔の袖のゆかりとも花たち花のまをとへかし

述懐

おもふ事人にはいはてあまのはらふりさけみつゝ歎く比哉

いかばかりあはれ成らん世中はいとひてみはや秋のよの月

跡たゆるみ山の庵に獨りて秋の有明の月をみてしか

露たにもやとかるかやはある物をなとか我身の置所なき

秋はいぬ袖は時雨のひまもなし哀みかさの山のはもかな

徒にわか身ふりゆく時雨ゆへみかさの山のかけをまつかな

よをすてゝいらむ山路は近けれとなとか心のとをさかる覽

うき事のきこえぬ山もあるなるを思ひはいらて猶歎く哉

すみわひぬ山にても猶かなしきは所もわかぬ浮世なりけり

世中は所もわかぬうさなれや野にも山にも歎きのみ有

難波江や底の玉もにすむゝしのたゝわれからとよをは恨す

和歌の浦や磯隠れなるあしたつの鳴音もけふそ人に知るゝ

朝夕にしほくむあまのぬれ衣いとひかたきは浮世なりけり

みなといりの芦分舟にあらぬ身の障り勝なるよにもふる哉

よを偲てすむかくれかの芦のやも猶憂ふしのやむ時もし

今はわれむくらの宿に門さしてなしと答てあるへき物を

思ふより心はまたもなき物を厭はむとてもなをそよにふる

一すちにうしとはいはしすき行はつらきも果のなきよ也鳧

思ひとけは惜からぬ身の惜かないかにならへる心なるらん

よの中を捨ぬをうしといひなから心よはくも猶すくす哉

捨やらぬ我身をしれはよの常の思ひなれにし心なりけり

はかなくもしなは姻とならん身をいける程とて何惜むらん

世中を厭はむといふことくさのあらましにのみ成やはて南

朝夕は我とわか身をいさめてもそむかれぬよの果を悲しき

二條舊跡の柳をみ侍て

故郷の朽木の柳いにしへのなこりは我もあるかひそなき

亡父か日記をみ侍つてに本望の不達侍し事を思ひ

いたして讀侍し

花さかてかれにし藤の末なれは何をまつとか頼みかくへき

神祇

ゆふかけて祈るみむろの榊葉のかはらぬ色や君かよろつ代

隣女和歌集卷第三自文永七年至同八年

春

立春

きのふけふ都に春をさきたてゝまたとしこえぬあふ坂の山

逢坂の夕つけとりのなく聲やけきたつ春のはしめなるらん

春の來るいはとの關のあくるたにゆふつけ鳥の聲をまち鳧

山里の庭のかよひちあともなし雪のいつくに春のきぬらん

あとたえて雪にこもりし山里もありとやこゝに春の來ぬ覽

將軍從三位左中將になり給ひて正月一日

三笠山みもとの松の若みとり千代にさかえん春を來にける

同日雪降侍しに出仕し侍とて

春の來る庭のしら雪ふみわけて道ある御代に出つかへつゝ

十二月つこもりころに京よりまかり下り侍りて元日に

みやこをは霞へたてゝふる里に年とゝもにも立歸かな

山早春

立そむる浅間のたけのあさ霞春來にけりとみやはとかめぬ

初春

曉のかねのひゝきとりのねといつれか春のはしめなる覽
むつき立今ははるへと鶯のきなくかきほの雪のむらきえ

春夕月

めつらしき春の光と見ゆるかなけふみか月の雲間もるかけ
春たちてけふみか月のほのかにも霞そめぬる峯のまつ原

處々子日

野へ毎にけふひく松の萬代をあまたかそへて君そみるへき

餘寒

鶯のたえて聲せぬきとなくは雪のうちとや春をまたまし
冬さむみ雲のいつくに残りてか春たつ空にまた雪けなる
うつもれし軒端はかりはあらはれてなを雪さむき峯の松風
谷川にうち出し波のたちかへりなをよなくはこほる比哉

霞

あけはつる鐘の響に山の端のなを夜ふかきや霞なるらむ
たよりにもあらぬ烟のおほ空になひきそむるや霞なるらん
此春はをくらの山のゆふ霞おほつかなくもへたてつるかな
かさしおるかたやいつくそ三輪の山ひはらかすめる春の曙

雪中霞

よしの山峯のしら雪なをさえてふる里はかり霞むそらかな
たえゝに峯の霞やたちぬらんまた解そめぬ雪のむらきえ

里近きふもとは雪や消ぬらむ峯を残してたつ霞かな

淋しさはまた雪消ぬおく山のまきのこすゑの霞なりけり

深山霞

あしひきのを山かつら春かけてやゝ長き日にかすむ空哉

遠山霞

河邊霞
あさみとり霞も深したかせさす淀のわたりの春のあけほの

海邊霞

すまのあまのしほやき衣春たちてまとをに霞むあはち嶋山
清見かた春の夕くれみわたせば霞にたてる三穂の松はら
あまた舟今こそよそにへたてつれ霞のをちのみくまのゝ浦
伊勢のあまのすむなる里の夕煙しるへをそへてたつ霞かな
わすれすよなにはの春の夕霞そこはかとなき浦のをちかた

鶯未鳴

梅のはなさきちるをかは近けれとまた聲聞ぬ春のうくひす
雪中鶯
鶯のこほる涙やおちつらむこつとふ枝の春のあはゆき
夕鶯

夕鶯

夕暮は山とやみえん鶯のまかきのたけにねくらしむなり
鶯のをのかは風もなをさえてくるゝ籬にあはゆきそ降
竹間鶯
軒端なる竹のさえたにこつたひて千代をならせる鶯のこゑ

閑居鶯

八重葎さしこもりにしふる里はよを鶯のねをのみそなく
鶯歌中に
朝霞たちにし日より鶯のたえず聲きく春の山さと

梅のはなありとやこそやならひけん雪のかきねに鶯のなく
しら雪の降てつもれる谷かけにひさり春しる鶯の聲
我やとにはつ鶯鳴はやとふ人の珍しといふ春のうくひす
我宿のはなのねくらによかれしていづれの梅に鶯のなく
春 氷

野へははやなつみの川の山かけになを冬のこる薄氷かな
雪とけの軒のいと水くりかへしまた吹むすふ春の山風
春風にむすひしつらゝ解そめてたるみのみつはいは注ぐ也
焼 野

むさし野のおきの焼原たつきしのつま籠るへき草陰もなし
若 菜

武藤野は只けふもやけいつしかとあすよりやかて若菜摘てん
たつねてもたれに問はまし草の原若菜摘へく雪やけぬらん
今ははや雪消ぬやとふひのゝ野守もけさそ若菜摘ける
冬枯の萩のふるえをふみしたきむれるてのへの若菜摘なり
白妙の袖ふりはへていそのかみふるからをのゝ若菜摘なり
さは水のうち出る波に袖ぬれて氷のあとにねせりつむ也
我やとはいまはの山し近ければきのふもけふも若菜つむ也
山里は花まつほとなくさめに垣ねの若菜摘ぬ日はなし

題をさくりて歌よみ侍しなかに白馬
もゝしきやおほうち山の朝霞棚引わたる 春のあをむま

残 雪

まきもくのひはらの雪もきえなくにこまつ霞て明るしのゝめ
うちわたすをちかた人の袖さえてまた雪しろきおきの焼原
つほみたる梅の枝を人のをこせて侍しかは

折人の行末とをきいるみえてさかりまたしき春の梅かえ

月 前 梅

軒ちかくなかわる袖に梅花かこめの月のかけそうつろふ
ふりにけり春やむかしの梅花月はみしよにおもかはりせて
梅花月のかつらのなになれは色も光もかはらさるらん
にほひもてわかはやおらん春霞月にあまきる夜はの梅かえ
梅のはな色こそ見えね風吹は月の光のにほふなりけり
風さむ霞まぬ月の都にも梅のにほひに春やしるらん
夜 梅

曉 梅

梅ちかきよとこねなれば手枕のすきまの風も花のかそする
春の夜のあかつきをきの袖のかに移りにけりな軒の梅かえ
行路梅

風かよふみちゆきふりの梅か香をおりける袖と人やかめん
たまほこのゆくてのかきほ末なひき梅かゝをくる庭の春風

故 郷 梅

梅のはな咲ぬとつけは見にゆかん故郷人よものわすれすな

折 梅

梅の花折てかきゝん我身には老とはいはすうさやかくるゝ

梅 歌 中 に

鶯のこゑせぬ宿もむめのはなにほふにつけて春そしらるゝ
春風の鶯さそふ梅かゝに我さへあやなあくかれにけり
待人も来ぬものゆへに梅花匂ひを風のなにさそふらん
我袖に匂ひかうつせ梅のはな咲ちるをかの春の夕かせ
うくひすのこつたふ枝の梅花は風を寒み雪そ散ける
柳

をそくとく春しる色もあらはれぬこなたかなたの岸の青柳

つらゝぬしこのかは柳かけ見えてうち出る波に春風そ吹
ふる里の朽木の柳をのつから三代の春まで色を残れる

行路柳

暮ぬとも行末近し青柳のかけふむ道を誰かいそかん

春雨

かき曇そらにはもえぬ陽炎のあるかなきかに春雨そふる
なみこえぬふるかはのへの春雨に緑はかりやふかくなる覽

旅春雨

けふいくかみのしろ衣ほさてきぬひなのなちの春雨の空

春雨

故郷のあれたる軒の板まより梅かゝなから月そもりくる
さらてたに都戀しき月影のをくらの山のなにそ霞める

雨後春雨

晴やらぬゆふへの雨の名残さへ霞に添て曇る月かけ

海邊春雨

春のよの月をへたてゝ三熊野の浦よりをちに立霞かな
霞たつなにはの春のよばの月おほるけならぬ哀れとそみし

水上春雨

春の夜のおほるの清水影みればやとれる月の名に社有ける

春曉月

山のはの霞をわけてほのくといさよひのほるあり明の月

野遊糸

青柳の風にみたとみえつるは霞のひまの野へのいとゆふ

待花

待わふるおもかけみせてよしの山花にきたつ峯の白雲
わすれては問はすと人をおもふかな花まつ里の峯のしら雲

鶯のはつね待えしゆふへより花をおそしといはぬ日もなし
とふ人のなきにつけては山里の花をおそしとらみつる哉
人のもとへ申つかはし侍し

咲そむるはつ花櫻なへてよの人にふるさぬ色をみせはや
誰ゆへに待れし花そ山櫻咲ぬときかはとふ人もかな
花歌中に

花歌中に

きのふまで春を遅しとまつことのけさこそ人に移りぬる哉
誰里につけはやらまし我宿のはつはな櫻咲そめぬとも
きのふけふ誰かまちえたる花ならん遠き山へにかゝる白雲
あけわたる峯の霞はとたえして咲あらはるゝ山さくらかな
花盛いくかもあらしと思ふよりよるも安くはねられきり鳧
あしの家の我すむ里にうへ置し花も今ころ盛りなるらん
人しれぬ花や咲らむみわの山霞のうちの峯のしら雲
櫻花いま盛なり筑波ねのこのもかのもにかゝるしら雲
きのふけふまなくときなくしら雲の龍田の山は花盛かも
吹をくる風こそにほへ山たかみ雲のあなたや櫻なるらん
こゝろあてに雲をさなから尋つる山のかひある花櫻かな
みよし野やなきたるあさのはる風に猶雲残る山櫻かな
雲にのみまかひはてなは花櫻吉野の山のかひやなからん
來て見れば雲にまかひし偽をたゝすのもりは櫻なりけり
山櫻霞のいくへへたつらん色こそ見えねかはにほひつゝ
よし野山花の盛の朝霞ふる里かけてにほふはる風
ふく風ものとけきころときさきやなかはにかゝる花盛哉
花かくす霞吹とく春風はいとひいとほおもひそひけり
風吹はこのもとことに行やらて花にくらせるしかの山こえ
吹風にうしろめたさに待えてもしつ心なき山さくらかな

たのめつゝこぬ人よりも山櫻匂ふさかりの風はうらめし
山櫻おれはかつちる袖のうへにそへてみたるゝ花のあき露
をくら山霞のひまにかつきえて花にうつろふ峯の月影
みつならぬ花のかゝみは山櫻このまを出る峯の月かけ
此春は月と花とのあひにあひて物思ふ比のよるそかさなる
徒に我身ふりゆくなかも春のものとして花は忘れす
みわの山ひはらにまじる 櫻花春はかさしをおりやかへまし
山櫻わきてよきけん袖人の心のいろも花に見えつゝ
あかてこそけふもかへらめ志賀の里花の影みる 山井の水
櫻花春もいろ／＼にうつろへはひとつ縁ののへとやは見む
やとからに問人もなき山里は花のなたてに身そなりぬへき
あくかれて花をやみましこの里に絶て櫻のなきよなりせは
いつ迄かあくかれはてんきのふといひ今日と暮せる花の下影
はなみてもまつそこひしき九重の都も今や盛りなるらん
春ことに雲むはるかにおもひやる都の花も我を忘れな
わするなよ馴しをくらの山櫻みやこの外に春はへぬとも
このころと思ふもかなしをくら山麓の花のこそのおもかけ
花のさかりに雪のふり侍しに
山櫻さくほともなく散と見ておしむ袂は雪にぬれつゝ
つきの日よみ侍し
ふれはかつきのふの雪はきえにけり名残を花の色に残して
花 遅
こそははや花みし頃を此春はなを雲寒くあは雪そふる
花有遅速
櫻はな咲ちる山かきのふけふ所をかへてかゝるしらくも
をそくとき山の櫻の花ゆへにまつもおしむもしつつ心なし

見所々花

移り行心を花にまかすれはいく山里の春をとふらん

ひさくら

霞はれ空ものときき日櫻の花のかけにてけふはくらさん

縣の花さかりに侍るころ百日のまりはしめ侍るに人

人おほくまうて來て侍しかは

ゆく末はけふをやこひんもろ人の袖ふりはふる花の下かけ

源親行陽福寺のはなみるとて使をこせて侍りしに

目のいたはり侍りてえまからて申をくり侍りし

うき身にはさも社春のよそならめ花をたに見ぬ昨日けふ哉

返事

親行

老か身はのちの春ともたのまねは花にあひみぬ人も恨めし

落花

(け敷)

春の夜の月も曇らてふる雪はさきは且ちる櫻なりけり

山風や峯の櫻をさそふらん野へ行袖に雪そみたるゝ

咲さかぬ花のほかなるこすゑまでけふはあまねく散櫻かな

櫻散みねのしら雲いつきえて麓に波のたちかばるらん

山川の岸の櫻のかけみれば花のうへこす水のしらなみ

櫻ちる庭の池水うつもれて花より外の波もさはかす

落つもる庭の櫻に風ふけはもとのこすゑを越るしら波

のちもなを忘れかたみにしのへとやあかてわかるゝ山櫻哉

法印定清遅櫻さけるよしつけて侍しにさはる事あり

てをそくまかり侍りしかはをくり侍りし

定清

暮て行春をかきりと見る月にはやくもちれる遅櫻かな

返事

散はてゝ後はなにせん遅櫻はなの盛はをとつれもなし

三月三日

花のせに歪なかつみつくきのあとはいくよの春を経ぬらん

春田

をやまたの苗代水にかけ見えて峯の櫻そ風にみたるゝ

喚子鳥

たれもかもしる人にして呼子とり鳴や尾上の松かあらぬか

藤

花の咲春にあふこそかたからめ藤の末葉のかれもゆくかな

津花

ふる里の庭も籬もあともなしつ花ぬく野といつ成にけん

蛙

苗代の谷のかけ樋に水もりてしめゆふ小田に蛙鳴なり

題をさくりて春のうたよみ侍し中に

よしの川岸の山ふきうつろひてかはつ鳴せに春風そふく

山吹

春の色はうつりにけりなよし野河蛙なくせの山吹のはな

よし野河かはつなくせにかけみえて春もうつろふ岸の山吹

たつた河そこなる花のしからみや三室のきしの山吹のかけ

みるもうしやよひの月の有明に残すくなき山ふきの花

影はかり移ると見えし谷川の波にちり敷きしの山吹

暮春

ちるはなは淀むいはまもあるものを瀧津せ早くくるゝ花哉

三月盡

櫻たにいまは流れぬ山河のよとまで行や春の別れ路
ゆく春は我をもおしめ命こそ父あはんともさらに頼まね

夏

首夏

誰かまつころもほすらん久方のあまのかく山夏は來にけり

夏衣けきたちかへてはなそめの袖のわかれに春そなりぬる

更衣

これやこのあまの羽衣夏たちて袂そうすき雲の上人

花の色は袖に残りしかたみたにけさはかへぬるしら重ね哉

餘花

郭公たつね入さの山かけにおもひのほかの花をみるかな

卯花

とふ人の袖かとみえて夕暮はものおもひまさる庭の卯花

川しまの磯こす波のかけなからたちかへらぬや咲るうの花

卯の花はやみちまよはぬひかりかな衣の浦の玉河のさと

うのはなの垣根のほかも白妙に光そへたる玉河の里

郭公

うつゝにもさもこそあらめ郭公夢地にさへも一こゑばなけ

我宿のはつ卯の花の月夜よしまたすもあらぬ郭公かな

人ならはおもひたゆへきあめもよになをたのまるゝ郭公哉

此里になきてすきぬる郭公誰かはつれと今はきくらん

夢中聞郭公

郭公はつ音きゝつさおとろけは思ひ寝に見る夢にそ有ける

郭公あかねは人の心にてきゝてしもこそなをまたれけれ

郭公鳴橘

郭公こそのやとりのたちはなにこゑもかはらて今きなく也
卯月にものへまかり侍りしみにちにて森の下にて月を

見侍りて

郭公きかすは過しゆふつくよこのまもりくる森の下みち

馬上郭公

郭公こゑきくほとは駒とめてしはしくさかふ森の下かけ

雨後郭公

むら雨のはれ行峯の雲間よりこゑもり出る郭公哉

郭公歌中に

郭公よそには過し卯の花のまかきはやまとくれはみえけん

ほとゝきすふたむら山を夕こえてなるみのかたの月に鳴也

ほとゝきす雲のいつくにすぎぬ覽また宵の間の月を残して

郭公まつ宵過てありあけの月のほのかに一こゑそなく

ふたこゑとなをもかたらへ郭公寢覺ぬ人にあけはかたらん

しきたへのちり拂ふまで郭公鳴やき月のよはあけにけり

葵

かみ山におふるあふひの二葉よりかけし心は今もかはらす

菖蒲

ひく人もなきみこもりの菖蒲草よに沈みぬるね社なかるれ

同題を五十首よみ侍し中に朝菖蒲

あさといての軒の菖蒲に風過てかほれる露そ袖にかゝれる

寄菖蒲蓬

枝かはす契りの末やよし經てもあやめ蓬とむすほゝるらん

寄同橘

軒近き花橘のあやめ草たかひに袖のかにそしみぬる

寄同螢

おなしえの契りしられて菖蒲草軒・にすたく夏むしのかけ

〔は脱歌〕

寄同枕

まくらとて結ふはかりの菖蒲草あやめもしらす明る夢かな

寄同笛

笛たけのねやのまぐらの菖蒲草ひとよのふしと誰結ふらん

寄同船

河船のよとのおふるあやめ草引手のなはに露と亂るゝ

寄同神樂

我袖のあやめの草のねにそへて引結びぬるこも枕かな

早苗多

里毎に早苗とるなりあまさかるひなのなかちきき月きぬらし

夏艸

露をかぬ夏野の草のひとゝほり是やゆきゝのふるのなか路

夏草埋水

なつ草のものと心をくみゝつは野中の清水誰かしらまし

照射

かつきゆる峯のほくしのかけなからほのめき渡る横雲の空

ふけ行はしかや深山に歸るらんおのへのともし遠さかる也

山五月雨

夏衣ほさてやくちん五月雨の晴ぬ雲井のあまのかくやま

この頃もきえんものはふしのねの雪より下の五月雨の雲

河五月雨

ふる里のあすかをゆかぬ河水も瀬は淵に成五月雨のころ

みな河みつまさるらし築波根の峯にはれせぬ五月雨の雲

野徑五月雨

五月雨の野へ行人の三笠山なにもかくれすぬるゝ袖かな

田家五月雨

早苗とる田面のいほのあしすたれひま社なけれ五月雨の雲

五月雨歌中に

かち人の行あふ坂も五月雨にわたれはぬるゝ水増るなり
五月雨は一よのほとにかはしまのさゝこす波の音まさる也
涙さへぬれそふ袖はほしわひぬめのおもふ宿の五月雨の頃
五月つゝきて侍りしころ 法印定清か許よりやまさ
にふる五月雨よ道たえてとはねはとてやとはれさる
らんと申て侍りし返事に
とはぬをも我にてしりぬ此里の山路たえぬる五月雨の頃

夏 月

夕立の雲はあとなく空はれて露の名残にやとる月影
あかてこそ影もきえぬれみしかよの天の戸わたる有明の月
橋

さ月きて今も花咲橘のなにおふさとはむかしかふらし
おりつれは我袖の香をたちはなの昔に誰かおもひなすらん
橋のにほふのきはゝあれはてゝ昔をしのふ人たにもなし

山路螢

行くらす山路はるかに影見せて里まで送れよはの夏虫

水邊螢

おほ井河みせきをこゆる篝火や鶺鴒舟にあらぬ螢なるらん

海邊螢

夜とゝもに焼もすさめぬいさり火や波間にすたく螢なる覽
湊いりを舟の篝やすらはてあしまを行や螢なるらん

古庭螢

古はふみ見し庭のあとゝへはふるき軒端にすたく夏虫

螢歌中に

すむ人のおもひある夜とみせかほに葎の宿にとふ螢かな

しら玉か露かなにそたとるまにきえかへりつゝとふ螢哉

鶺鴒川

さつきやみ月なきころの桂川あらぬ影さすよはのかゝり火
いははしの契りならねとうかひ舟あくれば歸る淀の川なみ

水 鷄

夏のよの心しりてやくるゝよりまきのとたゝく水鷄なる覽
山里のさよ更かたのまきの戸をたゝくや今はくひなゝる覽

蟬

世中はむなしき物とうつ蟬の身をなけきてや音をはなく覽
わすれては秋かと思ふひくらしの鳴山陰のならの下風

夕 立

郭公まつとはなしに行やらて山路くらせる夕立のあめ
夏の日のかけろふをちの峯つたひよそに過行夕立の雲

遠嶋夕立

この浦は夕立はれて波間よりみゆる小しまに雲そかゝれる
夕 顔

故宅夕顔

すきやらてをちかた人にこと問しみちのゆくての宿の夕顔
里はあれぬ誰いにしへに住む人のかたまはかなき花の夕顔

納 涼

涼しさのてつきみなれやよるもなを月にしほ汲すまの浦人
涼しさにえそすきやらぬはつせ川ふるかはのへの杉の下影

暮ぬとも人やり

山（な歌）の井にかけさし出て結ふてのしつとも見ゆる月の涼しさ
行やらて濱名のはしの松かけにこま引とむる袖をすゝしき

六月萩

水上に誰かみそきをしかま川うみに流るゝ波のしらゆふ

秋

立秋

物おもふ涙の露のおちそめて我袖よりそ秋はしらるゝ

旅宿立秋

秋やたつ露吹^吹むすふ風の音に草の枕も夜寒にそなる

山家立秋

いつのまに淋しくなりぬまつのとをゝし明かたの秋の初風

初秋

朝またき秋たつ風に淺茅生のをのゝしはふに露そこほるゝ

きのふたに音たて初し萩の葉に秋としらるゝ風そ吹なる

波音も涼しくなりぬ夏草ののしまかさきの秋の初風

七夕

彦星のつま待秋の夕暮は雲のはたてにもの思ふらし

七夕の涙の露のくれなゐにもみちのはしはうつろひにけり

同庚申

七夕のまれなる中にあらねとも我さへこよひねてあかす覽

同別

天の川雲のしからみかけとめよぬれては歸る袖のわかれち

棚機^のあまのは衣おさをあらみまとをにきても立歸りつゝ

天の川わかるゝ船の渡もりなしとこたへてけさは歸すな

萩

さをしかの妻とふ野への小萩はら曉露に花咲にけり

妻こひの聲は聞ねとむさしのや鹿なく草の花咲にけり

さをしかのたちならすのゝ朝露に花咲をむる萩の一えた

草花露深

さのみやは風もはらはむ宮城のゝこのしたふかき萩の朝露

女郎花

女郎花おらては過し白露のあたのおほのゝ名にはたつとも

夜はの露こゝろをくとも女郎花かりねのゝへの手枕にせん

女郎花をうへ侍るとて

仇なりと名には立とも女郎花多かる野へとうへやをかまし

薄

淋しきはほやの薄のそよとたに同しこゝろにいふ人もかな

わきもこか手枕の野の初をはないつしか露にむすはれに鬼

古庭薄

ふる里は庭もまかきも秋の野のおはなをわけて問人もなし

鶉鳴草花中

むさしのやおはなみたるゝ秋風にそこはかとなく鶉なく也

荳荳

吹まよふ風をまつまの露にたにかつみたれぬるをかの荳荳

秋花を

色々の花もかきりはなかりけり行末とをきむさし野の原

蘭

ふる里にたれかへるらん春日野は錦とみゆるふち袴かな

萩風

秋来ては老のね覺にあらねともおき吹風によを残す哉

風わたる萩のうは葉はよそなれとねさめの袖にかゝる露哉

馴ぬれとまたは夢路もたえぬへし閑ちかく吹萩のうは風

山里は萩吹風のたよりもそよともなとかいふ人のなき

秋夕

ゆふくれはさらても悲し我宿の萩の葉よきて風はふかなん
目くらしを

淋しさは色こそみえね秋風の吹なる山の目くらしの聲
鴈

うすきりにつらを離るゝ鴈金ははなたのおひの中そたえ行
誰かための玉章なれはかりかねの我をはよそにへたて行覽
み吉野のたのめをすきていつかたによるさへ鴈の月に行覽
こしの秋都の春のいかなれはかりの心のすみうかるらん

暮山鹿

鳴鹿も雲のはたてに物やおもふゆふるる山に聲を聞ゆる
麓 鹿

たえくゝに鹿の音送るあらし山嵯峨野の庵のね覺にそきく
霧間鹿

さを鹿のつまをはよそに隔てゝや霧よりをちに音を盡す覽
鹿聲幽

さをしかのいる野の尾花ほのかにも我手枕にこゑかよふ也
鹿歌中に

虫

みる人の折たにおしき秋萩の花ふみしたき鹿のなくらん
風さむきふしの裾野の鹿の音にぬるよすくなきたこの浦人
草のはらたかたのめ置ゆふ露を涙にかりてまつむしのなく
松虫の聲する野への花すゝき誰とさためて人まねくらん
きりゝす枕のしたに音つれて秋の夢ちはすゑもとほらす
露ふかき葎のやとのきりゝす誰も思ひにねこそなかるれ
まゝろまぬ壁の底なるきりゝす浮世の夢はなれも悲しな

露なから小はきちる野の秋風に聲を亂てむしそ鳴なる
あさちふはまた色みえぬ露霜にやかてかれ行虫のこゑ哉
色かはる萩の下葉の露さむみよなくむしの聲そかれゆく
露

武藏野はみきやいかにと人とはゝほさてそ袖の露をみせまし
眞葛原またちかへり秋風のはらふあとよりむすふ白露
ふる里はむくら露のたまゝも月の外には影もとゝめす
秋歌中に

夕月

あけ暮の朝霧ふかしあまを舟同しとまりに漕や歸らん
淋しさのときはわかねさ夕つくよ小倉の山の松の秋かせ
待 月

武藏野は月のいさよふ山もなし何にさはりてなをまたる覽
曇りなき秋のならひのこよひとて月も暮行空やまつらん
出 月

秋風を高根の雲にききたてゝはれぬる後に出る月かけ
みるまゝにこすゑにとをく也にけり峯を別るゝ秋のよの月
月前草花

月前草花

月みれはわかいねかてに成にけり萩の下葉の色はしらねと
月影も移りにけりなをみなへしおほかるのへの露に任せて
月もなをあたにそみゆる女郎花おほかる野への露の宿りは
忘れすよ尾花か袖をかたしきて露にねし夜のむさしのゝ月
秋風に月よゝしとや花すゝきこてふに似たる袖のみゆらん
月前鴈
かりかれのつらをみたるゝ空見れはいる山端の弓張の月
月前鹿

影さむく更行月にうらみても鳴ても鹿のつまやつれなき

月前松

住よしの松はいくよにふりぬともおなしえにすむ月や知覽
和歌の浦や磯への松のよゝをへてなれぬる月よ哀とをしれ

月前楸

ふけぬともあかてすきめや楸おふる清き河原の秋のよの月

月前櫛

此頃はつけのをくしもてにふれす月に心のあくかれしより

月前舟

夢にたにまたやみさらんうきれせし枕の下の波のうへの月

月前眺望

我心もろこしまてもかよふらしまつらか沖の月をなかめて

月前視

積りては淵となるへき菊の露かつく千代の月そやとれる

山月

たくひなき淋しさなれや獨みるみやまの月に秋風そ吹
こゝにたになくさみかたき月影を姥捨山にたれか見るらん
古のおもかけみえて松浦瀉ひれふる山の木の間もる月

峯月

神もなを月見むとてやふしの根のけたぬおもひも煙たえ南

谷月

にしはるゝ谷のこかけのしはの庵入かたはかり月を見る哉

河月

隅田川名におふとりはあともなし月に都のことやとふへき

水上月

よし野河よしやいは浪はやくとも宿れる月の影しよとまは

瀧月

龜の尾のたきのしら玉君か代の千とせの数も月にみる哉

野月

花にあかて一夜わかぬし武藏のゝ草の枕の月そわすれぬ

里月

おちたきつ河音きよく月さえてうちの里人ころもうつなり

水郷月

かつら河もみちやなみに流る覽やとる瀬はかり月を曇れる

都月

月やあらぬおなし雲井と思へとも都のかけそわきて戀しき
忘れすよこそ今宵は都にて小倉の山の月を見しかな

題をさくりて秋のうたよみ侍し中に

今年よりひなにいくとせなからへて都忘れす月をなかめん

關月

西にゆく月にたくへて逢坂の關のあなたを思ひこすかな
あふ坂や雲路を過る月をたにもるゝ水には影とゝめけり

海上月

志賀の浦や月の出しほはなけれ共波に宿れる影そみちぬる

海邊月

おきつ風吹あけの眞砂白妙にひかりかよへる秋の夜の月
浦つとふあかしのなみに影見れは月の旅ねも宿はきためし
わすれめや須磨の苦屋に一夜ねて波にしほれし袖の月かけ
二つなき月と聞しにわたの原うらゝことに影やとしけり
なかむれはわかぬともゝあり明の月にうら漕あまの釣舟
月影にやとも定すあくかれて八十嶋つとふ海士人の釣舟
影やとす月さへ岩にこゆるきの磯の波ふく秋のしほ風

波かくるいらこか崎の月影にたまもかりしくあまのつり舟
かくてやまは覺東なしや夕月夜ほのみの崎はあすもきてみん

旅泊月

山良の戸や明かた近き月にまた枕をわたる松風のこゑ
出やらて幾夜あかしのとまり舟思はぬかけに月は見せける

岸月

あけかたによやなりぬらん住吉の岸にむかへる秋の月かけ

山家月

影ふけて獨なかむる山さとは月よゝしとも誰につけまし
契り置人たに問はぬ山里に都の月はしたひきにけり
月影を軒のかけひにせき入て水のまゝにもなかつてそみる

田家月

ひとり住いほとはいはし月もなをいなはの露に影やとし鳧

月臨秋穂

ほに出るいなはの露の數みえてとはたのおもに月そさやけき

故郷月

ふる里の軒のしのふをもちかねて袖にすくなき月のかけ哉

故宮月

ふけ行とみる人もなしたかまとの松のへの宮の秋のよの月

社頭月

いそのかみふるのやしろも今更に月にみかけるあけの玉垣

古寺月

はつ瀬山嵐を寒みいはのうへに旅ねをしつゝ月をみる哉

惜月

いる月のさらぬ別れはいかゝせん山のこなたに雲隠れぬる

掃衣園

さそひこす尾上の風に聞ゆなり山のあなたに衣うつこゑ

菊

白菊の花おるまにも我袖に千代のかすをく秋の夕露
待て暫し移るふ菊の花かたみめならふ色のあるよならねは

秋閑居

草はより人めそはやく枯にけるまたしもをかぬ淺ちふの宿

秋雨

秋の雨のまとうつこゑに月影は曇る夜さへもねられさり鳧
神な月またき時雨のかねてよりはれぬ山へをとふ人もかな
山姫の秋はしくれにかす袖の紅葉のにしき折は盡さし

雨後紅葉

染すてゝ時雨はいつち過にけん露を紅葉にかたみとゝめて

深山紅葉

おく山の色なき木々の時雨にもぬるれはかばる下紅葉かな
深山木の雪をそへて下もみちたえぬ時雨やちしほそめけん
深山木の常盤にまじる下もみち秋の色こそすくなかりけれ

白雲のはれぬ梢の色みえて外山はうすくもみちしにけり
いはねふみ雲もかさなる峯こえてなを奥山の紅葉をそみる
都にてかゝる紅葉の色やみしたゝおく山のこすゑなりけり

里紅葉

山深き色にはにねとこの里も時雨にけりと見ゆるもみちは

紅葉歌中に

夕霧のたえつる山の下紅葉色こそ見えね露は染らん
ゆふつく日うつるふ山の薄もみちふかくそむるは心なり鳧
鳴わたる鴈の泪のゆふ露も色つきそむる峯のならしは

秋風にはゝそ色つくさほ山のみねはこひしき秋のおも影

風さむき秋の朝けの露しにも色つきあへすちるはゝそかな
暮ぬとも秋はうからし紅葉はを散ぬかたみと頼むよならは

秋歌中に

小倉山もみちかつ散なか月の有明の月に鹿そなくなる

暮秋

秋の色はあさちかすゑに移りきて人ぬもかるゝ霜のふる里
野も山もいまは限りの色みえてうつろひはつる秋を悲しき

九月盡

秋はつる色をみせてや紅葉はも枝に残らずけふはちるらん
我やとの籬は山につゝけともとまらぬ秋やよるもこゆらん

曉九月盡

暮ぬとてななく一夜の秋もはや更行かねのあかつきのこゑ
行秋を今宵はかりとおしむまの心もしらぬ鳥のこゑかな
鳴そむるゆふつけとりの一聲にやかてや秋の立別るらん
花すゝき曉露をかたみにて袖の別れに秋はいぬめり
曉はうきものなれやきぬくの袖よりほかの秋のわかれも

小九月盡

なか月となに社たてれおほかたの日數もたらて秋の暮ぬる

冬

初冬

神無月けさはしくれすもみち葉のちる社冬のはしめ也けれ
時雨

神無月よのうきときやこれならん紅葉こきちらし降時雨哉
今はゝやまさきの紅葉あともなし外山をかけて時雨降ころ

夢さむる里のいたまをもる時雨なれより先にぬれぬ袖かは

時雨

みなと河山セイもとめくる村雲に時雨の雨もたえゝに降

行人もとゝまる袖も露けきをかきねてぬらす村時雨かな

落葉

吹しほるむへ山風のあらし山たえぬ木の葉はあめと降つゝ
紅みになかるゝ河の水上はもみちをはらふあらしなりけり
山里のすみうきときはこれそこの紅葉みたるゝ峯の夕かせ
紅葉はに庭のかよひち跡たえてをちかた人の訪つれもなし

落葉與時雨爲友

梢をも雲をも風やさそふらんもみちとゝもに降時雨かな

冬歌中に

木の葉なきよその梢は音たえてまつにのみ吹冬の山かせ
嵐さへこの葉の後はをともせて山邊淋しき神な月哉

霜

立かへりまたふみわけていつか見んさかのゝ冬の霜の古道
さえ氷る袖の夕霜うち拂ひけふいく里の旅ねしつらん
よをさむみねてのあさちふうちなひき初霜しるし水莖の岡

行路曉霜

たまほこの道の冬草霜わけて曉さむき袖のかへるさ

霰

風さはく枯野のまくす立歸りあられ玉しく冬のゆふくれ
そともなる竹の落葉に音信てたまこきちらし降霰哉

山路霰

深山路の横の葉つたひもる霰袖にくたけて物そかなしき

霰驚夢

なれゆへに見はてぬ夢かまきの屋に霰たまちる音ぞ聞ゆる

寒夜

臥わひぬあられ亂れて霜氷るさゝのまろやのよはのさむしろ

曉初雪

有明の月かとたとるやすらひにやかても袖につもる初ゆき

雪歌中に

軒近きたけのはしたりむはたまのねぬる一夜につもる白雪
降雪のやかてつもらは誰かまつあとつけ初てけきは問こん
絶ぬとて庭の通ひ路うらみしな雪よりさきも人しとはねは
わくらはに問はるゝ跡もかつきえて雪を恨むる庭の淋しさ
山里の谷のかけ橋いまさらに雪ふみわけて誰か通はん
きのふけふ降積雪の九重にあさきよめせぬとものみやつこ

松上雪

高砂の尾のへの松もいたつらによにふるものと積るしら雪
きてみれば雪もこたかくつもり鳧誰かひき植し宿の松かえ
麓にはつもりもあへすかつきえてまつ雪しろき峯の松はら

谷雪

ふるゆきはよのうき事の積れはや深きたになく埋もれぬ覽

河雪

水はやき岸の河竹おりふせてこほらぬ淵に積る白雪

枯野雪

うつもれぬかれのゝ尾花うちなひき風に亂れて淡雪そふる

濱雪

あま人の汐くむ道もたえはてゝなに降にける雪の白はま

行路雪

朝またきさきたつ人のあとゝめて雪を分行野路のかや原

京より下り侍しにふたむら山にて

ふる里にいかてしらせむ山高み雪ふみ分てこえわひぬとよ

雪はれて曉月によふかく立侍しに

あふ人もさきたつあともなかり鳧我ふみ初るみちのしら雪

をさきかはらといふ所にて

雲はれて朝日にみかくしらたまのをさきか原に氷るあは雪

ふり埋む雪の下なるもかしはもとこし方を忘れやはする

みちすから忘れわひぬる小倉山みなれし里の雪のおもかけ

はしもとにて

波こゆるしつえはかりはあらはれて雪にかくるゝ磯の松原

さかわといふ所にてあしからを見やりて

こえきつるあとの山のは雪しろし此里までの雲はしくれて

山家雪

山里は日をふる雪にうつもれて軒端をわくる庭の通路
我はかりふみならしたるあともうし芝こる軒の雪の通ひち

故郷雪

きのふより埋もれはつる檜のはのなにおふ里にふれる白雪

嵐吹寒草

あらち山峯のあらしに雪ちりてやたのゝ尾花袖氷るなり

千鳥

冬寒みしほかせあれてこよるきの磯の波わけ千とりなく也
うき枕ねさめてきけはあはちしまとわたる千鳥月に鳴也

あり明の月かたふけは淡路嶋^{にしにめぐりてイ}しまか磯に千鳥なくなり

さよ千とり鳴聲近しありあけの月の出しほやみつの松原

さよ千とりなくこゑ淋し有明の月のかたふく浦のをちかた

氷

冬こもるたるみの氷いまとちてたえずそゝくは時雨なり鬼
ちり果しこののはのちのをとつれもけさまた絶て氷る谷川
浅き瀬も冬はさはかす山河のうは波たちて氷るこのころ
龍田川わたればこほり中たえて紅葉のにしき色も残らず
冬さむみ人もすさめぬ山の井にたえずむすふは氷なりけり
湖上氷

冬月

名残なく雪けの雲はそらはれてつもとみゆる庭の月かけ
ひろ澤の池の堤を照月はともに曇らぬかゝみとそみる

江水鳥

難波江の氷の床やさえぬ覽おちのかたしくよはのあしかも

網代

ふけ行はもる人もなし網代きにいさよふ波の音はかりして
網代木の宇治の河おさ暇なみひおのよるさへうちも休ます

豊明節會

山あるのをみの衣の日影よりとよのあかりといひや染けん

年内鶯

もろともに春待わひて咲そむる冬木の梅に鶯そなく

寒梅

あしかきの雪まの梅は咲にけり春のとなりやまぢかゝる覽
年中冬盡るといふ題をさくり侍て

送るとていくかもあらし年月をさそはて冬のひとり行らん

戀

初戀

いせの海士のけふやきそむる汐竈のやかてもからく立煙り哉
たきそむる浦の藻鹽火いつのまにやかてなき名も空に立覽
ふみそむる戀ちの奥にありといふ山は忍ふの名をももらすな

聞戀

さのみやは音に聞へき高砂のおのへの松のあらしならぬを
不見戀

人つて

いかにせんみぬめの浦のさよ千鳥人傳ならぬ聲そゆかしき

初見戀

雪まよりけさみえ初る若草の我したもえに出る也けん
波まわけふかりそむるみるめ故やかても袖の汐たゝる哉

戀歌中に

雲間よりほのかに見えしみか月の我はかり社おもひ出らん

忍戀

いまよりは月をもめてし枕たにしらぬ涙に影やとしけり
あやなくもかけやとしけり今よりは月にも袖の涙しらせし
月ゆへにぬれぬる袖とかこちてもいりなん後を如何答へん
ふしの根のかみたにけたぬ煙をも猶したもえに我そ年ふる
おく山にやくすみかまのゆふ煙人もとかめぬ身のおもひ哉
したむせふ芦屋の小屋の夕煙いかなる隙にもらしそめまし
あつまやの軒の萱間をもる時雨音には立てぬ袖を濡ける
たつね見よしのふの山もをのつから心の外に露はもりつゝ
しのふ山人の心のおくのみち夢にあふともさらにしられし
としふとも言になたてそしのふ山いはまをくゝる谷の下水

人しれぬ心のおくの山もなをしのふてふなの世にそ聞ゆる
奥の海のうのすむ石をこす浪のかけて思ふと人はしらしな

見忍戀

しられしな海士もあさらぬ荒磯の底のみるめにぬるゝ袂は

月前忍戀

つゝみあまる涙や袖に落つらんおもひの外にやとる月かけ

忍久戀

時雨もる横のを山の下もみち人もとかめぬ秋そへにける
我袖やつゐには朽んたまかしは波の下にもぬれつゝそふる
つれなしやかれなて軒の忍ふ草いや年のはになにしける覽
忍ふれは苦しき物をいかにして思ふにまけぬ年のへぬらん

言始戀

春の田にけふかけそむる池水のいひ出るより袖はぬれつゝ

契戀

身をかへて後もかれしと契れ共待このよ社うしろめたけれ

くちかたむ

をのつから問人あらは偽はなへてうきよのさかとこたへよ

尋戀

杉立るかとも人のをしへねはいつくを行て三輪の山もと

人しれぬたのむるくれをしりかほ^(は股隙)うたて聲する軒の松風

待戀

いまもうし誰かつれなさの初にて松といふ名を啣ちそめけん
こすとてもまたてはあらし我さへに頼めし事を如何違へん
いつはりも誠もけふそしらるへきたのめそめぬる夕暮の空
なれぬれは頼むるまでも偽そおもふ物からなをそまたるゝ
さすかなを頼めしよはと思ふらんいひし計は忘れしもせし

寄月待戀

よしさらは月よゝしとも告やらし只まつ虫の聲にまかせて

寄筵待戀

さのみやは空しき夜はも積るへきたゝ塵拂へ聞のさむしる

不遇戀

こえやらて逢坂山にまよふかなせきとめかたき涙なれとも
もりわふる人目の關はありなから我戀ちにはあふ坂そなき
よなゝは袖のみ滯ていたつらに行てはきぬる道しはの露

顯戀

よしやさはおもひけり共しるはかり袖の涙を人につゝまし
みる人のとかむるほとに成にけり淺間の獄の思ひならねと

逢戀

思ひねにかねて逢みしぬはたまの夢はうつゝに迷ひなる哉
わか涙あふをかきりと思ひしにあけ行袖はなをしほれけり

馴戀

須磨のあまの鹽焼衣たゝなれんまとをに有も浮世ならすや

稀遇戀

思ひねの夢もあふ夜の數なくはまとを也とは恨みさらまし
おもひねの夢をうつゝにとり添はあふよの數やすすか積覽

あふ事はとを山とりののをのれのみ思ひ亂れて泣ぬ日はなし

後朝戀

なこり思ふ父ねの夢路立歸りくるゝをまたてあひみつる哉
歸るさのけさの泪に比ふればあはてこしよの袖はしほれす

別戀

あか月のとりよりさきの別にも我なくね社なをうかりけれ
夜ふかしといひ慰むる別れちをすゝむるとりの聲も恨めし

有明の月をは何かわきていはんつれなき物は別れなりけり
あけわたる峯の横雲たち別れおなし空にや我もきえなん
傀儡戀

遇不遇戀

さゝまくらぬしきたまらぬ別かなかはる一夜の露の契りは
あひみてもあはての浦のそのころにまた立かへる沖つ白浪
逢見しと思ふはかりをなこりにて心の外はかたみたになし
ありしよにたかふ契のすゑの松たか袖よりか浪はこえにし

昔あへる人

久戀

いにしへの野中のしみつ今さらに思ひ出れはぬるゝそて哉
人しれぬ年のへぬれは山深くたつをたまきの我もつれなし
年をへは思ひやよはる片糸のなからへてみる玉のをもかな
もゝ社しちのまるねも人やすれ逢を限りの數をかけとや
よそに見しかつらき山の峯の雲心にかけて年はへにけり

違約戀

わかためは偽になるあふことのまことを誰に人のみすらん

形見

忘れしといひしに違ふ言の葉をつらきなからの形見也ける
ふみたかへ

うちつけにうらみやかけん濱千鳥ふみたかへたる跡を尋て

絶戀

逢事にかへし命のなにとまたなからへてうき世をもみる覽

夜戀

東屋のまやにはあらぬあまそゝき余りにぬるゝ夜はの袖哉
頼め共ねられぬ夜はのから衣かへしてはなを身をそ恨むる

誰か袖に今はかくらんかよひこしあかつきおきの道芝の露
獨り寝のみにあらはしも偽に思ひしらるゝよなくそらき
しつく

獨寝戀

忍ひ寝の涙まかへてあしひきの山のしづくに袖やかさまし
うたかた

思

うち拂ふ袖のうたかた哀れにも海とあれぬる床のうへかな
徒に我のみもえてふしのねのならぬ思ひに年は經にけり

互思戀

わすれすはおもひおこせん心こそ我忍ふよりなを悲しけれ
ひと方になをさりならは頼めしも偽になる夜半のあらまし

片思

月見てもまつそ戀しき人はいさ誰をいかにと思ひ出らん
もしほやくなるみのうらのかた思ひ煙も波も我身にそたつ

風吹はおはなかもとの思ひ草かたなひきなる袖の露かな
恨戀

恨戀

いかにせん身を秋風にまくす原歸りしまゝの露そかはらぬ
暫し社我身のうさと歎きしかあまりになれは人そつれなき

思ひする我身のうさもひと心つらさも共に恨めしのよや

寄日戀

朝毎にあまのいはとを出る日の思ひやむへき時のまもなし

寄月戀

夜なゝは寐られぬ儘に眺めわひぬ月みよとしも人や契し

寄煙戀

ふしのねの空し煙に年はへぬならぬ思ひのなをはたてつゝ

ふしのねのもえつゝとはに立烟さのみ思ひによをや盡さん
徒にうき名をたてゝ富士の根の煙くらへに身そなりぬへき
あさましやあさまのたけの煙にも立まさり行みの思ひかな
東路やむろのやしまに立けふり心のほかのおもひともみす
いつまてか室のやしまよそにみしもゆる煙は我身なり鬼
ならはすやおもはぬかたのうら風にたくもの煙なひく心は

寄露戀

わか袖のたくひもうしや色かはる軒のしのふにかゝる夕露

寄雨戀

しられしな横のを山に降時雨色こそ見えね袖はかはかす
雨降となをそまたるゝ中々にかゝる折もや人はとふとて

寄霜戀

袖の霜枕の塵もいかゝせんきみかこぬよのつもるのみかは

寄雪戀

降雪に我がよひちはうつもれぬたゆみやすらんよはの關守
ふりそむる庭のしら雪いつのまに深くも戀の身につもる覽

寄橋戀

いは橋やいかに契りをかけ初てよそにふみ見る中と也けん
ありしよのまゝの繼橋中たえてとしのわたりに袖を朽ぬる
繰返しものかたにやみちのくのとつな橋の戀渡るへき

寄水戀

八橋のくもてに物を思ふかな水行かはを袖に流して

寄春水戀

氷たにとまらぬ春もとけかたく人の心のむすほゝるらん

寄河戀

うき名のみよには流してぬる床の涙の河に身そしつみぬる

みな瀬川したゆく水もある物を袖に浮ぬる我涙かな
寄瀧戀

音なしの瀧のみななみたつぬれは人めをしのふ涙なりけり

寄塵戀

逢ぬよの間のさむしろしきたへの塵拂ふまで積りぬるかな

あやめ草五首の中に寄菖蒲見戀

隠れぬる菖蒲にまじる草の名のかつみしるよりぬるゝ袖哉

寄菖蒲顯戀

昨日までみこもりなりし菖蒲草けさ我袖にねをそかけつる

寄菖蒲夢見戀

あやめ草枕にむすふ夢ちさへあかぬ一夜にわかれぬるかな

寄菖蒲違約戀

あやめ草ななき契りを引かへて一夜はかりに今はなすらん

寄松戀

浪越るうのすむしまのいばね松ぬれはぬるとも色に出めや

寄木戀

忍ふれは錦木をたにえそたてぬちつかかふとも誰（か隠匿）しらまし

寄鳥戀

逢ふ事のたえぬる後はつらしともうしとも聞ぬとりの聲哉
濱千鳥しほひのかたにひく波のとをさかりぬるあとに鳴也

寄鶴戀

おくの海の波こすいしにすむ鳥のうき人ゆへにぬるゝ袖哉

寄蟬戀

さと遠き深山かくれに鳴蟬の音をつくせとも人もとかめす

寄衣戀

いせの海士の鹽垂衣なれは猶ぬるときのまも袖はしほらし

寄糸戀

逢ことは夢にもいまは片糸の玉の緒とけてぬるよなけれは
寄弓戀

寄舟戀

我戀は引しほ向ふみなといりの蟹の小舟のよるへたになし
あしわくる湊の小舟うきふしにさはりかちなる程を恨むる
我戀はよるへもしらす風吹は浪に流るゝあまのすて船

寄火戀

あまつ空雲井に物をおもふかなゑしの焼火の夜はもえつゝ
つれなきを恨むる海士のすむ里は煙やきたてこかすも鹽火

寄夢戀

諸ともにあふとたにみはむはたまの夢はかりにも慰なまし

雜

雲

山たかみ夕ひうつるふしら雲の棚引かたや都なるらん
月あかき夜人にさそはれてはしめて人に對面して後
の朝に申つかはし侍し

人はいさ思ひも出しわれのみやあくかれし夜の月をこふ覽
六帖題にて讀侍し歌中にいさよひ

山端をいさよふ月のいてかてにうき世にすむは我身なり鳧

ありあけ

なからへてすむへきよとは思はねと有明の月の猶めくる哉

あか月やみ

しはしともえ社とゝめぬ夕月よあかつき闇といそくかへさは

峯松

數ならぬみのゝをやまの一つ松又たくひなくよをや盡さん
山家松

山里は軒端の松のなかりせはまた友もなくよをやつくさん
世中のうきにくらへて住里の峯の松風心してふけ

いたつらに世に經る物とひきうへし松もこたかき軒の山風
物おもふよはの寢覺のあらましを松にこたふる軒の山風

六帖題にて讀侍りし歌中につはき

こせ山のつら／＼椿つらからは逢にはかへぬ身をや盡さん
からもゝ

降雪はきえぬものから百ちとり今ははるへとけふそ鳴なる
くるみ

此里は山もとめくる道とをみゆきかへるまに日はくれに鳧
むろ

古の人にたとへしあまそきの岸のなかはにたてるむろの木
かつら

里とをみ我すむいほの山かつらさても浮世のかけは離れす
竹

かは竹の流ての世も頼まれすうき節しけく身はしつみつゝ
うきふしの色も替らて吳竹のよにふるともは我か身なり鳧

たかむな

いとゝなを人の心やまよひけん雪まをわけて生し竹の子

よもき

古里に軒をあらそふ蓬生のもとみし庭の俤はなし

わすれくさ

つれもなき人の軒端のわすれ草かれねしのふの露を残して

ねぬなは

徒に行てはくとも池におふるねぬなはたてし人のきかくに

藻

わかの浦や昔のあとに年をへてかき集むるはもくつなり鳧
夏草のしまかさきの朝風にあまの乙女子玉藻かるみゆ

浦鶴

和歌の浦や雲にのほりしあしたつのかたみ計の跡も止めす

六帖題にてよみ侍し歌中にはとり

うちはへて音をのみそ鳴庭つ鳥かけのたれをの長き思ひに

からす

あけぬとて寝やたち出てなかわればやもめ鳥の月に鳴ける

にほ

風吹はにほのうきすのうきにのみ流るゝものは涙なりけり

鶺鴒

大井河みせきのさなみたちかへりおなしせめくる篝火の影

すゝき

世中はたゝ秋風にすゝきつる浦のとまやそすみよかりける

たひ

波あらしいそらか崎にたいつるとあさる蟹舟こき歸るみゆ

あゆ

今もかもたましまかはゝ古のかしこきあとにこあゆつる也

ひを

横の嶋網代によするひをへてもみまくそほしきうちの渡りは

くも

さゝかにのくものすかきのいとすゝき露も亂れて秋風そ吹

をくら山

小倉山はては我身のかくれかとあらましにのみ思ふころ哉

ふかくき山

みしよこそおもかけさらぬ深草やふりにし里の山端の月

とりへ山

とりへ山あすをはしらて暮ぬまのけふの煙を哀れとそみる

みかさ山

こえわふるみかさの山の峯の松つれなき名のみ年はへに鳧

みわの山

月日のみすきのしるしはかひもなし人も尋ぬみわの山もと

かつらき山

よそにのみ見てはやましなこの里に時雨てむかふ葛城の空

吉野山

よし野山はなちるまでの宿もかなふるさと人は待わひぬ共

さやのなか山

おほ井河わたせをおほみ行暮て月にこへゆくさやのなか山

うつの山

うつの山うつゝはいはし夢ちさへなとみえ難き年のへぬ覽

ふしの根

ふしの根の煙の故はしらね共たえぬ思ひのたくひとそなる

やまひこ

山彦の答ふる聲にしられけりありてなきよの夢のうつゝは

谷

谷深み草かくれのさゝれ水よにすみわふとしる人もかな

たきゝこる谷のをかはゝ浅けれとあした夕の風もねかはす

いはほ

苔ふるきいはほにねさす松の葉のかすゝ遠き千代の行末

むめつかは

影うつすむめつの河のはやき瀬にいはこす波も花を散ける

たなかみ河

なみさはくたなかみ河のあしろきに氷いさよふ冬のよの月

ひとよ河

七夕の契りにたゆる一夜河このあふせこそやかてたえぬれ

ゐせき

ゐくひたて此方彼方にせきかけてもとの流はせたえしに鬼

瀬魚簾

山河のやなせのさ浪たち迷ひ行末（へん）もしらぬ我身かなしも

池

世中のうきめの池の水を浅みすみわふる身のはていかな覽

たのむの池

よをさむみ氷にけりなあしかものうきねのことと頼む池水

うきめのいけ

はちすはのうきめの池のむらさめに亂れてはまた結ぶ白露

いかほの沼

したにのみ思ふ心の深さをもいかほの沼のいかてしらせん

江

里はあれし難波ほりえにすむ鳥のをのか名のみそ都なり鬼

みしまえ

みしまえや鹽のひくまは顯れて又みこもりの苜のわかたち

たまえ

影やとすほとたにもなし夏苜のたまえのあしの短かよの月

浮漂

我ことや難波ほり江のみつし徒にのみよにたてるらん

山の井

浅ましや今はむすはし山の井によにすみわふる影はみゆ覽

嵯峨野有注

忘れすよあつまに歸るなこりとて雪ふみわけし嵯峨の通路

かすかの

春日野を焼しけふりの消はてゝあとにもゆるはわらひ也鬼

武藏野

むさしのははきの下葉の露わけて花の中ゆく秋の旅人

みくま野

しるらめや頼む心はみくまのゝ浦よりをちに身を隔てゝも

入野

いかはかり露みたる覽さをしかの入のゝはらは秋風そふく

野亭

涙そふ露のたまくら袖ぬれぬ後のさゝやのよはのまろふし

すまの關

須磨のうらせきやもみえぬ夕霧に袖に吹こす秋のしほ風

かすみの關

行末の霞のせきははるゝとなかむる方のなにこそ有けれ

東路やはるはかひなくすきにけり霞の關の名はとまれとも

はまなの橋

との海のしほ風まつに吹こしてはまなのはしに月わたる也

里

あつまには住吉といふ里もなし何處に暫しみ（も）なしくさん

山なしの里

いつくにか身をはかくさん厭ひても浮世の外の山なしの里

たまかはの里

盛りなる岸のうのはな目にみかき風にみかける玉川の里
さらしなの里

秋はなをなくさめかたき浮世とは月にもしるや更科の里

海

世中に沈みはつればわたつうみの底を深めて身をそ恨むる

海人

しかの蟹のめかり鹽やく袖も猶うちぬる程はぬるゝ物かは

いかり

舟とめて今ひきおろす碇縄かつしつみゆく身ないかにせん

鹽籠

あさりする干潟に海人やいてぬ覽けふり焼さす浦の鹽かま

ねぬなはの浦

涼しさの月にしほくむあま人や夏はさなからねぬなはの浦

たかしの濱

おきつ波たかしの濱の松影に千鳥なくなりよそふけぬらし

うき嶋

うき嶋の名をもちとはし世中に思ひ定むるすみかなければ

なからの橋

古のなからの橋よあとはかり名に残りてもいくよへぬらん

磯浪

あら磯のいはうつ浪の我なれや心くたけぬ時のまもなし

旅歌中に

けふもまた里なき野へに行くれぬさのみやしもに枕結む
なれもまた旅寝の袖にしたひきぬ思ひやらるゝふる里の月
をくらさぬ心なり共うつ山のうつゝにしらし夢にたにみよ
草枕あかつき毎のとり音にけさのなこりを思ひわするな

あかしかた月たにやとる秋の夜を風に任せてこきやすき南

くたりはへりし時あふさか山をこえはへるとて

あふ坂の山の杉村すきかてにせきのあなたそやかて戀しき

鳴海にて

都のみとをく鳴海の濱千鳥目かすにそへてねそなかけける

清見關にて人々ふねにのりてめなとかり侍りしに

清見かた浪まをわけてかつけ共しのお都はみるめたになし

富士山を見侍りて

いつくより雪はふるらむ天の原雲のうへなるふしのしは山

送旅人

したひ来る心のまゝに身をやらはやかてや越ん足柄の山

京に侍る人のもとへ

最上川たゆるあふせもいな船の昇りわつらふしはし計りそ

遠江へまかる人に

こえぬともさやの中山わかなくに心へたつな峯のしら雲

駿河へくたる人にたきものつかはすとて

行かたの山はふしのねくらへみよ我したもえのおなし煙に

近江へくたる人に装束つかはすとて

近江ちやのちのゆふ露ふかゝらはみのしろ衣たちも重ねよ

美濃へくたる人に

したはるゝ心のまゝに同しくは行てやみましつきよしの里

甲斐へ下る人に

わかるれは袖こそぬるれ假初行かひちとは思ふものから

信濃へくたる人に

さらしな月みむたひに思ひ出よ慰めかたく君をこふとは

常陸へ下る人に扇つかはすとて

常陸なる霞の浦のはれせぬはあふきの風をたくへてそやる

陸奥にくたる人に

しひて行心よいか東路のなこそせきのなをはきかすや

つくしへ下る人に

あすよりはかへりこむ目をまつら瀉心盡しに我やしのはん

遠所なる人のもとへ申遣し侍りし

君かあたり雲井はるかになりぬれと思ふ心はへたてさり鬼

入宋し侍僧のもとへ

浪ち分漕わかるとももろこしの虎ふすのへも浮世ならすや

人の女のもとより男こゝにとゝまりたるときくと申

をこせて侍返事に

尋みよ誰かすむさとのぬれきぬに三笠の山の名をかきす覽

丹後前司定有美乃國へ下向せんとし侍ころかねて日

ことになりおしみ侍とて

けふ迄はなを行末もあるものを今はといはんとときいかな覽

下向してのち思やりてよみ侍し

旅衣さそな露けさをくれゐておもひやるたに袖はぬれけり

都

現こそ都へたつる身なりともよかれぬ夢のかよひちもかな
あかさしし都のみこそこひしけれ月みるたひに物忘れせて
いにしへのならの都にあらね共我身ふるれはとふ人もなし

禁裏

百敷ををとにのみきく山川のうき瀬に沈む身をいかにせん
またしらぬ雲井を戀てあしたつの澤へに獨なかぬ日はなし

山家

人めとてみて慰むも哀なりつまきのしつかよそのかよひち

きくもうし思ひいれしとのへとも夕暮ことのみねの松風
曉山さより歸侍とて

木かくれの山もと遠くなる儘にいりぬとみつる月を出ぬる

閑居

我やとは八重葎してかとさゝむよにすめはとて訪人もなし

やと

吉野山浮世へたつる宿もあらはすみ浮れぬる身をは歎かし

山田

徒に世にたてるかな秋はつる山田のそほつをのれうれへて

故郷

故里は風もたまらぬ板間あらみねやなからみるよはの月影

寺

里とをみけふりもたゆる深山ちにゆふへの寺に歸る袖みゆ

初せ山ゆふる雲にこえくれて檜はらにしつむ入相の鐘

水郷

よの中をうちの里人しかそすむ我も行てや身をかくさまし

王昭君

あきことに鏡の影を頼みきて都のほかをみるそかなしき

六帖題にてよみ侍りし歌中におや

たらちねの心のやみの深さをも身をおもふ道に今ぞ知ぬる

わかこと

我事やいとけなきこの思ふ事いはてのみ社ねをはなきけれ

つかひ

鴈金の雲ちのつかひきりわけてつはさにかくる露の玉つさ

かり

かり人のいる野のはらになく鹿は命にかへてつまや戀しき

色

つき草の花よりあたに移るふは人のこゝろの色にそ有ける

つゑ

君か代の干とせのさかの爲とてやその神山に卯つゑきる覽

かさし

かさしこし雲井の櫻わするなよ都の外に身はふりぬとも

たまくしけ

玉くしけ都のでふりえそしらぬあつまの民と衰ろへしより

はた

數ならぬ身賤しくてしつ機に物おもふことは人にをとらし

綿

萬代のはると吹なる笛の音にかさしの綿も花とみえつゝ

裳

わきもこかひきもの姿うちはへて面影にのみ戀ぬ日はなし

和琴

山かつら紅葉も枝にひきかけてあらしの聲をてにそ聞する

寄月管絃

かきならす東のことの聲たてゝ月のしらへにかよふ松かせ

懷舊

いくほとも積らぬ年の我身にも思ひ出おほくすくしつる哉

おもひ出る心をのみそ忍ひける忘るゝ時はむかしともなし

秋懷舊

故里は昔しのふの軒端より見しよににたる月そもりくる

夢

ぬるか中も覺るうつゝもかはらぬをわくる心や夢となる覽

夢の中にてよみ侍りし

無常

誰かために秋のきぬらん故郷のぬしなき宿の庭のおさちふ
翌までの命も今やしら露のかゝる草葉に風そ吹なる
物事に移るひ行はありはてぬ世のはかなきも秋そしらるゝ

少僧都嚴雅病かきりになりてのころ手本をくるとて
つゝみかみに

古のかしこき筆の跡までも我かたみとやのちはなるへき
返し

世々ふとも君かかたみと水莖の跡もかしこき道をならはん
身ちかくめしつかひ侍ものみまかりて今けふりとな

すよし聞侍て律師嚴雅許へ申つかはし侍し
蚊遣火のけふりを見てもかなしきは雲となるらん山端の空

返事

蚊遣火のけふりの色も時しあれはむせふ心のうらにみせ鬼

釋教歌中に三界唯一心

思ひとけは氷も浪もうたかたもひとつ流の山河のみつ

三世不相待

古とおもへはやかて昔にて心のまゝのよにこそありけれ

心佛及衆生是三無差別

ぬる夢もさむるうつゝもひたすらに思へはおなし心なり鬼

是法住法位世間常住

大方のみつの心をしりぬれはたちるも波もかはらさりけり

煩惱即菩提

風ふけは俄にあれてさばけともなみはさなからもとの池水

唯境無識

みる人もきく人もなし高砂のおのへの松にわたる夕風

唯譏無境

ねむりこそ夢ともみゆれ世中はたゝおもひわく心なりけり

六帖題よみ侍りし歌中に法師

あらはるゝころものたまやこれならんけの袂に結ふ白露

法印宸信日蝕の御いのりし侍しに雨降て侍しかはの

ちの日申つかはし侍し

おほふなる我たつそまの雲よりやきのふの雨のふり始めん

返し

つたへこし我たつ袖のみのり社きのふの雨と今はなりけれ

法印定清まうてきて物かたりし侍しついでに眞言の

記教にすぐれたることなと申て歸り侍て次の日申を

くり侍し

きよたきを下すいかたのさす棹にのりの流の淵瀬をそし

返し

きよたきのなかれの淵をふみ分て水のみなかいいて尋ん

有宣法師としへてのちまうて來て物語なと申て酒す

すめて侍しにゑひて袈裟をわすれて侍しを朝にかへ

すとして

年をへてまれに逢みし宵のまの名残あり共けさそしりぬる

述懷

世中を厭はんと思ふあらましのいつか誠にならんとすらん

年たけはいらむと思ふ山ちこそ月日にそへて近くなりゆけ

かねてより世のうき時としめ置し山ちもいまや近くなる覽

行末もさそなことのけふまては思ひし事の叶ひやはする

心から我とわか身をせめきつゝななくもいへは浮世なり鬼

世中に我をとむるはさりとともと行末たのむ心なりけり

世のうさを思ひしらすはいかゝせむ歎く心のか厭はぬ

しつかなる寝さめは誰か心にてそむかれぬ身を思ひ捨らむ

人毎に思ひつきせぬうき世とやあさまの嶽もたえずもゆ覽

月もなをあらはれとみすやわかの浦にしつみ果ぬる浪の下草

和歌の浦やむかしの跡は有なから迷を月のしるへやはせぬ

わかうらに沈みはてぬる身をしらて袖に浮ふは涙なり鬼

浦風や浪に流るゝなひきものさしてよるへもなき我身哉

寄月述懷

はれかたき身の歎きかな月見ても猶かきくらす袖の涙は

あま雲のうへ行月の我なれやよにすむとたにしられさる覽

寄秋雨述懷

降はてゝ秋の時雨にかす袖をほさて朽なむ名こそおしけれ

寄鳥述懷

夏莉の芦邊の鳥にあらぬ身のよにたつ空もなくゝそふる

名所述懷

よの中はなにか難波の恨むへきもにすむ虫のなに沈みつゝ

世中のうきたひことにみよし野の山を哀といはぬ日もなし

ななく事侍人のもとへ申遣し侍し

三代すきてしつむためしも有ものを我ひとりとは何歎く覽

京にすみ侍ながら所勞にて出仕せすしてくたりてよ

み侍し

久かたの雲井の影はよそなりき都の秋の月をみしかと

人におほくこえられ侍ころ關屋といふ題をさくりて

我ことやふはの關守年をへてこえゆく人のかすをみるらん

轉任事申侍しに奏者心にいれすしてひきしくありて

五月五日雨ふり侍しに人のもとへ申つかはし侍し

み籠りにくちや果なん隠れぬの菖蒲はけふも人しひかねは
いかにせん我身ふりゆく五月雨に頼む三笠の山はかひなし
おもふ事侍て

住吉の神をやいまはかこたまし松もむなしく年のへぬれは
題をさくりてよみ侍し歌中に四方拜

春のたつ雲井の竹のおき伏てよのため四方にさを祈るらし
除目

この秋は我名もらすな三笠山さのみしぐれに袖やぬるへき
交の心よみ侍し歌中に人行莫_レ大ニ於孝_一
古のあととはかた／＼おほけれと親につかふる道そかしこき

進思盡忠退思補過

心をはつかふる道にすゝめともなを立歸り身をそいさむる
一人有慶兆民頼之

あまつそら春たちくれは野も山もなのかさま／＼花咲に梟
在上不驕高而不危

おほ空の星のくらゐは高けれと道たかはねは影そ久しき
戦々兢々如臨深淵如履薄氷
そこゐなきいはかきふちの薄氷こゝろも解ぬ世中のうさ

夙夜匪懈臣事一人

霜雪に我身を責てくるとあくど君につかふる年そへにける
資於事父臣事君其敬同

たちねの親にしたかふ心もて君につかふる道そかはらぬ
自天之時就地之利

夏はうへ秋はかり田にたつ波のをのか儘なる身とやしる覽
不以一惡忘其善

あたにちる色をうしとて山櫻いつれの花におもひおとさん

儉以養生

世中はたまのうてなも何かせん草のいほりも心こそすめ
禍福無門唯人所召

恨みしななには入江のよしあしももに住虫のなにそ有ける
欲悔非於既往唯愼過於將來

行末をいまは思はぬおもひ川過にしうさはまたもかへらす
欲生於身不遇則身喪

笛による秋のをしかもおもひより身を徒になしそはてぬる
茅茨不剪

とゝのへぬ草の軒端はよゝへても道有みよの試しにそひく
王者欲明讒人弊之

久かたの月日はいつら曇るへきたゝ雨雲のおほふなりけり
いはし水

やはらくる月の光もいはし水こゝろきよさに宿るとそきく
たむけ

立歸り年をへたてゝ逢坂とせきもる神にたむけせしかな
しめ

今よりはひくしめ繩のうちはへて神の心に身をはまかせん
七夜に人々歌よみ侍しに

行末はおもふも遠し万世をかそふるけふはなぬかなりけり
視

我が君のめくみそ遠きあまの原月日の影のさすにまかせて
しきしまの外には雲のみたるとも神よの月の影はくもらし

君かよのともなりけるを徒に尾上にたてる松とみしかな
かめのおの山のいはねにむす苔のかはらぬ色や君か万世

浪風ものとききこゝろと和歌の浦やなきたる朝のたつの諸聲

よもの海の濱の眞砂の數々にいはほとならんみよそ久しき
限りなく思ふ心にまかせてもなをいひしらぬみよの行末
さかさまにかそふる年の神代まてくらへてあまる君か行末
君か代を神にそ祈る住吉の松はやちたひおひかはるまて

寄月祝

君か代を月にそ祈る行すゑのかきりもしらぬ秋にまかせて
曇なきみよをしらする月影に千とせをそへて松風そふく

寄里祝

古のかしこきあとにたちかへり今も道あるかまくらのさと

已上八百四首

點者戸部禪門也。星點者權黃門也。依ニ念劇ニ不レ終レ功。及ニ
兩年ニ間爲ニ粉失ニ歟。返云了。

永仁二年十二月廿三日

隣女和歌集卷第四

自文永九年
至建治三年

春

立 春

逢坂のとりより先のね覺こそまつ春をしるはしめなりけれ
我そまつ春はしりぬるしのゝめのとりより先の老のね覺に
あまの戸を出る朝日や梓弓春のひかりのはしめなるらん
けふやかてきゆる雪まの松か枝や春のみとりの初なるらん
白雪の降かくしてし我やとをいかにたつねて春の來ぬらん
消あへぬ峯のしら雪ほのくくと霞むを見れば春そきにける

はれやらぬ空の雪解のうす曇霞になして春そきにける

山立春

春來ぬといふはかりにて足曳の山かきくらし雪はふりつゝ
春の立朝けのそらにみわたせは遠き山へそまつ霞ける
春たつと雲井のよそにしられ梟けさまつ霞むかつらきの山

羈旅立春

今朝みれば霞の衣たちそめて袖ふる山に春は來にけり

禁中立春

あふ坂を我より先にまつこえてけさは都に歸るはるかな

山家立春

けさははや霞もやかて九重のおほうち山に春は來にけり

故郷立春

春たちてあらはれそむるまきのやの軒端に落る雪の玉水

早 春

霞たちいまははるへとなにはつにけき消殘る雪やこの花

子 日

春日野の松の千とせを君かため空に棚引はる霞かな

朝 霞

あさほらけいづれ山ともみえわかつて霞に立てる峯の松原

山 霞

さしのほる朝日に峯はかつはれて霞殘れるをちの山もと

河 霞

春日山はるは色そふひとしほに松よりほかも霞むそらかな
棹姫の霞の衣はる風に袖ふる山はみゆき解ぬらし
ときしらぬ山ともいはしふしのねの雪にかゝれる春の霞は

つらゝるしほそ谷河はうつもれて霞おひたる吉備のなか山

野 霞

春の野のおきのやけはらけさみれは若な摘へく霞そらかな
野へ見ればまた縁にはなりやらて霞はかりそ春めきにける

浦 霞

すまの蜃のやくしほ烟り空にのみたちみちぬるや霞なる覽

里 霞

いつか見むあしやの里のゆふなきにひとむら霞む住吉の松

鶯

春たつといふはかりなるかすみよりほのめき出る鶯のこゑ

明ぬるか閨のいたまのひま見えてほのかにしつる鶯の聲

鶯のは風やなをもさえつらんこつたふ梅は雪とふりつゝ

今さらに雪ふらめやも鶯のこつたふ梅のはなやちるらん

谷 鶯

我のみやあはれときかん山かつのかきつの谷の鶯の聲

野 鶯

きのふけふ若菜つみにと春の野にきつゝなれぬる鶯の聲

山家鶯

ふるすより深山つたひにこの里はまつ聞そむる鶯のこゑ

竹間鶯

色かへぬ春のともとや呉竹の千代をならせる鶯のこゑ

遠 鶯

此里に啼てうつろへ霞たつをちかた野へのうくひすのこゑ

近 鶯

けさよりは餘所にもきかす咲そむる軒はの梅の鶯の聲
若 菜

萌出る若菜もあらは摘へきを野へのいつくか雪間なるらん

ふる里をたち出てみれば春日野のとふひのかたに若菜摘也

春日野に若菜摘なる袖なれや雪よりのちの雪のむらきえ

ことゝはむ遠かた野へにうちむれて白くみゆるや若菜摘袖

ふる里はわかなつめともみ吉野の山かきくらし雪は降つゝ

藤衣袖うちへて山かつのかきつのたるにねせりつむなり

雪中若菜

鶯のこゑきく野への若菜さへ袖にたまらぬ春のあは雪

岡若菜

みつ莖の岡のやかたを立出てねてのあさけに若なつむなり

野若菜

人毎に我しめし野の若菜とやをのかさまへけさは摘らむ

野へみればきゆる雪まも自妙の袖ふりはへて若菜つむなり

澤若菜

氷とけうち出るなみに袖ぬれて野澤のわかな誰かつむらん

海邊若菜

浪あるゝのしまかさきの海士人はいそなは摘て若菜をそ摘

行路若菜

見渡せば行も歸るも道のへのさはたの若なつまぬまなし

春草處々

同し野もまつやきそめしかたみえてをくれ先たつ春の若草

遙見殘雪

春霞ふゆをへたてゝかつらきや雲井のよそに残るしら雪

春 雪

ふる里ははやかすめとも見よし野の山の白雪降まさりつゝ
浅みとり霞む日かけに山のはの雪さへけさは春めきにけり

春もなを雲のいつくの冬なれば霞をわけて雪はふるらん

山春雪

この里ははや霞ともあしからの箱根の山に雪はふりつゝ

岡春雪

朝日さす軒はにつたふ水莖の岡のやかたの雪のむらきえ

杜春雪

春風にみたれし糸のくりかへし柳の杜にあは雪そふる

河春雪

氷とちまたうちとけぬ谷河に浪のはなちる春のあは雪

湖邊春雪

一しほも雪のうちにやまさるらん緑かくるゝしかの濱まつ

關春雪

あふ坂のせきにや冬のとまるらむをとほの山に残るしら雪

橋春雪

春霞たちわたれともあとたえて雪のみ深き峯のかけはし

里春雪

春もなを冬につゝきのさとなれば雪解はなれす立霞かな

春氷

うち出しいまはの浪もたちかへり春さへ氷る谷河のみつ

梅遠薫

この里はまた咲やらぬ梅かゝのいつくの風ににほひ來ぬ覽

雪中梅

降雪の匂ふよならは梅の花なにをしるへにわきておらまし

白雪のふりかくせとも梅の花なをうつもれぬ色とこそみれ

月前梅

梅花かやとまるとて立ならす袖にうつるは春のよの月

紅梅

わきもこかたちよる袖もくれなるのこそめに匂ふ軒の梅枝

くれなるのいもか衣に梅のはな色こそあらめ香さへ別れす

そのかみうへをきて侍紅梅とし久しうさかす侍しか

はしめて咲て侍をみて

をのつから春しる年も有けるを身のたくひとは何思ひけん

落梅

風吹は匂ひはかりとみし梅の色さへけさはさはれそゆく

我袖に梅ふきたむる春風はつらきはかりをえこそうらみね

柳歌中に

あを柳のいとふきなやむ春風に朝露もろく玉を亂るゝ

立よれば袖にみたるゝ玉ほこのみちゆきふりの青柳の露

あさ緑いとよりかくる青柳やちる花ならてねにかへらん

霞間柳

棹姫の霞の衣たえゝにはつるゝいとや岸の青柳

かけろふのもゆる野原を來て見れば霞になひく青柳の糸

雪中柳

うちなひく柳の糸のたちかへりまたかき曇庭のしら雪

雨中柳

たちよりて見る人もなきあを柳にいとかけそふる春雨そ降

水邊柳

池水になひく玉もとみえつるは岸の柳の影にそ有ける

遠村柳

誰里のこすゑなるらしあさみとり霞になひく青柳の糸

隣家柳

春風にわかやとかけてなひくなり人の垣根のあを柳の糸

故庭柳

ふる里ははらふ人なき庭のおもにあさきよめする青柳の糸
二條の舊跡の懸の柳をおもひやりて

蕨

ふる里の庭のをしへの跡なからのこる柳もよふりにけり
三代のこるおいきの柳ふる里に今一春のさかりまたなん

春雨

立わたる春の霞を煙にてけきもえそむる野への早蕨
みよしの山には雪やふるさとの霞もさむき春雨の空
さを姫の霞の衣たてぬきに糸よりかくる春雨を降
おほなる春のならひの朝曇り霞と見れは春雨を降
中將所望し侍しころ春雨ふり侍しに

歸鴈

我身よにふるかひもなき春雨にふれぬ三笠の山のなかな
春はこし秋は都にかへる山かりのためなる名にこそ有けれ
鴈の行こしの國なるしら山のしらねは社あれ言つてなまし
歸鴈なきゆくかたをなかわれは雲のみ残るきたの山のは

夕歸鴈

ぬししらぬ黄昏ときのうすゝみにかく玉つきの歸る鴈かね
夕日さす峯のかけはしあとたえて霞にきゆる鴈の一つら

夜歸鴈

何ゆへにいそきて鴈のかへるらむ花の盛の月を見すてゝ
京へ登らんとてのころ歸鴈を

喚子鳥

旅にてもをとつれかはせふるさとにわれさへ歸春の鴈かね
呼子鳥よふかひもなし山彦のこたふる聲もおのかねなれは

待花

さらてたにまたるゝ花の面影をほのかにみせてかゝる白雲
都人とはぬにつけてこのころはいとゝまたるゝ山櫻かな

遠尋花

はなとみる外山の雲をわけ捨て霞む高根にかへさ忘れぬ
初花

咲そむるはなかなあらぬか山のはにかゝるともなき峯の白雲
山里のはつ花櫻けふもなを雲とみればやとふ人もなき

けさやて誰にか見せむ待わひし花咲そむる軒の一枝
尋ねいる山のはつかに咲そむる初花さくらあすも来てみん

ことはをかきて歌讀侍しにみやこのはな咲はしむる
ころ山さとへまかりて侍るにはないまたをそしとい

ふ題をとりて
たつねつる山路はをそき梢かな宮古よりこそ花は咲けれ

障子のゑを見て

吹風やのとけかるらし梓弓はるをかきらぬ花をみるかな
曉花

雲間花

いつのまに鳥の啼までふけぬらむ月と花とはみる程もなし
しら雲とみゆるも花か山櫻にほひを送れ峯の春風

月前花

この春は月のころしも盛にてよるもめかれぬ山櫻かな
花

嶺花

またれつる花や咲らし常よりも山のはしろくかゝる村雲
しら雲のたつたの山とみえつるは小倉の峯の櫻なりけり

河 花

またちらぬ花のかけさへよし野河行末みえてうつろひに鳧
名所花

宿りして花ちるまてはみ吉野のふる里人に身をやなさまし
都 花

春をへてにほふ櫻のこゝのへにおほうち山は曇りかさなる
みよし野は山のは高き名のみして櫻は花のみやこなりけり
年のうちに京へ登り侍らんと侍りしにおもひの外に
とゝこほりて

おもひきや猶この春もこのさとの花に都をこひぬものかは
花比眺望

咲にほふ花の都をみわたせは唯九重の春のしら雲
閑居花

春來てはにほふ櫻のやへむくらしける宿も人はとひけり
春きては花をあるしと頼め共なをやとからにとふ人もなし

花ゆへに人のとひ来るやとならはちるに歎を猶やそへまし
花下待人

散はてむあすはなにせん山櫻きのふけふこそ人も待たるれ
花誘引人

いつくにか春のこゝろのとまるへき花より後そ宿も定めむ
花忘愁

思ふことみれは忘るゝ花にまたなけきくはゝる春風そふく
花歌中に

みよし野の山の櫻や咲ぬらんふる里にほふ春風そふく
ゆふ日さす峯の霞も櫻色のうすくれなるに匂ふころかな
あけぬれと峯をわかれぬよこ雲の花になり行山櫻かな

峯の雪尾上の雲にうつろひて花にそまとふみよしのゝ山
雲と見え雪にまかひて山櫻花こそ咲ねかはにほひつゝ
山櫻いま盛なり雲もなくなきたる朝に降れるしら雪
よそにたつ雲もさなから花とみてまかふ色なき山櫻かな
花にあかていく里すきぬかへりみるやとの梢は雲となる迄
誰きとに花咲ぬらんあし引の山のはならてかゝるしら雲
よし野山今年は遅き花なれややよひにかゝる峯のしら雲
月のすむそらは霞て山櫻こそゑはかりにかゝるしらくも
月もらぬ木のまも春はいとほれすちる事おしき花の下かけ
花見ても袖こそぬるれいたつらに我身ふりぬる春雨のそら
今よりは誰をかまたん春雨のつゝけるころの花のふる里
ふる里と宿をあらして今よりは花みかてらに誰をさそはん
春はたゝさてもや人のまたるゝと花なき里に宿やからまし

落 花

よし野山はなやちるらん昨日より薄くなりゆく峯のしら雲
冬ちかき色をみせてやあしかきのよし野の花も雪と降らん
雲ときえ雪とふりても山櫻行ゑもしらぬ春の色かな
みよしのゝ山のあなたも櫻花さそふ嵐のかくれかやなき
おほ空に霞の袖はおほへともなを春風にちるさくらかな
我やとの若木の櫻さきしよりめかれすみつゝちらしつる哉
庭のおもは闇とも見えぬ光にておほる月よにちる櫻かな
春の夜の夢よりもなをはかなきは咲とみしまの櫻なりけり
きのふかも盛とみしは山櫻ねぬる一夜の夢にそ有ける
きのふまで梢の雪とみし花のよのまにみつのおはれよの中
やり水のいはゝしはかりあらはれて苔にふりしく花の白雪
花後春風

散る花のおもかけのこすかたみさへあたなる雲に春風そ吹
山櫻あかすきそひし春風のかたみの雲を又はらふらん
ちる花にいとひ馴にしなこりとて雲にもつらき峯の春かせ

三月三日

いと猶またるゝ物は花のせのいしまによとむ春のさかつき

苗代

あしねはふ澤の沼水ひきかけてのたの苗代しめはへてけり
苗代のを田のしめなは引はへてはや山かつのいとまなき比
なはしろの池のみなくちさしとめて水もまかせぬ春雨の比

堇菜

ふるさとの淺茅か原のつほすみれ人目すさめぬ年やつむ覽

杜若

たつねすは花もみましやくくれぬのいはかきつはた今盛也

松上藤

松にのみ枝をつらぬる契もてなにかは藤のあたにうつろふ

淵邊藤

山河のそこひもしらぬ淵なれとあたにさはくや岸の藤なみ

藤歌中に

九重にゝほふ櫻はかさしてきまた身につかけぬ春の藤なみ

中將にて石清水臨時祭の使つとめてあつまにまかり

くたりてつきのとしの春ふちをみ侍て

みれはまた都に歸る心かなこそのかさしの春の藤なみ

躑躅

たつた山からくれなるの岩つゝし春も紅葉の色かとそみる

蛙

花の色ははやくうつろふ山吹の咲るよし野の蛙なくなり

歎冬

咲しつむきしの山吹なみこえて花の色なる谷川の水
くちなしの色もあやなし山吹の咲る井てには蛙なくなり

河邊山吹

山吹の影ゆく河の水の色やにこらぬ御代のためしなるらん

吉野河の山吹を

花はなを契りありけりよしの河櫻のゝちのきしの山吹

庭山吹

ゆふ暮の籬はかはる色もなしをのか名のみや山吹のはな

山吹の盛に人まうてきてよるになりぬいまばかへら

んと申侍しかは

ゆふ暮の庭の籬は山吹の花につけても夜はかへるな

暮春雲

春深きあを葉の山のしら雲は咲をくれぬる花かとそみる

山高みあをはに残る花とみておられぬ雲にさそはれにけり

暮春月

やよひ山花よりのちの光かなあを葉わけ出る有明の月

暮春歌中に

花もちり月もあり明にうつろひぬ哀れあなうの春の別れや

ひとかたの名残やおしき山櫻ちるや彌生のありあけの月

暮はつる春のゆくゑはしら浪のあとなきかたにたつ霞かな

暮て行春よひとめぬ呼子鳥なにそはありてなくかひもなし

影はかりそこにしつみし山櫻浪にうきても暮る春かな

惜春といふことを

年ことにおしむかひこそなけれともこりぬ涙を春を先たつ
ちる花におしむこゝろは盡にしを又なけかるゝ春のくれ哉

なをさりにおしき春ハルかは暮ゆくも命のほかの月日ならねは

春残二日

散る花のかたみの色の衣たにけふとあすとや身にもならさん

三月の末に卯花の咲るを見侍りて

またきよりやよひをかけて夏衣さらしそめぬる岸のうの花

三月盡鶯

鶯のをとつれさへやたえはてんけふよりのちの春のふる里

小三月盡

よの常の日數にくるゝ春たにもさらぬ別は辛くやはあらぬ

夏

四月朔日ころ京へ登り侍らんとて

けさはまた花の袂をぬきかへてひとへにいそく旅ころも哉

卯花

夏衣けさたちかふる袖の色にひとつに咲る庭のうの花

我袖にまかひやすらんとふ人もなき山里のには卯花

朝卯花

卯のはなの咲る垣根としりなからいく度いもか袖とみつ覽

立とまる袖かとをみるわきもこかかへる朝けの庭のうの花

夕卯花

朝といてのいもか袖かとみるまてに庭しろたへに咲る卯花

卯花歌中に

また出ぬ山のあなたの月かけのかねてうつるや庭の卯の花

残花

このころは空にしられぬ夕月のさとわくかけや庭の卯花

ほとゝきすたつぬる山の遅櫻はつねにかへて花をみるかな
郭公はつねたつねている山のあらぬかひある花を見る哉

葵

うち渡すをちかた人もけふは皆其かみ山のもろかつらせり
あまつ日のかけに葵の草なから月のかつらに影もはなれす

賀茂祭

朝ゆふの日影のまゝのあふひ草君にしたかふ道をしらせて
もろかつら月日に契る草きとや雲井のつかひけふかさす覽

神祭

誰さとにかみ祭るらむ山人の歸るつまきにさせるさかきは

待郭公

郭公はつねやきくとうの花の咲るあたりにやとやからまし
ほとゝきすはつねはいかにうの花の咲ちる岡のむら雨の空

人ならはおもひたゆへき雨もよにいとゝなたるゝ郭公かな
こよひたに聞かてやあけむ郭公雨の晴まの村雲の月

長景すゝめ侍し歌の中に同題

郭公はつねまつまに卯花の月もありあけの影をすくなき
またてきく年はなけれと郭公ねぬよのいたく積るころかな

四月許に嵯峨にまかり侍て京へかへらんとてそこに
すみ侍る人のもとへ申つかはし侍し

都にて何をかたらむ郭公はつねをきかてたちかへりなは

人傳聞郭公

なきぬとも我にかたるな郭公人よりのちの聲やまたれし

賀茂にて社頭郭公といふことを

しめのうちにはつねたむけて郭公そのかみ山を鳴て出なり

二聲郭公

みしか夜となにはたてとも郭公また宵なから二聲そきく
河邊郭公といふ事を

五月雨のふるかはのへのすきかえになく郭公またもあひみん
宇津山にて郭公をきゝて

都にてまつやかたらん郭公うつ山のちにはつねきゝつと
旅にて郭公を聞侍て

都まで我を送るやとことにおなし聲なる郭公かな
奈良にまかりて侍しに

ふる里のならの都の郭公しらぬむかしのこともかたらへ
こかくれの三笠の山の郭公年へぬる音を神はきかすや

内野にて郭公をきゝて
いにしへをなれもしのふや郭公おほうち山のあとになく也

内裏にて時鳥きゝはへりて
久かたの雲のうへにてきく時もなをよそになく郭公かな

郭公歌の中に

同じくはあけはてゝなけ郭公またぬ人にもはつねきかせん
ましてしはしつらさうらみむ郭公またれゝてすくる一こゑ
郭公けきよりそなく五月をはをのかときはの森のむら雨
郭公いま一こゑはあし引の山のあなたの人やきくらん
一こゑの名残もつらし郭公こゆるたかねのゆふ暮の雲
郭公ゆふつけとりにあらぬねもきゝてそこゆるあふ坂の關
郭公なにうたゝねをさますらん二聲そきく夢もこそみれ
ありあけの月なかめすは郭公行かたしらぬねをやしたはん
山里は人こそとはね郭公たえずかたらふ聲はかりして
郭公なく音聞えぬあつまちも身は山かつの慰めもかな
ひさしく郭公なかなす侍ころ

都おもふ我にならへる郭公あつまに來ては音をのみそなく

閏五月あるとし郭公をきかす侍しに鳴侍るよし人の
かたりしに

郭公さ月くはゝることしたに人つてにのみきゝてやみぬる
菖蒲

五月きてあすのあやめをひく袖にまつけふかゝる池の小浪
故郷は軒のしのふもひまなきにあまりにふけるあやめ草哉

雨中菖蒲
あつまやのまやのあまりの菖蒲草たまさへふける雨そゝき哉

六日菖蒲
うらかれて袖に残れるあやめ草ときすくるねは我のみそ鳴

藥王
玉のをのなかきためしはいろゝの花ぬきかくる袖の白糸

早苗
さかさす森のしめ縄くり返しみとしろをたにとる早苗哉

けふもなを奥手の山田すきかへし五月雨すきてとる早苗哉
夏歌中に

夏草の野しまの崎のしほ風にすゝしくさはく浪のさゆりは
長景許にて題をさくりて夏草

夏草は庭のをしへのあとばかり我みち見せよ宿のこのもと
庭の夏草あとなきまでしけりにたりとらみ侍る人

の返事に
あさゆふにおもひやらるゝ通路に心もしらすしける夏艸

照射
木のまより峯のほくしのほのめくを闇を忘れて月かとそみる
さ月やみ思ひの外に月影のいさよふ山やともしなるらん

きのふたつと山すそのししかやなき尾上を越えているともし哉

山五月雨

淋しきは夏こそまさされ五月雨にかきこもりぬる山陰のいほ

河五月雨

いつみ河いつみしよりも五月雨はけふみかの原浪そこゆなる

沼五月雨

たつねはやいつれあさかの沼ならむ水のみ深き五月雨の比

夏月

人しれすすみける月のあたりしもまつ晴そむる五月雨の空

待程は秋におとらぬ月かけの出てはやかてあくるみしかよ

轉任事年久かなはて賀茂にて河夏月といふことを讀

侍しに

この夏もみたらし河に照る月の沈める影にすみやはつへき

長景すゝめ侍し歌中に浦夏月

この頃はなか井の浦の海士人も月をみるめのよるそ短かき

ぬるかうちも覺るうつゝも夏の夜はみはてぬ夢に明る月影

新樹間曉月

庭のおもはあか月やみとみえなから木影のほかに有明の月

朝橋

あさとあけに吹いるゝ風のにほふかな軒の橋花咲ぬらし

故郷橋

五月來て今も花さく橋のなにおふ宮古あれまくもおし

有近橋を見侍て

雲の上わかつたの袖ふれてみはしの西に匂ふたちはな

歌合し侍りしに月前螢

月はなを心つくしのこのまにもさはらぬ影やほたるなる覽

江螢

なにはえの玉藻の光あらはれて波の上にもとふ螢かな

漕かへるたなゝし舟のいさり火やおなし入江にもゆる夏虫

浦螢

身を照らす光はみねと和歌の浦に螢あつめて年はへにけり

螢歌中に

煙たつ思ひとそみる夏むしのもえて亂るゝふしのなるさは

はるゝ夜のあしまの水に影みえて波のそこにもとふ螢かな

鵜河

あらし山かたふく月のかつら川光をかへてのほるかゝり火

蚊遣火

月をみるやと社夏はしられけれ外にはたつるよはの蚊遣火

淋しさにたつる煙となけれども柴おりくふるよはの蚊遣火

みな月も涼しかるへき夕暮のあつさをそふる軒のかやり火

氷室

ときしらぬふしより外の氷室山こほりて残る冬のしら雪

晩立

ゆふ立の雲井にひくかみなひのみむろの岸は水まさる也

晩立に目影のみえ侍しかは

かきくらす雲のいつくのひまもりて夕立なから入日さす覽

山家夕立

風はやみ涼しく曇雨雲の我がいる山の夕立のあめ

月前納涼

なかむれは涼しかりけり夏の月には秋のかけやそふ覽

曉納涼

このほとは夢をわかれて有明の月にしみつを結びかへぬる

山家納涼

山かけや風吹いるゝ松のとをさゝていくよかあかしきぬ覽
三首歌合し侍し時同題

涼しきはしみつを庭にせきとめて夕日よそなる山かけの庵
納涼歌中に

ゆふつく日よそにうつるふ山かけの涼しき宿にかよふ松風
かた岡のならの葉そよき風すきて夕かけ涼し日くらしの聲
結ふてにさはくいつみのさゝら波立よる人の歸りやはする

夏神樂

かはやしる櫛の枝にをりはへて波にかさぬる夏ころもかな
河やしる波かけ衣をりはへてしのに聲するほとゝきすかな
櫛さすきよき流の河やしろしのにかけほす夏衣かな
六月晦日みたらし河にて風涼しく侍しに
秋風はけふより吹ぬみそきするみたらし河の森の下かけ

六月秋

みそき河あか月かけてよる浪のかへるや夏の別れなるらむ
みそきするあさのたちえのとりもあへす更行空に秋風そ立

秋

初秋

さ夜ふくるみそきにかけしゆふしての靡きし儘に秋風そ吹
露は今をきもやすらむあけぬまは風社秋のはしめなりけれ
いつしかとはやうらかなしまくす原暮行そらの秋のはつ風
秋はきぬけふよりのちの夕暮を風につけてもとふ人もかな
月の色風の聲までわひ人の心つくせと秋や來ぬらん
風かよふ袖に涙の露ちりてぬさめよりこそ秋は來にけれ

露よりもまつおちそむる涙かなれ覺のとこの秋のはつ風
風のみや秋のけしきにかはる覽露はならひのあさちふの宿
ふる里はいつも露けきあさちふに風こそかはれ秋やきぬ覽
秋はきぬ風は淋しく吹かへぬとふへき人はをとつれもなし
なとたてゝ一夜ふたよに成にけりおきゝか原の秋のばつ風
よなゝは涼しくなりぬをさゝ吹わきたのいほの秋の初風
今よりの心つくしもかつみえてこのまにいつる秋の三日月

初秋月

初秋露

あさとあけて庭の萩原見渡せは露こそ秋ははしめなりけれ
秋風はまたをさつれぬ萩の葉の露にそけきは驚かれぬる
いつのまにをさかさぬらん夏衣またひとへなる袖の白露
七月六日

短しとあすは恨みむ秋の夜をけふ七夕やなかしといふらん

七夕

秋の目もなかしと思ふ七夕にかしつる糸のくるゝ待まは
秋來てもなな短か夜をたなはたはなと長月と契らさりけん
天の河もみちのはしは秋の夜の月の桂の影にやあるらん
棚機のもみちのふねや天の河とわたる月のかつらなるらん
ひとりすみ侍し秋七夕を

七夕後朝

七夕に今年はかさしひとりねの秋をかさぬるよはのさ衣
きぬゝにかへる別の袖こえて我身うきぬるあまの河浪
行末はまたとをさかる天の河きのふそ近きわたりなりける
萩
秋たちていくかもあらぬ朝露にまつ咲つらむ萩のひと枝

このねぬる曉露に咲そめて花まとをなるもとあらの萩
棹鹿のけさなく聲に野へみれはもとあらのこ萩咲そめに梟
いまははや鹿の音さそへ我宿の萩のふる枝の花の下風
みる人の心はかりと思しに月もうつるふはきのうへのつゆ
よそにのみみてこそやまめ朝またき折はこほる萩の上の露

女郎花

花にあかてなをやすすきん女郎花秋の限りは野へにあり共
色かはるたか秋風にをみなへし涙こほるゝのへのしら露
女郎花風の心のいかなれはなひくものからなをそむくらん
薄

蘭

さをしかのいる野のおはな暮行は誰た枕と露むすふらん
ゆふされは人まつ宿の秋風に袖かとみゆる花すゝきかな
人めなき宿のかきほの秋風におはな袖のたれまねくらん

草花

をり出す野への錦の藤はかま風と露とをたてぬきにして
いまはまた思ひそ出るさかの山みなれし秋の花の色々

荳蔻

いはしろの岡のかるかやゆふ露に松ならねとも結はれに梟

萩

きゝなるゝ垣根の萩のをとつれも今はたかはし秋のはつ風

山家秋風

山かけやあしふく軒の萩の葉にひまこそなけれ秋風のことゑ

秋夕

むら雲の風にみたるゝ山のはの夕日の色も秋そ淋しき
小倉山くるゝ麓の秋風にきりのそこなるいりあひのかね

秋夕立

夏たにも涼しかりしをのわきたつ風をたよりの秋のゆふたち

初鴈

久かたのあまつさきりのあさ曇り吹風寒くかりは來にけり
小萩ちる夕風さむみ山かつのうつ麻衣かりそなくなる
秋風の寒く目ことになりゆけはこるも鴈金なかぬよもなし
雲井まで稻葉の風やさそふらんふしみのをたに鴈は來に梟
月はなを光もみえぬ秋のよのきりにもれくる初鴈の聲
秋風に雲かはれぬる山のはの月をよこきる初鴈のことゑ
なかむれは秋風いたくさよふけてかたふく月に鴈ぞ鳴なる

月夜に鴈のなきわたり侍しに和琴の月の調の事おも

ひ出て

久方のかつらの影にとふ鴈は月のしらへのことちとそ見る

鹿

女郎花おほかる野へになく鹿はいかなる草の妻をこふらん
小男鹿のいる野の尾花かりそめに結ふ庵はねむかたもなし
妻こふるときをは誰にならふらんふしの裾野の小男鹿の聲

夜鹿

月のすむよをうち山の秋風にみやこのたつみ鹿ぞ鳴なる

曉鹿

夢さむる閨のいたまに月もりて手枕なるゝさをしかの聲
淋しさをいかにしのへと山里のねさめの月に鹿のなくらん
さを鹿もねさめのゝちそ鳴そむる何に驚く夢にかあるらん
基盛朝臣許の探題に同題

夜をかさねつれなきつまや有明のつきす恨むるさを鹿の聲

山里にまかりて鹿をきゝ侍てのちよみ侍し

忘れすよねさめの月のあり明にほのくきしさを鹿の聲

虫

松むしのはつねをさそふ秋風のほのかにわたる庭の萩はら
露さむき萩の下葉の色みえてはやいれかての虫の鳴らん
露しもに枯ぬときはのなはふりてなくれ異なる野への松虫
ゆふ暮のをのゝ篠はら忍ひかねあまりて虫の聲そほのめく
花みむと植し籬の一むらを野へありかほに虫そなくなる
出やらぬゆふへはさそな月影の入かたにしも松虫のなく
長きよになにを明すときりくすあけても聲のなを殘る覽
月前虫
またきより霜とや月を水莖のをかぬさきにもよはる虫の音

終夜聞虫

夜もすからぬぬともとなる葦あはれと思へ哀とそきく

夢後虫

なれゆへに覺ける夢かきりくす枕の下に聲そきこゆる

壁底虫

きりくす壁におふてふ草の名の秋の思ひのねをやなく覽

葦の枕邊になくを

都おもふ枕のしたのきりくす我なくねをも哀とやきく

秋の歌の中に

虫の聲鹿のなくねも秋はたゝひとつ涙にあはれとそきく

露

風さむみ暮行にはをなかわれは萩のしつえをのほるしら露
涙さへもろくなり行秋風に草のかきはも露そこほるゝ
さをしかの朝たつ野への跡なれや風よりさきに露を亂るゝ

霧

あけくれの空とみしまに我袖のおほえすぬるゝ秋の初霧
あらし山峯のあき日ははれなから麓はくらき秋のかはきり
千鳥なくさほのわたりの河霧に駒ゆきなつみ家路ともしも
すみよしの岸のわたりになりけり霧のあなたの松風の聲
山路霧

關霧

野へにては露わけ衣ほさてきて又きり深き秋のみやまち

檜

秋ふかく霧たつころは武藏野の霞の關もなをやかふらん
薄霧のまかきの竹のよをこめてぬれく吹る花のあさかほ
朝貝のはなをやとりをく露のいつまてかゝる命なるらん

待月

まちわふる月影さそへあし引の山のあなたの松のゆふ風
限あれば山のあなたにすむ人もまたいてぬ間の月はまつ覽

未出月

いつくにて誰と今宵の月をみむとよはた雲に入日さすなり

出月

秋風にたなひく雲はきえはてゝまつにかくるゝ山のはの月
山月

かねてより雲なき空をなかめつゝくらせる宵の山のはの月
曇りなき影をや空に移すらむかゝみの山の秋の夜の月
いく千代も曇りはあらし君かすむはこやの山の秋の夜の月

露しものまた色染ぬこの間よりしたてる山は秋のよの月
月もなをなくさめかたきうきよとや影すみはてぬ姥捨の山
霧はるゝ小倉の山の秋風に名にゝぬよはの月を見るかな

嵐山の月をみて

秋の夜はむへ山風のなもしるく雲もかゝらぬ峯の月かけ
峯 月

ふしのねは雲より高き山なれとなを空とをく澄る月影
山路月

ふけ行は月も出なむ暮ぬともいそかてこえよさやのなか山
山地までしたひてけりな久方の雲井に馴しよはの月影

河 月
みなせ河した行水はしらねともうへにこほりて月を流るゝ

野外月

夜半の月まつもおしむも山のはのつらさしられぬ武藏野の月
山のはやいつくなるらむむさし野はを花かすゑに月を傾く

關 月

あふ坂の關もる水のなかりせは空行月をいかたとゝめむ

海邊月

隈もなき月によるともしらねはやかれたて蜚の藻鹽たる覽
なにはかた底にうつれる影見れば月のかつらにかゝる白波
住吉のまつほともなく出にけりゆふへにかゝる浪の上の月
すみよしの松はふたゝひ老ぬれと神代の月の影そかはらぬ
いつくにも光をわかぬ月をたになほ住吉とあまはいふなり

聖福寺の僧住吉新宮にて同題を

霧はるゝみこしのさきの波かけてなをすみ吉の月をみる哉

濱 月

白妙の光そきよきふきあけの濱の眞砂の秋のよの月

八月十五夜

秋の月なからなる光かとこよひをしらぬ人にとはゝや

九月十三夜雨ふり侍しに

長月のなたかきかひもありなましきのふの月の今夜也せは
旅宿月

ひき結ふ草の枕の露にまた月も旅ねやよきむなるらん
人の許へまからんとて申て月まつほとにのみ侍し

あり明の月まつほとはやすらひを問ぬつらさに人や待らん
ものへまかり侍る道にて

ゆふやみの山のは過てなかわれははるかに月はすみ登り鬼
里 月

山のはをまつもおしむも月ゆへに慰めかたきさらしなの里

山家月

誰さにとまつうつろひてなかわらん我すむ峯を出る月影
月にはや木の間の外にさし出て心つくしはのきの山かせ
この秋はおのへのいほにすみかへて心つくさぬ山のはの月
庭のおもの鹿のかよひち跡みえて月に玉ちる萩のうへの露
秋風に月さえのほる山のはの軒のつまとふさをしかのこゑ
あたたえて世をうち山は人もなし都のたつみ月のみそ見る
きりくすなくやまさとの秋の月たゝ我のみそ哀ともみる
したもみち色つく山の木の間より軒ばにうつるよはの月影
軒はゆくかけ樋の水の音はしてひとり氷れる秋のよの月
山さとにすむ月影の都までいかて心をさそひゆくらん
山深き住家ならすはななめつゝこよひの月に誰をたままし
年を経て馴すはいかにすみわひん獨深山の秋のよの月
とふ人の影たにみえぬ山里にあひやとりして住る月かな
山里も月のよころはこゝろせむ思ひの外に人もとひけり
我のみやあはれもみまし山里のこよひの月に人こさりせは
身にうとく雲井の影はへたゝりてなれて久しき山端の月

故郷月

こぬまでも都は人のまたれしを思ひたえたる山のはの月
淋しさはいつくの秋と人とはゝたゝふる里の月をこたへん
月のみや軒をあらそふ蓬生のもと見し影にかはらさるらん
月の歌あまたよみ侍しに

木の間より心盡しにもる月の影みるからに秋そかなしき
おきの葉にはつ秋風の音たてゝ月のかつらにかゝるしら雲
かりかねの聞ゆる空をなかわれは夜わたる月に秋風そ吹
かねてたに早いねかてとなけくよの月の頃にも成にける哉
まとゝまぬ夜は積る共それをたに思ふ事とて月をなかめん
今よりは露もはらはし月影を袖のものとはいかて見るへき
思ふ事ありしむかしの秋よりや袖をは月のやとゝなしけん
夜もすからなかわる袖のしほるゝは月の光やなみたなる覽
風にこそ露も落なれ月見れはすゝろにもろき我なみた哉
山とりのおのへの月の増鏡かけみるからにねこそなかるれ
曇りなき秋の月夜に見渡はかゝみの浦のかけにそ有ける
曉月

惜入月

擣衣

すみはてぬ都の秋のなこりとてよな／＼みつるあり明の月
山のはにたゝよふ雲はあけぬめり空行月になかめせしまに
又いてむ後のたのみも忘れられているをかきりとみつる月哉
誰さとのねさめなるらん月かけのいるやまもとに衣うつ聲
衣うつよその夢さへたえぬらん我身一のねさめなれとも
秋風はまつこの里やさむからん外よりさきにうつ衣かな
色かはる萩の下葉の秋風にやゝいねかての衣うつなり

山家擣衣

日暮れはさむくふくなる山風にこそうち添る囁のきころも
まさきちる峯のあらしに月さえておのへのいほに衣うつ也

田家擣衣

しかのたつ山田のなるこ引かへてぬぬてすさひの衣うつ也
山田もるひたになれてや衣うつ宿にも鹿のとをさかるらん

待菊

夜のほとに花や咲とて見る菊のいくあき露に袖ぬらすらん
菊歌中に

よるつよもおいせぬ秋のしら菊になにそは露のあたに置覽
けふまては猶しら菊の露しもにまつうつるふにはの月影
とふ人の袖かあらぬかしもまかふたそかれ時の庭のしら菊

庭前菊

或人の夢に政村朝臣此題にて人々をすゝめて歌よま
せて心經を書供養せよと見侍とて時村すゝめ侍しに
露はらふ袖かとそみる秋風に亂れてなひくにはのしらきく
人にかはりて

秋霜

野へみれは萩の下葉も色つきて夕風さむく結ふ初霜
まくすはふおのゝ淺ちの夕霜に苜のうらみもかれ勝るなり

秋歌中に

ゆふつく日うつるふ山の秋風にもみちぬ松も色はみえけり
かはり行よそのもみちに秋もなをひとしほまさる松の色哉
風の音も木の葉の色も山里はひとかたならす秋そ悲しき
きのふけふ時雨かちなる山へかな哀れ木の葉の色かはる頃

物をおもひてよみ侍し

我袖もいろつくほとになりにつけり涙しくるゝころの秋風

紅葉色浅

時雨ゆく雲たちかへり猶そめよ唯一しはの峯のもみちは

月前紅葉

月影のいたらぬ谷のこかけまでしたてる山はもみちなり鳧
久かたの月のころこそみちはのよるの錦も色まさりけれ

雨中紅葉

かき曇りしくるゝ雨のいかにして日影の色も紅葉そむらん

雨後紅葉

時雨つるひとむら雲の露のまに山をちしほの色に染けん

紅葉間松

常盤なる松も時雨の染れはや紅葉のころの色まさりける

庭紅葉

我やとは立田のふもと時雨して峯よりつく庭のもみちは

柞黄葉

はゝそ山また色浅し神無月しくれぬさきの秋のひとしほ

紅葉歌中に

ふる里にあさち色つく鴈鳴てきり立山はもみちしぬらし
染そめぬよはの時雨のむまやちもけさの紅葉の色に見え鳧
そめかへしなにをあかすと時雨らん紅葉にかゝる秋の村雲

暮秋

木からしに残る紅葉もあるものを惜むかひなく秋のゆく覽
ふりにけりみそちあまりの秋暮て今はおいその森のゆふ霜

山暮秋

なかつもゆふくれなるの紅葉はにいまは限りと山風そふく

野暮秋

なかつも残りく野のをさゝはら一夜ふた夜にむすふ霜かな

暮秋鹿

ちりつもる紅葉ふみわけ長月のありあけの月に鹿ぞ鳴なる

暮秋曉月

秋の夜もあさちか末のしら露にやとるもよはきあり明の月
長月はかきりとそみるはつ秋の有明たにも月はうかりき

暮秋落葉

秋の色もいまはかきりにうつるひて有明の月にちる紅葉哉
長月のあり明の空のこからしに桐の葉おつる窓の村雨

暮秋雨

秋はつるけふの空こそ晴やらね時雨は冬のはしめと思ふに

九月盡日

雲の上をこふる眺めにしらさりつ秋はけふこそ暮て行なれ

曉九月盡

更ゆくををしみてなかつのわかれの鐘のあかつきの聲

小九月盡

翌までもあるへき秋のことししもけふをかきりに暮て行覽

冬

初冬

きのふたに嵐の音は高砂のおのへの松に冬は來にけり
松の音のけさよりことに閉ゆるは嵐のつてに冬やきぬらん
時雨せぬ山の木の葉もさためなく降こそ冬の初めなりけれ
冬きぬといふはかりにて秋たにも時雨し空のけさは晴ぬる
行秋のかたみの露も干ね袖に時雨かさなる冬はきにけり

きのふみし野へのゆふ露置かへて霜のふりはに冬はきに鳧
時雨

神な月あれたる宿の獨ねの袖の外にももる時雨かな
いひしらす淋しき物はね覺するまきのいたやの時雨なり鳧
けさみれはをちの高根そ曇るなるたかすむ里の先しくる覽
神無月しはとる峯やしくるらむゆふひにぬれて歸る山人
更行はゆきをやみまし宵のまの空さへさえて降時雨かな
旅時雨
ふる里の木すゑの色やいかならむしくれは旅の袖ぬらす覽

亡屋時雨

里はあれてふりにし宿は時雨たになをもり捨て跡も定めず
人のもとに申つかはし侍し

落葉

思ひやる山ちはさそな都たにふみわけかたき庭のもみちは
移りゆく雲のはたての山風に空に亂るゝ峯のもみちは
とふ人のおとなる宿と見せかほに風吹わくる庭の紅葉は
基盛朝臣許にて朝落葉

山路落葉

紅葉はに道なくみゆる山里はあらしのさきにとふへかり鳧
杜落葉

殘菊

ちらぬまにとはまし物を神無月いくたの杜はあらし吹なり
うつろひし色ともみえず秋はてゝ降ゆく霜のしら菊の花
霜

みつしほのさしこすほとはつらゝゐて末はに残る芦の朝霜
柴の戸をしあけかたの風さえて庭のくちはにこほる朝霜
冬草のくちはかうへに置しもは菊より後の花とこそみれ
寒草

秋暮し露より霜にむすひきて軒はの萩の音そかれぬる
長月のもとの雪もほしやらて末葉にこほる霜のした草
庭ふかきくちはかうへも白妙にふるえに氷る萩のあさ霜
山里の人はときもなきものを草葉は冬そ枯まさりける
江 水

冬 月

みつしほのいり江は波に立かへりあしまに残るあさ氷かな
里わけて曇りくもらぬ空なれや月のよそなる雲そしくるゝ
冬かれのおはな袖のしろたへに霜をかさねて氷る月かけ
ふけ行は氷そまさる千とりなくきよきはらの冬のよの月
降すさむ雪けの雲のたえまより氷かさぬるにはの月かけ
これやこの高根の松のひまならん雪のそこより出る月かけ
千 鳥

水 鳥

浦ちかき宿こそ冬は淋しけれね覺の千とり月に鳴なり
あり明の月の出しほの浦風にいりうみ遠く千とりなくなり
夜なゝの氷のとこや寒か覽おちはかたしく池のあしかも
霰

さゆる日にふるや霰のなこりまで氷て殘る庭の玉さゝ
このころは霰みたるゝ玉さゝの葉わけの風の音のみそする
あらし吹まさきのかつら散はてゝ外山もいまは霰ふるなり
みよし野はけふもみ雪やふる里のならの枯葉に霰ちるなり

ふしわひぬあれたる宿のいたまあらみもるや霰の床のた枕
涙たに置ところなき我袖も玉こきちらし降あられかな

月前霰

月かけは曇りもはてぬうす雲のたえまかちにも降あられ哉
冬歌中に

冬の夜は松なき宿に住人や嵐もきかて夢むすふらん
ちりはてし梢はかよふ音もせずまつばかりにや嵐ふくらん
暮行は嵐のをともはけしくてまた雪けなる雲のいろかな
人とはぬ窓の吳竹うちなひき雪けの風の音のみそする

初雪

さよなかに寢覺さりせは初雪の降にけりとも翌そしらまし
朝雪

明るまであり明の月はさえつるをいつ曇りけんけきの白雪
むは玉のよはの小衣さえ／＼てうらめつらしきけきの初雪

夜雪

雲ふかき闇はあやなし白雪の光は月にをとりやはする
山雪

横の戸ををし明かたになかむれは山のはしるく雪は降つゝ
雲はれぬ都もけふは時雨して雪になりゆくしかの山こえ
この山やいかに見ゆらん都たに木すゑは花とまかふ白雪
此里はあられ亂れてあしひきのとを山白く降れる初雪

山路雪

あと絶る山路はよそにあらはれてつゝら折にも降れる白雪

野雪

暮行は野風をさむみ雪ちりておもはぬ草のやとりをそかる
我あとををくるゝ人やとめくらん今ふみそむる野ちの白雪

雪中船

見渡せはうちのは舟うつもれて雪こきくたすまきの嶋人

雪中旅

落つる蔦の朽葉はうつもれて雪わけわぶる宇津の山こえ

山家雪

降や雪山路たゆともうらみしな人めは宿のならひなければ
ふる雪にとふ人もなし山里は柴こる道のあとはかりして

閑居雪

さしこむる葎の枯葉うつもれて雪にとちぬる宿の門かな

雪歌中に

小夜衣そてさえ／＼てあまのとのをし明かたに降れる白雪
きのふかも高根はかりにみし雪のはや麓までけきを降ぬる
あり明の月は雲まにみえなから袖にみたるゝよはのしら雪
宵のまにさえつる月は曇れとも同じ光にふれる白雪
明るまでさやかにみえし月影のいつくもりてか雪の降けん
ふる雪は秋みし色にかはれともはきのふるえの花さきに鳧
我やとのまつはかひなくふる雪にをちかた人の誰をとふ覽
暮行ははらひもあへし雪積る山のしたしはけさやからまし
をの山の雪ふみわけてたち歸る都はけふもしくれなりけり
大はらや山のはしるく降そめて宮古もけきは雪解なりけり
はしたかのすゝの篠原降すきみ積りもあへぬみかりはの雪
降雪にをちかた人の道はあれと我あとはかりなとか絶ぬる
賀茂の臨時祭の舞人つとめて侍りしに雪のふりて侍
しを思ひ出て

忘れすよそのかみ山のやまあるの袖に亂れしあけほのゝ雪
人のもとに申つかはし侍し

降そむるほとこそ人も待れつれ思ひたえぬる雪の下みち

雪のふる目とはすと申人の返事に

思ひやる心は人もしら雪にあとつけてこそとふへかりけれ

夢中によみ侍し

雪降れば庭も木すゑも白妙の花と月とをひとつにそみる

神樂

神かきのまつの嵐にかよふなりあつまの琴のよりあひの聲

山人の庭火にこれるみをたきにさとり櫛のかをそ留こし

禁中神樂

とのもりのにはひの影もほの／＼とあくる雲井の朝倉の聲

たきすさむ雲井の庭火かけるひてほのかにかへす朝倉の聲

遠炭竈

まきのたつ炭やく峯や遠からむ日暮て歸る小野の里人

歳中梅花を

冬ながら春たつ年の色見えて雪まに匂ふ梅のはつ花

年くれて春の隣もあしかきのまちかき宿に咲る梅かえ

年暮如水

氷たに結もとめぬたき河のはやくなかれてくるゝ年かな

基盛朝臣の許にて歳暮

あはれなりみそちあまりの年暮てよそに思ひし花そ近つく

戀

初戀

きのふまでかゝる心はしらさりき眺めからなるけふの空哉

覺東なこひてふ事もしらぬ身にたゝならはしの袖ぬらす覽

さやかにのみさりし月の俤に曇りそめぬる我なみたかな

我戀はまた谷出ぬうくひすのはつ音なりともしる人もなし

花薄ほのみしのへのゆふ霧にしほたれそむる袖としらすや

花すゝきほに出そむる袖とてやかこち顔にも露のをくらん

山あひのはつしほ衣いつのまに心にふかく思ひそめけん

たちそむる袖のしら露つもりては涙のかはの名にや流れん

あふとみし夢の契を頼みにてそのねさめより思そめてき

開戀

萩はらやはつ秋風の一こゑを聞そむるより袖を露けき

白河の關のあなたにありときくつほの碑いかてふみゝん

見戀

春の夜の霞へたてゝゆく月のほのかにみてし影そ戀しき

忍戀

したにのみ忍ふもちすり忍ふれと思ひ亂るゝ色やみゆらん

何ゆへにしたの亂となりけん心のをくのしのふもちすり

露とたに袖にはみせすよな／＼の人なきとこにあまる涙を

つゝみかね露もる袖のしたもみち色に出ともうきな散すな

我戀はみ山つゝきの道なれや人しれすのみふまよふらむ

我袖の涙なるらしみなせ河うへはつれなきしたのかよひち

我戀はしのふの浦のおきつ波をとになたてそ人のきかくに

忍通書戀

またきより浮名やもれんふく風にかきやる袖の露の玉つさ

忍契戀

すゑの松ゆく末契る波よりも音にたつなとまつやかけまし

顯戀

獨りねのよな／＼ゆるす涙より聽て浮名のよそにもりぬる

待戀

我やとは軒のしのふに露ちりてくるゝ夜ことにまつ風の聲
人はいさこぬ夜あまたの僞をまたしとまてはえこそ思はね
恨みすよ空たのめなる夕暮もいはてこしよを慰さめにして
人のふけてこと申侍か心もとなくて

君かこん時こそあらめまつ事の我ゆくよさへかはらさる覽
不遇戀

あふ坂にあらぬなこりの關もりを我戀ちにば誰かすへけん
逢事はかた野にたてる檜芝のいつならひてかみねは戀しき
鴈金とゆき違ふなるつはくらめ逢頼みなき音をのみそなく
夜もすから月に尋しとも船のあはてこかるゝえに社有けれ
あふ事はまとろむ夜はのあらは社夢はかりなる契をもみめ
はかなくも夢に慰むうつゝかなあふとみつるを思出にして
年をへはいとふにまけぬ戀しきの心くらへも誰かよはらむ
いつまてかあらはあふ夜を頼けん戀しなぬ身と歎くころ哉
人のもとへ申つかはし侍し

なからへぬ契とならば別れ路にあはてさきたつ命ともかな
或人の夢に政村朝臣此題にて人々をすゝめて歌よま
せて心經を書供養せよと見侍とて時村すゝめ侍しに
不遇戀

逢ことにかへぬ命のさきたゝはよしのちのよを今は頼まん
遇戀

戀しなぬ身の怠のつらさこそあふよはかへて嬉しかりけれ
恨みこしうさもつらさも忘れられて逢夜は物もいはれさり鬼
別戀

別れ路の人のかたみも我身よりあまる思ひの涙なりけり
まちしまのふけしつらさも忍ひきてたへぬ命は別れなり鬼

別路をすゝむるとりのをのれさへなと曉はねをつくすらん
歸るさをなを夜深しといひなせは僞しらぬとりのねもうし

後朝戀

けさはしも誰に別てかへるらん我身はなれぬ君かおもかけ
思ひ置こゝろは露も身にそはて我にもあらす歸るけさかな
別路にともなふ月はあけはてゝおもかけ残る袖の朝露
いにしへも我かまたしらぬ別ちにむすはゝれたる袖の朝霜
逢と見るまたねの夢の覺ることふたゝひつらき別なりけれ

遇不遇戀

たか中の心つくしにふきかへてよそになりゆく松風のこゑ
逢坂のゆきゝに馴しとりの音をいく夜むなしき床に聞らん
夜を重ね詠めそあかす戀しくは月見にとしも契らさりしに
在し夜をさなから夢になしはてゝ闇のうつゝに猶迷へとや
待よひの目頃にもにすふけし社心かはりのはしめなりけれ
逢事はうつゝともなき一夜にて二たひ夢をなとみさるらん
あふ事は夢より外の道そなきいかにみし夜かうつゝ也けん
すゑの松たか契よりかけ初てつれなき波を袖にこすらん
人はいさ波やこすらん我はかり契し末のまつとせしまを

寄月戀

いつとても月の夜ころはねられぬをあやしくもろき我涙哉
秋のよの月よいかなる影なれはなからに人の戀しき
人しれぬしのふの山のした露もあらはれぬへき月の影かな
曇れたゝあなあやにくや人しれぬ我通路の秋の夜の月
眺めつる月をそかこつやとらすはなに故袖の露もしられん
今よりは心してみむ人めもる袖の涙に月やとりけり
たのめても人そつれなき我袖の涙に月のよかれやはする

なかむれは我心のみあくかれて人をさそはぬやとの月影
人はいさこよひの月をなかくても思ひや出る我そ忘れぬ
あふ事はぬるまをたのむ夢ちさへ猶たえぬへき月のころ哉
あめにたに頼めぬ夜はもこし人のつらさをみする月の影哉

寄星戀

七夕の雲の衣のまとなる契りくらへに我やなりなむ

寄雲戀

戀しなむ身をおしまし白雲の消てあとなき浮名なりせは
思ひきやたかまの雲のよそなから聴て隔てゝ遠さかれとは

寄風戀

我袖のなみたならねと大方も秋風ふけは露そ亂るゝ
うきものと思ひそめてき頼めつゝこぬ夕暮の松風のこゑ
つれもなき人の心の風ならは松にはたえすをとつれなまし

寄雨戀

くれなるは空にまかはぬ涙かな秋の時雨に袖はかせとも
我袖よなとて涙に染るらん嶺の尾山も時雨もらすや

寄煙戀

いつとなく思ひにむせふ煙哉室のやしまや我身なるらん

寄霞戀

つれもなき人の心や春霞まちかき里もへたてゆくらん

寄霧戀

かきくらす心のほかもばれかたく空さへ秋は霧こめてけり

寄稻妻戀

宵のまの空にほのめく稻妻の影はかりたにみてやゝみなん

寄霜戀

みせはやなまつ夜の月の影たけて霜置まよふ曉の袖

寄霞戀

みせはやな霞みたれて寒き夜にひとりかたしく袖の水を

寄春戀

春のよのみはてぬ夢の名残しもなと覺かたくけさまよふ覽

寄夏戀

みしふつきおきたつたこにくらへみよ我戀路社袖は朽ぬれ

寄秋戀

我そてを人なとかめそ野も山も秋はならひの露に亂るゝ
しのふ山なにはかくれぬ露ならは染る下葉の色やみゆらん
我涙もみちを染る露たにもいつかはをのか色にいてける

寄冬戀

神な月空のはれまも我袖はたえぬ時雨にぬれぬ目もなし

寄朝戀

立ちぬみちのあさちの朝露は袖よりつたふ涙なりけり

寄山戀

契り置しすゑの松山いかならんまつ我袖に浪はこえける
人心つらさは雪とつもれはや身はふしのねのもえわたる覽

寄岡戀

けふまては忍ひの岡のしの薄いつほに出て人をこひまし

寄原戀

戀しなぬ命そつらきなからへていきの松原まつかひもなし

寄河戀

みなせ河した行水もあるものを袖にうきぬる我涙かな

寄江戀

我袖もいろにないてそなには江の波のした草ぬれはぬる共

寄海戀

伊勢の海に汐波蜚のあとも猶ぬるゝはかりそ色はなかりき
いせの海士の汐たれ衣いつよりか波のよるゝ袖濡しけん
寄濱戀

つれなさの限りもはても白波のはままつかえの年はへに鳧
寄浪戀

松山にあらぬ我身をこす浪も契るにたかふなみたなりけり
寄里戀

思ふ共かひなき世にや長らへむいはての里のいはてやみなは
寄橋戀

いははしの夜の契もあらはこそ明るはかりを恨み渡らめ
寄社戀

住吉の松になひかぬゆふ禊つれなかれとは神にかけきや
寄紅葉戀

よそにみししのふの山の下もみちよるの袂にたれうつし劔
寄藤戀

いつはりと思ひなからも立歸るまつにたのみをかくる藤浪
寄卯花戀

よひゝに待えし袖のおもかけを垣根に残す庭の卯花
寄瞿麥戀

夜をかさねはらはぬ露やつもらん君こぬ宿の瞿麥の花
寄葛戀

秋風の吹しくをのゝまくす原うらむるほかの言の葉もなし
寄雄戀

煙たつ焼野のきゝすつま戀に我身ももえてねをのみそなく
寄郭公戀

郭公ほのかなるねをきゝしより袖の涙の五月雨のころ

寄糸戀

あはてふる戀の亂れのかた糸は苦しとはかりいかて知せん
旅戀

ふる里のあれたる宿にいもをゝきて旅をし行はしつ心なし
かりねする草の枕の露けさも袖の涙にまさるなりけり
かりそめの一夜なれともさゝまくら結し露の契りわするな

戀歌中に

難波なるみつともいかゝ語らましようつゝ共なき夢の名残は
いかにせん露とこたふる我袖の涙もあらぬ色となりなは
待わひて恨みし夜はそのまゝにいく有明のつらさみす覽
をのかねにおき別にし朝よりゆふつけ鳥の鳴ぬよもなし
我ために思へはつらき命かな人のうきよをなからへて見る
年を経て思ひけりともしるはかりかはる涙の色を見せはや
人と戀歌の贈答し侍しに

とへかした涙しくるゝ神な月袖の紅葉の色はいかにと
返し

誰をかはわきてもとはむ神無月なへて時雨のそむる袂を
人のもとへつかはし侍し

戀しきの慰む事はなけれともかこつ方とてねをのみそなく
思ひいつやさこそ心はへたつとも契置にしむら雲の月

京なる人のもとへ申遣し侍し
戀しきのあまりになれは水莖にかき流すへき言の葉もなし

京へのほり侍し頃いまたあはぬ人のもとへ遣し侍し
あちきなやなとて心をくたくらん重ねぬ袖のよその別れに

ものへまからむとて人のもとへ申つかはし侍し
めにちかき人のつらさをいとひても雲ち隔てむ程の悲しさ

人のしのふわすれ草をみせ侍しかは

わすれ草うき名に人の枯ゆかはひとり信夫の露やはらはん

夏戀

もの思へはあくかれいつる玉河のうき瀬に燃てとふ螢かな
なには江や芹のしけみに飛螢さても思ひはかくれさりけり

絶戀

逢とみし夢路はかりのすさひたに絶てうつゝの慰めもなし
なをさりに今宵はかりの契かといひしは人のまことなり鬼

忍絶戀

あふ事は軒のしのふをかことにてやかて忘るゝ草そ茂れる

長景すゝめ侍し歌の中に恨絶戀

つらしとて人をも身をも恨みしは猶も名残のあるよなり鬼

思

せみはも元螢はなかつ我のみやひとつにかねて年のへぬ覽

片思

いつのよの我つれなさのむくひとて厭ふ人しも戀しかる覽
なひかしなしはやく浦の片おもひ我のみむせふむなし煙は

恨

秋風のふきしく野への葛かつら恨るほとのことのばもなし
おほろけの恨とやおもふ秋風のふきと吹にし小野のくす原
わきもこやまくすか原にいりにけん恨る外の言の葉もなし
なにゆへに人のつらさも増るそと

たちかへり思へは人もつらからす我身ひとつの浮世なり鬼
身のうさを思ひしらすはなけれどもつらきは人の心なり鬼

雜

月影の宵曉はかれともまた弓はりにはちかへりぬる
我ことや人も月夜をたのむらん暮て行來のあふ坂の山

雲

かさし折袖かとそみる三輪の山ひはらの上にかゝるしら雲
羈中雲

行末になかめし峰のしら雲はこゆる山ちのあとうつむなり
歸り見る都のさかひいつくともしらぬ山路のあとのしら雲

松

うへ置し人はいくよにふりぬらん小高き松に苔おひにけり
千とせまでかけはならへて徒に世にふるともと松をみる哉

蓬

露はらふ人こそなければふる里の庭のよもきふ風にまかせて

鶴

なにはかた浦こきくれば有明の月の出しほにたつそ鳴なる
雲井にも聲は聞えて芦たつのよにたつ空もなくそふる

浦鶴

わかぬ浦にはねを並へしとも鶴の我あと計りなとかたゆ覽

鷄

にはつ鳥かけの垂尾の打はへて浮よはいつもねそ鳴れける
明やらぬ寢覺のまたねさめかへりいくたひとりの聲を待覽
名所の歌あまたよみ侍し中に嵐山

うき人の心の秋のあらし山となせのたきは袖におちつゝ
たきゝこるゆふへはきたの嵐山かへき淋しき谷のかよひち
かめ山

萬代のありかすにせん龜山の松のいはねの瀧のしら玉

をくら山

淋しともいつかはきかむ小倉山むかし馴にし峯のまつ風

たかをの山

たかを山たえすしくるゝころなれや都のいぬる雲を晴せぬ

松のお山

萬代ときみかみかけを祈かなまつのお山の神にまかせて

宇治山

我庵はあつまの奥に有なから世をうち山といはぬ目もなし

とり邊山

いける世に絶ぬ思ひのはてやさはとりへの山の烟なるらん

かさとり山

笠とりの山にいるともわひ人は身をしる雨に袖やぬれなん

かすか山

今ははや神たにしらしかすか山よにあらはれぬ谷の埋木

みかさ山

ふり出る我身時雨のみかさ山いつまでおなし影にかくれん

かつらき山

かつらきの麓にかゝるしら雲はいつれの山のたかねなる覽
しられしなかつらき山にゐる雲のはれぬ思ひの心たかさも

三輪山

いはと明しそのいにしへの笛竹のいく代になりぬ峯の神杉

天香具山

やをよるつ神のうたひしもる聲にいはとを明る天のかく山

吉野山

みよし野の山のあなたを尋ともうきよの外の宿やなからむ

すゝか山

思ひ出る昔はいまにならねともまたけふこゆる鈴鹿山かな

さやの中山

東路のさやの中山なかたえし宮古をいてやまた歸りみむ

宇津山

故郷の夢にもみえようつの山うつゝにまよふつたの下みち

宇津の山うつゝも夢となりに鳧いにしへわけしつたの下道

うつつの山またこの秋やわけわひんこそふみなれし薦の下道

さらしなの山

身のうさそなくさめかたき更科の山より出る月は見ねとも

ちとせ山

行末はかきりもしらぬ君か代を誰か千とせの山といひけむ

かみなひのもり

誰にかは紅葉のぬさをたむくらん冬たつ月のかみなひの森

山なしの里

いつくにか身をはかくさむ事繁き浮世へたつる山なしの里

不破關

駒とめてふはの關もりことゝはむ越路にかゝる道は何れそ

宇治橋

徒に年ふりまさる我身をやあはれとはみる宇治の橋もり

すみの江

すみのえの松ならねとも徒に神さふるまで身そふりにける

鹽竈浦

なのみして焼とはきかぬ鹽かまのうらの烟や霞なるらむ

若浦

古のしちのまろねにあらねともゝよかすかくわかの浦人

わかぬ浦は沈みし袖をほしわふる人にこされし浪の騒きに

野

武藏野や露もるいほのさゝまぐら夢も結はてあけぬ此よは
むさし野けこと山みえぬ雨雲にふしのねはかり残るしら雪
夢の中はなをふる里の空ならさむれはあらぬのへの月影
忘れつよおはなかり吹野へのいほの露は枕になれし月影
橋

うらやましなからの橋の跡迄も朽果ぬ名のたゆるよそなき
山河のいはとかしはのつたひはしふみも定めぬよを渡る哉
海路

これやこのいなな港になりぬらん浪路にかよふ峯の松風
便りなき沖にてにけり山のはも目にみぬ風のしるへ計りに

眺望

和田のはらなきたる朝に見渡せば雲井のみ社限りなりけれ
春ならぬなかも末のかすむこそ遠き雲路の限りなりけれ
あつまに侍しころ思都といふ題にて

東路にいかにすみてかすみた河こと問ふ鳥の名をは忘れん
すみた河我おもふかたの都とり戀しきたひにことや問まし
都おもふ夢のかよひちさめかへりうつゝにみるも古里の月
京へのほらむとてかと出の所にて

このほとは故里なからやとかへて旅に先たつ旅ねをそする
竹下といふ宿にとまりて

旅衣なれにし里をへたてきてふたよになりぬ竹の下ふし
青墓にて故相公の歌を思ひいてゝ

いつくとそたつねし苔の青墓に今も置そふ袖の露哉
あしやにすみ侍しころ京より人まうてきて歸侍しに

尋來るふる里人の歸るさは我心さへとまらさりけり
あつまへ下るとて京出侍しに雨そほふり侍しかは

わか袖に雨も涙も降そひぬ都わかるゝよこ雲のそら
鏡山にて

こしかたの面影みせよ鏡山けふよりのちの忘れかたみに
なるみのしほみちて山路にかゝらむとて

しほみたはよそに鳴海のうらわかれ白雲かゝる山路にそ行
同旅宿にて

おもひねの都の夢ちみはてゝ覺れは歸る草枕かな
しほひ坂より船にのりて濱名橋のやとにつき侍とて

みなとより入海とをくさすしほに棹をまかせて登る海人舟
同旅の道にて

あはれけふ都にかへる人もかな覺東なきのことつてもせん
菊河にて

露ながら濡てほすなり旅衣さやの山路のきく河の水
宇津山にて

都には青葉をそめし宇津の山つたもかへても紅葉しにけり
六連にて

立まよふなみかあらぬかわたの原ちさとの沖にみゆる白雲
旅歌中に

都をはかつへたてつゝ逢坂の杉の梢にかゝるしら雲
いる月に都をこひてなかわれはおなし空をも山そへたつる

草枕むすはぬほとは旅寝にてまろむ夢は都なりけり
とりの音を旅の夢ちのかきりにて結びもはてぬ草枕かな

浪かくる蟹のたまやに一夜ねてもしほもたれぬ袖濡しつる
あつまに侍しころ京より人のいのちのうちにいかて

いま一たひたいめんし侍るへきと申送りたりし返事
に

あふことを今一たびと思ふにもうしろめたきは命なりけり

さとの國へなかにされて侍人のもとへ申遣し侍し

すみなるゝ故里なからみるたにも淋しき月に思ひこそやれ

はるかなる波路ともなしあさ夕に思ふ心はゆきかへりつゝ

人しれすれても覺ても思ひやる俤ならていつかあひみん

定有春ぬなかへ下り侍しに

鴈かねの春のつらさにいつなれて花のころしも別れ行らん

人の餞別に

歸りこむたのみはかりに慰みて思はぬかたの道いそくなり

山家風

すみなれは淋しからしと思しにきゝしまゝなる峯のまつ風

眞木柱

すみなるゝこの山里のまきはしら跡たに残れ我のちのよに

夕樵夫

たきゝこる峯のあなたや時雨けん夕日にぬれてかへる山人

閑居煙

淋しきに柴おりくふる夕煙里のしるへとみやはとかめぬ

田家

世の中はいほさすをたになく鹿の驚きながら立もはなれす

秋はつる山田の庵のひたふるによに捨られてひく人もなし

故郷

故里は松の風のみをとつれて月よりほかにすむかけもなし

和歌會百日満侍てまた百日はしめ侍んとて

わかぬ浦もゝ夜の數を書のへてもくつの外の玉を尋ん

和歌の浦や今年よとせの秋をへて百たひ拾ふかひもあら南

これは百日歌よみ侍ことのつもりたることをよめる。

河内入道覺因の許へ揚名事とひ侍とて

君ならて誰に問む夕かほの花のあるしはしる人もなし

返事

夕貞のはなのあるしも白露の置忘にし袖そぬれそふ

人の琴をかりてみとせといふに返とて

今はとてみとせてならす琴の音にひき別るゝも悲しかり鬼

述懷

花の咲春にやあふとまぢしまに身はとしふかき谷の埋れ木

年ことに老の數をは身にとめてよそにわかるゝ春の色かな

衰るふる我身ひとつにあらぬよにおなし影なる月をみ哉

つれもなく浮世にめくるたとひとて有明の月を眺めつる哉

山のはにいるみちしらぬ有明は浮世にめくる我ともにせん

我をななともとやみらむ高砂の尾上に朽し松のむもれ木

數ならて老ぬる友は高砂の松ともいはし谷のむもれき

つれなくて世にふる友と高砂の松も我をはあはれとやみん

すま人のきのふの山にのこす木のたゝ徒に年やふりなん

一目みし雲井をこひてあしたつの歸る里へにねをのみそ鳴

みひとつの憂にあさりし芹たつのこを思ふねを重ねてそ鳴

波こゆる沖つ小島の岩かねにすむなる鳥の名にそしほるゝ

難波えやあまのすて舟いたつらに引人なくて身を沈みぬる

いかにせんわかみよとめるふる河のすゑは絶ぬと歎く頃哉

我よにや跡は絶なん雲井まてにはのをしへの道はありしを

雲の上に我身はさをくへたて來ぬ近きまもりのなを頼め其

なからへは君か恵もまつへきを定めなき世にみはふりに鬼

すみわふる身はすみのえに沈むとも言のは残せ岸の松か枝

もろこしの文みるあととは變れとも雪をあつむる大和言のは

うき身には又渡らしと水莖のあとをいつくのはしに残さん
ますかゝみうつれる影や人なから人かすならぬ我身なる覺
あはれ我身は數ならていたつらにうきこと多く積りゆく覺
おいらくよ名さへ浮世に沈む身をなを人數に尋てやこん
あめの下よにふる人は多けれと我身ひとつの袖をかはかぬ
嬉しきをつゝみもなれぬ我袖に絶すかゝるは涙なりけり
くり返し思ふもかなしをとろふる身は山賤の賤のをたまき
あらましを思ひつゝけて身のうきを忘るゝ外の慰めもなし
思へ共身のうき事は數々にさのみはえこそいはれさりけれ
なに事にとまる心のあるよかと我つれなきを誰に問まし
世の中をまつともしはし住なれむ都にとまる心残さて
いとはれぬうき世と誰か歎かましいつもね覺の心なりせは
なからふる人のためしをひきかけてしらぬ命のあすを待哉
いとはれぬ世をやそむかん昔より思ふ事のみたかふ身なれは
うき事の限りを見るも嬉しきは世を厭ふへき道せしらるゝ
すみわひていまはとおもふ山ちまて同じ心にいる人もかな
年たけはいらむといひし山ちの老をもまたす急かるゝ哉
うきは世の習ひといひし慰めも餘りふるればかひなかり鬼
春日山神の恵みの春もなをよはぬ谷の苔のむもれ木
春日野や神もさこそは忘水世にすむ數にあらぬ身なれば
いのりこし神に我身を任せてもかひなく沈むえに社有けれ
神かきに祈る我世もかひなくはそをたに厭ふ道をしらせよ
よゝふりてその名をかけし柏木のほもりの神も今も變るな
世々へぬる契りくちすは柏木の葉もりの神も我を忘るな
中將を申侍しかともかなはすしてなけき侍しころ寄
月述懷といふことをよみ侍し中に

思ひ出のありやなしやを人とはゝ月見る外はいかゝ答へん
よそにのみみかさの山の峯の月うらやましくもさし登る哉
わかぬ浦やいへの風なき海人も思ひはるけて月は見るよを
思ふ事あるとはなしにあちきなくよを重ねてもみつる月哉
我のみや沈みはつへきみなそこに宿れる月も空にこそすめ
すみわたる我身よいかにみな人のおしむ月たに山にいる也
をくらさていらぬ山へに誘へ月世にすむかひの有身共なし
有明の月ならなくに山のはに思ひもいらてよにやめくらん
おなしころ秋の除日ちかくなりてきやうの事うれへ
申人のまうてきて歌よみ侍しついでに
この秋は我名もらすな三笠山さのみ時雨に袖やぬるへき
おなしころをよみ侍し
三笠山なとこえかたくなりぬ覽よゝのふる道跡はあるみに
轉任の事上首多とて沈論し侍頃河といふ題にて
いかにせむ我身せかるゝ古河のよとめは末の絶ぬへき身を
最上川のほととはなきいな船の下り果ぬる身をいかにせん
山川に沈みはてぬる埋れ木の浮名はかりやよにはなかさ
雅顯少將所望のころ長景もとの探題に述懷
こえかねて我身年へし三笠山こそ思ふ道に又かへりぬる
老人述懷といふ題をさくりて
ふしの根の雪にこかるゝ煙こそ年ふる人の思ひなりけり
所ともめされ侍しころ人の物へまかり侍しに
よるへなき身は浮草となり出てさそはぬ水をなをしたふ哉
歎事侍しころ
行末は斯るへしともしらて社さりともとのみ頼みきつらめ
賀茂社に述懷卅首をよみて奉し中に

あはれとも神はきかずや郭公うきみやまへのこかくれの聲
なにことにとまる心と身にとへは只いひやらすぬるゝ袖哉
世中はかくこそありけれとはにのうき慰めに年をふる哉
いまそ我ともとしりぬる徒に年へてたてる高砂のまつ
身のうさはさてもかくてや山鳥のをれ恨みてねをは鳴へき

懷舊

思ひ出のありしはさそな古はうかりしさへになとか戀しき
思ひいてのありきあらすはしらね共昔と聞はまつそ戀しき
戀しきのさむるとそなき夢とのみなりし昔やうつゝなる覽

寄夢懷舊

思ひねの心からなる夢にたによな／＼こそ昔やはみる
夢

いかばかり夢路は近き都とてうたゝねのまに行かへるらん
ぬるうちもうつゝの外のをやみる何を何とて夢とわく覽
うしとても此世の夢はみもはてゝ長き眠をいかてさまさん
或人の夢に政村朝臣此題にて人々をすゝめて歌よま
せて心經を書供養せよとみ侍とて時村すゝめ侍しに

難叶思

行末をかねてよりみる夢もかな頼みなき世も思ひきためむ
右題をあまたよみ侍し中に

夢ならていかてふたゝひたらちねの昔なからの面影をみん
思ひ出のおもかけならてたらちねに今一度のおふ事もかな
無常歌中に

思ひとけはきえん程なき命かな氷のうへの春のあは雪
世中は日影におりてをく花のしはしもいかてあらんとす覽
久かたの天つ雲井にとふ鳥の跡はかもなき世にこそ有けれ

なからふるよそのならひに怠りて頼命のあすもはかなし
昨日見し人はけふなきよの中にあす迄我身あらんとやする

先人日記をみ侍て

夢ならて見ぬ世の事をみつる哉むかし書を書く筆のすきみに
同時に亡父無文燵草鞆ゆりすして身まかりし事を思
侍て

あやめなき煙の色を身にそへて絶にしあとの思ひはるけん

同月忌の日

郭公けふはまつかなしての山こえにし人のゆくへかたれと
たらちねの跡問ふけふをかたみにて行衛もしらぬ昔戀つゝ
世中さはかしく侍しころ

うらめしき春にもあるかな櫻花心のほかにまつ人もなし
人々おほくうせ侍しころ

此春はねなくにみつる夢よりも花のちる社のとけかりけれ
限りなきこの夢みても世のうさを猶驚かぬ身とやなりなん

諒闇のよし聞侍て

春の日の霞のたにゝいりしより心のやみに花をたにみす
世のうさを何につけてか慰めん花をみるへき春にあらねは
暮し日のそのゆふへより墨染の霞の衣空もきてけり

入道中書王うせ給よしきゝ侍て

つかへつゝなれし昔のまゝならは今夜やよをは背き果まし
めのまへにみまし浮世をひきかへて雲井の空の哀とそきく

人のもとへ申遣し侍し

いかばかり君も歎かんめの前にありしなからの浮よ也せは
雅顯少將あつまへ下り侍し時石帯を宗成朝臣にかり
て侍しをなくなりてのちかへしつかはすとて

めぐりあふ契りたえぬる石の帶の返すにつけてぬる、袖哉
世にふれはうきのみ積るしら雪のしらぬ山路に跡や絶なん
返 し 宗 成

かけてたに形見なれとは思ひきやこはうき帯のかこと計りも
うしとのみ思ひ消なてみし人のあとをを殘す庭のしら雪
釋教歌中に無常偈を

身をなくる人こそなければ古のなかはのりは今もきけとも
照見五蘊皆空度一切苦厄の心を

ぬるか内にこゆるは雪としりぬれと憂もつらきもなきよ也鬼
信解品のこゝろを

いそちあまりもとの栖をあくかれてからぬ境に迷ひこし哉
神 祇

いはしみつ濁なき世と祈りをく心のそこをあはれとやみぬ
賀茂のみたらしにてあそひてまたのちにまかりて侍
しに

ありしよの月をこひつゝ尋きて又みたらしのあり 明の空

蹴鞠の道は賀茂成平か流なる事を思ひて
たえ行は神もあはれとみたらしやしめの外なる流ならねは

神祇歌中に
住よしのうらさひてみしいにしへの有明の月を神も忘るな

小浪のしかのから崎いく千代か神のみゆきにあひおひの松
新熊野六月會に參詣して

けぶよりは思ひ隔つなみくまの、浦よりをちに我はすむ共
毎朝彈神琴て諸社に法樂し侍とて

朝毎に神に手向て彈琴の庭火のかけやよをてらすらん
あつまにて中將になりてやかて都に登て拜賀申つい

てに殿上ゆるされ侍しかは
あつまより三笠の山をまつこえて雲の上なる月をみる哉
祝

よろつ世も都をかけて東路のせきのふちかは絶すつかへん
世を照らす君かみかけはあまの原行末遠き月日なりけり
千代ふへき君か常盤の影みえて池の汀にたてる松かえ
あら磯のいはうつ浪にちる玉のしられぬ數はきみか萬代
わたつ海のおきつ白波昔よりよせくる數を君か代にせん
すみよしのまつ常盤に祈りても久しくなりぬ君か萬代
住の江の松にとは、や君か代に今いく度かおいかはるへき

右隣女和歌集以猪苗代謙誼之本校合

群書類從卷第二百四十四

和歌部九十九家集十七

祭主輔親卿集

夫ひとの才學をみかき文章ををれる家の集となつて世につたへたり。是をみしれる人はすくなくして。しらざるは多かり。かるかゆへに褒貶の輩は其數いくはくにあらず。和歌の心しれるものは知りてそしる。しらざるはしらすして又そしる。たとへは和らかなる人のこはきそねみにあへるかことし。然れとも。すさのをのみことの出雲のみにわかれ。婆羅門僧正の難波津にむかひしより。三十一字は詠ことにはしまれり。其後さま／＼の體これくはしからず。但妖艶のなかたち。花鳥のつかひ。契接の曉。産生の夜。或離別餞送のをしみ。或哀泣戀慕のなくさめ。山川野望の所。煙霞の夕を見て友をたつね。興にのりて酔によるついでに。いひあつめたること葉なれは。はか／＼しくもおもほえず。此外屏風草子の歌。うたあはせ。艸あはせ。かたわきのいとみほとすきぬれは。心はせ顯れてことのはふかくすへし。是によてかきもと／＼めさるに。兩三の兒女。祖師のふにうけて。家々の舊草をひろふ。今あひつくこゝろにもよほされて。はつらくはあれたること葉をもて。なましひにあさやかなる紙をけ

かさん事を。ゆめ／＼人のねたる。これをいやしき身からいたして。かたくな／＼るおやのために。いよ／＼あさけりをのこすことなかれ。其こと葉にいはいく。

花のしへ

〔後拾遺〕

紅葉の下葉かきつめて木の本よりそちらむとす覽

おやの家さうしすみにて人々うたふむにはつ春のこゝろ

こその冬今年の春のしるしには山の霞そ立へたてける

梅花

ふるとしに咲初めにし梅か／＼も春になりてそ匂ひましける

鶯をきく

萬代のはるにあひくる鶯のこゑわかやけるけふにも有かな
秀才すけたゝあたらしき家すみするに學生いはひの
うた琴をもてあそふ

千年へて變らさるへき家ゐには□きくの琴そ里にあたれる
きさらきのはつむまにいなりへまうつるみちに田つ
くるをみて

玉鉾のみちほとりなるあら田をは踏すき難き物にそ有ける

三月人々花みて歸るに

ゆきめくりみれともあかす山櫻我のみならは歸らましやは

おなし月山吹もてあそふ所にて

たち歸る春のかたみと思へはやひとへにおしむ八重の山吹

おなし頃藏人所の人々一種物してまいれといへるに

菓子十種を山ふきにませてそへたり

井手ちかき宿にすめは山吹のはなの色より外の物なし

ある人におもふ所ありて

あふ事をいつともしらす歎きつゝぬる夜の數そ年積りぬる

ある人にあふきやるとて藤の花にさして

藤なみの心かけたるいろみなむそふる扇の風のしのひに

う月はかりに寺のくりして卯花をおりてひとにみす

とて

卯花のうら珍らしくみえつれと折ての後は常の色にて

おなしころ兵庫のかみとも時の朝臣のありまの湯か

らかへりておやのもとにきて酒のむついてにいふ

日郭公をみちにてきゝてかくよみたりしといふ

とくゆきて人にかたらん足曳の山郭公初音きゝつと

といへは

きゝすてゝ君か來にける郭公こゑよいつれの山路なりけむ

内に人のかたらふかかくてやかてやみなんとやとい

へるに

九重の雲非なりとも逢ことのたえてやむへき中の契か

あひみすてなかむる空の雲間なく思ひ晴せぬ五月雨の月

ある僧のみなつきのゑかゝせたるうちには天のはし

たてのかたかきてたひゝとおりゐてあま人にものい

ひたる所に

はし立の松の線はいくそしほそむとかかたるよきのあま

人 又ひとえたに吹上のはまにしほやくところ

波風のたえず吹上の濱なれはうらなき君そもしほ焼ける

おなし月かはらの院に人々ありて泉の邊にすゝむ所

いは水の涼しき陰をみるけふは夏の暑も忘れにけり

又と山のなつの山寺をたいするに

みねつゝき老たる松の色のうちにこふかくみゆる夏の山寺

ふ月のなぬかの日に七夕まつりをする所にて

雲間より星合の空をみわたせはしつ心なき天の川なみ

おなしころ世のはかなき事をいひて人々うたよむに

人の世は何かはためしあさかほの露けき人を命とおもへは

はつ秋うたあはせする所からよみてとあるに左かた

もてならず扇にそへる涼しさはあまたの秋のしるし成けり

右かた

あまたとしてならしける扇には多くの秋の風そこもれる

八月はかりに人にふみやるとて薄のほにつけて

〔後拾遺集〕き忍ひもあへぬ心にてけふはほにいつる秋としら南

あふみのくらふのさといふ所にて月あかき夜とゝ

まりて

よそにてはくらふのさとゝ聞しかと普ねく照す秋のよの月

しりたる人の承香殿のみこの齋宮にてくたり給ふ御

ともにある神宮の九月まつりにまうてゝわたりあひ

川といふ河わたるによるなれようちそひていふ

君にかくわたりあひ川なからへて思ふ心のあせすも有哉
返し女
渡りあひの河渡りにも其かみのうかりしせをは忘れやはする

といへは又いふ

けふまてにのときき淵としらすして淺き心をうらみける哉
おなし夜みもすそ川といふ所に齋宮とまりて御は
らへし給ふに女目をたちかくれつゝみつのかしはと
いふかしはおこせてこれは何とかいふといへるに
わきも子のみも裾川の岸におふる人をみつの柏とをしれ
又おなし夜神宮にまうてつきたるに鹿のなくをきゝ
て人々あはれかる

みやひたるころにも有哉鹿のねの深き山へにすきむ物から
神無月はかりに京へかへるに紅葉を見て
あふみなるなつみの里の家ゐには秋の紅葉そ今に残れる
人にはしめて交やるに

よそ聞に年しへぬれはうとからす心なれても頼まるゝ哉
しりたる人の伊與へくたるに

をちへゆく船のともゝあらましをこき離れぬる浪のよそ哉
冬すみよしにはしめてまうつるに

またしらぬ難波のうらの芦間わけ漕ゆく方や住吉の岸
まうてつきて舟よりおるゝ程に松をみて

これやこの神代久しく成ぬれるときはかはらぬ住吉の松
願はたす人のかくらするをみるに長き榊に松をとり
そへたるに

榊葉に千代の小松をとりそへてけふより祭る住吉のかみ
女房なとありて住吉のひめ君の事なといふに

たつねけむ昔のことのしらへとはふく松風を聞なされける
かへる程に

住の江のなみ立かへるほともなし何長居すとむかしいひ劍

天王寺にまうてゝ

難波江に心深くそ尋ねくる法をひろめし人のあとみに
かへさに遊女を見て

うふねさし波の上にてよを過す身は何ものとしらぬ成へし
人に物いひて後にやる

けふたにも慰めかたき心にはいかてすくしゝ昔成けん
五節のころ藏人所にて人々あまたるて殿上人のさか

り給ふころなめりわれらはとうねなむなといひてふ
しなみて心によむ

もゝしきの雲の隔の遠くしてとよの明をよそに社見れ
ほのしりたる人のかしつきに出てほめられて殿上人

むつましくありつときくに父のあした
かたしけるをみの衣のうらめてゝけさの日影はまはゆる覽

ある所のむすめもきたるころてまさぐりにさかりた
るこしをむすひてのち人かたらひたりときゝて

結ひてし玉ものこしをゆるしなく我ならすして誰かとき劍
御佛名の後朝装束つかまつりなをすつてにつくり

花をおりてまかへるきくに人にいひける
終夜をきあかしつる霜のきく折つる罪やきえせさるらむ

後のとしの正月にほり川中納言との人々によませ給
ふ十首歌はつ花

霞たちほのめく春と成にけりもゆる草木も煙まかひて
鶯をまつこゝろ

春は淺くする山道は深ければをそく鳴いつる鶯のこゑ
わかな

わかなつむ春日の野へに雪まわけ今かく人を家ゐせさらん

春雪

降そはる春の雪たにひまあらは山の緑もけふはみてまし
閑院大將殿をそこ方女かた歌あはせあるにあはぬこ
ひ

敷たへの床うちはらひ宵毎にあひみぬ人をよそへてそ見る
中たえたる人のもとよりつらき人のためには涙せき
あへすといへるに

今はとも思ひなたえそ野なかなる水の流は行て尋ねん
閑院女御さふらひに人々一敷物いたすに紅梅の枝に
鳥つけていたすとてうたよむに

くる人もなき宿にさく梅花とりのは風ををりみつるかな
二月子日に閑院大將との女房なとくして有明をか
て

緑なるまつひきかへる紫の野へに出てそ色めきぬへき

三月はかりに花みるに

〔後拾遺書上〕
何れをかわきてをらまし山櫻心うつらぬ枝しなけれは

麗景殿女御かたの女房ほそとのにいて居たるにやま
ふきの花をとりつたふるに歌あるへしとあれは

思ふこといはてつもれるくちなしの色ことならぬ山吹の花
おなし所の女房なしつほを局にしたるか枕とりにお
こせたるにかきつく二首

みにそへて年ふる床の枕たに忘れぬれは身をは思はす
また

わすらるゝ床の枕と成はてゝあまたよみけむもの語りせよ
かへし

しらはしれ何に枕を尋ぬらんあやなしひとよ夢なとはれそ

かためたりとあるにあふさかには世にあらしとて

尋ねすは君しらめやはうつゝにも夢にもこふる人の枕を
おなし所にふちの花を山吹にそへてこれはいかにと
あれは

ふた心ありける人のおる花はひとつ色にもさかすそ有ける
女房に蔭雑色保男かかたらひたえてまたあらためて
うちはしからしのひてかよふを見て

かつらきの絶とたえにしいは橋をしのひに渡る人は誰かも
ある男人のをなりたりつるにれいならすならめな
けしきになんぞこみえつるうたやらんとせむるに

君戀てあくかれ染し玉の緒をとまれとしてや手に結びつる
こ堀川とのゝ御さうしにをむなものの申て立たり瀧の
ほとりに男かくれてみる所に人々うたよむにおしつ
くる三月なり

行人は影やとると瀧つせの波もろともに立ぬこそみれ
人の家にすみはしむる比五葉のちいさきないつこの

松ならんとゝへはかまくらよりほりて後八年になり
ぬといへはそのこと葉をやかてつゝくるなり

植て後まつの千代までかそふれはけふは八年の春にそ有ける
家にありし人のほかよりきて紅梅のおもしろき事と
いふに

花さかぬ宿ならませは古の春をたのねて人のこましや
むつまじき人のひせんの守のめにてくたるに

わかれちに君を松浦の濱松の千代へても又あはさらめやは
おなし人にぬさやるすはまにかけり

さしばへてゆくに波路の浦々に浪立つへくもあらぬ洲濱に

あからさまにものへくたるよしは、いふこしにはも
せきこゆときけは遠き心地すといふに

〔後拾遺集〕

逢坂の關ちこゆとも都なる人に心のかよはきらめや

人にふみやる返事のなきにかくいひやる

〔後拾遺集〕

みつ潮の干間たになき浦なれや通ふ千鳥のあともみえぬは

しりたる人のれいすむ所にはあらてほかになんといふにたつねてやる

定めなき人のありかの聞ゆるは波にうきける蟹の小ふねか

田舎なるほと京より人のきてひとりすみはいかなる

そさいへは

都よりかれて知にき旅ねして人はなれたる住居せんとは

人に物いふに心いられしけれはふかうそといへれは

松にふみをさしてやる

久しきを何かはいはん岩代の松の結びはおひかはるとも

左むまのせうかねすみつかさえて後露艸うつしおこ

すとして手につみて身つから染し花なれは年はふれとも色も變らす

かへし

我宿のかきねの草に咲まじる花の色こそうすくみえけれ

おほやけ所なる人をあまたいふころ

うしろめた風のさきなるもかり舟何れの方にやらんとす覽

閑院大將殿なつのよの雨といふ題をよませたまふに

申ことある程にて

うるほひにぬるへき身としりぬれは降夏のよの雨も嬉しき

十月はかりにいもうとをけさうする人のことはなる

ましきなめりふみをたにかへしえてんといへるに

木枯の風のゆくてにまかせてし人の言のはとまらさりけり

冬のおはりにしりたるをんなのひきしう來ぬおとこ

にやらんとて歌せむれは女郎花のおりからしてさゝ

す

かれぬと思ひなりなん女郎花折々みえぬ人のとはぬを

あるをとこの人のもとにふみやりける返事にすゝき

のはにさしもくきといへることはいかゝといへは

誰故にもえん物かはさしも草もゆる思ひの身にしまれは

おほやけ所にかたらはんとおもふ人のつまとにて物

いはんとするか人さはかしとて入にしかはつとめて

岩とさし入にし月の影をたにみるへき暇のあらしとやる

五月十日よひつれゝなるに大將殿御もとより夏の

よ軒のあやめといふ題をたまへり

五月雨はをくらき月と思ひしを今よひの空はくもゝ隔てす

のきのあやめ

ひきわかれ目頃へぬれと菖蒲草のきはにみゆる色は替らす

女所の宮つかへする比そこにさふらふ女房なごのゐ

てたばふれことするにかく心かゝひなさゝるは人に

うたかはれてなといひて

我によりいもは思ひやみたるらむ宿に結びし紐もとけぬに

おなし所なるわらはをみる人のものいふついてにか

ひなゝるすいゝをとりたいはこひにをこせたるをき

きて

我にこそ心のほにはつくれ共誰にあひてかたまゝるらん

ある所におとなひたる人のわれみきためてこれとい

はんにものはいへと契れるかおとなしきに

我身より君をさきにと思へ共まど道にはしるへやはする
かつらなる人の家にせうえうしにかれこれいきてま
へなるくれはしにおりゐてみな人はひさしくみたる
こゝろはへによめははしめていきたる人にて

おもなれて水たにみなん年へたる橋をはしめてけふ渡る共
さるへきわさして又ひとこむといひしを桂へは
いかてやましのかみの月のわといふ所にこれかれ
いきてかつらをあらためてこゝにきたる心はへをよ

むに

【後道難四】
先の目に桂の宿をみしゆへはけふ月のわにくへき成けり

ある女の家にこうはいさきたるを梅つほの女御のた
いはん所よりおもしろからん枝まいらせよとあれば
かはりて

匂ひかは君にますへきあらねとも折てそみする宿の梅かえ
おなし所にて月のあかきよ梅の花おもしろく見ゆる
に

常よりも哀こそませ春のよの月の影さす梅のはな笠
といふにこゝにありし女今はほかにあるかこよひし
もきて

住なれし昔にたる春の夜の月と花とをみるそらもなし
おなし頃月のあかきに人のもとにいきてかをとたゝ
くに車にのりなからひはをひくをきゝなからつゐに
あけねはつとめて

春のよの月にしらへしことの音の哀をしれる人そなかりし
三月つこもりの日いもうとのおとこのもとに山ふき
の花をやるとて

あすよりは色や變らんけふなればのとけくちらて井手の山吹
かものまつりの日かたらひし人のもとよりあふびに
つけて

ち早ふる神かけつゝそ恨めしきよそのかさしとなれる葵は

といへるにさらにわすれすといひて

ゆふ禊かけはなれたる心あらは神のしるしに葵

かくをそろしくおもはぬ事をかくるそよそにてもた

いらかにてとこそ思へとてかへし

千代へよとおもふ心のある物を何にたゝすの神をかくらむ

かへし

よそにかくこふへき身とし知ぬれば久しき千世を何か待へき

四月に左馬允かねすみおやにをくれて

鳴聲はおとらし物をほとゝきすしての山路の道しるへせよ

かへし

しての山道しらませはたらちめの先にそ我は立てゆかまし

なきたまは蓮のはにも浮はなん涙の露ををきやまかふと

夢におやをみて

夢のうちに之を夢そと思ひせはさめて千歳もあらまし物を

とあればはしめの口こと人かへしすれはいまみつゝ

こ返し

たらちめのおやより先に何かそのしての山路を君か越まし

此世をははかなき露と消にしを今は蓮のうへそゆかしき

夢にてもあかすさめけん面影を現の千世にならはましかは

四月はかりにむつまじき人のもとよりたちはなをお
こすとしてむかしの人にならはまほしくなん有といへ
れば

橋のかほとゝめはや古の思ひわすれぬ袖のかさなり

おなしころおなし人のもとより卯花をおりて

思ひいてゝけさうの花の露しけみ垣ねに袂いとゝそほちぬ

あやしくもかこてるかな。

卯花を折らん袖はぬるらめとわれを忍ふる雪にはあらし

むかしかたらひし女の今はことにつきてゐなかにあ

るかもとよりとはぬことなとらみて

よとともにかけつゝ戀るかひもなく立返りえぬ袖のうら浪

あたにさる事なからましかはなとかはとはさらまし

とて

濱風も何につけてか音つれん沖つ白なみよるとしるゝ

五月五日人のもとよりくすたまおこすとして

君かため玉つくり江のあやめ草ひけるねなかし心ともみよ

かへし

かくれぬの深きにひける菖蒲くさ心なかしを比へてそみる

ほとゝきすの隣になくをきゝて

我宿になかぬ心はうけれども聲なつかしき山ほとゝきす

まらうとあまたゐて時鳥のなかぬ事なといひて

時鳥なくへきほとはいかなるを待にもすきてをととなはぬ哉

心かけたる人にをんなゝ(本ノマ)きすしせておそしと

こひにおこせたそはいまゝてなりけるをたゝなる

よりはそへんとあれは

あちきなく君かきし櫛みてしより妻をもとらて日頃へに鳧

かへし

つまとらて日頃へぬとかさしくしのさして誰をと思ふ成覽

とあれは又かへしす

君ならぬ人をは戀もしらなくに誰とかよそに思ひなすらん

八月はかりの夜人々あまたとまりてあるかかへるも

あるをおしむこゝろ

曙になるまで人はとまらん夜とひるともわかすみるへく

むかしかたらひし人のもとにある女のおふきそめに

やるをみてすはうにかきつゝ

そめ姫の色にしあへは夏のあふき薄き物からうつるひやせん

ある人のうふやの七日夜人々歌よむに

なみ清き濱松かえにおひそはる苔の縁はいつもかはらし

かたらひし人の七月五日はかりにまゆみのもみちた

らん枝折てとあるやりたれは

秋もまた浅きもみちの色をわか心深くもたのみける哉

とありければ深きつたのもみちにかきて其まゆみの

枝にそへてかくいふ

去年の秋深き紅葉にくらへみよ色はことにもおとらさり鳧

七月はかりおなしせんさいなとうへてひとゝ御前

にあまたあるよ月のおかきにかはらけ取てあきのよ

の月水にゑいすといふ題を院にて

秋のよの空をすきゆく月なれと流るゝ水に影はすみけり

おなし所のすゝみに人々歌よむに

身にそはる扇の風は忘られて秋の空にもまかせたるかな

九月はかりにまへの花さまゝに咲たるをみて雨の

ふるひ

秋のひにしつけき雨のなくさめは我宿に咲いろゝのほな

かたらふ友たちのほうしになりてこと人のもとにふ

みやるかへり事につけて十月廿日宵はかりにやる

みし人のいれる山路を尋れば跡も木のはにうつもれにけり
十一月はせにまうつる人々うちにて是かれお
もしろかるほとにたちぬへきことなさいひて

川浪にひをはよせてやとまらましみるにもあかぬうちの川浪
おなし日みわの山もとゆくに木かくれなる紅葉のち
らすおもしろく見ゆれば

みわの山杉のしるしは年ふりてちる新らしきもみちはの色
おなしたひのかへるさにうちにきてきやうにひをや
るにひとつおほきに

旅にいて、數多の目をはへぬれ共うち路のひをは一つ成鬼
かたらふ人のつねにうとくのみあれは

うちとけぬ人の爲にはよと共に我たましるも結ほれつゝ
ある人をかたらひそめてほともなくえさらぬことに
てほかにねてつとめてつかはす

逢すして歎きあかせる夜はよりも暮待ほと心なりけり
夏夜月あかき人のもとにいきたるにねたりとてあ
はさりしかは歸りてつとめてやる

月かけもすきめぬ人の宿にきて夏の下深くいてゝこしかな
けさうたつ人のもとにきて花橋のはにかきてやる
橋のかをむつましみなれよらむ花の姿も折てみるへき

十月はかり水のほとりの菊を
水かけに白くもみゆる菊の花老せぬなには流れたりとも

おなしころもみちおもしろくしたる山の本をゆくにかゝる
あたりにすまはやと人のめつるに

紅葉はの色こき山の山かつと成やしなましちらぬ限は
十月はかりいよのゆへかねすみゆくこれかれむま

のはなむけするに月たにいてはといそくに
冬のよの月ともなひ漕つへき舟路の風はのとけからなん
なよ竹のをのか此世を知すしておほしたてつと思ひける哉
かへし

竹の子の老まさるへき世をすてゝ常盤ならすも枯にける哉
九月十日よひものへくたるにゑ京(惠慶法師)のもと
よりさらはあすやくたる野のはな山の紅葉はたれと
か見んするとてかくいへる

〔後拾遺別集〕
もみちはも殘の秋も少なきを君なかるせは誰とをらまし
とあれはまことと思はねと心ときめきにさらは此月
の十日かきにはのほりなんとてかく

〔同〕
惜むへき都のもみちまたちらぬ秋のうちには歸らさらめや
おなしたひおほやつかひなれは人々あまた尋ねて
鈴鹿山のせきある所にてききなるひと月は此關には
さはりやあらんとあれは

すゝかなる關の山のは高けれと越て過行秋のよのつき
秋ものへゆくにあふき心さすとして人
別ちの草はにをかん露よりもはかなき旅の形見にもみよ
とあれはむつましき人なれは思なるへし

忍はれんおりゝ事のなくさめは扇にそへる君かうつりか
たひより京にある人のかりやる
身にかき衣へたてすねし床を旅の心に戀ぬよはなし
ある人こふるに父うたかはしき人もあれは

もかり舟うかへる波にたくひなはいとゝや我かこかれ増覽
人にむつましくなりてほともなくとをき所にゆくに

女

程もなく雲井はるかに別るれは有にもあらぬ心地こそすれ
とあれはけにいかにあやしきさまにおほさるらんと

〔後拾遺題〕

て

あふことは雲井はるかに隔つとも心かよはぬ程はあらしを
交やる人のかへりことして後父やれともせねは

跡たえす猶ふみかよへ濱千鳥かひある浦のしほのあはひそ

むつまじう日ころ相かたらふ人のよそ／＼なるに

あふことのいや遠さかる雲井にて猶こそ物を思ひみたるれ
かへし

遠さかるくもゐなりとも逢事の絶間にかよふ人や有らん

又人のもとに交やる返事せねは

よと共に渡しあらへは須磨の浦に通ふ千鳥の跡はみえぬる

かたらふ人のもとによへは雨のふりしかはさはりて

なんといへるにとくやみにしものをとて

忘らるゝ身をしる雨はふらね共袖はかり社かはかさりけれ

といへるにわすれぬにかくいへるとて

我ためにかけてぬれけん衣手は忘れぬ人をうらみてかもし

人にやりたる返事をせねは

小倉山ふみはしめたる道しらて歸る跡さへ見えすそ有ける

あるおとこ人のもとに文やりけれと返事せねは

數ならぬ身にも辛きのしられつゝ歎けは君を如何と思ふ

とあるかへししてとあれけ

よそ人のなけく歎きは何ならて恨みん程に年やつもらむ

人にふみやりたる返事にものかゝぬ紙をおこせたれ

は

しるしなきみと□しる／＼頼む哉我思ふ事をなれと祈りて

かたらふ人おき／＼とはぬをうらみてすむ所はしら
せてさすかにふみやる返事みな月はかりにやありけ
ん

身はかくれ聲は音なふ山彦を尋ぬる程に夏そ暮ぬる

人々あまた居て物なといひて手まさくりにおもものを

まろかして鳥のかひ子のかたをしてかくいふ

かひにしてあまたしあれは知難しこやいひときのこには有覽

むまのせうかねすみ

はしよりも尋ぬへけれと歸らねは未いひしらす何鳥の子そ

なといふにれいのかくいふ

巢守なるかひとみつるはかりてほす稻負鳥の種にそ有ける

かたらふ人のもとに雨のふるひきたるになに心な

くて居たるかみつてかくれければよしくらからん

にまいらむとていてぬる後にかくれあへてみえぬる

ことゝいひてかくいへり

三笠山みのをのたちも隠しあへすふりつる雨に我を濡ぬる

とあれはかくれぬる人はさもあらしとて

さしはへてとふかひもなく三笠山立歸りにし人ばぬれしを

ある所の歌合に物の名なとよまするに秋風

夜さむなる秋の初かせ吹しより衣うちばへね覺をそする

もみち

ひとてにはそむとも見えぬ紅葉ばの色は錦に立そまされる

をみなへし

あたし野の種とはみれと女郎花うつろひかたき花のいる哉

すゝき

紫のほかに出たる花すゝきほのかによその風そなひかす

萩

待人にあやまたれつゝ萩の音のそよくにつけてしつ心なし
かり

雲路より宿かりきたる鴈かねはたひの空なる聲にこそきけ
はたおりめ

虫の音にはたおる聲はうちへて秋さ成にしひより絶せず
あはぬこひ

あふことのなくて年ふる我身哉何を命にのふるなるらん
あるをんなのもとに又ある女のもとより色々のにし

きをかみてふしてかくかきてをこせたり
君かため思ふ心のへたてぬをかみてふかみは空に知らん

とあるかへしよみてとあれば
隔なく君し思はゝ何かそのかみてふかみにこともよすへき

ある女のもとにくきに文をかきてかく
夏くさの結はぬ人の心もて露にはいたくぬれそしにける

ある人のもとに目ころはをのといふ所になんありつ
るとてかくいひやる

世を恨みをのゝ山路にいる人のたえぬほたしは君にそ有ける
かたらふ中のたえたるかやなりからつる歌のさうし

かりてかへすとて
聞すてすかきつめてける八千草のよゝのふる事我も忘れし

すみける女のたえにけるかもとよりかみをもとゆひ
にしたるかむすひなからあるをおこすとて

年ひきにはかなき物はかみさひて古き契のあせすそ有ける
とあるかへし
磯のかみ結びをきてし元ゆひは古きなからに忘れやはする

あるをんなのもとにはしめて文やる

とふことの初めはけふにみゆらめと思ふ心は年そへにける
むつまじからぬ女に松にさして

みくまのゝ浦の松とそ成にけるときはに人をこふる我身は
うしをうしなひてもとめわつらふほとにかよひし女

のもとにいきてたてりければひかせてかくいひたる
うしとみし心そ人にまさりけるこや後おひのつといふ覽

返し
〔後拾遺雜〕
數ならぬひとをのかひの心にはうしとも物を思はさらなん

ある女のもとに文やることはありなからつゝむこと
ありてなんとてかくいひにやる

世の中の人のなかにはあらすとも戀る心はたれもまさらし
またよそにてかたらふ人のほかにわたりけるをいひ

やる
いつくともありかをしらぬ人故に尋ねそわふるみわの山寺
をんなかへし

よそにても杉はみゆるを三輪の山何しか寺に人のたつぬる
五月ついたちのころなかあめのやみたる暮つた蜚

を見て
あまらせる五月のやみのこかくれに蜚のみこそ光みえけれ
おなし月のみかにしけゆきの朝臣のもとへ雨のふれ

はここのあめによりてなるとて
日をかねてひくへきものを菖蒲草おひたる沼の汀まさりぬ

馬允かねすみひろあはて夏月のあかき夜きて日こ
ろこひしかりつることなといひて

山のはの月まつほと心の心にもやゝ思ひまし戀てこしかな

といふにまちつる心もしるくとして

雲まより立いつる月影やある待かひありてみゆる 君かな

人々ありてなてしこよむに

からにしき籬にかけてみえつるはさく床夏の花にそ有ける

ある女かれ／＼になるほとおなし所なる人のもとに
物いひにきたるにさりとともとおもひけるかのちにと

ていれは女

獨してさしてかりつる蜨舟のすき行方はゆかしかりけり

われはのとけくおもへと心いられしていへはかうよ
そよそになりぬるとおもふけてかく

風はやみのとけくもあらぬ浦波にかれはなれ行舟としら南

ある女に物いひそめてほともなく田舎へくたりてを
こすひころはあやしきたひのひとり寝をのみなんと

て

むつましく成ての後は手枕もあたらし人にふれうかりけり

人になれてあか月にいひやる

(後拾遺)
程もなくこふる心は何なれや知らてたにこそ年はへにしか

ある人のもとにいきてさけなとのむにかくきたるは
ことさらにはあらしなといひてたよりなる 心はへを
よめる

たよりとは思はさらなん釣舟のとまりをと社さしてきにしか

おとこある人にあたなたちければなをあるよりはと
てかくいふこの人は齋宮にそ有ける

仇浪はたつときけ共伊勢の海のかひある浦もみてややみ南

ある所のひやうふのゑに櫻のはなのさける木の下に
水なかる人の家より女の水くむ所あり

花さける木の下水をむすひあけて散なは後の影をたにみん

心かけたる人のもとにいきて物なといふにいらへも
せさりしかはかくいひやる

をとなしの里とはみれと聲たてゝ鳴へきまてになれる 我戀

三月つこもりにかくてくれぬへきといふに

夏衣たちへたつへき程ちかく暮ゆく春の色おしきかな

左大臣殿さふらひに大はん所よりからくたものをお
ほきなる枝につくられたるにしむくりなとをならし
ていたされたりしかは

なれる身はこゝのもの／＼いかなれは猶隔つ覽唐のくた物

三月廿日よひはかりはつせへまうてんとて女房にい
とまこふとて

くりこまの山の櫻のちらさらん春の中にはかへらさらめや

はしめて女に

思ひつゝこゝらの年をしのふくさ忍ふる程につみてける哉

やつはしといふうへわらは人々あまたかよはしける
に

やつはしはあまたの人を通ひける春はすくれと道はきに梟

異本歌歌本機載

正月はかりに人々あまたきてさけのむにまへの梅の

はなを見ておもしろかる

かをとむる人も有けり春の夜のなに咲花とすさめさりけむ

おなしこゝ大將殿のさふらひにゆきのいたうふるあ
したにおしきに雪をすはまにをきて松と梅の花とう

へてたいはん所よりとてなきしゝてあるにかきつく
濱松のときは色に咲まじる花のにほひはひさしかりけり

ねうはうかへしとて殿

年月のゆきつもりける濱松はかそへ盡さむ世こそしらね

とあるにこと人々にかへしませとあれとなをさせる
心さしあらん人こそとあれは

君か代のつくへくもあらぬ長濱はいとゝもおふる松のちよ哉

おなし頃麗景殿の女御のさふらひにこれかれものひ
とくきとりにやれとあるにこうはいにきしをつけて

いたせるを人々かゝる花はありけりとあれは

くる人もなき山里にさく梅はとりの羽風にをりみする哉

二月ゐなかにあるに院の子日と聞ていかなるさまに
よむらんかやうにそあらむとて

野へにいてゝけふひく松の本毎に君にとのみそちよをかす覽

おなし所にて二月十日のころ京の花いかにおもしろ
からんと戀しうなりぬなとはらからなる人にいひあ

はせて

大かたの都の花は咲ぬらん中にも宿の梅そこひしき

齋宮のおりゐ給へるふる宮所のいとあはれにあらて

人影もみえぬを入てみれば三月十日はかりさくら
とおもしろしはやうさせりける榊のかれたるを見て

あたにみし庭の櫻はちらすしてしめの榊の色かへてけり

右輔親集。爲定卿爲秀卿以兩自筆本一字不違令書寫
之。再往加按合者也。

寛文六丙午初冬仲旬

右祭主輔親集雖不審多依無類本不能校正

大藏卿行宗卿集

長承元年十二月炎上之後隨思出書之

山花未綻大教院作

山櫻またさかすともみえぬ哉朝見るくものたえぬかきりは

山家早春園融院

何ゆへか人もとひこん道遠みまた花さかぬはるの山さと

五月十五日依忌日罷向仁和寺之時師頼朝臣許より

足引の山ほとゝきすけふしこそ昔をこふるねにはなくらめ

かへし

郭公音なふからにいとゝしくむかしのけふをこひつゝそ鳴

我ことく君もわれをや思ひ出るくまなき月を獨なかくて

かへし

月影の心や空にかよふらん忍ふるやとをさしてとふかな

鳥羽殿前裁合

薄

花すゝきなひかさりせはいかにして秋のゝ風の方を知らし

荻

物こと(下載秋上)に秋のけしきはしるけれとまつ身にしむは荻の上風

晩見殘菊内府

いつしかとあさとをあけて菊の花月の光のさすまでそ見る

菖蒲同

いかてかは深みにひける菖蒲草なへての根には等しかるへき

止宿草庵

忍戀

しらてこそ草の庵に宿りけめはや武藏野の深きゆかりを
しのふれと顯れにけり我戀はしほひの磯の玉もならねと
女のもとにつかはしける

寄鳥戀失井

つらしとて思ひたえなは是さへや人を忘るゝなには立へき
たちのけとうへならひぬるこからめをつれなき人の心共哉

關路月

月影にさそはれて行われかみそ今宵はすぐせ關のせき守

初雪

初雪は今朝ふりにけりしるかりし昨日の暮の雲のけしきに

風中擣衣堀川少將曾

追かせにとをちの里のから衣我宿ちかくうつこゑそする

五月一日聞郭公

いつの間に里なれぬらん郭公けふを五月の初とおもふに

落花滿橋

岩はしにちりつむ花をふましとて此方の岸に立そやすらふ

地下にてはへりし時

雲井にはまた聞えぬか澤にすむかしらのかみも白たつの聲

土御門の内裏の陣にて頭辨雅兼朝臣宿所の花みて

よそなからあかぬ袖を尋ぬれば君かすみかの花にさりける

かへし風やみけるころ

此ころは我身も花もおしければ風をそいとふ春のあけほの

皇后宮齋院にておはしましし時故源中納言なりとあり

て三月つこもりの事にやまかりかへりしにものにも
かゝてさふらひしてかくありし

いかにして立かへる覽神かきにかゝれる藤の色を見すてゝ
かへし

さらぬたにかへる空なき夕されに結びとゝむる神垣のふち

六條院とはにおはしましゝにほのゝとあくるほと

に女房たちいつみさのゝあさかほみに船にのりてお

はせしにをひてたてまつりし

覺つか花の朝かほいかならん露のおきうきけしき成とや

かへし

思ひやれ霧のまかきにかくろひて露うちとけぬ花の朝かほ

法勝寺鐘樓前の花見にひとゝまかりて見はへりし

に

故郷へたちかへるへき道そなき散つむ花のふまゝおしきに

白川にて俊頼朝臣伊勢へくたりし錢に

たのむへき我身なりせはいく度か歸りこん日を君に問まし

氷逐夜結鳥羽

汀よりよはの氷のとちゆけは沖にや鴈のうきねしつらん

鳥羽殿にて曉郭公を聞て修理大夫のもとへつかはし

し

聞らめやみ山たちいてゝ時鳥いまこそきなけ鳥羽田渡りに

返し

夜もすからねて待ものを郭公おなしわたりにわきて鳴らむ

同人としことにかみゝをつかはしゝたつねにつか

はしたりしかは

なをさりのことの葉をたに聞ましや扇の風の便ならすは

かへし

顯仲朝臣のもとへ扇とものたゝまぬを櫃にいれてこ
れにてならひしてと申たりしかは返事に
戀をこそひつに鎖さしおさむなれまた社しらね扇いるとは
返し

戀はいさ吹くる風の身にしめは扇をひつにいかをしれ
日ころ山里にゐてふるさとかへりて

我宿は淺茅か原とあれにけり鶉なきぬといはぬはかりに
岸竹

岸の竹鳥やねくらにしめつらん重けにたはむ枝のみゆるは
熊野のみちより便につけてふるさとへつかはしゝ

立てながら淺茅か末をおひに結び知らぬ山路に旅ねをそする
熊野の道にてふかき谷にとまりて月あかきころに侍

りしかともくらかりしに夜ふけていほのうへに月の
さしたりしかは

山路にはいつれも峯の高ければさよ中にこそ月ほもりけれ
九條民部卿家歌合に夏月

月影のけしきは秋にかはらねと明ゆく空そ程なかりける
圓宗寺に宮の御ともまいりて花前述べ

色かへぬ緑の松にことゝはん咲ちる花をいくかへりみつ
四位侍従宗忠朝臣還昇したりと聞て

〔金葉雜上〕
うらやまし雲のかけはし立歸り二たひのほる道をしらはや
あはれなることありしころ

哀てふ我ことくさをとみつまはいく車ともしられさらまし
仁和寺にてなはしるに水まかすとしてみてくらをたて

てはらへするやうにせしをみて
苗代のみなくちまつる丈夫はその川かみを頼む成へし

すみれを

われたにもありうき宿の淺茅生に共にすみれのいかで咲覽
堀川院御時宮女房殿上人などに仁和寺の花見にまう
てきてみちのくにかみたつねにつかはしたりしにこ
とつけし

〔金葉雜上〕
いく年に我なりぬらんもろ人の花みる春をよそに聞つゝ
戀歌院

〔金葉雜上〕
つらかりし心ならひに逢みても猶夢かそうたかはれける
葵

神代しもかさしもこそはあまたあれけふ葵とは如何定めし
白河院御事のゝち月あかきよ經敏入道のもとより

月みれと猶慰まぬ心こそ物思ふことのほとはしらるれ
返し

月みてもなをなくさまぬ心をそけにきらしなと思ひ知るゝ
遠尋郭公

いとかくは尋ねさらまし郭公きなく山へをかねてしりせは
停舟見花

この春はかちかくしてよ櫻花咲る嶋はにひかすへぬへし
僧正御許より八重紅梅めしゝにたてまつるとて

けふこそはひきわかるとも梅の花もとの垣ねを忘れさら南
返し

梅の花おなし垣ねのたねなれは匂ひはかへしひき別るとも
内大臣殿に折檻にとりを入れてむめのはなさしてまい

らせたりしかは
鷺やぬきすてゝけんきゝすさへいつよりきるそ梅のはな笠

返し

きゝすさへさしたてまいる印には梅の花笠かりてきたるに
内大臣殿南庭花を見て

君かすむ宿の櫻にくらふれはよしのゝ山もいかゝと思ふ
御返し

名にたてる吉野の山にくらふれは心まさりのしつる花かな
宮の御經申とて

千とせへて君に仕へんしるしには御法をかねて我に授けよ
御返し

それにより人を道ひく佛たにのりをはおしむ物と社きけ
五月六日ある女のもとより

さもこそはかりそめながら菖蒲草やかて軒にも枯にける哉
かへし

かりそめの軒にはかれんあやめ草なかく契りしねを頼ま南
梅花當簾

梅かゝのたまらす匂ふことのみそ柴のとひらのとり所なる
これを聞て又の朝つとめて三宮のかひの君のもとよ

心こそ柴のとひらにとゝめつる梅の匂ひのなへてならねは
郁芳門院かくれさせ給ひてつきのとしのあき御まへ

のつほの萩を見て
萩か花おなし匂ひに咲にけりうかりし秋の露もさなから

返し
堀河殿
みるたひに露けさまさる萩か花折しり顔に何にほふらん

三月盡
東路や雲のいしふみたちかへりもとこしかたへ春やいぬ覽

心あらは人にかたるな行春よけふにあひくるわかとしの數

むろのとまりといふ所に櫻のおもしろく咲たりしを
みて

櫻花こゝろやすくもみゆる哉むろには風もふかしと思へは
鳥羽殿にて月のあかゝりしおり郁芳門院女房のなか

にたてまつりし
天の原おなし空行月影の秋しもいかて照まさるらん

返し
御匣殿
そよやけにいてそふ月はなけれども光ことなる秋のそら哉

長承元年十二月廿四日雪朝當齋院の御たいはん所へ
まいらするゆき降かゝりたる竹につけて

吳竹の雪うち拂ひけさみれはよことに君か千世そこもれる
かへし

吳竹の雪うち拂ふよことにはそよ／＼君か千代そこもれる
同日大僧正御許へたてまつるこの家つくりてわたさ

せ給へりしころ
いかにして旅ねの雪を拂はましけふ立やとる宿なかりせは

かへし
白雪の年ふりにける我が身はふせやにつけて思ひてよかし

六條院にて月のあかき夜女房たちあそひしに
天のはらよこさる雲にあらはれて月のかゝみそあかく成行

五月雨
五月雨に數もしられす我宿の軒のしのふにつたふ玉みつ

爐火
埋火の下に焦るゝ身にし有は世にきえうすと誰かしるへき

述懷
いつ迄か代に長らへてよと共にうきにしにせぬ身は歎かん

さまにめてたくせられたりしをみて宣旨許へ
千とせとそ齋の宮のいつくしく打出のきぬの色にしらるゝ
返し

誓ふへきつまとていたすうちいての色をもしりて祝ける哉

同二年二月六日敦經權守の梅のおろしえたひとせ
とりて植たるかはしめて花咲たるみせに遣すとして

植わけし君か垣ねの梅の花おなし匂ひに咲やさかすや
かへし

植わくる宿もかはると梅の花何か匂ひのうすくこからん

菊閑中友 雨中戀侍従中納言

菊のうへも我もとゆひの霜をけは是こそ老の友となりけれ
雨ふれはまちしもせしなをしたかへ今宵はゆかん袖笠をきて

保延三年九月十四日三井寺歌合に人にかはりて月菊
戀

くまもなきおなし月夜を宿毎にこゝはまさると争ふやなそ
八重匂ふ菊は籬に咲にけりあるしもとはて人やみちこむ
まさしてふ津守の浦に物とひてあはしといは戀やしぬへき

同年後九月經定朝臣家歌合に 月 女郎花 戀

雲はれてみとりの空にすむ月や天津乙女のかゝみ成らむ
女郎花おもはぬ方の風ならは靡くまねしておれふすなゆめ
我戀は千引の石にあらねともあふはかりなきねをのみそ鳴

保延三年侍従中納言許へなとうりはたはぬそといひ

しかは

中納言

ときのよに君かふくほしみゆる哉只今人のこれをたひたる
返し

又中納言のもとへ二三日ありて

きのふけふ瓜もみえねは人しれすこまの渡りを思ひ社やれ
返し

中納言

又二三日はかりありてうりやかみおこすとありしか
みてさりしかはかく中に

魚のあみ龍の蹄のみえぬかな水にかくれて空にのほるか
かへし

うをのあみ龍の蹄を獻せるを白浪のためかすめられつも
内眼イに申ことありしころてよしときこしめしたりとき

きて中將得業靜顯

九重にあしてはなしと聞ゆ也なにはの事をかたらましかは

雪朝宮法眼のもとへ奉

心さし大はら山にあらませは世に住わふる身をとひてまし

阿彌陀經かきておくに

願くは此みつきの跡によりおなし蓮のうへにやとらむ

大藏卿になりてのつとめて大納言師頼許より

我君のみことの末のうれしきは大藏にこそつみあまりけれ
かへし

いへはありや君か恵の嬉しきはちくらにおくと積や餘さん

いはひをかもとよりことりをつかはしたりしかは

我爲に取集めたる嬉しきはすへこのすへていひもやられす
かへし

たつねてそとり集めたる心さし君にすへこの程を見よとて
いはひを

正月七日備前介のもとより

羨ましけきはわかな口いそくらんゆきのみつむは翁草かな
返し

もろともに若菜はつまであはれにも雪の下なるおきな草哉

大原尼上のもとより

下蔵つみにやくると待ほとに野へにてけふも目をや暮さん
かへし

老ぬれは野への若菜もはつかしみ年のみ積て思ひたゝれす

木幡人道いまはものともたへとありしかは

けふ迄に物をきみてぬ大藏はもとの修理にそたかはさりける
かへし

入道

大藏になにはの物もつみみてしとくおろしたへいける身の爲

拾遺抄かきておくに

みつくきのあととはかなくも世にふれは落る涙を流そひける

松の木の中に櫻の咲たりしかは

たちまゐる松の梢にもものなれて花もときはに匂はましかは

仁和寺のあさりのおさなくすたれいたくおたり

といはれてめのとのつほねにこもりゐてよみておこ

せたりし

おもひたにかけさりしかと玉簾うきふしはまつ我身成けり

返し

玉垂のみすは戀しと思ひせはうきふししらすさしいてなまし

琳賢かもとよりいかくりあけひなとつかはして

いかくりは心よはくそおちにける此山ひめのゑめる顔みて

かへし

いかくりは君か心にならひてや此山姫のゑむにおつらん

女院の中納言とのゝはしかみのめはかとくしき氣

のしたるとありしかはかとくしきもののまいらすと

てつかはしたりしかは中納言殿

はしかみのめにもつきたる心哉かとくして是を起すな

かへしせよとありしかは

からくしてめにつくなれは今よりは此はしかみを仇に思はし

女院中宮と申しゝ頃のはるしけよしかめのもとより

咲そむる春のはなにもなくさまで秋のみやなる人そ床しき

これをかへしせよと有しかは

おもひやれ千とせの秋の宮のうち春の花さへ匂ふけしきを

遙望山花 寄述懷戀

よそめには雲井の峯のさくら花布をさらせる泉とそ見る

我からと人のつらさはしらるれと別れぬ物はなみたなり鬼

さうしかきておくに

忍へとてかきそとゝむる水荳のあととはかもなくならん後迄

兵部大輔雅通のよきほうたんとてつかはしたりしか

とわろかりしかは

心さし深みくさとそ思ひしにあきましけなる花のさまかな

安樂行品 乃至名字不可得聞

世々をへて名をたにきかて過しにし法に嬉しく逢見つる哉

阿彌陀經 水鳥樹林皆演妙法

池の鳥林の花もいかてかはこのよの事にいひたとふへき

南面の梅はなのちりたるを見て

いかなれはうす紅のむめの花ちりつむ庭の雪とみゆらん

保延五年五月三日禁中にて縁よりおちて侍しに成通

中納言もとより

「本ノマヽ」
おきなひやなくいゑのさいてらうにしろ衣にかくと聞は誠か

かへしはせて二三日はかりありてなとかへしはぜぬ

そといはれしかは

落縁に女法に腰の折たれは御歌の返しも不猷なり
掃衣をよみはへる

たか爲によを長月の明るまてうちもたゆまぬ衣なるらん
來不留といふ題を

よひのまにいてゝ入にしうつりかの何とて身には止る成覽
信解品 止宿草庵重出

しらてこそ草の庵にやとりけめいや武藏野の深きゆかりを

百首

春二十首

立 春

月よめはけふは春たつ日なりけり片間の氷とけやそむらん

子 日

二葉なるねのひの小まつ行末に花さくまては君そみるへき

霞

天のはら霞をわけてふる雪はちりゆく花のこゝちこそすれ

鶯

めつらしく今そ鶯きなくなる春山ちかく家みせねとも

若 菜

打むれてかたみにめをもかくる哉誰か若菜をつみまさるとて

残 雪

初雪のまつ降そめし心ちして庭もはたらにきえのこるかな

梅

君か代なのときき風に梅のはなちらぬものゆへ匂ひくる哉

柳

春風にいつかとくへき青柳のむすほ・れたるあをやきの糸

(性脱歌)

蕨

かた岡のおとろかしたの下わらひなる人なしに老やしぬ覽

櫻

一枝もちらさゝらまし山さくら風を心にまかせましかは

春 雨

春雨のふる野の道を分ゆけは三嶋すかゝさかはくまそなき

春 駒

春艸やしかふはかりに成ぬらんいはゆる駒の心地よけなる

歸 鴈

かりかねはかへるゝや思ひいつる花の都の春のあけほの

呼子鳥

呼子鳥わか名を呼はいくかへり聲するかたへ尋ねゆかまし

苗 代

苗代にまかする水は心せよあせこゆはかり威もこそすれ

菫 菜

つほすみれ若紫にみゆる哉色ゆへこれもなつかしきかな

杜 若

藤 花

我宿の松にふちなみかけてけり田子の浦とや人はみるらん

欸 冬

山吹はいづれまされり名にたてる小嶋か崎と井手のわたりと

三月盡

花のいろ鳥の聲とはさてをきつ老ぬる身は誰かをしまむ

夏十五首

更 衣

入かすに衣はかりはかふれともあらたまらぬは我み成けり

卯花

卯の花とかつ知なからよそめには夏きて消ぬ雪かとそみる

葵

山人は諸かつらとそいふなれとけふのみあれにあふひ也

郭公

雲井よりたそかれ時のほとゝきすとはぬ先にも名のり行哉

菖蒲

ひきみれは底井もしらぬ沼水にあやめも長く根そさしにける

早苗

早苗より室の早わせしなきかも代かきあへす急きうふめり

照射

星とのみみゆるともしの光かな雲のはやしに鹿やたつらん

五月雨

五月雨に水まさるらし淀川のわたせのきしの遠さかりゆく

花橘

我宿に花橘の匂はすはさならぬひとの尋ねこましや

螢

玉ほこの道とやいはん夕やみに螢のすたく河のへのさと

蚊遣火

蚊遣火のけふりは人にしられけり我下燃そいふせかりける

蓮

氷室

いはひつゝ千世のためしにをく物は松か崎なる氷室なり

泉

道遠みいた井の清水むすひつゝけふは扇もさしそをかるゝ

荒和秋

けふは皆千年の命のへんとて川の瀬ことにみそきをそする

秋二十首

立秋

けふよりは心盡しの秋なれはいとゝ我みそをきところなき

七夕

天河ちきりたかへぬ今宵さへつかひの星をけさや待らん

萩

よなゝの曉つゆに宮城野の萩の下葉や色つきぬらん

女郎花

女郎花おなし野へなるおもひ草いま手枕にひき結ひてむ

薄

思ふ事ほにたにいてゝやみぬへしとをちのをのゝ篠のを薄

荳荳

亂るれとつかねをもなき荳荳はたゝよとゝもの心成けり

蘭

きてみれは野毎に匂ふふしはかまたか移りかそ懐かしき哉

萩

身のほとおもひつゝくる夕されの萩の上はに風そよく也

鴈

越路よりあさ霧かくれくる鴈の都ちかつくこゑ聞ゆ也

鹿

かねてよりさつをのねらひ恐ろしみたちのゝ原に小鹿鳴也

露

しら露の青葉の山をいかにしてから紅に染かへすらむ

霧

幾つらそみね飛こゆるかり金の霧間をわくる聲きこゆなり

槿花

道のへのたちかくれなき槿をねたしや人はいかゝみるらん

駒迎

天の原なかば雲井をかけるよりけしきことなる望月の駒

月

九重の庭さえわたる月影を氷をしくとたれかみさらん

櫛衣

から衣かさねんことを急けはや夜さむの里に打あかすらん

虫

よを寒み艸むらことになく虫の涙ややかて露と成らむ

紅葉

すはえよりしくれの雨に染られて紅ふかき神なひのもり

菊

君かつむやをよろつよになすらへてやへ社匂へ白きくの花

九月盡

苦しくもいさやおしまし君かへん千年の秋は多くこもれり

冬十首

初冬

いつしかと冬のけしきのしるき哉葎のかともしもかれに鳧

時雨

雲はれてしくれの雨はすきぬれと獨りかはかぬよはのさ衣

霜

朝霜のをきわたしたるをさゝ原下葉はかりやみとり成らん

霰

雪

いとゝしくいやはねらるゝ片岡の奈良の枯はに霰ふるよは

寒芹

かきくらし降白雪を哀なるわかもとゆひにまかふと思へは

千鳥

堀江にはをれふす芹のひまなくにたなゝし小舟漕をやられぬ

氷

むれるたるしたの湊のさよち鳥汐みつまゝに聲そちかつく

水鳥

岩間もる玉ぬし水も夜を寒く玉のかすにそ氷るにける

網代

鴨鳥のむれゐてさばく入江にはをのかは風にを波立らし

神樂

遠かたにきこえしもせしあしる人舟よふ聲は波にまかひて

鷹狩

夜もすから櫛みてくらとりくて朝倉かへす程そえならぬ

炭竈

雪つもるかたのゝみのをかりゆけは雉子の跡も隠れさり鳧

爐火

あれやさはをのゝ炭竈たえゝにたつ煙こそしるし成けれ

除夜

いかにせんしたに焦る埋火のかきあらばさて消ぬへきみを

戀十首

初戀

流花行年はけふにそ成にけるおもてに波のしはをとゝめて
月草の色とり衣けふよりはふかく思ひをそむとしらすな

不被知人戀

君こふと今はさりともしりぬらん心遣ひはつくやつけすや
不遇戀

初遇戀

いて立のあしうらよくて幾夜さへ又つれなくて立やかへ覽
はゝかりも名こそこの關もこえはてゝ今逢坂を嬉しかりける
後朝戀

今朝よりはいもか住居を思ひ出て暮を待まの思ひてにせん
遇不逢戀

旅戀

中々にあはすはあはて泪川かさねし袖や更にくちなん
むは玉のよこと淋しき旅ねには枕うこきていやはねらるゝ
思

片思

思ふとは我をしら南あた人のうち語らふはことのなくさそ
我獨り思へはくるしいかにせんかたよりなりやみのゝ白糸
恨

雜二十首

曉

きのふまで事そともなく暮にしを何また鳥のおとろかす覽
松

竹

何事をまつともなくて過すかなみとりの髪のおひ替るまで
あかねさす目もくれ竹に風吹はねくらさためぬ雀なく也
苦

あをつゝらくる人もなき山中にたかためしける苦の筵そ
鶴

松か枝に鶴のかいずの巢立つゝ千代へん程は君そみるへき
山

梓弓たな引雲のたえ間よりはつかに見ゆる初瀬山かな
河

よしの川岩こす波のわきかへり白ゆふ花にみえわたるかな
野

道しけき野原の露にそほちつゝとふてのまゝに尋そ社ゆけ
關

都いてゝ立かへるへき程とをみ衣の關をけふそこえゆく
橋

哀ともいふ人あらは今はたゝまつみち橋にならんとそ思ふ
海路

汐まつとなこの浦はに舟とめてとも舟またむしはし休らへ
旅

松かねに枕をしてもあかしてん心とまらぬ旅の身なれば
別

わかれちは雲のはるかに成ぬともそなたの風の便すくすな
山家

山里にすみなれぬれば峯のさる谷の小鹿もむつまじきかな
田家

小山田をかへす春より秋までは賤のてまなきしからきの里
懷舊

昔として思ひてもなき身なれともせめては今になすよしも哉
夢

無常

思ひ寝のゆめはかりなるよき事をやかつて現になすよしも哉
いかにしてゆふかけ草にをく露のいまゝて消ぬ命なるらん

述懷

沖つもをかへさふ波の返すよりしけき思ひを誰かしるへき

祝

君か代はやみねの椿はをしけみふたゝひ陰のあらたまる迄

保延元年七月八日草花未遍

咲そめて秋の日敷しあさければかたえそ匂ふまのゝむら萩

寄露戀

道芝にひまなき露も獨りぬる我たもとはいひもくらへし

遠尋山花

よしの山花のさかりをすこさしと伏見の里を今そ過ゆく

無常心を

いかにせんうきよの中にすみかまのはては煙と成ぬへき哉

〔身を金雲〕

郭公何方

何方ときゝもわかれす郭公おいのねさめのおほくしさに

月前遠情

月よにはおもひそ出るもろこしに友を尋ねし人のこゝろを

關路雪深

雪つもる庭にそしりぬいとゝしく猶やそふらん白川のせき

違約戀

人まつは苦しき物と我もさはそらたのめして思ひしらせん

對鶴爭齡

萬代を猶かさぬへき君なれば鶴の千とせもいひなくらへそ

二首和歌海上遠望

難波にて明石のせとをみわたせば雲の波こそ立へたてけれ

寢覺戀

逢と見る夢もむなしく覺ぬればつらき現に又成にけり

曉添虫聲

夕露にこゑたてそむるきりくす明行まゝに鳴まさるかな

月添秋思

哀とも誰かみるへき月影にかしらの雪そひとへそひぬる

晚見藤花

むらさきに夕日かゝやく藤の花またゝとふへき色もなき哉

寄橋戀

あはぬよの戀のしけさは八橋のくもての數にいひも比へし

三月盡

行春をたれかとゝめんとりのねをまねひし人のおもひ計も

戀

散花の物をしいはゝ行春をくもりもたゆく千たひとめまし

奥山の木の下かくれ行水の人にしられぬなみた成るらん

晚風告秋

夕風そまたこぬ秋のこゝちする萩のはそよく程ならねとも

草花露色取

野へことに色々にこそみえわたれ露やそむらん花やそむ覽

萩盛待鹿

しからまは枝やおれんとをしけれと小萩匂へは鹿そ戀しき

蟬聲滿耳

夏の日の聲もしけみに鳴せみのまたことくも聞そ別れぬ

なつ山のしけき梢にうつせみののかこゑくたえす鳴哉

扇不離手

うちもをかね扇の風の涼しさにわか手に秋は立かとそ思ふ
終夜固辭戀

下紐のうちとけぬともみえずして今宵もたゝに明しつる哉
終夜結ほふれたる下紐のとくるまつ間にあけそしにける

漸忘扇

扇をは涼しき風にかへてけりやゝおさむへき心地つくらし
題しらす

菊花臨水

吉野川岸のしらきく咲にけりおくりくる波に色やまかはむ
不返事戀

初聞鶯

思ふこと書なかしつる水莖のせきかへされて又そきにける
たまさかに我まつ妹にあふよりも猶めつらしき春の鶯

毎年見花

年をへて散かふ花とおきなさひ我もとゆひと何れしるしも
郭公過曉

月不如秋

しのゝめに今そすくなる郭公音羽の山のをとにたてつゝ
冬よの氷とみゆる月よりも秋の影にはしかしとそおもふ

田家秋雨

山里のさく^{つくろい}りの上にしりかけてをしねこくまに雨そ降ぬる
林下時雨

行路雪

むれ立る木々の梢に隠るれと頼むかひなくぬれそほちつゝ
たひ道に初雪ふれはいかにせんこゝちまとひて詮方もなし

寒鷹添戀

冬寒み聲さえわたる鷹かねに我おとらめやとしそおいノ、
船中曉戀

明かたに浦こく舟のこゝちして我もおとらす楫のしづくに
うちの御たいはん所へ

七夕はわか玉床をうちかはらひちりの立ゐや暮をまつらん
これをきゝて

あひみても別の空を思ふにはかねてやぬるゝ天のはこるも
ゆふへの風すたれなうこかす

夕くれにこす吹かへす秋風にをさふる袖のしとろなる哉
わつかにみるこひ

打つけにはつかの月のはつゝに見し空もなき戀もする哉
かの岸にいつかいた覽舟なくて苦しき海におほゝるゝ身は

手もたゆくちる紅葉はを打はらひ誰かは我を尋ねとふへき
かゝみ

鏡うしまつしらひけの映りつゝ雪とみゆるもいとうたて鳧
ますかゝみ月にもにたり又みれば池の氷とあやまたれけり

さつきのや五日のむまのひにいるは秋の川かとみゆる鏡そ
くた物

もちる社いたきやつなれ皆人のふゝたとのみも懐くと思へは
いかにせん立花くひに負ぬれはをもさるかくをするをうたてき

われそまつとふへかりける老はてゝくれ行春をしたふ心は
かへし

老ぬれはおいぬる人そなつかしき心や同しこゝろなるとて
のこりの雪

人しれすわかはや今はきさすらん垣ねに残る雪の下草

やなき

山風にむすほふれすもみゆる哉うらやましきは青柳のいと

はるこま

春草にいはゆる駒のこゑ聞はなつみし冬のけしきともなし
しかふへき程にもならぬ若草の心地よける駒そいはゆる

くるな

いかばかり人まつ宿にあらませはたゞく水鶏に驚かれまし

ゆふたち

むら雲の俄にみゆる程もなくゆふたちしくる音聞ゆなり

うのはな

うの花とかつしりなからよそめには白浪かくる垣ねとそ見る

七夕

天河つかひの星のかへるまを心もとなくまちわたるらん

おき

たそかれの萩のすゑこす秋風は心盡しのしるへなりけり

のこりのきく

君かへんやち代の秋になそらへて八重こそ匂へしら菊の花

たかり

雪の上にきゝすの跡もかくれぬはけふはし鷹を合てそ見る

ちきりてあはぬこひ

玉たれのこすはうしともいはすして契る計や情なるへき

たひのこひ

旅にはいとゝ戀のみ優りつゝ枕うこきていやはねらるゝ

のちのあした

頼めをきてかへるもくるしいかにせん流るゝ水の心とも哉

きのかけ水にうかふ

風ふかぬ汀の松のあやなくもよせくる波に影そみたるゝ

夏草

秋こそは萩か花すりみえわかめみなみとりなる夏の野へ哉

はつ雪

あらち山紅葉ふみわけ行道にきしかたしらすけさの初雪

たの家の秋のあめ

雨ふれは門田のいねそしとろなる心のまゝにかふき渡りて

はやしのもとのしくれ

みわたせは時雨てわたる絶間より木々の梢は色つきにけり

寒鴈増思

我戀はことにふれても増る哉雲井の鴈はよろつならねと

はしめてうくひすをきく

鶯は雪ふるすよりいつらめと猶はつ聲のめつらしきかな

竹をうへてまつ鶯のよをこめて春告かほに今そ鳴なる

ゆふかけて生田のもりの涼しきは風こそ秋のつかひ成けれ

花下述懷

櫻花ものをしいはゝ年ことに我身のうきをとふらひやせむ

哀とも誰かみるへきちる花のかしら雪とちりまかふをは

老にける頭の雪の色ならば花も我をはあはれとやみる

身のうさの事もおろかにあらはこそ花みること慰もせめ

鶯のこゑなをすくなし

一こゑに春をしらせて鶯のなとその後にきなかさるらん

天永二年二月十六日のゆめに

いかにせん此よの夢もまたさめす蓮のうへをうつゝとも哉

うちにて大夫のすけのあふきのかのめかためてとて

つかはしたりしかためてつかはすとて

蟹のめのはなるゝたひにいと敷君か心のうしろめたさよ
かへし 大夫のすけ

けふよりは君かかのめにかたまりぬ人も扇は思ひはなたん
うちへ

鶯のはるさめもよに尋ねきて梅か匂ひにあかす鳴かな
御かへし

春雨に何かゝさん鶯は梅の花かさありと見なから
月あかゝりし夜みくらのことねりして御たいはん所
より

かく計くまなきよはの月なれと君をはえ社さそはさりけれ
御返事まいらせてやかてまいる

今更に何さそふらん月かけの心は雲のうへにこそすめ
れいならす侍しころ御たいはん所より

思ひあまり逢みぬ程を敷ふれば手たゆきまでも成にける哉
御返りまいらす

心にそ逢みぬ程をかそへせは中のゆひまでふせすあらまし

右大藏卿行宗卿家集以濱田侯秘本校合

群書類從卷第二百四十五

和歌部百家集十八

六條修理大夫集

顯季卿

承暦(自川)二年殿上歌合

尋こぬさきにもちらて山櫻みるおりにしも雪と降らん
藤中將の家の歌合

山高み尾上にさけるさくら花散なは雲のはるゝとやみん

二位の白川のさうし合の歌

〔金葉名〕
時雨つゝかつちる山の紅葉はをいかに吹よの嵐なるらん

遠聞郭公といふ心を

山ひこのこたへさりせは郭公外になくねをいかてきかまし

郁芳門院根合歌

さりとと思ふはかりや我戀の命をかくるたのみなるらん

退齡如松題

二葉なる松を引うへて誰もみなおなし千年のかけをこそ迄

毎朝臨菊

菊の花さきぬる時は目かれすいく朝露のをきてみつらん

鳥羽院前裁合に越前守家保に給歌二首左方萩不入

萩か花散もちらぬをしなへてさなからおほき秋の野邊哉

すゝき

秋風になひく薄と知なからいく度そこに立とまるらん

おなしせさい合にいなはのかみにかはりて右方にた

てまつる歌二首萩不入

秋の夜は人まつとしもなれとも萩のは風に驚かれつゝ

さくいる

〔金葉秋〕

千年迄君かつむへき菊なれば露もあたにはなかしと思ふ

殿上にて千鳥と云題をよませ給ひしに

沖津風吹上のうらや寒からん浪立さはき千鳥なく也

戀をなこそその關によせてよみし

東路のなこそその關はよとゝもにつれなき人の心なりけり

歌合に

〔後拾遺〕
鳴の伏かりたに立るいなくきのいなとは人の云すもあら南

人々雨のうちの野花と云題をよみしに

雨ふれはおもひこそやれ露をたにおもけに靡く眞のゝ村萩

三條の内裏にわたらせて給て始て歌よませ給ひしに

花おほくの春を契といふ題を

君か代の千とせの春に櫻花是やはしめの匂ひなるらん

かよひ侍けるおとこのかれゝになり侍けるを女い

かかいひやりたりけんおとことかくいひていたくな

うらみそなといひをこせたりしにその女にかはりて
何しかは人も恨みむ夏ひきのいとかりける身社つられ

ある六位の二（觀子）の御許にうちの殿上をまうしける
か年比に成にけれとゆるされさりけるにろうさう
をもとめ給と聞てこの六位ろうさうを奉るとて

雲の上をよそにのみ聞身にしあれは緑の袖も何にかはせん
をこなひするほと也この返事せよとの給ひしかは
よそにのみ思はさらなん雲の上をつるは緑の袖そかさねん

住吉のかんぬし國基内に申さする事ありしをせんし
をそくくたるとて又の年の二月にいひをこせたりし
雲の上は月社さやにさえわたれまたとこほる事や何なる

返し

同
とこほる事はなけれと住吉のまつ心にや久しかるらん

御門おりゐさせ給ふて後おほるにこ（御幸）うせさせ
給ふて落葉満水と云題をよませ給しに

〔金葉秋〕

大井河ぬせきの音のなかりせは紅葉をしける渡りとやみん
はりまにくたりて侍しに周防内侍と云人花のさかり
もすきなんとするにのほらぬといひて

おほつかな都の櫻にほふにもうら風はやきわたりいかにそ
返し

都にも花の匂ひはかはらねといひあはせつゝみる人そなき
院とは殿におはしまし（マ）こに殿上の人々つれ／＼

かりて日ごとに歌よまむとて野花露滋と云題を
鶉なくあたの大野の眞葛原いくよの露にむすほゝるらん
野花薰衣

みれとあかぬとを里をのゝ萩か花袖に移れる香さへ懐かし
田家秋興

風はやみなひく稻はの葉の上にかくてをくらん秋のよの露

行路秋花

花のいこはきイ

霧はれぬをのゝ萩原咲にけり行かふ人の袖匂ふまで
二月廿二日京極殿に御幸ありしに又の日花をもてあ
そふと云題をよまれしに

櫻花にほふさかりの宿なれは猶おりてこそみまほしけれ

六條院にて落花入籠といふたいをよませたまひしに
櫻花こすのまをりちるからに塵さへけふは拂はてそみる

花の池水にうつると云題を鳥羽殿のしま人々よみし
に

しら波の立かとそみる池水にしつえをひてゝさける櫻は

歸鴈

ことつてん人とまつらん春霞たな引空にかへるかりかね
水によりて山の花を知と言題を人々よみしに

散かゝる細谷川に山櫻たつぬる人のしるへなりけり

はりまへくたりしに日のあれしかは河尻より馬にて
かちよりまかりしに馬にのりし所にて馬の口をとり

住吉の神主國基

諸共にふちはあけねとしたはるゝ心は君におくれさりけり

といひしかはかへし

心はおなし道にはたくふともなを住吉のきしもせしかし
橋のなりともかやり戸ひとつへたてたる所にまうて

きて人々物語なとしてかくなんとつけてかへりしか
は

すまのうらの恨やせまし高砂の松に音せずおきつ白波
旅宿雪と云心をよみしに

松かねにおはなかりしき終夜かたしく袖に雪はふりつゝ

戀

岩代の野中の松にあらねとも戀も年ふる物にそ有ける
年比侍し女房の尼に成て侍にきぬとらすとて

唐衣絶すきてみよ今はとて法の道には入にけれとも

返

今はとてそむく身なれとから衣きてみる時を君はうれしき
人々春の心花に有といふ心をよみ侍しに

心みにさてもや春はうれしきと花なき年に逢よしも哉

鳥羽殿に御方たかへに正月十日行幸有しつとめてつかはしける

あらたまの春のはしめに降雪はいつしか咲る花かとそみる

返

住人も久しき宿は千とせふるみゆきに雪のつもるなりけり

依月夏涼

なかむれは涼しかりけり夏の夜のかつらに風やふく覽

雨中閑居

五月雨にとふ人もなし山里は軒のしつくの音はかりして

遠村早苗

里とをみ山田のさなへ引つれて急きてみゆる田子の景色は

逐日草薺

眞葛原しけれの野邊のけしき哉としはか末のみえす成行

瞿麥滿庭

我宿は庭も色もおしなへて今さかり也なてしこの花

盧橘暮薰

軒近く花たちはなの匂ふかはたそかれ時をそほめかれぬる

聞郭公忘歸

子規聲あかなくなつたつねきて生田の森にいくよへぬらん

照射及曉

ともせとも今夜もあけぬ徒に相坂山もかひなかりけり

初戀

我戀はふかき太山の松なれや人にしられて年のへゆけは

遇不逢戀

思ひきやまた逢事のかたしきにすまの浦にて鹽たるへしと

戀

大空は戀しき人の何ならんかめてのみも過すころかな

卯花所々

川野邊にむらゝ咲る卯花はせゝのしら波たつかとそ見る

逐夜待郭公

さてもなをねていく夜にか成ぬらん山郭公いまやきなくと

待客聞杜鵑

諸ともにきかまし物を郭公たのめし人のはやきまさなん

樹陰留客

逢坂の關ならねとも夏山は木の下陰も人はとめけり

正月十日比よりわさとなけれと風たへかたき(きい)に

おろしこめて春の行ふもしらすてありしに二月廿日

比にきやくせしにりう源あさりかこもりそらにてあ

りしにこそうへたりし櫻の花さきたりしをみてあさ

りにやりし

花みんとねこしにうへしわか櫻咲にけらしも風なふきこそ

あさりのこのむ歌のすかたになん。

返し

今年より君かかさしの花なれは千年をへてもちらしと思ふ
二月廿日ころほひ周防内侍いふ事ありてせうそこい
ひたりし返事に正月の十日比より風のわりなさにさ
し出る事もなくておろしこめて春の行ふもしらてな
んあるなどかとはぬと申たりしかは又をしかへして
身にしてみていとふ風とはしらすして花による共思ひける哉
返

青柳のいと吹みたる春風もいかにくるしき物とかはしる

別當殿る所に人々月前旅宿（情）と云題をよみしに

（金葉秋）
松か根に衣かたしきよもすからなむる月を妹（やみるらん）みるらんか

鳥羽殿北寝殿に始て渡らせ給しに松契週年題

今年より枝さしそむる松の木の花の折々君そみるへき

七條にて人々あそひし次によりし戀の歌

年もへぬつくまの神にことよせてなへの數にも人のいれ南

おなし所にて梅告春近題并戀

雪中につほみにけりな梅花散明かたになりやしぬらん

としまよりとわたる舟のともやかたやかたつれなき妹か心か

（金葉春）
正月雪の降たりしかは大納言公實の許に聞えし

あら玉の年のはしめに降しけは初雪とこそいふへかりけれ

返

（同）
朝戸あけて春の梢の雪みれは初花ともやいふへかるらん

藤大納言の鳥羽のとる所にて人々雨のうちの子規
又戀の歌よみしに

五月雨のいまきの岡の子規しとゝにぬれて啼わたる哉

戀

松の木の根にあらはれぬ我戀は人の心のかたきしなれは

右近のむまはに人々時鳥たつぬとて

郭公聲なかくに山ひこのこたふる里そうれしかりける

そのつゐてに人々戀をよみしに

うらもなく今はひとつに脇母子かあひみ初けん雲鳥のあや

閨五月朔日のひ新大納言の許に聞えし

猶きなけいまた五月そ時鳥おもひたかへて山へかへるな

返

またさらに初言とそまつ郭公おなし五月も月しかはれは

同じ歌を前左衛門佐基俊かもとにつかはしたりし返

事
つけさらはこそにならひて郭公ほとゝ山に入やしなまし

うちにみやゝに歌よむときこゆる女房共にけさう

の心の歌めして其聞え有殿上人かんたちめにたひて

かへし奉れと仰られしかは

恨みかねさよの衣を人しれすおもひかへせとなくさまぬ哉

返

ひたすらにさよの衣に事よせてうらなき人を恨みさらなん

十一月廿日比に平等院のあさりのもとよりかけの馬

を送りて

またしきに逢坂山を立出るこの月かけのこまはあらしを

返

もりこすはいかてかみまし逢坂のこの月影の駒そうれしき
はるかに月をおもふと云題を

心あらは今夜の月をから國の人もなかくてあらさためやは

月は旅のなかのともと云題を

舟出してすまの浦半によもすから月の光のさすをこそまで

松返年友

千年まですむへき宿の例にと岩根の小松けふそうへつる

秋花催興

よとともに野邊に心やあくかれん本あらの萩小萩イの花し散すは

紅葉

紅にふかくそ見ゆるふすまちのひきての山の峯のもみちは

戀

岩代の野中に立る結松いつとくへしとみえぬ君かな

おとこせむさきのさゐいんにわたりにてさふらひ給し

にくす玉たてまつるとて

けふ毎にたつねてひける菖蒲草ななき君かよはひ共哉

返たれにか有けん

菖蒲草玉のうてなに引かけてねななきためし君をみるへき

行宗の前兵衛のすけの許より扇かみこひにをこせた

りに例ならぬ事有と聞はいかにと有しかはやりし

にかく

なをさりの言のはをたにきかしとや扇の風の便りならすは

返

等閑の風のたよりと思ふなよこのかみくもかけて誓はむ

吾妹子にいかて知せんそなれ木の枝にもいはて年のへぬれは

中宮の堀川の院作りて渡り給て歌ありしに松返退年

万代の松のしけれ宿なれや千とせのみとは思はさらなん

院にて山家卯花題

通ひこし柴のかとうちみえぬまで卯花さけるみ山への里

人のこゆみをせちにこひしかは惜みかねて

そりたかききの關守かたつか弓心よはくもはられぬる哉

返

今よりはをしてをいはん手束弓かく思はずにはられぬるに

暮山落葉

くれぬとてかつちる山の紅葉はに嵐ふくよとみてやかへ覽

戀

しるらめや音にのみきくかつらきの山のみね共戀しき物を

月照菊花

いか計限なきよはの月なれや八重さく菊の數みゆるまで

小倉山峯のあらしの吹まからイに谷の梯もみちしにけり

駒にをくうつし心もなきまてに戀わたるとは人しるらめや

月

御笠山さしいつる月のくまなくも光のとけきよにも有哉

山家待花

あし曳のかた山きしに家ゐして峯の櫻の花まつわれは

中院にて初和歌見花延歸題

眺むれはをのゝえさへそ朽ぬへき花社千世のためし成けれ

江中納言匡房のもとに申へきこと有てまかりたりし

に櫻のめてたかりしを見て

君のみそたつねてみける櫻花おらまほしくも思ほゆる哉

又日返

春毎にきてみよかしな櫻花はなきかりなる宿といはせん

二月許圓融院翫花情人々よみにしに

主なくてあれのみまさる山里にさかりとみゆる花櫻かな
堀川院にうちわたらせおはしまして和歌有しに竹不
改色題

すへらきのなかれも絶す河竹の緑の色も色つくまで
潤二月有し時三月廿日餘比に待郭公和歌一首と書て
平等院阿闍梨許より

二月のそはさらませは郭公これは卯月と里馴なまし
返

日數にてほとそしりくる蜀魂春はゝるといかゝ聞けん
長治^{編別}貳年三月四日行事して三日おはしましゝた
ひ池上花題

岸近くにほふ櫻の花みれはしつえやきしのかさし成らん
春日にまうてたりしに莊嚴院法眼の坊にやとりたり
しに父の日歸らんとせしに酒なとたうへなとしてあ
る僧のよめりし

三笠山木高き松のなかれとそ君をは頼む千代の例に
返

三笠山松のなたての身なれ共千代のためしにひかれぬる哉
正月に人の卯杖をつかはしたりしに書付たりし歌
のイ

三笠山さしもはなれぬ君にけふいのりし杖をたてまつる哉
返

祈つる杖のたよりにみかさ山千とせの坂もさしこえぬへし
中納言の姫君の御もとに前齋院より正月七日子日に
あたりしにおほせられし

とにかくに心いとなき子日哉まつや若菜をつみにゆかまし

かはりて返

しらすやは子日の松にひきつれて千歳摘へきはかな成とは
白川にてつれ／＼なりしかは女房なとして題を(三歌)
くりくはりなとにしてとりしに紅葉を

散つる色もみるへき紅葉はなをかきみたる山下の風
おなしたひ人にかはりて女郎花
尋きて誰おさらん女郎花霧のまかきに立かくるとも
菊契千年

色も香もむつまじき哉菊の花千とせの秋のかさしと思へは
月照紅葉

うすくこき紅葉の色のみゆるまでくまなく照すよはの月哉
戀

思ひあまりおつる涙を忍ふれとをそふる袖の色に出ぬる
岩代の野中にたてるむすひ松とくへくもなき君か心か
浪かくる岸の額のめなれ木のめなれて妹とぬる由もかな
依花忘家

よとともに野へにて年や過さましときはにさける櫻也せは
つくしへくたらんとせしに永縁僧都鹿毛なる馬をを
こせて

立別れはるかにいきの松なれは戀しかるへき千代のかけ哉
返

浪路わけ遙にいきの松のみも心つくしに戀しかるへし
和歌合櫻

吹ちらす風なかりせは櫻花匂ふ日數の程はみてまし
詠花無擇處

いつこともわかぬ櫻の花なれは尋ねいたらぬくまのなき哉

十月十日比に成まで菊さかさりしに眞尊阿闍梨のも
とより大なる菊ををこせて枝にゆひつたりし

二葉より行末までにさかへつゝこれも八重咲しら菊の花
返

萬代のかさしと思へは年ことにとへとそおもふしら菊の花
藏人のしゝうの越後守のもとへわたりしふみに

諸共に千代へむ程を人しれすくれ行空をまつにそ有ける
返

千年經ん程はまことに知ぬへしくれ行空をまつとしきけは
たいこの座主のもとより此程なん花盛なるとありし
かは人々さそひてまかりたりしに

櫻花はな心にもこゝろみん此春風はふかすもあらなん
東山觀音寺といふ所にて藤の花いとめてたかりしに
人々藤并戀歌よみしに

ひたすらに今もむかしもわすられて心のかゝる藤の花哉
知るらめや晋にのみきくかつらきの山の峯とも戀わたる哉

此歌を聞て前兵衛の佐ゆきむねの許より
藤の花みね迄人のこゝろにも聞につけてそまつかゝりける
返

藤の花心にかゝる物ならは尋ねてまつさなさかみきらん
前木工頭俊頼朝臣の北山の花見に人々さそひて罷た
りけりさ聞て

春風にあらぬ身なれど櫻花たつぬる人にいさはれにけり
返

君か身は花ふくへしさみる物を風ならすさと思ひける哉
人々つれ／＼かりて戀歌よみしに

足引の山かへりなるはしたかのさも見えかたき戀もする哉

俊忠宰相家にて戀歌十首よみしに占戀

戀々てつけのをくしのうらをしてつれなく人を猶たのむ哉

きてはさまらぬ戀

〔金葉下〕
玉津嶋岸うつ波の立かへりせないてましぬ名残さひしも

ちかことの戀

〔千載戀二〕
うれしきは後の心を神もきけ引しめ繩の絶しさと思ふ

ふしなからまことなき戀

事ならはふす名も立ぬひたすらにうちもさけなん妹か下紐

いのれ共あはぬ戀

はふり子かいのりを神やうけきらん我錦木をとる人もなき

ついせうの戀

心をはいかにも君につくせ共雲のよそにて年をふるかな

偽にてあはぬ戀

こひしきを何につけてかなくさめ頼めし月日過ぬと思へは

〔金葉戀下〕
わきも子か聲立聞しから衣其夜の露に袖はぬれにき

いやしきをいとふ戀

雲鳥のあやしかりける身なれさも思初てし心はやまし

かたけれととくる戀

いか計みとのまくはひ契ありておやの諫にさはらさるらん

於七條亭人々櫻歌十首よみしに

今はゝやさきにほはなんさくら花鴈の草くきかくるへに鳧

常よりものとけく匂へ櫻花春くはゝれるとしのしるしに

〔金葉戀〕
櫻花咬ぬる時はよし野山立ものほらぬ峯のしらくも

さくら花匂はぬ春はなけれどもみる度ことにめつらしき哉
白雲とみゆるさくらの匂ひかなたかすむやとの梢なるらん
霞立くらまの山のうす櫻でふりをしてなおりそわつらふ
目かれせすなかもてをらん櫻花山下風に散もこそすれ
散つる鏡の山のさくら花面影にこそよるも見えけれ
驚の花ふみしたく山里は衣手さえぬ雪そふりける
春風の吹につけてや山櫻隣の松に花はかすらん
於大井河落葉浮水并戀

小倉山みねのあらしの吹からにとなせの瀧そ紅葉しにける
年ひさにゆけたの帶をとりしてゝ神にそまつる妹に逢ん爲
雲居寺上人百種物供養に花綿可相具和歌の山いひた
りしに

春風のふきくるからにしきたへの枕の上に花の散らむ
春情在花題

櫻花匂はさりせは何しかは春くる事のうれしからまし
桂の山庄にて暮山郭公并戀

夕附日入佐の山にときしまれおりはへてなくほとゝきす哉
おもひかね戀わすれ貝ひろへとも袖ぬれまさる沖津嶋守
水邊芦葉題

見渡はあしはをしなみ茂合て道たつゝし堀江こく舟
内府於東三條夏夜月并怨人戀

明るかとみる程もなくあけに鳧おしみもあへぬ夏のよの月
言の葉をたのまさりせは年ふ共人をつらしと思はさらまし

長實朝臣於八條亭歸路落葉并戀

家にもはくものふるまひ頼らん道さまたけにちる紅葉哉
我妹子は木曾のほきちにすまはねと何逢事のかたきしな覽

同亭霞并戀

雪消ぬ比良の高根も春くればそれともみえず霞たな引
いかにせん野澤におふる丸苔のまろすけもなき戀にけぬへし

曉尋花

夢さめていそきてきつる山櫻あさふく風のたゝぬさきにと

同日晚景戀

時しまれ戀まさりけり入日さす山のはひとと眺めすなゆめ

永久四年四月四日鳥羽殿北面和歌合有しに卯花

卯花の咲につけてや山里は夏のころもをおもひたつらん

郭公

深山出てまた里なれぬ子規旅の空なるねをや鳴らん

菖蒲

けふことに袂にかゝるあやめ草千世のさ月は君かまにゝ

早苗

種まきし早苗の稻や生ぬらんしつ心なく見ゆるさをとめ

戀

戀しなむ事をそ今はなけかるゝ終にあふみと成もこそすれ

百首和歌 堀河院初度

春

立春

うもなひき春はきにけり山川の岩間の氷けふや解らん

子日

君か代を子日の松とけふよりは千世の例にひかんとそ思ふ

霞

見渡せは春の氣色に成にけり霞たなひく櫻井の里

鶯

鶯〔金華春〕のなくにつけてやまかねふく吉備の山人春をしるらん

若菜

若菜おふる野をやしめまし今年より千年の春を積んと思へは

残雪

山里のかき根にのこる白雪は草のもゆるに消やはつらん

梅花

梅花咲過てくる春風はたかふる袖とおとろかれつゝ

柳

佐保山に柳の糸を染かけて心のまゝに風をふきくる

蕨

紫の蕨うちはらひ春のゝにあさる蕨のものうけにして

櫻

櫻花匂ふにつけて物もおもふ風のこゝろのうしろめたさに

春雨

霞〔新勅春上〕しく木の目春雨ふることに花のたもとはほころひにけり

春駒

とりつなく人やなからむ春の野にいはゆる駒のあしけ成哉

歸鴈

人ならはとはまし物を散ぬへき花をみすてゝかへる鴈かね

喚子鳥

小夜中にみゝなし山の喚子鳥こたふる人もあらしと思ふ

苗代

小山田に種蒔すてゝなはしろの水のこゝろにまかせつる哉

堇菜

雉子鳴山田のをのゝつほすみれしめさすはかり也にける哉〔千載春下〕

杜若

東路のかほやか沼のかきつはた春をこめてもさきにける哉〔金華春〕

藤

住の江の松にかゝれる藤の花風のたよりに浪や折けん〔をらん金華〕

歎冬

山吹の花咲里は春こそにをらまほしくもおもほゆる哉

三月盡

花の散事をなけくとせしほとに夏のさかひに春はきにけり〔いイ〕

夏

更衣

いつしかとけふたちきつる唐衣ひとへに夏とみゆるなり〔はイ〕

卯花

手玉ゆらしつはた布を織あけてさらしえたりとみゆる卯花〔かい〕

葵

昔よりけふのみあれにあふひくさかけてそ頼む神の契を〔ちかひをイ〕

郭公

時鳥夏の夜さへそうらめしきたゝ一聲にあけぬと思へは

菖蒲

よとゝもに通ふ淀野のあやめ草けふたか宿のつまと成らん

早苗

脇母子かすそわの田井に引つれて田子の手まなく取早苗哉

照射

五月間〔千載夏〕は山の峯にとす火は雲の絶間のほしかとそみる〔千載〕

五月雨

久方の天までもみえぬ五月雨にみくまか菅をかりほしかねつ

盧橋

吾宿の花橋や匂ふらん山ほとゝきす過かてになく

螢

大井河せゝにひまなき篝火とみゆるはすたく螢成けり

蚊遣火

わきも子にいかてしらせむ蚊遣火の下もえするは苦しかり鳧

蓮

つとめてはまつそ眺むる蓮葉を終に我身のやとりと思へは

氷室

夏の日も涼しかりけり松か崎これや氷室のわたりなるらん

泉

むすふ手に扇の風もわすられて牆の清水涼しかりけり

荒和秋

水無月の川そひ柳うちなひきなこしの板せぬ人そなき

秋

立秋

朝またき袂に風の涼しきははとふく秋になりやしぬらん

七夕

ひこ星のまれに渡れる天川岩こす浪の立なかへりそ

萩

萩か花しからむ鹿そうらめしき露もちらさてみる〔みまはしきにイ〕へき物を

女郎花

秋霧にかくれの小野の女郎花我たもとはは匂へとそ思ふ

薄

風ふけは花野の薄ほに出て露うちはらふ袖かとそみる

荊萱

鶉なくかりはの小野のかるかやのおもひみたるゝ秋の夕暮

蘭

秋の野に香さへ匂へる蘭きてみぬ人はあらしとそおもふ

萩

山里に吹おとろかす風なくはおきさへ音もせてやかれまし

鴈

古里はかへる鴈とやなかむらん天雲かくれいまそなくなる

鹿

終夜しつくの山にうらふれてつま〔こイ〕とひわふる小男鹿の聲

露

風吹はまつ打なひく浅茅生にいかてをくらん秋〔しらイ〕のよの露

霧

白波の音はかりしてみえぬかな霧立わたる玉川の里

槿

浦かせは浪やおるらんよもすから思ひあかしの朝かほの花

駒

引渡〔さ〕るせたのなか道空晴てくまなくみゆる望月の駒

月

山端にいさよふ月のたけ行を詠る我そ人なとかめそ

掃衣

衣うつつちの音にてよもすから人の心の程そしらるゝ

虫

夕去は過^{暮イ}うかりけり秋の野は我まつむしの聲ならなくに

菊 菊
うすくこく移ふ菊に置露はひといろならぬ玉かとそみる

紅葉 紅葉
浅からぬやしほの岡の紅葉はをなにあかなくに時雨そむ覽

九月盡 紅葉はのちりてつもれる木の本やくれ行秋のとまりなる覽

冬

初冬 昨日まで聲絶さりし小男鹿の冬こもりせるけさのけしきか

時雨 天つたふ時雨に袖も濡にけりひかさの浦をさしてきつれと

霜 霜 霜 霜
さむしろに思ひこそやれ篠のはのさやく霜よのをしの獨ね

霰 人目にはあられたはしる我袖を衣につゝむ玉かとやみん

雪 白鳥の鷺坂山を越くれは小篠か峯に雪ふりにけり

寒 葉かひせし芦もまはらに枯果てくきのわたりそ淋しかりける

千鳥 千鳥
よくたちに千鳥しはなく楸生る清き川原に風や吹らん

氷 氷
浪かくる岩はひまなくたるひして氷とちたる山川の水

水鳥 終夜霜やをくらむ水とりのはらふ羽音のたえす聞ゆる

網代 篝火をともしさゝりせばひをのよる網代の程をいかてしらまし

神樂 夜もすからとる榊葉にをく霜のとけさらめやは神の慮も

鷹狩 白ぬりの鈴もゆらゝに岩せ野に合せてそみるましらふの鷹

炭竈 炭竈のそことも見えすふる雪に道たえぬらん小野の里人

埋火 山里にひとりぬる夜は埋火も板まのかせに吹おこされて

除夜 門松をいとなみ立るそのほとに春明かたになりやしぬらん

戀 戀 戀 戀
おもひあまりけふいひいたす池水のかき心を人はしら南

初戀 不被知人戀 我戀はからす羽にかく言のはのうつさぬ程はしる人もなし

不遇戀 我戀はよし野の山のおくなれや思ひいれともあふ人もなし

初逢戀 播磨かたうらみてのみそ過しかと今宵とまりぬあふの松原

後朝戀

こひしさに我身そはやく消ぬへき何あき露のをきてきつ覽
遇不戀逢

神もきけ思ひもいてよ吳竹のたゝ一よとはいつかちきりし

戀(金葉體下)旅戀

戀しさをいもしるらめや旅ねして山の雫に袖ぬらすとは

思

何しかは人を恨むひたすらに心よはけにつけるおもひを

片思

かたしきの片思してすまの浦にたるゝもしほのからき頃哉

恨

思ひかねよるうらかへす唐衣うらみをれともしる人もなし

雜

曉

山里の笥の水のせはしきに猶有明の月そやとれる

松

玉もかるいらこか崎の岩根松幾世までにか年のへぬらん

竹

冬籠色かはりてもみえぬかな竹のよことに雪はふれ共

薔

雲かゝる青根か峯の莓むしろいく世經ぬらんしる人そなき

鶴

鳴海かた朝滿しほやたかゝ覽あさりもせなてたつ鳴わたる

山

嶺高きこしのを山にいる人は柴車にてかへる成けり

河

舟もなく岩浪たかきさかひ河水まさりなはこともかよはし

野

梓弓いる野の草のふかけれは朝行人の袖そ露けき

關

妹かりにくもの振舞しるからとなみの關をけふ越くれは

橋

東路のさゝの舟橋朽ぬともいもしきためはかよはさらめや

海路

おほみ舟したなに波はかくれとも藤戸をさして浦つたひ行

旅

思ひ出ぬ人のなきかなかやねかり袂露けき旅のね覺を

別

唐衣袖のわかれのかなしきにおもひ立けん事そ悔しき

山家

蛸の聲はかりする柴の戸は入日のさすにまかせてそみる

田家

小山田の稻葉の露にそほちつゝ人めもる身はくるしかり鬼

懷舊

末の世の人にみよとや岩代の野中の松をむすひをきけん

夢

うたゝねの夢なかりせは別にし昔の人をまたもみましや

無常

朝日まつ露はかりなる命にてなからへおもふ人そはかなき

述懷

なそやこは吾身は越の白山かかしの雪のふりつもるかな
(イ)

祝

君かためゆはたのきぬをとりして、神をそまつる万代迄に
 人々歎冬并船中戀と云題よみしに

我宿に猶ほりうへん山吹の花のおりにそ人もとひくる
ワイ

希聞郭公并戀

時鳥やそ山までに尋きてたゝ一こゑはきくへきものか
 妹か門我過ゆかん出てみよ戀にやつれてなれる姿を

新中將(雅定)渡中院初祝和歌鶴契還年

〔千載〕
 むれてゐるたつのけしきにしるき哉千年すむへき宿の池水

新中將家和歌合郭公

五月闇暗部の山の時鳥こゑはさやけきものにそ有ける

五月雨

五月雨に浅香の沼の花かつみそこの玉もと成やしぬらん

戀

〔下載戀三〕
 よとゝもに行かたもなき心哉こひは道なき物にそ有ける

未聞郭公并共憚戀

夏衣たちきる日よりけふまでにまつにきなかぬ時鳥かな

かた糸の思ひみたるゝ比なれや言つてすともあはまし物を

曉天水鶴并月戀

またし今は八聲の鳥もなきぬ也何おとゝるかすくゐな成らん
 ふき板のわれてもりくる月かけの戀しき人と思はましかは

海路子規并寄山戀

けふもなを舟出ものうし郭公こゑ高砂にたえず鳴なり
 わきも子に今はあふみと思へとも人めもる山苦しかりけり

五月雨のはれまもなくつれゝに侍しにつねにまし

かはす人々のをさなはさりしかはさきのもくのかみ

俊頼さきの兵衛の佐あき仲の君のもとにおなしこと

をいひつかはしたりし

何事か物せさせ給ふらんきこえさせてみつかきとい

とひさしくなり侍にけるかな明行は二見の浦のうら

めしくもくれ行は五月雨の空いとゝおほつかなき事

大井川におとす筏のいかなることきゝ給へるにかと

雲鳥のあやめられ侍りて空行鳥のすけもはんへるか
 な

〔後頼集〕

五月雨の空をなかくて過せともたえてをとせぬ時鳥哉

さきの兵衛のすけ

かうはしき御をとつれはてのまひあしのふまん所も

おほえすなんそもゝさゝかにのいとむつかしく心

のうちも五月雨のつきなきほとはまことにみつかき

の久しくをとのはの川のをとつれまいらせぬ事なんか

しこまり申

子規軒のしづくにをとなしのをとせぬうらみ誰もせましや

さきのもくのかみ

五月雨の晴間なきにつけても思かけすおほし出ける

事をうれしき涙衣の袖にかゝりける身のほとのおも

たゝしきをしら露のしらさりけるもをきところなき
 心地して本のしつくとなりはてむことをさへおしま
 か磯の千鳥久しくもなからへはやとおほけなきこと

は式嶋の大和みことのおそひのむしろにはなをちひ
ろのかすまへさせたまへと心のうちに思ひ給ふこ
とを大空にあらはれてかきつらねさせたまへる 鴈の
玉章をひらくにつけても袂のせはきうき身さへ敷そ
ふ身のありさまををしはからせたまふへきにや

蜀魄なけきの森にあかすして君かまつをはすきにける 哉

水風晚來

夕附夜むすふ泉もなけれとも志賀の浦風涼しかりけり

庭樹礙日并戀

みな月のてる日といへと我宿の檐のはかせは涼しかりけり
箱根なるねろの和草にこやかにつれなき人を見る由もかな

兵衛のかみの家の歌合夏風

夏衣裾野の草を吹かせにおもひもあへす鹿やなくらん

よかは

ぬは玉の夜川にともすかゝり火はさはしる鮎のしるへ成鳧

夏戀

つらきをもうきをも今は思餘たゝ空蟬のねをのみそなく

寄泉戀

つれもなき人もろともに手もたゆく結ふ泉と思はましかは

たなはた人々よみしに

天川たまはしいそきわたきなん淺瀬たとるも夜の更行に

月爲秋友

出るより入山のはのふもとまで心をそやるあきのよの月

九月十三夜詠月(和イ)歌并戀各一首

秋は今半もいまは過ぬるにさかりとみゆる夜半の月哉

寄森(露イ)戀

いかにせん我立ぬれぬわきも子にあはての森の木の下露
月照旅宿并戀

いさゝめにさそはぬ月と諸共に旅のいほりによをあかす哉
玉もかるからかの嶋のからき哉妹に逢へきかたのなけれは

詣住吉社

そのかみのかきしにしめし住吉の松のしつえは浪そおりくる

殘菊留秋題并戀

冬に今は成ぬときけは頼れす時そとみゆる白菊のはな
吳竹のよことに今はいさなへとふしみる事のありかたき哉

十二月廿日比に雪のいといたくふりたりしにつとめ
てもくのさきのかみ俊頼の君前の兵衛佐顯仲かもと

におなし歌をやりて侍し

雪ふれはふまゝく惜き庭の面をたつねぬ人を嬉しかりける

俊頼のきみかへし

我心雪けの空にかよへともしらさりけりなあとしなけれは

あきなかのきみ

人はいさふまゝくおしき雪なれと尋てとふは嬉しき物を

山寒花遲并戀

吉野山春は半になりぬれと雪きえやらて花さかぬかも
まとりすむうなての杜のうなたれてねをのみそ鳴人のつらさに

於桂山庄花纔殘并戀催舊意

櫻花青葉の中に散のこる梢や春のとまりなるらん

思出よあまのかこ山よそにのみ聞わたらむといつか契し

同山庄にて花並戀人々よみしに

木の下に衣かたしき旅ねせん花散里とみてやかへらん
もしほやくあまをとめ子か麻衣あさましき迄人のつれなき

土佐守播磨守のもとへわたる目歌とこひたりしかは
万代を契りはしむるけふなれはくるゝさへ社久しかりけれ
人々歎冬藏橋并戀題をよみし

かよひこしむての岩橋たとるまで所もさらすさける山吹
我せこかきまさぬ時はうちなひき獨有明の月をこそみれ
平等院僧正講結願日人々止宿菴題を

かとのとの草のいほりにやとりして我身の程を終に知かな
雨中郭公并戀

五月雨にしつくの山の郭公しのゝにぬれて小夜中に鳴
關守か弓にきてふ槻の木につきせぬ戀に我おとろへぬ
詠盧橋薰風和歌

夕月夜花橋にふく風をたか袖ふるとをもひけるかな
たのめてこぬ戀

契こし程は過ぬとおもへとも待とはいはし年もこそふれ
待聞郭公題并戀

夏衣たちきし日より杜鵑ぬるよもなしに今ぞ鳴なる
よとともに浪こす磯のそなれ木の下枝や戀の衣成らむ
草花告秋題院人々

露結ふ秋にははやく成にけりあさちか花の移ふみれは
曉知早涼并戀

秋風やや立ぬらん夢覺てたもと涼しく成も行かな
戀をして年のへぬるに女郎花うらやましくも結ふ露哉

月不撰處并契今夜戀

柴の庵も玉の臺も空晴ておなし心にすめる月哉
いつとなく思ひしよりも中々にくれ行空をまつにけぬへし
さきのもくのかみ俊頼の君いせにくたりて後久しく

をともしせさりしにかなんいひをこせたりし。ひな
のわかれによろつをとろへはてゝおほつかなきおほ
よとのつねにもせさせたまふちふねのよるひるは浪
のこゝろにかけなから月日の過にける事もなけきの
森のときはなるうへに薪をつめるうれへは身にそへ
る影のことくにして鈴鹿の關にもふりすてられすし
ふく山をもすへらかに越にければさもあはれなりけ
る身のありさまをもてあつかひて。しらぬさかひに
もまとひけるかなと袖のしからみところせきまゝに
はたゝはまおきのおりふしことにはなをよきさまの
つらにかすまへさせたまへかしと人しれすあふかれ
て。おもひてもなき都なれとさゝかにのほそかりけ
る事なれば。くすのうらはの風になひくもめにとゝ
まりて。さりとしてやはいそきたつを聞て野にたつし
かのまうさする人もなきにはあらねは。いてやいつ
こにもつゐのすみかならねは釣するあまのとさため
かねてやすらはるゝほとに残すなき身のありさま
は旅の空よはの煙とも立のほりなは。あまのいさり
火かとおほめかれんこともをのつから哀とはかりや
つたへきかせ給ふらんと水くきのあとかきなかされ
ぬまゝにはこれにもつきぬ心地するいふせさまたゝ
をしはからせたまふへし

〔俊賴集〕

とへかしな玉くしのはにみかくれて鵲の草莖めちならす共
とありしかはかくなん
つかひのたゝいまくたればとて。とく／＼とせむる
に何事もおもひもあへぬほとにて。すなはち千はや

ふる神無月のついたちのひなんいろ／＼のことは
は見給へ侍ぬる誠にみつかりのいと久しくも聞えさ
せて侍けるかな花の都をふり捨てすゝか山越させた
まひしにさりともしふく山のなをたのみをも玉く
しかとかひなくなのみして過給ひにけりとうけたま
はりてくちおしくて過侍しかと。つゐにはいせの海
の浪立歸り給はさらめやそのときこそはほしあひの
はまの眞砂のかすをつくして。おほつかなかりしほ
との事をもきこえさせめひなかのはまのほとはかり
たにもたいめんせてやはとむら松のはまを頼てすき
侍るほとにあはせてもたれそのもりのたれも。いく
りのゝ人を聞事もふちかたのかたくてなに事も岩木
のことにてのみなんうきはしのをろかなるさまにお
もはれたてまつりぬるかな

〔餘韻集〕

しらす
やは伊勢の濱萩風ふけは折ふしことに戀渡るとは

院北面にて郭公はしめて聞と云題又戀

卯花のかきねならずは時鳥いつしかけさの聲きかましや
武藏野のうけらか花のいとなく咲みたれたる戀もする哉

院北面にて橋上藤花と云題

薄く濃くのとかに匂へしつゝえまて常葉のはしにかゝる藤波

郭公并戀人々よみしに

色ならて身にしむ物は子規信田のもりのしのひ音のこゑ
夏引のいとしも人はしらしかし心にかけて年ふるわれを

旅宿郭公并戀人々よみしに

折しまれしつ心なし時鳥たひねの空になく聲聞は
河内めか手染の糸のみたれ合てよりあふへくもみえぬ君哉

かすみ

ひはりあかる時にしなれは吉野山をこともみえす霞たな引
歌合に三首 贈左大臣家

子規なける渡りは關なれや行かふ人のすきかてにする

〔詞花〕

種まきしわか撫子の花さかりいく朝露のをきてみつらん

いたつらに花のみ咲て玉かつらみならぬ戀も我はする哉

さきのもくのかみとしよりの君の七月廿三日なん伊

勢へむすめをゐてくたり侍人のこになきんとてなん

ひとへにまれはかまにまれことさらにとてこひたり

しかばひとへはかまなとしてつかはしゝにたもとに

かき付侍し

今年よりかさしにしむる女郎花千世の秋をは君かまに／＼

返
女郎花うれしき涙をきそへて露けかるへき旅の道かな

皇后宮にて庚申夜晩風如秋并戀

夕されは風のけしきの涼しさに鹿鳴ぬへき心ちこそすれ

いかにせむ新嶋守かあさ衣あさましきとてあはぬ君哉

おなし夜又草の花をまつ并戀

おもふとち露打はらひみにゆかん花のゝ萩のはやもさか南

ますらおの弓にきるてふ槻の木につきせぬ戀も我はする哉

山のかけ水にうつる并戀

龜山のかけをうつして大井川いく世まてにか年のへぬらん

いかにせむしほれ衣にあらねとも夜毎に人をかへす君哉

祝

二葉なる松をひきうへて頼むかな万代迄のかさしと思へは

はな橋砌に匂ふ

しらぬことを人のまうせるによりて 白河院の御かし
こまりなる比唐の鏡の一尺はかりなるを 北野にたて
まつるとてかきつけし

身をつみて照しおきめよます鏡たか偽もくもりあらずな
そのことのあらはれにしこそ 世のすゑこともなく
哀なりしか。

年比の人かくれにしかは山里にわたりてとかくのこ
とはするにすゑにもなりぬれはことさらに京にいて
そめて曉かへるに鳥の鳴はへりぬなと人のいそけは
いつのまに身を山かつになしはてゝ都をたひと思ふ成らん
わきのことゝもはてゝみな人京へ出ぬれと我身はな
をしはしと思ひてあるにしくれのせし 日中將の上の
もとへ

たれもみな花の都へちりはてゝひとりしくるゝ秋の山里
身のうれへあるころかもにまいりて

わかたのむかもの川波立かへり嬉しきせゝゝにあふ由もかな
其後氏人の夢に。この歌を御殿におせりけるを。歌
かきたるかたを。御前にむかへてをせとおほせこ
と有ければ。しかなんをしなをすとみたまへしと
かたりしはまことにや。

なき人のために西山なる所にて 經供養するにきたれ
る人々くれにければとまりて 山家春深といふことを
よむに

鶯のなく音はかりや春ならむ花ちりにけるみ山へのさと
大貳の許に東國よりくるき馬のいてきたる名をはう
しのことなんいふをたひゝものすれとおしまるれ

は

かゝりける心つくしの牛のこをたれあつまちの駒といひ劍
源伯西宮にて歌合し侍りしに 寄月述懷

難波江のあしまに宿る月みれは我身ひとつもしつまさり鳧

薄戀

いつとなく忍ふも苦ししの薄ぼに 出て人にあふよしもかな

蘭戀

わきもこがすそのに 匂ふふちはかま思ひ初てし心たかな

菊祝

君か世は限りもしらす長月のきくをいくたひつまむとす覽

こもりゐたりし比月のあかき夜平等院僧正(行尊)のも
とにたてまつりし

身をつめはたな引雲もなき空に心ほそくもすめる月哉

冬の春日祭に奉幣すとて身のしつみゐる事を思ひて
御幣にかきつけし

〔詞花雜上〕

枯はつる藤のすゑはの悲しきはたゝ春の日をたのむ計そ

或所に淡路といふ女房にたひゝせうそこすれとか

へりこともなけれは

いかにせんとふひも今はたてわひぬ聲も通はぬあはち 嶋山

つれなくて過る女の人にかたらひつきてあつまのか

たへなんときけは心ほそくおもひけるにあはつとい

ふ所よりいひおこせたりし

忘るなよあはつつの原のあはすとも今かへりこん葛の末はに

返し

あはつのゝ葛の末葉のかへるまでありやはすへき露の命は
國なともさりにし後さてのみやはとて公文かむかふ

るに左大弁宰相爲隆勘解由使長官なれはきたする文
などあるほとに消息ありみれは立春に後今日のつか
さの奏にあはせむとていそかせたまへはとくるよし
かむかふるつかさのおさなかめて侍て御使につけて

夜をかさねあかたの水の凍れるをさの春風けふそときつる

返し

春風にあかたの水とけぬれは沈むみくつもあらはれにけり

詞花雜上
歌合し侍しに月

よもすからふしの高ねに雲消て清見か關にすめる月影

紅葉

山姫にちへの錦をたむけてもちる紅葉はをいかてとめん

戀

つらからむ言のはもかなわひつゝは恨てたにも慰めにせん

此後判者の前左衛門佐某俊の許へ又歌合すへしこの

たひも判したまへと聞えたる返事に

諸越のたまつむ舟のもとりけは思ひ定めんかたもおほえす

これは人々何こといひあはれたることにやとて

風をいたみたまつむ舟のもとりきは君はかり社まほに定めし

播磨守宗成朝臣歌合せしに月

いかばかり隈なくてらす月なれは心のやみもはるゝなる覽

鹿

山ひこのこたふる山に鳴鹿はおのか聲をやとときくらむ

戀

あつまやののきのかやまの忍草こひをは人の忍ふ物かは

琳賢かもとより酒をなくるとて萩花さかりはよきさ

け世中になしこのころよき酒とりいてたるかめには
かならず物をいれてなんかへすといはせたれは近江
守なりしおりにて坂田郡の檢田の廳宣をいれてやる
とて

野へに出て露けき華をみるよりも秋はさかたの數を數へよ

返し

數ふへき山田のつほの内にいれは萩の情けにしく花そなき

八月十五夜中宮御方にうへわたらせ給ひて月の歌人

人よませさせたまひしに

なにかき今夜の月をみる程や心のうちのはれま成らん

播磨守家成朝臣歌合せしに落葉

くれなるにたきの白糸そめてけり峯の紅葉やまなく散らん

祝

いくらとかいふへかる覽萬代も君かためにはかすならぬ哉

火きりとて近江より貢御にまいらすもちゐは國司

のれうはことにおひたゝしくおほきにて人々のそう

するを前左衛門佐某俊君のもとへふるとて

よしあしも清き鏡そてらすなる心のほとはこれにてをみよ

返し

はし鷹の野守のかゝみなられともよそなる人の心をそみる

身ののそみかなはて世中すさましくおほゆるころ人

のもとにつかはしける

浮身には都のてふりあきはてぬ鄙へ誘はんあつまつもかな

大宮中納言歌合に櫻

しら雲のたな引岑の櫻花かほらさりせはいかてしらまし

鶯

鶯の花のねくらにとまらずは夜ふかき聲をいかてきかまし
霞

炭かまの烟にむせふをの山は峯の霞もおもなれにけり

月

山のはに關守すへよたつた姫おしむもしらぬ月やとまると

紅葉

苔のむす岩かけまゆみ色ふかしこれを嵐にしらせすもかな

戀

情なきことのはさへも懐かしき戀しきなかに通ふと思へは

内にて遠聞掃衣の心を人々によませさせたまふに

たかためといそくなるらんよもすから櫛のしま人衣うつ也

雨後草深と云題を

かそいろと頼むもしるし夜はの雨に小萩か原のたけそ増れる

鍛冶井宮法印世をうらみて大原にこもり給へるに

しはすばかりに奉る

すみかまの烟はかりはたゝすとも山里いかに淋しかるらん

華のさかりに人々まうてきて花の下におりゐて偏愛

花といふことをよむに

我宿のものともいはし櫻花かゝる月日はあらしと思ふ

灌佛

世中にけふそ佛の立いてゝあらはれたまふ水はくみける

郭公

時鳥さてしもやまし物ゆへにおもはせたりや小夜更るまで

七夕

月の舟光りをさしていてぬめりこや彥星のあまの戸わたり

重陽

同しくはこゝのへにさけ菊の花月日の數にかなふはかりに

歳暮

はかなくてくれぬる年を數ふれは我身も末になりける哉

晨明月

三室山みねにあきひのうつるへは立田の川に月そのこれる

百瀬川

名のみしてさしも嵐を百瀬川ゆゝしき瀬をは我そすきにし

祝

君か代にくらふの山の岩ね松いくたひはかりおひ變りなん

長承(崇徳)元年十二月廿三日内裏和歌題十五首春

その色とめには見えぬを春雨の野への緑をいかてそむらん

歸鴈

契りけん程やすきぬと急くらむよるもすからにかへる鴈金

梅

かほらすはたれかしらまし梅花しらつき山の雪のあけほの

夏夜

まことにやあかしかぬらん夏のよを獨ね覺の人にとはゝや

照射

梓弓たかまと山にともすひはほくしにかけているにや有覽

瞿麥

朝またきおれふしにけりよもすから露をきあかす撫子の花

虫

聲たかしすこしたちのけ菴さこそは草の枕なりとも

霜

かるの池の入江をめくる鴨とりのうはけはたらに置る朝露

千鳥

あふみちや野嶋かさきの濱風に夕波千とり立さはくなり
落葉

紅葉はをよもの嵐はさそへともみなこのもにかへる成鳥

初戀

昔より人まとふとはきゝしかと戀てふ山にけふよりそいる

忍戀

淺ましや千嶋のえそのつくるなるとくきのや社ひまはるなれ

會不逢戀

ひと夜とはいのらさりしをかひもなく心定めぬうき嶋の神

近衛院御時大嘗會和歌

悠紀方 近江國

風俗和歌十首

從三位行左京大夫兼近江守皇太后宮亮藤原朝臣

稻春歌

野洲郡

人心やすのこほりときくなへにつけとつきせすはこふ稻哉

神樂歌

三上山

千早振みかみの山の榊はをかをかくはしみとめて社とれ

辰日參音聲

高御倉山

雲かゝる高みくら山のほる目のはるかに見ゆる君か御代哉

同日樂破

玉蔭井

濁なきたまかけのゐの底清みすみよき世にもあひにける哉

同日樂急

長等山

〔玉簪賀〕
君か世はなからの山の岩ね松ちたひやちたひ花の咲まで

同日退出音聲

安良郷

やすみしる我おほ君の御代に社いとやすらの里も富ぬれ

巳日參音聲

佐野船橋

四方の海波もとせぬ君か代とよろこひわたるさの、船橋

同日樂破

朝日郷

いつしかと朝日の里をたちいてゝ急きもはこふみつき物哉

同日樂急

大富山

萬代とおほとみ山そよはふなる久しく君をさかゆへしとか

同日退出音聲

秋富村

君か代はたのしかるらし常よりも年へてみゆる秋とみの村

御屏風六帖和歌十八首

甲帖 正月

長峯山小松多生

君か代はなかみね山に二葉なる小松の千たひおひかはる迄

見遣岡有摘若菜人

はるゝとみやりの岡の若菜こそ千歳の春はつむへかりけれ

梅原梅花盛人翫之

何れをかわきてもおらん梅はらは心にそまぬ色し見えねは

乙帖 三四月

青柳村樹尤多

〔玉簪賀〕
君か代はたみの心の一かたに驛きてみゆる青柳のむら

白雲山櫻花盛開行客見之

八重たてるしら雲山の櫻花かほるはかりやしるし成らん

山吹崎歎冬開敷行人見之

いはね共くちなし色にしるきかなこや音にきく山吹のさき

丙帖

五六月

長澤池有採菖蒲人

年毎にたえずひくかな菖蒲艸もなかさの池をたつねて

千藏里植田甚多

見渡せはちくらの里にあまるまで敷もしられすとる早苗哉

常夏里毎人家罌麥開

宿毎にうへける花のかひありて咲みたれたるとこなつの里

丁帖 七八月

石瀧水如糸

昔より名になれたる岩瀧の水のしらいといくよへぬらん

千草原色々草花開敷

色々の千草の原をみわたせはいくらはかりのにしき成らん

玉井宿月

くもりなくすむ玉のゐにいとしく光をそふる夜はの月哉

戊帖 九十月

板倉山山田多積稻人見之

〔詞花雜下〕
板倉の山田につめるいねをみておさまれるよの程をしる哉

會坂關運調物人馬多

貢物はこふよほろしおほければみちもさりあへす逢坂の關

鏡山紅葉盛客見之

日にそへてあかくそみゆるかゝみ山紅葉の色や深く成らん

己帖 十二月

鷹尾山付鷹狩人

御狩するたかのお山にたつきしや君か千とせのひつき成覽

益田杜祭神所

すへらきを守り益田の森なれやあから柏のあからめもせず

高宮里白雪尤深

あさまたきふりさけみれば白妙の雪つもれるや高宮の里

康治(近衛)元年十月三日攝政殿(忠通)舍利講の次にふみ

つくらせたまひて願成佛道の心を被講に歌もある
へしとてめしありしかはまいりて

〔詞花雜下〕(かイ)
いかてわれ心の月をあらはして闇にまさへる人をてらさむ

人々來て歌よむに海邊月を

すみの江にやとれる月の村雲は松のしつえのかけにそ有ける

月照菊花といふことを新院のよませたまひしに

いくへとか籬のきくを思はまし今夜の月のなへてなりせは

ひえにまいりて客人宮の御前にてこれしら山のお

はしますときゝしかはむかし加賀守にて神拜にまい

りしことをおもひいてゝ

年ふともこのししら山わすれすはかしらの雪を哀ともみよ

新院仁和寺殿にて人々に和歌よませたまふとて中

務大輔季宗かこひしに松間紅葉といふ題を

住吉の松の絶まの紅葉にやつもりの蟹はあきをしるらん

右衛門督宗成卿東山にて山家初雪といふことを讀し

に

小夜更にかけひの水のとまりしに心はえてき今朝の初雪

夏月

夏引のいとのみたれもかくれなくこやのしのやを照す月影

新院にて野徑眺望

ますらおか朝ふむのちをみ渡せは雲の遙かにかゝるせこなは

九月十三夜九條殿にて女院御堂にて和歌有しにいた

はることありてえまいらぬをとのよりせめておほせ

らるればはうゝまいりて月戀またもありしかと覺

えす

くれのあき月の姿はたえねとも光は空にみちにけるかな

人まねの戀にそ老はわすれぬるむかしの心いまたありけり

左大臣殿（親長）の中納言中將兼長春日祭上卿にくたり
給ひしに前馬助範綱か二郎子清綱をいみしくしたて
てしのふすりのかりきぬなとをさせたりしおもふと
ころあるやうに見えしかは又の目たれともなくて範
綱かもとにさしをかせし

〔千載雜上〕
さのふみし忍ふのみたれ誰な覽心のほとそかきりしらぬ

老の病目にそへてよるつもおほえねと南おもての花
さかりなりときゝて例のことなれば人々に案内して
花の宴せしに

命あれは多くの秋になりぬれと今年はかりの花は見きりき

此はなつねよりもめてたかりしをわすれかたけれと
きのふの名残にみたれこゝちまさりてさしいつへく
もおほえさりしかば友人しておりにやりて見るにつ
けて

かはよりの花の匂ひををきながら又もみきらん事を悲しき
このゝち病おもくなりて五月七日なむかくれはへり
にける

金葉集
いとしかと明行空のかすめるは天の戸よりや春はたつらん

郭公をよはる

郭公あかて過ぬる聲によりあとなき空になかめつるかな

新院のおほせことにて百首歌奉けるによめる

詞花集
天川よこさる雲や織女の空たきものゝけふりなるらむ

千載集
梅の木に雪の降けるに鶯のなきければよめる
梅かえに降つむ雪は鶯の羽かせにちるも花かとそ見る

崇徳院に百首の歌奉ける時花の歌とてよめる

同
かつらきやたかまの山の櫻花雲ゐのよそにみてやすきなん
卯花をよめる

同
村々に咲るかきねの卯花は木のまの月のこゝち社すれ

崇徳院に百首の歌たてまつりける時よめる

同
五月雨の日數へぬれはかりつみし賤やの小菅くちやしぬ覽
難波かた入江をめくる蘆鴨の玉もの床にうきねすらしも
百首の歌奉ける時別の心を

同
たのむれと心かはりて歸りこはこれそやかての別なるへき

同
おもへともいはての山に年をへてくちや果なん谷の埋れ木
砂の尾上の松に吹かせの音にのみやはきゝわたるへき

同
よそにしてもときし人にいつしかと袖の半をとほるへき哉

同
年ふれと哀にたえぬ泪かな戀しき人のかゝらましかは
百首歌たてまつりける時旅の心をよめる

同
東路の野嶋かさきの濱風に我ひもゆひし妹か顔のみ倂にみゆ

同
花十首歌讀侍けるに

新古今集
篋まて
尾上の櫻ちりこすはたなひく雲と見てや過まし

同
秋風にたなひく雲のたえまよりもれ出る月の影そさやけき
年比住ける女の身まかりにける四十九日はてゝ猶山

同
里にこもりゐてよみ侍ける

たれもみな華の都に散果てひとりしくるゝ秋の山里

同
冬月をよみ侍ける

新勅撰集
雪ふかき吉野の山のたかねより空さへさえて出る月かけ
としふとも猶いはしるの結び松とけぬ物ゆへ人も社しれ

物の名
ときのふた

〔同難〕
つらけれと昨日頼めし言のはに今日迄生る身とは知らずや

續後撰集
久安百首歌霰

さらぬたにね覺かちなる冬のよをならの枯葉に霰ふる也

戀の歌の中に

同
いかにせん玉江の芦の下ねのみ世をへてなけとしる人もなき

法性寺入道關白家に恨戀といふ心を

〔同〕
つらしとて心のまゝに恨ても後は思ひにたへんものかは

題しらす

〔同〕
思ふこと晴せぬ比はかきくらす時雨もよその物とやはみる

契不逢戀の心を

續古今
僞とかつしりなからけふまてに頼むや戀の餘りなるらん

久安百首歌奉ける時

新後撰
うちなひき春立きぬと鶯のまた里なれぬ初音なくなり

命をそちる花よりもおしむへきすかに咲ぬ春しなけれは

同
隠れぬにおふるあやめもけふは猶尋ねてひかぬ人やなか覽

久安百首歌に秋のはしめの歌

同
衣てのまた薄けれは朝またき身にしむものは秋のはつ風

返し

王集
家の風吹つたへすはこのもとにあたら紅葉のくちや果まし

新後拾
家に歌合し侍ける時郭公

時鳥なきて過ぬる一こゑのいかで心にとまるなるらむ

八條入道前太政大臣右兵衛督に侍ける時家に歌合し侍けるに寄泉戀

同
我戀はむすふ泉の水なれやたえすなかれて袖ぬるゝかな

春生人意中といふことを

風雅
春來ぬとおもふはかりのしるしには心のうちそ長閑也ける

新千載
織女の天の岩舟こよひこそ秋風ふきてまほに逢ふらめ

久安六年崇徳院に百首歌奉ける時

新拾遺
人つてといはぬはかりそ郭公聞ともなくて過ぬなる哉

旅の心を

同
草枕袖のみぬるゝたひ衣おもひたちけむことそくやしき

久安百首歌たてまつりける長歌

〔新拾遺〕
うき身にはよのふる事もたのまれすいつれかいつれ

おほつかなことほりなれやまさきもくのひはらの山の

そま人のうきふししけみまかりきといとひすてたる

身なれとも心にもあらずたちましりかなしきまゝに

かりかねのひまなくなけとあはれてふ言のはをたに

きかせねはなくもゆかんとかはらぬをたゝ身のとかに

なしはてゝこの世のことを思ひすて後の世をたにと

おもひつゝ「うき世の中を立いつれと子を思ふ道に

まよひつゝ」行へきかたもおほえぬは天の川なみつねなき名をも

立かへり空をあふきて在明の

なかしつる哉

反歌

身をしらていふはかひなき事なれと頼めは人をも思ふ計りそ

おなし心を

新後拾遺

河のせにおふる玉もの行水になひきてもする夏秋かな

右雖人ニ勅撰ニ不見ニ家集。

子規負

郭公夏くはゝれる年とてもみのくせなれやとこめつらなる

豊泰勝

から錦しくとこなつの花なれは宿のかきりと誰かみさらん

戀勝

今はさはあひみん迄はかたらはん命とならん言のはもかな

右三首修理大夫顯季家歌合。

水風晚來

またきより秋はたつたの川風の涼しきくれに思ひしらるれ

右左京大夫顯輔卿集以兩本校合了

群書類從卷第二百四十六

和歌部百一家集十九

從三位賴政卿集

春

立春

あふ坂の關にし春をとめては山のこなたは霞さらまし
おなし心を倭成卿家十首會内

冬こもる吉野の山の岩屋には苔の雫に春をしろらん
おなし心を實國卿家歌合

めつらしき春にいつしか打とけて先ものいふは雪のした水
故郷(靈村イ)霞歌林苑會

ほのかにも梢はみえし故郷をおもひやらする朝霞かな
霞播州歌合

ひきわたす大原山のよこかすみすくにのほるや煙なるらむ
霞隔關路

春くれは先そたちける相坂のせきもる物はかすみ成けり
おなしこゝろを

宇治路行すゑこそみえぬ山城の木幡の關を霞こめつゝ
海邊霞大貳重家卿會

春霞へたつころはしら浪の越ともみえすすゑの松山

おなし心を

あきさゝるうななみかたを見渡せは霞にまかふ信太の浮嶋
晚霞公通卿十首會内

狩ゆけは交野の御野に立鳥の羽きはもみえぬ夕かすみかな
鶯

ふる巢より若木の梅の初花にわたりそむなる鶯のこゑ
竹間殘雪

吳竹の夜な／＼雪のやゝきえてもとのいくふしまた歸る覽
池水浪靜といふ事を歌林苑にて

春風や波たつ計ふかさらんかた寄もせぬ池のうき草
松上鶯

若和布刈春にしあれは鶯も木傳ひわたる天のはし立
毎朝鶯を聞といふ事を二條大宮にて人々よみ侍しに

日數行たひの庵を立ことにきゝ捨かたきうくひすのこゑ
ある宮はらなる女房に申かたらひて時々まかりかよ

ひける程にあし分成事や有けむ久しうまからさりし
かは二月の朔日頃梅の枝につけてつかはしける

きまさすはさても散なて梅花なを待かほににほふ様みよ
かへし

梅の花ちは散なんちりて後それ故ならてゆかむと思へは

よろこひして侍りける頃あひしりたりける女の悦ひ
つかはさゝりしかは(これより)つほみたる梅の枝に
つけていひつかはしける

またしとや梅を見つゝもとはさらん開くる物を我か思ひは
返し

かねて我思ひひらくる梅かえに並ふ人なき身なるへしとは
隣家梅清輔朝臣家會

一枝もおらぬとなりの梅花にほひはえたる心地こそすれ
新院(雲德)御時里内裏におはします頃大内に候けるか
綾綺殿の前の梅のはな盛にはへりけるを小舎人して
おりにつかはしける枝に結びつけて奉りける

九重の内にゝほへる梅の花とへはちらさしとおもひし物を
返し兵衛内侍

九重のおなしみかきの内なれはあたにはちらぬ花と社みれ
年ころ住侍りし所を大宮の御所にかへめされてつき
の年の春梅咲たるよしを聞て下枝にむすひつけさせ
侍し

昔ありしわらやは宮に成にけり梅もやことにほひ増らん
かへしよみ人しらす

むめの花むかしを忍ふ妻もやと待かほに社にほひましつれ
梅花薰窓中

東風かせの梅ふくかたに窓をあけて匂ひを聞の内に入つる
二條院御時禁中柳垂

紫もあけもつらなる庭の面に又みとりなる玉柳かな
雨中柳伊賀入道會

春雨に柳のかみを洗はせてけつり流すは風にそ有ける

鶯

谷近き宿に來鳴やうくひすの里なれそむるはしめ成らん
梅契多春

よろつ代の春まで咲ん宿の梅を命もかなや手折かさゝむ
鶯爲春友

谷にてもつゐの友にや鶯のまたきにきつゝ我ならすらん
待花似戀

いもか事戀しき花のひらけなは我こそさゝめ聞のかさしに
きさらき廿日頃に大内の花みせよと申人に未ひらか
ぬはなに付てつかはしける
おもひやれ君か爲にとまつ花の咲も出ぬにいそくこゝろを
返し小侍從

逢事をいそく成せは咲やらぬ花をはしはし待もしてまし
南殿のはなみに大納言實房卿女房あまたひきくして
大内にまいりて待けるにいひつかはして侍し

あたならす守御垣のうちなれと花こそ君にさはらさりけれ
返し
九重のうちまで人を尋いれははな吹風をいかゝいさめむ

南殿花盛にさふらひける頃内の女房里内裏よりみに
まいりて歸さまにあふきのつまを折て書付て花のし

つえにさしはさまれたるをみれば
百敷の花に心をとゝめ置て歸らむ道にふみやまとはん
かへし

花にあかて道にまとはゝ留けむ心の方へ歸れとそおもふ
二月朔日頃に花またしき程にならよりつくりたる櫻

をませくた物のうへにかさしてつかはしたりけるを
ひとりみむか口惜きにむかひ成所に櫻の梢のみゆる
かまた咲ぬ程にあるしのもとへ此造花をつかはすと
て

君かすむ宿の梢のさかぬまにめつらしかれと花たてまつる
返し

身さへなりちらてやむへき花みれは宿の梢はまたれさり鬼
花

さくら花みるにつけても懷敷ちりなむ後のかねて惜さに
春月經盛卿家歌合

暮ぬまは花にたくへて散しつるゝこゝろあつむる春夜の月
花下月明右大臣家歌合

花ゆへになかしと思はぬ春の日をやかて暮きて見する月哉
春あつまのかたへまかるに花の咲たるをみて

東路や春のむかひに行旅はさきあふ花にえこそちかはれ
人々あまたくして花み侍しに法性寺にて

咲まさる木すゑやあると尋すは長閑にやとの花ばみてまし
白河にて人々花見侍しに

をのつから花の下にし休らへはあはゝやと思ふ人もきに鬼
深山花

太山木のその梢ともみえさりし櫻は花にあらはれにけり
山さくら散もちらぬもしら雲のかゝる限はえこそみわかね

となりなる所に櫻の咲たりけるか梢計見えければあ
るしのもとへ

櫻なく梢をみれとよそなればそなたの風を待としらなん
返し

花さそふ風を待えて嬉しくはやかて隣の歎とをしれ
尋山花宰相入道歌合

はなさそふ山下かせの香を留て道にもあらぬ道をふむかな
遠尋花

くやしくもあさるる雲にはかられて花なき峯に我は來に鬼
水邊櫻

咲影の水にさなから移れるははなのすかたの池にそ有ける
さくらを重家卿歌合

あふみちやまのゝ濱邊に駒とめてひらの高根の花をみる哉
おなし人のもとにて花のうたとて

散はてゝ後やわか身に歸りこむはな咲宿にとまる心は
花播州歌合

さくら花さける盛は梢より外に心も散すそありける
花

散ぬれば程をへたつとおもへはやかつみる花のかねて戀しき
我やとの花はねたくやおもふらんよその梢にわくる心を

つねよりも花の梢の隙なきは立やならへる峯のしら雲
さくら咲梢はそらの白雲にまかひし花の雪とふりぬる

けふいく日同し所にゐる雲とみゆるは花のさかり成けり
人々白河の花みられしに歡喜光院の花の下にて歌よ

みさふらひしに
としことに哀とそおもふ櫻はなみるへき春の數もうすれは

尋花の心を歌林苑にて
たつねくる我こそ花を花とみれ人のよそめはみねのしら雲

歌林苑にて人々花のうたよみさふらひしに
花さかは告よといひし山守のくる音すなり馬に鞍をけ

大内のさくらさかりにさきてさふらひしに雨のふる
ひに侍従かもとへつかはしける

けふは雨明日は曇と成ぬへき雲井のさくらみむ人も哉
返し

雪とたにみるへき花のなとやさは雨やみけれとふらむとす覽

逢樵夫問花心を歌林苑にて人々よみ侍しに

折くたる爪木ころをに物申すかのみね成は雲かさくらか

老後見花

古はいつもくとおもひしを老てそ花にめはとまりける

おなし心を

是きけや花みる我をみる人のまた有けりとおとろかす也
人のわれを見てイ

散かたに成にけるこそ惜けれと花やかへりて我をみるらん

歸鷹

いまはとて春の田面を立鷹の雲に消ゆくかたをしそおもふ

おなし心を頼輔朝臣歌合

天つ空ひとつにみゆる越の海のなみをわけても歸る鷹かね

湖上歸鷹

歸る鷹聲をほにあくる時しもあれ南よりふくよこの浦かせ

大納言實國卿南殿のはなみにまいりて歸られて後た

れともなくて文をさし置てつかひはかへりにけりあ

けてみれば

我か身は歸る計そ木のもとにとまる心と物かたりせよ
なのみイ

返しもしさにやと推量てつかはしける

歸りぬるうさは花にそ愁へつるとまる心はみえは社あらめ

八條院歡喜光院におはします頃さくらやうく咲は
しめて侍るをみて花半開といふころを人々よみ侍

しに

とりそへて植し櫻の先さきに一本咲にそ二木とはみる

地下にて侍しに南殿のさくらさかりなる頃上達部殿

上人参りて禁庭花のころをよまれ侍しに

てもかけぬ雲井の花の陰にゐて散庭をのみ我物とみる

水上落花

よしの河岩瀬の波による花や青ねか峯に消るしらくも

落花

吹ちらす梢のはなを天の原風ませにふる雪かとそみる

おなし心を按察公通會

散はてゝ梢のはなの戀しきに我なくさめよ峯のしら雲

いまた殿上をゆるされぬ事を歎侍しに二條院の御時

三月十日頃に行幸なりて南殿の櫻さかり成を一枝お

らせて去年と今年といかゝあると仰下されて侍りし

かは枝にむすひつけてまいらせ侍ける

よそにのみ思ふ雲井の花なれは面影ならてみえはみそあらめ

かへし丹後内侍

さのみやはおもかけならてみえさらむ雲ゐの花に心止めは

於船中見花

さくら咲磯山ちかくこく舟の片乗せぬはあらしとそ思ふ

谷櫻

かけわたす木曾路の橋の絶間よりあやふみなから花をみる哉

櫻を季經朝臣家歌合

尋ねしと宿に櫻を植しかとおほつかなみの春の山邊や

尋花

山さくら尋ねみるまに宿なるは身を恨みてや散むとすらん

三月十日餘のほとに内の女房さと内裏より大内の南殿の花見に上達部殿上人など引くしてまいり(らどて)出さまに散たる花をかきあつめてつかはすとて花ゆへに風うみないとひそぢれは社かき集めても家つとにすれ返し

いにしへももの宮つこいさめけれ散花とても家つとにすなかくて後夜に入まで此人々あそひてふくるほとに出入るとて陽明門より人をかへしていひつかはしてさふらひけり散積る花はいくらと人とは風のはらひていにしとをいへ返し

ちる花を風にあふせてなしといはゝ同し名そとやふかおとす覽春野歌林苑會

冬枯の野邊の新やけ程ふれはまたさわらひそもえ出にける

折蕨遇友

めつらしき人にもあひぬ早蕨の折まく我ものへにきに梟

落花客稀歌林苑會

ちらさりし程ときはまもなくこし人の花踏わくるあとのともしさ

水上落花

山さくら散にけりとは初せ河すゑくむ里の人やしるらむ

落花按察公通十首内

花はみな散ぬとおもふかなしきに我なくさめよ峯のしら雲

おなし心を大内にて南殿のはなの下にて上達部殿上人よまれしに

はたれ雪ふるかとみれは九重に散かさなれる花にそ有ける故郷花伊賀入道會

なはのうみの沖行ふねそ過やらぬ高つの宮の花やみゆらん藤花を歌林苑にて人々歌よみ侍に

藤なみも汀によするをとす也かゝれる松に風やふくらんおなしこゝろを

あたならぬ松のえことに咲花の散にそよそのふちと知ぬる

大内にて殿上の人々藤花映水といふ心をよみ侍しに

住の江の汀に松のなかりせは二本に藤をかけてみましや

藤花留客

みる人をなとやかへさぬ藤の花はひまつはれよとかは教へし

杜若

さらぬたに行かたもなき沼水のめぐりにたてる杜若かな

躑躅をよめる經盛卿歌合

けふそみるさきさか山の白躑躅いかて佐保姫そめ殘しけむ

瀧下歎冬

瀧の糸にぬきとめられす散玉をうくる袖かとみゆる山ふき

隣家歎冬

山ふきの色をうらやみ中垣のあなたにゐてと思ふころかな

春殘二日といふ心を

おしめとも今宵も更ぬ行春をあすはかりとや明日は思はん

三月盡

春も果花も同じくけふちらはたひゝ物はおもはさるまし

山三月盡

あるしこそ山かつならめけふ春を限としらぬ遅さくらかな

夏

六位にて侍し時更衣の心をよみ侍しに

夏ころもみとりの色もかはりせは心のうちや涼しからまし

更衣大納言實國卿歌合に

けふやきは卯花色のしらかさね春のつゝしに引かへつらん

卯花

神まつる比にもなれはうつきさす小屋の袖かき花咲にけり

暮見卯花歌林苑會に

けふも猶卯花山は越ぬへしそのさく色のくれはこそあらめ

卯花季經朝臣家歌合

うの花の垣ねなりけり五月雨に雨さらしする布とみつるは

卯花隔水

卯花のみつの垣ねに咲^{ぬい}ければなかめにわたす淀のわたりを

夜鵜河

かひくたすう舟にかゝる篝火のみえぬ夜もなきしもつやみ哉

旅宿郭公

哀さは思ひし事そほとゝきす鳴いほりをは朝たちちもせず

月前卯花

てる月に色はとられて卯花の下枝をのみそ垣ねとはみる

閏四月卯花

あやめ草ふくへき月を卯花のうはひて猶も咲かとそみる

人傳郭公

ほとゝきす聞つと語る人をさへ父もやくるとまたぬ夜そなき

待郭公公通卿十首會中

戀するか何そと人やと^{あや}かむらん山ほとゝきす今朝は待身を

夏草

男鹿ふす夏野の草を分行^{くれ}はふまれにけりなあたは萩さへ

瞿麥をおさなきものにたくひて

なてしこを我身のすゑに成まゝに露のみをかん事を社思へ

竹風夜冷

をしのくる夜半の衣を戦くなる竹の葉音に引き^{きられつゝ}つるかな

竹の陰に涼むといふ心をよみ侍し

吳竹のあたり涼しきうたゝねに我さへふしをならへつる哉

待郭公の心を人々よみ侍しに

ほとゝきす空にも道をさためせは其一すちをまたまし物を

おなし心を

待けりと我もやきかむ郭公かなのりせは名のりかへして

郭公を公通卿會

香をとめて山ほとゝきすおちくやと空までかほれ宿の橋

なく聲^{こゑ}のきえ果るまで郭公山^{とふ}遠方をななめこそやれ

ほとゝきす鳴音遙にほのめくは五百重の雲の上やすむらん

寢覺に時鳥を聞て

ほとゝきす聞はしめたるね覺にはおとろくうへに猶そ驚く

念佛の隙に待郭公といふ事を人々よみ侍しに

西のみかすゝを打をく隙もあればまたねかはるゝ郭公哉

海路郭公

もろともにとわたりすなる郭公系しまへいなば鳴聲もおし

三位大進清輔家やけて後五月郭公なくをきゝて申つ

かはしける

かたらひしいへはなしとて郭公君を尋ぬときくやきかすや

返し

郭公いつものとせぬならひとて宿のとかとおもはさり鳧

深夜郭公

待またむ人の心をみむとてや山ほとゝきす夜をふかすらむ
郭公前兵衛佐經正家歌合

まちけるもまたさりけるも子規聞けしきにそみえ別れぬる

夏草同會

春過ていくかになれは眞菰草あさりし駒のはみかへるらん

寢覺の郭公のこゝろを人々よみ侍しに

うたゝねの夢に聞なす郭公うつゝのそらに名殘なくなり

郭公法輪寺百首中

郭公またこそきかね我は世にあふちの花のさかりならねは

世中を過かてになけ郭公おなしこゝろにわれもきくへき

一聲はさやかに過てほとゝきす雲路はるかに遠さかりゆく

郭公あかて過にし名殘をは月なしとてもななめやはせぬ

野徑郭公範兼卿家會

なきくたれふしの高根の郭公すそのゝ道は聲もおよはず

むかひ成所にさくら多く咲たる梢をのみ見てすき侍

るほとに五月に成て郭公の鳴けれはとなり聞らん

とおもひて

返し宰相中將

ほとゝきす聞はきくらむみれはみし隣の花の梢のみかは

郭公ともには聞と猶きませしつゑたまてとて花もさそみし

五月十日比に郭公のしけく鳴をきゝて別當入道のも

とへつかはしける

郭公かたらふ比の山里は人とはすともさひしからしな

返し

夕郭公

けふもまた山路に柴の庵してとまれはすくるほとゝきす哉
おなし心を

まきのとをしはしなさしを霍公きゝつ宿とふ人もこそくれ

月前郭公

一すちに月みる程のこゝろをそ山ほとゝきす空に分つる

山家郭公法住寺殿會

都にはまつらんものをほとゝきす出るをおしむ太山邊の里

郭公漸稀

いま更に猶までとてやほとゝきす五月の末に聲のともしき

五月雨の比内にさふらひてまかりいてたる夜珍らし

く月のあかゝりしかは大宮に小侍従さふらふときゝ

て近き程なりければ申つかはしける

雨雲のはれまに我もいてたるを月ばかりをや珍らしとみる

返し

雨のまに同じ雲ゐは出にけりもりこはなとか月にをとらん

盧橋薰閣歌林苑會

かほりくる花橋の道をあけてしのふね床を人にしれぬる

盧橋蕙遠法住寺殿會

たかりのはな立花のにほひそとはまし物を風のこたへは

五月雨

さみたれの日をふるまゝにいかなれは池の水草の淺く成覽

六月十日頃に更忍 郭公といふ心を讃岐の院にて人

人よみけるに女房にかはりて

郭公今はなかしとおもふ夜は待しよりけにいこそねられぬ

浦風のふきあけにたてる涼しさに秋かと思ふ志賀の辛崎

江上螢多鳥羽院北面會

いさやその螢のかすはしらね共玉江の蘆のみえぬ葉そなき

水鷄

くゐなとは思ひもあへす明にけり人待宿の夜半の戸さしは

水鷄驚寢

心なくわれ驚るかすくゐな哉またまところまは又なはかりそ

寺邊水鷄

あれはてゝたつる戸もなきあへ寺を叩くは夜半の水鷄也鳧

連夜鶉河歌林苑會

かつらめや新枕する夜な／＼はとられし鮎の今夜とられぬ

河邊草深二條院御時女房に替りて

小船入つたの細江にさす竿の末そみえ行草かくれつゝ

泉

大原やせか井の水を手にかけていくむすひせは秋に成らむ

泉邊翫月右大臣會

まとゐして岩井の水を結ふには手毎にそゐる弓張の月

夏月

庭の面はまたかはかぬに夕立の空さりけなくすめる月かな

水上夏月

うき草を雲とやいとふ夏の池の底なる魚も月をなかめは

水邊納涼

なつも猶ゆきけの水の末なれは不二の河こそ冬心地すれ

杜邊納涼

名を聞に思ひなすにやいつみなる信太の杜のかけの涼しき

夜五月雨と云心をよみ侍しに

露はしる山の末のにかりねして空おそろしき夜はの五月雨

大井河邊にまかりてあそひ侍しに河邊夕涼といふ心
を人々よみ侍りしに

暮ぬるか遠の山かけわたりきて今そとなせの河邊涼しき

夕顔の心を述懐によせてよみ侍しに

よの中をうしろになせる山里にまつさしむかふ夕顔のはな

我にをとる人こそなけれ山さとに夏そ引折しはふるひ人

山かつカイの小屋のしりへのはたにまく哀我身をいかさまにせん

秋

萩

めにみえぬ風のきたらは告よとて植てし萩そ契たかへぬ

秋かせの身にしむ事をそ／＼とうなつく萩そ諸心なる

草花露重

枝よはみ露のしら玉もちかれて夜もふすのへの女郎花哉

薄

浅せなき大河嶋の花すゝきまねくとみれとえこそわたられ

大内にて禁中秋と云心を人に替りてよみ侍ける

やまふきや菊も重なる數はあれと増りてみゆる九重の秋

草花催促

出にけりあたの大のゝわさ薄またかたはらのこと花もかな

萩

わか宿の萩をはよきてこともなき浅茅かすゑに秋風そふく

秋野

宮城のゝ花の盛に下あひて音に聞こし萩をみるかな

旅行聞鴈

旅なるはわれし獨とおもへとも鴈も雲路を幾日とそなき

霧隔行船

ともとりも小舟もみえてたはれめか聲計こそ霧にかくれぬ

女郎花近水

なみ立る此河岸のをみなへし咲わたれはや露けかるらん

野徑眺望

暮ぬとて人ぬるのへの女郎花いまさは花のあきかたちみむ

草花の心を歌林苑歌合

かり衣われとはすらし露しけき野原の萩の花に任せて

月前草花法住寺殿會に

隈もなき月やまはゆきをのか枝をかさして立る女郎花かな

鹿歌林苑會に

草かくれみえぬ男鹿も哀こふる聲をはえこそ忍はさり鬼（けれ鬼）

鹿聲遠近法住寺殿會に

いなり山みねかと聞は杉の庵の窓の前にもをしかなく也

夜泊鹿歌林苑會に

泊出て夜舟をこけは高砂のおのへのしかの聲そきえゆく

秋花勝春花範兼卿家會

秋までも倂にさく櫻はな野邊の色みて後そ散ゆく

閨餘秋月法住寺殿會

名に高き月は二夜をみよとてやことしは秋をのふる成らん

鹿聲何方同

鹿の鳴かたをもえこそ聞わかね今はみゝさへおほる成けり

爭尋紅葉同

さそひつる人にも告て先さきに立田の山のもみち葉をみん

殘菊夾路同

露しのく山路のきくはうらうへの（にイ）ばかまにさへそ移ひにけり（る曉）

故籬菊萱

よりかゝる笹もあれて菊かやのみたれもしらす打臥にける

隣家晚萩

風ふけは中垣たゝく萩の葉をたそかれ時にとはせつるかな

待月

出ぬまの山のあなたにおもひこす心やさきに月をみるらん

月法性寺殿にて人々十首の歌よみ侍しに

夜もすから寒行月を山端にをくり付るはこゝろ成けり

おなし心を

月清みこよひそみゆる水底の玉藻にすたくさいの數さへ

月待（尋イ）秋勝左大臣家會

光をは秋の爲とやおさめけむとりいてたりとみゆる月かな

月經威（盛）卿歌合

残るへき垣ねの雪は先消て庭はつもとみゆる月かけ

海邊月

すみ吉の松のこまよりみわたせは月おちかゝるあはち嶋山

同伊賀入道爲業會

浦つたひなるおの松のかけにきて又隈もなき月をみるかな

三井寺歌合し侍けるに人々にかはりて月をよみ侍りける

月清みしのふる道そ忍はれぬ世にかくれてとなに思ひけん

月小野宮會

秋の夜も我よもいたく更ぬれはかたふく月をよそにやはみる

八月十五夜

名にたかき秋は二夜としりなから先みる月にしかしと思ふ

おなし心を歌林苑會

月はたゞ今宵をのみそまたれつる過ぬるかたや山のは成覽
八月十七夜月常よりくまなくみ侍しにむかひの中將
のもとより

我見てもたくひ覺えぬ月の夜はふりぬる人そまつとはれける
返し

七十年の秋にあひぬる身なれ共今夜はかりの月はみさりき
經盛卿かもにて歌合し侍りけるにまいりあひておな
し心をよめる
影やとすみたらし河のさやけさは月もやこよひ天降るらむ
敦頼すみよしにて歌合し侍りけるに社頭月のこゝろ
を

一すちにあふく心をすみよしの空行月に分そやらるゝ
月終夜友

有明の月もやわれを惜むとていらぬ先にはいらしと思ふ
雲間月

よもすから絶間々々そまたれける雲より雲にうつる月をは
清輔朝臣家歌合に月を

雲もなく山のはもまた遠けれは月ゆへいまそ物はおもはぬ
月歌林苑會に
曇なくあれたる宿になかむれは我もさやかに月にみえぬる
おなし心を

今夜たれすゝ吹風を身にしめて吉野のたけの月をみるらん
月重家卿歌合に

月かけにうつもれぬとや思ふ覽雪にならへるこしのさと人
海上見月左大臣家會に
てる月を雲なへたてそ夜舟漕我もよるへき嶋隠れなし

關路惜月同

入月そ常よりもけに惜まるゝよし足柄の關をこゆとて
旅宿月

雨にこそ庵はさゝね更科の月にさはりていく夜とまりぬ
九月十三夜法性(住こ寺殿(供花イ)會

つもりより廣田へ渡るあき人の今夜の月をめてさらめやは
おなし心を
かくはかりさやけき月を命あらは又こむ年の今夜もやみむ
水月右大臣家歌合

影たにもみせきにしはしよとまなんいらば小倉の山端の月
水上月
夕は川わたみによとむ水のあはのめくるもみゆる秋の夜の月

心にもあらてやまねく花すゝき秋のゝ風にそゝのかされて
野風右府家會(歌合イ)
夜鹿

夜をこめて立きる山の裾にしも鳴てや鹿の人にしれぬる
水上月公通卿家會

月影を氷とみれとすはのうみに上ふむ冬はまたしかりけり
野風同會
吹おろすあらしやまなきをしほ山すそのゝ草のかた驛なり
促織虫

夜もすからはたをる虫はあさち原露ふき結ふかせや寒けき
野宿見月

秋の野のおはなかりふく庵には月はかりこそあひ宿りすれ
江上月歌林苑會
いさやこら難波堀江の蘆かりて宿れる月に隈もあらせし

寄月述懷

天の原あき行月のいたつらによにあまさるゝ心地こそすれ
同右大臣家會

おちかゝる山端ちかき月かけはいつまで思ふ我身也けり

湖邊見月

こき出て月はなかもむさゝなみや志賀津の浦は山端ちかし

霜夜月

馴にけむおなし雲井の月影に猶一つなる庭の霜哉

海邊晚霧

貝ふむと汐干にたてる難波女か歸るあし邊にまよふ夕きり

閑居霧深

霧わけてとふ人もなししかのふむ庭の木葉の音はかりして

寄月述懷

さやかなる月の光をしるへにてよにふる道を辿らすもかな

月照己屋歌林苑會

あるしからあれたる宿のくせなれはおろしこめても月はみえ鬼
らい

藏人おりてはむへりし比夜半月といふ事を人々よみ

はへりしに

ねひとつと今やさすらん雲の上の月をみるにも忘れぬ哉

遍照寺の月を見て

いにしへの人はみきはに影たえて月のみすめる廣澤の池

草花經盛卿歌合

をりはてぬ花こそあらめ秋の野に心をさへものこしつる哉

をみなへし

ひとととゞ定めてそみし女郎花はなここと心あらしと思へは
なき名のみいはれのゝへの女郎花露の濡衣きぬはあらしな

雨中鹿

時雨する空はくもれとなく鹿の上毛のほしやかくれさる覽

菊花待開

こからしのかせの立まで綻ひぬきくこそ花のとしめ成けれ

大納言實定卿のもとより菊をこはれはへりしかはむ

すひつて侍し

玉しける庭に移ふ菊の花もとのよもきの宿かいなわすれそ

返し

うつし置て此一もとはめかれせし菊も主ゆへ色まさり鬼

惜秋忘戀といふ心を刑部卿範兼卿會

またもなき秋を今夜は惜めとや身にそふ戀のかたさに劔

九月盡實國卿家歌合

秋にこそ今宵わかれめこのはさへとまらぬ音を聞そ悲しき

おなしこゝろを歌林苑會

秋ゆへにねぬ夜成けり盡ぬへき我齡をはたれかおしまん

冬

しくれ歌林苑會

山めくる雲の下にや成ぬらんすそ野の里を時雨きけいすくなり

おなし隆信卿家歌合

音きけは哀ともにや曇らん時雨か下にしくれしてけり

行路時雨

晴くもり時雨する日は常盤木のかげに幾たひ駒とむらいめけむ

月前殘菊

月もみよ菊には似すな世中に残れる身こそ白く成けれ

殘菊

白菊の父さけるかとおとろけは霜の下にそ色はありける
月照山雪右大臣家會

つもりける雪はかりかは木間より月もしくるゝさよの中山
冬月

袖さえて嵐ふく夜の月みれは梢も空もくもらさりけり
おなし心を經盛卿家歌合

月かけを凍へたつる池の水の玉もかしたやくもるなるらん
月前水鳥

澄のほる月の光によこされてわたるあきさの音の寒けさ
水上落葉北白川會

谷河のふし木の橋にせかれたるみくつをみれはもみち成鬼
故郷落葉

木葉ちる志賀の都の庭の面はその跡とみる石すへもなし
落葉

龍田姫梢も染るくれなるの色をおるすは嵐なりけり
おなし歌林苑會に

梢には一葉もみえし大荒木の杜の下草もみちにけり
落葉入簾中

木葉ふく嵐やくすをあけつらん拂ふにおしき塵のつもれる
大井河邊にて水上落葉をよめる

梢にもあらぬるせきにわがちやる河の枝にも丹葉しにけり
水上落葉

いまはよに山の木葉もあらしかし立田の河の色つくみれは
葉飛渡水範兼卿會に

立田河吹こす風を待てこそぬれぬもみを袖にうけつれ
山路落葉仁和寺にて人々歌よみ侍しに

このは散山路の石はみえねとも猶あらはるゝ駒のつま音
紅葉隔池範兼卿會

かつまたの池のあなたの紅葉ゆへ昔の人やふねもとめけむ
隔谷紅葉

もみち葉をよそにみましやかつら木の神の岩橋渡し果せは
落葉驚夢範兼卿會に

木葉散宿はかやゝの板ひさしはしに臥夜は夢も見はてす
於法住寺殿院三熊野詣候間人々歌合せられしに關路落葉を

都にはまた青葉にてみしかとも紅葉散しく白河の關
おなし歌合に水鳥近馴

子を思ふ鳩の浮巢のゆられきて捨てしとすれや水隠もせぬ
おなし心を歌林苑會

まき流す丹生の河せにゐる鴨はめなれにけりな立も騒かす
鷹狩

あられふる交野の草を打なひけこまかにかるや鳥立なる覽
河邊千鳥

東女とね覺て聞は下野やあそのかはらに千鳥鳴なり
寒夜千鳥觀蓮歌合

さゆる夜は遠さかり行しかの浦の浪のこなたに千鳥鳴也
曉千鳥

打わたるやすのかはらになく千鳥さやかにみえぬ明暮の空
千鳥

夜舟こきおきにてきけは常陸の海かしまか崎に千とり鳴也
時雨經盛卿歌合

時雨する交野のみのを狩行はならのましはの露そこほるゝ

雪おなし

こえかねて今そ越路をかへる山雪ふる時の名にこそ有けれ
身のうへにかゝらむ事を遠からぬ黒かみ山にふれる白雪
ふる雪に木曾路の谷は埋もれてかけても橋のみえぬ頃かな
踏分てこゆるあらしの山風に梢の雪もまたふりにけり

閑居雪歌林苑會に

雪にかかるまかきの竹の音のみそ時々われをおとろかしける

雪埋樵路

雪つもる山路にまよふ山人はをのか爪木をこりぬとや思ふ

雪中鷹狩

御狩する野もせに雪の降ぬれば山をにたゝむかつらたになし
枝折せしはのさ枝もうつもれて歸る山路に雪にまよひぬ

曉鷹狩歌林苑會

暮ぬてかへる野へより立鳥の羽音はかりにあはせつる哉

待初雪

またれつる雪けかと社思ひつれいま時雨の雪にそ有ける

社頭雪敦頼入道西宮歌合

しめのうちによをとをす哉下消ぬかしらの雪を打拂ひつゝ

旅雪公通卿十首

船わたすすみた河原にふる雪の色にまかへるみやこ鳥かな

連日雪宰相入道歌合

こしの空雪けの雲の絶せねはふらぬ日をのみかそへつる哉

雪

今朝みれは小野山白しむへそこの過ぬる夜半の床はさえける
雪つもるこしの山風吹ぬらし檜原松のはあらはれてみゆ
雪ふれは何にかは身を隠すへきかるもか下のいとこもなし

曉雪

忍ひつま歸らむあとのしるからしふらは猶ふれ東雲の雪

雪のふり侍しあしたに範兼卿許より

山里の雪を獨はみまうきに君やきまささん我やゆくへき

返し

君ませといはゝかしこし降雪を打拂ひつゝわれそゆくへき

寄米述懷

我か身やふる河水のうす氷むかしはきよきなけれなれとも

氷

さゆる夜はつらゝやまなき原の池の上とふ鴨の聽て過ぬる

あるし人のもとよりまかりて朝に出るに雪のふり侍

しかは立歸りて申つかはしける

朝またき雪ふみ分て出てわかまたこむ跡をみんやみしとや

返し

雪のうちに又こむあとを待ものをみせしといはゝ消計り也

歳暮雪

かそふれは我身もとしも暮果てふるも頭の雪かとそおもふ

賀

祝のこゝろを人々よみ侍りしに

君か代は千尋の底のさゝれ石の鵜のゐる程にあらはるゝ迄

おなし

君か代を何に例へむと思へとも果なき物のあらは社あらめ

禁中祝心を二條院の御時人に替りてよめる

昔よりをきけるちりの山なれと君か御代にそ雲はかゝれる

經盛卿かもとにて歌合し侍りけるにまいりあひて祝

のこゝろをよみ侍りけるに

斧のえをくたす山人かへりきてみるとも君か御代は變らし
攝政殿下閑院つくらせ給ひて初て作文和歌の會せさ
せ給しに歌人のうちにめされて對松爭齡といふ事を
つかふまつれり

春の日のしつかにてらす庭の面の松の千年に君をとらめや
庭松

千年まで我をみよとや君か代の廂にちかく松たてるらん
祝

君か代はなからの橋をちたひまで造りかへても猶やふり南
寄松祝の心を歌林苑會

ゆく年のつもりは濱のはま松も君かよはひに立はならはし
祝二條院御時女房にかはりて

あまたゝひ君そみるへき海は山やまば白なみ立かはるやう

別

敦頼あつまのかたへまかりけるに人々はなむけし給
ひけるによめる

はるゝと行もとまるとも老ぬれは又逢事をいかゝと思ふ
つくしへまかる人に餞侍りしによめる

その日と聞たにかねて悲しきにこき別なはなに心地せん
素覺入道潮湯あみに津の國成所へまかりはへりしに
忘るなよふりぬる我を津の國のなからの橋の跡をみつゝも
登運つくしのかたへまかるときゝて旅衣してつかは
すとしてよめる

限あればわれこそゝはね旅衣たゝむ日よりは身をなはなれそ

返し

旅

嬉しきをつゝみそかぬる旅衣ゆたかに立るかひもなきかな
九月はかりに難波わたりに潮湯あみにまかり侍しに
侍従師光素覺入道かはしりにおなしゝたられたり
のち侍従のないしのもともり消息つかばしたるおく
にかゝれて侍し

旅寝するかたは浦々かはれともおなし都やこひしかるらむ
返し

君か住空戀しくそ我はおもふしのふ都もたれゆへそこは
おなし所より入道そへてつかはしける

くれて行そなたの秋やいかな覽此みなとには舟よそひせり
返し

われもさと思ひよりぬる行秋の舟よそひせは梶かくさなむ
旅のこゝろを歌林苑にて

捨て行都のかたの山にまたいつかむかひてゆかむとすらむ

哀傷

二條院かくれさせおはしましてのち御めのと大納言
の三位ほとなくみまかりぬときゝて女房せんつるか
もとへつかばしける

雲の上に別れたつはをりゐてもひと方ならぬねをや鳴覽
返し

わかれにし雲井をこふるあしたつは澤へに獨音をのみそ鳴
あひしりはへりける女三年はかりすきていかなる事

か有けむとすみける山さとへをくりつかはしてけりそのうちある上達部のもとにをかれたるよしきゝわたり侍しほとに俄に煩ふ事ありてみまかりけるもとみしものとやおもはれけんかの上達部のもとよりかゝる哀なる事こそあれよの中のつねなきはいまにはしめぬ事なれとも心うくこそなといひつかはしたりしかへりことにあはれるよしを申て

返し

あるをたにさこそは人は思ひつれなきは哀をそことしらすや少將通家身まかりてのちうち續きはりとも有てをそく吊ひつるよしはゝのもとへ申(し)つかはしたりし返事に

悲しさを歎く心のあらはこそとふもとはぬも思ひわかれめ返し

よそなから歎く心のうせぬにそ君かおもひにとるとはしる月前催無常右大臣家會

限あれは月はこよひも出に鬼きのふみし人けふはなき世に範兼卿身まかりてのち法事の日誦經し侍りける 諷誦文に書付侍りける

此世にはこと葉も文も書絶てかねにつてある事そかなしきよそにのみかくきゝゝていつか又我なき跡を人にとはれむ

戀

思へとていはて忍ふのすり衣こゝろのうちにみたれぬる哉

同歌林苑會

忍 戀

萌出てまた二葉なる戀草のいくほとなきにをける露哉聞しれる人もやあらん忘れつゝ打歎かるゝ夜半のけしきを身のうさを歎くにつけて忍へとも戀はこひとや分てみゆ覽人しれすかよふ心のめにみえははや我戀はあらはれなまし

皇后宮權亮賴輔朝臣歌合

事しけきあへの市路に我たゝし戀をみしれる人もこそあれ忍ふとは君もかつしる事なれといかにか思ふとはぬたえまをあけはとくかへしなをさむ小夜衣みて心うる人もこそあれいつ迄か心にこひをこめをきてもたりくるしき物を思はん

後悔戀

打出てもかひなかりける我戀を心のうちにおもひかくさて藏書戀鳥羽院北面

戀清和院齋院會

かくれなきなみたの色の紅をふみちらさしとなにつゝむ覽せきかぬる涙の河の早き瀬は逢より外のしからみそなき

逐夜増戀

戀初めて暫しは夢みしか共今はいをたにねられは社あらめ

戀歌とて

世をなけき身を恨みてもなく涙戀にしなれは色かはりつゝ思ひわ夢にみゆやと返さすは裏さへ袖はぬらさゝらまし

隔河戀

山城の美豆野の里に妹を置いていくたひ淀の船よはふらむ旅にてみたる人をこふると云事をうちにて人々よまれしによみ侍りける

うイ

おちゝかふ淀の河舟こすをあらみほのみし人を忘れかねつる

恨てあはすといふ事を清和院齋院にて人々よみはへりしに

まことにや恨のはしを作り出て戀わたるともあはしてふ也
又ふたつ文をたにかよはすまじかりける人のもとへ
これをかきりとおもへとて

水くきはこれをかきりと書つめつせきえぬ物は涙なり鬼
せめてうらめしき人のもとへつかはしける

きゝもせし我もきかれし今は唯ひとりゝか世になくも哉

心よりほかに申絶たる女のもとへつかはしける
思はずや手ならずらにふす竹の一よも君にはなるへしとは

かれゝに成にし女の山里にこもりぬにけりとときゝ
てさすかにあはれに覺てをとつれつかはしたるかへ

りことにこゝにはあるまじきよしを申て
世のうきに思ひ入にし山里をまた跡たえむ事そかなしき

かへし

おもひやる心はかりを先たてゝ行らむ方へわれもまとはむ
かたちをみていとはるゝ戀といふ心を歌林苑にて人

人よまれ侍しに
朝なゝ戀こそはれ十寸鏡みればいとふも思ひしられて

はしめてあひたる女に

ぬイ

わか袖の忍ふもちすりぬれゝて亂れあひたる心ち社すれ

忍ひて物申女の夜更て逢たるに廿三日の月山のはよ
り出たるをみて

みよかしなはつか餘りの月たにも今迄人にまたれやはする

つれなかりける人のもとにまかりたりけるになをあ
はさりければ歸りていひつかはしける

あひもみて歸れはこやの池水となれる涙にうきぬをそする

此暮と契れる女のもとにさはる事有てをとつれ侍ら
て次の日人をつかはして過ぬる夜は片分なる事のあ
りしなり今夜はかならずまてとたのめつかはしたり
し返り事に言葉はなくて小侍從

筏おろす杣山河のおさきせは又もさこそはくれのさはらめ
かへし

きのふより涙おちそふ杣河のけふはまされはくれもさはらし
過不告戀清和院齋院會

音もせて人かよひける道のへに何家ぬして物おもふらむ
戀播州歌合

我袖のしほのみちひの浦ならは泪のよらぬ折もあらまし
戀のこゝろを小野宮侍從歌合

君こふと夢の内にもなく涙覺てのちもえこそかはかね
會後隱戀

をイ

身の程も思ひもしらし中々にあひみぬ先になしといひせは
及曉逢會戀

夜もすから妹か結へる下ひもは鐘とゝもにそ打とけにける
失返事戀

こひゝてまれにうけひく玉章を置うしなひて又歎かな

返迎車戀

のせてやる我心さへとゝろきてねたくも歸すむな車哉

不語終隱戀

改名隱戀

聲はかり通ふやり戸のしりさしを猶頼ぬかなき心ちする
あふみてふ名をはたかへて忍ふれは我を秋とや今は尋ねん

返事をみて増る戀の心を入々よみ侍しに
引かへし妹か書けることのはを恨みて今そねけなけれ

戀のこゝろを按察會

ともすれは涙にしつむ枕かなしほみつ磯の石ならなくに
いとほるゝ身を恨むるや戀しきに又こと事を思ひますらむ
尊勝寺にて人々戀歌よみ侍しに

我戀をさてやわすると思へとも起ても侘しねてもすへなし
あふ人もなき戀路行くるしさに休むまとは身をそ恨る
忘れつゝ猶そ戀しき身のほとを思ひしるには思ひやめとも
見家思出戀歌林苑會

故郷をみれば物こそかなしけれ我もあれにし心なれとも
人しれす心かけたる女のもとよりすゝをこひにつか
はしたりしかはつかはすとて

思ふ事下にもまるゝまろすゝの露はかりたにかなはましかは
女のもとより雨のふる日つかはしたりける

雨もよに思ひ出しとおもへともおもふ心をもらすけふかな
かへし

雨もよに思ふ心のもりけにやあやしくぬるゝ我たもと哉
過門不入戀歌林苑會

人心かはれは明ぬまきの戸をきなれし駒を過かてにする
隔河戀尾坂歌合

わたりこぬ妹か栖を尋ぬれはあふくま河のあなたなりけり
待不來戀

すみよしの松とはすれと沖つ浪たちかへるにもよらぬ君哉
行路戀といへる事を

打過し野上の里の妹をみてかへりくたるはなみたなりけり
こゝろイ

逢事を命にかふる市もかなかゝる戀する人やつたふと
今はたゝ身を恨みつゝなくものをしゐてこふとや妹は聞覽
戀しなむ後ははかなき玉章をもしやみるとて書そをかるゝ
世中をなけかぬほと身の身なりせは何によそへて妹を戀まし

歌林苑戀十首内

敷妙の枕はふたつならふれとひとつはなれす君しなけれは

おなし

人はいきあかぬ夜床にとゝめつるわかこゝろ社我を待らめ
せきもあへすはなれて落る涙哉我そはたつる瀧まくらより
奥山の杉のともすり我なれやわか戀ゆへに身をこかす也
今はたゝ夢をのみ社頼め共あはぬめさへそつれなかりける
つれもなき人に心をかけしより我世はつきぬと思ひし物を
わきも子かもすそになひく黒髪はなかくや物を思ひ亂れむ
くれなゐに染たる袖のおなし色の涙みわかぬ戀ころもかな
まところまは驚かすなよ逢とみは夢にも中をさくと思はん

來不逢戀

住吉の沖よりきたる浪ならば松のねもみて歸らましやは

寒夜増戀

さゆる夜は人を戀しと思ひねの枕のしたにつらゝゐにけり

戀の心を

あひみてまかねて朝のなけかれてかた心には物をこそ思へ
あちきなし今は思はしと思へ共物うかるねに猶そなかるゝ
うらめしなから戀しき人のもとへつかはしける
ならへたる恨も戀もからくみの二すちなからぬるゝ袖かな

寄草花戀

露すかる萩の下枝はさもあらぬにわか涙には人もたはます

つれなかりける人のもとへつかはしける
きつゝはやせきもとめなて涙河^んなかつも君か心ならずや
雨中増戀

君こふと詠めくらせる夜の雨は袖にしもるゝこゝち社^{しるイ}すれ

やうゝかれゝゝになる男をうらむる女にかはりて

水の面におは打ふれて立鳥のやゝあまさかる人そ戀しき
祈神戀と云事を人々よみ侍けるに

逢事を祈るかひなき此嶋は涙をかくる名にこそ有けれ

寄源氏戀歌林苑

人しれす物をそおもふ野分してこす吹風にひまはみねとも

寄催馬樂戀

いとはれたゝにはいらし妹か門過はふらなむひち笠の雨

觀身不言戀

もしやとてかく玉章も身のうさを思ひいてゝは打そ置くゝ

寄照射戀

我戀をほくしにかくるものならはつれなき人も目をや合せむ

經盛卿歌合に

うち歎きぬれとねられすあたりにも又こぬ人に驚かされて

被妨人戀院殿上會

なかれても契りし妹をせく人やあふくま河にかくるしからみ

戀のこゝろを大貳重家會

夜とゝもにおつる涙や戀してふ我こと草の露と成らむ

おなし心を

袖のうへにおつる涙の色みてそ戀はかきりと思ひしりぬる
命あらはもし逢事もありやとて我なくさむるわか心かな

久しく音信侍らぬ女のもとにしはすの廿日あまりの
ほとにつかはしける

とゝこほる春よりさきの山水を絶果ぬとや人もしるらん

かく申つかはしたれともものにこもりたるよしを申
て返事もなかりしか年かへりて正月の十日比にかれ

よりつかはしたりける小侍從

とゝこほる音かと聞し山河のたえはてぬとは春ぞ知るゝ

忍ひて物申女のあひてその日にわかれし時又いつか

といひしに

思へたゝ岩にわかるゝ山水もまたほともなくあはぬ物かば

立聞怨戀

我のみか松のねたけにことのはを立聞波のうらみやはせぬ

寄石戀

厭るゝ我みきはにははなれ石のかゝる涙にゆるきけそなき

寄菊花戀

つれもなき人こそよそにきくならめこふる袖さへ移ひに鳧

遊女戀

思ひかねもしもやみるとたはれ女か住河上になかす玉つさ

乍臥無實戀

からさしと植ける竹か妹と我ふしをならへてゆるきけのなき

寄山戀

我妹子はさかよふ山のせはちかはあはしと人にかねて聞する

ある宮仕人をよひ出すとて木陰に立かくれて侍しに

時雨のしてしつくのおちかゝり侍しかは
君まつたてる木陰の雫さへ涙につれておつとしらなん
馬上の戀といふ事を

落かゝる涙やしけき戀路行駒のたつかみ露ふしにけり

言出後悔戀

されはよなかくても同じ苦しきを言ぬ先より思ひかへさて

言切後増戀

言のはをきかず顔なる涙かな思ひたえなはなれもたえなて

依月増戀右大臣家會

妹こふとまたはしちかき轉寢の枕のそはにやとる月影

時々見戀

なこの海汐干しほみち磯の石となれるか君かみえかくれする

聞戀我戀

みこもりの神にや妹か祈るらんこふと聞より我もかなしき

秘知音戀

うとからぬ人にはつけし戀といはゝ思ひ顔にて諫めもそする

秘從者戀法住寺殿會

ちらさしとせめても思ふ玉章は我つかひにて我そもて行

返書戀

玉章に我ひく墨のたかひせはみけりとみても慰みてまし

時々逢戀

鳴のゐる岩根の池の薄氷むらゝなれや解みとけすみ

寄鳥戀

妹とわかおなしこのねの鳥ならは逢ぬ歎に鳴すへてまし

ある宮腹の女房を忍ひてむかへにつかはしたりしに
曉になりてまうてきたりしかは

ことしけき大宮人を待々てあふほともなく明る東雲

二條院のくらゐの御時間聞増戀といふこゝろを人に
かはりて

うき人の上をはえこそ聞果ね又問たひにねのみなかれて

大貳重家卿歌合に戀の心をよみ侍ける

紅のなみたにそまる戀ころもかへさは袖そうらみなりける

失返事戀

いつこそや妹か玉つさかくし置て覺えぬほとに老ほれに鬼

思移媒戀

つれなくはしゐてないひそなれに吾思ふ心は早うつしにき

五片思戀

その心道にあふらし我を君あひ思はすとおもひおこせは

戀

なき名たにたゝむと思ふ世中の人の偽せぬさへそうき

獨ねの床はさゆれと妹かすむそなたの風は吹かとそおもふ

されはよな我みのうさに兼てより思ひし事そ人のつらさは

戀しなん後たにせめて有しおりあはてといはん言のはもかな

爐邊女談

くらき夜も漸おこす火を中に置て聲のみ妹そ見えぬる

語和不會戀

逢事は猶もかた木の切えねは言の葉のよき何にかはせむ

はしめは思はて後に思ふ戀の心を人々よみはへりし

に

思ひきや新手枕をいとひしにおなし身なからこひん物とは

戀やするととひし人に

寄船戀

こひしさは泊もしらて行舟のゆにかくものは涙なり鬼

寄山戀

忍ひしも今はあさまのかひもなくもゆる煙となれる戀かな
うらめしき事侍る女を夜もすから恨あかして歸りて
侍りけるにいかにしたりけるにかしろきおひのつき
てまうて來りしを返しつかはすとて

憂にさは中や絶まし色なしと花田の帶を思ひなしつゝ
十月つこもり比大内にさふらひしにかたらひ侍る女
をあひくして侍しにまかりいつとて女をもをくりつ
かはしたる夜霜つねよりもさえて朝の霜しろくみえ
侍しかは文つかはすとて

霜さゆる今夜しもなと九重にかさねし衣引わかれけん
これかれあまた申ときく女のもとに女郎花につけて
つかはしける

おなしは我にをなひけをみなへし吹秋風は心さためし
久しう音せぬ男のもとへうらみつかはしたりけれと
もなをまでとこさりければ申つかはしける女にかは
りて薄につけて

まねけ共こぬ夕されは花すゝきなひき初けむ事そくやしき
時々物申女波こしてけりと聞て心うきことなり今は
おもひ絶なんと申て夜もすから恨侍りしを女も心う
しと思へるけしきにそそ泣ふしたるにさしかはし
たるかたの袖の所せきまでぬれにけるをかへりてみ
侍るにさすかにあはれにて申つかはしける

あやなしや人をこふらん涙ゆへよその袂を今朝しほりつゝ
道にあふといふこゝろを齋院にて
わきもこかせはちにちかふ移香のいつのまにしむ心なる覽
たえて久しく成にける女のもとより五月五日あやめ

に付ていひつかはしたりし
よそのみ人は軒はのあやめ草うきねは絶すかくる袖かな
かへし

菖蒲草そのねにいかて身をなしてかくといふなる袖を離れし
絶て久しく成たる女の思ひ出て五月五日になかきね
をつかはすとて

あはぬまにおふる菖蒲のねをみつゝたゝふ涙の深さをはしれ
返し小侍從

かけてたにみぬまに生る菖蒲草淺きためしのねにそ比ふる
曉戀右大臣家會

鐘の音を獨ぬる夜もいとへはやあふてふ夢を打覺しつる
後朝の心を

戀々て君に始てあひそめのかへる色とは今朝こそはしれ
朝またき風吹野への葛の葉もかへれはかくや露そこほるゝ
あけぬとてかへる涙に暮ぬるを暮ぬといひて猶やゆかまし
むかしより歸る事とは知なからけさや我身にとまり初まし

送書待戀

玉章をみるかと思へは妹かりとやりつる使またるゝもよし
紀伊守三河守にふるされたる女のそのことを心にか
けたる氣色なるを白河なる人のつかはしける

八橋と吹上の濱と忘れすは思ひも出よしら海のさと
返し

八橋はふみ絶にしを今更になにかくもてにおもひみたれん
袖の氷を思ひやれとて女のもとより
なかれてと頼むへきにはあらねとも心にかゝる白河の里
返し

寄衣戀

逢事のとゝほれはやしら河のなかれと君は頼まさるらん
我ためはかたしく妹か小夜衣いかなる人にへたてさるらん

近隣戀

立そはぬ時のまそなきわきも子か聲はへたてぬ中のひ垣を

行路戀

とゝめてし我心にやかはるらんみし面影につれてきにけり
歎咎夢にたにてねしか共きてもみえねはせむかたそなき

たえて久しく成たる男のもとへふみつかはしける女
にかはりて

そのかみはふみならされし道芝の茂りに梟とみるそ悲しき

戀

人しれぬ木葉か下の水なれやわか袖かくれおつるなみたは
おもはしと思ひけてともけたれぬは我胸にたくおもひ也梟
麻衣かたのまよひにもる玉はとゝめもあへぬ涙なりけり
人心あれたる宿の庭に生るからなつなかはつまゝほしきは
久しく音信侍らぬ女のもとより恨つかはすとて
しらさき蟹の刈藻にすむ虫の名をはいつより我につけしそ
返し

戀の心

海士のかる藻にすむ虫の其名をは君にはつけす我ものにして

戀の心

涙川色をは袖にせかれけりやなせにとまる紅葉はのこと

あひかたらひ侍し女のやうゝとこはなるゝ契りと

成てもとすみ侍ける山里へをくりつかはすとてその

かたならすとも心なくおもへたと申契りて侍し人

のもとよりいゝつかはしける

鳥の子のすもりにとまる身なりせは歸りて物は思はさらまし
返し

かへるとも立はなるなよ鳥の子のはくゝむ親と我を頼まは

おさなくてみたる女おとなしく成て後あひかたらひ

て侍けるに女郎花に付てつかはしける

女郎花其かたおひはめもたえて花の盛りそなつさはれぬる

戀左京大夫顯輔家歌合

逢事はなきさにかへるしら浪の猶よりみるやこりすまの浦

旅戀

妹をゝきて門出せしより落初し涙も我もえこそとまらね

同左大臣家會

思ひきや妹をとゝめてなく涙いほのしたかや浮ふへしとは

七月十日頃に人のもとへまかりてあしたに遣しける

身をつまは今朝の別を彥星も空に哀と思はさらめや

かへし

七夕の契はかりもありとみはとはぬ絶まも歎かさらまし

久しくをとつれ侍らぬ女に十月朔日頃にいまたひら

けぬ菊に付てつかはしける

君を我秋こそはてね色かはる菊をみよかしひらけたにせず

返し小侍從

いさや此ひらけぬ菊も頼まれす人のこゝろの秋はてしより

さてほとへて後うつろひたる菊につけてこれよりつ

かはしける

ひらけぬを秋はてぬとや見し菊の頼むかたなく移ひにけり

返し

移ろはゝ菊はかりをそ恨むへき我こゝろには秋しなけれは

後朝戀

あはぬまはいかゝと思ひし疑もなく／＼けふそ人は戀しき戀

目をへつゝ戀しき事はまされ共戀する道にえこそやすまね

見書増戀

ふみゝては色増りぬる我袖や紅そめのふりてなるらん

返書戀

待々て何心ちせむ玉つきをおなしさまにてかへしえたらは

隱傍女戀法性寺殿會にて

しらすなよつほねならひの下くちは物いひあしき宮と社きけ

戀遠所人同

陸奥のかねをは戀て堀間なく妹かなまりの忘れぬかな

觀身不言戀

數ならていひ出ん事をとゝめつるうき身や戀の關と成らむ

女のうちとけたる所にをし入て侍しにさはきてはか

まをきけるをみて

何かその君か下紐むすふらん心しとけはそれもとけなん

戀の心を人々よみ侍しに

つれもなき人は稀にもみえこぬにめなるゝ物は涙なりけり

冬くれは駒打渡す諏訪のうみの幾重ともなき人のつらゝは

今はさは戀もしなゝんしなすとて難面き人のきてもみなく

妹ならはひたいのかみをふりかけて傳ふ泪を玉とぬかまし

しほりあへぬ花染衣袖しろくかへしのみしてあはぬ君かな

下女をこふと云事をよみ侍しに

我心なにおほはらにつくす覽すみよかるへき人のさまかは

寄草戀のこゝろを

なとて我よそなる袖をぬらす覽おれはそ萩の露もこぼるゝ

あひかたらふ女うらむる事有て山里へ行かくれなむ

とする由を聞て今一度人つてならてものを申さん

とてまかりたるになきよしを申ていれさりければを

し入てみるに只今迄もありける様にてぬき捨たるき

ぬをみればさすかにあはれと思ひけむ袖のしほる

るはかり濡たるをみるにかなしき事かきりなくて袖

に書付てかへりける

今はとて脱をく衣の袖みれは我ひとりのみぬらさゝり鬼

二月廿日あまりのほとに南殿の花みむとて参りたる

折しもある女房のもとよりあるかなきかと尋につか

はしたりしかはさふらふよしを申たりし後音もせさ

りしかは是より云つかはしける

まことには雲ぬの花をみむとてや我によそへて空尋せし

返し小侍從

尋ねつる心のうちを知らは花にもかくや恨られまし

其後又大内にまいりたるにきゝて侍し人のもとより

尋つゝけふを待つるこゝろなは花をおもふに猶やなるへき

返し

我をのみ目を數へつゝ待けるかあなまさらは花にきかせし

おなし人のもとへつかはしける

さても猶人つてならてとひみはや花かあらぬか我か事かと

返し

花きかはさすか答へまうき事を人つてならてとひはみられし

おなし人のもとへつかはしける

逢坂を越ぬものからてにかけし清水かなにそ袖のぬるゝは

返し

くみてしれ相坂山のいはし水手にかけてゐるはあさき心を
おなし人のもとよりからのさくらのさまをうつした
る也このに見あはせよとてつくりたる櫻のはなを
つかはしたりしかは

もろこしの花もこゝには渡りけりまして間近き人は如何は
かへし

もろこしの花を渡しの船よりもあやうき道は床しと思ふ
ある女に始てあひて物こしに夜もすから申かたらひ
て歸りて朝につかはしける

あひもせずあはすもあらぬけふやきは事あり顔に詠暮さん
ひおりの目の車の心こそすれといひつかはしたり
しかは

今朝社はならはぬみにもあひてあはぬ戀とは是を思ひ知ぬれ

おもひをしるへにせし車はうつゝにてこそ。これは
よひとにそ定させまほしくといへり。

南殿の花ゆかしかりてみせよと申たる女の返しに
しかすかにひるはまはゆし雲の上の花はよるみよ星の光に
返し

今そしるよる花みよといひなして山もる人をとゝむへしとは
女にはじめてあひて朝につかはしける

こえぬともえこそ覺えね逢坂の關に心やとゝめ置けむ
かへし

いそきつるけしきにみえぬ相坂の關に心をとゝめしもせし
ふちつほの藤をみせにつかはして

逢事を待よりもけに今朝よりそ心にしけくかゝる藤なみ
ふかい

返し

あふ事をまつにもあらぬ數にそ今朝より藤はかゝり初ぬる
物申そめて後二三日音信侍らさりしを小侍従かもと
よりいひつかはしたりし

とへかしなうき世中に有々て心とつくる戀のやまひを
かへし

いかはいきしなはをくれし君ゆへに我もつきにし同し病そ
久しく音信さりし女のもとよりいひつかはしける

忘れしと契し文のもしならひかねてみえにしかゝるへしとは
返し

玉章にかきける文字は君と我ならはむ事をみせし成らん
疑行末戀歌林苑會

末までのことはなひそ逢ぬまのわか心をは我もしらぬに
戀の心を

命をはあふにかへてんと思へ共變るもまたて先そけぬへき
不誤被怨戀

今更にさてあはしとや君ならていつかは我は新まくらせる
欲盜戀

夜床をは汀となして妹をわれひく白波のなをやたゝまし
曉に人を送りて後につかはしける

みえずとも有としらなん送りつる心は未だ歸りこぬそよ
返し

思はれぬ雨夜の空に出る身はをくる心のかけかとも見す
夜戀といふ事を按察十首内

夜もすから枕をつたふ涙かな明ての後や袖におつらむ
かたらひ侍りける女久しう音し侍らさりければ絶果

ぬとや思ひけむいとわかき新枕をなんしたりと聞て
今音信さりしかはかれよりつかはしける

忍ひこし夕くれなるの儘ならてくやしや何のあくにあひ劍
返し

紅のあくをはまたて紫のわか根にうつるこゝろとぞ聞
一會之後不會戀歌林苑會

よしさらはしゐても戀し逢事を一夜てふ名は誰かくるしき
戀經正朝臣家歌合

まことにや戀の病を何と此それかかれかときつゝとふらむ
たとりえぬ涙の河の淺きせを妹かふみゝる時そしりぬる
いにしへはみかきか原に芹つみし人もかくこそ袖はぬれ
皁隨不會戀法住寺殿會

袖ひけはさすかよりて難面やくつろく物のぬけぬ成らん
被忘人戀

君をおもふ人の心のかはらなんさらはや我と新まくらせん
戀自我下人

我故としらすやあらん賤の女かつゝれる袖につける墨をは
戀若狭三位歌合

戀しなむ後はけふりとのほりなは涙しくるゝ雲とや成らん
絶て久しく成たる女又かたらひたる人に忘られにけ
りと聞て後あひて野中の清水の心ちしてものなと申
て後かれよりつかはしたりし

すむとしもなくて過にし忘水何ゆへさてもおもひ出けむ
返し

人もみなむすふなれともわすれ水我のみあかぬ心ち社すれ
橋上待人

妹をいかて木曾路の橋に待かけんよく方もなき道と社きけ

戀東西人

生野社いくかひなくてかへされめなとや近江の逢人のなき

老後戀

逢事そまたてけぬへきさらぬたに残すくなき我身と思へは

としおいて後むかひ渡りなりける女をやさしきさま
にはあらて申かたらひて後つかはしける

心をはむかひのきしにかくれ共よせぬは老の浪にそ有ける
返し

老の浪つゐによるへき岸なれば其方を忍ふ身とはしらすや
おなし人のもとにつかはしける

年ふりて色かはりぬる黒髪のならぬ筋なる物をこそおもへ
返し

朝ね髪さこそは老のみたるらめ鏡のかけのかはる筋にも

おなし人のもとより五月五日あやめ草にはあらぬ草
に付てつかはしける

けふとでもとはぬ菖蒲のうき中にあらぬ筋社嬉しかりけれ
返し

引上セイ

日にそへてねそまほしき菖蒲草あらぬ筋をは思ひ返して
逐夜増戀の心を

日をはつゝそふるつらさを重荷にて悶へはつゝへき心ち社すれ
新佛戀

雜

人心うつまきに猶いのりみむ戀の病もやめさらめやは
世中に思はすなる事のみ有て京には住侘ていつみ成

所に籠居て侍しに岡崎の三位六位にて侍し時内藏人に成ぬと聞て悦いひつかはすとて

君かためうれしき事は嬉しきに我歎をはなけきしもせし返し

嬉しさをうれしと思はし思ひしれ君か歎をなけきけりとは藏人おりて次の日女房のもとへつかはしける

思ひやれ雲井の月になれくらくきふせやにかへる心を返し

雲の上に心をふかくとめをかはすむ月影も哀れとそみむ地下に侍し時内より歌をたひめされてまいらすとて女房のもとへつかはしける

ことの葉は下吹風に散しあけて谷かくれる我なけき哉大内守護ながら殿上ゆるされぬ事を思はぬにしもなかりける比行幸なりて侍けるに大宿直なる家にかく

れゐて侍るに月のあかりければ丹後（兼イ）の内侍のもとへつかはしける

人しれぬ大内宮のやま守は木かくれてのみ月（兼イ）をみるかな返し

いつの間に月みぬ事を歎くらん光のとけき御代にあひつかくてのみ過るほとに世かはりて當今の御とき殿上ゆるされてこれかれより祝の歌よみてつかはす中に

中宮亮重家かもとよりつかはしける

まことにや木隠たりし山守の今は立出て月をみるかな返し

そよやけに木隠たりし山守をあらはす月も有ける物をおなし比皇后宮權大夫顯長のもとよりよろこひいひ

つかはすとて此春やおもひひらけて九重の雲井のさくら我ものとみむ返し

散をのみ待し櫻（兼イ）を今よりは雲の上にておしむへきかな二代の御門に昇殿して侍し時三位大進清輔朝臣のもとよりつかはしたりし

立歸る雲井のたつにことつてむ獨澤へに鳴とつけなん返し

諸共に雲をこふるたつならは我ことつてをなれやまたまし蓮花玉院の執行靜賢おなし比よろこひ申つかはすとて

木隠にもりこし月を雲ぬにて思ふことなくいかにみるらん返し

こかくれと何歎けむふた夜まで雲の上にてみける月ゆへ右少辨親宗おなし比悦申つかはすとて

若月の出はしめたる雲井にはまたおほるけの人はかよはす返し

長夜に出はしめたる月影に近つく雲の上そうれしき正下の加階して侍し時右馬權頭隆信かもとよりよろこひいひつかはすとて

和歌の浦に立のほるなる浪の音はこさるゝ身にも嬉しとそ聞返し

いかにして立のほる覽こゆへしと思ひもよらぬ和歌の浦浪加階の後ほとなく殿上つかうまつりたるを聞て少納言資隆かもとより悦申つかはすとて

位山のほるにかねてしるかりき雲の上までゆかむ物とは

かへし

翁さひはふ／＼のほる位山雲踏ほとにいかて成らむ

同よろこひの時中宮の大盤所よりとて

くらゐ山高く成ぬとみしほとにやかて雲井にのほる嬉しき

返し

のほりにし位の山も雲の上も年の高きにあはすとそ思ふ

殿上の事をきゝて女房大輔かもとよりよろこひつか

はすとて

よそにきく袖にもあまる嬉しさを包みあへすやあまのは衣

かへし

袂をはたちこそかふれ嬉しさをかさねてつゝむ袖の狭きに

ほとなく悦をふたゝひして侍りし比三位大進清輔朝

臣もとより

いかばかり袂もせはく思ふらむ雲井にのほる鶴の毛ころも

返し

知けりな雲ゐをおりて鳴たつの立のほるまで思ふ心を

昇殿の時これかれより悦の歌ともつかはしけるに前

大納言實定のをそくいひつかはしければこれより

雲の上を思ひ絶にしはなち鳥翹おひぬる心ちこそすれ

かへし

雲の上に千世もやちよも遊ぶへき鶴は久しき物としらなん

祝言のついでにもむかし思ひ出られてこそとてかれ

よりつかはしける

木隠てみし夜の月のかはらすはおなし雲井を哀とや思ふ

返し

こかくれてその夜の月に馴にしも雲にイゐをみては哀とそ思ふ

年の内に五位の上下をして正月に四位をして侍る悦
ひいひつかはすとて中宮亮重家

あけ衣色（マ）そへにしむらさきの今一しほやまして嬉しき

返し

色そへし袖に包し嬉しさを紫にてはあまりぬる哉

昇殿の後四位して侍し時亮君顯昭よろこひいひつか

はすとて

ことはりや雲井にのほる君なれば星の位もまさる也けり

返し

みえにけむ星の位も雲の上ののほりし折にのほるへしとは

誰ともなくてさし置たる文をみれば

いかにして野中の清水思ひ出て忘るゝはかり（イニナシ）・又成ぬ覽

そのゝち誰ともしらて女のしわざにこそはと思ひし

ほとに別當入道大谷にまかりたりしにおとし文やみ

しそれは我したりしなりと有しかは歸りてつかはし

ける

浅かりし野中の清水忘れねは又夏草をわくとしらなむ

女院百目の御懺法のはてに僧の布施にわらはへのさ

うそくをしてまいらするにすいかんさうそくをした

しき人々一具つゝしてつかはす中に中宮權大進重家

かつかはしたることに珍敷みえ侍しかはつかはした

る返事に申ける

音羽川せきいるゝのみか水ほすに人の心はみえける物を

返し

をととは河あさき心はみえぬるを關いれし水によそへさら南

是は伊勢か敦忠の中納言山庄に瀧おとしたる岩にか

きつたりける歌をおもひ出てよみたりけるにや。
はしめてあひたる女に正月朔日の日子日の松をつかはすとて

今日よりは君とねの日の松をこそ思ふためしに人も引らめ
別當入道大谷におはすと聞て四月十日比にまかりたりしに松に藤の花咲かゝりておもしろかりしかは歸りて後つかはしける
松になを残りやしけむ藤の花かへる心にかけてし物を返し

藤のはな心にかけては又もやと待事のみそときは也ける
従下なる事を歎侍る比によめる

思ひきや雲のかけ橋おりしよりしもか下にてあらん物とは
述懷敦頼住吉歌合

いたつらに年をつもりの濱に生る松そ我身のたくひ也ける
別當入道大谷を人にかくれて出られにけるときゝて
そこともきかさりしにほのゝおはする所を聞付て
誰ともなき文をさしをかせ侍にし

おほつかな谷より出る鶯もそこにありとはきかする物を
すなはちかへり事はなくて程へてかれよりつかはしたりし

こたへせぬ太山かくれの山彦のおもふ心をしらすや有らん
返し

こたへはそこともきかん山彦の思ふ心はいかゝしるへき
むかしいまのことをつくゝおもひつゝくるに哀なる事もましりて侍りけむ

いろゝに思ひあつむることの葉に涙の露の置も有けり

別當入道ことありて後とふらひ申事もなくて過にけるをのほりて程へて後山里のさひしさいかゝなと申つかはしたる返事に

さひしさをとふへき事と思ひける人の心をことし知ぬる
返し

淋しさはさやは有しと人しれす歎しことはことしのみかは
鳥羽院かくれさせ給ひて後歌林苑にて人々懷舊といふ心をよみ侍けるによめる
昔わかなめし月の入しより世にふる道はふみたかへとや

寶莊嚴院になへてならぬ梅有と聞て執行靜賢におろし枝をこひにつかはしたるにことしはえあらし明春
たはんと申たる返事によめる

頼むとも又こん年の春までは梅のえまたし残りなき身は
返し

色も香も心にふかく染つれば梢はるかに君そみるへき
年老たる人の五月十日比に盧橋の有けるを隣なる人のもとへつかはすとておりひつのたてかみに書付て
つかはしける

橋は花の咲まてありけるに老ぬる身こそとまるましけれ
返し

時過て猶さかりなるたち花をおる人の身によそへてそみる
小侍従あまに成にけると聞てつかはしける
我そ先出へき道にさきたてゝしたふしとは思はさりしを
かへし

をくれしと契し事を待ほどにやすらふ道も誰ゆへにそは
帥中納言顯時卿子四人昇殿せさせられたるよしを聞

て
雲井迄みなほなるたつの子はいかなるすより立初けん
返し

引つれて雲井に昇るたつの子は三熊野に住しるしとをしれ
熊野につかふまつれる人なりければかくよまれたる
にや。

少輔別當入道空仁と申歌よむもの侍るをとし比聞わ
たり侍るかれ聞てたかひにいかてあひ見てしかなと
思ひけるほとに歌林苑にて人麿か影供し侍ける日あ
いて歌よみなとしてのち程へていひつかはしける
音にのみきゝきかれつゝ過々てみきな我みき其後はいかに
返し

戀々てみきわれみえね其後は忍ひそかぬる君はきにあらし
上達部殿上人あまた大内の花みられ侍しに三位大進
清輔文をかきてさしつかはしたるをみれば

朝夕になれし昔の百敷や花のたよりにみるそ露けき
返し

馴にけむ昔を忍ふ袖のうへにおつる花もや露けかるらん
岡崎の三位やまひにわつらひて出家のよしを聞てと
ふらひつかはすとてよめる

三年まで君に先たつ身なれとも眞の道に入をくれぬる
返し

かはり行ひつしの歩近ければいそき入ぬる道としらなん
同入道のもとより筆をつかはすとてつゝみ紙に書付
てはへりける

やるかたに筆に涙そこほれぬる我あらは社かきもかはさめ

返し
こほらん涙にたくふ水莖を我目の前にかけてこそみれ
ある女のもとへ山端に月いらんとするほとかきたる
扇をつかはすとて

山のはに入なむとする月影を我によそへて哀ともみよ
返し

千世迄と君によそへてみる月そ山のはかけて入すもあら南
別當入道山里におはする所に尋まかりたりしにむか
しの事ともなとかたりつゝあはれつきせて歸て後か
れより故院の北面の車などのみ面影にこそたちしか
とて

有し夜の君やかたみにとまるらん先みしまゝに昔おほえし
返し

世もかはり姿もあらぬ君なれば我も昔のかたみとそ見し
少輔入道素覺年ころの妻にをくれて歎くと聞てとふ
らひつかはすとて

ほともなきかしらの雪を持たから先にきゆるを哀とそ思ふ
かへし

末の露もとの雫はけふならすうきよのうへとみるそ悲しき
其後。ほともなく入道もうせ侍にけり。

九月廿日あまりのほとに天王寺へ参りて侍しに伊賀
入道爲業かもとよりこもりて侍けるかかくと聞てつ
かはしたりし

君こすは誰にみせまし津の國の難波わたりの秋のけしきを
返し

心ある君ましければともにこそ難波わたりの氣色をもみめ
はい

又女房大輔かまいりたりけるかかくと聞いていひつかはしたりし

底清みむすふ龜井の水すみて心のあかをすゝきはてつる返し

手に結ふ龜井の水はにしの海もわたす心をすゝめさらめや此事を伊賀入道聞いていひつかはしける

西の海に渡す心の月の舟かめ井よりこそ澄ハイのほるらめ返しイナシ

わか心龜井にすめと西へ行月の舟にそ乗歸移イりぬる又是より入道のもとへつかはしける

諸ともにいさゝはゆかむ極樂の門むかひなる所なりけりかへし

興津なみ君先たてゝ清き海の舟出いそかむにしの門より其後入道のほりぬと聞て曉におひてつかはしけるわたのへにて舟に乗所にてそ（よ）み侍ける

都へは我は急かすなはの海のかなたの岸へゆかまほしさに返し

かの岸へゆかまほしきは我もあれは都の方はいそかれぬ哉ことちといふ歌うたひ念佛所にて夜もすから歌うたひてきりしといふあき經よみなとせしを伊賀入道聞て興に入て我門といふ催馬樂うたひなとして忘かたくして思ひ給ふ事を門むかひとよみ侍し事なとを思ひ出られけるにやのほりて後入道のもとより歌三首よみてつかはしたりける

行やすくつとめてゐたる極樂の門むかひこそおもひ出けれ思ひいづや秋のきりしの法の聲立ぬに付て忘れやはする

すみのほるよることちは松風を開心ちして身にそしみけるに返歌三首を一首にかきて

琴の音もきりしかのりも立聞し我ことをさへわれそ忘れぬある人のもとにきしをつかはすとて申つかはしけるこれをみよ人もさこそは妻戀る春のきゝすのなれる姿を

返し人にかはりて女房大輔われはたゝかりの浮世を哀なる春の雉子のなれるさまにも

和歌所の人々あつまりて夜もすから歌よみ連歌なとしてあそはれ侍しに隣なりけるおきなたひゝよはれければまいりて人なみゝにましろひ侍るにある宮はらの女房二三人を引物のうち（あそむ）にすへておなしく連歌（し）なとして今よりはなかく知人にせん

なと申かたらひて夜もやうゝ明方に成にしかはまかり歸てのち二三日計ありて一人かもとへ遣しける君にあひて歸りにしより昔せし戀にさにたる物をこそ思へ返し

我はいさ昔もしらすあかさりし名残はそれに始てそおもふこれを聞て今ひとりの女房さにたるといふ事をいまいましかりてさ文字をはきかといひければさらはよみこそなをさめとて

かくしあらは早そけなましそのかみの戀にはきにぬ我思哉かへし

なとやさはさにると聞し古をいとひけるさへ今は戀しきあひしりて侍女わつらふ事有けるか久しくおこたらさりければ日野にこもりて日比に成ぬるよしを聞ておほつかなさ人に人をつかはすとて申つかはし侍ける

茜さす日の出る方に妹をゝきてあくれば山のはをそ詠むる
大夫公俊恵か坊にかたゝかへにまかりたりし夜雨の
ふり侍しに坊主のもとよりいひつかはし侍りし
月もれとまはらにふける闇の上にあやなく雨やたまらざる覽

返し

主からそ思ひしらるゝ雨のもるねやの板間の月のゆへかも
南殿の花ゆかしかりける人にみせて後よりなき知
人にせんなとちきりて(後)久しくをとつれ侍らさり
しかは霜月の廿日あまりのほとにいひつかはしける
こむ春は雲井の花を待つてなれゆへ有しことゝかたらん
返し

なれ故と雲るの花のかたれはちりに散てやにけむとす覽
岡崎の三位入道のもとにかへに瀧のかたをかきてそ
の瀧の下よりまことの水をおとしつきたり遠くてみ
れはたゝおなし水の落たるやうにみえしをみてまか
り歸りてつかはしける

うつゝにもかへにも同し瀧をみてねても覺ても忘れぬ哉
返し

夢のよにかへよりおつる瀧の糸を君か心にかけゝりやさは
うちイ

あひしりて侍女房二月十日比に大宮にさふらふよし
を聞いていひつかはしける

春なから秋の太山に入人は紅葉をこひて花をみしとや
返し

あたに見し花のつらさに春なから秋のみ山を出そわつらふ
如渡得船

彼岸をねかふ心やるからんうれしくよする法のふねかな

入磨影供の前にて一品經供養人々せられ侍しに勸持
品のこゝろを
けふこそあれ終は佛とおもふなはしらてや我を恨かほなる
化城喻品

かりのみやに暫し休むるしるへあれは終に實の道にきに梟

やさしき方にはあらて申かたらひける女のもとより
雪のふりたりける朝につかはしたりし

朝戸明てまたれやせまし降雪のとふへき人のある身成せは
返し

朝戸あくる程にはゆかしけきの雪の積れは暮に踏分てこそ
ひとりのみあかしくらす比大夫公俊恵かもとよりと
ふらひつかはして侍ける文に

身をつめはいかゝはすらん獨ねてかた敷袖のさゆる霜夜に
返し

偽の身をはえつましつむならは獨はねしと思ひやらなん
甲斐大進爲基かもとより故帥大納言集を尋につかは
したりしをりしも大事なる所勞ありて人してかゝせ
てつかはしける

はかなさを誰かは君にかたらまし昔のあとを尋さりせは
返し

ありなしをかつはかたみに聞やとて昔の跡を尋ぬはかりそ
鳥羽院に侍し時光信かもとより櫻花をつかはして

みなもとはおなし梢の花なれば匂ふあたりのなつかしき哉
返し

けにや皆もとはひとつの花なれば末々なりと思ひはなつな
敦頼入道西宮にて歌合し侍りしに海上眺望のこゝろ

をよめる

わたつ海を空にまかへてこく船の雲の絶間のせとに入ぬる

おなし歌合に述懐をよめる

おもへたゝ神にもあらぬえひすたに知なる物を人のあはれは

おなし心を

常にわかねかふ方にしますと聞神を頼むは此世のみかは

とし比かたらひ侍りける女宮古や住うかりけむおと

こにくしてあつまのかたへまかりける日ことさらに

かたみにもせんときならしたる物ひとつとこひけれ

はつかはすとて

とにかくに我身になるゝ物をしもはなちやりつる事を悲しき

返し

はなたるゝ我身かたみにたくふイになるゝ唐衣こゝろしあらはなれも悲しや

群書類從卷第二百四十七

和歌部百二家集二十

紀貫之集第一

延喜五年二月廿一日尙侍之被_レ奉_ニ泉右大將_一賀之時
屏風依_ニ内裏仰_一奉_レ之

夏山のかけをしけみや玉ほこの道ゆく人も立とまるらん
雪の降たる所

白雪の降しく時はみよしのゝ山下風に花そ散ける
延喜六年月次の御屏風八帖料歌四十五首依_ニ内勅_一奉_レ之

行て見ぬ人もしのへと春の野のかたみにつめる若なり鳧
二月はかりに

獨のみ我こえなくに稻荷山春のかすみの立かくすらん
弓のけち

あつき弓春の山へに入時はかさしにのみそ花はちりける
三月田返す所

山田さへ今はつくるを散花のかことは風におほせさらなん
わすれ草

うちしのひいさ住のえの忘草わすれて人をつましとそ思ふ
三月盡日

花もみなちりぬる時はゆく春の故郷とこそ成ぬへらなれ
五月ともし

五月山木のした闇にともす火は鹿のたちとゝしるへかり鳧
六月鵜河

かゝり火の影しうつれはむは玉のよ河の底に水ももえけり
七月七日

七夕にぬきてかしつるから衣いとゝ泪に袖しぬれなん
秋風によの深行は天河かはらに浪のたちゐこそまで

八月駒迎
相坂の關の清水にかけみえていまやひくらん望月のこま

小鷹狩
秋の野にかりそくれぬる女郎花こよひ計の宿もかさなん

穉衣
穉の田のほに出ぬれは打むれて里遠くよりかりそきにける

風さむみわかから衣うつ時そ萩の下葉も色まさりける
志賀山越

人しれすこゆと思ひし足引の山下水にかけはみえつゝ

十一月神樂

おく霜に色もかはらぬ榊葉のかほるや人のとめてきつらん
大鷹狩 〔をやはイ〕

霜かれの草葉をしと思へはや冬の、田をは人のかるらん
十一月臨時祭 〔うイ〕 〔野へはイ〕

宮人のする衣のゆふたすきかけて心を誰によすらん
十二月佛名

年の内に積れる罪はかきくもりふりつる雪のと共にきえ南
延喜十三年十月十四日尙侍四十賀屏風歌依内裏仰
奉之 〔らふる白雪イ〕

まねくとやさつるかひなく花薄ほに出て風のはかるなり梟
人家のほとりになかれたる水にくれなみの木有 〔てイ〕

水底にひかりうつれは紅葉はの色も深くや成まさるらん
鷹鳴を聞 〔かけしイ〕

秋きりは立わたれとも飛かりの聲はそらにもかくれさり梟
月のなか 〔なくイ〕

から衣うつ聲きけは月のなかまたねぬ人をそらにしる哉
紅葉の山にみちてしくれのふりそきおつる 〔きよみイ〕

足引の山立くもりしくるれと紅葉はなをそてりまさりける
おとなひ人の馬よりおりてしはし松のもとにやすむ 〔かきくらしイ〕

に岸ちかき石に浪のしきりによせたる
我のみやかけとは頼む白浪のたえす立よるきしのひめ松 〔もイ〕

延喜十四年二月廿五日女一宮御屏風の料歌
新しき年とはいへとしかすかの我身ふりぬるけふにそ有ける 〔にイ〕

山みれは雪をまたふる春霞いつと定めて立わたるらん
山かせに香をたつねてや梅花にほへる里に家ゐるめけん

やまのかひたなひきわたる白雲は遠き櫻の見ゆる成けり
いかにして敷をしらまし落たきつ瀧のみをよりぬける白玉

爰にしてけふはくらさん春の日の長き心を思ふかきりは
月をさへあかすと思てねぬ物を時鳥さへなきわたるかな 〔たにイ〕

深みなるまこもえりさけあやめ草袖さへひちてけふや引覽
住の江のあきみつしほに御秋して戀わすれ草つみて歸らん 〔はイ〕 〔かりそけイ〕

風の音のあきにも成ぬ久堅の天つ空こそかはるへらなれ
かりにとて我はきつれと女郎花みるに心の思ひつきぬる 〔あるイ〕

常よりもてりまさるかな山の端のもみちをわけて出る月影
聲をのみよそにきつ我宿の萩には鹿のうとくも有かな

さくかきりちらてはてぬる菊の花むへしも千世の齡のふ覽
吹風にちりぬと思ふを紅葉はのなかる瀧のともにおつ覽

延喜十五年閏二月廿五日に齋院御屏風歌依勅奉之
女共瀧のなかに出る花をみあるは手をひたしあら 〔見ゆイ〕

ひたる
春くれは瀧のしら糸いかなれは結へとも猶あはになるらん

女の寺詣に山路につれてゆく
思ふことありて社ゆけ春かすみ道さまたけに立わたるらん 〔かなイ〕

人の木のもとにやすみて川こしに櫻花をみたる所
遠方の花もみるへく白浪のともにやわれは戀わたらまし 〔もイ〕

旅人の道にありて歸鷹の雲に
ねたき事かへるさならは鷹企をかつ聞つゝそ我はゆかまし

人の家に春花をみたる

我宿の物なりなから櫻花ちるをはえしもとめすそありける
倚柳下曳糸條

花見にとゆくへき物を青柳のいとてにかけてけふは暮しつ
藤の松にかゝれる

緑なる松にかゝれる藤なれとおのか心と花はちりける
〔こゝろと花はさきイ〕

延喜十五年二月三日右大弁やすたの君の故中御門
の左大殿の北方の御爲に奉給五十賀の屏風の歌

我宿の松のこすゑに住つるは千世のゆかりと思ふへらなり

水とのみおもひし物をなかつゝ瀧は多くの糸にそ有ける
〔るイ〕

なへてしも色かはらねは常葉なる山には秋もしられさり鳧

うつろはぬ常葉の山にふる時は時雨の雨もかひなかりけり

紅葉はのまなく成ぬるこの本は秋のかけこそ残らさりけれ
〔モリイ〕

紀貫之集第二

延喜十五年九月廿二日右大臣殿〔忠平〕の奉爲清和七
宮御息所被奉六十賀時屏風歌

かそふれとおほつかなきは我宿の梅こそ春の数はしるらめ

百千とりこつたひちらせ梅花何れの春かきつゝみさらん
〔すさくらイ〕

菊の花しつゝおちそひ行水のふかき心を誰かしるらむ

みよしの山より雪は降くれといつともわかぬわか宿の竹

延喜十六年齋院御屏風四帖か料の歌依仰獻之女庭
にいてゝ梅花殘雪をもてあそふ

梅の花さくとしらすやみよし野の山に友まつ雪のみゆらん

人の木の下に立て遙に櫻花をみる
山櫻よそれに見るとてすかのねの長きはる日を立くらしつる

池邊に藤花あり女水にのそみて是を見る

藤の花色ふかゝれや影見れば池の水さへこむらさきなる
〔けイ〕

なかれよる瀧の糸こそ弱からしぬけと亂れておつる白玉
〔るイ〕

海のほとりにある松木のもとにおこなひ人やすむ

いく世へし磯邊の松をむかしより立よる浪や数はしるらん

雪庭にみちたり

夜ならば月とそみまし我宿の庭白妙にふりしける雪
〔つるイ〕

延喜十七年八月に仰によりて獻之

人はむへおそくしりけり梅花さける後にそはるはきにける
〔めイ〕

梅かえに降かゝりてそ白雪も花の便にをらるへらなる
〔ゆイ〕

若なつむわれを人見は淺みとり野邊の霞を立かくさなん
〔はイ〕

鶯のたえず鳴よる青柳のいとにうきふしなくもあらなん

松をのみたのみてさける藤の花千とせの後をいかゝと思ふ
〔はイ〕

人もなきやとに匂へる藤の花風にのみこそなひくへらなれ

見てのみや立くらしてむ櫻花散をゝしむにかひなかりけり

をしみにときたるかひなく櫻花みればかく社散まさりけれ

千世までのゆきかと見れば松風にたくひて田鶴の聲を聞る

色のみそまさるへらなる磯の松かけ見る水もみとりなり鳧

かへる鴈わかことつてよ草枕旅は妹こそ戀しかりけれ

なかれゆくかはつなく也足引の山吹の花匂ふへらなり

夏衣しはしたたちそ時鳥なくともいまた聞えさりけり

時鳥まつ所にはおともせて何の里の月になくらむ

こぬ人をしたにまちつゝ久堅の月を哀れといはぬよそなき
朝霧のおほつかなきに秋の田のほに出て鴈そ鳴わたるなる

女郎花うつろひかたになる時はかりにのみ社人は見えけれ
花薄ほにはおけとも初霜の色はみえすそ消ぬへらなる
八重葎生にし宿にから衣たかぬふとてかうつ聲のする
おく物はひさしき物を秋萩の下葉の露のほともなきかな
紅葉はの散しく時は行かよふあとに見えぬ山路なりけり
白浪はふるさとなれや紅葉はのにしきおりつゝ立かへる覽
物毎に降のみかくす雪なれと水には色も残らざりけり
降雪をそらにぬさとそ手向たる春のさかひも年のくるれは
延喜十七年冬あつひらの口部卿宮屏風に
から衣あたらしく立としなれや人はかく社ふりぬへらなれ

子日

春霞たなひく松の年あらはいつれの春か野へにこさらん
道行人櫻の下にとまれる

玉ほこの道は猶こそ遠けれと櫻を見ればなかるしぬへし
あたなりと思物から櫻花ある所にはやすくやはゆく

池の上に藤の花さきける

池水にさきたる藤を風吹は浪の上にたつ波かとそ見る

瀧

松の音をことにしらふる秋風は瀧の糸をやすけて引らむ

九月晦日

もみちはを別をしみて秋風はけふのみむろの山を越らん

延喜十八年女四宮の御かみあけの料の御屏風の歌

依ニ内裏仰ニ奉レ之 正月

山の端をみさらましかは春霞たてるもしらてへぬへかり鳥

二月

よる人もなき青柳のいとなれは吹くる風にかつみたれつゝ

三月

うつろはぬ松の名立にあやなくも宿れる藤のさきてちる哉

七月

萩の葉のそよくおとこそ秋風の人にしらるゝはしめ成けれ

八月

あま雲のよその物とはしりなからめつらしきかな鴈の一聲

九月

いつれをか花とはわかん長月の有明の月にまかふしら菊

十月

なかくる紅葉し見ればから錦瀧のいとしておれる成けり

十二月

木間より風にまかせて降雪を春くるまてははなかとそ見る

紀貫之集第三

内裏御屏風歌

あたらしく明ることしをもゝとせの春のはしめと驚そなく

人の梅花を見たる

我やとに有とみなから梅花あはれとおもふにあく時もなし

山邊にちかくすむ女どもの野へに遠くあそひはなれ

て家の方をみやりたる

野へなるを人もなしとて我宿に嶺のしら雲おりやあるらん

立ねとやいひにやらまし白雲のとふこともなく宿にゐる覽

故郷にけふ来て見ればあたなれと花の心そむかし成ける

春のくるゝ所

いつとのみ櫻さくとかをしめともとまらて春の空にゆく覽

松にさける藤の花

藤の花あたにちりなは常磐なる松にたくへるかひやかなか覽
散ぬとてあたにしもし藤の花ゆくさき遠き松にさければ

おほみわの祭にまうてたる

古のことならずして三輪の山こゆるしるしは杉にそ有ける

さうふとれる又かさせるもあり

あやめ草ねなかきとれは澤水のかき心は知ぬへらなり
時鳥聲聞しよりあやめ草かさすさ月と知にしものを

女どもの月におきて時鳥まてる所

なくさめてひとよたにねん月影に山時鳥なきてゆきなん

七日

よをうみて我かすいとは七夕の涙の玉をとやなるらむ

よるの歌

誠かと見れともみえず織女はそらになき名を立る成へし

八月十五夜海のほとりなる家に男女出るて月のいつ
るを見たる

難波かたしほみちくれば山の端に出る月さへみちにける哉

田の中に小鷹狩したる所

秋の田と世中をさへ我ことくかりにそ人は思ふへらなる

河のほとりに鶴のむれむたる

むれむたる河邊の鶴も君かため我おもふ事を思ふへら也

萩見たる

とめきつゝなかなすも有哉我宿の萩は鹿にもしられさるへし

をんなの菊花みたる所

置霜のおきまかはせる菊の花いつれをもとの色とかはみん

紅葉いたうちれる山こえたる

ひねもすにこえもやられす足引の山の紅葉をみつゝ迷へは
紅葉のなかるゝをみたる

もみち葉のなかるゝ時は立田川みなとより社秋はゆくらめ

人の家の竹いたくおひたる

竹をしもおほく植たる宿なれば千とせを外の物とやはみる

大鷹狩したる所

おほつかな今としなれば大あらしの森の下草人そかりける

霜かれに成にしやとゝしらねはやはかなく人の狩にきつ覽

神祭

神まつる時にしなれば坂樹葉の常盤の影はかはらざりけり

山里に住人の雪ふるをみる

雪のみや降ぬとはおもふ山里にわれも多くの年そへにける

延喜十一年東宮御屏風歌右近衛中將の君の被_レ傳仰

あれひきに引つれて社千早ふるかも河なみ立わたりけれ

時鳥なくなる聲をさなへとるてまうちやすみあはれとそ聞

たきつせの物にそ有ける白玉はみるたび毎にみぬ時そなき

夜に隠れきつるかひなく紅葉はも月もあかく照まさりける

京極の中納言の御屏風歌

春かすみ立ぬる年のけさみればやとの梅さへめつらしき哉

〔我宿にさける梅なれと年毎に今年あきぬと思ほえぬ哉〕

野へなるを人やみるらむ若なつむ我を霞の立かくすらん

雨とのみ風吹松は聞ゆれと聲には人もぬれすそ有ける

山ふかきやとにしあれば年毎に春の心はあさくそ有ける

到るまにちりもそはつる如何して花の心にゆくとしられん

ゆかりとも聞えぬ物を山吹のかはつの聲に匂ひぬるかな

行月日おもほえねとも藤の花見れはくれぬる春そしらるゝ

五月くる道もしらねと時鳥なく聲のみそしるへなりける
 一とせをまちつる事も有つれとけふの暮るそ久しかりける
 織女はいまや別るゝ天河かはきりたちて千鳥なくなり
 降しける雪かとみゆる月なれとぬれてさえたる衣手そうき
 てる月をひるかとみれば曉に羽をかく鳴もあらしと思ふ
 うゑ袖またもひなくに秋の田を鷹かねさへそ鳴渡りける
 「鷹鳴きて吹く風寒しから衣君まちかてに打たぬ夜そなき」
 山遠き宿ならなくに秋萩をしからむ鹿の鳴もこぬかな
 もみち葉はてりて見ゆれと足引の山はくもりて時雨社ふれ
 「もみち葉の流るゝ時は白浪のたちにし名社變るへらなれ」
 白雪にふりかくされて梅花人しれすこそにほふへらなれ
 一とせに二度にほふ梅のはな春の心にあかぬなるへし
 延長七年十月十四日女八親王の御爲に陽成院の親王
 の四十賀せらるゝ時の屏風歌内裏調進之依勅奉
 久之くも匂はんとしてや梅花春をかねてもさきそめにけん
 いとをのみ絶すより出す青柳を年のをなかしるしとそ見る
 櫻よりまさる花なき春なればあたし草葉を物とやはみる
 藤のはな咲ぬるをみて時鳥またなかぬからまたれけるかな
 足引の山下しけき夏草のふかくも君をおもふころかな
 常夏の花をし見れば打はへてすこす月目の數もしられす
 こふるものなくてみるへく我宿の萩の下にも鹿ばなかなん
 かりにのみ人の見ゆれば女郎花花の袂そつゆけかりける
 心とてちらむたにこそをしからめなとか紅葉に風の吹らん
 紅葉せぬ草木にもにぬ竹のみそかはらぬ物のためし成ける

松か枝に降しく雪をあしたつの千世のゆかりに降かとそ見る
 世の中にひきしき物は雪の中にもと色かへぬ松にそ有ける
 延喜のすゑよりこなた延長七年よりあなた依内仰一
 獻れる屏風歌
 春立て風や吹とてけふ見れば満のみをより玉そちりける
 若菜つむ春のたよりに年ふれば老つむ身社わひしかりけれ
 久しきをねかふ身なれば春かすみ棚引松をいかゝと思ふ
 春ことに絶せぬものは年をへて風によらるゝ青柳の糸
 みし人もこぬ宿なれと櫻花「色もかはらす花そちりける」
 「人も皆我もまちこし櫻花」ひとひとたてゝみれとあかなくに
 いまはとて残れる峯の藤なみは春のみなとのとまり也けり
 あひたなくよする藤浪立かへりいのりても猶あかすも有哉
 大そらをわれもななめて彦ほしの妻まつよさへ獨かもねん
 女郎花にほひを袖にうつしてはあやなく人や我をとかめん
 行水の心はきよきものなれとまことと思はぬ月をみえける
 一枝の菊折からにあら玉の千とせはたゝにへぬへかりける
 足引の山の川きりなにとてか行人をのみたちかくすらん
 散事も色さへともにもみち葉ばもゝとせまとか變らさり鬼
 大空しあたにみえねは月影もかはる時なくてらすへらなり
 春ちかく花思をりに我宿の梢に雪のふりかゝりつゝ
 うくひすのなきそめぬるを梅花色まかへとや雪の降らん
 立ぬとは春をきけとも山里はまち遠にこそ花はさきけれ
 ふたつこぬばるとおもへと影みれば水そこにさへ花は散鬼
 鶯のきゐつゝなけは春雨にこのめさへこそぬれてみえけれ
 川へなる花をし見れば水そこの影もともしくなりぬへら也

櫻花ちとせみるとも鶯もわれもあくよもあらしとぞ思ふ
散かたの花みる時は冬ならぬわか衣手に雪そふりける
春の爲あたし心のたれなれは松か枝にしもかゝるふちなみ
春雨に道まとはして我宿にひさしくみえぬ人もみえなん
こぬ人を月になさはやむは玉の夜毎にわれはかけを頼まん
雨ふらん夜そおもほゆるひさ方の月にたにこぬ人の心を
山里につくれるやとは近けれと雲井とのみそ成ぬへらなる
「おく霜の心やわける菊の花うつろふ色のおのかしゝなる」
瀧つせもうき事あれや我袖の泪につゝおつるしら玉
よとゝもに鳥の網はる宿なれはみはかゝらんとくる人もなし
空にのみ見るたにあかぬ月かけの水そにさへ又も有かな
うきてゆく紅葉の色のかきからに河さへちかく見え渡る哉
雪ふれはうとき物なく草も木もひとつ道にそ成ぬへらなる
いかて人なつけそめけんふる雪は花とのみ社ふり増りけれ
みえねとも忘れし物を櫻花けさは雪のみふりかくしつゝ
くれなゐに紅葉すれはや石上ふるらむことに野へをそむ覽
白雲のたな引わたる足引の山のたなはし我もふみみん
延長七年十月十四日女入親王陽成院一の親王の四十
賀せらるゝ時の屏風歌内裏令調進之依勅奉之
ちはやふる神たちませよ君かためつむ春日野の若菜也けり
行末もしつかにみへき花なれとえしもみ過ぬ櫻成けり
時鳥きつゝ木高くなく聲は千世の五月のしるへなりけり
九月九日老たる女の菊しておもてのこひたる
今までにわれを思へは菊の上の露はちとせの花にそ有ける
竹に雪のふれる

白雪はふりかくせとも千年まで竹のみとりはかはらさり鬼
承平五年内裏御屏風之料の歌女すのこに出てゐたり
男物いふ梅木あり

〔よこイ〕

子日したる人々馬車に乗各歸る中に男松をもたせて
車にやりたる

此松の名をまねはれは玉ほこの道わかるとも我はたのまん
女簀子にさし入たる櫻花折たる馬に乗て道行法師垣
こしにうちよりて見る

物こしに花をうちみて人しれす

馬に乗たる人故郷とおほしき所にむれ入て櫻を見た
り

故郷にさける物から櫻花色はすこしもあれすそ有ける

男とも打むれて池邊にさける藤の花みたり

松か枝にさきてかゝれる藤浪を今はまつ山こすかとを見る

女とも神のやしるにまうてたり

〔を〕〔やイ〕

打むれて心さしつゝ行道の思ふおもひや神もしるらん

馬にのる女旅行

家路にはいつかゆかむと思しを日比しふれはちか付にけり

月夜に女の家に男いたりてすのこにゐて物いはせたり

山のはに入なんと思ふ月みつゝ我はとなからあらむとやる
久堅の月のたよりにくる人はいたらぬ所あらしとそおもふ

網代に紅葉ちりて落る所

二度やもみち葉はちるけふみれは網代に社は落はてにけれ
承平六年右大臣殿御障子おやこ住給中へたてなる繪

に松竹鶴かける所

おなし色の松と竹とはたらちねの親子久しきためしなり鳧

鶴むれたる所

鶴おほくよをへてみゆるはまへ社千とせつもれる所也けれ

承平二年右大臣殿二(五)郎侍従の御屏風歌稻荷詣

春霞立ましりつゝいなり山こゆる(おもひ)ろの人しれぬかな

いやしき人神まつる

柳葉の色かはりせぬ百年のけふことにこそ祭まつらめ

十一月臨時祭

ゆふたすきかけても人を思はねと卯月もけふもまた明ぬ哉

十二月晦の雪

我宿にふるしら雪を春にまた年こえぬまの花とこそみれ

承平六年春左衛門督屏風歌

思ひかねいもかり行は冬のよの川かせさむみ千とり鳴なり

同年の夏八條右大將の北方本院の北方七十賀し給ふ

時の屏風の歌大將仰給ふ時に人の家松

變らすもみゆる松かなうへしこそ久しき事のためし成けれ

藤花

名残をはまつにつけても百年の春のみなとにさける藤なみ

四月神祭

まつる時さきもあふかな卯花は猶氏神の花にそ有ける

山里

草も木もしけき山へはくる人の立よるかけの(たより)しるへ成けり

人の家の橘

年ことにきつゝ聲する時鳥はなたちはなやまつに有らん(つまとなるイ)

瀧

白雲やなかるゝとのみみえつるは落くる瀧のつねにそ有ける

野花

秋の野のちくさの花は女郎花ましりておれる錦成けり

山の月

草木みなもみちすれとも照月の山のはゝよにかはらさり鳧

水邊菊

さくの花ひちて流るゝ水にさへ浪のしはなき宿にそ有ける

河のせに驛くあしたつおのか世を浪とゝもにや君によす覽

人の家の竹

千世もたる竹の生たる宿なれはちくさの花は物ならなくに

承平七年依仰奉之

年立は花(う)こふへくもあらなくに春今さらに雪のふるらん

くれぬとてなかつ成ぬる鶯の聲のうちにや春はへぬらん

つらき人忘れなんとて拂ふれとみそくかひなく戀を増れる

秋はきにみたるゝ玉はなく鹿の聲よりおつるなみた也けり

同年右大臣殿屏風歌

わかなつむ所やのうちに女な

めたり

野邊みれば若菜つみけりむへしこそ垣ねの草も春めきに鳧

子日

春立て子日になれは打まれていつれの人か野へにこさらん

人遙に山の瀧を見る

山分て落くる瀧を白雲のたなひくとのみおとろかれつゝ

駒引

都まてなつてひくはをかき原へみの御牧の駒にや有らん

人家に紅梅あり

雪とのみあやまたれしを梅花紅にさへにほひぬるかな

人家に櫻花あり男あまた有てもてあそぶ

ことさともみな春なれと我やとの櫻にまさる花やなからん

人家のうしろにて男女さゝめきことしたり

忍ふれと思ひかねては人しれす心ひとつにみえぬへき哉

道行人木のもとにゐて時鳥のなきてゆくをおよひさ

していふこと有へし

玉ほこの道もゆかれす時鳥なきわたるなる聲をきゝつゝ

女あまた川原にすゝみあふ

我みあまたあらしと思を水底に覺來なきは影にやはあらぬ

みな月に秋したる所

はらへ共はらふる水のつきせぬは忘れ難き戀にそ有ける

道行人馬にのりてむちして月をさして見る

照月をみさらましかはむは玉の夜は物へもゆかすそあらまし

七日男あまた庭にあつまりて天河を見る

大空はかひもなけれと織女をおもひやりつゝなかくめつる哉

馬車にのりて人おほくさま／＼の花もさきみちたり

秋くれははたおる虫のあるなへに唐錦ともみゆるのへかな

山里の人の家に釣殿あり水の上に木葉なかる

そまぢかき所ならすは行水ももみちせりとを驚かれまし

人の家のすたれのもとに女出わたるに垣の下に男立

てせうそくいふなる垣のつらに薄おほかり

いてゝとふ人のなきかな花薄われをはかなとまねく也けり

人家に男女庭の菊見たり

植てみる菊といふ菊は千世までに人のすくへきしるし也梟

臨時祭

足引の山井にすれる衣をは神につかふるしりとそ思ふ

人家ありすたれのもとに立出て雪ふるを見たり

草も木も花さきにけり降雪や春よりさき／＼の花と成らん

松かえにつるかとみゆる白雪はつもれる年のしるし成けり

紀貫之集第四

延喜十八年四月廿六日東宮御屏風料歌櫻木のもとに人々をる所

かつみつゝあかすと思へは櫻花ちりなん後そかねて戀しき

岸のほとりに藤花さける所

水にさへ春やくるゝと立歸り池の藤なみおりつゝそ見る

秋したる所

此川に秋へてなかつことの葉の浪の花にそたくふへらなる

七日

天河よふかく君はわたるとも人しれすとはおもはさらなん

小鷹狩したる所

花の色を久しきものと思はねとわれは山のをかりに社見め

大鷹狩したる所

春にのみ見えて山のへ冬なればさりけたになく霜枯にけり

男の花みる所

おなし枝に花しきければ秋はきの下葉にわきて心をそみる

雪ふれる所

春近く成ゆく冬の大そらは花をかぬてそ雪ふりにける

延喜十八年承香殿女御屏風歌依仰獻之水邊に梅花さ

きたる

梅花またちねとも行水のそこにうつれる影そみえける

鴈のかへるに旅人あり

ともく^{〔はい〕}に思ひきつれと鴈金のおなし里へも歸らさりけり

藤花

うつろはぬ色ににるともなき物を松か枝にしもかゝる^{〔のし〕}藤浪

櫻花の散所

同じ色に散しまかへは櫻花ふりにし雪のかたみとそ見る

人出て春野にあそふ

春にかく成ぬる時の野へみれは草のみとりも色^{〔まさ〕}こかりけり

河邊の松

松をのみときはと思へはよとゝもに流るゝ水のみとり也梟^{〔ふに〕}

やな見れば河かせいたく吹時そ浪の花さへ落まさりける^{〔はい〕}

雨ふるとふく松風は聞ゆれと池のみきはもまさらさりけり

女ともあまた秋の野にゐて花見たる所

花の色はあまたみれ共人しれす萩の下葉そなかめられける

女のもとに男いたりておはなの下にたてり

吹風になひくをはなを打つけにまねく袖かと思ひけるかな

くれの秋女車の紅葉の中をゆく

紅葉はのぬさともちるか秋はてゝたつた姫社歸るへらなれ

月の下の白菊

色そむる物ならなくに月かけのうつれる枝のしら菊の花

旅行人松の雪を見る

白妙に雪のふれゝは小松はら色のみとりもかくろへにけり
人家に佛名の朝に導師の歸に法師男とも庭におり立

て遊ぶあひたに雪ふりかゝれる梅花折

梅花をりしまとへは足引の山路の雪とおもほゆるかな

延喜十九年東宮御息所御屏風料歌依内仰獻之子日の

松のもとにつれてあそひむる所

春の色はまた淺けれとかねてよりみとり深くもそむる松哉

櫻花ちる

風吹はかたもさためすちる花をいつこへ歸る春とかは見ん

山邊に藤花松にかゝれり

藤の花もとよりみすは紫にさける松かとおとるかれまし

車にのれる人賀茂へ詣る

人もみなかつらかさして千早振神のみあれにあふひ成けり

五日

菖蒲草ねなき命つけはこそけふとしなれは人のひくらめ

稜

大麻の川のせことになかれても千年の夏はなつはらへせん

空になける鶴を聞

千年ふとわか聞なへにあしたつの鳴渡るなる聲のはるけさ

いつとても人やは隠す花すゝきなとか秋しもほにはいつ覽

朝ことに露はおけとも菊の花人のよはひはかれすそ有ける

道行人の時雨にあひて

道すから時雨にあひていとゝしくほしあへぬ袖の濡にける哉

臨時祭

山井もてすれる衣の赤紐のなかくそわれは神につかへん

雪のふれる

春こねと草木に花のさくほとはふりくる雪の心なりけり
〔くれい〕
延喜五年中宮御屏風歌正月立日

昨日よりをちをはしらす百年の春の初めはけふにそ有ける

二月梅花

山里にすむかひあるは梅花みつゝ鶯きくにそありける

もとよりの松をおきてけふは猶おきふし春の色を社みれ

田かへす所

忘らるゝ時しなけれは春の田をかへすゝそ人は戀しき

三月山寺へ詣

足引の山を行かひ人しれす思こゝろのことみなからん

晦日落花所

散花のもとにきて社くれはつる春のをしさは優るへらなれ

四月大神祭使

孰れをかしるしと思はん三輪の山みえと見ゆるは杉にそ有ける

人の家の垣のものと卯花見る

〔今日も又い〕君ならて後もわすれし白妙の卯花にほふやとゝみつれは

馬にのれる人のおほくゆく

行かうへにはやもゆけ駒神かけて三室の山の山かつらせん

五月旅人の山のほとりにやとれるか時鳥鳴を聞て

山里に旅ねよにせし時鳥聲聞そめて長ゐしぬへし

雨のうちに田うふる所

時過はさなへもいたく生ぬへし雨にも田こはさはらさり見

六月すゝみしたる所

夏衣うすきかひなし秋まては木の下風もやます吹なん

かゝり火

大空にあらぬ物から川上にほしかとみゆるかゝり火のかけ

七月七日の夕のそらを見て

人しれす空をなかめて天川浪うちつけにものをこそ思へ

田守る家ある所

かりほにて久にへにけり秋風の早田かりかねはやもなかな

八月數人堀野花

みる人もなきのへなれは色毎に外へうつろふ花にそ有ける

鹿啼花

棹鹿やいかゝいひけん萩の花匂ふ時しもつまをこふらん

九月霧籠山

ちりぬへき山のもみちを秋霧のやすくもみせず立かくす覽

河渡の所にある舟

山路には人やまとはん河霧の立こぬさきにいさわたり南

十月菊花

うすくこく色そみえける菊花露や心をわきておくらん

十一月芦かる所

難波女の宿のみあれはかりてほす芦火の煙たゝぬ日そなき

十二月雪にむかへる梅花

降雪に色しまかへは打つけに梅をみるさへさむくそ有ける

紀貫之集第五

延長二年左大臣殿北方御五十賀屏風料歌鶴群但北方已所

還其事

かひかねの山里みれはあしたつの命をもたる人そすみける

田子浦

吹風もあかすおもひて浦浪の數にそ君かとしもよせける

會坂

君と我千とせの春にあふさかの清水はわれもくまむとそ思

龜山

かめ山のかけをうつして行水にこきくる舟はいくよへぬ覽

白濱

君か代の年の數をは白妙のはまのまさこと誰かしりけん

むろふ

よと共に行かふ舟をみるからにほに出て君を千年と思ふ

松崎

たなひかぬ時こそなけれ秋もなき松かさきよりみゆる白雲

嵯峨野

手ことにそ人は折ける君か爲行末遠き秋の野の花

宇治

おち積るもみちは見れば百年のあきのとまりは綱代也けり

かへのやしろ

影とのみ頼むかひ有て露霜に色かはりせぬかへのやしるか

梅の原

梅花おほかる里に鶯の冬こもりしてはるをまつらん

芳野山

みよし野のよしの山は百年の雪のみつもる所なりけり

延長四年八月廿四日清貫民部卿六十賀桓佐中納言北方被進之時屏風歌わかなつめる所

春日野のわかなも君を祈らなれたか爲につむ物ならなくに

人の櫻と松の木の下にをる所

櫻花ちらぬ松にもならはなん色々に見つゝ世をへむ

人の家にさくら花おほかる所

我宿に春こそおほくきにけらしさける櫻のかきりなければ

すもゝの花を人をもる

君かためわか折花は春ふかく千とせみたひを折つゝそゆく

人の舟にのりて藤花見たる所

をりつみてはやこきかへれ藤の花春も深くそ色は見えける

女共の瀧見たる所

糸とさへみえて流るゝ瀧なれせばたゆへくもあらずぬける白玉

松のもとに泉のなかるゝ所

松のねにいつる泉の水なれはおなしき物をたえしと思ふ

秋花

いはひつゝ植たるやとの花なれは思ふかことく色こかり鳧

馬車に乗て人秋の花見たる所

かきりなくわか思ふ人の行野へは色のちくさに花を咲ける

鹿の萩の中に立る所

棹鹿の尾上にさける秋萩をしからみへぬる年もしられぬ

菊花さける所

菊の花うゑたる宿のあやしきは老てふ年もしらぬ成けり

池邊に鶴のあそぶ所

さゝら浪よする汀にすむ鶴や君かへむよのしるへ成らん

女紅葉ひろへる所

散うへにちりし積れば紅葉はをひろふ數社しられさりけれ

人家に紅葉の川のうへにちりかゝる

紅葉ちるこの下水を見る時は色くさゝに浪そ立ける

神樂せる所

足引の山の榊の常葉なるかけにさかゆく神のきねかも

延長四年九月廿四日法皇六十賀京極御息所被奉仕時

屏風歌若菜つむ

春たゝむすなはちことに君かため千とせへぬへき若な也梟
若な生る野へといふのへを君か爲萬世しめてつまむと思ふ
子 日

藤松にかゝれる所

松風のふかんかきりは打はへて絶へくもあらずさける 藤浪

瀧の水

思ふ事たきにあらなん流れてもつきせぬ物とやすく頼まん

いはほ

山風は吹とふかねと白浪のよする岩ほそひさしかりける
こけ長くおふるいはほの久しきを君にかへてん心やある 覽

むれたる鶴

かの見ゆるたつの村鳥君にとそおのか世々を思ふへらなる

菊

いかてなを君か千とせは菊の花折つゝ露にぬれんとそ思ふ
菊の花下ゆく水にかけ見れはさらに浪なくおいせさりけり

竹

年毎に生そふ竹の世々をへてかはらぬ色を誰とかは見ん

三條右大臣殿御屏風に

〔エイ〕

いたつらに老にけるかな高砂の松や我身のはてをかたらん
むは玉のわか黒かみも年ふれは瀧のいとゝそ成ぬへらなる
春霞立よらねはやみよしのゝ山にいまさへ雪のふるらん
いつしかとこえむと思ふ足引の山になくなるよふこ鳥かも
足引の山下瀧ついはなみの心くたけてひとそこひしき
鶯の花ふみちらす木の下はいたく雪ふる春へ成けり
〔たぐい〕

〔ふさいつるイ〕

浦ことに花ちるなみの花見れは海には春のくれぬ也けり

梅の香のかきりなければ折人の手にも袖にもしみにける哉

とふ人もなき宿なれとくる春は八重葎にもさはらさりけり

ゆきやとる白雲たにもかよはすは此山里は住うからまし
〔エイ〕

玉もかる海人のゆきとひさす棹のなかくや人を恨みわた覽

此やとの人にもあらて朝顔の花をのみみて我や歸らん
〔エイ〕

うつろふを匂ふと思て常葉なる山には秋もこえずそ有ける

年月のかはるもしらす我やとの常葉の松の色をこそ見れ

久かたの月影みれは難波かたしほもたかくそ成ぬへらなる

つなてとき今とはと舟もさし出なは我は浪ちをこえやわた覽

山たかみ梢を分てなかくる瀧にたくひて落るもみち葉

さゝの葉のさえけるなへに足引の山には雪を降つみにける
〔エイ〕

君まさてきむさもしらしみ吉野のよしのゝ山に雪は降つゝ
〔エイ〕

紀貫之集第六 戀部

やまとに侍ける人のもとにつかはしける

こえぬまは吉野の山のさくら花人傳にのみきゝやわたらん
〔おきりイ〕

山櫻かすみへたてゝほのかにもみしはかりにや戀しかる覽

世の中はかくこそ有けれ吹風のめに見ぬ人もこひしかり梟

よしの河岩波たかく行水のほやくも人を思ひそめてし
〔エイ〕

あふ事は雲るはるかになる神のおとに聞つゝ戀わたるかな

人しれす物思ふ時は難波なる苜のしらねのしられやはする

浪にのみぬれつるものを吹風のたよりうれしきあきの釣舟

津の國の難波の芹のめもはるに茂きわかこひ人しるらめや
人しれぬ思ひのみ社侘しけれ我なけきをはわれのみそしる
もえつゝもこなたかなたの思かな泪の河のなかにゆけはか
くれなるのふり出つゝなく泪には袂のみこそ色まさりけれ
風吹はみねに別るゝ白雲の行めぐりてもあはんとそ思ふ
風ふけはたえず浪こそ磯なれやわか衣手のかはく時なき
泪川いつか水上はやければせきそかねつる袖のしからみ
行末はつゝにすぎつゝあふ事の年月なきそわひしかりける
白玉とみえし涙もとふれはから紅にうつろひにけり
なけきこる山路は人もしらなくに我心のみつねにゆくらん
山川（ふけい）につくる山田のこ隠れてほに出ぬこひはわひしかり
燃れともしるしたになきふしのねに思ふ中をは譬へさら南

宮つかへする女のあひかたかりけるに

手向せぬわかれせぬ身のわひしきは人めをたひと思ふ也
ななき夜を思明して朝露のおきてしくれば袖そぬれける
織女とおもふ物からあふことのいつともしらぬ我そ戀しき
もゝはかき羽かく鳴もわか如くあした侘しき數はまさらし
かさす共たちと立なんなき名には言なし草のかひやかな
逢事のあまひこにしてよそならは人めも我はよきすそ有まし
織女の年にひとたひあふ事は人めそ後の空には有ける
まこもかる淀のきは水雨ふれは常よりことにまさるわか戀
よそに見てかへる夢たにある物をうつゝに人に別れぬる哉
我戀はしらぬ山ちにあらなくなとか心のまとひけぬへき
君こふる涙しなくはから衣むねのあたりは色もえなまし
逢事を月日にそへてまつ時はけふゆく末に成ねとそ思ふ
朝なゝけつれはおつるわかかみの思ひ亂れて果ぬへら也

秋風のいなはそよきて吹なへにほに出て人そ戀しかりける
手もふれて月日へに鳧しらま弓おきふしよるは物を社思へ
わか爲のあたにそ有ける年月は思もなきて行かへりつゝ
戀しきや色には有らん泪川なかるゝおくの氷はうつろふ
敷鳥のやまとにはあらぬ唐衣比もへたてすあふよしもかな
泪にそぬれつゝしほる世の人のつらき心は袖のしづくか
あひみんと思ふ心を命にていける我身のたのもしけなき
伊勢の海の蟹とならばや君こふる心の深さかつきくらへん
あふ事のなくて月日はへにけれと心ばかりは明くれもせず
石上ふるのゝ道の草分てしみつくみにはまたもかへらん
むかしへに猶立かへるこゝろかな戀しき事に物わすれせて
年月はむかしにあらぬけふなれと戀しき事はかはらさり
戀にのみとしはすくせと時鳥なくかひもなく成ぬへらなり
さ月山梢をたかみ時鳥なくねそらなるこひもするかな
あはれとも戀しともおもふ色なれやおつる涙に袖のぬる覽
哀てふ事にしるしはなれともいはてはえ社あらぬ物なれ
あはれてふ事にあかねは世中を泪にかふる我身なりけり
さをしかのなきてしからむ秋萩における白露我もけぬへし
穂萩をみつゝけふこそ眺めつれ下葉は戀のつまにそ有ける
身をせはみ袖よりもふる泪には物思ひもなき人もぬれけり
君こふる涙に秋のかよへはや空も袂もとみにしくるゝ
野へ見れば生る薄の秋わかみまたもほに出ぬ戀もする哉
人の身に秋やたつらん言の葉のうすくこくなり移ひにけり
秋はわか心の月にあらねとも物おもはしきころにも有かな
をしからて悲しきものは身なり鳧人の心のゆくへしらねは
秋のゝの移ふ見ればつれもなくかれにし人を草はとそ思ふ

百ちとり鳴ときあれと君をのみこふるわかねはいつと定めず
秋の野のみたれてさける花の色千くきに物を思ふころかな
明たては先きす紐の糸よはみたえてあはすなといけるかひ
雨やまぬ山のおまくも立あつゝやすき時なく君をしそ思ふ
大空は曇らさりけり神無月しくれこゝちは我のみそする
年をへてこひわたれ共我爲に天のかはらのなきかわひしき
天河せたえもせなん鵲のはしをしらすたゝわたりなん
紅に袖そうつろふこひしきや涙の川のおきにはあるらむ
人を思ふこゝろのそらに有時はわか衣手そ露けかりける
秋風に萩の下葉のうつろへはひとりぬる身そ戀まさりける
秋の野の草も分ぬにわか袖の物おもふなへにつゆけかる
消やすき雪はしはしもとまらんうき事しけき我に變りて
よとゝもに流れてそゆく泪川冬もこほらぬみなわ成けり
雨ふれは色さりやすき櫻花うすき心をわかおもはなくに

女なほさりにいふとなんと申ければ

色ならはうつるはかりも染てまし思ふ心をえやはみせける
君によりぬれこそわたれ唐衣そては泪のつまにそ有ける
初かりの鳴こそわたれ世の中の人のこゝろの秋しうければ
住の江の浪にはあらねとよとゝもに心を君によせわたる哉
夢ちにそ露もおくらぬぬるよの我衣手のぬれてかはかぬ
人めてふ物はいかなる道なればつかひもゆかて遙けかる
賤機に亂れてそ思戀しさをたてぬきにしておれる我身か
さけはつむ物と思ひしくれなみは泪の川の色にそ有ける
あはれてふことをゝにしてぬく玉はあはて年ふる泪也けり
つまこふる鹿のしからむ萩におけるしら露我もけぬへし
思ひ餘り戀しき時はやとかれてあくかれぬへき心ち社すれ

降雪をゆきとたのまし人しれす物思ふ事の數にそ有ける
色もなき心を人につけしよりうつるはんとは思はさりしを
ちか隣なる人時々とかく物いふを外へうつるふと聞
て

近くてもあかぬうつゝを今宵よりとほき夢みん我を悲しき
萩の葉の色つく秋をいたつらにあまたかそへて過しつる哉
春霞やまほとゝきす紅葉はもゆきもおほくの年そへにける
わひしとは年にしられぬ秋なれや我袖にのみ時雨降らん
しのふれと戀しき時はあし曳の山より月のいてもこそくれ
うつゝにはあふ事かたし玉のをのよるは絶すも夢にみえ南

心させる女のあたりになかりていひ入ける

わひわたる我身は露を同じくは君かあたりの草に消なん
忘れす戀しきものは春のよの夢のなこりのさむる也けり
ぬぬるよの夢はなみにもあらなくに立歸りても人をみる哉
時鳥人まつ山になくなれば我も打つけに戀まさるなり
なけきこる山と我みの成ぬれば心のみこそいとなかりけれ
夕されは人まつ虫のなくなへに獨りぬる身そ戀まさりける
山ひこの聲のまにゝ尋ゆけは何處ともなく我やまとはん
降雨に出てもぬれぬわか袖のかけにぬなからひちまさる哉
人しれすいはぬ涙のわひしきはたゝにたもとのぬるゝ也
人しれす仇し心のありといへは浪ちとのみややまてなく
夢をみてかひなき事の倅しきはさむるうつゝの戀にそ有ける
あひみすは生らしとのみ戀る身の流石に惜く人にしれぬる
かさくもり雨ふることに道しらぬ笠とり山にまとはるゝ哉
み山には時もさためす百千鳥めつらしけなく鳴わたる哉
散時はうしとみれとも忘つゝ花に心のなをもとまれる

給ひける

百草の花のかけまてうつしつゝおともかはらぬ白川のみつ

恒佐大(中イ)納言殿の扇合の歌すはまに入たり

住の江の松のかせをもこめたればあふく扇のいつか絶せん

宰相中將(師範)の四條の宮(勳子)に住はしめ給にまうて

てことのついでによめる

物ことにかけて水底にうつれ共ちとせのかけそ先はみえける

承平五年十二月左衛門督殿(實題)の男女きみたち元服

しもき給ふ夜よめる

大原やをしほの山の小松原はやこたかかれ千世のかけみん

源公忠の子に元服せさせ給ふ所に

君をみな祝ひかてらに百年をまたぬ人なくまたんとぞ思ふ

天慶六年正月藤大納言(師範)御せうそこに年比ありつ

る魚袋をつくるはせんとて細工に給へるをおそくも

てくるあひたに目ちかくなりしかはいぬる一日の日

はつけす有しかはおほいとの(急ぎ)に此よしきこしめ

してわかむかしよりするをあえ物にけふはかり

つけよと仰られて給はりしかはよろこひかしこまり

て給はりようして松の枝に付て返し奉る其よし内侍

の督の殿上にいさゝか聞えんとなんおもひしのひて

そのよしを書いたしてとあるにたてまつる

吹風に氷とけたる池の魚の千世はイまで松のかけにかくれん

岩しみつ松か枝深くかけ見えてたゆへくもあらぬ万代の影

藏人中務源さねなかの君こへるにやる

千世と思ふ君か便にけふまちてつまんと思ふ若なをそつむ

紀貫之集第八 別部

人のうまのはなむけによめる

をしむから戀しき物を白雲の立別なはなにこゝちせん

みちの國へ下る人にやれる

白雲の八重にかきなるをちにても思はん人に心へたつな

人をわかれける時よめる

別れてふことは色にもあらなくに心にしみてわひしかる覽

おとは山のわたりにて人をわかるとて

おとは山こたかくなきて時鳥君かわかれをしむへらなり

藤原のこれをかか武藏介にてくたる時相坂までおく

りて

かつこへて別れもゆくか相坂は人たのめなる名に社有けれ

兼茂朝臣の物へゆくに兼輔朝臣の餞する所にてよめ

る雨の降ければ

久堅のあめも心になはなんふるとて人の立とまるへく

みちの國へ下る人ををしめる

かり衣する名におへる忍山とえん人こそかねてをしけれ

遠くゆく人に

またもこそ物へゆく人われをしめ泪のこさす君になきつれ

遠くゆく人の爲にはわか袖の泪の玉をしからなくに

兼輔の兵衛督のかも河のほとりにて左衛門尉みはる

のありすけの甲斐へ下るに餞したる目よめる

君をしむ泪おちます此川のみきはまさりてなかるへら也

あひしれる人の物へゆくにぬさやるとてよめる

行けふも歸らむ時も玉ほこのちきりはイの神をいのれと思ふ

もみちはも花をもをれる心をば手向の山の神そしるらん
鶴のかたにぬさいるゝ物をしてかける

千年をはつるに任せて別るともあひみん事はあすもとそ思
左中弁済光朝臣の人の馬のはなむけのぬさにかゝん
とてよませたる夏なりければ

いとまたきみゆる紅葉は君か爲思そめてしぬさにそ有ける
玉ほこの手向の神もわかこく我思ことを思へとそ思ふ
師氏少將の信濃へゆく人の馬のはなむけにやらんと
てよませ給へる

我にしも草の枕はこはななくに物へとときけはをしくそ有ける
君かゆく所と聞は月見つゝ姥すて山もこひしかるへき
おなし少將のもとへ行人に火うち調度をてうして
それにたきものをくはへてやるによめる
をりゝに打てたく火の煙あらは心さす香を忍へとそ思ふ

師尹の侍従のよませ給ふに
遠く行君をしきと人もみな時鳥さへなきぬへらなり

橘の公頼の帥のつくしへ下時其子の阿波守としきた
の朝臣のまゝ母の内侍のすけに送れる物ともにくは
へたる歌くすりに

しはし我とまるかはりに千世までの君かおくりは藥社せめ
かつら

打みえん面影ことに玉かつらなかきかたみに思へとそ思ふ
さうそく

あまたにはぬひかさねゝと唐衣思ふ心はちへにそ有ける
あひしれる人のものへゆくに馬のはなむけしけるあ
ひたに雨の降ければえいかす有けるによめる

君ををしむ心のそらに通へはやけふとまるへき雨の降らん
みちの國の將軍ありときかむまのはなむけ宰相中將
のし給ふによめる

みてたにもあかぬ別を玉ほこの道のおくまで人のゆくらん
物へゆく人に送らんとて人のこふに

あつらへてわするなと思ふ心あれは我身を分るかたみ成鬼
みちの國の守たひらのこれみつ(よりすけ)の朝臣のく
たるにぬさのすはまのつるのはねにかける

千年まで命たへたる鶴なれは君かゆきゝをしたふ也けり
同じ人の馬のはなむけにやるとて兵衛のかうのよま
せたるに

遠くゆく君をおくると思ひやる心もともに旅ねをやせん
同じ人に

これをたに形身とて見はうは玉の思ひみたるゝ時なから南
おなし人の馬のはなむけにさうそく調して送るにく
はへたる歌

玉ほこの道の山風寒からはかたみかてらにきなんとそ思ふ
同じ人の馬のはなむけをおほきおとの白河殿にて
せさせ給ふにかはらけとりてよめる

人もみな遠道ゆけと草枕このたひはかりをしき旅なし
遠き人にぬさなとやるに

染たちて祈れるぬさの思ひをは手向の道の神や知らん
別ゆく人ををしむと今夜より遠き夢ちに我やまとはん

筑前(後)守の子の下るにあふきやるとて
あふけともつきせぬ風は君かため我心さすあふき成けり

尾張守藤原のおきかたか女の下にぬささうそくなと

やるにくはへたる歌

たつぬさの我思ひをは玉ほこの道のへことの神もしるらん
その人とかにおもほゆるから衣忘るゝなとてぬける成けり
人はいさわれは昔の忘れねは物へと聞て哀とそおもふ
同じ人の下るを相坂にて送らんとて兼道の大君のそ
の爲とてよませたる

出てゆく道とはしれと相坂はむかへん時の名に社ありけれ
源公忠朝臣近江守にて下るに送る

ねに鳴てわひしと思はぬほとなれと常の心にかはりぬる哉
別ちを君にまたわか習はねは下に心をくれさりける
返し

せき人におとりかりける君かため心とゝめぬ時はなけれと
師尹の頭中將東に下る女にくしの箱鏡なと調してや

り給ふにそふとて

別てもけふより後は玉くしけ明暮見へをかたみ成けり
信濃にゆく人に送る

月影をあかす見るとも更科の山のふもとに長ぬすな君
人の國へ下るにたひにてよめる

いによる物ならなくに別ちの心細くもおもほゆるかな

ひこの守藤原のときすけといふぬしの國へ下るに
一ひたに見ねば戀しき心あるを遠道さして君かゆくらん

躬恒かもとにまかりてつとめて

ちらぬほとに一枝もかな櫻花君かかたみにけきままくほし

みつね返し

我こひて見んとなひひそ櫻花ふりにし雪のかたみとをいへ

紀貫之集第九 哀傷部

あひしれる人のうせたるによめる

夢と社いふへかりけれ世の中にうつゝある物と思ひける哉

紀友則かうせたるによめる

あすしらぬ我身と思へと暮ぬまのけふは人社悲しかりけれ

山寺に行道にてよめる

朝露のおくての山田かりそめにうき世の中を思ひぬるかな

あるしともうせたるに家の梅の花を見て
色も香も昔のこさに匂へともうぬけん人のかけそ戀しき

河原の左のおほいと(魚)うせ給て後にいたりてしほ
かまといふ所のかたをつくれりけるを見て

君まさて煙たえにし鹽かまのうら淋しくもみえ渡る哉

素性うせぬと聞て躬恒かもとに送る

石上ふるく住にし君なくて山の霞は立るわふらん

三常返し

君なくてふるの山への春かすみ徒にこそたちわたるらめ

とあるまたの日

うせにしと身こそ聞ゆれ石上ふるき名うせぬ君にそ有ける

世中のはかなきをみてよめる

昨日まであひ見し人のけふなきは山の雲とそ棚引にける
うけれ共いけるはさても有物をしぬるのみ社悲しかりけれ

いつみの大將うせ給ふて後隣なる人の家に人々いた
りあいてとかく物語なとするついでにかの殿の櫻の

おもしろくさけるをこれかれあはれかりて歌よむつ
いてに

君まし〔a c i y〕昔は露か故郷の花見ることにてそてのひつらん

兼輔中將のめのうせにける年のしはすの晦日にいたりて物語するついでに昔を戀しのふるあひたによめる

こふるまに年のくれなはなき人の別れやいと遠く成らん
題不知

立かへりかなしくも有か別てはしるもしらぬも煙なりけり
藤衣おりたる糸はみつなれやぬれはまされとかはく時なき〔まもなしイ〕

東宮のかくれ給へる比よめる

霞たつ山へを君によそへつゝ春の宮人なほやたのまん
君まさぬ春の宮には櫻花泪の雨にぬれつゝそふる

延長八年九月日京極中納言の諒闇のあひたにはふくになり〔ふく〕

ひとへたにきるは〔かたイ〕侘しき藤衣かさぬる秋をおもひやらなん

とよみて土佐國にあるあひたに送られたりし返し
藤衣かさぬる思ひおもひやる心はけふもやすまさりけり

題なし

驚〔はとくさイ〕のけさなく聲におとるけは君に別れし時にそありける

夢のこと成にし君を夢にたに今はみることかたくも有かな
おく露を別れし君と思ひつゝ朝な／＼そこひしかりける

おやのおもひに侍ける時よみける

藤ころもはつるゝいと〔君こふるイ〕は侘人の泪の玉をとそなりぬる

かいせんうせぬと聞てかのをひの在原のまさふさかもとにといひて敦忠の中將のもとに送る

明〔ふイ〕くれてちとせあるものと思ひしを猶世中は夢になりぬる
ひとのことちとせ行まは高砂の松と我とやけふをくらさん

京極の中納言うせ給て後栗田に住給ふ所ありける
にそこにいたりて前栽に松竹などあるをみてよめる

松もみな竹も別を思へはや泪のしくれふるこゝちする
同じ中納言うせ給へるとしのまたのとしの一日の日
から衣あたらしく立年なれとふりにし人のなほやこひしき〔ふちイ〕

紀貫之集第十 雜部

屏風の繪なる花をよめる

さきそめし時より後は打はへて世は春なれや色の常なる
夜雲收盡月行遅といふ事ある人のよませ給ふによめる

天雲のたなひけり共みえぬよは行月影そのとけかりける
凡河内躬恒か月おもしろき夜來るによめる

かつ見れとうとくも有哉月影の到らぬ里はあらしと思へは
和泉國にあるあひた藤原忠房朝臣のやまとよりこえておくれる

君を思ひおきつのはまに鳴たつの尋くれはそ有とたにきく
とある返事

興つ浪たかせのはまの濱松のねにこそ君を戀わたりつれ
なにはにてよめる〔名イ〕
〔まちイ〕

難波かた生る玉もをかりそめのあまとそ我は成ぬへらなる
池にみゆる月をよめる

身をなけきてよめる

春やいぬる秋やいくらん覺束なかけの朽木と世を過す身は
かうふり給ふてかゝの介に成て美濃介にうつらんと
申あひたに内の仰にて歌よませ給おおくにかいてた
てまつる

降雪や花と咲ても頼めけんとかゝのみのなりかてにする
こしなる人にやれる

思ひやるこしの白山しらね共一夜もいめにみえぬよそなき
雨ふれは北へたなひく白雲を君によそへてなかめつるかな
志賀の山こえにて山の井に女の手あらひむすひての
むを見てよみてやれる

結ふ手のしづくにこる山の井のあかても人に別れぬる哉
九月九日壬生忠岑かもとより

おる菊の雫をおほみわかゆてふぬれきぬを社老の身にきれ
とよみて送れる返し

露深き菊をしをれる心あらは千世のなき名はたえんとと思ふ
〔のたえん〕

藤原興風か歌の返事

櫻には心のみこそくるしけれあきてくらせる春しなけれは
興風かもとに杜若につけてやれる

〔君か〕
人のやとわかやとわける杜若うつるはん時みん人もかな
返し

睦ましみ通ひへたてぬ杜若たかかたにかはうつるひぬへき

とあるを又返し
たゝちにて君かこえこん杜若風を外にてうつるひぬへし
在原元方かもとに送る

白雲のたなひきわたるくら橋の山の松とも君はしらすや
忠岑かもとに送る

かひかねの松にとしふる君故に我はなけきと成ぬへらなり
源宗于朝臣もとより

君ひとりきとはぬからにわか宿の道も露けく成ぬへらなり
とある返しに

草の露おきしもあへし朝なけに心かよはぬ時しなけれは
躬恒か

まことなき物とおもひしを偽に泪はかねておとさゝらまし
とある返し

をしからぬ命なりせは世中の人の偽に成もしなまし
紀の國に下りてかへりのほる道にて俄に馬のしぬへ

くわつらふ所にて道行人立とまりていふやう是はこ
こにいましつる神のし給ふならんとし比やしるもな

くしるしもなけれといとかしこくていましける神也
さきくかやうにわつらふ人々ある所也いのり申給

へよといふにみてくらもなけれはなにわさすへくも
あらすたゝ手をあらひてひきまつきて神いますかり

けもなきかたにむかひてそもそ何の神とかいふと
いへはありとほしの神となん申といひけれは是を聞

てよみて奉る歌也そのけにや馬の心ちもやみにけり
かき曇りあやめもしらぬ大空にありとほしを思ふへしやは

難波のたみのゝしまのほとにて雨にあひてよめる

雨に社民のかし^(のイ)まを越ゆけとなにはかくれぬ物にそ有ける

源のとしのふの朝臣のよひにおこせたるにいまう

てむとておそくいきければ

春日すら我まつ人^(のイ)をこんとたにいはすはあすも猶頼まゝし

とある返し

こしと思ふ心はなきを櫻花ちるとまかふにさはる成けり

七日の朝に躬恒かもとに

君にあはてひとひふつかに成ぬれは今朝彦星の心ちすらしも^(こそすれイ)

とある返し

あひみすてひとひも君にならはねは織女よじも我そ優れる

あくる年の七夕の後の朝に躬恒かもとに送れる

朝戸明てなかもやすらん織女はあかぬ別の空をこひつゝ^(のイ)

しはすの晦日かたに身の上をなけきてよめる

霜かれにみえこし梅は咲にけり春に我身^(はわかし)はあはんとはすや

ぬは玉のわかくろかみに年くれて鏡のかけにふれる白雪

高砂のみねの松とや世中をまもる人とはわれやなりなん

けふ見れは鏡に雪そふりにけるおいしる人は冬にそ有ける

京極宰相中將のみもとにおいぬることをなけきてよ

みて奉れる

ふりそめて友まつ雪はぬは玉のわか黒髪のかはる成けり

返し兼輔朝臣

黒髪のいろふりかはる白雪のまちつる友はうとくそ有ける

又返し

黒かみと雪との中のうきみれはとも鏡をもつらしと思ふ
色みえて雪積りたる身のはてやつひにけぬへき病成らん

同じ中將のもとにいたりてこれかれ松のもとにおり
ゐて酒などのむついてに

かけよとて立かくるれはから衣ぬれぬ雨ふる松の聲かな^(のイ)

ある所に春と秋といつれかまざるととはせ給ふける
にやみてまいらする

春秋に思きたれてわきかねつ時につけつゝうつるこゝろは

躬恒かもとに

草も木もふけはかれゆく秋風にさきのみまさる物思の花^(ぬそイ)

とある返し

ことしけき心よりさく物思ひの花の枝をやつらつえにつく

花を折てこれかれかきさすつゐてにかさしてよめる

かさせ共花咲とやは頼まるゝみのなりつへき時しなけれは

承平五年十二月に左衛門督殿の男女きんたちのかう

ふりし裳きしたまふ夜殿へ

今日までに昔の人のあらませは諸共にこそゑみてみましか

とて奉るに御返し^(のイ)

むかしへをこふる心のあるか上に君をけふみて又そ戀しき

三月晦日の日家うつりするに

我やとを春とともにし別るれは花はしたひてうつろひに鳧

宗子の右京大夫のもとよりひさしくあはぬことなと

いひて

よそにてもおもふ心はかはらねとあひみぬ時は戀しかり鳧

とあるかへし

櫻ちり卯花もみなさきぬれは心さしには春夏もなし
つかさなくてなけくあひたに正月の比ほひ坊城左衛

門督のもとにおほいとのによきさまに申給へと申奉
るついでに是奉給へとて奉る

〔手のうらイ〕

朝日さすかたの山風いまたにも身のうちさむき氷とけなん
枯はてぬ埋木あるを春はなほ花のたよりによくなと思ふ
延寛かもとより

世中に誰かなたかきたらちをと我とかなかを人はしるらん
とよみておこせたる返し

我はいさ君かなのみそ白雲のかゝる山にもおとらさりけり
世中をなけきであるきもせずしてあるあひた三月晦
日の日藤原雅正朝臣のもとより

君みすて年はくれにき立かへり春さへけふに成にける哉
ともにこそ花をもみめと待人のこぬ物ゆゑにをしき春かな
とある返し

君にたにゆかてへぬれは藤の花黄昏時もしらすそ有ける
八重葎心のうちにふかければ花見にゆかん出立もせず
四月に成て同じ人のもとに送る

あはぬまに梅も櫻も過にしを卯花をさくやりつへきかな
とし比近き隣に住けるを外へうつると聞てよみてや
りける

秋萩の散たにをしくあかなくに君かうつろふきくそ悲しき
式部承三統元夏かにしなる隣に住はしめてかくちか
となりなることなといひおこせたるついでによみて
おくれる

梅の花匂ひのふかくみえつるは春の隣の近き成けり
とある返し二首

かたのみそ春はありける住人は花しきかねはなそやかひなし
梅もみな春近しとてさく物をまつこともなき我やなに也
もとなつかもとより
いてつとふ花にもあはぬ鶯はたゝにのみ社なきわたりけれ
とある返しに

〔尾イ〕

こち風に氷とけなは鶯のたかきにうつる聲をつけなん
近隣なりける男正月三日もとなつかもとにいたりた
るになかりければかくなんまうて來つるといひおき
てかへりにたるつとめて送れる

とはゝとひとはすはさても有へきを物の始めに歸るへしやは
とある返し

心をし君にとゝめて年ふれは歸る我身は物ならなくに
もとなつかほかにて曉に歸て門たゝくを聞てよみて
やれる

夜かれしていつからくるそ時鳥またあけぬまに聲のしつ簾
三條の内侍のかたたかへにわたりてつとめて歸るあ
ひたに物なといふついでにむすふ手の平ににこると
いふ歌はかりは今はいえよみ給はしかなといひて車
に乗ほとによめる

家なからつかるゝ時は山の井のにこりしよりも侘しかり鬼

六月に木葉のちりつるをとて歌をよみてまさたゝ
〔雅正〕の朝臣のもとより

秋こそあれ夏の野へなる木葉には露の心のあさくも有哉
とありける返し

夏なから秋をまちけるもみち葉は色計りこそ物うかりけれ
〔かはらゝイ〕

あつよしの式部卿のむすめ伊勢のこのはらにあるを
すむ所近く有けるに折てかめにさせるはなをおくる
とて

久しかれあたに散なと櫻花かめにさせれとうつろひにけり

おなし所にちひさきくみの木の有けるをきゝてこ
ひてほるとてよめる

鶯にはなしられけはなれとも春くるみちの物にそ有ける

ちか隣なりける所にかたかへにある女わたれりと
聞てあるほとに事にふれてみきくに歌よむへき人な

りと聞てよまんさまいかて心みむと思へといとむ心
にしあらねはふかくも思はすすゝみてもいはぬあひ

たにこれもや心見んと思けん萩の葉ののみちたるに
つけて歌ををこせたるあはせて十首女の

秋はきの下葉につけてためにちかくよそなる人の心をそ見る

返しに

世の中の人の心に染しかは草葉の色も見えしきそ思ふ

女

下葉には更にうつらてひたすらにちりぬる花と成やしぬ覽

返しに

散もせすうつろひもせす人を思心のうちに花しきかねは

女

花ならてうつろふ物はしかすかにあたる人の心とそきく

返しに

あたなりとなつくる人のことはに匂はぬ花も我はさく哉

女

色も香もなくてさけはや春秋もみえて心の散かはるらん

返しに

春秋はすくす物から心には花も紅葉もにほひなくこそ

女

春秋にあへと匂ひもなき物はみ山かくれの朽木成けり

返しに

奥山の埋木に身をなす事は色にも出ぬ戀のためなる

ひさしう住家をすましとて外へうつるに生たる松竹

松もみな竹をもこゝにとゝめおきて別ていつる心しらなん

昨日けふみへきかきりとまもりつゝ松と竹とをけふそ別るゝ

つかさえ給はらてなく比おほきおほい殿のものか

かせ給へるおくによみてかける

おもふ事心にあるをあめとのみ頼める君にいかてしらせん

いたつらに世にふる物と高砂の松も我をやともにみるらん

しはすのつこもり方に身の上をなけきて

雪たにも花と咲へきみにもあらて何をたよりと春を待らん

六月晦日にまさたゝの朝臣のもとに送る

花もちり郭公さへいぬるまで君にもゆかす成にける哉

三月晦日の日ある人のもとにやれる

又もこん時そと思ふを頼まれぬ我身にしあれはをしくも有哉

世中の心ほそくおほえ常のこゝちせられさりければ

源公忠朝臣のもとに此歌をなんよみてやれりけり此

あひたにまことのやまひにておもく成にけり

手にむすふ水に宿れる月影のあるかなきかの世にそ有ける

後に人のきけは此歌の返しをもとは思へと。いそきて
せぬほとに。うせにければ。聞おとろきて。かの送れり
し歌に。返しをよみくはへて。おたきに誦經して。かは

らにてなん。やかせけるといふは。まことにやあらむ。

竹生嶋にまいるついでにもる山といふ所にて

白露も時雨もいたくもる山は下葉残らす色付にけり
昔初瀬へまうつとてやとれりし人の家に久しくいた
らてまかりたりしかはかくきたかになんやとりはあ
るといひ出したりければこゝにある梅花を折てやる
とて

人はいさ心もしらず故郷は花そむかしの香に匂ひける
かくいひていれたれは思の外にいたせる

花たにもおなし香なからさく物をうゑたる人の心しらなん
秋の立日殿上のぬしたちのかはらに逍遙し給ふとも
にいきて歌よむついでに

河風のすゝしくもあるか打よする浪とゝもにや秋は立らん
昔人の家にあつまりてさけのみあそひけるに櫻の花
盛に人々これをよみしついでに

散かうへにちりもまかふか櫻花かくてそ空の春もくれにし
亭子院の御門の歌合し給に歌ひとつ奉れとあるに

櫻ちる木の下かせはさむからて空にしられぬ雪そ散ける
延喜の御時やまとうたしれる人々いまむかしの歌た
てまつらしめ給て承香殿のひんかしなる所にてえら
はしめたまふ始の日夜ふくるまでとかくいふあひた
に御前の櫻の木に時鳥のなくを四月の六日の夜なれ
はめつらしからせ給ふてめし出し給てよませ給ふに
奉る

こと夏はいかゝ聞けん時鳥こよひはかりはあらしと思ふ
大徳の櫻の花をうすかみにつゝみて

空しらぬ雪かと人のいふなればさくららの冬は風にそ有ける
とある返事によめる

吹風にさくららの浪のよする時はくれゆく春を空かとと思ふ
花の散もとにて歸なんとしてよめる

我はきていつことゆくを散花はさきし枝へもかへらさり鬼
三月ふたつ有けるとし左大臣殿(忠平)のさねよりの君
にたてまつれる

餘りさへありていぬへき今年さへ春に必ずあふよしもかな
春のつくる日仰にて奉る貳首

こん年の爲には祈る春なれとけふのくるゝはをしくも有鬼
櫻なき枝ならなくに今はとて春のいつちかけふはゆくらん
ある人の歎冬の花を折て給へるに

おとにきく井手の山吹みつれとも蛙の聲はましらさりけり
師輔の宰相中將の二郎君(兼通)のはしめてはかまき給
ひておほち大殿の御もとへまいり給日送物のかへし
にくはへんとてよませ給ふによめる

言にいはて心の内をしる物はかみのすちさへぬける也けり
ひえの慈恵といふ阿闍梨いましけるかうせ給ひなん
とてもものやみ給けるかいたくわつらはれてれいにあ
らすなやみ給けるによめる

やみおきてけふかあすかとまつ程をおきふしとふは泪也鬼
とよめるを内にきこしめして御とふらひにつかはさ
んとてめされしに

鶯の花になくねを聞しまにいとほしきことしらすそ有ける
右貫之集以肥後守經亮本書寫得一古寫按焉

群書類從卷第二百四十八

和歌部百三家集廿一

業平朝臣集

二條後の東宮の御息所と申せしをり大原野にまうて
たまふに

大原やをしほの山もけふ社は神よのこを思ひしるらめ
櫻の花盛にひさしくまからぬ人の許へまかりたれは
あたなりと名に社たてれ櫻花としにまれなる人もまちけり

といへは女かへし

けふこそすはあすは雪とそ降なまし消すは有共花とみましや
なきさの院にて櫻の花を

世の中に絶て櫻のなかりせは春の心はのとけからまし

三月晦日に藤の花を人につかはすとて雨降日

ぬれくそしひて折つる年の内に春は幾かもあらしと思へは
人の許なる前栽にむすひつけ侍ける

植しうへは秋なき時やささらん花社ちらめ根さへかれめや

かへし

秋はきを色とる風は吹ぬとも心はかれし草葉ならねは
おきもせずねもせて夜を明しては春の物とて眺めくらしつ
千早振神よもしらす立田川からくれなゐに水くゝるとは

年久しくいひわたりける人のつれなく侍りければ
たのめつゝあはて年ふる僞にこりぬ心を人はしらなん
かへし女

なつ虫もしるくまと思ひをはこりぬ哀と誰かみさらん
右近のむまはのてつかひみ侍るむかひにたてる車の
下すたれよりはつかに女の見え侍ければつかはしけ
る

みすもあらずみもせぬ人の戀しくはあやなくけふ眺め暮さん
ある女のもとに人のつかはしける

つれくの眺めにまさる涙川袖のみひちてあふよしもなし
かへし女にかはりて

あさみ社袖はひつらめ涙川みさへなかるときかはたのまん
あるきいたくすとて女のいたくいひ侍けるに

大ぬさのひくてあまたに成ぬれは思へとえ社頼まさりけれ
かへし

大ぬさと名に社たてれ流れても終にあふせは有とこそきけ
后宮の五條のにしのたいのにしのつまにすむ人をし
のひて物いひ侍るときは正月十餘日はかりに梅の花
さかりにかたらひける人のいきかたもしらすおとも

せす成にければまたの年の春の花盛にかのたいにま
かりて廿日の月のかたふくまで あはらなるいたしき
に侍りて

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとのみにして
宮つかへしける人をひさしくまからてむかひにまう
つれととみにもいてさりければ

よひのまにはや慰めよいそのかみふりにし床も打拂ふへく
伊勢といふ人に

いせの海に遊ぶ蟹とも成にしか波かき分てみるめかつかん
これたかのみこかりしにまかりしにあまの川といふ
所にてその心をいひてかはらけはとれといへは

かりくらし七夕つめに宿からん天の河原に我はきにけり
かへし歌えし給はさりければ御供なりける 紀有常と
いひける人

一年にひとたひきます君なれは宿かす人もあらしと思ふ
昔五條わたり忍ひて人をかたらひけり忍ひたると
ころ成ければ門よりはえいらてつひひちのくつれよ
りかよひけるをあるしきゝつけてかの道に人をすゑ
てまもらせければえあはてのみかへりてつかはしけ
る

人しれぬ我通ひちの關守はよひゝことにうちもねなゝむ
ある人

君やこし我やゆきけむ覺束な夢かうつゝかねてかさめてか
かへし

かきくらす心のやみにまよひにき夢うつゝとは世人定めよ
ねぬるよの夢をはかなみまゝとるめはいやはかなにも成増る哉

秋の野の篠分し朝の袖よりもあはてこしよそひち増りける
有常かむすめに住けるを恨ることありてひるはまで
來てくるればさてのみしてまかりければ

あま雲のよそにも人の成行かさすかにめにはみゆるものから
かへし

行かへりそらめ^{にイ}のみしてふる事は我ゐる山の風はやみなり
めのおとうともて侍けるにうへのきぬゝひにつかは
すとて

紫の色こき時はめもはるに野なる草木もわかれさりけり
大かたは月をもめてしこれその積れは人の老となるもの
これたかのみこの狩しにまかる供にてかへりによひ
と夜さけのみして物語し侍けるをみこのしひていり
なんとし給ふに

あかなくにまたきに月の隠るゝか山のは送ていれすもあら南
母の宮長岡といふ所に住侍りける時みやつかへし侍
るとてしはゝゝえまからす侍ければしはすの晦日は
かりにとみのことにて侍けるふみをみれば

老ぬればさらぬ別の有といへはいよゝゝ見まくほしき君哉
かへし

世の中にさらぬ別のなくもかなちよもと祈る人のこのため
布引のたきのもとにて人々歌よむに

ぬきみたる人社あるらし白玉のまなくもちるか袖の狭きに
これたかのみこかしらおろして小野といふ所に住給
ふに正月にとふらひにまかりたりければ雪のいとた
かくつれゝゝに物かなしかりければ歸りて送り侍け
る

忘れては夢かと思ふおもひきや雪ふみ分て君をみむとは

おなし所なる女にとしゆきの朝臣かたらひつまから
んと思ふを雨ふるになむおもひわつらふとましけれ
は

かすゝに思ひ思はすしりかたみ身をしる雨は降を増れる

昔深草といふ所に住けり京へいて立ていくとてそこ
なる人に

年をへて住こし里をいてゝいなはいとゝ深草野とや成なむ

といひければ

野とならは鶉となりてなきをらん狩にたにやは人のこき覽

大井なる所に人々まかりてさけたへしに

大井川うける川邊のかゝり火に小倉の山もなのみなりけり

紀のとしさたか阿波の守に成てまかりける時あない

せんとてけふかたとひにつかはしたりける日こゝか

しこまかりありきて夜ふくるまでまうてこさりけれ
は

今そしるくるしき物と人またむ里をはかれすとふへかり鬼

時しらぬ山はふしのねいつとてかかのこ斑に雪のふるらん

くれぬとてねてゆくへくもあらなくゝも猶歸る勝れり

鴈鳴て菊の花咲秋はあれと春の海へに住よしのはま

思へともみをしわけねはめかれせぬ雪の積るそわか心なる

年たにもとをとてよつはへにけるを幾たひ君を頼みきつ覽

背くとて雲にはのらぬ物なれとよの憂事はよそになるてふ

なつの夜の星か川邊の螢かも我すむかたのあまのたく火か

頼まれすうきよの中を歎きつゝひかけに生る身をいかにせんに老ぬる身をもるかこと

いとひては何か別のをしからんありしに増るけふは悲しも

いてゝいにし跡たに未だ變らぬにたか通ひちと今はなる覽
今迄に忘れぬ人はよにもあらしおのかさまゝ年のへぬれは
むさしのゝ若むらさきのすり衣忍ふの亂れかきりしられす
女をなけき侍りて

住わひぬ今は限りのやま里につま木こるへき宿もとめてん

身のうれへ侍りし時津の國すまの浦といふ所にすみ

はしめ侍ける日

難波女にけふ社みつの浦ことにこれやうきよをうみ渡る舟

田むらの御時ことにあたりて津の國すまのうらとい

ふ所にこもり侍りて都の人につかはしける

わくらはにとふ人あらばすまの浦に藻鹽垂つゝわふと答へよ

東のかたに友たち二三人はかりさそひてまかりける

にかきつはたのいとおもしろく侍りけるをみて木の

もとにおりゐてかきつはたといふ五文字を句のかみ

にすゑてたひの心をよめと侍ければ

唐衣きつゝ馴にしつましあれははるゝきぬる旅をしそ思ふ

むさしとしもつふさの中にあるすみた川のつらにお

りゐて思ひ侍るにいとほるかに遠くまかてきにけり

わたしもり日くれぬといそかし侍りければ舟にのり

てわたらんとし侍るほとにみな人物悲しくおもふこ

となきにしもあらぬにしるき鳥のはしとあしとあか

きか河つらに侍るを何鳥とかいふととひ侍りければ

都鳥となんわたしもりいひ侍ける

なにしおはゝいさ言とはん都鳥我思ふ人はありやなしやと

やまひしてかきりとおほえしに人につかはしける
遂にゆく道とはかねて聞しかと昨日けふとは思はさりしを

敏行朝臣集

正月一日二條の后宮にて白きおほうちきを給はりて
降雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりとおとろかれぬる

寛平御時殿上人におほみきなど給はせて御あそひせ
させ給ひけるに

老ぬ連なとて我みをせめきけんおいすはけふにあはまし物か

おなし御時中宮のたいはん所にかめいたして御みき
おろし給はらんと申たりけるを藏人ともわらひて御
前にとりいたしてともかうもいはてやみければその
藏人ともの中につかはしける

玉たれのこかめやいつらこゆるきの磯の波わけ沖に出に鳧

題しらす

いくはくの田を作れはか時鳥してのたをさを朝な／＼よふ

おなし御時后宮の歌合に

明ぬとてかへる道にはこきたれて雨も泪も降にこそふれ

賀茂の臨時のまつりにうたふへき歌とめしゝに

千はやふるかもの社の姫小松よろつよまでも色はかはらし

業平の朝臣の家に侍ける女の許につかはしける

つれ／＼のなかめにまさる涙川袖のみ濡てあふよしもなし

いかなりけるをりにか

我こつく物や悲しきほとゝきすときそともなく夜たゝ鳴覽

后宮の歌合に

こひ偲てうちぬる中に行かよふ夢のたゝちはうつゝなら南

これきたのみこの家の歌合に

我きつる方もしられすくらふ山やまの木葉のちるとまかふに

寛平の御時菊の花をよませ給ふに
久方の雲のうへにてみるきくは天津ほしとそあやまたれける

おなし御時后宮の歌合に

何人かきてぬきかけし藤はかまくる秋毎に野へをにほはす

又

秋の野に宿りはすへし女郎花名をむつましみ旅ならなくに

秋立日

秋きぬとめにはさやかにみえねとも風の音にそ驚かれぬる

これきたのみこの家の歌合に

秋の夜のおくるもしらす鳴虫はわかこと物や悲しかるらん

おなし

秋はきの花咲にけり高砂の尾上の鹿は今やなくらん

女の許につかはしける

我戀の數をかそへは天の原雲ゐはるかに降雨のこと

近江の關寺にわつらひてこもりて侍るにまへよりか

う院のこ石山へまで侍りけるをみておひてつかはし

ける

あふ坂のゆふつけに鳴鳥のねはきゝとかめてそ行過にける

大空に雲の鷹かねきにけらしおのかとこにはなしの宿りに

秋たちていくかもあらぬにこのねぬる朝けの風は袂涼しも

いつこにも草の枕を鈴虫はこゝをたひとはおもはさらなん

寛平の御時櫻の宴ありける日雨の降侍りければ

春雨の花の枝よりなかれこはぬれ社ぬれめなにかかくれん

これきたのみこの家の歌合によめる

しら露の色はひとつをいかにして秋の山へをちゝにそむ覽

うくひす

心から花の雪にそほちつゝうくひすとのみ鳥のなくらん

宗于朝臣集

からふしてあひたる人のさはる事ありてえあはぬに
東路のさよの中山なか／＼に逢みて後そわひしかりける

中宮歌合の時

つれもなく成行人のことはや秋よりさきの紅葉なるらん
わすれ草枯もやするとつれもなき人の心に霜はおかなん
ものおもふころひとりに

いつとは時はわかねと秋のよそ物思ふ比の限りなりける
我こひの數にしとらは白妙の濱の眞砂もつきぬへらなり
恨むれとこふれと君かよと／＼もにしらす顔にて難面かる覽

返事

思ふともこふともいかに雲よりはるけき人の空にしろる覽
あはすして今宵あけなは春のひの長くや人をつらしと思はん

中宮の歌合

ときはなる松のみとりも春くれは今一しほの色まさりけり
雪ふりて年のくれぬる時に社つひにもみちぬ松もみえけれ
たひにまかるさうそく人につかはすとて
袖ぬれて別はすとも唐衣ゆくとなひひそきたりとをみん

かへし

別ちは心もゆかすから衣きれば涙はさきにたちつゝ
旅にまかる人の扇にかける

そへてやる扇のかせの心あらは我思ふ人の手をなはなれそ
七月八日曉によめる

今はとて別るゝ時は天の川わたらぬさきに袖そぬれぬる
歌合に

山里は冬そさひしきまさりける人めも草もかれぬと思へは
けふ人をこふる心はあすか川なかるゝ水におとらさりけり
むすめのみちの國へまかるに宮より給はせたる
いかて猶笠取山にみをなして露けき旅にそはんとそおもふ

かへしむすめ

かさとり山と頼みし君をおきて涙の雨にぬれつゝそ行

男の伊勢へまかりけるに

君か行かたにありてふ涙川水は底にそなかるへらなる

秋の野に宿りはすへし女郎花名をむつましみ旅ならなくに

人を思ふ心は我にあらねはやみのまとふたにしられさる覽

わかやとの庭の秋はき散にけり後みむ人やくやしと思はむ

梓弓いるさの山の秋きりのあたることにや色まさるらん

しら露のおかまくをしき秋萩ををりては更におきやまさ覽

よそにしてこふれは苦しいれ紐のおなし心にいき結ひてん

君といへはみまれみすまれふしのねの珍しけなくもゆる我戀

はらからなる人のうらめしき事ある時

君とわかいもせの山の秋くれは色變りぬる物にそありける

我妹子に逢坂山のしのすゝきほにはいてすも戀わたるかな

年月は昔にもあらず成ぬれとこひしき事はかはらさりけり

ゆき積るおのか年をはしらすして春をはあすと聞そ嬉しき

朝またき露分きつる衣手のひるまはかりのこひしきやなそ

よの人のおよひかたきは富士のねの麓にたかき思なりけり

あけかたに外山の雲のいとはれて歸りし程は侘しかりきや

寛平御時歌合

くる春にあはむこと社かたからめ過行たひに遅れすもかな

貫之か許にひさしうおとせぬにせうそこいひつかは
すとして

君ひとりとひこぬからに我やとの道も露けく成にけるかな
かへし

草の露おきしもあへす朝夕に心かよはぬ時しなけれは
ひさしくたいめせぬころ貫之かもとより

よそにても思ふ心は變らねとおひみぬ時はこひしかりけり
かへし

櫻ちりうの花もみな咲ぬれと心さしには春なつもなし
貫之かもとへ

よの中に誰かなたかにたらちねと我とかなとか人はしる覽
かへし

君はいさわれか思ひは白雲のかゝる山にもおとらさるまし

公忠朝臣集

延喜の御時に五位藏人にてさふらひけるを御讓位に
あひてはなれにければ朱雀院の御時延長八年十一月
に又かへり來てあくるとしの正月に御あそひのつひ
てに梅のはなを折て

百敷にかはらぬものは梅の花をりてかさせる匂ひなりけり
枇杷のおとゝ(仲平)の左大臣に成給へる御よろこひに
おほき大殿(忠平)わたり給へる日御あるしありてある
しもまた人も歌よみ給ひけるに

色もかもことしの春は梅の花ふたへに匂ふこゝちこそすれ
紅梅

くれなゐと雪との中はとほけれと梅のうへには通ふへら也
朱雀院の帝わらはにおはしましける時膝の上におは
しまして御手つから紅梅をかうふりにさゝせ給ひて
かしらもたけさらむに歌よめと仰られければ

もゝ敷の梅の花かささす時はあめの下社うしろやすけれ
南殿の御前のさくらちるを

との守のとものみやつこ心あらは此春はかり朝きよめすな
延長八年三月廿三日藤壺の藤の賀に

色深くにほへる藤の花ゆゑに残りすくなき春を社おもへ
おなし(延喜のイ)御時に四月一日鶯なかぬよしのうたよ
めと仰らるゝに

春はたゝきのふはかりを鶯のかきれることもなかぬけふ哉
北の宮のみくしけの御屏風に山をこゆる人のほとゝ
きす聞たる所に

行やらて山路くらしつ子規いま一聲のきかまほしきに

醍醐の御時に御前のすゝきのむすはれたるを御覽し
てあれはたかむすひたるかと仰られければ

綻ひて招くけしきとみえしかはしとけなしとて我を結ひし
秋の夜の月をみてあそふといふ心を

池水のもなかにいてゝ遊ぶいのをの敷さへみゆる秋のよの月
朱雀院御時八月十五夜をみてあそふ心

秋のよの月とはよそに聞つれと時にあへるは今宵なりけり
春霞かすみていにしかりかねは今そなくなる秋霧のうへに

近江守にて館に有けるころ殿上の人々たなかみのあ
しろに來けるにさけなとすゝむとて

流れくる紅葉の色をあかければ網代にひをのよるもみえ鬼
延喜十七年十月廿五日(五日イ)藤壺のないしのかみの

御屏風の歌

神無月時雨にまさる菊の花秋はてにきとみえすもある哉

おなし御時菊の宴に霜のうちのきくををしむといふ
心をよめる

いとほしき霜にも有哉菊の花移ふとやは色をみすへき
おく霜に色そめかへし匂ひつゝ花の盛はけふなからみむ

寛平の御時歌合に

梅かえに降つむ雪は一とせにふたゝひさける花かとそみる

八條の大將の(女のイ)ために賀しけるに

よろつ代も猶社あかね君かため思ふ心のかきりなければ
后宮の御方の御屏風に

行かへる舟ちばいたく馴に鳧年をつみてそはこふことなる
みな人のいかでと思ふ萬代のためしに君をいのるけふ哉

女におくる

あふことをよゝにへたつる吳竹のふしの數なき戀にも有哉
思ひやる心はつねに通へともあふ坂の關こえすもある哉

承平五年十二月三日(五日イ)から物の使に藏人左衛門尉
藤原の親盛(衛集)かまかりけるに餞し侍とて

別るゝか侘しき物はいつしかとあひみん事を思ふなりけり
あかたへゆく女にさうそくやるとて

いとせめて戀しき旅のから衣ほとなくかへす人もあらなん
ゐなかへくたる人にしるき袋をあをき物してすりて

火うちをそへてやるとて

打みては思ひいてよと我宿の忍ふ草してすれるなりけり
月よみのあめに昇りて闇もなく明らけき世をみるか樂しき

小野好古すみともか時の追討使にてくたりてあくる
年少將のらうにて四位になるへかりけるかあつから

さりければやすからぬよしさねへおくりてかへりけ
る文のおくに書つけゝる

玉匣ふたとせあはぬ君かみをあけなからやはみんと思ひし

延喜御時に月あかゝりける夜藤壺なとめくりて御覽
しける御供にたゝひとりさふらひけるに誰ともしら

ぬ女いてゐていみしうなくあるをうへもいみしく
あやしからせ給ひてかれよりてとへと仰られければ

よりて物いへといらへさりければよみける

思ふらん心のうちはしらねともなくをみる社哀れなりけれ
おなし御時五位の藏人なりけるを位さらせ給ひけれ

はひらきぬのさうそくに成てまかりたるをみて女房
ほともなくぬきかへてけるから衣

といひけるを聞て

あやなきものはよにこそ有けれ

近江守にてくたるに貫之か許よりおこせたりける歌

ふたつかへし

關の戸そおとろかれける君かため心とゝめぬ時のなけれは
水海にしほたるはかりをさなくてみやこに年の老にける哉

内の御屏風に

なかるれとよをへてつきぬ汀社ちとせの鶴の住家なりけれ

延喜御時殿上の人々おのか名をみなそへてよみける
に

から衣ぬきすてかたみ我やきんたゝめの前にかけて社みめ

延喜五年八月十五夜

古へもあらしと思ふ秋の夜の月のためしはこよひなり梟
おりのほりみるかひもなし白雲の山と頼みし君もなけれは

この歌延喜の御門かくれ給ひて殿上もせさりけるほと
に山に雲のかゝりたりけるをみやりてよめる。

九月晦日のほとに殿上の人々紅葉みむとて東山のか
たにありきて

さしてゆくかたもしられす秋の野に

とあれは

千古

もみちをみつゝとまる身なれは

延喜四年中宮御屏風に海の上ゆく舟かける所に

春の日ののときき浦をこく舟は水底さへそしつかなりける

秋のよの月

年毎にみる月なれとよをへつゝ今宵に増るをりなかりけり

七夕

稀にのみ逢とはすれと天の川流れてたえん物にしあらねは
小鷹狩

秋の野に色々さける花みれは歸らん程そいつとしられぬ
うつろはむ色をみよとて菊の花露の心もおけるなりけり
くれぬひを網代によする物ならは紅葉の色は赤くみてまし
まつ散て後に咲ぬる梅の花思ひまかふは雪にそ有ける
我宿の松と竹とのなかりせは千世といふ事は外にそあるらし
色をみてかつまとはせる梅の花かをふりかくす雪なかり梟
春にのみ年はあらなん荒小田をかへすゝも花をみるへく
ふる郷はふりやしぬらん子規夜ふかき聲のめつらしきかな

頼基朝臣集

天曆の御屏風に春日野に若なつむところ

いくはくの年つみくれと春日野に生る若なは老せさりけり

三月

花たにも散残らなん過ぬとをしむにとまる春かともみむ

秋の夜召ありて春宮にまいりて鴈のなくを

なく鴈はくるかかへるか覺束な春の宮にて秋のよなれば

寛平御時の屏風の歌

白露のおくての稻もかりてけり秋はてかたに成やしぬらん

てる月の流るゝ水し清ければうへした秋のもみちをそみる

水そこに影のみゝゆるもみち葉は秋のかたみに浪やをる覽

霧の立紅葉のにしき亂るれば行へもしらぬ野へにをるかな

北の宮の御もき給ひしに内侍のかんのとのおくら

れたる御屏風にかきとりの山を人の行ほとに時雨の

すれは袖をかつきたる所

笠とりの山を頼みしかひもなく時雨に袖をぬらしてそゆく

宇多の院にて梅花をよみ侍ける

散まてはきつゝたにみむ春雨に我をぬらすな梅のはなかさ

おなし院のうちに四十賀奉り給ふ竹の杖の歌

一ふしにちよをこめたる杖なればつくともつきし君か齡は

あるところの屏風に志賀の山越に瀧おちたる所

水上に結ふ人なみ白玉は山の尾よりそぬけて落ける

ある人の扇にかく歌

涼しさをえやは心にまかせたる扇にあふく風ならすして

朱雀院の御屏風に子日の松ひく所に驚なく

子日する野へに小松をひきつれてかへる山へに驚そなく

宇多院の御前に松のすゑに藤花さきかゝりたるを三

月晦日に

藤の花まつのみならずくれぬへき春の末にも咲かゝりけり

先代の皇后(安子)の九條の右大臣殿(師範)の五十賀奉り

給ふ御屏風に竹ある家

なかきよを思ひしやれば吳竹の暮行冬をしからなくに

ある所の屏風の繪に志賀の山越の所

なにはおへと馴るもみえす爪生坂春の霞のたてるなるへし

人の扇にかゝんといへるに

内も外もみえぬ扇のほとなきに涼しき風をいかてこめけむ

亭子院の御使にこしへ行人におひとらするにたゝな

るよりはとて

ゆふおひのとくはあれ共別れなはこしをめぐらん程の久し

おなし院の御前にてまゆみのもみちにみのむしのか

かりたるを歌つかうまつれとあるに

もみち葉の枝にかゝれる錢虫はしくれ降共ぬれしと思ふ

女の許にはしめて文やるとて

はつ霧の空にたちたる心かなおもはれんともしらぬ我みを

大井川の行幸にさまゝの題ともをよませ給ひしに

水にうかふといふ題を

秋の山を

白露はわきておかしを秋山のなとか紅葉のうらこかるらん

紅葉散

もみち葉の流れうつまく淵を社くれ行秋のかたみとはみめ

猿丸大夫集

あひしりて侍ける人の許よりすけにふみをつけてこ
れはいかゝみるといひて侍る返事に

しらすけのま野の萩原ゆくさくさ君社をしめまのゝばき原
あたる人のさすかにたのめてつれなくのみ侍りけ
れは

いて人はことのみそき月草のうつし心はあひもおもはず
もの思ひ侍けるころ子規のいたう鳴侍れは

ほとゝきす鳴らん里に行てしかしかなく聲をきけは苦しも
あひしりて侍る女の家の前をまかりわたるとて草を
むすひていれ侍るとて

妹か門過ゆきかてに草結ふかせ吹とくなあはむ日までに
名立侍ける女の許に

しなかととりゐな山ゆすり行水のなのみなかれて戀わたる哉
しなかととりゐなのふし原あを山にならん時に色はかは覽

春の夜の月をまつに山かくれにて心もとなう侍れは
くらはしの山をたかみかき曇りいてける月の光ともしき
ある女のもとに心はへありて

人妻といふはたか事すころものこのもとけしと云はたか事
家に女郎花をうゑて

をみなへし秋萩手をれ玉ほこの道行人もとはんこかため
鹿のなくをきゝて

うたの野の秋萩しのき鳴鹿のつまこふらくは我におとらし
女のもとに

玉くしけあけまく惜きあたらよを妹にもあはて明しつる哉

おもひかけたる人のもとに

梓弓末のたつきはしらねとも心は君によりにけるかな
朝日影匂へる山にてる月のよそなる君を山こしにして

かたらふ人の遠くまかりたるか許に

ほととほみ戀侶にけります鏡かけたにけさは爰に見えこす
梓弓ひきつのへなるなのりその花咲まてに妹にあはぬかも
あひみねはこひ社増れみなせ川なになふかめて思ひそめ劍

あひしりたりける人のさすかにわさともなくて年こ
ろになり侍りにけるに

をとゝしもこそも今年もはふ葛のしたゆたひつゝあり渡る哉
玉襷かけねは苦しめたはつきてみまくのほしき君かも

夕月夜さすや岡への松のはのいつともわかぬ戀もする哉
ものへまかりける道の海のほとりにかせのいたう吹

にあさりするものとの見え侍れは

風を痛みよせくる浪にあさりする蜚乙女子か裳裾ぬれぬる
おやのせいする女に忍ひて物いふをきゝてとりこめ
ていみしういふを聞侍りて

ちりひちの數にもあらぬ我ゆゑに思ひわふらん妹か悲しき
おほ舟のわくる所のたゆたひに物思ひ倍ぬ人のこゆゑに

人言のしけき此頃玉ならは手にまきつけて戀すそあらまし
我妹子にこひてあらすは秋萩のさきて散ぬる花ならましを

足引の山下風はふかねともよなゝ戀はかねてさむしも
物へまかる道に霧の立たるをみて

しなかととりゐな野を行は有馬山ゆふ霧たちぬ友なしにして
物へまかる道にひくらしの鳴侍れはふみ山にて

ひくらしの鳴つるなへに日は暮ぬと思へは山の影にそ有ける

ひさしう中絶たる女を思ひいてゝつかはしける
梓弓ゆつかあらため長ひさしひかすもひきも君かまに／＼
あらしをのかるやのさきに立鹿もいと我ことく物は思はし
前ちかううめの花の咲て侍りけるを

宿近く梅の花うゑしあちきなくまつ人のかにあやまたれ鬼

山寺(里イ)にまかりたるに櫻の咲たるをみ侍りて

山たかみ人もすさめぬ櫻花いたくなわひそ我みはやさん

雨降侍る日八重山吹を人の許につかはすとて

春雨に匂へる色もあかなくにかさへなつかしやまふきの花

やま吹をみて

今もかも咲匂ふらんたちはなのこしまのさきの山ふきの花

あたなる女に物をの給ひそめてたのもしけなきこと

なと申ほとに子規のなき侍れは〔此歌伊勢物語爲賀陽親王作〕

時鳥なかく里のあまたあれはなほうとまれぬ思ふ物から

さつきまつ山郭公打はふきいまもなかなんこそそのふる聲

秋のはしめつかた物おもひ侍るころ

大かたの秋くるからに我身こそ悲しき物と思ひしりぬれ

秋萩の色つきぬれはきり／＼す我身のことや物は悲しき

鹿のなくをきゝて

奥山に紅葉ふみ分なく鹿の聲きく時そ物はかなしき

秋はきぬ紅葉はやとに降しきぬ道ふみ分てとふ人もなし

女に

萩の花散らんをのゝ露霜にぬれてをゆかむさ夜はふくとも

しのひたる女に

ほに出ぬ山田をもとかり衣いなはの露にぬれぬ日はなし

あひしれる人のなくなれる所にまかりて

小浪やその山守はたかために今もしめゆふ君もあらなくに

人のいみしうあたなることのみいひて心にいれぬけ

しき成ければ我も何かはとのけひきて有ければ女の

うらみて侍りけるに

まめなれと何そはよけく苧萱の亂れてあれとあしけくもなし

あひしりて侍る女の人をかたらひておもふさまにや

あらさりけむつねになけきたるけしき見え侍ければ

たかみそきゆふつけ鳥から衣立田の山にをりはへてなく

文つかはす女のつれなかりけるか許に春のころほひ

あら小田をあらすき返しかへしてもみて社やまめ人の心を

なちこちのたつきもしらぬ山中におほつかなくも呼子鳥哉

花みにまかれるに山河の岩に花のせかれたるをみて

石はしる瀧なくもかな山櫻手折てもこむみぬ人のため

山に花見にまかりて

折とらはをしけにもあるか櫻花いさやとかりて散迄はみむ

こんよにもはやなりなゝむめの前につれなき人を昔と思はん

紀友則集

立春日

水の面にあや吹きたる春風や池の水をけさはとくらん

早春

花のかを風のたよりにたくへてそ鶯さそふしるへにはやる

うめの花を折て人のかりやるとて

君ならてたれにかみせむ梅の花色をもかをもしる人そしる

櫻花の許にて年老たるをなけきて

色もかも昔なからにさくらめと年ふる人そあらたまりける

寛平御時后宮の歌合に

みよしのゝ山へにさける櫻花雪かとのみそあやまたれける

久かたの光のとけき春の目にしつ心なく花のちるらん

雪のふれるを見てよめる

雪ふれは木毎に花を咲にけるいつれを梅とわきてをらまし

音羽山をこえけるに時鳥を聞てよめる

音羽山けさこえくれは子規梢はるかにいまそなくなる

右大將の四十賀の屏風の歌

珍しき聲ならなくに郭公こゝらの年をあかすも有哉

寛平御時中宮の歌合に

五月雨に物おもひをれは時鳥夜深く鳴ていつちゆくらん

夜やくらき道やまとへる時鳥我やとしもおりはへてなく

夕されは螢よりけにもゆれとも光みねはや人のつれなき

けふよりは天の河浪あせななんそよみともなくたゝ渡り南

あまの川流れてこふる七夕の涙なるらし秋のしら露

天の川せゝの白浪たかけれとたゝわたりしぬまつに苦しみ

天川戀しき瀬にそわたりぬるたきつ涙に袖はぬれつゝ

寛平御時殿上人歌合せしにかはりて

銀川あさせ白浪たとりつゝわたりはてねはあけそしにける

聲たてゝ鳴そしぬへき秋霧に友まとはせる鹿にはあらねと

誰きけと聲高砂に棹鹿のなかりしよなひとりなくらん

うちはへてかけとそ頼む嶺の松色とる秋のかせにうつるな

夕されはさほの河原の河霧に友まとはせる千鳥なくなり

これきたのみこの歌合に

秋かせに初かりかねそ聞ゆるたか玉章をかけてきつらん

やまとの國にくたりけるにさほ山に霧の立けるをみ

誰ためのにしきなれはか秋霧のさほの山へをたちかくす覽

繪に菊の花のもとに人のたちよりたるをみて

花みつゝ人まつをりは白妙の袖かとのみそあやまたれける

露なから折てかささん菊の花老せぬ秋のひさしかるへく

たつた山をこえてよめる

かくはかりもみつる色のこければや錦たつたの山といふ覽

みることに秋にも有かなたつた姫紅葉そむとや山もきる覽

初時雨ふれは山へそおもほゆれ何れのかたかまつもみつ覽

から衣たつたの山のもみち葉は物思ふ人のなみたなりけり

おほ澤の池の堤に菊の花さけるをみて

一もとゝおもひしきくをおほ澤の池の底にはたれか植けん

春霞たな引山の櫻花みれともあかぬ君にもある哉

我戀をしのひかねては足引の山たちはなの色に出ぬへし

よひのまもはかなくみゆる夏虫にまとひ増れる戀もする哉

寛平御時中宮歌合に

蟬の聲きけはかなしな夏衣うすくや人のならんとおもへは

紅の色にはいてしかくれぬのしたに忍ひて戀はしぬとも

われよりもたかき人をおもひかけて

玉かつく蜚ならねともわたつ海の底ひもしらす思ひつる哉
返事のなければまた

みるもなくめもなき海の嶋に出てかへす／＼も恨みつる哉
我心いつにならひてみぬ人の思ひやりつゝ戀しかるらん
我宿の菊のかきねにおく霜のきえかへりてそ戀しかりける
思ひてもはかなき物は吹風のおとにもきかぬ戀にそ有ける
秋風はみを分てしもふかなくに人の心のそらになるらん
さゝの葉におく霜よりも獨る我衣手そさえまさりける
河のせになひく玉ものみかくれて人にしられぬ戀もする哉
よひ／＼におきてわかぬる唐衣かけて思はぬ時のまそなき
東路のさやの中山なか／＼になにに人をおもひそめけむ
しき妙の枕のしたは海なれと人をみるめは生すそありける
年をへてきえぬ思ひはありなから冬の袂は猶氷けり
ことにいてゝいはぬ計そ水無瀬川したに通ひて戀しき物を
命やは何そは露のあたものをあふにしかへは惜からなくに
たち歸り思ひいづれはそのかみのふりにし事を忘れさり鬼
下にのみ思へはくるし玉の緒の絶てみたれん人なとかめそ
水の沫の消てうきみとしりなから流れても猶たのまるゝ哉
うきなからきえぬ沫と成なゝん流れてとたに頼れぬみは
雲もなくきたる朝の我なれや厭はれてのみよをはへぬ覽
本院のおとゝのまへにして 四十よに成まで無官にて
侍るよし申侍るにおとゝ

今迄になとかは花のさかすしてよそとせまで年きりのする

とある御返事に

はる／＼の数はまとはす有なから花さかぬ木をなにゝ植けむ
人のもとより殿ゐものおこせたるをかへすとて
蟬のはのよるの衣はうすけれとうつりかこくも成にける哉
つくしにありし時こうちなとしける 人の許に京にの

ほりてやりける

故里はみしこともあらすをのゝえの朽し所を戀しかりける

ものへ行道にあひて物なといひける人に別るとて

下の帯の道はかた／＼別る共行めぐりてもあはんとそ思ふ

藤原のたゝゆきかみのしつむよしなけきけるとむら

ひにやりたる返事に菊の花をゝりて

枝もはも移ろふ秋の菊みれははてはかけなくなりぬへら也

とあるかへしに

雫もて歸のふてふ花なれは千世の秋にそかけはみつらん

おやのよみたる歌を書集ておくにかきたりける

ことならは言のはさへもきえなゝんみれは涙の瀧まさり鬼

藤のとしゆきうせて後かの家に送りける

ねてもみゆねてもみえ鬼大かたは空蟬のよそ夢には有ける

とりもあへぬとしは水にや流るてふ花の心のあさく成行

をみなへし

白露を玉にぬくとやさゝかにの花にもはにいと女郎花

朝露を分そほちつゝ花みんと今そ山へをみなへしりぬる

をかたまの木

み吉のゝ吉野の山に浮ひいつるあはをか玉のきゆとみゆ覽

きちかう

あきちかう野は成にけり白露のおける草はの色かはりゆく

りうたん

我宿の花踏ちらす鳥うたん野はなけれはやこゝにしもくる

年をへて君にのみ社ねすみつれこと腹にやはこを話すへき

君といへはみまれみすまれふしのねの珍らしけなく燃る我戀
我を君思ひつくはの山のはにいといるなはかへらさら南
朝霧はけさはなたちそさほ山のはゝその紅葉よそにてもみん
池水や氷とつらむ芹鴨の夜深く聲のさはくたる哉

坂上是則集

春亭子の歌合に

浅緑そめてみたる青柳の糸をは春のかせやとくらん

山里の花をみて

折とらはをしけにも有か櫻花いさ宿かりてちるまてはみむ

前栽の中にさくらの咲たるをみて

櫻花けふよくみてん吳竹のひとよの程にちりもこそすれ

花をしむ所にて

かつみつゝ千年の春をすくす共いつかは花の色にあくへき

亭子院の歌合に

花の色を移しとゝめよ鏡山春より後のかけやみゆると

同歌合に

三千とせになるてふ桃のことしより花咲春にあひにける哉

松のもとにこれから侍りて

深緑ときはの松の陰にゐて移ろふ色をよそにこそみれ

鶯亭子の歌合に

きつゝのみ鳴鶯の故里は散にし梅の花にそありける

夏時鳥

山かつと人はいへとも時鳥まつ初聲はわれのみそきく

秋

はつ時雨ふるほともなくさほ山の梢あまたに色つきにけり
大かたにおく白露も今よりは心してこそみるへかりけれ

大井に行幸に秋の山

秋の色は千種なからにかはれるをたれか小倉の山といふ覽

紅葉水にうかふ同行幸に

いつかたかとりなる覽山風の拂ふ紅葉にふなちまとひぬ

もみち

みね高く行てみるへき紅葉はを我るなからもかさしつる哉

秋の歌とよめる

さほ山のはゝその色は浅けれと秋は深くも成にけるかな

紅葉散大井の行幸に

紅葉はのおちてなかるゝ大井川せゝのしら浪かけもとめ南

もみちはの流れさりせは立田川水の秋をはたれかしらまし

大井の行幸に菊の花のこれり

かけさへにいまはと菊の移れるは浪の底にも霜やおくらん

鷹 大井川の行幸に

いくさとのある道なれや秋ことに雲井の旅のかりのゆく覽

かりてほす山田の稻のこきたれて鳴こそ渡れ秋のうけれは

冬やまとの國にまかりける時雪のふりけるに

朝ほらけ有明の月とみるまでによしのゝ里にふれる白雪

奈良の京にまかりてやとれる所にてよめる

みよしのゝ山のしら雪積るらし故里さむくなりまさるなり

氷

冬の池のうへは氷のとちたるをいかてか月の底にいるらん

祝

君か代は天の羽衣まれにきてなつともつきぬいはほなら南

戀

わたの原かつきてしらん人しれす思ふ心のふかさくらへに
我戀をくらふの山の櫻花まなく散とも数はまさらし

を鹿ふす夏のゝ草の道みえすしけき戀にもまとふころ哉

をなみイ

秋山に朝たつ霧のみねこめてはれす物をおもふへらなる霜かれの淺ちかもとの荳蔻のみたれて物をおもふころ哉

もイ

枕のみうくと思ひし涙川今は我身のしつむなりけり

こふイ

かつきえぬ泪か磯のあはひゆる海より海はかつきつくしつ

片糸をこなたかなたによりかけてあはすは何を玉の緒にせん

川のイ

谷イ

谷深み岩まをたきつ山河のおとにのみやはきゝわたるへき戀しさの限りたにあるよなりせは年へて物は思はきらまし

あふ事をなからの橋のなからへて戀渡るまに年そへにける

あひみては慰むやとそ思ひしをなこりまで社戀しかりけれ

しもイ

逢ての後あひかたき女に

霧ふかき秋のゝなかの忘れ水たえまかちなるころにも有哉秋のよをまとろまでのみあかすみは夢ちとのみ頼まさり鬼

風別に

忘るなよ別ちに生るくすのはの秋風ふかはいまかへりこん

雑大井の行幸に

此川の入江の松は老にけりふるき御幸のことやとはまし

鶴洲に立り同行幸に

山ちかみおりあるくもとまな鶴の立る河へを人やみるらん

かもめ人になれたり同行幸に

行舟になるゝ鷗はさす棹のかへす浪にそあやまたれける

猿かひになく同行幸に

秋山のかひにみかへりなく猿を夜ふかく聞て袖そぬれぬる

異本

秋の野に露おほく置たる所

秋の野に置白露のきえさらは玉にぬきてもかけて見てまし

藤原清正集

ある所にてみちの國のかみの餞せられける日

にイ

かりそめの別れと思へとたけくまの松に程へん事を侘しき

まらうとゝも家にきて月いてなは歸りなんといひけ

れは

月影をまつほと計たちとまる君かためにはいてかてにせよ

正月山寺にこもりたりけるに京よりいかに鶯の聲き

きたるやさいへりける返事に

鶯の鳴ねたにせぬ我宿はかすみそ立て春そつけつる

くイ

天曆の御時の御屏風に

春霞けふそたちける春日野に若菜つまんといそくへらなる

紀伊國にて子日しけるに

はかなくやけふの子日を過ぎまし名草の濱の松なかりせは

子日しにしめつる野への姫小松ひかてやちよの影をまたまし

ある屏風の歌

石上ふりにし里をきてみれば昔かさしゝはなさきにけり

おなし屏風に二月歸鷹

はイ

里とほみ雲ち過行かりかねもおなし旅とてかへる聲する

やイ

三月に人々ちる花みる所

ちりぬへき花みる時はすかのねの永き春日もみしかゝり鬼

同頃藤壺の藤の賀の宴せられけるに

こむらさき昔の色もあせすしてたちかへりつゝ匂ふ藤なみ

かけみえて春はゆかなむ水底ににほふ藤浪折もさむへく

やまふき

春かせは八重たつ浪の色にさへ色こきよする井手の山ふき

家に櫻木植たりけるに花のさかきりければ

いつしかさ植てみたればわか櫻さかすて春のすきぬへき哉

おなしころ御屏風に

うの花のさかりに聞は子規夜ふかゝるねにあく人そなき

人の家に前なる小柴垣にいとしろう卯の花咲かゝり

たる月夜に

いつれをかわきてをらまし卯花のさける垣ねにてらす月影

ほとゝきすの聲聞比女御の御かた成ける人よみける

に

時鳥かねてし契る物ならはなかねよさへはまたれさらまし

うちの兵衛

里めくりなさきなかぬ時鳥人の心をそらになしつゝ

女房のしりたるに物いひけるほとにおやめきたりけ

る人の聞つけてゐて入にける朝に

あらかし浪の心はつられれとすこしによせし聲を戀しき

月まちて歸らんといひけるほとにほとゝきすのこゑ

しはゝきこゆ

夏のよの月まつほとは時鳥我やとはかりすきかてになけ

むかししりたりける女の許へゆく道にいみしうあれ

たる所にたかをはなちてありければ女

夏草のしけりのみます我宿をわけては人の狩にこそみめ

かへし

はし鷹のすゝるあるきにあらは社かり共人の思ひなされめ

右大臣の賀に頭の中將のし給ひける屏風に

夏のよも涼しかりけり山河は浪の底にやあきはやとれる

五月くらまといふ所に女ともまうてあひたるにほと

ときすの聲す

さつきやみくらまの山の時鳥おほつかなしやよはの一こゑ

くらま山くらくこゆれば時鳥かたらふ聲をそれとしらすや

國へ下りける人々まうて來て別をしみけるに時鳥ま

つ心を

小夜更て今もなかなん時鳥別をゝしむ聲ときこえて

七月七日七夕の心

一とせに一夜のみあふ七夕をたちなかくしそ天の川きり

おなし心の屏風に

天の川霧たちわたり渡りてはたか衣手かひちまさるらん

雨うちふるゆふつかたまらうとゝもきてさけのみな

としけるをりに月の雲かくるゝに人々かへる

あま雲の立のみさはく秋の夜は月影さへそしつ心なき

天曆の御時かたわかちて前裁合せさせ給ひけるに中

宮の御方に花の枝にてふのかた作てつけさせ給ひけ

るに

九重に露をおけはや花の色の外の秋には匂ひまされる

百敷に花の色々匂ひつゝ千とせの秋は君かまにゝ

内の御屏風に

秋のたのひたすらに社思ひつれかりにと人にみえにける哉

九月はかりに人々あまたきあつまりなとして志賀の

山越しけるに紅葉の色うみに移りたり

もみちはのくれなる深き色みれば水底までや霜はおくらん

十三みこ

よも山の紅葉はおほくみつれとも水底の霜ふかき色かな

又人

上は霜下は水海の浪かすにをりかへしつゝそむるにしきか
しくるれは色まさりけり奥山の紅葉の錦ぬれはぬれなん
同比山へまうてにける道にかせ打吹てもみち散
紅葉はの絶す山ちにちりかふは錦をたちてゆけはなるへし

九月九日

のふときく齡にそへて露けきは年とともにそこひ増りける

うちの紅葉あはせ九月ふたつあるとし

紅のやしほの色はもみちはの秋くはゝれる年にそ有ける

もみちをしみに山里にゆきて

風吹はぬさとちりかふ紅葉こそ過行秋の手向なりけれ

ある所のかんしん(庚申)に鷹秋風

とこよ出しかりのは衣さむけきに心してふけ秋のよのかせ

松と竹と植たる所に女房みる繪に

ときはなる松と竹とをやとに植て秋はくれ共物思ひもなし

閏九月にうちにて別をしむころ

秋の日の日數まされる年なれとけふの別はをしくそ有ける

繪に

むらなからみゆる紅葉は神無月また山風のたゝぬなりけり

殿上人残りの菊をしみけるに

菊の花いかにとへは九重にうつろふ色のかきりなりけり

繪にかくらの所

柿葉のかをとめくれは千早振神のいかきにさしてきにけり

しはすばかりにまへのうめに雪ふりかゝりたるをみ

せしに

梅か枝にわきてふらなん白雪は春よりさきの花とみるへく

うちに十月十四日につほの前裁の菊のえに

九重に移ろふからに菊の花いつれの色にこゝろそむらん

物へまかりける秋

たひにして物思ふほとに秋の夜の有明の月もいてにける哉

うちに宇佐の使のせん錢せられけるに

限りあれはゆきてはきぬる道なれと孰れの旅か惜まざる(へき)

田舎へゆく人に物なとやるとてこうちきの袂に

君かためいのりてたてるから衣わかれの袖や手向なるらん

あつまちのかりの旅とは思へともいまこむ空を眺むへき哉

又こと人に

から衣馴にし人のわかれには袖こそぬるれかたみともみよ

かへし

かたみには慰むやとてから衣きるにしも社ぬれまさりけれ

こと人のくらのうはしきに

あしたつのちとせの水に影みえてとくたちかへる岸の白波

しのひたる女房田舎へくたれは

ありなからあひみぬ程もたへぬみに別の程を何にたとへん

五月はかりにことかたらはんと一聲もせずといへる

女に

人しれぬねやはたえせぬ時鳥たゝあけぬよの心地のみして

ふく(服)なりけるころとはすと恨て山吹をおこせたる

人に

いふかひもなき世中におひしよりくちなしに咲花さへそうき

人に

須磨の浦に蟹のこりつむも沙きのからくもしたに戀渡る哉

五月ころ人に

なきそめし宿をこふとて時鳥夜深き聲をたれにきかせん
かへし

郭公とはぬをりたに忘れすことかたらひしよはの一こゑ
ふくなるころ久しういはて女に

すみ染の衣手そほつ物おもひにおほつかなくは成にける哉
廣はたの御息所の御さうしにあこみといふわらはに

文つかはすとてすまといふものもりつかはして
すまの蜚をるへと思へはわたつ海の底のみるめは疑もなし

又人にいかゝ有けむ
命をはあたなる物と聞しかとうきみのためは長くそ有ける

又人かへしにこそあめれ
あひみてもあはても終に別れぬるしはし計のよをな恨みそ

いとしのひにかたらひける女のおやこと人にあはす
へしといそきけるをきゝて

我ならぬ人にとくと結ひおきし君か下ひもゆるすなる哉
かへし

むすふともくともしらて下紐のよに亂れつゝ物を社思へ
人をいひけるにいないとあたなりとおやせいしける

をきゝて
つれもなき人にまけしとせし程に我もあたなは立そしにける

人のむすめ今も(蜜)きんほとをねんし給へといひけ
るもなときてける後さへつれなかりければ

あまならて底の玉もゝかつくなり今はみるめの方を尋ねよ
かへし

四月まつりの日

千早振神の心はたかふとも猶ねきことはたのまるゝかな
しのねイ

齋院の女従の其院の院司を男にてあるときくに
千早振神もしりにきゆふたすきしめのほとかく離れさら南

秋たつ日
獨ぬる床は草葉にあらねとも秋くるよひは露けかりけり

濱のまさこの敷しらんとたのめたる女のもとに
忘れしのなきためしに頼めこし濱の眞砂やかそへきぬ覽

浅茅生の床のよとのゝあれしより我もなつなの何とかはみん
人の許にいきて夏ころしのひたりけるとときゝ人しつ

まるほとにいたう更てやうゝ夜中はかりにいて逢
たり

みしかよの残りすくなく更行はかねて物うき曉のみち
年かへりて物いはんとたのめし女にしはすに

花さかぬ梅の立枝もわかことや年のこなたに春をまつらん
葛城やくめのつき橋つきゝも渡しもはてしかつらきの神

かへし
葛城やくめのつき橋ならなくに渡しははてイやましくめのかけちに

近江へ下りけるころ心見のわたり過けるによいとふ
かし

あけぬとや心みまてはきにけれとまた深きよのわたり成鬼
又山の井といふ所に道に人あへり

みな人のむすひて過る山の井に我うちとけて影をみえぬる
繪に

行人もかへるもみゆる淀川は浪の心もいとなかるらん
ある女に

住よしの岸折かへしかへしても立よらまくのほしき君かな

かへし

打しきりたちよりくとも岸とほみよそにそ歸るおきつ白浪

いかてとおもひける人にはつかにあひたりけれとい
らへなともことにせきりけるに月も朧なり

おほつかな曇れる空の月なれは心やましきよはにもある哉

う月のみあれの又の日ついて有てなるへし

千早振神に祈りしあふことは草はにつけてけふそみゆめる

かへし

皆人のなへてかさせは葵草いつれをそのしるしとかみん

ある所にて琴なとひきてあそふに夜ふけて月もいり

ぬうちの人とも入ぬる音するに琴をしらへていたし
たるに

山のはに入といりにし月なれは調へていたす琴もかひなし

あふ坂の關路に年はへぬれともけふの清水やなを流さん

紀守になりてまた殿上もせきりしに

天津風ふけ井の浦にすむたつのなとか雲井に歸らざるへき

天曆の御時中宮の歌合のかちわさにふしの山をちん

(洗)して作ていたゝきより立るけふりのしたにうちの

御かたに

よに人のおよひ難きはふしの山ふもとに高き思ひなりけり

月夜にしろきゝぬとものかきりきたる女ともあまた

ゐたりけるにひとりか許につとめて

たれとなく朧にみえし月影に分る心をおもひしらなん

藤原元眞集

朱雀院御屏風繪に正月一日

あら玉の年を送りてふる雪に春ともみえてけふの暮ぬる

中の春池の邊に山吹櫻さけり女すたれをあけて立り

我やとの八重山吹はちりぬめり花(ハレイ)のさかりを人のみにこぬ

櫻花のもとに人々あそふ

春風もことしはかりは櫻花人のころにまかせたらなん

田うつ所

浅みとり野へのあらたを打返しせなかに秋をまちやわた覽(くらさんい)

暮の春池のほとりに藤の花さける所に人あそふ

岸ちかき松にかゝれる藤の花波さへをりてかへるめるかな

同花さけるわたり

藤の花咲るわたりをこく舟のよそにて波はおもひかけなん

水のあやのおりゐる毎に藤咲る池のあしたつたゝぬ成へし

はしめの夏ほとゝぎす

まつ人はあまたあれとも立とまり山ほとゝぎす二聲もなけ

中の夏五月五日

駒なへてすさめぬ澤の菖蒲草けふにあはすは猶やからまし

七月七日

一とせを一夜にこめて七夕の逢はこよひの月日ならぬか

はつかりを聞て

初鴈をおくるなりけり秋風の雲むはるかになきてすくるは

中秋十五夜

白露のおける草はにうかはすは今夜の月をひると社みめ

田かるところ

秋の野をたちいてゝみれば足引の山の錦におとらさりけり
始の冬網代の上におきなをり

我宿にあるへき物を此たひの網代によりてひをもふる哉
雪みるところ

大空に春ともみえて散雪の雲の上にてたつねてしかな
十二月晦日

いたつらに過る月日はおほけれとけふしも積る年を社思へ
同十二月春宮女御藤壺の御局にてちゝの御五十賀う
ちにせさせ給ひしに其御屏風障子宣旨にて奉る始の
春男女かた岡の水のほとりにてあそふ

子日する山下水のかけしあれは千年の松はひかてみえけり
うめの花ある所に人あそふ

山風にまかするよりは梅花にほひの宿につきすも有なん
松に藤かゝりたる所

春ふかみ咲て匂へる藤の花松そ千年のやとりなりける
人の家のはな橋にほとゝきすなく

よになれぬたゝ一聲も時鳥はなたちはなにかくれてそなく
瀧あるところ

山たかみ落くる瀧のしら糸は空にみたるゝ玉かとそみる
池の邊に鶴たてり

あしたつのちよの影すむ池水は浪さへたゝてのとけかり鳧
おなし題

水底にしつめる千世のかけをみて池の芹たつのとけかり鳧
かしらしろき翁のある所に雪ふる

年ふかき色としみれば白雪のふるにもおのか上をこそ思へ
人の家に竹のあるところ

窓近きときはのかけはくれ竹のよをへてふかき緑なりけり
うちの御障子の繪に女宮のつけ(けとうせい)させたまふ
ける女いなりにまうてたる所

ちはやふる神の社にいのりかくる道の程さへおもなれに鳧
よし野川にくれくたす所

吉野川おろすいかたのをりことに思ひもやます波の心を
廣澤の池のほとりに女とものねぬなはくる

廣澤のいけのねぬなはくりよする
さかみのあしからの關にたひ人ゆく

あしからの關にしける玉こそけ行かふ駒もすさめさり鳧
いてはのやそしまに舟にのりて人あそふ

やそしまの浦の渚に數へつゝとまれる年もあまたへぬへし
みちのくにのあさかの沼のほとりに京よりくたれる

人たちとまれり
おとにきくあさかの沼の朝ほらけたえぬ煙はなのみなり鳧

屏風繪に柳おほかる人の家にかすかにてあり
青柳の糸によりても年をふるうきよそむける跡もたちけるえい

旅人造ゆくに櫻花ちる
いつしかと行故里の櫻花われたにみての後にちらなん

おなし題
行てたにいかてとくみむ我やとの櫻はけふのかせに残らし

時鳥
時鳥こそ一聲あかさりし人のきかくにまつそなかなん

櫻の咲たるやとに女見いたしたり
わかやとに咲にし日より櫻花かくこそはみめあかすも有哉

また

我やとの櫻はかせに散はてぬあすこん人やくやしと思はむ
山里に梅さける家に男まらうと馬よりおりてたてり
しる人もなき山里の梅の花匂ふ日よりそきてもたつぬる

卯月のついたちにいまたよそなる女に

けふよりはさてもすきてん夏衣みるよりうすき心とやみん
かへし

かけてたにいふ社うけれ夏衣あるよりまさる薄さと思へは
をとこ

あはてふる程にぬれたる唐衣けふはみまくもほしくそ有ける
かへし

大空に降てぬるらん濡衣をほしもわひぬるころのなかめか
をとこ

うれたかみ鳴音空なる時鳥おとにたえてや夏を過さん
五月五日おなし人

菖蒲艸あやなくもみて逢事をいつかとまちしけふは暮しつ
かへし

まちきけるけふ過ぬれは菖蒲艸今は五月もあらしと思ふ
さての朝にをとこ

いたにねてありにし物をあふ事の夢かとのみも思ほゆる哉
えあはてかへりて男

ねさめにて夜は明ぬとも杜鵑ことかたらはん一聲もせず
かへし

あやしさにねさめて聞は子規なと古郷に聲も聞えぬ
小野の宮に御ものいみにさき／＼かたらひしこたち
に女郎花につけて

うつろはんほとたにもみん女郎花心のとかに露はおかなむ

同年前裁合に神無月を題にて

神無月しくるゝ空のもみち葉は秋をたむくるぬさと散けり

過し秋ををしむ

霧たちて別れし日より時雨つゝ過にし秋そ悲しかりける
もみちをしむ

もみちをしむ

秋霧のたゝぬさきよりさほ山の紅葉のにしき残らさりけり

神無月といふ心を

散はてゝ木のはも空に残らぬを神無月とはいふにそ有ける

又

鴈金は霜とともにやおきてくるしくるゝ空になく聲のする

菊の花をしむ

年ふかき色としりては初霜の残しおきけんしら菊の花

二條の式部卿の御おとゝの六十賀北方のし給ふ御屏

風歌松原のあひにみな渚にいてゝ人あり

目をふれと松の濱へにある舟は千年をみると出ぬなるへし

田舎の家の前に川あるにそれに河龜なかる

河龜も今よるつ代はもろともに波の底にてすみてわたらん

大將殿の女御のなてしこ合に

山かつの垣ねをせはみ生そめし色とはみゆやなてしこの花

天徳三年九月十八日庚申に中宮の女房歌合せむとい

ふによめる庚申

難波瀉けと小舟はあしわかのえさる程こそ久しかりけれ

花すゝき

月影にほのかにみゆる花すゝき風のたよりにむすひつる哉
萩

高砂の尾上の萩を折つれば鹿のたちとやうとくなるらん
女郎花

をみなへし野への故里思ひいてゝやとれる虫の聲や戀しき
きりくす
(リレイ)

露結ふ秋はてかたのきりくす草のねことに寒くこそなけ
日くらし

秋かせの萩の下葉に吹みたれ空にみちぬるひくらしの聲
松むし

まつ虫の絶すなくなる女郎花千年の秋はたのもしき哉
同八月廿三日女御の前裁合の虫歌

人しれす秋のくれぬる女郎花むしのねよりも尋つる哉
花すゝき

秋くれてまねく袂を花すゝき今は露さへむすふへきかな
萩

萩の葉に風のすゝしき秋きてはくれにあやしき物を社思へ
蘭
(マイ)

むさしのゝ草のゆかりに藤袴わかむらさきに染てにほへる
なてしこ

露結ふ風は吹ともとこなつの花の盛りにみゆる秋かな
菊の花

所よりうふるもしるく菊の花うつるふ色をけさはまたなん
紅葉
立田山ふかき紅葉も君みすはよるの錦となをそくれまし
(コイ)

同年二月三日内裏の御歌合かたくのをよめる霞
吉野山霞たちぬるけふよりやあしたの原に若なつむらん
右れう同霞
のイ

春かすみ立やこめつる小倉山ほとりのかひに雪も見えぬは
左れう
(セイ)

けさよりはかすむ山ちに立昇る三輪の故里ほのかにもみる
おなし

冬なからけふ計にや春霞たなひく空のことにみゆらん
人れう

春きぬとまちつけかほに鶯の木高き枝にふりいてつゝ鳴
又右れう

春は猶をしみつゝ鳴鶯の聲に雲も匂ふへらなり
左
又右
(左イ)

浅緑みたれてなひく青柳の色にそ春のかせはみえける
又右
また櫻

青柳の糸にはふしそなからまし風のくるにも亂れさるへく
また櫻

さきさかすつけよ吉田の山櫻霞はれなはよそにてもみん
左
右欵冬

よと共にちらすもあらなん櫻花あかぬ心はいつかたゆへき
散迄ものもしきかな山吹の八重をつくさん程もあるやと
同方

花さかり八重山吹を折たれは井手の蛙のねにやなくらん
左
藤

もろともにはあは咲なん藤の花松にかゝらぬ春しなければ

右

ときはなる松にかゝれる藤波は花たにちるな春のなこりに

左くれの春

あすたにもくるへき春にあらは社心のとかにけふを惜まめ

左卯花

咲にけり我山里の卯花はかきねにきえぬ雪とみるまで

右

白妙にさける卯花やみならは月とやみまし賤か垣ねを

人れうに時鳥

初聲のよはに聞ゆる時鳥わかこと人もまちやしぬらん

左

夏のよのみしかきよりも時鳥また二聲となかす^{てイ}ゆくらん

同方れう

夏山のしけきにあともみえぬ哉野中ふる道いつれともなく

右

夏艸はしけりにけりな玉ほこの道行人もむすふはかりに

同方のれう戀

戀しきの忘れぬへき物ならは何かはいける身とも恨みん

左

君戀てあふとみる夜の曉は夢にうれしきかひなかりけり

同れう

我むねの絶すもゆるをしのふ哉人にいふへき中にあらねは

右

君こふとかくは消つゝふる程を斯てもいける身とやみる覽

つイ

打とけていゝをたにねゝは逢事の夢ちをさへそ隔てはてつる
玉の緒の絶てみたるゝ我戀にいとゝ涙そおちそはりける

戀わひて絶す泪のもろければつひにみくつと猶やなかさん

夏山のしけき思ひをふりそへてしけらす程に道まよひけり

夢にたにあふとみるまの曉はおつる涙のがつそはりけり

春つくしにて歌よみあまたしてよむにあまつゝみと

いふ所を十二にて

須磨の蛭のつゝみて底をかつかねは深き玉もゝみえぬ也梟

霞かゝる浦にこきつくゝし舟いつれかけふの泊りなる覽

唐くた物のおなし題を

こゆるきの渚に風の吹しからくたも残さす波もよせけり

五葉

あと絶て行もかへるも年をへて人のこえふる相坂のせき

すゝむし

飛鳥川岸やくつれて打にこすすむ白波のせゝにみえぬは

りうたう

思ひきや秋の下葉の露はかりうたうまたきに移ろはんとは

大みつ

芹分の小舟にのりてさはりおほみ妻にあひみぬ戀もする哉

十一にて梅花に雪のかゝれるをみて

匂ひをそつくへかりける梅かえに花まかはしてふれる白雪

若菜

君か爲若なつみつゝちよをへん珍らしけなく野へはみる共

又

吉野山ふもとの雪はきへにけり衣かたしきわかなつむめり

梅花

春霞立かた岡の梅花にほはさりせは誰かしらまし

紅梅

白妙に匂ふもあかぬ梅花くれなゐふかきいろさへそみる
ある所にて雨のうちの紅梅ををしみて文作り歌よむ

くれなゐの梅の花かき雨もよにけふをします花そ散まし

同年はしめの所の紅梅を殿上人所の衆なとしておし

む

梅花くれなゐ深き春のよの色をもかをもてらす月かけ

春藏人所にかれこれ右近の馬はにて櫻ををしむ

櫻花ちらさて千世もみてし哉あかぬ心はさてもあるやと

人のさうし(藤子)の繪に山里に櫻の花のさけるに道行

人のいひいるゝ

あらしのみ吹山里の櫻花いとゝのときき人はあらしな

梅の宮にて櫻の花ををしむ

風にのみおほせつれとも櫻花けふは心とちりはてぬめり

ある女の許にて櫻ををしむ

一とせにいとせなからちらすともいつか櫻の花にあくへき

又おなし

春風の吹たひことに櫻花心のとかにみつるほとなき

人に別るゝ所に櫻はなちる

をしめともとまらぬ君を櫻花別るゝ道のみえぬまでちれ

四月一日人のもとに時鳥待

我にまつ鳴てきかせよ時鳥またよになれぬころの一こゑ

同

人しれすまつもなかなん時鳥みのうき事もかたらはまほし

八月十五日夜藏人所にて月の心をあはれかりて立出

て行に麗景殿の御曹子のこたち花すゝきを折てたて
しとみよりさしいたしたり

白露のおくより招く花すゝきむすはぬさきにまつそ亂るゝ

かへし

なへて人むすはぬさきの花すゝき風にのみ社亂るへらなれ

又をとこ

定めなく招く尾花の花すゝきほにいつる秋ははからるゝ哉

秋の野にいてゝあそぶ

なへて咲花のなかにも女郎花おほかる野へはすきうかり鳧

おなし野にて人にいひかく

めにつくは少なかりけり女郎花あまた多かるさか野なれ共

女郎花のはなをもてきて人のうふるに

虫のねのほのかに絶ぬ女郎花いとゝ物おもふやとに植つる

時々かよふ人のもとにをみなへし

女郎花植て後よりいかなれは露の心もおきてなるらん

山里のをみなへし

あらし吹深山なる女郎花うしろめたくもかへるけふかな

物いふ人にこと人かよふと聞いていきたるに女郎花を

をりていたしたるに

女郎花なへて草葉におく露の秋はてかたにみるそわひしき

御前の前栽ほるとて

女郎花あまたみすてゝ過行はさかの心とおもふへきかな

春野より歸たるにあるさうしのこたち物いひかへる

に

百敷に移してうふる女郎花心おこりのいかゝせさらん

萩の花人にやるとて

棹鹿のねに鳴そむる秋萩を折てそみゆる人のこゝろは

ある人の許に行たるに萩ををりてさしいたしたり

秋萩の色つくまゝになく鹿の聲をはよそのことゝきけり

人の家に萩を植たるをみて

人戀る鹿の涙もかゝらしを今さへかゝる萩のうへの露

人ともあそふ所に萩の花あり

秋きても程はへぬれとこの暮におとろくはかり風は吹ぬる

六月十四日秋のせちに人

今夜より萩の葉風の音すらし秋のさかひにいりやたつらん

七月七日

一とせに今夜計そ天川戀つゝわたるせをすこしてよ

同題を

天川今はみなせに成ぬらんけふ彦ほしのふなちこくへく

同秋風

大かたに吹秋かせも心あらは物おもふやとは萩のははよけ

七月七日秋夜の虫といふ題を

何事を草の枕におもふらんなく聲たへぬ秋のよの虫

七月山寺に參るついでに野への草村の露をみて

秋の野をけさきてみれば蘭わかぬきかけし露もはらはす

紅葉を遠くみやる宮の御屏風の繪に

秋霧はたちかくせとも足引の山の錦はたまにみかけり

おなし題

たつた山みねの紅葉もみるへきを霧たちこむる秋の空哉

波近き山の紅葉さかりなる所を人の馬にのりて

足引の山のしきを惜むとて浪さへけふはたゝぬ成へし

十二なりけるとし九月によめる

花すゝき招く袂はあまたあれと秋はとまらぬ物にそ有ける

むさしのかみひてしけかつるのかたのとうかいあせ

ち殿に奉れり其使にしるかねのかめの箱にくすりい

れたりそれに

今年より君に千年をゆつるをそとうかいたうに求いてたる

かへし

千年ふる鶴のありけむかたにやはけふ万代の龜をすません

同殿の北方はくろめすみを舟につみてすみをそきよ

しをある所に

をりはへて君かたきゝにこく舟は佳のえに社程はへにけれ

おやのしもつふさになりて下るに兄の近江守の打出

の濱にてよめる

もろともに打出の濱に打波のかへらんをりを思ひこそやれ

かへし

よの人の打出の濱といふことは涙のさきにたつなりけり

さて尾張よりかへりて藏人所にふしたる夜物哀れに

てこれかれ秋の夜の雨といふことをよむに

あつまちへゆく旅人を別れきておもひこそやれ秋のよの雨

きちかう

しら露のおける草葉にかせすゝし曉ちかうなりやしぬらん

くさの香

しら露のいかにそむれは草のかうおくだひ毎に色のます覽

ほそおとこ

春の田を打かへしつゝほりたてるほそをとことも思ひける哉

たゝの戀

霜水り心もとけぬ冬の池によふけてそ鳴をしの一こゑ

ある所の前裁合に

しら雲のはるけき峯の姫小松君か千年のかけと社みれ

志賀の山越に紅葉のかけに鹿

瓜生山紅葉の中に鳴鹿の聲はふかくもきこえけるかな

宇治の網代にて

紅葉はの流るゝ川はぬは玉のよるそあしろの色はみえける

秋くれは移ふ色のこきからに萩の下葉をみるそ露けき

秋の野はから紅になりにつり鹿ふりいてゝ鳴そめしより

まねく共たのみける哉花すゝき風にのみ社まかせたりけれ

棹鹿の音に鳴そむる秋はきを折てそみゆる人のこゝろは

人の許にをみなへしを植て

我宿にうつしうゑつる女郎花秋のかせさへあたらしもせし

宇治のあしろにて

水上に紅葉ちるらしうち川のせゝさへふかくなりまさる也

人のもとへやる

花すゝき風に亂るゝ夕くれそあしかりけると思ひしらるゝ

いつとなく時雨の空に秋くれは物おもひそふる事多かる

六月に萩の下葉をみて

さきたちて萩の下葉は色つきぬをくれて秋のいつこ迄きぬ

朱雀院御屏風にはらひする所

おほぬさにはらひやるとも此川の神はしるらんふかき心と

三宮にこちまき奉るとて

木かくれて五月まつまの時鳥忍ひてなけと聲つきぬへし

歌合に
卯花のかけにかくれてけふまでも山ほとゝきす聲は惜まむ
今よりは聲なをしみそ時鳥さつきまつまのほとそあるらし

和歌所にて

さくら花をしむに年の老ぬれは恨みてすくすをりそ多かる

三宮御息所子日若菜を奉る小松

かた岡の子日の松を雪まより心ことにもけふそひきつる

また

霞たつ野への若なをけふよりそまつの便りにちよは摘へき

同おとゝの北方おとゝに若菜まいり給

浅みとり野への松引子日してつめる若菜は千世そはるけき

子日承香殿女御

君ひかて子日の野へも老ぬるを何をまつとか世をは盡さん

人の子うみたる七日夜に

かねてより千年の影そおもほゆるまた二葉なる今年生の松

人の子うみたる七夜

雲井にも今そまつらんあしへなる聲ふりたつる鶴の雛とり

冬の夜のなかきを送るほとにしも曉かたの鶴の一聲

物へいく人にこうちきぬはてやる

此たひはえたにぬひあへす唐衣たつにとまらぬ涙ならぬに

年毎の春の別をあはれとも人にをくるも人そしりける

物へゆく人にきぬとらすとて

別れちの草葉の露もはらへとてやかてかはかぬ衣をそやる

同しくはきぬに心もたくへてん涙のとまるものならなくに

道露ははらふ計のから衣かけてもうすき心とな見そ

みそきつゝ別るゝかたの川浪の立かへりけん程をこそ思へ

袖の上にかつしら露のかゝりける別るゝ道の草のゆかりに
別れては思ひ出よと朝ほらけ露けなからもぬるゝころもそ
いかなれはつけても人の別れけん深き心のおくれさりけり

その所にて人の別ををしむ夜

よそにても君わすれめや百年のおのかさまくをしむ別を
惜まねと我みのいける程は猶おもひもしらすなからふる哉

はらからのしつむよしよめりけるに

君をたに浮へてしかな涙川しつむ中にも淵瀬あるやと

ふくにておやをむかへてかへるにはやう川を渡ると

おとにきく淵せの川をたちかへり悲しき瀬をも渡りぬる哉

正月六日鶯のはつねをきゝてはらからに

鶯のはつね計を聞ゆる春のいたらぬところくにおほ磯の岸にきよする白波の打みて歸るほとはまさらし

わすれたる女の家に雨やとりしてゐたるを今はこゝ

にかといひたり

古里は雲の外に飛かりをよそなる人のかへるとやみん

うき事そまたしら雲の山のはにかゝるやつらき心なるらん

深山木のこりやしぬ覽と思ふまにいとと思ひのもえ増る哉

はかもなき跡とみなから嬉しきはいくら計りの涙いつらん

煙とそうき世の事は成ぬへき空にわかるゝ我なとなら

神な月しくれにそひて紅葉はのふるもかひなき物にそ有ける

春風になひく柳のいとよはみ心ほそくもたゆるきみかな

うき事を空にしりては白雲のかひなき山にかゝらましやは

秋の野の草葉をみれはおしなへてうきみの程に置る白露

わすれ貝よせもやすると佳吉の岸のわたりに目を暮しつる

思ひやる夢ち變らぬ物ならはおほつかなしと君もまぢみし
いひしらぬ思ひそいつる東雲におのか衣そ露けかりける
秋したる女をみて

みそきせしなこしのよゝり人しれず頼み渡るを人はしらすや

をしの聲絶す鳴つる初霜に心をさへもおかせつるかな

忘れ貝ひろふ計に住吉のうらみてわたるほとはへにけり

花さかり過も社すれ娘部志句ひて風にまつなひかなん

吹かせになひく物かは女郎花露の心もおかせせならん

きえぬへき露の我身も言の葉にかゝれはとまる程悲しき

忘れぬ心を君にとゝめてん今はかきりにおもひなりとも

煙とも雲とも今は成ぬへしつれなき人はよそにこそみめ

おもふ事いはてやみなは山城のとはに苦しみとやなり南

かく社はあひみる事のかたからめ覺束なきは如何せよとや

から衣しほる計に成にけり涙も雨も降てきゆれば

人しれすふりかゝれともから衣涙にのみそあらはれぬへき

末の松まつ人をのみ頼みつゝ我をは波におもふ成へし

よにもにす物思ふからに苦しきはおのか心のしわきなり梟

世のうきも人のつらさも忍ふるに戀しきにこそ思ひ侘ぬれ

いせの海のおまの濡衣きぬ人は別ると思へは残らさりけり

忘るやとしはしはかりも忍ふるに心よはきは涙なりけり

いとゝしく物おもふ事の増る哉いつ我戀のやまんとすらん

戀侘てみのいたつらに成ぬとも忘るな我によりてとなら

心にも哀かなはぬみなりけりかくてもいける我みと思へは

けさこそは別れてきつれいつのまに覺束なしと思ふ成らん

あひみてもちゝにくたくる玉しひの覺束なきを思ひ起せよ

あひみぬにしぬへき物としりぬれは心をさへそ殺し果つる

風吹ははこねの山の玉ますけなひきて我に心とゝめよ

大井川おせきの波になる瀧はおのか上こそ悲しかりけれ
いひしらぬ思ひのみ社勝りけれ行先いかてましてまとはん

住の江の浦みつへくそ思ほゆる鹽のひるまの今はなければは
 涙川えもせきあへす成ぬれは今はかきりとおもふ成へし
 雨ふれはつねより増る澤水と聞しも君かなみたなりけり
 心をもかつはわりなしと思ふ哉いつのよにかはもえは歸覽
 雲かくれ過行月のよもすからおほろけにては歸るこゝろか
 夏衣うすき袂に落かゝる涙はしはしとまらさりけり
 こりすまに猶もかへるか玉ほこの道の行衛にみゆる物哉
 心をそならはし物といふなれとかた時のまもえやは忘るゝ
 住よしの岸によすなる忘貝せめて戀しきけふそよすなる
 恨てもかひなき物としりぬれといきてかひなき我身なり鬼
 夏衣いとゝ涙にそほちつゝおほしきこともいはてきにけり
 戀しとは事をもかへぬ頃なれはいひし昔はのとけかりけり
 白雲のしらぬ山ちにかくれなんかゝる浮世の處せき身に
 我なからわりなき事はしられけり今夜計はのとけからまし
 おとにのみ聞わたりつる衣川たもにかゝる心なりけり
 いなり山やま下水を結びあけて君さへかけにならしつる哉
 かへし

山川の流るゝ水のはやければむすふ計のかけもとゝめし
 又かへし

あかすして別るゝけふはむすふ手の雪ならねと濁らさり鬼
 賀茂にて人に
 みつかきのよそになるとも夕禰かけても我を思ひわするな
 ゆふ付の鳥につけても忘れしを悲しきおやは君はのこさぬ
 雲まよりはるかにみゆる白雪の山ちをいかて越てきぬらん
 今はとて別るゝ袖の涙こそ雲の上より落るしら玉
 山たかみ嶺のしら雲ふりはへてかへると思へは物うかり鬼

君こふと我そ流れていはるへき涙の川のうきしつみつゝ
 いせの海になこりを拾ひ飽るあまも物思ふ事はえしも増まし
 いかならんと思ふ心の疑に恨てかつはゆゝしかりけり
 むすめは京にておやは人の國にあるに
 めに近くふゝきにまふ玉しひをいとゝ遙にたのめつる哉
 朝ほらけ歸るまもなく降雪に道の行衛もままとひぬるかな
 人の國なる女に

里遠みいかにせよとかかくのみは暫しもみねは戀しかる覽
 行ききに思ひしりけん秋霧のしはしもみえずまふ物とは
 常よりも物思ふことの増る哉むへもいひけり秋のゆふくれ
 よそにてもなひかさらめや人しれす心を春の風につけとか
 わひはてぬ今は限りのみなりけり生て歸覽ことそゆゝしき
 うしとてもかつもきえなてふる程に我みは雪に劣らさり鬼
 よもすからおちかゝりつる草枕涙のかゝるたひもありけり
 よの常の思ひならすと我戀を君にはいかてことにしらせん
 限りなく頼むにのみやつれなきとほに出てのみかつは苦敷
 思ひつゝへぬる月日の程よりも忍ひ兼つる我にやはあらぬ
 風吹は入江にさばく蘆鴨のたのむかたなくなりもゆくかな
 みなせ川流れてとまる水くきのみえぬ絶まは涙なりけり
 はつ雪にかくれてみえぬ跡よりも覺束なくて程もふる哉
 清水の山ほとゝきす聞つれば我故里の聲にかはらぬ
 えそいはぬ我は片邊の田鶴なれや知人なしに濡れて年ふる
 秋霧のはれぬ思ひにまとはれて鴈の羽風におとろかす哉
 いひそめぬ程はかりこそ池水の深き心もつゝみこめつれ
 虫のねの数そまさ覺おなしは君かまかきの露にたになけ
 さゝかにのいかにせよとか我戀の頼もしけなき空にしもふる

君こひて露の命のきえかへりほとをたになとまたす消ぬる
住よしの岸のしら波袖ひちて今はいふかひなくそ成ぬる
いひはなつ君にしあへは火澤のいけるかひなき身をそ恨む
いひそめし池の水くきたゆれとも深き心はわすれさりけり
今そしる馴ての後もから衣袖に涙のかゝりけりとも
君こふる夢の玉しひ行かへり夢ちをたにも我にをしへよ
ゆふ月の鳥の一聲明ぬれはあかぬ別れを我そなきぬる
藻鹽やく蜚の焼火の下にのみ燃つゝからき我にやはあらぬ
みをうみにおなし涙はかゝらしをつきす袂もおちかゝる哉
中絶てあまたの年に成ぬれは今はかひなしみをそうらむる
戀しなは今夜もあすもしらぬみをいける程に心とゝめよ
涙川みもうく計なかるれときえぬは人のおもひなりけり
疑に猶もたのむかいせの海のあまのたくなはくりかへしつゝ
ひたちなるいかこかさきの忘貝ひろふかひなき物にも有哉
飛鳥川人たのめなるよなりけり渡りそめけん我そくやしき
同じくは我みを露となりな南きえなはつらき言のはもなし
みのうさにおもひもあかし浦風にあまの歎きはいつか絶へき
住よしの戀忘草たね絶てなきよにあへる我そ侘しき
まとひつゝ幾世へぬ覽かほ鳥のみえし山ちの猶そはるけき
侘ぬれは曉かけてかへりたる鳴のはねかき我そかすかく
思ひつゝ獨ぬるよのから衣夢ちにさへも露はおかしを
三輪の山のしるしの杉も枯はてゝなき世に我そきて尋つる
なき人のゆきけん人は尋ぬとも此世の事は行てをしへん
いせの海にあまの釣舟春風になりをたかみ何かわふらん
霞たつ三輪の山もと人しれす春のなけきを我につまする
雪降はまつそ悲しき三輪の山しるしの杉のみえしと思へは

朝ほらけおき行露は消ぬへしいつか暮とたのみける哉
君こふと涙にぬるゝから衣かへすほとなくわれそ悲しき
ひさしくこすとしてふすへてこぬ人に
こむらさき君かむすひし元結のちり打拂ふほとまてやこぬ
君こすは我もかへらし神な月しくれにさへやぬれてかへ覽
かりそめの心くらへにあふ事の命もしらぬみとはしらすや

父人に

つらさのみまさり行哉思ひやる夢の玉しゐいかにつくらん
草わかみ植て別れし娘部志わかみぬほとにかれにける哉
君たにも我たにあさく成はてはおもはす山に入ぬはかりそ
ひとりねの餓しき旅の草枕草のゆかりにとふ人もなし
君こふとおもふ心のたひよりも今はおろかに成ぬへきかな
夢にてもあふと見えなん戀わたる涙の川は淵せあるやと
白玉か露かとはん人もかな物おもふ袖をさしてこたへん
忘れたる人にいひやるとて

あしろ行宇治の川波流れてもおおのかかばねをみせんと思ふ
かへし

古はくらけの骨はみもしてんあしろのひをはよるかたもなし
朱雀院にて

霞立野へ吹かせもさむからて我みのよそに春はたちぬる
春くれはなく鶯の一聲をこかくれてこそきかまほしけれ
散ほとは雪とみゆれと梅花かせに匂ひてきえぬたもとそ
かたらふ人の殿物物のうらのいたくやれたりけれは
年をへてなれる中をはから衣うらみてかへすあはれなり鬼

人の子になれる女に物なといひてかへす道にやすむ
所にていく野といふ所より人をかへして
別にし程に消にし玉しゐのしはしいくのゝ野へにやとれる

群書類從卷第二百四十九

信明集

和歌部百四家集廿二

亭子院うせさせ給ひつる御ふくにて

去年の春えたにて折し藤のはな衣にきんと思ひけんやは
又の年御はてに

故里の梢の紅葉ちりはてゝおのかちりゝなるそかなしき
(るわひしき)

村上の御時に國々のなたかき所々を御屏風に繪にか

かせ給て春日野
春日野の野守と身をもなしてしか待らん春を我物とみむ

三熊野

うき事も山道しらす尋ねこしわかみくまのに入やしなまし

長柄橋

心たになからの橋はなからへん我身に人はたとへさるへく

難波

我戀は難波の芦のうらなれや波のよるゝそよときゝつる
(つゝ)

すま

なには江て藻鹽のみたくすまの浦に絶ぬ思ひを人しるらめや
(やい)

この歌つかうまつれとおほせことあるに奉る

渚岡

うちつけに渚の岳の松風を空にも波の立かとそきく

佐保山

さほ山の祢の紅葉ちりにけり戀しき人を待とせしまに

田子浦

我戀は慰めかねつするかなる田子のうら波やむ時もなく

しかすかの渡

ゆけときぬくれとゝまらぬ旅人はたゝしかすかの渡り也梟

つくはやま

年をへて君に心をつくは山峯は雲ゐにおもひやるかな

しら山

むかしよりなに降つめる白山の雲ゐの雪は消るまもなし

ふたこ山

なかし世に君とふたこの山のねはあく共しらぬ朝霧をたつ

よしの山

行年の越てはすくる芳野山いく萬代のつもりなるらん

あさかの沼

花かつみかつみる人の心さへあさかの沼になるそわひしき

なこそ其の關

なこそ世になこそ其の關は行かふと人もとかめぬなのみ也梟
(やい)
こと御屏風の繪に紅葉散たるを見る人々

はのくゝと有明の月の月影に紅葉吹おるす山廬のかせ

朱雀院のわか宮御もきの御屏風のふに梅のはた山里
の家にある所

色もかもまつ我宿の梅をこそ心しれらん人は見にこめ

おなし所雪ふる

ふる雪の下に匂へる梅のはなしのひに春の色を見えける

おなし花折女を男見る

梅の花折たもとをも見つる哉かを尋ねてもとはむとそ思ふ

初鴈

待人にいかてつけまし雲の上にはのかに聞ゆはつ鴈の聲

たきおちたる所

紅葉はの落そはりぬる瀧つせは秋の深さてそこに見えける

内裏の御屏風の繪に子日したる所

行かへり野へにこたかき姫小松これも子日の二葉なりけり

子日して歸る家ちのばるゝとゆくさき遠くおもほゆる哉

天曆八年中宮七十賀御屏風のれうの和歌なきさの岡

和田津海のなきさの岡の花すゝきまねきそよする沖つ白波

芳野山

よしの山雪には跡も絶にしな霞を春のしるしなりける

おほあらきの森

時鳥さなくをきけは大あらきの森こそ夏のやとりなるらめ

うきしま

うきこともきこえぬ物を浮嶋は所たかへのなにこそ有けれ

石上

年をへていひふるさるゝ石の上名をたにかへてよをへてし哉

ふしみの里

行春に伏見の里とつけてしかあはまくほしみ立やとまると

高砂

すむ鹿のなかぬ時さへあやしくも聲高砂ときゝわたるかな

をはずて山

秋の夜のあかつきかたの月みればなは捨山を思ひやらるゝ

こゆるきの磯

風吹は玉もりいたすしら波のよせすともなきこゆるきの磯

又こと御屏風三月

鶯のなきかへる音をしるへにて春の行衛をしるよしもかな

六月

水上にはらへて流すあきの葉をおりなかくしそせゝの白波

〔ことい〕

芦のねのおふるあら田を打かへし下にて思ふ心あるらし

〔そい〕

あちきなく思ひこそやれ七夕のまれにあふらんよるの下紐

もみち

ちりぬへき紅葉の色も月影も山端にこそとまらさりけれ

〔のい〕

紅葉折るなりもかはらていつのまに降しきぬらん峯の白雪

霞ふる

峯の山への榊葉にゆふかけてこそくれはかへらめ

志賀の山

われたにもけふ珍らしく見る山にあまたの年も越にける哉

山路には

絶て水たになかりせはいとゝ涙をそほちまきまし

そほつともこゝに暮さん山のぬに戀しき人の影やみゆると

朱雀院うせさせ給てける時

かなしきの月日にそへて今よりは我身一つにとまるへき哉

御いみはてゝ人々出ける日

しくれつゝ梢はこゝにうつるとも露にをくれし秋は忘れし

式部卿宮教じ出家し給ける時御とふらびに小野宮殿

まいり給へるに御あるしなとあるついでに

うれしきも哀も深き春なればわかれかたきも見ゆるけふ哉

敦慶のみこのむすめ市勢に

年ふればわすれやせんと思ふ社あひみぬよりも我は侘しき

かへし

なからへん命もしらぬ忘れしと思ふ心は身にそはりつゝ

うしと思ふ心のこゆる松山はためしにもかひのなくそ覺ゆる

かへし

秋といへば色もかはらぬ松山はたつ共波のこえんものかは

をとこ

こりすまにたゆるまもなき水藻のなく／＼かける文にそ有ける

又なとこのかへりて

ちはやふるかもの葵をいのりつゝかさして君を頼みける哉

かへし

千早振かもの葵をかくるよりいとゝうきてもおもほゆる哉

をとこ

神代よりいむといふなる五月雨の此方に人を見る由もかな

かへし

五月雨の此方かなたも逢事はいつもいむとそ人はいふなる

又かへし

何處にも思ひもいらんよと共にいまぬ絶まの中もなにかは

をとこ

こよひれてあふみへゆくとみし夢の悲しと袖にふる泪かは

かへし

ほともなくやみぬる雨にたとふるはいかに悲しき涙なる覽
限りなく悲しと人を思ふには物思ひますものにそありける

五月雨は君にや有けん子規人しれぬ音をこゝらなきつる

かへし

いかてかはきゝとかめつる時鳥人しれす社ねをはなきつれ

をとこ

人やりにあらぬ事にもあらなくに身もいたつらに成ぬへき哉

かへし

身をすゝ思ふと見しは徒になるへき事にかこたれもせん

又なとこ

僞をたかならはして限りなき我まことをもうたかはすらん

かへし

世の人のおなし心にあらはこそみなおしなへて僞もせめ

又かへし

たまさかに誠やすると君ならぬ人してよをもしらせてし哉

又

身の上に人の心もしらぬまはことそ共なきれなのみそなく

かへし

君たにもことそともなき涙をはいかに知てか哀とおもはむ

又

あくる迄と思ふ時たにある物をなく／＼とくも返るへき哉

かへし

我思ふ心もまたきかへるまもふかくはあらぬ中にそ有ける

けふの内に否ともう共いひはてよ人頼めなる事なづれそ

かへし

今といひてかりの心も見るへきをかひなき人に頼めつる哉

又

かくなんと人しるらめや行道も心とゝめておもほゆるかな

かへし

行道もとまらはとまれ知とてもやるへき事の心ならねは

又

早く此かみの十日もすきな南はつかにてたに晦日なりやと

かへし

廿日にて晦日ならん共思ほえす後やよそかにな覽と思へは

又

涙とも雨ともわかす大かたにわれはふるとも人はみくらむ

かへし

泪ともしらぬ先よりむへ社は常よりとくもなめられけれ

又かへし

しらねともおなし心になかめける事はかりなを哀とはきく

又

契りけん日をも過さし七夕は我ことかくやおもはさりけん

かへし

七夕の契りけん日は過す共たとふへしやはこともゆゑしく

又かへし

ゆゑしとも思はさりけり七夕は忘れぬ中のあらまほしさに

又

數ならぬ心の内にいとしく空さへゆるす比のわひしき

我をこそ世にみくるしく思ひしか人はいかなる心なるらむ

又かへし

あひもみすことなはいはん方もなし誰つけそめし病なる覽

かひもなき君によりつくたくれは心もなくて成ぬへき哉

又

うきまさる我身もしらてよそにのみ聞し昔にかへしてしかな

たのむる事なくはしぬへしといひたる返事に〔女イ〕

徒にたひ／＼毎にしぬといへはあふには何をかへんとす覽

かへし

しぬ／＼ときく／＼たにも逢みれば命をいつの爲に残さん

はしめてのつとめてかへりたる女

はかなくておなし心に成にしを思ふ〔かイ〕ことは思ふらんやは

かへし

わひしさをおなし心ときくからに我身を捨て君そかなしき

ちかつきてたとこ

よもすから風も涼しく吹ころは心ことにてまたしとやする

又

波高く松の隠れるよにやあらん頼めて行そなひかすといふ

かへし

末の松〔やま〕むかしよりまつ君をおきて波高く共さしと思ふ

かゝみかりてかへすとてしきのしたにかきつく男

曉のわかれな／＼のかゝみかもおもかけにのみ人のみゆ覽

人のゆるさぬ中にやありけんをとこ

そめて思ふ色は深きを口なしのいとはぬ色と人やみるらん

いきたるにあはねは

あたらよの月と花とをおなしくは哀しれらん人にみせはや

かへし

君ならて誰にかみせんうめの花色をちかをもしる人そしる

内へいそきまいりたるつとめて女

いそきけん心の中をしらぬ哉もし百敷に床やさたむる

かへしありしとか。

又女

ありしよりつらき處も優らなんかひなきよりは絶てやみ南

山里にある女もさてあるに

我ことや人もいふらん山里は心ほそさそすみうかりける

おなし女のふくなるころ絶まかちなるるうらみて
なき人もあるかつらきを思ふにも色わかれぬは涙なりけり

おなしころいきてたゞくにあければなとこ

東雲の明さりしかは夜もすからま木のとよりそ立歸りにし
かへし

夏の夜もまきの板戸も徒にあけてくやしくおもほゆるかな

絶てのちきたるにかゝみないたしたれば男

あけにけり影めつらしき増鏡ふたよりみよりね社なかるれ

かへし

心からみさりし影はますかゝみみよりなく共今はかひなし

おなしころ女

思ひやる心もよにもおくれぬる野にも山にも行とみえつゝ

かへし

世とよにまとふ心や人めには野にも山にも行と見ゆらん

こと人●がよふときゝてなとこ

年をへて我こそ下に住の江の松をは人のうへときゝつゝ

かへし

心にもあらてうき世に住の江の年ふる松をみぬはくるしき

女小野の宮にまいりてさふらふなきゝつけてさふら

ひにぬて月のあかき夜人していひやる

戀しさはおなし心にあらすともこよひの月を君みさらめや

かへし

さやかにも見るへき物を我はたゝ涙にくもる折をおほゆる

行平か三君をたえたるころ女

わひつゝもこの世はへなん渡り川後の淵瀬を誰にとはまし

かへし

此世をはおひもかつきて渡してんのちは初の人をたつれて

閑院のおほい君いとおもくわつらひておこたれる比
いかてあはむなといひてをこせたる

辛くして惜みとめたる命もてあふ事をさへやまんとやる

かへし

諸共にいさとはいはてしての山いかてか獨こえんとはせし

さてきたるにえあふましきやうありてかへりてつと

めて

曉になくゆふつけのわか聲に劣らぬ音をそなきてかへりし

かへし

あかつきのね覺のみゝに聞しかは鳥より外の聲はせさりき

人のふみをえてかくせは女のうらむればふみのうち

にかきて見する

これはかくうらみ所もなき物をうしろめたくは思はさら南

女のもとにやる

秋とたにおもはさりせば人しれすしくるゝ事を何に告まし

いひ初ぬとはなかくありにしをしつ心なき昨日けふ哉

返事にかみをつゝみてをこせたれば

わりなくてやみやしなんと侘つるに助くる神をるる嬉しき

またしらす惑ふ心にいとしく覺束なきはわびしかりけり

返事にみゝす書をしておこせたれば

侘しきに戀に惑へる心にはそのことゝしもみえずそ有ける

はともなく消ぬへきよに白露の辛かりきとな思ひおかれそ

おとなしの山より出る水なれやおほつかなくも流れゆく哉
なか／＼に覺束なさの夢ならはあはする人も有もしなまし
人しれぬ思ひをすれは秋萩の下葉こかるゝ物にそありける
露はおけと我折宿のはきのえはかくこそ秋をしらす顔なれ
たいふの君といふ人にいひやる

思ふ事ありて久しく成ぬとはきくかきかぬかしりて知ぬか
有^{〔ひい〕}大弁なくなり給て人々いみにこもりて有ほとに

物をのみ思ふれ覺の枕には涙かゝらぬあかつきそなき
おとうとの許にひさしくあはぬころ

手すさひにひをけの^{〔きい〕}なけや有にけん戀しき人にあはぬ比哉
五月のせちにやあらんたいしたしかにしらす

限りなく思へる駒に較ふれば身にそふかけはなくれさり鬼
さくらの花をみて

年毎になをたに變は世の常の櫻とのみはいはすそあらまし

そてといふ女つかひたる人にその女につけていふ

人しれぬ我物思ひの涙を袖につけてそみすへかりける

二三日はかりあはぬ女に

思ひきやあひみぬ程をいつなりと數ふ計りにならん物とは

堀川のおとゝの宮の權大夫ときこえし時みちのくに
よりきこゆる

明くれは籬か嶋を眺めつゝみやこ戀しきねをのみそなく

大別松といふ人の出家したるいひやる

いかにして君か心にたちつらん小松の山のすみそめの雲

しれたるといはれたる人のうしのしりにたちてはし
りけるを見て人々のかれを題にて歌よまむといひけ
れは

あら牛のしたしの浦の床しさにとりてみつればはしかれに鬼

はせをば長谷寺やけたりときくころ

世中のたのみ所にせし物をはせをばかくややかんと思ひし

中務にしのひて物いふよ時鳥のなくなきゝて

今宵こそしての田長もきゝつらめ今は五月の空にしられん

かへし女

時鳥きゝわたるとも五月雨の空ことにたに人のなきなむ

しるや君しらすはいかにつらからむ我かくはかり思ふ心を

みるめゆゑ蟹にたれと娘部志けふは我にそかつきおとれる

御しやうしのゑにふかき山にうくひすの聲をきく人

あり
鶯のなくれをきけは山ふかみ我よりさきに春はきにけり

藤原義孝集

源修理のかみのいへにかたゝかへにいきてあるにま
くういたしたるつゝみかみに

つらからは人に語らんしきたへの枕かはして一夜ねにきと
かへし

あちきなや旅のやとりち草枕かりならすとて定めたりとは
あかすおもほえしかは人にかくなんありしこれか返

事せよといひしかはかくはいかゝとて
語る共たかなはたゝしななゝらぬ心のほとや人にしられん

秋のゆふくれ
秋はなをゆふまくれこそたゝならぬ萩の上かせ萩の下露

露たる星合の空をなかめつゝいかてことしの秋を暮さん
殿やみたまひしころいかゝと人のとひたるに

夕暮のこしけき庭を眺めつゝこのはと共におつるなみたか
うせさせ給にし御いみはてゝ人々におはしわかるゝ

日
今はとてとひ分るめるむら鳥のふるすにひとり詠むへき哉

修理のかみ返し
羽ならふ鳥となりては契るとも君わすれすは嬉しと思ふ

春人のよめといひしに
夢ならて夢なる事を歎きつゝはるのはかなきものおもふ哉

春かしらけつらせてみな人々よめといひしにうめの
花おもしろくある所を

春風のそらなるはとはうめの花梢こそなをうしろめたけれ
はるゝの花をあたにとみしものむ昔の人の夢こちする

人の許よりかへりてつとめて

君かためをしからさりし命さへなかくもかなと思ひける哉
ものいひし女こと人に物いふときゝておほかたつれ

にみれともいはいはねはなとかへるやまといひたりけ
れは

かへる山さかゝしくもみえなくに何しか人の立留るへき
かへし

こひにのみ惑へる人の心にはさかゝしくもみえぬなる覽
七月はかりに月のあかきにもいふ人のもとに

忘れてもあるへき物をこの頃は月よゝいたく人なすかせそ
ことゝもおもはぬ女のものいひかけしかは

梅かえに雪もつもらぬ春なればこの下露やつれにつゆけき
うちわたりにて物いひし女のたえてのちうらみけれ

は
あふ坂や旅行人もしのはらにひと夜は宿りとらぬものかは

左衛門督の命婦の許に權中將となりのりて宮のおはし
たりときゝてやる

あやしくも我れきめをきたる哉み笠の山を人にかられて
おなし人にひさしくたえて

忘るれとかく忘るれと忘れすいか様にしていか様にせん
あふきにうめの花のかれたる所なとあるにかきつく

年毎にとまらぬ花の色よりもかれたる野へをみるそ悲しき
五節のころさしくしとりたるかへすとて

人しれぬ心ひとつを歎き箇つけのなくしをさすかひそなき
かへしいかなる人

かき分て我になさしを美しとおもてゝにかつはいひつゝ

左衛門藏人のなかうとかりければこくれうのおかし
きなつゝみてそれにかきつく

ならされぬかはそのくれときゝ乍ら宵あか月と立そ苦しき
とをさしなから物いひし女に堀川の中宮にて
思ふ事なるとか聞しかひもなくなとうちとけぬよはの白波
かへし

うちつけに思ひ鳴門の浦もなくとけはあたる波も社たて
よかはにてさくなむさうなみて

紫の色にはさくなむさしの草のゆかりと人もこそみれ
櫻花やまにさくなん里のにもまさるときくをみぬか悲しさ
ふくなる比大夫君人のめて人の國よりのほりたりと
てもものへゆく道なれはいひいるゝなとこもふくなり
ける

こひしとはおもひし物をふち衣きたりときけとゝはぬ心よ
なとこあるほとにて返り事なし。

堀川の中宮に雪のふりたるつとめてれいけい殿の
ほそとのゝかれたるすゝきに雪ふりかゝりたるを
ものもつかさしてさしいれて弁の少將のきみたてまつ
れ給ふとてそれにむすひつく

まれくかたにそゆきとまりける

とかきてをこせたりければ

ときすきてかゝるすゝきのみなれとも

かきてをこせたり

定めなく風もこそふけ花すゝきいかにせんとか結ひをき劍

またかはらけにかきてかみにつゝみてうちわりてと
らせたれば

さためなく風のふくよは花すゝきやらん方なき物を社思へ
またかへし

あはれにも思ふなる哉花すゝき秋こそうけれ春もしらしな
一品の宮の大はん所にてかむし手かひしかは山吹の
花にいとおかしうならしてよふくろにさしいたした
りければこしにひきつけてうめつほのかたにきんた
ちひきつれていきて花をいろゝくにこきいれてかう
かきてなかにいれたりける

嬉しやはこれをみつれとあちきなく花に慣たる心のみして
またかへし

またなさは誠の花に劣らめとあやしや春のときならぬみよ
またかへし

時ならぬみにもいかてかなりぬ覽春に後るゝ花もありやは
またかへし

春は花ちるやちくさに思へとも言のはしけしかくてやみ南
藤侍従五月五日まるなるさうふやるとて

駒たにもすさめすといふ菖蒲草かゝるは君かすさひとそきく
かへし

あやめたにかゝるは人にひかれけり汀に移る君やなになり
狩衣のひもなとりてむすひめなとりかへたりしかは

我ならぬ人にはまれと結ひをきし紐いつのまに打解けぬ覽
九月九日きくの露をみて

移ろはぬ菊に結ひなく露の色はとけぬ霜かとなりてみゆ覽
いし山の峯のもみち

有明の月のはらにて山端のふかくも空にしりにけるかな
行方も定めなき世に水はやみう舟をさなのさすやいつこそ

左衛門のないしときめいしころ山にのほりていひおこせたりし

空たかくときめく月と聞しかは我も雲井にきてそなかむる

堀川の中宮の内侍のすたれのまへにものいふほとに

雨の降かゝれば女のつけゝれは

侘ぬれはつれなしかははつくれ共袂にかゝる雨のわひしき

またおなし所にたちよりたるにまらうとのありしかはたちなからかへりてまたあしたにうりにかくつく

是をみよ一夜はひとめ辛かりきたち煩ひし瓜にやはあらぬかへし

たちわひてはひかゝりけるうり葛ならし顔にや人のみて劔

中宮の大夫うふやの七夜むかしをこひ給て

ちゝにつけおもひそ出る昔をはのとなる共君をいふへき御かへし

君かかくいふにつけても人しれぬ心のうちて（いのりするイ）

藤侍従すけに物いひにたちよりたるに月もなきころ

なればいとくらしやなといひたるにやみのうつゝは

さやかなるといひたるに

思ひつゝまゝむ程にみるよりもかゝる現をはかなかりける

女の許に

命たにはかなゝもあらはよにあらはと思ふ君にやはあらぬ

また女

いつまての命もしらぬ世中につらき歎きのたゝならぬかな

かへし

みなつみてなかゝらぬよなしる人はひとへに人を恨みさら南

修理のかみこれたゝわかなすひわかうりをおこせた

りらい月されすけの少將むこにとるへしときゝてのころ

御園守答へたにせよつきたゝはかの言も皆なりぬへしとか

四日のよかへしあり

何事もなる共なしに瓜つらの名にのみたゝん事のあやしき

またかへし

あやもあれあやもなくまれかの瓜の敷ならぬみようやは世中

五月五日時鳥の聲せすとて

こよひしもきかてやゝまむ時鳥のちになく共定めなきよな

また女をたつれしに

つみふ（ゆイ）かき物にそ有ける女郎花たつぬる人を唯にあらせよ

女御殿のすのこになかひつにほそちを入ておかせ給

へるをゆふたちのすればみかうしおろしたるまされにうせたれば

盗人はほそちをみても雨ふればほしうりとてやとり（かくすイ）收む覽

いし山にまうてゝかへる河つらにとりおほくたては

さよ深くたつ河霧もある物をなくゝきぬるちとり悲しも

殿うせ給て入講し給ひしついでに

君たにも同じぬれとてのりの雨のふる心をもたつれつる哉

されはかへし

のりの雨も涙にわかす神無月はてやしくれやいとゝなか覽

權大納言殿にはなみにいきたりしかはさくらの花ち

りたりけるをみて大納言

櫻花またみのほとに散にけりのちの春たに心あらなん

御返し

この春も君をはまちつ櫻花かせの心のなきにやあるらん

おなしへたうひめの別たうはなればまたにこゝろや
すく仁和寺のはなみんとさため給へる日風のいたく
ふきてとまるよしの給へるに

あまつ風吹みたれぬる春なれば心のとかに花もみ^{てい}るまし
御かへしにへたうはなれ給ひぬるよしをいたうあは
れかりきこえ給ひて

吹とめぬ風そかなしき春のよの色のつれなきこと^{つれなきことをしるこい}を思へは

殿うせ給てまたのとしの春あめのふる日

春雨としにしたかふ世の中に今はふるよと思ふかなしな
八月はかりしのひたる人にあひて夜ふかくかへるあ
したにすゝきにつけて

はなすゝきむすひなきつる袂ゆへ露も心のとけすみえつる
かへし

ほのむすふのくさかくれの花薄とけてや秋もすきんとす覽^{をばてい}

物いひし人にうりのありしなとりて

たつ事の物うかりつる瓜なれとのちやならずと思ひぬる哉^{んい}
かへし

仇なりとないたつ君は瓜生のゝかゝる辛さもならさゝり鬼
はゝうへの東宮にさふらひ給しにいとまにてひさし
うまいり侍らさりしかはなてしこにつけてたてまつ
りしはゝうへ

よそへつゝみれと露たになくさます如何はすへき撫子の花
御かへし

しはしたかかけにかくれぬ程は猶うなたれぬへし撫子の花
これはのちにかきそひ給へるとそ。

もかさやみ給ひてしぬへき心ちのする哉しぬるかさ

なりともしはしはとかくなせを誦經しはてんの心は
への女御のおまへにきこえたまひけるをわすれ給て
とくなさめ奉り給ひてければはゝうへの御ゆめに
しかはかり契りし物をわたり川かへる程には忘るへしやは
またの年の秋六君の御夢にこの君の御ふみありける
に

きてなれし衣の袖もかはかぬにわかれし秋になりにける哉
うせ給ての十月はかりにせいみむそうつ夢にちゝ
のおとゝのおはする所にものをへたてゝあにきみと
おはするにあにの少將はものおもはしけにてしやう
のふえをふき給をみればたゝ御くちのなる也けりな
と母上のあに君よりもこひきこえ給を御心ちよけに
てはおはするときこゆれはいとあはすおほしたるけ
しきにてたつ袖をひきとゝめてかくの給ふ

しくれとは千草の花そ散まかふなにふる里のそてぬらす覽
むかしは契りき蓬萊宮の中の月今はあそふ極樂界の
うちの風に

心にもあらてあひみぬ年月をけふきて花とつみてける哉
かへし

移ろはぬ心なりせは年月を花とつみても見えすそあらまし

藤原伸文集

けさうしける女のしにければいとかなしうて女のは
 らからの許にいひやる

なかれてと契りしことは行末の涙のうへをいふにそ有ける
 旅の道行人みのゝ國ときの郡といふ所にやとりて

むすひをきし人やとくらん下紐のときの郡に旅れしつるは

忍ひてかよふ人の許におほかたのまらうとにていき
 たるに雪のいたう降ければ忍ひていひ侍る

はるかにて忍ふる事もある物ないかなるまより行かよふ覽

女の許にこんとての夜はこて後の夜來るにふすへて

あはねは

ことわりや今宵は罪のそこにはやいれよふし南ざり所なし

四條大納言前裁つくるはせ給けるに心なき人のなて

しこなすきすてたるに

すき物を花のあたりによせさらは此常夏にねたえせましや

大風のまたの日家の外よりもいたくこほれたればち

かき所なる四條の大納言殿にきこえたる

我宿は野分のほかもとよりあれまさりたる心ち社すれ

御返し

隣よりあれまされりといふなるはいかなる風かみをは吹覽

花の枝にふみのあるをえ給ひて

春のとふ心つかひを尋ねれば花のたよりにこてふなりけり

所行殿にさふらひける人なきたらひけるかみそか人

をもたりとてまかりたりしかはまとひかくしてける
 にくつのありけるをみてまへのやり水に生たるれせ

りをとりて

澤水にあらはれにける忍ひれをからせりけるはうき心哉

みたけさうしすといは山にこもりたるに女藏人ま
 うてあひてとはれ侍ければ

何處へも身をしかへれば雲懸る山ふみしてもとはれざり鬼

かへし

鳥のれもきこえぬ山にいかてかは雲路をわけて人の通はん

ある女臨時の祭に車に乗なからきてたゞいれ入けれ

は小家にてえかくれあへす夕日のさしていとあらは
 なれば

思ひきやかけてもかくはゆふ襟けふの日影にまはゆからんと
 かへし

ゆふ禪神にかけても誓ひてん夕日にあてゝみてはあらしと

同じ人のふるきめのこひたるに

花さかぬ朽木のそまの柚人のいかなるくれにおもひいつ覽

絶ての比所行殿のたしま

かく計りくるに苦しき棒繩を只にくたしてやまんとやする

三條の大殿にてゑちこに物いひてあくるまであるに

なてしこに露なとをきたる扇をかれみ給へとてさし
 入たれば

思ひしる人にみせはや夜もすからわか常夏におきぬたる露

うりたるかなへをこよなくこひをこしたりければう

る人

ちうこくの鼎にもこそにえ給へおほくのせにな落し給へそ

かへし

かうよりもうるこそ罪は重けなれむへ社かまの底に有けれ

とれりのそのに男ありてとれりのうれへまさらんと
いふときゝて

古はとれりのれやのものの語りかたりあやまつ人そあるらし
紀伊國の郡をよめる いと なか なくさ あまり

ありた ひたか むる

いと長さよはなくさまつ餘りありたえすひたかく室にいらはや
雪のふりたるつとめて院の御かゆのおろし給て哥よ
めとおほせられければ

白雪のふれる朝のしらかゆはいとよくにたる物にそ有ける
同じ人かうすけにもとすけすはうにくたる道にえと
まりといふ所よりいひをこせたる

えとまりに我きたりとはしられはや今迄君かみにこさる覽
かへしもとすけ

限りなきよりこを好む君なればかへりはみしにまさり也鬼
同じなか文堀川の中宮のおはしまさて後ひとくあ
まになると聞て少將の内侍の計に

數へつゝきても過つる世を背くうしろて共そ思ひやらるゝ
かへし内侍

そむきぬるうしろてよりも極樂にちははん君か顔を社思へ
又かへし

あか佛かほくらへせは極樂のおもておこしは我のみそせん
正月七日宰相内侍に

老らくも子日の松にひかれてやけふより若きなをやつむ覽
同人ゆきのかみのむすめけさうしける人に
とけかたき下ひもしても心みよ思ふ心のゆきのしまゝて

もとのめをやむことなき物に思ひながら又しる人お

ほかりけるにもとをはしのかたにて物語なとして曉
に歸たるにいたの上にさゆはかりおかれてひえにけ
りとてえしければ仲文

ことわりや下はけに社ひえつ覽君にしくへき思ひなければ
物へまかりけるに女にわすれ給なといま秋はかなら
すまかりかへりなんといへりければ

またすとも秋こさらめや初鴈の雲井になかん聲をこそ思へ
東三條院にてあはたの右大臣中宮夜人々花雪のこと
しといふ題をよませ給ふけるに

降まよふ花か雪かと辿るまにわか世のいたくふけも行かな
三條殿にてきんたうの宰相の八月はかりの月のあか
き夜前栽の花み給ふにおなし人

常よりもこよひの月はさやかなれ秋の夕もたとるはかりに
ある本に大りの宮やけておはしまし所なしとて一宮
にわたらせ給ひて又ほかへかへらせ給ふに白かれの
はちすにこかれのはくを露におきてめしゝに

思ひをける蓮の露の玉さかにかたみにかよふひかり共みよ
かうつけのかみにて下りけるに美濃國うるまのわた
りにて

行通ひきためかたきは旅人の心うるまのわたりなりけり
三條殿松かしつきつくるはせ給ふ野分にたふれてれ
をさかさまにてあるをまわりてみるに

その上は千世をもわかつ祈りこし松なくなるとやは思し
仲文藏人になりし時衛門の内侍にくしなかりてかへ
すとして

祈事にかくし叶はゝれくたれのおとろの髪も宥めてんかし

かへし

れくともよからぬ事はきく物か世にうるはしき神の心は
れせい院の御心ちのさかりにまひよらせよと藏人に
成しかはさいなめはいとたえかたししらぬ事なけれ
はなほいとたえかたしとて衛門の内侍に
追々は如何はすへきしらはまひ立まふへくも思ほえぬよに
かへし

あなさかな斯る事をや駿河舞君かしるへにたかへてをへよ
藏人にてやむことなき人のつほれを立きくにとのも
つかさしてたゝ今まぬりてといはせたる人ありしか
しはしありていとなれかほにうちたゝけはそれかと
てあけたるに入て臥ぬいとゝさらにえいはぬにから
うしてつほれ人をみつくて

雲かゝるさ山に生る松なれやねさして人にあひかたき身は
かへし

くつれゆく岸に生たる松よりもれさしあやうき心ち社すれ
宮つかへ人またこと男かよふときゝてひさしくいか
ぬを思ひ出てさとききたれば月あかきになかしま
水なといとおかしければとみにものほらてなかめぬ
たるに女なとかさてはといへは

比へはやこの中嶋のおきつ涙こすとはたれか恨みさるへき
此女のはらに女子のあるをさためなしと思てとはね
は

人しれすくちぬる物にさほ山のはゝそからちる木葉なり鬼
此女は但馬のもの也けり同所の式部の君といふとぬ
たりにきあひて思給ふやととへは式部人はいへは但

馬の君

我ははたせちに思はすと人心いひそとめつるしたに通はん
しもつけのかみすけあきらといひかはしたはふるゝ
とありてすけあきら

我頼むかさきのもととしるしからは過にしもとをかずしにあら南
かへし仲文

かさきをはかけすもあら南朝夕に宮のめ祈る己れなこひに
とて宮のめの所はしけしきけとてかすめてかきたり
めやみやにさふらふ四君かへし

たか月のいやゝ高き成まさはけすにはくれし宮のめの物
又仲文

宮のめのおろしにいへと幾許のかさ勝りてはあらしと思ふ
つくしに四わうし山といふ題をいとよみかたき題な
りといひけるを

老ぬ共さしてかくして入へきをしわうし山は顔にたまれば
殿にさふらひてすけあきらとふなせうようせんとて
さためてすさのみかにぬしはふなはいかにといひた
れはいまかひにこそはつかはさめといひたるにやる

めに近く我はをきてあふみ鮒かひつやりつといふは眞か
かへしすけあきら

つくまえの鯉はみゆると命をそかひつやりつるつるの郡に
かよふ宮つかへのさとのいへかひをきて尋れけれと
もえあはて後にいへは三輪の山もとゝきこえしとい
へは

三輪の山世の行末はいかなれば處々にすきたてりけん
女なくなりてななく比けさうせし人五月五日をこせ

たる

思ひやるよもきのやとはさびしくて涙のつまに何をかた覽

かへし仲文

けふしもあれ蓬の宿を問人はもしあやめにもな覽とや思ふ

かへし

菖蒲とは誰がかけ共思ふへき白きれなかみふきことなせそ

又かへし

昔よりけふの菖蒲は轉寢をいかにひかるゝ物とかはしる

女

ひきつれてればうきにこそみかくれめけふはかり

しまのかみとゆきのかみ少將になり給ふにまぬりあ

ひてかはらけとりてさすに

播磨瀉こなたかなたにく舟はかたほなりともおしむ我哉

大入道殿つかさをとられて又の年なりかへり給ひた

りし

去年は思ふ今年はみれば神無月しくれかはれる心ち社すれ

仁和寺の御はての日物いみにさしこもりてゐたるに

たて文にて法しわう子けふすくにぬましき御文なり

とてさしをきたるをみればくるみ色のしきしにあや

しき手して

これをたにかたみと思ふに都にはかへやしつらん椎芝の袖

後にきけはとうのわたりよりある成げりと聞ていみ

しうあやしかりけり同しことなれとかくこそはと思

ふ

惜まれは衣のうちにかけてみん玉のきすとやならんとす覽

かよひし女のあまに成にけるに

今はなをふところひろき衣手に人をはくくむ心あらなん

山里にかよふ人花みにいきしまゝに久しうこれは

櫻花みるとていにしほとふれは思はぬ山も思ひこそやれ

中宮御前よりいしをつゝみてこれは何そとてなけ出

させ給へり

苔むしていはほとならんさゝれ石はわが獨みる心あたらし

源順集

五日菖蒲につけてあるところにたてまつらせける
進上ころさし
深ふかき

右葉之菖蒲草みきはあやめくさ

千年五月五日可茹らさぜのさつきいつかしるへき

にしの四條の宮の源中納言のおまへにちいさき紅梅
をうゑさせ給ひたりけるをはしめてはな咲たるとし
悦てゐのこともおのゝ文字ひとつをさくりてよむ
哥の序さくりてうもしをたまはれり

あはれ春のはしめはひかしよりといふことを西の宮
よりなりけりとはこの梅のはなをみてなんおとろか
れけるこれによりわかおとゝの君やまとことのなの
こともをひきつられてさふらはせ給ひからたけの笛
の一よあそびあかさせ給ひかゝるふしをたゝにやは
すこすへきとてこのこ木のおひ出てし萬代の老木に
ならんまての心はへをよませ給ふに

白波のしらぬ身なれと大淀のおほせことをは如何そむかん
梅津河このくれよりそなかけける嬉しきせゝはみえん水底
あめつちの哥四十八首もと藤原有忠朝臣藤六なんよ
める返しなりかれはかみのかきりにそのもしをすゑ
たりこれはしもにもすゑ時をもわかつてよめる也
春

あらさしと打かへすらしを山田の苗代水にぬれてつくるあ
めもはるに雪まも青く也にけり今こそへの若菜つみてめ
筑波山さける櫻の匂ひをはいりてなられとよそなからみつ

ちくきにもほころふ花の錦哉（にびひい）いつら青柳ぬひしいとすち
ほのゝと明石の濱を見渡せば春の波わけいつる舟のほ
しつくさへ梅の花笠しるき哉雨にぬれしときてやかくれし
そらさむみむすひし氷打とけて今やゆくらん春のたのみそ
らにもかれ菊も枯にし冬のゝのもえにける哉を山田のはらつイ

夏

山も野も夏草しけくなりけりなとかまたしき宿のかる螢
待人もみえぬは夏も白雪や猶ふりしけるゝこのしら山
かた戀に身をやきつゝも夏虫のあはれわひしき物を思ふか
はつかにも思ひかけては木綿襦かもの川波立よろしやは
みをつめは物思ふらし時鳥なきのみまとふさみたれのやみ
れをふかみまた顯れぬあやめ草人の戀ちにえこそはなれ
誰により祈るせゝにもあらなくに淺くいひなせ大麻にはた
庭みればやはたて負て枯に鬼からくしてたに君かとはぬに

秋

くれ竹の夜さむに今はなりぬとやかりそめふしに衣かた敷
もかみ河いな舟の身は通はすておりのほり猶さはくあし鴨
きのふこそゆきてみぬ程いつのまに移ひぬらん野への秋萩
りんたうも名のみ成けり秋の野の千種の花の香には劣れり
結びなきて白露をみる物ならはよる光るてふ玉もなにせん
るもかちも船もかやはぬ天川七夕わたるほとやいくひろ
このはのみふりしく秋は道をなみわたりそわふる山川の底
けさみれば移ひにけり姫部志我にまかせて秋ははやゆけ
冬

ひをさむみ氷もとけぬ池水やうへはつれなくふかきわか戀
とへといひし人はありやと雪分て尋れさつるそ三輪の山木

いつこ共いさやしら波立ぬれは下なる草にかけるくものいぬる毎に衣をかへす冬の夜の夢にたにやはきみかみえこぬ打渡しまつ綱代木にいとひなのたえてよらぬはなを心そへみゆみの春にもあらで散花は雪かと山にいる人にとへ炭竈のもえ社まされ冬寒みひとりおきひのよるはいもれすゑこひする君か簪鷹霜かれの野になはなちそ早く手にすゑ

思

夕されはいとゝ佐しき大井川かゝり火なれや消かへりもゆ忘れすも思ほゆる哉朝なゝししか黒かみのぬくたれのたわさゝかにのいたに安くれぬ比は夢にも君に逢みぬかうさるり草の葉になく露の玉をさへ物思ふ時は涙とそみる思ひをも戀をもせしの祓すと一方ならてはてゝはしおふく風につけても人を思ふ哉天津空にもありやとそおもふせは淵にさみたれ川の成ゆけは身をさへうみに思ひ社ませよしの川そこの岩波いはてのみくるしや人を立ぬこふるよ

戀

えもいはて戀のみまさる我身哉いつとや岩におふる松かえのこりなくおつる涙は露けきをいつらむすひし草村のしのえもせかぬ涙の川のはてゝやしひて戀しき山はつくはえ小倉山おほつかなくもあひみぬかなく鹿ばかり戀しき物をなきたむる涙は袖に満汐のひるまにたにもあひみてしかなれうしにもあらぬ我こそあふ事を照射の松のもえ焦れぬれぬてもこひふしても戀るかひもなく影淺ましくみゆる山井照月ももるゝ板まのあはぬよはぬれこそまさるかへす衣て雙六盤の哥これもありたゝかよみはしめたるによみつく

〔舊本此間有詞合從便宣移置次頁〕

祝

みそきするせみのを川のきよき瀬に君かよはひを猶祈る哉天曆五年宣旨有て初て大和歌えらふ所梨壺におかせ給ふ古萬葉集よみときえらはしめ給ふ也めしおかれたるは河内掾清原元輔近江掾紀時文讀岐掾大中臣能宣學生源順御書所預坂上茂樹也藏人左近衛少將藤原朝臣伊尹其所之別當にさためさせ給ふに神無月のつこもりに御題を封してくたし給へるにいはいく神無月かきりとと思ふもみちほのと有各哥を奉る

神無月にはは紅葉もいかなれや時雨と共にふりにふらん又くたし給へる判にいはいく。紅出葉の神無月にはてぬと思ひて散するをりりにつけり。いかなれやとおほめくきためなし。すゑつかたたをやけきさまなれとなよ竹のよゝのふることにもなん成につけり。佐保山はせ寺にまうてゝ

千鳥なくさほの河霧さほ山の紅葉はかりはたちなかくしそ應和元年勘解由の判官の勞六年いにしへになすらふりてつかさの長官朝成朝臣に給ふにくはへたるなかな

哥

あらたまの年のはたちに ときはの川の
やまさむみ 風もさはらぬ ふちころも 二たひたちし
秋きりに 心も空に まとひそめ みなしら雲と
なりしより 物思ふことの 葉をしけみ けぬへき露の
〔るるハイ〕 夜半に起て 夏はなききに もえわたる 螢を袖に
ひろひつゝ 冬は花かと みえまかふ 木のまゝに


~~~~~

|   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|
| く | こ | け | か | こ |
| う | ふ | ふ | ふ | ふ |
| う | ふ | ふ | ふ | ふ |
| う | ふ | ふ | ふ | ふ |
| う | ふ | ふ | ふ | ふ |

~~~~~

~~~~~

~~~~~

か	こ	け	か	こ
く	こ	け	か	こ
か	こ	け	か	こ
く	こ	け	か	こ
か	こ	け	か	こ

~~~~~







This image shows a page from a handwritten manuscript in Arabic script. The text is written in a dense, cursive style, filling the page with many lines of script. The ink is dark, and the paper appears aged and slightly discolored. The handwriting is very close together, with some words and phrases being repeated or emphasized. The overall appearance is that of a historical document, possibly a letter or a treatise.

ふりつもる 雪をたもとに あつめつゝ ふみゝて出し  
みちはなを 身のうきにのり ありければ こゝもかしこも  
あしれはふ 下にのみこそ しつみけれ たれこゝのつもの  
さは水に なく鶴の音は 久かたの 雲の上まで  
かくれなく たかく聞えて かひありと いひなかしけん  
われはなほ かひもなきに みつしほの 世にはからくて  
すみの江の 松はむなしく 老ぬれと みとりの衣  
ぬきかへん 春はいつとも しらなみの 波路にいたく  
ゆきかよひ ゆもこりあへず なりにける 船のわれをし  
君しあらは あはれ今たに しつめしと 蜃のつり繩  
うちはへて ひくとしきかは ものはおもはし

應和元年七月十一日によつたる女子をうしなひて同年の八月六日に又いつゝなるをのこゝを失ひて無常の思ひ事になれておこるかなしひの涙かはかす古萬葉集の中に沙彌滿誓かよめる哥の中に世の中を何にたとへんといへることなとりてかしらになきてよめる歌十首

世中を何にたとへんあかれさす朝日まつまの萩のうへの露  
世中を何にたとへん夕露もまたてきえぬるあさかほの花  
世中を何にたとへん飛鳥川さためなきよに瀧津水の泡  
世中を何にたとへんうたゝれの夢路はかりに通ふたまほこ  
世中を何にたとへん吹風はゆくゑもしらぬみれのしら雲  
世中を何にたとへん水はやみかつくつれ行きしのひめ松  
世中を何にたとへん秋の田をほのかにてらすよひの稻つま  
世中を何にたとへんにこり江の底にならてもやとる月影  
世中を何にたとへん草も木もかれ行ころの野へのむしの音

世中を何にたとへん冬をあさみ降とはくれとけぬるしら雪ある所の前裁合の哥の判ある所に男女かたわきて御前の庭のすゝき萩しらにしなにくさのかうをみなへしかるかやなてしこ萩なとうへさせ給ひ松虫鈴虫をはなたせ給ひて人々にやかてその物ともにつけて歌を奉らせ給にをのか心々に我もくゝとあるは山里の垣れにさなしかの立よりあるはかきりなきすはまの磯つらにあしたつのおりぬるかたをつくりて草をもおふし虫をもなかせたる仰こととて花の有様むしのすかたいつれもくゝいとおかしかめり哥のおとりまさりはさためてやはあるへきたれしてかさため申さすへきと仰給にこれかれまうすさきのいつみのかみ源順朝臣なんおほやけには梨壺の五人かうちにめされ宮にはおもと人八人かうちにてさふらびし人也これをめしてこそさためられんによるしからめと申によりてかれて其事とはなくてこよひすくすましとまめことなんあるとてめしたりたみのつかさたすつかさのおほいすけたちこなたかなたにさふらひ給ひかゝの縁橋のまさみちによみあけさせ順朝臣にことばらせ學生ためのに今日のことをかきなかせ給ふなかにためのに源といふ人にもあらず千種に匂ふ花のあたりにはもき木のやうにてましりにくゝ侍れともやんことなくさふらふへきみやまのふもとよりおひ出たる草のゆかりにて仰ことのいなひかたさにみつゝきして書しりて奉りおく具哥とも順朝臣さため申さる處かくなん

花のみなひもとく野へのしの薄いかなる露かむすひおき劔

源すけまさの朝臣

秋風になひく夕の花すゝきほのかにまねく立とまりなん  
このすゝきの哥は。すけまさかなひくまねくといへ  
るわたり。らうたけたるやうなり。今しはしそ思ひ  
あはせまし。

こなたしなひき劣れる花薄玉まくくすのまくる成へし  
をみなへし 帥のきみ

玉のをゝみなへし人のたえさらはぬくへきものを秋の白露  
わけのありたゝ

くらふ山麓のゝへの女郎花露のしたよりうつしつるかな

此女郎花の歌は。ありたゝの朝臣のさか野を打いて  
て。くらふ山までもとめありきけんもちきなし。  
又やまと名に。いひにくき事をこそそへてはよ  
め。

我妹子か女郎花てふあたかな玉の緒にやは結びこむへき

萩

兵部君

さなしかのすたゝ麓の下萩は露けきことのかたくもある哉

橘のもちきの朝臣

萩の葉になく白露のたまりせは花のかたみの思はさらまし

此萩の哥は。たれもゝおなしさまなれと。すたく  
麓のなといへるわたり。少いひなれたり。もちきの  
朝臣の。はきの葉におく露といへるわたり。めつら  
しからねと。哥めきたり。

露を浅み下葉もいまたもみちれば赤くもみえず勝負の程  
しらに

弁 君

わかれゆく秋をししらに鳴鹿は命をさへやとゝめかぬらん

藤原のもりふむ朝臣

あたしのゝ草村にのみましりつる匂ひは今や人にしられん

此もりふむ・朝臣のあたし野は。野のなたしかなら  
れはにやあらん。ありとしる人すくなし。又かみに  
花もみえて。しもに匂ふといふにつけて。

覺束なあたしのみれば花もなし空に匂ふといふや何そも  
此哥。ことなることはへはなれれとも。添ところす  
くなきに。今一もしなくはへてしらにといへる所。  
すこしまされけり。

左衛門君

床夏の露うちばらふよひことに草のかうつるわか萩かな

源のためのり

野へことに花をしつめは草々のかうつる袖そ露けかりける

此草のかうの哥さまは。左衛門の。今少やはらかに  
いはれて侍るめり。されともかみのくさは。もとの  
草なから。しものかうをのみそへたれば。人にかく  
れん人の。身かくして。おもてはあらはならん心ち  
なんしける。

千くさのか移る萩も有けるをなと朝顔をかくさゝりけん

しなに

ひうかのかみ

しら雲のかゝりしなにも秋霧のたてはや山は空にみゆらん

藤原もろふむ

高砂の山のをしかは年をへておなしをにこそ立ならしなけ

此しなにの哥は。これとかれもおなしさまなれと。  
秋霧のたてはや山は空にみゆらんといへるわたり。



河霧の麓をこめて立ぬれば空にそ秋の山はみえける  
といへるふることと思ひあはすれば。似おとりにな  
んみえける。

麓とも峯ともみえず秋霧の立なばなにか空にみゆへき  
をき すけのきみ

そよと吹秋の萩たになかりせは何につけてか風をしらまし

をきの葉の末こそ風の音よりそ秋のふけ行ほとはしらるゝ  
源朝臣すけかぬ

此萩の哥。身つからも見給へ。人してもよみあけさ  
するに。

萩の葉をそよかす風の音高み末こそかたは少しまされり  
なてしこ もとき

山賤のかさねの外に朝夕の露にうつるななてしこの花  
藤原たかたゝ

秋深く色移りゆく野へなから尙とこなつにみゆるなてしこ

此なてしこの哥は。いづれもくゝいとよくいはせて  
侍り。但

秋も尙とこなつかしき野へ乍ら疑ひおける露をほかなき  
かるかや こはいと

行秋の風にみたるゝかるかやはしめゆふ露もとまらさり鬼  
藤原たゝのふ

移しうへは束のまもなく蒨萱はみちよの数を數ふばかりそ

此かるかやは。たゝのふかみちよの數なといへるわ  
たり。秋の野にかるかやにはあらて。春の野に咲け

ん物のはなゝん。おもひいてられける。

言のはゝこはくみゆれとすまい草露には映る物にさりける

むしのね 但馬

淺茅生の露吹むすふ木枯にみたれてもなくむしの聲哉

橘正通

秋風に露を涙となく虫のおもふ心をたれにとはまし

此虫のれの哥。露吹むすふ木枯のなといへるわたり。  
いひなれたりなとさたむるほとに。正通か申や

う。木枯とは冬のあらしなこそいへ。この比の風を

いはゝ。雨をも時雨とやいふへからんといふをきこ  
しめして。みすのうちに。これかれかゝる事をいふ  
ことをこそは。ためしにひかめとて。

木枯の秋の初風ふかぬまになとか雲井にかりのおとせぬ  
又

我門のわき田の稻もからなくにまたき吹ぬる木枯の風

なといへるは。冬の嵐を秋の初風といへるにやあら

ん。そのわたりをこそさため申されめとあるに付て  
又々み給ふれば。

なく虫の涙になせろ露よりも露吹むすふかぜはまされり

抑順。梨壺には奈良の都のふる哥よみときえらひ奉  
りし時には。すこしくれ竹のよこもりて。行末をた

のむおりも侍りき。へは草の庵に。難波の浦のあ

しのけにのみわつらひて。こもり侍れば。すへて

われ舟の引人もなきさに。すてられおかれたらん  
心ちなんしける。かゝるうちに。このとしころ

は。しらけゆく髪には霜やおきな草ことのはも皆枯はてに鬼

かく侍れば此哥ともさため申せるさまとも。いとい

霜

ひしらすことやう也。猶おまへにて定させ給はんや。  
よからんと申をきつて正通か申すやう。

霜かれの翁草とはなれとも女郎花にはなほなひきけり  
今日の判をみればなといひたはふれて。まかりいて  
なんとするほとに。みすの内をきけは。帥のすけ橋の  
なかしといひし人のむすめ。これかれなとさふらひ  
て。夜のふけゆくまゝに。さやけさまさることの音を  
しらへあひたり。おまへの庭のおもをみれば。月影  
のおほるなるに。花のいろ／＼にうちみたり。  
風のおほるなるに。虫の聲々もなきあひた  
り。かゝることともをきしひすて。今はまか  
り出なんとて。萩の下露に衣手のぬるゝもしらす。  
おきぬておほみきたふなりときこしめして。にへ殿  
より。みこの宮のくら人ところのさうしき藤原のた  
かたとして。おほんくた物のおろしに。政所よりは  
長門の權守源有忠の朝臣して。さかなに給ふへき物  
をさま／＼色々に給へり。これかれみなたへあきて  
申やう。またあかぬ物は。おまへの花の色々と虫の  
こゑとなん有けるなと申て。やう／＼まかり出ぬ。  
爲憲ひとりあくるまでさふらひて。きのふよりけふ  
までの事を書しるして奉りおく。天祿といふ年はし  
まりてみとせの秋の半。長月のしもの十日に今二日  
おきて。大井にての事なり。

久しくつかさ給はらて式部卿の宮より大盤所に奉つ  
らするな歌

初の冬(貞元元)かのをさるの夜伊勢のいつきの宮にさ

ふらひて松のこゑよるのことにいるといふ題にて奉  
る哥の序いせのいつきの宮寛子秋野の宮にわたり給  
ひて後冬の山風さむくなりての初はつか七日の夜庚  
申にあたれりなかしき夜をつく／＼とやはあか  
すへきとおもほしてみすのうちにさふらふおもと人  
みはしのもとにまいれるまうちきみたちに歌よませ  
あそひせさせ給ふ歌の題にいはく松の風よるのこ  
にいろこれにつけてきけはあし引の山おろしにひ  
くなるまつのかかみとりもうは玉の夜はにきこゆる  
ことのおもしろさもひとへにみなみたれあひゆき通  
ひてむへもむかしの入松風に入といふことの詩句  
つくりおきそめげんとなむおもほえける順かかしら  
のかみ夏も冬もわかぬ雪かとあやまたれ心のやみは  
からにも大和にもすへてつきなくおまへのやり水に  
うかへるのこりの菊に思ひあはすればいつみはかり  
にしつめる身はつかしくなにかききぬかきなかに  
てるもみちはを見わたせばかゝるまゝにさふらふ  
ことさへまはゆけれとさもあらはあれ人こそきつて  
そしりわらはめかけまくもかしこきおほんかみは哀  
ともめくみさいはひ給ひてん今いにしへをみるかこ  
とくこよひの事を後の人もみよとて書しるして奉る  
は仰ことにしたかふ也

夜を寒

みことしにもいる松風は君にひかれて千代やそふ覽  
天曆御時御屏風哥立春

けふとくる水にかけてそむすふらし千年の春にあはん契な

西宮源大納言大饗の所に立へき四尺屏風調せらるゝ  
れうの哥元日

きのふまで冬籠<sup>雪にこも</sup>れりしみよしの霞はけふや立もそふらん  
子日する所

岩に生る子日の松もたれしあれは千年の春は我におほせよ

二月はつむまいなりのやしるにまうつる人に

稻荷山尾上になてるすきくにゆきかふ人のたえぬけふ哉

あら田うつ所

おりたてはそら迄ひつる袂さへ何うちかへすあら田成らん

三月花つみの所

いかにして花をつまゝし花のかを袖にとめくるつみも社うれ

小弓射る所

春ふかき山に<sup>やと</sup>いれはや梓弓ふく風にさへ花のちるらん

四月神まつり

神のます杜の下草風吹はなひきてもみなまつるころ哉

五月ともしする人あり

時鳥まつにつけてやともしする人も山邊に夜をあかすらん

六月被

祈事をきかすあらふる神たにも今はなこしと人はしらなん

七月七夕まつる所

七夕は空にしるらんさゝかにのいとかくはかりまつる心を

十五日ほんもたせて山寺にまうつる人

けふのためをれる蓮のはをひろみ露おく山に我はきにけり

八月あふ坂の關に駒むかへにゆく

なにゝ我夜半にきつらん相坂の關明てこそ駒もひきけれ

人の家のつり殿にまらうとあまたありて月をみる所

水の面に宿れる月ののとけきはなみぬて人もれぬ夜たれはか

九月小鷹狩する所

里遠みくねなは野へに留るへし稻おほせ鳥に宿やからまし

月の夜衣うつ所

風さむみなく鴈かれにあはすればよるの衣はうちまさり見

十月志賀の山こえの人々

なをきけは昔なからの山なれとしくるゝころは色かはり鬼<sup>まじりイ</sup>

十一月加茂臨時祭みる車

ちはやふるかもの河霧さるなかにしるきはすれる衣也けり

十二月佛名をこなふ家

冬山の雪まにこれるあはれ木の上にそくゆる残すつみなく<sup>かくすイ</sup>

藤原のとほかすの御四十五日のいみたかへに家にま

うてきてすむあひたに正月十五日子日にあたるあし

たかゆのうへに小松をききてつけて侍る

時しまれけふにしあへる餅かゆは松の千年に君もによとか

天徳四年三月晦日内裏哥合の歌うくひす

氷たにとまらぬ春の谷風になど打とけぬうくひすの聲<sup>こたイ</sup>

山吹

春ふかみ井手の河波立かへりみてこそゆかめ山ふきの花

戀

たかために君をこふらん戀わひて我は我にもあらす成ゆく

式部丞清原元輔かおとうとの學生もとされ字清用み

まかりて後はふりするまでしらすしておそくきくに

たるよし兄の元輔にいひつかはす

宵のまの空の煙と成にきとあまのはらからなとかつつけこめ

應和二年正月東宮の藏人に成て月のうちに式部丞に



うつれりおもひをのへて右近の命婦につかはす

ひく人もなしとわひつる梓弓今そうれしきもろやしつれば  
同年十二月前朱雀院の姫宮の御裳きのれうに御屏風  
調せさせ給ふ人々哥奉らせ給ふ哥青柳

露を重みたえぬはかりの青柳はいくめかけたるこかれ成覽

四月卯花さける所

我宿のかきれや春をへたつらん夏きにけりとみゆる卯花

旅人時鳥をきく

おほつかなゆくたひ人をたれとてか山時鳥まつなのらん  
池のほとりに鶴たてり

池水になひく玉藻のそ清み千世さへしるき鶴のかけ哉  
芦たつの影のみ浮ふ池水は千代にすむへきしるしとそみる  
初鴈をきく人

里とほみ雲路かきわけ水くきの跡かとみゆる鴈はきにけり  
山川にもみちなかる

山川にもみちなかる

水上に風や吹らし山川のせゝにもみちのいろふかくみゆ  
五月あめふる日東宮にさふらひて雨の心の哥を奉る

とてもしひとつなさくりてあもし給はれり  
雨ふれは草葉の露もまさりけりよとのわたりを思ひ社やれ

内裏に女親王たちの御れうに月次の繪かゝせ給ふて  
殿上人に哥をおしつけさせ給ひ有人のれうによめる

四月卯花咲る家に女郭公をまつ

郭公きかいおきてまつ夜は明にけりほのにうの花白くみえゆく

九月大ぬ川に人々あそふにもみちゝる

もみちはな山風の吹つめはふれにしくれの秋はきにけり  
人の家の池にはちすおひぬなはおひたり

蓮たにおひさらませは水の上に露おき鬼といかてしらまし  
年ことに春はくれとも池に生るぬなはは絶ぬ物にさりける  
康保五年女五男八親王の御屏風の哥田舎の家に女と

ものいふ男あり

道とほみ人もかよはぬ梅花君には風やわきてつけつる

きしのなくをきゝて山の櫻をみる

かりにくる人もこそきけ春のゝに朝なく雉のちかくある哉

山さくら木の下風し心あらはかをのみつけよ花なちらしそ

卯花さけるに郭公をきく

うの花のならまくなしき山里に時鳥さへきつゝなくなり

みあれ

わかひかんみあれにつけて祈る事なるゝ鈴も先聞えけり

人の家に泉のつらにすゝむ

山の井をかつむすひつゝ夏衣ひもうちとけてすゝむ比かな

人の家に女二三人出て曉花みる

花の色やよのまの風にかはるとて先おきながら出て社みれ

海のつらにしほやきあみひく

みわたせは蟹のたくなはなのみしてたつは鹽やく烟なり鬼

九月卅日の日男女野へにいてゝもみちをみる

いかなれは紅葉にもまたあかなくに秋果ぬとはけふをいふ覽

雨の中に殘菊をみる

しくれつゝ移るふみれは菊の花色をしめふる雨にそ有ける

池に水鳥あり

朝氷とけにけらしな水のおもにやとるには鳥ゆきゝ鳴なる  
雪ふる日あつまのかたにおひつらねたり

旅の空くもろくろしな東路のゆきつのかたも見えぬしら雪

田の中に水びくたのこれり

遠山田たれまきおける人よりもんせきに水はちりまざる賢

池のほとりの藁のはなを

藤溪のかゝれる岸の松は老てわかむらさきにいかでさく覽

四月神まつる所

夏山にたれる柳の葉を茂みまつりまざるはけふにさりける

五月五日

澤水になくつるのれを尋れてやあやめの草を人のひくらん

六月よりひ

夏草にはらひかくれと久堅のあまつつみとは露やけぬらん

七月

七夕の心なくみて天のかはしづくに袖のぬれぬへきかな

八月十五夜こまびき

けふしまれ相坂山のやまのはにまついてきぬる望月のこま

九月九日

けふみて後社しらぬ葉の花きくにたかはぬしるし有とま

十月綱代

もろさへきよるあしらの手にかけてたつ白波はから錦哉

十一月

水のうへに嵐吹らし山川の瀬にもろろのはやくみゆれは

十二月佛名

夜を寒風さへはちふ宿なれば寝れる君かつみはあらしな

四のふこの北野に子日しに出給へるに

古のためしなきけは八千代まで命をのふる小松なりけり  
右兵衛督忠公朝臣あたらしく調する昇風の哥正月一

日人の家にやり水のしもに梅花あり

氷とくかぜにつけつゝ梅花ゆく水にさへにはふなりけり

二月旅人櫻花ならせたり

春日すら長居しつると人とはつみせんともる花なうらせそ

三月人の家に女とも柳のもとにあそぶ

枝しけみ手にかけそめて青柳のいとまなくても暮すけふ哉

四月神まつる

夏衣きて社まされおなしくは神のひもろきときてかへらん

五月五日庭に馬をひかせて見る

若駒のとさもろへく高蒲草ひかね先にそけふはかけまし

六月はらひ

岩波の立かへりせばぬせきよりなこの験すとやきくらん

七月七日庭にことひく女あり

ことのなそやかひなき七夕のあかね別を引とめれば

八月相坂の関に駒むかふる人あり

むさしの、駒迎にや關山のかひよりこえてげきはきつらん

九月志賀の山越の人

山嵐の風にもろろのちる時はさつ波そまついろつきにける

十月山里に待つ人來たり

山里に心あはする人ありとわれはし鷹にかはりてそとふ

十一月綱代

朝水とくる綱代のひななればよれとあわにそみえ渡りける

十二月佛名導師にものかつく

渡津海の底の名残とけさはあらしかつくはと壁ならす共

右近少将義孝朝臣と加賀縁橋正通と園若うちて大和  
守（孝賢）十首をつゝる正通まけて次日こふに四首をあ

たふ

春の暮

心して風はふかなん花の散かたにや春もゆくと尋ねん

秋月

久かたの空さへすめる秋の月いつれの水にやとらさるらん

あはぬ戀

あはれてふ言のはも社聞えけれよそにきえなん露の悲しさ

あひての戀

我なからくらへわひぬる心哉今さへ猶やこひしかるへき

宰相中將藤原朝臣たてまつる漢書の光武記よみをふ

る日わたりかゆの響まうけて文つくる又のあしはい

はひの心ある哥人々よみ侍るに

老ぬれは同じ事社せられけれ君は千代ませ君(は)千代ませ

藤大夫されまさの朝臣の家に五月朔日なるに庚申す

るに曉に成て鳥の鳴をきゝて女方よりいひ出す

なく聲を鳥たにかふるものならは郭公とてきゝあかさまし

かへし

君きかはなけ時鳥くろかみのふゝきになれば我もおとつす

一品宮くら人とあふきつくの目に御碁あそはして宮

まけ奉り給ひにければ七月七日に奉らせ給ふあやの

文にもしなゝりてはれる哥

あまつ風あふくともゆめ霧たつなこは七夕のおれる錦(ころも)そ

大納言源朝臣の枇杷殿にて菊をもてあそひてくもし

なえたり

うつろはん時やみわかん冬の夜の霜(しも)とひとつにみゆる白菊

右馬頭遠頼朝臣家にきたりやとれる比もちつきのお

ほんまひいぬる秋日かす冬になりてひき奉るむかふ  
なるつかさの官人ともに酒なと給ふついてに

君たにもあれたる宿にやとらすはよそにそみまし望月の駒

八月左大臣後院にて宴をなす夜の哥翫水上月

水きよみやとれる秋の月さへや千世まで君とすまんとす覽

岸のほとりの花

色ふかき岸(くし)のまに／＼さける花あさき波にはをられさり鬼

草むらのうちの虫

草村の底まで月のてらせはやなく虫のねのかくれさるらん

中の御門の家の南に中務すむ六月また梅の枝につき

たるを折て北の家に送れる詞にいはいくゝのはまた

かくなん残たるとすなはち云心

井堰にはさはらす水のもるにあへは前の梅つも残らさり鬼

南のかへし

泉(いづみ)たに残らすいかでもりにけん堰のふる杣くひものかぬに

ならひて北返し

いつみにはあらぬ籬の鳴ちかみ波のこえつゝもると社きけ

南のかへし

打こゆる波の音をほらぬよりしまきの風を吹かへさまし

又北のかへし

花を社人やをるととてかめしか數ならぬみは何にかはせん

貞元(五)年初齋宮侍従のくりやに御座する間に八月廿

八日庚申の夜人々あそひいはいひの心をよむ

神代より色もかはらて竹川のよゝなは君そかをへわたらん

おなし年の九月はつる日齋宮の宮の御前に前栽う



へて又よむ

たのもしなの宮人のうふる花しくるゝ月にあすはなる共〔へすい〕

此歌の返事女房

あすよりは時雨にかゝる花をうへてのへやるへくもあらぬ秋哉  
かへし

君か爲今年の秋はなければやのへやるへくもあらすといふ覽

永觀元年一條の藤大納言の家寢殿の障子に國々のな  
ある所を繪にかけるにつくる哥

夏鏡山

なにしおへは曇らさりけり鏡山むへこそ夏の影にみえけれ

秋大る川

大井川袖に秋風さむければたつ岩波も雪とこそ見れ

あまのはしたて

満鹽ものほりかれてそかへるらしなにさへたかき天の橋立

八十嶋

やそ嶋を誠にいかてみてし哉春のいたらぬうちはあるやと

うきしま

さためなき人の心にくらふればたゝうき嶋はなのみ成けり

たかさこ

うちよする浪と尾上の松風と聲高砂やいつれなるらん

たこの浦

春くれば田子の浦浪うらよくて出まさりけりたこの浦波

おほよと

いせの蟹ととひはきかねと大淀の濱のみるめはるくそ有ける

しかすかのわたり

ゆふかよふ舟路はあれとしかすかの渡は跡もなくそ有ける

天元二年の秋おろかなるをのこさうしは平の兼盛す  
るか守にてくたるにやる哥二首

時しまれをしかの橋を秋ゆけはあつまなさへそ戀渡るへき  
思ひわひ己か舟々ゆくを舟たこのうちみてきめといはすな

しもつふさの守藤原のすゑたかゝ國にくたるに中納  
言のいへに餞給ふによめる哥

君ははや人なみくに出立てしつみにしつむ我にあふなよ

伊勢齋宮規子内親王の群行の後長奉送使ひろはたの山

納言京にかへり給ふあした齋王の御前にて饗まうけ

祿等給ふに男女哥よむに奉る

神のます山田の原の鶴の子はかへるよりこそ千世は數へめ

天元二年十月初の亥の日右大臣殿の女御ひなけとも

にもちゐくたものもりてうちの女房ともにつかはす

次てに大臣殿にもひなけ一つ奉らせ給ふ銀にてゐの

こかめのかたを作りてすゑさせ給へるにくははれる

哥

渡津海の浮たる嶋をおふよりは動きなき世をいたゞけや龜

同年の五月一條藤大納言石山にまうてゝ七日さふら

ひたまふ同日本人の詩つくり哥よむにたへたるあまた

あるいとまのひまにからの哥作大和哥よめるに侍従

誠信朝臣さはりありてとゞまれり後にかの哥ともを

みて身つからゆきて作り侍らてこれにまた作りく

へてとすゝめしむるに中に三河の權守惟成朝臣の江

山此地深と云詩に客帆有月風千里仙洞無人鶴一雙と

いへると内記源爲憲朝臣なききの松といふ題をよめ  
る

老にけるなききの松の深緑しつめるかけ よそにやは見る  
といへるをふたつの和すといへる和歌

ふかみとり松にもあらぬ朝あけの衣さへなとしつみ初けん  
同年十二月の比ほび依宣旨奉る御屏風哥予日の野へ  
にあそふ人

小松ひく人にはつけしふか緑こ高き陰そよそはまされる  
梅花ある人の家

朝水吹とく風は寒けれといそきて梅ははや咲にけり

春の野のかすめるに梅花あり小鷹すゑたる人行

梅かゝをかりにきてなる人やあると野への霞はたち隠す覽  
人の家に櫻柳あまたあり

鶯はわきてくれとも青柳の糸は櫻にみたれあひにけり

花の木の本に人々あそふやり水のもとに山吹さけり  
山吹の花の下水さかれともみなくちなしとかけを見えける  
河風はさえんかたなく山吹のちりゆく水をせきやとめまし

松の木に藤かゝれり男女むれぬたりあるは折て行

住の江の岸のまつさへおもほゆれ身にさへかゝる藤波の花  
松風の音にきゝつる藤波は折つゝかへるなにこそありけれ  
紫の藤咲松の木すゑにはもとのみとりもみえすありける

七月七日女庭におりぬて七夕まつる男來てすい垣の  
もとにたてり

彥星を待とはなしになにすとして天の河霧いそきたつらん  
七夕にけさはかしつる麻の糸をよるは祭ると人はしらすや  
天川わたし守にも成にししか七夕つめにけふなまたまし  
なにしおへは鵲の橋わたす也わかるゝ袖は猶やぬるらん

八月十五夜人の家に蓮有木のはうかふ月の影落たり

男女心々にあそふすたれのとにぬてものかたりする  
もあり

蓮葉にもみちもしける水の面に底までみよとてらす月影  
水のおもに照月なみをかそふれば今宵そ秋のななか成ける  
秋の夜月あかき木のもとに鹿たてり

月あかきこよひを數はかそへつる常も鹿たつ木とはみれ共  
秋のゝに色々の花もみち散まかふはやしのもとにあ  
そふ人々あり鷹すゑたるもあり

もみちゆふ家も忘れてくらす哉かへらは色やうすく成として  
時雨かと驚かれつゝふる紅葉あかき空を色イもくもるとと思ふ

池水にもみちゝりうかふ水鳥あり馬にのれる人ゆく  
空の霧の中に鴈なきてわたる野に狩する人あり

秋霧をわけ行鴈は何なれやおくれて後にまといふけふ哉  
池の面に浮ふもみちの唐錦をしといふ鳥そたゝてぬるらし

此歌を奉らする次てに仰ことの給ふる藏人にやる  
程もなきいつみばかりに沈むみはいかなる罪の深き成らん

天つ風空に吹あくる暇もあらば澤にそたつはななくとつけ南  
天徳三年の春能登守になりてきたるに一條大納言の  
家の人々餞する日の哥

こしの海にむればぬるとも都鳥都のかたそ戀しかるへき  
おなしころ左衛門佐誠信餞する日の哥

神のますけたのみ山水しけくともわきて祈らん君か千年を  
おなしころ

をとゝしもこそも今年もなとゝひも昨日もけふも我こふる君  
かきたえてとはぬはうくも思ほえすかゝるにしなぬ身をいかにせん

# 群書類從卷第二百五十

## 和歌部百五家集二十三

### 能宣朝臣集

小野宮太政大臣の七十賀左大臣し給てよませ給ける  
御屏風の哥

たつの住澤邊の苜の下れとけ汀蒔出る春はきにけり  
花さかぬ常盤の山の鶯は霞を見てや春を知らん

夏

夏山の木高き陰に立よりて見れば千年の影にそ有ける

秋

龜山の岩ほのうへの紅葉はうちらて秋をそかそふへらなる

冬

春日野のときはの松は霜のふる年毎に猶色まさりつゝ  
おなしるいの竹のつえにそへ侍る

君か爲けふきる竹の杖なればまたつきもせす千代を籠れる  
屏風の哥よめと侍るに正月子日松引わかなつむとこ

春

引松の千年の春は春日野の若菜も摘まむ物にやはあらぬ

二月田つくり侍る所

雁金そけふ歸るなる小山田の苗代水のひきもとめなん

三月晦日はかりに花の下にておしみ侍とて

散果る花をおしめは太かたの春さへ暮ることなしと思ふ

四月山里にうの花咲たる所を旅人とまる

山近みさく卯花を時ならてふる雪とのみあやまたれつゝ

五月五日人の家にさうふきて侍り女ともほとゝき  
す聞侍るに

あやめ草引かけたれば子規をくらへにや我宿になく

六月はらへし侍るところ

みそきする川の淵瀬に引網をおほぬきなりと人やみるらん

七月七日たなはたに物かせる所侍るに

棚機にかせる衣のうち返し別てこひんほととのつゆけさ  
「はるい」

八月駒迎し侍所

むかへくる人もあるかな關山の駒引かへすかけはしるしも

九月お中の家のいねをとるにかりする人のまうてき  
たる女とも侍るに

狩にとて我宿のへにくる人はいなおほせ鳥にあはると思ふ

十月あしるに紅葉なかれよりたるとまりて見侍る  
「にそい」

紅葉はのよれる網代はあかして過にし秋のせゝにて有ける  
「れい」

十一月神まつる家

櫛葉の霜うち拂ひかれすのみすめとそ祈る神の御前に



十二月雪ふるところ

新き春さへ近く成ゆけはふりのみまさるとしのゆきかな  
又屏風の哥よめと侍るに春いなりまうてして歸るも  
の侍り花の陰にてやすむもの有所

さしてくるいなりの山の道遠み花のあたりに宿やからまし  
春日野にわかなつみ侍るところ

新き春くる毎に故郷の春日のゝへに若菜をそつむ  
おなし所にまつりの使のかへり侍るに

八乙女も霞ともにけふしこそ春日のゝへに立渡るらし  
須磨の浦しほやき侍るところ

すまの浦のもしほの煙春なればそらに霞の猶や立らん  
くれの春ふしの山近き所に人の家侍り

草ふかみまたきつけたる蚊遣火とみゆるはふしの煙なり梟  
すみよしのかたかきて侍る所

住吉の年ふる松のよはひをはかへるゝも浪やかそふる  
あまのはしたてわたりにあまの侍る

誰爲にわたり初けんよさの海の浦に世をふる 蜃の橋立  
うみのほとりなる人の家見いたして侍り

漁火のくるれはうかふ影をこそ天津星とそいふへかりけれ  
末のまつやまに馬のりともおりてやすみ侍る

音に聞する松山けふこそは打くる浪のこえゝすみめ  
うきしまのはしわたりして侍る所に

浮嶋と名にきゝくと浪の上に所もさらすよをそへにける  
夏季をくらのやま

紅葉せはあかく成なん小倉山秋まつほとの名にこそ有らし  
大井川くれくたす人の家侍り男女見侍り

篋おろし明くれ下す大井川みなれそしつる四方の人さへ

さか野にくら人所の人々まかりておまへのせんさい  
ほりいてゝ

秋ことに大宮人のくるのへはさかのことゝや花も見らむ  
人の家にせんさいのつらに侍りて

女郎花にはふあたりにむつなればあやなく露や心置らん  
小野にし侍る山里に人の家の紅葉おもしろきに女と

もの出ゐて侍るにかりする人のたかすへてまかりた  
る

山城の小野の山への里遠みかりのやとりを鳥ぞ鳴なる  
くりこま山なる人の家に女とも紅葉見侍り

紅葉するくりこま山の夕かけをいさ我宿にうつしもたらん  
うちのあしろに紅葉散なかれて侍る

もみちはの日をへてよれる継代木は錦を橋に渡すとそみる  
かくらし侍る

みや人のたける庭火のおきあかし聲々あそふ神のきねかも  
しかすかのわたり雪ふり侍る舟にのりて侍る

雪によりかへりやせましかすかに故郷こひしいさ渡なん  
女のもとに春のころほひいかて物いひ侍らんといいひ

つかはして侍るに秋につゆはかりいはんといひ侍れ  
は

天の川へたつる中のこひよりも久しき秋をまちや渡らん  
やよひのつこもりかたに雨のふる夜春の暮るをおし

み侍るこゝろをよむに  
暮ぬへき春のかたみと思ひつゝ花の雪にぬれん今夜は

人の哥合し侍るによみてと侍れは

霞

霞たに立をくれせは新き春のくるともしらすそあらまし

梅

梅花匂ふあたりの夕くれはあやなく人にあやまたれつゝ

春風

はる風の吹ときかたのうす氷底の玉もゝ今やみたるゝ  
岩つゝし

卯花

卯花の咲るあたりは時ならぬ雪ふる里のかきねとそみる

子規

時鳥ね覺に聲を聞しよりあやめもしらぬ物をこそ思へ

夏虫

もゆる火の中の契りを夏虫のいかにせしかは身にもかふ覽

蚊遣火

終夜したもえわたる蚊遣火にこひする人をよそへてそみる

苧萱

東ちにわかゝる萱のみたれつゝ誰爲とかはふきてなひかん

秋霧

秋霧の峯にも尾にも立田山紅葉の錦たまらさるらし  
をみなへし

女郎花あたにやみをは思ふらん露の心にあやまたれつゝ

すゝき

吾たにも結び置ては花すゝきなへて人をはまねきしもせし

時雨

杣山に立煙こそ神な月しくれをくたす雲となりけれ

初霜

夜を寒み笥の草を見渡せは今朝そ初霜置にけらしな

氷

山川を落くる瀧の音もせず今は氷にとちそしぬらし  
同じやうなる事人のし侍るにはつ春

隠沼の水のまより下根さし芦のわか葉も今やとくらん  
霞たにたゝすありせは春さぬと何をしるしに人のとはまし

鶯

山高み雪ふるすより鶯の出る初音はけふそなくなる  
梅

若菜

句をは風にそふとも梅花色さへあやなあたにちらすな

白雪

白雪のまたふる里の春日野にいさうち拂ひ若菜摘てん

櫻

櫻花またきなちりそ何により春をは人のおしむとか知

柳

ともすれば風によるにそ青柳の糸は中々みたれそめける

子目松

いつしかも引人ともや春のゝに生る子目の松は待らん

蛙

今朝聞は澤の蛙も鳴にけり春のくれにも成ぬへらなり

やまふき

こくれつゝ春の中はに成にけり今や咲らんやま吹の花

天の原わきて鳴なる雁金は故郷尋かへるなるへし

春夜月

花ちらは起つゝも見ん常よりもさやけくてらせ春の夜の月

春雨

我宿の垣根の草の淺緑ふる春雨に色はそめける

戀

埋れ木のうへはつれなくありなから下には深き戀もする哉  
こひゝてあふとも夢に見つる夜はいとゝね覺の恨めしき哉  
さりともと頼む心にはかれてしなれぬ物は命なりけり  
人しれぬ戀の道なる關守は忍ひにとひしことにそ有ける

旅ゆく人にかりの聲をきゝて

草枕われのみならずかり金も旅の空にそ鳴渡るなる

おほいまうちきみのかつらにて水のほとりの秋の花  
といふ題よめと侍るに

水の色も花の匂をけふそへて千年の秋の例とそみる

藤花

こむらさき匂へる藤の花よりはみつなき空に涙を立ける  
人の屏風（に）に小鳥をすゑこにかひて侍るかたをかきて  
はへる

さま／＼に山の古巢はこふらめと此とくらには鳴聲もせず  
人の産して侍る所にて

時しもあれ春の始に生出たる松は八千世の色をそへけん  
小野宮大まうちきみ月輪寺のさくらの花見侍しに  
山櫻千代のはる／＼ことしより色さき増れ君か見（こもり）にこは

しはすのつこもりの夜山寺にまかりて侍るつとめて  
僧のもとよりけふは何事か侍るといひて侍しに

人しれすいりきと思ひしかひもなく年も越ける山（く）ちなり鳥

〔さそひ〕

同じ山寺にて法師の松引に携ひ侍るにまうてたりし  
室の前におほいなる松の木の下にて昔住ける人の引  
ける松なり爰にゐて侍らんと申侍りしに

引そめて世々をへにける松なれと緑の色のあせすも有哉  
くら人所のおのことも花見にまかり出て侍るに藏人  
になりて侍るかもとにつかはしける

花の色をよそに見つゝももろともに折し昔の人そこひしき



爲頼朝臣集

めの及ふ山野も近き夕まくれおりある雲そしるへなるらし

十一月廿八日前大納言などしてさけまいりしに

人を社あらましかはと歎きしかれを誰か思ひいつへき

とおもひたまへるに今日なんすこしたのもしう侍る

別れては又もあひみんよはひこそなとてなげきし昔とも哉

いとたのもしかりしものをとそ人しれすおもひたまふ

おほかたの空の露かは君かため萬代かけてをけるきくをや

たふさにけるのさま

言とははとけそとかも菊の花昔うつくしきくのもととは

あひて後のわかれ

みし程にきえなましかは別てのちさへ物は思はさるまし

おりつれは心もけかるもとなから今の佛に花たてまつる

つくるうた

めつらしくやま井につけん葵草待かけてのみ年はへにけり

かへし

ゆきすりの山井の衣珍らしく獨ならすはみえすそあらまし

さよきことせさすとして文慶君のもとにものし給とこ

ろあめもるときよて

くもりなき君かみむろの空はれてうろの宿りを如何みる寶

かへし

うろなれと君かさやけきやとのうちに

たいしらす

ちりぬとして歎きし花は咲にけり戀しき人をほるけかりける  
春はなをこぬ人またし花をのみ心のとかにみてをくらさん

中務のひやの御

花もみならん後は我宿になににつけてか人をみるへき

なかくににあたなる花は散ぬ共まつを頼まぬ人のあらめや

また宮

櫻花まつによそへておるひと千歳の春をみるへかりける

月の哥少將にかはりてや

秋風に夜やふぬらんおほそらの月の桂のなひくかけみゆ

ひとりの月をなかくむる秋のよはなに事をかは思ひ殘さん

見る人をかそへつくしていつ迄か歎くは君とふれはなり鬼

たいしらす

人のよをあるにまかせて花をのみおしむ心やかつは悲しき

人のよはへんに任せてありぬへし花をばえ社思ひかへさぬ

ひせにくたるいもうとのもとに

故郷の草葉をまたも結ふへきはるけきみちはいのち共かな

かへし

故郷にむすひし草の契りあれば千とせの春は誰も頼まん

長徳二年十月廿二日花山院の東宮におはしましし時

殿上にて右中納言の五節たてまつりしときなにごとに

かといひしかはなにもこゝならんものをたてまつら

んといひしにゑりくしもとめてかせとありしかはか

したりし後の華もなくなりくしたりし人もなくな

りてわすれてやみにしをことし五節たてまつるに何

事をかせんと右京大夫のたまふにかのくしやある  
ときたのかたにあないせらるゝに奉のくしのいたき

れはいとあはれにて

かきなてゝさしけん櫛にかみさひてあるに傳へし人のなき哉  
小野宮の御日に法住寺にまいるとておなしほとの人  
のおほくまいりしを思ひいてゝ

〔拾遺哀集〕

世の中にあらましかはと思ふ人なきか多くもなりにける哉  
小おほきみこれをきゝて

あるはなくなきは數ぞふ世中に哀いつまでいきんとすらん  
〔拾遺哀集〕  
常ならぬよはうき身社悲しけれ其數にたにいらすと思へは

なつのはしめつかたいへのもえきをみて

おいに鬼庭のもえきのご暗きにそこはかとなき涙とまらて

つのかみなりときははりまのかみむこにとりていへの

庭ところこゝすのかたになしたるにあめのふるころ

うみにしたり

うちつけに播磨瀧にもにたる哉いかなるあまのよる通ふ覽

住吉と見えこそわたれ浦とをみいかゝ有へきはりまかた迄

正月十三日ひとひまいりたまへりしのち左兵衛督の

宮にまいらせたまふ

あかさりし君か匂のこひしきに梅の花をそけさはおりつる

みや

いまもとる袖にうつせるうつりかは君か折ける匂なりけり

いへあるし

戀しきにはなをおりつゝなくさめは驚きん梅ものこらし

このころ今上の宮春宮などに人々まいりつかうまつ

るときゝて

身をよせん方もおもてはなかり鬼戀を厭はん人しなければ

いたう夜ふけて車のをとのしければ

さ夜更ていつち車のつきならん山のへさしていかにかや有覽

かやり火にやあらんおりすきたるけふりのたちけれ

は

夏はてゝ秋までくゆるかやりひは昔いかなる事かありけん

越前へくたるにこうちきのたもとに

夏衣うすきたもとをたのむ哉いのる心のかくれなければ

人のとをきところへゆくはゝにかはりて

ひとつなるとは命そおしかりしけふは別ぞ悲しかりける

正月ついたりころある人の御もとにせんよう殿より

あゆのかたをつくりてありければ

虫にたに欺かれしと思ふ身をいかなるあゆのかはるなる覽

むまこのをうなにてむまれたるをきゝて

ささきかねもし然らすはよき國の若き受領の妻かねならし

この人からものゝつかひにゆきたるころ月をみて

おもふ人あるかたへゆく久方の月の桂にふみやつけまし

おなしころ人くたりしころ

いとゝしく老はそふ共ゆき歸るひからは暫し短かならん

いまの左大弁の御子のいかにおほわりこのふたにい

ちひめのかたちなとかけるところに

市姫のかみのいかきのいかなれやあきなひ物に干よを積覽

ものおもひに遠ところへにけるかほをかくみのかけ

に見はへりて

なましるにとまれる顔をけさみれば鏡やつらき涙とまらす

はらからのみちのくのかみなくなりてのころきたの

かたのなまみるをこせたりしに

磯におふるみるめにつけて鹽釜のうら淋しくも思はゆる哉

藏人なるからものゝつかひにくたる殿上人の饒にか  
はりてとしかへりてはかうふりたまはるへかりけれ  
はなるへし

まちゐるもよの常なれやなかゝに年の歸らん事をしと思  
わかゝりしおりにつねに女のもとよりかへされて  
雁の子も巢守はあるといふめるをなとて夜ころに我歸る覽  
いなりになかてたりける女のもとに文やりけるをほ  
かさまになれりときゝて

我ためは稻荷の神もなかりけり人のうへとは祈らさりしを  
はかりてあはさりける女に

白玉か涙かなにそよひゝにはかりあたりの袖にこほるゝ  
くりしまの鹽やひるらむ此冬は見暮ぬものゝめつらしき哉  
しれる人なかゝはへたてゝありけるに七月七日のよ  
る

七夕のくもちはしらす中川をはやうち渡れかさゝきのはし  
加階したりけるかたのさはにしなるに山ふきのおほ  
ううつれりけるを束のさにとや

山吹の咲るみきはを見渡はそこゝそ花の咲り成けれ  
きみの御ふくなりける所のたてしとみにさうふのね  
をかけたりければ

古はたもとにかけしあやめ草けふはなかねをなにゝよす覽  
これは三條との

草枕しのふるたひのから衣露にたもとそあらはれぬへき  
かへりに

色ふかき萩のほとはきてそみるいとゝ都のなめらるゝに  
五月のすゑにさくらのもみちたるにつけて

我宿のこ末にのみは秋こしをいかにもみつる夏のなかには  
かへし

うちつけに涼しくもあるか紅葉みる里にはなかくす郭公さへ  
にる人の心にたるこゝろふとなくそ頼むたえすも有南

丹波の國府にて三月のゆふやみに  
ほつかはにまかふ汀のあやめ草月まつ宵はみしかゝらなん  
故あはたの右大臣とのゝはかなくなりたまひての  
年の十月に

神無月いつもしくは悲しきをこゝ井の森はいかゝみる覽  
はきに露のかゝりてたまかとみゆるをおりにやりて  
みるにみなきえてなければ

朝露を日たけてみればなにもなし萩の上はに物やとはまし  
ものおもへる女にかはりて

白露のきゆるをみてもうら山し萩の下葉に宿やからまし  
人にかはりておとこのたえたるころは〔霜懸萩を見て  
枯はつる冬もありけりあき萩の下葉の色をなに思ひけん  
こなくなりてなきねのゆめさめてうつゝとおほえつ  
るとて前のせんさいをみて

なてしこを夢に見てこそいつしかとあけて空しき床夏の花  
屏風繪にぬす人たかひたるかた書たるかたゝの人と  
も見えぬに

〔拾遺短下〕

ぬす人の立田の山に入にけり同しかさしの名にやけかれん  
いもうとの老たるかもとよりとしころの人なくなり  
たゝ〔霜懸るをとひたるに

いけらしと厭ふにしなぬ老の身をおしむにきゆる露を共哉  
としころあひそひたる人なくなりわたるころ中つか



さの宮のはゝの女御の御もとより

この代にて契りし事をあらためてはちすの上の露と結はん  
右大臣とのゝ女房さとへいてんとてくるまかるかす  
とて

またしらぬ戀の山路にまとふ哉さとへもさそふ人もあら南

かへし

はかなくて消にし露をはちすはに君しむすはゝ疑もなし

おなしをのゝ宮の中納言きたのかたにをくれてのた  
まへる

よそなれとおなし心を通ふへき誰もおもひの一つならねは  
かへし

ひとりにもあらぬ思ひはなき人もたひの空にや悲しかる覽

またせんようてんの民部のめのとのもよりおなし  
ころ

君はいかに寢覺すらめや思ひやる我たによをは思ひ明すや

かへし

ねさめとはまところむ程のあらはこそうきよを夢とみる計也

むまこのいたゝきもちろを見せたれば

年をへて數まさるへきさゝれ石の巖とならん程をしそ思ふ  
しれる人つくしのかたにくたるほとあふきにふねの  
かた書たるをこれはうちきみにとてとふらふ人のあ  
りしかは

思ふ人かすふか浦の君か爲とみてさつめる舟にやはあらぬ

まきといふ人を心にもあらてわかれたりしころ津の  
くにへくたりしにつりふねのともあそひしをいつ  
こそとゝひしかはまきのさとゝいひしかは

なにしおはゝいさ舟とめん牧の里こひつる人も有といふ也

はやうけさうしける女つのくになかたのもりといふ  
所にありときゝてやりける

命たになかたの森のなかりせはたよりに君か宿をみましや

故院の哥合にくさむらをたつぬといふ題を

〔拾遺歌〕

覺束ないつれなるらん虫のねを尋ねは草の露やみたれん

水上秋月

水のうへに光さやけき秋の月萬代までのかゝみなるへし

岸のほとりの秋花

ときしるき花を亂れて匂ふなるなみの心やかけておるらん

おもものもちの人の物とるを見て

獨してあまた恨むるおもものもちもたるわたをそ尋ぬへら也

一條のおとゝかくれたまひての秋いつれの度にかも

もそのゝ殿をはしましくおもひ

おほかたの秋とみるたに花すゝきうへし君ゆへ袖は露けき

とのゝ御かへし

うへをきし尾花にかゝる白露の消ぬさきにそ先まねかまし

つかさめしにのそむことありけるころさぬきのすけ

これすけか馬をかりければすけつかさたまはらはと

らせんと思ふ馬なりとてかしたりけるをかへすとて

心有てかひける駒のいはゝしにあやなくのりて我も頼もし

三條中納言つのくにゝらうしたまふところに御とも

にまでゝはまへちかき所にせんさいなとおかしきに

かれたるすゝきのうへより見えければ

濱風になひくおはなは朝ほらけ籬によするなみかとそ見る  
みちのくにのかみのおくりしてかへるに女車あふさ

かのせきにてゆきあひたりむかし心かけたる人にき  
きなしてやる

古はこえかたかりしあふ坂をいつちとかへる涙をかなしき  
この女。さるやうありて伊勢にかよふにそありける。  
きゝしこともあれと。ひかことにやとてとそ。

## 元輔集

村上の御時に紅葉合殿上人にせさせ給ふに

【おもひやるい】  
我思ふくらふの山のもみちはにおとらぬものは心なりけり

梨壺にへい内侍のすみ侍りけるにさうしのへたての  
かみよりゑふくろにも入て藤の花してゆひてうち  
こして侍しに

立かへりみれともあかす春風のなこりにこゆる藤浪のはな

三月盡

風はやみよしのゝ山の櫻花ちらぬに春のすきぬてふらん

に 藏人所のをのことも川原にすゝみしにまかりたりし

吹風はすゝしかりけり草しけみ露のいたらぬ萩の下はも

同御時の菊合に

【さのい】

たとふへき色もなきかな菊の花枝をわきてや露もおくらん  
つかさ給はらて又の日左近藏人のもとにつかはし侍  
る

年毎にたえぬ涙やつもりつゝいとゝふかくやみをしつむ覽

しむ 小野宮の太政大臣の家の池のほとりにて櫻の花をゝ

櫻花そこなるかけそをしまるゝしつめる人の春かと思へは

はらて 藏人所に櫻の花の散をみてつかさ給るへき年の春給

さくらこそ雪と散けれ時雨つゝ春ともしらて過しつるかな  
小野宮の太政大臣月輪寺に櫻の花みにおはしたりし

に

たかためかあすは残さん山櫻こほれて匂へけふのかたみに  
梨壺の櫻花さかりなりけるにくにちか哥よみてつけ  
て侍りける後に聞てよみて侍りし

花櫻おもひやりてもたへぬ哉あかすちりけんをりの心を  
藏人所まかりはなれて後なしつほにてをのことも雨  
ふる日さけたうへしついでにともたちにあひて侍る  
よしを

石上ふりにし人にあふ時はうれしかりけりなつのよのあめ  
冷泉院の池のほとりにて藏人所ののことも櫻をし  
み侍るにまかりあひて

いにしへのなこり成へし池水にうつれる花の浪とみゆるは  
天徳三年二月三日權大納言源朝臣舟にてやはた詣侍  
るに道にて人々のおもはん事をいへと侍りしに  
わたし守君にみなれて老にけり雲井の岸にまとふへき哉  
またの年の十月に同大納言の家に残れる菊をゝし  
侍りて

なかきよの星かともみよ初霜のおきて残せるしらさくの花  
同大納言の家に菊をもてまかりてよみて侍る  
霜ふかく成行年になかれけるまかきにおひて年へぬる菊  
同大納言菊をしむ曉に紅葉をらせて讀侍りし

夜もすから残れる菊をしむとも紅葉の色も忘れさらなん  
かへしに

忘れめや深きもみちのかけならて移ふ菊のあらは社あらめ  
小野宮太政大臣花宴し給ふ日浪をへたてゝ花をみる  
といふ題

岸ちかみ浪のへたつる花の色は折てたに社みるほとにせめ

また

遠近の岸をは浪のへたつれとかよふは花の色にそ有ける  
ちいさき人の許にかひをおこせて侍し人に  
ゆくさを心もとなく頼みけるちひろのはまの貝を嬉しき  
またあまひこのすにかひをいれて同人におこせて侍  
しに

虫のねのよる共しらてうつせ貝思はぬかたにもとめける哉  
天祿二年正月ひえによしたかの少將のほりて鶯の聲  
心もとなきよしよめと侍りしに

鶯の音はうちとけて足引の山の雪こそした消にけれ  
小野宮太政大臣さか野に花みにまかりて侍りしに

秋の野の萩のにしきを故郷に鹿の音なからうつしてし哉  
天徳四年二月十四日の夜大納言（訃）右大將藤原朝臣  
（師尹）なと月のあかきに昔を戀ふる心人々よみ侍りし  
に

天の原月かはらぬ空なからありし昔のよをやこふらむ  
宮内卿もとなか八十賀にやかて法師になりて布引寺  
といふ所にこもりて侍りしに

夜を深みまつにゆつりて歸る哉うき世をそむく程の遠さに  
天徳二年八月廿四日白川院に大納言源朝臣（訃）秋花  
露を帶てひらくといふ題を右大將藤原朝臣（師尹）なと  
まかりあひて

ほころひて花咲にけり藤袴にはひをむすふ露にまかせて  
安和二年二月五日一條のおほいまうち君白河院にて  
予日し侍りしに



わかなつむ子日の松の千世のかけすみつゝみせよ白河の水  
ありひらの左大臣八十賀あせちの更衣のし侍しに若  
なの哥

春毎に若なつみて祈るへきをしほのかひに色ふかきまつ  
大將の子のいか子日にあたりて侍りしに

二葉なる子日の松をいかはかり行末とほき物にたとへん  
小野宮太政大臣の家にて子日し侍りしに

千年ふる宿の子日の松を社ほかもためしにひかんとすらめ  
内の女房とも子日しにまかり出んとて侍りけるに中  
宮のなやみ給て俄にとまりにければまうけて侍りけ  
るわりこつかはすとて

春霞子日の野へに立出ねはまつかひなくて暮しつるかな  
つかさめしの子日にあたりて侍りしにあせちの更衣  
の局より松をはしにて物出して侍りしに

ひく人もなくて年ふるみよしの松は子日をよそに社きけ  
式部卿親王の子日の日人々にかはりてよみて侍る  
舟岡に若なつみつゝ君かため子日の松の千世をくらん  
子日する松の千年の春毎に若なつまん野へのまに

安和二年二月五日頭中將さねすけの朝臣小野宮の太  
政大臣の子日しにつかはしけるによみて侍る  
老のよにかゝる子日はありきやと木高き嶺の松にとはや  
女房車に梅花折てつかはすとて

松をのみひきてかへれば梅花おもふ心ののこるらむかし  
人にかはりて  
萬代の春の子日にてゝみん松はいくたひおひはかはると  
天祿三年二月三日一條の太政大臣さい院にて子日し

侍りし日庭の松をもてあそふといふ題を

千早振いつきの宮の庭の松いく世の千代をもとめかそへん  
其日齊院のお前のものゝすはまに鶴小松舟などある  
に

つみて送れあまのつり舟棹さして松の千年も鶴のよはひも  
大貳くにのりか女の賀し侍しに

二葉なる松はひかすとおもふらん千年の春のけふに残すを  
又

けふよりは二葉の松をむつまじき君諸共においんとすれば  
すはうに侍し時岩に生たる小松を人のもてきて侍り  
しに

萬代に千年をそへてみつる哉いはほなからにひける小松は  
植てみんちとせの春の今日毎に子日の松はかゝりけりとも  
すはうなるかつまのむまやといふ所にて子日し侍り  
しに

思ひいてよ千年の春のけふ毎にかつまの浦のきしのひめ松  
ある人のほらめるほとにその父身まかりて後むまれ  
て侍る七日の夜につかはしける

千世をへんかたみともみよ忍ひつゝ獨すたてん鶴のけ衣  
頭中將さねすけの朝臣子むませて侍し七日の夜

をしほ山いかなる嶺の松なれば千世を一夜になして生らん  
九月九日人のむまれて侍るに七日にあたりて侍るに  
時しもあれけふのけふにしあひぬれば千世ををかん菊の白露  
人の裳きしに

千年ふる松に玉もそかゝるへき興つ白浪たちかへりつゝ  
たかときか子のかもの祭の日はかまきし侍りしに

千年とはわれならねともゆふたすきむすふの神も祈かく覽

冷泉院の御めのとこの七夜よみて侍る

たちねも皆なからへて住吉の二葉の松の千代をこそみめ  
なかさよかむまれて侍し七日夜

松かえのかよへる枝をとくらにてすたてもるへき鶴の雛哉  
人の裳き侍るに

萬代をなからの濱のさゝれ石の今宵よりこそ苦もむすらめ  
是もまた人の裳き侍りしに

住吉のうらの玉をもむすひあけて渚の松のかけをこそみめ

とうの少將あつとしか子むませて侍る七日夜

姫小松大原山のたねなれば千とせけたゝにまかせてをみん

人の裳き侍るに

玉もよる岩ほのほとに成にけりなからの浦の濱の眞砂は

宰相もとすけの朝臣のむま子に袴させ侍りしに

育くみて君すたてすは鶴の子の雲ゐなからや千世を知まし

人の子うみたる七日夜

たつのこの雲井にあそふ齡こそ空にしらるゝ物には有けれ

宰相もとすけの朝臣の娘のもき侍りしに

結ひあへる君か玉ものひかりにはさやけき月の影そはる覽

きよはらのすけときか子むませたる七日夜

遙にそ思ひやらるゝうとからぬ我中やまの松のすゑの世

きのかみためみつかちいさき子をいたしてこれいは  
ひて哥よめといひ侍りしに

萬代をかそへんものはきの國のちひろの濱のまさこなり鳧

右大將藤原朝臣子むませて侍りし七日夜さきそむる  
梅といふ題をよみ侍りしに

さきそむる梅の花かさかさすみはうしろやすきを萬よの春

又のとしまたむませて侍るに

年毎に祈りしくれはおもなれて珍らしけなき千世と社みれ

もとすけか子のとみはたとつけて侍りしにはかまき  
せ侍りしを

世の中にことなることはあらず共とみはたしなん命長くて

大貳くにのりの朝臣むま子のいかに侍りしにわりこ  
てうして哥を繪にかゝせ侍りし

みてしかな二葉の松の生茂りやそうち人のかけとならんよ

住の江のはまの眞砂の苦ふりて岩ほとならん程をしそ思ふ

松の苦千とせをかねて生しけれ鶴のかひこのす共なるへく  
また後にきせ侍りしに

縁この千世そ常盤に祈らるゝのるへき山の松とみるゝ

かはもとといふ所に

行春のをしむにとまる物ならは何かはものを人のおもはん

冷泉院にわたらせ給ふて池のもとの初雪といふ題を

殿上のをのこともよみ侍りしにかはりて

池ちかく降初雪の名残には玉のうてなそあらたまりける

五月ふたつある年庚申に人にかはりて

五月雨の數くはゝれる年たにも山ほとゝきす聲にあかはや

さみたれのあまりもまたし時鳥たゝ一聲に明もこそすれ  
うちの藤花の宴に人にかはりて

もゝしきになひきてみゆる藤波はいく萬代の春をたのまん

つは前栽の宴せさせ給に人にかはりて

月かけのいたらぬ庭もこよひこそさやけかりけれ萩の白露  
天祿四年七月七日一品宮の扇合にあやの文におらせ

給とてよみ侍りし

天河扇の風に霧はれて空すみわたるかさゝきのはし

又扇合に人にかはりて

萬代の秋やしのはん棚機はあふきの風のなこり久しく

村上の御時五月四日庚申をんな方男方哥合せせ給

ふに男方勝にければ八月廿日にまけわさしていとを

むすへるこに松虫すゝむし入てをみなへしにつけて

女郎花雲にかゝりてはふくすのまくるとや思ふ露の分めを

千世をへてくる秋毎に聞えなん行末とほき松むしの聲

内〔そらイ〕の御前に紅梅を藏人ともによめとおほゝせらるゝ

にかはりて

春雨やふりてそむらんくれないの色こくみゆる梅の花かさ

梅花か〔あイ〕はことゝくに匂はねと薄くこくこそ花はさきけれ

くれないに色こき梅は鶯のなきそめしより匂ふ成へし

中務かある所にまかりたりしに貝をこに入て侍しに

浪間分みるかひあるはいせの海の何れのかたのなこり成覽

かへしなかつかさ

いせの海は名残たになくあせに鳧〔うらイ〕なのみ高師の濱と聞えて

又かへしつかはす

しら波の昔をかけて聞からにしほみつうらと成ぬへきかな

つかさめし〔うらイ〕のころ過て雪の降て侍しに兼盛か許につ

かはしゝ

雪ふかみこしのしら山われなれやたか致へしに春を知らむ

中務娘の中納言清水に詣て人に物いひ侍しを聞てつ

梅花に雪のこほりつきて侍るを花か雪かと人のいひ  
て侍りしに

花を雪ゆき〔そらイ〕を花かとみてそふる梅の氷のとけぬかきりは

にし〔そらイ〕の京に住侍し人のはぬ心の哥よみて侍し返事

に

草わかみ結びし萩はほにもいてすにしなる人や秋を知る覽

順か子なくなりて侍りしとふらひにつかはしゝ

思ひやるこゝひの森の雫にはよそなる人の袖もぬれけり

したかふか返し

朽はてゝなきこのもとは君かとふ言のはみるも先ぞ悲しき

又かへしつかはしゝ

おひたゝてかれぬと聞しこのもとの歎の森といかて成けん

正月二日鶯は聞やと人のいひ侍しに

年毎に春のわするゝやとなれば鶯のねもよきてきこえす

おいたる人〔そらイ〕のなるとよりめをおこせて侍りしに

わたの原あさくも思ひやらぬ哉おいの浪わけみるめかる浦

櫻のちれる所〔そらイ〕にて

花の影たゝまくをしき今宵哉にしきをさらす庭とみえつゝ

貫之集を人のかりて返し侍るにつかはしゝ

かへしけん昔の人の玉章をきゝてそそく老のなみたは

ある所に松虫すゝ虫籠に入てひわりこなとそへて侍

しに

萬代の秋をまちつゝきゝわたれいはほにねさす松虫のこゑ

四月一日とともときかありまよりまうてきてかへるに

時鳥なんなきしとかたりければ

春はをし時鳥はたきかまほしおもひわひぬるしつ心かな



こに侍るものゝわかなのやうなる物して侍しに  
二葉にてみし面影もかはらぬに若菜つみけるけふにあふ哉  
また

おりたちて若菜をいかでつませけんひまを離れし程もへなくに  
かゝいまいし侍しにえせて鶯のなくをきゝて

鶯のなくねはかりを聞えける春のいたらぬ人のやとには  
みちすゑ同しことかゝいを得し侍らていかなる花か  
まづは開くるなとやうなる心をよみて侍りしかは

おそくとく開くる枝を花ゆへに身をもうしとは何か思はん  
宰相中將の子むませて侍し七日の夜梅花を題にて  
さきそむる梅の花笠いつよりかあめの下をはしらんとす覽  
時文か女なく成て又の年の同頃いひおこせて侍る

年をへて馴こし人を別れにしこそは今年のけふにそ有ける  
かへし

別れけん心をくみて涙河おもひやる哉こそそのけふをも  
菊のはなのいとしろきにつけて時文

菊の花さかりの色の我身にはしろくなるなとわひしかる覽  
かへしに

露のわく世をそ恨る我みには盛り色のさかりならぬに  
小一條のおとゝのなく成侍て後櫻の花おもしろきを

もて遊び侍る日かへる雁といふことを  
かへる雁君もしあはゝ故郷に櫻をさむとなきてつけなん

ある所にて月のおもしろきに昔のものの語なとして  
かくはかり秋の月かけあかければ曇し冬の空や戀しき

大貳くにのり正月にはらかと云物おこせて侍しに  
みよしのも若菜摘らんまきもこの檜原霞みて日比へぬれば

同人のめしにて侍し又の年つかはしゝ

月影をへたてし比の春霞みてなむらんけふのかなしき  
かねもりかするかへまかりしにつかはしゝ

しらさき田子の浦なみ袖ひちて老の別れにかゝる物とは  
大貳くにのりの朝臣めのなく成ぬと聞てつくしへつ  
かはす

年ふかき人に別の涙河袖のしからみおもひこそやれ  
同くにのり秋風の夜さむなるよしよみて侍りし返事  
につかはしゝ

思ひきや秋の夜風のさむけきに妹なき床にひとりねんとは  
左大將のひえにのほりて歸るむかへにまかりて後ひ

さしうまからさりしかはおほつかなきよしの哥の侍  
し返事に

草深き谷の秋きりうつみてんおほつかなく忘れぬへし

頭中將さねすけか許にまかりて昔物語なとせしに

老て後昔をこふる涙こそこゝら人めもつゝまさりけれ  
かゝいし侍るへき年もれてえし侍らて雪いたくふる  
日人のもとに

浮世にはゆきかくれなてかき曇りふるは心の外にもある哉  
人のかうふりし侍りしに

こむらさきたな引雲をしるへにて位のやまの峯は尋ねん  
ふくなる人の許にきぬの袖のかきりをつかはすとして

うらさえて道にもあらぬ衣手は袖の限りをみるそやさしき  
おほいまいち君の家にて藤花を見侍しついでに

藤花こきむらさきの色よりもをしむ心をたれかそめけん  
ともしか四月一日ありまよりまうてきて時鳥のな

給とてよみ侍りし

天河扇の風に霧はれて空すみわたるかさゝきのはし

又扇合に人にかはりて

萬代の秋やしのはん棚機はあふきの風のなこり久しく

村上の御時五月四日庚申をんな方男方哥合せ給

ふに男方勝にければ八月廿日にまけわさしていとを

むすへるこに松虫すゝむし入てをみなへしにつけて

女郎花雲にかゝりてはふくすのまくるとや思ふ露の分めを

千世をへてくる秋毎に聞えなん行末とほき松むしの聲

内の御前に紅梅を藏人ともによめとおほゝせらるゝ

にかはりて

春雨やふりてそむらんくれないの色こくみゆる梅の花かさ

梅花かほことゝくに匂はねと薄くこくこそ花はさきけれ

くれなるに色こき梅は鶯のなきそめしより匂ふ成へし

浪間分みるかひあるはいせの海の何れのかたのなこり成覽

かへしなかつかさ

いせの海は名残たになくあせに鬼なのみ高師の濱と聞えて

又かへしつかはす

しら波の昔をかけて聞からにしほみつうらと成ぬへきかな

つかさめしころ過て雪の降て侍しに兼盛か計につ

雪ふかみこしのしら山われなれやたか致へしに春を知らむ

中務娘の中納言清水に詣て人に物いひ侍しを聞てつ

かはしゝ

匂ふらん霞の遠の山櫻おもひやりてもをしまるゝかな

梅花に雪のこほりつきて侍るを花か雪かと人のいひ  
て侍りしに

花を雪ゆきを花かとみてそふる梅の氷のとけぬかきりは

にし京に住侍し人のはぬ心の哥よみて侍し返事

に

草わかみ結びし萩はほにもいてすにしなる人や秋を知る覽

順か子なくなりて侍りしとふらひにつかはしゝ

思ひやるこゝひの森の雫にはよそなる人の袖もぬれけり

したかふか返し

朽はてゝなきこのもとは君かとふ言のはみるも先を悲しき

又かへしつかはしゝ

おひたゝてかれぬと聞しこのもとの歎の森といかて成けん

年毎に春のわするゝやとなれば鶯のねもよきてきこえす

おいたる人のなるとよりめをおこせて侍りしに

わたの原あさくも思ひやらぬ哉おいの浪わけみるめかる浦

櫻のちれる所にて

花の影たゝまくをしき今宵哉にしきをさらす庭とみえつゝ

貫之集を人のかりて返し侍るにつかはしゝ

かへしけん昔の人の玉章をきゝてそゝく老のなみたは

ある所に松虫すゝ虫籠に入てひわりこなとそへて侍

しに

萬代の秋をまちつゝきゝわたれいはほにねさす松虫のこゑ

四月一日ともときかありまよりまうてきてかへるに

時鳥なんなきしとかたりければ  
春はをし時鳥はたきかまほしおもひわひぬるしつ心かな

こに侍るものゝわかなのやうなる物して侍しに

二葉にてみし面影もかはらぬに若菜つみけるけふにあふ哉

また

おりたちて若菜をいかてつませけんひまを離れし程もへたに  
かゝいまいし侍しにえせて鶯のなくをきゝて

鶯のなくねばかりを聞えける春のいたらぬ人のやとには  
みちすゑ同じことかゝいを得し侍らていかなる花か

まつは開くるなとやうなる心をよみて侍りしかは

おそくとく開くる枝を花ゆへに身をもうしとは何か思はん

宰相中將の子むませて侍し七日の夜梅花を題にて  
さきそむる梅の花笠いつよりかあめの下をはしらんとす覽

時文か女なく成て又の年の同頃いひおこせて侍る

年をへて馴こし人を別れにしこそは今年のけふにそ有ける

かへし

別れけん心をくみて涙河おもひやる哉こそそのけふをも

菊のはなのいとしろきにつけて時文

菊の花さかりの色の我身にはしろくなるなとわひしかる覽

かへしに

露のわく世をそ恨る我みには盛り色のさかりならぬに

小一條のおとゝのなく成侍て後櫻の花おもしろきを

もて遊び侍る日かへる雁といふことを

かへる雁君もしあはゝ故郷に櫻をしむとなきてつけなん

ある所にて月のおもしろきに昔のものの語なとして

かくはかり秋の月かけあかければ曇し冬の空や戀しき

大貳くにのり正月にはらかと云物おこせて侍しに

みよしのも若菜摘らんまきもこの檜原霞みて日比へぬれば

同人のめしにて侍し又の年つかはしゝ

月影をへたてし比の春霞みてなむらんけふのかなしき

かねもりかするかへまかりしにつかはしゝ

しらさき田子の浦なみ袖ひちて老の別れにかゝる物とは

大貳くにのりの朝臣めのなく成ぬと聞てつくしへつ

かはす

年ふかき人に別の涙河袖のしからみおもひこそやれ

同くにのり秋風の夜さむなるよしよみて侍りし返事

につかはしゝ

思ひきや秋の夜風のさむけきに妹なき床にひとりねんとは

左大將のひえにのほりて歸るむかへにまかりて後ひ

さしうまからさりしかはおほつかなきよしの哥の侍

し返事に

草深き谷の秋きりうつみてんおほつかなくを忘れぬへし

頭中將さねすけか許にまかりて昔物語なとせしに

老て後昔をこふる涙こそこゝら人めもつゝまさりけれ

かゝいし侍るへき年もれてえし侍らて雪いたくふる

日人のもとに

浮世にはゆきかくれなてかき曇りふるは心の外にもある哉

人のかうふりし侍りしに

こむらさきたな引雲をしるへにて位のやまの峯は尋ねん

ふくなる人の許にきぬの袖のかきりをつかはすとて

うらさえて道にもあらぬ衣手は袖の限りをみるそやさしき

おほいもうち君の家にて藤花を見侍しついでに

藤花こきむらさきの色よりもをしむ心をたれかそめけん

とるときか四月一日ありまよりまうてきて時鳥のな



きつるといひ侍れは

時島まつ初聲をいつしかといかなる人<sup>〔かい〕</sup>にきてかたりけん

堀河の中宮うせ給て御服過して内侍のまかり出しに

雨のふり侍りしかはつかはしゝ

故郷はありとも君を忘れけんけふ降り雨はやましを  
ぬす人の入て侍りしに又日人のかいねりのきぬをお  
こせて侍りしに

浅からす思ひそめてし衣かなかゝる時こそそてもひちけれ<sup>〔はい〕</sup>

すけゆきか家に冬の月のおもしろきにまかりて侍り  
しに

いさかくており明してん冬の月春の花にもおとらさりけり

男なく成て侍る女の程もなくこと人にあひぬと聞て

つかはしける

年へにし人のかたみの藤衣すてやしにけんまたやかけたる

大貳くにのりかすはうおこせて侍りしに

くらゐきぬ頼めそめてし色なれはいとゝ深くも成ぬへき哉

まためのなく成たる秋さむき風をとほぬことゝいひ  
て侍りし返事に

こし方もみえて眺むるかり金の羽風にはらふ床よかなしな

年頃つかさも給はらぬに子日しに人のいてまかりた  
りしに

谷深くしつむたとひにひかされて老ぬる松は人もてふれす

よしのふか伊勢へ幣の使にてまかりしに<sup>〔をしい〕</sup>

すへらきの鈴の限し有ければふり出て行もつらからなくに

人の子うみて侍る七夜に

千年をは松と竹とに任せつゝ八百よろつよはいはて思はん

ある宮の入道し給へりしに

月影をいるゝ山へはつらからて思ひへたてん世をそ恨むる<sup>〔いりけんい〕</sup>

女三の宮にまいりて

世をすてゝ山へいる人いらましよ昔の空の曇らさりせは<sup>〔や〕</sup>  
とほふるか子の七夜に<sup>〔まづ〕</sup>

おひしけれひら野の宮のあや杉よこき紫の色かさぬへく<sup>〔にたらい〕</sup>

三輪の山しるしの杉はありなから致へし人はなくて幾世そ

三月はかり櫻の花のいとおもしろくさきたるに風の  
よるいたく吹侍りしに

くれて後うしろめたきを山櫻風のおとさへあらく聞ゆる

まかりかへるとてまた

山櫻みすてゝかへる心をは何にたとへてひとにかたらむ

みつなかひたち成てまかりくらんとし侍るころ

筑波山つくゝ物をおもふ哉君をみさらんほとこのこゝちを<sup>〔なのい〕</sup>

川原院といふ所に人々もるともに花見にまかりたる  
にそこには花も侍らて山櫻の遙にみえしかは

春霞たちなゝよりそうすくこき錦とみゆる山のさくらを<sup>〔にい〕</sup>

四月一日頃みただけにまうて侍りてよしの山のわたり  
にて

古ものほりやしけん吉野山やまよりたかきよはひなる人

とうの弁さねすけか子むませ侍りし七夜

日の本を心やすくそ思ひぬる國のちふさのけしきみつれば

衛門督入道し侍りしにつかはしゝ

ますかゝみふたゝひよにや曇るとてちりを出ぬと聞は誠か

津の國にまかりていさりをするをみて

いさり火の底のみくすとみえぬるは浪の中にや秋を惜まん  
前の大貳くにのりの朝臣の四十九日し侍りしすぎや  
うのかねにそへて侍りし

鐘のおとに涙の玉を添てたに玉のかさりをまさんとそ思ふ  
山里なる所に秋の頃はひ住て人につかはし

紅葉ちるころなりけりな山里のことそ共なく袖のぬるゝは  
人にかはりて

風早み秋はてかたのくすのはのうらみつゝのみ世を（のい）はる哉  
とてつかはしたる返事はなくてほかへ遣したる返事  
をもてたかへてまうてきたれは又つかはす

とひかよふてふのたよりに散にきと聞し櫻も花をみる哉  
えいしちかもとにまかりてつかさのほしく侍ること  
はくとくのためなりといひてよみて侍りし

世を渡すひちりをさへやなやまさん深き願のならす也せは  
九月廿日のほと右大將さか野にまかりて侍し供にて  
こぬ人をなく譬へて語らましくるゝ秋をしむのへの心ちを  
歸りまうてきて又の日大將の家にてしくれのし侍り  
しに

冬をあさみまたき時雨と思ひしをたへさりけりな老の涙も  
同大將の家に九月はかりに庚申し侍りしに菊の花を  
題にて

秋ふかきまかに生る菊みれは花のうへともおもほえぬ哉  
十月一日頃に殿上のをのこともさか野にまかりしに  
よみて侍し

秋深みまたきにおふる菊の花立かへれともつけにやはや  
とたいによみて侍りし

秋はまた遠くならぬにいかで猶立かへりぬと人につけはや  
正月申文につけて侍し藏人に

露のいのちもしとまりて秋ふ共今年計りそ春のゝそみは  
文月はかりに萩のさきみたれたる家にまかりて

ほかみれは秋はきの花咲にけりなと我宿の下葉のみこき  
山寺にまかり侍りしにある人の法師になりたるなめ  
りといひ侍れはつかはし

憂世もし外になしやといへてしを道に入ぬと誰かつてまし  
くにもちかおなしことのそみならてなけくと聞侍し  
頃遣し

つれゝと詠むる春の鶯もなくさめてたになかはなかなん  
つかさめしの後にさふらひし内侍の許につかはし  
心あてにたよりもあらはつたへ南さかて露けき櫻ありきと  
山里にまかりかよふ所ありしを花見にと人々のまう  
てきたりしに

櫻こそ嬉しかりけれ花見にといはては人のくるしなければ

# 兼盛集

我君としこる民をめぐみ國をおさめおはしますこと  
御まつりことかすおほくて山にのほり水にたはふれ  
給ふおほみあそひもみえさりき西はなくら山の秋の  
もみちいたつらにその色をうしなひ東はむらさい野  
の春の梅むなしうそのかけをうしなひきしのほとり  
みつきようすみ山の聲たかうよはふ風はえたをなら  
さすあめはつちくれなやふらす世中もたのしけれは  
けふの御幸もありますなりかきりなき我君の御とく  
をおいたるは老たるをよるこひわかきはわかきをよ  
ろこふ世中のたのしきことはけふの御幸をためしと  
すへしとつけしめて其日の和哥

春日してよの榮ゆへき例にはけふの御幸をよには残さん

かはらの院にてはるかに山の櫻をみる

道遠みゆきてはみれと山櫻こゝろをやりてけふは歸りぬ  
春の花さかりにはかならずこんといひたりけるをさ  
かりになりにつれは

花盛たのめし人もある物をかくさけり共つけすやあらまし  
小野の宮のおとゝの櫻の花御覽しにおはしましたり  
しに

山櫻あくまでけふはみつるかな花ちるへくも風ふかぬよに  
春頃夢に人のみえたりしに思ひつゝにやありけん  
思ひつゝれつればみえつ春の夜の正しき夢に空からすな

夏

大監物なる時御こき侍しに内侍所に参りたりしにい  
とおかしけなるこうりをつゝみていたしたりしかは  
山城のこまのわたりをみてしかな瓜つくりけん人の垣れを  
五月ころ物いひたりしになにかはといひたりしにた  
のみてさもあらずなりければ恨みて雨降ぬへかりけ  
る日

秋

天の原くもればかなし人しれす頼む木のもと雨ふりしより  
あきの夕くれにむしのいとあはれになくに  
あさちふに秋の夕暮なく虫は我ことしたに物やかなしき  
秋月いと面白きに紅葉散夜家にてよみし  
あれはてゝ月もとまらぬ我宿に秋の木のはを風そふきける

冬

ふゆ山寺に心ちわつらひてありけるにとふらひにこ  
んといひたりける人まつほとに雪の松にかゝりたり  
けるを

山かくれ消せぬ雪のわひいかなしきは君まつ葉にかゝるなり鬼  
白河の關にて

たよりあらはいかて都へ告げや覽けふ白川の關はこえぬと  
駿河へくたるにあはつといふ所に惠慶かきたるにあ  
はれはかく

恨めしき里のなれや君に我あはつの原のあはてかへれば  
返し

栗つ野のあはて歸ればせたの橋こひてかへれと思ふ成へし  
世中恨ける比多きやうか許にいひやる



世中を今はかきりと思ふには君こひしくやならむとすらん  
春頃

春霞たな引空は人しれす我身よりたつけふりなりけり  
石まより出る泉そむせふなるむかしなこふる聲にや有らん  
はしめて女の許に

同しくはつけてをこひん難波めの忍ひにのみはもえて渡らし  
またみぬ人のとひたりければいとうきたりやと女の  
いひたりけるに

みぬ人の戀しき時はなのつかから我のみならずたれもしる覽  
いかでと思ふ人のちかくあるあたりにきて  
濱千鳥かひなかりけりつれもなき人のあたりは鳴わたれ共

又  
何せんに人をおかしと思ひけん戀する袖のやすからなくに  
松に露のかゝれるを落さすをりて

あふことを今やとまつにかゝりてそ露の命の年もへにける  
いといたふしのふる中に

はかもなく落る涙を包みてそ人めもるとはいふへかりける  
我戀はつゝ井の水となりなゝん心をくみて人はしるへく  
いみしう恨むればとき／＼はきこゆるゐりもあるは  
と女のいふに

言のはゝ色やは見ゆるこむらさき深き心はれそめてそしる  
又  
さゝれ石の上もかくれぬ澤水の淺ましくのみみゆる君かな  
いかでとおもふ人に

谷河の岩まをわけて行水の音にのみやは聞わたるへき  
人なこひて  
〔かんと思ふし〕

我戀にくらへてしかば山河の岩まの波にかすをそへつゝ  
おなし人に

君を思ふかすにしとらはをやみなく降添雨のあしは物かは  
いひそめていと久しうなりにける人に  
二葉より今はおほたの松のはの幾よか君を戀てへぬらん

又  
つらくのみみゆる君かな山のはに風まつ雲の定めなきよに  
又

君こふと消こそわたれ山河にうつまく水のみなはなられと  
返事もさらにせれば  
我戀にたくひてやりしましたましの返り事まつほと久しさ

女のつれなくのみいへれば  
戀そめし心をのみそ恨みつる人のつらさを我になしつゝ  
我戀はなからの橋の下よりもつくる世なくもなりにける哉  
ものなといへといとつれなき女に

我戀はいたなき淵の釣なれやうけも引れてやみぬへらなり  
女のもとにまかりて物なといふにつれなきを思ひな  
けくほとに鳥さへなけは

天のとの明くるやをしき庭鳥の鳴ぬあしたもなくそ成ぬる  
女のもとにまかりていたつらにれて歸るに  
逢事のなきつゝ歸るよな／＼はいたつらねにも成にける哉  
すみよしといふ所にて人をこひつゝ

なふりて世に住の江の神もなし戀しき人の影もみえれば  
女よにこひしともおもはしといひたりければ  
戀しとは何をかいはん岩波にたくふみなはの消ぬはかりを  
七月七日にこよひの星含みんとてはしにぬたりけ

に忍びてみてのあしたに  
天の河かはへの霧の中わけてほのかにみえし月の戀しさ  
かへし

戀しくは河への霧の夜をこめて立返らずそあかしはてまし  
又

あな戀し雲間の月に人をみておもかけにのみそへるころ哉  
冬のはしめのころ霜のいと白きをみて我よりたかき  
人に

獨れにあまたの冬をへぬる哉身をひと霜に思ひおかれて  
こほりしたるあした人に

冬の夜の袖の氷のこりすまに戀しき時はねをのみそなく  
雪のいみしうふるに

物思ひてよにふる雪のわひしきはつもりく消ぬ計りそ  
雪のふりたるあしたに

白山の雪のした草我なれやしたにもえつゝ年をのみふる  
女のもとよりわすれわたるかなといひをこせたるに

忘るとは恨みさらなんはし鷹のとかへる山の樵はもみちす  
女ふかき心にはあらざりけりと恨たりしに

淺しとは恨みさらなん渡津海のこふれはいと沖になる身を  
女かへしもせざりければなける物なといふことも

あるものゝとて  
言のはなける物と思ひせは何かは人のつらくしもあ覽

なないとつらかりける女に  
難波かた汀の芦のおひ風に恨みてそふる人のこゝろを

いといたう恨みて  
られけと猶そ戀つる水無瀬河うけもひかれぬ身とはしるく

文かよはしていと久しくなりぬれとつれなき人に  
足引の山のかけはし久しくもなけきこりつゝ渡りぬるかな  
いとつれなかりける女に

神なひの山のさは水君なれや淺ましくのみみえしわたれば  
思ひかけて久しく成ぬる人のことさまに成ぬと聞て

うへしより枝のみまさる歎とて頼めはもとに雨そふりける  
大入道殿御賀の御屏風の歌

見わたせば松のは白きよしの山いくよ積れる雪にかある覽  
しらゝの濱

君か代の數共とらむきの國のしらゝの濱につめるいさこそ  
難波

難波江に茂れる芦のめもはるに多くのよをば君にとそ思ふ  
須磨

すまの浦にあさりする海士の大方はかひあるよそそ思ふへらなる  
なからのはし

朽もせぬなからののはしの橋柱久しき事のみえすもあるかな  
みつのみまさ

まこもかるみつの御牧の駒の足の早く樂しき世をもみる哉  
しかすかのわたり

我妹子か家路ふみわけしかすかの渡り難くもおもほゆる哉  
むさし野

むさしのを霧のはれまに見渡せば行さき遠き心地こそすれ  
ふたむらやま

玉くしけふたむら山の月影は萬代をこそてらすへらなれ  
まかきの嶋

よる波のかすをそしあすなりにける籬の嶋のまかけれ共

あさかのぬま

ぬま水も氷にけらしこしかたの山路も今はたえやしぬらん

末のまつ山

あしたつのむれぬる末の松山はいくそかさねの千年なる覽

よるのみそすくいれたるはこのふたにあしてにて

しら波ののときき浦の姫松は千年の數そそひてみえける

又

此夏のうすき衣は行末のかされてかゝるをりをたのまん

又御杖のふくろに

なよ竹のよなかき杖をつきてこそ八百萬代の秋はかそへめ

又

萬代の山にれさしはしめより君か杖にと見えにけらしも

御かさしのおほいにぬへる

萬代のよゝのみとりも清き哉これや千年のすめる水の色

千代をへて岩の上なる鶴さへそ君か千年につたふへらなる

しらたつの天の原よりとひつるは遠き心をしれるなるへし

御扇にあしてにて

昔より扇つたふる袖なれば君か手にてそ萬代はへむ

御はしのたいあるおしきのおもてに

君かへん萬代の數かそふれはたゝかたはしの千年なり鬼

三條のおとゝのおまへの前裁あはせに左右わきて歌

よむ人めしてよませたまひけるに水の上秋月

にこりなく千世をかそへてすむ水に光をそふる秋の夜の月

水のほとりの花

むらさきの雲とそ見ゆる月影に水の面てらす岸の秋はき

草むらの虫

千年とそ草むらことに聞ゆなるこや松虫の聲にはあるらん

齋宮のみやにてかんし給しに

萬代と天の空まで聞ゆるはよふかき松のしらへなりけり

駿河の守にて神はいして歸るにいそのほとりを行と

て

みさこぬるあら磯に立波なれはたいらけく社我國はあれ

申文にかきて奉る

澤水に老のかけみる芦たつの鳴音雲井にきこえさらめや

女のいと思ひのほかになといひけるに

谷ふかくやく炭かまのけふりたに峯の雲とはならぬ物かは

ひら松のありけるを見て

年をへてたけも變らぬ平松のあやしやいかてれもみてし哉

女にいきて物いはんといひければ來ても何ことをか

といひたるに

芦の屋のこやとしいは津の國の難波のことかいはす有へき

宮つかへ人のさうしのかへ近き所に立よりておほつ

かなきことなといひければさりとも夢にはみゆめり

といへは

君かまたかけにもかけてみえは社夢にも人をみつと思はめ

思はぬことゝいひければいはての森のなといひけれ

はさらはとて

思ふてふ事はいはても思ひ鬼辛きないはてつらしともみし

女を思ひやみねとひければ

ひたふるにいひもはなてそ世にふれは人憎からぬ物と社きけ

すみけるおとこよかれたりとときゝしこる女に

君か宿ひまありけりと聞しより風に成ても入らんとそ思ふ



先帝の御時歌合 月卅日右霞

故郷は春めきにけりよしの山みかきの原を霞こめたり

鶯

我宿に驚いたく鳴なるは庭もはたらに花やちるらむ

梅

白妙の雪ふりやまぬ梅かえにけふそ鶯春となくなる

青柳

さほ姫のいと染かくる青柳を吹なみたしそ春のはつかせ

櫻

よと共にちらすもあらなん櫻花あかぬ心はいつかたゆへき

山吹

ひとへつゝ八重山吹はひらけなん程へて匂ふ花とたのまん

藤

我ゆきて花みるはかり住吉の岸の藤波折なかさしそ

卯花

あらしのみ寒き山への卯花は消ぬ雪かとあやまたれつゝ

時鳥

太山出て夜半にや來つる時鳥曉かけて聲のきこゆる

夏艸

夏ふかく成そしにける大あらしの森のした草なへて人かる

戀

君こふる心のそらは天川かひなくて行月日なりけり

人しれすあふなまつま

忍ふれと色に出にけり我戀は物や思ふと人のとふまて

逢事のかたぬさる縁子のたゝん月にもあはしとやする

雨やまぬ軒のした水かすしらす戀しきことのまさるころ哉

大嘗會歌せたのはし

みつき物たえすそなふる東路のせたの長橋おとともとゝろに

萬代なもちそ榮へん近江なるおもものゝ濱の海士のひつきは

岩の上の河せきあけて植し田の稻は萬代たえすうへにし

さゝ波のなからの山のなからへは久しかるへき君か御代哉

君か代をまちしもしるく大あらしの里の榮をみるか樂しき

やす河の水底すみて鶴龜の萬代かれてあそふをそみる

いにしへもみすやありけん鏡山行末遠きとよのあかりは

鏡山やまひこたかくよはふ世の榮ゆへきかけそみゆらし

世のとみはいはくら山におさめ置て萬代までに君を傳へん

とみゆかの枝まさり行君か代にあへる國人たのもしき哉

朝妻のみぬのこのかけしけり合て榮へ行世をみるか樂しき

是は繪にかもの社に人々まうつる事にてもかちに

も

おなしくや人の心もいのるらむ我思ふ事をあやまつな神

あさましく有明の月と出つれとひたかく人にみえもする哉

あなうま

降雪に色もかはらてひく物をたれあを馬となつつけめけん

みこ達の●出て子日し給へる所に

春立は子日をそする年をへて久しきことはまつをひくとて

大臣家大饗する所

ひきつれて大宮人のきませれば春うれしくもおもほゆる哉

大將の家にすまひのかへりあるしするに

蹟きもなく今年に數さしつゝゑひさまたれて今日は歸りの

大將の家にむすめの裳きたるに

千早振神の社を尋つゝけふのためてふいのりをそする

祭の使のたつ所つかひまひ人へいしうなとに中將か

はらけとりて物かつく

ふひにける我らはしらす綾もなしたかかつけたる罪にある覽  
駒むかへの使むかひあひてあそひてとれりに中將き  
ぬきてかつく

花すきほ末の露にそほちたる我衣手をぬきとるやたれ  
足引の山路遠くや出つらん日高くみゆる望月のこま

市に物かふ車あり

市とのみいふそはかなき萬代をかひにそ我は急き出つる

ひはのほうし

よつの緒に思ふ心を調へつゝひきありけともしる人もなし  
すはうのめのくたる所河つらに馬わたしてもものふ

ところ

白雲の山へはるかに聞ゆるをなかと日たかく出たちをする  
京の人の家に市女來たり酒うる

なよ竹の末のよ遠きわたらひは市女も我もかはらさりけり  
さきくゝにこりにし君かひ戀を何業しにか又はきませる  
招かれと數多の人のすかた哉とみといふ物を樂しかりける

糸ひきゝぬおる所

年をへて織つくすへきいとなれや棚機つめをやとひてし哉  
旅人いくあひたにぬす人あひたり

旅人はすりもはたこも空しきを早くいましね山のとれたち  
つかきたまはらて内わたりの人に

澤水に老ぬるかけをみるたつの鳴音雲ぬにきこゆらんやは

女をけさうしけるにあはさりけるかいつみの守なり  
ける人にあひたるにそれもすまさりけるに正月はか  
りに

春雨に雪けの水もそふ物をなとてたえぬるいつみなるらん

駿河にふしといふ所の池にはいろくゝなるたまなん  
わくといふそれにりんしの祭しける日よみてうたは  
する

使ふへきかすにたとむ淺間なるみたらし河の底にわく玉

駿河になりて久しく音つれさりければよしのふ

怪しきは駿河の守といひしよりなとうと濱のうとくなる覽

かへし

うと濱の疎きにはあらす田子の浦の戀しか覽を豫て習ふそ

駿河なりけるものゝ男のいつといふ所にかよふかさ  
きに人まうけてもとの人の許にはまからさりければ  
神にうれへ侍けるうれへふみにはし侍ける

よこ走り清見か關の通路にいつといふことは長くとゝめつ  
とありければしけゆきかへし

關すへぬ空に心の通ひなは身をとゝめてもかひやなからん  
屏風の繪に子日する所四帖か歌

鶯の初音にけふはおとろきて春の山へにをりくらしてん

女の家

〔す説い〕

梅かゝを便りの風やつけつらん春めつらしき君かきませる

二月田舎家に田かへす所にかはつなく

澤水に蛙の聲はおいにけりおそくやからん春のを山田

三月櫻のはなを見る人

一年にふたゝひもこぬ春なれはいとなくけふは花を社みれ  
釣舟つりをたれて海のうへにひかへたり

浦なきに釣のをたれてくる我をいたくなたちそ沖つ白波  
濱に男女見わたせり

あら波のかける岸の遠ければ風まにけふそ舟渡りする  
六月はらへする所

河風の吹くるかけにふきくすしはらふる事を涼しかりける  
七月七日女とも庭に出て尾花にいとかけたり

棚機にあふくれの衣糸を秋の尾花にいくよへぬらん  
八月小鷹かりする所

秋のゝに招く尾花にはかられて狩にきつれとけふは暮しつ  
九月九日

朝露に我そほちくる菊の花つみしもしるき心ちこそすれ  
十月山のほとりなる家に男女ゐて紅葉をみて遊ぶ

唐にしき色みえまかふもみち葉のちる木の本は立うかり  
霜月谷河のうへにもみちおほうなかるあしろある所

男女ゐたり

太山には嵐やいたく吹ぬらんあしろもたはに紅葉つもれり  
十二月大雪のふれるに家に男かしらに雪かゝりてゆ

つるはもちてきたり

奥山のゆつるはいかて折つ覽あやめもしらぬ雪のふれるに  
内の御屏風四帖和歌春

正月ゑする所

あたらしき年のはしめに逢くれと此春はかり樂しきはなし  
鶯をきゝて女の家に男きたり

人しれす待しもしるく鶯の聲めつらしき春にも有かな  
正月わかなつむ所

足引の山かたつける家ゐにはまつ人さきにわかなをそつむ  
三月花のもとに旅人たちとまれる

花みると家ちをおそく歸る哉待時すくと妹やなけかん  
〔なふらんい〕

櫻の花をしむ所

色にあける年しなけれは櫻花けふ日くらしに折てこそみれ  
藤のはな松にかゝれる所

ときはなる花とそみゆる我宿の松にこたかくさける藤なみ  
夏

四月ほとゝきすきく家

太山出るまつ初聲は時鳥我宿ちかくうちもなかなむ  
五月長雨

我宿の庭の若草しけり合てなかに目をもくらす比かな  
六日すゝみする家

水さむく風の涼しき我宿は夏といふことはよそにこそきけ  
河つらにはらへする所

河風の涼しからすはみな月のはらへはかりに物うからまし  
秋

七月七日

大空のことゝはみれと棚機は衣きぬかしいくよへぬらん  
八月十五夜

夜もすからみてをあかささん秋の月こよひの空に雲ながら南  
九月田かる所

時鳥聲めつらしく植し田をいなはもそよとけふはかるかな  
野に出て花みる

をみなへし花みにきつる秋のゝをあやなくまねく尾花也鳧  
冬

冬

十月かものやしるにまうてゝかへる人道のなかにて  
しくれにあへり  
かくるへき木の葉なけれは神な月時雨に袖をぬらしてそ行  
〔つる歌い〕



十一月こほり池にあり

鶯のねのいたく鳴つる朝ほらけ池は氷にとちてけらしも

十二月雪おほうつもれる家

人しれす春をこそまで我宿に降つむ雪をは（らイ）こふ人なみ

これもおなし御屏風の歌となり花の木ある家に人  
きたり

まかきより木末をみつゝ梅花春のとなりにつふはにきけり

子日

むれ立てめも春のゝに引松の千とせの春はたかためにそは（かすイ）

鷹かりしたる

妻こふるきゝすの聲もたえなくにはかなくけふは家路暮しつ

花みる所

はかなくもけふは山路に暮す哉かへらむ程に花やちるとて

三月三日桃の花ある家に

みちとせにひらくる桃の花盛りあまたの春は君のみそみん

松に藤かゝれる家

むらさきの雲うちなひく藤の花千年の松にかけてこそみれ

内の御屏風のれう梅花人來て見る

けふくればあすも來てみん梅花花ちるはかりふくな春風

花の木ある家に人きたり

花の木を植しもしろく春來れば我宿すきて行人もなし（そなきイ）

櫻のはなみてとまれり

世中にたのしき物は思ふとち花みてくらすゝろなりけり（うれイ）

山吹生たる所

枝たはにやへ山吹は咲にけり井手の河へをおもひやる哉

よき女藤のはなをもてあそふ

一年は春なからにもくれなゝん花の盛をあくまでもみん

藤の花を人なる

引よせてまつ社たなれ藤の花またみぬ人にみせにやるとて

住吉の岸の藤波我宿の松の梢に色もまさらし（はイ）

七月七日女庭に出て七夕祭するまらうときてまかき

のもとにやすらふ

年毎に棚機つめをいのりつゝおほくの秋を過しつるかな

棚機のあかぬ別れの悲しきにけふしもなとか君かきませる

すゝきある家に男きたり

來ぬ人をよびにはやらす我宿の招く尾花にまかせてそみる（はイ）

秋の夜女きんひくまらうときてすのこにぬてけさう（おきあイ）

す

秋の夜の月みるとのみあかしつゝ今宵もれてや我はかへ覽

月影に鹿の音聞ゆ高砂の尾上の萩の花やちるらむ

九月田かる所におきなあり

からくして急き刈つる山田哉いなおほせ鳥の後ろめたさに（そなきイ）

足引の山田の梢あすまでといなおほせ鳥の思ふことたゆ（をふもてたしイ）

山里に女ありかりする人に物いふいらへに

かりにくる人はやとさす昔より都の事はゆかしけれとも

十一月たひ人

何にかは急きもゆかん夕暮にあすもこえなん山にやはあらぬ

十二月佛名する家

數ふれは我身につもる年月を送りむかふと何いそくらん

内の御屏風正月梅の花を

日頃へて待しもしろく我宿の梅の梢に春は來にけり

柳ある家

青柳のまゆにこもれる糸なれば〔はる／＼イ〕くる春のみそ色まさりける

四月山里にて時鳥さく

山里に家みせしより時鳥夜半の初音は我のみそきく

五月五日男馬引出てみる

我駒をあやめの草に引そへてさつきもくれはみぬ時そなき

六月河つらにてはらへする所

夏〔よもイ〕の日はすゝしかりけり河風ははらふる事もかくやなる覽

七月七日

残りなく衣はかしつ棚機〔はし〕にけふもせなこは我いかにせん

天川かはせの風に七夕も夜のふけ行をまちやわたらん

八月野に出て花みる

はるかにそ花みにきつる女郎花あたる露に移ふなゆめ

うかひの家の前に河あり鶴かふ

うかひする河へに年を送りつゝうき世中〔のこしイ〕をしらてこそふれ

命長き人の前に松竹あり家のほとりに菊あり

春秋もしらて年ふる我身哉松と竹との年〔ちよイ〕をかそへて

年をへて菊の下水〔くみイ〕みてしより老といふこと●しらて社ふれ

戀しとはいへはさらなり水の上に降つむ雪と人はしらなん

なからといふ所に行て女の許にやる

忘るやとなからへゆけと身にそへて戀〔ひし〕しき事は後れさり鬼

女風にわつらふときゝて

まつ人を梢に高きなきこそ風にわつらふ身ともなるらめ

いとおもはしかりける女に

思ふてふ事のよにたにふり〔とそイ〕は我いへること君にいはまし

宮つかへする女をしもにおりよといはせたるにえお  
りましといひたれば

大空にたな引雲のめに近くおりゐるとみは我はたのまん

いひわたりつれとつれなき女に

みちのくのあたちか原のしらま弓心つよくもみゆる君かな

群書類從卷第二百五十一

和歌部百六家集二十四

實方朝臣集

〔千載別〕  
昔みし

心はかりをしるへにておもひそをくるいきの松原

臨時

石清水のりうしのまつりのつかひにてためまさの朝  
臣のありけるとしの舞人にてまたの日かさしのはな

にさして

〔續後〕

かつら河かさしの花のかけみえし昨日の淵をけふは戀しき  
しら川殿にて石上のまつを

一の種としあれば岩の上の子日の松もおいにける哉  
四月のついたちの日殿上人山里にいきて郭公をまつ  
みやこ人まつをもしろて郭公月のこなたにけふはなかなかん

しら川殿の結縁の八講に

けふよりは露の命もおしからすはちすの上の玉とちきれば

山里にて日くらしの聲をきゝて

〔新勅〕

はを繁みと山の影やまかふ覽あくるもしらぬ日くらしの聲  
しきつといふところにてふねにて日のくれにければ

船ながら今宵はかりは旅ねせんしきつの波に夢はさむとも

高松殿のうへにきこえさせたまひけるにさふらはせ  
給ひけるほとにや

かみならぬみは蓮葉のいける世にうきは獨とおもほゆる哉

宇治にて

はしひめの片しく袖もかたしかて思はさりける物を社思へ

五月五日小一條殿にて

宿のうへに山郭公きこゆなりけふは菖蒲のねのみと思ふに

大將をしゝきこゆる事ありてしはしみえたてまつら

ぬに白川にいたり給とてれいのいさなひ給に

白川にさそふ水たになかりせは心もゆかておもはましやは

ほり川の院にて御屏風のうしろにこまの命婦かゐた

るにかみよりやまふきのはなをなけこさせ給へるを

うへのせさせ給へるところへて

〔續詞〕

やへなから色もかはらぬ山吹の九重になときかすなりにし

ときこえさせければ一品宮の大はん所

九重にあてやへさく山吹のいはぬ色をはしる人もなし

又

少將

しひたきにみゆる花なれば心の中にいはて思ふか

上

御

御垣より外のひたきのはなれは心とゝめておる人もなし

さくらのおもしろきある人に心をよせて



うへてみる人の心にくらふればつねなくちらぬはな櫻かな  
かへしむすひつけゝる

蔭にたにたちよりかたき花のえをならし顔にも較へける哉  
またかへし

立よらんことやほかたき春霞ならしの岡のはなならずとも  
清涼殿の御前のすゝきをむすひたるをたかしたるな  
らんといひて内膳の命婦のむすひつけさせける  
ふく風の心もしらす花すゝきうらにむすへる人やたれそも

殿上人返しせんといひすきむほとにまいりあひて  
〔新物〕  
風のまにたれむすひけん花すゝきうは葉は露も心をくらし

あさひの山のふもとにかみまつりけるところ

朝日山ふもとをかけてゆふたすきあけくれ神を祈るへき哉  
杉むらのもりにてほとゝきすをきゝて

はふきつゝいまやみ山をいてつらんすきかけてなく山郭公  
あまの川にて

〔新古〕  
天の川かよふうきゝにこととはん紅葉の橋は散やちらすや  
宇治にてこれかれゆくにかけまさの朝臣のひわりこ  
のふたにかきておこせける

はし姫の夜半の寒さもとふへきをさそはて歸る狩人やたそ  
かへし

橋姫に袖かたしかん程もなしうちにとまらぬ人かたらひて  
かけまさのあそんもろともにいそきけるころ花山院  
のおりさせ給へるをなけきて

いひてなそかひ有へくもあらなくに常なき世をも常に歎かし  
道信中將に花山院の御ことをおもひやりて聞えける  
花のかに袖をつゆけみをの山のやまのうへこそ思ひやるる

権少將とのゐところに枕はこわすれたるをやるとて  
あくまでもみるへき物を玉くしけ浦嶋のこやいかに思はん  
かへし

玉匣なにいにしへの浦嶋にたれならひつゝをそくあくらん  
たちかへり

をそくしもあくこそうけれ玉匣あな恨めしの浦嶋のこや  
つねふさの少將のもとにとのゐるものあるとりにやる  
とて

返さんと思ふも苦しから衣わかためかふるおりしなけれは  
道綱の中將のあしるにさそひけれは道心かり給ふよ  
りはせ(養)生このみ給こそとて

宇治川の網代のひをゝ此頃はあみたほとけによると社きけ  
かへし

ひをのよるうちにはあらそ西河の網たにあらはいほも救はん  
仁和寺僧正御くたものまいらせ給ふらいし(繼子)のか  
へさにかきつけたる

思ふ事なりもやするとうちむきてあなたさまにそ櫛子奉る  
かへし

我爲にむらいしたまふことならは思ふ心もならさらめやは  
かすかにて

〔かほすい〕  
えたわかぬかすかの里の姫小松いの心は神そしるらん  
正月のついたちにたちはなのきに雪のふるを  
時は春はなはさ月の花かもし鳥の聲にやけさはわくらん  
かへし

郭公なくへき枝とみゆれともまたるゝ物はうくひすの聲  
花山院の春宮と申しゝときに九月御庚申に

もみち葉の色とる露は九重にうつる月日やちかくなるらん  
時明（露イ）朝臣ほうしにならんするころ女にくしの箱  
とらすふたにあしてして

なれてける程な忘れそ玉くしけあけ暮そはぬおりはあり共  
そのくしの箱を女院の物にてめしければたてまつり  
たるを御覽してかへしたまはすとて

忘るなと契りをきける玉くしけ我かたみとやけふはみる覽  
御かへし

中々にをくかたなきは玉匣みには餘れるかたみなりけり

さね明の君の女をかれにければ女にいひやる

わみつ（信明集）も此よはへなんわたり川淵瀬（後のふらせと誰にとはまこ）を誰にとはんとす覽  
殿上にてこのは雲日とつと字かんぬ（おの）のやにさ

（御とくりあとといふもしを）

常ならぬよをみるたにも悲しきに夢さめてのち思ひ社やれ

宰相中將こそきみといふ子なくなりて七月八日のあ  
さほらけに

七夕のけさの別にくらふれはこはなをまさる心ちこそすれ

おなしころこのなき人をみて

（後拾）うたゝねの此世の夢のはかなきに覺ぬやかての命ともかな

ほとへて難波へゆく道にてなからのはしにて

親子も常の別のかなしきはなからへゆけと忘れやはする

ものへ行みちにしはつみたる車のゆきわすらふをみ  
て

はるこりのしはつみ車うしよはみたか故郷の垣ねしめにそ

十月の一日ころのふかたの中將に

いつとなく時雨ふりをく袂にはめつらしけなき神無月哉

おなし人をうちにさそふとて  
いてたちて友まつほと久しさにまさきの葛ちりやしぬ  
かへし

急かすは散も社すれ紅葉々のまさきの葛おそくくるとて  
道信中將りうしのまつりのまひ人にてもろともにあ

りしをふたりなら四位になりてのとしのまつりに

古のやま井の水にかけみえて猶そのかみの事そこひしき  
かへし

古の衣の色のなかりせはわすらるゝ身となりやしなまし

ためたふの弁なかよりか家にたゝそめしとしことし  
はかりとて宮のへのうへの御そのはしらひたりける  
けしきをみてしりうことに

天にます笠間の神のなかりせはふりにし巾をいかてとはまし

人のもとにかみこひにやるとて

何をしてとよをかひめをいのらましゆふして難き神無月哉

ふるきとしみかはのかみのいとたてまつらんといひ  
て又のとしおこせたるに

いにし冬いとしも何にまたれけん春くる物と思はましかは

うさよりかへりて人にかみなとこゝろさすとて

（編輯）いさや又うさの社はしらねともこやそなる覽すくなひの神  
（ちと）（おの）（おの）

かへし

ひろまへにまさぬ心のほとよりは大直日なるかみと社みれ  
うちにて川にうきたるはしにうたゝねしたるにのふ

かたの中將聲をかくして

うちかはの夢のまぐらのゆめさめて

といへは

よるはしひめいやねさるらん

新嘗會のよあかひものみたるゝとのふかたの中將う  
れふれは さくるなるらん

いかなるひものよそにとくらん

のふかた

〔後拾〕  
あしひきの山井の水はさえなから

雪ふりてあしたに弘徽殿の北おもてにみちなかのき  
みとたちよりて左京のきみに

〔續詞〕  
あしのかみひさよりしものさゆなるは 〔る戦イ〕

といへは

こしのわたりに雪やふるらん

ゆみのけちにまたらまくに雪の降かゝれるを入道の

少納言

まへかたのまたらまくなるゆきみれは

とあるに

しりへの山もおもひやらるゝ

殿上にてほとゝきすをまつ心を

かきくもりなとかをとせぬほとゝきす

ためすけ

かまくらやまに道やま<sup>よ</sup>とへる

ためすけかうふりうへきまへのとしの八月に月のあ  
かきよものかたりなとして

かそふれは今いつ月になりにつける

ためすけ

むつきにならはとふ人もあらし

みかは水のつらにゐてなかむるにある藏人のものお

もひかほにてゐたるかなといへは  
こひとさほしきかけやみゆらん

といふに

やつはしにあらぬみかはのをちにゐて

六月はらひにあるやかきのまへをわたれば

さをしかのみゝふりたてゝきこしめせ

といふ人あれはいとゝく

おもとをゝかすつみはあらしな

五せちのころにてまかてなんといひあるきけるを

六條殿の少納言

くものとを月よりさきにいてつれば

といふをきゝて

ふしみの里に人やまつとて

小一條殿の人々なそゝ物かたりす

かたすまけすの花の上の露

といひけるに

すまひ草あはする人のなければや

うちわたりの人にあふきをとりにかへさゝりければ

たかためにおしむあふきのつまならん

といへは

とれかしとらのふせるのへかは

八月はかり月あかきよ花山院のひか哥よまんとて

秋のよにやまほとゝきすなまかせは

さねかた

かきねの月やはなとみえまし

三條院にてせ 〔歌〕 教せられし日ひとつものおほくみ



ゆるを

このひつはなにそのひつそおほつかな

といふにためすけ

かたねのまへのほかるなりけり

ためすけの弁しのひたる所よりきたるあしたに

たかさとにいか契し郭公いもかかきねの花や散咲にし

道信の少將よのなかはかなき物かたりしてまたのあ

したにきしをやるとて

たつ雉のうはの空なる心地にも遁れ難きはよに社ありけれ

ほりかはの院の子日つかまつりし

むらさきの雲のたなひく松なれば緑の色もことにみえ鬼

花山院の哥合に

のとけくも思ほゆるかな塵たゝぬ花の都のさくらと思へは

またおなしうた合に

しくれ

秋はてゝかみの時雨はふりぬらんわか片岡のもみちに鬼

うさのつかひのおりもるとともにみんと契りけるをか

の少將なくなりてのとしのあき

〔後拾〕  
みんといひし人もはかなくきえにしを獨り露けき秋萩の花

白川殿にて鹿の聲をきゝて

浮世にも山のあなたの床しさに鹿のねなからいやはねらるゝ

ある女のもとにさねかたの兵衛佐となのりてこと人

のいきたりけるを女に

誰ならんいはての森に言とはんしめのほかにて我名かり劔

しければ命婦のもととなるたつたやといふしもつかへ

して

仇浪のたつやをそきと騒く也みしまの神はいかゝこたへん

おなし女にふみをこまの命婦さわややくなき事をい

ふなといひけるをきゝて

こまにやは先しらすへきまこも草まことゝ思ふ人も社あれ

小一條にある人のむすめをしのひてかたらふに女お

やきゝつけていみしうはらたちてつみなとするとき

くころ三日の夕かた北のかたもちるまいれとあれば

みかのよの餅はくはしうかり鬼きけはよとつにはこころ鬼

おなしところの少將のおもとこそせちのまひ姫にてか

へりたるに

かみまひし乙女にいかて榊葉のかはらぬ色をしらせてし哉

この人たいのあらはなるにゐあかしてつまとををし

あけたりけるに空のけしきもおかしくてかたちもま

さりてみゆれば

天のとを我爲とてはさゝねとも怪しくあかぬ心地のみして

おなし人のさとなるになきよしをいひてあはさりけ

れはうちにまいりにけり女あけほのにおこせたりけ

り

天の戸のさゝてこゝにと思ひせは明るをまたて歸らまじやは

かへしことはりとて

天の戸をあけてふ事をいみしさにと計りとはぬ罪は罪かは

おなし人わかき心地やみけるをうすくなんいかにし

たるとかきゝて

いかなればわれしめしと思ふらん春日の原を人ややく覽

ある女をいかなることかありけんいまはさらにとは  
しなとちかひてかへりてほとへていかゝおほえけん  
何せんに命をかけて誓ひけんいかはやと思ふおりもあり鬼  
人にはしめて

〔詞花〕  
いかてかは思ひあり共しらすへき室のやしまの煙ならては

宰相

七夕の契るそのよはとをくともふみみきといへ鵲のはし  
かへし

たゝちには誰かかよはん天川うきゝにのれる世は變るとも  
小一條とのゝするかにふみやりたるにかへりことは  
せてたゝいなはの山のとていへるに

結ふなるをやまの山もある物をなにゝいなはの峯にかく覽

おなし院〔みだり〕に宮内といふ人男に髪きられたりとときゝて

よそなから消すきえすみある雪のふるの社のかみを社思へ

又おなし院〔みだり〕にある人承香殿にまいりてみし人とたに  
おほしたゝぬことをうらみけれは

〔後拾〕  
わりなしやみは九重〔のうらち〕にあり乍らとへとは人の恨むへしやは

これかやうにうらむる人に

我ながら我ならず社いひなさめ人にもあらぬ人にとはれは

ある女に

ものをたに岩まの水のつふゝといはゝやゆかん思ふ心の

また

おほつかなわかことつけし郭公はやみの里をいかになく覽

二葉よりみしまのみすを結はんと浪の打いてゝえ社いはれね

わすれにし人のもとにいきてえふともいはて

わかことやくめちの橋も中たえてわたしわふらん葛城の神  
おなしさまなる女のもとより

今はとてふるすをいかに驚のあとみることね社なかるれ

かへし

うくひすの古巢をいてゝ雁金の歸るつらさも思ひならまし

つゝむことありてあひかたかりける女に

大かたはたかなかおしき袖をみて雪もとけすと人にかた覽

清少納言とてもとすけかむすめみやにさふらふとお

ほかたになつかしくてかたらひて人にはしらせすた

えぬなかにてあるをいかなるおりにかひさしく音つ

れぬをおほそうにて物なとあらそふを女さしよりて

わすれたまへなよといへはいらへはせてたちかへり

〔後拾〕  
忘れすよ又かはらすよかはらやのしたゝく煙下むせひつゝ

かへし

賤のやのしたゝく煙つれなくて絶さりけるも何によりそも

承香殿の宰相君のさとにいきたるに人あるけしきな

れはかへりて白河にせりあらふ女して

中川に洗ふ根芹のねをほりてあらはれて社あるへかりけれ

ひは殿にないきの侍従のきみといふ人に

山人のをゝ便りと思ふともこりしもせしな峰のつまきに

うちわたりる女に尾花につけて

是をみよちきらぬ野への尾花たにこと社いはね招く物をは

又ある人に  
をみ衣めつらしけなきはる雨に山井の水もみきはまさりて  
ものいひける人のたえてのち

笹蟹のくもの垣のたえしよりかくへき宵も君はしらしな  
おなしとこころに十月のついたちの夜いきたればみち  
つなの少將そまへよりありける夏のなをしきたるを  
みて

身に近きなをたのむとも夏衣昨日はかへてきたらましかは  
うちの女さうしをへたてゝものいふにこれあけ給へ  
といへはさゝぬものをといふいらへに

しまのこか心ゆるさぬ玉匣あくれとあかぬ物にそありける  
またうちの女にたひゝかへりことのなかりければ  
水莖の跡さへたゆる玉つさはみのゝを山のかみやいさむる  
みのゝかみのむすめなりしかはかみのみるほととて  
返事なければ

覺束なかゝぬたひもある物をたちけるかみの心つらしも  
人にはしめて

〔後拾〕  
かくとたにえやは伊吹のさしも草さしもしらなめる物ゆへ

かうしのつらに一夜ゐあかしてあしたにおなし人に  
あけかたさふたみの浦による波に袖のみぬれし沖つしま人  
うちのかうしをよひとよならすを女さなゝりとはき  
きながら心しらぬ人にてあらくとはせたれば音もせ  
て返にけるあしたに女

あけぬよの心乍らにやみにしをあまえてとひし聲は聞きや  
かへし

〔後拾〕  
獨のみこのまろ殿にあらませはなのらて闇に歸らましやは  
四月はかりにこの女のもとにふかくよりてたちき  
きをするにまたぬぬけはひなれば

まところまぬ人もありけり夏の夜に物思ふことは時ならず共  
いとゝしけうつゝむことも心やすくもあらぬに

諸共にをきふし物を思ふともいさとなつ露となりなん  
ある女に行末のこと契りちかひなとしてのちいかゝ  
ありけん

〔玉葉〕  
誓ひてし事そともなくわすれなは人の上さへなけくへき哉

かへし

〔歌關〕  
おやのせいしける所にいくをきゝてひなき事といひ  
ければ

いはゝゆへ親のかふこも年をへてくる人あれと厭ふ物かは  
かへし

繭こもり親のかふこのいと弱みくるも苦しき物としらすや  
はやう物いひし人にかれたるあふひにつけて

古のあふひと人はとかむとも猶そのかみのけふをわすれぬ  
かへし

かれにける葵のみこそ悲しけれ哀とみすやかものみつかり  
うさよりかへりたりけるに人のくしをこひければう

ちわたりの人  
こし道にけつる共なき旅人のたむけのかみに盡しはてゝき  
かへし

かくし社かくしをきけれ旅人の露拂ひけるつけのをくしを  
おもひかけたる人のうちよりまかてたるとのゐ所の

まへのせさい〔前栽〕をみて露をきたりけるをなとか見  
給はさりしといへは

をきて  
七月七日ひきたりける糸にくものすかきけるをみて



さゝかにのもろてにいそく七夕のくもの衣はかせやふく覽  
といふかへし

七夕ひこほしのイのくへき宵とやさゝかにのくものいかもしるくみゆ覽  
はちすの葉に「」をつゝみて女に

いつれをかのときき方と頼まゝしはちすの露と空蟬の身と  
かへし〔此歌公任集爲公任作〕

蓮葉のうかふ露こそたのまるれなに空蟬のよをなけくらん  
ある女にふみやりたるかへり事にあけまきをむすひ  
ておこせたれば

ひろ計りさかりて鷹まろイと旅ねせよその總角のイにしるしあらせん  
人のもとにまくらをゝきてこすなりにければかへす  
とて

をきてみるかひもあらまし忘るゝを是たにつけの枕りせはなりせば  
すゑはなきなめり。ことなりしさかしらなめり。  
かへし

小一條殿の中將君に五月五日  
水鳥のさはかぬ沼の景色にもいつかとのみを猶またれける  
誰そこのみわの山もとしらなくに心のすきのわれを尋ぬる  
おもひかけたる人のねたるをみて

うき事の夢のみさむる世中にうらやましくもねられける哉  
ある女かよふ人をうらみてこと人を語らふときゝて  
かくなむとつけの枕にあらめ共しらさらめやは戀の數をも  
これはいかなりけんおりにか

大井川〔新勅〕のせきにつゝむ水なれやけふ暮難きなけきをぞする  
〔五三イ〕

また人のむすめにしのひてかよふをほとなくむなし  
くなりければあかすあはれに思ひ出つゝ女の母に  
契〔後拾〕りありて又は此世に生る共おもかはりして忘れもやせん  
郭公花たちはなの香をうとみこと語らふときくはまことか  
四月はかりにもものいふ人の五月になりていたくしの  
ひければ忍びたる所のかとをたゝきければあけさり  
けるつとめて

覺束なまた明ぬよの月をみてあまのとはかり詠められしか  
小弁といふ人にことひとのものいふときゝて

浦風〔後拾〕になひきにけりな里の蟹のたくものけふり心よはさは  
中宮の宰相のきみのうへにのみさふらふをうらみて  
風はやき嵐の山のもみち葉もしもにはとまる物とこそきけ  
五節のころあふきをとるかへて臨時のまつり日かへ  
すとて女

夕かけて扇も今はかへしてんまはゆくみえし日影と思へは  
かへし

諸共にをくるあしたもまたみぬこイに何の日影のまはゆかる覽  
又女に

山人のをのゝえはみな朽にしをいかなる人のつまきこる覽  
中宮の宰相君七月七日に

七夕のをにぬく玉もわかことやよはにをきゐて心かすらん  
ある女かよふ人ありときくをしのふけしきなるにか  
の男のあふきにみしまかきたるところ

まつに社思ひかゝるときゝしまにねに現はれてみゆる藤波  
世の中の家々のおほくやけたりし春ところを人のお  
こせて

此春は珍らしけなきやけところつれなき人はいかゝみる覽  
かへし

煙たつひの本なからゆゝしきには唐土のところとそみる  
とのもりの君にむらさきこひたるをこすとして

かこつへき人もなきよにむさしのゝわか紫をなにゝめつ覽  
かへし

したにのみ歎くをしらて紫のねすりのみやはむつまじき故  
又人になにのおりにか

むらさきの色にいてにける花をみて人は忍ふと露を置ける  
かへし

しら露のかそふはかりの花をみてこはたかかこつ紫のゆへ  
五せちのまひひめに

おほつかないかに吾をもすへらきの豐の明をいつくとも哉

承香殿の宰相君なしをさしいてたれば

隠れなき身とはしるゝ山梨のおふのうらまて思ひなる覽

おなし御かたにせきこゝのへといふわらはのこなた  
あなたにゐて人ともいふをみて

こゝのへは關のこなたときく物を關のあなたの九重やなそ

白川殿にて道つなの少將せきとふしたるによりて

いかてかは人のかよはんかくはかり水ももらさぬ白河の關

おなし少將とふしてさうゝしくもあるかな女かた  
をきたるところやとて人やりたるにかへりてあなは

らいたとの給ひつる人の御聲なんしつるといへは

その原やいかにやましく思ふそも伏屋といふも處やはなき

女たちかへり

何とてか人をも更に恨むへきもにすむ虫をしらは社あらめ

## 高光集

十月九日冷泉院のつりとのにて神無月といふことを  
かひにをきて哥よませ給に

神無月風にもみちのちる時はそこはかとなく物そかなしき

一條のおとゝのもとなる人に

秋風にみたれてものは思へともはきの下葉の色はかはらす

はゝ宮うせ給て年かへりて雨のふるひ姫君に聞えし

ひねもすにふる春雨やいにしへをこふる袂のしつくなる覽

御返し  
詠むるを空もしれはやひくらしにをやみもせずは降そはる覽

世中はかなくのみおほゆるころ雪のふるに

世中にふるそはかなき淡雪のかつはきえぬる物としるゝ

たつ雉のうはの空なる心にものかれかたきは此世なりけり

うちとけてもあらぬ人をわりなき所にひきとゝめて

かくやはとつまはしきをしかくれはあなまへきく

らんとわふれば

さもあらはあれ人のきく覽事もいさての限りなる物思ふ身

歌合に  
萬代の松にかゝれる秋の月ひさしき影をみよとなるへし

ひこのめのとの出羽にくたるに饑たふとて人々歌よ  
むに

旅の行草をのまぐらの露けくはをくるゝ人の涙とをしれ

天曆三年三月つこもりの日文人めして花も鳥も春の

をくりすといふ心を詩につくらせ給にやかてやまと

歌ひとつそへてまいらせよとおほせられしに

櫻花のとけき春の雨にこそふかき<sup>う</sup>にほひもあらはれにけれ

紅梅あはせに

鶯のすをくひそむる梅のはな色もにほひもおしくも有哉

小龍宮かくれたまへるころ

世中はかくこそみゆれつくくと思へはかりの宿りなり鬼

おほんさうそうのち

たのみこしときはの山も大空の霞にかすむよに社ありけれ

おなしころおほんふくにて七月七日のことにやあり

けん

七夕のわたるせもあらしあまの川藤の衣のみてるよなれば

といひしかは

かさゝきの橋なかれなは藤衣きしより身をや誰もすつへき

ひめ君にきこえし

常よりも秋の恨あることし也野への草葉も露にしほれて

七月七日宮君に火たてまつるとて

秋風のはしめてむすふ白露<sup>は</sup>といひをくほともゆゝしかり鬼

御返事

年<sup>章</sup>のはにかゝる心を白露といひをくほともひさしかりけり

白川にすみ<sup>イ</sup>にわたりて

白河のまつの色こきかけみれはいづれか色もかはらさり鬼

ひめ君の御かたにこしと思へとこられぬこんと思へ

とこられすときこえたるを宮きこしめしておほせら

れたる

頼むにはしけさまされと思へ共こられさらんはになき事也

おほんかへし

年をへて繁さ増れはみ山木のよゝをへつゝもこられてし哉

そちの大納言のむすめ左衛門督にいかなりしおりに

か

いふ事のなひき難さに白露のおきゐてのみもあかしつる哉

にしのごふみたてまたしたりけるかへりことのなか

にかくかきてくはへたりける

年をへて思ふ心のしるしにそ空もたよりのかせはふきける

又これもおなし人に

片時もわすれやはするつらかりし心も更にたくひなければ

七月七日九條殿の御まへにて君たち参たまへるにけ

ふの心よめと仰られしに

うちよする波にまかせて七夕をたちなかくしそあまの川霧

これは一條殿

謙徳公

七夕のまちかけにする今宵すらなにたちさくあまの河波

ほり河殿

忠義公

あすよりはゆゝしかるへき七夕の羨やましきは今宵なり鬼

すけまさの朝臣をかたらひわたりてとのゐしたるよ

もろともにといひてさばる事やありけんみえたまは

さりければ又の日

程へたる覺束なさもある物をひとよはかりにまさる侘しさ

女七宮みこにならせたまふよ人々歌よみ給ふに

あやまたぬたねにしあれと姫小松心ことにものるけふ哉

天曆九年うさのつかひにきよとをくたるに餞せんと

上のぬしたち歌よみ給ふついでに

露のことはかなき身をはをきながら君か千年を祈りやる哉

おとゝうせ給ふてのとし新嘗會のころうちにもま



らてないしのもとに

霜枯の蓬の門にさしこもりけふの日かけをみぬ〔かなしきイ〕そわひしき

ある人のむすめに物語するほとに女のおやあさまし  
とてもろともにゐあかしてかへりてつとめて

戀やせん忘れやしなんぬともなくねすもなくてあかしつる哉

女のおやのかへし

ぬともなくねすともなくてあかすよを戀もなこひそらは忘るな  
世中はかなくのみおほえてほうしになりなんとおほ  
ゆるころ

たのむ夜か月のねすみのさはくまの草葉にやとる露の命を

村上の御門かくれさせ給てのころ月をみて

かく計りへかたくみゆる世中にうらやましくもすめる月哉

たふのみねに住ころ人のとふらひたる返事に

いかてかは尋きつらんよもきふの人もかよはぬ我やとの道

花盛に故郷の花を思ひやりていひやりし

みても又またもみまくのほしかりし花の盛はすきやしぬ覽

ある女のかひねりのきぬを十月はかりにくとくにつ  
くるに

もみち葉のおつるほとしも唐衣にしきかくるそ哀なりける

たつきよの衛門督こせちたてまたしたまふにたきも

のかうはしうあはすとてそらたきものすこしと多武

のみねにこひ給へるにたち花のなりたる枝にみをと  
りうてゝそれにいれてたてまたすとて

末のよになりもてゆけは橘の昔のかにはにるへくもあらず

かへし

衛門督

香をとめてこひもしるく立花のもとの匂ひはかはらさる梟

とふのみねに住比あさみつの大納言ひはの北のかた  
わつらひ給ふ祈せよとのたまふに

昔よりきゝならしこしいかゝさき淺からしを思ひなさ南

返事

大納言

早くより聞ならしけるいかゝさきすゑの人さへ頼もしき哉

ひえの山にすみ侍るころ人のたきものをこひて侍り

ければ侍りけるまゝに梅花のわつかにちり残りける  
につけてつかはすとて

春立て散はてにけり梅のはなたゝ香はかりそ枝に残れる

# 相如集

いつものかみにてのちつかさなし藏人にて春宮に候  
へし女に

祈事をきかぬものからちはやふる神てふ神は君につきにき

ふてよつをとらせたるをすくなしといふ人に

ひとつしてとをにかくともたらしかしつくまにまゐる

これのりの少將のもとにゆきてとのゐものゝかうは  
しかりしかは

我妹兒かみなれ衣の移りかをひとへねたりと人そとかめし

人のもとより

数ならぬ人のひとへにやまふきの八重九へといかてしる覽

かへし

九重にやへ山吹はしりたれととへといへとは君ををしへし

あたらんとといひし人に

いな舟のいなみなはてそ最上川みなれは社は流れてもみめ

七月六日

あすは人ゆゝしといふ也最上川あけぬ此方にあひるてしかな

ものいふて中絶たる人のもとにゆきたるにふすへか

ほなれは

今更になにたたくまのたけからん心のうちに松はおひつゝ

くらのかみ(霜)のふくぬきし日

藤衣はつるゝ袖のいとよはみ涙の玉のぬきそみたるゝ

一品宮むめつほのはきの花くらへさせ給しに

くらふれと勝らさりけり花なからこの宮城のゝ萩の下葉は

おなし藏人のころ御文あけてみたりとてつみあるへ  
しときはかるゝに

雲の上たかくみゆれは天川ふみゝぬせにて身をやしつめん

ひとのもとに人の

あたことのたへまやなとゝ葛城のくめちの橋の中ならなくに

これを見て

葛城やくめちの橋のその中のとたへにとはゝうらみ渡らん

おりしらす

たとふるも心ある物をいは橋のひとことぬしは渡らさら南

ひは殿にてこゆみのかけ物にせられたる

すみよしの岸に咲てふ藤ならてなにをか春の末にかくへき

かへし

住よしの岸ならすとも藤波の心をわれにかけてみよかし

物いふなかにいかにもゝいつといひやりたるにた

たいなとのみあれば

〔新千懸〕

いとゝしく頼まるゝ哉最上川しはし計りのいなをみつれば

宮の御事にてきはかれしころ人をとらへてせちにあら

るましきよしをいへはゆるして又の日

みちのくの奥を思ひはゆるしゝを我たけくまと思ふ覽やそ

はらへのつかひに難波にゆきてもとるといふうかれ

めにつきて

つの國の難波の葦のほのかにもねにきと人にいひつへき哉

おなしもとりにやる

行末はいのちもしらす夢ならて何れによにか又はあふへき

むすめにすはうのかみなかきよ

なは代によとみし水を打返しかけはこひちにおりたちに鬼

かへし

おり立てかくとききは小山田にたてるそうつの心地社すれ  
いなはへくたるときゝて

吹風につけても悲し稻葉なるいなはにかゝる露の身なれは  
かへしおや

露の身のいなはにかゝる程もなく己か軒端をみする也けり  
堀河の中宮のたくみの藏人に兵衛のそうなる人住と  
きゝしに

柏木の杜のした行みつからにくもらはことか人のいふめる  
人のむめこひたるやるとて

しらしかし花なる人の心にはかゝるなけきの身になれり共  
わかかりし時女三宮におかしといはるゝ人にいかて  
ものいはんと思ふにおさなきちゝ三魁のあふきに女  
をこのかたをかきてもたるにたかそとへはその人  
のといらふれはかくかきつく

いひ出はそらもやはちん人となる姿の池のかけのたかはぬ  
かへしむめのさるをつくりて

大和なるすかたの池にうきさるのまさるを君か影と社みれ  
たちかへり

かくいへとかるきか池に底のなを影の移れとさると社みれ  
ほとへていかにそといへといらへなし

覺束なたへて物をそいはしかよいつら渡りにあらし事そも  
つねにいひたはふるゝをはしめよりの人あればわつ  
らはしかりていらへもせぬをとのゐしてつとめてあ  
りくちおしくてみかうしはなちて手をたゝけはふと  
よりきたりにけてかへりぬみかうしあくる人にたれ

そとへは朝顔にさして

露のとくをきてみつれば朝顔をにくけなりとそ思ひぬる哉  
心にくゝ思ひつるといへりしかへし

うちとけてをのかゝ根の朝良を我身をいかてひとおほす覽  
またかへし

我宿の垣根なからもおいのよにいきまたかゝる朝良はみす  
いきことなし給ふとあるねたしとてかゝみ草にさし  
て

朝かほのよそこそあらし影移るかゝみ草をそこにみつ覽  
またかへし

かゝみ草ありける物を朝顔を思ひもしらぬ人のこゝろよ  
女いとあやしかるそしりたまはぬかとて

一つたにすへて心のなき人はをのかかけ共あらぬとやる  
またかへし

我にたにかけをならへはかゝみ草その朝良はみもなをしてん  
ねたかりてかゝみのかたにかみをしておかしけなる

女とさるのゑほうししたるとかきならへて  
並へてももるさは君こそ増鏡さるや移れるかけにてもみよ

兵部卿宮御前に人々おほかるにもていてゝはしめよ  
りの事をかたりきこえわつらふいとくちこはかりけ  
りとて

にくけなる朝良よりはかゝみ草心をみるにおもひかゝりぬ  
あひかたきことなん思ひぬるとていまはすまひと

らんといへは女  
朝良のうつる計りの思ひ草おもひかゝるはまくるなるへし  
なに事にもかつ事あらしとはいへり男



まくるとし人の思はゝ同しなをたまゝくすと中をいて南  
二日はかりありてやる

そこ深くおもふ心はあしまよふうきにも移る影をみしより  
八月に兵部卿宮九の宮人々あまたして文つくる草む  
らになくむし聲たかけれとなくかりよりはといふ題  
を聲はいときゝにくし人々わらひて例の人  
草むらになくむしよりは高けれとよくもきこえぬ雁の一聲  
すけゆき

我もまた玉章かけぬ雁なればやまひさるまの聲にやある賢

女

いかてかはかりにもかけん玉章を造りわつらふ君と社きけ  
かへし

魂もなくなる迄にひとめわかいひころしてし人はいけるか  
かねゆきの兵衛佐にひはならふをたちきゝて

女

しらへつゝ君か爲にはあふ事の返しの聲はきゝもならさし  
たゆるよもなくゝ思ふ琴のねに常にならさん人そなか覽  
まくらかへるとて

君にいかて竝へてみると共に思ひ數妙こよひとめてん  
こと女の四月一日うすさのといひたるに

いとゝしくあつくこそなれ夏衣きるひとからや涼しかる覽  
女三の宮大納言の君にかれゆくとしてうらみらるゝこ  
ろ

かすならぬよを浮舟のよるへなみ響の灘のなくをこそまで  
おなしとち見なき所にきたりしに

里もなくしるへたになき山道にこのもといかて人やとる覽  
賀茂のまつりの日しりたる車にたち花やるとて

かをとめて昔の人を尋ぬればけふはあふひになりにける哉  
はやうみし人のかゝみをかりてかへりに

かゝみ山あきたつ霧はくもれともみそめし影はさやか也鳧  
わすれにし女のもとより

我ながら我からそとはしりなから今ひとたひは人を恨みん  
かへし

忘れぬときかはそ我もわするへき同し心にちきりこしかは  
大納言の君またしかりし時の事なるへし

あふ事をたなるる君を岩の上にまかせてみるは久しかり鳧  
堀河の中宮のひとのを□のかたりあかして

はかなくて明石の浦にあさりする蟹の袖ともほゝつけさ哉  
かへし

いさりする蟹によそふる袂をは猶來りとやかけていはまし  
はつかに物いふ人に

かけろふの水にとはたる螢よりもはかなくみしは夢か現か  
一條攝政にてしはすのつこもりにかたひのまねして

さみしきまゝにおうはうことするにかとのもちひ人  
にさえかしひにいたさせ給ふいひつけて

戀する人にくやうするとあるにすけゆき

集まりて物な思ひそをのこともあけんみかとのもちひ也鳧  
花山のみかとうまれ給ひてのちころなれはいとめて  
たうけうしてものかつけられけりとかやをもしらす  
すけあきらかもとへやりし

きてもみる人しなれば我宿のもみちはよもの風に任せつ  
かう二位の大將とのゝさふらひの人々ともさみしか  
りとてすけゆきかけあきらかもとにいひやりたれば  
すけゆきかかものかたものなかにせにふたつけれ  
て

と

ともしきをたか心はと人とはゝいさしら菊の露となたつや

二條殿(畠山右大臣)うせ給てあはれかきりなしかし

夢ならて又も逢へき君ならはねられぬいをも歎かさらまし

## 重之集上

三位の大貳佐理は故小野宮の大貳尊賢の御子なりわ  
らはより殿上なとし給へりけり宰相をかへしたてま  
つられて大貳になられて下給へるを道風(おきなたちては)はなちては  
いとかしこき手書におはして手本なとはつくしへそ  
かきにつかはしけるかなの御手本書に下させ給ふけ  
るをかくへき歌ともよみてえんとの給へはあたらし  
き昔のも書あつめて奉る此哥の人も世中心かなはぬ  
をうきものに思きたれるにやあらん大貳のかくてを  
き給へるよしなともあるへし所々のおかしきなとも  
あるへし

松かえにすみて年ふるしらつるも戀(のイ)しき物は雲井なりけり

かまと山

春はもえ秋はこかるゝかまと山霞も霧もけふりとやたつ

はこさきの宮の松おほかり

いくよにかかそへつくさん箱さきの松の千年も一つならね

いきの松原

都へといきのまつ原いきかへり君か千年にあはんとぞ思ふ

しかのしま

みよや人しかの嶋にと急け共かのこまたらに波そたちける

秋くれは戀するしかのしま人もをのか妻をや思ひいつらん

そめ川

染川の錦(きしに)よせくる白波はきくにもたかふ色にそありける

うさ

ちかのしま

筑紫へと悔しくなにゝ急きけん数ならぬ身のうさや變れる  
名を頼みちかの嶋へとこきくればけふも舟ちに暮ぬへき哉  
白雲のかゝれる峯をみ渡せばちかのしまにはあらぬ成へし  
みのしま

あまくも

〔すむい〕

〔こきい〕

雨雲のしたにのみふる我なれば思ふことなきおりもぬれ毫

欣

もみちする秋は旅にてくれぬへし我ふる郷に人もつけなん  
一本菊をひおけに植て大將殿の仰ことにて

をく露にまかせつゝみし菊の花よにもおします成にける哉

四條の後のさうしの繪によめる女のけさう文かける  
を友たちとものみければ

秋なればたれも世にそ成にける人の心に露やをくらん

小鷹狩の所

かりにきてかるにも今は思ほえず秋の山への歸りなければ  
女房男方として斬裁あはする所ありたゝひとつなら  
すかすさしに女わらはゐたり

なへてやは色もみえけり白露の數をくかたの花そまされる  
かへしせさりし女に

誰ゆへに思ひ人にし山ちとてかへりことたにいはれざる覽

女返事はせてかみを文のやうにしておこせたるに

葛城や久米ちの橋も渡すらしこれより神のしるへなりけり  
山端に關をすへたる世成せはこゝのひをはずくささらまし

秋歌

もみちはの色こひしりて別れなは吹風に社つけておしまめ  
唐錦こゝの水にもうかひけりいかにさためて波のたつらん  
紅葉はを己かもの共みてし哉みるにいさむる人はなけれと  
初霜のをかぬたにこき紅葉はのその盛をはたれにみせまし  
八月十五夜かむしん候也にて大貳のみたちにてさう  
のことにかりの心ある哥よみていたされたるに

ことの上にひきつらねたる雁金ののをか聲々めつらしき哉  
〔こい〕

又かむし哥れいの人  
もみちせぬ常盤の山にすむ鹿はをのれなきてや秋をしる覽

むさしのかみたためかたかかり衣をかりて二年ありて  
かへすとて

うらもなき心ならひにかり衣かへさしとまで思ひけるかな  
みちのくにのあたちにありし女に九月にいひやる

思ひやるよそのむら雲しくれつゝ安達の原にもみちしぬ覽  
ある人宮たちに夢のやうにてやみにけるをゆめ人に  
しらすなとなくく口かためられけるをうせ給にけ  
れは

おもひて悲しきものは人しれぬ心のうちのわかれなり鬼  
みちのくにの柳河の家にてふみてにもちなとして七  
月七日七夕の心

たつとこそおもひやらされ七夕のあけゆく空のあまの羽衣  
〔もい〕  
うみつらにてなみたちけり

吹風に色をめわたる藤波ははるしもとかぬをにそありける  
〔かゝるものい〕

廣澤の池にいみしう波の立をそうの君なとして

廣澤の池にうかへる白雲はそこ吹風の波にそありける



あまの家にやとかりたるに日くるゝまで釣舟のみえ  
ねは

波まよりよふかく出し釣舟のまつほと過てものをこそ思へ  
うこの大ふよしのふにみちのくにより

わかれてはいかに戀しと思ふらんをのか心そ人をしりたる  
あしろにもみちよせたり

紅葉はをよする網代は多かれと秋をとめてみる由そなき  
つくしへゆくに

天原波のなるとをこく舟のみやこ戀しきものをこそおもへ  
山たかみおちくる瀧の白糸はあはによりてそ亂れそめける  
やま吹の八重咲花をなつかしきそよや一重に打とけにけり

又立春

山川の氷とけつゝ春くれはぬるき風にもはやきなりけり  
青柳の糸よりかくる春くれは池の氷もほころひにけり  
此御手本箱にあしてをぬひ物にすへしとせめらるれ  
は

王くしけ二見の浦の中におつる月かとみれば鏡なりけり  
いつこそやふたみの浦のありといひし心をいれてこほし物を  
おなしやうなれと書あつめて定らるへしとて

箱のうちに明くれ遊ぶあしたつは川瀬のみ社友とみるらめ  
難波津につのくみ渡るあしのねのねはひ尋ねてよを頼む哉  
又大宮の仰ことにてよめると御手本にかゝれたれば

いつしかといそく心のさきたちて朝の原をけふこゆるかな  
しのゝめに朝の原を越くれはまたよこもれる心ちこそすれ

二村山

秋風にはたをる虫の聲しけみたつねにきたる二むらの山

ふるのやしろ

年をへて植し榊のかはらねはふるの社といふにそありける  
人のなれと返しを書とて人の家の櫻をみて

さかしらとおもはさらなん櫻花ちらはとなりの人もおしまん  
といへるを返しとて

つれ／＼と花なきやとにひとりて隣の春に心をそやる  
むつまじき人のめのおかしと思ふにそねむとて  
心をは染てひさしく成ぬれといはて思ふそくちなしにして  
もろ友かきよめる

人こふる我衣手のかはかぬは一夜の露やいかにをきしそ  
むかしあふみといひし人に冬

冬こもりつひにあひみす成はては雪ふりにきと人にかた覽  
むまのすけにて播磨にくたるに明石の浦にてよるく  
らきに千鳥なきておきのかたに出ぬ

白波に羽打かはし濱千鳥かなしき物はよるの一こそ  
いなひのにむら／＼立る柏木のはひろになれる夏はきに鳧  
村雨に立かくれせし柏木の青葉になつはあつまりにけり

ひうかの國にこと引の松あり枝の波のよするを  
しら波のよりくる糸ををにすけて風にひくくかこと引の松  
つくしにて女にあひて曉方にいひやる

なに事のけきはうれしき我なれや涙はわかぬ物にそ有ける  
又みちの國にてあるものゝのれかをこひにやる

冬の池の同じ鳥には數ふ共おしとないひそかものひかはそ  
むまこのよりこて京へいくを恨ける女にかはりて

親の親と思はましかはとひてまし我子のこにはあらぬ成へし

あはつにやとかるときゝていひやる

湖のあはつにやとる君ゆへにはかなくしほをたれてける哉  
むねたかゝみちの國にて子とも三人かかうふりし侍  
けるまたのあした

松嶋の磯にむれるあしたつもの己かさまゝみえし千世哉  
末の松山に子日に此人の母車にて出たるにかみ(等)  
しけみ(等)すけ(介)つねみなといひたり

末の松引にそきつる我ならて波のみたるときくかねたくて  
返しあれはつけけれと。かゝす。をのかならねと。かへし  
したるかおんと思ふて

ある人あゆみつ水くきの末につけて  
水莖のあとふみつけて心みん思ふところにあゆみつくやと  
かへし

篝火のうら白からぬからす河をみつとやいはん事は許すな  
春雨をなかめて

ちる花をやらん涙の春雨にぬれぬ人こそ世になかりけれ  
春雨のそほふるあしのをやみせすのか涙に花そちりける  
くれの春

春毎にけふのわかれはおしめとも年の内にはかへらさり鬼  
年毎にわかるゝ春とおもへとも猶なくさますおしまるゝ哉  
くる夏とわかるゝ春の中にあてしつ心なくものをこそ思へ

さく花の散にし春はうけれともけふのわかれは猶そ悲しき  
年ことにとまらぬ春としりなから心つくしにおしまるゝ哉  
二月はかりに梅花に雪の降かゝりたるを世のうき事  
をおもふころにて

花の上に散くる雪の我ならはいかに嬉しきいのちならまし

かゝみにしろさやみえけん

雪きえぬ我みやまなる朽木には春もまたれぬ心地こそすれ  
立春の日雪ふる

初春の思ひたつらん山道にあやにくなるやけきのふるゆき  
またさかぬ枝にうつまは白雪を花ともいはし春のなたてに  
立春の日又雪ふる

春ことに鶯のみそしらせける鳥のはらにや花もこもれる

山里はすみてあたにそ成ぬへき春の心の花にみゆれは  
吹風をしるへにはして梅花こよひばかりをしるへかりけり

風さむみ春や來らぬと思ふまに山のさくらを雪かとそみる  
雪とみておほつかなきは山櫻花となつてゆくやなになる

女の家にもゝの花やすもゝの花なとむらゝさきた  
りうくひすなく

鶯の聲によはれてうちくればものいはぬ花も人まねきけり  
春夏の中にける藤波はいかなる岸か花はよすらん

白波の立田の川を出しより後くやしきは舟ちなりけり  
昔より我千世に契なし人ともそあひみる事はすくなく鬼

打返しはあらぬ人世中にすみわひて鏃すきとりてお  
りすはたはるほともなくしぬるをみて

春ことにわすれにけり埋木は時めく花をよそにこそみれ  
雁金は花にすむ共みえなくにちりぬと思ふにかへる聲する  
蛙なく苗代水にかけみればときすきにけるわれいかにせん  
山ちこえくれ行春の木のもと夏もみえぬにしけりあひに鬼  
みちの國に山のこほりといふ所にて冬の月を

雲はれて空にみかける月影を山のこほりといひなおとしそ

此山のこほりにかのこまたらに雪消殘る

秋くれはなくさをしかの北へゆき山の遠きかなく聲もせぬ

京よりくたるにたこのうらにてむすめ

いそぎ行旅の心や通ふらんたゝぬ日そなき田子の浦波

さねかたの君のもとにみちの國に下るにいつしかは

水の上の濱名の橋もやけにけり打けつ波やよりこさり鯉

九條の右大臣のむすめかくれ給て

よそにふる物とこそめ白雪のしらゝしくも思ほゆる哉

はるかに京よりくたりしに

天雲のわかれし中に通へはやよそなる袖のかはかさるへき

むかしのはおほつかなけれと

いとかたき岩ほに生る松たにも風のふくにはなひくてふ也

かへるさのなき水壺のはまへにてうつし心はとゝまりに鳧

いひさしてやみぬと思ふな池水の深き心のよとむとをしれ

はのゝと明石の浦をこきくれば昨日戀しき波そたちける

大嘗會のゆきすきのかたに明石の濱を懸にて

朝日さす明石の浦に立るせし波ものとかになる世なりけり

難波にて舟せうえうして岸の藤のはなを折てやかた

にさしてくれにかへるとて

漕舟にけさよりかけし藤波はよるさへみゆる物にそ有ける

秋わかれし人

年ごとに昔は遠く成ゆけとうかりし秋は又もきにけり

やとり所はなし

いつこにか心をやりてやとさまし花なき里はすみうかり鳧

### 吹風梅の香す

花さかぬ我宿さへもにほひけるとなりの梅を風やとふらん

梅か枝のものうきほとに散雪を花ともいはし春のなたてに

萬代の春をかそふる鶯は花と竹とにすめはなりけり

散雪を花のさかりとみるへきは春の心の浅きなるへし

消はてぬ雪かとみゆる山櫻にははさりせはいかてしらまし

花にのみうつもれにける鶯はなく聲さへそほのかなりける

散花をおしむとやなく鶯のおりしれりともみゆる君かな

世中はおとろへゆけと櫻花色も昔の枝にそありける

山里は櫻花こそあたらめすむ人さへやしつ心なき

鶯のとなりにわれもすむ物を聲をわきてそ人もとひける

春のくれつかた

花もちり鶯のねもかれゆけはわか山里はあくかれぬへし

いそくらん夏のかよひに關すへて暮行春をとめてし哉

うき事も春はなかくてありぬへし花のちりなん後そ悲しき

うちしのひなとか心もやらさらんうき世中に花はさかすや

音もせて谷かくれなる山吹はたゞ口なしの色にそありける

我のみやゆきておらまし山さくら人の恨みをおもはすも哉

初聲はさかまほしきを時鳥春にわかれんことそかなしき

いかてなをけふの衣をかへさらん春にわかれん事の悲しさ

雁金のかへる羽風や通ふらんすき行みねの花ものこらす

山里は浮世もあらしと思ひしをいとふもしらて尋ねきに鳧

あふくまに霧立といひしから衣袖のわたりに夜もあけに鳧

又春思ひ出るに



春すきはいとゝ物をそ思ふへき花もちらぬに憂身すてゝん  
波の聲に夢さむるといふ題をためきよとむねちかと  
によませておきなことわる春 ためきよ  
夢たにも戀しき人をみるへきに波の聲にそおとろかれぬる

むねちか

浦ちかみぬるかとするは白波のよるをとに社夢さめにけれ

これをわろしとておきな

戀しきは夢にのみ社なくさむれつらきは波の音にそ有ける

渡津海の波のかたゝ立波はいと打はへていつちよるらん  
枝もなきうらゝに咲梅花風にやとれる春かとそみる

花のあはれなる事をみて

のみをまつさはれける

舟ちにはおもふ事のみ戀しくて行末もとくわするめるかな

吹風のしつ心なき舟ちにはさらはよといひし人を戀しき

都いてゝけふはいくかそおほつかな留めし人は數へをく覽

大嘗會すきの哥こしの國くは原の里題にて

桑原の里のひきまゆひろひあけて君もや千世の衣糸にせん

ゆきのかた玉つくり川を題にて

えか

ひとつにて萬代てらす月なれと底もみえける玉つくり川

又屏風の繪にわらひ折女かたみひきさけなとして

我ならぬ野へのわらひも生にけり命を春のかたみなりける

ひは殿のいは井に女の水くむさしのそきつゝかけみ

年をへてすめるいつみに影みれはみつわくむ迄老にける哉

昔衣川の關の長のありしより老たりしかは

昔みし關守もみな老にけり年のゆくをはえやはとゝむる

しなのゝつかまのゆにおはしたりしかはかきつけし  
これたゝのさいそうのおり  
出るゆのわくにかゝれる白糸は來る人たえぬ物にそ有ける  
やかてむまやをそへたるおなし事なれとおかしとみ

る

最上川おちそふ瀧の糸は山のまゆよりくるにそありける

此もかみ川はいみしき所なりよにゝすおもしるき所

なればすきかたし

もかみ川瀧のしら糸くる人の心よらぬはあらしとそおもふ  
なとそいひあつめける。

昔堀河殿石山よりかへり給しにはしり井にてよませ  
給ひし

相坂の關とはいへと走り井の水をはえこそとゝめさりけれ

法師の色このむをにくしとて

常ならぬやとの櫻に心入てやまさくらをはいひなけなちそ

二月はかりにみちの國にりんしの祭に雪にぬれこう

したるかちなるをのここつるの池をすくるほとにこ

こはいつこそととへはこつるの池のつゝみといへは  
心やりによめといへは

千年ふるこつるの池もかはらねは親のよはひを思ひ社やれ

父

千年をはひなにてのみや過すらんこつるの池と聞て久しき

みちのくにのかみはらゝの子とも男女かうふりし

裳きすまたはかきもきすかはらけとれとあれは人々

かはらけとりてはゝきみうせての事也

いろゝにあまた千年のみゆる哉小松か原にたつやるる覽

かへし

古をけふにあらする物ならはひとり千代も思はさらし  
又返し

ひな毎に千世もゆつりてまな鶴のいつれの雲に飛隠れけん

仁和帝の子日に

萬代を霜をくけふの子日には野への小松そかつひかれける  
をとに聞田子の浦をわたるに浪立は

風吹は面かはりゆく田子の浦の小浪しも社さかなかりけれ

をのか子とももの京にも田舎にもあれは

人の世は露なりけりとしりぬれはおやこの道に心をかなん  
ことしめつらしき時鳥をきゝて

一人かすかたらひわたる時鳥ことのいらへをたれかせき覽

世中なし恨て紅梅を

紅に花さく梅と衣手と露と我身をいろやかよへる

世中のはかなきをみてむねちかに雪降日

瀧つせにたえすうつまく淡雪の憂世つくすとみるやいつ迄

かへし

雲井より渦まきおつる瀧つせの雪とみえつゝ千代をふる哉

齋宮の内侍にひは殿よりいろ／＼の物送り給ふにれ  
いのおきな

大方の聲となきゝそ時鳥おもふ心のあはれなるらん

故后宮より池の草合するにおほと草ありけりととき  
きていひにおこする

よるやとるいそへの波やさくらんおほ海の原に千鳥鳴也  
降雪の袖にこほりし朝よりふりすてかたき物をこそおもへ

さかみにて

こゆるきの磯の若めもからぬみは澳のこなみや誰によす覽

はるくら人たひとといふくつを花につけてえさせたる  
足引の山の櫻もみにゆかしこのたひえたるくつのおしさに

おもふ君にあひやなりたりけんまゆみいむとてはり

まちへくたりてかへりて

播磨野やしかまの市にそめかすし我かちにの君をみつしか  
といへはおもふ君

我ためは君の心も淺みとりそらことかちのことなきかせそ

いまはあまに成ていひおこす

山ふかみ我身はいりていにし月思ひ出るはなみたなりけり

かへし

思ひ出る心になふ涙もているとく山はふかからしやは

あるやんことなきあたりにて風にわつらふにゆゝて

するにかたひらとへはいみしきしなののふるきかた

ひらをおこせたりかへすとて

よへしやるみちに程ふるから衣こゝの物にと人もこそみれ

兼盛するかのかみなりける時其國なりける男の清見

か關といふ所にまた人まうけてこのめのもとにいか

さりければかくなんあるとかみにかたりければ

するかのかみ兼盛

〔よこはしり〕

するかなる清みか關に人すへていつてふ事は永くとゝめつ  
女にかはりて

せきすへぬ空に心の通ひなは身をとゝめてもかひやなか覽

重之集下

大貳のかゝら哥もりにけり

舟路にて草の枕しむすはねはおきながらこそ夢はみえけれ

大貳常に哥よませけりつゝみの瀧を

音にきくつゝみの瀧をうちみれば唯山河のなるにそ有ける

つゝみの瀧はこれにまさりてよむ人はあらしされと  
たゝにやはとて

山河にふかるゝ笛のあれは社つゝみの瀧にあはまくらめ

すみや汀に春

春くれはまつそうちみる石上めつらしけなき山田なれとも

かすか野を

やかすとも草はもえなん春日野をたゝ春の日に任せたら南

あるやんことなき女にむかし

春の雨にしはらのふる事そまさりける山のみとりも色に出に鬼

夏

我かとにまつなきたらは空蟬のむなしきねをもなき暮す哉

ためちか島めぐりにきていみしかりけるところをみ

いそなつむ蟹のみるめもある物を若か舟ちに後れてそ思ふ

みちの國のかみさねちかあきらある人のおやに後

れたるをとひにおこせてきぬわたなとこをつくりて

いれておこせたり

はこくくみし君を雲井になしてより大空を社たのむへらなれ

かへる春にあひて

吹風もけふはのとかになりけり物思ふほとに春やいぬ覽きい

又春つかさめしを思ひやりて

春ことにわすられにけり埋木るいは花のみやこに思ひこそやれ

あるやんことなき所にめせはまいりたりむかしにな

らひておまへに出たれはなにとなく御覽してかへさ

るにつけて聞ゆ

天原わたる千鳥のはねたゆみきしをかはともみてかへる哉

ある女に秋

虫のねの悲しき野への花すゝきこち吹かせにうちなひか南

五月はかりにさまうつくしきわらはのかうのうすや

うのに蟬のめぬけをつゝみてもてきて人にさしおこ

せてうせぬよろつにおもへとみしらぬをもしひとゝ

せの夏ころいきたりし人こそよしなくみえしかとを

しはかりていひやる

古の夏なつにければ空蟬のそれからをともするにそ有ける

みちの國のかみの母君にいひはしめに

さゝかにの糸筋いとすぢならはあらぬ身の雲のよそには思ひ放ちそ

又此君のもとにてくものてひとつおちたるか二三日

まてうこくを

さゝかにのくものはたてのうこく哉風を命に思ふなるへし

齋宮の女御うちにおはせしむかしあるたちはきのお

さ承香殿の西の妻戸に立よれり少納言といふ人いと

えものおかしくわかよむこの君たちも人に物いひか

けよといひよりてまついかゝいはんと思ふと袖と

りかはしたり誰にととへはみなもとのこたへすおな

しきなのらすといふ  
こゆるきの磯いそのなりのそなのらねと底計をそ作りしりたる



女されはよといひてきゝもはてぬに

磯棠つむ蟬ならは社わたつ海の底のものめく事もゆるさす〔ぬい〕

といひてそとしへける又波立をみて

吹風にいろたちまさる藤波は岸になりてやかつはおるらん〔よい〕

春何事を思ひけるにかありけん

いにしへをおもふ涙の春雨はわか袂にそわきてふりつゝ〔けるい〕

もろともに外へゆかんといひ契りてふとひとりいぬ  
るによりてやる

行春に立後れぬと春霞思はぬ山をなけきつるかな〔るい〕

法師のことこのむ哥の返しを心えすれば

口なしや君か園には繁るらん色めくなるをいらへせしとや〔けい〕

又法師

行さきを思ふ涙のしるへにて蓮の池をたのむはかりそ〔をい〕

また

花をのみ春の宮にておりしかは思ひ出てそうくひすのなく〔つゝい〕

いにしへの戀しき人もみえぬには花のゆかりにあひみつる哉〔ぬい〕

桃花すける人のうちゑいてあるをみて

人しれすすくとはきけと桃の花色に出てはけふそみえける

大貳の御手本

年ごとに枝さす松の葉をしけみ君をそたのむ露にもらしそ〔なう〕

たけくまの松一もとかれにけり

たけくまの松も一もとかれにけり風にかたふく聲の淋しき〔らふい〕

年をへて誰をまつとか武隈の常盤にのみはいかて頼まん

行水に心をそへてやりけれとむかしまてには波もかへらす  
にはにすやありけん

鶯もなかつ霞もたゝぬ春あやしとて心長閑なる所に  
おはせといひやる人のおそかりければ

鶯の聲のつかひもまたこねはおもひそたゝぬ春の霞を

そねのよしたゝ但馬にていつしの宮にてなのりそと

千早振いつしの宮の神のこまゆめなのりそよたりもそする

曉のまかきにみゆる朝良はなのりそせまし我にかはりて

故右大臣殿になつきにゆみそへて奉るとて

陸奥のあたちのまゆみひくやとて君に我身をまかせつる哉

故みちの國のかみせきかそならていれりとて返した  
ふによりてまうす〔きかい〕

こそ春關にとまるとしらませは今年花の長閑からまし〔春い〕

花見にはゆるしそせまし白河の水ならは社せきに淀まめ

平野の祭にもろともにさそへるに一尺はかりの松た  
てりとまひこめたり

千代のこもれる心地こそすれ

と神のいふおきな

二葉なる平野の松をけふみれば

はこかたのいそにて京にのほる

白河の關よりうちのはのとけくて今はこかたのいそかるゝ哉

みちのくの國にて子のかくれたるに

わかためとおもひをきけん墨染はをのか衣の色にそ有ける〔るい〕

言の葉にいひをく事もなかりけり忍草にはねをのみそなく

なよ竹のをのか此世をしらすしておほしたちつと思ひける哉〔てい〕  
さもこそは人に劣れる我ならめをのか子にさへ後れぬる哉

なけきてもいひても今はかひなきに蓮の上の玉とたになれ

むすめに曳もたるといふころ

世にふれば心の外にあくかれて君か立名をよそにこそきけ

返し

人なれぬみつの御牧の駒なれや立なも更にあらしと思ふ

あつまへくたるに美濃國とよきの郡にて

旅人のわひしき事は草枕雪降ときこのほりなりけり

東路のとしをうるまといふ事は行かふ人のあればなりけり

夏の夜のみしかき事を人々いふあすは五日のひに

なるへければ

夏のよの短き事もつらからすあすの菖蒲にあはんと思へは

秋の夜月をみて雁なきわたる

月影をまつらん里もある物をかりの羽風のぬるくきこゆる

たちはきのおさみなもとのしけゆきつこもりの目を

給て哥よみたてまつらんときはたんと仰られけれ

は春廿夏廿秋廿冬廿戀十難十

春二十

吉野山峯のしら雪いつ消てけさはかすみのかはるらん

難波えに生出るあしのほみれは数しらぬよと思ひやらるゝ

冬はいかに結へる瀧の糸なれやけふ吹風にとくるをとする

めつらしくけふしも鴨のむれるるは池の氷やうすくなる覽

春日野にむれたつ雉の羽をとほ雪の消まに若なつめとや

春たちてほとはへぬらししからきの山は霞にうつもれに鳥

常盤なる嶺の松原春くとも霞たゝすはいかてしらまし

けふきけは井手の蛙もすたく也苗代水を誰まかすらん

春の日のうら／＼にして出てみよ何業してか鰯はくらすと

かせにのみまかせてはみし梅花おりて快にかをもうつさん

いつれをか色ともわかん春たちて散こし梅におもなれに鳥

鶯のをのか羽風に散花をのとけくみんとたのみける哉

おさなくそ春しもとふと思ひける花のたよりにみゆる也鳥

鶯のなく聲をのみたつぬれは春さく花はわれのみそみる

我宿や花のさかりに成ぬらん道行人のたちとまるかな

青柳の糸をみきはに染かくる春の風にやなみはよすらん

花さくらつもれる庭に風ふけは舟もかよはぬ波そたちける

みたえせぬる手の山吹かけみれば色の深さもまさらさり鳥

夏にこそ咲かゝりけれ藤花松にとのみもおもひける哉

春の日はゆきもやられす蛙なくさほのわたりに駒を止めて

夏二十

花の色にそめし袂のおしければ衣かへうきけふにもある哉

夏草は結ふばかりに成にけり野かひの駒やあくかれにけん

かけてたにあふひときけは千早振わか祈事のしるしある哉

卯花のさける垣根は宿りせしねぬにあけぬとおとろかれ鳥

山城のよとのこくさをかりにきて袖ぬれぬとは恨さらなん

初聲のきかまほしさに時鳥夜ふかくめをもさましつる哉

夏かりの萩の古枝もたえにけりむれるし鳥は空にやある覽

春まさし山田のなへは生にけりもろてに人はひきも植てん

我身こそふりもせさらめ五月雨の同じそらとは思はさら南

五月山ともしにいつる狩人はをのかおもひに身をややく覽

夏のよはあり共みえぬ虫なれと秋は野もせに有とさゝてん

旅人のたく火とみつる螢こそつゆにもきえぬひかり也けれ

わかてにも夏はへぬとも思ふらんあふきの風の今は物うき  
草の葉もうこかぬ夏のてる日にも思ふ中には風を吹ける  
空蟬の空しきからはをとせすたれに山ちをとひて越まし  
小男鹿の通ふもみえぬ夏草もしけみなりとは思はさらなん  
夏艸のしけみをわけし君なれと今は心に秋そきにける  
秋風は吹ぬとをに聞てしをさかりにみゆる常夏の花  
ゆきなれぬ道のしけきに夏草のあか月をきは露けかりり

秋二十

秋くれと夏の衣もかへなくにありしさまにもあらずなり行  
天川水まさりつ彦はしはかへる朝になみやこゆらん  
七夕のわかれし日より秋風のよことにさむくなりまさる哉  
をとめて思ひにもゆる螢こそなく虫よりもあはれ也けれ  
待人のかけはみえすて秋山の月のひかりそ袖に入ぬる  
秋風は昔の人にあらねとも吹くるよひはあはれとおもふ  
覺來なこゆる山への遠ければ日暮しのねに宿りをそする  
萩の葉に吹秋風をわすれつ戀しき人のくるかとそみる  
秋風の吹ぬ日たにもある物を今宵はいと人そ戀しき  
なく鹿の聲きくからに秋はきの下葉こかれて物をこそ思へ  
秋のよの有明の月にひろへとも草葉の玉はたまらざりけり  
秋風は旅の空にも吹ぬらんせこかこるもをかへすらんやそ  
白露のをくての稻も出にけりかりくる風はむへもふきけり  
名取河やそせの波そさはくなる紅葉やよりていとせく覽  
秋風にしほみちくれは難波江の芦のはよりそ舟は行かふ  
白雲のおりある山のから錦かさねて秋のきりそたちける  
風さむみやとへかへれば花すき草むら毎に招くゆふくれ

白露のをきける菊を折つれば袂ぬれてそいろまさりける  
山城の鳥羽のあたりを打過て稻葉の風におもひこそやれ  
冬二十

もみち葉の残れる枝にをく霜のしはしの程を恨むへしやは  
あさちふにけき吹風はさむけれとかれ行人を今はたつねて  
さむからはよるはきてねよ深山より今は木葉も嵐ふきつ  
水鳥の羽にをく霜のさむきを誰になれてかけつへかる覽  
千早振をみのかさせる日影にもとけす霜のよるむすふ哉  
霜の上にけさふる雪のさむければ人を重ねてつらしと思  
芦の葉にかくれて住しわか宿のこやもあらはに冬はきに覺  
我宿にけふ降雪の消さらはいつしか春をまたれましやは  
降雪にぬれきてほさぬ我袖をこほりなからも明しつる哉  
冬くれはつらにみゆる石山の氷はかたきものとしらなん  
故郷の垣根の雪しふかければ遠ひしあともみえすそ有ける  
信濃なる浅間の山のあやしきは雪こそきゆれ火やほもえ南  
たく人もあらしと思ふふしの山雪の中よりけふりこそたて  
けふみれば蟹の小舟も遊ひけりしほみつ浦は氷らさるらし  
近江なるやすの入江にさすあみの氷ををさけさそみえける  
信濃なるいなにはあらすかひかねに降つむ雪のとくる程迄  
数しらすかつくときけとわたつ海の蟹のしはさは寒け也鬼  
年をへて雪ふりうつむ白山のかゝれる雲やいつこなるらん  
山の上をよそとみしかは白雪はふりぬる人のみにもきに鬼  
雪つもるをのか年をはしらすして春をはあすと聞そ嬉しき  
戀しさを慰めかてら菅原やふしみにきてもねられざりけり



思ひやる我衣手は難波女〔なるとい〕の芦のうら葉のかはくよそなき  
 風をいたみ岩打波のをのれのみくたけて物を思ふころかな  
 打とくる世社なからめ人しれすふす計り〔けずさ〕にもあらぬまそな  
 松嶋〔やい〕のを嶋の磯にあさりせしあまの袖こそかくはぬれしか  
 淀のつとみまくさかりに行人もくれにはたゞに歸る物かは  
 関原やふせやにとつくかけ橋のたかためにかは我は渡し  
 つくは山は山しけ山しけれと思ひ入にばさはらさりけり  
〔なとりい〕  
 となか川渡りて作る小嶋田をもるにつけつゝよかれのみする  
 白波のまかきのしまに立よればあまこそ常に誰ととかむれ

雜 十

高砂の尾上の松の我ならはよそにてのみはたてらさるまし  
 水の上にうきたるあはを吹風のともに我みも消やしなまし  
 うしと思ふ心にけさはきつれ共たそかれ時は空しからまし  
 みさこゐるあら磯波そさはくらししほやく煙なひく方みゆ  
〔こい〕  
 衣川みなれし人のわかるれは袂〔たちけりい〕までにそなみはよせける  
 きさかたや渚にたちてみわたせはつらしと思ふ心やはゆく  
 磯はみなしほみちくれと嶋島の波の中にそよるもねぬへき  
〔さくい〕  
 たけくまのはなはに立る松たにも我こと獨ありとやはみる  
 水上に人のみわたる河なれば心によゝもたのまれぬかな  
いけろ  
 年ことにおひそはるてふやそしまの松の葉枝は君やしる覽  
 やそ嶋の松の葉枝をかそへつゝ今ゆくすゑのほとはしる覽  
〔はあへとい〕  
 枝わかぬ春にあへとも埋木はもえもまさらて年へぬる哉  
〔をふるい〕

群書類從卷第二百五十二

和歌部百七家集廿五

藤原長能集

むかしこかみ 故号の河内國さり侍りし時のり申事  
やはへりけむ丹波守にてかの國の神うゝ返まうしは  
へりしにものたてまつれる人の侍りしにかはらけと  
りて

いのり置し神の心もいちしるくむかしの人にあへるけふ哉  
また昔ことありてこのかみ (守)さり侍りしかは候し  
東宮の殿上もおりて後右近將監になりはへりしかは  
もとのことくに宮にまいりて候しほとに九月十五  
日しんして詔奉らせ給ひしことはおほかれはとゝめ  
つうたかくなむ  
いにしへに光たかはぬ月清み神の心はさやけかりけり

東宮の大后宮女房におほせ給ふことありきいづれの  
としにかはへりけん三月三日草もちゐして法しのか  
たをつくりて是にむろつくりてまいらせよとおほせ  
こと侍りしかはかたのやうなるすはまつくりてむろ  
のかたはらに木ともなとたてたるにほとゝさすのか  
たつくりてまいらせしにつけてはへりし  
宮こにはまつ人あらん郭公さめぬ枕の宿にしも鳴

丹波にてわつらふことありしかはひさしう京にもか  
へらさりしほとにつれ／＼にてみゆるものにつけて  
よみあつめて侍りし哥春の事なりかたをかに火つけ  
たるを見てこれはなにそとゝへは畑やくとはこれを  
なんいふといひしかは

片山にはたやくをのこしかやかはみ山櫻はよきてはたやけ  
あらたに驚のゐたるをみて

さきたる汀の澤田あらずかもふるみなからに春を暮せる  
山寺にまうつる道に木々のもと過るほとにあまかへ  
るのなきしかは

雨蛙鳴や梢のしるへとてぬれなんものを行やわかこませこ  
野にあやしき水のたまりたるをみて

河上に井せきやすらんこそ冬かくしはゝらに岩分る水  
松一たてるをかをみてよめる

武隈にいつくたかへりくさむらのみよのうかみに松立る岡  
草むらあるみや。その所の名也。

かりすとてたかき山にのほりていつくとかいふとと  
へはいふき山となん答は  
高けれと都もみえず登りてはたゝやくたらむいふゝきの山

夢見さはかしとてよめる

みやこ人我をこふらし草枕われか旅ねの夢みさはかし  
秋小鷹かりにまかりありきしにあるたのくろに女郎  
花のさけるをみて

山かつの田くろに咲る女郎花我ひとりのみゝるそあへなき  
後にかたりしかはあたなは松といひしものかへし  
やまためのたくろに立る女郎花人待えたる心ちしけめや  
をくらの少將の御もとにてあめふりし夜秋夜雨とい  
ふ題をよませ給ひしに

〔同冬〕も明は先みむ宮城のゝもとあらの萩は萎れしぬ覽  
おなし人の石山にまうてゝ夜川霧といふ題をよませ  
給ひしに

河霧は河邊をこめて立にけりいつこ成らむ千鳥なく也  
あるひとの屏風の哥よませ給ひしに人の家の妻戸よ  
りおとこのいつるに草のうへの露おほくありあけの  
月のこりしに

白露にかゝやく月の影みれはくやしやまたきをきにける哉  
いつのやまひにかありけん家のうちにをきたりし人  
なくなりしほとにさとのとねの申やう五條にてやく  
神のまつりつかまつるになんあるおとこの五條には  
ひとゝおほくおはする中にうたふへき哥ともよま  
せたまふへきことになむやむことなくはへるといひ  
しかは祭主もこの條にこそはすめまつかしこにこそ  
はいはめといひしこととものおそろしくおほえしか  
はもしつとめなきさまに神もこそおほせとてよみ申  
たりしかともわかよみてければいたさぬはたり哥

〔後拾遺〕白妙のとよみてくらをとりもちていはひそゝむる紫の野に

はやうた  
今よりはあらふる心ましますな花の都にやしるさためて  
また水邊の白菊を

影みしは天つ星なりしかりとて沈む藻屑をてらすとはなし  
かたらふ人のもとに五月のころほひいきたるに暗夜  
子規待といふ題をよますれば

月みつゝ待たに有をほとゝきすなそやねなんと思ひける哉  
又あそひする所にて待時鳥の心に

老らくの聲かれにけり時鳥きなきとよませはちかくるへく  
またおなしころある法師の坊にておなしころを  
おとゝひもきのふも待し郭公けふさへ鳴すなるや世中  
花山院の春戀といふ題を給へりしかは

もろ共にわかなも摘んいもせ山やま田の澤の水もぬるめて  
さゝのはのさゆる霜よも明してき白つむ春の袖をぬれぬる  
何もせて明ぬるものを管のねの永き春日をまたやくらさん  
入道中納言〔拾遺〕下らうにおはせし時一條殿のさくら  
をおしむころの哥ひとゝゝによませ給ひしに

〔拾遺〕身にかへてあかなく花を惜むかないけらは後の春も社あれ  
うちわたりなりし人に

白波のよすれはよするさゝれ石のかとなき物は我身なり是  
おなしひとに春山寺にこもりていひやる

なをや君われつらからむ然らずは霞の影はおるへきものを  
又おなし人に  
よのつねのものを思ふ人の袂たにぬるゝはぬるゝ物と聞しを  
また女に

〔後拾遺〕我心かはらむ物かはらやのしたゝく煙わきかへりつゝ



かへし

忍ふ思ひひとしくなればかはら屋の烟ははやく絶にし物を

うちわたりの人に

ありへてもあらはやなとそ世中のかく憂き物としりぬとならば

〔後拾遺〕

いとふとはしらぬにあらす知なから思ふにあらぬ心なり鬼

命あらは命あらはと思ひつゝうきをもいたく恨みやはする

〔後拾遺〕

また女に

〔こころをい〕

數ふれば空なる星もなにならず何をつらさの數にとらまし

うちわたりなる人に四月はかりにやまより

聲たえす山ほとゝきすなけ共都の人そわきて戀しき

返し女

郭公しのはぬこゑにつけつゝもわくらむ人やいつれ成らん

おなし人に

わか如く物思はむ人を又もかなたくひ有けりと聞は頼まむ

いかなるおりにかありけむ

うき事は我身ひとつのうきなれば處かへてもかひなかり鬼

〔新古〕八月はかりのゆふくれに

ひくらしの鳴夕暮そうかりけるいつも盡せぬ思ひなれとも

〔續詞〕

夕くれはなかわる人のなければや心つくしといひはしめ劔

また女のもとに

思へ共えそうち出ぬなるすゝのひとつ心にこめてこそふれ

また

あひ思はぬ人をしもなと思覺露よりけなるこなかみをもて

又

所からうかる君にもあらなくにはかなくまとふわか心かな

〔新千雅〕

うしとたにいふも更也いさゝらはいさやいかなる我み成覽

いつとてか君かうからぬうきか上に又憂き時はいふかひもなし

人心うしとは思知なからさすかに物の忘れかたさよ

うき身なり何かおしむと人とは我こたふへきものはを

君よりほかにたれかしるへき

女かへし

ことたへやかたは多かるしはのはを我のみ計り心と思はむ

〔題詞〕

うき事も戀しきことも諸共に我みをのみもしる心かな

うくはあらで戀しき事のそはさらはなそや枕のおしからなくに

雨のいみしうふる夜簀子にてものいひあかしてつと

めて

流れ合てそ共しらすぬれたれば軒の雪におほせてそほす

女かへし

雪おほみ立よる軒の數まさはそのぬれ衣をたれすへやきん

女になつたのはなにつけて

雪をうすみ垣ねに摘るからなつたつさはまくのほしき君哉

雨のいみしうふる夜女のもとに

かきくらし雲まもみえぬ五月雨ははれす物思ふわか身也鬼

おなし女つれなくのみありて行すゑはなとたのめたりしかは

頼むれば頼まはすこし慰まていとゝえならぬ心地こそすれ

又

うきことも戀しきこともふりぬれは何をか今は言の葉にせん

みつからまいらんとひたりしかとひむなき所なり

といひければなをくとして

有へくも斯る浮世になそやとめけふそ我身を頼みはつへき

また女やいかゝいひたりけむ

思ふてふことこそいとゝうき人のうきをしらする心也けれ  
また

わひ人の心をすこしなためけむしての山路もやすく越へき

数々にたのめし事をあめつちの神も聞けむ物にやはあらぬ

とも角もいふへき方も思ほえすすへて我身の我身ならぬは

老ぬるも若きも何もわかぬ世にも思ひにやしなむとす覽

こゝろほそけなる山里にこもれる人のもとにいきて

かへるとて

おほあらきのとをのゝ原に住人をみすてゝ行は袖を露けき

かりにみる袖たにぬるゝ大あらきの杜の雪はいふ方もなし

人のもとにいかむと契して待りしにかはりの新し人

のまいらさりしかはえまかてさりしつとめて

袂にそくみあかしつる夜もすから立ちわひつらん人の心を

山にのほりて法師になりたるひとのもとに

なにかその身のいるにしも立かくし心の深き山にすませよ

屋の繪に水無月はらへしたる所

さはへなすあらふる神もをしなへてけふはなこしの稜也鬼

さかのに前栽はりにまかりて

ひくらしにみれともあかす女郎花のへにや今宵旅ねしなまし

花山院に三月小なりし時春のくれおしむ心人々よみ

しに

心うき年にも有哉はつか餘こゝのかといふに春は暮ぬる  
おなし夜のあくるあけほのに  
なけや鳴山ほとゝきす春くれて物さひしかる人さかくれに

同院にて障子の繪に橘の咲たる所

たちはなの花のさかりに成にけり山郭公きなけしはなけ

左大辨のはしめの北方の御もとにおはしはしめての

比ほひそこにとのゐしてのあかつき

若草の

いもかきなれの唐衣かはしもあへす明るしのゝめ

上總よりのほりての春のりまさの家にまかりて人

人さけのみしつゐてに

東路の野路の雪まを分てきて哀都の春をみるかな

ひととせおほ殿の卅講の哥合に

ねさめする秋もこそあれあまの原のとけく照せ夏の夜の月

夏夜月

郭公

誰里にあかす聞らむほとゝきす有かなきかに鳴わたる也

池邊松

君か代の千とせのの深みとりさはかぬ水に影はみえつゝ

いつれのとしにかありけむ花山院に八月三日哥合せ

させたまはんとてありしかととまりにしに哥ともは

をのゝ奉れとおほせられしかはたてまつりし七夕

袖ひちて我手に結ふ水の面にあまつ星合の影をみる哉

露

さゝかにのすかく葉末の淺ちより亂てかゝるしら露のたま  
花山院三月廿八日はな御らむしにありかせ給ふ御と  
もにさふらひて尋殘花といふ題を  
谷風にみやまの花やのこり有と打を渡れるみつもさばくに  
山寺にてあそふ  
優婆塞か行かふ山の山さくらけふの行幸のためにさりける

同院の御てつからかみ繪かゝせ給ひて人々に哥つけ  
させ給ひしに秋の前裁さきみたれたる紅葉おもしろ  
き所に

佐保姫の玉おちにけりから錦おれる木のはのうへの白露  
ものへ行人に

いにしへも今もあらんやわか如く思ひ盡せぬ思ひするひと  
わかれイ

石山にて

しらかしの知らぬ山路を尋ねれば高根の續きならせるや誰

女のもとにいきて硯をこひ出て筆の中に

こと繁み見れば流るゝ薄墨のかすめしことやしるらんや君

女のたちより給へものきこえむといひたれば

定めてそ立もよるへき世の人のあひてもあはぬ物は思はし

おなし人に

つれゝと物思ふ事の盡せぬをくるしき物としるや知すや

女返し

思ふ覧おなし心にあらはこそくるしきものと聞もなやまめ

なつきて後ひさしくありてとひて侍りしに女

あふ事のはに置し露はきえにしを世に有とてや人のとふ覽

霧立し朝に

秋きりは川邊にさへそ立にけるいつこ成らん千鳥鳴なり

紅葉散をみて

ひくらしに見れともあかぬ紅葉はいかなる山の嵐なる覽

かはらやとかありしおなし人に

早きせにのほるますらおこりすまに此夕暮を頼むへらなれ

我心散り失せぬ菊にたとふれば花こそいたく移るひにけれ

千早ふる天の岩とををしひらき我にかたよれみこもりの神

あめつちの神ふりかけて誓ひてしことなる空に成にける哉

かけつらといひはへりける人の物いひ侍りける女に

しのひて物いひをめてまかりたりけるにきあひにけ

れは一品宮の九條にかけつらみむときとて

こす波に袖うちぬらしかへりしも哀と思ひかけつらむやそ

かへし

よし思へなるよしとたにみましかは涙こし鬼とみせまじやそは

女のもとに扇おとしたるにかへしたれば

獨ねの夜の衣にあらねともかへすはつらき物にそ有ける

白川の院にいてはてたる月の松陰よりもりたるに

山端のうちなる松の枝しけみさやかにみえぬ春のよの月

紅葉ある人の家のまへをわたるとて

道ゆきにみれともあかぬ紅葉哉むへこそ人も家居せりける

やたの里にて

やたのなる藻屑やはらのつかのまも戀すやあらぬ花の都を

こかみにまかりをくれて人々わかれ侍りしには傳殿

のものゝ上にかきつけてたまへりし

こゝにともしらてや君かすきぬらんだては悲しき深草の里

かへし

覺束な誰かきつけしことのはそみれば涙のかきくらしつゝ

花山院の御佛名に菊のつくりはなを

咲もせず散ともなききくの花みよのためしを頼みてそふる

はやう賀茂の祭見侍とてあやしき人を車にのせて侍

りしをむかへによしまさの朝臣立てかくいひはへり

し

その神のなかよしとたゝしりぬれば人の數とも思ほえぬ哉



かへし

理やしか憂き身也しかあれともよしまさゝらむ人は誰そは  
いつれのとしにかありけむからきぬあふきなとゝら  
せて遠江にくたり侍りしに

〔後拾遺〕

世の常に思ふ別れのたひならは心みえなるたむけせましや  
明暮のほともやみると心みに入重立こめよ秋の河きり  
岩波や吉野のもみち散ぬへし浪とゝもにもおれぬけふ哉  
神無月にくらまにまうて侍りしに紅葉のいとおかし  
うはへりしかは

女に

日くるれば遙にかゝるから衣さほしかねつるころにも有哉  
ある人のもとにまかりて二三日はかり音もせて

うはとよみとよみに鳧な淀河の底にも戀ん閑けからぬに  
やよひのついたち

〔詞花卷〕

ひとへたにあかぬ心をいとしくやへかさなれる山吹の花  
春雨

常よりは思ふとなき身にしあればなぬかふる共何かとを思  
ある女に五月はかりに

五月雨はすきにたりとやあし曳の山郭公なく聲もせず  
かへし

五月雨は世にうき物とほとゝきす鳴かくれにし聲な聞せそ  
また

うかりけるその五月雨は過にしを今はゝやきてよしと語覽  
かへし

風を疾みこりすまなみに立出て蜚よいかなるめをかみるへき

海士のきる鹽たれ衣ほさすして明石の浦をわひしかりける

しのものしのもとにまかりて物はむといひ侍りし  
にいとまなしとていて侍らざりしかは

煙たにすこしたなひけ朝なけに離のしほ焼いとまなく共  
かへし

なたのうらに絶ぬ烟は絶ぬとも思はぬ方へみともせもせし  
宮のすけなくなりて後宮にまいりて侍りしかはいと  
あはれにて

諸共にこそさふらひし老らくの獨はみえすなりていく世に  
母のふくにて宮にまいりしはへりしに花おりてとおほ  
せを侍りし

したつえにさかすしもあらず櫻花いかてかゝけむ墨染の袖  
故伊勢守のむすめにもいはむとて母の御息所に

老らくのなれる姿の池に生るはちなきこひも我はする哉  
但馬守の家に和琴かりにつかはすとて

つれゝの夏の日くらし戀しきにかみの調へもして心みむ  
上總にまかりしとしものいひはへりし女にあふきな  
として

東路の野路の契りはへたつとも扇のかせのたよりあらしや  
ぬさに

行末に神〔のし〕をしるらむいはすともこは大ぬさの手向ならぬを  
かへし

武藏野の草のゆかりを尋ねみは便りをしもはなとか侍へき  
傳殿のうへあふきぬさなどおなしく仕たまふとて

〔マコ〕  
さりそむ袂も早く朽にけむ軒のした葉の露をたにみよ  
かへし

わかる覽とまるもおなし武藏の木の下露は風も吹あへす

物いひ侍りし女我は今老にたりこれか中にとてむ

すめよひいたして物なといひてはへるほとにくりを

ものふたに入て出して侍りしそのふたにかきつけ

てはへりし

何れをかわきて忍はむふたこより思ふ心はひとつなりとて

花山院の哥合にめしゝかは

〔後拾春〕  
谷河の氷もいまたさえあへぬに峯の霞はたな引にけり

鶯

我やとの軒端の梅やさきぬらん驚きなく聲きこゆなり

櫻

春たゝはいつしかみむと待ものを遅くもさける櫻はなかな

いやしきに涙うちしくとみえつるは峯の櫻のかけにさりける

けふ咲てあすは散ぬるさくら花よはゝや早に物をこそ思へ

歎 冬

そこ清く井手の川瀬にかけみえて今さかりなる山ふきの花

柳

花さくら散しはきのふ青柳のはやまにけふはうくひすそ鳴

夏

夏くれは山ほとゝきす鳴やせむと思ふ心そめはさましける

冬

同しなを花橘のはなさかりみしかき夜こそわひしかりけれ

ふしつけし淀の渡りをけさみれはとけむこもなく氷しに鬼

ひとりぬる人も社あれ一つかひ鳴なるをしの聲やかなしき

左の大臣〔内裏御事也〕の大井におはしまして紅葉をたつ

ね給ふこゝろよませ給ひしに

〔續詞〕イ  
いつくにか駒もとゝめむもみちけの色なる物は心なりけり

おなし殿の哥合に惜夏戀月

ねさめする秋もこそあれ天の原のとけてこそ夏よの月

やまにて

何れをか世になかれとは思ふへき忘るゝ人と忘らるゝ身と

人の上を我に語りし其かみもそよ添はさりし口つきそかし

うとからぬなも有ものをいもせ山たちなかくしそ春の霞も

院の殿上にて四月二日庚申ありけるに卯花隔牆根と

いふ題を

うの花のしけき垣ねとなるまゝに隣にかよふ道そたえぬる

十月はかりに白川にて山里の戀といふ心を

戀しさそ忘れさりける山里はうらみていてし我身なれ共

藤原長能讃岐權介惟岳孫也。伊勢守〔正四位下〕倫寧二男。

惟岳者高經朝臣男。中納言長良卿孫也。

天元五年十月十八日。任右近將監。永觀元年二月五

日。停任。八月十二日。任左近將監。二年八月廿七

日。補藏人。〔卅六〕九哥仙傳。寛和二年月日。兼近江少

椋。永延二年八月廿九日。任圖書頭。正曆二四月廿

六日。任上總介。寛弘二正月廿七日。叙從五位上。

治國實。同六年正月廿八日。任伊勢守。

右藤原長能集以古寫一本按合

# 源兼澄集

十一に侍りしときち(信孝)のともにみちのくにへ  
まかりたりしにたまつくりのこほりそこのかはすき  
といふところをかならずつけよといひはへりしに人  
人もれすれてつけはへらてはやすき侍にきといひは  
へりしかは

音にのみき渡りつるかはすかきそこ共しらて過にける哉  
たちはきにてはへりしとき宮の女房のまへをわたり  
侍りしにむめのはなをさしいてはへりしかは

たまたれのみすのうちには梅の花思ひかけたる人やおる覽  
ときあきらもろともにをのといふ所にまかりしゆふ  
つかたおきな女くして京にいりはへりしかは

山人のおのかつまをおりつめてよを故郷にうつる悲しな  
おなし人もろともに八月はかりにはつせにまうては  
はへりしにあか月にかはきりのたちて侍りしかは

河霧も旅の空にや思ふらむまたよふかくも立にけるかな  
女のもとにまかりてあめのふり侍りしあかつきにま  
かり歸てつかはしほいなくはへりしかは

逢事のなきさはいつも乾かねとけきこそ袖の裏はことなれ  
いかの守ためたふかまた無官はへりしとききし(難子  
やあるいそく事なむあるといひて侍りしかはまとかと  
てをこせて侍りしにつかはすとて

求むれと更に交野のきしとしれ有といひしはそれそそら鳥  
みつからよりはまさりたる人を忍てかたらひはへり

しにことのきこえありてきにく侍りしかはこた  
みはかりそとあひてはへりしに

さきにたつ涙の道にさをはれてかきりのたひに思ひ立哉

かはらの院にあほふか方にまかりたりしついでにこ  
ころへぬたいをいひてうたよまむとあはふかまそて  
この御寺のうしろにかしは木うへたるかなまかれか  
たになりたるそれよめと申ししかは

ならのはのよふること思ひては梢の枝はかれむ物かは  
ともときかありまのゆにまかりたりしにほときす  
はつねをなむきしといへは

郭公ありまの山をきみひとりこゆとしりせはゆかまし物を  
もとすけともろともにみたけにまうててはへりしに  
もとすけ

完轉集

いにしへものほりやしけむ吉野山山より高きよはひなる人

といひはへりしかはかねすみ

歸りてもとそともなき身にしあれば吉野の山に山こもり南  
さいすすけちかゝいへにて人々四月一日ころもかへ  
のころよみ侍りしに

なれ衣もぬきかへ難し花のかを春のかたみにうつし物を  
たちはきに侍りし時ある女のもとにまかりてあした  
にしものいとしろくをきてはへりしかは

朝霜に夢忘るなといひ置てとくるにぬるうらをみせはや  
入道の中納言の子入道中將のむまれてはへりし七夜  
むめのはなをおりてかさして侍りしかはこのころ  
よめと侍りしかは

梅花何れの春かさかさらむと思ふからにそ千代はしらるる



よしのふともろともにいせへまかりしにすゝかの  
みちのいみしうしたるに時雨のふりはへりしかはよ  
しのふ

紅葉はの色々になるすゝか山時雨のいたくふるにやある覽

かねすみ

神な月しくるゝ空は紅葉はの色もたむけのしるへ成けり  
十一月かけあきらともろともにつのくにのいくたの  
もみちのちりしを見て

紅葉はの沈むそこあらはみかさりし名残によせよ沖つ白波  
かよひはへりし女をわすれかたになり侍りしにちい  
さき木のもととはへてすゑはかれてはへりしにふみ  
をつけてかくいひて侍りし

侘つゝも木の世をたに頼む木の嬉しもまつそ枯れ勝りける  
と申したりしかは

末のよをしらぬ歎はしけくとももとより人を枯むとはせず  
ともまさの朝臣のはりまへまかり侍りしにはりまか  
たといふところに女の車ののりてはへりしかは

はりまかた行かふ舟の波面よりほのかにみえし嶋かくれ舟  
き辛にそうのいけほりはへりしおりにまかりあひて  
すみかへる袖にほる池の水の面に今は蓮の開けむにあはむ

まかりかよひし女のおとこにもわすられたる  
かいへのまへをわたりしにみしわらはのかとにたち  
たるにおはすやといはれたればこのわらはしていは  
せて侍りし

忘れられていける身もあらし世中に有やとたにもとはれさら  
かへし

南

とはぬをも恨きならむ世中に我ひとりするもの忘れかは  
ものいひはへりし女の返事をせきりしかは

我ことはあくたの山の山人も思ふといへはおもふとそいふ  
ある女のもとに五月四日にまかりてまたの日いひつ  
かはしゝ

けさこそは君をみぬまの菖蒲草よとのをこふる程のわりなき  
ある女に物をいひそめてあふさかのせきのもとより  
つかはしゝ

越すてもこえてのゝちも逢坂は猶まとはるゝ物にそ有ける  
身の程よりもまさりたる人をおもひかけて  
年をへて人めをつゝむ袂よりつねに涙のもりぬへきかな  
むさしのかみためたかゝめのあまになりてはへりし  
に

なてきけむうふの黒髪やふりして變れるすちは心ほそしや  
四條の宮のすけの君たゝにまかりてあまになりぬと  
きゝしほともなくなをかたかむかへければあひぬと  
きゝて

世をたゝにすつる道にはいらすして又故郷に歸るへしやは  
むまのせうになり侍りてよろこひ申になかよりかた  
ちはきのせ上なりしうへのきぬをかりて雨のふりし  
かはかへすとて

かさまよりもりし玉水でもたゆく拂ひし袖の後めたさよ  
五月五日めのもとにてうちやすみたりしほとに女の  
いりにければ

うたゝぬのひるぬの夢に菖蒲草結とみつるうつゝならなむ  
東宮のとのゐにさむらひしにかりのこゝろよめと人

人申しかは

鳴鴈はゆくか歸るかおほつかなはるの宮にて秋のよなれば

四月一日人のもとへ

けふよりは夏の衣にもよせてあらふる神もあらしとそ思  
よのなかいとさはかしきころ人のもとよりそのまへ  
のさくらちりやしにたるひと枝をこせよといひたる  
やるとて

世中に折くらふれば櫻花匂ひのとけきこゝちこそすれ  
としころいみしうけさうせし女に

年を経てかき集めこし藻鹽草けふりやいかにならむとす覽

四月一日ころもとすけやこれかれさけなどのむ序に  
子規なかぬなといへは人々みなさゝてきといへは  
里ことに鳴といひつる郭公まつ 我宿にをとつれぬ哉

四月一日ある所にて

身にしめるまた花のこもある物をとくもかへつる夏衣かな  
ほとゝさすふるきこゑありといふ心を

故郷をこふる心有郭公思ひてなきにぬるゝ袖かな  
女のもとにとまりてのつとめてほかへかへらむとい

ふにかへらてひるいひ侍りし

命をはけさ社たけく思ひつれくるゝをみれはいかむ方なく  
八月つこもりに神明といふ寺にもとすけとふらひに  
まかりたるにせんさいのいとおもしろく侍りしに  
歸るさの物うき秋の夕暮にいとゝもまねく花薄かな

ものいひ侍りし女に

數ならぬ身にもつらさのしられつゝ歎くは君をいかこそ思ふ  
さいすすけちか露草こふやるとて

てに摘て身つから染し花なれば年はふれとも色もかはらす  
しのひたる女のつれなくはへりしかはそのふみとも  
おこせよとて

いひそめし言のはいかに成ぬらん吹かへさなむ秋の山かせ  
女にものをいひそめてほともなくいよのゆにまかる  
とてかはしりより

波たゝぬ衣の袖のうらなれてよものはま風なにならぬ哉  
かけあきらかつくしへいくにやまはといろのあをや  
るとて

足引の山はと色のかりあをくさしとや人のいはむとすらん  
すけちかゝいもうとにおくれて侍りしにそのころす  
けちかゝいへにてむかしを思ふといふこゝろを人々  
よみて侍りしに

古をこふる心にまくれして君にあひてはまとはるる哉  
すけちか

哀我むかしなからにけふならは心のほかにかへらましやは  
またいてゝいく人をあはれかちに侍りしかはむすめ  
かふくにすみしに

老の身をまもにおらん物なから此方彼方にいれてみよかし  
くら人にてはつてのつかひにゝてなにはにまかりし  
にうとのといふかたはらにとりかひのせきといふと  
ころのあれは

川上をうとのと人のいひつるはとりかひのせのあれは成鬼  
つくしよりきたるひとにすたれかはこふをいまいま  
とてこさねは

ありとのみ人のいふめるそめかはを心盡しに戀や夢らむ

はゝにをくれてはへるころすけちかゝいへにてほと  
ときすをきゝて

啼聲はおとらぬ物を郭公しての山ちの道しるへせよ  
しての山歸るゝもしるへせは親のさきにそ我はたゝまし  
かへし

このよをははかなき露と聞しかと今は蓮の玉と成らむ  
おなしころゆめにみて

夢の内にこれは夢そと思ひせは覺て千とせもあらまし物を  
夢にみてあかすさめても思ひしも現の千よにならへてし哉  
三月つこもりにおいゆくやなきをみて遊ぶといふ心  
をひとゝによみしかは

しはしまて花とこれとは春深き雨におい行柳みるまは  
みつまさかむさしへくたるにかはらけとり侍て

行人は思ひやすらむとまるをは是を分れはしつ心なき  
くら人に侍りし時ひとゝあつまりてさけなとたへ  
て月のいとおもしろければこれかれとゝむれとあす  
は御ものいみなりとてこもりにいそきまいるとて

いかにせむなか空成や人をゝきて月と共にし出る身なれば  
齋宮のかん神したまひしにあかつきにきむのこゑの  
はつかなりしかまたもきこえさりしを心もとなしと  
おもひし程にさけいたさせ給たるかはらけとりて

しのゝめのあくまてと思ふとの手に覺束なくも惑はるゝ哉  
もとすけかかつらのいへにてふるきはしのうへにて  
人々哥よみしに

いにしへとけふとのををはしにして後のよまでと思ひ渡覽  
すけちかいと久しくあひはへらて夏の月にあひ侍り

て

山のはの月待ほと心のともよと思ましてまとはるゝかな  
内わたりなる女のまかてむわりはからなすと契てを  
とせていてたれば

兼てより契らぬ空のしつくだに出るはしるき物としらすや  
たちはきにはへりしときある御方の女房にもいひ  
はへりしをよことに殿上の人にさまたけられて

あま小舟あきのゝ島にせかれつゝ入江の方をみてやゝみ南  
よしのふもろともにいせにまかりくたりてためもと  
入道みかはのかみにて侍しに哥よみておこせよと  
申しかはつかはすとて

尋ねこしかひこそなけれしかすかの渡り遙に海をへたてゝ  
こうませて七日に人々哥よみしは

かきりなく思ふ心にいはれねは人にまかせて頼む成けり  
宮つかへひとをとらへてもものいひはへりしをひきす  
くしていはりはへりしかは

乙女子か袖ふりかけし移りかのけきは身にしむ物と社思へ  
一條殿さうしのゑに人々哥よみはへりしにはまなの  
はし春

しほみてる程は行かふ族人やはまなの橋と名つけそめけん  
夏

あふみなるかゝみの山の山影の曇ぬほとにこえてぬるかな  
宇治秋

あしろ木に目をへてよする紅葉ははたちともしらぬ錦成臈  
すみよしの冬

住吉の峯に波たつまつもみな千とせは君にゆつる也けり



おほ井かはの秋

みなかみも時雨やすらむ大井河散くる紅葉色深くみゆ

やそしまのはる

やそ嶋の波とゝもにや春霞立くるあまの敷をしるらむ

うきしまはる

水の面によるへ定めぬうき嶋もしつけき春はうこかさり見

さはやま秋

さは山の紅葉の色のあかぬゆへあまたの秋にあひぬへき哉

たかさこの冬

色もゐすすまできぬらむ高砂の尾上の松をとまりと思ひて

たこの浦春

たこの浦のもしほの煙打霞のとけくみゆる春の空かな

こゆるきのいそ春

わかめかる春やきぬ覽こゆるきの磯のあま人浪にましれり

おほよと

〔拾遺集〕

おほよとのみそきいくらに成ぬらん海はひぬらむ浦の姫松

〔和さひにたるい〕

しかすかのわたりの夏

思ひたち急きこしかとしかすかの渡りにきてそ妹は戀しき

屏風のゑに梅の花のかきたる山寺にまらうときても

のかたりするところ

山里の梅を忘れぬ心にて春にをくれす尋ねつるかな

くれの春かはらの院にてはるかに山さくらぬしなく

てあれたる心を人々よめは

ふるさとはゆかむとこそものうけれ山の櫻に心うつりて

やとあれて昔の人はみえねともすみえし水の絶ぬをそみる

くら人にて臨時の祭日まい人して宮の御かたにかへ

りあそひにかはらけとりしはとにおほ入道殿いはひ  
の心よめとおほせられしかは

よひのまに君をしいのりをきつれば我世も深く思ほゆる哉

三月つこもりにあはたの殿に大將殿のおはしましゝ

御ともにつかまつりて

山里にみにこそきつれ君ともをおくれて匂ふ花は有やと

くら人にてさふらひしときさか野にはなみにまかり

てはへりしにむまこそといひし人のあまにてありし

所の坊のまへをわたりしかはませの中にうりなとう

へたりしかはそれを

なかむれはうとましくこそ思ほゆれこは何人のみその成覽

あはた殿のくら人のとうにてをはしましゝときふる

きとしにせちふ〔餘〕してはへりしにむめの花をたま

はりてこのこゝろよめと人々のはへりしかはくら人

ところのさうしきにてはへりしころ

枝わかす匂ひやすらむ梅の花年のうちなる春のあしたは

おなしをとゝそのとしの七月七日こ前のあしたさら

にあき有といふこゝろ人々よませたまひしに

織女の秋をしもなと契りけん雲の上なる人にとはゝや

またくら人にならさりし時ともまさのあそむの大貳

にまかりなりてくたるにうへのそうそくひとくたり

たまはりてかたみにみよとてものひとへわかちはへ

りしにそへて侍りし

雲よりたつたひ人のから衣かたみに置も露けかりけり

と申たりしかは

くらふ山のほらん程は唐衣ちりもそゐるとかきてあふかむ

くら人おりてかふりたまはりてのはるよしふかきい  
へにてこうはいをおりて人々哥よみしかは

ことしより色付にける身にしあればおれる花さへ心有らし  
めにまかりをくれて涙のふちといふ哥をよみ侍りし  
かは

をり立ておほくなくには涙かは淵瀬しられぬ物にそ有ける  
あるる中にまかりて京にのほりしにかみのめのきぬ  
とてしらておこせたりしかは

夏衣あまたかさねてみゆめればあつかふほとに立やこき覽  
屏風のゑにはなおもしろき所にあまふねのわたりた  
るかたかきたれは

さしはへて入えに急くあま舟の花のあたりはすきうかる覽  
ある所のはかうに院源そうつのかうしせしにまかり  
あひて方便品ときしそうつかはらけとりて

君かけふときつる法を聞て社三世のほとけにあふ心ちすれ  
ある女にひさしうあはぬかおほつかなくてはへりし  
ころよひて侍りしかは

戀つゝもふるやのつまの忍草忍ふる程にをとなふやたれ  
ゑに女のつらつゑつきて人まちたるところ

すみしれる月と水とはかられて人待宵の秋の山さと  
くら人おりてはへりしころひとのうへのはかまをか  
りてかへすとてきてかへすへきなとやうにいひて侍  
りしかは

雲の上おりてのゝちは唐錦きて返すへきはとそいつらは  
わすれ侍りし女のまつりの車よりあふひをおこせて  
侍りしかは

神かけて君かちかひし我中の葵はよそにならんとや思ひし

ひとのむすめをけさうしはへりしにおやにのみいひ  
わたりて七月はかりにすゝきにさして女に

秋風の吹につけつゝ花薄ほのめかすをはしるやしらすや  
女にかはりて

おほかたに何ともなくて過しつる暮も晝まも今や知られん  
またなればへらぬ女のもとにねすくして女のいたく  
はち侍りしかほをみはへりしかはうちにいり侍りし  
かは五月五日

菖蒲草よと野はそれとしりながら轉寢にやは思ひつくへき  
五月五日人のかりくすたまやるとてひとにかはりて  
永きとかみか齡に較へつるにはふしのねに引くらへみよ  
四月山道をまかるとてほとゝきすをきゝて

郭公初一聲のあかぬゆへこえくらしてむけふの山ちは  
よしたゝにそうそくしてとらすとてかりきぬにむす  
ひつけし

ぬきふとみ風さはなへてみえね共こを網のめの例にはせよ  
まつりのかへさにちそく院の前にてほとゝきすの聲  
をきゝて

ふる郷のゑやつたふる郭公初音ならねととこめつらなる  
さねかたの中將あはひこひにをこせてはへりしやる  
とて

ねを澤のあはひの程に較ふればくによりも尙おほきなる哉  
右源兼澄集依無類本不能授合

# 源道濟集

藏人に中納言の君の御もとにて哥合に春まつころ  
待よりはゆきてやみまし春日野を春のけしきは霞たつやと  
雪

朝ほらけ雪降空を見渡せは山のはことに月そのこれる  
人々長閑寺にありきて殘花をたつぬといふ由よみし  
に

ちり殘る花もやあると尋ぬればそこもしらす日は暮に鬼  
參河入道の參河なりしほと女のなくなりけるに京  
にのほりてしうとめのもとにありてまたくたるにあ  
はれるうたよみかはしたりけるをかきをいたりし  
草子をみて

哀しる涙は更におほかたの人の爲ともわかすそ有ける  
元輔か集かりてかきつけし

玉章に心のうちはしりにしを身はいつかたのけふりなる覽  
朱雀院にまいりたりしに山の紅葉いとおもしろかり  
しかは

見渡せは紅葉しに鳧山里はねたくそけふはひとりきにける  
おなしころなくなりける人のとふらひに山さとに  
いきたるに人もなければかきつく

古里に人たにあらはとふへきを紅葉の道もうつもれにけり  
あひかたらふ女のとしころありてのほりたりと聞し  
に

分れしにつきにし物を待出ておなし涙とおもはさらなん

ある人のち中へくたるときゝていきたるにいてにけ  
るほとにてえあはてかへりしかは  
常ならはあはてかへるも思はしを都いつとか人のつけつる  
かへしに

山深くうき世を出ているなれと心はかりはかくれさりけり  
二月はかりあひかたらふ人のもとにいひやりし  
待えたる春もなかななりぬるを花みにさそふ人もなき哉  
月のあかき夜人々哥よみしに

二月はかり花をそくさく頃よみしに思ふことありし  
比にて

春にあはぬ人にあはしと思へはやよそなる花をそく咲覽  
はなたつねてほとをしらすといふころを  
山さくらみてかへらしと思ひしにしらぬ里にそ尋きにける  
あひかたらふ人の陸奥國へまかりしに

思ひ出てよみちは遙になりぬとも心のうちは山もへたてし  
月あかき夜あひかたらふ人のこのころの月はみるや  
といひしかは

徒にねてはあかせともろともに君かこぬよの月はみさりき  
うしろやすきみかやとなる紅葉はの風の心にえしも任せし  
十月はかり人の家にきくを見て

ほかなるはかれはてにしをおしみをける菊に心のみえもする哉  
かたらふ人の家になてしこをもて遊しに

瞿麥の花の殘れる宿みれはあるしさへにもなつかしき哉  
繪に山里に花をしみかほなる所に

〔新吉〕  
山里に散はてぬへき花ゆへにたれとはなして人をまたるゝ  
〔覺〕



秋のねさめ

〔所古賦下〕  
ねさめして久しくなりぬ秋のよは明やしぬらん鹿を鳴なる  
さよふけて峯の嵐やいかならんみきはのなみの聲まさる也

山家月

〔諸花雜上〕  
さひしさに家てしぬへき山里をこよひの月に思ひとまりぬ

池 氷

池の上の氷にたつのおりるをかゝみのうらと思ひける哉

松風を聞

世中に思ひみたれてつく／＼となかむる宿に松風をふく

故郷をこふるこゝろ

人をたにやるへき物をふる里の越ちにゆきをへたてたる哉

もみちのつもる家

散つもる紅葉おしむとせしほとに庭もはらはて秋すきに鬼

雪ふりたる山家たつぬる所

道もなく雪ふりにけり山里はたゝ山ひこのこたへのみして

月に山路をゆく人ある所

〔續詞雜上〕

秋のよの月に山路を越ゆけはまたなもしらぬ鳥をなくなる

あひかたらふ人のゐ中へくたるにきぬやるとて

わかるれとわかぬなるへし唐衣同じ身なりと契りてしかは

ふる里をこふる心ゐ中にてよみし

忘れてもあるへき物をふる郷のけさ曙の夢にみえつる

人の惜花こゝろよみしに

散ぬとも春こはられは匂ひなんいかなる身にて我とゝむ覽

みちたつねに人きたる山里にいきて

おしみける人もありけり紅葉はのぬしなき山に尋けるかな  
或所にて聞郭公よしよみしにおやの服なるとしにて

いにしへにことにも有かな郭公物思ふ時は聲かはりけり

卯花をたつぬ

卯花の咲るあたりを尋ぬればしらぬ宿をもしりぬへき哉

山のさくらをたつねて

このもとにけふはくらさむ山櫻後に尋ねはちりもこそすれ

〔續詞雜上〕

千歳ふ

常盤の松もあまたゝひ君か千世にはおも變りなん

〔續詞雜下〕

ある時はうきとしけしふる里にいそくやなにの心なるらん

おやの能登守になりたりしにまつくたれとありしに

留るへきも道には非す中々にあはてそけふはゆくへかりける

法輪にまかてゝこれかれ哥よみしに

年毎にせくとはすれと大井河昔の名こそなをなけれけれ

二月はかりにけいそうかもとから

花みるそ急きしほとにおのつからこひしき人の日數へに鬼

かへし

花盛ひとりはみしと契りしをはるしもきみか忘るへしやは

服なりし時かたらふ人みた〔下平調〕

思ふといへはすこしは慰むをいつまで君にいはいしとすらん

とき／＼ものいひし女の予うみてその予なくなりぬ

とき／＼て

はかなしといふにもいと涙のみかゝる此世を頼みける哉

なくなりたるおやの夢にもなといひしかは

よはもになりにけれとも垂乳根の同じ様にて夢にみえつる  
おやのなくなりたる比山寺にて佛供養してかへるみ  
ちにて

歸りては先たらちねをみし物をけふは誰かはあはむとす覽  
おなしころなかもなとしてつれ／＼なりしかはおな  
しおもひなる人のもとに

身はことに色はおなしきふち衣袖にてしりぬおもふ心は  
左大臣殿の秋花御覽せし御供にて

よそにのみみつゝはゆかし女郎花おらむ袂は露にぬるとも  
ある人のもとから實方君の集をおこせたりけるにか  
へすとてかきつく

なき世には形見なりける玉章を昔はさしもおもはさりけん  
山里にしりたる人たつねにいきたりしにあればてゝ  
人もなかりしかは

隣さへたえてなくこそなりにけれ誰にかとはんすみし人をは  
あひしりたる人の武藏へくたるにそのおやのもとに  
いかにそやよそに聞ける武藏野の残れるななに涙なりせは  
みるゝに逢まほしきを玉章のみるの杜にはなりになりとは  
河原にてすゝみしけるに

涼みしてあくまでけふは心みつ河へは夏のほかにそ有ける  
あひしりたる人のもとにいきたるに家はむかしのま  
まにてあるしのなくなりけれははしらに書つく

昔みし宿はかはらす有なからあるしはなくもなりにける哉  
源中將家さくらいとおもしろく咲たりしを見てめの  
とのもとにやりし

うへをきし人もなけれと春くれは花は昔にかはらさりけり  
春ころの中よりのほととて

みわたせは都はちかく成ぬらん人の心そかくれさりける  
或所にてことなく春むなしくすきぬといふ題をよみ

しに  
花みにも物うき人はいたつらにくれぬる春もしられさり  
人のおとこさりにしかはとをき國へくたりしにいひ  
やる

〔新千載別〕  
わかるへきみちやはつらき大かたの世中はかり憂物はなし  
或所にて四月つこもりかた郭公きかぬよしよみしに  
郭公まつほと久し山里にところからかとゆきてとはゝや  
郭公待聲きけは山里につねよりことに人そまたるゝ

また月みる男女ある所  
久方の月はまゝにかはらしをひとりみしにはとにそ有ける

〔新古今〕  
宰相中將殿にて春にをくれたる事昨日といふことを  
夏衣きていくかにか成ぬらん残れるはなはけふもちりつゝ  
〔無詞集〕  
年毎にめつらしけれと郭公むかしの聲もかはらさりけり

ほとゝきす鳴へき里を定めねはけふも山路を尋くらしつ  
郭公たつねありきしに

山家卯花  
きなれたる人やかよはん山里にみちもなきまで咲る卯花

殿上人あまた大井にまかりて秋の心をよみしに  
あきゝぬと

〔長保三年三月日節之〕  
藏人になりて侍しに秋南殿にて月を翫ひはへりて  
よそなりし雲の上にてみる時も秋の月にはあかすそ有ける

おなしころほひうへにて月をみて  
秋のよの月の心にしみぬは身のうちさへそさやけかりける

花のきをうへしもしるく春くれはまつ鶯のこゑをきゝつる  
子日

〔南詞春上〕  
姫小松おほかる野へに子日して心に千世をまかせつるかな

たひ人山さとをみる

散はてゝのちやかへらむふる里も忘れぬへき山さくら哉

四月

けふくればかさす葵は千早振神に仕ふるしるしなりける

五月あやめふくいへ

年毎のけふにおひそふ菖蒲草ひくらむぬまのみまほしき哉

六月はらへ

水上のたゆるよもあらし年毎になこしの故こゝにきてせん

七月七日

小夜更に逢やしぬらむ織女よそなる人もまたれこそすれ

八月十五夜

年毎に秋のすくれておほゆるは今宵の月のみするなりけり

九月九日

おる人はよはひを延ふときくなへに散しらぬ菊のはな哉

冬もみちする家

日をふれと厭かすも有哉紅葉はのひるたにとも色の勝れる

十一月神まつりする家

神代よりいはひそめてしあし引の山のさかきは色も變らす

雪ふる家

松の上〔續詞集〕にふる白雪のかつきえて千世は隠れぬ物にそ有ける

權中納言殿の御屏風哥

花のきを風にまかせてわか宿を尋ぬる人にあはぬ目そなき  
かへるさは花の盛に成にけりおもふ事なきたひにも有かな

かすみたつ山さくら

きのふより散とそみえし山櫻今朝は霞のたちへたてつゝ  
みそめては歸らさらし常夏に戀しき人をこさせてしかな

馬にのりたる人みたりすくかけはしあり

心してこまはゆかなんあし引の山のかけはし苦おひにけり

五六人はかり松の木の下にありふちの花咲たり

常盤なる松にかゝれる藤なれば散とも千世はたのもしき哉

峯にたにまた登らぬに日は暮ぬ月は出なんこえやはつると

吹風にいまはさやかに成にけり秋ときこゆるふえのごゑ哉

山里に人家ありもみちはつかにみはやしに霧たちこ

めて

嵐のみ吹山里のもみちはをきりたちこめてくる人のなさ

海のとりに松ありつたもみちかゝれり

紅葉して松にかゝれる薦みれはかくて千年の秋そしらるゝ

松をのみ巡りて蜨のうへたれば千世の住家と思ふなるへし

こまなめてかりそめと行は朝ほらけ松風寒く雪降にけり

入道中將のきみの御もとに消息きこえしおくに書つ

けし

朝夕にみなれし君をおもふかなしら雪かゝる山をみなから

藏人になりて右衛門督殿にようさりまいりて侍しに

御物忌なりければあひたまはてようちふけて

天のとにさしこししてやさよ更てたゝよひありく雲の上人

とあるかへし

蘆たつの雲の上にはかよへともふるす忘るゝときはなき哉

院うせ給ての春一條院櫻のいとおもしろきをみて

〔續詞集〕

櫻花見るにもかなし中々にことしの春はさかすをあらまし

四月になりて殿上に

夏のよはよは更ぬるを郭公待よひありて今はなか南  
殿上人すゝみしに川原にいかんといひたりしにうち



にてえいてすといひやりたりし

音羽川かはせの風をこゝのへのうちにてひとり思ひやる哉

かへし

君こねはみるかひもなしをとほ川岩波たかき風はふけとも

もとかく山里にすまんのこゝろなんはへるをいとよ

き山里あるをいさたまへと聞えしかは少納言かくの

たまふ

朝夕に心をやりて山里に花みんほとをおもひこそやれ

とある御返し

そよやそよ君やきますと兼てより心のうちに花をひらけぬ

大學助とのる所よりをみなへしにつけて

こゝにかく珍しと見る女郎花多かる野へをおもひこそやれ

かへし

ひとへたに花の心はしりぬれ・なへての秋をなにとたとへん

〔は脱懸〕

正月はかり中納言とのにて人々驚聞心よみしに

驚の聲きくたひに春たては物わすれせぬ人となるかな

二月のころほひ六條の右大臣殿へむにありしにやと

もみなこほちてけり櫻のはなの咲たりしかは

昔みし人もなければあたなりし花こそ宿のあるし成けれ

或所に落花を思といふこゝろよみしに

散にける花の心をしらぬかなみてすくしけん人にとはや

つれ／＼なりしにいみしう咲たる花人のもとにやる

とて

残なくけふを匂へる櫻花かせまつほとにひとりみるかな

衛門督殿にてよみし

春くれて待へき花もなき物を□より匂ふ宿の藤なみ

四月一日或人のもとにて

ほとふれてなつの心になりぬれば物思ふをを變らさりける

しのひたる人に

しのふれは人にはいはす年をへて心のうちにやすき時なし

左大殿にて惜夏月

〔詞花〕

待ほとに夏のよいたく更にけりおしみもあへす山のはの月

はるかにほとゝきすをきく

はるかなるたゝ一聲に郭公人の心をあくからしつゝ

水のほとりのまつにむかへり

君かすむ宿にむかへる松なれば水の面には猶そうつれる

としへてたのめし人に正月一日

春こはとちきりしことを待ほとにけさ驚のこえに聞つる

屏風に稻荷詣

いなり山行かふ人のさま／＼に思ふ心は神やしるらむ

あれたる人家に女ありたひ人かつゆく

我宿のまへのあら田をうちかへし春ふかきまで人をまつ哉

まつに藤花かゝれる所

ひとりなる松にかゝれる紫の花のさけるとみゆる藤なみ

たひ人さくらの花みる所

駒とめてみるにもあかす櫻花おりてかさゝむ心行まで

みあれひく所

ゆふ掛てかもの河原にとし毎にけふあふ人のおほくも有哉

屏風に正月むめのはなある所

梅か枝をすきてや風の匂ふらむよそにするへも成にける哉

二月子日

春の日に子日の松を引つれてうらやみもなくみゆるちよ哉

三月ちる花

春暮て残らむとはかたくともみるおりにたに花のちらなん

四月神まつる家に卯花あり

ゆふかけてたれかみわかんみてくらに咲みたれたる宿の卯花

五月時鳥

よをこめて尋てくれはほとゝきすいまはみ山を出る聲する

六月はらへ

風吹ててるみな月に波たゝぬせゝやなこしのはらへなる覽

七月たなはたまつり

七夕の再ひとたにあひみねは我はかなしと思ひしみにき

八月十五夜

常よりも今宵優れてみゆるかな月こそ秋のすかたなりけれ

九月やまさとに人の家ありゆく人きたりむかふ

すむ人の心はしらすむかしみし宿はこたくなりそしにける

十月人家にもみち

色深くなりもてゆけは紅葉はの風ふかねとも散まさりけり

十一月高山有古社人々參詣

山高み登るまゝにそ神かきの嵐のこゑも様々にふく

十二月前池雪降水鳥群居

池水の氷につとふをしのうへにつくくるとふる今朝の白雪

鶯

我宿にはつ聲そする鶯のほかには春のをそくあるらし

今朝見れは春きにけらし我宿の垣ねの梅に鶯のなく

耕作

けふこそは打かへすめれ小山田をいつしか風の吹んとす覽

山里尋花

櫻花たつねすくれは山里も空にそみける風にまかせて

見卯花

雪とのみあやまたれつゝ卯花にふゆこもれりとみゆる山里

聞郭公

五月やみあやめもなきに郭公行衛はしらす聲そとまれる

河邊納涼

川風にすゝみにくれは夏衣かさねつへくもさはくしらなに

七夕

よそなれと心はそらにたなはたのもとにそ渡る天の河波

目言懸前聞鴈

つくく傾く月にさよふけてはつかにすくる初鴈の聲

霜中野

山ふかみ暮行野へはなかゝに初霜をきて色まさりけり

神樂

あし引のみやまにとれる榊はの色こそまされあらし吹らし

見遠山雪

朝なく降積む雪を見渡せばはやまの山もわかすそ有ける

河原院にて

行末のしるしはかりに残るへき松さへいたくおひにける哉

雲林院の櫻を一枝あるあるまゝこかりつかはすとて

またみせん人しなければ櫻花いま一えたをおらすなりぬる

早秋十首

秋きぬとけさはけしきもみえねとも人の心の變るなるへし

こまなめていさゆきてみん宮城のゝ萩の上はゝ花咲にけり

わきもこかたひねのころもいまよりそす吹返す秋風そ吹

我宿のけさのわさ田もまたからてけふは立ぬるとを山の霧

都まで行やしぬらん初秋のまつ山里そしるくみえける  
こよひしもねさめかちにて朝ほらけ尾上の鹿に秋を知ぬる  
白露をよそにをくともみけるかな我身につもる秋をしらすて  
思ふとさしてそれとはなけれども秋にはそふる心ちこそすれ  
〔鑑別秋下〕  
古は身にしむ秋もなかりしをわいては物そかなしかりける  
秋くれはすこさそまさるふる里もおなし心に人やなるらむ  
かはらのほとりのほたる  
飛まかふ螢のかけそうつしける思ひみたるゝ人のこゝろを

ゆふへの月をのそむ

夕つくよみるほともなく山端にいりての後も詠めこそすれ  
七夕

ふたゝひもなきあふ事を七夕のさよ更るまで影みえぬ哉  
はきの露

よそにてもあかすみゆれと萩花露やおつるとおらすなりぬる  
秋風をさく  
〔詞花秋〕  
〔なかわるい〕

ひとりゐて物思ふ宿の萩のはに風こそ渡れ秋の夕くれ  
草花をみる

花みれば物思ふとも忘れぬ秋は野へにてすむへかりける  
松虫をさく

我宿に鳴松虫をさよ更てつれなき人にきかせてしかな  
あさきりにすく

朝ほらけ霧はれぬれば行水の聲こそ道のしるへなりけれ  
はしめの戀  
〔詞花戀上〕

しのふれと涙そしるき紅に物思ふ袖はそむへかりけり  
あひてあはぬ戀

うかりしにはしめきみにし魂を二たひしぬる身とや成なん

屏風の繪にさくららの花みたる所  
わか宿に咲みちにけり櫻花ほかには春もあらしと思ふ  
水のほとりにをしむれるたり

春くれは芦間の氷とけぬらしむれるをしの數まさるめり

陸奥守のもとへすまひのつかひにつけてつかはす

思ふとなからましかは武隈の松をよそにあかすそあらまし

十一月朔日のほとにゆふくれ時雨のするをみて  
神な月すきにしかたも夕暮の  
おなしころ

おりをける紅葉は散すほとふれは秋は心にまかせてそみる  
いなかにてふるさとの花をこふるこゝろ

かつみてもあかすおほえしふる里の花の盛に遠きけり  
五月うのはな

卯花に咲こめられて山里にこひし都もわすられにけり  
ゆふ暮の袖にてしりぬ五月雨は戀する人やなつけそめけん

なくなりてとふらひにくたりてのほりたる人にあひ  
て

よそにきく袖にてしりぬあつまちに遠く行けむ人の心は

おもかけに散にし花のみえまかひ春をわするゝ時のなき哉  
のりの花をおもふ

かをたにも衣にいかで移してむ残れば花はけふもこそられ  
藤花をおしむ

身にしてみておしまれそする紫の心をみせん花はちるとも

郭公をまつ



うたゝねもせられさりけり夏のよは山郭公いまやきなくと  
夏月をみる

そともなる菊のはるはも繁りあひてさも懐かしき月の影哉  
夏草をのそむ

宿ちかき野への夏草かるなゆめ鹿の聲聞たよりにもせん  
ふるさとをこふる

老ぬれはすくる月日もあらはれてまつ古郷を戀しかりける  
こひ

忍ふれとくつる袂のしるければいくたひ衣ぬきかへす覽  
祝

君か世にみのゝを山のおひそはる松の千歳の數にそ有ける  
四月八日山寺に即事灌佛

様はかりみるにつけても嬉しきは昔のけふを思ひこそやれ  
尋殘花

尋ぬれとみえすも有かな櫻花春のとまれるところなければ  
見藤花

山高み松にかゝれる藤の花そらより落る波かとそみる  
〔繪詞春下〕

雲の上にむかしさやかにみし月を時雨のみする谷かくれ哉  
九月はかりに山里の月をみる

寛弘五年七月或所屏風春住吉有參詣者  
住吉の神のみつかき神さひてやむときそなき岸の松風

籬嶋有柴舟折藤花所  
紫の風そ吹ける藤の花空より落る布引のたき

我宿のまへの八橋ふみならしみちゆき人のすきぬ日はなし  
やつはしに人家ありまへに旅人  
秋のみやき野に旅人通行もみちあり野花也

駒とめてゆきもせられす宮城のゝもとあらの小萩花咲に鳶  
たまの井きしのうへに花あり

岸のうへのはなにかゝれる白露や流てすめる玉の井のみつ  
いもせ山旅人紅葉をみる

いもせ山たひとゝ紅葉は紅の袖ふりかはしゆくかとそみる  
冬小倉山遊客見紅葉有埒下者

小倉山紅葉ふりしき大井河波の心に秋そとまれる  
交野鷹大者兩三騎經廻兩霜霏下

みかりする交野へはゆくはし鷹の羽うち拂ひ雪はふりつゝ  
晩秋十詠に時主山家紅葉みる

深く淺く紅葉の色のみゆるかないかゝ定めむ秋のほとをは  
翫殘菊

おいらくは残れる菊を哀なるしもいたゝける人にまかへて  
たひのかりをのそむ

雁かねもふるさと遠くなりけり我心をそ空にしりぬる  
時雨をまつ

秋暮てむらゝく空そくもり行山さといまは時雨すらしも  
深山月

心こそあくかれにけれ秋のよのよ深き月をひとりみしより  
〔新古秋上〕

木枯風  
かた岡に木枯吹てせこかすむまへのさつかいまりこふらし

春戀  
つくゝとなかむる宿に春ひすら花ふみちらす鶯そなく

夏戀  
衣手のかはくまもなきいにしへのさみたれよりや戀初けん  
秋戀

もみちはた涙や空にそくらん秋は戀こそしるくみえけれ  
冬戀

かき・らし風吹むすふ 冬もかひなしもゆるおもひは

夏夜三首思深夜月

雲はれてよも更ぬらし月影のいるをのみ・やまむとす覽

夜思瞿麥

よの程にさきやしぬらん常夏の花の盛はいこそねられね

聞村笛

おきゐつゝねさめのみする頃にしもよ深きふえの聲を聞哉

八月十五夜左衛門督殿にて

大空のつねよりひろくみゆる哉ちれる雲なくてりみてる月

同殿にて思野花と云題を

秋の野はゆきてはみねと思ひやる心のうちに花を咲ける

秋風聞

夏衣またかへなくに萩のはの末打なひく秋風そふく

或所にて惜殘菊

一くさにいふにはあらず菊の花うつるふとに猶やかへまし

くれのあき

み渡せはくれも暮すもさほ山の紅葉も秋の心なりけり

大納言殿大井道遙同和歌一首望紅葉

日くらしに昨日しくれて紅葉はの山てゐる迄に今朝みゆる哉

翫蘆花

ほにいてた汀の蘆のあしたつの千世に變らぬ色にそ有る

或所にて

君か世とうへしもしるゝ吳竹のけふそ一よはおひ初めてん

九月盡日眺望惜秋光

おしめともとまらぬ秋にならひぬる心にさへも別れぬる哉  
有明の月

さよ更てふれる雪かと驚ろきてみれば有明の月にそ有ける

松風

朝ゆふに吹松風はよとゝもに千世のかけこそたえす聞ゆれ

いのり

萬よはいづぬきかはにむれるたる鶴の影にそみるへかりける

しくれ

おりゝにかはりそしける神な月しくれは人の心なりけり

しもかれ

み渡せは飛かふとりの風をいたみむれいる かにけり

こしはかきにあをきつたなとはひたるに雪ふりか

かりければ

卯花と見えもするかな山里のかきねにふれるけさのしら雪

家のさくら花をみて

我宿の櫻の花はさきぬへしいまはとふへき人をまたるゝ

ものいふ人の在所をしらぬにいひやる

白雲のしるくもみえぬ宿なれば尋ねそわたる三輪の山本

二月つこもりかたにものいふ人のもとに

いふ人もなき我宿の櫻花風の心にまかせてそみる

二月つこもり頃左衛門督殿人々於白河院惜花心よみ

しに

春霞絶まにみれば山櫻いまそちりけるところゝに

庭前櫻花の雨のよみな散をみて人のもとにつかはす

君こすて散ぬる宿の櫻花こよひの雨に残らざりけり

川院に人々花惜にいてゝ哥を不講てかへりしか

は相模權守もとにつかはす

しら川の花の心そはつかしきおほくのとしの春すくしけん  
ある人の家にひねもすに雨ふりて山ふきの花咲たる  
をみてこと方にある人に

日くらしに春さめ降て我宿に咲やまふきをみる人やたれ  
白川院の歌をきゝて河波前司入道

花をみる心はかりはしら川のむかしの春にはちすも有かな  
相模權守にいひやる

山櫻はなによそへてかすめしをいかなる風のちらすなる覽  
かへし

山櫻はるすきかたに成ぬれは風ちらさねと残りやはする  
人々來會ておほなる月をみしに

空霞みおほるなからに月影のもるにもまさる庭のけしきか  
長恨歌當時好士和哥よみしに十首養在深窓

玉たれの簾もすかぬねやの中にきまじけり人もしらすな  
寵愛一身

百敷の君かあさいの移りかはしみにけらしなにかさ衣  
行宮見月

みるまゝに物思ふもの優るかな我身よりいる月にやある覽  
不見玉額〔詞花雜〕

思ひかねわかれし人をきてみればあさちか原に秋風そふく  
池苑依舊

草も木もむかしなからの宿なれとかはらぬ物は秋のしら露  
碧落不見

やるかたもなかりし心幻をまつにはまさる思ひそひけり  
雲海説々

久かたの空もきはなきわたつ海に雲きり渡り日暮にけり

花帳夢驚

たれそこのけき曙の夢の内に都のことをほのめかしつる

誓雨心知

たなはたやしらはしるらむ秋のよの長き契りは君も忘れし

此恨綿々

いはねさす筑波の山はつきぬともつきん世なきあかぬ我戀

或女草子かゝすとてふてをやりたりしにはてかたに

とてかへしたりしかは

さかさまにかけはかゝれぬ水壑をいかてか人のいひ初けん

ものいひし人のむつまじくもあらでやみにたるを五

六年はかりありてまたひとりなんあるといひにつか

はすとて

年ふれは忘れやしにしたら衣ぬれにし袖の又もかはかぬ

夏はぬれ冬は氷りて人しれすおほくの年をすくす袖かな

難面さはいかゝなりにし年ふれとぬれにし袖は乾かさり鬼

またおなじやうなる人に

うかりしにぬれにし袖の乾かすて七年といふにくちはてに鬼

はやう又つかはしゝ人に年頃ありてひとりあらず

と聞なからまた文つかはしたれはいひを〔三疊〕せて侍る

駒もこぬ時たにありしかけ橋を又文みるそあやしかりける

またつかはす

人めのみもる山なるとかけはしのこのした蔭は月も照さし

五月五日さうふにぎして返事せぬ人につかはす

とし深きねは隠れぬる菖蒲 あやめもしらてやまん物かは



〔節詞雜中〕

君すまてまたいくとせにならねとも峰の松風聲そかはれる  
〔なく節詞〕

東山に郭公をたつね

峯ことに尋ねきにけり郭公わかいたゝきに鳴てきにけり

雲林院櫻花を

また咲ぬ枝もあれとも櫻花けふそ盛とみえもするかな

見庭前櫻花〔金能事也〕橋入道

むかしみし君そきまさぬ我宿に花の盛に成にけるかな

三月五日中午宮大夫〔齊信卿〕法住寺にて人々よみし二首

春殘花

山かくれ殘れる花をみつるかなよにふきいたす風に尋て

雨中小松

春雨におふるこ松のこすゑにて君かきてみん程はしくるゝ

あひかたらふ人のひさしくをとつれぬに

さゝなみのをとつれもせず山の井の淺かりけりな君か心は

あひかたらふ人の出家して深山にいたると聞ておも

ひをやるとて

朝夕にきなれし君をそのおりに覺束なしととてとひけん

なにとなく昔かたりもむつ事の數は今こそかそへられけれ

わつらふころ人のもとに

狩人の朝たつ野へのくすかつらくるしさしけき頃にも有哉

八月はかりに山里にあひしれる人を尋ぬとて

君にあはて程やへぬらむそともなる檐のはそよき秋風を吹

八月十六日山寺にて京なる人に

〔節詞雜上〕

よそなから君やみるらむ思ひつゝ今宵の月にねてあかしつる

八月はかりに山さにて三首萩花

萩の花あけらはてぬにおりつればこほるゝ露に袖そぬれける

見山月

かたをかのしはとを明て山端にいまゝ出る月を見るかな

わつらふ頃山寺にて秋月をみて

〔節詞雜上〕

昔みし人はこねともなかゝにちきらぬ月を忘れさりける

秋ころなまめかしき歌よめと人ののたまひしかは

さゝかに糸てにかけて白露を玉にもぬくかいもかいとなき

秋夜虫といふ題を

草かれの萩にやたへぬなく虫のよふかく成て聲のうらむる

水上月

波の面にいかてか月のいてつらんなど水底に山のはのなき

九月はかり東山橋入道かもとにてよる鹿の鳴を聞て

よを寒く君を尋てきを鹿のよふかき聲にめをさましつゝ

山月をよめる

よとゝもにみる月なれと空すみて照つる月はめつらしき哉

秋の曙に花見に人の出て人もあらしと思ひて有しを

つかはす

ねくたれて花みにいもか曙にぬれにし袖のかはくまなし

ある人のもとに十日計有てかへるに

日をへつるむつもの尙つきぬるも君かそともに君か袖とる

武藏前司勢に聞ゝ蟄居之由遣之

谷ふかみ春待とをに鶯のはねのみたれとゝはむともなし

返し

こゝろみにこすゑつたひに鶯の紅葉の錦とひも絶なむ

十月はかりに

哀れなる山のしたには久方の空のけしきもさえまさりけり

山家早春五首霞

うら／＼に照するひはあし引の山も霞て遠く成ぬる

鶯

鶯の聲聞そめて山里に春日くらしつ花のかけにて

春風

きゝわかすはなふりひらく春風に寒けもあらずけさも吹南

梅

君かため梅かえおれは我袖に花ちりかゝりかさへうつれり

柳

〔詞花春〕

ふる里のみかきの柳はる／＼とたかそめかけし淺緑そも

見渡せは峯のつゝきに咲みちて空まで匂ふ花櫻かな

また櫻の花をみる

さくらの花さかりに山さとにれいなき人あるに

よそなれと心はしりぬ山里の花のさかりにすむ人やたれ

山寺僧房の前新闕伽泉

流れいつる心はしりぬ秋のよの月そやとれる山の井の水

十月一日人のもとにつかはす

いつしかと曇れる空にいとしくけふは袂のぬれまさる覽

山里にて紅葉をみて

人のもとに

みえつるは夢かと思ひてさめたれはなと面影に離れさる覽

朝ほらけうつるふ菊の露をもみ花みるいもか袖はぬれつゝ

返事せぬ人に

山高み峯におりゐる白雲のしらては人のやまん物かは

また

ふく風のそよとそなひく山のはにうらやまるゝは秋の風哉

また

風吹はすゑうちさはくしのすゝき何みる人のなひかさる覽

山寺にて月をみる

あきさむく成にけらしな山里の庭白妙に照す月かけ

としころいかてとおもふ人に

人しれす思ふ心は高砂の松やしるらむ年そへにける

かへし

年をへておもひやすらん高砂の松にいかゝゆきてとふへき

ものいふ人に

わきもこにみせてやけなむ山里の紅葉の上のけさの初雪

しのふ人に

人心なき世をそむく山里に空かきくらし初雪そふる

また

山里のもみちにふれる白雪は花櫻とそみすまかひける

また人に

都にはふりやしぬらむ山里のみちもなきまでつものる白ゆき

山里にある人をかたらひてとき／＼通ふにまたおな

し山さとのちかきところにもものするあひたにていひ

たる

山里の外にそますときく時は心のほとをしらすそ有ける

かへし

君しらぬ心はほかにもたらねは行山里もへたてやはする

山寺にこもりたるあひたに雪ふる日玄番〔鑑興〕助か

夕されは寒さやまさむ山里のかたちの岡にみ雪ふる也  
かへし

吉野川雪はふれとも春きぬと峯のけしきそ霞渡れる

正月五日

我袖に春そしみぬる山里のむめかりする秋のすゝきは  
いくへきよしをいひてさはる事ありてとまりしかは  
戀しさにまけてやしたに待もみん云にかひなきとはとしめつ  
かへし

心にもかなはぬ物は身なりけり□しても人を契りける哉  
つくしにて十月はかり歡そは<sub>マ</sub>もとにきぬつかは  
すとして

神無月み山の風しいかならむさとさへすこし時雨ふりつゝ

秋住吉にて三首

宮はしらふとしきたてゝわか

おいらくに病をひつゝいかにせん今行末を神のまに／＼  
筑前國にて香椎宮の祭の日梅花をさしてよめる國の  
例にて春は梅冬は杉きをさして前の守を必歌よめる  
年毎に匂ひまされる梅花おなし色にてすきをかさゝん  
色かへぬときはの杉は我國のなかけき宮のしるしなりける  
<sub>ひり懸</sub>

右源道濟集以村井敬義本按合了



群書類從卷第二百五十三

和歌部百八家集廿六

橘爲仲朝臣集 始闕

すなはちたちなから

櫻花おりよく匂ふ春ならは風にも人のかくとつけきや

又朝久

ちらすなとつけしと思ふ櫻花風ものときき君か御よには

かへす

吹風のとききよとはみゆれとも花さへ散て春やすくへき

ものなとはいひなからしたしくはなきなんのものと

よりなてしこの花のさきたるをみにこといふにやる

きてみよと思ふはかりの撫子は今まてなとか移るひもせぬ

かへし

いはてこそすくへかりけれ撫子のありやなしやと花み心よ

殿のうた合のこうてうのあか月に哥合のうたをかき

て中宮のいては辨のもとへやるとて

さ月闇くらへてみつる言のはをつきなき人にまつ散しける

微涼向月生詩題也

河かせの吹くるはかりあられとも月みる程はすゝしかり梟

屏風のゑをみて人々うたよむにはるの花のもとにた

ひ人むまよりおりてゐたるところ  
けふも又花みて暮す旅人の春のとまりは櫻なりけり

おなしゑに山家の前に田うふる所

いにしはる水せきいれし苗代の早苗は早くけさとりける

山家あかつきすゝししけつれかいなりのやまもの

山莊にてゑいす

いなり山峯のすき村風吹はふもとさへこそすゝしかりけれ

たいをさくりてぬのひきのたきになつの心をそへて

夏なれと音のさむきはひなかなすなよりも高き布引の瀧

月よかやう院殿にて人々よるの菊といふ題をよむに

月かけにみな白妙の心ちしてうつろふ色はあけてこそみゆ

山道ののみちを人々ひるさはにしてよみしに

嵐吹深き山へは我こまのゆく人もみえず紅葉ちりけり

殿上人五六人はかりして紙匂連懷うたよまれしに

雪の上になれし昔をけふさへに思へは年のおほくへにける

月にむかひて秋をおしむといふ題九月十三日の夜

つねよりも心空なる月みすはかくまで秋をおしまゝしやは

三月はかりあはちよりのほるにつの國のすいたとい

ふところにみちのくにのせしなりたふかしる所さい

ぬのさふらひにて人々ほとゝきすなまつうたよみけ  
るひ講程にまいりあひて

待かねてきかぬかきりは郭公こひするころの心ちこそすれ

宮のさふらひにてたいなさくるにさみたれなとりて  
かゝくらし晴るまのなき五月雨のふしの煙はなをや立らむ

あきのはなひとつにあらすといふ題をおはりのかみ  
としつなかいへにて

いつれと思ひわくへは秋の野の千草の茂にうつる心は  
のゝはなあき日さしといふ題皇后宮さふらひの前さ

いほりに  
うつしうふるけふより後の行末の數もしられぬのへの秋萩

いつのまに程なく明し夏のよのねさめせらるゝ秋になる覽  
かうふりたまはりて三年はかりのほととゝの辨つ

れいへのきみのさかのよはれたるにあるにくたり  
たりけるにかくすくなりてなとつれたるにたちよ

りて宮の人々なとありてあめのふるに春雨を題にて  
思はずに今日こさりせは春雨のふる里人にかてあはまし

四月のつこもりかたにあはちにくたるにかはしりに  
てよるかたはらなるふれにのうぬ入道かくたりあ

ひて物かたりするにさかつきなとりて  
のうぬ入道

〔續拾遺〕  
さ月待なにはの浦の郭公あまのたくなはくりかへしなけ

このほと郭公なきわたりきやまとの入道五月に入道  
になりてのちのことなるへし

郭公鳴てすくなりなにはかたあしまの千鳥しはしなとすな

このたひ宮こいとままうしゝほとおはりのかみのよ  
となるところのたうへん見てくたれとゝめられし

さほとめの賤のした袖びきぬらし山田の早苗植やしぬらむ  
月まつをてらすといふたひ中宮のすけかれふさの二

條のいへにて人々おほくありてよみしに  
松かえの木影もみえず曇りなき月のつもるやちとせ成らん

よるのあられを備ちうのかみよりいふかもとにて古  
曾部入道相摸不會

とふ人もなき冬のよのさよなかに音する物ばあられ成けり  
こせちのころうちにて月のあかきにぬうはうのつほ

れのまへにてかくいひし  
つきこそとよのあかりなりけれ

本を宮のしもつけ  
ひかけにもたへまさりつゝ雲の上は

うるう七月七夕  
彦星そすきにし

あはちいくはのさとゝいふところのちをすくるに  
はきのしけくおもしろきに露のをきたるをみて

小萩原分つるほとにぬれにけりいくはかりに置る露そも  
おなしくにのみはらのみなとゝいふところにて月の

あかきに  
宮こにてみしにおとらぬ月なれやもしほの煙立まかふとも

おなしくにゝてわこしのまつりするにいきなきのや  
しろにてかくらするほと雪のふるに  
あまくたる神の心もゆきはてゝ庭火のかけに今やとくらん

梅の花の同じ枝に白き紅梅咲ましりたるを皇后宮に奉りしを是はいかゝみると女房のみせ給ひしに

いつれとかわきておりつる同じえにひと色ならぬ梅の匂を人のゑをひろけて哥をよむにおやなき女にめのとのならのほうしをあはせむとするになきたるかたをきたるかたをみて

いかてわれよを古里にたえなはやならの都の人にしられて淡路にてはるひのてるに人のなけきていのりするに神にさうしなつゝりてたてまつるにかきし三首

淡路嶋あはれとみてやその神の天くたりまし跡もたれけんあらをたをかへすゝも諸人のふりはへ祈るあめのした哉祈りつゝ神の心にまかせつるなはしろ水はいつもたえせし同國にあるほとみふのたいふ義孝かくたりたりときくにたとせさりしかはふみやるにかきて

いかなれはゑしまの磯をかきたえて今まで人の音せさる覽三月つくる日はるをおしむによあけたりといふ題をたむはのかみのいへにて人々よみしに

おしむよの明やしぬらむと思ふより豫て戀しき春にも有哉おなしよるのときにはとりなきてまらうと通るといふ題をにはかによみしに

あけぬとて人も歸りぬ今暫し今宵は鳥のなかつそあらまし五月十日ころに月のあかきに

月影は秋におとらぬ心ちしてなのみふりける五月雨の空後れいせ院の御ときところのしふのうたあはせすとある人のうたをこふにころもかへないつしかと夏の立ぬるしるしには衣かへせぬ人のなきかな

ほとゝきすな

なかゝに聞てそいとゝ勝りける人くるしめの時鳥かななてしこ

いかなれはおなしたれなる撫子の千草の色に花は咲らむ納涼

秋風のまたふかなくにおほあらしの森のこ影は涼しかり鳧みな月はらへ

神代より年にひとたび夏河の流れたえぬみそき成けりいはひ

君か代はふたはの松のおひのほり數もかきらす花の咲らむ水風始秋皇太后宮のすけきむもとが六條にて人々よみし

河風に吹かへさるゝ衣手は秋きてのちの心地こそすれ八月十四日に勘解由次官もとにて講説のついでに人あつまりて詠題々二首一首は法華經文をおのゝ

さくりて止宿草菴

そのかみの草の庵りを尋ねればついにはかきの宿り成けりしつかなるよの月のよ人々あまれくよむいまひとつのたいなり

尋くる人しなれば一人ゐて月みる程によさへ更ぬる月水をてらす

このうたは九月十三日のよに。とうの中將みきのむまのかみつれのふのきみの六條の家にてよみし。勘解由次官あきひらか題なり。

行水の音せさりせは月影をまたきるにけるつらゝとやみむ宮にさふらふほとうち殿よりもみちをたてまつらせ



たまへたりけるをおりてさふらひにいたされてこれ  
はいかゝみるとありしかはまうしいれし

尋ても吹くる風のなかりせはいかてかみましょその紅葉は  
いそく事ありてこのうたのかへしもきかていてゝた  
つれしかともほとすきたれはにやあらむ返しもな  
ければすゝきのお花ひとほあるなはふれにかつら  
殿のすゝきなり昨日のうちののもみちといかゝ御覽  
するとまうさせたればしもつけのきみのいひいたさ  
れたる

秋の野のお花か末をみれたかき紅葉の色にくらへさらなん  
このうたかみて昨日のもみちのうたのかへしをたま  
はり候へこれはまいらせんといへはまつこれをみて  
紅葉のかへしはせむとあればかく

紅葉をはふきも返さぬ秋風にれたくお花のなひきぬるかな  
あきの夜のこひ

長月の有明の月はいてにけりこひしき人は影もみえれと  
探題三垣原加露ところのなにふたつときのものな  
くはへたる

わかこまの行ゑもしらす秋霧のみかきの原に立にけるかな  
件二首宮のさふらひにて人々よみし中宮のいては弁  
のあまになりたるあき九月つこもりのひをくる

今はとてよをそむきぬる心にもおしみやすらむ秋の過るを  
返し

常よりもあはれそひてそおしまるゝ契りことなる秋と思へは  
正月七日雪のふりたるに宮の

春日野に雪まかきわけ常よりも今日の若菜をいかゝつむ覽

わせるしもつけのきみ

若菜にとのへにも出て今日は唯降つむ雪にまかせてをみむ  
花下逢客世尊寺にて人々よみしに

ゐるとしも契らさりしを花ゆへにひきみぬ人も尋ねきに鬼  
法華經一卷つゝえいしたてまつるに六の巻を

いりぬると心の闇に思ひしはくもるよもなき月にさりける  
うりう院のほたいかうきくついてに人々よみし

今日をこそ心のちりを吹はらふ涼しき風のたよりとせめ  
三月三日盃山浮水流といふ題を

水波に流てくたるかはらはけは花の影にもくもらさりけり  
かすみ山の花をへたつといふたいをたんはのかみと

しつなかいへにて  
行ほともかつはみるへき山櫻なとて霞のたちへたつらむ

岸柳垂絲うち殿にて源大納言殿  
春風のたえす吹くるみきはに波そよりけるあをやきの糸

中宮のいては辨なむ八かうをこなふときゝてさるへ  
き人々のきかむとていきたりしかはこと人のおなし

ところによとりてきゝたかへてとてかへりにしのち  
のひいひをくりたりし

嬉しくもひきつれたりしつて哉のりたかへたる舟と聞しを  
返し

君によりわきし心やにこりけむ思へはおなし法のなかれな  
うくひすのすにあるをこめなからきの枝なるを折て

人の宮にまいらせたるをいかゝみると女はうの見せ  
たまひしかは

もゝ敷にそたつとならば鶯も雲井のつるをみもならはなん

うるふ三月あるとしの三月つくるにうるうるうあま  
りありといふたいを

つれならは今日までみまし春霞いまひとへさへ立やそふ覽  
ほととぎすといふたいを

年毎にきく許にて郭公あかて我よは過ぬへきかな  
つれひらかちくせにくたりてふたとせばかりありて  
ふみおこせたるにかきつけたる

都には君をのみこそ思ひいつれ紅葉のおりも花の盛も  
返し

君もさは忘れさりけり我も思心や空にゆきかよひけん  
なつのよといふたい  
くるゝまと思ふにあくる夏のよは伏見の里の人いかならむ

東三條にて殿の人々のみることやくるしきをみなへ  
しといふたの末はおほゆやとはせたまひしに中

宮のやまとの君の家はきたなれはいかゝいふ・と(三疊)ひ  
にやりたれはこれこそおほえれといひてしはしはか  
りありてものかきてきりのまかきにたちかくるら  
んとこそいひけれといひおこせたりければはしめお  
ほえぬをはちしむとて

をみなへし忘れ草と思ひつるきりの籬におそくはるれば  
返し

霧はれぬまかきの外に女郎花しらて尋ぬる人やなになる  
すけよしのおそむのさぬきにあるころ九月許をくり  
し

古さとは紅葉しぬめりまつ山のときはの影をみやなれぬ覽  
もみち山にのこる宮の女方のうちにまいる日人々の

よみし

常ならすわきて嵐や吹つらむちらぬもみゆる峯の紅葉々  
となく山の雪をのそむといふたいをさい院のさふら  
いにて人々まいりあひてよみしに

ほととぎをみ峯の白雪ふりに鳧雲のまかふとみえまかふまて  
ゆきのあしたともなまつ

けさしもあれあやなのときき我身哉雪まは人々尋ねくるとて

雪のあした宮の御前に人々して雪山つくらせ給ふに  
ひたきやのうへなる雪をみてしもつけのきみのいひ  
いたしたりし

いかてかつもるひたきやのゆき  
もとつけし

けさみればかまとの山もかくやあらむ

客依花來 京極にて

春ならぬ折にも人のきてとはは花ゆへのみと思はさらまし

花のひゝにちるを人々みて長らく寺にして

山風のふきこぬひまは櫻花いかと思ふにちらぬひそなき

月前落花

月影の霞み渡りてくらははよのまに花のちるをみましや

このたいのうたをよみあけてのちのあしたに懷圓か

いそきかへるにいふ

月もすみ花もちりつるこの下にけさは霞の立もとまらて

はるくれて花すくなし

櫻花あをはのなかにみゆるかな春の残りもいくかなられば

月あきらかなるよ山ふきの花をみて らうせん

月影に色はみゆれとおほつかなくへかさける山ふきの花

すなはち返し

色はかりみてやとふらむ山ふきのいくへ分れぬ月の影かは  
あめのうちにはるをおしむ宮のさふらひにて人々の  
よみし

おしめともたちさるはるの春雨に霞の衣ぬれやしぬらむ

四月十日ころ平等院五十講のほと慶足阿闍梨宿房に  
てほときすなまつといふたいをよみしに

山へにもきなかさりけり郭公みやこに待しよひそかゝりし  
月くさの花をてらすといふたいを宮のさふらひのか  
むしのよ

白菊のひまなくみゆるみきはに風にもよらぬ波を立ける  
宮の女はうのふけ殿にわたりたまひたりしに月あか  
きによふけてものかたりなとしてちくせの君にのす  
ふ

はきはれたるにつゆそおきける

といへは

さよなかの月をやひるとおもふらむ

右之一冊以西行法師芳跡并外題者定家卿眞筆之本  
不違一字一寫之。本則令書寫校合一畢。彼證本落帳  
三四枚有之由雖有沙汰其所未勘。任當本一書續  
者也。

右之外又爲仲集有之以未書載之爲一部一畢。

## 橘爲仲朝臣集

かうふり給はりたるに周防内侍のおとつれたる返  
に

澤水におりゐるたつは年ふともなれし雲井を戀しかるへき

法性寺の南に重經が山庄にまかりて納涼を

いなり山峯の杉村風吹は麓さへこそすゝしかりけれ

宇佐使にまかりしに周防國ののくちのむまやにとま  
りたるに月いとあかし

かへりては古郷人にまつとはん今宵の月はかくやみえしと

豊後國ゆふのたけのゆきをみて

神代よりおほくの年の雪つもり白くもみゆるゆふのたけ哉

宇佐の驛館にみやつかさきむのりまうてきて侍しに

雪のふれは

千早ふる神のしるしのあらはれてきよめの雪の降にける哉

かへし

いのりつる神もつかひもまちつくる人も心の雪とこそみれ

豊前國よりおほさふなこゆるに雪のふれは

けふみつる山路なれとも人とは雪降にきといはんとす覽

安樂寺にまいりてかまとの山けふりをみて

またしらぬ人のみるへきしるしにやかまとの山に煙立らむ

越後守にてくたり侍しに射水と云所を渡りて上津と

云所にとまりたるに松虫のなきしかは

我ならぬ人はこしちと思へとも誰かためにか松虫のなく  
九月十三夜をかはのやしろにまいる月いとあかし



訪人やよるつの月にまたれまし我ひとりのみ越ちならずは  
十月つこもりころに雪降たるにしなのゝかみたかも  
とかまうてきてあそひしに

思ひきや越ちの雪をふみ分できませる君にあはん物とは  
返し

今さらにいなと思ひし道なれと君にあふちのせきを嬉しき  
みやこるといふ所

都いと聞にかけたにゆかしきに水もつらゝに成にけるかな  
その原をたちてみさかなすくとて

よそにのみ聞しみさかは白雲の上までのほるかけち也けり  
をはすて山の月をみて

これや此月みるたびに思ひつるおはすて山のふもとなる覽  
越後にて正月七日雪ふりたるをみて

雪深き越ちは春もしられともけふ春日のはわかな摘らむ  
京にのほりて四月十一日いなりにまいりて侍にすき

のうへに郭公の鳴をきゝて  
卯花のかきれなられと時鳥杉むらにてそはつ音聞つる

みちのくにの守になりてくらんとし侍しに式部大  
輔實綱か七條のいつみにてわかれおしみ侍りしに

すゝきたる心は人もわすれしな衣のせきを立かへるまで  
李部郎藤原實綱

人はいさ我よはすゑになりぬればまた相坂をいかゝ待へき  
大宮の少將の内侍もとより

思ひいてん思ひわするな朝夕に山のはいつる月つもるとも  
返し

いはさらむさきにも人を忘れめや月日にそひて思ひ社出め

月日をかそへて

東路のはるけき程に行めくりいつかとかへき下ひものせき  
右大臣殿より御さうそくつかはしたる中に御ふみに

たまさかに思ひも出る時あらは是そきなれし物とみよとて  
おとろきなからいそきまいりてまいらせし

みなれたる心ならひにたまさかも思ひ忘るゝ隙やあるへき  
十七日の夜かゝみのやまのふもとにとまりたるに月

いとあかし  
老の後うつらむ影もはつかしくかゝみの山の月をみつるよ

おはりの國のなるみのをすき侍りしにすゝむしのい  
とあはれに鳴しかは

古里にかはらさりけり鈴虫の鳴海の野へのゆふくれの聲  
みかはのふたむら山をすくるにもみち盛なり

唐錦おらまくほしきこのもとは二村山の紅葉なりけり  
同二日たかしまといふ所にみかはのかみ季綱たひの

さうそくつかはしたるにそへたる  
さして行衣のせきのはるけきは立かへるへき程そしられぬ

みかはのさきさかといふところになよりにつけてか  
へし

忘るなとかたみにきつる旅衣きみをみかはの立うかりけり  
遠江のさやの中山といふ所にとゝまりたるにしかの

いとあはれに鳴しかは  
旅寢するさよの中山さよ中にしかもなくなり妻や戀しき

十月十日きよみかせきにとまりたるに月いとあかし  
岸近くなみよる松のこのまより清見かせきは月そもりくる

同し十四日はこれの山のふもとにとゝまりたるに月

いとあかし

朝毎にあくるかゝみとみゆるかなはこれの山に出る月かけ  
おなし廿一日むさしのよこ山といふ所をすくるにも  
みちいとおもしろし

紅葉はのかゝる夕へを過行と古里人につけもやらはや

十一月七日日川のせきを過侍しに雪ふり侍しかは

人つてに聞渡りしを年ふりてけふ雪すきぬしら川の關

たけくまにて國の人いてきたりていひらく古へは松

侍りけりうせて久しう成けれとも國の司いらせ給時

かならず松の枝をもとめてかくたて侍るなりさき

さき物の心をしらせ給へる人はこゝにて哥をなむよ

ませたまふといへは

たけくまのあとを尋て引うふる松や千とせの初めなるらむ

くたりつきて京へ頼俊かもとへいひつかはす

別しはきのふはかりと思へともみちにてとしの暮にける哉

うきしまにまいりて

祈りつゝなをこそ頼め道のおくにしつめ玉ふな浮嶋のかみ

正月十日ねの日にあたりたるに出羽守行房かもとよ

り

いとしく今日を子日ときくに社すかの松山思ひやらるれ

返し

問人のねのひならでもをとつればすかの松山我もたのまん

雪のふりたるに行房かもとより

たけくまのまつこともなき我身には年月のみそ雪積ぬる

八月十五夜京を思ひいて大宮女房の御なかに十首か

うち

みし人もとふの浦風音せぬにつれなくすめる秋の夜の月

左衛門權佐行家許より八月十五夜の返し

うき影に誰かはとはんとふの浦のうらめしくてや獨みる覽

散位實清かもとより

秋のよの月はのとかに宿るともあふくま川に心とまるな

紀伊入道素意返し

宮城のゝ萩の下葉の露の身は君かきまささん日をまつとしれ

君ゆへによはにいくせか鳴渡るあふくま川のかは千鳥かは

はなかつみ且みしたにも有物をあさかの沼の淺ましのよや

頼義かすみけるたちのもみちおもしろしと聞てみに

まかりて

草まぐらかりそめにても紅葉はの色にや人の移りすみけん

子日にしほかまにまかりて

ちはやふる神もねのひと思へはや煙たな引しほかまのまつ

源時綱肥後守に成てくたりぬときゝてつかはす

我たにもくやしと思にまことにや君もはるかにいきの松原

大藏卿長房かもとにふみつかはしたる返しに

沈む共今は我身はさもあらはあれ戀しき人をみぬそ悲しき

紀伊入道素意が衣川の哥のかへしたよりにつけてつ

かはす

なにせんに立る待らむ思ひ出ては衣の關をきてもみよかし

伊勢守廣經かもとへつかはす

たけくまの松としきかはすゝか山ふりにし心我も忘れし

返し

鈴鹿山としふるまゝにたけくまの松に心をかけぬ日そなき

うきしまにまいりたるに花いとおもしろし

うきしまの花みるほとは道の奥にしつめる事も忘られに梟  
式部大輔實綱朝臣もとへつかはす

朝夕にむすひしものを逢みてもいつとせまてに成にける哉  
返し 實綱朝臣

老にける人の爲にはいつとせも積れは残りすくなかりけり  
資仲中納言帥に成てきたるへしときゝてつかはしけ  
る

きなれたる我たにぬれし旅衣若もやとをく思ひたつらむ  
實源あさりかうちとのゝ御事などおもひてたるにや  
有けんいひをこせたる

しるらめや霞となりて上りたる人のすみかの春のけしきを  
延住したりと聞て兵庫頭隆資かもとより

まつ我はあはれや空に成ぬるにあふくま川の遠さかりぬる  
わかさの國にしりたる女のいひをこせたる

山の井のそこに心はある物をあさかのぬまにかけやみゆ覽  
返し

思ひをくる影しうつらは山の井の水は結はし濁りもそする  
つくしより時綱かいひをこせたる

めぐりあはんほととせの秋なれや末の松山いきの松原  
京上し侍しにたけくまの松をすくとて

古郷へ我はかへりぬたけくまの松とは唯につけよとか思ふ  
白川の關をいつるあいたもみちいとおもしろし

紅葉はのかゝるおりにや白川の關はなを社かふへかりけれ  
五月つこもり大宮にさふらひし南面のこするに郭公

の鳴侍しかは女房のいひいてられたる  
いまはとて聲もしのはぬ郭公唯にわかれをおしむ成らむ

御簾のまへにさふらひてとりもあへす

我ひとりきくにあらねと時鳥今日の音にこそ忍ひかたけれ  
月前の述懐といふこゝろを

かくしつゝ世をへてみつる秋の月今幾年かあらむとすらむ  
秋深月明

秋ふかくなり行空のさやけきは月の影にも霜や置らむ  
あしまのうすこほり

水鳥のゐるにさはらぬうす氷芦まやしはし消のこるらむ  
白川院にて關路のほとゝきすといふ事を

吾妻路にことつてやせし郭公關のいはかと今そすくなる

治承四年二月五日自筆書畢。和歌六十九首。此内人歌十  
七首。

建長五年三月九日以三宮三位知家入道本一書寫按合畢  
日 孝

弘長二年初冬頃書寫了。已上一按畢。  
入撰集二不見此集一哥。

題しらす  
あやなくも曇ぬ宵をいとふかな忍ふの里の秋の夜の月

見華日暮ぬといふことを  
櫻花日くらしみつゝけふもまた月待ほとになりにつけるかな

此集本末兩部。以證本令三書寫爲一冊一者也。則按合畢  
以藏本書寫以橋本俊長中川教保藏本按合畢



讃岐入道集

藤原顯綱朝臣

ある宮はらの女房のつほねのまへに柳の枝をうへて  
みけるによひにきて物かたりなとしてかへりにける  
つとめてその柳なかりければ夜部の人のとりたるな  
めり返したへよとせめければかくなん

青柳の糸になき名は立にけりよくる人は我ならねとも  
人々くしてしほゆあみにまかりたりしに京よりしり  
たりける女の四位權少將のもとにかくよみてつかは  
しける

たちよらてをとせぬ時は津の國の芦間の涙の心地こそすれ  
少將の返事侍しうはつゝみのかみにかきついたりし  
つの國の芦間の波の我ならはうらみぬ程にをとほしてまし  
齋院の邊にさふらひける人の世中にかくれてあるや  
う有ておもひかけぬ所に有ければとし頃に成て四月  
かもの祭の日あふひにかきてつかはしける

おもひきやその神山の葵草かけてもよそにならん物とは  
是は有やうあるうたなり。ことさらにくはしくはかか  
す。

年ころかたらひける人のこと人に物いひてたえにけ  
れは日頃ありてあるやうありてをとつれけるつゝて  
によみて遣しける

心にもかなはぬ物は泪かなわかためつらき人とするゝ  
まひひとしてはやうしりたる女の内わたりにかくれ  
てありときゝて尋てよめる

ゆきすりにとふとや人の思ふらむ山の衣きたるけふとて

はなたなるかりきぬをきてある宮はらの女房にあひ  
てまかてけるに雪のいたくふりてつとめてそのかり  
きぬの袖をやるとてかきてつかはしける

ゆきかゝるはなたの袖を打はらひかへりし程の袂ともみよ  
風いたくふきける夜御前にちかくうへさせ玉へる萩  
御覽しにいてさせ玉ひて人々哥たてまつれとおほせ  
られければ宮にて

秋風の萩の下葉を吹かへしうらみや露は置まさる蘭  
ある宮はらの女房のもとよりなそゝとてかくいひ  
たる

かひなしや社のみしていのる事なくてみそかに成にける哉  
返しかくそ

みそか迄いのる社のかひなくは神無月とやいふへかるらん  
二月許に寺に講きゝにまかりたりけるにある宮はら  
の女房又くるまをならへてきゝければ誰ともなくて  
しきみの葉にかきてつかはしける

よそゝにみつゝの車と思へとも人の心はひとつならなん  
講はてゝ人々さはき出ける折に。つかひまきれにけれ  
は。誰ともしらで。いみしくねたかりて。ひころ尋けれ  
は。程へてそかくときゝける。

三月つこもりかたに文をさし置てつかひのにけたり  
ければ人をつけて見すればしる君のたはかる成けり  
かくそ讀たる

もろともにいさ尋みむ山さくらちり残りたる花は有やと  
返ことかくなん

花見には何かはいさときそふ覽すゝめしのりのおりは尋て

とよみてつかはしたりければこゝにはよもとあらか  
ひてよめる

まろ橋をあとも定めす渡りてはふみ違ふるそ怪しかりける  
又返し

あらかはゝさてもやみなん丸橋の跡なくは社ふみも違へめ  
山さとにまかりけるをこよひはとゝまりてあれとと  
めけれととゝまらていそきかへりてつとめていみし  
うゆきのふりたるにくしてかへりし人の許よりとゝ  
めしひとけふの雪をいかにといひたれば

あは雪のふるにつけてもななく覽とくるをわひし人の心は  
ある所に参りたるにみすのそはより女房のかみいと  
なかくこほれ出たるをみて

人しれす思ふ心をかへなん神あらはれて見えぬとなら  
いつそやの殿上の大井のせうえうの哥かきつけたる  
うらにあしてを人の手ならひにしたりければそこに  
かきつけたりける

津の國の難波のみかと思ひしを和かの浦にもあしておひ息  
さみたれの頃よころ物かたりなとしてあかすをかゝ  
るはよけれともなき名たつなんわりなきといひけれ  
は水無月の朔日の日つかはしける

五月雨はなき名立田にそほちつる田子の濡衣けふやほす蘭  
すみける所のさくらの花をみていかに世中をみける  
頃にか

雨ふれはうき言の葉も茂る世にうら山しくも散櫻かな  
久しうかたらひける人のうき事ありとてたえにける  
ひはをかりたりけるそのおりはかへきて年頃ありて

思ひかけぬ程に返しをこせたりければよみてつかは  
したりける

忘るなと教へし事はかひなくてひき違へたるひはと社みれ  
しりたる人の許よりひさしくをとつれすとてのき  
におふる艸をゝこせたれば忘れ草とおもひたるにやと  
て

これやこの音にきゝつる忘れ草またこそしらね心ならひに  
しのひたる人のふみををこせてひとやみるらんとて  
かくいひたる

涙川せゝの玉もゝかきつめし人のみくつになりもこそすれ  
返し

かきつめと河のせゝなる玉にも人のみるめはあらしを思へ  
たはふれ事にてかたらふ人の恨て今はあはしなとい  
ひければ

蜘蛛の糸かはかりの言の葉に申かきたえん物とやは思ふ  
すはういろなるかひのちいさきをこれなん忘れ貝と  
いふはまことかみしりたりやとて人の見せければ

これやさは人忘れかひ覺束なえこそしら波あまにとははや  
なきことをきゝて人の恨ければかくせといひけるも  
のを人にみせたりとさゝたりけるにや

恨むれはひるめなきさと思へともこはいかなりし蟹の濡衣  
ふみ人にみすらんと疑ける人のふみおこせたるその  
ふみを見て返しやるとて

今よりは跡もとゝめし濱千鳥なみたか磯のみるめなければ  
人々なとよひて和哥よむによはすとて恨をこせたり  
ければ

きの國やしらの濱のしらせねは理なりやわかの浦みは  
ともたちのあつまの方へまかりけるかくともしら  
てまかりくたりにければよみてつかはす

東路にたつ目をたにもしらせねは衣の關のあるかひそなき  
かたらふ人に五月五日つかはす

つくまえの長くも人を頼かなけふのあやめのつまならね共  
煩ふ事ありて久しうありかぬ頃つねに月もろともに  
みる人のもとより月のあきおきこそ思ひ出らるれ  
といひたりければよむ

世中になからむ後に思ひ出て有明の月をかたみともみよ  
百和香にくらゝの花をくはふとてよめる

惑はすなくらゝの花のくらき夜に我もたなひけもえむ煙は  
しりたる人のとをき國へまかるとてあこたうりをを  
こせたりければうりにかきつけて返しやる

見るからにつらさをさるあこたうり立別行道とおもへは  
昔はすき物にて哥なとよみけるか年おいておはりの  
くに鳴海のうらといふ所にすみけるによみてとらす  
る

陸奥國のいはてやしはしおらましと忍ふにいと増る戀哉  
かたらふ人のつくしへまかりけるによみて遣しける  
とまらしと思ふ物から別路の心つくしになけかるゝかな

九月十三夜の月のくもりたるをあかゝりきなどあら  
かふ人の許にいかゝみるといひにやりたりければか  
くいひける

夕霧のたちふたかれる頃なればるゝをそ待秋のよの月  
かたらふ人かさをこりたりときゝていかゝといひや

りたる返ことに  
今こむと頼めをきてしのちよりは君まつ風そいと戀しき  
といひやりたりける返しに

高砂や立よる浪のしけゝれは我をのみやはきしの松かせ  
源氏を人にかりて返しやりける

いかはかり袖のぬれけん武藏のゝ若紫の露のきえかた  
齊院に人々あまた参りてよむに  
神垣にさす榊葉のゆふよりも花に心をかくる春かな

おなし心

さかき葉のときはならひに櫻花しめのうちには散て年へよ  
但馬のくにゝあさくらといふ所にいし井なとおかし

くてすきもの有ける年おいてあまになりてこむまこ  
なとあまたある猶おとろへるありける事のついでい  
ひやる

年積て螢のすむらんあさくらゝの里のみるめをかりて我みん  
おなし人のあまうれへすとて申ふみにくしのはこそ  
そへたる返しやるとて

返してむうちは床しき宮なれとあけて悔しと思ひもする  
内わたりにてかたらひし人の年頃さとゐしてみやつ  
かへもせて五せちのころかくいひをこせたる

谷ふかきみ山かくれに家居してひかけをよそに思ひやる哉  
かへりことはその程さはる事有てうちへもまいらね  
は

谷深く契りし事のしるしにや同しひかけをよそにきくらん  
おなし頃内わたりにありし時九月十三日の月をもろ  
ともにみあかしてさとゐのゝちおなし十三日の夜よ



みてをこそり

曇りしはうらめしかりし月影の今夜はそれを嬉しかりける  
返し

行すりのよそにみよとやいにしへの山の衣きては契りし  
るゐの大そきたの方に成りてくたるに御そやるとて  
色深く染たる旅のから衣かへらむまてはかたみともみよ  
年頃かたらふ人の人のめになりてたえてのち五せつ  
のころうちわたりにてあひたりしにひかけのいとを  
ときとらせてよみたりける

思へ共ひかけの糸のくり返したえにしふしのつらくも有哉  
一の宮の女房のうた

行かゝるうす花染の色みれば君よりは又かはらさりけり  
心浅く染たる糸の色なればこれよりは又いかゝかはらん  
行かゝる跡を詠めし我袖もぬれなからこそみすへかりけれ  
またしらぬ思れ草といふ名をはさは我によりてや知り初めける  
うしとみし心の程はをみ衣九重までそへたてられぬる  
谷川は誰かしからみとゝむれば秋はてにけるけしき成かな  
身の程の思ひしらるゝ世中は跡とゝむへきこゝちやはする  
あらかはて心も空に成ぬれば水くむ月の影ははなれし  
淋しくてゆきふる里の印には人の心のかはるをを見る  
女御殿女房内りにて

吹返す風につけても山櫻またさちりぬる心をもみる  
かく計りあたり忘るゝ扇には返さむよりはいかてとゝめし  
つけてまし今そきたると夏衣ひとへにたのむ心なりせは  
おもひしるおりも有けり涙河あさき瀬をのみゝせし心に  
鵲のはしは雲井の便までふみゝし跡もたれか尋む

その事を思ふともなきかたしきの袖こそけさはしほる計に  
歸してんみれば中々つらさのみいとゝ益田の池のみつき  
泪河あけてもみせん玉くしけ浦嶋の子か心ゆるさは  
夜をかさねあかくかれはてゝ秋の月思ひくらふる心たになし  
冬深み結ふつらゝもこち風の吹したちなはなにならすやは  
唯にやはかきも絶なんさゝかにのうはの空成ことつけす共  
我なみた忘かたみのめをあらみ年つみあへすもりも社すれ  
夏衣うすきにかわる折しもやなひ□とふにうちはとくへき  
うきことは露もなかけそ天川ゆき逢せこそ絶はたゆとも  
神葉のさゝても深く思ひしを神をはかけてかこたさならん  
ひきかくるつまならねはそ菖蒲艸忘ぬにしもわきておふ蘭  
戀す共泪にいろのなかりせはしはしは人にしらせさまし  
故院のうせさせ玉ひたりけるに

賀陽院の哥合にさくらを

花ゆへにかゝらぬ山をなかりける心は春の霞ならねと  
ほとゝさす

あくる迄待かね山の郭公けふもきかてやくれんとすらん  
月

岩橋の神の契れるかひもなくくまなくてらす秋のよの月  
雪

外山にはしはの下葉も散はてゝ遠の高根は雪ふりにけり  
いはひ

君かせはな井の濱のさゝれ石のいはねの山と成はつる迄  
あるものなへを人のこひければ  
に歌合

覺束なつくまの神のためならは幾つかへのはいはいるへき

水邊歎冬

山吹の下行水ははやけれと移れるかけはなかれさりけり  
中將家哥合くひな

里ことにたゞく水雞そきこゆなる心のとまるやとやなか覽  
戀

紅のこそめの衣をしたにきん戀の涙のいろかへるやと  
鳥羽殿の前裁合きくを

君か代は菊のした行谷水のなかれを汲てちとせをそまつ  
行末はまたなな月の菊なれは久しき秋の花とこそ見れ

萩

秋露のたえぬあしたはむら／＼に萩の錦のみえわたる哉  
萩の葉に露吹むすふ木からしの音をよさむに成まさる也

菖蒲

引かけぬ宿はあらしをけふ毎にいかにつきせぬあやめ成覽  
我宿のつまにのみかは菖蒲草かゝらぬ宿のねやしなけれは

藤

時わかぬ松のみとりは紫の藤さくおりや夏を知るらん  
きく

七夕

秋の夜に雪むらさゆとみゆるかなまきに咲る白菊の花  
たなはたの待つる程の苦しさとあかぬ別といつれまされる  
いつれをか思ひます覽七夕はあふ嬉しさとあはぬつらさと  
七夕に心かはすとおもはねと暮行空のうれしきはなそ

月

わたつみの底の玉もの□毎になひくそみゆる秋の夜の月  
しは

獨ねやいと淋しきさほしかのあさふすをのゝくすの浦風  
中宮のますかけはまゆふをとりをこせんと契りて  
まつに久しくをとせさりければよみてつかはしける  
忘らるゝ我みくまのゝはまゆふを何しに人にとへといひ劔  
返し

此本。子息道經之家本云々。於先考之外家一者爲先  
祖粗傳其說等仍隨見及書留之

右讃岐入道集以百花庵宗固本校合了

故侍中左金吾家集

源賴實

春

三月三日ある人の家にて花みくらしておのゝさか  
つきとりてよめる

花をみる春は闇たになかりせはけふも暮ぬと歎かましやは  
三月十五日しらかはてらに五時かうに人々いきてふ  
みなとつゝりてのちけふことにならすすへきよし  
をかはらけとりてよみける

しらかはのけふの契りを違へすは春のみとふと人や思はむ  
やまふきをおりてある人のうたよみてをこせたる返  
し

ゐてにゆく人にもあらて我宿におりてそみつる山ふきの花  
長久二年源大納言家にてかむしにおつるおしむとい  
ふたいを

散頃はちるをみつゝもなくさめつ花なき春のなをや残らん  
しらかはてらにて花浮瀧水題を

流れつる瀧の水たになかりせは散にし花をまたもみましや  
宮にて花によりて春をおしむといふたいを

行春ををしむ心はちり残る花みる人やのとけかるらん  
春の夜の月

曇なき空も霞にかすみつゝ光りにあかぬ春のよの月  
源大納言のねの日に

ねの日してけふ引そむる姫小松いくたひ春にあはむとす覽

夏

夏日見遠山雲

夏山のをちにたな引白雲の立出てみねと成にけるかな  
くひな

たとゝとも暫しとちなん天のとはあくればかへる水雞成鳧  
ほとゝきす

ゆふやみに鳴てすく成郭公かへらむ時も道なたかへそ  
ある所にて詠木下風

夏の夜はこのした渡る風の音も夕かけにこそ涼しかりけれ  
なかをかにしてほとゝきすをまつといふことを

郭公きなかぬさきに明にけりなとなか月にまたす成けん  
ほとゝきすをきゝて

一ころのおほつかなきに郭公きゝてのゝちもねられさき  
月夜ほとゝきす

五月雨はおほつかなきを時鳥さやかに月のかけにきゝつる  
長久二年四月九日於源大納言家「有哥合事」左右

人各十人おとこ五人女五人

左侍従乳母 宰相乳母 權辨 五節 中務 實範 賴

家重成 隆方 定宗 少將乳母 宰相 小辨 山城 大夫 棟仲 義清 經

衡 親範 賴實

三月ついたちのほとにたいをたまはせたりけれと  
ことしけきよにてけふまてなりたるにや。

なつころも

みな人もけふや衣はかへつ覽ひとへに夏のきぬとおもへは  
此哥被撰右一番。而右一番右衛門侍従哥云。式部權  
大輔舉周母言經古き賢當時打者也。而有言之間被



定。爲取は世無<sup>レ</sup>恥。願<sup>ニ</sup>於身<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>愁願<sup>ニ</sup>合<sup>レ</sup>來者。重

三是非顯書<sup>ニ</sup>入此集<sup>ニ</sup>了

款冬

たちて行春をおしめと夏衣きたるはこれもなつかしき哉

ふちのはな

いとしくやへ山吹は匂はなん春さへ深くさけるしに

うの花

ときはなる松にかゝれる藤の花千とせのはるに匂ふへき哉

葵

卯花のさかりすきなん山里はすむ人やみの心地こそせめ

可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>撰<sup>ニ</sup>入勝<sup>ニ</sup>に

早苗

けふみれはかけて歸らぬ人をなき葵を神のしるしなりける

ほととぎす

五月雨をまたは早苗やおいぬへき水ひくたこの急かしき哉

くひな

郭公きなく道たにしるからはあふ坂までもゆくへきものを

吳竹

古里はとひくる人もなかりけりたゞく水鶏の音はかりして

潺湲

こちくるを我友とのみみゆる哉よをへて風の音したえねは

かきなす水も濁らぬ宿なれは移れる月のかけさへそすむ

四月はかりによふけて女のもとにいひやりける

暮はてゝ人のまれらになるまゝに入相の鐘の聲をきこゆる

待こひてきゝやしつると郭公人にさへこそとはまほしけれ

棟仲かいへにてなてしこをよむに

とこ夏に露をさわたる朝ほらけ錦に玉をかけてこそみれ

氷室

夏の日になるまでとけぬ冬こほり春立風やよきて吹らむ

草むらにむかひて秋をまつといふたいを六月廿日の

ほとに

秋をまつ花をほり植てみる人は夏をすくすそ久しかりける

秋

中逢秋

秋風はまた夏なから吹にけり月のたつをもなにかまつへき

田家早秋

秋立てかとのいなはうちなひきをとめつらしき秋の初風

早秋月

初秋の空さへすゞしき月影は人の心もすみまさりけり

毎夜見月

さやかなる月をのみやは眺めつる曇しよはもまたれし物を

七夕後朝

待ほとくの久しからすは七夕のけさの分れは歎かさらまし

八月十五日に大學頭義忠にさそはれて遍照寺にまかりて池上の月といふ題を

あかなくにあまつ空なる月影をいけのし・に寫してそみる

八月十五夜右大弁家月似畫題を

秋のよの空にくまなき月影はなけきやす覽かつらきの神

殿上人よふけてにはかにしらかはへなんいくとてくるまよせてさそふにまかりてしらかはの秋の月といふたいを

くる人にいくたひあひぬ河の渡りにすめる秋のよの月  
七月十二日に宮の前栽ほとりに花契千秋といふ題を  
秋毎に花を宮こにほりうへてけふそ千とせの初め成ける

聞鹿聲

秋ことに妻こひわひて鳴鹿はきりたつ山やふしうかるらん

聞掃衣

秋風にこゑうちそふるから衣たかさと人としらすも有かな

終日見花

朝霧を野へに分つるかひもなしけふさへ花にあかて暮ぬる

見庭萩

青やきの枝はかりにも春暮てにたる花なき宿の秋はき

なかをかになかつかさの宮なおはして一夜とまり

たまひてありしにもみちをよめる五首

紅にふもとのかはのうつるまで峯のもみちの深くも有哉

野花

歸るさは急かれぬ哉花のかのひをへて變る野へにきぬれは

旅 鴈

空にのみ聲のきこゆる鴈金はあまの河原にやとやかるらん

しか

夜をかさね鹿のね高くきこゆなり小萩か原やしほれしぬ覽

あきなり

河霧にをちみえぬまで立にけりいつれかよとのわたり成覽

右大弁の家にて九日翫菊

おいせしとおもてくくのこへとも霜いたくける白菊の花

むめつに四條中納言などおはしてゆふくれに舟にのりてあしの花雪のことしといふ題を

岸による蘆かり小舟なかりせは雪とのみ社みるへかりけれ  
うちのせさいほりに

九車にうつしうへつるしには久しく匂へ野への秋萩

源大納言の家に八月に歌合あらんとしたるをのひて

九月になりてければ十首のたいの中にはきのありける

をいまはときすきにたりとてもみちにかへられければ

そのよしをかたの人々あつまりてかはらけとりて

よみけるに

秋萩のけふまでちらぬ物ならは紅葉の色もまさらましやは

長曆二年九月十三夜源大納言の家におとこをんなか

たわきてうたあはせられけるにおとこかたの九人

のうちにめされてよめる

月

つねよりものとけき空にみつる哉世を長つきにすめる月影

風

吉野山紅葉ちるらし我宿の木すゑゆるきて秋風ぞ吹

露

宮城のくけさの白露ひまなくてかせはたまをや吹みたる

きり

花みんとしめしかひなく秋きりのあしたの原を立渡る哉

すき

花薄ほにいてなひく秋風に野へはさなから波ぞ立ける

きく

くらきよもをりつへらなり我宿のをもしろきまで咲る白菊

田

小山田の秋はてかたにみゆる哉残りすくなきかりやしつ覽

もみち

すきかたき色とみゆれば紅葉はの深き山路に駒をとめつる  
かり

白雲にあとはきえつゝとふ鷹のきにける聲を空にしるかな  
しか

聲しけみさを鹿のなく秋のよはきく人さらに驚ろかれぬる  
ゑもんのすけの家にてかうしんのよのこりの菊を

色々に移ろふ菊のなかりせはなにをかまし秋のかたみに

秋野晩望

しめゆはぬきりの籬のこ萩原またあかなくに日も暮にけり

依花知秋

けさみれば色つきにけり小萩原花こそ秋のしるし成けれ

庭盡秋花

我宿に花を残さす移しうへて鹿のねきかぬ野へとなしつる

なかをかにて山家に月をまつ

月影のふもとの里にをそきかな峯を越てそまつかへりける

落葉滿庭

朝夕にあらしのはらふ庭の面に散しつもれる紅葉成けり

千栽秋花

我宿は花のやとりとなりにけりのへの主と人やみるらん

月夜のしくれ

定めなき空にもあるかなみるほとに時雨に曇る冬のよの月

のこりのきく

春秋の花といふ花の色々を残れる菊にうつしてそみる

右大弁のさそひ給ひしかはむめつにまかりて河邊水

秋夕風

秋風のをきのはすくる夕暮に人まつひとの心をそしる

長久三年うるふ九月のつこもりに關白殿ありまのゆ

におはしましてそのあいた宮にさふらふ人々よしき

水のおもによもの山へもうつりつゝ鏡とみゆる池の上かな

見泉

昔よりをととき高き泉かな人のせいるゝ水ならねとも

翠松

色深く小高き松はなりにけりいくよそめつるみとりなる覽

紅葉

梢より散たにをしき紅葉はの風の音さへまれに成行

明月

月影のみるにくまなき秋のよはたのめぬ人もまたれ社すれ

初霜

あさまたき人のふみ行道しはのあとみゆはかり置る霜かな

殘菊

秋ふかくなり行まゝにきくの花日にそへてこそ色は染けれ

擣衣

唐衣もうつ聲しけくきこゆなり寒きあらしの音にそへつゝ

遠鷹

よとゝもに空にきこゆる鷹金はしらぬ雲ちも嵐とそ思ふ

惜秋

暮て行空に心そとまりけるけふらし秋のせきと思はん

長久三年

右大弁山家にて夜深待月といふ題

月影をまつに夜更ぬ秋のよはあく程たにひさしかなん

冬十月一日山さとに人々いきてもみちをみてかはら



けとりて

紅葉はの散し残れは山里に秋をとゝめてみるこゝ地するかやうるん殿のいけにふねにのりて月秋といふたいを

秋毎にさやけき月は今宵こそ我みつるよのためし也けれ

栖霞寺にてもみち衣にをつといふ題を

紅葉々是我衣てにかゝれともきてみる人のあかすも有かなけさみれは河邊の氷りひまなくて河瀬にのみそ波は立ける

いかた

河水にまかせて落すいかたしはさして行衛もしられさり鳧

雪ふりたる日大納言の家にうたよむひと人よひて松

雪といふ題を

雪ふれは松こそいたくおいにけれ千歳の冬をつみやしつ覽

十月廿日殿のあまうへはせにまうてさせたまひて返

らせたまひしにうち殿に御むかへにまいれる人々あ

しろにまかりてあしろにて月をみるといふ題を

月影もいは浪たかきあしろにはうすき氷のよるかとそみる

遍照寺にて人々月前紅葉といふ題をよみける

いとゝしく紅葉ちりしく庭の上に光をそふる冬のよの月

落葉如雨

このはちる宿はきゝわく事をなき時雨するよも時雨せぬよも

落葉舊苔上

打かさねいくよの風か立つらんこの葉そ苔の衣なりける

戀

よを重ねふけるの浦に蟹のたく思ひありとは人もしらしな思ひかねしらぬ磯へに事寄てうちいつる波のかひもあら南

深縁思ひそめては久しきをいかてかみましすみよしの松  
おとは山谷の下水おとにのみきゝて渡らぬ袖もぬれけり  
思ふこと鳴門の浦にすまぬみのしほたれ衣かはくよそなき  
しるへする人たにみえぬ奥山のふみゝぬ道にまとふころ哉  
年ふれといはぬ思ひはかひそなき人にしらるゝ煙ならねは  
いかにせん戀ちにまよふ郭公しのひに鳴てすこす頃かな  
我如く戀せん人のまたあらはいかにかするととふへき物を

右源賴實集以百花庵宗固本書寫校合了

# 津守國基集

霞籠棹山といふ事をよめる

春くれはふもともみえすさは山に霞の衣立そかけつる

忍岡霞

霞こそ忍ふの岡に立ぬれときゝすの聲はつゝまさりけれ

留船聞鶯

聞すてゝ漕し行ねは鶯の聲は船路のとまり成けり

梅花遠兼

さよ更ておちの里なる梅の香の吹くる風にたくふ成哉

雪中梅花

風吹て雪降かゝる梅の花散かちらぬかえこそみわかぬ

山家皆梅花

なつかしきかのみこそすれ山里は梅の匂はぬ宿しなけれは

春色浮水

緑なる河邊の柳影させは水にも春の色そみえける

岸柳臨水

水のおもに柳の影のなひくをはそこにも風の吹かとそみる

山花未落

櫻花また盛りなりたかまとの春の山風のときかるらし

見花述懷

とし毎に花みぬ春はなけれともあくことのなき山櫻かな

花時無外人

春くれはうとき人こそなかりけれおなし心に花をおしめは

閑庭落花

みる人もなき庭の面に散花をふまてみるこそ心やすけれ

追歲尋花

とし毎に山へのこさす尋ぬれとまたこそあかね散ぬ櫻に

花殘待人

尋ねくる人もやあると足引の山下影に花を殘れる

苗代

眞菅おふる野澤のをたを打返し種まきて鬼しめはへてみゆ

きさらきや彌生になれば山かつの門田のそひに種まきて鬼

歸鴈

うす墨にかく玉つさとみゆるかなかすめる空にかへる鴈金

行歸る旅の空にやひかすへんはかきのとけくみゆるかり金

遠山霞薄

春ふかくまた霞けるふる郷のとをちの山をほのもみましや

三月盡

吹風のさそふに花は散とみきたかゝたらふに春はいぬるそ

三月つこもりの日ある人のもとより

心あらは散殘らなむ櫻花暮行はるのかたみはかりに

かへし

櫻花こそすゑはかりをかたみにて春とゝもにそ散ていにける

夏夜待郭公

夏のよのなかゝらませは郭公心やすくもまたまし物を

遙聞郭公

ほのかにその夕暮に郭公をちのをかへのもりになく也

尋處聞郭公

待かねてこそそのならひに山里を尋くれはそなく郭公

納涼

流いつる水にあつきの忘れられてすゝむけしきそ打とけに鬼  
樹陰似秋

夏のひのこのした影の涼しきはしのひに秋やかねてきつ覽

七夕

織女にほか心をしかしたらはたゝひとよには歸らさるまし

萩花をよめる

朝また萩原みれば露を重みたはなる枝のいとゝたはなる

紅葉

紅葉はのちれるか上にちりつめは錦かさぬる庭とこそみれ

水邊紅葉

時雨つゝ雨とふれはか紅葉はのあさきみきはに色の深きは

草花廻水

秋のゝをうつせる宿の池なればさしのまゝにそ花は匂へる

無山里月

ほかよりも光り久しくさやけさは月のかくるゝ山なしの里

月浮山水

くむ人のなき山の井のにこり沼さやかにすめる秋の夜の月

緩木森月

いつとなくゆるぎの森の木間より長閑に月はみえずや有覽

秋冬

いつのまに空の氣色の變るらむ激しきけさの山おろしの風

旅中繁

定めなく時雨て過る山ちには菅のをかさをぬきみぬかすみ

すかたのいけみつとり

水鳥のおのかすかたの池水にうつるおりこそ我をみるらめ

旅宿雪

ひとりぬる草の枕はさゆれとも降つむ雪をはらはてそみる  
行路雪

雪降て路たつゝ逢坂の瀬の岩かとみえみみえすみ

雪埋山路

雪深みこまのつまをとをとせす山した水にわたすいた橋

歳暮

くる春にあはまく事は思へとも暮ぬる年のおしくやはあらぬ

戀わひてひとりぬるよをまそてもてとこ打拂ひ哀とそ思ふ

手枕を交さむ事はかく共あとにはふせよもすすそひきさん

さ庭にいもをふせはや狭くとも衣しきつきかたはしにねん

わきもこか額のかみの亂よりたわきまゆねをみしか戀しき

吾妹兒かはたにきなれのきぬも哉戀慰めに身にもまつはん

あひかたき戀に心やまとふらむつらき人をも思ひしらぬは

あひかたかりし女に

おふの浦の恨みてのみそよをはふる逢事なくになれる身なれば

あはむとちきりたる人をよそに見て

よそにみて過ける物をはきゝの伏屋てふなそ人頼めなる

女のもとにまかりてかへされて

うしと思ふ人の心は草はかは歸る袂の露けかるらむ

ひるなりとものかたりせんといふにみくるしなをよ

るといひ侍し女に

あふ事をひるはなさきにあさ□ね蟹の釣舟よるをこそまで

かたらひて侍し女のまたさらに心つよかりしかは

つれなきにこりぬ心を思ひしれこれも昔のなこりなるへし

かへし

つれなくはさてもやみなて何にかは折々人の思ひいつらむ



つれなき女のゆめにみえしかは

明ぬとも君とてけさはねたらし今宵の夢のうつゝ成せはいかてとおもふ女のかひこひたりしに

戀しとて君うらみせは人しれす思かひある心地せましやかへし

思ふらむ心もしらて浦みたるかひありけりと今こそはみれいひいてむ事のはゝからしかりし人におつゝさるころなむあるとしらせんと

賤のみにやかて心のたくへかしさもあるましき事も思はしかへし

浪たゝむ事をつゝまぬ身成せは思ふといふは嬉しからまし又やりはへりし

あふまての事はかたくと人しれぬ心のゆくをやるといはなむかへし

人しれぬ心のきつゝつもりなはなきなの高くなりもこそすれものこしにていらへはかりする女に

聞ゆなる聲を心にとりかへてへたてなき人思てしかな四月はかりにかへりことをせぬ女のもとにくちをし

きよしをいひつかはして侍しかは郭公里をもわかす語らへはこたへをなとかこゝにしもせんかへし

郭公よ深き聲をあはれとも思ひしらすはなにかこたふるあきの夜のななきひとりねをおもひやれといひつか

はしたりしか女秋のよは人からならす昔よりあかしかねぬるものしらすやかへし

なかしともなけかさらまし君と我枕ならふる秋のよならは

かたらひて侍し女のもとにひさしうをとせさりしかはいひおこせて侍りし

かねてより人の心をしらませは契りしことを頼まゝしやはかへし

頼めしを心みむとてをとせねは忘れたりとも思ひけるかなまたむつましくもあらぬ女どもの仁和寺に遊びにまかりて日のくれにしかはとゝまりてあくるあしたかへるとて

よそ人は睦ましとこそ思ふらめならひの岡にねてし歸れば宮つかへする女をむかへておくりてあしたに

朝ね髪たか手枕にたわつてけさは降こしかたみとかみる能登守正月つこもりころにこし地はまた雪うつもれ

てなむあるといひおこせて侍しかは思ひやるまたゆき深き越ちには霞む空をや春とみる蘭

すりの大夫のはりまくたりにいちのすまておくりきこえ侍しに舟こきはなるゝほとに霞のへたてしかは

嶋かくれ漕行までもみるへきにまたきへたつる春の霞か花山にまかりたりしに僧正のむろのまへとおほしき

所に櫻のくちのこりたるかたゝひとえた咲たりしかは

あるしなきすみかに残る櫻花あはれ昔の春や戀しき花見に人々のまかるかをともせぬにつかはし侍りし

櫻みにいさと人こそいはねとも花に心はさそはれそする花ちりてのちうちのけしきのかすめるをみて

山櫻いまはのこらす散ぬらむなになちかくす春の霞をかへし

花ちれるあとのつれ／＼みせしとて山立かくす朝霞なり女のあひかたかりしに二月の晦日頃につかはし侍し

春風はへたつる霞吹みたれみたれのまにも花やみゆるとかへし

花散す風は吹とも春霞立へたてゝはいかゝみゆへきあめのふりし日女のもとにつかはし侍し

春風やひとを忘れぬつまならむしめ／＼物を思ひ出つるかへし

春雨を忘れぬつまになすめれば降たるなかのこゝち社すれ春のよ女とゐてものかたりして

手束弓春のよ君とまゐりてみけしのしたにいる身とも哉四月一日ある女のいへをすくとてなにことかといひ

いれさせて侍しにかへりことをはいはて山吹の花をおこせたりしかは

くちなしの色に咲はか山吹の過行春をとまれともいはぬある人のむことりしてのちはしめて人々よひて哥よ

み侍しに藤花久盛といふことをよみ侍しついでにやとからか夏になれとも藤の花移るふ色のみえすも有かな

布引の瀧にて人々哥よみ侍しつてに高ねより落くるほとをしらぬかないくひろならむ布引の瀧

筑前の司頼家五月許にいさゝかにいとなむことなんあるかさめやうのものとこひみ侍しにおくるとて

五月雨にたみのゝ嶋のあま人のかつくかさめは君かため也かへし

頼家

天くたる神のしるしとみる物はたみのゝ嶋のかさめ成けり賀茂の禰宜成助にはしめてあひて

聞渡るみたらし河の水清みそこの心はけふそしるへきかへし

住吉の松かひありてけふよりは難波の事もしらすばかりそその日まうてきあひて祇園別當良暹

住吉のみたらし河も流れあひてこの渡り社すまゝほしけれかものみたらし河のほとりにすゝみ侍しに

神やまのしたもさゝに流れいつるみたらし河の水の涼しさかへし

我さとにかたりも渡れけふ結ふみたらし河の水の涼しさ七月七日すみよしよりまかりのほりしにあまの河と

いふ所にて目のくれにしかはとゝまりて舟をあらひきよめてたなはたにかすとて

たなはたは思ひしらなむ天の河いそく渡りに舟をかしつる八月許に月のあかく侍し夜三條大納言の御もとにて

月をみてよみ侍しきやかなる月みる毎にゆきつもる心は空にみちやしぬらん

かへし

みそら行月はあはれと思ふらむゆたにも君かなめける哉おなしころむまこのわらはのはかまに萩の花をかき

たるを大納言みたまひて誰ともなくていみしうさうそきたるさうし女にもたせてないれさせたまひたりし

ぬししらて萩のするなるたかまとののも心みに衣まかせんかへし

袖たれてたかまのゝちを君ゆかは萩の花すりすりやみた覺

月はかりに成助かきかにまかりてそれよりよひに  
おこせてはへりしかは

心とはまねかし物を化すゝきさかのゝ風のたよりなるらん  
かへし

草なひく風は吹とも花すゝき我ほにいてすは招かきらまし  
月許に豊前守保定くたるとてみてくらしまにてむ

まのくさからせけるをせいしければからすへきよし  
のくたしふみこひたりしに遣すとして

秋風に草はゝまかす豊國のたみのなひかむためしと思へは  
和泉の國ふけ井のうらといふところになかりとゝま

りたりしによふけてやまのかたにはしかのこゑきこ  
えなきさには千とりなきしかは

鹿の音をあはれと聞に秋のよのふけるの浦に千鳥さへ鳴  
すりの大夫ふしみのもりのしたにて紅葉の散にとし

のおいぬることをたとへて人々哥よみ侍し  
紅葉する縁には春もまたきなむ我身の秋をやかてかれ行

ものへまかるみちにてあめのふりしかは  
雨降ぬいさ宿からむこの里のおちのゝちには人もすまなく

ある人のきのくにへくたるとてすみよしをすきてさ  
かひといふところにてとゝまり侍りしかは

住吉の渡りにたにも音せねはさかひの里を思こそやれ  
或人のすみよしにまいりてよみ侍し

いたつらにおひにけりとや住吉の松も我身をけふはみる覽  
かへし

君か代や千とせまでへむ住吉の松に久しきとともみえつゝ

つのかみ範永すみよしに神拜すとして  
我身こそかみさひまされ住吉のこ高き松の影にゐぬれは

かへし  
住吉の松の齡にあへぬれは君をも千世の友(と)こそみれ  
住吉に人々おほくまいりてあめのふりしにぬるゝ事

をいひしかは  
ぬるゝにて思ひしらなむ諸人は天くたりたる神のしるしを

美濃の國へまかりくたにある女の許にまかりてい  
とまこひてたつにいふことの侍らさりしかは

暫し共なとかとゝめぬ不破の關稻葉の山のいなはいねとや  
かへし

旅の空行へき君としりぬれはなにかとゝめむ關のなたてに  
津の國に侍しころ京にあひしりたる人のもとにつか

はすふみのうはかきに  
津の國の難波よりそといはす共蘆手をみてはそれとしら南

故さぬきのかみにはしめてあひきこえさせたりしに  
よみかけられたりし

住吉の松をそ頼むけふよりは千とせはふとも思ひかはらし  
かへし

住吉の松の千とせもあかなくに萬代までをけふは契らむ  
かもの禰宜なりすけかもとへかひつものやるとて

したゝみも鮑きたえも蛤もかきあつめたりみなゝからみよ  
かへし

難波瀧なにはのものもかひありて朝みつ汐のみつとしら南  
なけく事の侍りしころとふへき人のとはさりしかは

知しらすとはぬ人なくとひつるについに音せて君をやみぬる  
成助



かへし

良 選

しぬ計り歎きいりてそ音はせぬ知も知ぬもとふはとふかは  
加茂の行幸にみやつかさともかうふりたまはりてま  
かりかへりてやすむ所に六位にて侍し時

紅葉するかつらのなかに住吉の松のみひとり緑なるかな

つしまにまかりたりしに我國のかたははるかになり  
て新羅のやまのみえしかは

舟出せし博多やいつらつしまには知ぬ新羅の山はみえつる  
たちまの國にあさくらといふ所に哥よむあまなんあ  
るとききつてまかりてものかたりしはへりしついでに  
あさくらやまたみぬ里に尋くる心のほを思ひしらなむ  
かへし

あ ま

たつねきてみるにかひなき宿成と朝倉山を忘れざらなん  
石山にまいりてかへり侍しにせたのはしのほとり馬  
に乗たる女のきつれたるか夕立のせしかはせきてら  
の大門におなしくたちいりたるにいひかけはへりし  
東路をくるいもならは言とはん伏屋といひて誰かとめし  
かへし

女

東路のふせやになにか尋ぬらんけふ逢坂のことやちきらぬ  
すみよしに賀茂の神主なりすけたりとききつて

加賀左衛門命婦

葵草おふとしきは住吉のきしにそ今はつむへかりける  
かへし

住吉は忘れ草そといはるれと人にあふひをうへてまつなり  
あはのくによりかみのゝみちからまかりのほりしに  
するかにいりえのうらといふ所にて風ふきて八日ま

てふねをいたさすあやしみなけくほとに人のゆめに  
住吉のひとのする事もなくておりのほりするかやす  
からねはおきなかふかする風なりとなむみへるとか  
たれはおとろきてたつねれはなきさに神のやしるあ  
りみをの明神と申にはかにみてくらはさみてしてに  
かきつけ侍し

みをの神すむと聞てそ入江なるなそ舟すへて日數へぬらん  
かくてそほとなくかせやはらきなみしつかにてふ  
ねいたしはへりし。

おほやけに申事はへりしに申文にそへて奏者の御も  
とに

住吉のあまつ社のうれへには心よせなれくものうへ人  
おなしく申事のほとすきひさしかりしかは

雲の上は月そさやかにさえ渡るまたとこほる事やなに也  
かへし

兵衛佐

とこほる事はなけれと住吉のまつ心にや久しかるらん  
おほやけに申事のともかくもおせは懸せくたされは  
へらさりしかは住吉へまかりくたるとて奏者の御も  
とに

いつしかと見事きかまく住吉のまつなる神に如何いふへき  
藏人少將うちへのみさふらひたまひてひさしうあひ  
きこえさせねは月よなりしころ

雲の上にへたてゝ月のももこねはしつのとよりは朧なる哉  
かへし

少 將

雲の上にみるたにあかぬ月影をことはりなりし賤の宿りは  
成助かきやう中けからはしきことあれば京へもえい

てすみやしろにこもりゐてなむあるといひをこせて  
はへりしかは

〔本ノマコ〕

神垣にけからはしけきみいまはおのか心をいつちやるらん  
住吉より京へのほり侍しにみつてらのほとにてあめ  
のふりしかは人のいへにたちいたりしにいみしう  
もりしかは

すゝたるゝみつのかやゝの板底久しくなりて雨もたまらず  
江中納言大宰帥になりてくたられしにかはしりにま  
かりむかひて物かたりのついでに  
む年にそ君はきまさん住吉のまつへきみこそいたく老ぬれ  
かへし

すむ人のすき行われも住吉の松の千とせといのらさらめや  
三條大納言すゝしのむしろたてまつるとて  
うらやまし我ひとりねのさむしろに誰とか君かた枕をせん

正二位大納言をはいかてうらやむそやすからぬこ  
となりとていみしうこそわらひ給しか。

六條すりの大夫のうへにいしたゝみせんといしと  
りてとありしかはきこえさすとて

かたきことはけみけり共思ひしれ石をわりつゝ君に仕ふる  
同人におほえひをきこえさすて

住の江のおきな姿そあはれる海においつゝ腰のかゝまる  
かへし

わたつみのおいなゝけきそ住吉の松にかゝれるおきつ白波

同人のはりまくたりにかちしなりしかは

諸共にむちはあけねとしたはるゝ心は君におくれやはする  
かへし

心をおなし道にはたくふとも猶住吉のきしもせしかし  
おいのゝちに月をみてよみ侍し

あかすして老はてにける我身かなこむよのやみも照せ月影  
伯のはゝのたうのつまとのいたをこはれたりしかは  
つかはしてのちに

まきのとをにしに明てや月をみるさき立行に言つてをして  
かへし

西へ行月みるたひにまきのとを君思ひつるつまにするかな  
前左衛門佐のもとよりひさしくをとせすといひつ  
かはしたりし

みこもりにひとひもおちす思へとも人忘れけり住吉のまつ  
かへし

住の江の松にたえせず吹風そきつせそへつゝ忘れやはする  
同佐のもとにかひつものをませくた物にしてきこえ  
さすとて

わたつみの涙のはななく浮木にはかき蛤のなるにやある覽  
備中守仲實くたられしになにはえのほとりにまかり  
むかひたるにこふねのはたつひたるかありしをみて  
よみ侍し

難波江に年ふりにたる舟なれば芦のはすりにはたなれに鳧  
備中守

難波江の芦の葉分にはたなれてけふを待ける舟のけしきか  
若狭阿闍梨隆源

芦のはの茂みをわくる舟なれば年はつまねとなるゝなる覽  
おはりのかみにきこえさする事ありて

尾張なるはゝりの糸を手玉ゆらはにめのをれる衣のきほしき

住吉の堂の壇のいしとりにきのくにまかりたりし  
にわかのうらのたまつしまに神のやしろおはすたつ  
ねきけはそとおりひめのこのところをおもしろかり  
てかみになりておはすなりとかのわたりの人いひは  
へりしかはよみてたてまつりし

年ふれと老もせずして和哥の浦にいく代に成ぬ玉津嶋ひめ  
かくよみてたてまつりたりし夜の夢にからかみあ  
けてもからきぬきたる女房十人はかりいてきたり  
てうれしきよろこひにいふなりとてとるへきいし  
ともををしへらるをしへのまゝにもとむればゆめ  
のつけのまゝにいしありいしつくりしてわらすれ  
は一度に十二にこそわれて侍りしか壇のかつらは  
しにかなひ侍にき。

賀茂神主なりつきにあふひこふとて  
むつまじくかもの葵に住吉の松のゆふにもしてまほしきを

なりつきあふひをはめてたくしたてゝ遣はしてか  
へりことはちからおよはすといひてはへりしこそ  
中々ありつきたりしか。

右津守國基集以村井敬義本書寫校合了

松 小 知

林 林 念

竹 正 武

雄 直 雄

校





昭和五年八月二十五日印刷  
昭和五年八月三十日發行



發行者

東京府西巢鴨町大字巢鴨貳千五百七拾番地  
續群書類從完成會代表者

太田藤四郎

印刷者

東京市芝區西久保明舟町九番地

松岡松三

印刷所

東京市芝區西久保明舟町九番地

太洋社第五工場

發行所

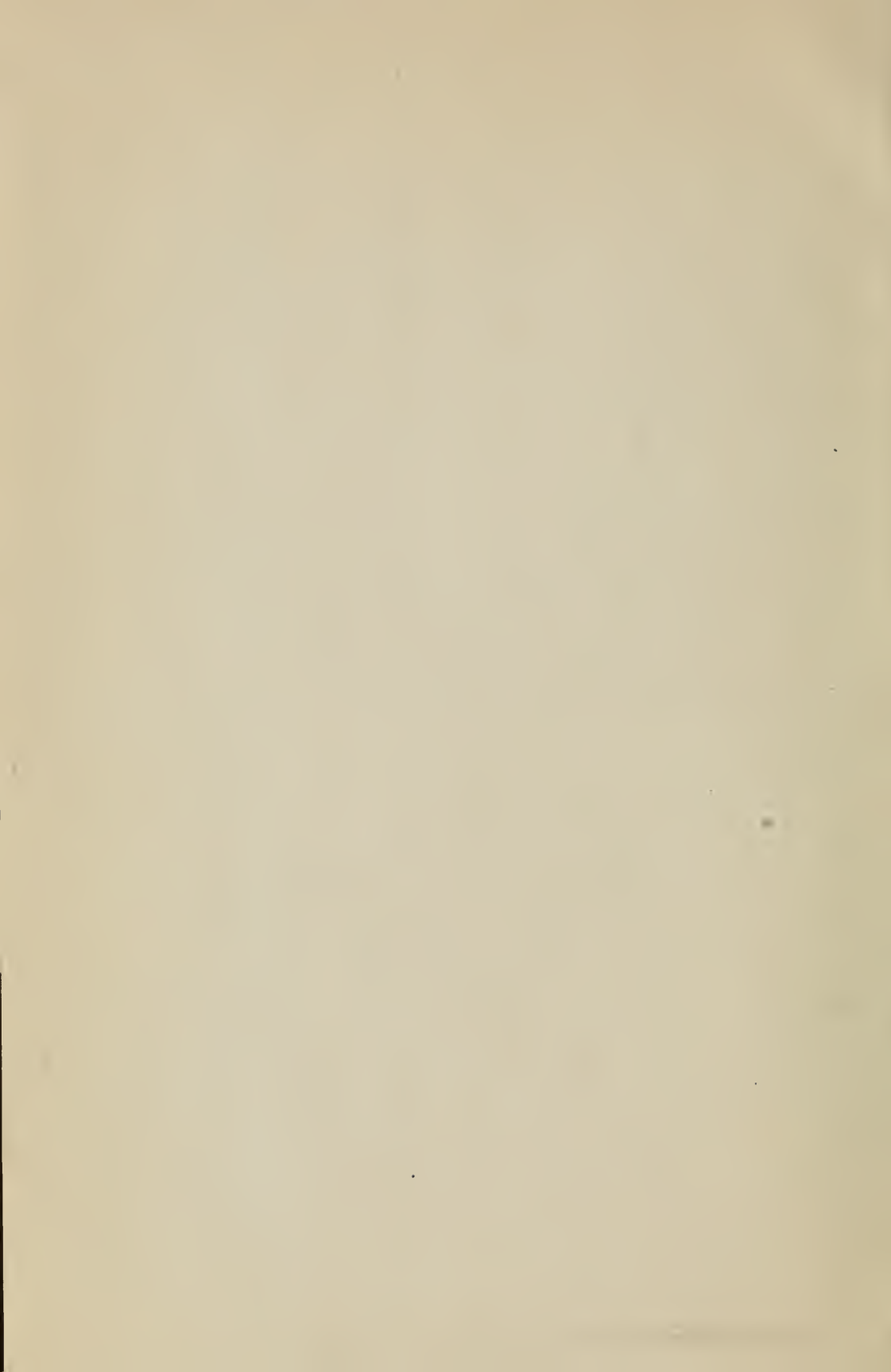
東京府西巢鴨町大字巢鴨貳千五百七拾番地

續群書類從完成會

振替東京六二六〇七番電話大塚〇七一八番













EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02964 7880